岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 105

斎富遺跡

山陽自動車道
建設に伴う発掘調査

13
(第1分冊)

1996

日本道路公団広島建設局岡山工事事務所
岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 105

斎　富　遺　跡

山　陽　自　動　車　道
建　設　に　伴　う　発　掘　調　査

13
(第1分冊)

1996

日本道路公団広島建設局岡山工事事務所
岡　山　県　教　育　委　員　会

1. 斎富遺跡全景（北東上空から）

2. 前田調査区（上空から）

186

1. 竪穴住居 58 出土新羅系陶質土器

1374

1375

814

256

815

1240

2. 陶質・陶質系土器

171

1239

1. 軟質系土器

1421

1446

1408

1435

654

1437

1436

2. 須恵器・陶質系土器（土師質）

W4

W6

W5

W7

1. 土壙 62 出土ねずみ返し状木製品

序

山陽自動車道は大阪府吹田市を起点とし、瀬戸内海沿岸を結び山口市にいたる総延長426kmの高速道路です。県内で最初に貫通したのは、昭和56年度備前～相生（兵庫県）間でした。以降、倉敷・福山間、岡山・倉敷間と順次供用開始を行ってきましたが、備前・岡山間約40kmが最後まで残されておりました。

備前・岡山間につきましては、その工事を担当する部局としまして昭和60年７月に日本道路公団広島建設局備前工事事務所を開所させ、早期に供用開始ができるよう本格的に着手したのであります。その間、条件整備等が進んでおりました瀬戸町・熊山町においては、第１次調査を実施し平成２年度からは全面調査を行うことができました。そして、平成３年度からは懸案でありました山陽町の調査に入ることができました。平成４年10月末には、備前工事事務所管内で最後に残されていた斎富遺跡の終了により埋蔵文化財関係の調査はすべて終了したのです。

報告書につきましては、平成７年３月に『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』99として、熊山町、瀬戸町、山陽町に所在する松尾古墳群・斎富古墳群・馬屋遺跡などを報告していただいております。この報告書においては、斎富遺跡を収載することにより備前・岡山間の埋蔵文化財関係の案件はすべて終了したことになりました。

備前・岡山間の報告書は、本冊を含め２冊であります。これらの報告書が学術および文化の振興に寄与することを期待します。

最後に、発掘調査並びに本書の編集に当たられた岡山県教育委員会と岡山県古代吉備文化財センターを始めとする関係各位に対し、謝意を表します。

平成８年３月

日本道路公団広島建設局岡山工事事務所
所長　佐伯博三

序

山陽自動車道は、瀬戸内沿岸の主要都市を東西に結び、九州・近畿さらに瀬戸中央自動車道、やがて中国横断自動車道とも結ばれ、四国・山陰地方へと連なる大動脈であります。

この山陽自動車道の備前市から岡山市間建設に先立ち、岡山県教育委員会では、関係当局と幾度となく協議を重ね埋蔵文化財の保護・保存の調整を図ってまいりました。しかしながら、この道路が古代備前の中枢部を、そしていみじくも古代山陽道と平行するようにして走るため、多くの遺跡が記録保存の対象となりましたが、発掘調査は平成4年10月末日をもって全遺跡の調査を完了することができました。以降、平成6年度まで整理・報告書作成作業を行なってきたところであります。

今回発刊いたします備前工事事務所関係の第2分冊には、赤磐郡山陽町斎富遺跡について収載しております。この遺跡は、遺跡分布図には記載されていませんでしたが、また山陽自動車道の分布調査によって南方条里遺構が所在することが明らかとなりました。確認調査の結果、複数の時代にわたる遺構が広範囲に存在することが判明し、斎富遺跡として平成3年4月から4年10月まで発掘調査を行なってきたところであります。発掘調査の結果、縄文時代から弥生・古墳・奈良さらに中・近世の多くの遺構・遺物が検出されました。とくに古墳時代後半期の住居跡・包含層からは朝鮮半島に関係する多くの遺物が出土し、さらに、奈良時代の掘立柱建物群など多くの成果を得ることができました。この報告書が、今後この地域の歴史解明の資料として、また、文化財保護の一助として広く活用されることを希望しております。

なお、発掘調査の実施および報告書の作成にあたっては、山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財対策委員会の先生方から種々の御教示と御指導を得、また、日本道路公団広島建設局・広島建設局備前工事事務所・岡山工事事務所をはじめ、岡山県土木部・岡山県東備地方振興局や地元の関係各位からも温かい御理解と御協力を賜わりました。関係各位に対して、深甚の謝意を表わすしだいであります。

平成8年3月

岡山県教育委員会

教育長　森　崎　岩　之　助

例　　言

1．本書は、山陽自動車道建設に伴い、日本道路公団から岡山県教育委員会が委託を受けて、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した斎富（さいどみ）遺跡（山陽町）の報告書である。

2．斎富遺跡の発掘調査は平成３年度に行った第一次調査の後、引き続いて同年度から平成４年度にかけて実施した。調査担当者は、伊藤　晃、井上　弘、下澤公明、岡田　博、平井　勝、二宮治夫、福田正継、窪田廣志、野上和信、大森善市、平松義則、古谷野寿郎、竹井孝充、山本了峰、吉久正見、石田容一、田原　順、山田明信、東呂木博、松岡浩太郎、安井　悟、長川　優、高田恭一郎、大橋雅也、氏平昭則、横山　定、滝川明徳、長門　修、根木智宏である。

3．発掘調査および、報告書作成にあたっては、山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会を設け、下記の方々に委員を委嘱した。対策委員会各位からは終始有益なご指導とご助言をいただいた。記して深謝の意を表す次第である。

水内昌康（岡山県文化財保護審議会委員）
鎌木義昌（岡山理科大学）平成４年度まで
西岡憲一郎（岡山県遺跡保護調査団）平成３年５月まで
西川　宏（山陽女子高校）
間壁葭子（倉敷考古館）
高見周夫（岡山県遺跡保護調査団）
根木　修（岡山市教育委員会）
新納　泉（岡山大学）平成３年５月まで、平成５年度から
稲田孝司（岡山大学）平成３年５月から平成４年度まで
土井基司（岡山大学）平成３年５月から平成５年６月まで
亀田修一（岡山理科大学）平成５年度から

さらに、多数の県内外の研究者の方々から、様々なご助言、ご教示を得た。記して、感謝の意を表す次第である。

4．特殊な遺構・遺物および自然科学分野における鑑定、同定等については、下記の諸氏、機関に依頼し、有益な教示を得、一部の成果については、報告文をいただいた。記して深く感謝の意を表す次第である。

・人骨鑑定　　池田次郎（九州国際大学）
・樹種鑑定　　畦柳　鎮（岡山商科大学）
・動物遺体鑑定　　金子浩昌（早稲田大学）
・鉄滓分析　　大澤正己
・石材鑑定　　妹尾　護（吉備国際大学）
・玉材質分析　　藁科哲男（京都大学原子炉実験所）
・鏡の鉛同位体比分析　　平尾良光　榎本淳子（東京国立文化財研究所）

・赤色顔料分析　　安田博幸　金杉直子（武庫川女子大学）
・土器の胎土分析　　白石　純（岡山理科大学）
・土器の胎土分析　　三辻利一（奈良教育大学）
・初期須恵器・陶質土器　　定森秀夫（京都文化博物館）
・奈良時代の遺構　　山中敏史（奈良国立文化財研究所）
・C14年代測定　　日本アイソトープ協会
・花粉分析　　パリノ・サーヴェイ社
・プラントオパール　　パリノ・サーヴェイ社

5．報告書の作成は平成5年度から平成6年度に岡山県古代吉備文化財センター山陽町事務所で行った。

6．本報告書の整理担当調査員は、平成5年度伊藤　晃、二宮治夫、吉久正見、横山　定、平成6年度下澤公明、槙野芳典、田原　順、大橋雅也である。本文の執筆はこのほか調査担当調査員が分担し、文末に文責を記した。

7．本書に掲載した遺構写真は調査担当者が撮影した。遺物写真については、整理担当者の指示のもと、江尻泰幸が撮影した。なお、航空写真は有限会社　ＲＣスカイワークに委託した。

8．本書の編集は、下澤公明が担当し大橋雅也が補助した。

9．本報告書の関係する遺物、実測図、写真、マイクロフィルム等は岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325－3）に保管している。

凡　　例

1．報告書に記載された高度値は海抜高であり、方位は特に示さない限り磁北である。

2．遺物番号は、土器・瓦についてはまとめて通し番号を付けた。これ以外のものについては材質・種別を示すため、下記の略号を番号の前に付した。

石器・石製品：S　　土製品：C　　金属器・金属製品：M　　木器・木製品：W

紡錘車：R　　玉類：O

3．本報告書に掲載した土器実測図のうち、断面が黒塗りのものは、古墳時代から奈良・平安時代の焼成良好な硬質の須恵器、および陶質系土器である。また、トーンで表現したものは焼成が不良で、赤褐色系の色調を呈する須恵器、陶質系土器である。なお、中軸線に左右の白抜きがあるものは口径が不確かなものである。

4．掲載した遺構の縮尺率は必ずしも統一を図れず、個別にスケールを付した。また、遺物は土器が基本的に1/4の縮尺率であるほかは、統一を図れていないため、個別に縮尺率を明示した。

5．遺構名を省略する場合の略称は、以下の通りである。

竪穴住居：住　　掘立柱建物：建　　土壙：土　　井戸：井

また、遺物名については、壺形土器、甕形土器、高杯形土器などを壺、甕、高杯のように略称して用いる。

6．報告書中に用いる時代区分は、一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために文化史区分、世紀を併用した。

7．第7図は建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図を複製し、加筆したものである。

8．本文中に掲載した各種表の凡例は以下の通りである。

竪穴住居一覧表：柱穴欄は、すべてが検出されていない場合、推定本数を分母に、検出本数を分子にした分数表現を行った。なお、推定が困難な場合は分母が空白である。また、（　）付きの数値は現存を示す。

掘立柱建物一覧表：（　）付き数値は、現存、検出できたものである。

棟方向は、すべて磁北からの斜度を示す。

その他の遺構観察表中の土器欄は、出土量の多少によって、多い方から◎・○・△・×の4段階に分けた。

土器観察表：法量欄の（　）付き数値は径1/8以下からの復元推定値である。

色調は、小川正忠・竹原秀雄編著『新版　標準土色帖』1993年度版をもとに表記した。

胎土は、主に含有される砂粒の大きさにより、精良(0.5㎜以下)・微砂(0.5～1.0㎜)・細砂(2.0㎜以下)・砂礫(2.0㎜以上)に分類して表記した。なお、精良な胎土であり、従来、水漉し粘土といわれているものは、特に特徴欄に記入している。

目　　次

巻頭カラー写真

序

例言

凡例

目次

第1章　調査の経緯

第1節　調査の契機……1

第2節　第一次調査……5

第3節　調査の経緯と組織……7

（1）調査の経緯と経過……7

（2）日誌抄……9

（3）調査の組織……12

第2章　報告書の作成

第1節　報告書作成の体制……14

第2節　報告書作成の方法……15

（1）遺構の取り扱い……15

（2）遺物の取り扱い……16

（3）時期の取り扱い……17

第3章　遺跡をとりまく環境

第1節　地理的環境……19

第2節　歴史的環境……20

第4章　発掘調査の記録

第1節　調査の概要……23

第2節　遺構と遺物……25

（1）竪穴住居……25

（2）掘立柱建物……135

（3）周溝遺構……209

（4）区画溝……220

（5）柱穴列……224

（6）井戸……226

（7）炉……242

（8）墓……245

（9）土壙……263

(10) 柱穴……342

(11) 溝…… 347
(12) 土器溜り…… 364
(13) たわみ…… 377
(14) その他の遺構…… 391
(15) 遺構に伴わない遺物…… 393

第5章 結語

第1節 調査成果の概要…… 437
第2節 掘立柱建物群と奈良時代の遺構について…… 450
第3節 朝鮮半島系の遺物について…… 457
第4節 遺跡の歴史的位置づけ…… 464

附編

・斎富遺跡出土の軟玉製丸玉の産地分析 藁科哲男…… 471
・斎富遺跡出土の赤色顔料物質の微量定性分析
ならびにその赤色顔料に関わる材質定量分析 安田持幸 金杉直子…… 481
・斎富遺跡出土珠文鏡の鉛同位体比 平尾良光 榎本淳子…… 485
・斎富遺跡出土硬質土器の蛍光X線分析 三辻利一…… 489
・斎富遺跡出土土器の胎土分析
－土師質の須恵器を中心に－ 白石 純…… 505
・斎富遺跡と周辺古墳出土製鉄関連遺物の金属学的調査
大澤正己…… 511
・斎富遺跡亀田調査区における花粉分析・植物珪酸体分析
パリノ・サーヴェイ株式会社…… 549

新旧遺構対照表…… 556
索引…… 560
写真図版
報告書抄録
附 図

図　目　次

第１図　山陽自動車道関係遺跡位置図……３
第２図　山陽自動車道山陽町内ルート図（１/30,000）…４
第３図　第一次調査位置図（１/4,000）……５
第４図　第一次調査グリッド土層断面図（１/60）……６
第５図　調査区位置図（１/3,000）……７
第６図　遺跡位置図（１/1,000,000）……19
第７図　周辺遺跡分布図（１）（１/25,000）……21
第８図　周辺遺跡分布図（２）（１/15,000）……22
第９図　調査区内堆積土分布概念図（１/4,000）……23
第10図　竪穴住居配置図（１/1,000）……27・28
第11図　掘立柱建物・柱穴列・周溝遺構・
　区画溝配置図（１/1,000）……137・138
第12図　井戸・炉・墓・土壙・柱穴・
　土器溜り・たわみ配置図（１/1,000）……227・228
第13図　溝配置図（１/2,000）……348
第14図　縄文・弥生時代の遺構配置図（１/2,000）……438
第15図　古墳時代前半期の遺構配置図（１/2,000）……438
第16図　古墳時代後半期の遺構配置図（１/2,000）……444
第17図　製鉄関係遺物出土分布図（１/3,000）……444
第18図　奈良・平安時代の遺構配置図（１/2,000）……448
第19図　鎌倉時代以降の遺構配置図（１/2,000）……448
第20図　掘立柱建物方位と配置図（１/2,000）……452
第21図　奈良時代方形区画推定域と建物配置（１/2,000）
……454

表　目　次

表１　山陽自動車道関係遺跡一覧表……２・３
表２　調査工程表……８
表３　編年対照表……18
表４　斎富遺跡製鉄関係遺物出土一覧表……445
表５　掘立柱建物方位と規模一覧表……456
表６　角状杯（須恵器）出土遺跡一覧表……461
表７　算盤玉形紡錘車出土遺跡一覧表……462

巻頭カラー写真図版目次

巻頭カラー写真図版１　１．斎富遺跡全景（北東上空から）
　２．前田調査区（上空から）
巻頭カラー写真図版２　１．竪穴住居58出土新羅系陶質土器
　２．陶質・陶質系土器
巻頭カラー写真図版３　１．軟質系土器
　２．須恵器・陶質系土器（土師質）
巻頭カラー写真図版４　１．土壙62出土ねずみ返し状木製品

写真図版目次

写真図版１　１．調査前遠景（北東から）
　２．調査前遠景（北東から）
写真図版２　１．前田調査区全景（北東上空から）
　２．前田調査区全景（南東上空から）
写真図版３　１．前田調査区掘立柱建物と区画溝
　（南上空から）
　２．前田調査区西半部全景
　（南東上空から）
写真図版４　１．亀田調査区全景（南上空から）
　２．亀田調査区竪穴住居と溝
　（南上空から）
写真図版５　１．亀田Ｍ２区全景（東から）
　２．亀田Ｍ３区全景（西から）
　３．亀田Ｍ５区西半全景（北から）
写真図版６　１．亀田Ｍ６区北半全景（北西から）
　２．前田Ｍ６区全景（北から）
　３．竪穴住居18（南西から）
写真図版７　１．掘立柱建物１（南東から）
　２．掘立柱建物56・57、井戸10
　（南西から）
　３．掘立柱建物73、溝17（南から）
写真図版８　１．掘立柱建物74、柱穴列１・２（西から）
　２．井戸10（西上から）
　３．墓２（東から）
写真図版９　１．土壙62（南から）
　２．土壙62木製品出土状況（北から）
　３．土壙62木製品出土状況（南から）
写真図版10　１．土壙14遺物出土状況（東から）
　２．溝７西端部遺物出土状況
　３．溝12（東から）
写真図版11　１．竪穴住居１出土土器
　２．竪穴住居３出土土器
　３．竪穴住居４出土土器

4．竪穴住居５出土土器
写真図版12　1．竪穴住居６出土土器
2．竪穴住居11出土土器
3．竪穴住居13出土土器
4．竪穴住居15出土土器
5．竪穴住居16出土土器
6．竪穴住居17出土土器
7．竪穴住居18出土土器
写真図版13　1．竪穴住居22出土土器
2．竪穴住居25出土土器
3．竪穴住居28出土土器
4．竪穴住居30出土土器
5．竪穴住居31出土土器
6．竪穴住居37出土土器
写真図版14　1．竪穴住居39出土土器
2．竪穴住居48出土土器
3．竪穴住居50出土土器
写真図版15　1．竪穴住居51出土土器
2．竪穴住居52出土土器
3．竪穴住居53出土土器
4．竪穴住居54出土土器
写真図版16　1．竪穴住居58出土土器
2．竪穴住居60出土土器
3．竪穴住居62出土土器
4．竪穴住居63出土土器
写真図版17　1．竪穴住居64出土土器
2．竪穴住居68出土土器
3．竪穴住居69出土土器
4．竪穴住居70出土土器
5．周溝遺構１出土土器
写真図版18　1．周溝遺構４出土土器
2．周溝遺構５出土土器
3．周溝遺構６出土土器
4．区画溝出土土器
写真図版19　1．井戸２出土土器
2．井戸３出土土器
3．井戸５出土土器
4．井戸６出土土器
5．井戸７出土土器
写真図版20　1．炉７出土土器
2．墓１出土土器
3．墓３出土土器
4．墓５出土土器
写真図版21　1．墓６出土土器
2．墓７出土土器
3．墓８出土土器
4．墓10出土土器
5．墓11出土土器
写真図版22　1．土壙１出土土器
2．土壙２出土土器
3．土壙４出土土器
4．土壙９出土土器
5．土壙10出土土器
写真図版23　1．土壙12出土土器（1）
写真図版24　1．土壙12出土土器（2）
2．土壙14出土土器（1）
写真図版25　1．土壙14出土土器（2）
写真図版26　1．土壙14出土土器（3）
2．土壙15出土土器
写真図版27　1．土壙18出土土器
2．土壙24出土土器
3．土壙31出土土器
4．土壙33出土土器
5．土壙35出土土器
6．土壙38出土土器
7．土壙40出土土器
写真図版28　1．土壙41出土土器
2．土壙43出土土器
3．土壙42出土土器
4．土壙48・49出土土器
5．土壙50出土土器
写真図版29　1．土壙52出土土器
2．土壙54出土土器
3．土壙55出土土器
4．土壙59出土土器
写真図版30　1．土壙61出土土器
2．土壙62出土土器
3．土壙66出土土器
4．土壙70出土土器
写真図版31　1．柱穴出土土器
2．溝１出土土器
3．溝３出土土器
4．溝６出土土器
5．溝７出土土器
6．溝11出土土器
7．溝12出土土器
写真図版32　1．土器溜り１出土土器
2．土器溜り４出土土器
写真図版33　1．土器溜り５出土土器
2．土器溜り６出土土器
3．土器溜り７出土土器
写真図版34　1．たわみ１出土土器
写真図版35　1．たわみ２出土土器
2．たわみ３出土土器
3．たわみ７出土土器
4．たわみ８出土土器
5．たわみ９出土土器
写真図版36　1．たわみ10出土土器
2．地鎮遺構出土土器
3．胞衣遺構出土土器
写真図版37　1．遺構に伴わない遺物（1）（縄文土器）
2．遺構に伴わない遺物（2）（弥生土器）
写真図版38　1．遺構に伴わない遺物（3）
（古墳時代の土師器）
2．遺構に伴わない遺物（4）
（軟質系土器）
3．遺構に伴わない遺物（5）
（須恵器　蓋）
写真図版39　1．遺構に伴わない遺物（6）
（須恵器・陶質系土器　高杯）
2．遺構に伴わない遺物（7）
（須恵器・陶質系土器　壺、甕）
写真図版40　1．遺構に伴わない遺物（8）
（須恵器・陶質系土器　甑）
2．遺構に伴わない遺物（9）
（須恵器・陶質系土器　椀）

3．遺構に伴わない遺物（10）
（陶質系土器　器台）
写真図版41　1．遺構に伴わない遺物（11）
（須恵器・陶質系土器　器台）
写真図版42　1．遺構に伴わない遺物（12）
（土師質の須恵器）
2．遺構に伴わない遺物（13）
（奈良・平安時代の土器）
3．遺構に伴わない遺物（14）
（鎌倉時代以降の土器）
4．遺構に伴わない遺物（15）
（カマド）
写真図版43　1．出土石器（1）
写真図版44　1．出土石器（2）
写真図版45　1．出土金属器（1）
写真図版46　1．出土金属器（2）
写真図版47　1．出土金属器（3）
写真図版48　1．出土分銅形土製品
2．出土紡錘車（1）
写真図版49　1．出土紡錘車（2）
写真図版50　1．出土玉類
2．出土土鈴
3．出土異形土製品
写真図版51　1．塼
2．遺構に伴わない遺物（16）（把手）
写真図版52　1．土壙62出土木製品

第１章　調査の経緯

第１節　調査の契機

昭和62年度段階において、岡山県内の山陽自動車道建設路線上で唯一残されていた埋蔵文化財の取り扱い箇所は備前工事事務所管轄の岡山－備前間であった。この岡山－備前間において分布調査などから埋蔵文化財の調査対象地が認められていたのは山陽町、瀬戸町、熊山町の３町であった。このうち山陽町を除く他の２町の第一次調査を昭和63年度から行える見通しがついた。これをうけて、積雪のために冬期の１～３月までの調査中断を余儀なくされた中国横断自動車道関連の発掘調査を担当していた２名の調査員が山陽自動車道関係の第一次調査にあたった。

昭和63年度には、瀬戸町保木池尻遺跡、同保木西遺跡、同松尾２・３号墳、同松尾古窯の第一次調査を、平成元年度において瀬戸町実教寺南遺跡と同実教寺北遺跡の第一次調査を実施した。

平成２年度は、山陽町については依然見通しがつかない状況であったが、先の第一次調査の結果にもとづいて全面調査が必要とされる遺跡と、まだ第一次調査がされていない遺跡とをあわせて担当２名で本格的な調査体制をとることとなった。この年度は、瀬戸町奥池西遺跡、同奥池北遺跡、同塩納成Ａ・Ｂ遺跡、熊山町満願寺遺跡の第一次調査および瀬戸町実教寺北遺跡、同松尾２・４・５号墳の全面調査を実施した。この年度末近くには山陽町内の遺跡の一部について調査着手可能な状況となり、山陽自動車道の岡山工事事務所管轄である津寺遺跡の調査終了に伴い、これを担当していた調査員から２名を移動し計４名で斎富古墳群の第一次調査を実施した。

平成３年度当初においても、唯一残されていた山陽町地区では前年度に実施した斎富古墳群の第一次調査以外の主要地区については、いまだ条件整備等が整っていないことから調査も入れない状況であった。

自動車道の山陽町内の路線は、第２図に示したとおりである。これによると、岡山市から馬屋トンネルを抜けて山陽町内にはいり、北に備前国分寺・両宮山古墳・森山古墳・廻り山古墳、そして南には備前国分尼寺・朱千駄古墳・小山古墳等が点在するあいだの水田を走り、立川の集落の南側にインターチェンジを造る。この間には高月条里が広がる。さらに、このインターチェンジから東へ延び、砂川を渡り、南方条里が指摘されている地区に延び、斎富と南方の字境を通過し梅峠トンネルから瀬戸町へぬけて行くのである。この間において遺跡の内容が把握されていたのは、池新田遺跡と新屋敷遺跡である。この２遺跡は、山陽自動車道の南側に接している県道岡山吉井線の改良工事に伴い昭和63年度に調査され、弥生時代から古墳時代にかけての遺構および遺物が検出されその内容が把握されていた。この他の地区、特にかって永山卯三郎が指摘した高月条里遺構の詳細についてはまったく把握されていなかった。備前国分寺については、昭和49年に国の補助を受けて寺域および主要伽藍を把握する目的の発掘調査が行われており、寺域は、東西600尺、南北800尺内外が想定されている。この時点に確認された南門は３×２間のものであり、南限の寺域から南に80ｍのところを通過するのである。この国分寺から南へ300ｍのところに備前国分尼寺が想定され、この両者を結ぶとみられる現在

表1　山陽自動車道関係遺跡一覧表(1)

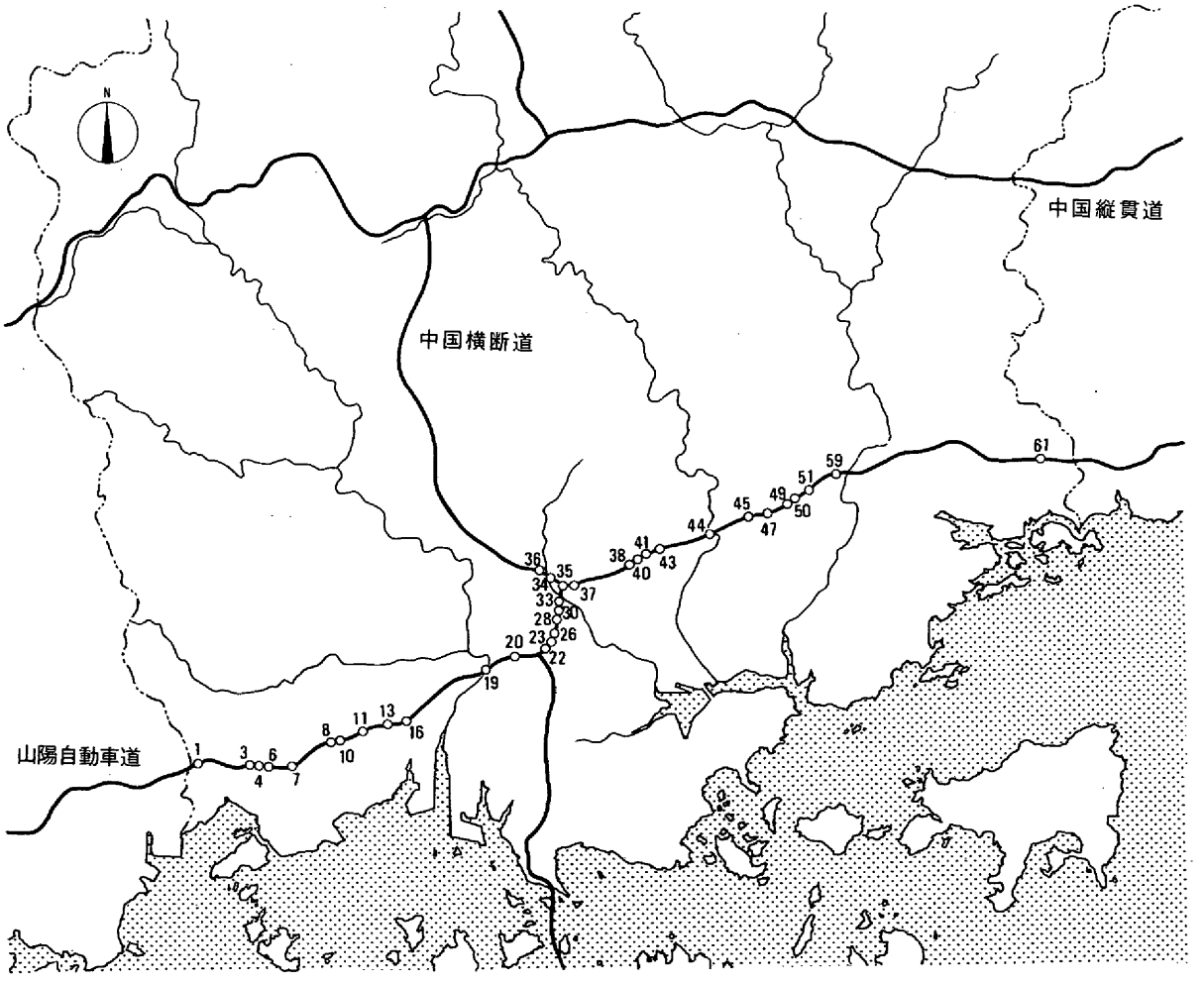
平成8年3月31日現在

番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	調査年度	調査面積	調査担当者	県報告
1	内山遺跡 内山古墳	笠岡市篠坂		昭和59年度	550	福田	70
2	中畦遺跡	笠岡市小平井		昭和59年度	98	福田	70
3	鍛冶屋遺跡	笠岡市小平井	古墳時代～中世の集落・製鉄跡	昭和59～61年度	29,328	松本・岡田・福田・田中・武田	70
4	圃井土井遺跡	笠岡市園井	中世の集落	昭和59～60年度	5,570	福田・田中	70
5	猫宜ケ峠遺跡	笠岡市園井		昭和59年度	460	福田	70
6	本谷遺跡	笠岡市今立	中世の集落	昭和59年度	200	福田	70
7	沖の店遺跡	鴨方町小坂西	中世の窯跡	昭和55年度		伊藤・浅倉	42
8	和田遺跡	鴨方町益坂	弥生時代の墳墓群	昭和54年度		伊藤・浅倉	42
	宮の脇古墳	鴨方町地頭上	古墳時代の墳墓	昭和54年度		伊藤・浅倉	42
9	向原遺跡	鴨方町益坂		昭和54年度		伊藤・浅倉	42
10	阿坂古墳	鴨方町益坂	古墳時代の墳墓	昭和54年度		伊藤・浅倉	42
11	上竹西の坊遺跡	金光町阿坂	弥生時代～古代の集落・窯跡	昭和56・58年度	9,650	正岡・井上・福田・古谷野・武田	69
12	唐津池北遺跡	倉敷市玉島道口	弥生時代の集落	昭和58～59年度	5,230	正岡・福田・古谷野	69
13	道口遺跡	倉敷市玉島	古墳時代の集落	昭和58～59年度	1,830	正岡・福田・古谷野	69
14	沢寺遺跡	倉敷市玉島八島	中世の集落・貝塚	昭和58～59年度	2,940	正岡・福田・古谷野	69
15	西光坊遺跡	倉敷市玉島八島	中世の集落・貝塚	昭和58～59年度	480	正岡・福田・古谷野	69
16	亀山遺跡	倉敷市玉島八島	中世の集落・貝塚・窯跡・墳墓	昭和58～60年度	10,160	正岡・岡田・福田・古谷野・田中・武田	69
17	中山貝塚	船穂町中山	中世の貝塚	昭和59年度	850	浅倉・中野	81
18	酒津八幡山遺跡	倉敷市酒津	古墳時代の遺物包含層	昭和59年度	770	浅倉・中野	81
19	酒津一水江遺跡	倉敷市酒津	弥生時代～中世の遺物包含層	昭和59年度	260	浅倉・中野	81
20	菅生小学校裏山遺跡	倉敷市西坂	旧石器～中世の集落	昭和59・60～62年度	21,450	浅倉・中野・亀山・小松原	81
	西坂古墳	倉敷市西坂	古墳時代の墳墓	昭和61年度		中野・亀山	81
21	三田散布地	倉敷市三田	中世の水田	昭和61年度	200	井上	81
22	二子14号墳	倉敷市二子	古墳時代の墳墓	昭和61～62年度	1,700	井上・松本・亀山	81
23	矢部古墳群A	倉敷市矢部	古墳時代の墳墓群	昭和59・61年度	4,760	浅倉・大智	81
24	矢部古墳群B	倉敷市矢部	弥生時代の集落・古墳時代の墳墓群	昭和59・61～62年度	2,820	井上・内藤・大智	82
25	矢部大坑遺跡	倉敷市矢部	弥生時代の集落・中世の祭祀跡	昭和62年度	1,200	内藤・大智	82
26	矢部奥田遺跡	倉敷市矢部	縄文時代の貝塚・古墳時代の粘土採掘跡	昭和59・62年度	3,200	山磨・浅倉・中野・内藤・大智・佐守	82
27	矢部堀越遺跡	倉敷市矢部	弥生時代～中世の集落・墳墓	昭和59・62年度	7,400	浅倉・中野・内藤・大智・石田	82
28	郷境墳墓群	岡山市津寺	弥生時代～古墳時代の墳墓群	昭和61～62年度	1,365	松本・亀山	89
29	前池内遺跡	岡山市津寺	弥生時代～中世の集落・墳墓	昭和61～62年度	6,835	中野・小松原	89
30	前池内3号墳	岡山市津寺	古墳時代の墳墓	昭和62年度	1,675	田中・亀山	89
	前池内4～7号墳	岡山市津寺	古墳時代の墳墓群	昭和63年度	990	中野・後藤	89
31	後池内遺跡	岡山市津寺	弥生時代・中世の集落	昭和63年度		正岡・田中・川崎・亀山	89
	後池内古墳	岡山市津寺	古墳時代の墳墓	平成元年度	240	高畑・土井	89
32	黒住・雲山遺跡	岡山市津寺	縄文時代～中世の集落・墳墓	昭和61～63年度	24,463	正岡・山磨・川崎・佐守	89
33	甫崎・天神山遺跡	岡山市津寺	縄文時代～中世の集落・墳墓・城跡	昭和61～平成元年度	15,729	宇垣・岡本・片山・大智・澤山・柴田	89
34	三手遺跡	岡山市三手	古墳時代～近世の集落・水田・墳墓	昭和61・63年度	20,584	正岡・小柴・山磨・二宮・吉田・中野・川崎・小田・福田・亀山・大橋・後藤	90
35	津寺遺跡	岡山市津寺	弥生時代～近世の集落・水田・官衙・墳墓	昭和61・63～平成4年度	87,290	葛原・正岡・小柴・井上・松本・高畑・山磨・岡田・二宮・福田・浅倉・林・吉田・野上・中野・窪田・栗尾・垣内・井上・川崎・光永・島崎・源・小田・福田・広瀬・山本・片山・田代・亀山・安井・佐守・大橋・小松原・澤山・弘田・柴田・古市・村田・久保・森・後藤・飯島・佐伯・谷岡・土井・石黒・波多野・守屋	90・98 104
36	高塚遺跡	岡山市高塚	弥生時代～中世の集落・祭祀跡	昭和62～平成元年度	16,195	正岡・松本・浅倉・窪田・古谷野・江見・岡本・栗尾・垣内・川崎・平井・長川・佐守・小松原・弘田・横山・森・谷岡・石田	未刊
37	政所遺跡	岡山市加茂	弥生時代～中世の集落・墳墓・鋳造跡	平成元年～平成4年度	17,683	正岡・松本・浅倉・窪田・古谷野・出原・江見・岡本・吉久・平井・川崎・長川・平松・亀山・古市・佐守・澤山・弘田・横山・柴田・森・守屋	未刊
38	富原西奥古墳	岡山市富原	古墳時代の墳墓	昭和63年度	300	松本・佐守	83
39	富原大池奥山遺跡	岡山市富原		昭和63年度	300	松本・佐守	83
40	大岩遺跡	岡山市富原	弥生時代～古墳時代の集落・江戸時代の墓	平成4年度	1,583	正岡・浅倉・二宮・古谷野・中野・松岡・澤山・柴田	未刊
41	田益遺跡	岡山市田益	弥生時代～中世の集落	平成2～3年度	5,440	伊藤・松本・下澤・岡田・二宮・窪田・野上・山本・佐守・長門	未刊
42	白壁古墳	岡山市横井上	古墳時代の墳墓	平成2年度	300	松本・佐守	83
43	白壁奥遺跡	岡山市横井上	古墳時代～古代の製鉄跡・墳墓	平成4年度	3,500	下澤・竹井・滝川	83
44	平瀬古墳群	岡山市玉柏	古墳時代の墳墓群	平成元～2年度	1,000	葛原・井上・大智	83

表１　山陽自動車道関係遺跡一覧表（２）

平成８年３月31日現在

番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	調査年度	調査面積	調査担当者	県報告
45	馬屋遺跡	山陽町馬屋	古代～中世の集落	平成３～４年度	10,412	伊藤・下澤・二宮・窪田・野上・平松・横山	99
46	池新田遺跡	山陽町穂崎		平成３年度	1,120	伊藤・下澤・二宮・窪田・野上・平松・横山	99
47	新屋敷遺跡	山陽町船穂	弥生時代の集落	平成３年度	1,164	伊藤・下澤・二宮・窪田・野上・平松・横山	99
48	長尾遺跡	山陽町	遺物包含層	平成３年度	50	下澤・平松・横山	99
49	斎富遺跡	山陽町斎富	縄文時代～中世の集落	平成３～４年度	20,580	伊藤・下澤・井上・岡田・福田・平井・二宮・窪田・大森・野上・古谷野・竹井・吉久・山田・石田・山本・長川・田原・東呂木・松岡・安井・大橋・高田・横山・氏平・滝川・長門・根木	本書(105)
50	斎富古墳群	山陽町斎富	古墳時代・中世の墳墓群	平成３～４年度	1,683	福田・松岡・安井・古市・澤山	99
51	勘定口２号墳	瀬戸町塩納	古墳時代の墳墓	平成４年度	370	福田	99
52	塩納成遺跡Ａ	瀬戸町塩納		平成２年度	73	下澤・栗原	99
	塩納成遺跡Ｂ	瀬戸町塩納	遺物包含層	平成２年度	80	下澤・栗原	
54	実教寺北遺跡	瀬戸町万富		平成２年度	270	下澤・栗原	99
	実教寺南遺跡	瀬戸町万富	遺物包含層	平成２年度	340	下澤・栗原	
55	保木池尻遺跡	瀬戸町保木		平成元年度	190	下澤・大智	99
56	保木西遺跡	瀬戸町保木		平成元年度	220	下澤・大智	99
57	保木窯跡	瀬戸町保木	古代の墳墓	平成２年度	200	下澤・栗原	99
58	奥池西遺跡	瀬戸町万富		平成２年度	537	下澤・栗原	99
	奥池北遺跡	瀬戸町万富		平成２年度			
59	松尾古墳群	瀬戸町万富	古墳時代の墳墓群	平成元～２年度	610	下澤・栗原・大智	99
	松尾窯跡	瀬戸町万富	中世の窯跡	平成元年度		下澤・大智	
60	満願寺遺跡	熊山町奥吉原		平成２年度	58	下澤・栗原	99
61	荒神社東遺跡	備前市福石		昭和51年度		岡本	25



第１図　山陽自動車道関係遺跡位置図

の町道両宮線が通っている。自動車道はこの南限の寺域外の遺構内容、そして先の町道両宮線が両寺に関わるものなのかによっては、設計変更等の協議が生じる可能性をもっていた。さらに、南方条里遺構は分布調査の段階においては遺物等もみられず、条里遺構の内容を確認することが主眼であったが、平成３年３月に町の教育委員会が圃場整備事業に伴って南方地区を調査した結果、きわめて密度の濃い遺構が確認されたことから、自動車道部分も変わらない様相を示すものと想定された。このように過去の調査および近接する調査地の状況からその重要性が知られてくるのであるが、道路用地内の調査は依然未着手であった。

このような状況下にあったが、道路公団備前工事事務所と地元とのたびかさなる折衝により、ようやく持ち越されていた条件整備等の懸案についての解決の見通しがついた。これをうけて、山陽自動車道の岡山工事事務所管轄の田益遺跡の調査を担当していた４名の調査員を移動させ、平成３年５月から山陽町の第一次調査を実施した。この間の調査対象遺跡は、高月条里遺構、長尾遺跡、門前奥池遺跡、南方条里遺構、南方条里遺構（ＳＴＡ＋60から西）の５か所である。その結果、遺構密度の希薄さから長尾遺跡、南方条里遺構（ＳＴＡ＋60から西）については、この第一次調査で終了した。しかしながら、高月条里遺構、門前奥池遺跡、南方条里遺構の３地点については想定されていたように遺構密度の濃いことを確認した。さらに、門前奥池遺跡、南方条里遺構の両遺跡については、切れることなく連続した遺構の広がりを把握することができたのである。

このようなことから、高月条里遺構は馬屋遺跡として、そして門前奥池遺跡と南方条里遺構については斎富遺跡として全面調査を実施し、今回報告する運びとなったのである。　　（下澤）

参考文献

「新屋敷遺跡」「池新田遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』22　1992
「備前国分寺跡緊急発掘調査概報」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』13　岡山県教育委員会　1975
伊藤　晃　横山　定ほか　「馬屋遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』99　岡山県教育委員会　1995

第２図　山陽自動車道山陽町内ルート図（１/30,000）

第２節　第一次調査

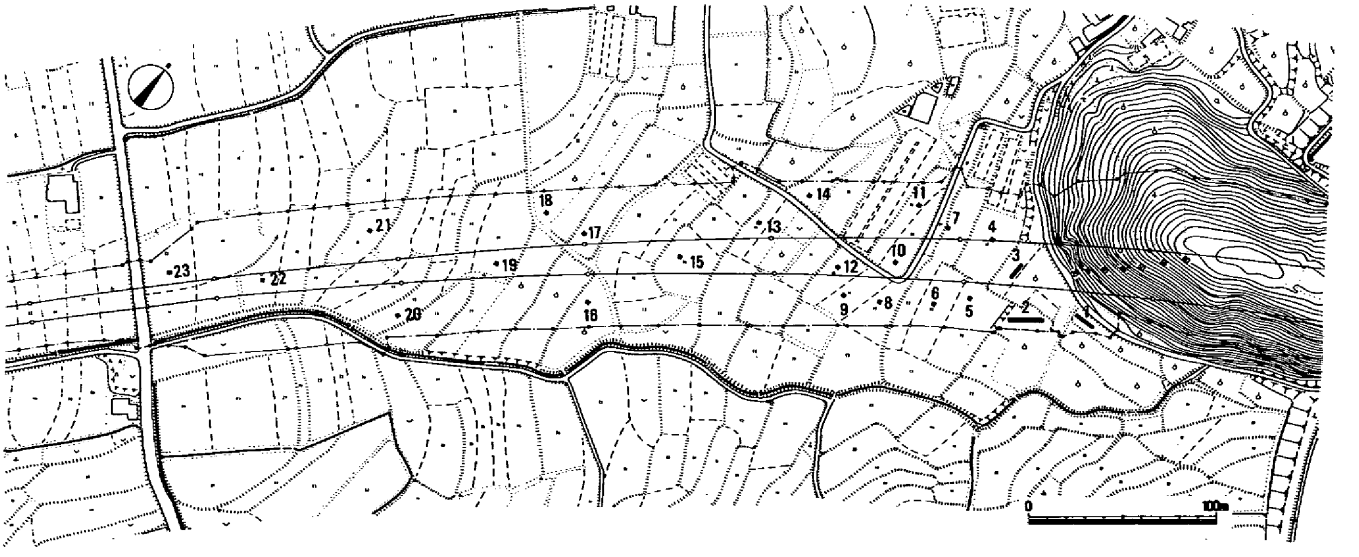
斎富遺跡は、当初においては南方条里遺構と門前奥池西遺跡の２か所として調査対象となっていた。前者については、斎富古墳群の所在する丘陵の南西裾から町道沼田舟廻り線を越えてさらに西へと広がるものと想定され、後者はその丘陵の裾部に一部がかかっており周知の遺跡地とされていたものである。この対象地の現状は、水田部分がほとんどであり、他に畑と鶏舎に一部が利用されていた。

調査は、平成３年５月７日から着手し同17日には終了した。調査の方法は、遺構の面的広がりを把握するため複数のトレンチを設定し、東から西へ進行することとした。しかしながら、**Ｔ－１・２・３**（第３図）の掘り下げ過程で、堆積土が土よりも礫を多量に含む層が主体となっていることが明らかとなった。このことから、調査の効率化を図るため土層観察に主眼を移し２×２ｍのグリットを設定することとした。

Ｇ－４（第４図）は、丘陵裾部近くであり、丘陵の人為的カット面、もしくは斜面堆積と考えていたが図のように遺構が認められた。基盤層と考えられるのは、７層の淡黄褐色土である。この７層中には粗砂または礫の包含はほとんど認められず、これより上位において礫を多く含んだ遺物包含層を形成している。このグリットでは認められなかったが、これと接する**Ｔ－３**においては７層淡黄褐色土と同じと想定される層に掘り込まれている遺構を認めることができた。また、**Ｇ－４**の５層と同じと考えられる層より遺構を認めることができた。さらに、**Ｔ－１・２**においても同様な状況を観察することができた。

Ｇ－11（図４）は、南側道近くにあり、基盤層である淡黄褐色土中に掘り込まれた遺構を認めた。このグリットの西側に設けられた**Ｇ－７**では、この基盤層面での弥生時代の土器溜りを検出した。**Ｇ－12**では、明瞭な淡黄褐色土が認められず、それと対応する層と想定されるものは礫を多く含んでいる。このような状況が観察されるのは、**Ｇ－５・６・８・９**においてである。

Ｇ－13（図４）は、上り線の中央やや西寄りに設けたもので、先のグリットに認められていた黄褐



第３図　第一次調査位置図（１/4,000）

色系の土層は認められなかった。いずれも黒褐色あるいは暗灰色系の礫を多く含む層が主体となり、かつ、遺物の含まれる量が極めて多くなることが認められた。G－13の北側道部分に設けられたG－14は、淡黄褐色系で礫を多く含む層が認められ、それを掘り込んだ遺構を検出することができた。

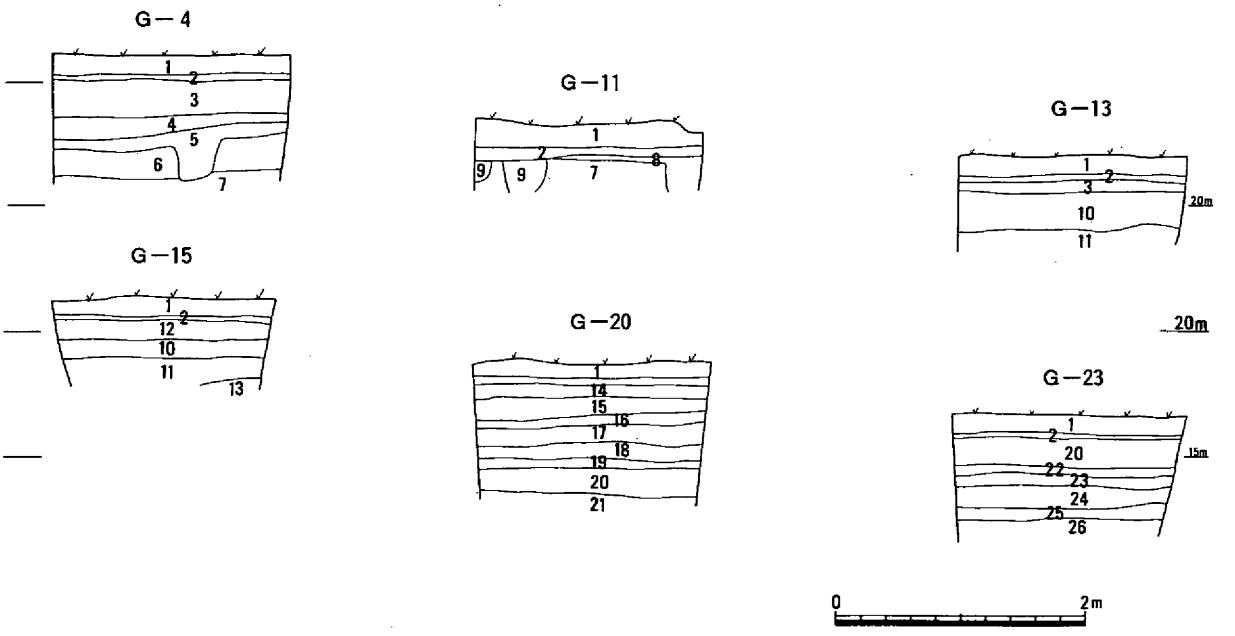
G－15（図4）は、南北間のやや北寄りに設けたもので、前述したG－13と同様な堆積状態を示している。G－16～19は、G－15と同じような堆積状態を示すがG－19においては、黄褐色系の土層が認められ、そこに掘り込まれた遺構を検出することができた。また、礫を含む黒褐色土系の土層より多くの土器を検出した。

G－20（図4）は、北側道寄りに設けた。19層の暗灰褐色粘性砂質土から下位の堆積土は、いずれも遺物を含んでおり特に21層は、多くの遺物の包含が認められた。G－21は、表土下30cmからグライ化が認められ、遺物の包含もあまり認められなくなっている。

G－23（図4）は、町道沼田舟廻り線に接して設けた。前述したグリットで認められていた礫が含まれる層を確認することができず、G－21と同様にグライ化が認められた。G－23より北に設けたG－22は、これと同じように均一なる水平堆積でグライ化が認められ、G－20で認められた礫は検出できなかったのである。

以上の結果から、丘陵裾部付近においては遺構が二面認められ、西に行くにしたがい黄褐色系の基盤層が存在し遺構検出は比較的容易と判断された。中央からG－20の南方向には黒褐色あるいは暗灰色系の礫を多く含み遺物を多量に含む包含層があり遺構の検出は容易でないことが想定される。また、G－21から町道方向においては低湿地の様相を示していた。したがって、斎富遺跡の範囲はG－21までの380m程の間であることが明らかとなった。

（下澤）



1．耕作土
2．橙灰色粘質土（床土）
3．灰褐色土
4．暗灰色土
5．灰色土
6．黒褐色土
7．淡黄褐色土
8．灰色粘性砂質土
9．暗灰色土
10．黒褐色砂礫
11．暗灰色砂礫
12．灰褐色粘性砂質土
13．暗灰色砂礫
14．灰褐色粘質土
15．灰色粘質土
16．明茶灰色粘質土
17．明灰褐色粘質土
18．灰色砂礫
19．暗灰褐色粘性砂質土
20．暗灰色粘質土
21．礫
22．黄灰色粘性砂質土
23．暗灰褐色粘質土
24．暗灰黄色粘質土
25．暗灰褐色粘質土
26．黄褐色粘質土

第4図　第一次調査グリッド土層断面図（1/60）

第３節　調査の経緯と組織

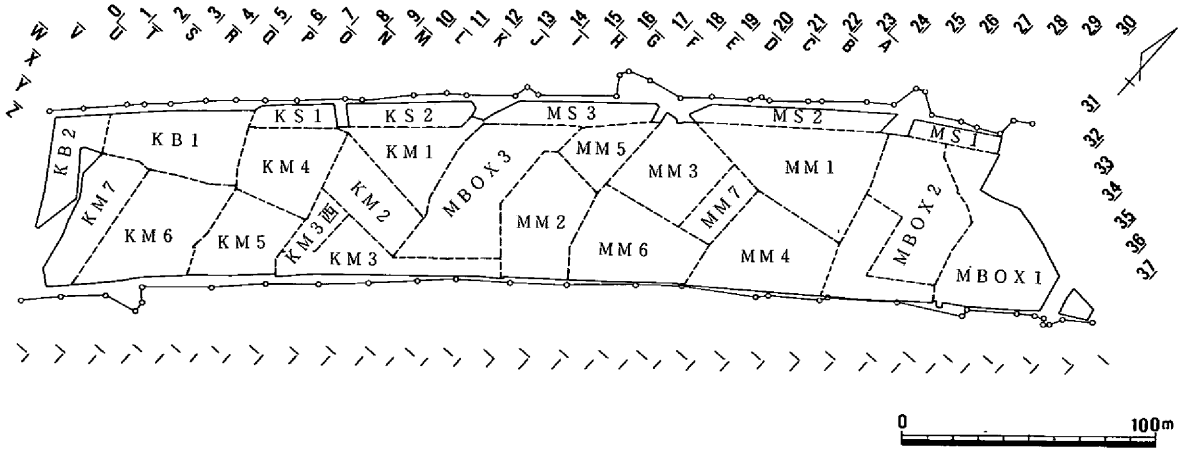
（１）調査の経緯と経過

第一次調査の結果から斎富遺跡の発掘調査は、山陽自動車道の岡山工事事務所管内において実施していた田益遺跡の調査終了予定が平成３年６月末であることから、これを担当していた調査員のうち３名で、同年７月から全面調査に着手することとなった。

調査区の設定は、第５図の南北方向のグリット線である13ライン線上を南北にのびる畦畔が字境となっており、南西側が亀田そして北東側が前田となる。このことから、前者を亀田地区（Ｋ）、後者を前田地区（Ｍ）とした。また、工事用道路としての北側側道部分（Ｓ）、土盛部分（Ｍ）、３か所のボックス部分（ＢＯＸ）に分割し、さらにこれを小分割し調査区として設定した。調査区名はこれらの記号を組み合わせ地区名、部分名に続いて算用数字で表現した。以下、本文中にある調査区名の記述はこれに基づくものである。なお、調査時には国土座標に基づき10ｍグリッドを設定し、遺構の実測、遺物の取り上げ等に用いた（第５図）。また、実際の発掘調査は調査範囲が現在棚田に利用されていることから、重機により順次表土およびこの水田層を除去し、この後人力で遺構の検出面まで掘り下げを行った。

発掘調査は、ＫＢ１区から着手した。平成３年10月には新たに、中国横断自動車道および井原線の調査が９月末に終了することから、この人員を移動し２班で調査員６名を増員しＭＢＯＸ１区とＭＳ１区を担当することとなった。なお、山陽町内の新屋敷遺跡・池新田遺跡・馬屋遺跡の発掘調査は斎富遺跡のそれと時を同じくして３班７名の体制で順次実施した。ＫＢ１区は、調査範囲の南西端付近に位置し、微高地から低位部への変換点に当たることが判明した。また古式の須恵器が散見され、この後の調査に先見をつけた。

斎富遺跡の調査面積は20,580㎡であり、このうち平成３年度中に2,800㎡余りの調査を終了した。平成４年度は、残り17,800㎡についてが調査対象となった。道路公団備前工事事務所は山陽自動車道の供用開始を平成５年度中としていたため、当初計画していた６班20名の体制では対応が困難な状況下にあった。しかしながら、百間川改修に伴う調査を半年間中断することにより１班３名の調査員の



第５図　調査区位置図（１/3,000）

増員を図ることにより人的に対応し、そして、公団側の工事工程の再三にわたる検討により平成4年10月末をもって調査を完了すべく努力することで最終年度の調査に入った。

平成4年度は7班23名の調査員体制で調査を実施した。ＭＢＯＸ3区の調査が昨年度から引き続き残されていた以外は、側道部分や構造物であるＢＯＸについてはすでに終了している状況であり、この年度の調査はこれら構造物の工事と平行して行わざるを得なかった。また、調査の主体は本線敷の盛土部分で第一次調査において確認された遺物量と遺構密度の高い箇所に相当した。

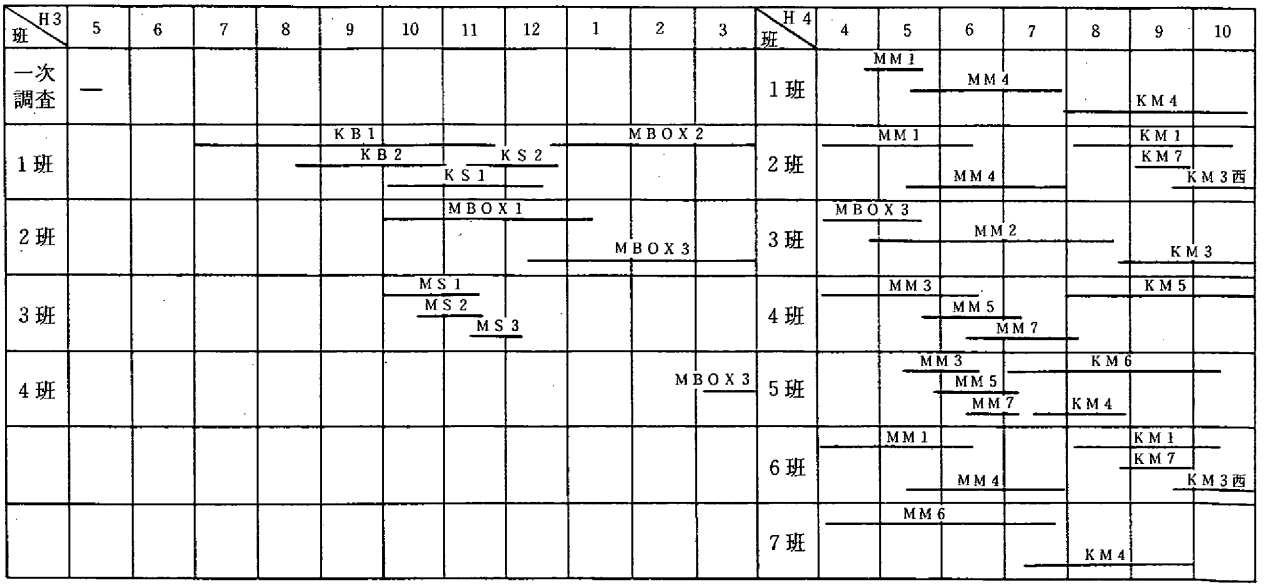
計画された7班調査員23名の体制では、とうてい地元の山陽町内だけでは発掘調査に従事する作業員の確保は困難であった。この必要とする人員を確保するために、岡山市、瀬戸町、赤坂町、吉井町、英田町、佐伯町などの近隣市町からの確保が必須の条件であった。そのため交通手段の確保を図り、先の近隣市町からのバス路線を設け人員の確保の用件を整え、作業員総勢140名近い体制で実施することとなった。

調査は、基本的に前田調査区から亀田調査区へと進めていった。表2に示したように調査工程は比較的短期間となり、遺構密度と調査工程の関係で、複数の調査区を同一の担当者が一時同時並行し、調査を進行させざるをえなかった。このことは担当の調査員においてはさらなる負担の増加となった。

前田地区の調査では官衙関連遺構と推定される奈良時代の掘立柱建物群とこれを区画する溝が検出され、遺物についても須恵器・土師器の他、硯・石帯等の比較的豊富な奈良時代の資料を得た。同年7月にこの内容を記者発表し、さらに現地説明会を開催し、一般県民への普及・啓蒙を図った。また、同月には、ＭＢＯＸ3区で珠文鏡、新羅系の陶質土器、馬具などが出土し、前年度に出土した古式の須恵器と合わせ5世紀～6世紀における斎富遺跡の実体にせまる資料を得た。この時期の資料は続く亀田地区の調査において、より豊富に得られた。亀田調査区は、東側から西側へと調査を進行させ、ＫＭ1区においては、土壙からねずみ返し状の木製品が出土した。また、調査範囲の南西端はＫＭ6区では遺構密度が疎になり、ＫＭ7区においては低位部となることが判明した。

以上の経過を経て、斎富遺跡の調査は平成4年10月末にすべて終了した。　　（下澤）

表2　調査工程表



（２）日誌抄

一次調査

平成３年５月７日～５月17日

門前奥池西遺跡の調査開始

Ｔ１～23の掘り下げ、写真撮影、実測。

全面調査

平成３年７月１日～７月30日

亀田調査区から開始する。

亀田Ｂ１区－掘り下げ、遺構検出。

平成３年８月１日～８月31日

亀田Ｂ１区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影。

亀田Ｂ２区－掘り下げ。

平成３年９月２日～９月30日

亀田Ｂ１区－遺構検出、写真撮影、表土排土。

亀田Ｂ２区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測、表土排土。

平成３年10月１日～10月30日

亀田Ｂ１区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

亀田Ｂ２区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

前田調査区は、側道部分から開始。

前田Ｓ１区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

前田Ｓ２区－表土排土、遺構検出、写真撮影、実測。

前田ＢＯＸ１区－掘り下げ、写真撮影、実測。

亀田Ｓ１区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

平成３年11月１日～11月29日

亀田Ｂ１区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。25日終了。

亀田Ｂ２区－実測。22日終了。

前田Ｓ１区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。18日終了。

前田Ｓ２区－掘り下げ、実測。19日終了。

前田Ｓ３区－表土排土、遺構検出、写真撮影、掘り下げ、実測。

前田ＢＯＸ１区－掘り下げ、遺構検出、実測、写真撮影、実測。

平成３年12月２日～12月26日

亀田Ｓ１区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。19日終了。

亀田Ｓ２区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。19日終了。

前田Ｓ３区－実測、写真撮影。10日終了。

前田ＢＯＸ１区－表土排土、掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

前田ＢＯＸ３区－掘り下げ。

前田ＢＯＸ２区－表土排土、掘り下げ、遺構検出。

平成４年１月４日～１月31日

前田ＢＯＸ２区－遺構検出、写真撮影、掘り下げ、実測。

前田ＢＯＸ１区－掘り下げ、写真撮影、実測。13日終了。

前田ＢＯＸ３区－掘り下げ、遺構検出。

平成４年２月１日～２月28日

前田ＢＯＸ２区－遺構検出、写真撮影、掘り下げ、実測。

前田ＢＯＸ３区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

平成４年３月２日～３月30日

前田ＢＯＸ２区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。30日終了。

前田ＢＯＸ３区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影。

平成４年４月３日～４月30日

前田ＢＯＸ３区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

前田Ｍ１区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

前田Ｍ３区－掘り下げ、遺構検出。

前田Ｍ６区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

前田Ｍ６区－掘り下げ。

平成４年５月１日～５月29日

前田ＢＯＸ３区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。21日終了。

前田Ｍ２区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

前田Ｍ１区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

前田Ｍ４区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

前田Ｍ３区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

前田Ｍ５区－掘り下げ、遺構検出。

前田Ｍ６区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

平成４年６月１日～６月29日

前田Ｍ４区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

前田Ｍ２区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

前田Ｍ１区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

前田Ｍ３区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。18日終了。

前田Ｍ５区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

前田Ｍ７区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

前田Ｍ７区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

平成４年７月１日～７月31日

航空撮影。現地説明会。

前田Ｍ２区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

前田Ｍ４区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。30日終了。

前田Ｍ１区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。30日終了。

前田Ｍ６区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。24日終了。

前田Ｍ５区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。７日終了。

前田Ｍ７区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

亀田Ｍ２区－掘り下げ。

亀田Ｍ６区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

亀田Ｍ４区－掘り下げ、遺構検出。

亀田Ｍ５区－掘り下げ。

平成４年８月１日～８月31日

前田Ｍ２区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。23日終了。

前田Ｍ７区－掘り下げ、遺構検出、実測。５日終了。

亀田Ｍ２区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

亀田Ｍ１区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

亀田Ｍ７区－掘り下げ。

亀田Ｍ５区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

亀田Ｍ４区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

亀田Ｍ６区－掘り下げ、表土排土。

平成４年９月１日～９月30日

亀田Ｍ２区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

亀田Ｍ３区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

亀田Ｍ１区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

亀田Ｍ７区－掘り下げ、写真撮影、実測。

亀田Ｍ３西区－掘り下げ、遺構検出。

亀田Ｍ５区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

亀田Ｍ６区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。

亀田Ｍ４区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。29日終了。

平成４年10月１日～10月30日

亀田Ｍ２区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。26日終了。

亀田Ｍ３区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。29日終了。

亀田Ｍ１区－掘り下げ、写真撮影、実測。20日終了。

亀田Ｍ３西区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。29日終了。

亀田Ｍ７区－掘り下げ、遺構検出、写真撮影、実測。29日終了。

亀田Ｍ５区－掘り下げ、写真撮影、実測。30日終了。

亀田Ｍ５区－掘り下げ、写真撮影、実測。14日終了。

（3）調査の組織

発掘調査は日本道路公団と岡山県の委託契約に基づき岡山県教育委員会が当たった。なお、契約事項は文化課が行い、発掘調査は岡山県古代吉備文化財センターが担当した。

平成3年度（発掘調査）

岡山県教育庁

教　育　長　竹内康夫
教育次長　森崎岩之助
文　化　課
課　長　鬼澤佳弘（12月31日まで）
　　渡邊淳平（1月1日以降）
課長代理　大橋義則
課長補佐（埋蔵文化財係長）　柳瀬昭彦
主　査　時長　勇

岡山県古代吉備文化財センター

所　長　横山常實
次　長　河本　清
総務課長　藤本信康
課長補佐（総務係長）　小西親男
主　査　平松邦男
主　任　坂本英幸
調査第二課長　正岡睦夫
課長補佐（第三係長）　井上　弘
文化財保護主査　古谷野寿郎
調査第三課長　伊藤　晃
文化財保護主幹　下澤公明
第一係長　岡田　博
文化財保護主査　平松義則
主　事　横山　定
主　事　長門　修
第二係長　福田正継
文化財保護主事　安井　悟
主　事　氏平昭則

平成4年度（発掘調査）

岡山県教育庁

教　育　長　竹内康夫
教育次長　森崎岩之助
文　化　課
課　長　渡邊淳平
課長代理　松井新一
課長補佐（埋蔵文化財係長）　柳瀬昭彦
主　査　時長　勇

岡山県古代吉備文化財センター

所　長　横山常實
次　長　河本　清
文化財保護参事　葛原克人
総務課長　北原　求
課長補佐（総務係長）　小西親男
主　査　石井　茂
主　任　石井善晴
主　任　三宅秀吉
調査第二課長　正岡睦夫
第一係長　平井　勝
文化財保護主査　大森善市
文化財保護主事　高田恭一郎
調査第三課長　伊藤　晃
文化財保護主幹　下澤公明
課長補佐（第一係長）　井上　弘
文化財保護主査　二宮治夫
文化財保護主査　窪田廣志
文化財保護主査　野上和信
文化財保護主任　竹井孝充
文化財保護主任　吉久正見
文化財保護主任　石田容一
文化財保護主事　田原　順
文化財保護主事　松岡浩太郎
主　事　横山　定
第二係長　福田正継
文化財保護主任　山田明信
文化財保護主事　東呂木博
文化財保護主事　長川　優
文化財保護主事　安井　悟
文化財保護主事　大橋雅也
主　事　滝川明徳
主　事　根木智宏

平成５年度（報告書作成）

岡山県教育庁

教　育　長　森崎岩之助
教育次長　岸本憲二
文　化　課
課　長　渡邊淳平
課長代理　松井新一
課長補佐（埋蔵文化財係長）　高畑知功
主　査　時長　勇

岡山県古代吉備文化財センター

所　長　横山常實
次　長　葛原克人
総務課長　北原　求
課長補佐（総務係長）　小西親男
主　査　石井　茂
主　査　石井善晴
主　任　三宅秀吉
調査第二課長　伊藤　晃
文化財保護主査　二宮治夫
文化財保護主任　吉久正見
主　事　横山　定

平成６年度（報告書作成）

岡山県教育庁

教　育　長　森崎岩之助
教育次長　岸本憲二
文　化　課
課　長　大場　淳
課長代理　松井新一
課長補佐（埋蔵文化財係長）　高畑知功
主　任　若林一憲

岡山県古代吉備文化財センター

所　長　河本　清
次　長　葛原克人
総務課長　丸尾洋幸
課長補佐（総務係長）　杉田卓美
主　査　石井善晴
主　任　三宅秀吉
調査第二課長　伊藤　晃
文化財保護主幹　下澤公明
文化財保護主任　槙野芳典
文化財保護主事　田原　順
文化財保護主事　大橋雅也

整理協力者（遺物実測・トレース・浄書）

赤木祐子、岩崎加代子、奥野仁美、楠本浩子、小宮山泰子、柴田令子、田中一女、千原尚子、延原経子、光延秀典、山本響子

第２章　報告書の作成

第１節　報告書作成の体制

岡山県山陽町・瀬戸町内に所在する遺跡について山陽自動車道備前工事事務所関係の発掘調査は前述したように昭和63年度から同４年度にかけて行われた。

これらの遺跡の報告書の刊行は大きく２分冊の計画が立てられ、まず、斎富遺跡の調査終了後、平成４年度から同５年度にかけて斎富古墳群、馬屋遺跡等の報告書作成にとりかかった。平成６年度にはこの成果を「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告99　松尾古墳群　斎富古墳群　馬屋遺跡ほか」として刊行した。

今回報告する斎富遺跡の報告書作成は、これに引き続き平成５年度途中から平成６年度に古代吉備文化財センター山陽町事務所で整理作業を行った。出土遺物の水洗、註記作業は、調査継続中から順次行った。

整理担当調査員は平成５年度４名、同６年度４名であるが、平成５年度については前述した馬屋遺跡、斎富古墳群等の整理・報告書作成作業に重点を置いたため、当遺跡の本格的な整理・報告書作成作業にあたったのは平成６年度である。

調査終了時に確認した遺跡全体の総遺構数は765基を数え、主な出土遺物はコンテナにして1,300箱を越える分量であり、この限られた期間で網羅的に全てを報告することはすでに不可能な状況にあるとの認識があった。

さらには、遺構・遺物についての本書の原稿執筆は原則的に発掘調査担当者が分担したが、センターの組織上直接に整理作業に携わることができたのは前述した４名であり、それ以外の発掘調査担当者は業務としては関わることができなかったのである。このようなことから、実際の遺構・遺物の整理作業、および編集作業についてはこれら発掘調査担当者の協力の下、整理担当者が行った。日常業務として整理作業に携わることのできない調査担当者は、新しい自分の調査現場、あるいは別の報告書作成作業を抱えながら本書の整理作業の補助ならびに執筆をこなさざるを得ない状況であった。報告書としての基本的用件であるところの発掘調査担当者が報告書を作成するということが十分にできなかった。従って、本書には十分な意志疎通に欠けたり共通の認識をもてなかった側面が多々あることは残念ながら否めない。

なお、整理作業員として、遺物復元９名、遺物実測６名、トレース２名、遺物写真撮影１名の助力を得、これらの作業員を指導して実際の整理作業にあたった。　（大橋）

第２節　報告書作成の方法

遺物の水洗、註記作業は平成６年度に本格的な整理作業を行う以前に終了した。

平成５年度については遺物・遺構の大要の把握に努め、一部遺物の復元作業に着手した。平成６年度は遺物については復元、実測遺物の抽出、実測に主眼を置いた。

限られた整理期間の関係上実測可能な遺物についても割愛したものも多いが、それらについては、実測遺物とともに特徴などを記入した台帳を作成し、データベース化した。このようにして実測した遺物は土器類1,931点、石器78点、土製品73点、金属製品72点、玉類24点である。本書にはこれら実測した遺物からさらに選別を行い、実際には土器類1,449点ほかを掲載した。また、これらのデータを利用して本書の各遺物観察表を掲載した。

遺構については調査終了時に概略的な遺構配置図を調査担当者が作成し、それに基づいて整理担当者が個別遺構の図面整理、製図作業を行った。なお、各遺構一覧表をデータベース化し、その成果の一部は本書の遺構一覧表として掲載している。

遺構とそれに伴う遺物の原稿執筆については先述したように調査担当者が行った。これ以外の原稿については整理担当者が分担した。編集作業についても整理担当者が行った。

本書は、遺構および出土遺物の実測図とその法量等を示した観察表、ならびに遺構写真と説明文を、できるだけ近接してレイアウトする構成をとった。これは、各遺構をできるだけ個別に理解しやすくなるような効果を狙ったためである。また、説明文についても表で記述されることは重複を避け、できるだけ図・表で説明、表現できない事柄にのみしぼり簡略化した。

（１）遺構の取り扱い

斎富遺跡は、第３章で後述するように扇状地の中腹に立地している。遺構はその扇状地を形成した礫層の堆積を掘削してつくられており、検出には非常な困難をきわめた。遺構から出土した遺物も著しく磨滅を受けたものも多く、また後世の撹乱と堆積による時期の異なる遺物の混入が認められた。さらには、前述したように非常に限られた調査期間および報告書作成期間であったため、残念ながら十分な調査・整理がなされたとはいいがたかった。このような状況下で、時期を判断できない遺構が数多くあることが報告書を作成するにあたり問題の一つとなった。

特に、この斎富遺跡を特徴づける一つの要素である掘立柱建物群については、古墳時代後半から奈良時代とはいう共通認識が調査員間であるものの、詳細な時期を判断する材料に乏しく、個々の掘立柱建物の時期については不明な点が多い。これらのことから、時期別に各遺構・遺物を説明することができず、遺構の種別にそって項目立てを行い、それを再整理する形でできるだけ時期別に第５章にまとめとして構成して、編集作業を行った。

また、限られた整理期間および報告書ページ数の関係から、土壙や柱穴、溝等のうち、遺物を伴わなかったり、形状が不安定なものの一部については附図とした全体図に掲載したのみで個別に説明することはせずに割愛したものも多い。

調査時の遺構の実測は、国土座標を基準として設けた10ｍグリッドに基づいた(第５図)。本文中にあるグリッド名はこれによるものであり、北西交点をグリッド名称とし、Ａ10グリッドのように呼称

した。なお、本文中における遺構の絶対位置の記述については、この10ｍグリッドもしくは調査時の調査区名の両者を混在している。

（２）遺物の取り扱い

１．須恵器と朝鮮半島系の土器

斎富遺跡を特色づける要素として須恵器と朝鮮半島系の土器の問題がある。遺物整理作業の段階で徐々に明らかとなったが、比較的多くの朝鮮半島系の遺物が出土した。これらのうち、朝鮮半島産の搬入品と考えられるものが認められるものの、朝鮮半島産であるか国内産であるのか判別できないものの方が多い。また、近年の大庭寺遺跡の調査から従来搬入品と考えられているものについての再検討の必要性も説かれている。しかしながら本書では、できるだけ区別を行う努力を試み、朝鮮半島産の搬入品と思われるものを「韓式土器」と呼称することにした。さらに、このうち還元炎焼成のものを「陶質土器」と呼称し、赤褐色を呈する酸化炎焼成のものを「軟質土器」と呼称する。また、国内産ではあるが朝鮮半島の影響が強く認められるものと搬入品であるか国内産であるかどうか判別できないものの２者については「陶質系土器」「軟質系土器」という名称を便宜上用いることとする。なお、本書では「初期須恵器」という呼称も適宜用いている。これは、定型化以前の須恵器であり、ＯＮ46相当段階までを目安とする。残念ながら、これらの用語の整理について執筆者間での統一を試みたが、見解の相違から一部齟齬が生じていることもある。これは、すべて編集者の責任である。

２．焼成不良の須恵器

本遺跡では赤褐色系の色調をもついわゆる赤焼けの須恵器が数多く認められた。そのため、実測図上ではこれらをトーンで表現し、通常の焼成の須恵器と区別した。また、これらについてもその胎土と焼成状況の差違から分類し、土器観察表中では、

須恵器（土師質ａ）…水漉し粘土様の精良な胎土で橙色の色調を有するもの

須恵器（土師質ｂ）…やや精良な胎土で堅致な焼成。橙色の色調を有するもの

須恵器（土師質ｃ）…いわゆる通常の土師器の胎土・焼成。黄褐色の色調を有するもの

の３分類を行った。ただし、高杯の接合部等にみられるような部分的に須恵器の技法が用いられているものについては、土師器として扱った。

３．紡錘車

紡錘車は、土製、石製、鉄製の３種が出土しているが、これらに通し番号をつけ、頭にＲを付した。また、土製紡錘車については、その形態からＡ類からＦ類まで分類した。

Ａ……算盤玉状を呈し、上下に平坦面を有するもの。

Ｂ……薄い算盤玉状を呈するもの。

Ｃ……算盤玉状を呈するもの。

Ｄ……円筒に近い円錐台状を呈するもの。厚さがあるものをさらにＤ１、薄いものをＤ２とした。

Ｅ……円筒状を呈するもの。稜がはっきりしているものをＥ１、やや稜が鈍いものをＥ２とした。

Ｆ……円錐台を呈するもの。斜縁が内反になるものをＦ１、反らないものをＦ２とした。

４．土錘

遺跡全体で113個の土錘が出土したが、そのほとんどが遺構から出土しなかったこともあり、図示したものは少ない。そのため、図示しなかったものについては第４章第２節に、表で法量、形態を記

述することにした。形態の分類基準は以下の通りである。

A……寸胴で孔が中央を貫通するもの。これらはその法量によりさらに細分した。

ＡⅠ：長さ80㎜以上、幅20㎜以上の大型品

ＡⅡ：長さ60～80㎜のやや大型のもの

ＡⅢ：長さ40～60㎜の中型のもの

ＡⅣ：長さ40㎜未満の小型のもの

B……上下の端部が細い中太の紡錘形をなすもの。これらもその法量によりさらに細分した。

ＢⅠ：長さ80㎜以上の大型品

ＢⅡ：長さ60～80㎜のやや大型のもの

ＢⅢ：長さ40～60㎜の中型のもの

ＢⅣ：長さ40㎜未満の小型のもの

C……球形をなし、孔があるもの

D……両端に孔が貫通するもの

なお、個別に扱わなかった遺構から出土した遺物のうち特徴的なものについては、遺構に伴わない遺物にふくめ、第４章の最後に項をもうけて説明することとした。

（３）時期の取り扱い

本報告書に用いた弥生時代から古墳時代の時期区分については、表３に示すとおりである。また、奈良時代以降の時期については、一般的な政治史区分に準じている。

本遺跡における人跡は縄文時代後期に遡ることができるが、集落が形成されるのは弥生時代中期段階である。本来的には時期区分するにあたり本遺跡出土の弥生土器・土師器・須恵器を元に編年作業を行うべきではあったが、時間的制約および欠落する時期資料の存在等の理由から、これを行い得なかった。そのため若干様相が異なるものの大枠は変わらないものとして、同じ備前地域の百間川遺跡群の成果を援用した。

弥生時代中期前葉は百間川中期Ⅰ、弥生時代中期中葉は百間川中期Ⅱ、弥生時代中期後葉は百間川中期Ⅲ、弥生時代後期前葉は百間川後期Ⅰ、弥生時代後期中葉は百間川後期Ⅱ、弥生時代後期後葉は百間川後期Ⅲ、弥生時代後期末葉は百間川後期Ⅳの内容をほぼ指標としている。

古墳時代については、遺跡の特色を顕在化するために、須恵器出現を境に前半・後半に分離した。古墳時代前半前葉は百間川古墳時代Ⅰ、古墳時代前半中葉は百間川古墳時代Ⅱ、古墳時代前半後葉は、百間川古墳時代Ⅲをあてはめて考えている。須恵器出現以降の古墳時代後半については、須恵器の編年をもとに４区分し、前葉はＴＫ73～208、中葉はＴＫ23～ＴＫ47、後葉はＭＴ15～ＴＫ10、末葉はＴＫ43～ＴＫ209を指標とした。実年代については評価の分かれるところであるが、おおよそ前葉が５世紀前半、中葉が５世紀後半、後葉が６世紀前半、末葉が６世紀後半～７世紀初頭までをあてはめて考えた。（大橋）

表３　編年対比表

		百間川（註１）	上東・川入（註２）	斎富	
弥生時代	中期	百間川中期Ⅰ		弥生時代中期前葉	
		百間川中期Ⅱ		弥生時代中期中葉	
		百間川中期Ⅲ		弥生時代中期後葉	
	後期	百間川後期Ⅰ	鬼川市Ⅰ	弥生時代後期前葉	
		百間川後期Ⅱ	鬼川市Ⅱ	弥生時代後期中葉	
		百間川後期Ⅲ	鬼川市Ⅲ	弥生時代後期後葉	
		百間川後期Ⅳ	オノ町Ⅰ オノ町Ⅱ	弥生時代後期末葉	
古墳時代		百間川古墳時代Ⅰ	下田所	古墳時代前半前葉	
		百間川古墳時代Ⅱ	亀川上層	古墳時代前半中葉	
		百間川古墳時代Ⅲ	＋	古墳時代前半後葉	陶邑（註３）
			大溝上層	古墳時代後半前葉	TK73～TK208
				古墳時代後半中葉	TK23～TK47
				古墳時代後半後葉	MT15～TK10
				古墳時代後半末葉	TK43～TK209

註１　『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査』Ⅰ～Ⅹ　岡山県教育委員会　1980～1995

註２　「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16　岡山県教育委員会　1977

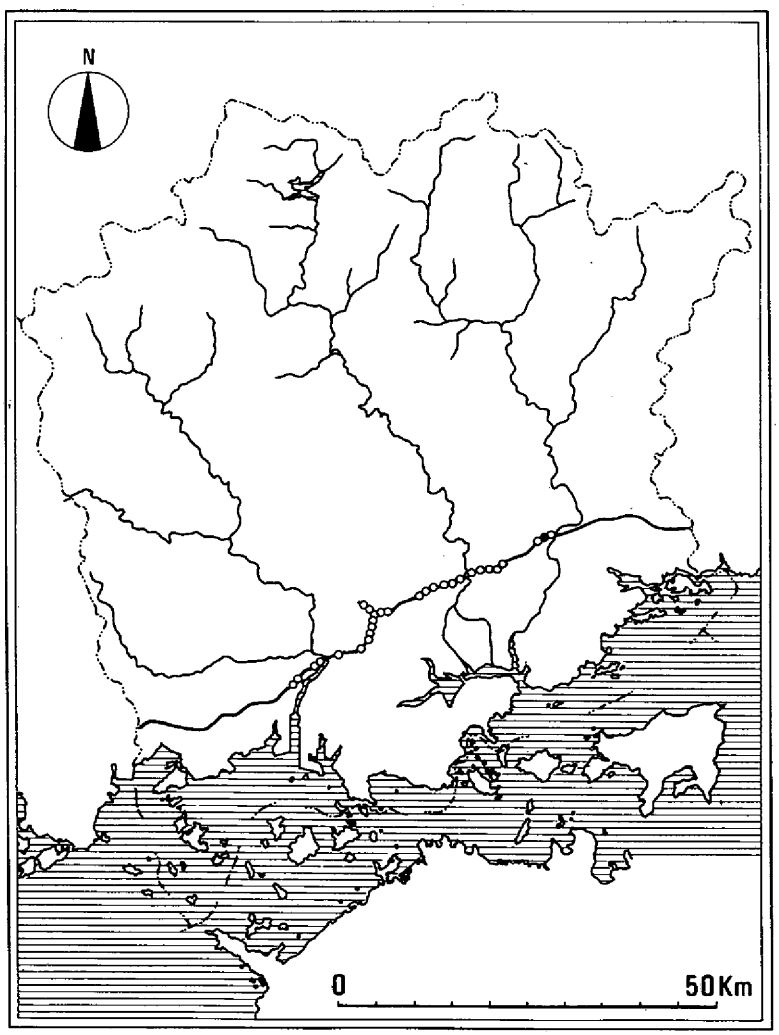
註３　田辺昭三『須恵器大成』　1981

第３章　遺跡をとりまく環境

第１節　地理的環境

斎富遺跡は岡山県赤磐郡山陽町斎富に所在する。山陽町は、岡山県南東部の赤磐郡において中南部に位置し、吉備高原に続く赤磐丘陵と岡山平野が接する地点にあり、浅くて広い皿状の地形をなしている。西は、標高458ｍの本宮高倉山を中心とする丘陵を分水界として御津郡御津町と接し、南西および南は低い丘陵によって岡山市・瀬戸町と接している。東は、起伏の小さい丘陵で熊山町と境をなし、北は赤磐丘陵部に続く赤坂町に接している。

町西部の丘陵は、標高300～450ｍで比較的高く、稜線で境される西側は旭川に臨み急傾斜である。丘陵地の東麓は、山陽町中央部の低地と緩斜面で接している。西山地区の西中・鴨前では、小扇状地あるいは崖錐となっている。



第６図　遺跡位置図（１/1,000,000）

町の東部は、西部の丘陵に比較して40～100ｍとその標高が起伏も小さい。この東部の丘陵から町中央部の低地に向けてのびる舌状丘陵がいくつもみられる。そして、これらの丘陵間の谷頭には多くの溜池が造られている。この舌状丘陵の一つに斎富古墳群があり、その下の扇状地に斎富遺跡が営まれているのである。遺跡の南西側は広く町中央の低位部を見渡せ、また南・東は丘陵によって囲まれている。

山陽町の中央部は、砂川を中心として広く低平な地形を形成させている。砂川は、吉井町仁堀東を源とし、岡山市光津で児島湾に注ぎ、17世紀後半に大規模な改修が行われているが右岸・左岸にも旧河道が認められることから何回か流路を変えながら現地形を形成させたものと思考されるのである。

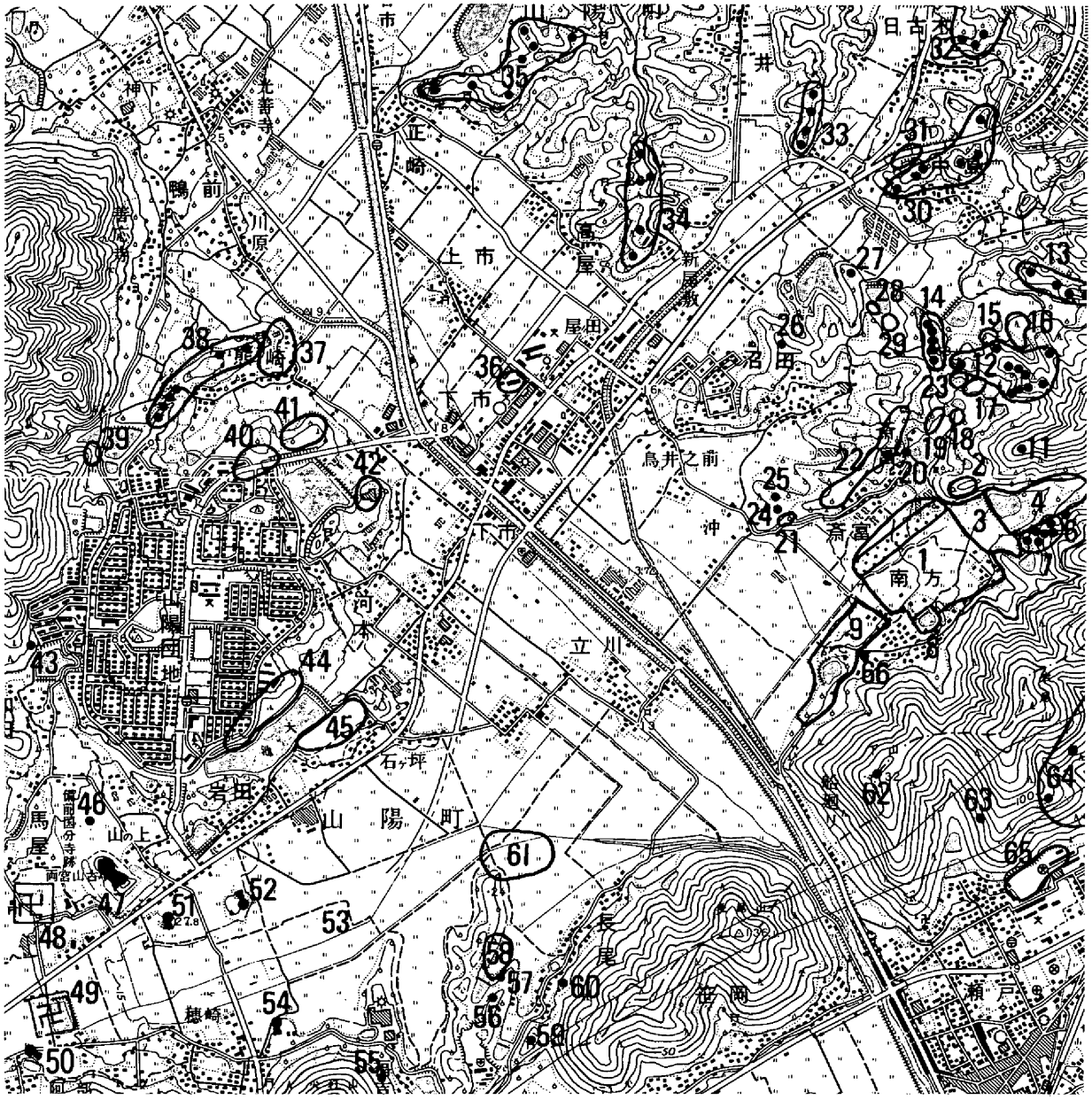
（下澤）

第２節　歴史的環境

山陽町において最も古い時期の遺跡が確認されているのは、南方前池遺跡(第６・７図８、以下同)であり、縄文時代晩期後葉とされている。この遺跡からは当該期の貯蔵穴が10基調査されて生活の痕をとどめている。この時期よりさかのぼる遺物が今回報告する斎富遺跡から出土している。時期は縄文時代後期の中津式と彦崎ＫⅠ式であるが、いずれも少数でありその内容を明らかにできる資料は得ていない。縄文時代晩期中葉以降になると遺物の出土量が多く認められるようになり、生活の場を広げていったことが知られる。

弥生時代になると、前期には丘陵から離れた沖積地の山陽小学校遺跡(36)を認めるが明確な遺構は検出されていない。中期中葉～後期前葉においては、遺跡数が増加するとともに遺跡の規模が拡大していくことが明らかにされている。1969年から宅地造成に伴い砂川右岸の分離丘陵上の山林約105haの調査が行われたのが現在の山陽団地である。この際に調査された用木山遺跡・惣図遺跡・愛宕山遺跡・さくら山遺跡等が丘陵上や斜面などの比較的高所に営まれ、高地性集落として位置づけられている。後期以降になると、先の宅地造成で調査された岩田大池遺跡(44)や門前池遺跡の他に、門前池東方遺跡(42)などが丘陵端部や谷間などの低位部の付近に認められ、集落立地が移動している。斎富遺跡もこれらの遺跡同様、丘陵端部の緩斜面に占地している。斎富遺跡の弥生時代の集落は弥生時代中期後葉にその先鞭を見ることができ、ほぼ時期的にも符合している。また、この時期これら生活の場の他に、埋葬の場が四辻土壙墓群・愛宕山土壙墓群・便木山遺跡などで認められる。これらの遺跡をみると集落域と墓域が異なった分離丘陵上にあり両者の場の分離が明確に意識され営まれている。さらにはこの墓域において方形台状墓の形成といった突出した首長の萌芽が看取される。一方、弥生時代後期での斎富遺跡では成人埋葬と思われる土壙墓と小児用の土器棺が検出されているが、いずれも墓域を認めるほどの広がりをみせず集落内に点在している。これは、埋葬に関しての制約がそれほど強くは機能していなかったのか、または、集落外に特定の墓域を形成していたものと思われる。

古墳時代になると、砂川の西岸側と斎富遺跡の所在する東岸側とでは、その相違が際立っている。砂川の東側では、先に述べた山陽団地の丘陵とその南の丘陵から裾部にかけて、尚方作獣帯鏡が副葬されていた４世紀前半の用木１号墳をはじめとした用木古墳群、５世紀前半の岩田３号墳などがある岩田古墳群が存在する。また、県下第３位の傑出した規模をもつ５世紀後半の両宮山古墳(47)、森山古墳(51)、そして廻り山古墳(52)、５世紀末の朱千駄古墳(50)・６世紀前半の小山古墳(54)の５基の大形前方後円墳が継続して築造されている。なお、森山古墳の北東100ｍほどの地点の調査で径23ｍの古墳が新たに発見されている。この古墳は、正免東古墳とされ二重周溝の可能性も考えられている。時期は、５世紀後半と考えられている。さらには、６世紀になると県下三大石室墳である牟佐大塚がある。一方、後者の砂川の東岸側は、第７図の分布のごとく、低墳丘を有する古墳群の存在が特徴的に認められ、その内部主体は木棺直葬か箱式石棺が想定される。以上のように砂川の西岸側の南西部分は古墳時代の備前の中枢を担ったものの奥津城を形成させていたことが理解でき、また東岸側においてはその有力構成員の墓域であったことが想定される。こういった巨大勢力は、備中における造山古墳を頂点とする勢力との対比が興味深く、この時期の斎富遺跡における朝鮮半島系の遺物の出土もこの中で理解されるであろう。



1．斎富遺跡
2．斎富古墳群
3．門前奥池西遺跡
4．門前奥遺跡
5．横山古墳
6．堂屋敷古墳
7．南奥池古墳群
　a 南奥池古墳
　b 南奥池２号墳
　c 南奥池３号墳
　d 南奥池４号墳
　e 南奥池５号墳
　f 南奥池６号墳
8．南方前池遺跡
9．細尾山古墳群
　a 細尾山１号墳
　b 細尾山２号墳
　c 細尾山３号墳
10．南方西遺跡
11．竜王山西古墳
12．斉戸池東古墳群
　a 斉戸池東１号墳
　b 斉戸池東２号墳
　c 斉戸池東３号墳
　d 斉戸池東４号墳
　e 斉戸池東５号墳
　f 斉戸池東６号墳
　g 斉戸池東７号墳
　h 斉戸池東８号墳
　i 斉戸池東９号墳
　j 斉戸池東10号墳
13．中島東古墳群
　a 中島東１号墳
　b 中島東２号墳
　c 中島東３号墳
　d 中島東４号墳
14．別所古墳群
　a 別所１号墳
　b 別所２号墳
　c 別所３号墳
　d 別所４号墳
　e 別所５号墳
15．斉戸池東Ａ散布地
16．斉戸池東Ｂ散布地
17．中池北散布地
18．中池南散布地
19．前田池北散布地
20．斎富石棺
21．斎富Ａ散布地
22．斎富Ｂ散布地
23．斎富Ｃ散布地
24．雨壺古墳
25．雨壺２号墳
26．沼田古墳
27．小池山古墳
28．小池山（別所）窯跡
29．小池南散布地
30．中島古墳群
31．八幡神社西遺跡
32．日古木古墳群
33．岩鼻古墳群
34．高屋古墳群
35．正崎古墳群
36．山陽小学校遺跡
37．熊崎遺跡
38．熊崎古墳群
39．三つ池遺跡
40．門前池集落遺跡
41．向遺跡
42．門前池東方遺跡
43．塚の前古墳
44．岩田大池遺跡
45．みのる遺跡
46．茶臼山古墳
47．両宮山古墳
48．備前国分寺跡
49．備前国分尼寺跡
50．朱千駄古墳
51．森山古墳
52．廻り山古墳
53．高月条里遺構
54．小山古墳
55．福吉古墳
56．山の間１号墳
57．山の間２号墳
58．山の間遺跡
59．道通山古墳
60．塚神古墳
61．長尾遺跡
62．有田山古墳
63．名称不明（古墳）
64．西久保古墳群
65．名称不明（散布地）
66．南方西古墳

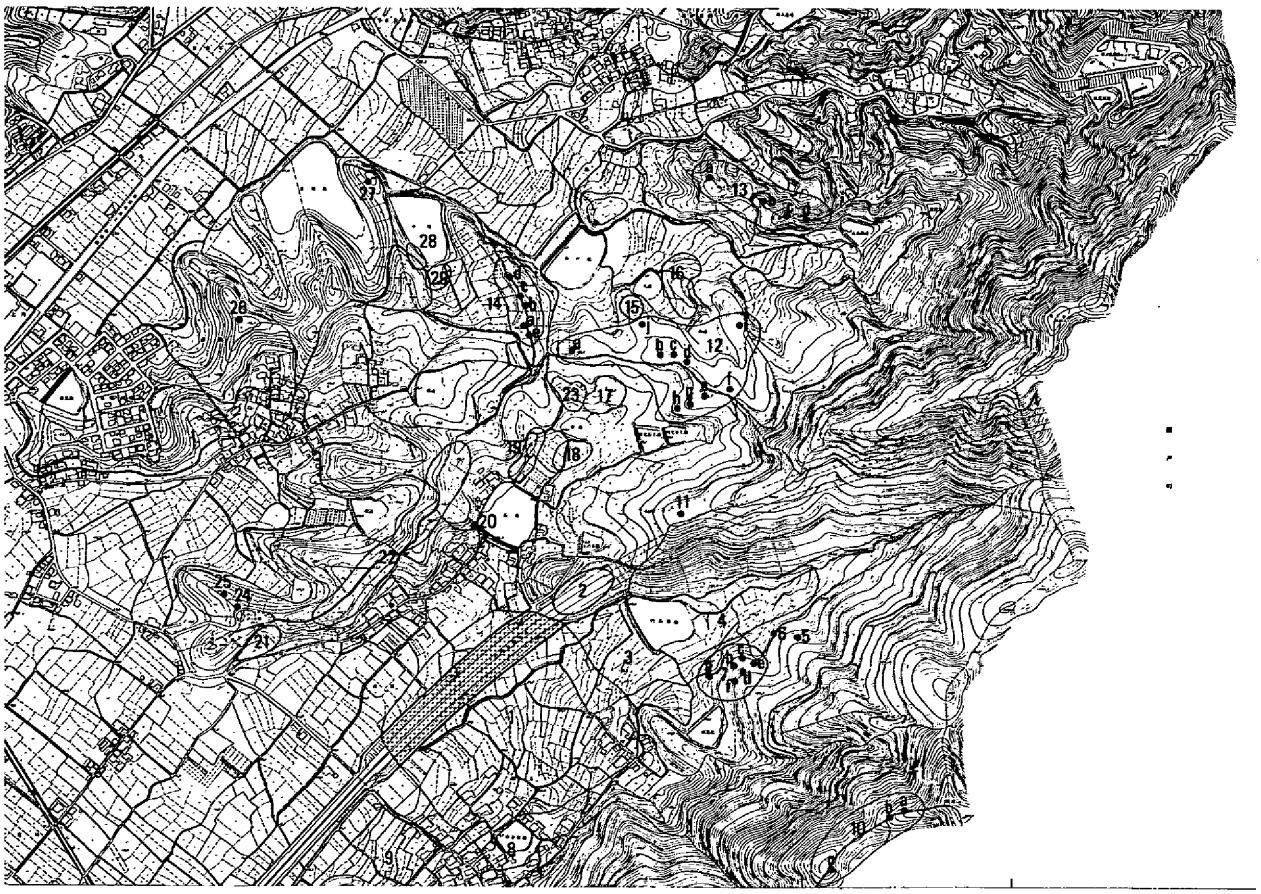
第７図　周辺遺跡分布図（１）（１/25,000）

律令制下の山陽町は、備前国赤坂郡に属し『倭名類聚抄』における高月郷・鳥取郷に比定される。『延喜式』巻二八兵部「諸国駅伝馬」条において、山陽道高月駅に馬20匹が置かれていることが知られる。古代山陽道のルートは、中島古墳群(30)、日古木古墳群(32)、岩鼻古墳群(33)が所在する日古木地区から山陽団地の造成された丘陵の南東側の岩田大池遺跡(44)、みのる遺跡(45)の営まれる下市・河本・岩田をへて備前国分寺、国分尼寺が位置する馬屋地区に至る説のほかに、いくつか提起されている。しかし、いずれもが山陽道高月駅を馬屋地区に比定しており、先に報告されている馬屋遺跡においては、それらと有機的なつながりを喚起させている。斎富遺跡では奈良時代の官衙関連の遺構・遺物が検出されており、山陽道の想定ルートからは東へ１㎞ほど離れているものの、古代山陽道および、この時期におけるこの地域の新たな検討資料となると思われる。

平安時代から鎌倉・室町時代は、後白河上皇が設けた持仏堂に始まるとされる長講堂の領として鳥取荘が記録されているが、この長講堂領鳥取荘の所在したと想定される現在の鳥取地区周辺ではまだこの時期の調査がなされていない。馬屋地区では、この期の掘立柱建物が馬屋遺跡で調査され、当時の集落の在り方の一旦を知ることができた。　（下澤）

参考文献

『山陽町史』　山陽町　1986
『岡山県史』　考古資料　岡山県　1986
葛原克人　「砂川中流域」近藤義郎編『岡山県の考古学』吉川弘文館　1987
伊藤　晃　横山　定ほか『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』99　岡山県教育委員会　1995



第８図　周辺遺跡分布図（２）（１/15,000）

第４章　発掘調査の記録

第１節　調査の概要

斎富遺跡は、斎富古墳群の所在する丘陵裾部から南東にひろがる扇状地状の地形を呈する。調査区北東端近くの果樹畑の海抜高は24.64ｍであり、一方南西端近くでは15.75ｍを測る。この比高差は約９ｍ近くあり、第一次調査の土層観察の所見とあわせても、遺跡地の状態が一様な様相を示さないことは明らかであった。第９図は、遺構検出面での堆積土の広がりの概念図である。以下、調査の概要をこの概念図を基にして記述することにする。

堆積土１は黄褐色土であり、ほとんど礫を含まない。調査区北東側の１ａ地点では、東西に分離しているが用地外には同一の遺構面の広がりが想定される。調査区南西部にも、１ｂ地点にこの黄褐色土が堆積している。この堆積土は、吉備南部において沖積層の遺構を検出する際の基盤層となる黄褐色土にきわめて近いものである。これらの地点では、比較的容易に遺構の検出ができた。堆積土２は砂礫を多く含む暗黄褐色土である。堆積土１の影響を受け、南側道寄りを南西から西へと認められ、調査範囲のほぼ半分を占めていた。堆積土３は多量の砂礫を含む灰褐色土系のものである。堆積土２の広がりの南西側に広がる。堆積土４は暗灰褐色土の広がりであり、堆積土２・３と比較して砂礫等の含まれる量は少なくなる。調査区北東側と、南西端の２か所に広がる。北東側の１ａ地点では堆積土１の黄褐色土の広がりを分けるように存在するが、この地点はグライ化している部分があり、かつ細砂の互層が認められることから窪地状になっていたことが考えられる。また、南西端の４ｂ地点は低湿地状態になっていた。特に、この部分にあたる亀田Ｂ１区の過半と同Ｍ７区においては遺構が希

第９図　調査区内堆積土分布概念図(1/4,000)

薄な状態にあり、縄文時代晩期の溝とその南側に認められた溝が検出されたのみである。

なお、この亀田Ｍ７区の土層の堆積から平面的な検出は出来なかったものの古墳時代の水田層の存在が想定された。附編の土壌分析結果においては溝１に示した土層断面図中の第12層暗オリーブ灰粘質土が耕作土に相当する可能性の報告を受けている。この下層の第15層暗淡黒灰色粘質土も可能性が指摘されているが、調査時の見解では縄文時代晩期の溝の埋土と判断している。

以上のように調査範囲の過半を堆積土２・あるいは３といった礫を多量に含む堆積土が覆い、遺構検出、掘り下げには困難をきわめた。

今回発掘調査を行った斎富遺跡において最も古くさかのぼる遺物は、前田Ｍ５調査区から出土した縄文時代後期の中津式のものであり、明確な遺構に伴うと考えられるのは前田ＢＯＸ１調査区である。ここで認められたのは、縄文時代晩期であり、この期の遺物は前田Ｍ４調査区において比較的多く検出され、前田ＢＯＸ３調査区においても認められている。これらの縄文期の遺構・遺物が主に認められるのは、堆積土２と３が認められるところである。

弥生時代になると中期中葉の土器が認められるようになり、後半になると前田ＢＯＸ３調査区において明確な遺構として竪穴住居を検出している。さらに、中期末の竪穴住居も検出しているが、いずれも堆積土３とした灰褐色系の礫を多く含む層位が認められるところである。弥生時代後期前葉には、堆積土１が広がるｂ地点において多くの遺構が認められている。弥生時代の遺構が比較的多く認められるのは後期中葉までであり、以降それに比較して少なくなる。

古墳時代には、５世紀段階の比較的古い須恵器を伴う遺構が検出されている。これらのなかの遺物には、韓式土器と認められるものとそれと区別できない物も存在し、また算盤玉形の土製紡錘車もあり、朝鮮半島と関わりのある遺物が比較的多く出土している。これらの遺物を伴う遺構が認められるのは、堆積土２と３とした礫を多く含む堆積土の広がりのなかである。また、調査区中央南西寄りで堆積土３が西と南へと堆積の流れの分岐が認められる。とくに、南に堆積するものは錯綜する溝を伴っており、これらの溝の埋土中から多量の鉄滓が検出された。６世紀後半から７世紀にかけての遺構で注目されるのは、掘立柱建物である。この時期は、斎富遺跡の北東丘陵上に所在する斎富古墳群との関わりが注目される。

奈良・平安時代は、掘立柱建物が堆積土１～３の広がりの部分に認められる。この掘立柱建物は、区画溝を伴っているものもある。また、遺物も官衙関係の遺構から出土するものが認められていることから、何らかの公的な施設がこの地に設けられていたことが思考される。

鎌倉・室町時代の遺構・遺物は、堆積土１が広がる調査区北東部のａ地点に多く検出されている。前田Ｍ３区、同ＭＳ１区から掘立柱建物を検出している。この時期は、報告書の整理作業のなかで最後に振り分けていたため、この期に属する輸入陶磁器類など十分な内容を有する結果に至らなかった。また、建物としては把握できなかったが、前田Ｍ１区の北側地区は附図で示したように柱穴の密集している部分が認められる。この柱穴は、この期のものによって占められている。また、江戸時代の遺構・遺物も認められている。　（下澤）

第２節　遺構と遺物

（１）竪穴住居

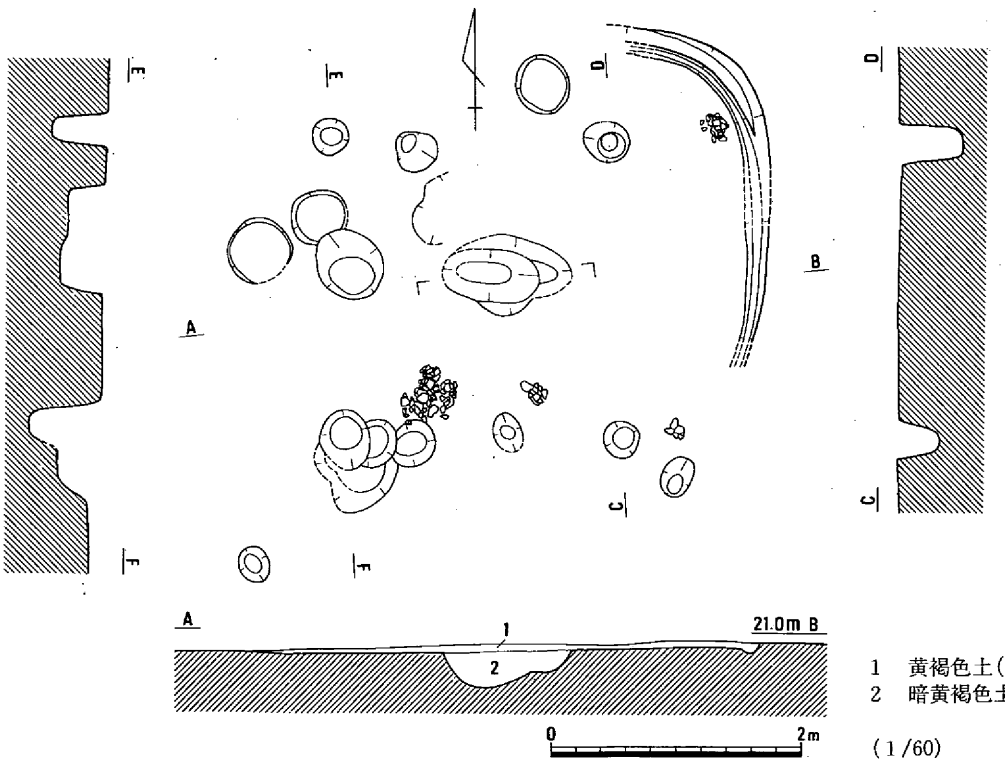
竪穴住居は、78軒として報告するが、重複、建て替えが多く、実数は約100軒近くなると思われる。そのほとんどが礫層中にあり集落の立地としては良好な地形とは言いがたい。また、検出状況も不良なものが多く、住居構造を把握できなかったものも多い。

最も古い竪穴住居は弥生時代中期中葉段階のものである。この後、幾度かの短い間断を挟みながら６世紀代まで継続して集落が占地するものと思われる。特に５世紀後半から６世紀代の竪穴住居が最も多く、この時期に集落規模の拡大が看取される。

特筆されるものとしては、弥生時代の竪穴住居のうち住居外に周溝と思われる溝が巡るもの、また古墳時代の山陰にみられる住居構造をもつものの存在などが挙げられる。さらに、５世紀末から６世紀の竪穴住居から珠文鏡、馬具、新羅系の陶質土器の出土もみた。

以下、個別に概観するが記述の都合上、必ずしも時期順に説明はしていないことを断っておく。（大橋）

竪穴住居１

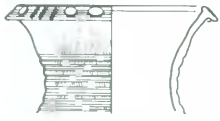


1　黄褐色土（炭・焼土粒含む）
2　暗黄褐色土（炭・焼土粒多く含む）

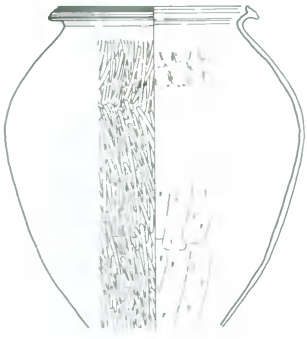
（１/60）

形状	規模（cm）		床面積（㎡）	柱穴	中央穴			方形土壙（cm）			火所	壁体溝	高床部	排水溝	時期
	長軸	短軸			形	幅（cm）	深さ（cm）	長	幅	深					
隅丸方形？	不明	不明	－	4/4	楕円	（105）×66	29	－	－	－	－	○	－	－	弥生中期後葉

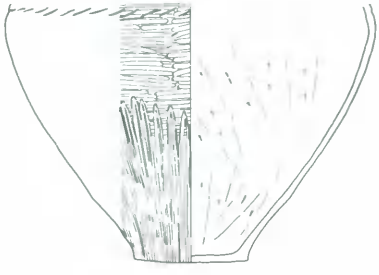
3



1



4



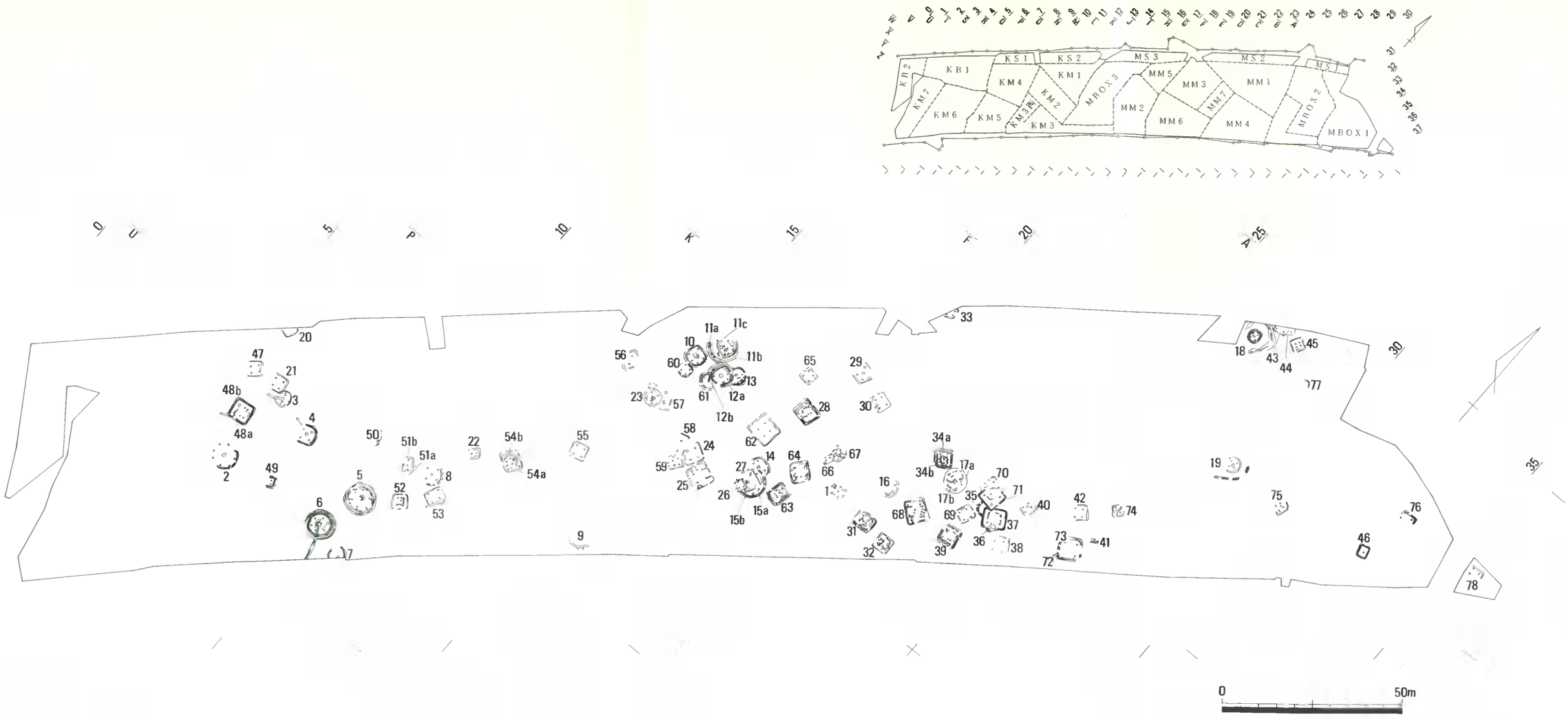
2

（１／１）

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1	弥生土器	壺	13.0			良好	橙5YR7/6	細砂	口縁部外面棒状浮文３、円形浮文２で１単位
2	弥生土器	壺		8.0		良好	橙2.5YR7/6	微砂	内面ヘラケズリは胴下半1/3まで・外面ヘラミガキ折り返し部残る・刺突文２
3	弥生土器	壺	8.8			良好	灰白10YR8/2	微砂	内面ヘラケズリは胴下半1/3まで・外面刺突文３段・黒斑
4	弥生土器	甕	13.4			良好	赤橙10R6	微砂	内面ヘラケズリは胴下半1/3まで

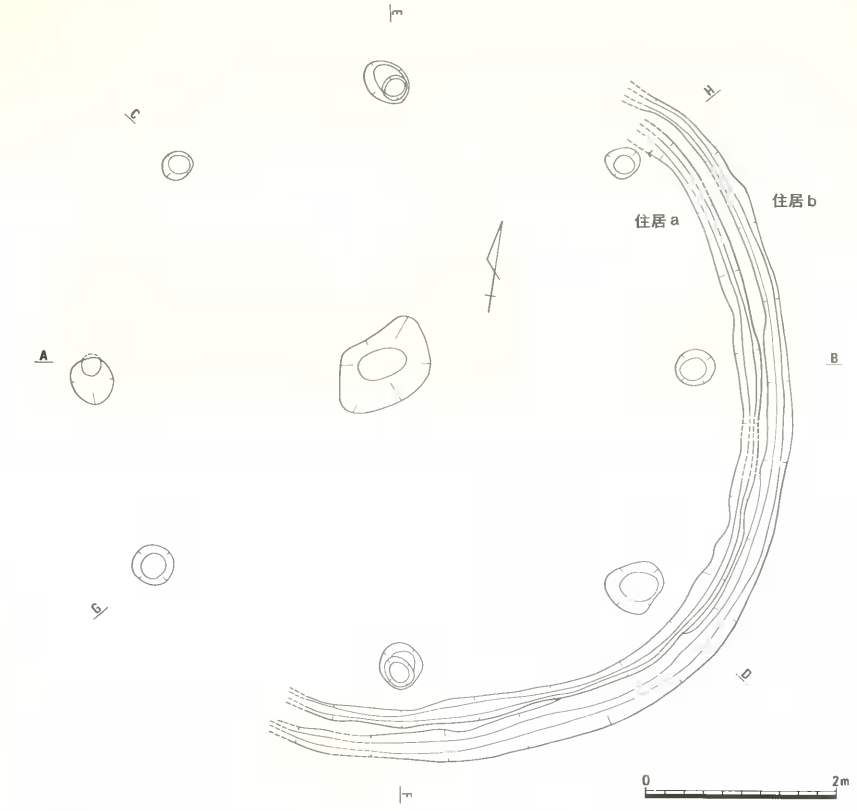
竪穴住居１は、Ｍ・Ｎ20グリッド（ＭＭ６区）に位置する。残存状態が良くないため明確ではないが、住居の平面形は、北東側でわずかに検出された隅がやや弧を描く壁から、隅丸方形になるものと考えられる。住居内には柱穴がほぼ正方形に４本配され、その柱間間隔は２～３ｍ前後を測る。中央には長楕円形を呈する中央穴が穿たれ、中には炭や焼土が多く認められた。なお、中央穴はわずかに位置を違えて作り替えており、西側の柱穴の内側にある柱穴と東側の柱穴とで、長方形に配された４本柱を想定できるとすれば、壁体溝は明確でないものの建て替えが推定される。

遺物はいずれも弥生土器で、住居内の北東隅と、南西の柱穴の内側から小量出土した。**１～３**は壺である。**１**は長い頸部に凹線がめぐり、上下に拡張された口縁端部外面には棒状浮文と円形浮文とが配される。**２**はヘラ状工具で、**３**は刷毛状工具による刺突文が肩にめぐる。土器の時期は、弥生時代中期後葉で、ほぼ前山Ⅱ式に対比されるものと考えられる。（平井）



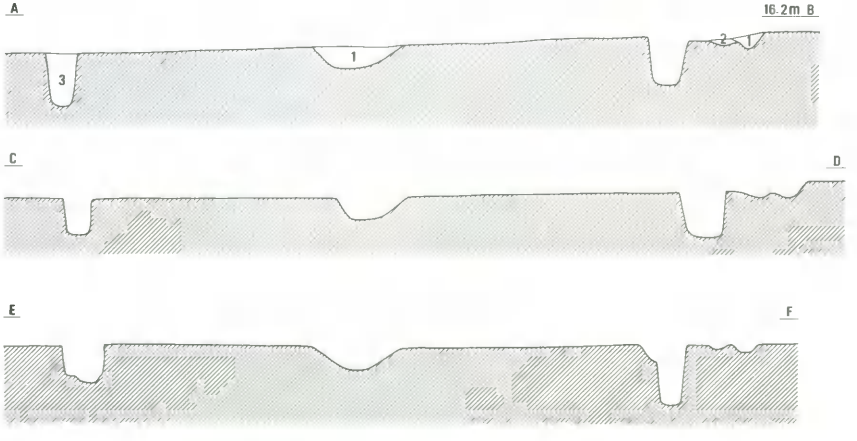
第10図　竪穴住居配置図(1/1,000)

竪穴住居２

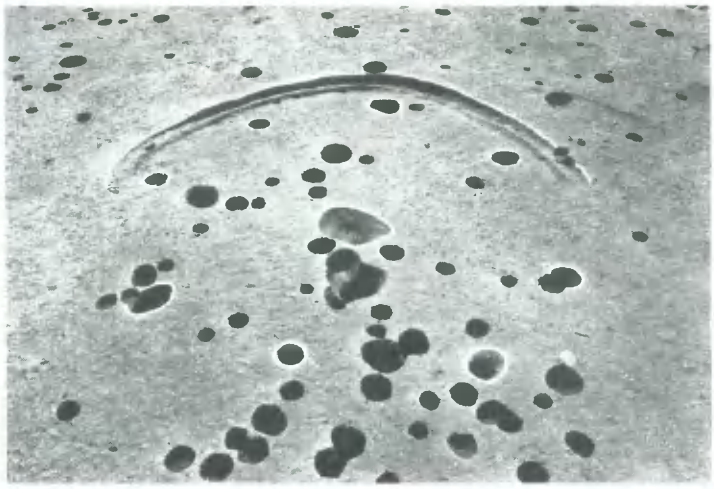


1　暗灰茶褐色土
2　茶褐色土
3　暗灰褐色土

（１/60）



形　状	規模(cm)		床面積(m)	柱穴	中央穴			方形土壌(cm)			大所	壁体溝	高床部	排水溝	時　期
	長軸	短軸			形	幅(cm)	深さ(cm)	長	幅	深					
a　円形	(782)	—	—	8/8	方	120×86	23	—	—	—	—		—	—	弥生後期前葉
b　円形	(722)	—	—	8/8	方	120×86	23	—	—	—	—			—	



5

6

M１

0　10cm

（１/４）　（１/２）

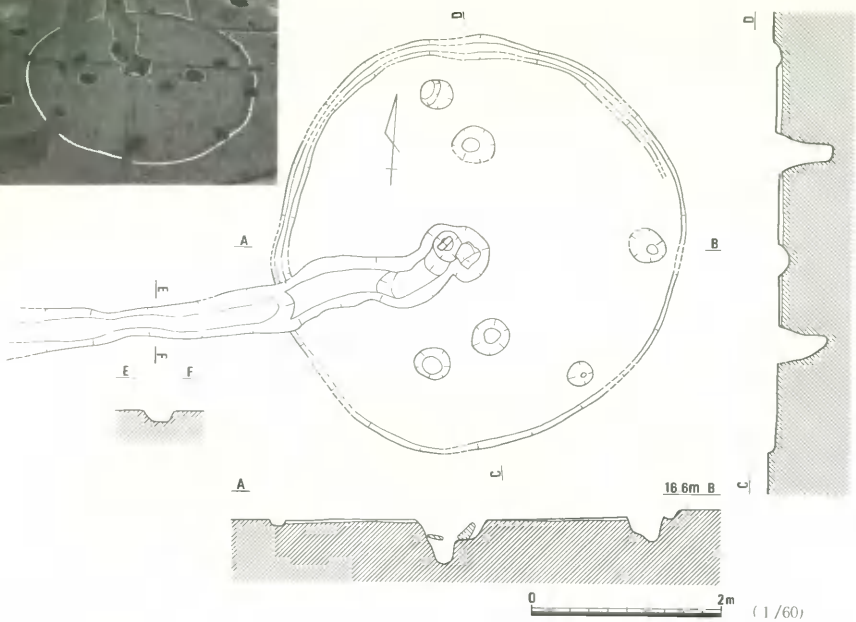
掲載番号	種別	器種	土器			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
5	弥生土器	甕	[illegible]			良好	[illegible]	砂礫	口縁外面擬凹線
6	弥生土器	高杯		[illegible]		良好	[illegible]	砂礫	円形透[illegible]・ブン描沈線

掲載番号	器種	材質	土器				備考
			最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	
M１	釘か鏃	鉄	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	

竪穴住居２は、亀田調査区の最も南西端部に位置する地形の低い地点に存在した。遺構の残存状態は極めて悪く、弧を描く２条の壁体溝の一部以外に、８本の柱穴といびつな方形に近い形態を呈する中央穴を検出した。外側に存在した壁体溝から判断して、最大径が782cmの比較的規模の大きな円形の竪穴住居であったと考えられるが、ほぼ平行する２条の壁体溝が確認されたことから、この竪穴住居は柱穴や中央穴はそのまま利用して床面を拡張した建て替えが行われていることが判明した。

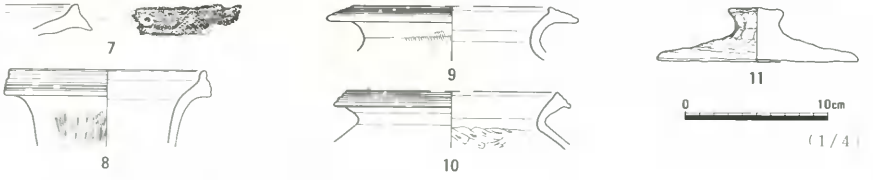
竪穴住居の床面からは、弥生時代後期前葉の甕**５**や高杯**６**の弥生土器以外に、釘か鏃になると推定される鉄器の断片**Ｍ１**が出土した。　（福田）

竪穴住居３



（１/60）

形　状	規模(cm)		床面積(m)	柱穴	中央穴			方形土壙(cm)			火所	壁体溝	高床部	排水溝	時　期
	長軸	短軸			形	幅(cm)	深さ(cm)	長	幅	深					
円形	446	425	14.1	[illegible]	楕円	74×[illegible]	45	－	－	－	－	－	－	西	[illegible]後期前葉

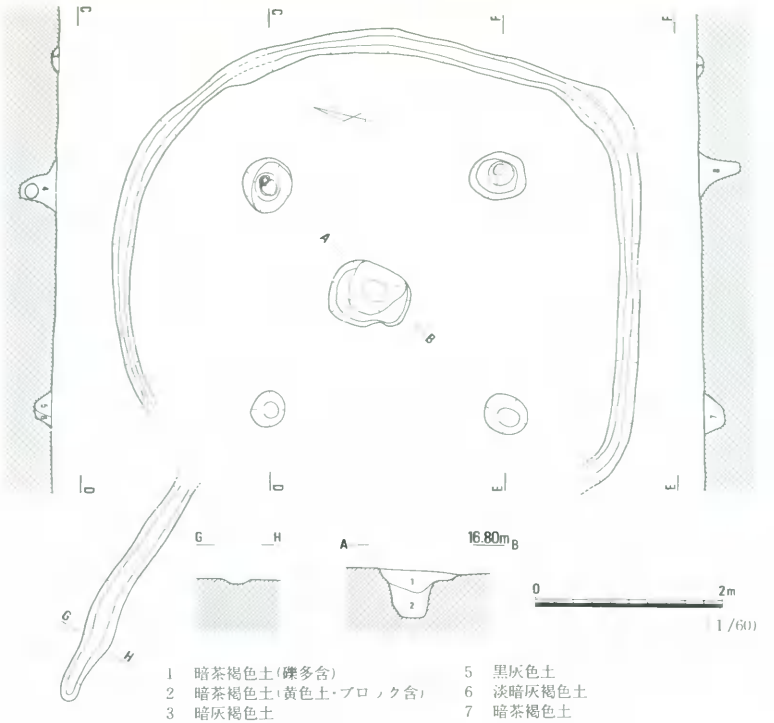


（１/４）

掲載番号	種別	器種	土量(cm) 口径	高	器	焼成	色調	胎土	特徴・備考
7	弥生土器	壺				良好	橙5YR6/6	砂礫	口縁端面に充填鋸歯文及び円形の刺突文
8	弥生土器	壺	[illegible]			良好	[illegible]、黄橙10YR6/4	細砂	口縁端面に擬凹線４本
9	弥生土器	壺	[illegible]			良好	灰黄2.5Y7/2	砂礫	口縁端面に擬凹線４本
10	弥生土器	甕	[illegible]			良好	浅黄2.5YR7/4	砂礫	口縁端面に擬凹線４本、内面頸部直下からヘラケズリ
11	弥生土器	蓋	14.1			良好	明赤褐2.5YR5/6	砂礫	胎土[illegible]の[illegible]に押[illegible]が顕著

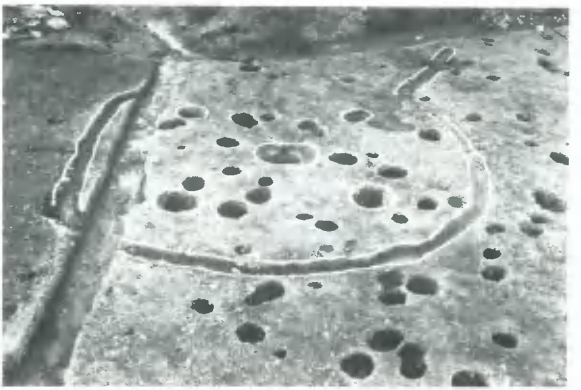
竪穴住居３は、ややいびつな円形を呈する。検出面からの深さは、床面でわずか10cmあまりを測るほど浅く、後世の削平が顕著であるといえる。床面で検出された柱穴は、数本散在するが中央穴の南北に中央穴からそれぞれ約１ｍ離れて存在する、２本の柱穴が棟持柱に想定される。中央穴は不整円形を呈し、西方へ排水溝が延びる。最終的には、溝８に到達するものと推察されるが、検出全長は約５ｍである。出土遺物は、図に掲げるように弥生土器が覆土中から出土しているが、小片が多い。住居の建て替えなどもなく、比較的短期間使用された住居の可能性が強い。　（岡田）

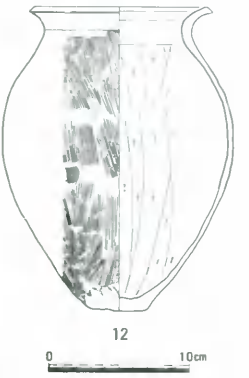
竪穴住居4



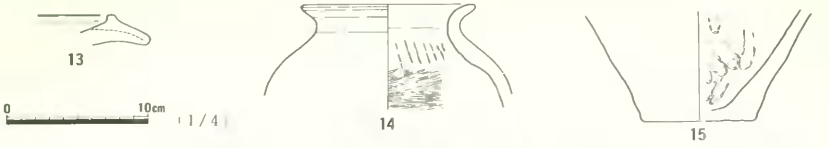
1　暗茶褐色土(礫多含)
2　暗茶褐色土(黄色土・ブロック含)
3　暗灰褐色土
4　暗灰茶色土
5　黒灰色土
6　淡暗灰褐色土
7　暗茶褐色土
8　黒灰色土

形状	規模(m) 長軸	短軸	床面積(m)	柱穴	炉 中央 形	幅(cm)	深さ(m)	方形土壙(cm) 長	幅	深	竈	壁体溝	高床部	排水溝	時期
不整円形	[illegible]	小明	[illegible]	4/4	方	85・[illegible]	[illegible]	—	—	—	—	—	—	西北西	弥生[illegible]期[illegible]集





1, 4)

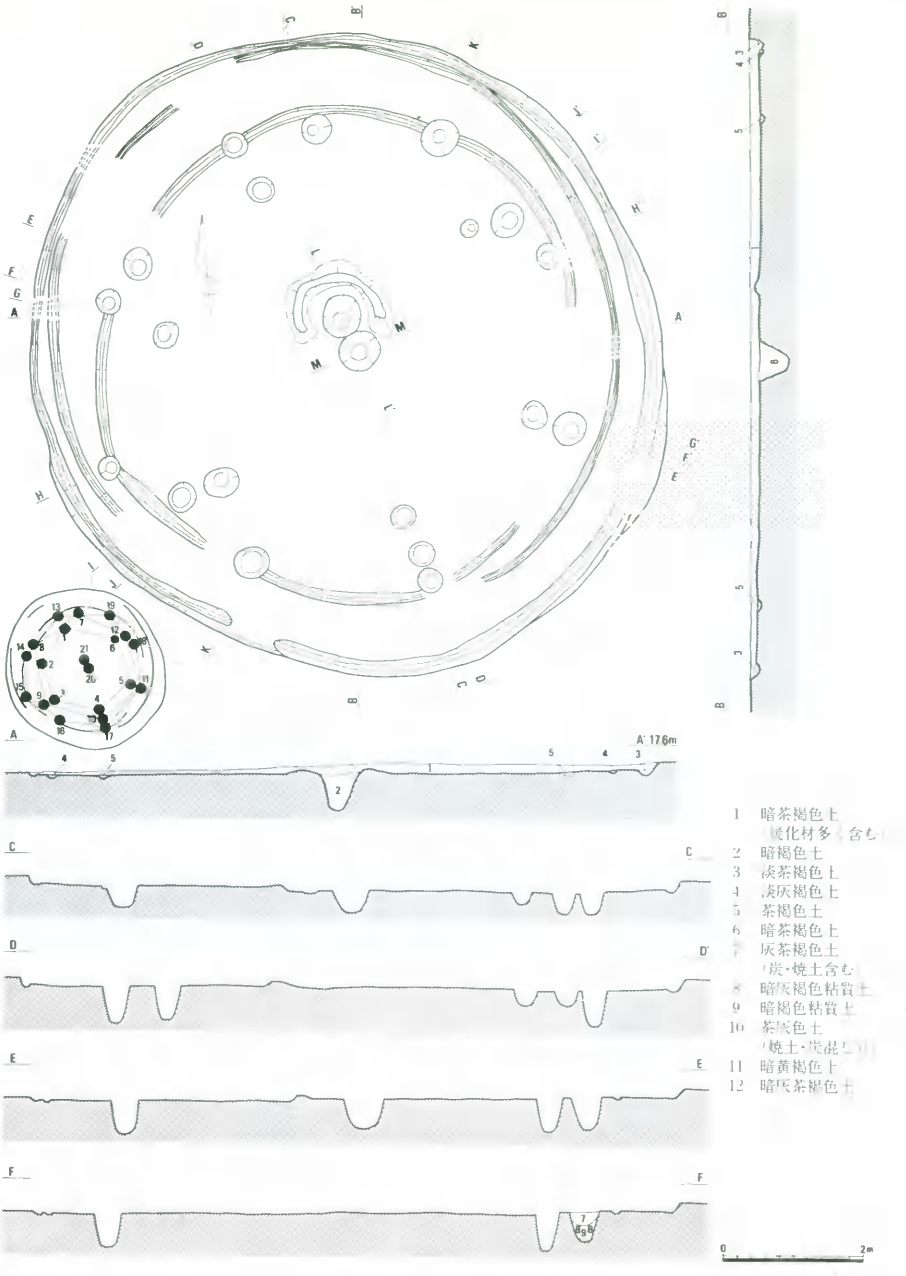


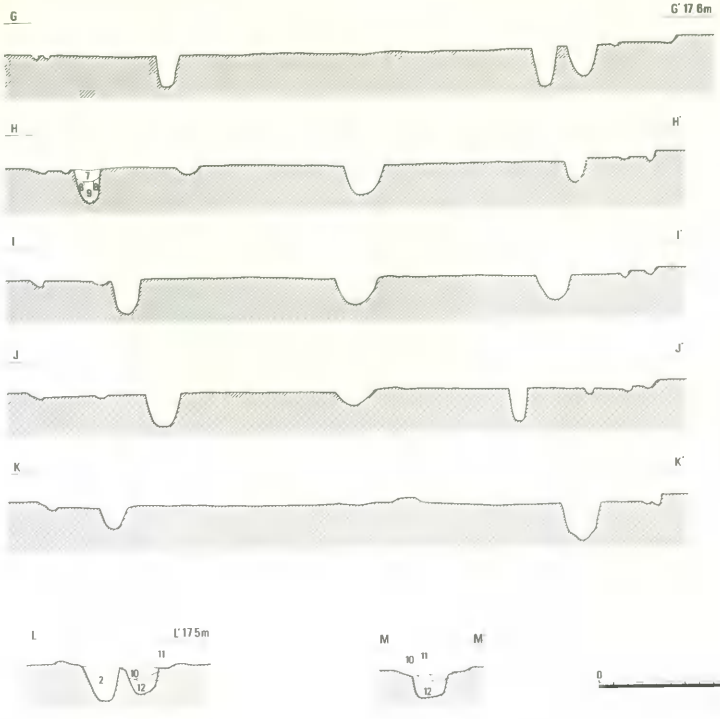
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
12	弥生土器	甕	12.2		21.6	良好	にぶい黄橙10YR7/3	砂礫	外面ハケメ・内面ヘラミガキ・黒斑・スス付着
13	弥生土器	装飾高杯				良好	にぶい赤褐2.5YR4/4	微砂	外面縦衝文
14	弥生土器	壺	11.9			良好	灰黄2.5Y7/2	精良	厚手の作り・端部は丸く納める
15	弥生土器	(底部)	・			良好	にぶい黄橙10YR6/4	微砂	

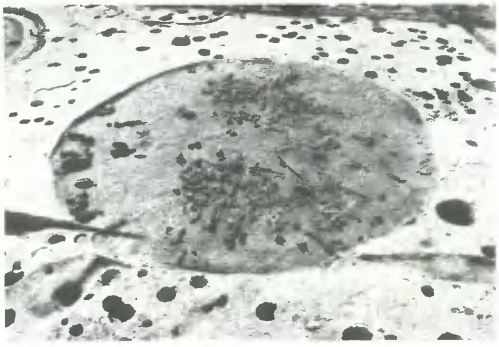
竪穴住居4は、V7・8グリッド(KM4・5区)に位置する。壁体の立ち上がりはほとんどみられず、東側では周溝が跡切れるなどその残存状況は悪い。平面形は不整円形で、北側の壁体溝が円弧であるのに対し、東と南側は直線的で隅丸方形状となる。柱構造は4本で、東側の2本はやや深く、壁が二段に落ち込んでいる。また、北東の柱穴内からは完形の甕**12**が出土している。中央穴は平面不整形で二段に落ち込むが、炭層等はみられなかった。なお、西北に向かって延びる長さ2.6mの浅い溝は、その位置関係から排水溝と考えられるが、住居内でのあり方は不明である。

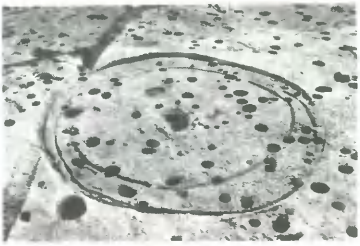
時期は、出土遺物から弥生時代後期前葉と考えられる。　　(高田)

竪穴住居5


A'17.6m
1　暗茶褐色土
（風化材多く含む）
2　暗褐色土
3　淡茶褐色土
4　淡灰褐色土
5　茶褐色土
6　暗茶褐色土
7　灰茶褐色土
（炭・焼土含む）
8　暗灰褐色粘質土
9　暗褐色粘質土
10　茶灰色土
（焼土・炭混じる）
11　暗黄褐色土
12　暗灰茶褐色土
0　2m
1/80

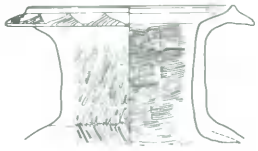




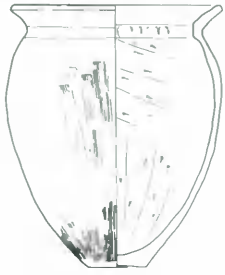


形状		規模(cm)		床面積(㎡)	柱穴	土坑穴			方形土壙(cm)			火所	壁体溝	高床部	排水溝	時期
		長軸	短軸			形	幅(cm)	深さ(cm)	長	幅	深					
a	円形	710	702	36.41	6.6	円	60×[illegible]2	57	—	—	—	—		—	—	弥生後期中葉
b	円形	816	802	[illegible]	[illegible]	[illegible]			—	—	—	—		—	—	
[illegible]	円形	[illegible]	[illegible]	61.[illegible]	[illegible]	円	61×[illegible]	55			—	—		—	—	

16


17

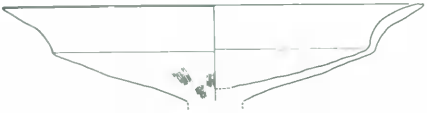
18

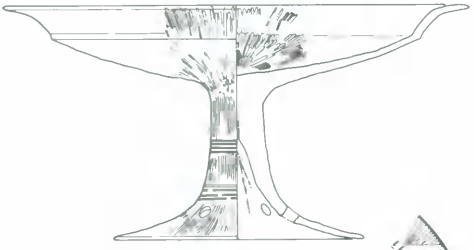

19

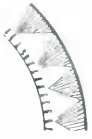
20

21

22


23


24



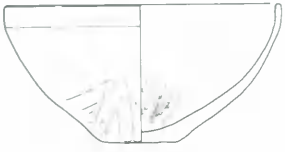
26

27

25

28

31


29

30

0　10cm

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
16	弥生土器	壺	(12.4)			良好	橙5YR6/6	精良	口縁部強いヨコナデ・頸部外面ハケメ・胴内部絞しぼりケズリ
17	弥生土器	壺	14.3			良好	にぶい黄橙10YR7/3	砂礫	頸部外面ヘラミガキ・内面ハケメ
18	弥生土器	甕	(16.8)			良好	浅黄2.5Y7/3	微砂	口縁部擬凹線・肩部に２段の連続刺突文
19	弥生土器	甕	14.2	4.0	18.7	良好	にぶい黄橙10YR5/3	砂礫	一次的に火を受けている・口縁端部はわずかに面をなす
20	弥生土器	甕	15.6			良好	にぶい黄橙10YR7/2	精良	赤色顔料残る・スス付着
21	弥生土器	甕	(15.4)			良好	灰黄褐10YR6/2	細砂	器壁磨滅の端部丸く納める
22	弥生土器	甕	(11.8)			良好	にぶい黄橙10YR7/3	細砂	端部は丸く納める・スス付着
23	弥生土器	高杯	(29.8)			良好	橙7.5YR6/6	細砂	器壁磨滅・杯外面にハケメかすかに残る
24	弥生土器	高杯	(33.2)	(17.5)		良好	にぶい黄橙10YR7/4	微砂	口縁部大きく外反する・脚部円形透かし孔５個・沈線４条１組２段
25	弥生土器	装飾高杯	(19.4)			良好	浅黄橙10YR8/3	細砂	器壁磨滅・口縁部簾描文
26	弥生土器	台付鉢	(16.7)	4.4	8.7	良好	浅黄2.5Y7/3	微砂	端部上方につまみ上げて成形・内外面丁寧なヘラミガキ・スス付着
27	弥生土器	台付鉢	13.9	6.6	7.8	良好	明赤褐5YR5/6	微砂	端部は丸く納める・丁寧なヘラミガキ
28	弥生土器	鉢	(11.8)			良好	にぶい黄橙10YR7/1	精良	内面丁寧なヘラミガキ
29	弥生土器	鉢	(19.0)	5.0	9.8	良好	灰黄2.5Y7/2	砂礫	内外面磨滅・内面ヘラミガキがかすかに残る・スス付着
30	弥生土器	鉢	(18.5)	4.1	8.0	良好	にぶい黄橙10YR7/4	微砂	端部丸く納める・内外面丁寧なヘラミガキ
31	弥生土器	鉢	8.0	3.4	4.8	良好	灰白2.5Y8/2	精良	外面磨滅・内面細かいヘラミガキ

竪穴住居５は、ＫＭ５区に位置する。竪穴住居４の東約15ｍで検出された。

調査当初、焼土・炭が広い範囲で検出され火災住居であると判断された。この焼土・炭の除去後、床面の精査中に壁体溝と思われる溝が住居の内側にも確認され、また柱穴の配置状況から、少なくとも２回の建て替え、拡張が行われていたことが判明した。以下、古いものから順に５ａ、５ｂ、５ｃとして説明する。全体的に遺存状況は良好ではなく、最も残りのよいところで検出面からの深さ約10cmほどであった。

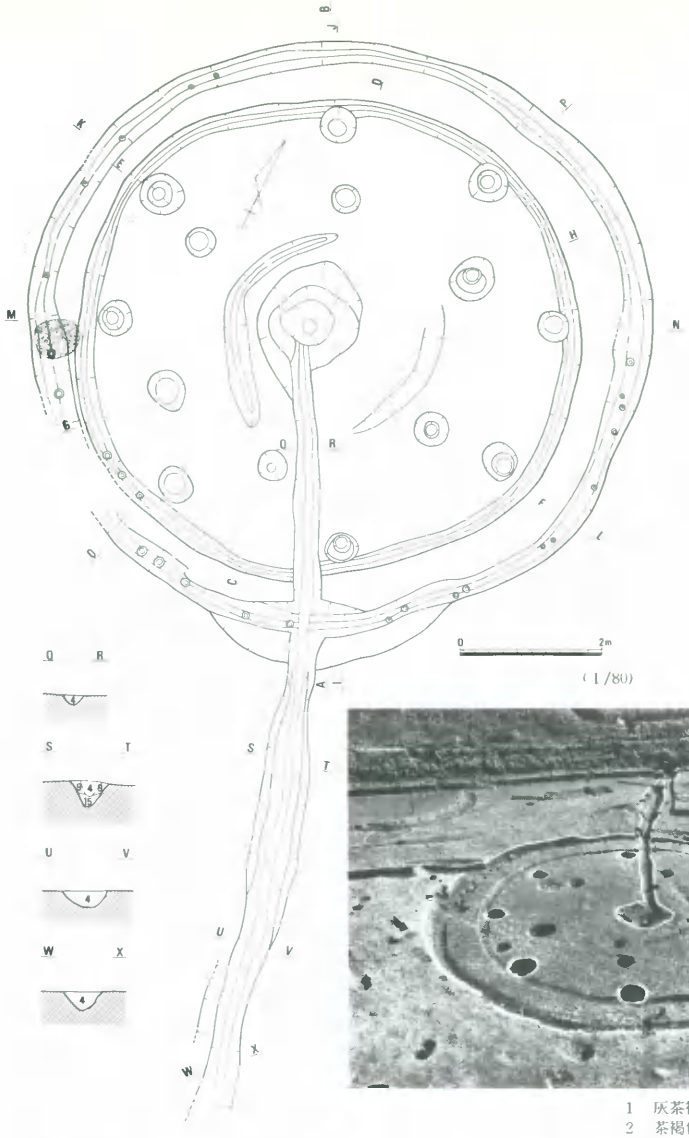
最も前出する竪穴住居５ａは、径約700cmを測る円形の住居である。主柱穴はＰ１～Ｐ６の６本柱を構成するものであり、中央穴については確認しておらず、拡張後のものと重複している可能性もある。

竪穴住居５ｂは、径約800cmほどを測る円形の竪穴住居である。主柱穴は、Ｐ７～Ｐ12の６本柱を構成するものと判断した。竪穴住居５ａよりやや北側に拡張するものである。中央穴はＭ－Ｍ'断面で示すものであり、60×52cmの規模を持ち、深さ57cmを測った。壁体溝は南側では一部確認できなかったが、ほぼ竪穴住居５ａのものと重複している可能性はある。

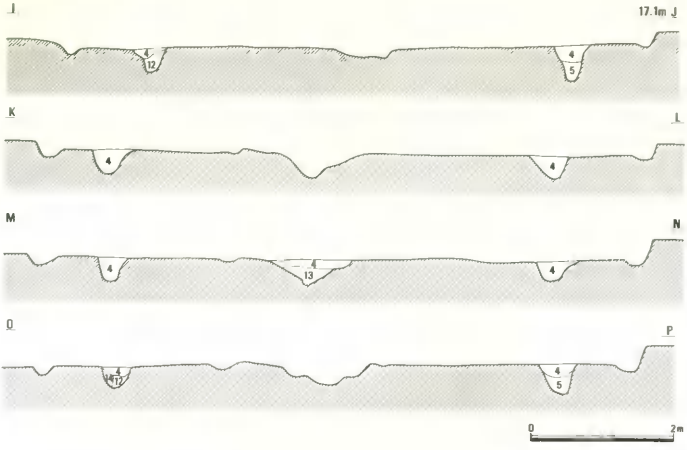
竪穴住居５ｃは、長軸方向で約950cm、短軸方向で約890cmを測るやや南北方向に長い不整円形を呈する竪穴住居である。全体的に竪穴住居５ｂよりやや南側を拡張したものであり、北側では一部壁体溝が切り合う状況が確認されている。３軒のうち最も後出するものである。主柱穴はＰ13～17・Ｐ11・Ｐ18・Ｐ19で８本柱を構成するものと判断した。Ｐ11については、竪穴住居５ｂと重複している。中央穴は、径約60cm、深さ約55cmほどの規模であり、その北半の周囲に土手状の高まりが検出された。また、炭化材・焼土が多量に認められ、この竪穴住居が火災を受けたものと判断した。炭化材は放射状に検出されたが、特に東西方向で顕著に遺存し、南北にはやや希薄であった。またこの付近の壁体溝の方向に沿って落ち込むように認められた炭化材もあるが、これが板材であって壁面を構成するものかは判断できなかった。また、主柱を構成する炭化材は確認できていない。炭化材は太いもので径約15cmほどあり、アラカシとの鑑定を得た。

図示した出土土器からこの竪穴住居の時期は弥生時代後期中葉と考えられる。なお、炭化材のC^{14}年代を測定したところ、1930±85ｙＢ．Ｐの結果を得ている。（大橋）

竪穴住居6

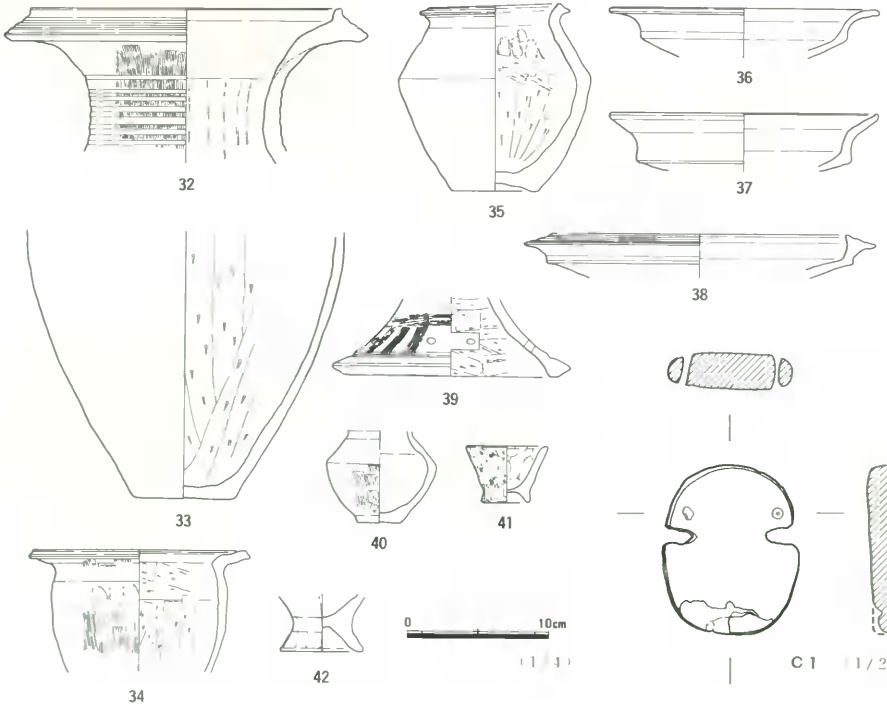


1　灰茶褐色粘質土
2　茶褐色土
3　暗茶灰褐色土
4　暗茶褐色粘質土
5　灰褐色砂質土
6　灰褐色土(黄褐色ブロック混じり)
7　暗茶灰褐色土(黄褐色ブロック混じり)
8　暗茶灰褐色土
9　灰褐色土
10　灰褐色土(黄褐色ブロック混じり)
11　黄灰褐色粘質土
12　暗黄茶色粘質土
13　暗灰茶色粘土
14　暗茶褐色粘質土(黄褐色ブロック混じり)
15　暗灰色粘質土



（１/80）

形　状	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	床面積(㎡)	柱穴	中央穴 形	中央穴 幅(cm)	中央穴 深さ(cm)	方形土壙(cm) 長	方形土壙(cm) 幅	方形土壙(cm) 深	次所	壁体溝	高床部	排水溝	時　期
a　円形	716	676	36.2	6/6	楕円	158×132	15	—	—	—	—	○	—	？	弥生後期中葉
b　円形	876	840	55.0	6/6	楕円	158×142	15	—	—	—	—		—	東	



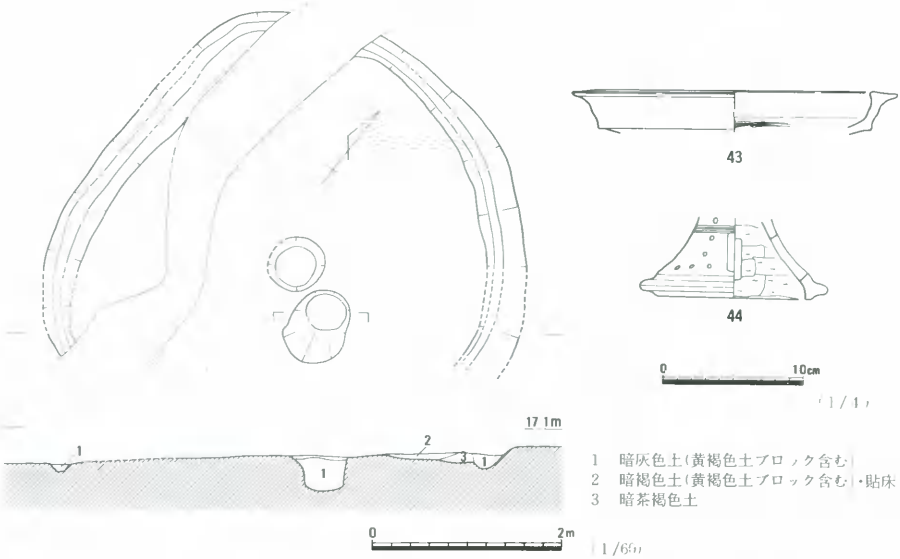
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
32	弥生土器	壺	22.0			良好	橙7.5YR6/6	砂礫	口縁部外面凹線・頸部沈線
33	弥生土器	甕		6.5		良好	にぶい黄褐10YR5/4	砂礫	外面磨滅
34	弥生土器	甕	15.0			良好	灰黄2.5Y7/2	細砂	端部面をなす・胴外面は細かい[illegible]
35	弥生土器	甕	9.2	6.0	13.2	良好	にぶい橙7.5YR6/3	細砂	器壁厚い・内面胴下半まで[illegible]ラケズリ（外面[illegible]キか？）・底部里斑
36	弥生土器	高杯	18.2			良好	にぶい褐7.5YR6/3	砂礫	口縁部強く外反・器壁磨滅
37	弥生土器	高杯	18.8			良好	にぶい黄橙10YR6/3	細砂	口縁部直立してから外反する・端部はわずか[illegible]つまみ出す
38	弥生土器	高杯	20.6			良好	橙7.5YR6/6	細砂	口縁部上面凹線・杯部内外面ヘラミガキ
39	弥生土器	高杯		14.0		良好	にぶい橙7.5YR6/4	砂礫	円形透かし孔２個一対
40	弥生土器	小形壺		3.0		良好	にぶい黄橙10YR6/4	細砂	外面ハケメ・やや粗雑なつくり
41	弥生土器	小形鉢	(5.5)			良好	にぶい橙10YR7/3	細砂	杯状の器形
42	弥生土器	台付鉢		6.0～5.8		良好	にぶい黄橙10YR5/3	砂礫	製塩土器・脚部片・二次的に火を受けている・やや厚手の器壁・赤み

掲載番号	器種	色調	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
C 1	分銅形土製品	灰白2.5Y7/1	[illegible]	48.0	[illegible]		

竪穴住居６は、竪穴住居４の５ｍ南に位置する。床面を共有すると考えられる１回の拡張が認められた。以下、古いものを竪穴住居６ａ、新しいものを竪穴住居６ｂとして記述する。

竪穴住居６ａの主柱穴は６本柱であり、拡張後の竪穴住居６ｂは８本柱で構成されている。中央穴は共有していると思われ、その周囲に土手状の高まりが認められた。また南東方向に排水溝が延びるが、これも共有している可能性はある。排水溝が延びる方向はやや地形が下がる様相をみせる。図示した出土遺物のうち高杯にはやや時期のばらつきはあるが、全体的には弥生時代後期中葉の竪穴住居と考えている。また、ほぼ完形に近い分銅形土製品も出土している。　　（大橋）

竪穴住居７



（1/4）

1　暗灰色土（黄褐色土ブロック含む）
2　暗褐色土（黄褐色土ブロック含む）・貼床
3　暗茶褐色土

（1/60）

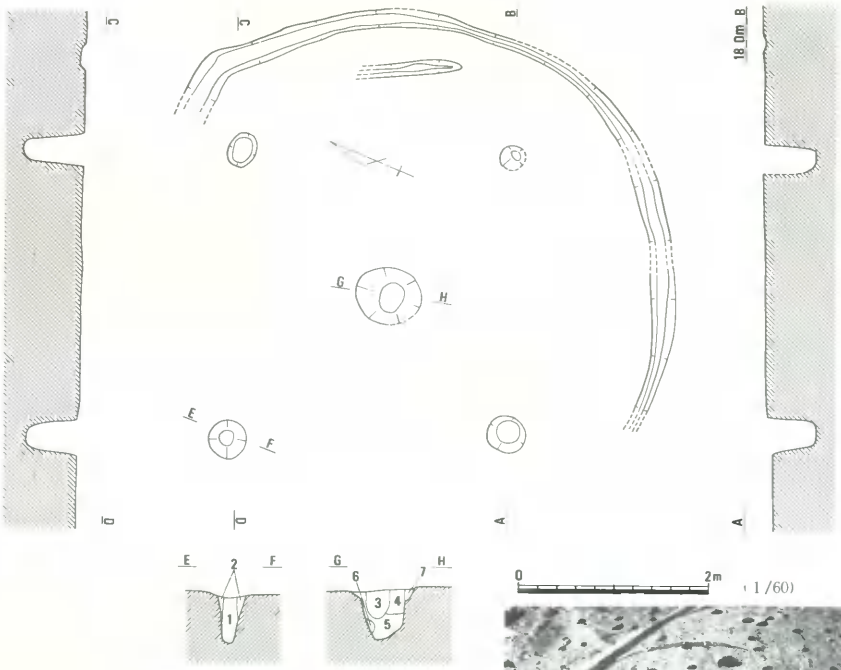
形状	規模(cm) 長軸	短軸	床面積(m)	柱穴	中央穴 形	幅(cm)	深さ(cm)	方形土壙(cm) 長	幅	深	大所	壁体溝	高床部	排水溝	時期
不整円形	511	不明	—	不明	楕円	[illegible]	[illegible]	—	—		—	—	—	—	[illegible]

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
43	弥生土器	高杯	(19.6)			良好	にぶい褐7.5YR5/4	細砂	器壁磨滅・口唇部強いヨコナデ
44	弥生土器	高杯		(10.6)		良好	橙7.5YR7/6	細砂	変則的な円形透かし孔６個残存

竪穴住居７は、竪穴住居５の南東約４ｍに位置する。南半を調査区境のため確認していない。いびつな円形に近い平面形を呈し当初大形の土壙と考えていたが、土層観察で貼り床層と壁体溝が確認されたため、竪穴住居と判断した。主柱穴は確認されず、無柱の可能性はある。また中央穴と判断した穴も中央からややはずれた位置にある。

出土遺物は、残存状況が悪かったため少ない。図示した**43・44**は高杯であり、これらからこの竪穴住居の時期は弥生時代後期前葉に求められる。　（大橋）

竪穴住居８



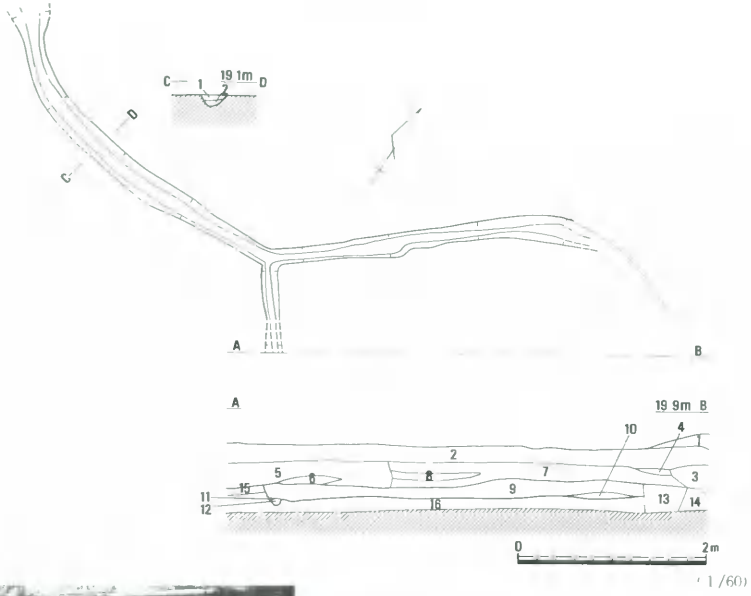
1　茶褐色粘質土
2　灰茶褐色土
3　暗灰茶褐色粘質土
4　茶褐色土
5　茶褐色粘質土(炭含む)
6　黄褐色土ブロック
7　灰褐色土

形状	規模(cm)		床面積	柱穴	中央穴			方形土壙(cm)			大形	壁体溝	高床部	排水溝	時期
	長軸	短軸			形	幅(cm)	深さ(cm)	長	幅	深					
円形	596	不明	-	4.4	楕円	71・79	[illegible]	-	-						弥生後期前葉

竪穴住居８は、ＫＭ３西区に位置し竪穴住居53と東側で接している。遺存状態は悪く、壁体溝と柱穴、中央穴が確認されたにすぎない。

平面形態は西辺が確認されたにすぎないが、ほぼ円形を呈するものと考えられる。東辺の壁体溝の内側に長さ１ｍほどの溝が認められる。壁体溝の一部と考えられるがこれに伴うと想定される柱穴などは認められず重複あるいは拡張されたかについては判断できなかった。柱穴は４本検出され、その内の１本について柱穴痕が認められたのである。中央穴は焼土・炭などは認められなかった。（下澤）

竪穴住居９

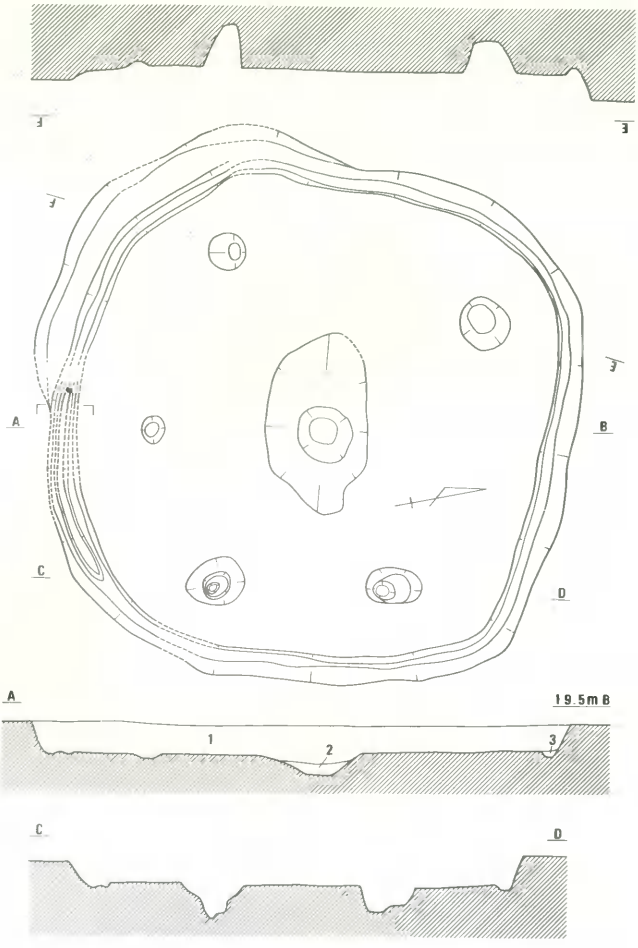


1　明灰色土
2　黄色土
3　灰褐色土（礫多く含む）
4　暗灰褐色土
5　明灰色土（茶褐色土含む）
6　暗灰色土（礫含む）
7　灰褐色土（礫多く含む）
8　〃
9　暗茶褐色土
10　淡暗茶褐色土
11　暗灰褐色土
12　灰色土
13　淡黒茶褐色土
14　黄褐色土
15　灰色土（茶褐色土含む）
16　黄褐色微砂

形　状	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	床面積(㎡)	柱穴	中央穴 形	中央穴 幅(cm)	中央穴 深さ m	方形土壙(cm) 長	方形土壙(cm) 幅	方形土壙(cm) 深	火床	壁体溝	高床部	排水溝	時　期
方形	416	不明	不明	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	北西隅	古墳？

竪穴住居９は、調査区の南端に検出したもので、そのほとんどは調査区の外に存在するものと考えられる。さらに、北東側は溝に切られているため住居の全体は不明である。検出したのは北と西の壁と壁体溝で、残存する壁の高さは約15cmを測る。壁体は直線的でありＬ字状に曲がる部分を検出したことから方形の住居と判明した。この角から西に向けて幅約20cm、深さ10cmの溝を検出した。溝は約3.5ｍまでを調査した。出土遺物がないため明確な時期は不明である。（井上）

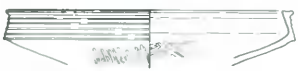
竪穴住居10



1　茶褐色土
2　暗茶褐色土
3　濃茶褐色土

（1/60）

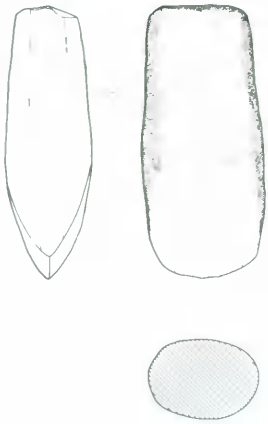
形　状	規模（cm）		面積（m）	柱	中央			方形土壌（cm）			大所	壁体溝	高床部	排水溝	時　期
	長軸	短軸			形	幅（cm）	深（cm）	長	幅	深					
胴張隅丸方形	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	楕円	[illegible]	14	—	—	—	—	[illegible]	—	—	弥生中期後葉



45

0　10cm

（1／4）



S１

（1／3）

掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
45	弥生土器	高杯	18.7			良好	にぶい橙7.5YR6.[illegible]	細砂	内面[illegible]外面に凹線

掲載番号	器種	材質	最大長（mm）	最大幅（mm）	最大厚（mm）	重量（g）	備考
S１	磨製蛤刃石斧	[illegible]	145	[illegible]	45	760.0	

竪穴住居10は、ＭＢＯＸ３区の北部に位置し、竪穴住居11の南西に隣接する。

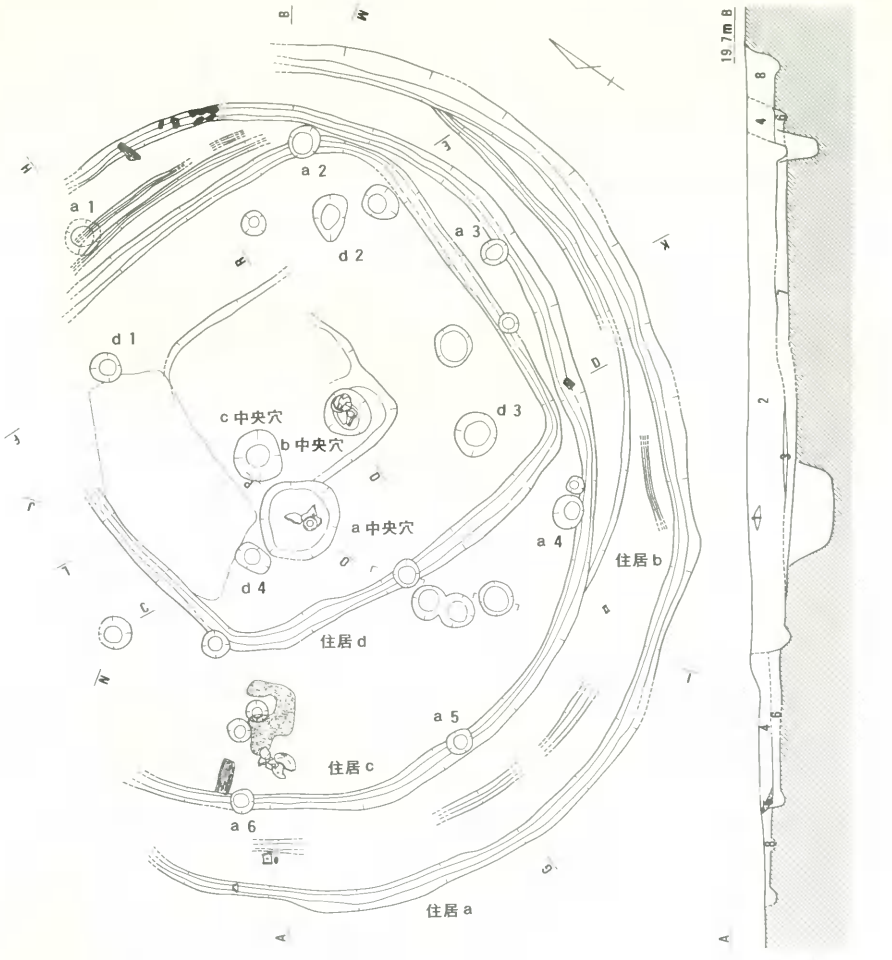
住居の柱穴は５本検出されたが、１本だけが著しく小規模である。他にも多数の柱穴が掘りこまれているが、ほとんどは古墳時代後期のものと思われる。また、貼り床層は確認できなかった。

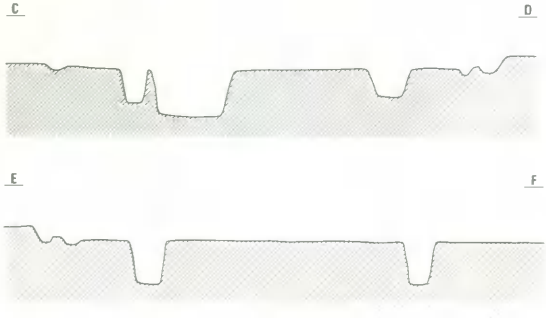
中央穴の形態は、周辺の傾斜が緩やかで途中から急に落ちるもので、埋土に炭化物・焼土が混じる。

遺物は、高杯**45**が床面直上、石斧**Ｓ１**が埋土中から出土したものである。須恵器・土師器も埋土中から多数出土したが混入と思われる。住居の時期は、床面直上の高杯から弥生時代中期後葉と考えられる。

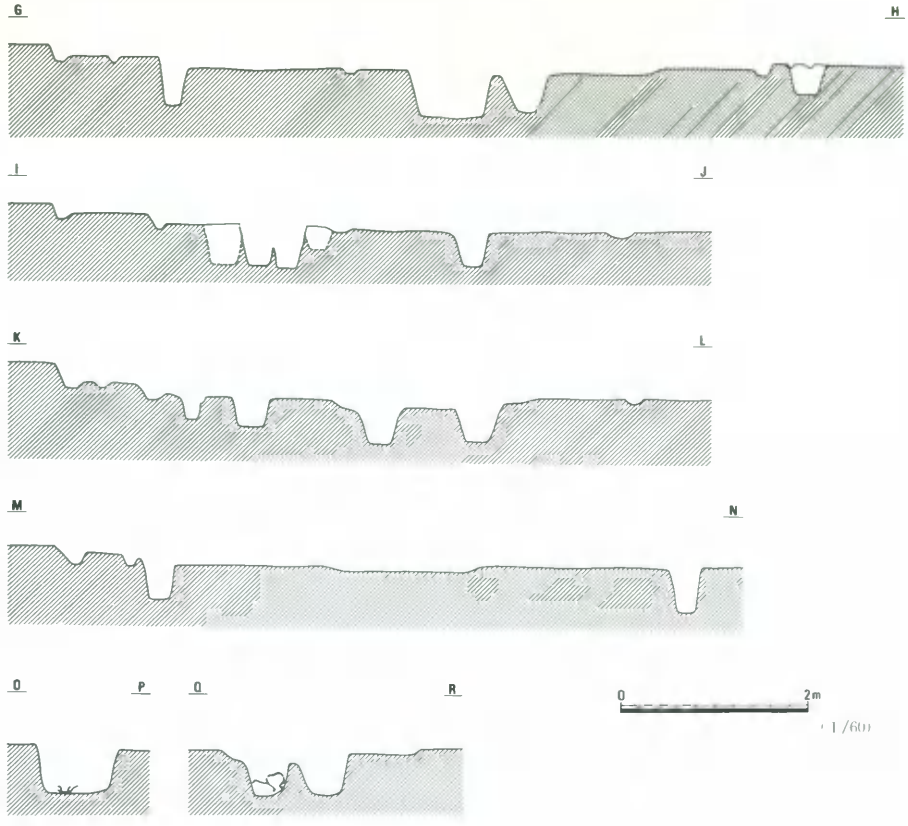
（氏平）

竪穴住居11

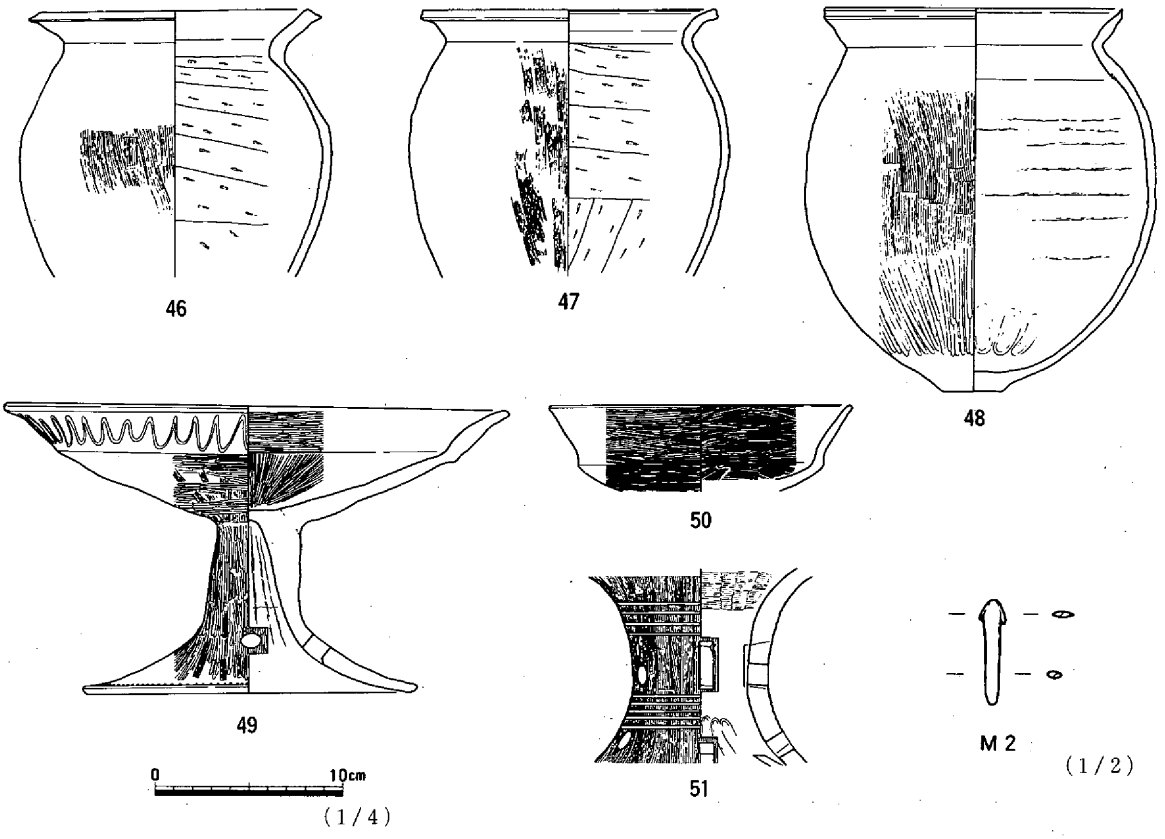




1　茶褐色砂質土
2　暗茶褐色土（炭化物・土器片・礫含む）（竪穴住居11ｄ埋土）
3　赤褐色土・黒色土混合（炭化物・焼土混合層）
4　淡茶褐色土（竪穴住居11ｃ埋土）
5　赤褐色土（焼土）
6　淡黄茶色土（土器片・炭化物・礫含む）
7　淡黄茶色土
8　淡茶褐色土（炭化物・土器片・礫含む）（竪穴住居11ａ埋土）



形状	規模(cm)		床面積(m)	柱穴	中央穴			方形土壌(cm)			大所	壁体溝	壁床部	排水溝	時期
	長軸	短軸			形	幅(cm)	深さ(cm)	長	幅	深					
a 円形	911	不明	—	[illegible]	円	85×83	65	—	—	—	—		—	—	弥生後期中葉
b 円形			—	—	円	51×49	[illegible]	—	—	—	—		—	—	
c 円形	746	不明	—	—	円	[illegible]	[illegible]	—	—	—	—		—	—	
d 隅丸方形	178	[illegible]	[illegible]	[illegible]	—	—	—	—	—	—	—		[illegible]	—	弥生後期末葉



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
46	弥生土器	甕	14.2			良好	にぶい橙7.5YR7/4	砂礫	胴外面スス付着
47	弥生土器	甕	15.6			良好	にぶい橙5YR6/4		口縁端部面を持つ
48	弥生土器	甕	15.7	3.0	20.5	良好	上部　にぶい黄橙10YR7/2 下部　にぶい黄橙5YR6/4	砂礫	口縁端部上方へつまみ出す・内面丁寧なナデ・粘土接合痕残る・外面スス付着
49	弥生土器	高杯	26.5	17.2	15.3	良好	橙5YR6/6	細砂	杯部屈曲して大きく外方へ広がる・口縁部外面に波状暗文・脚部円形透かし孔４方向
50	弥生土器	高杯	15.8		4.6	良好	橙5YR6/6	精良	杯部立ち上がりはわずかに外反する・内外面細かいヘラミガキ
51	弥生土器	器台				良好	明赤褐5YR5/6	砂礫	円形・方形透かし孔２段

掲載番号	器種	材質	法量 最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
M２	鏃	銅	28.0	7.0	2.1	1.14	茎長21.6　幅3.7・両丸造腸抉三角形式

竪穴住居11は、ＭＢＯＸ３区の北端に位置する。合計４回以上の建て替えで、最大で最古の円形住居をａ住居、２番目の円形住居をｂ住居、３番目をｃ住居、最新の方形住居をｄ住居と呼称する。

ａ住居内には壁体溝がさらにもう１条あり、拡張されている可能性が高い。遺物は中央穴から甕**46**、床面に器台**51**がある。柱穴はａ１～ａ６、中央穴の断面はＯ－Ｐラインに示した。

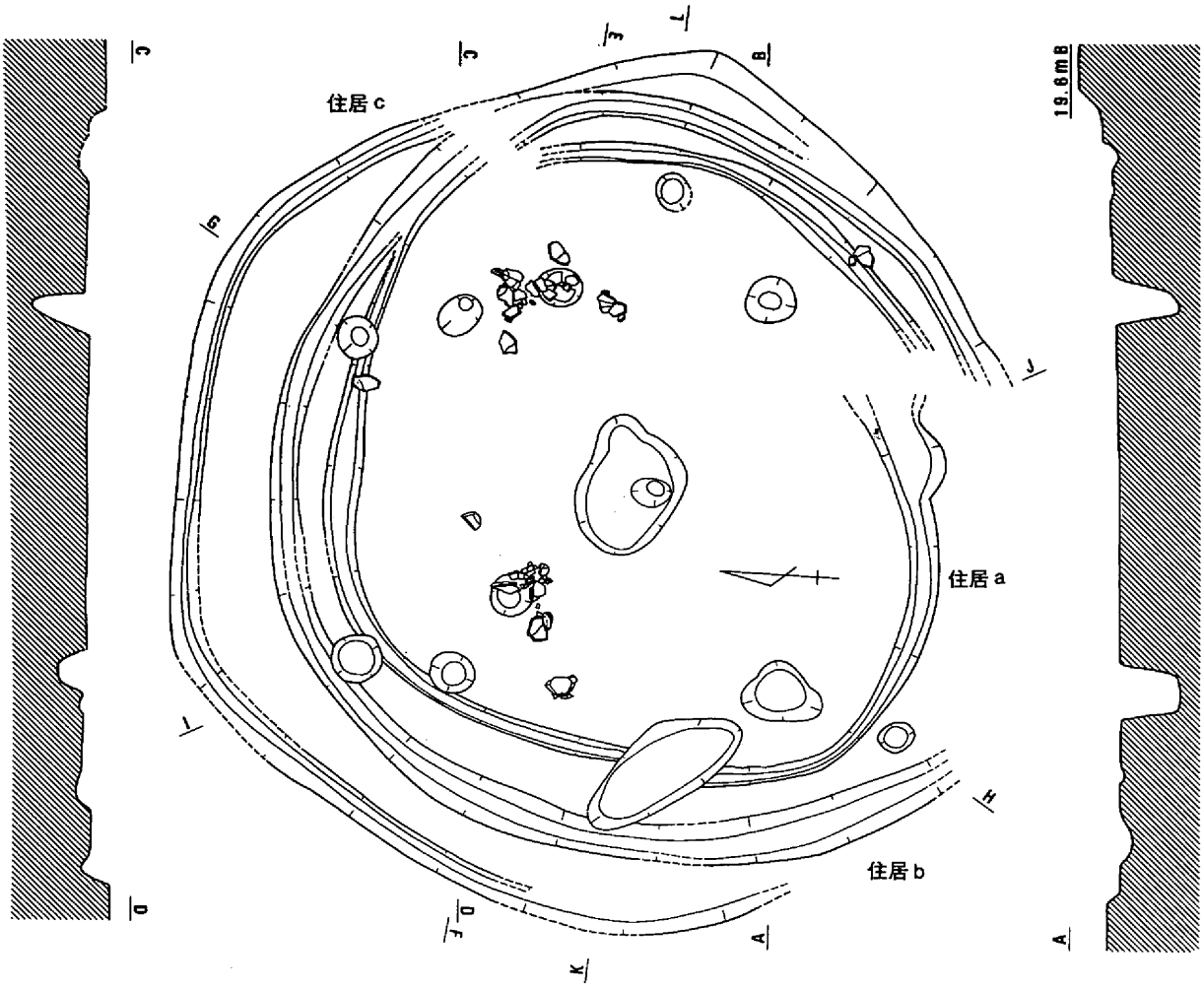
ｂ住居は壁体溝と中央穴のみが確定的である。中央穴から完形の甕**48**が出土している。中央穴の断面はＱ－Ｒラインである。

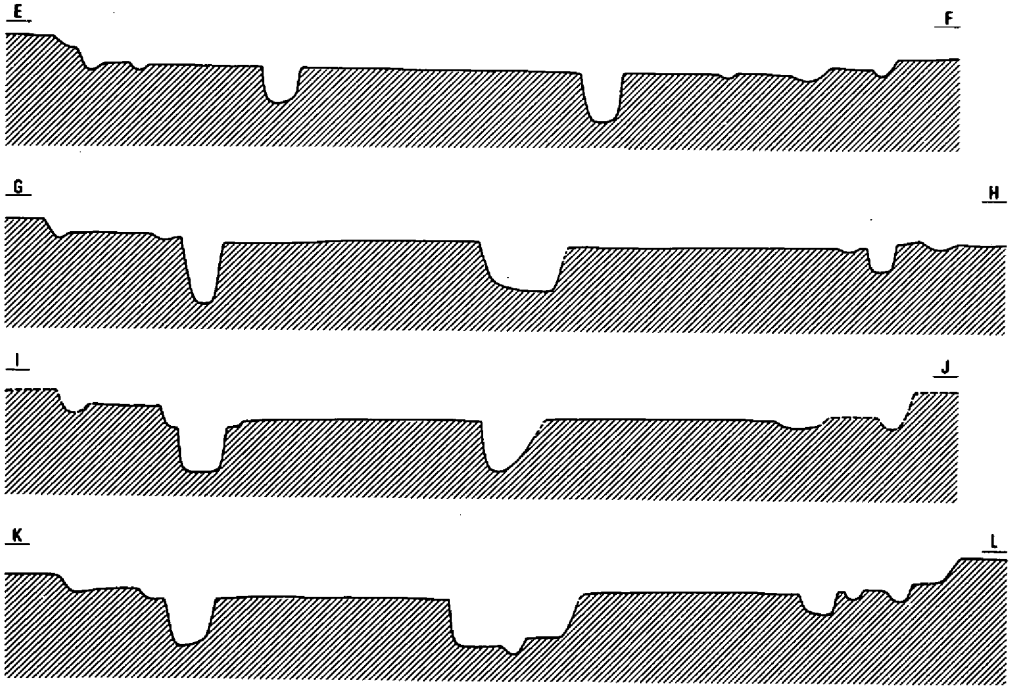
ｃ住居は炭化材・焼土を伴い、焼失した可能性が高い。遺物は、床面から埋没時の現位置を保つ甕**47**と高杯**49**、埋土中より銅鏃**Ｍ２**と、図示していないが緑色凝灰岩製の管玉１点が出土している。

ｄ住居は最も新しい住居で、四方に高床部を設け、貼り床が一部残っている。高杯**50**はこの住居に伴うもので、他に短脚の高杯や直口壺も見られる。柱穴はｄ１～ｄ４である。

住居の時期は、ａ、ｂ、ｃ住居が弥生時代後期中葉、ｄ住居が弥生時代後期末葉に属するものであると考えられる。　（氏平）

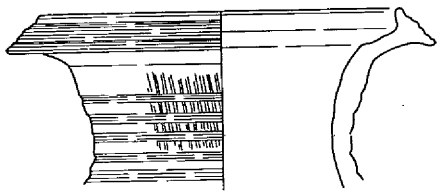
竪穴住居12



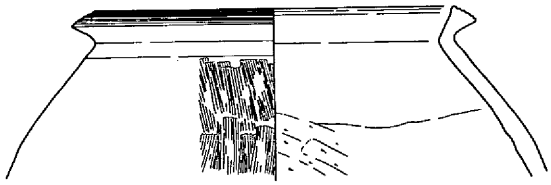


(1/60)

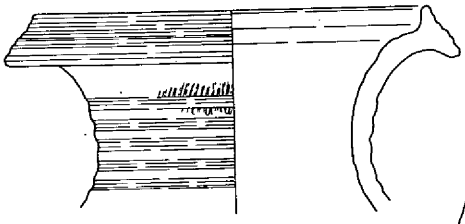
形状	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	床面積(㎡)	柱穴	中央穴 形	中央穴 幅(cm)	中央穴 深さ(cm)	方形土壙(cm) 長	方形土壙(cm) 幅	方形土壙(cm) 深	火所	壁体溝	高床部	排水溝	時期
a 不整隅丸方形	505	501	19.4	2/(4)	不明			−	−	−	−	○	−	−	弥生中期後葉？
b 円形	652	591	(27.2)	4/4	不明			−	−	−	−	○	−	−	弥生後期前葉
c 六角形	728	674	(35.0)	5/(6)	楕円	103×79	53	−	−	−	−	○	−	−	



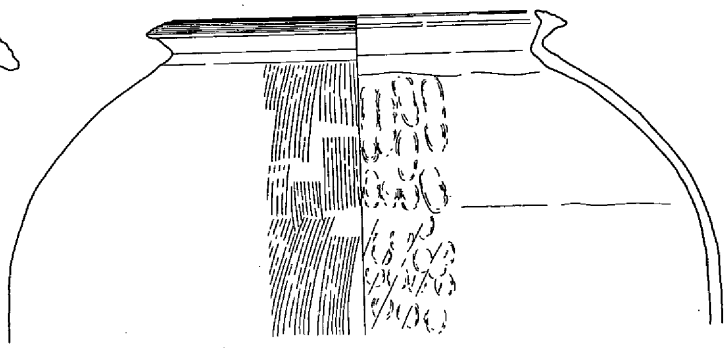
52



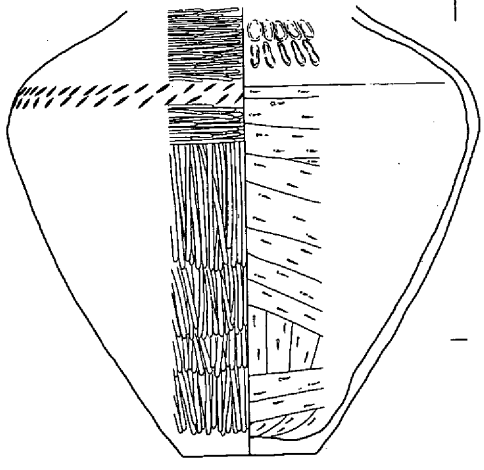
56



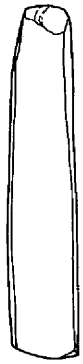
53



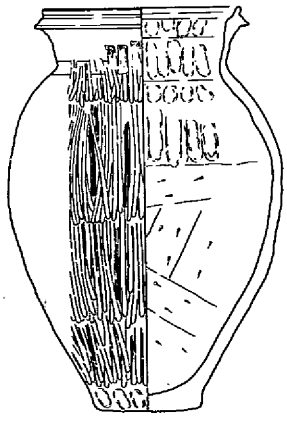
57



54



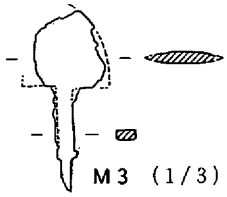
S 2 (1/2)



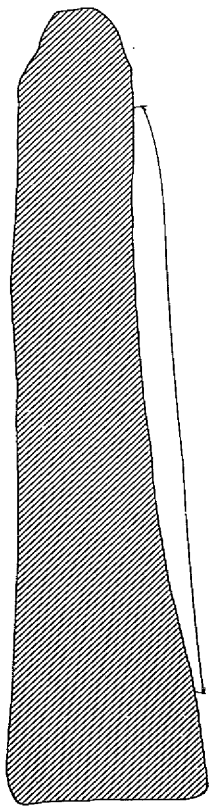
55

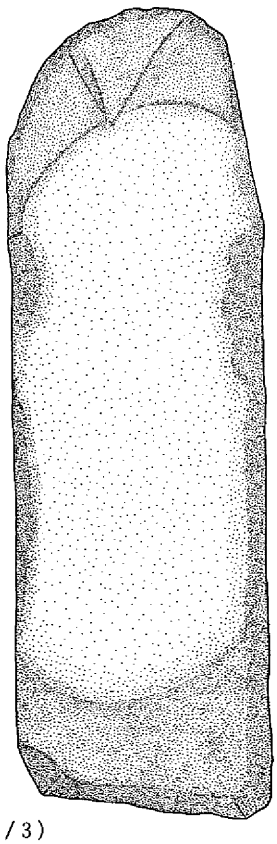
0　10cm

(1/4)



M 3 (1/3)





S 3 (1/3)

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
52	弥生土器	長頸壺	(19.0)			良好	浅黄橙10YR8/3	細砂	口縁部・頸部凹線・黒斑
53	弥生土器	長頸壺	(20.7)			良好	にぶい橙7.5YR7/3	砂礫	口縁部・頸部凹線
54	弥生土器	壺		5.0	23.8	良好	にぶい褐7.5YR6/3	砂礫	肩部2段の刺突文・内面ヘラケズリは胴部最大径の位置まで・黒斑
55	弥生土器	壺	10.2	5.5	21.5	良好	にぶい褐7.5YR5/3		内面ヘラケズリは胴部最大径の位置まで・外面ハケメ後ヘラミガキ・黒斑
56	弥生土器	甕	(19.0)			良好	橙5YR6/8	細砂	肥厚させた口縁部に擬凹線
57	弥生土器	甕	19.0			良好	灰黄褐10YR6/2	細砂	内面ヘラケズリは胴部最大径の位置まで・口縁部外面凹線

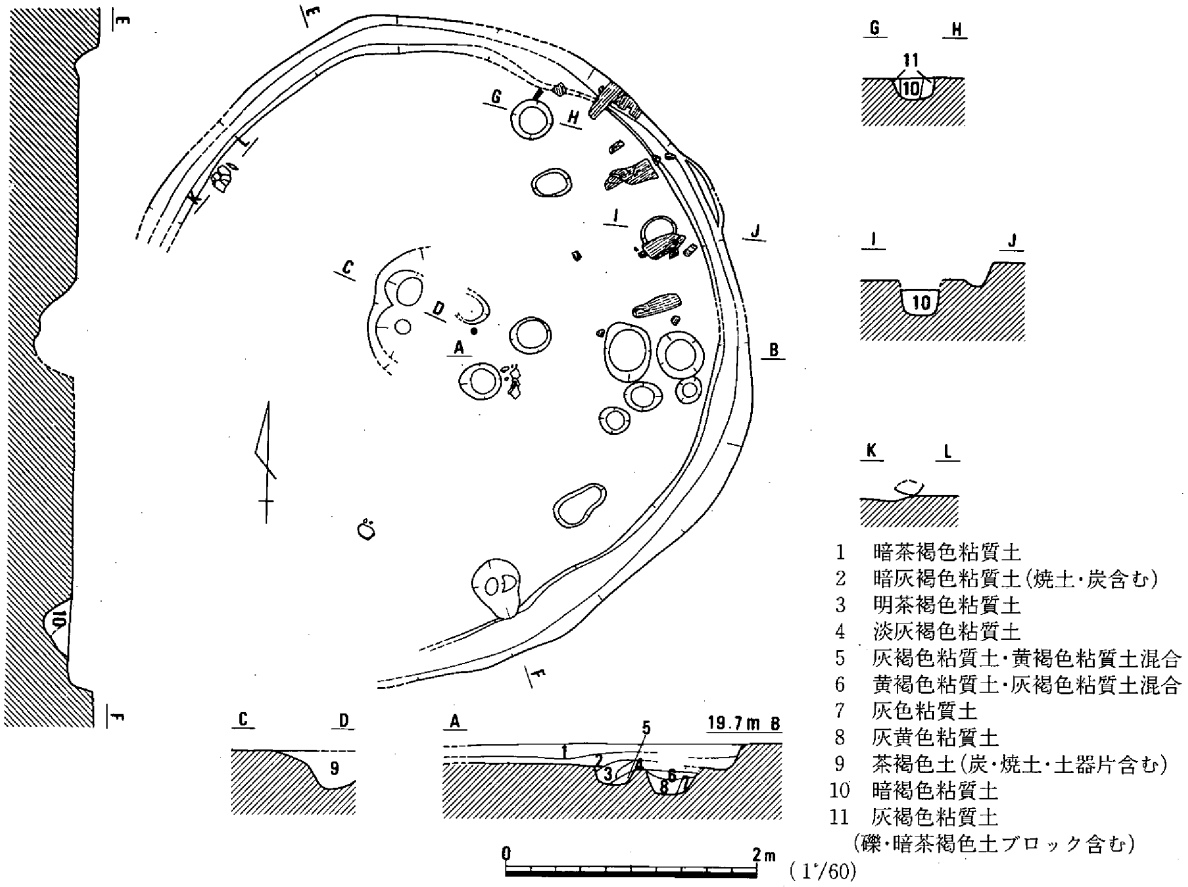
掲載番号	器種	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
S2	砥石	頁岩	94	18	11	41.29	
S3	砥石	半花崗岩	320	100	45−80	3925.00	

掲載番号	器種	材質	法量 最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
M3	鏃	鉄	(72.0)	(27.5)	4.6	11.82	広鋒両造箱挟三角形式

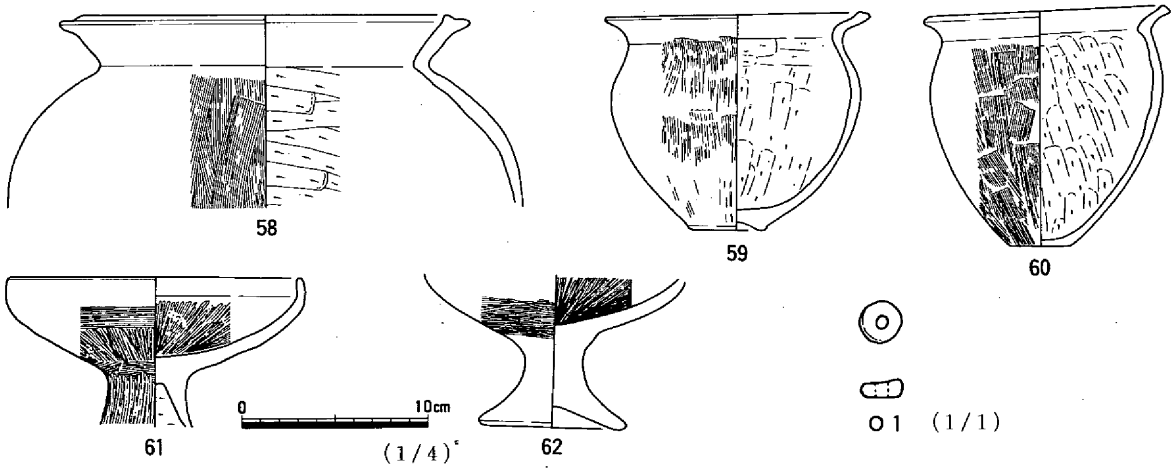
竪穴住居12は、竪穴住居11の南東に接する状態で検出した。住居は3棟が重複するもので、最も内側のものが隅丸方形、その外側のものが円形、最も外側のものが六角形を呈している。柱穴は六角形のものは5本、円形のものについては4本を検出した。しかし、隅丸方形のものについては2本を検出したが残りのものについては検出されなかった。中央穴については、1基を検出した。検出した位置は3棟の住居のほぼ中央にあたるもので、切り合う状態が見られなかったことから同じ位置に拡張されながら使用されたものと考えられる。検出面から床面までが浅いため、住居の前後関係は明確ではないが、六角形の住居が最も新しいものと考えられる。また、床面から土器を検出したが、その一部は隅丸方形の住居の柱穴を覆う状態であり隅丸方形の住居が古いことを示している。

住居からは、土器、石器、鉄器などが出土している。**52・53**は長頸壺で頸部はゆるやかに弧を描きながら外方に開くもので、ハケメを施した後に凹線が施される。口縁端部は上下に拡張される。**54**は壺の胴部である。外面の肩部に刺突文が2段に施される。肩部より上は横方向のヘラミガき、下方は縦方向のヘラミガキが施される。内面は胴部最大径まではヘラケズリ、その上はユビナデが施される。**55**も壺である。やや外反した短い頸部の先に端部が少し拡張した口縁部がつく。胴部外面は底部付近にユビオサエ、その他は縦方向のヘラミガキが施される。内面は胴部の最大径より下半はヘラケズリ、上半はユビナデが見られる。**56・57**は甕である。外方に折れ曲がった口縁部の端部は少し上下に拡張するものである。胴部外面はハケメ、内面は肩部より下はヘラケズリ、上はユビナデが見られる。**S2・S3**は砥石である。**S2**は断面が長方形を呈する直方体のもので、材質は頁岩である。**S3**は床面に検出したもので扁平な石の上面は使用による浅い窪みがあり面は非常に滑らかである。**M3**は鉄鏃である。一部は欠失するも元の形状を窺い知ることはできる。　　(井上)

竪穴住居13



形状	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	床面積(㎡)	柱穴	中央穴 形	中央穴 幅(cm)	中央穴 深さ(cm)	方形土壙(cm) 長	方形土壙(cm) 幅	方形土壙(cm) 深	火所	壁体溝	高床部	排水溝	時期
円形	534	不明	(17.5)	不明	楕円	不明	33	−	−	−	−	○	−	−	弥生後期前葉



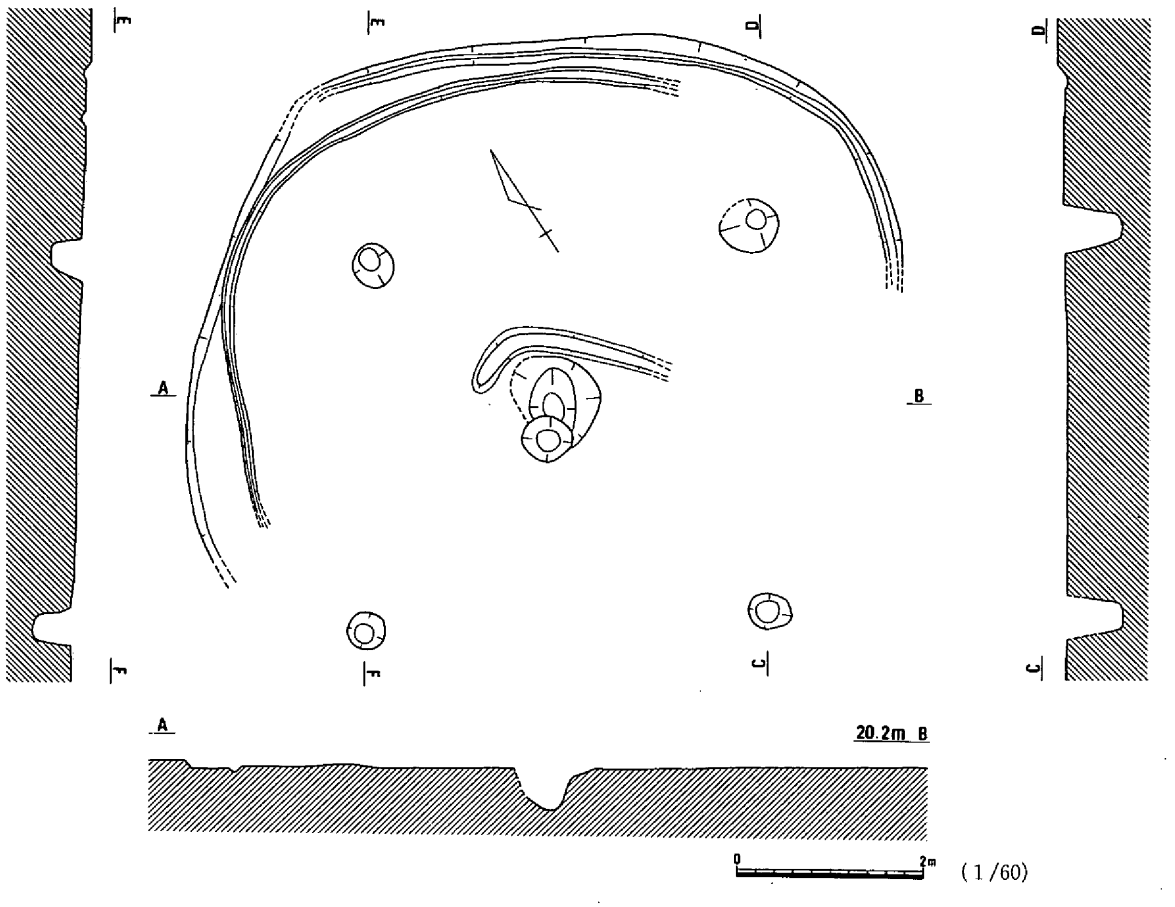
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
58	弥生土器	甕	(19.4)			良好	にぶい橙7.5YR7/4	微砂	内面ヘラケズリは上位まで・口縁部は強いヨコナデによる凹部を形成
59	弥生土器	甕	13.4	(4.1)		良好	にぶい橙7.5YR6/4	微砂	口縁部は肥厚して上方に面を形成する・底部は上げ底気味・黒斑
60	弥生土器	甕	(12.2)	(3.2)		良好	浅黄橙7.5YR8/3	微砂	口縁部は肥厚して面をなす
61	弥生土器	高杯	15.5			良好	にぶい橙5YR7/4	細砂	杯部は浅い椀形を呈す・外面は荒いヘラミガキ・黒斑
62	弥生土器	高杯		6.9		良好	橙5YR7/6	細砂	杯部は浅い椀形を呈す・脚部は中空にならない

掲載番号	器種	材質	色調	最大長(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
01	臼玉	滑石	暗オリーブ灰	2.35	5.25	1.80	0.10	

竪穴住居13は、竪穴住居12の北東に一部重複した状態で検出した。調査中の観察では、竪穴住居13の床面が竪穴住居12Cにより切られる状態でありこの住居が古い。平面形は円形を呈しているが柱穴の数は不明である。床面のほぼ中央に中央穴を検出した。中央穴は東側を調査区境の溝により削平されているがその形状は楕円形を呈するものと推定される。中央穴には2個の底があり造り替えられたものと考えられる。床面からは炭化材が出土しており焼失住居の可能性がある。

出土遺物としては弥生土器の壺、甕、高杯、滑石製の臼玉などが出土している。　(井上)

竪穴住居14

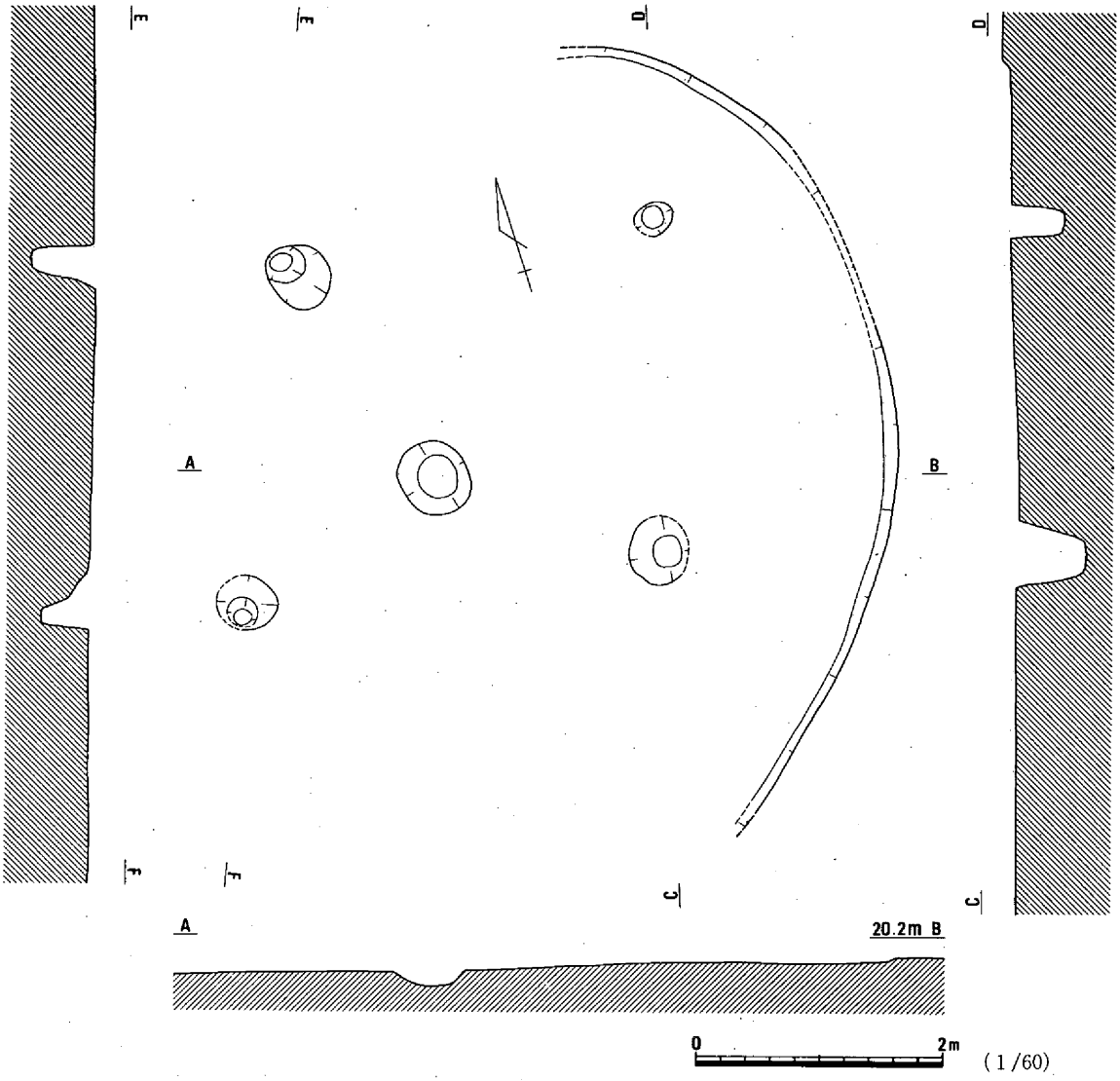


(1/60)

形状	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	床面積(m²)	柱穴	中央穴 形	中央穴 幅(cm)	中央穴 深さ(cm)	方形土壙(cm) 長	方形土壙(cm) 幅	方形土壙(cm) 深	火所	壁体溝	高床部	排水溝	時期
a　胴張隅丸方形	不明	不明	−	4/4	楕円	(74)×(59)	36	−	−	−	−	○	−	−	弥生後期前葉
					円	40×37	30								
b　隅丸方形	不明	不明	−	不明	不明	−	−	−	−	−	−	○	−	−	

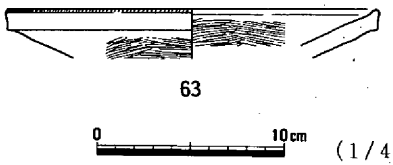
竪穴住居14は、竪穴住居13の東21mの位置に検出した。この住居は、竪穴住居15と重複している。住居の新旧関係をみると竪穴住居14の壁体溝が竪穴住居15の壁体により切られている。住居跡は2条の壁体溝を検出し、建て替えのあったことを示している。外側の平面形は胴張隅丸方形を呈しており、壁体溝は東側の半分に検出した。内側の平面形は隅丸方形を呈するもので、壁体溝のみを検出した。柱穴は4本を検出した。平面形は円形を呈するもので、直径25～45cmを測る。柱穴間距離は、300～320cmを測る。床面のほぼ中央部に中央穴を検出した。中央穴は円形と楕円形を呈する2個を検出し、円形を呈するものが新しい。中央穴の北側には土手状の高まりを検出した。住居の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。　(井上)

竪穴住居15ａ

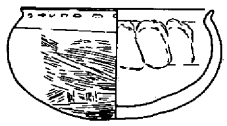


（１/60）

形　状	規模(cm)		床面積(㎡)	柱穴	中央穴			方形土壙(cm)			火所	壁体溝	高床部	排水溝	時　期
	長軸	短軸			形	幅(cm)	深さ(cm)	長	幅	深					
円形	不明	不明	－	4/4	円	63×53	14	－	－	－	－	－	－	－	弥生後期中葉



63



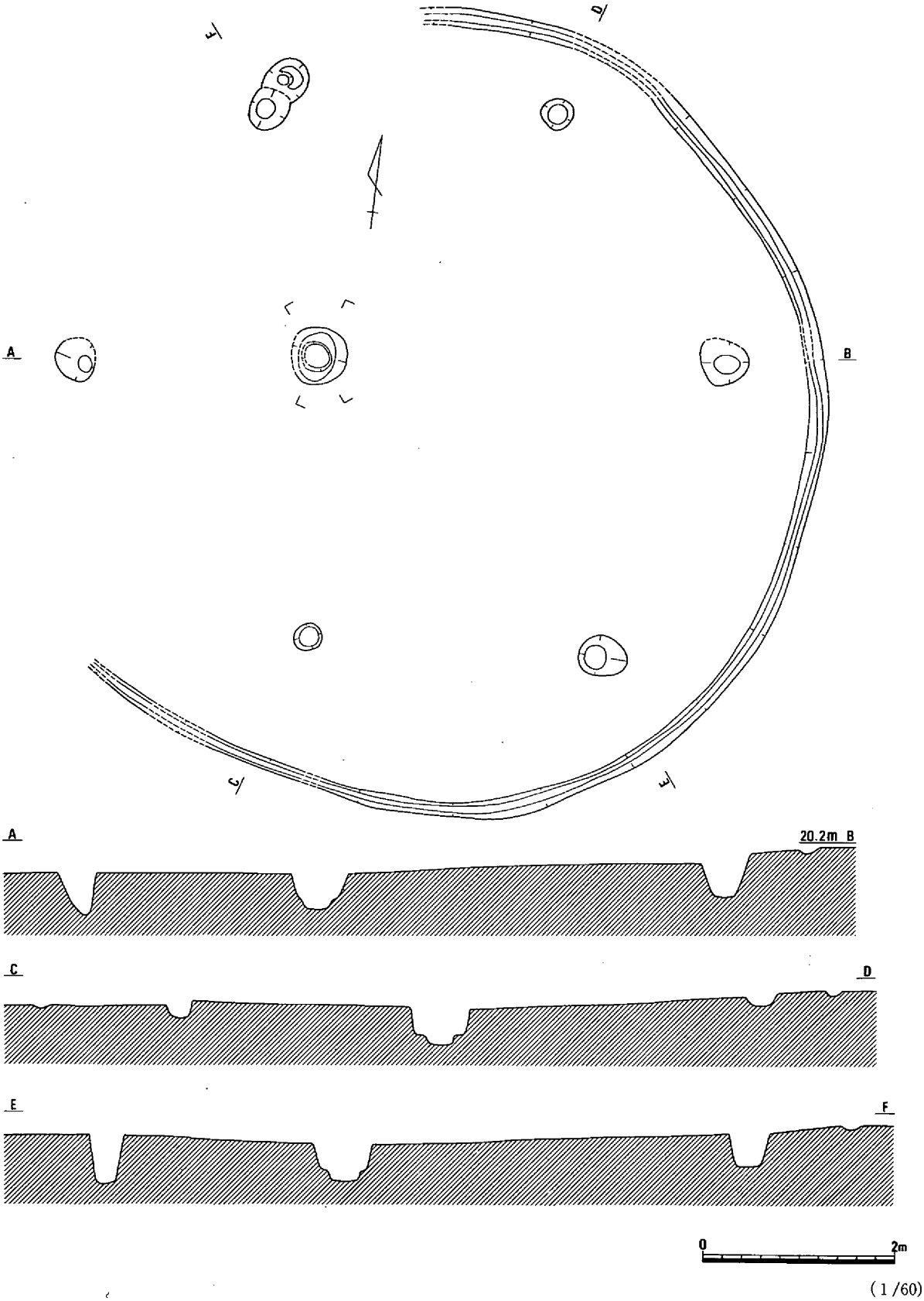
64

0　10cm　（１/４）

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
63	弥生土器	壺	(19.8)			良好	にぶい黄橙10YR7/4	砂礫	口縁部は僅かに肥厚させて外面を形成・端部に刻み目あり
64	弥生土器	鉢	10.1		5.9	良好	橙7.5YR7/6	砂礫	わずかに上方につまみ上げる口縁部下端に刺突文

竪穴住居15ａは、壁体の一部のみを検出した。検出面からの深さは約10cmを測るものである。柱穴は４本を検出した。平面形は円形を呈し、直径25～50cmを測り、検出面からの深さは40～55cmを測る。住居の中央と考えられる位置に中央穴を検出した。円形を呈するもので長径60cm、短径55cm、深さ10cmを測る。住居の時期は弥生時代後期中葉と考えられる。　（井上）

竪穴住居15ｂ



(1/60)

形　状	規模(cm)		床面積(m²)	柱穴	中央穴			方形土壙(cm)			火所	壁体溝	高床部	排水溝	時　期
	長軸	短軸			形	幅(cm)	深さ(cm)	長	幅	深					
円形	824	不明	[illegible]	[illegible]	円	60×[illegible]	38	—	—	—	—		—	—	弥生後期中葉

65

66

67

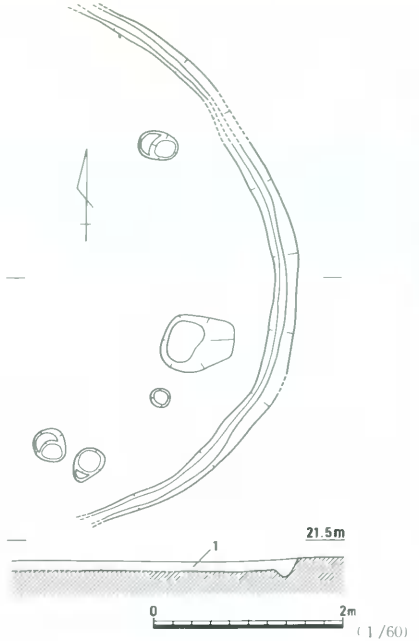
（１／４）

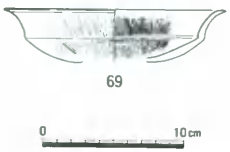
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
65	弥生土器	甕	(16.0)			良好	橙5YR7/6	微砂	肥厚させた口縁部外面に沈線２条
66	弥生土器	鉢	[illegible]	3.1	[illegible]	良好	橙5YR7/6	微砂	底部は平底気味
67	弥生土器	手づくね	[illegible]		[illegible]	良好	灰白[illegible]R[illegible]	精良	ユビオサエで成形

竪穴住居15ｂは、竪穴住居15ａの外側に検出した。住居は上面を削平されているため検出したのは壁体溝のみで壁体と西側の一部は検出できなかったが、円形を呈するものと考えられる。住居の規模は長軸824cmを測る。溝の幅は16～20cm、深さ約５cmを測るものである。柱穴は７本を検出したが、１本は重複しており６本柱の住居と考えられる。柱穴の平面形は円形を呈するもので、直径30～50cmを測る。柱穴間の距離は300～365cmを測る。床面からの深さは10～55cmを測る。これらの柱穴の一部は竪穴住居15ａの壁体を切ることから竪穴住居15ｂが新しいことが解る。床面の中央部やや西寄りに中央穴を検出した。中央穴の平面形は円形を呈するもので、長径60cmを測る。穴は２段に掘られるもので下段の平面形も円形を呈しており、長径28cm、床面からの深さは38cmを測る。

出土遺物として弥生土器がある。**65**は甕の口縁部である。外反した口縁部の端部が少し上下に拡張するもので、胴部内面は口縁部の直下までヘラケズリが施される。**66**は鉢で、直立する口縁部の端部は丸く納められる。**67**は手づくねの土器で、内外面にユビオサエの痕がみられる。住居の時期は弥生時代後期中葉と考えられる。　（井上）

竪穴住居16





1　茶灰黄色土(炭化物・焼土粒多く含む)

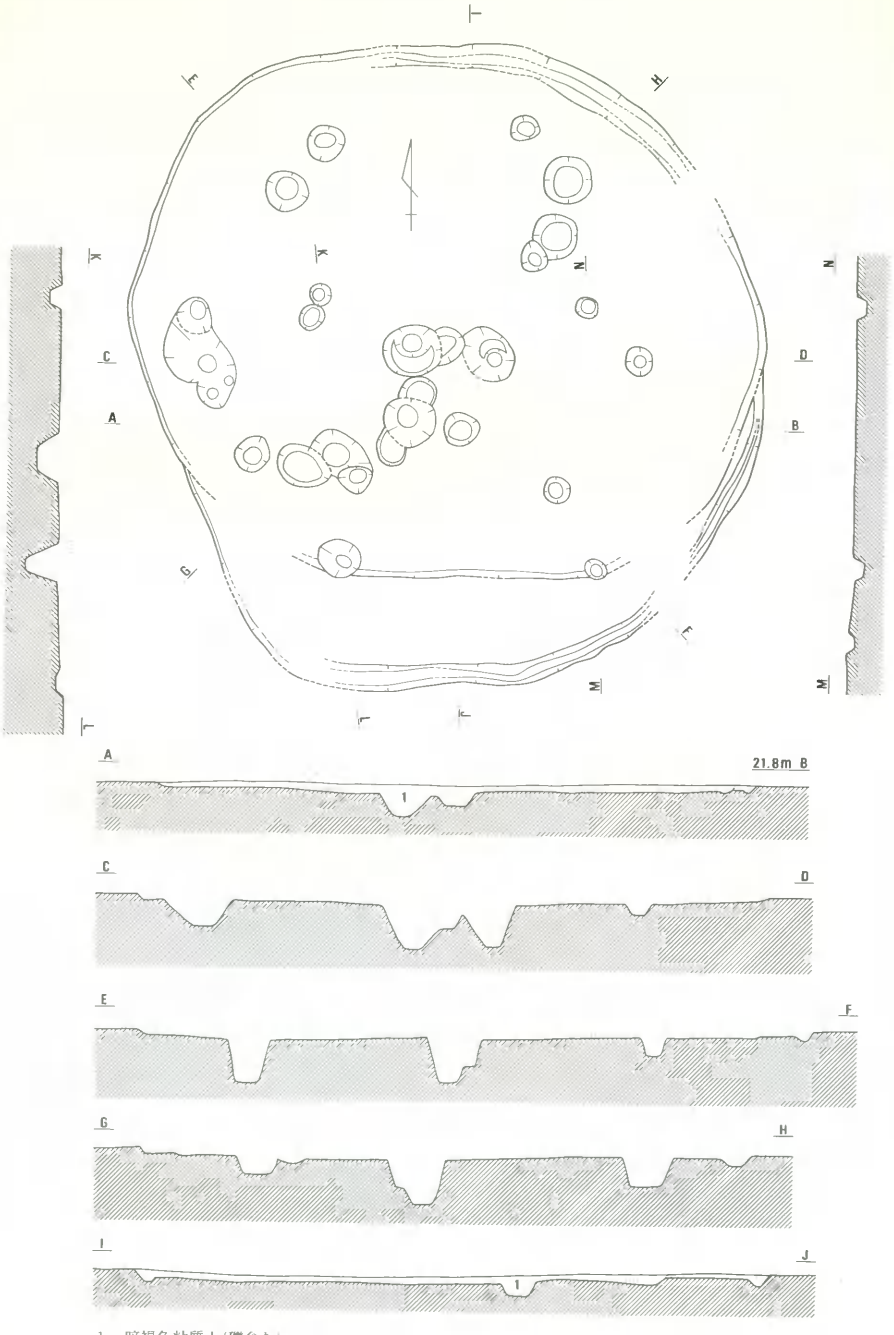
形　状	規模(cm)		床面種(m	柱穴		中央		方形土壙(cm)			火床	壁体溝	高床部	排水溝	時　期
	長軸	短軸		形		幅(cm)	深(cm)	長	幅	深					
円形	不明	不明		不明	不明	—	—	—	—	—			—	—	弥生後期中葉

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
68	弥生土器	小形壺	7.6	3.6	7.8	良好	橙5YR7/6	細砂	屈曲して外方に開く口縁部・平底あり
69	弥生土器	高杯	(13.4)			良好	にぶい黄橙10YR7/4	精良	杯部は屈曲して外反する

竪穴住居16は、L・M21グリッド(MM6区)に位置する。残存状況は良くないが、弧を描く壁が約3分の1検出されたことから、径約6m前後を測る円形の住居になるものと推定される。住居は壁に接して壁体溝がめぐる。その内側にはピットが点在するが、住居に伴う柱穴を抽出することはできなかった。住居の埋土中には多くの炭化物や焼土が含まれていた。

遺物はわずかに弥生土器が認められた。**69**は高杯で、精良な胎土を用いて作られ、内外面を丁寧なヘラミガキで仕上げている。土器の時期は弥生時代後期中葉ごろと考えられる。(平井)

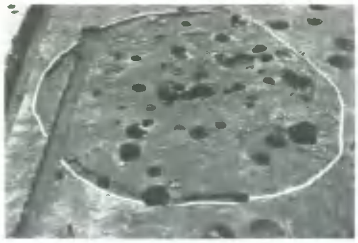
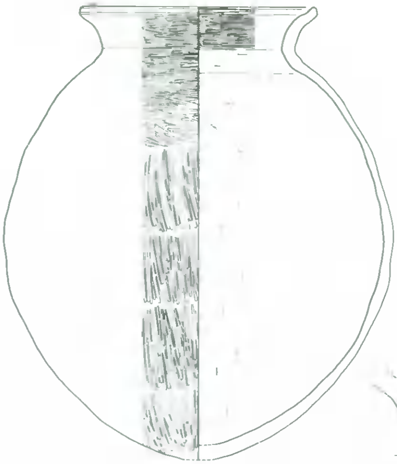
竪穴住居17



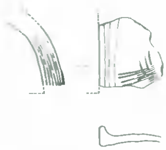
1　暗褐色粘質土（礫含む）

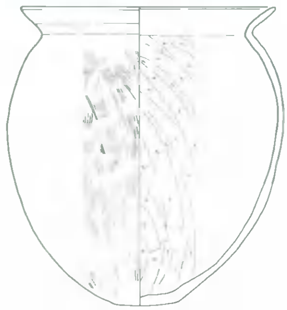
1/60

形　状	規模(cm)		床面積(㎡)	柱穴	中央穴			[illegible]形土壙(cm)			火所	壁体溝	高床部	排水溝	時　期
	長軸	短軸			形	幅(cm)	深さ(cm)	長	幅	深					
a　多角形	不明	不明	—	4/4	[illegible]			—	—	—	[illegible]		—	—	古墳前半前葉
b　六角形	678	[illegible]	[illegible]	[illegible]				—	—	—	[illegible]		—	—	



70

0　10cm
(1/4)


71


72

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
70	土師器	甕	[illegible]		[illegible]	良好	[illegible]黄橙10YR[illegible]	砂礫	口縁端部[illegible]を持つ
71	土師器	甕	[illegible]	[illegible]4	[illegible]	良好	浅黄2.5Y7/3	砂礫	[illegible]底部残る　器壁摩滅気味
72	土師器	手焙形土器				良好	褐[illegible]10YR[illegible]	精良	[illegible]描文様あり

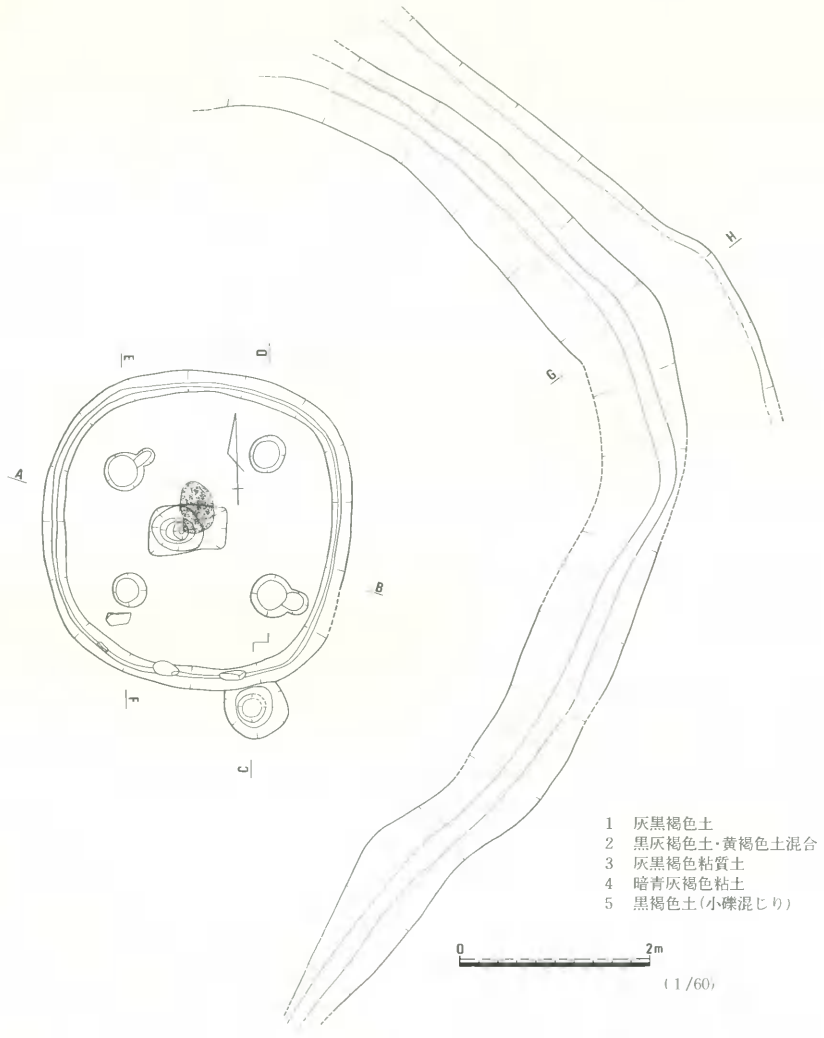
竪穴住居17は、ＭＭ７区に位置する。残存状況は悪く、最も残りのよいところでも深さ10cm未満である。床面は礫層上に築かれているため正確には把握できていない。この竪穴住居は少なくとも１回以上の建て替えが行われていると考えられ、古いものを竪穴住居17ａ、新しいものを竪穴住居17ｂとして以下、記述する。

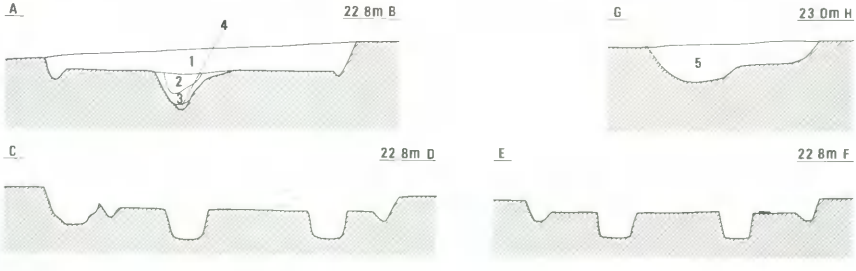
竪穴住居17ａは、六ないし八角形を呈するものと考えている。主柱穴はＰ１～Ｐ４の４本柱を構成するものと判断した。中央穴は、この柱に囲まれた範囲のなかのものが相当すると思われるが、いずれかは不明であった。

竪穴住居17ｂは六角形を呈するものであり、長軸方向で678cmを測る。主柱穴はＰ５～Ｐ10の６本柱を構成するものと判断した。中央穴は複数可能性のあるものがあり、いずれかは断定できない。おそらくは、このほかにも建て替えがあったことを示唆するものと思われる。

出土遺物は**70**～**72**を図示した。**72**は手焙形土器の破片であるが、斎富遺跡では確認できたのはこの１点である。これらの出土遺物からこの竪穴住居の時期は古墳時代前半前葉のものと考えている。（大橋）

竪穴住居18

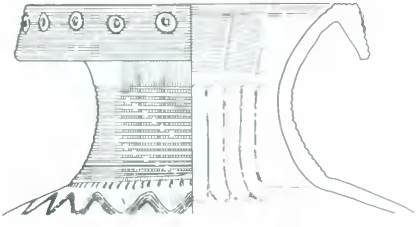

A
B
C
D
E
F
G
H
1　灰黒褐色土
2　黒灰褐色土・黄褐色土混合
3　灰黒褐色粘質土
4　暗青灰褐色粘土
5　黒褐色土（小礫混じり）
0
2m
（1/60）


A
22.8m B
1
2
3
4
G
23.0m H
5
C
22.8m D
E
22.8m F

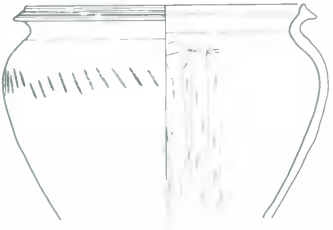
形状	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	床面積(㎡)	柱穴	中央炎 形	中央炎 幅(cm)	中央炎 深さ(cm)	土製土壇(cm) 長	土製土壇(cm) 幅	土製土壇(cm) 深	火所	壁体溝	高床部	排水溝	時期
隅張隅丸方	339	328	8.2	4/4	長方	80×50	40	–	–	–	–	–	–	–	弥生後期前葉

75

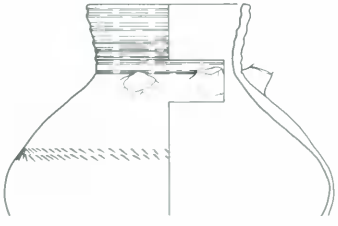
76



73



77

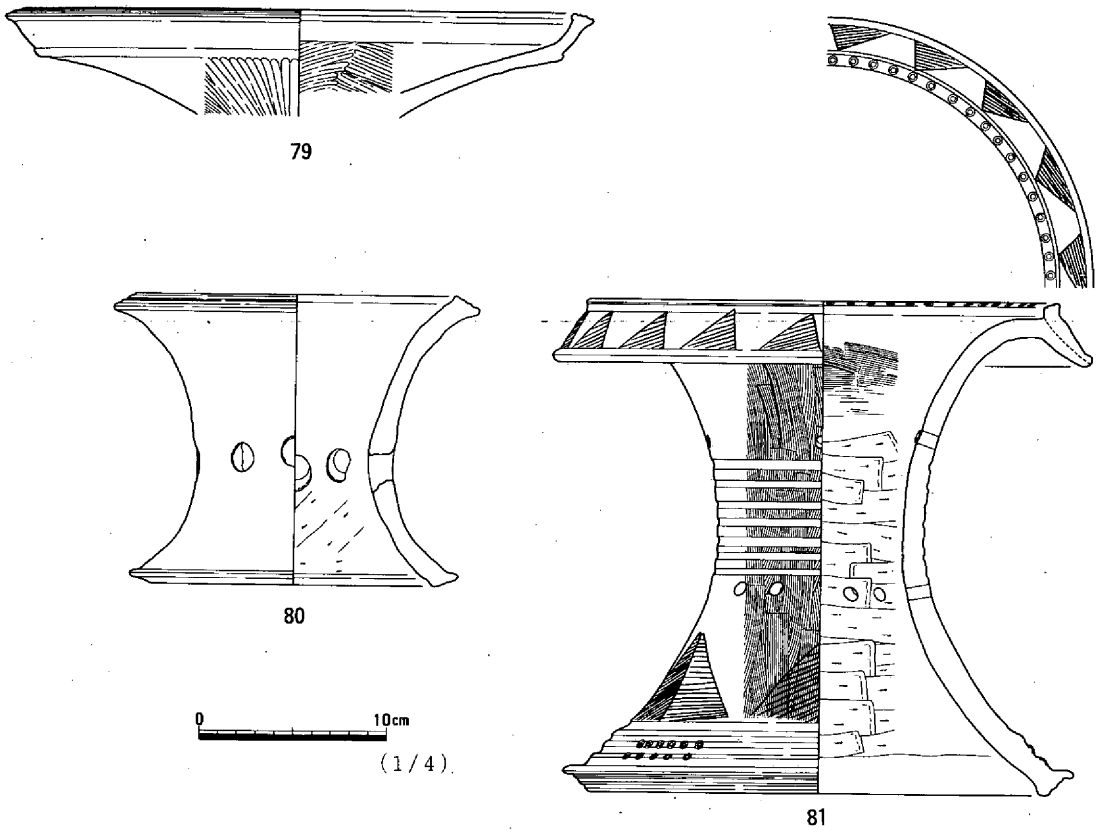


74

78

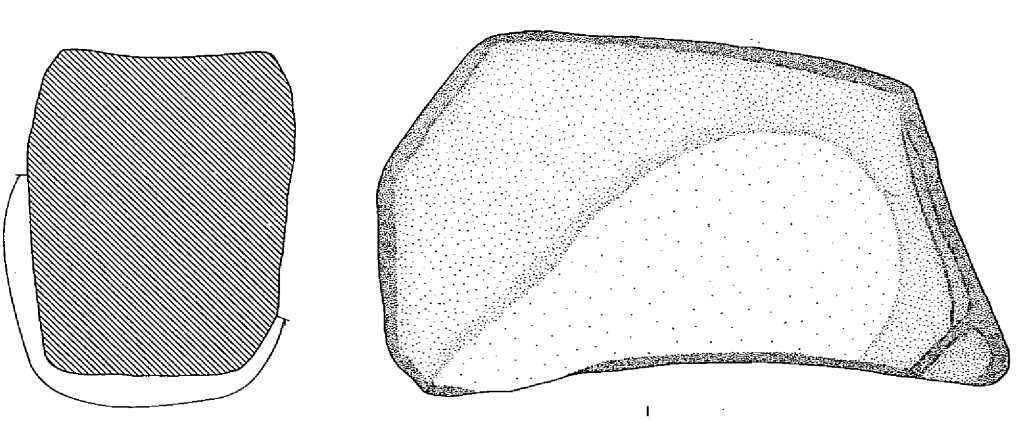
1 / 4

挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
73	弥生土器	壺	20.1			良好	橙7.5YR6/6	細砂	口縁部は下方に垂れ下がり外面に沈線と円形浮文・頸部凹線・胴下半に粗雑な波状文巡る
74	弥生土器	把手付直口壺	11.5			良好	橙5YR6/6	砂礫	把手部欠損・肩部に刺突文・撚糸
75	弥生土器	壺	(18.7)			良好	にぶい黄橙7.5YR7/4		頸部凹線文・ハケメ・口縁部は斜め下方に拡張
76	弥生土器	壺	(11.4)			良好	にぶい橙7.5YR7/3	砂礫	器壁磨滅・二次的に火を受けている
77	弥生土器	鉢	(19.7)			良好	橙2.5YR6/8	砂礫	口縁部凹線・胴肩部上に刺突文
78	弥生土器	甕	(24.6)			良好	にぶい橙7.5YR6/4	微砂	口縁部は強いヨコナデ・胴部外面は板状工具による調整



（１／４）

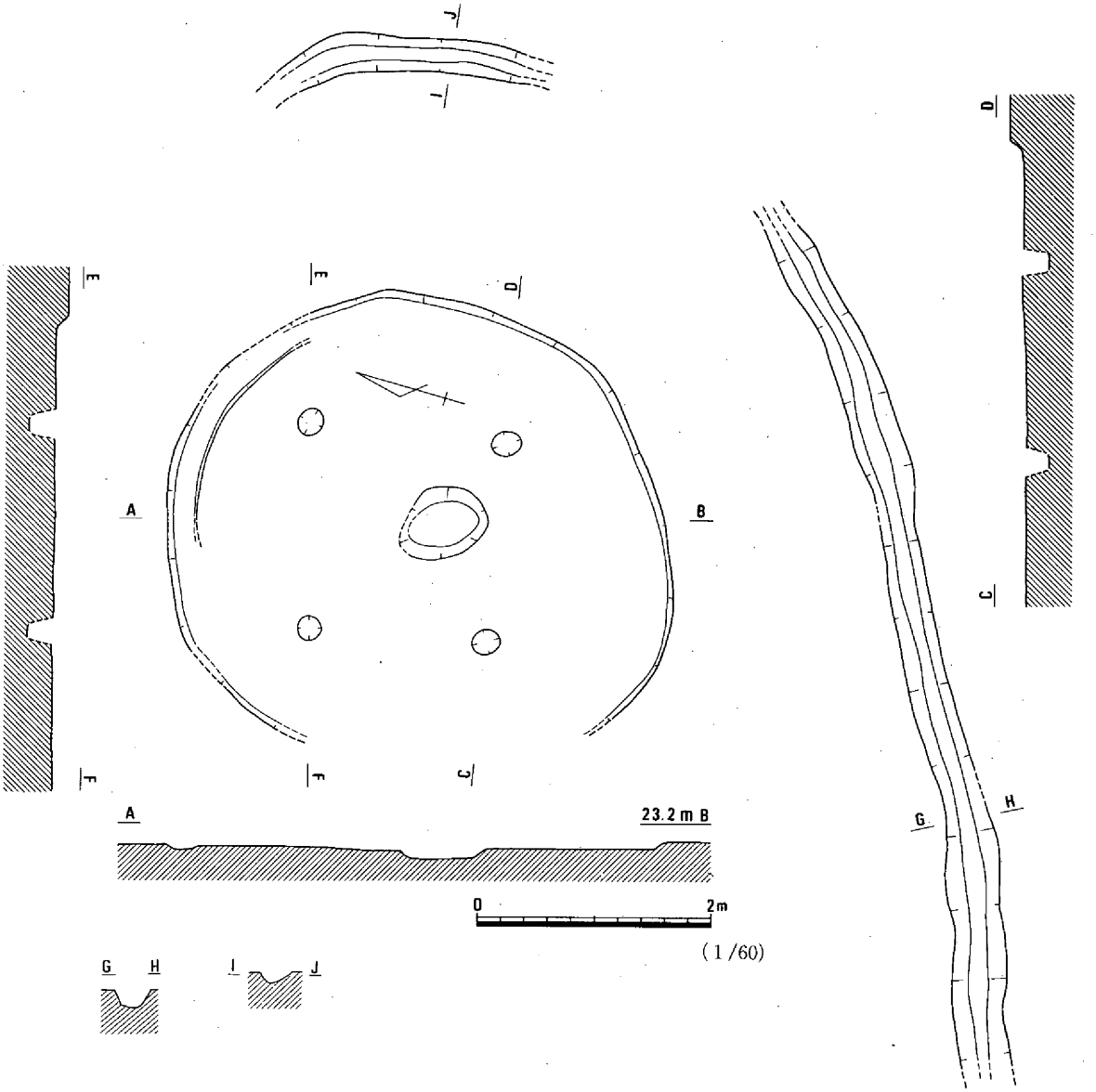
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
79	弥生土器	高杯	(29.4)			良好	にぶい橙5YR6/4	微砂	口縁部は短いＴの字をなし上面に沈線
80	弥生土器	器台	(17.0)	(14.8)	15.4	良好	にぶい橙7.5YR7/4	微砂	筒部２個１組で４組の円形透かし孔・口縁部はわずかに肥厚させる
81	弥生土器	器台	(24.7)	(24.0)		良好	にぶい橙7.5YR7/4	細砂	筒部沈線帯の上に円形透かし孔・脚裾部は凹線に竹管文を施す



Ｓ４（１／３）

掲載番号	器種	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
Ｓ４	砥石	半花崗岩	252	140	107	5910.00	

竪穴住居19



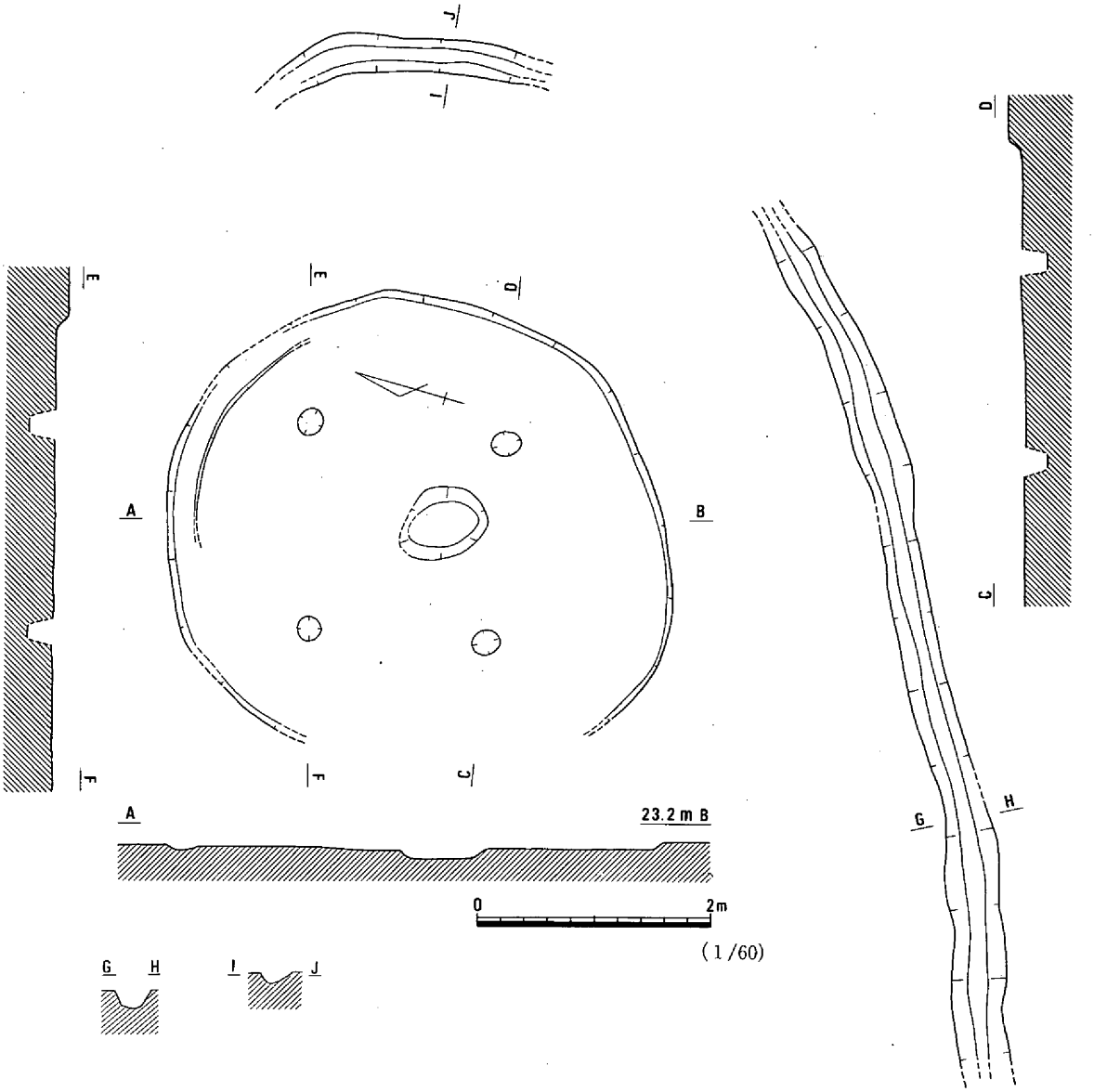
形状	規模(cm)		床面積(㎡)	柱穴	中央穴			方形土壙(cm)			火所	壁体溝	高床部	排水溝	時期
	長軸	短軸			形	幅(cm)	深さ(cm)	長	幅	深					
円形	455	415	13.3	4/4	楕円	(79)×61	8	−	−	−	−	○	−	−	弥生後期

竪穴住居19は、大小の礫を多量に含む基盤層を掘りこんで造成された、いびつな円形を呈する住居である。床面のほぼ中央南寄りに中央穴とみられる浅い土壙状の凹みが検出されているが、比熱部分が認められず炉のような性格・用途に該当するかは不明である。

住居に伴う柱穴は４本確認されているがいずれも浅い。壁体溝は検出されなかったが、北側で浅い段がつく部分があり、住居の拡張が行なわれた可能性を示唆している。

この住居の東から南にかけては、幅約30～40cm、深さ約10～15cmの周溝が検出されており、住居の覆土と同様な黒褐色土が埋積していることが確認されている。器形の全容を知る土器などの出土遺物は、細片以外きわめて少ないが、弥生時代後期の時期的範囲におさまる可能性が強い。　（岡田）

竪穴住居19



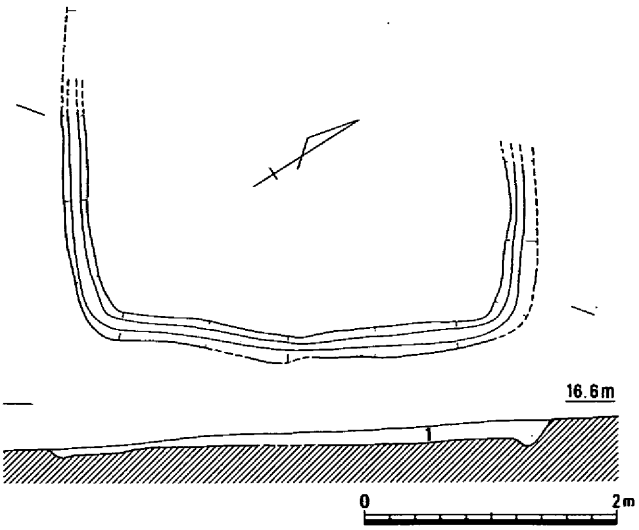
形状	規模(cm)		床面積(㎡)	柱穴	中央穴			方形土壙(cm)			火所	壁体溝	高床部	排水溝	時期
	長軸	短軸			形	幅(cm)	深さ(cm)	長	幅	深					
円形	455	415	13.3	4/4	楕円	(79)×61	8	−	−	−	−	○	−	−	弥生後期

竪穴住居19は、大小の礫を多量に含む基盤層を掘りこんで造成された、いびつな円形を呈する住居である。床面のほぼ中央南寄りに中央穴とみられる浅い土壙状の凹みが検出されているが、比熱部分が認められず炉のような性格・用途に該当するかは不明である。

住居に伴う柱穴は4本確認されているがいずれも浅い。壁体溝は検出されなかったが、北側で浅い段がつく部分があり、住居の拡張が行なわれた可能性を示唆している。

この住居の東から南にかけては、幅約30～40cm、深さ約10～15cmの周溝が検出されており、住居の覆土と同様な黒褐色土が埋積していることが確認されている。器形の全容を知る土器などの出土遺物は、細片以外きわめて少ないが、弥生時代後期の時期的範囲におさまる可能性が強い。　(岡田)

竪穴住居20



(1/60)

1　暗灰褐色粘質土(礫・炭・土器片含む)

竪穴住居20は、隅丸方形の平面形を呈する住居の一部で、東半のみ明瞭に残る。半分以上は、発掘区の北側に存在することになる。壁体溝の残りは良好である。

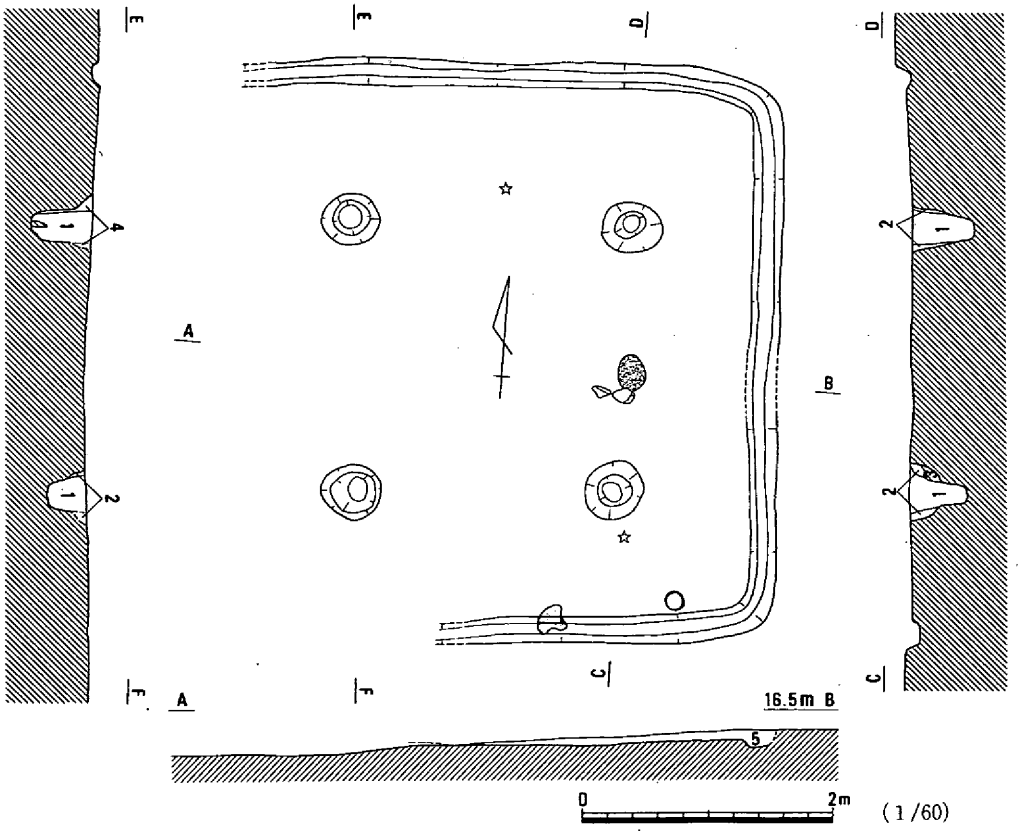
床面で柱穴が1本確認されたが、この住居に伴うか否か不明瞭であったため、掲載を割愛した。

出土遺物についても、土師器の細片がわずかに見られたにすぎない。

住居の形態から判断すると、竪穴住居21ときわめて類似し、位置的にも同時に存在した可能性が強い。　(岡田)

形状	規模(cm)		床面積(㎡)	柱穴	中央穴			方形土壙(cm)			火所	壁体溝	高床部	排水溝	時期
	長軸	短軸			形	幅(cm)	深さ(cm)	長	幅	深					
方形	不明	(373)	−	不明	不明	−	−	−	−	−	−	○	−	−	古墳前半後葉？

竪穴住居21

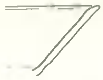


(1/60)

1　暗灰褐色粘質土
2　暗褐灰色粘質土
3　〃
(黄褐色土
ブロック含む)
4　〃
(礫含む)
5　灰褐色粘質微砂
(黄褐色粘質
微砂含む)

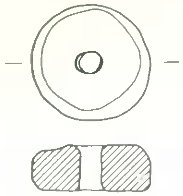
形状	規模(cm)		床面積(㎡)	柱穴	中央穴			方形土壙(cm)			火所	壁体溝	高床部	排水溝	時期
	長軸	短軸			形	幅(cm)	深さ(cm)	長	幅	深					
方形	不明	464	19.3	4/4	−	−	−	−	−	−	○	○	−	−	古墳前半後葉

82

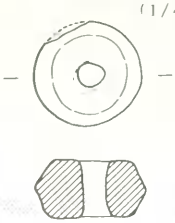


83

(1/4)



R 1



R 2

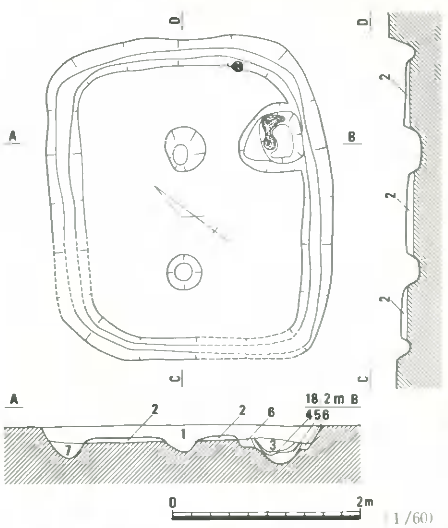
(1/2)

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
82	土師器	壺	(14.2)			良好	浅黄7.5YR8/3	細砂	摩滅顕著
83	土師器	坏				良好	にぶい黄橙10YR[illegible]		

掲載番号	器種	材質	形態	色調	最大径(mm)	最大厚(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
R 1	紡錘車	土	E 2	灰白10YR7/1	43.0	16.5	7.4	33.5	
R 2	紡錘車	土	A	にぶい黄橙10YR7/3	39.0	21.5	10.0	[illegible]	

竪穴住居21は、西側低位部を失っているが比較的規模が把握できる残存度を示す。隅丸方形の平面形を呈し、床面からは、4本の柱穴が検出されている。東側の柱穴のほぼ中間に円形に被熱した、赤色に床面が変色した部分が検出されている。一部の柱穴の中には、柱根を残すものもある。壁体溝は、住居の規模からするとやや太く深めに掘り込まれ、床面を全周するものとみられる。出土遺物には、**82・83**などの土師器のほか、**R 2**の朝鮮半島系の土製紡錘車の出土が特筆される。　(岡田)

竪穴住居22



(1/60)

1　暗灰褐色粘質土(礫多く含む)
2　淡黒灰褐色粘質土(土器片含む)
3　黒灰褐色粘質土
4　黄灰色粘質土(焼土・炭含む)
5　〃
6　黒灰褐色粘質土
7　暗灰色粘質土

84

(1/4)

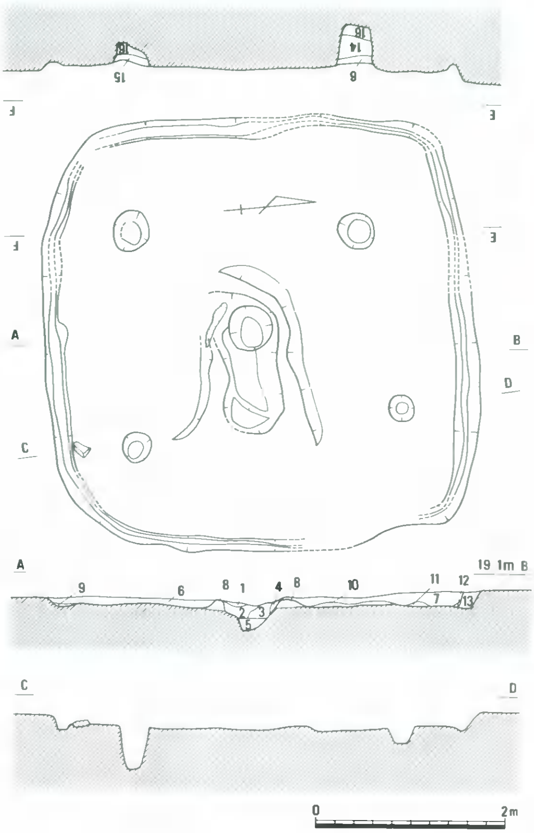
形状	規模(m)		床面積(m²)	柱穴	中央穴			方形土壙(cm)			入口	壁体溝	高床部	排水溝	時期
	長軸	短軸			形	幅(cm)	深さ(cm)	長	幅	深					
隅丸方形	41	[illegible]	[illegible]	2 2	—	—	—	[illegible]	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]	—	[illegible]	古墳前半前葉

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
84	土師器	鉢	11.4	3.5	5.4	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]残る　口縁部外面指頭圧痕

竪穴住居22は、ＫＭ２区に位置する。周辺には竪穴住居は少ない。北東方向に主軸を持った隅丸長方形の形態を呈する。規模は表に記されているが、やや小形の竪穴住居であり、検出面から床面までの深さは約15cm前後と遺存状況は良くない。床面はほぼ平坦であり、貼り床が施されているかのような土層が認められている。住居の壁は崩壊が著しく外方に広がりながら立ち上がっていくようである。壁体溝は壁に接してめぐるもので、床面からの深さは約10cmを測るが、北東隅部近くに重なって炉と思われる土壙状の窪みが設けられている。住居に伴うかどうかは不明である。床面には２本の柱穴を確認することができた。

出土遺物から古墳時代前半に比定される竪穴住居である。（二宮）

竪穴住居23



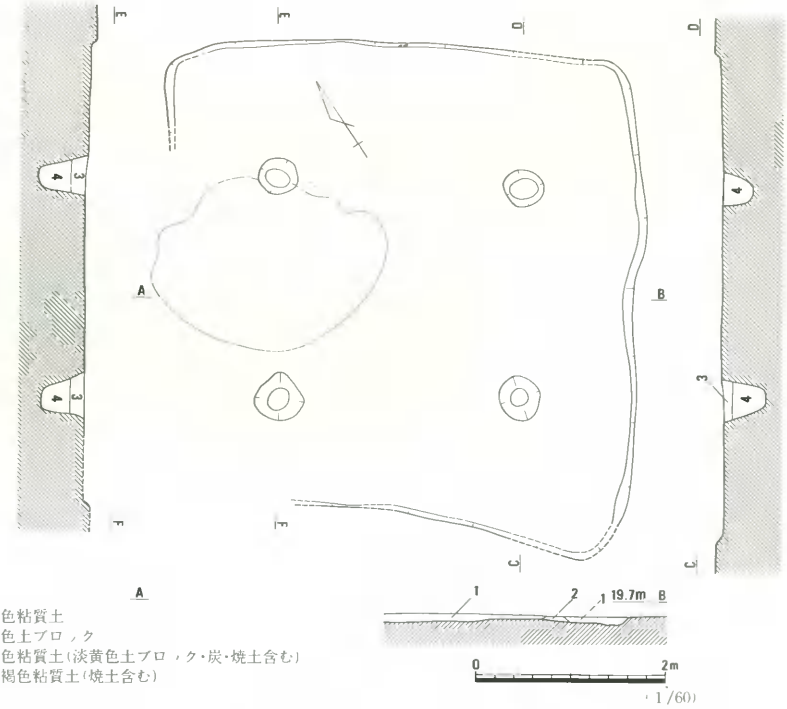
1　茶褐色粘質土
2　暗灰褐色粘質土（炭化物含む）
3　茶褐色粘質土
（１より粘性強，炭化物含む）
4　黒褐色粘質土
5　灰色粘土（炭化物含む）
6　暗褐色粘質土
7　暗褐色粘性砂質土・
黄褐色土ブロック混合
8　明黄褐色砂質土
9　灰褐色粘質土
10　暗灰褐色粘質土
11　淡暗灰褐色粘質土
12　暗灰褐色粘質土
（マンガン含む）
13　暗灰褐色土
14　暗灰褐色粘質土
（10より粘性弱）
15　暗褐色粘質土
（黄褐色土ブロック多く含む）
16　暗灰褐色粘質土
（黄褐色土ブロック多く含む）

（1/60）

形状	規模(cm)		床面積(㎡)	柱穴	中央穴			方形土壙(cm)			火所	壁体溝	高床部	排水溝	時期
	長軸	短軸			形	幅(cm)	深さ(cm)	長	幅	深					
隅丸方形	[illegible]	[illegible]4	[illegible]	[illegible]	円	[illegible]	[illegible]	－	－		－				[illegible]

竪穴住居23は、調査区の中央付近に検出した。住居の平面形は隅丸方形を呈するもので、長軸459cm、短軸454cm、検出面からの深さは15cmを測る。壁体に沿っては幅約15cmの溝を検出した。柱穴は4本を検出したことから4本柱の住居とすることができる。平面形は円形を呈するもので、直径25～40cmを測る。床面の中央には中央穴を検出した。中央穴の平面形は円形を呈するもので、長径49cm、短径46cm、床面からの深さ29cmを測る。中央穴を取り囲んでは土手状の高まりが見られる。その高まりは高さ7～8cmあり、東西に長い楕円形を呈している。住居からは図示できるものはなかったが少量の弥生土器片が出土している。住居の時期は、それらの土器からして弥生時代後期に属するものと考えられる。　(井上)

竪穴住居24

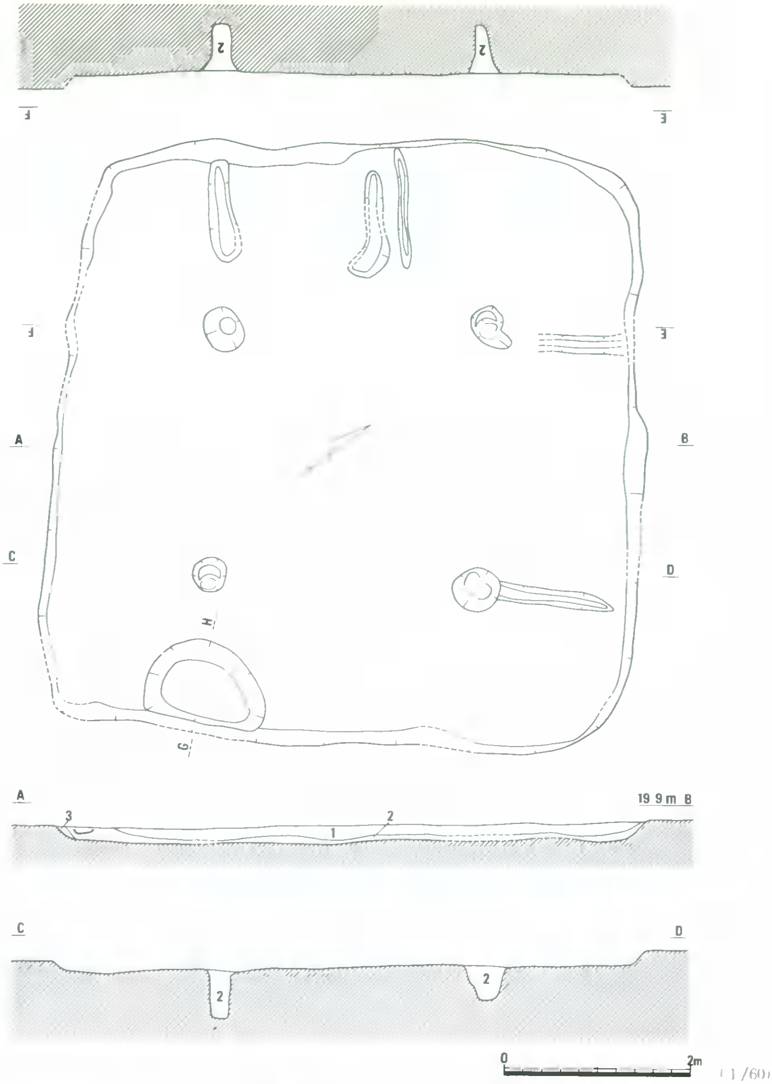


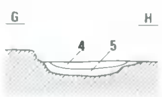
1　暗褐色粘質土
2　黄褐色土ブロック
3　暗褐色粘質土(淡黄色土ブロック・炭・焼土含む)
4　暗灰褐色粘質土(焼土含む)

形状	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	床面積 m²	柱穴	中央穴 形	中央穴 幅(cm)	中央穴 深さ(cm)	与形土壙(cm) 長	与形土壙(cm) 幅	与形土壙(cm) 深	火所	壁体溝	高床部	排水溝	時期
不整方形	495	不明	23.4	4	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	古墳前半

竪穴住居24は、竪穴住居23の東14mの位置に検出した。西側の一部は新しい住居に切られており検出できなかった。平面形は少しいびつであるが方形を呈しており、長軸495cmを測る。残存する壁体の深さは約10cmを測る。壁体に沿う溝は検出されなかった。柱穴は4本を検出し、4本柱の住居であることを示している。柱穴の平面形は円形を呈するもので、直径40～50cm、床面からの深さ30～50cmを測る。住居からの出土遺物がないため明確な時期については不明であるが古墳時代の前半に属するものと考えられる。　(井上)

竪穴住居25

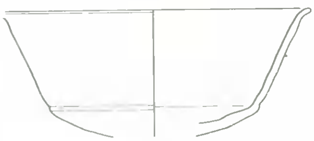




1　灰褐色粘質微砂（土器片含む）
2　暗灰褐色粘質微砂（土器片含む）
3　褐灰色粘質微砂
4　暗灰褐色粘質土（微砂・焼土含む）
5　暗褐色粘質土（炭・焼土含む）

形状	規模(cm)		床面積(m²)	柱	[illegible]			[illegible](cm)			入口	壁体溝	高床部	排水溝	時期
	長軸	短軸			形	幅(cm)	[illegible]	長	幅	深					
隅丸方形	[illegible]	[illegible]	[illegible]	4	[illegible]		[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	−	−	−		古墳後期前葉

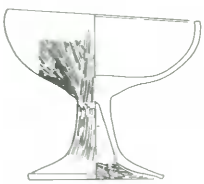
85



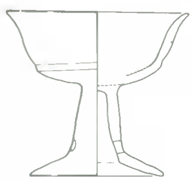
86

87

0　10cm　(1/[illegible])

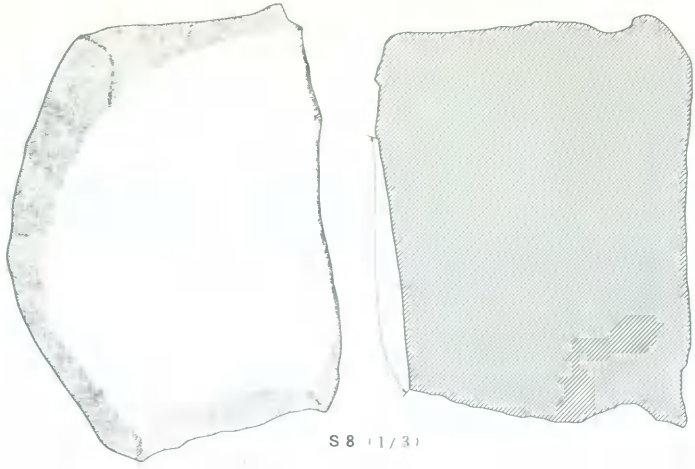


88



89

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
85	土師器	甕				良好	にぶい橙7.5YR7/4	細砂	外面[illegible]調整・内面[illegible]具痕跡[illegible]消[illegible]スス付着
86	土師器	高杯	(21.9)			良好	浅黄橙10YR8/[illegible]	細砂	[illegible]曲[illegible]上がる・口縁端部は[illegible]外[illegible]丸く納める
87	土師器	鉢	(11.5)			良好	にぶい橙5YR7/[illegible]	微砂	[illegible]外面は粗い[illegible]ケメ・口縁端部はわずか[illegible]
88	土師器	高杯	15.[illegible]	9.[illegible]	11.7	良好	橙5YR7/6	微砂	椀状[illegible]口縁端部は[illegible]成
89	土師器	高杯	(1[illegible])	9.[illegible]		[illegible]	橙[illegible]5YR6/8	微砂	杯[illegible]内[illegible]・脚[illegible]



Ｓ８（１/３）

Ｏ２（１/１）

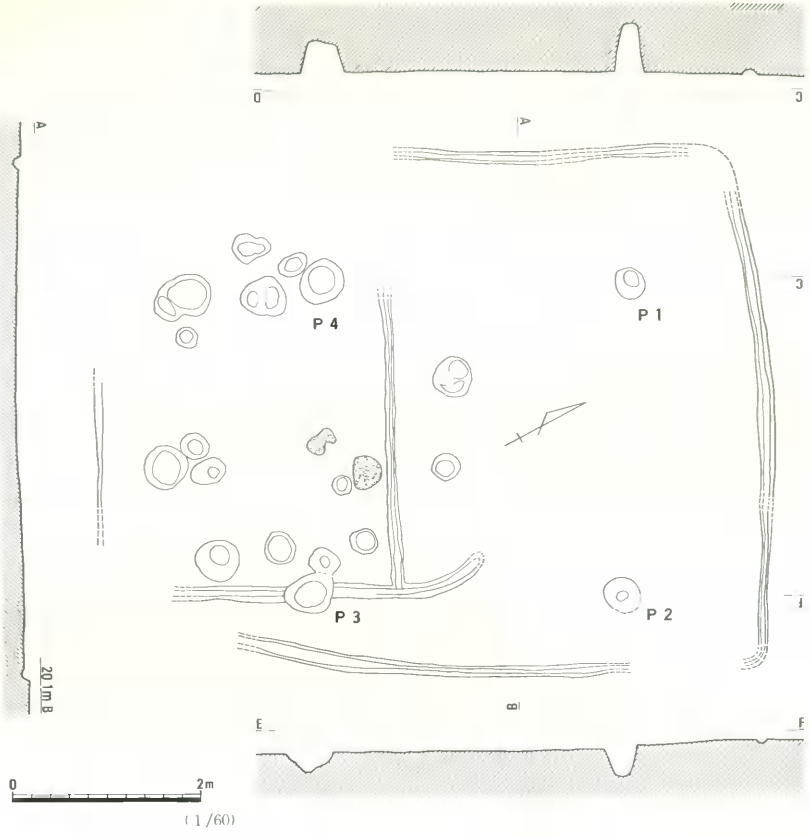
掲載番号	器種	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
Ｓ８	石皿	花崗岩	[illegible]	167	16[illegible]	12000.0[illegible]	

掲載番号	器種	材質	色調	最大長(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
Ｏ２	管玉	碧玉	[illegible]緑色	[illegible]	12.1[illegible]	[illegible]		分析

竪穴住居25は、竪穴住居24に接して東側に検出した。平面形は隅丸方形を呈するものであり、長軸632cm、短軸630cmを測る。残存する壁体の高さは約18cmを測る。壁体に沿う溝は検出されなかったが、柱穴と壁体を結ぶような溝を検出した。この溝が何を意味するか不明であるが北と東の柱穴からは壁体に向けての溝を確認した。また、西側には壁体から柱穴に向けての溝が存在する。床面はほぼ平坦で、柱穴は４本を検出した。柱穴の平面形は円形を呈するもので、直径35～55cm、深さは35～50cmを測る。床面の南東部角に近い部分に方形土壙を検出した。方形土壙は北西側は丸みを持つもので、その規模は長さ130cm、幅79cm、床面からの深さ33cmを測る。土壙の南東角の上層の住居の埋土からは**Ｏ２**に示す管玉が出土した。また、この方形土壙からはほぼ完形の高杯が出土している。

遺物としては、甕、高杯、鉢、管玉、石皿などが出土している。**85**は甕である。口縁部を欠くものであるが胴部は球形を呈している。胴部の外面にはタタキメ、内面には当て具の痕跡が見られる。**86**は高杯の杯部である。杯部は外に開きながら立ち上がり、口縁部は少し外反し端部は丸く納められる。**87**は鉢と考えられるものであるが、高杯の杯部の可能性もある。底部外面には粗いハケメが施される。**88**は方形土壙から出土した高杯である。杯部は椀状に弧を描くもので、口縁端部は面を形成する。脚部は柱状部から端部に向けて大きく開き、端部には面を持つ。柱状部から杯部にかけての外面はハケメが施される。また、柱状部の内面はヘラケズリ、裾部はハケメが施される。**89**も高杯である。杯部は**86**に似るもので底部との境に稜線が見られる。脚部は柱状部から裾部にかけて大きく折れ曲がり、柱状部の下端に３個の円孔が穿孔される。**Ｓ８**は上面に使用されたことによる磨滅の見られるもので石皿か作業台として使用されたものと考えられる。**Ｏ２**は大形の管玉で、最大長55.4mm、最大径12.1mmを測る。住居の時期は古墳時代後半期の前葉に属するものと考えられる。　（井上）

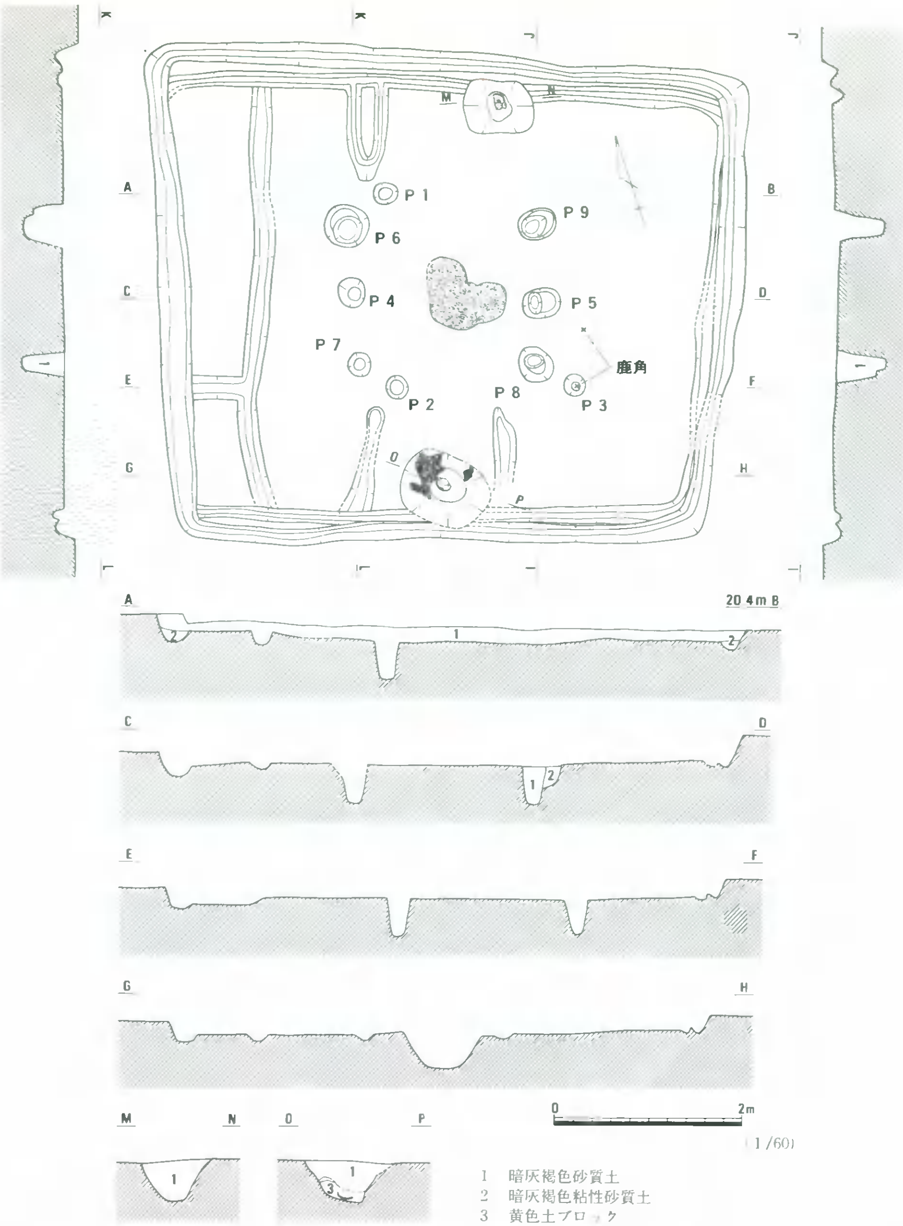
竪穴住居26・27



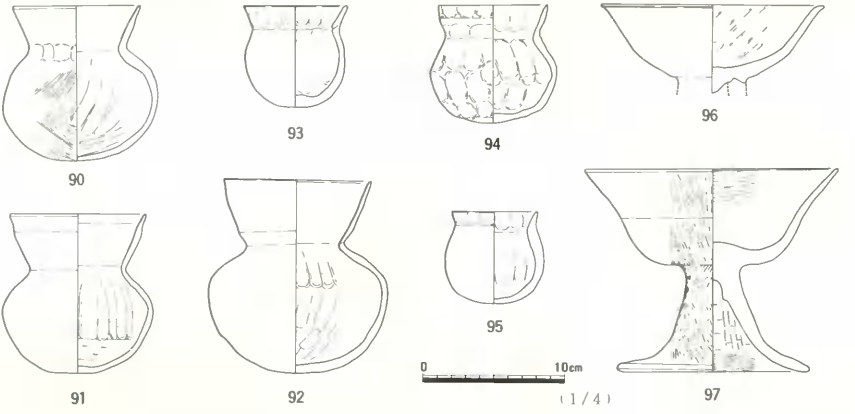
形　状	規模（cm）		床面積（m²）	柱穴	中央穴			方形土壙（cm）			火所	壁体溝	高床部	排水溝	時　期
	長軸	短軸			形	幅（cm）	深さ（cm）	長	幅	深					
26　隅丸方形	不明	不明	—	不明	不明			—	—	—	—		—	—	古墳
27　方形	不明		—	4/4	—	—	—	—	—	—			—	—	

竪穴住居26・27は、竪穴住居15と重複して検出した。全体に削平が著しいため壁体は検出されなかった。検出したのは壁体溝と柱穴である。溝の幅は13～20cmを測るものである。これらの組み合わせをみると、27は北側と西、東の三方を大きく方形に囲むものであり、方形を呈する住居と考えられ、１辺が555cmを測る。柱穴はＰ１～Ｐ４がそれに相当すると考えられる。柱穴は円形を呈し直径30cm～50cmを測る。Ｐ３・Ｐ４の中間に２か所の火所を検出した。26は、内側にＴ字に検出した溝と、南に検出した溝がそれに相当するものと考えられ、隅丸方形を呈する住居とすることができる。この住居に関係する柱穴は不明である。竪穴住居27のＰ３が竪穴住居26の溝を切っていることから竪穴住居27が新しい。住居からの出土遺物がないため明確な時期は不明であるが古墳時代に属するものと考えられる。　（井上）

竪穴住居28



形状	規模(m) 長軸	規模(m) 短軸	床面積(㎡)	柱穴	中央穴 形	中央穴 幅(m)	中央穴 深さ(m)	方形土壙(cm) 長	方形土壙(cm) 幅	方形土壙(cm) 深	火所	壁体溝	高床部	排水溝	時期
a　方形	不明	不明	21.2	3/4	—	—	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	古墳前期後葉
b　方形	不明	418	(25.6)	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	74	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]	[illegible]	[illegible]	
[illegible]　方形	[illegible]	[illegible]	[illegible]	4/4	[illegible]	—	—	[illegible]	[illegible]	11	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]	



（１/４）

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
90	土師器	壺	8.9		11.0	良好	にぶい橙7.5YR7/6	砂礫	内面ユビナデ・胴外面荒いハケメ　黒斑２か所あり
91	土師器	壺	9.5		11.3	良好		細砂	口縁部下ユビオサエ・黒斑
92	土師器	直口壺	10.3		14.8	良好	にぶい黄2.5Y6/3	砂礫	内面ユビナデ・外面磨滅
93	土師器	手づくね壺	7.3		7.2	良好	橙5YR7/8	砂礫	口縁部下ユビオサエ・胴片側黒斑
94	土師器	手づくね壺	(4.6)		8.4	良好	にぶい橙5YR6/4	微砂	二次的に火を受けている
95	土師器	手づくね壺	6.0		6.5	良好	浅黄橙7.5YR8/4	砂礫	口縁下部ユビオサエ・胴片側に黒斑
96	土師器	高杯	(15.8)			良好	明赤褐5YR5/8	細砂	椀状の杯部・筒状脚部・軸との接合部に凸部あり・二次的に火を受けている
97	土師器	高杯	17.8	14.3	14.4	良好	にぶい黄橙10YR7/4	細砂	内外面荒い[illegible]・スス付着

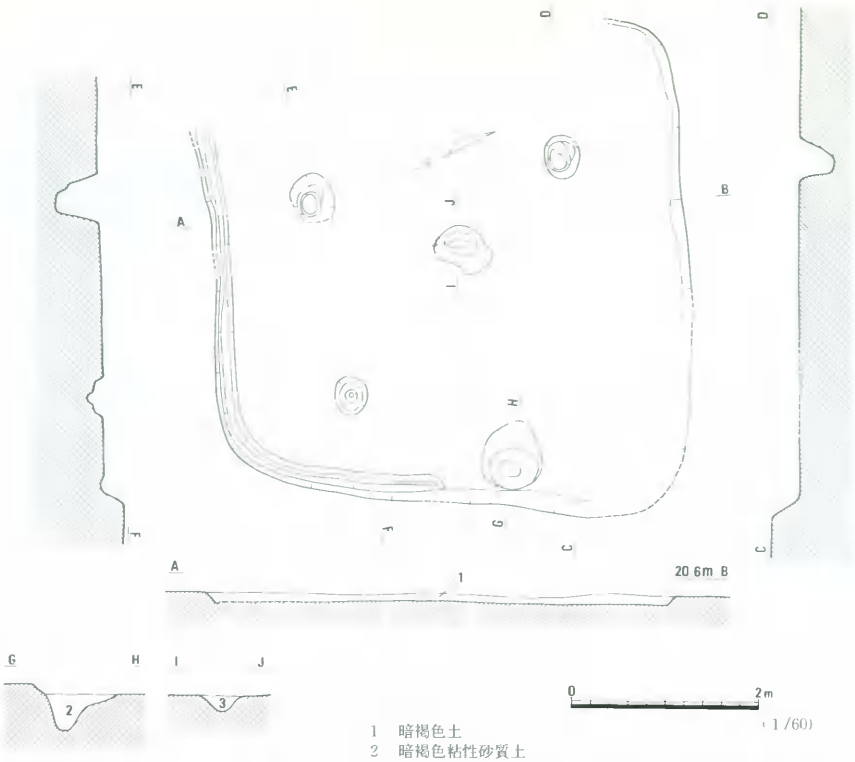
竪穴住居28は、ＭＭ５区で検出された。２回の拡張が確認され古いものからａ・ｂ・ｃとする。いずれも方形を呈するものであり、ａがＰ１～Ｐ３の配置から４本柱、ｂがＰ５・Ｐ６の２本柱、Ｃが Ｐ７～Ｐ９の４本柱を構成すると判断した。また、中央部には焼土面が確認されている。この竪穴住居で特徴的なのは、方形土壙の両側に間仕切り状の溝を持つことであり、県内ではこの形態を持つ住居は少なく、山陰の影響を色濃く持つものである。この方形土壙が南北両辺で検出されたが、同時期併存なのか、ｂ・ｃにそれぞれ１基づつ設けられているものなのかは判断できなかった。またＯ－Ｐ断面で示す方形土壙には、板状の木材が落ち込むように確認されており、蓋と理解している。

出土土器には、手づくねの壺**93～95**、丸底の壺**90～92**、高杯**96・97**がある。また、粘土化しており取り上げが不可能であったが、鹿角がある。

図示した出土遺物からこの竪穴住居の時期は古墳時代前半後葉に求められると考えている。

（大橋）

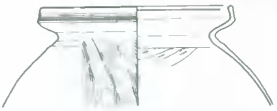
竪穴住居29



（1/60）

1　暗褐色土
2　暗褐色粘性砂質土
3　黒褐色粘性砂質土

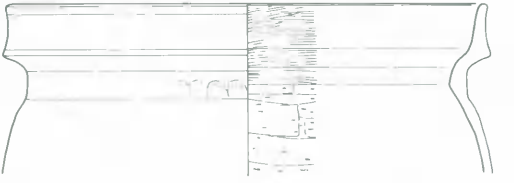
形　状	規模(cm)		床面積(m²)	柱穴	中央穴			方形土壙(m)			大所	壁体溝	高床部	排水溝	時　期
	長軸	短軸			形	幅(cm)	深さ(cm)	長	幅	深					
隅丸方形	不明	506	24.0	[illegible]	方	56×45	[illegible]	74	[illegible]	[illegible]			－	－	[illegible]



98

0　10cm

（1/4）

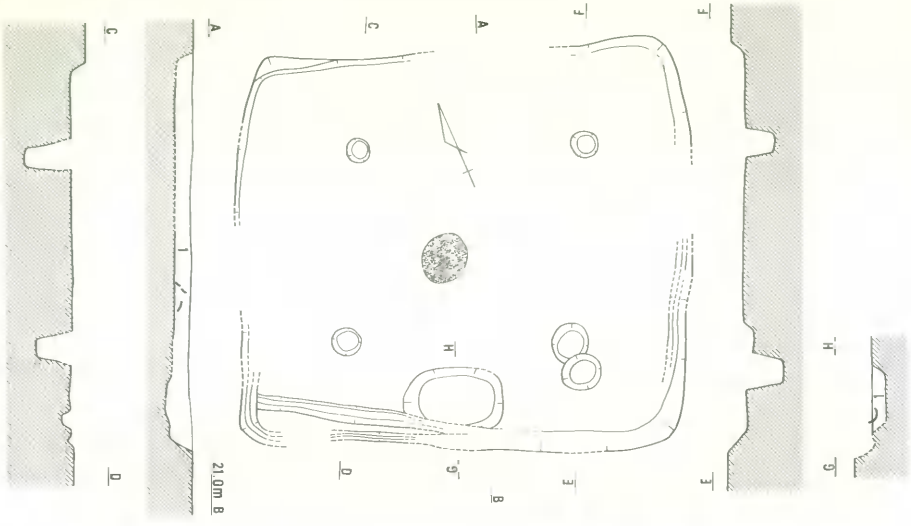


99

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
98	土師器	甕	13.3			良好	灰黄褐10YR6/2	微礫	吉備型甕
99	土師器	鉢？	13.4		[illegible]	良好	にぶい黄褐10YR[illegible]	微礫	[illegible]内側に傾く二重口縁を持つ

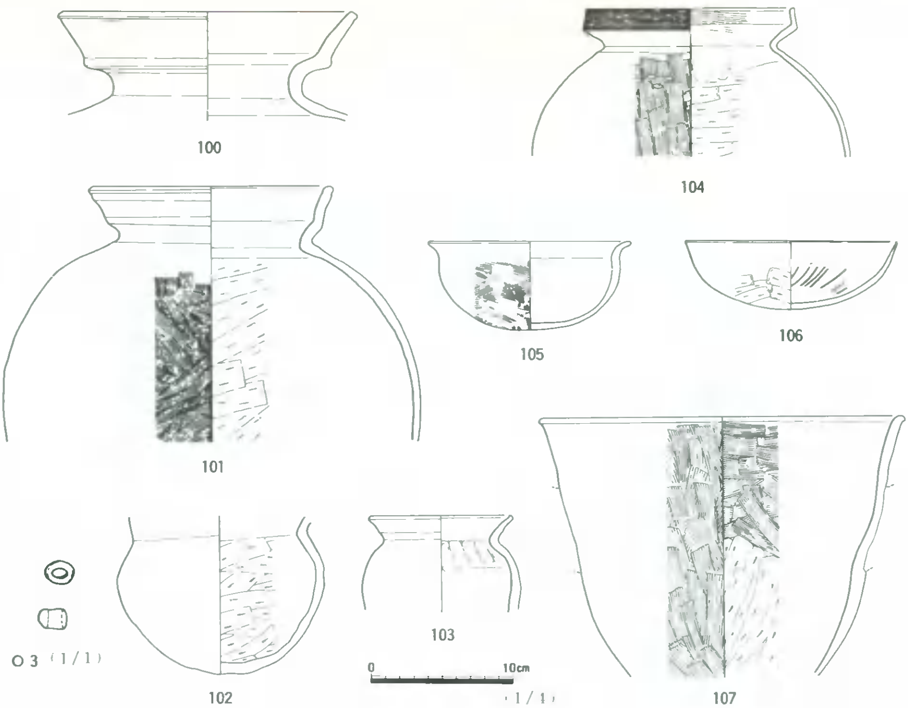
竪穴住居29は、竪穴住居28の北約12ｍで検出された。方形を呈するものであり、主柱穴は４本柱と理解されるが、うち北東の１本は、第一次調査時のトレンチで壊されているようであった。東辺中央に方形土壙が設けられている。出土遺物は少ないものの、**98**の吉備型甕と住居の形態からみて、この竪穴住居の時期は古墳時代前半前葉段階であると考えることが可能と思われる。　（大橋）

竪穴住居30



1　暗茶褐色土(礫含む)　　0　2m　(1/60)

形状	規模(m) 長軸	規模(m) 短軸	床面積(m²)	柱穴	中央ピット 形	中央ピット 幅(cm)	中央ピット 深(cm)	方形土壙(cm) 長	方形土壙(cm) 幅	方形土壙(cm) 深	火所	壁体溝	高床部	排水溝	時期
方形	(482)	(435)	(17.6)	4/4	—	—	—	106	65	13			—	—	古墳前半前葉 中葉



掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
100	土師器	甕	(20.2)			良好	浅黄橙7.5YR8/4	細砂	口縁端部は鈍い面を持つ [illegible] 次的に火を受けている
101	土師器	壺	16.6			良好	赤褐5YR4/6	細砂	にぶい [illegible] 重口縁
102	土師器	壺				やや不良	にぶい褐7.5YR6/3	細礫	[illegible] 次的に火を受けている
103	土師器	壺	(9.4)			良好	浅黄橙10YR8/3	微砂	外面摩滅・内面に粘土紐接続痕残る
104	土師器	甕	14.6			良好	にぶい黄橙10YR7/[illegible]	微砂	吉備型甕・[illegible]角に配された米粒状刺突
105	土師器	鉢	14.1		[illegible]	良好	橙5YR7/6	微砂	内面ヘラミガキか？口縁部を [illegible] 変形
106	土師器	鉢	14.8		[illegible]	良好	橙5YR6/6	精良	内面に暗文様のヘラミガキ
107	土師器	甑	25.4			良好	橙5YR7/6	細砂	把手欠損・端部はわずかに外へつまみ出す

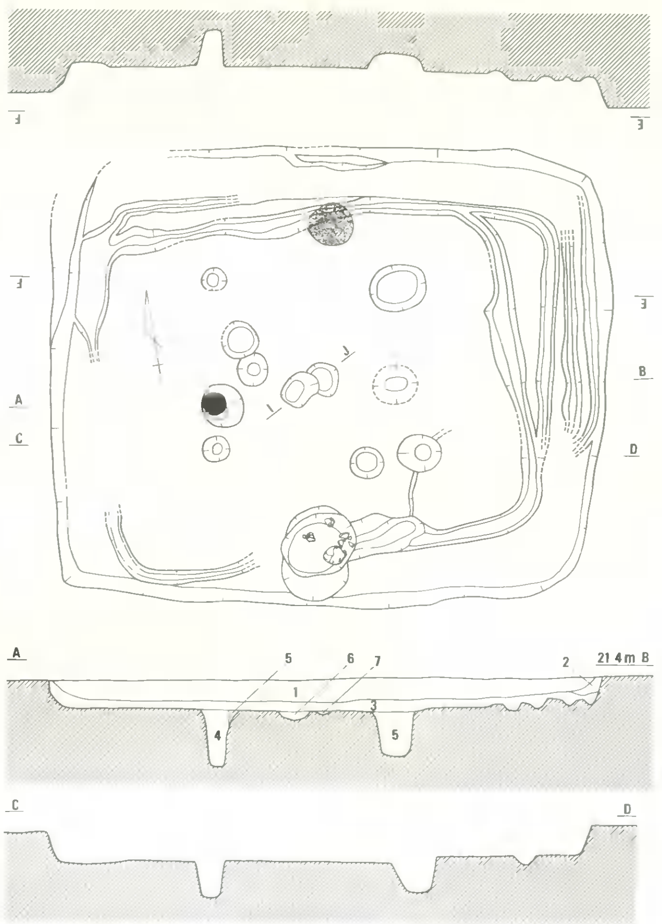
掲載番号	器種	材質	色調	最大長（mm）	最大径（mm）	孔径（mm）	重量（g）	備考
O 3	小玉	ガラス	半透明青	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	

竪穴住居30は、竪穴住居29の東約５ｍに位置する。方形を呈し、主柱穴は４本柱をなす。中央には火所が確認されている。この竪穴住居も遺存状況は悪く、壁体溝も部分的にしか確認できていない。また、礫層上に床面があり、不正確な点があることも否めない。南辺側には壁体溝と思われる溝が２本確認され、建て替えの状況を示した。またこの辺中央に方形土壙が検出された。

図示した出土遺物のうち、**104**の吉備型甕には三角形に配された米粒状刺突文が認められた。また、**107**の甑はこのほかの土器とは時期が異なり混入と思われる。土器以外には**O 3**のガラス玉がある。

この竪穴住居の時期は、出土遺物にやや時期のばらつきがあることから、判断に苦しむが、古墳時代前半前葉～中葉ととらえている。　（大橋）

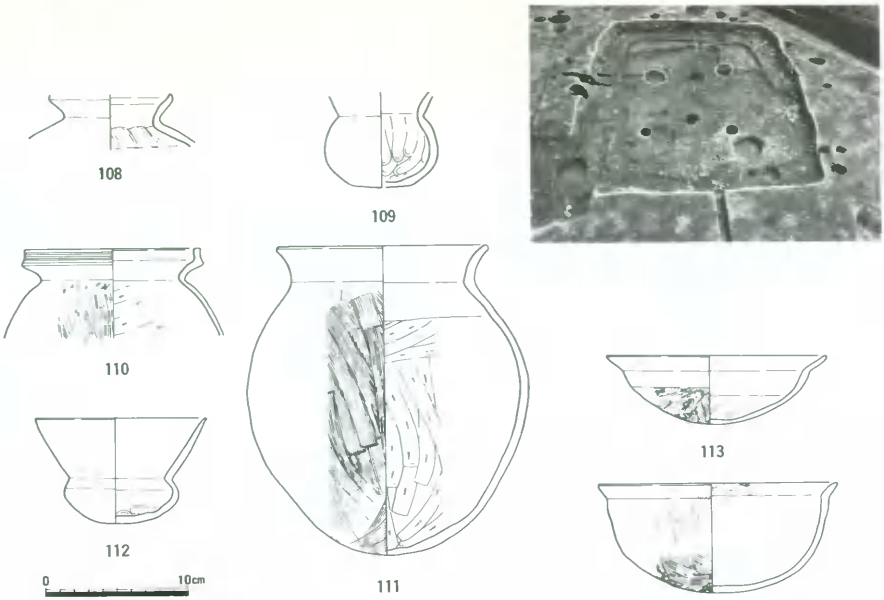
竪穴住居31



1　暗黄褐色土（炭・焼土粒含む）
2　暗黄灰褐色土
3　暗茶褐色土（炭・焼土含む）
4　黒茶色土
5　茶褐色土
6　〃　（炭粒・焼土塊含む）
7　〃　（炭・焼土粒含む）

0　2m
（1/60）

形状	規模(m)		床面積	[illegible]	中央[illegible]			[illegible]			[illegible]	壁体溝	[illegible]	排水溝	時期
	長軸	短軸			形	幅(cm)	[illegible]	[illegible]	幅	[illegible]					
a 方形	24[illegible]	不明	–	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明				–	
b 隅丸長方形	[illegible]	[illegible]	1[illegible].4	[illegible].2	円	[illegible]	[illegible]	[illegible]	43	[illegible]				–	古墳前半中葉
c 長方形	[illegible]	[illegible]	[illegible]	1.1	楕円	[illegible]	11	8	[illegible]	[illegible]				–	



（1/4）

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
108	土師器	壺				良好	浅黄橙7.5YR8/4	細砂	肩部里斑・口縁端部欠損
109	土師器	小形壺				良好	橙7.5YR6/6	細砂	内面強いユビナデ・底部は平底気味
110	土師器	甕	12.1			良好	橙7.5YR7/6	細砂	吉備型甕
111	土師器	甕	14.6		22.1	良好	橙7.5YR7/6	細砂	内外面ヌス付着
112	土師器	小形丸底壺	11.85		7.6	良好	にぶい橙7.5Y7/4	細砂	器壁磨滅・底部は一ラケズリ
113	土師器	鉢	15.5		4.9	良好	にぶい黄橙10YR7/3	細砂	屈曲して外方へ広がる口縁部・外面ハケ[illegible]
114	土師器	鉢	[illegible]		7.8	良好	橙5YR6/[illegible]	砂礫	やや深い鉢部から屈曲し[illegible]・口縁部

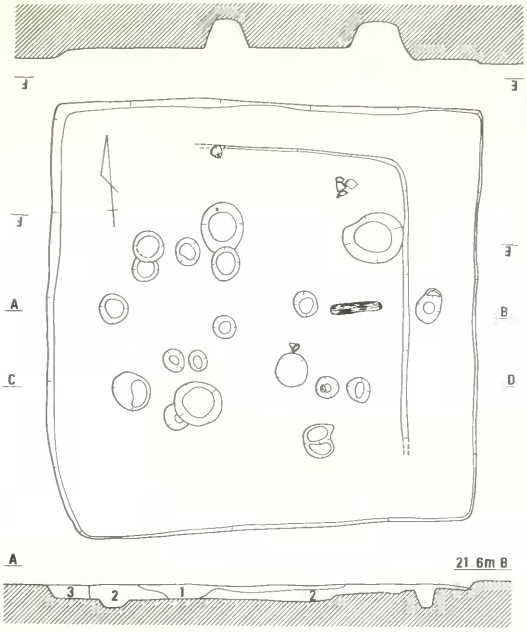
竪穴住居31は、暗灰褐色土包含層除去後の礫層上面で検出したもので、M・N21グリッド(MM６区)に位置する。後述の掘立柱建物35・36と重複し、それらよりも古い。また、床面で検出した壁体溝や柱穴のあり方から、数回の建て替えや拡張が考えられる。

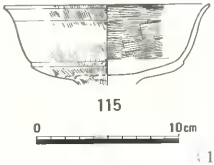
竪穴住居31ｂは、建て替え後の竪穴住居31ｃ内におさまるもので、残存する壁体溝から長軸を東西にとる隅丸長方形の平面形と考えられる。柱は長軸上の２本で、Ａ－Ｂ断面の土層４・５がこれに該当する。また柱穴間に中央穴を、南辺中央の壁体溝に接して方形土壙をそれぞれ配している。

竪穴住居31ｃは、主柱を４本とし、竪穴住居31ｂと軸線の若干異なる長方形の平面形をとり、壁体の残りは約35cmと比較的良好である。また、中央穴と方形土壙については、竪穴住居31ｂのそれらとほぼ同位置に配している。壁体溝は北辺と東辺で確認し、壁体とは40cm離れている。さらにこの間は黄褐色土塊を充填し、５～７cmの高床部としていた。住居の床面に被熱面はみられなかったが、北辺中央の壁体近くで50×45cmの範囲に置かれた焼土塊を検出している。

出土遺物には、土師器の壺、甕、小形丸底壺、鉢があり、おもに竪穴住居31ｃの方形土壙から出土している。これらの土器の特徴から、竪穴住居31ｃの時期は古墳時代中期中葉であり、竪穴住居31ｂもそれ以前の近接する時期と考えられる。　（高田）

竪穴住居32





(1/4)

1　黒褐色土(礫含む)
2　黒褐色土
3　茶褐色土

0　2m　(1/60)

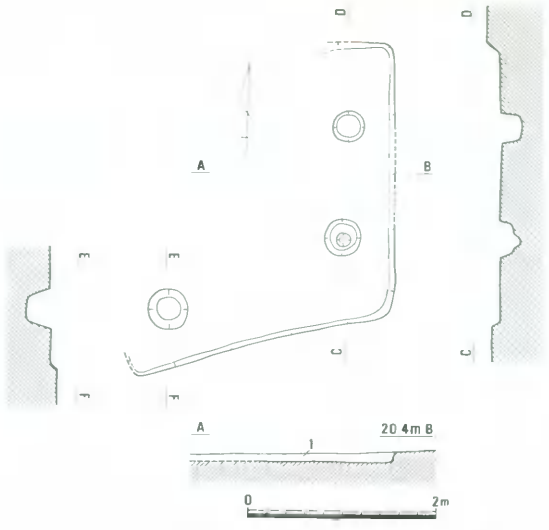
形　状	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	床面積(m²)	柱穴	中央穴 形	中央穴 幅(cm)	中央穴 深さ(cm)	方形土壙(cm) 長	方形土壙(cm) 幅	方形土壙(cm) 深	火所	壁体溝	高床部	排水溝	時　期
方形	456	453	19.3	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	古墳後半中葉

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
115	土師器	高杯	(14.4)			良好	橙2.5YR6/8	細砂	杯内外面ハケメ・屈曲部にアクセントを持ち、口縁部は外反し丸く納める・接合部はねじ込み・裏母

竪穴住居32は、N22グリッド(MM6区)に位置する。平面形は辺をほぼ南北に揃える方形で、規模は南北456cm、東西453cmを測る。住居の残存状態は良くなく、壁の立ち上がりは10cm前後を残すのみである。住居内には壁に接して幅50～70cmの高床部がめぐるが、南側と西側では明瞭でない。高床部の内側には長方形に柱穴が4本配されているが、南西の柱穴がやや外側に位置するため、少しいびつになっている。

遺物は土師器がわずかに出土した。**115**は高杯で、内外面はハケメで仕上げる。杯部と脚柱部の接合はねじ込みである。土器の時期は古墳時代の後半、およそ5世紀代の後半と考えられる。(平井)

竪穴住居33



1　黒灰褐色土（小礫含む）　　（1/60）

形状	規模（cm）		床面積（m）	柱穴	中央穴			方形土壙（cm）			火所	壁体溝	高床部	排水溝	時期
	長軸	短軸			形	幅（cm）	深さ（cm）	長	幅	深					
不整方形	不明	不明	-	1	不明	不明	不明	-	-	-	-	-	-	-	古墳後半末葉

竪穴住居33の遺構は、発掘調査を実施した範囲の中央よりやや北東方向に寄った地点の北西側境界部分に位置し、遺構全体の約半分は調査することができなかった。近接した周辺に竪穴住居はなく、南側約30ｍの離れた地点になってやっと方形を呈する竪穴住居29や竪穴住居30が検出された。

この遺構を竪穴住居とするには、ためらいが感じられた。というのは、３本の柱穴を検出したものの、その位置関係が不揃いであるだけでなく、壁体についても東側のものに対して南側に検出した壁体は鈍角に開いてしまっていたからである。

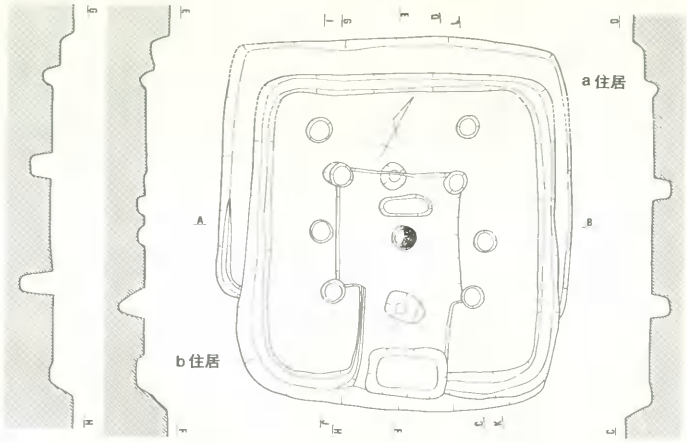
このような状態であったから、東側の壁体に沿って並ぶ２本の柱穴間の距離は約120cmであったにもかかわらず、南側の壁体に沿った柱穴間は約200cmとなり、前者より間が長いだけでなく壁体と柱穴との間隔も異なっていた。

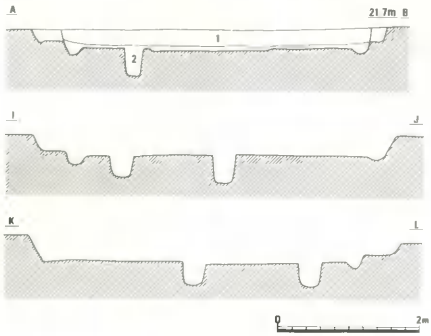
しかしながら、検出面からの深さは約10cmと極めて浅かったものの、内部には小礫を含む黒灰褐色土が堆積して須恵器や土師器の土器片も認められ、３本の柱穴の大きさもほぼ同じで底面のレベルが揃っていたから、方形を意図した不整形の竪穴住居として取り扱うことにした。

調査を行うのが可能であった範囲の遺構内を精査したが、中央穴や方形土壙は存在しなかった。

出土遺物はいずれも小片の土器で図化することができなかったが、おそらく古墳時代後半末葉の６世紀後半の時期を推定している。　　（福田）

竪穴住居34

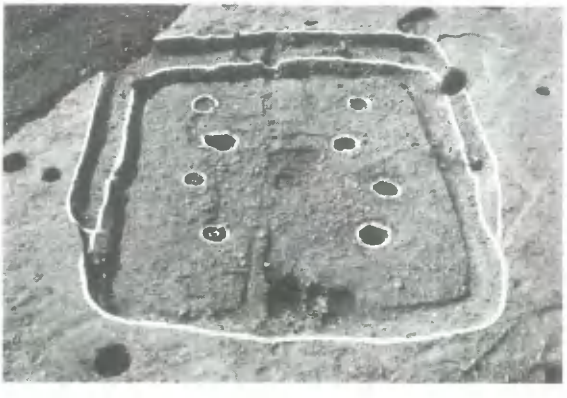


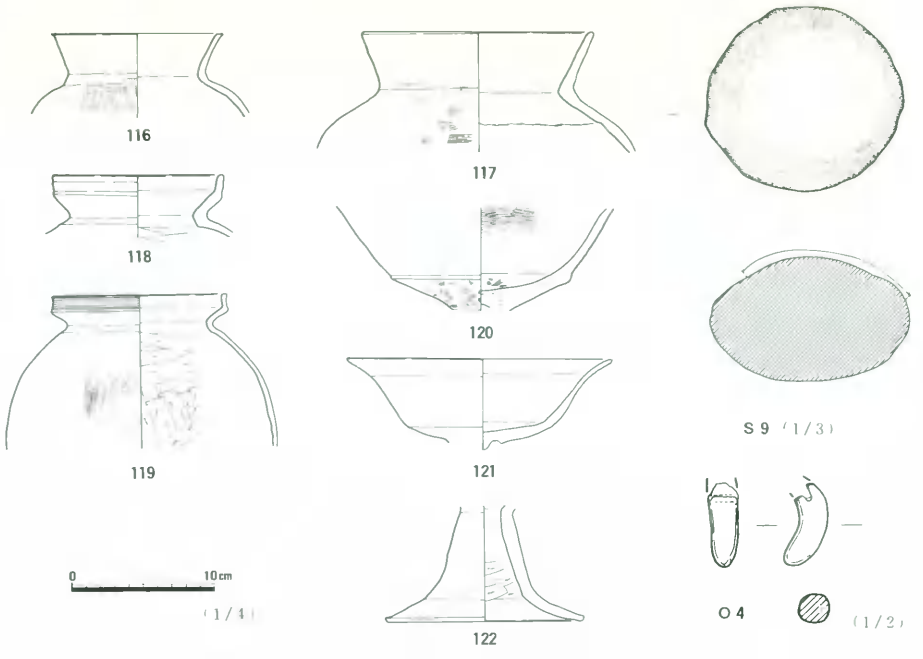


1　暗茶褐色粘質土(礫含む)
2　黒褐色粘質土(礫含む)

(1/80)

形　状	規模(cm)		床面積(㎡)	柱穴	中央穴			方形土壙(cm)			火所	壁体溝	高床部	排水溝	時　期
	長軸	短軸			形	幅(cm)	深さ(cm)	長	幅	深					
a　隅丸方形	449	不明	[illegible]	4.4	円	40×35	16	[illegible]	41	49	—	[illegible]	不明	—	古墳前半中葉
b　隅丸方形	477	432	9.4	4.4	円	34×32	14	107	67	14	—	[illegible]	四方	—	





掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
116	土師器	壺	11.8			良好	橙5YR7/6	微砂	胴上半内面に粘土接合痕・黒斑あり
117	土師器	壺	16.0			良好	にぶい黄橙10YR6/3	細砂	口縁端部は上面に平坦面を持つ
118	土師器	甕	11.8			良好	にぶい黄橙10YR7/4	砂礫	二重口縁の外面は強いヨコナデ
119	土師器	甕	12.0			良好	浅黄橙7.5YR8/6	細砂	古備型甕・外面スス付着
120	土師器	高杯			7.3	良好	浅黄2.5Y7/3	細砂	接合部差し込み・一次的に火を受けている
121	土師器	高杯	(18.4)			良好	赤橙10R6/8	砂礫	杯部は大きく外反する・一次的に火を受けている
122	土師器	高杯		[illegible]		良好	にぶい黄橙10YR7/[illegible]	砂礫	雲母赤色粒多く含む

掲載番号	器種	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
S 9	磨石	閃緑岩	長径105		66	865.00	

掲載番号	器種	材質	色調	最大長(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
O 4	勾玉	土	にぶい黄橙	[illegible]	14.90	11.[illegible]	4.[illegible]	

竪穴住居34は、竪穴住居17に近接して検出された。斎富遺跡の中では比較的遺存状況も良好であり２軒の重複が確認された。古いものをａ、新しいものをｂとして、以下記述する。

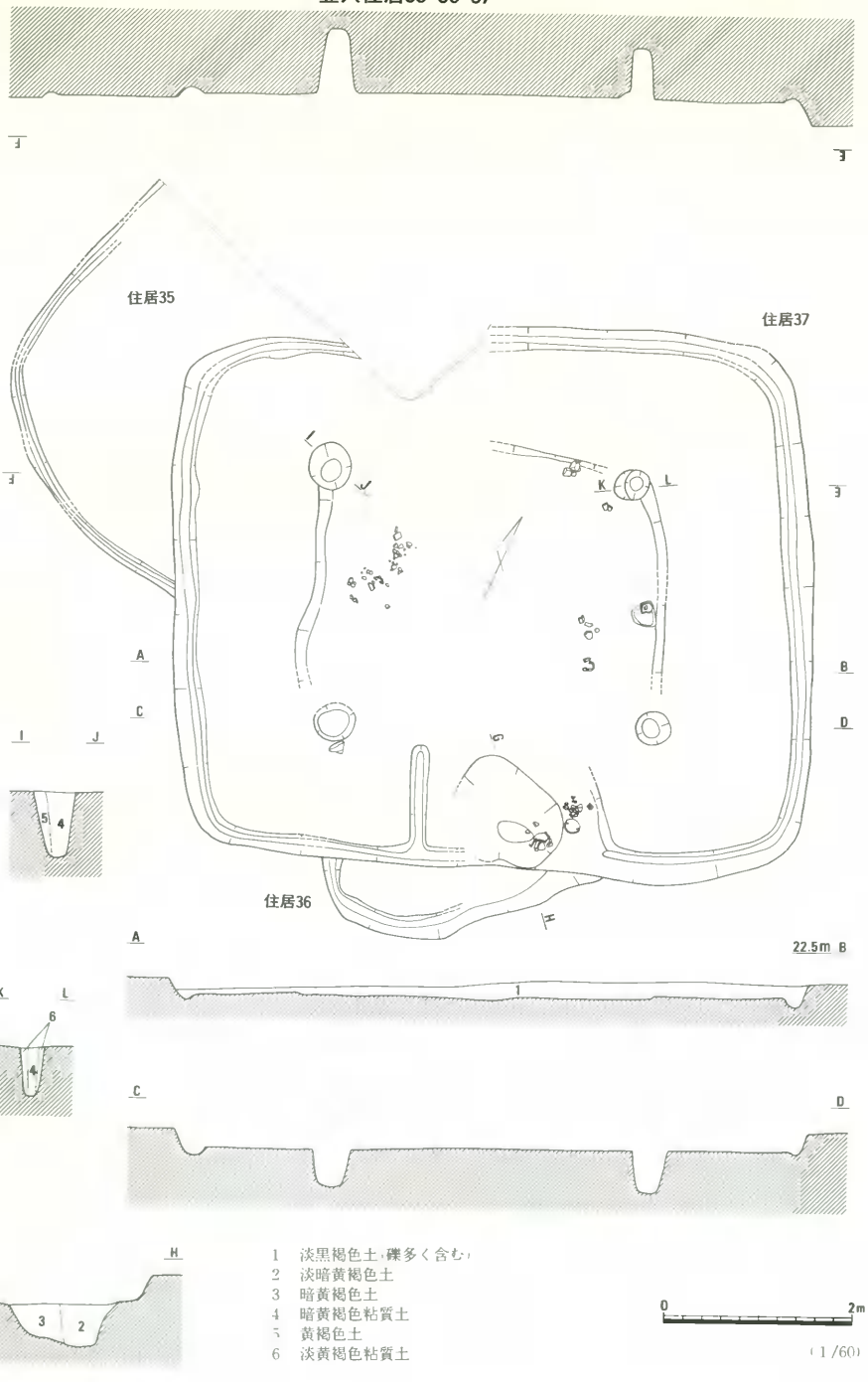
竪穴住居34ａはその床面のほとんどを竪穴住居34ｂに壊されている。主柱穴は４本であり中央穴、方形土壙の存在も確認された。構造的には建て替えた34ｂと同様のものと思われる。

竪穴住居34ｂは方形を呈するものであり、四方に幅100cmほどの高床部を設け、南辺中央部に方形土壙を配している。中央穴は円形であり、火を受けていた。またこの中央穴の北側には、灰の掻き出しと思われる長楕円を呈する浅い窪みが確認された。

遺物は、**121・122**の高杯が床面直上で出土している。また土製の勾玉がある。

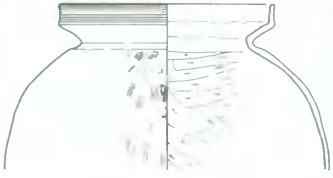
図示した出土遺物から、この竪穴住居の時期は古墳時代前半中葉と理解される。　　（大橋）

竪穴住居35・36・37

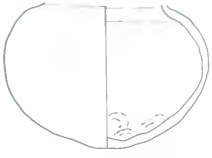

住居35
住居37
住居36
22.5m
1　淡黒褐色土（礫多く含む）
2　淡暗黄褐色土
3　暗黄褐色土
4　暗黄褐色粘質土
5　黄褐色土
6　淡黄褐色粘質土
0
2m
（1/60）

番号	形状	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	床面積(㎡)	柱穴	中央			方形土壙(cm)			大内	壁体溝	高床部	排水溝	時期
						有	幅(cm)	深(cm)	長	幅	深					
35	隅丸方形	不明	不明		不明											
36	隅丸方形?	不明	不明													古墳時代中葉
37	方形	678	578	34.3	4.1				131	82	45					

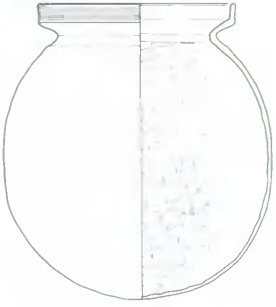
123



125

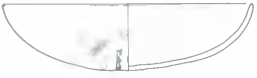


124



126

127



128

0　10cm

(1/4)

掲載番号	種別	器種	法量 口径	法量 底径	法量 器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
123	土師器	壺	9.8		11.0	良好	10YR8/3 浅黄橙	砂礫	外面ヘラ削り・内面ヘラ削り・平底
124	土師器	壺				良好	橙 7.5YR6/6	砂礫	球形の体部に押し出し気味の口縁・外面煤付着
125	土師器	甕	14.0			良好	10YR8/4 浅黄橙	砂礫	古墳型甕・器壁厚成・平底
126	土師器	甕	15.4		29.2	良好	橙 5YR7/6	砂礫	古墳型甕・胴下半に最大径部を有す　器壁厚成
127	土師器	鉢	15.7		4.7	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	微砂	丸い体部・内面に放射状[illegible]・口縁・端文
128	土師器	鉢	17.0		4.7	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	砂礫	丸い体部・外面[illegible]・内面[illegible]・器壁厚成・平底?

竪穴住居35・36・37は、ＭＭ４区に位置し、竪穴住居35・36は37に切られている。さらに37は竪穴住居70に切られている。

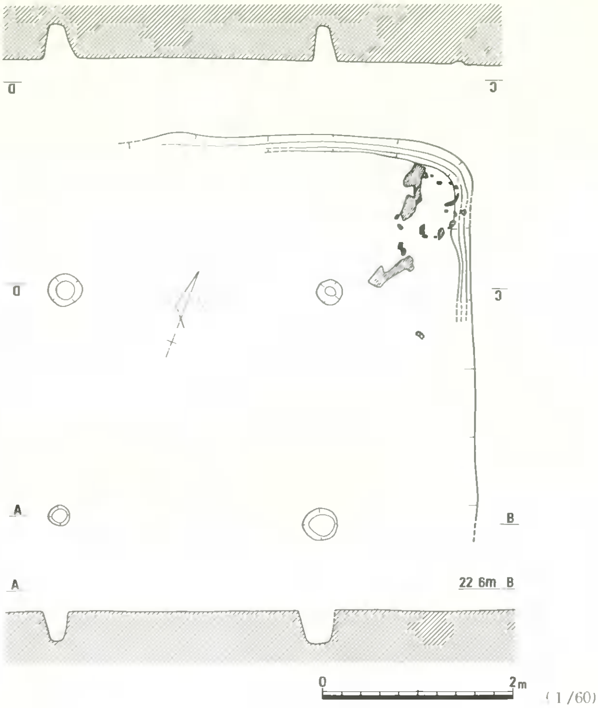
竪穴住居35は、隅丸方形状を呈し西南部約１/４を検出しているが全体の規模は、竪穴住居37に切られ不明である。幅10～15cmの壁体溝を持つ。

竪穴住居36は、住居かどうか不明であるが、壁体溝状のものが南西隅に認められたことから住居と考えた。ほとんどが37に切られ南西隅１/10程が検出できた。

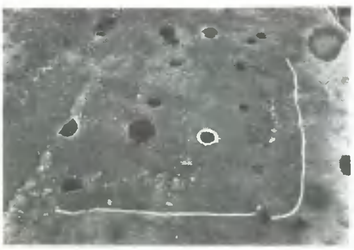
竪穴住居37は、東西678cm、南北578cmで１ｍ程東西に長い長方形をなす。竪穴住居70に北辺の一部が切られている。柱穴は４本で、東西が330～340cm、南北が190～215cmを測る。柱穴間はわずかに低くなる。南側中央部に90×130cmの方形土壙を持つ。床面から約50cmの深さである。

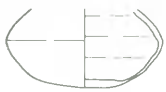
住居内からの出土遺物は、直口壺**123・124**、甕**125・126**、鉢**127・128**などが出土している。これら遺物の特徴からこの住居の時期は、亀川上層期に含まれ古墳時代前半中葉と考えられる。（伊藤）

竪穴住居38



形状	規模(cm)		床面積(m²)	柱穴	中央穴			方形土壙(cm)			火所	壁体溝	高床部	排水溝	時期
	長軸	短軸			形	幅(cm)	深さ(cm)	長	幅	深					
方形	不明	不明	－	4/4	－	－	－	－	－	－	－	○	－	－	古墳前半




129

0　10cm　（1/4）

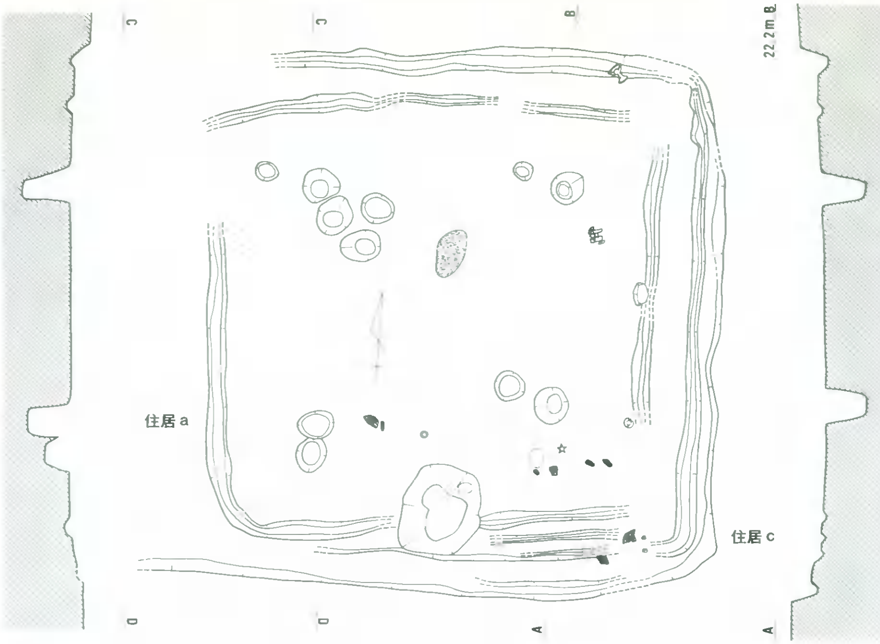
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
129	土師器	壺		1.9		良好	橙5YR6/8	精良	そろばん玉様の体部・[illegible]・[illegible]

竪穴住居38は、ＭＭ４区に位置し竪穴住居37の南東近くにある。

平面形態は、北コーナー部分の二辺の一部が検出されただけであるが方形を呈するものと想定される。壁体溝も認められ、柱穴は４本柱が確認されている。北コーナー部分に炭化材の認められるところがあるが、前述のように遺存状態が悪く火災住居かどうかについては不詳である。

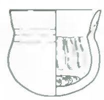
出土遺物は、土師器が認められている。　（下澤）

竪穴住居39



（1/60）

形状	規模(cm) 長軸	短軸	床面積(m²)	柱穴	中央穴 形	幅(cm)	深さ(cm)	方形土壙(cm) 長	幅	深	火所	壁体溝	高床部	カマド	時期
a　方形	不明	580	21.6	4/4	—	—	—	?	?	[illegible]	—	[illegible]	—	—	古墳前半後葉
b　方形	不明	不明	—	1/1	—	—	—	90	72	[illegible]	—	[illegible]	—	—	
c　方形	471	465	—	4/4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	



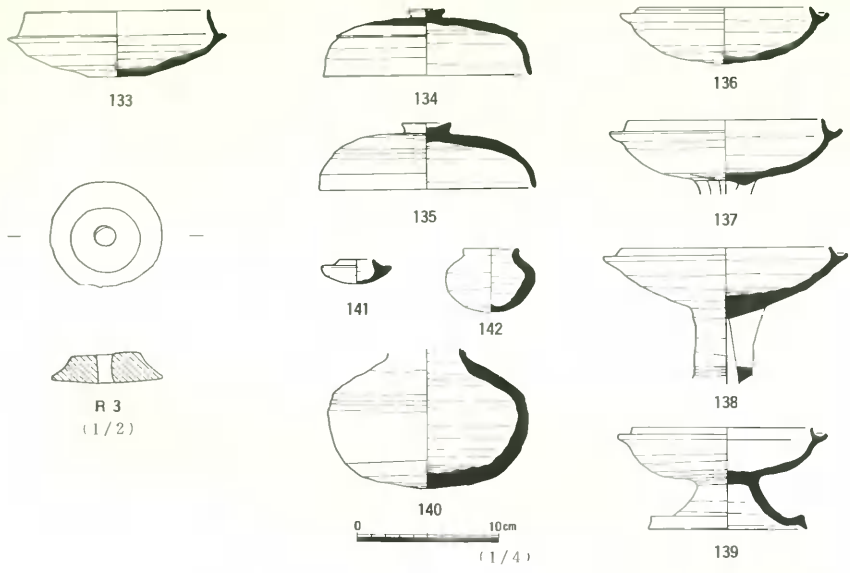
130

131

132

（1/4）

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
130	土師器	小形壺	6.4		6.1	良好	にぶい橙7.5YR7/4	細砂	ユビオサエによる荒い調整
131	土師器	手づくね	3.3		3.0	良好	明褐7.5YR5/6	細砂	ユビオサエによる荒い調整
132	土師器	高杯	17.[illegible]	脚12.[illegible]	15.[illegible]	良好	橙5YR6/6	微砂	杯部上半外面稜成[illegible]



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
133	須恵器	杯身	13.0		4.7	良好	(内・外・断)灰N5/	細砂	立ち上がり部ハリツケ・端部は丸く納める・杯内面ユビオサエ状の押圧痕・ロクロ右回り
134	須恵器	蓋	14.6		4.7	良好	(内)灰10Y6/1　(外)灰褐5YR5/2 (断)にぶい橙5YR6/4	細砂	天井部外面カキメ・稜部分はつまみ出して成形・端部はわずかに外反し丸く納める・内面仕上げナデ
135	須恵器	蓋	15.2	4.7		やや不良	(内・外・断)灰褐5YR4/2	砂礫	稜部は不明瞭・端部は丸く納める
136	須恵器	杯身	12.0	4.0		良好	(内・外・断)灰N5/	細砂	立ち上がり部折り込みで内傾し低い・底部外面ナデ調整
137	須恵器	有蓋高杯	13.6		5.3	やや不良	(内)灰白5Y7/1　(外)灰白5Y7/1 (断)橙5YR7/6	微砂	立ち上がり部折り込み・杯内面仕上げナデ・３方透かし孔
138	須恵器	有蓋高杯	14.6		9.7	良好	(内)灰N5/　(外)灰N5/ (断)暗灰N3/	砂礫	長脚２方２段透かし孔・杯立ち上がり部折り込み
139	須恵器	有蓋高杯	12.7	11.0	7.3	良	(内・外・断)灰5Y6/1	砂礫	短脚・杯立ち上がり部折り込み・内面に当て具痕跡・脚端部は下方へ折り曲げて外面を形成
140	須恵器	壺				やや不良	(内)にぶい黄橙10YR6/3　(外)黄灰2.5Y6/1　(断)黄灰2.5Y6/1	砂礫	体部外面下半ヘラケズリ・内面ロクロナデ・底部内面不規則な押圧痕
141	須恵器	短頸壺	3.8		4.5	良好	(内・外・断)灰N6/	細砂	ミニチュア品・体部外面ヘラケズリ後ナデ調整
141	須恵器	杯	2.4		1.7	良好	(内・外・断)灰N5/	細砂	ミニチュア品・ナデ成形
142	須恵器	短頸壺	3.8		4.5	良好	(内・外・断)灰N6/	細砂	ミニチュア品・体部外面ヘラケズリ後ナデ調整

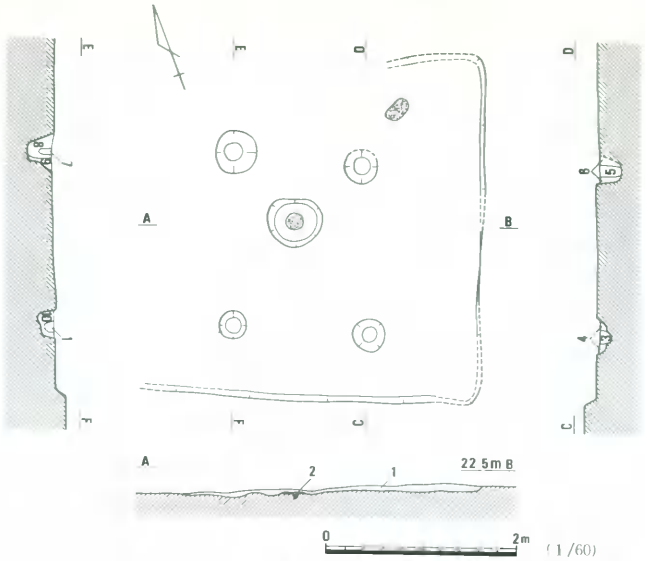
掲載番号	器種	材質	形態	色調	最大径(mm)	最大厚(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
R 3	紡錘車	滑石	－		[illegible]径40	[illegible]	[illegible]	19.1	

竪穴住居39ａ・ｂ・ｃは、ＭＭ４区に位置し、竪穴住居69の南にあたる。

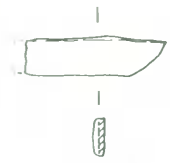
竪穴住居39ａは、壁体溝の一部と南辺が不明である。ｂも同様である。ｃは壁体溝が認められている。平面形態は、いずれも方形を呈し４本柱を構成するとものと考えられるが、個々の竪穴住居に伴うかについては明らかにすることができなかった。方形土壙は、南壁中央部分に設けられ当初ｂに伴うものと考えていたのである。しかしながら、炭化材および焼土片がｃの床面内だけでなくａの部分においても認められたことから、ｃの時期は不明であるがａにおいても機能していたと考えるのが妥当であろう。なお、南壁のｂとｃの間に壁体溝が認められるが詳細は不明である。

出土遺物は、**130～132**の土師器と紡錘車でいずれも床面からである。これ以外の**133～142**は、埋土中および柱穴で当竪穴住居には伴わないと考えている。　（下澤）

竪穴住居40



（1/60）



M４（1/2）

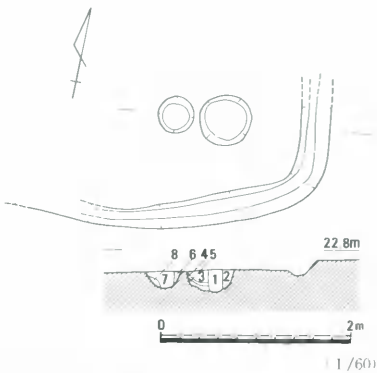
1　黒褐色土
2　赤褐色土（焼土）
3　暗褐色土
4　暗黄褐色土
5　暗灰褐色土
6　暗灰色土（礫含む）
7　暗黄褐色粘質土
8　黒褐色粘質土
9　淡灰色土（礫含む）
10　黒褐色土・黄褐色土混合

形状	規模（cm）		床面積（m）	柱穴	中央穴			方形土壙（cm）			火所	壁体溝	高床部	カマド	時期
	長軸	短軸			形	幅（cm）	深さ（cm）	長	幅	深					
方形	[illegible]	不明	[illegible]	4/4	円	59×51	5	—	—	—	—	—	—	—	古墳

掲載番号	器種	材質	法量				備考
			最大長（mm）	最大幅（mm）	最大厚（mm）	重量（g）	
M４	刀子	鉄	49.0	[illegible]	4.0	[illegible]	

竪穴住居40は、ＭＭ４区に位置し、東・南辺は良く残っているが、北・西辺は不明確である。東側では検出面より10cm程の深さがある。一辺約400cmの方形住居と考えられ、柱穴は、４本でほぼ中央部に直径50cm前後の凹内に直径15cmほどが赤く焼けており火所と考えられる。詳細な時期は不明であるが、古墳時代に含まれると考えられる。住居内からは、刀子状の鉄器が１片のみ出土している。（伊藤）

竪穴住居41



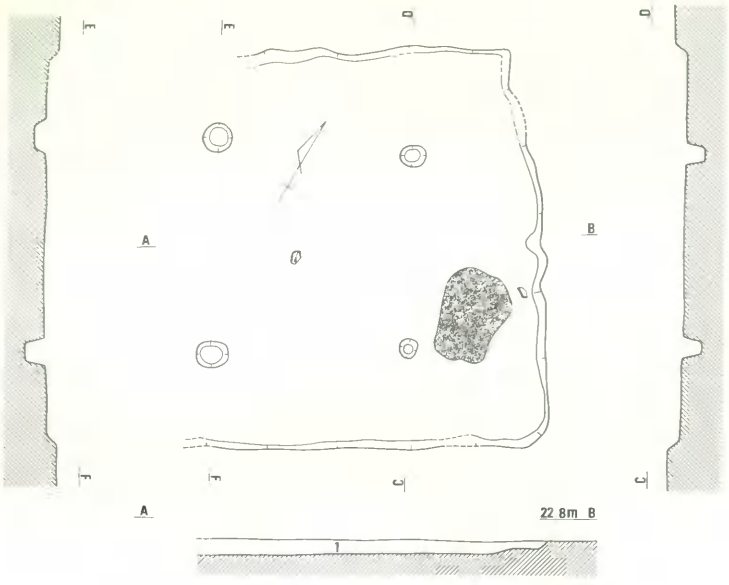
（1/60）

竪穴住居41は、ＭＭ４区に位置し、竪穴住居73の北近くにある。

平面形態は、南東コーナー部分のみ検出されているだけであるが、コーナーと壁の移行の線からして隅丸方形を呈すると想定される。壁体溝は、幅ひろのしっかりしたものが掘られているが、図示している柱穴については、この住居に伴うかどうか判断できなかった。（下澤）

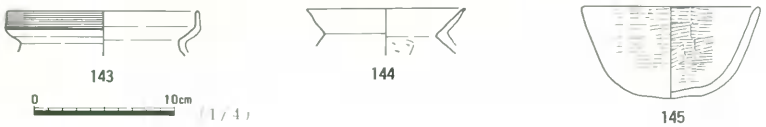
1　暗灰色土
2　茶褐色土
3　〃　（炭・黄色土粒含む）
4　黄褐色土ブロック
5　暗黄灰色土
6　灰色土
7　暗茶褐色土
8　暗黄褐色土

形状	規模（cm）		床面積（m）	柱穴	中央穴			方形土壙（cm）			火所	壁体溝	高床部	排水溝	時期
	長軸	短軸			形	幅（cm）	深さ（cm）	長	幅	深					
隅丸方形	不明	不明		[illegible]	—	—	—	—	—	—	—		—	—	古墳



1　灰褐色砂質土(礫含む)　　(1/60)

形状	規模(cm) 長軸	短軸	床面積(㎡)	柱穴	中央穴 形	幅(cm)	深さ(cm)	方形土壙(cm) 長	幅	深	火所	壁体溝	高床部	カマド	時期
方形	不明	421	—	4/4	—	—	—	—	—	—		—	—	—	古墳後半中葉



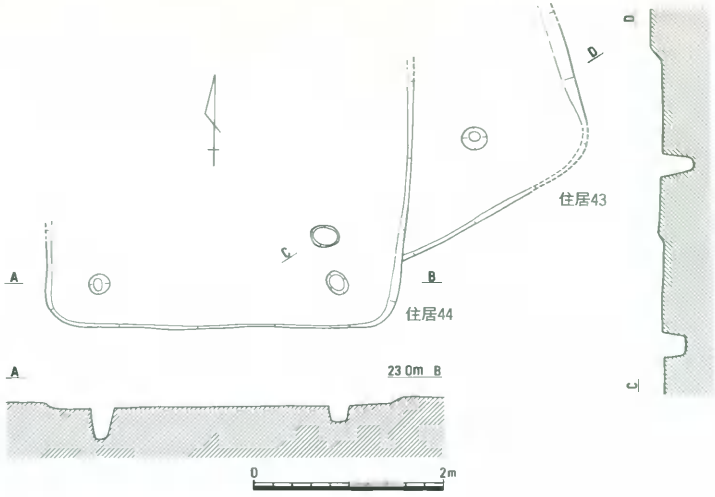
(1/4)

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
143	土師器	甕	13.4			良好	浅黄橙(7.5YR8/3	微砂	吉備型甕
144	土師器	甕	11.2			良好	にぶい橙(5YR6/4	細砂	「く」の字口縁・端部はわずかにつまみ出す
145	土師器	鉢	12.2		6.5	良好	にぶい橙(7.5YR7/4	微砂	やや深い椀状の体部・内外面ハケメ・底部わずかに残る

竪穴住居42は、MM4区に位置する。西辺ははっきりしなかったが東西220cm、南北210～230cmを測り、一辺420cm前後の方形の竪穴住居と思われる。柱穴は4本検出され、柱間距離は東西220cm、南北210～230cmを測る。床面東南部に60×110cmの規模で不定形に赤く焼けている火所が確認された。

住居内から吉備型甕**143**・「く」の字状口縁の甕**144**、小形の鉢**145**が出土している。これらの遺物からこの住居の時期は、古墳時代前半と考えられる。　(伊藤)

竪穴住居43・44



（1/60）

形　状	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	床面積(㎡)	柱穴	中央穴 形	中央穴 幅(cm)	中央穴 深さ(cm)	方形土壙(cm) 長	方形土壙(cm) 幅	方形土壙(cm) 深	火所	壁体溝	高床部	カマド	時　期
43　方形？	不明	不明	—	[illegible]	不明	不明	不明	—	不明	不明	—	—	—	—	古墳後半後葉
44　方形	[illegible]	不明	—	[illegible]	不明	不明	不明	—	不明	不明	—	—	—	—	

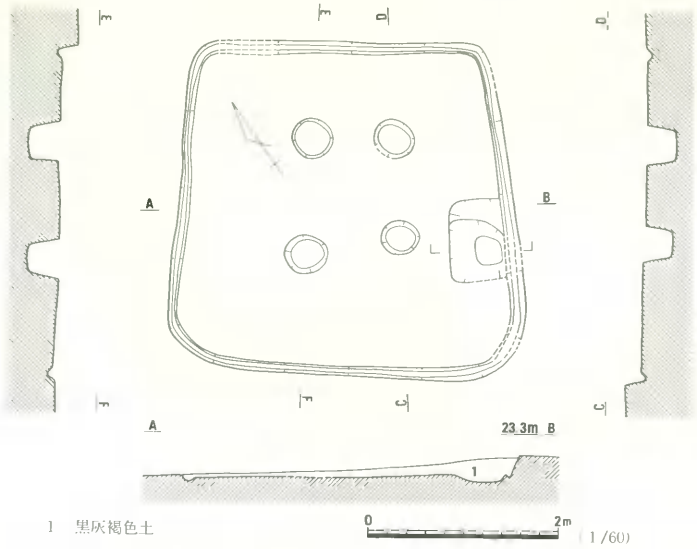
竪穴住居43・44は、発掘調査範囲の北東端部に位置していたが、境界部分に検出されたので、遺構の北西側は調査することができなかった。この2軒の竪穴住居は重複して発見され、竪穴住居44が竪穴住居43を新しく切っていた。

竪穴住居44の平面形は1辺約380cmを測る方形で、4本柱のうち2本を検出することができた。柱穴間の距離は約250cmで、床面に中央穴や方形土壙は存在しなかった。

竪穴住居43も平面形は方形を呈し、4本柱のうち2本が確認された。片方の柱穴は竪穴住居44の床面に位置し、柱穴間の距離は約190cmになっていた。

2軒の竪穴住居には時期を決定する遺物が出土しなかったが、周辺に存在した竪穴住居の調査結果に基づいて考えるならば、これらの竪穴住居は古墳時代後半後葉の時期になるであろう。（福田）

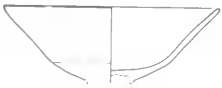
竪穴住居45



1　黒灰褐色土

0　2m　（1/60）

形　状	規模(cm)		床面積(m²)	柱穴	中央穴			[illegible]壁(cm)			火所	壁体溝	高床部	カマド	時　期
	長軸	短軸			形	幅(cm)	[illegible]	[illegible]	幅	深					
不整方形	358	350	11.3	4/4	—	—		87	55	3	—	[illegible]	—	—	[illegible]



146

147

0　10cm

（1/4）

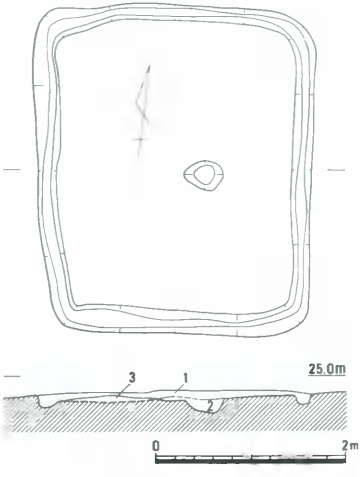
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			[illegible]	底径	器高				
146	上師器	[illegible]	[illegible]			[illegible]	[illegible]	微砂	[illegible]
147	上師器	[illegible]	[illegible]			[illegible]	[illegible]	微砂	[illegible]

竪穴住居45は、前田調査区の北東端部に位置し、西側に近接して前述した竪穴住居43・44が存在していた。

この竪穴住居の平面形は、長径358cm・短径350cmを測る不整方形を呈し、柱穴は４本である。柱穴の平面形と底部のレベルはほぼ同じになっていたが、柱穴間の距離は一定でなく、最小値約90cm・最大値約120cmになっていた。床面の周囲には断面形が「U」字形の浅い壁体溝が認められ、南東部分には壁体溝に接して長さ87cm・幅55cm・深さ８cmの長方形で２段掘りになった方形土壙が検出された。床面には黒灰褐色土が堆積し、土師器の高杯**146**や小形丸底の鉢**147**が出土した。

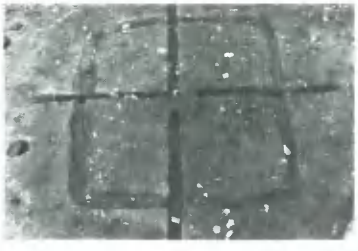
床面から出土した土器は、精査したにもかかわらずいずれも土師器だけで、須恵器は１片の破片も認められなかった。したがってこの竪穴住居45は、古墳時代前半後葉である須恵器が出現していない時期に属するであろう。　　（福田）

竪穴住居46



（1/60）

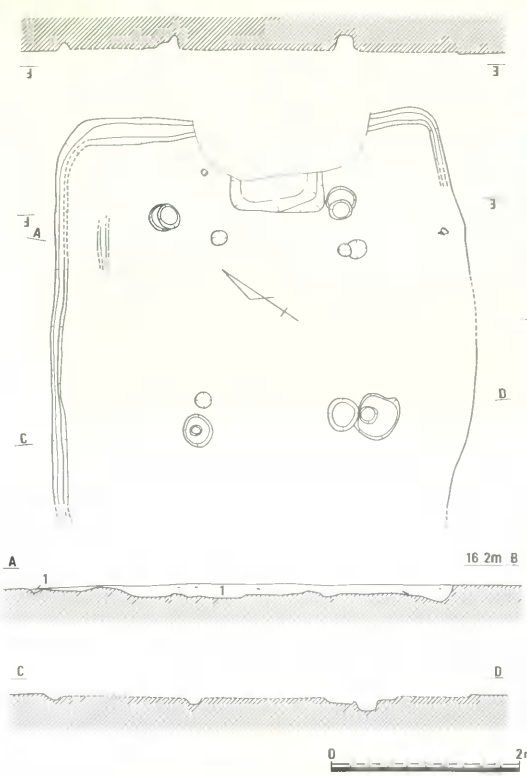
1　淡灰褐色土（土器片・焼土・礫多く含む）
2　暗灰褐色土（土器片・焼土・礫多く含む）
3　明黄褐色土（礫含む）



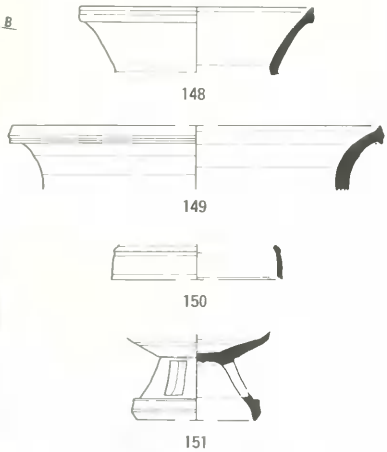
形状	規模(cm)		床面積(㎡)	柱穴	中央穴			方形土壙(cm)			火所	壁体溝	高床部	カマド	時期
	長軸	短軸			形	幅(cm)	深さ(cm)	長	幅	深					
方形	353	288	[illegible]	[illegible]	楕円	41×[illegible]	14	—	—	—	—	—	—		古墳後半

竪穴住居46は、ＭＢＯＸ１区の南端付近に位置する。残存状況が良くないだけでなく、基盤層が礫まじり黒褐色土で埋土と床面の判別は困難であった。断面図の３層は住居の貼り床である。中央穴には焼土が含まれ、埋土中にも見られた。また、床面を除去したにもかかわらず、柱穴は確認できなかった。遺物は、中央穴と埋土で土師器と須恵器の小片少量を確認している。いずれも型式は不明であるが、この住居は古墳時代後期に属するものと思われる。柱穴が見つからず、小規模であることから作業場である可能性も考えられる。　　（氏平）

竪穴住居47



1　暗灰褐色粘質土（礫多く含む）　（1/60）



（1/4）

形状	規模(cm)		床面積(m)	柱	主柱穴			方形土壙(cm)			入口	壁体溝	高床部	ｴｾﾞｸﾞ	時期
	長軸	短軸			形	幅(cm)	[illegible]	長	幅	[illegible]					
方形	不明	[illegible]		4				[illegible]	不明	不明					古墳後土中葉

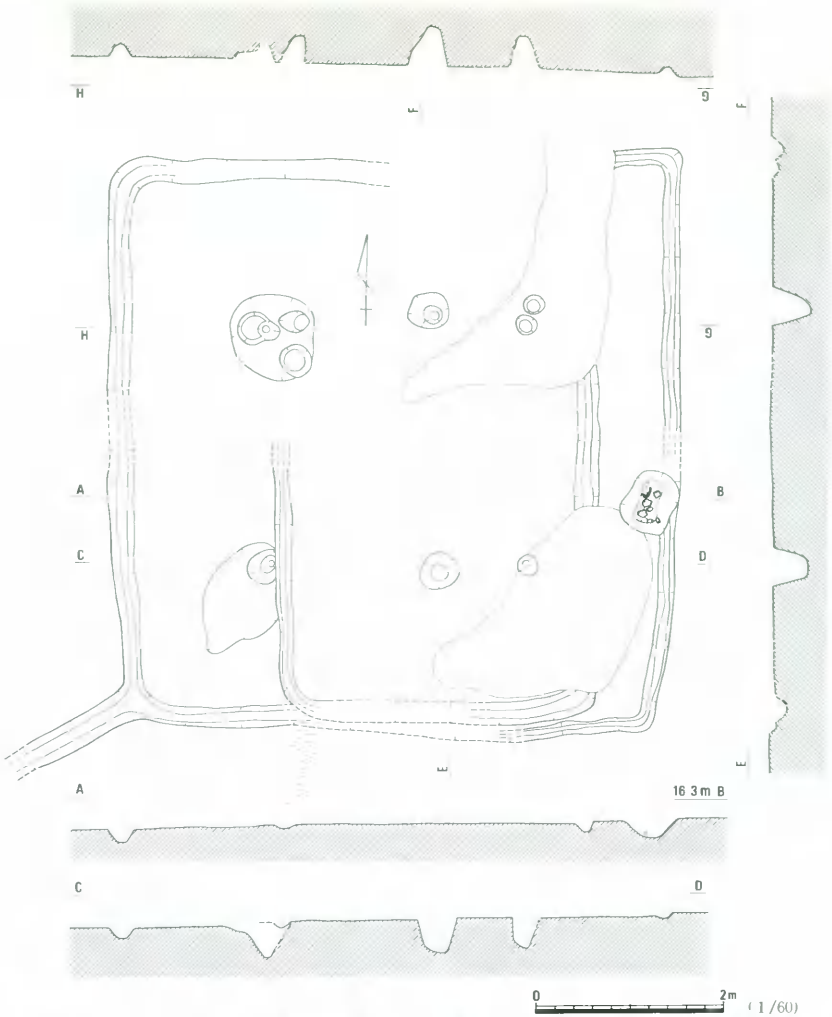
掲載番号	種別	器種	土量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			[illegible]	[illegible]	[illegible]				
148	須恵器	甕	[illegible]			[illegible]	[illegible]	砂礫	
149	須恵器	甕	[illegible]			[illegible]	[illegible]	微砂	[illegible]
150	須恵器	蓋	[illegible]			[illegible]	[illegible]	微砂	
151	須恵器	[illegible]				[illegible]	[illegible]	微砂	[illegible]

竪穴住居47は、礫を多く含む凹凸の目立つ不安定な基盤層面で検出されたため、平面形はいびつな形状を呈しているが、基本的に方形の住居と想定される。柱穴も４本と想定するのが自然であるが、壁体溝の全容は不明瞭である。建て替えの可能性も、北東部分で壁体溝の一部が検出されているので、あながち否定できない。

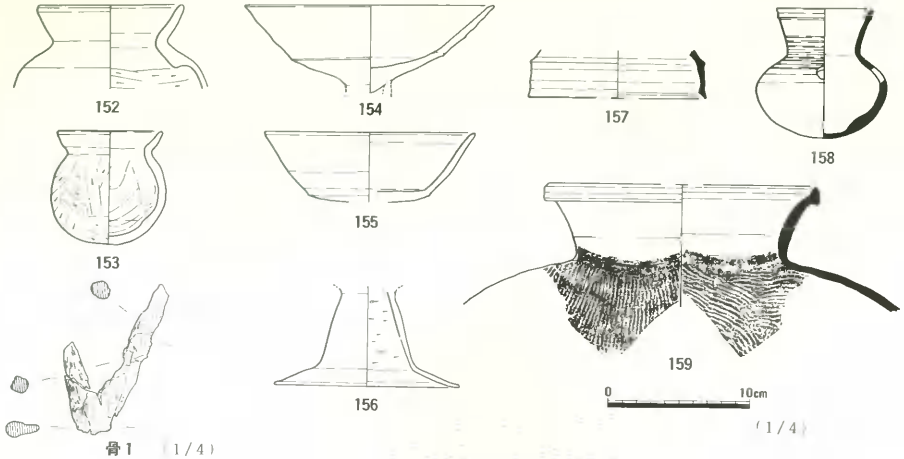
掘り方の北東辺中央では隅丸方形の土壙が検出されているが、本来この住居に伴う屋内土壙と考えて良いだろう。

出土遺物には、土師器細片のほか**148～151**の須恵器があるが、いずれも小片である。　（岡田）

竪穴住居48



形状	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	床面積(㎡)	柱穴	中央穴 形	中央穴 幅(cm)	中央穴 深さ(cm)	竈 長	竈 幅	竈 深	火所	壁体溝	高床部	排水溝	時期
a 長方形	不明	345	–	2・2	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	古墳後3中葉
b 長方形	[illegible]	[illegible]	(34.2)	4・4	–	–	–	68	49	17	–	–	–	–	



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
152	土師器	甕	(10.2)			良好	にぶい黄橙10YR6/3	砂礫	内面ケキ取り状に深いヘラケズリ
153	土師器	甕	7.2		8.1	良好	にぶい黄橙10YR6/4	細砂	器面の凹凸が顕著・ほぼ完形
154	土師器	高杯	(17.6)			良好	にぶい橙5YR6/4	砂礫	接合はデベソ・器面の磨滅顕著
155	土師器	高杯	(15.0)			良好	橙7.5YR6/6	砂礫	器面磨滅
156	土師器	高杯		13.0		良好	浅黄2.5Y7/3	細砂	脚内面はヨコヘラケズリ
157	須恵器	蓋	(13.1)			良好	(内・外・断)灰N6/	細砂	ロクロ方向不明
158	須恵器	壺	6.7		9.2	良好	(内)灰N5/　(外)灰N5/	精良	口縁部から胴中位にかけてアテ具による条痕・底部は静止ヘラケズリ・完形品
159	須恵器	甕	(14.8)			良好	(内・外・断)灰N6/	砂礫	

竪穴住居48は、後世の土壙や溝に切られてやや保存状態は悪い。さらに、大小の礫を多く含む基盤層での平面形の検出は困難をきわめた。基本的に方形の住居であるが、ほぼ東西南北に明瞭に検出された壁体溝は、内周と外周とにそれぞれ識別されるが、このことを住居の拡張あるいは、縮小と理解すべきか断定しがたい点であるが、土層断面の観察によれば後者の可能性が考えられる。

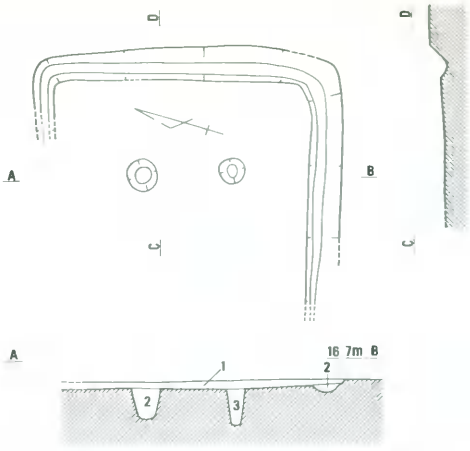
本来は4本の柱穴が想定されるが、縮小によって2本柱になった可能性もある。壁体溝は、南西隅からさらに延び、排水機能を持つ溝のように下位に位置する「たわみ1」に向けて下降する。

東辺の壁体溝に接するように掘り込まれた小土壙からは、土師器片や初期須恵器とみられる**158**の完形の甕のほかに、幼獣のものと推定される鹿の角が出土している。遺存状態はきわめて悪く、二股に分岐する付け根に近い部分としか確認できないが、自然落角なのか、捕獲のあと解体されて人為的に切断されたものかは不明である。

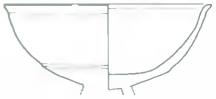
鹿は、弥生時代から銅鐸や土器などさまざまな器物に描かれ、農耕祭祀と密接な関係があることがつとに指摘されていることでもあり、竪穴住居28出土例とあわせ注意すべき出土遺物と考えられる。

一方で、「鹿角装刀子」などにみられるように、さまざまな工芸の分野での素材としても考慮すべきかもしれない。　(岡田)

竪穴住居49



160



161

1　暗褐色砂質土（礫含む）
2　〃
3　淡褐色土

（1/60）

（1/4）

形状	規模(cm)		床面積(m)	柱穴	中央穴			方形土壙(cm)			火所	壁体溝	高床部	カマド	時期
	長軸	短軸			形	幅(cm)	深さ(cm)	長	幅	深					
方形	不明	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	—	—	—	—	—	—		—	—	古墳後半後葉

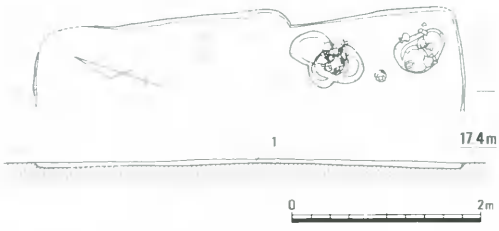
掲載番号	種別	器種	大量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
160	土師器	高杯	(15.4)			良好	浅黄橙7.5YR8/4	微砂	杯屈曲部にヨコナデによる凹み有り
161	土師器	高杯	14.6			良好	明赤褐2.5YR[illegible]	細砂	杯屈曲部にヨコナデによる凹み有り・端部はわずか外反する・接合部は須恵器的

竪穴住居49は、ＫＭ５区で検出された。遺存状況は悪く、その西半部分は検出できていない。

一辺約330cmほどを測る方形を呈する小形の竪穴住居と考えられる。主柱穴は２本柱で構成されると判断した。

出土遺物は少なく、**160・161**の高杯を図示した。これらからのみでこの竪穴住居の時期を判断することは困難であるが、古墳時代前半後葉と理解したい。　（大橋）

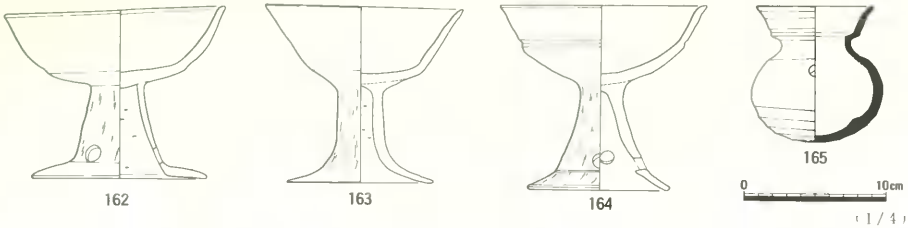
竪穴住居50



1　暗茶褐色土（焼土含む）

（1/60）

形状	規模(cm)		床面積(m)	柱穴	中央穴			方形土壙(cm)			火所	壁体溝	高床部	カマド	時期
	長軸	短軸			形	幅(cm)	深さ(cm)	長	幅	深					
方形	[illegible]	不明	[illegible]	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明		—	—		古墳後半後葉



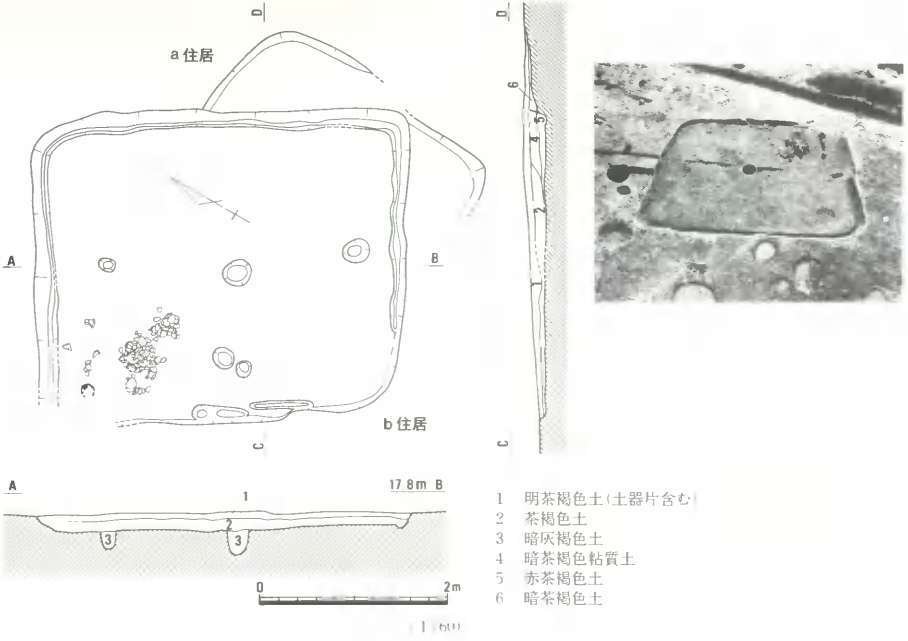
(1/4)

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
162	土師器	高杯	(15.5)	(12.2)	12.1	良好	にぶい橙7.5YR6/4	細砂	脚柱部ヘラミガキ・透かし孔3個・接合部突
163	土師器	高杯	13.9	10.3	12.6	良好	浅黄橙10YR8/3	細砂	内外面磨滅・接合部突
164	土師器	高杯	(14.4)	9.6	13.1	良好	にぶい黄橙10YR7/4	細砂	接合部切り込みあり・須恵器的技法・透かし孔4個
165	須恵器	甕	8.2		9.7	良好	(内・外・断)暗青灰5PB4/1	微砂	胴下半ヘラケズリ・ロクロ左回り・上半タタキメ?・下半部赤橙色に発色

竪穴住居50は、T・U9グリッド(KM4区)に位置する。溝13に切られるなどその残りは悪く、住居の東端を検出したのみである。東辺の中央の壁体近くに27×11cmの被熱面を確認したが、壁体溝は検出していない。また、南東隅には柱穴が集中するものの、主柱となる可能性は低い。

遺物には土師器と須恵器があり、いずれも南東隅の床面直上の位置で出土した。**162**～**164**は土師器の高杯で、**162**と**164**は脚柱部の下端に透かし穴を配す。**165**は須恵器の甕で、「ハ」の字状の短い頸部と丸い胴部をもち、胴下半にヘラケズリを施している。これら遺物の時期は、その特徴から5世紀後半代に属するものと考えられる。　(高田)

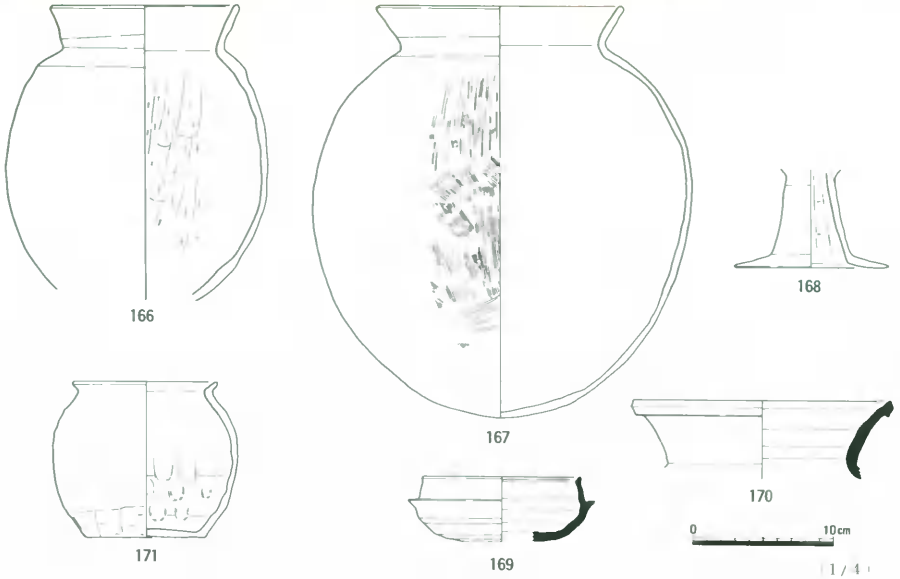
竪穴住居51



1　明茶褐色土(土器片含む)
2　茶褐色土
3　暗灰褐色土
4　暗茶褐色粘質土
5　赤茶褐色土
6　暗茶褐色土

(1/60)

形　状	規模(cm)		床面積(㎡)	柱穴	中央穴			方形土壌(cm)			火所	壁体溝	高床部	カマド	時　期
	長軸	短軸			形	幅(cm)	深さ(cm)	長	幅	深					
a　隅丸方形	不明	不明	—	不明	不明	不明	不明	—	—	—	—	—	—	—	古墳後半中葉
b　隅丸方形	394	330	[illegible]	[illegible]	円	[illegible]	[illegible]	—	—	—	—	—	—	—	



（1／4）

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
166	土師器	甕	12.9			良好	浅黄橙7.5YR8/3	微砂	器壁磨滅・里斑２か所あり
167	土師器	甕	16.8		29.3	良好	にぶい黄10YR6/3	細砂	里斑・スス付着・内面調整はケズリ後、ナデか
168	土師器	高杯		(10.9)		良好	にぶい黄橙10YR7/3	精良	器壁磨滅
169	須恵器	杯身	(11.1)			良好	(内・外・断)青灰5PB6/1	精良	端部は面をなしわずかに段を持つ・やや深い体部・[illegible]上がり部[illegible]ノケ・ロクロ左回り
170	須恵器	甕	(18.2)			良好	(内・外・断)青灰5PB5/1	精良	口縁部断面三角形状をなす・丁寧なヨコナデ
171	軟質系土器	平底鉢	[illegible]		[illegible]	良好	[illegible]5YR6/[illegible]	細砂	端部は[illegible]く納める・器壁磨滅・外面は[illegible]

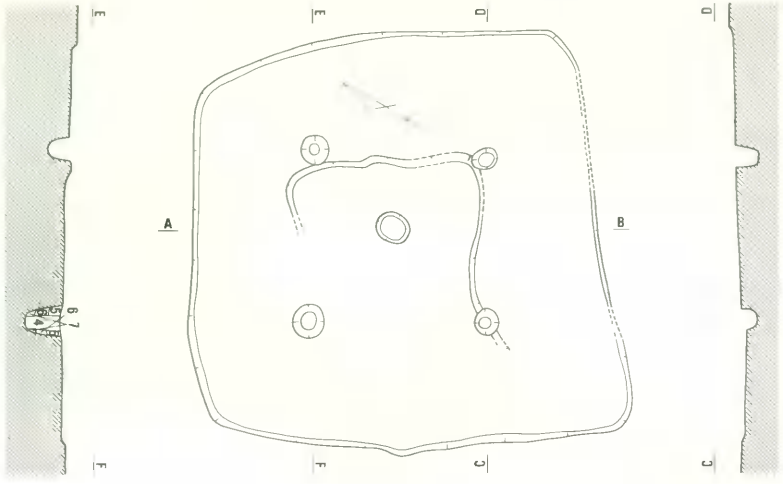
竪穴住居51ａはＫＭ３西区に位置し、竪穴住居８の西側にあり竪穴住居51ｂと重複している。

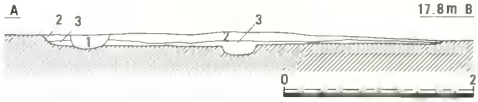
平面形態は、方形を呈するが西コーナー部分は確認できなかった。壁体溝は、南西壁を除いて認められているが、その部分においては途切れた状態で検出された。住居内には、ピットが５個検出されたがそのうち主柱穴と考えられるのは３本である。残りの１本を精査したが検出できなかったが、図の柱穴の配置からして４本柱とするよりも２本柱を想定したほうが妥当と考えるのである。

出土遺物は、**166～168**が土師器、**171**が韓式系土器、**169・170**が須恵器である。166は口縁部の立ち上がりに二重口縁状のくせをとどめている。**171**は軟質系で、頸部は「く」の字に外反し短い口縁をつくる。口縁内面は、明瞭ではないが受け口状となる。調整は外面の底部近くで静止ヘラケズリが、内面にはナデ状の押圧痕が認められる。

竪穴住居51ｂは，竪穴住居51ａと重複している。柱穴，壁体溝も認められず壁の切り込みがなだらかであり，床面も傾斜していることから竪穴住居として扱うのに躊躇するのである。　　（下澤）

竪穴住居52





（１/60）

1　灰茶褐色土（礫・土器片含む）
2　暗灰茶褐色粘質土（土器片含む）
3　〃
4　暗黒褐色粘質土（炭・土器片含む）
5　茶褐色砂質土
6　灰黄褐色粘質土
7　暗黒灰色粘土

形状	規模(cm)		床面積(㎡)	柱穴	中央穴			方形土壙(cm)			火所	壁体溝	高床部	カマド	時期
	長軸	短軸			形	幅(cm)	深さ(cm)	長	幅	深					
不整隅丸方形	452	[illegible]	[illegible]	4/4	[illegible]	[illegible]	11	—	—	—	—	—	[illegible]	—	古墳後半

（１/４）

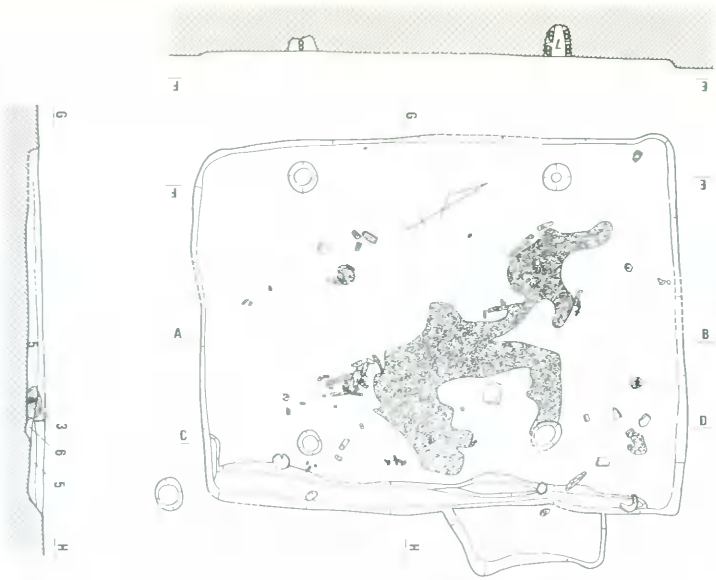
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
172	須恵器 土師質c	不明				[illegible]	内：橙5YR7/8 外：浅黄橙7.5YR8/6	微砂	器壁磨滅・外面はヘケメ状に見える

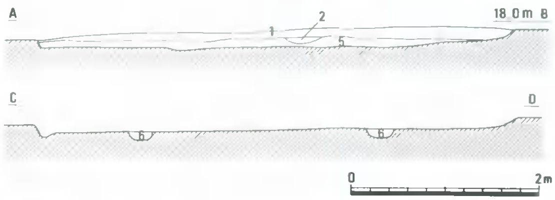
竪穴住居52は、ＫＭ３西区に位置し竪穴住居53の南西近くにある。

遺存状態は、壁の立ち上がりを確認できた程度であり良好とは言えないが、不整方形の平面形態を把握することができたのである。壁体溝は認められず、ピットは５本認められそのうちの４本が柱穴となる。柱穴の一つから断面において柱痕を確認することができた。中央穴は、その４本柱のほぼ中央に認められた。４本の柱穴を結ぶように内側が一段窪んだ形状を示していた。西側部分においては、明瞭には検出されなかった。

出土遺物は、**172**の須恵器が出土している。この須恵器は、土師質ｃとされる焼成のもので、高杯の杯部の破片と考えている。　（下澤）

竪穴住居53

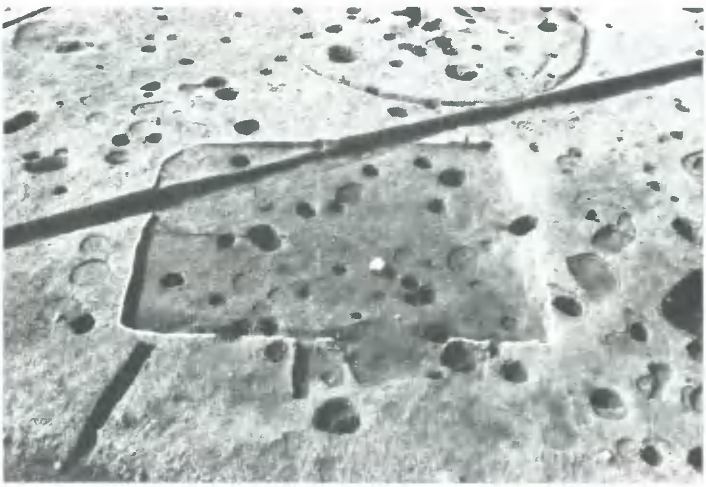


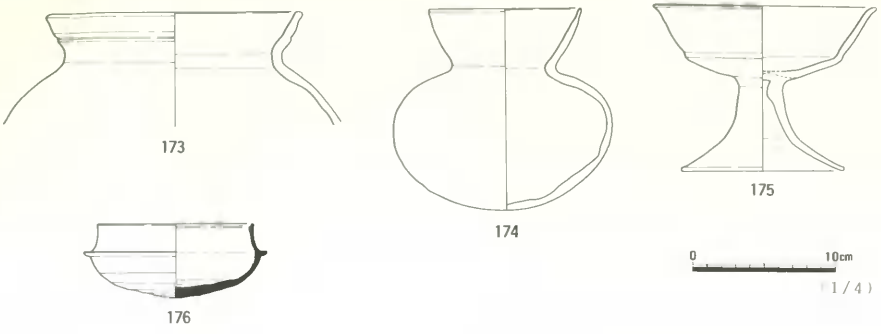


1　暗茶褐色粘質土（炭・焼土多く含む）
2　灰色粘質土（焼土多く含む）
3　黒褐色土（焼土）
4　赤褐色土（焼土）
5　暗灰色粘質土（炭・焼土多く含む）
6　暗褐色粘質土
7　灰褐色粘質土
8　暗褐色粘質土（炭・焼土多く含む）
9　暗灰褐色粘質土（炭・焼土多く含む）

（1/60）

形状	規模（m）		床面積（m²）	柱	[illegible]					[illegible]		壁溝	壁体溝	[illegible]	[illegible]	時期
	長軸	短軸			形	幅	[illegible]	[illegible]	[illegible]	幅	[illegible]					
方形	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]												[illegible]



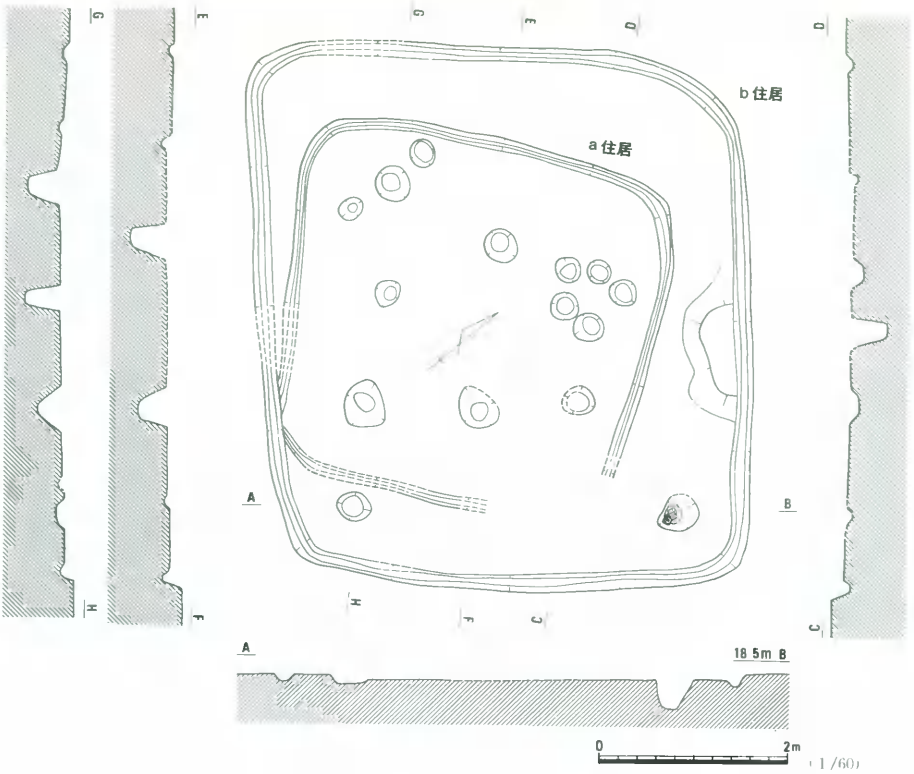


掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
173	土師器	甕	17.6			良好	浅黄橙10YR8/2	微砂	器壁磨滅・やや鈍い。単口縁・端部鈍い面を形成・次的に火を受けている
174	土師器	壺	(10.6)		14.3	良好	浅黄橙7.5YR8/3	微砂	器壁磨滅・一部ハケメか?
175	土師器	高杯	(15.3)	(11.2)		良好	灰白10YR8/1	微砂	杯屈曲部に凹みあり・器壁磨滅
176	須恵器	杯身	(10.8)		5.2	良好	(内・外・断)青灰5PB5/1	精良	丁寧な作り・端部段あり・ロクロ左回り

竪穴住居53は、竪穴住居52の北東5mの位置に検出した。平面形は少し南北に長い方形を呈しており、長軸511cm、短軸401cmを測る。検出面からの深さは約18cmを測るものである。住居の床面には壁体溝は検出されなかったが、東側に壁体に沿う幅の広い溝を検出した。溝の幅は20～40cmを測るもので、壁体溝とされるものとは趣を異にしている。また、この東壁には中央より少し北寄りに方形の張り出しがある。住居と土壙との切り合いを考えて調査したがその様相は見えず、同一の埋土であることから付属するものと考えられる。規模は長軸170cm、短軸70cmを測るもので、床の高さは住居の床面と同じか少し高い。柱穴は4本を検出した。柱穴は東西の壁体に近い位置に掘られている。平面形は円形を呈しており、直径25～30cmを測る。柱穴間の距離は250～290cmを測り、住居の外寄りに位置している。床面からはまとまった量の焼土が出土した。焼土の量に比べて炭の出土量は少なく、焼失住居か否かについては判断の迷うところである。

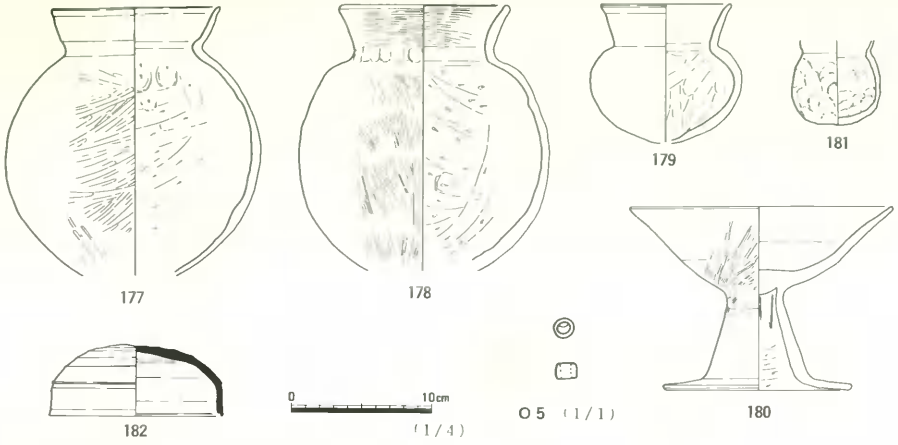
出土遺物としては土師器、須恵器などがある。**173**は、土師器の壺である。口縁部外面に鈍い稜がみられ二重口縁の趣をわずかに残している。**174**は、直口壺である。口縁部は少し開きながら立ち上がるものであるが、外面は緩やかに弧を描く。胴部はほぼ球形を呈している。器壁は磨滅しているが、一部にハケメの痕跡が見られる。**175**は、土師器の高杯である。杯部の屈曲部に明瞭な稜線がみられる。口縁部は少し外に曲がり、端部は丸く納められている。脚部は柱状部から裾部に向けて開くものであるが、その境は明瞭ではない。**176**は、須恵器の杯身である。立ち上がりは少し内傾しており、その長さも長い。しかし、器高の2分の1まではなく、端部の内側は傾斜した面を持ち段を有する。受部は水平に伸びる。底部外面は、ヘラケズリが施される。この須恵器はTK47にほぼ相当するものと考えられる。住居の時期は古墳時代後半の中頃と考えられる。(井上)

竪穴住居54



（1/60）

形　状	規模（cm）		床面積（m）	柱穴	中央穴			方形土壙（cm）			火所	壁体溝	高床部	ウマド	時　期
	長軸	短軸			形	幅（cm）	深さ（cm）	長	幅	深					
a　隅丸方形	[illegible]	[illegible]	13.3	2/2	—	—	—	—	—	—	—		—	—	方壙後半中葉
b　隅丸方形	[illegible]	[illegible]	27.[illegible]	2/4	—	—	—	—	—	—	—		—	北東辺中央	



掲載番号	種別	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
177	土師器	壺	11.9			良好	黄橙7.5YR8/8	砂礫	内外面ヌス付着
178	土師器	壺	11.6			良好	灰黄2.5Y7/2	砂礫	二次的に火を受けている・外面に指頭圧痕
179	土師器	壺	9.0			良好	灰黄2.5Y7/2	砂礫	胴部外面磨滅・細かいハケメか？
180	土師器	高杯	18.3	12.8	13.0	良好	灰白2.5Y8/2	砂礫	杯内面磨滅・外面タテ方向のハケメ
181	土師器	壺	(5.2)			良好	浅黄橙	砂礫	胴部から底部にかけて下膨れを呈する・内外面に指頭圧痕を留める、手づくね
182	須恵器	蓋	12.0		5.2	良好		微砂	端部は明瞭な段を形成・稜部下に沈線・天井部ヘラケズリ・ロクロ右回り

掲載番号	器種	材質	色調	最大長(mm)	最大厚(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
05	土玉	緑色凝灰岩？	うすい黄色	3.0	3.75	2.00	0.08	

竪穴住居54は、ＫＭ２区で竪穴住居22の北東に位置する竪穴住居である。検出面での平面形態は不整方形を呈していたが、その内側にさらに隅丸方形に壁体溝が検出され、この竪穴住居は重複していることが判明した。

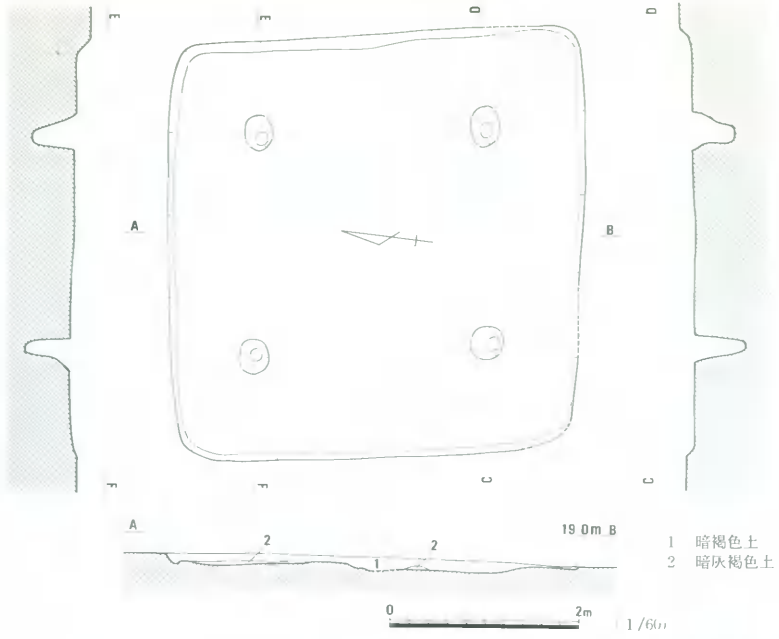
竪穴住居は、内側の壁体溝の南隅が外側の不整方形の住居壁体溝によって切られ、外側の不整方形が新しいものである。よって隅丸方形を54ａ、不整方形を54ｂと呼称して以下説明する。

54ａは隅丸方形の平面形態を呈し、規模は表に示した通りであり、部分的に点線で図示している箇所は、第一次調査等による確認調査時のグリッド、調査時のトレンチによって消滅したものである。この住居内床面には柱穴が多数存在するが、Ｅ－Ｆ断面に示す２本柱の構造をとるものと考えられる。また、その柱間は180cmを測り得たが、その他の付属施設等は認められなかった。この竪穴住居の壁体溝・柱穴内から遺物は土師器、須恵器の小片が少量出土している。時代は後述する54ｂの拡張前のものである。

次いで54ｂの不整方形の平面形態を呈す住居は54ａの壁体溝の一部を切って方位を若干異にしている。この壁体溝に伴う柱穴は４本と考えられるが、北東側ではそれらしき柱穴が確認されず、Ｇ－Ｈ断面に示す南西側の２本(柱間240cm)が相当するものと判断している。さらに北東辺中央の壁体溝に接してカマドの残部の遺構も認められた。

出土遺物は図示されている遺物の他にもかなりの破片が出土しており、これらからこの竪穴住居の時期は古墳時代後半に比定されるものと判断した。（二宮）

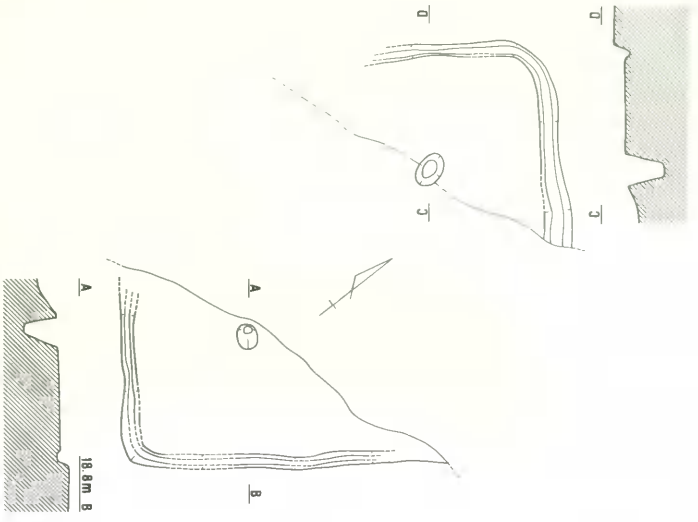
竪穴住居55



形　状	規模(cm)		床面積(㎡)	柱穴	平面形			方形土壌(cm)			主方	壁体溝	高床部	ベッド	時　期
	長軸	短軸			形	幅(cm)	深さ(cm)	長	幅	深					
方形	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	古墳後半

竪穴住居55は、竪穴住居54の北東約13ｍの位置に検出した。東西にやや長い方形を呈する竪穴住居であり、長軸453cm、短軸435cmを測る。残存状態は悪く、検出面からの深さは深いところで12cmほどにすぎない。検出した柱穴は４本であり、４本柱の構造をとる。柱穴の平面形はほぼ円形を呈するもので直径35～40cm、床面からの深さは45～55cmを測る。柱穴間距離は230～250cmを測る。土層断面に壁体溝と思われる窪みが見られたが平面的には壁体に沿う溝は検出できなかった。出土遺物は少ないため明確な時期は不明であるが、古墳時代後半以降に属するものと考えられる。　　（井上）

竪穴住居56



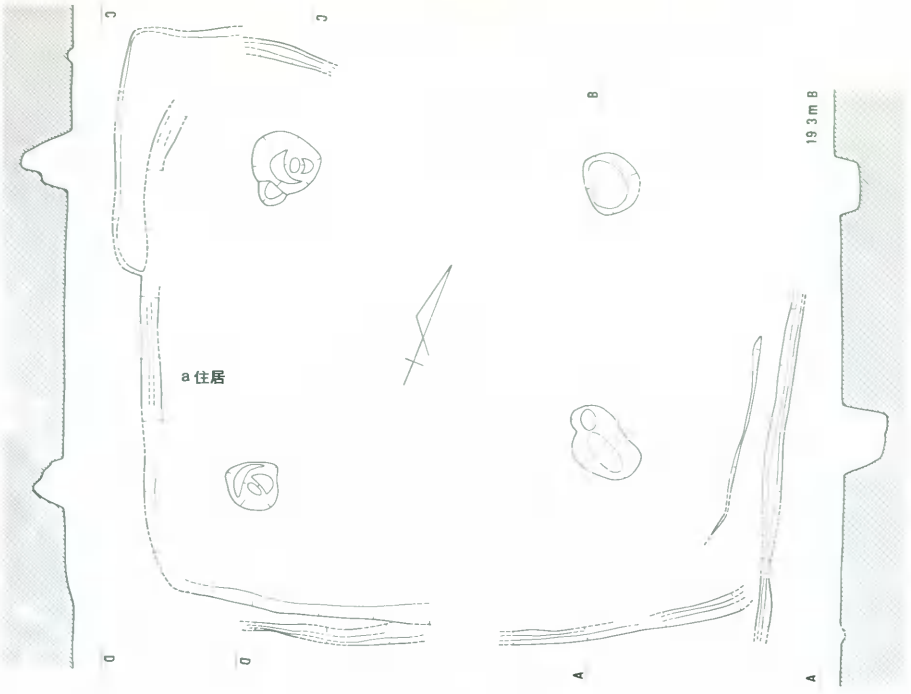
0　2m
（1/60）

形状	規模(cm) 長軸	短軸	床面積(㎡)	柱	中央穴 形	幅(cm)	深さ(cm)	方形土壙(cm) 長	幅	深	火床	壁体溝	高床部	カマド	時期
方形	(440)	(440)	(19.4)	2	不明	不明	不明	—	—	—	—		—	—	古墳

竪穴住居56は、竪穴住居55の北24ｍの位置に検出した。方形を呈する住居であるがその中央部を後世の土壙が斜めに削平しているため、その一部しか残存していない。検出したのは北と南のＬ字に曲がる角の部分である。規模は長軸、短軸ともに440cm、検出した壁体の高さは約10cmを測る。壁体に沿っては幅15～20cmの溝を検出した。残存する床面に２本の柱穴を検出した。本来は４本柱の住居と考えられるが、２本は土壙により削平されているため、２本のみが残存するものである。柱穴の平面形は楕円形を呈するもので、長軸28～38cm、短軸20～25cm、柱穴の深さは、床面から約45cmを測る。

出土遺物がないため明確な時期は不明であるが、古墳時代に属するものと考えられる。（井上）

竪穴住居57

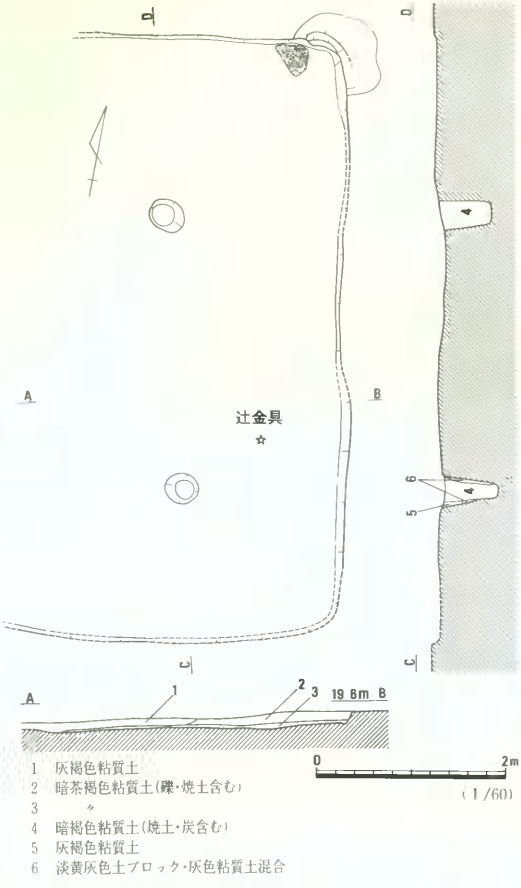


形状	規模(cm) 長軸	短軸	床面積(㎡)	柱穴	中央穴 形	幅(cm)	深(cm)	方形土壙(cm) 長	幅	深	火所	壁体溝	高床部	ベッド	時期
a 方形	(700)	不明	－	4/4	－	－	－	－	－	－	－	－	－		古墳後半
b 方形	不明	不明	－	不明	－	－	－	－	－	－	－		－		
方形	不明	不明	－	不明	－	－	－	－	－	－	－	－	－		

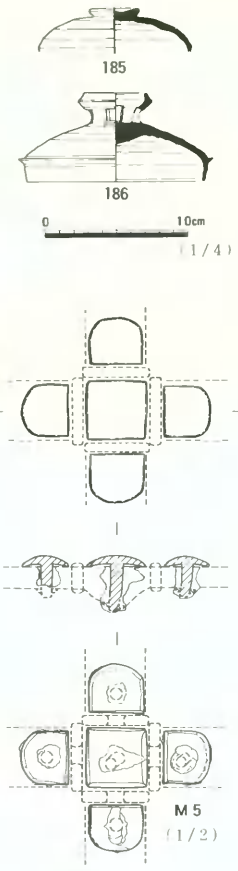
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
183	須恵器	甕？			(3.9)	良好	内：暗青灰5PB3/1 外：青灰5PB5/1 断：にぶい赤褐2.5YR4/3	精良	口縁部破片？・口縁端部上方へつまみ出す
184	須恵器	杯				良好	内・外：青灰5PB6/1 断：灰黄褐10YR6/2	微砂	胴部2条の沈線間に工具による刺突文

竪穴住居57は、竪穴住居56の東８ｍの位置に検出した。検出したのは壁体溝とそれに伴うと考えられる柱穴である。壁体溝は１本が廻るものではなく、数本で方形に囲むものであることを考えれば数回の建て替えがあったものと考えられる。壁体溝の組み合わせが解らないが、３回程度の重複が考えられる。規模としては一辺が６ｍ程度のものと推定される。住居は削平が激しいこともあって出土遺物が少なく明確な時期は不明であるが、古墳時代後半に属するものと考えられる。（井上）

竪穴住居58



1　灰褐色粘質土
2　暗茶褐色粘質土(礫・焼土含む)
3　〃
4　暗褐色粘質土(焼土・炭含む)
5　灰褐色粘質土
6　淡黄灰色土ブロック・灰色粘質土混合



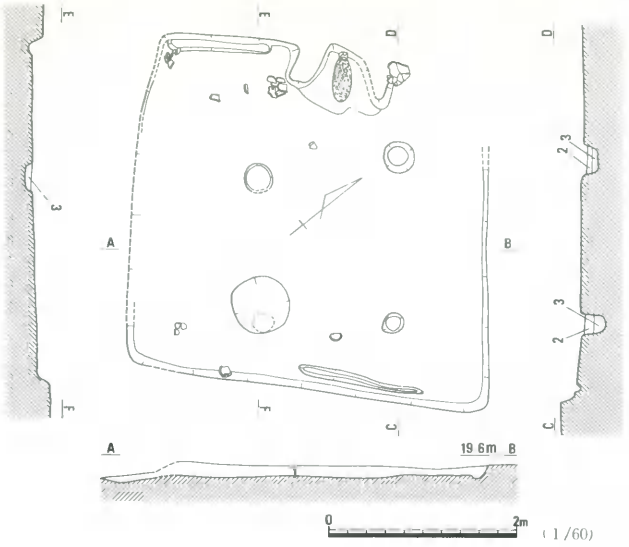
形状	規模(cm) 長軸	短軸	床面積(m²)	柱穴	中央穴 形	幅(cm)	深さ(cm)	方形土壙(cm) 長	幅	深	火所	壁体溝	高床部	カマド	時期
方形	(642)	不明	—	(24)	不明	不明	不明	—	—	—	?	—	—	北東角	古墳時代中葉

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
185	須恵器	蓋				良好	(内・外)暗青灰5PB4/1 (断)暗紫灰5RP4/1	微砂	天井部外面に重ね焼痕跡・自然釉
186	陶質土器	蓋	12.3		6.3	良好	(内・外・断)暗灰N3/1	精良	つまみ部に逆台形の透かし孔・稜部は斜め上方に拡張・新羅系

掲載番号	器種	材質	法量 最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
M5	辻金具	鉄				18.30	鉄地金銅張

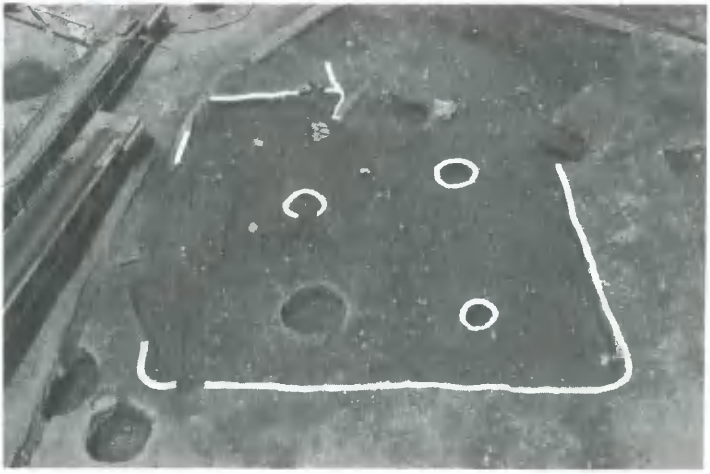
竪穴住居58は、竪穴住居57の東7mの位置に検出した。西側は現代の水田の造成により削平されており、東側の半分がようやく残存するものである。住居は方形を呈するもので、長軸642cm、検出面からの深さ15cmを測る。壁体溝は検出されなかった。柱穴は本来は4本柱であるが、2本のみを検出した。北東の角に火所を検出し、カマドの一部と考えた。上面が削平されているため形状は不明である。出土遺物として注目されるのは**186**の杯蓋で新羅系の陶質土器である。つまみ部には逆台形の透かし、肩部には斜め上方に拡張する稜線が見られる。**M5**は鉄地金銅張の辻金具である。　(井上)

竪穴住居59

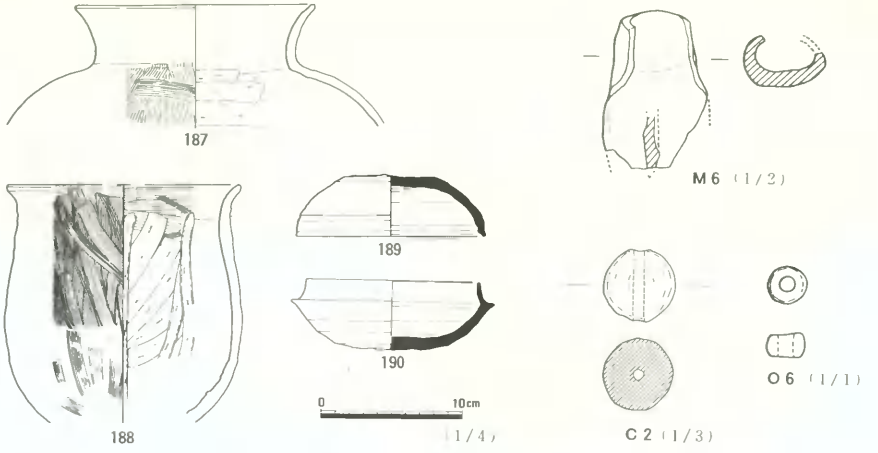


(1/60)

1　暗茶褐色粘質土
2　暗灰褐色粘質土(炭含む)
3　暗褐色粘質土(焼土・炭含む)



形状	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	床面積(m²)	柱穴	中央穴 形	中央穴 幅(cm)	中央穴 深さ(cm)	方形土壙(cm) 長	方形土壙(cm) 幅	方形土壙(cm) 深	火所	壁体溝	高床部	カマド	時期
方形	(373)	368	(11.9)	4/4	−	−	−	−	−	−	−	○	−	北西辺中央	古墳後半後葉



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
187	土師器	壺	16.7			良好	橙5YR6/6	微砂	胴部から屈曲し外反して立ち上がる口縁部
188	土師器	甕	(16.2)			良好	淡赤橙2.5YR7/4	微砂	口縁部はわずかに外反し、内面ハケメ・胴外面ハケメ・内面はヘラケズリ後ユビナデアゲ
189	須恵器	蓋	13.2		4.4	良好	(内・外・断)灰N4/	精良	稜は鋭い沈線で形成・端部内面はわずかにつまみ出し面を形成・天井部内面仕上げナデ
190	須恵器	杯身	(12.2)		4.9	良好	(内・外・断)青灰5B6/1	精良	立ち上がり部折り込み・端部は丸く納める・ロクロ回転右

掲載番号	器種	材質	法量 最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量	備考
M6	斧	鉄	55.5	35.3	5.2	[illegible]	

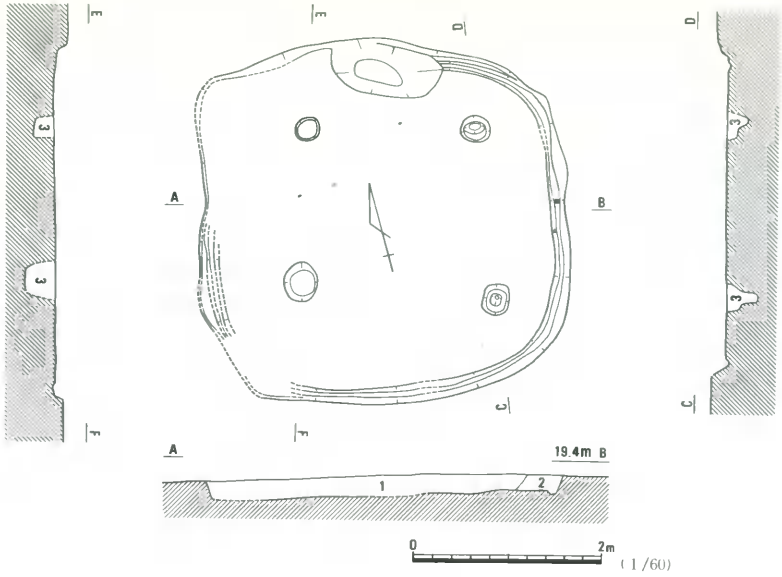
掲載番号	器種	形態	色調	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量	備考
C2	土錘	C	[illegible]い黄橙10YR7/4	38	[illegible]	[illegible]	[illegible]	

掲載番号	器種	材質	色調	最大長(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
O6	石製	滑石	黄味をおびた灰	4.40	2.90	2.50	11.51	

竪穴住居59は、竪穴住居58南東角に一部重複して検出した。竪穴住居59の北隅が不明なのは竪穴住居58に切られるためで、竪穴住居58が新しい。平面形は方形を呈するもので、長軸373cm、短軸368cmを測るもので、比較的小形の住居である。検出面からの深さは約10cmである。壁体に沿って、一部で溝を検出した。本来は壁に沿って廻っていたものと考えられる。柱穴は4本を検出した。台形に検出した柱穴間の距離は、140～180cmを測る。平面形は円形を呈するもので直径20～60cmを測る。北西壁のほぼ中央部にカマドを検出した。焼土部分を挟んで両側に「U」字状に土手が張り出すものである。土手と土手の間は約50cmを測る。煙道については削平が大きいため不明である。

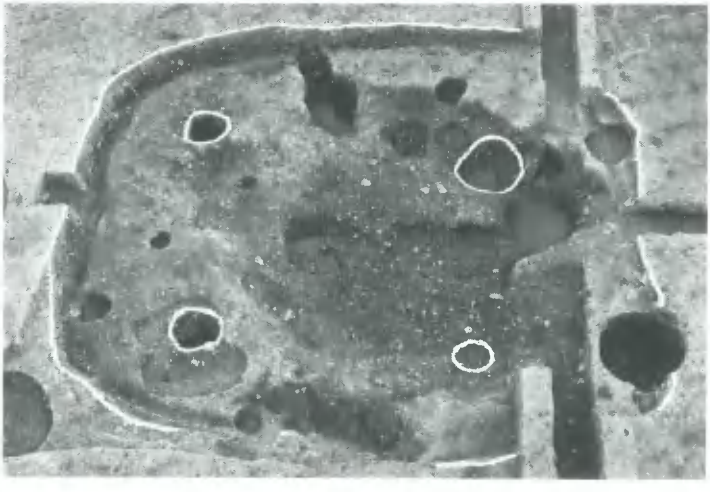
住居から出土した遺物としては、土師器の壺・甕、須恵器の蓋杯、鉄斧などがある。**187**は、土師器の壺である。口縁部は、外に開きながら立ち上がり端部は丸く納められている。胴部の外面にはハケメ、内面は横方向のヘラケズリが施される。**188**は土師器の甕である。縦方向に長い胴部を持つもので、口縁部はわずかに外反する。口縁部の内面と胴部の外面にはハケメが施される。**189**は須恵器の杯蓋で、天井部から口縁端部にかけて緩やかな弧を描き、明瞭な肩は見られない。端部内面は内傾した面を持つ。**190**は、須恵器の杯身で立ち上がり部は折り返されており端部は丸く納められている。**M6**は鉄板の両端を折り曲げた鉄斧の袋部である。　(井上)

竪穴住居60

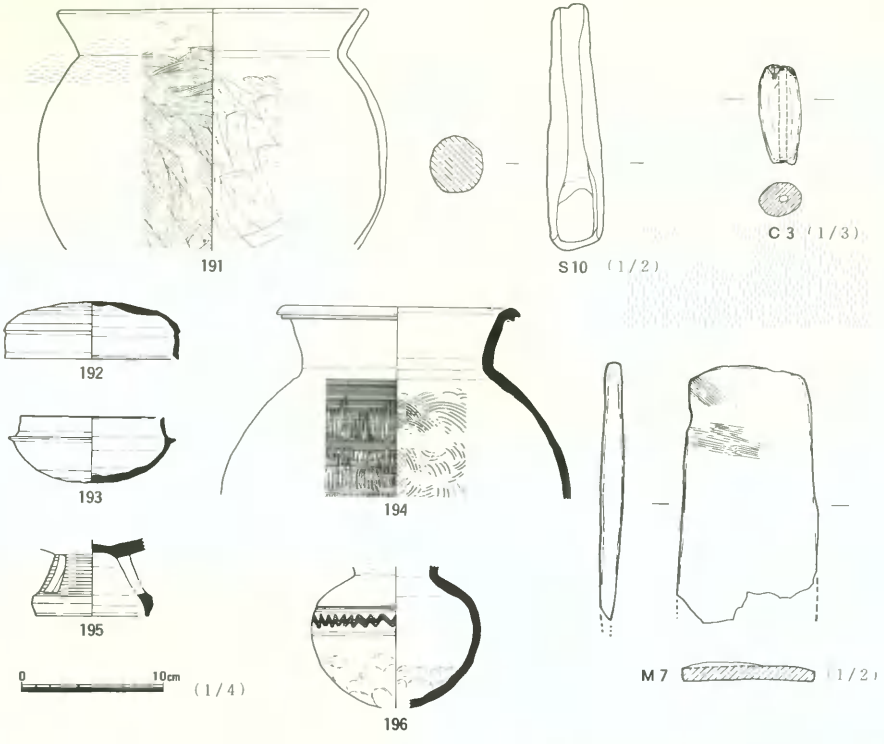


(1/60)

1　暗茶褐色土(礫含む)
2　暗灰褐色土(礫含む)
3　暗茶褐色土



形　状	規模(cm)		床面積(m²)	柱穴	中央穴			方形主堀(cm)			火所	壁体溝	高床部	カマド	時　期
	長軸	短軸			形	幅(cm)	深さ(cm)	長	幅	深					
胴張隅丸方形	391	382	11.8	4/4	−	−	−	118	53	19	−		−		古墳後半中葉



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
191	土師器	甕	21.5			良好	橙7.5YR6/6	細砂	外面荒いハケメ・口縁端部は丸く納めわずかに上方につまみ出す
192	須恵器	蓋	13.0		4.1	良好	(内・外・断)灰N5/	砂礫	稜は鋭い・端部に段を持つ・ロクロ回転右
193	須恵器	杯身	10.0		4.8	良好	(内・外・断)灰N5/	精良	立ち上がり部ハリツケ・丁寧なつくり・端部面を持つ・ロクロ回転左
194	須恵器	甕	[illegible]			良好	(内・外)灰N4/ (断)褐灰7.5YR4/1	砂礫	外面タタキ後カキメ・口縁部下に貼り付けの突帯がめぐる
195	須恵器	高杯		7.8		良好	(内・外・断)灰白10Y7/1	細砂	脚端部断面三角形・脚部３方透かし孔・カキメ・杯底部内面仕上げナテ
196	須恵器	瓶				良好	(内)灰N4/ (外)暗オリーブ灰[illegible] (断)灰白N7/	精良	体部下半ケズリ後ナデ・内外面自然軸

掲載番号	器種	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
S10	砥石	頁岩	87	径19		48.94	

掲載番号	器種	材質	法量 最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
M 7	板状鉄斧	鉄	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	

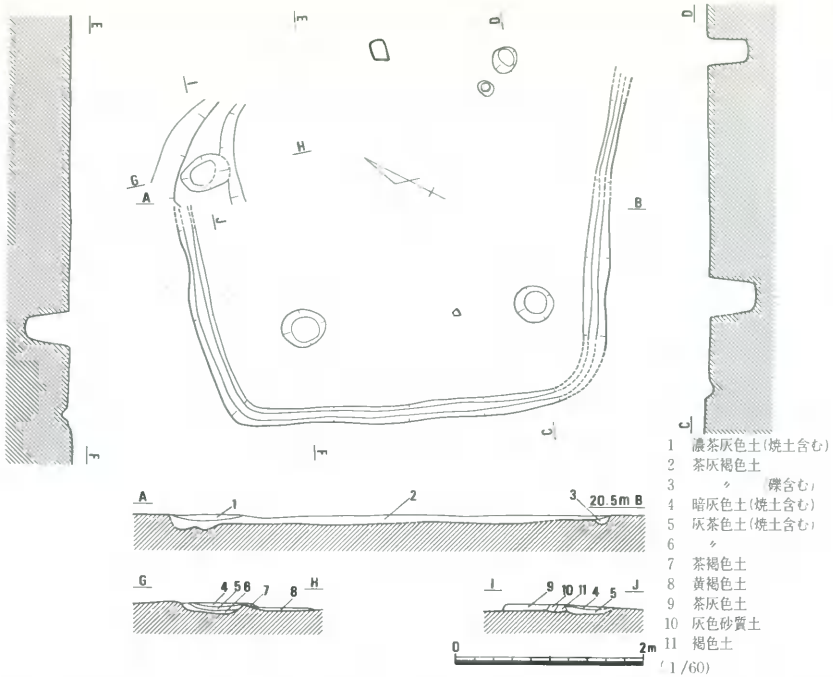
掲載番号	器種	形態	色調	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
C 3	土錘	B－Ⅲ	橙7.5YR6/6	[illegible]	[illegible]	4.0	[illegible]	

竪穴住居60は、ＭＢＯＸ３区の北部に位置し、竪穴住居10を切る。中央部を土壙44が破壊しており、当住居に伴う遺物の判別は困難であった。住居北辺中央に位置する方形土壙は当住居に付属する施設と考えられる。埋土は均質な暗茶灰色土であった。

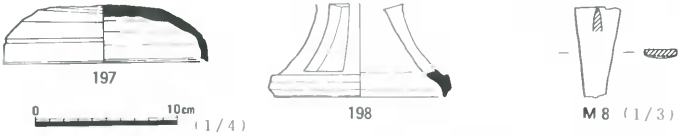
出土遺物のうち鉄斧**Ｍ７**、砥石**Ｓ10**はいずれも東側壁体溝内のほぼ底面から出土した。住居廃絶時のものと考えられる。その他の須恵器・土師器は埋土中である。

住居の時期は、須恵器から５世紀末葉に位置づけられる。　　（氏平）

竪穴住居61



形状	規模(cm) 長軸	短軸	床面積(m²)	柱穴	中央穴 形	幅(cm)	深さ(cm)	力形土壙(cm) 長	幅	深	火所	壁体溝	高床部	カマド	時期
不整方形	不明	(460)	—	5/4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	北辺中央	古墳後半～奈良

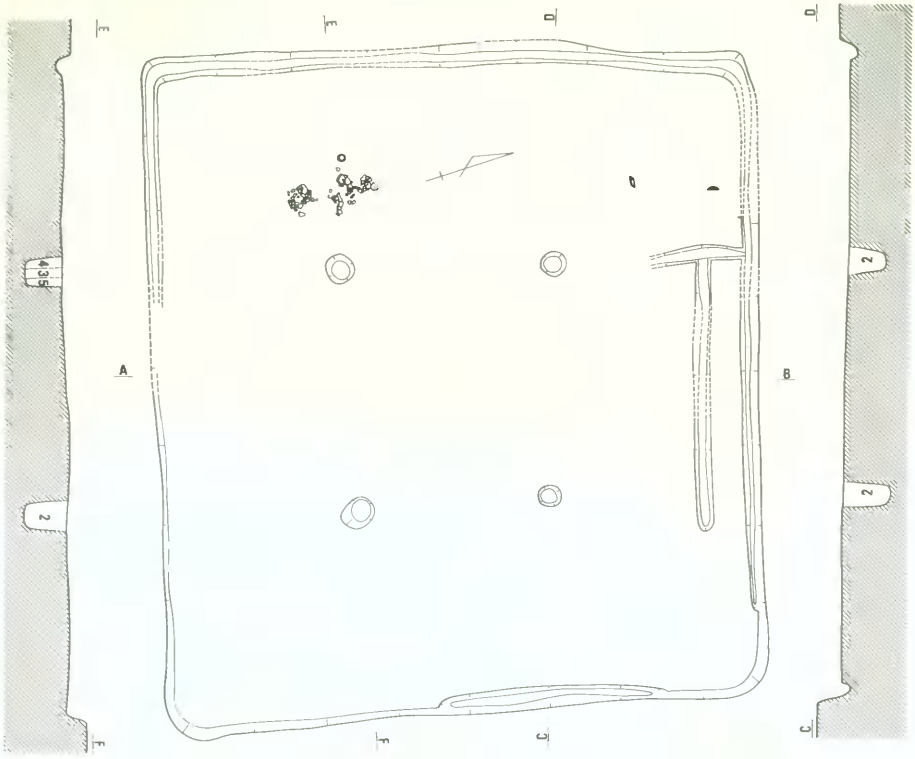


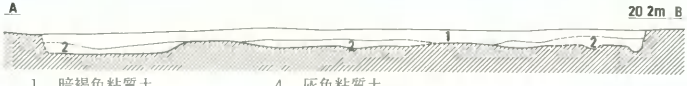
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
197	須恵器	蓋	14.35		4.1	良好	(内・外・断)灰白5Y8/1	砂礫	稜部は沈線で形成される・端部はわずかに段を持つ・内面当て具痕残る・ロクロ回転右
198	須恵器	高杯		12.0		良好	(内・外・断)N5/	砂礫	脚柱部方形透かし孔・脚端部は断面三角形

掲載番号	器種	材質	法量 最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
M8	鏃	鉄	(48.2)	23.5	6.0	8.20	方頭広根箆箱式

竪穴住居61は、竪穴住居60の東2ｍの位置に検出した。竪穴住居12と重複して検出したためその全体については検出することはできなかった。平面形はほぼ方形を呈するもので、判明する一辺の長さは460cmを測る。検出面からの深さも7～8cmと浅い。柱穴は3本を検出した。直径25～45cm、床面からの深さ40～45cmを測る。図示した遺物のうち、**197**は須恵器の杯蓋である。天井から口縁端部にかけては緩やかに弧を描くもので、肩部に明瞭な稜線はみられない。**198**は高杯の脚部である。**M8**は鉄鏃である。住居の時期は6世紀代と考えられる。　（井上）

竪穴住居62



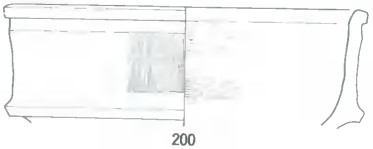


1　暗褐色粘質土　　4　灰色粘質土
2　暗灰褐色粘質土（礫多く含む）　5　淡黄灰色粘質土
3　〃

0　2m　（1/60）

形　状	規模（cm）		床面積（m）	柱穴	中央穴			与平土壙（cm）			大所	壁体溝	高床部	出入口	時　期
	長軸	短軸			形	幅（cm）	深さ（cm）	長	幅	深					
与平	712	[illegible]	42.[illegible]	4/4	—	—		—			—		—	—	与墳後土曲集

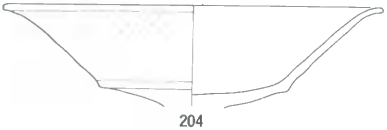
199

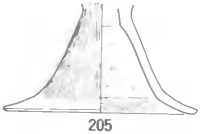

200

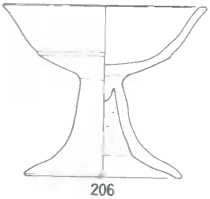
201

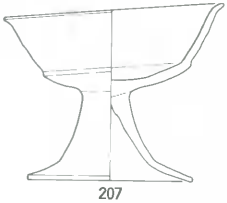
202

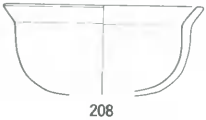
203


204


205


206

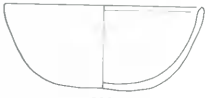

207


208

210

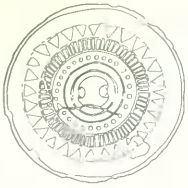
212

211


209

0　10cm

（1/4）



M９

0　5cm

（１/２）

拓影　（１/１）

掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
199	土師器	甕	(15.0)			良好	橙5YR7/6	砂礫	鈍い二重口縁・黒斑
200	土師器	壺？	(24.4)			良好	浅黄橙7.5YR8/3	微砂	二重口縁の壺か？・口縁部上端・下端に面を持つ
201	土師器	小形壺	(7.8)		9.8	良好	にぶい橙7.5YR74	微砂	外面赤色顔料・黒斑
202	土師器	小形壺	8.05		7.4	良好	橙5YR6/6	砂礫	底部はやや平底気味・黒斑
203	土師器	小形壺	(9.7)		9.7	良好	橙5YR6/6	細砂	外面ナデ・やや上位に肩部を持つ
204	土師器	高杯	26.15			良好	橙2.5YR6/8	微砂	器壁磨滅・杯部は立ち上がって大きく外方へ開く
205	土師器	高杯		(13.0)		良好	浅黄橙7.5YR8/4	細砂	脚部荒いハケメ
206	土師器	高杯	(14.0)	10.8	12.2	良好	橙5YR7/6	細砂	口縁部は鈍い上端面を形成・脚部はやや雑な作り
207	須恵器（土師質Ｃ）	高杯	(15.3)	11.6		不良	(内・外)橙2.5YR6/8	細砂	技法は須恵器的で焼成は土師質
208	土師器	鉢	(13.2)			良好	橙5YR7/8	微砂	内外面丁寧なナデ
209	土師器	鉢	(13.7)		5.9	良好	橙2.5YR6/6	精良	磨滅・端部は丸く納める
210	土師器	壺				良好	橙5YR6/8	微砂	体部はユビオサエで成形・底は平底・黒斑
211	陶質土器	不明				良好	灰赤10R4/2	精良	口縁部
212	軟質系土器	甕				良好	にぶい黄橙10YR6/3	細砂	非常に軟質

掲載番号	器種	材質	法量				備考
			最大長（mm）	最大幅（mm）	最大厚（mm）	重量（g）	
M９	珠文鏡	銅	[illegible]		2.4		

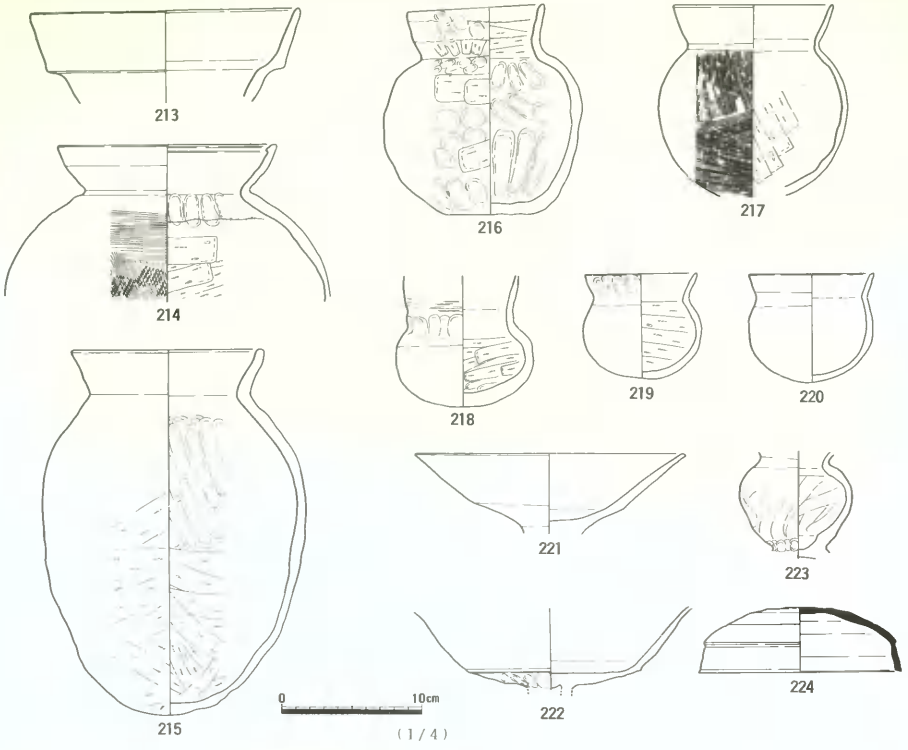
竪穴住居62は、竪穴住居61の東14ｍの位置に検出した。斎富遺跡の中で大形の住居のうちの一つである。住居は少し東西に長い方形を呈するもので、長軸712㎝、短軸638㎝、検出面からの深さは15～20㎝を測る。壁体溝は一部検出できなかった部分もあるが検出した。溝の幅は約15㎝、深さ約10㎝を測る。柱穴は４本を検出した。床面の中央よりに検出したもので、柱穴間の距離は東西が250～260㎝、南北が200～230㎝を測る。柱穴は円形を呈するもので直径25～40㎝、検出面からの深さ40～50㎝を測る。

遺物としてはやや多くの物を出土している。**M９**は珠文鏡である。完形での出土品であり、直径6.38㎝を測るもので、鏡面を下にして床面よりは少し高い位置で出土した。**199**は土師器の壺である。胴部から折れ曲がった口縁部は少し外に開きながら立ち上がるもので、外面に弱い稜を持つ。胴部外面はハケメ、内面はヘラケズリが見られる。**201**は小形の直口壺で、口縁部は少し外に開きながら立ち上がり、胴部は丸い。外面に赤色顔料の塗布が見られる。**204**は土師器の高杯の杯部である。底部との境に明瞭な稜線があり、口縁部はさらに開く。**206**も土師器の高杯である。杯部は底部との境に弱い稜線が見られる。脚部は柱部から裾に向けて開くもので、明瞭な折れ線は見られない。**207**は成形技法は須恵器的であるが、胎土、焼成は土師質のものである。**211**は器形は不明であるが、陶質土器の口縁部と思われる。**212**は軟質系土器の甕である。住居の時期は５世紀前半と考えられる。（井上）

竪穴住居63

1　茶灰色土

形　状	規模(cm)		床面積(m²)	柱穴	中央穴			方形土壙(cm)			大町	壁体溝	高床部	[illegible]	時　期
	長軸	短軸			形	幅(cm)	深さ(cm)	長	幅	深					
a　隅丸長方形	460	4[illegible]2	16.6	[illegible]2	−	−		不明	不明	(14)			−		古墳後十中葉
b　隅丸長方形	[illegible]	46[illegible]	[illegible]	4[illegible]4	−			71	[illegible]	[illegible]	−		−		



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
213	土師器	壺	19.0			良好	にぶい黄橙10YR7/2	細砂	二重口縁・器壁磨滅
214	土師器	甕	15.2			良好	にぶい黄橙10YR7/3	細砂	外面タタキメ後ハケメ・口縁端部は内側に面を持つ・赤色顔料
215	土師器	甕	13.2		25.9	良好	にぶい黄橙10YR7/3	砂礫	長胴気味・内面ヘラケズリ・強いナデ上げ
216	土師器	壺	9.5	5.8	14.7	良好	赤褐10YR5/4	砂礫	粗雑な外面調整・底部半底
217	土師器	甕	11.0			良好	灰黄褐10YR6/2	細砂	外面細かいハケメ・くの字口縁部の端部は丸く納める
218	土師器	壺				良好	淡黄2.5Y8/3	砂礫	頸部外面荒いハケメ・ユビオサエ・黒斑
219	土師器	甕	7.8		7.5	良好	にぶい橙7.5YR6/4	微砂	屈曲部ヨコナデ・ユビオサエ
220	土師器	甕	8.7		7.7	良好	にぶい褐7.5YR5/3	微砂	屈曲部ヨコナデ
221	土師器	高杯	(18.6)			良好	橙5YR7/6	微砂	杯部鈍く屈曲して外方へ大きく開く・外面ヘラケズリ後ヨコナデ
222	土師器	高杯				良好	にぶい黄橙10YR7/3	細砂	
223	土師器	脚付き			(7.7)	良好	淡黄2.5Y8/3	砂礫	脚台部欠損・外面黒斑
224	須恵器	蓋	14.2		4.6	良好	灰(内・外・断)灰N5/	微砂	端部鋭い面を持つ・回転右

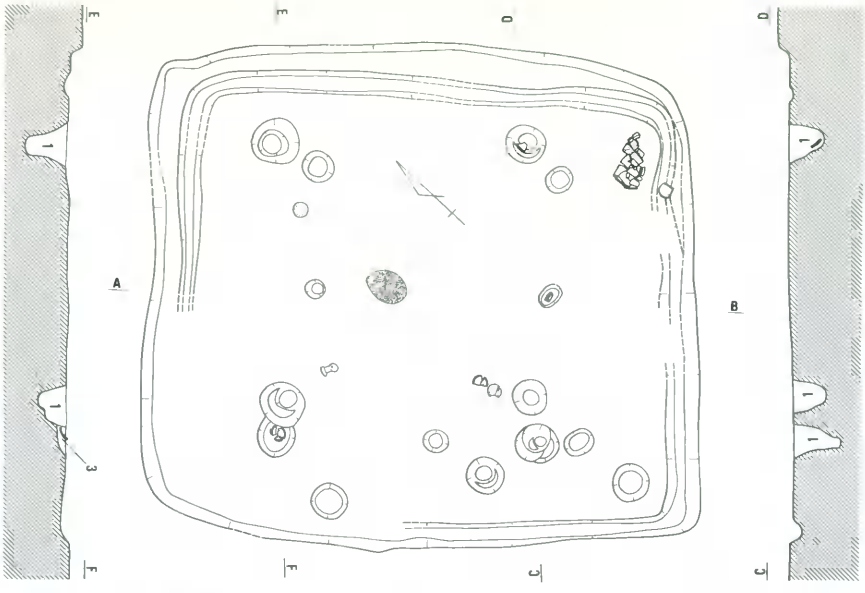
竪穴住居63は、N・O18・19グリッド（MM2・MM6区）に位置する。2軒が重複し、検出状況から内側の壁体溝の竪穴住居63aが竪穴住居63bに先行すると考えられる。

竪穴住居63aの平面形は隅丸長方形で、その主柱は柱間 140cmを測る2本である。また、西辺に直交する4条の小溝の伴う可能性があり、間仕切りの溝と考えられる。

拡張後の竪穴住居63bの平面形は、南東にやや広がるものの、ほぼ同様の隅丸長方形である。主柱は中央寄りの4本で、東辺に直交する間仕切りの溝とその間の方形土壙が伴う。なお、底面と周囲の焼けた径20cmの浅いくぼみを中央で検出したが、いずれの住居に属するものか確認できなかった。

出土遺物は土師器と須恵器である。土師器には壺、甕、高杯があり、その特徴からおおむね5世紀後半と考えられる。須恵器の杯蓋は、重複する新しい時期の土壙のものの可能性がある。　(高田)

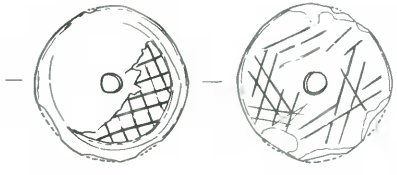
竪穴住居64



1　暗黄褐色土(黄色土含む)　　3　暗褐色土
2　暗黄色土(炭・焼土粒多く含む)

0　2m　(1/60)

形状	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	床面積(m²)	柱穴	中央穴 形	中央穴 幅(cm)	中央穴 深さ(cm)	方形土壙(cm) 長	方形土壙(cm) 幅	方形土壙(cm) 深	火所	壁体溝	高床部	カマド	時期
方形	573	555	23.6	4/4	—	—	—	—	—	—	○	○	—	—	古墳後半後葉

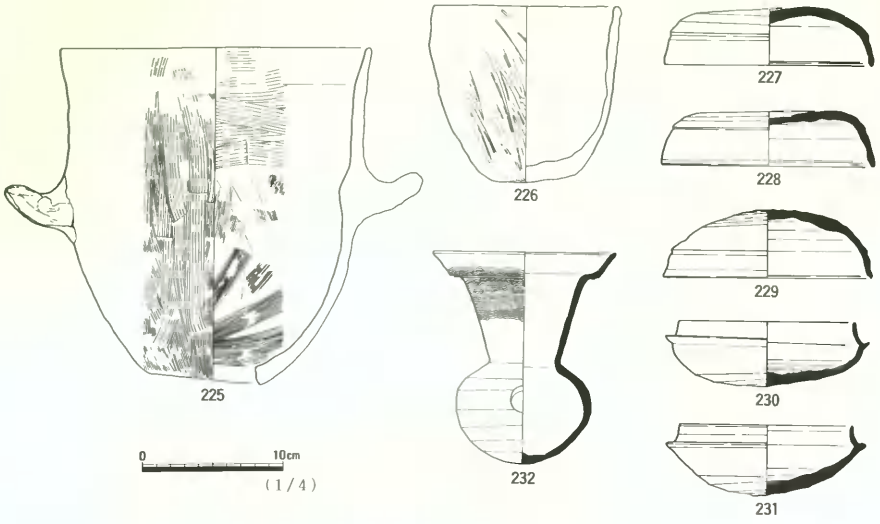


R 4　(1/2)

O 7　(1/1)

掲載番号	器種	材質	形態	色調	最大径(mm)	最大厚(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
R 4	紡錘車	土	F 1	灰黄2.5Y7/2	55.0	27.0	6.5	74.7	

掲載番号	器種	材質	色調	最大長(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
O 7	土玉	土	黒	7.10	8.55	2.00	0.53	

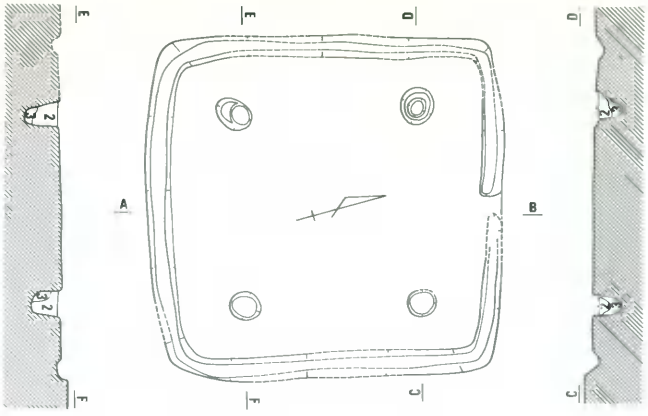


掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
225	土師器	甕	11.8		23.9	良好	橙5YR6/6	細砂	内外面ハケメ・底部は抜ける・把手部は貼り付け
226	土師器	鉢	(12.7)		12.5	良好	褐灰10YR4/1	微砂	平底・外面乱雑なヘラミガキ
227	須恵器	蓋	14.4		4.2	良好	(内・外・断)灰N5/	精良	稜部は沈線で形成・外湾するD縁部・端部は鈍い段を持つ
228	須恵器	蓋	14.7		4.0	良好	(内・外・断)灰N4/	砂礫	稜下部に沈線状の凹み・端部は丸く納め、鈍い稜を有す・ロクロ回転右
229	須恵器	蓋	14.6		4.8	良好	(内・断)灰N6/　(外)青灰5B5/1	細砂	稜部は沈線で形成・端部は段を持つ・ロクロ回転左
230	須恵器	杯身	(12.2)		4.6	良好	(内・断)明青灰5PB7/1 (外)青灰5PB6/1	微砂	立ち上がり部ハリツケ・端部丸く納める・内面のロクロナデ明瞭・ロクロ回転左
231	須恵器	杯身	12.0		5.1	良好	(内・外・断)灰N5/	砂礫	立ち上がり部折り込み・端部丸く納める・ロクロ回転右・ややひずみあり
232	須恵器	甕	(12.8)		15.0	良好	(内・外・断)暗灰N3/	精良	幅広の櫛描波状文

竪穴住居64は、Ｎ19グリッド（ＭＭ６区）に位置する。住居の平面形は方形を呈し、規模は長軸で573cm、短軸535cmを測る。残存状態が良くないため、２回の建て替えに伴う切り合い関係などは明確にし得なかった。外側の住居の壁体溝は南側隅付近で認められるが、これは北側に壁体溝が見られないことを考えると、むしろ内側の住居に伴う壁体溝がたまたま接するようにめぐっている可能性が強いように思われる。内側の住居の壁体溝は、北側では外側の住居の20cmあまり内側をめぐるが、南側はほぼ外側の住居に接するようにめぐっていたと考えられる。したがって、外側の住居が建て替えに伴って拡張されたとすれば、その面積はわずかである。柱穴は長軸方向より短軸方向の柱間間隔が長くなるように４本が配されているが、これらは近接する、あるいは切り合う２本の柱穴がセットで認められる。住居の中央からやや北西寄りには、床面が赤褐色によく焼けた場所があり、地床炉と考えられる。

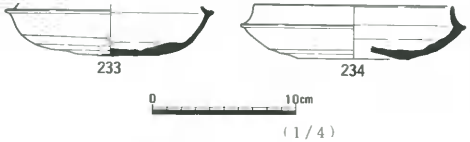
遺物はあまり多くないが土師器や須恵器をはじめ、紡錘車や土玉などが出土している。紡錘車は土製で、上面には篦描きの格子目が施され、下面は斜格子が施されるが粗雑である。土器の時期は古墳時代後半、およそ６世紀中ごろと考えられる。　（平井）

竪穴住居65



1　暗褐色土(礫含む)
2　暗灰色砂質土
3　〃　(黄色土ブロック含む)　(1/60)

形状	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	床面積(㎡)	柱穴	中央穴 形	中央穴 幅(cm)	中央穴 深さ(cm)	方形土壙(cm) 長	方形土壙(cm) 幅	方形土壙(cm) 深	火所	壁体溝	高床部	カマド	時期
方形	374	366	11.5	4/4	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	古墳後半末葉



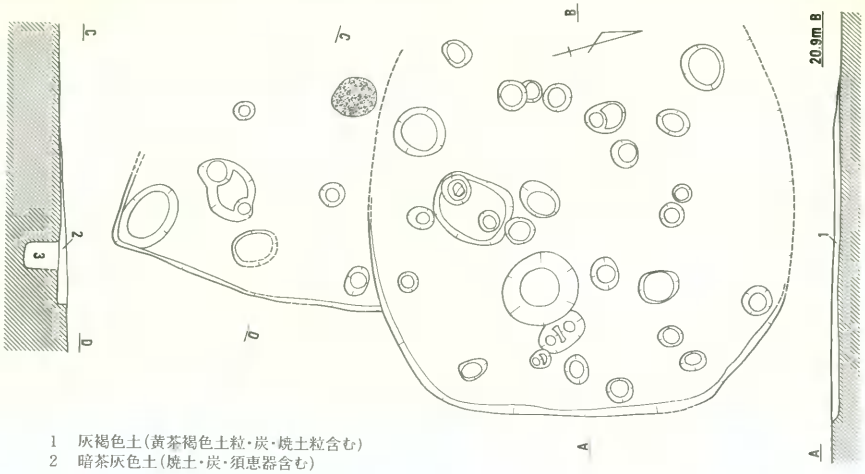
(1/4)

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
233	須恵器	杯身				良好	(内・外)灰N6/ (断)灰褐7.5YR5/2	砂礫	立ち上がり部は折り曲げて成形・外面自然釉・ロクロ回転右
234	須恵器	杯身	13.9			良好	(内・断)オリーブ灰2.5GY5/1 (外)暗青灰5B4/1	細砂	端部は丸く納める・立ち上がり部は折り曲げて成形・底部はやや変形気味・ロクロ回転右

竪穴住居65は、ＭＭ５区で検出された。一辺370cmほどの方形を呈する竪穴住居である。主柱穴は４本で構成される。壁体溝は、北側中央で一部確認されておらずとぎれる状況であった。カマドは検出されなかった。土壙78とこの部分で接し、本来的には土壙78がこの竪穴住居の構造の一部であった可能性は否定しきれなかった。

出土遺物は**233・234**の杯身を図示した。これからこの竪穴住居の時期は古墳時代後半６世紀後半と考えている。　(大橋)

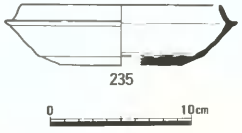
竪穴住居66・67



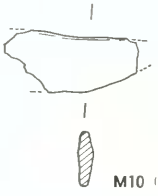
1　灰褐色土（黄茶褐色土粒・炭・焼土粒含む）
2　暗茶灰色土（焼土・炭・須恵器含む）
3　茶灰色土（黄褐色土含む）

（１/60）

形　状	規模（cm）		床面積（㎡）	柱穴	中央穴			方形土壙（cm）			火所	壁体溝	高床部	カマド	時　期
	長軸	短軸			形	幅（cm）	深さ（cm）	長	幅	深					
66　不整方形？	不明	不明	－	不明	不明	不明	不明	－	－	－	○	－	－	－	古墳後半末葉
67　多角形？	不明	不明	－	不明	不明	不明	不明	－	－	－	－	－	－	－	



（１/４）



M10（１/２）

掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
235	須恵器	杯身	（14.0）			良好	（内・外・断）灰N5/	精良	立ち上がり部折り込み・底部内面当て具痕残る・ロクロ回転右

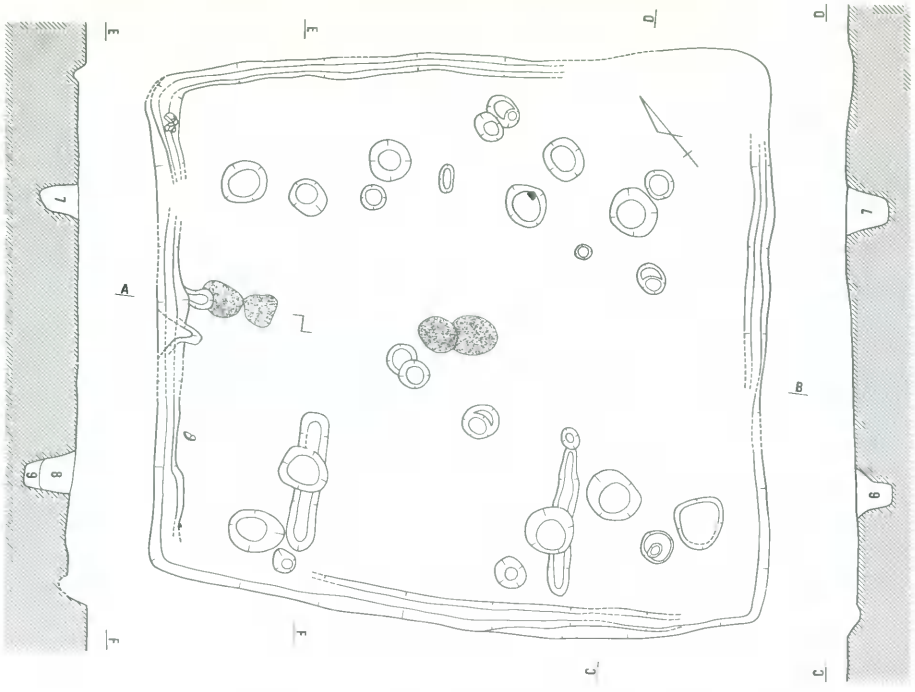
掲載番号	器種	材質	法　量				備考
			最大長（mm）	最大幅（mm）	最大厚（mm）	重量（g）	
M10	刀子？	鉄	47.6	21.0	7.2	9.07	

竪穴住居66・67は、M19グリッド（ＭＭ６区）に位置する。２軒の住居は切り合う関係にあるが、残存状態が良くないため今一つ明確ではないが、調査時の所見では住居67が住居66を切っていると考えられた。住居66は平面形が方形になるものと推定されるが、壁体溝もなく、また柱穴も明確でないなど、住居とするには躊躇したが、硬く焼けた厚みのある地床炉が見られることから住居と考えた。

住居67は平面形が隅丸方形ないし多角形を呈するものと考えられるが、残存部が少ないため明確さに欠ける。壁体溝はなく、ピットが多く見られるものの明確に柱穴と考えられるものも認められなかった。

遺物は少なく、須恵器と鉄片が出土した。鉄片は刀子の一部と考えられるもので、身と茎の区の部分であろう。土器の時期は古墳時代後半、およそ６世紀中ごろと考えられる。　　（平井）

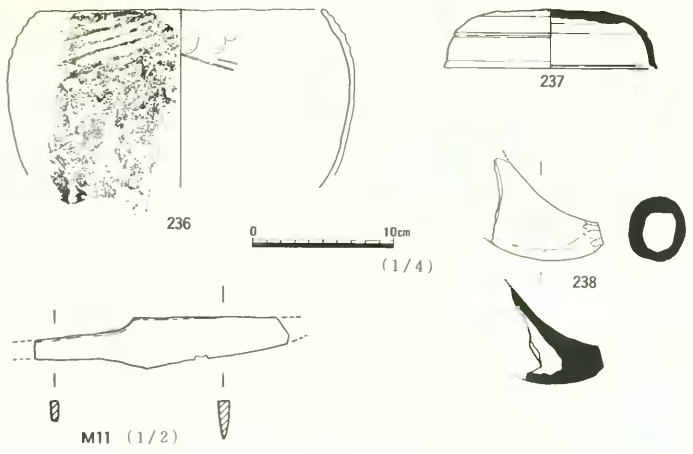
竪穴住居68



1　暗茶褐色土
2　暗黄褐色土
3　暗茶灰色土
4　明赤褐色土(焼土)
5　赤褐色土(焼土)
6　茶褐色土(黄色土ブロック含む)
7　〃
8　茶黄褐色土
9　黄褐色土

0　2m
(1/60)

形状	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	床面積(㎡)	柱穴	中央穴 形	中央穴 幅(cm)	中央穴 深さ(cm)	方形土壙(cm) 長	方形土壙(cm) 幅	方形土壙(cm) 深	火所	壁体溝	高床部	カマド	時期
方形	644	612	35.5	4/4	—	—	—	—	—	—	○	○	—	北西辺中央	古墳後半後葉



掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
236	土師器	鉢	(20.0)			良好	にぶい赤橙10R6/4	細砂	製塩土器・口縁部外面部分的にタタキメ残る・二次的に火を受けている
237	須恵器	蓋	15.0		4.2	良好	(内)灰5Y6/1　(外)灰N5/ (断)にぶい褐7.5YR6/3	細砂	稜部は沈線で形成・端部段あり・内面仕上げナデ・ミクロ回転左
238	須恵器	角状杯				良好	(内・外・断)灰N6/	精良	外面丁寧なナデ　内面シボリ状の調整

掲載番号	器種	材質	法量				備考
			最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	
M11	刀子	鉄	(90.6)	17.0	5.2	15.48	茎幅9.0mm、厚4.0mm

竪穴住居68は、Ｌ・M22グリッド（ＭＭ６区）に位置する。後述する建物41と重複しており、その切り合い関係から住居が古いことを確認している。

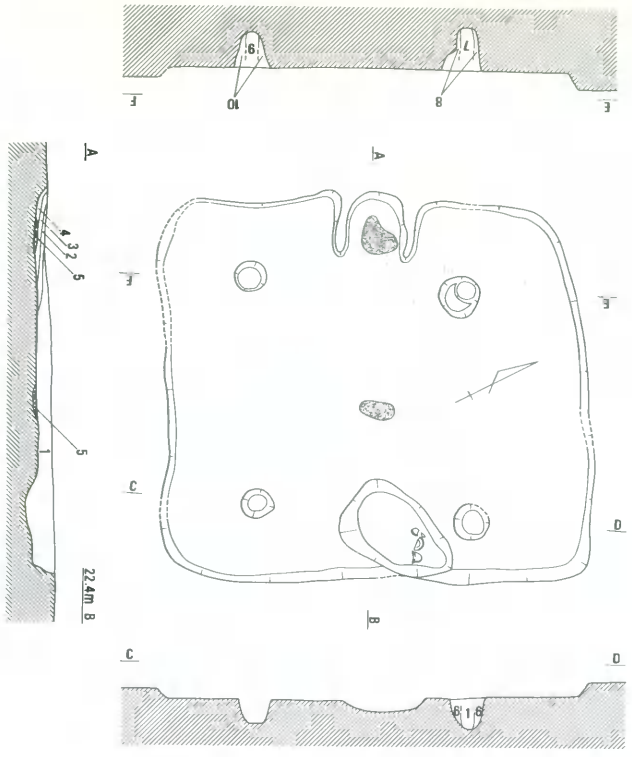
住居の平面形は、南西辺がやや広がる方形である。壁に沿って壁体溝が巡るが、東・南・西の各隅で途切れている。床面は東隅から西隅に向かって傾斜し、特に西隅では床面の礫層が若干盛り上がっていた。柱数は４本と考えられ、北東－南西側で295cm、西北－東南側で335～345cmを測る。小溝は、南西辺の壁体溝付近から直角に延びるもので、長さ150cm、幅23～28cm、深さ３cmを測り、埋土は暗褐色土である。間仕切り溝と考えられ、西北側のものは主柱のひとつに切られている。西北辺中央で検出したカマドは、上部を削平で欠いており、袖の一部と被熱面が遺存していた。袖は、埋まった壁体溝の上に黄灰色粘土を置いたもので、本来はさらに内側まで延びていたと考えられる。被熱面は２か所あり、いずれもよく焼けている。被熱面の厚さは、壁体側が３cm、内側が８cmであった。なお、住居中央でも被熱面を検出しており、２か所のうち西北側の方が新しいことを確認した。

以上の検出状況は、同一住居内での炉からカマドへの変遷、あるいは炉とカマドの併用を示すものであろうが、カマドと壁体溝、主柱と間仕切り溝との関係から前者の可能性を考えておきたい。

出土遺物には、土師器、須恵器、刀子、鉄滓がある。中でも特筆されるのが**238**の角状杯である。胴部以上を欠損し、尖底部のみ残存するもので、外面は丁寧なナデ、内面はヘラケズリ調整する。須恵器角状杯の出土は、これまでに全国で10例11点が知られている。本資料は、近畿地方より西でのはじめての出土である。

住居の廃絶時期は、検出状況と遺物の特徴から６世紀前半と考えられる。　（高田）

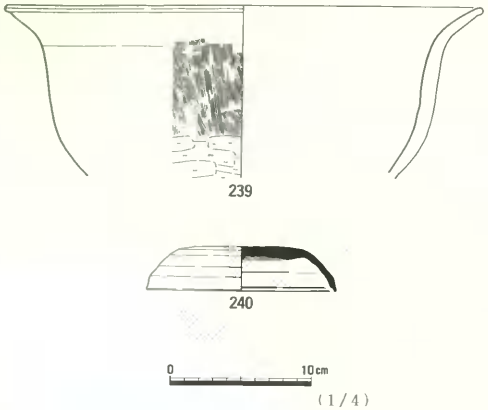
竪穴住居69

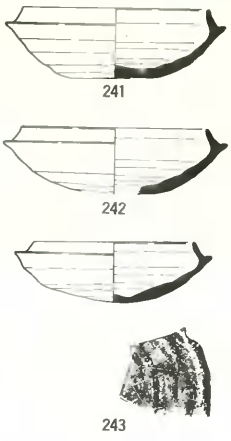


1　黒褐色土
2　黒灰褐色土(焼土含む)
3　〃　(マンガン含む)
4　暗灰色粘質土(黄褐色土含む)
5　赤褐色土(焼土)
6　黒褐色土(黄褐色土・礫含む)
7　黒灰褐色粘質土
8　黄灰褐色土(黄褐色土含む)
9　黒灰褐色土
10　暗黄灰褐色土(礫含む)

0　2m
(1/60)

形状	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	床面積(m²)	柱穴	中央穴 形	中央穴 幅(cm)	中央穴 深さ(cm)	方形土壙(cm) 長	方形土壙(cm) 幅	方形土壙(cm) 深	火所	壁体溝	高床部	カマド	時期
方形	447	410	16.1	4/4	—	—	—	—	—	—	○	—	—	西辺中央	古墳後期末葉





掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
239	土師器	鉢	(33.5)			良好	橙7.5YR7/6	砂礫	体部外面上半細かいハケメ・下半ヘラケズリ
240	須恵器	蓋	(13.3)		3.2	良好	(内・外・断)暗青灰5PB4/1	微砂	稜は鈍い・端部面有り・天井部は平坦気味・内面仕上げナデ・ロクロ左回り
241	須恵器	杯身	12.9		5.0	良好	(内・外・断)青灰5PB5/1	微砂	立ち上がり部ハリツケ・端部は丸く納める・ロクロ右回り
242	須恵器	杯身	12.95			良好	(内・外)青灰5PB5/1 (断)暗赤灰5R3/1	微砂	立ち上がり部ハリツケ・端部丸く納める・ロクロ右回り
243	須恵器	杯身	11.2		4.4	良好	(内・外)暗青灰5PB4/1 (断)灰赤7.5R4/2	微砂	立ち上がり部ハリツケ・端部丸く納める・底部内面仕上げナデ・杯外面にヘラ記号・ロクロ右回り

竪穴住居69は、ＭＭ４区に位置し、竪穴住居39の北近くにある。

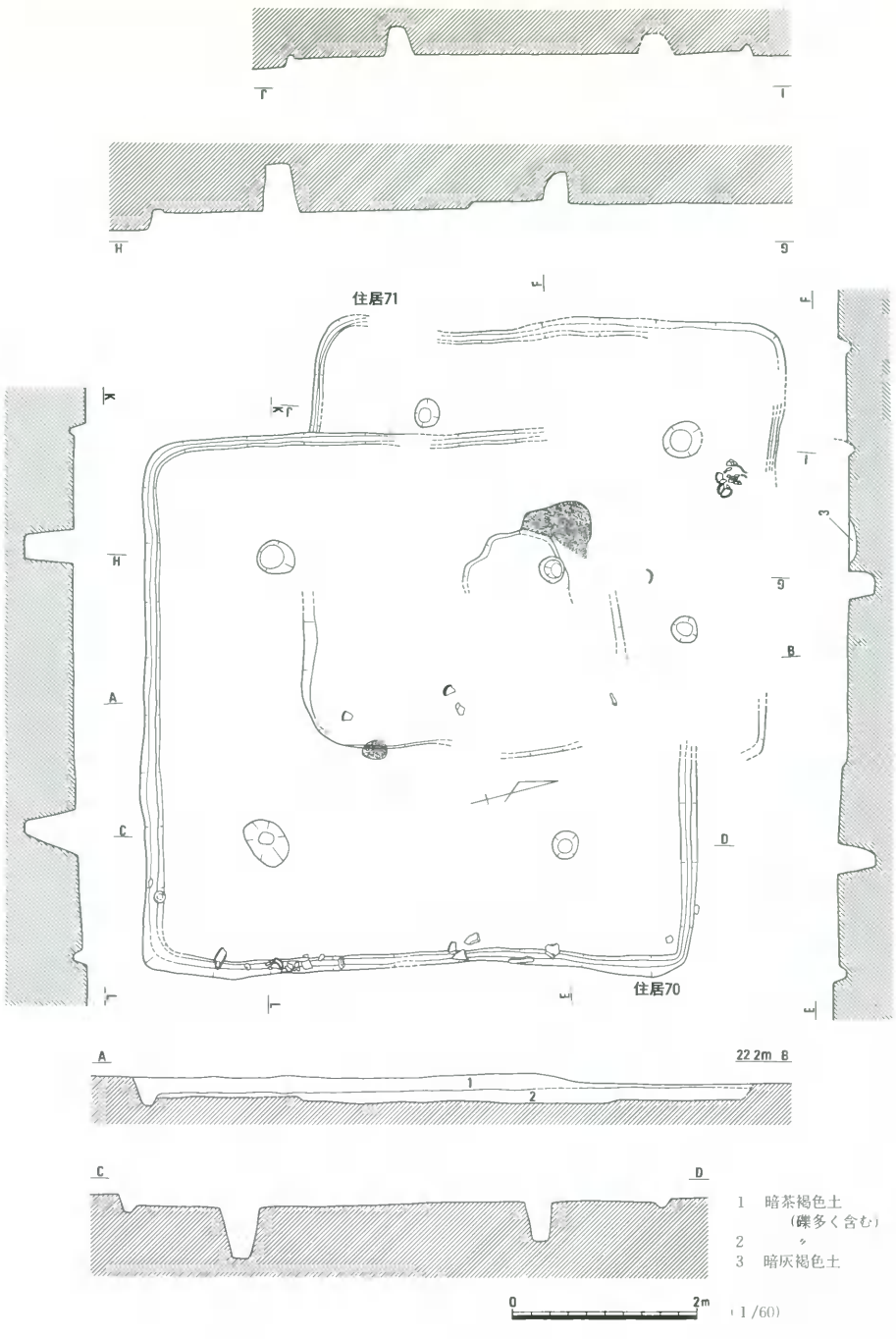
平面形形態は方形を呈し、その確認面から床面までは15cmを測る。壁体溝は認められず、西壁中央に作り付けのカマドを設けている。柱は４本認められ、その内の１本を除いて土層断面により柱痕を認めた。カマドが設けられている壁の反対側の東壁中央に125×80cm、深さ10cmほどの平面形態が不整楕円形を呈する土壙を認めている。床面中央付近に35×20cmの楕円状の火所が認められたが、床面の表面のみが赤く変色している程度である。

出土遺物は、**239**の土師器と**240**～**243**の須恵器である。**239**は頸部から外方へ屈曲する口縁部を作り、胴部は丸味をもって、底部へと移行する。調整は胴部上半は細かいハケメ、下半はヘラケズリを認める。**240**は杯蓋で、天井部は平坦気味となり稜はきわめて省略化した内容を示し、口縁部内面の段を有する。**241**は杯身で、立ち上がりは内傾し、端部は丸くなる。**242**も杯身で、立ち上がりは短く内傾し、端部は丸くなる。**243**も杯身である。立ち上りは短く内傾し、端部は丸底気味となる。

これらの土器の出土位置は、**239**は土壙の南側の柱近くの床面、**241**はカマドを設けている壁の南側の柱との間の床面、**240**・**242**・**243**は東壁に認められる土壙よりそれぞれ検出されている。

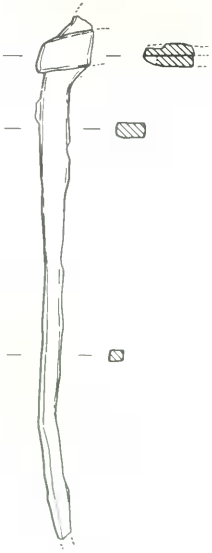
竪穴住居の時期は、これらの出土遺物から６世紀後半が考えられる。　　(下澤)

竪穴住居70・71

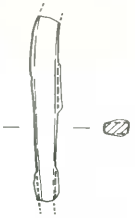


形　状	規模(cm)		床面積(m²)	柱穴	中央穴			方形土壙(cm)			火所	壁体溝	高床部	カマド	時　期
	長軸	短軸			形	幅(cm)	深さ(cm)	長	幅	深					
70　方形	(510)	不明	(22.0)	3/4	−	−	−	−	−	−	−	○	−	−	古墳後半後葉
71　方形	598	572	(32.7)	4/4	−	−	−	−	−	−	−	○	−	−	

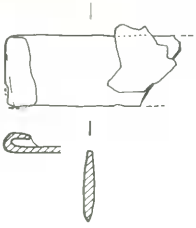
(1/4)



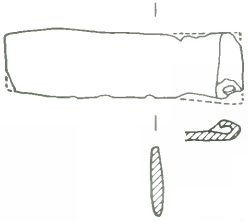
M12　(1/2)



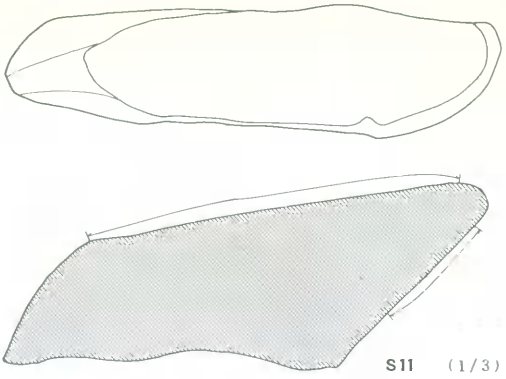
M13　(1/2)



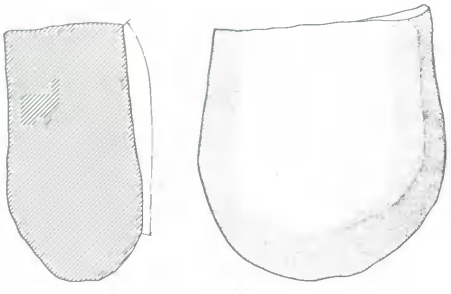
M14　(1/2)



M15　(1/2)

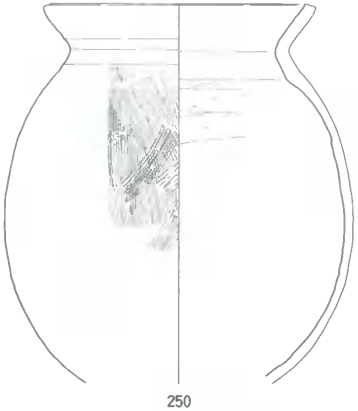


S11　(1/3)

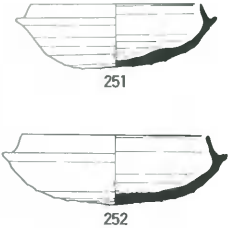


S12　(1/3)

S13　(1/3)



250

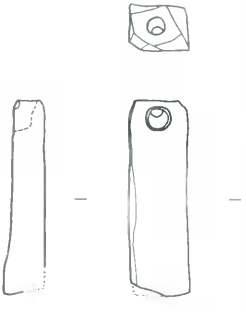


251

252

0　10cm

(1/4)



S14　(1/2)

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
244	須恵器	蓋	(17.2)			良好	(内・外)灰N5/1 (断)褐灰10YR5/1	精良	稜は鈍い沈線で表現・端部段を有す・天井部内面当て具痕・ロクロ右回り
245	須恵器	蓋	(19.6)			良好	(内)暗青灰5B4/1 (外)青灰5B5/1 (断)暗赤灰4/1	精良	稜部は浅い段によって形成・端部に沈線が巡り段状をなす・天井部内面にアテ具痕跡・ロクロ右回り
246	須恵器	杯身	(12.4)		4.2	良好	(内・断)青灰5PB5/1 (外)灰5Y6/1	精良	立ち上がり部折り込みで内傾・端部は丸く納める・ロクロ左回り
247	須恵器	杯身	12.2		4.9	良好	(内)灰7.5Y5/1 (外)灰N5/1 (断)紫灰5P5/1	精良	完形品・立ち上がり部折り込み・底部外面に押圧痕・端部は丸く納める・ロクロ左回り
248	須恵器	杯身	(13.0)		4.9	良好	(内・断)灰N5/1 (外)灰N4/1	精良	丁寧な成形・立ち上がり部折り込み・ロクロ左回り
249	須恵器	甕	(19.7)			良好	(内)灰白5Y7/1 (外)灰7.5Y6/1 (断)灰N6/1	精良	口縁部断面三角形・頸部外面はカキメ様の調整
250	土師器	甕	17.6			良好	褐5YR6/6	細砂	やや器壁厚い・口縁端部は面を有し強いナデによる凹部が認められる
251	須恵器	杯身	12.0		4.5	良好	(内・外・断)灰N7/	砂礫	立ち上がり部ハリツケ・端部は丸く納める・ロクロ右回り
252	須恵器	杯身	13.0		5.0	良好	(内)灰N6/ (外)灰N6/ (断)灰N6/	精良	立ち上がり部ハリツケ・端部丸く納める・底部なす面当て具痕跡残る・ロクロ右回り

掲載番号	器種	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
S11	砥石	流紋岩	258	70	90	2250.00	
S12	砥石	砂岩	(137)	129	70	2180.00	
S13	砥石	流紋岩	231	60	72	1880.00	
S14	砥石	流紋岩	69.2	21	13	31.61	孔有り

掲載番号	器種	材質	法量 最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
M12	不明	鉄	185.0	11.0	8.0	22.24	頭に別個体がくっついている
M13	釘?	鉄	(65.0)	(10.0)	6.3	8.71	
M14	鎌	鉄	(61.0)	24.5	4.3	18.87	
M15	鎌	鉄	83.0	24.0	6.0	20.09	

竪穴住居70・71は、ＭＭ４区にあり、竪穴住居71は竪穴住居70に切られている。

竪穴住居70は、一辺約600cmの方形の竪穴住居である。検出面から床面までの深さは20cmで、床面の標高は、21.9ｍである。幅20cm、床面からの深さ10cmほどの壁体溝がめぐる。柱穴は４本検出され、柱間距離は東西310～315cm、南北320～325cm、柱穴の深さは30～50cmである。北西隅、中央南東部に赤く焼けた火所が確認された。

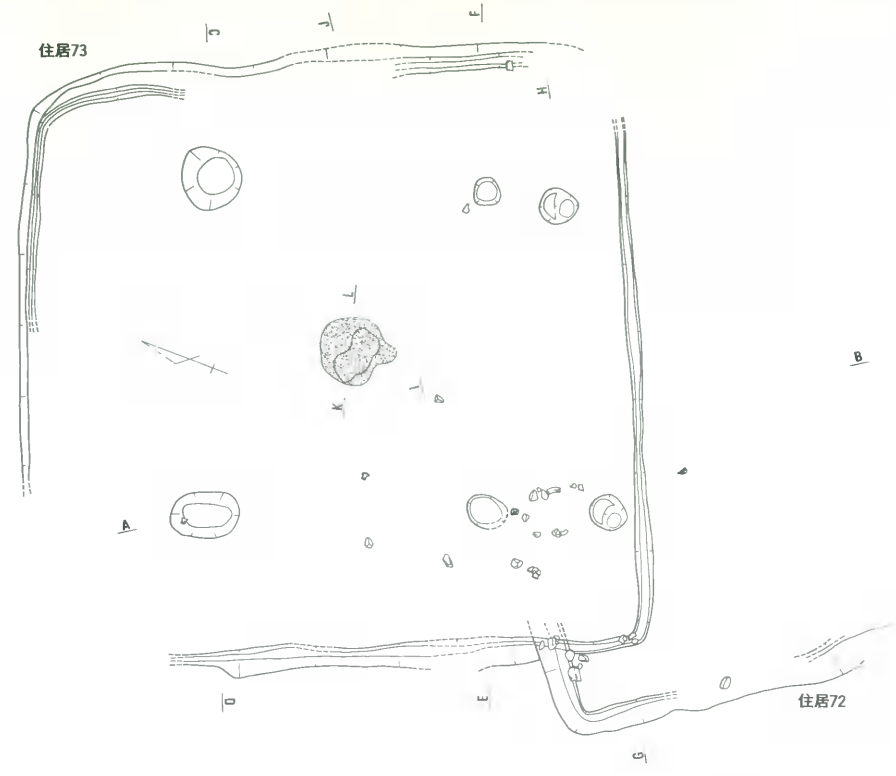
住居内から須恵器杯蓋**244・255**、杯身**246～248**、甕**249**、鎌状の柄付き鉄器**M12**、鎌**M14・M15**、砥石**S11～S13**が出土している。これらの遺物からこの住居の時期は、古墳時代後半期の６世紀中頃に位置付けられる。

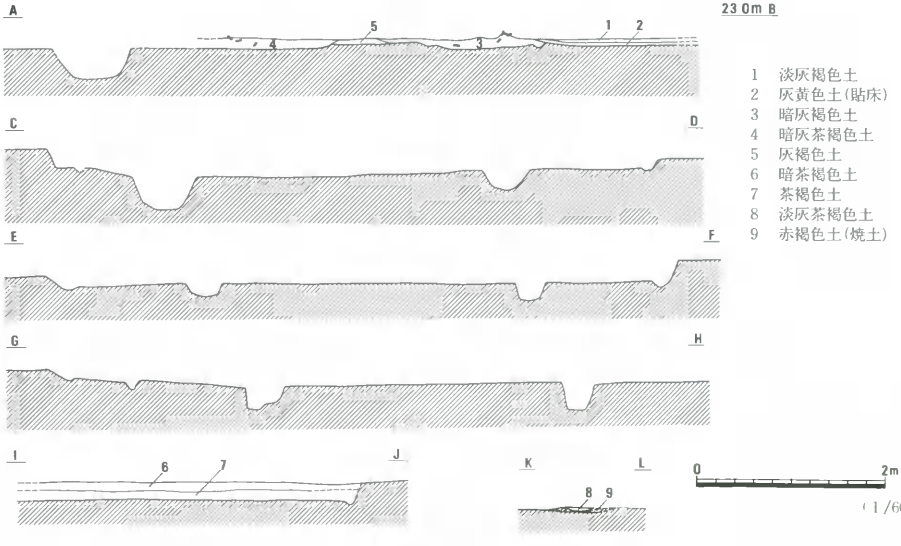
竪穴住居71は、竪穴住居70に切られ北側50～60cm、西側90cmほどが残っているが、住居70の床面下に５～10cmの深さで残存している。東西幅約480cm、南北510cmを測る。部分的ではあるが幅10cm、深さ10cm前後の壁体溝が確認された。柱穴は南東隅１本を除き３本検出できた。柱間距離は東西220cm、南北230cmである。

住居内から土師器甕**250**、須恵器杯身**251・252**、携帯用砥石**S14**が出土している。この**S14**は端部に円形の孔を小口面から長側面にかけて斜め方向にあけている。

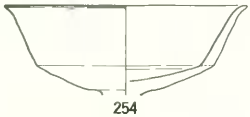
この住居の時期は出土遺物から古墳時代後半・６世紀中頃と考えられ、竪穴住居70に壊されているが大きな時期差はみられず、建て替えと判断される。　　(伊藤)

竪穴住居72･73


住居73
住居72
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L

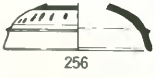

A
23.0m B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
1 淡灰褐色土
2 灰黄色土(貼床)
3 暗灰褐色土
4 暗灰茶褐色土
5 灰褐色土
6 暗茶褐色土
7 茶褐色土
8 淡灰茶褐色土
9 赤褐色土(焼土)
0
2m
(1/60)

形状	規模(cm) 長軸	短軸	床面積(㎡)	柱穴	中央穴 形	幅(cm)	深さ(cm)	方形土壙(cm) 長	幅	深	火所	壁体溝	高床部	カマド	時期
72 方形	不明	不明	−	2/(4)	−	−	−	−	−	−	−	○	−	−	古墳後半中葉
73 方形	656	650	(38.4)	4/4	−	−	−	−	−	−	○	○	−	−	

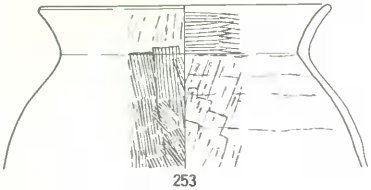


254

255



256



253

257

0　10cm　(1/4)

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
253	土師器	甕	20.4			良好	にぶい黄橙10YR7/3	砂礫	「く」の字口縁・胴内面に粘土紐接合痕
254	土師器	高杯	(16.8)		16.3	良好	にぶい橙7.5YR7/4	精良	脚柱部差し込み・口縁端部はわずかに外反する・ロクロ使用か？
255	須恵器	蓋	(12.4)		3.3	良好	(内・外・断)灰N5/	精良	稜部は水平方向に引き出す・端部は鈍い段を有す・ロクロ右回り
256	陶質系土器	蓋	(10.2)			良好	(内)灰N7/　(外)灰N5/ (断)灰N5/	精良	稜部は水平方向に引き出す・天井部外面櫛描沈線・刺点文・端部鈍い面を持つ
257	須恵器	甕	19.6			良好	(内・外・断)灰N5/	微砂	口縁部断面鈍い三角形・端部は上方へつまみ上げる

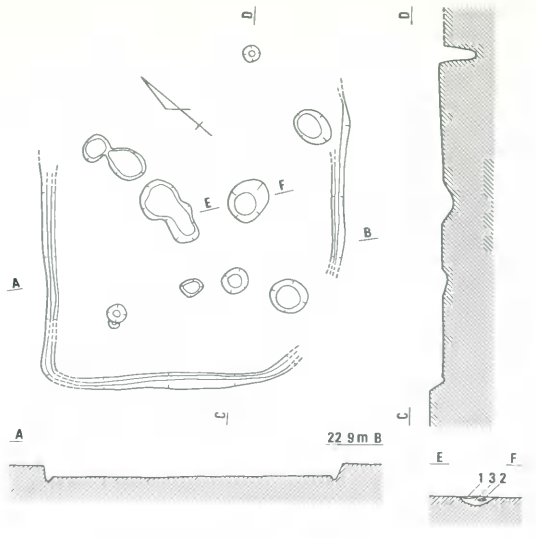
竪穴住居72は、ＭＭ４区に位置し竪穴住居42の南東にあり、竪穴住居73と重複している。平面形態は、西コーナー部分と南西辺の一部のみが確認されているが、方形を呈すると考えられる。壁体溝も認められ、柱穴は竪穴住居73床面上に２個検出されている。竪穴住居73との関係であるが、当住居の貼り床がそれの上に認められること、さらに出土遺物が明らかに新しい時期を示していることから竪穴住居73の方が後出する。

出土遺物は、**253**の土師器と**257**の須恵器である。**253**は、図中の西コーナー付近に示されているのがそれである。

竪穴住居73は、竪穴住居72と重複している。平面形態は、東と西のコーナー部分は確認することができなかったが方形を呈すると考えられる。壁体溝は全周すると考えられ、柱穴は４本柱である。この柱穴の中央には、火所が認められている。火所は、径70cmほどで中央部が60×30cmにわたって良く焼けた焼面が認められる。

出土遺物は、**254**が土師器、**255**が須恵器で、**256**が韓式系土器である。**255**は天井部は丸味をもち、体部との稜は鋭く、口縁部は「く」の字状に開いている。**256**は、陶質土器と考えられるものである。天井部外面に櫛描沈線と列点文を施文している。　(下澤)

竪穴住居74



（1/60）

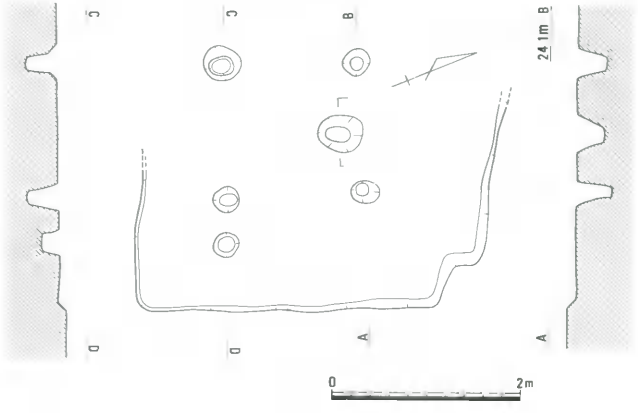
1　灰色土
2　焼土
3　黒灰色土（焼土・炭化物多く含む）

竪穴住居74は、MM4区に位置し、竪穴住居42の北東側にある。

平面形態は、西コーナー部分が方形を示し南コーナーは検出できなかったが、壁の移行状況から隅丸を呈している。また、北東辺は確認することができなかった。壁体溝は検出されたが、柱穴については床面上に認められたピットが柱穴を構成するものなのかどうかについて、調査時においても検討したが特定できなかった。時期については出土遺物が認められず不明であるが、古墳時代のものと思われる。　（下澤）

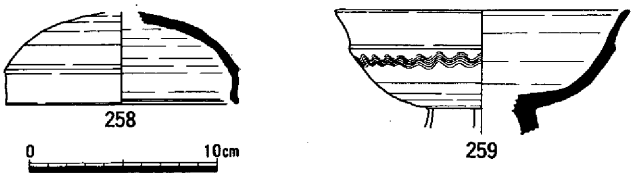
形　状	規模（cm）		床面積（m²）	柱穴	中央穴			方形土壙（cm）			火所	壁体溝	高床部	カマド	時　期
	長軸	短軸			形	幅（cm）	深さ（cm）	長	幅	深					
不整方形	不明	31	—	不明	不明	不明	不明	—	—	—	—	—	—	—	古墳

竪穴住居75



（1/60）

形　状	規模（cm）		床面積（m²）	柱穴	中央穴			方形土壙（cm）			火所	壁体溝	高床部	カマド	時　期
	長軸	短軸			形	幅（cm）	深さ（cm）	長	幅	深					
不整方形	不明	360	—	4/4	楕円	47×39	29	—	—	—	—	—	—	—	古墳時代中期



(1/4)

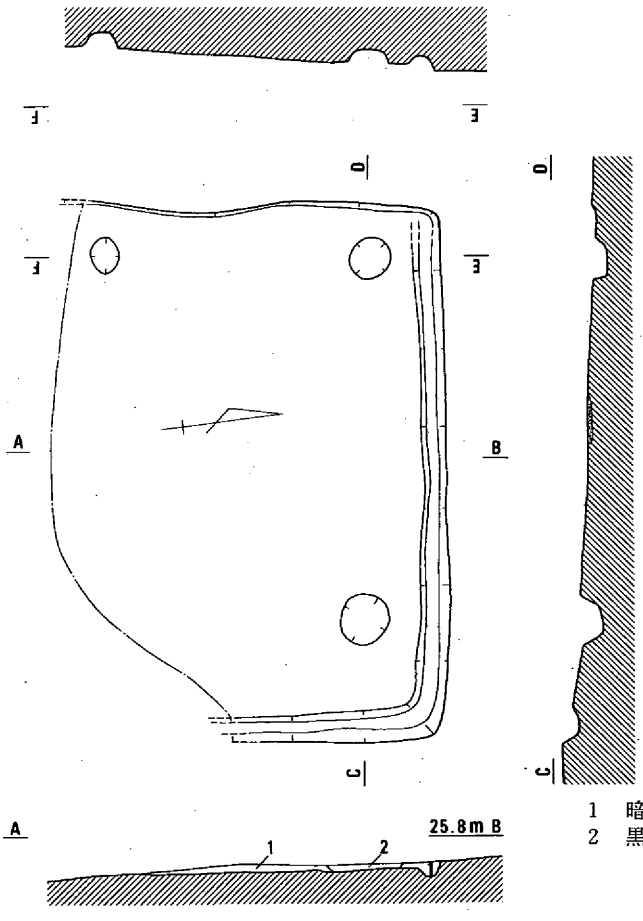
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
258	須恵器	蓋	12.4		4.9	良好	(内・断)灰白5Y7/1　(外)灰5Y6/1	細砂	端部段を有す・稜部はわずかにつまみ出す・ロクロ回転右
259	須恵器	高杯	15.5			良好	(内・外)灰N4/　(断)赤灰10R5/1	細砂	丁寧なロクロナデ・透かし孔5方向か？・ロクロ回転右

竪穴住居75は、ややいびつな方形の平面形を呈するが北東の角は、ほぼ直角に掘り残しのように張り出している。この部分は、検出の際きわめて明瞭に現われた平面形である。

作り付けのカマドや炉の痕跡は、まったく認められない。したがって、住居というよりは、工房のような性格を想定すべきかもしれない。床面のやや北側に中央穴と推定される楕円形の土壙がある。

柱穴は、東西南北辺にほぼ平行して4本の配置が考えられる。出土遺物には、**258・259**の須恵器が認められる。　(岡田)

竪穴住居76



1　暗褐色土(土器片含む)
2　黒褐色土(焼土・炭化物多く含む)

0　2m

(1/60)

竪穴住居76は、ＭＢＯＸ１区の北辺で検出された方形の住居である。

主軸はほぼ南北方向である。

埋土は北側のみにわずかに残り、南側は検出できなかった。図面に範囲は示していないが、北辺中央にカマドの残骸かと思われる焼土がある。北西隅床面直上には土師器があった。

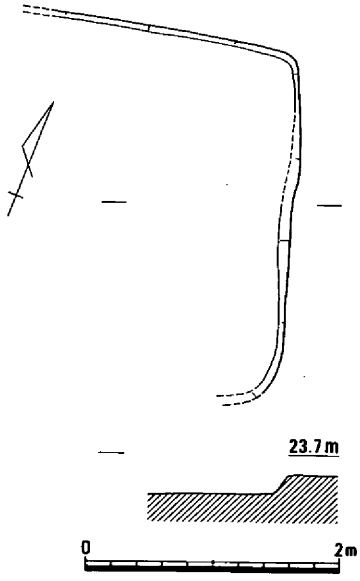
柱穴は貼り床を除去後に検出した。

遺物は土師器の甕、須恵器の甕小片を確認している。須恵器の時期は6世紀中葉相当であるが、当住居に伴うかどうかは微妙なところである。住居は古墳時代後半に属するものと考えておきたい。

ちなみに、この住居の南で縄文時代に属する石匙が表採されている。(氏平)

形状	規模(cm) 長軸	短軸	床面積(m²)	柱穴	中央穴 形	幅(cm)	深さ(cm)	方形土壙(cm) 長	幅	深	火所	壁体溝	高床部	カマド	時期
方形	436	不明	–	(3/4)	–	–	–	–	–	–	–	○	–	–	古墳後半

竪穴住居77



(1/60)

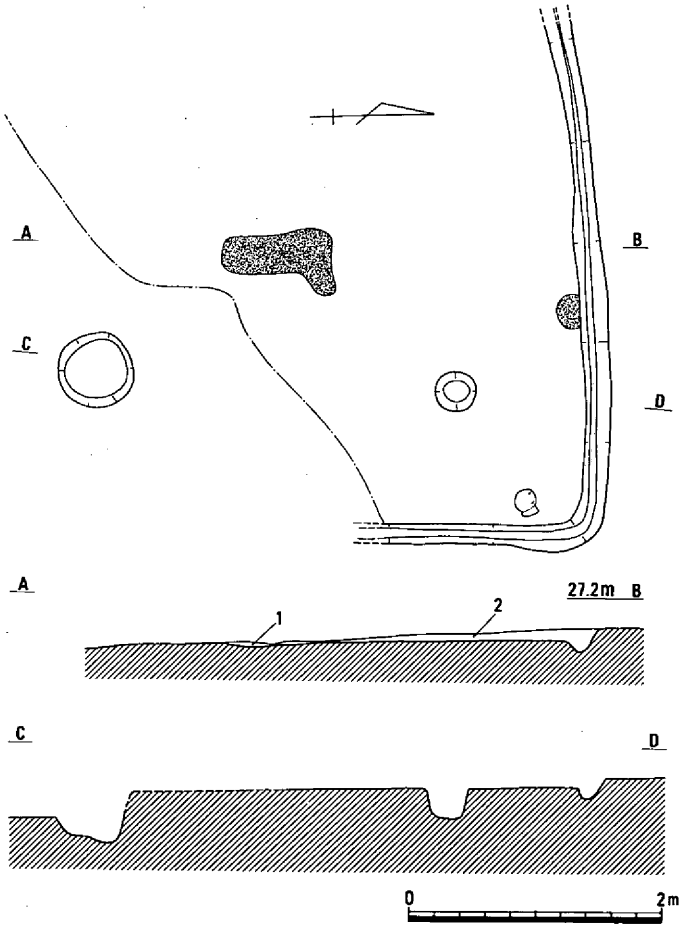
竪穴住居77は、ＭＢＯＸ１区の南西端に位置する。南西側は調査区外に出るため、未調査である。

柱穴、壁体溝、貼り床は確認できなかった。検出当初は埋土上面の黄色土を床面と考えていたが、堆積状況から貼り床ではないと判断した。住居の埋土は灰褐色土である。

遺物には須恵器の甕底部、杯身口縁部などと小片があり、それらが５世紀末葉にあたることから住居の時期も同時期に相当する可能性がある。　　(氏平)

形状	規模(cm)		床面積(m²)	柱穴	中央穴			方形土壙(cm)			火所	壁体溝	高床部	カマド	時期
	長軸	短軸			形	幅(cm)	深さ(cm)	長	幅	深					
方形	不明	不明	—	1/	不明	不明	不明	—	—	—	—	○	—	—	古墳後半中葉

竪穴住居78



(1/60)

1　赤褐色土(焼土)
2　暗茶褐色土

竪穴住居78は、ＭＢＯＸ１区の東端に位置する。西側は調査区外に当たり、未調査である。

検出は容易であったが、残りは浅く、南半の壁体溝と床面はすでに消失していた。

中央に焼土面を確認した。また、北東隅に土師器を検出した。

遺物には土師器甕・須恵器杯身などの小片が出土している。これらから、住居の時期は古墳時代後半であると考えられる。　　(氏平)

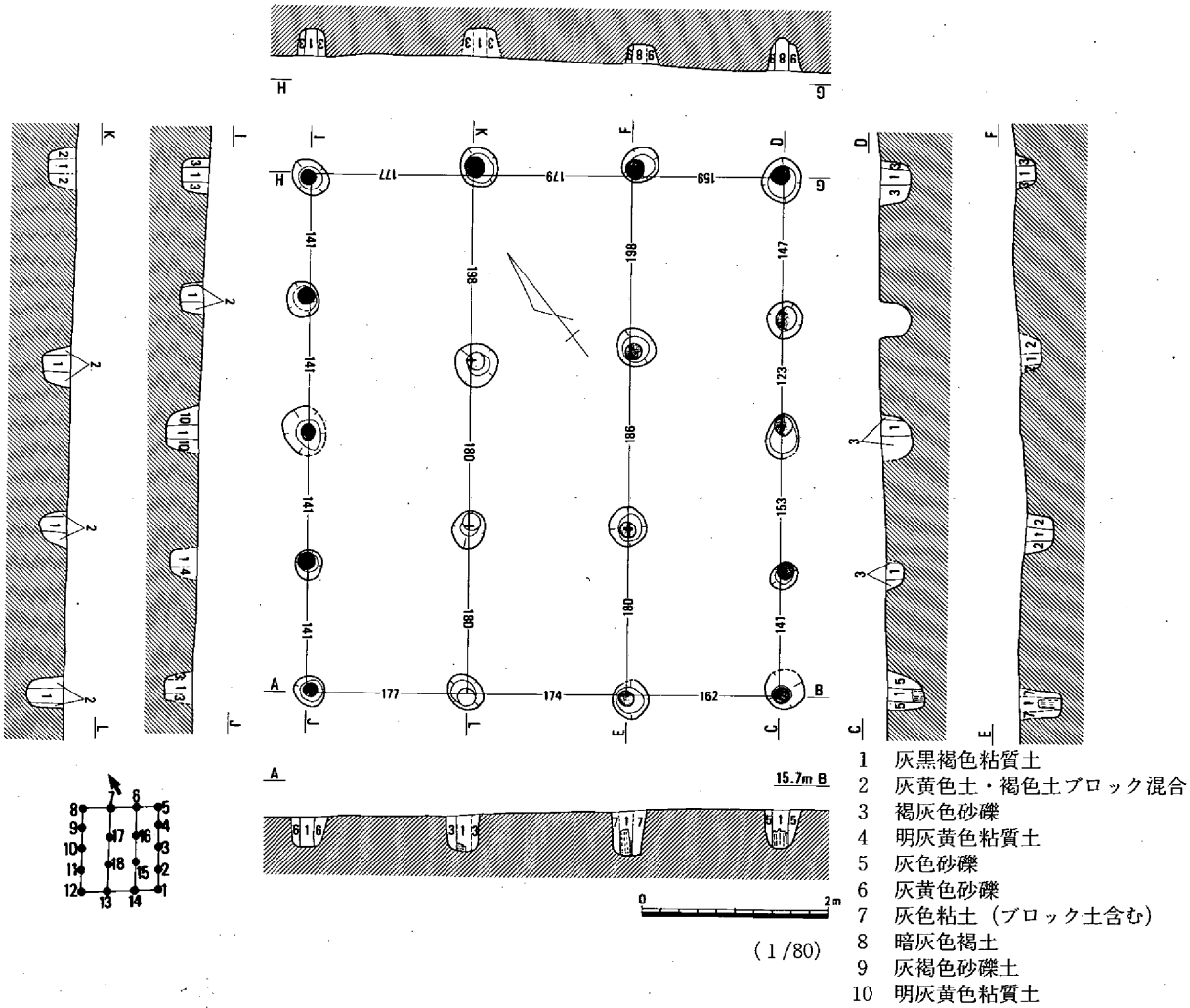
形状	規模(cm)		床面積(m²)	柱穴	中央穴			方形土壙(cm)			火所	壁体溝	高床部	カマド	時期
	長軸	短軸			形	幅(cm)	深さ(cm)	長	幅	深					
方形	不明	不明	—	2/4	—	—	—	—	—	—	○	○	—	—	古墳後半

（２）掘立柱建物

掘立柱建物は、76棟報告する。これらのほとんどは出土遺物からは詳細な時期を判別することが困難であった。そのため、柱穴規模・形態・埋土・建物方位を勘案して時期を判断したものが多い。中世以降の建物と考えられるものは15棟であり、これ以外のものは、古墳時代後半から奈良・平安時代にかけてのものである。また、掘立柱建物として認識できなかったが、多数の柱穴が検出されており、本来はここで掲載した棟数以上の掘立柱建物が存在したものと思われる。

特に注目されるのは、後述する奈良時代の二重の区画溝であり、この区画内に配されたと思われる建物方向を正方位にとる掘立柱建物群である。これらは、なんらかの官衙関連の遺構とも想定されるものである。しかしながら、区画の全容が不明であり確実にこの区画に伴う掘立柱建物を指摘することは難しい。以下、個別に概要を記述することとする。　（大橋）

掘立柱建物１



（１/80）

1　灰黒褐色粘質土
2　灰黄色土・褐色土ブロック混合
3　褐灰色砂礫
4　明灰黄色粘質土
5　灰色砂礫
6　灰黄色砂礫
7　灰色粘土（ブロック土含む）
8　暗灰色褐土
9　灰褐色砂礫土
10　明灰黄色粘質土

位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（m²）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
ＫＢ１	4×3	564	513～515	123～153	159～179	28.9	N-40°-E	円	42	古墳後半

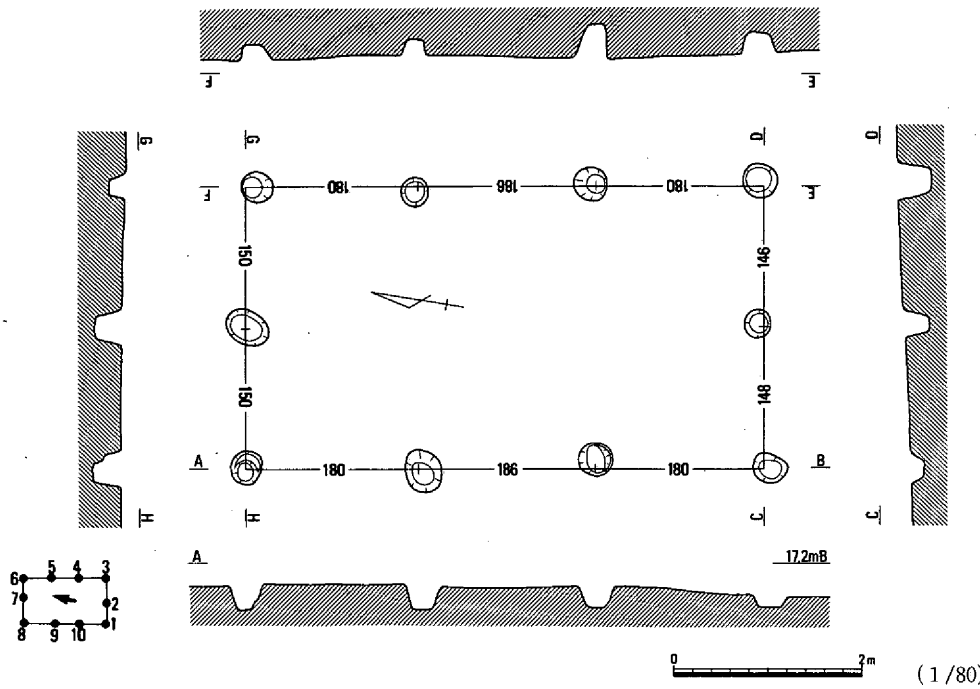
掘立柱建物１は、遺跡地の最も低い地点で検出された総柱建物である。建物規模は桁行４間、梁間３間で、身舎は30㎡に近い。建物内部に後世の仏教建築の「内陣」にみられるような、１×１間の仕

(1/4)

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
260	須恵器（土師質ｃ）	甕				不良	(内・外・断)浅黄2.5Y7/3	微砂	複数の柱穴から同一個体破片あり・平行タタキメ

切り区画がある点が注意される。Ｐ15～18に囲まれる部分がそれである。建物を構成する18本の柱穴のうち７本には、径15～18cmの丸い柱根の一部が遺存していた。Ｐ15では、柱根の下位すなわち柱穴の底に柱の沈下を防ぐために小礫が敷き詰められていた。建物の西方には、２×２間の小規模な建物の痕跡もあり、南周辺にはこれらの建物の柱穴と同一規模の柱穴が散在している。柱穴掘り方からの出土遺物はきわめて少ないが、**260**の須恵器甕片が複数の柱穴掘り方から出土しており、この建物の時期を特定する有力な手がかりとなっている。破片は土師質を呈しているが、比較的古式の須恵器と考えられることから、この建物の遺跡地内の集落全体における位置付けが検討課題である。湿潤で居住に不適と思われる立地は、むしろ集落の「出入口」的な位置を占める点で注意される。　(岡田)

掘立柱建物２

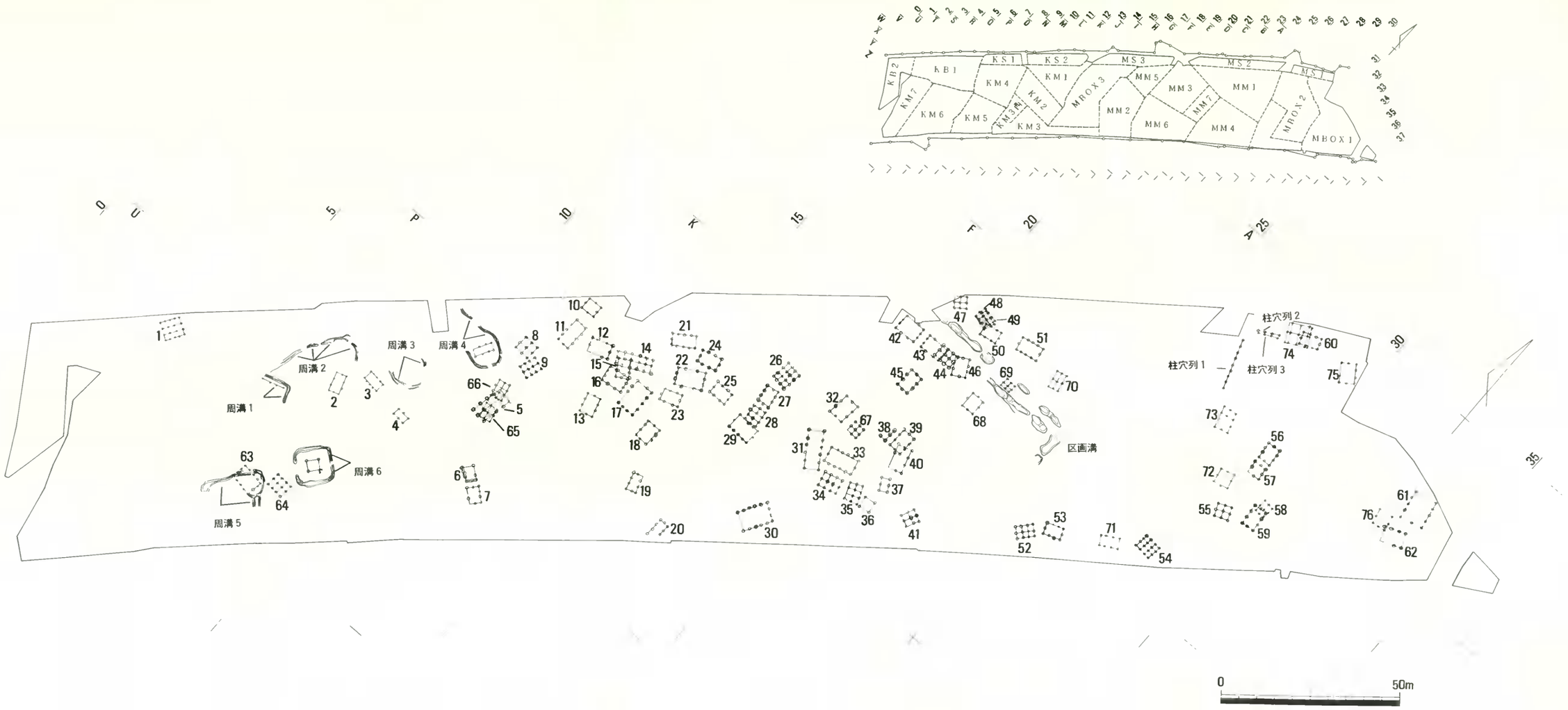


(1/80)

位置(調査区)	規　模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm) 桁	梁	面積(㎡)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期
ＫＭ４	3×2	546	294～300	180～186	146～150	16.2	N-9°-W	円	33～36	古墳

掘立柱建物２は、Ｔ・Ｕ８グリッド(ＫＭ４区)に所在する。ほぼ南北方向に棟を向ける３×２間の建物で、規模は桁行546cm、梁間294～300cmを測る。柱穴の掘り方は円形で、その規模は径35cm前後を測る。柱間間隔は大きな較差はなく、桁行が180cm，梁間は150cmあまりである。

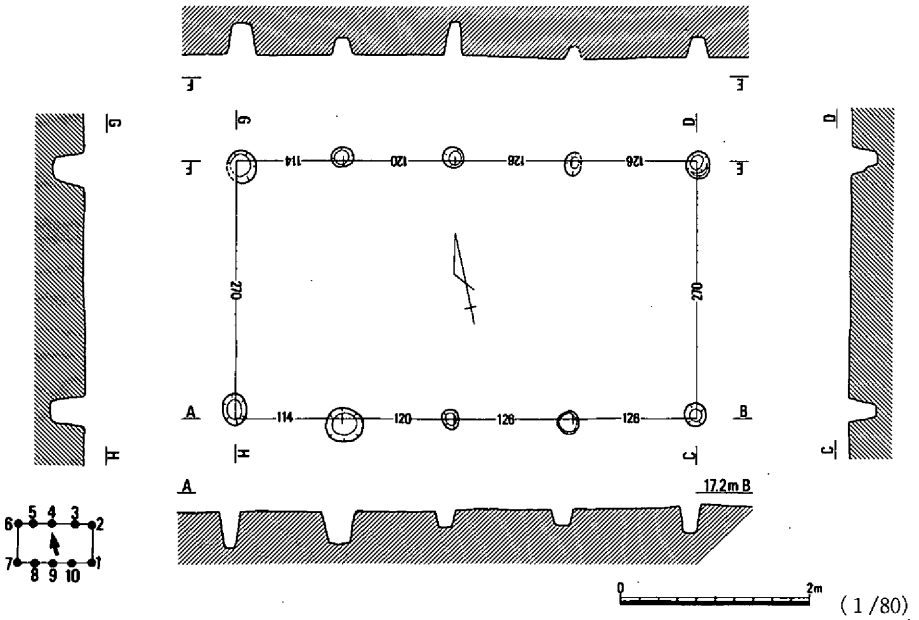
建物の時期は遺物がないため明確にし得ないが、柱穴の埋土などから古墳時代に属すると推定される。　(平井)



第11図　掘立柱建物・柱穴列・周溝遺構・区画溝配置図(1/1,000)

(数字のみは掘立柱建物)

掘立柱建物３



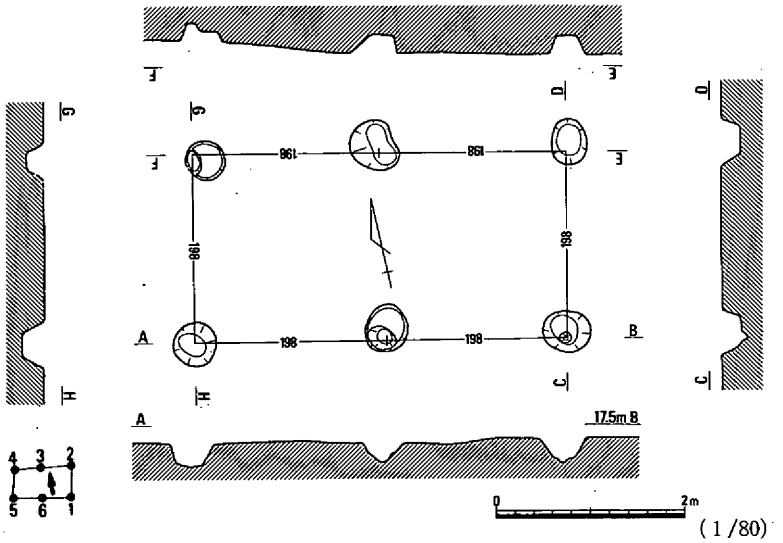
（１/80）

位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
ＫＭ４	4×1	486	270	114～126	270	13.1	N-78°-W	円	23～43	古代以前

掘立柱建物３は、Ｔ８・９グリッド（ＫＭ４区）に位置し、包含層除去後の礫層上面で検出した。周囲には建物２・４、周溝遺構２・３があり、建物４とその軸線がほぼ平行する。建物の規模は、４×１間で、桁行486cm、梁間270cmを測り、桁行の柱間を114～126cmとやや短くそろえている。柱穴掘り方の平面形は円形と楕円形で、その規模は径23～43cmであるが、四隅のＰ１・Ｐ２・Ｐ６・Ｐ７はやや大きい。埋土は灰褐色土と灰黄褐色土で、柱痕は確認していない。

出土遺物はなく、詳細な時期は不明であるが、黒褐色埋土の中世の柱穴とは区別できるため、それより古い建物となる可能性が高い。　（高田）

掘立柱建物４



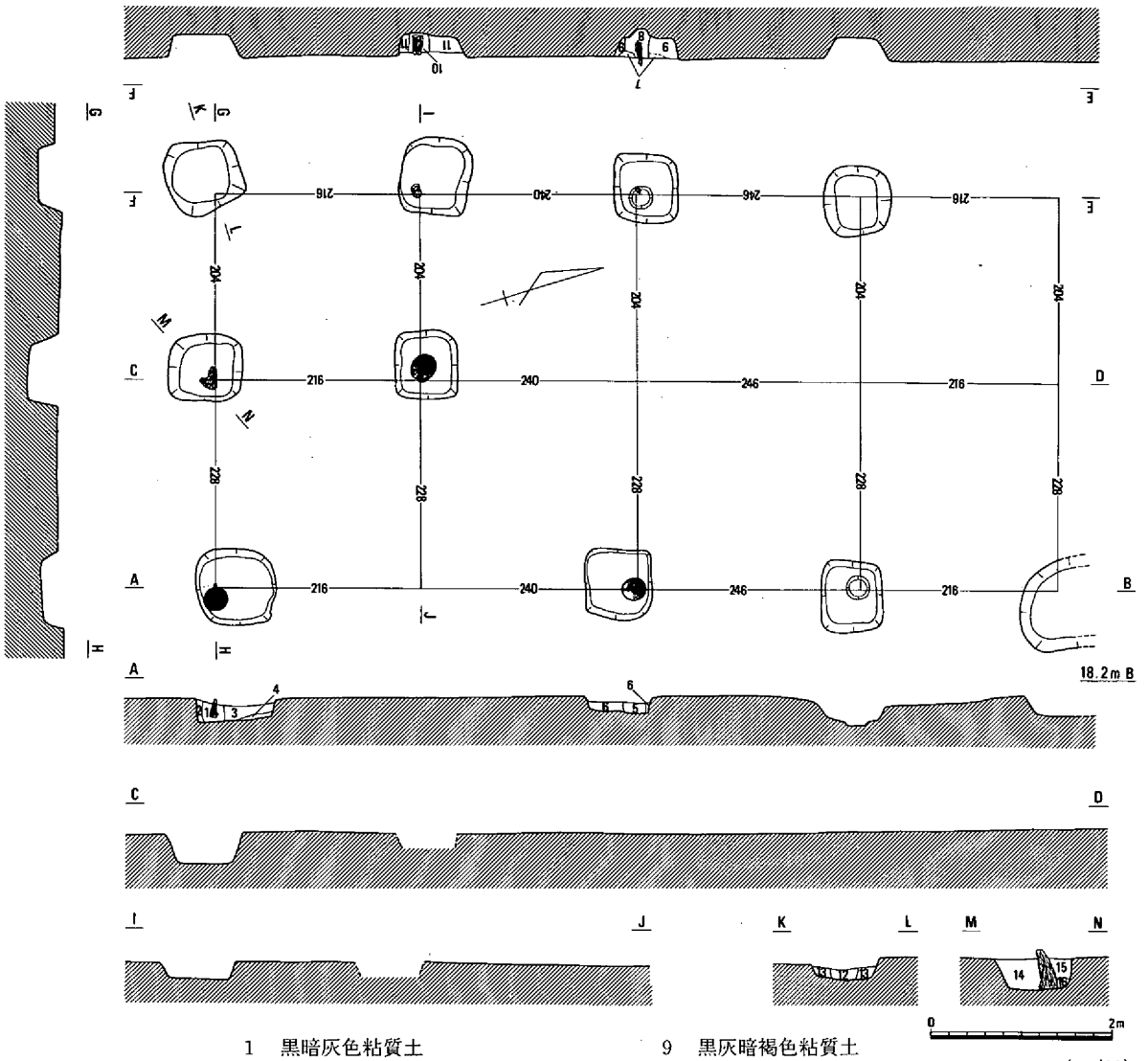
（１/80）

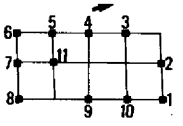
掘立柱建物４は、Ｔ９・10グリッド（ＫＭ４区）に位置する。ほぼ東西に棟を向ける２×１間の建物で、規模は桁行396cm、梁間198cmを測る。柱穴掘り方はほぼ円形を呈し、その規模は径45cm前後を測る。柱間間隔は、桁行、梁間ともに198cmで一定している。

建物の時期は遺物がないため明確にし得ない。　（平井）

位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
ＫＭ４	2×1	396	198	198	198	7.8	N-77°-W	円	42～49	？

掘立柱建物５





1　黒暗灰色粘質土
2　黒暗灰色土（黄色土少し含む）
3　黒暗褐色粘質土（黄色土少し含む）
4　砂礫
5　黒灰色土（礫少し含む）
6　黒暗褐色粗砂礫（粘質土含む）
7　暗茶褐色粘質砂
8　黒暗褐色粘質土
9　黒灰暗褐色粘質土
10　黒色粘質土
11　黒灰色粘土（粗砂・礫少し含む）
12　黒褐色粘土
13　黒暗褐色土（礫・砂含む）
14　黒暗褐色粘質土（礫少し含む）
15　〃
16　黒灰色粘質土（粗砂少し含む）

（1/80）

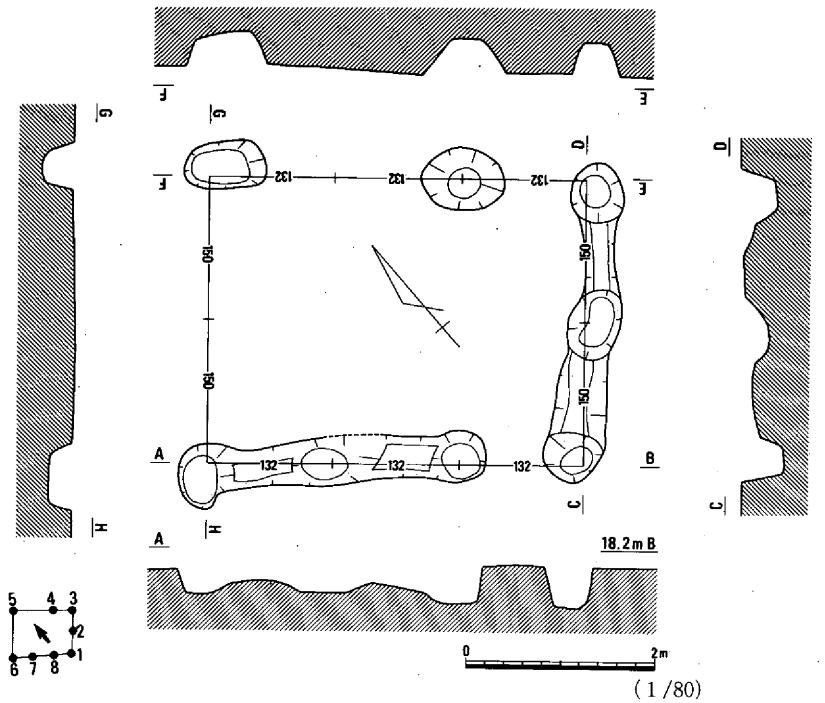
位置(調査区)	規　模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm)		面積(m²)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期
				桁	梁					
ＫＭ２	4×2	918	432	216～246	204～228	39.7	N-17°-E	方	80×74	奈良？

掘立柱建物５は、ＫＭ２区に位置し、掘立柱建物(65・66)と重複して検出されている建物である。長軸をわずかに東に向けてはいるが、ほぼ南北方向に主軸を持った桁行４間、梁間２間の総柱の掘立柱建物と判断したが、５か所で柱穴が検出されなかった。残存する柱穴が浅いため、これより浅いものは削平されているのであろう。検出し、掘り上げた柱穴は10本であり、Ｐ４・Ｐ５・Ｐ７・Ｐ８・Ｐ11の５本には柱の木材が残存していた。建物柱穴掘り方平面形態はすべてのものが隅丸方形状を呈し、大きさも一辺80cmほどの一定したものである。

出土遺物は細片少量であり、時代の決め手はむずかしいが、奈良時代の可能性を考えている。

（二宮）

掘立柱建物６

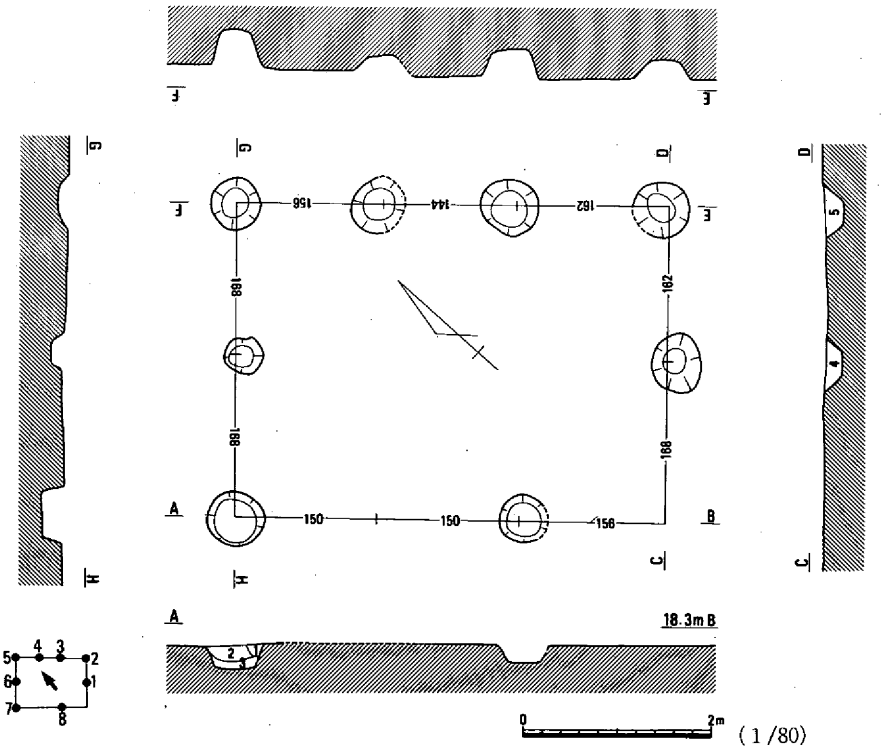


（１/80）

掘立柱建物６は、掘立柱建物５の南東11ｍの位置に検出した。すべての柱穴が検出できたものでないが桁行３間、梁間２間と考えられる建物である。Ｐ１～Ｐ３・Ｐ６～Ｐ８は、掘り方と掘り方の間が溝で繋がっており、布掘り状を呈している。他の柱穴については、その様な状況は見られなかった。柱間の距離は桁が132cm、梁が150cmを測る。出土遺物がないため時期は不明である。　（井上）

位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
ＫＭ３	3×2	396	300	132	150	11.9	N-48°-W	円	56～75	？

掘立柱建物７



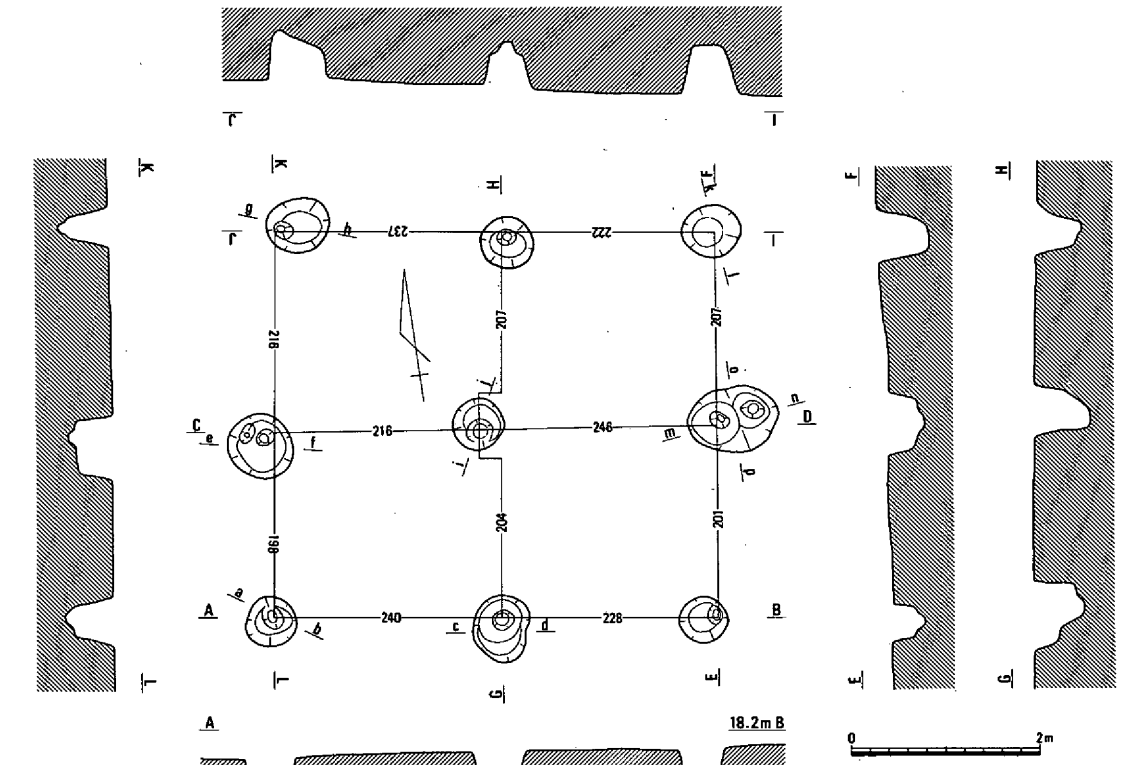
（１/80）

1　黒灰色粘質土　　3　暗灰色粘質土　　5　暗灰褐色粘質土（礫含む）
2　灰褐色粘質土　　4　灰色粘性砂質土（礫含む）

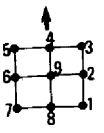
掘立柱建物７は、掘立柱建物６の南東２ｍの位置に検出した。これもすべての柱が検出できてはいないが桁行３間、梁間２間の建物と考えられる。柱穴の平面形は円形を呈するもので直径53～57cmを測る。柱穴間の距離は桁が144～162cm、梁が162～168cmを測る。柱穴からは５世紀末頃の須恵器が出土しておりそれより新しい時期の建物と考えられる。　（井上）

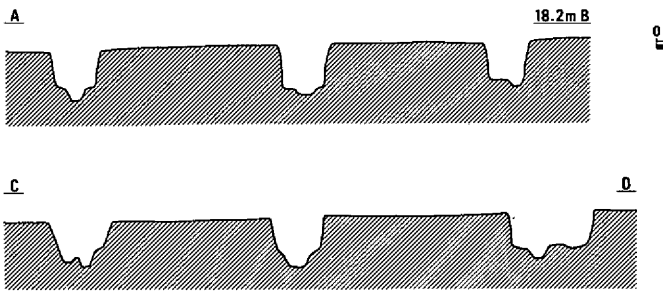
位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
ＫＭ３	3×2	456～462	330～336	144～162	162～168	15.3	N-40°-W	円	53～57	古墳後半中葉以降

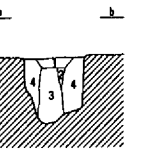
掘立柱建物8



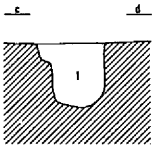
(1/80)



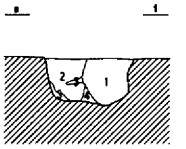




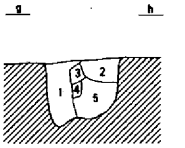
1　淡灰褐色弱粘質土
(黄褐色土ブロック含む)
2　黒褐色粘質土
3　黒褐色強粘質土
4　淡黒褐色粘質土



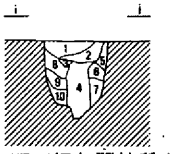
1　暗赤茶褐色粘質土



1　灰褐色粘質土
2　赤茶褐色粘質土
3　黄褐色弱粘質土
4　濃茶褐色粘質土

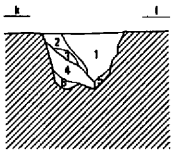


1　暗黒褐色強粘質土
2　茶褐色粘質土
3　淡茶褐色粘質土
(黄褐色土ブロック含む)
4　淡茶褐色弱粘質土
5　暗茶褐色粘質土

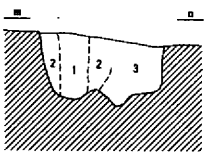


1　明灰褐色弱粘質土
2　濃灰褐色弱粘質土
3　暗茶褐色弱粘質土
4　淡灰褐色粘質土
5　明黄褐色砂質土
6　明灰褐色弱粘質土
7　濃黄褐色砂質土
8　明黄褐色砂質土
9　淡灰褐色弱粘質土
10　灰褐色弱粘質土

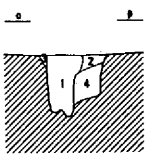
(1/60)



1　明茶褐色弱粘質土
2　明茶褐色粘質土
3　明黄褐色砂質土
4　濃灰褐色粘質土
5　濃灰褐色弱粘質土
6　淡灰褐色弱粘質土



1　淡灰褐色土
2　灰褐色粘質土
3　明茶褐色弱粘質土

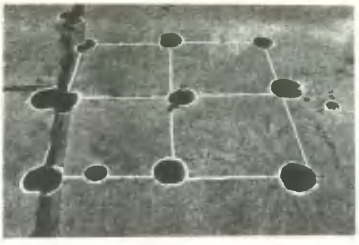


1　暗灰褐色粘質土
2　淡黄灰色土
3　淡黄灰褐色土
4　明灰褐色粘質土

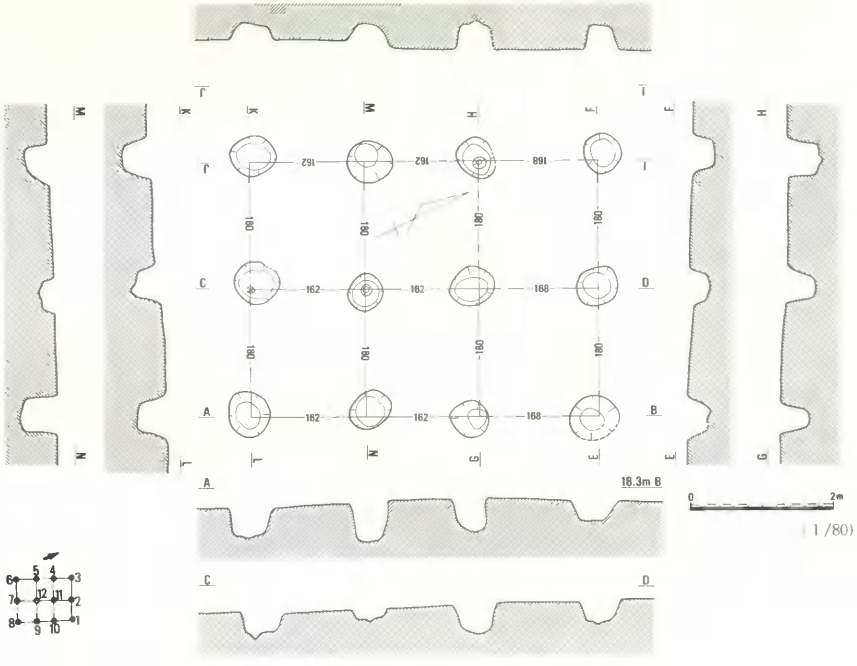
位置(調査区)	規　模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm)		面積(m²)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期
				桁	梁					
KM1	2×2	459～468	408～414	216～246	198～216	19.1	N-82°-W	円	58	古墳後半以降

掘立柱建物８は、ＫＭ１区に位置し、掘立柱建物９の北西側に接してある。

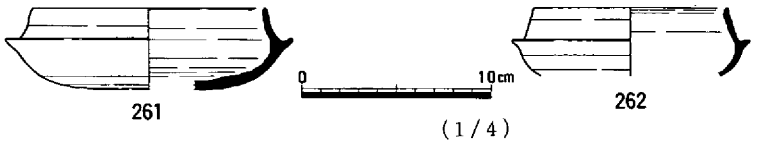
２×２間の総柱の建物で、Ｐ９が線上から若干ずれた位置にある。柱痕は、Ｐ８以外は土層断面観察によって確認することができた。柱穴掘り方の平面形態は、いずれも円形を示し方形のものは認められなかった。出土遺物は、須恵器の細片と甕の把手部分が出土している。（下澤）



掘立柱建物９



位置（調査区	規　模	桁行（m）	梁間（m）	柱間寸法（cm）		面積（㎡）	棟方向	柱穴掘り方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
ＫＭ１	２×２	4.2	3.6	162～168	180	15.12	Ｎ-26°-Ｅ	円	長	古墳時代後期以降



（１/４）

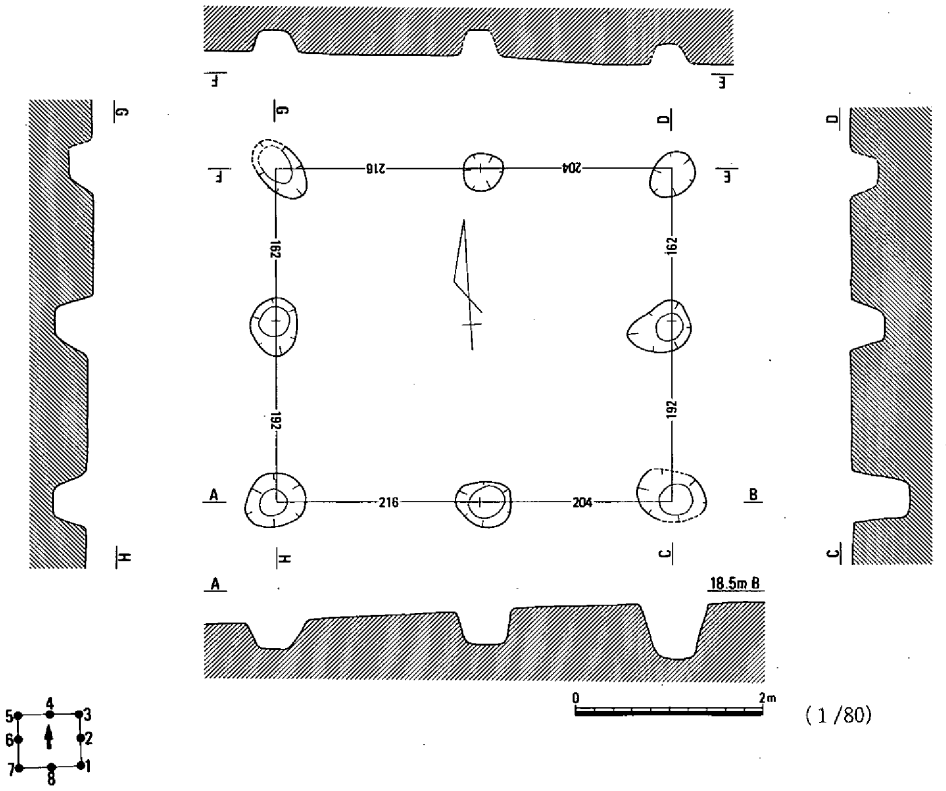
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
261	須恵器	杯身	(12.1)			良好	(内・外・断)青灰5PB5/1	微砂	外面自然釉
262	須恵器	杯身	(10.3)		(3.6)	良	(内・外・断)青灰5PB5/1	微砂	

掘立柱建物９は、ＫＭ１区に位置する。桁行２間×梁間３間(492×360cm)の総柱建物である。建物面積は7.7㎡で、建物主軸はＮ－26°－Ｅを示し、ほぼ東西方向である。柱間距離は桁行162cm(南側２間分)～168cm(北側間)で梁間はすべて180cmである。掘り方はすべて円形をなし検出面での柱穴の直径は45～76cmと不規則である。柱痕跡は、Ｐ４・Ｐ７・Ｐ12で確認できた。

出土遺物は、須恵器杯身**261・262**がある。

建物の時期は、出土遺物から少なくとも５世紀末頃より遡らないと推定される。　（伊藤）

掘立柱建物10



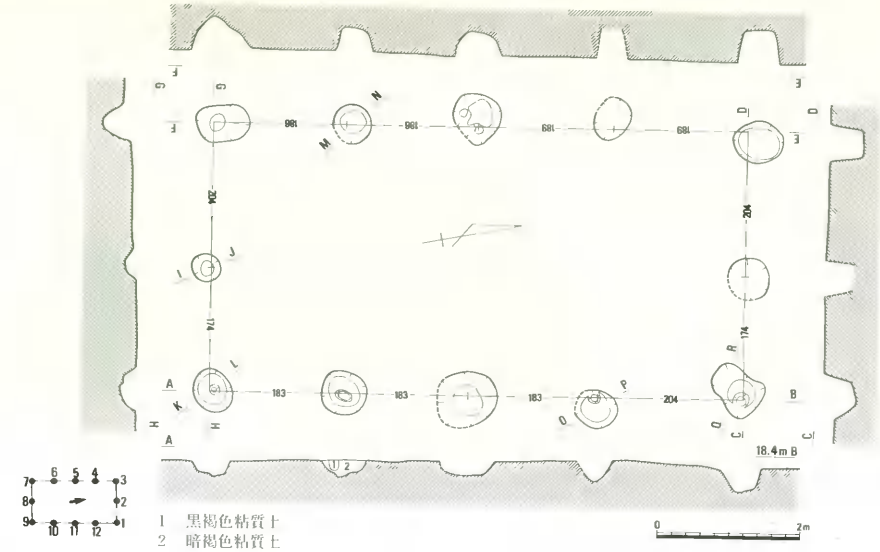
（１/80）

位置(調査区)	規模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm) 桁	梁	面積(㎡)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期
ＫＳ２	2×2	420	354	204～216	162～192	14.9	N-86°-W	円	61×48	奈良？

掘立柱建物10は、桁行２間、梁間２間のやや長方形を呈する建物である。総柱建物ではないが、やはり倉庫のような機能をもっていたと考えられる。棟方向はほぼ東西方向を示し、掘立柱建物11とほぼ同一である点が注意される。

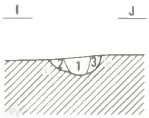
柱穴の掘り方は、いびつな円形ないし長円形を呈するものが多く、深さにもバラツキがある。出土遺物はきわめて少ないが、埋積土から奈良時代に比定される可能性が強い。　（岡田）

掘立柱建物11



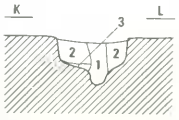
1　黒褐色粘質土
2　暗褐色粘質土

（１／80）

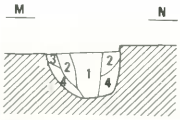


1　暗灰褐色土
（黄褐色土ブロック含む）
2　灰褐色土
3　茶褐色土
（黄褐色土ブロック含む）

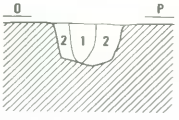
0　50cm　（１／60）



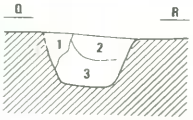
1　淡灰褐色粘質土
2　暗赤褐色粘質土
3　淡灰褐色粘質土



1　黒褐色土（焼土粒含む）
2　黒灰色土（焼土粒含む）
3　茶褐色土
4　淡黄黒灰色土（黄褐色土ブロック含む）



1　暗赤褐色粘質土
2　暗茶褐色粘質土



1　暗灰褐色弱粘質土（焼土含む）
2　暗赤灰褐色弱粘質土（焼土含む）
3　暗茶褐色粘質土

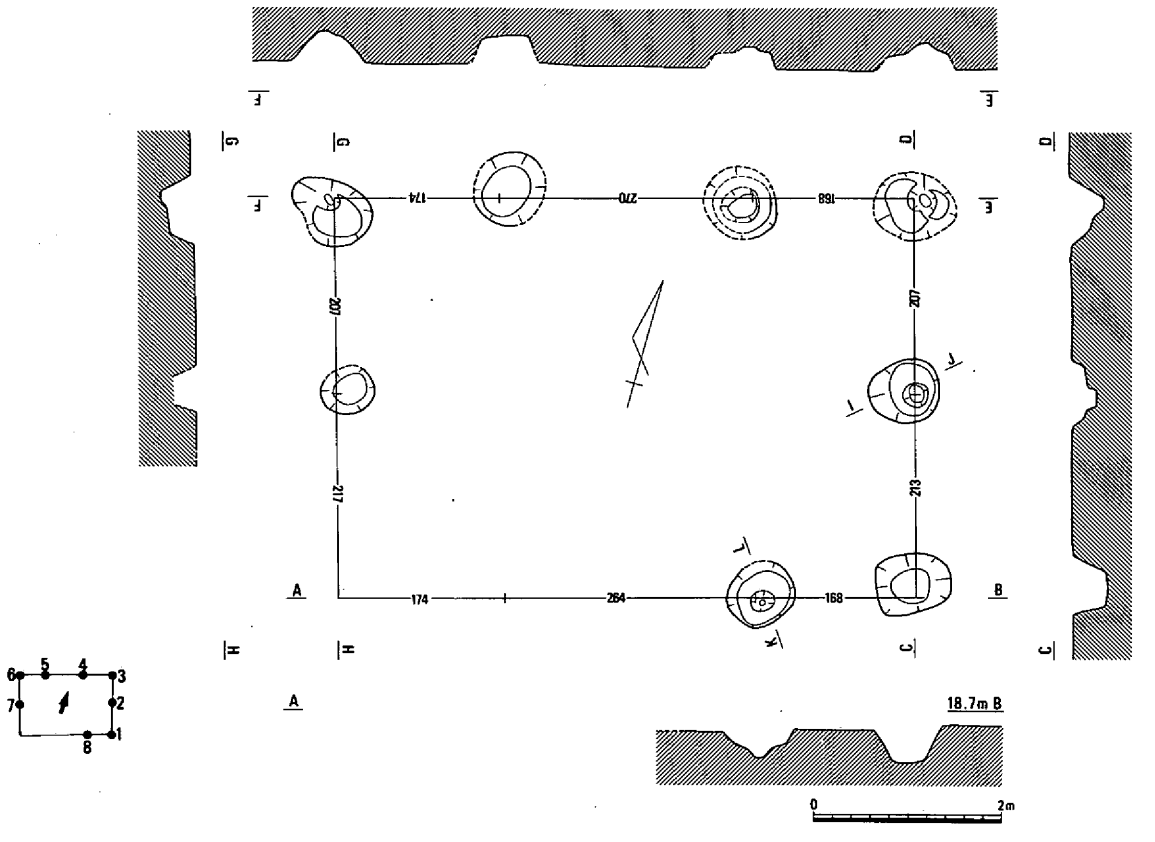
位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
ＫＭ１・Ｋ２	4×2	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	円	65	古墳後半以降

掘立柱建物11は、ＫＭ１区に位置し、掘立柱建物10の南側に接してある。

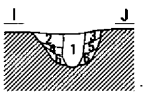
４×２間の建物で、東西の桁の柱の掘り方に乗ってくるが中心の位置からずれる傾向が認められる。Ｐ２とＰ４は、検出時において伴うかどうか判断しかねたものであるが、最終的にこの建物を構成する柱とした。また、Ｐ８は規模が小さく深さも浅かったが、先のと同様に判断したのである。柱痕は、断面観察でＰ６・Ｐ８・Ｐ９・Ｐ12の４本において認められた。しかし、Ｐ１については断面の位置が悪く明瞭な観察ができなかった。

出土遺物は、図示していないが須恵器と甑が認められている。　（下澤）

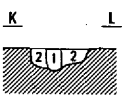
掘立柱建物12



(1/80)



1　茶褐色粘質土
2　明灰褐色粘質土
3　淡灰褐色粘質土
4　暗黄褐色土
5　灰褐色粘質土
6　灰黄色粘質土



1　灰褐色粘質土
2　灰茶褐色弱粘質土（礫含む）

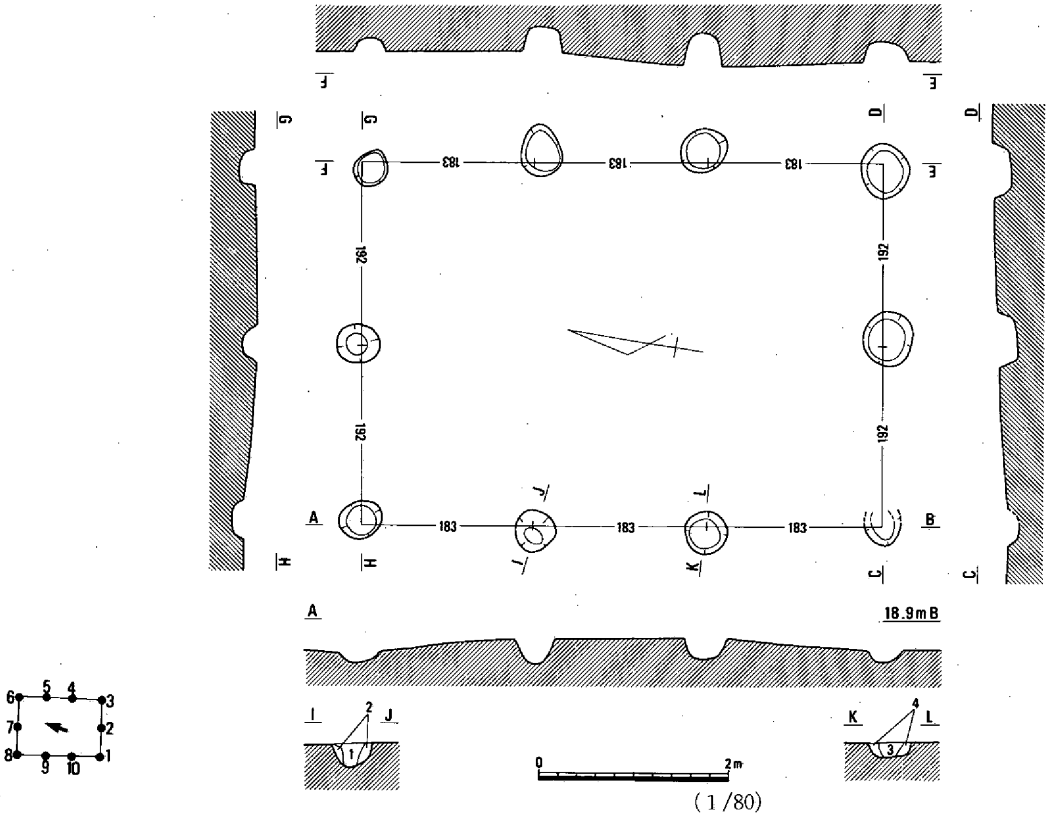
位置(調査区)	規　模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm)		面積(m²)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期
				桁	梁					
ＫＭ１	3×2	606～612	420～424	168～270	207～217	25.8	N-75°-E	円	78×66	?

掘立柱建物12は、ＫＭ１区に位置し、掘立柱建物11の東側に接してある。

３×２間の建物で、それぞれの柱間の距離は若干の差を有している。西の梁と南の桁部分の柱は認められなかったが、この建物が溝２と重複している箇所に相当することから、調査時においてこれらの柱の確認を見過ごした可能性が考慮される。柱の平面形態はいずれも円形を呈し、規模は80cm前後のものである。また、柱痕はＰ２とＰ８において土層観察により認められ、Ｐ２～Ｐ４・Ｐ６・Ｐ８においては柱穴底面に柱痕部分と思われる凹部が認められた。

出土遺物については、ほとんど認めることはできなかった。したがって、建物の時期を判断する根拠を得ていない。　　（下澤）

掘立柱建物13



（１/80）

1　暗茶褐色土（焼土含む）
2　暗灰褐色土（焼土含む）
3　暗茶褐色粘質土（焼土含む）
4　茶褐色土

位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
ＫＭ１・MBOX3	3×2	549	384	183	192	21.1	N-10°-W	円	49	?

掘立柱建物13は、ＫＭ１区に位置し、掘立柱建物16の南側に接してある。

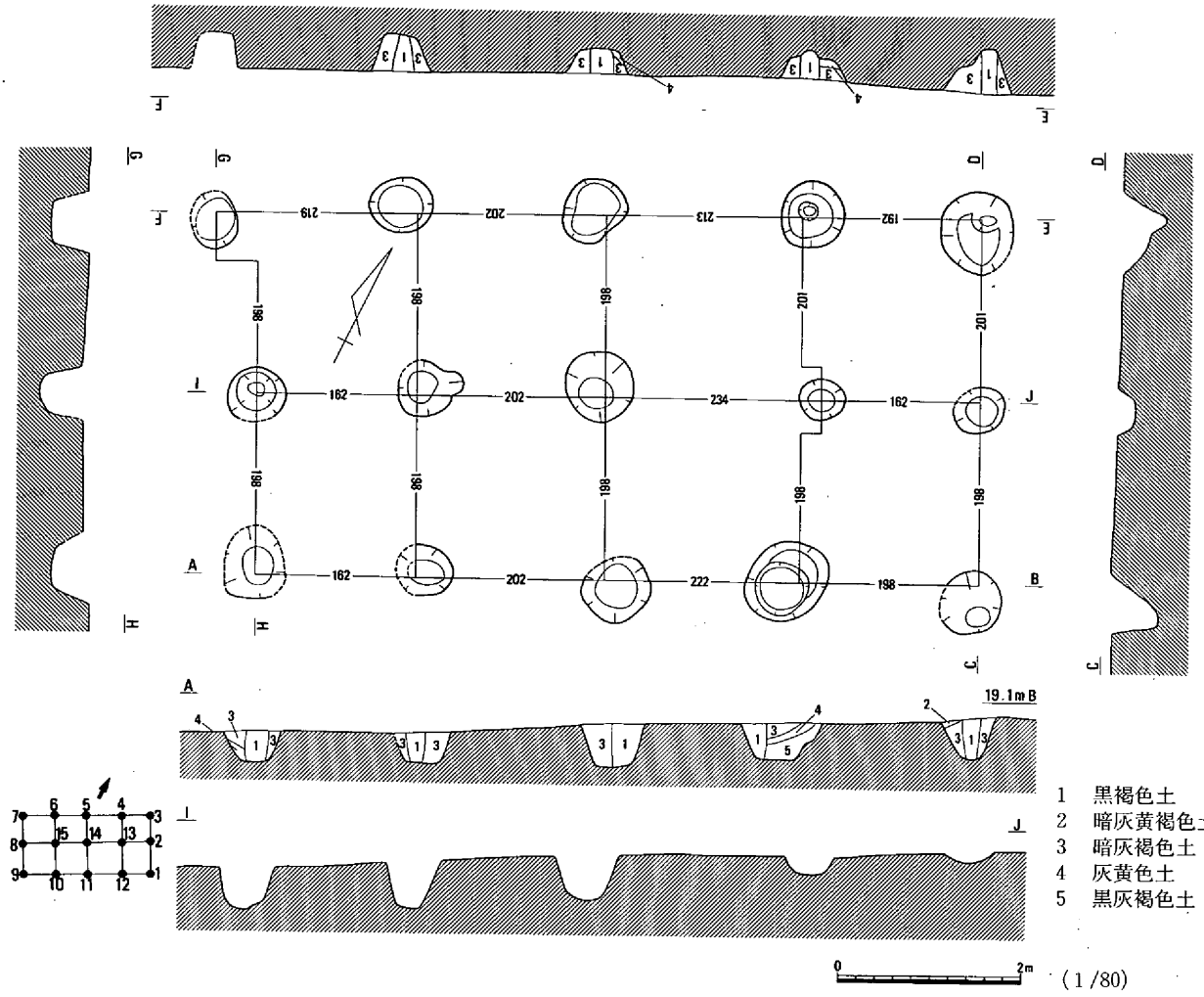
３×２間の建物で、東西の桁行の柱間の距離がいずれも183cm、南北の梁間の柱間がいずれも192cmと整った配置をなしている。調査時において梁が１間分東のＭＢＯＸ３区へ延びると考えていた。しかしながら、整理時の図作成における両調査区を合成して、桁行の柱間がそれぞれずれることが明らかとなり、上記の規模としたのである。

柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径約50cmであり深さは20cm未満のものも見られ、遺存状態は悪い。柱痕は、Ｐ９とＰ10において認められたが他には確認することができなかった。

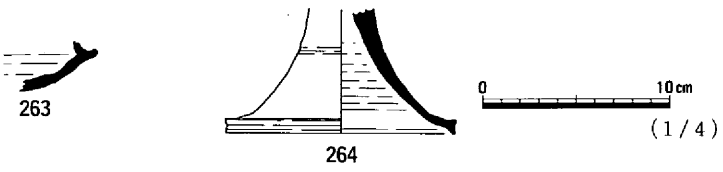
この建物が検出された土層は、黄褐色系の基盤層から礫を含むものへと変化が認められるところである。付近は、第一次調査において黒褐色土の堆積が認められ、この層での遺構検出が困難であったため、礫は混じるが黄褐色系の明るい層近くまで掘り下げたため、このように柱穴が浅くなった要因がある。

出土遺物は、ほとんど認められず、したがって時期も不明である。　　（下澤）

掘立柱建物14



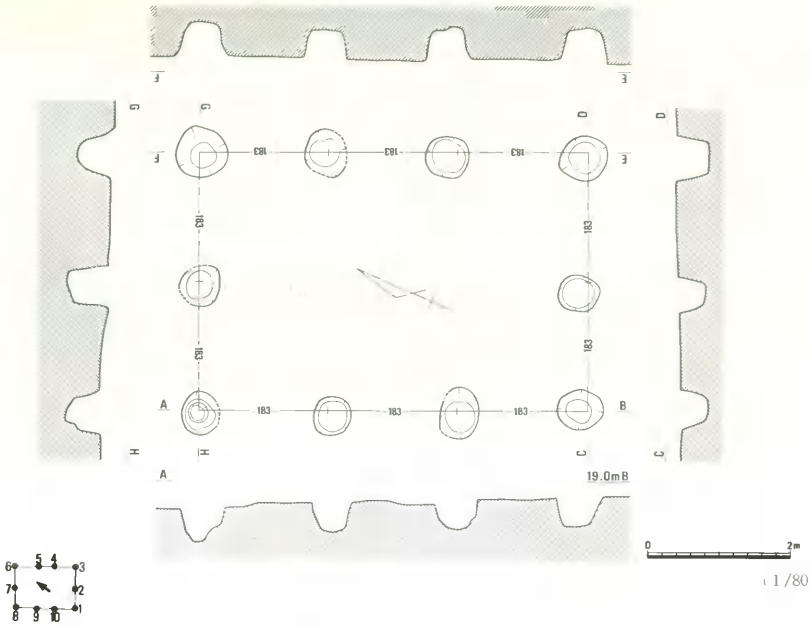
位置(調査区)	規　模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm) 桁	柱間寸法(cm) 梁	面積(㎡)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期
MBOX3	4×2	784～826	396～399	162～234	198～201	31.2	N-65°-E	円	71×62	古墳後半末葉以降



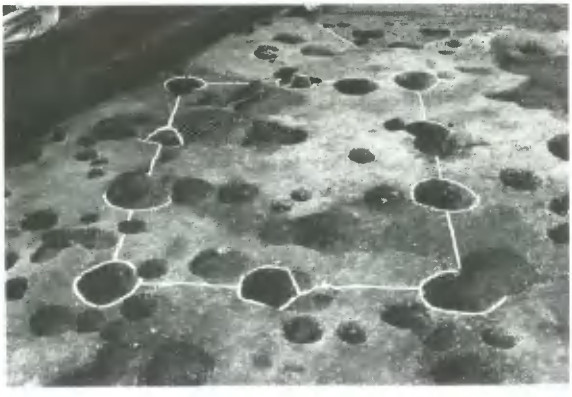
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
263	須恵器	杯身				良好	(内・外)灰白N6/(断)灰白N5/	精良	ロクロ右回り
264	須恵器	高杯		脚(12.0)		良好	(内・外・断)青灰5PB5/1	微砂	脚柱部沈線状の凹み・脚端部強いヨコナデ

掘立柱建物14は、掘立柱建物12の東２ｍの位置の検出した。桁行４間、梁間２間の総柱の建物である。柱の並びは側柱、束柱ともによく対応するものであるが、Ｐ７のみは桁行き方向は線上に乗るが梁方向には少しずれが見られる。調査中も気になり十分精査したがこの位置にしか柱穴は検出されなかった。柱穴の平面形は円形を呈するもので直径50～80cmを測る。柱間距離は、柱痕跡の残るもので測定すると192～228cmを測る。遺物は少量出土している。**263**は杯身である。折れ曲がった立ち上がり部は受部よりわずかに高い。**264**は高杯の脚部である。裾に向けてラッパ状に開き、端部は下方に拡張する。７世紀前半と考えられ、それよりも新しい時期の建物と考えられる。　(井上)

掘立柱建物15



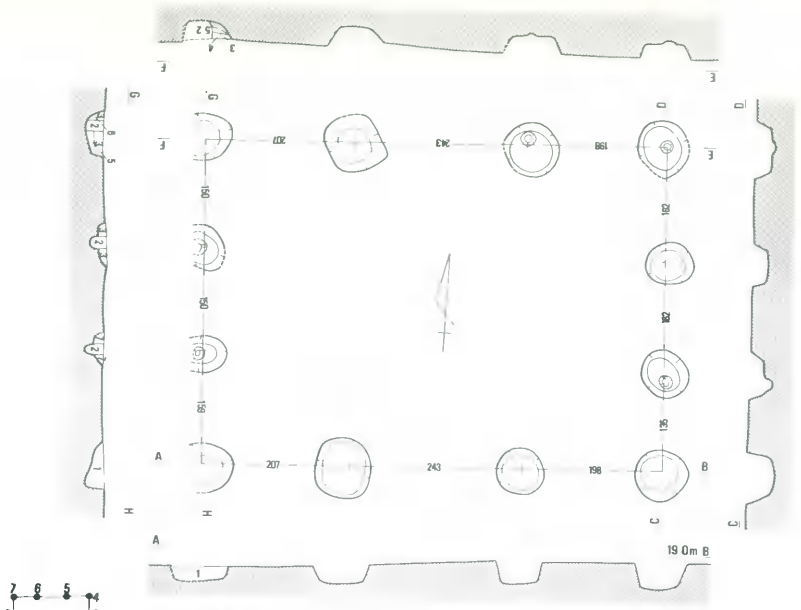
（1/80）



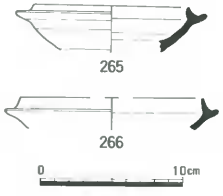
位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（m²）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
MBO[illegible]	3×2	549	366	183	183	[illegible]	N-[illegible]	円	64	古墳後半末葉以降

掘立柱建物15は、掘立柱建物14の南西部分の一部と重複して検出した。桁行３間、梁間２間の建物である。柱間の距離は、桁、梁ともに183cmを測る。柱穴の平面形は円形を呈するもので、直径50～72cmを測る。検出面からの深さは40～60cmを測る。この建物の北半の柱穴の一部は掘立柱建物14の柱穴の一部と切りあう。しかし、土質、色調など非常に似ておりその前後関係はわからなかった。出土遺物がないため時期は不明であるが掘立柱建物14に近い時期のものと考えられる。　（井上）

掘立柱建物16



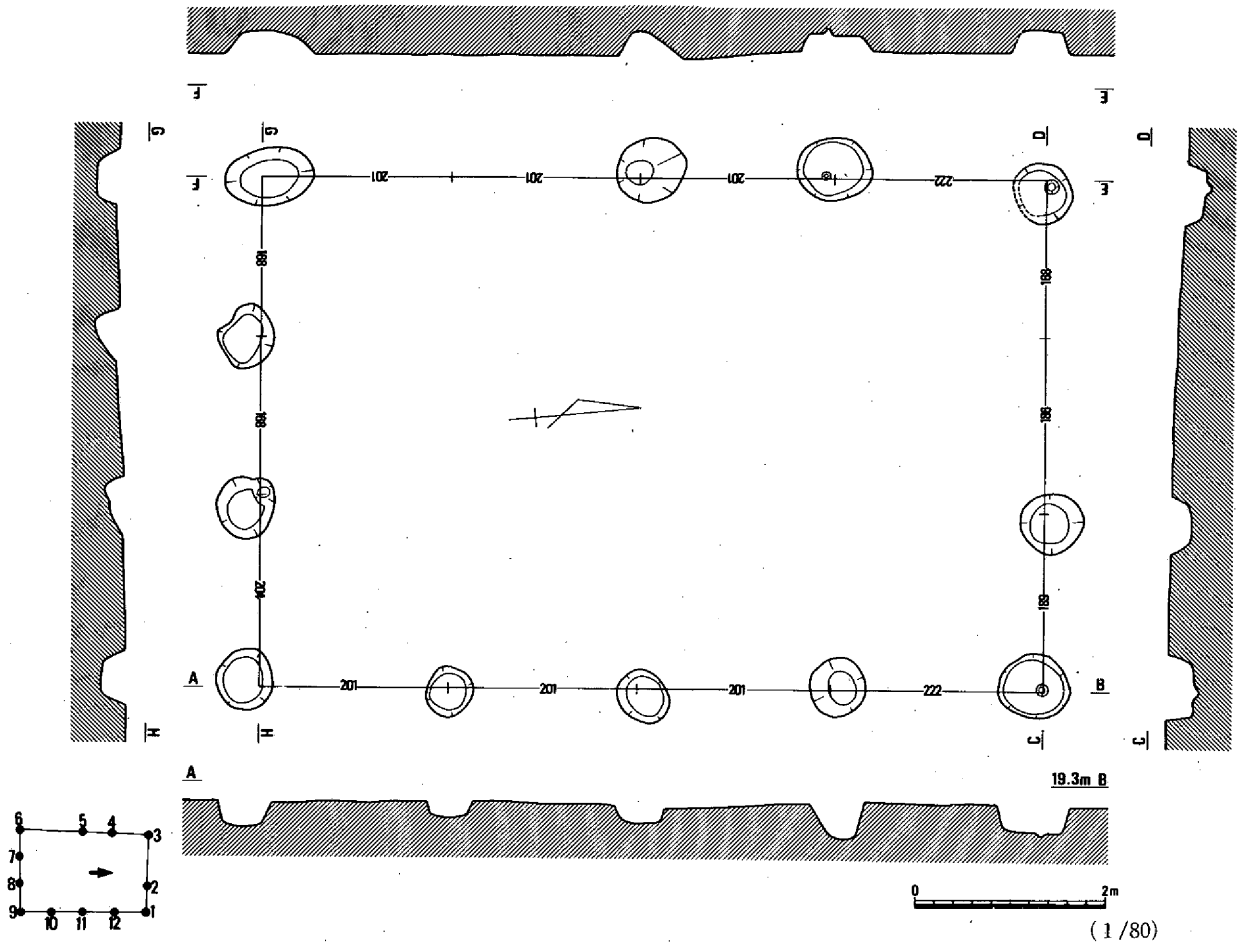
位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm） 桁	柱間寸法（cm） 梁	面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
M80X5	3×3	648	459	198～243	135～162	29.7	N-82°-E	円	70	古墳後半～奈良以降



掲載番号	種別	器種	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	法量（cm） 器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
265	須恵器	杯身	(10.9)			良好	内・外・断：灰白N 7/	精良	ロクロ右回り
266	須恵器	杯身	(12.8)			良好	内・外：暗青灰5PB4/1 断：赤褐10R4/2	微砂	外面自然釉

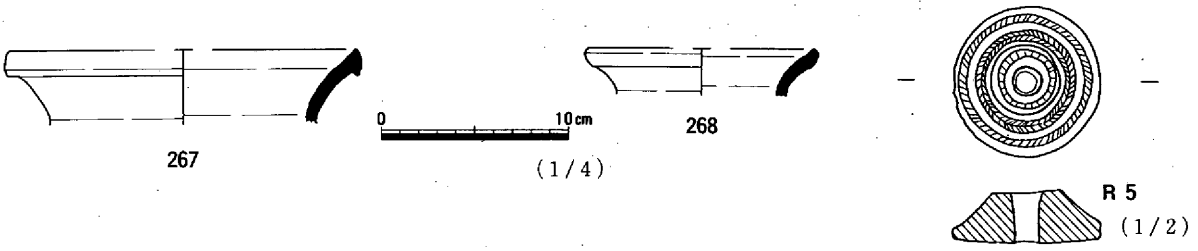
掘立柱建物16は、掘立柱建物15の南半と一部重複して検出した。桁行３間、梁間３間の建物である。柱間の距離は、桁行198～243cm、梁間135～162cmを測る。柱穴の平面形は円形を呈するもので、直径50～70cmを測る。検出面からの深さは20～40cmを測る。遺物としては**265**は須恵器の杯身である。折り曲げられた立ち上がり部が受部よりわずかに高いものである。**266**も須恵器の杯身である。**265**に比べて立ち上がり部が高い。７世紀前半と考えられるものであり、建物の時期はその須恵器よりは新しいものと考えられる。（井上）

掘立柱建物17



（１/80）

位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
MBOX3	4×3	825	540～543	201～222	168～204	44.5	N-6°-E	円	69	古墳後半末葉以降



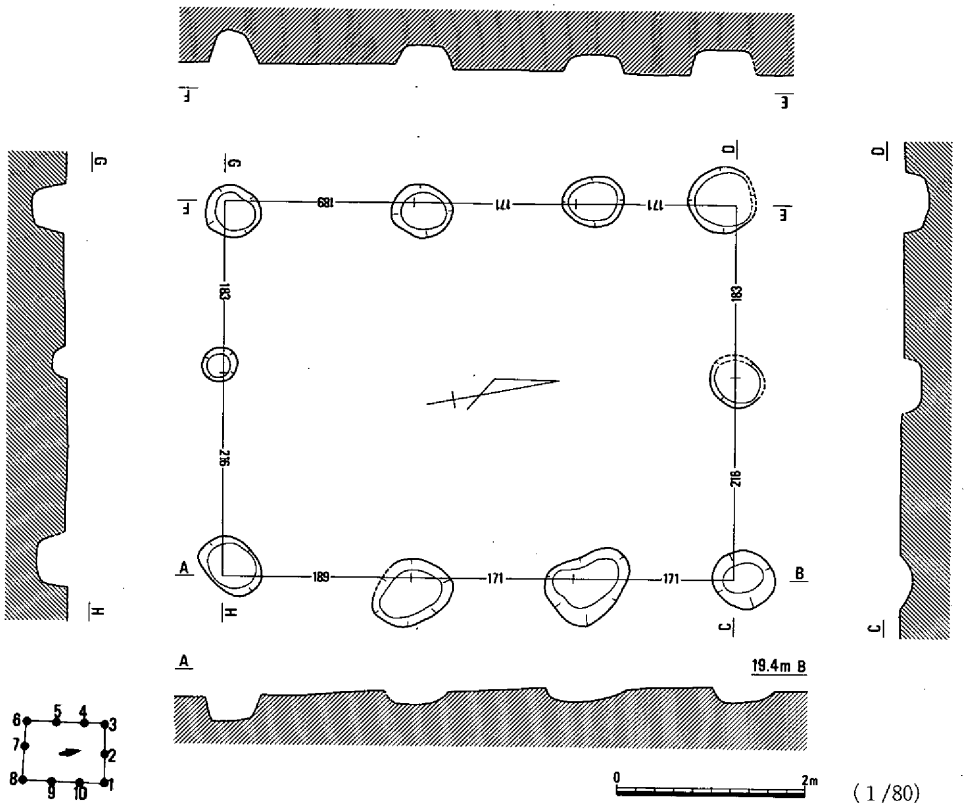
（１/４）　（１/２）

掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
267	須恵器	甕	(18.4)			良好	(内・外)灰N-5/ (断)紫灰5PB-6/1	微砂	
268	須恵器	甕	(11.9)			良好	(内・断)灰白N-6/　(外)灰N-4/	精良	

掲載番号	器種	材質	形態	色調	最大径（mm）	最大厚（mm）	孔径（mm）	重量（g）	備考
R 5	紡錘車	滑石	—		上径19　下径39	13	5～8	24.94	

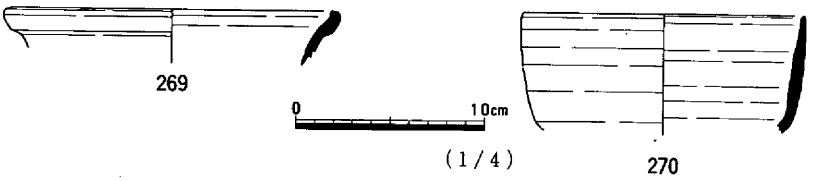
掘立柱建物17は、掘立柱建物16の東約２ｍの位置に検出した。桁行４間、梁間３間の建物である。柱間距離は、桁行201～222cm、梁間168～204cmを測る。柱穴の平面形は円形を呈するもので、直径50～76cmを測る。図示した出土遺物のうち**Ｒ５**は石製紡錘車で、材質は滑石である。外面には線刻の文様が刻まれる。**267**は須恵器の甕の口縁部である。外反しながら立ち上がる口縁部の端部が少し拡張する。**268**も同じく須恵器の甕で、口縁端部の下端が少しふくらむものである。　（井上）

掘立柱建物18



（1/80）

位置(調査区)	規　模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm)		面積(㎡)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期
				桁	梁					
MBOX3	3×2	531	399	171～189	183～216	21.2	N-10°-E	円	65	古代？



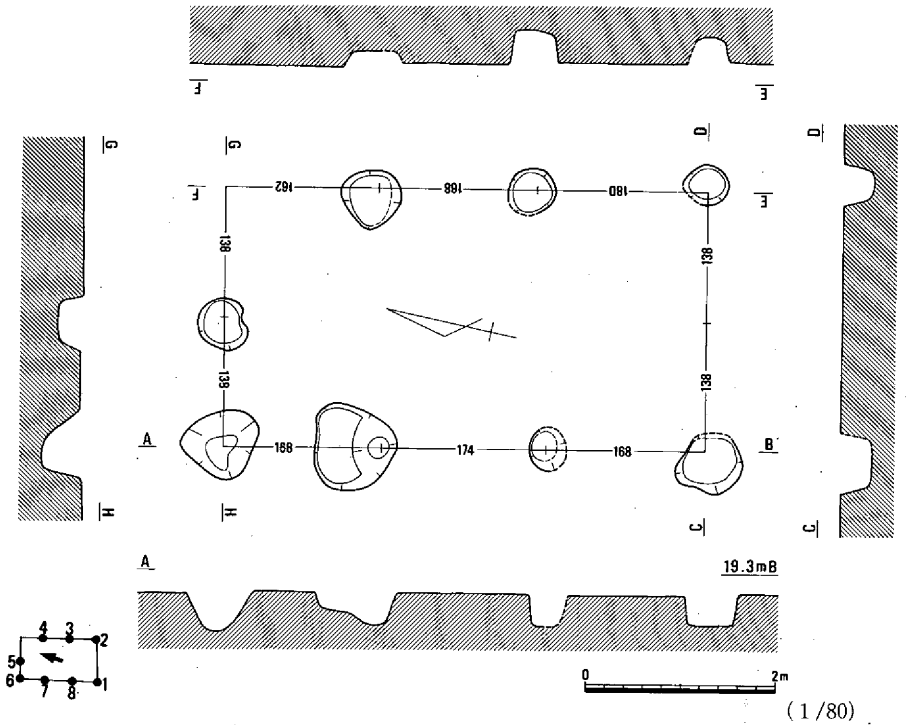
（1/4）

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
269	須恵器	甕	16.7			良好	(内･外･断)灰白N-8/	精良	
270	須恵器	杯	15.0			良好	(内･外･断)灰白N/	細砂	

掘立柱建物18は、掘立柱建物17の東４ｍの位置に検出した。桁行３間、梁間２間の建物である。柱間の状況をみると桁側では南の１間が広く、北側の２間は等間隔である。また、梁方向では、南側の柱間が広く北側の柱間が狭い。柱間の距離は、桁行171cm・189cm、梁間183cm・216cmを測る。柱穴の平面形は基本的には円形を呈するものであるが、一部不整形な柱穴もある。柱穴の直径は38～65cm、検出面からの深さは16～38cmを測る。

柱穴からは少量の遺物が出土している。**269**は甕の口縁部である。少し開きながら立ち上がる口縁部の端部外面が少しふくらむものである。**270**は須恵器の杯で、ほぼ垂直に立ち上がる体部を持ち、口縁端部は丸く納められる。建物の時期は、７世紀の後半を遡らないものと考えられる。　（井上）

掘立柱建物19

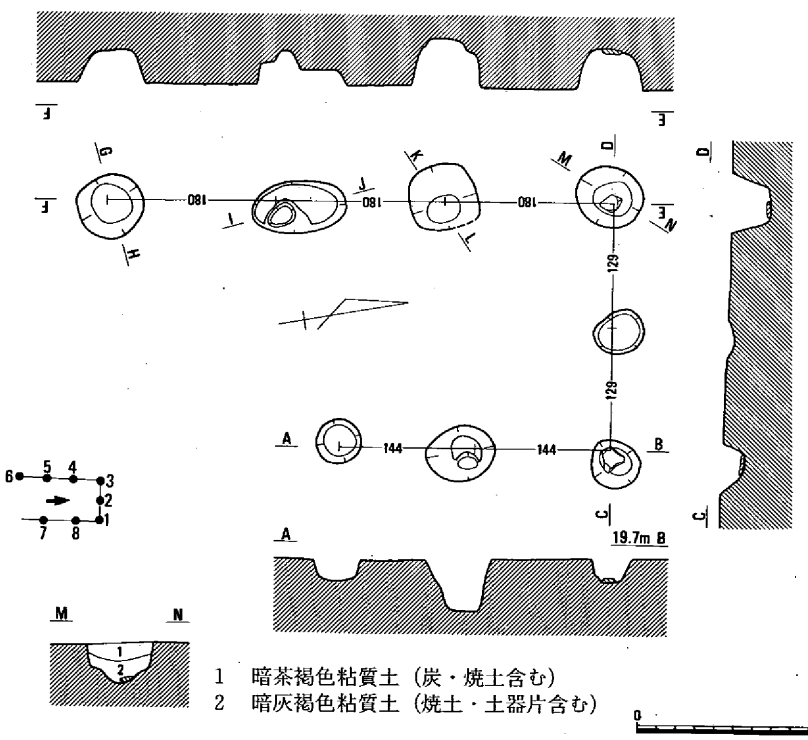


（１/80）

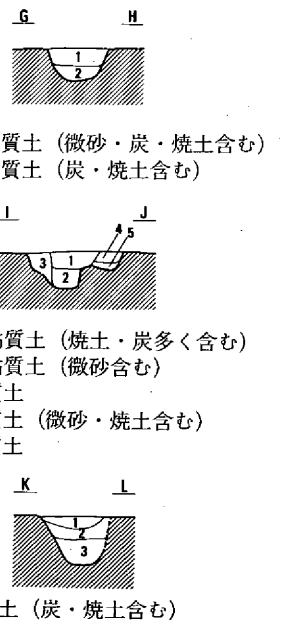
掘立柱建物19は、掘立柱建物18の南東約８ｍの位置に検出した。桁行３間、梁間２間と考えられるものである。柱間の距離は桁162～180cm、梁138cmを測る。柱穴の平面形は円形を呈するものが多いが大きさは不揃いである。直径40～60cm、検出面からの深さ15～40cmを測る。　（井上）

位置(調査区)	規　模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm) 桁	柱間寸法(cm) 梁	面積(m²)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期
MBOX3	3×2	510	276	162～180	138	14.1	N-11°-W	円	63	?

掘立柱建物20



1　暗茶褐色粘質土（炭・焼土含む）
2　暗灰褐色粘質土（焼土・土器片含む）



1　暗茶褐色粘質土（微砂・炭・焼土含む）
2　暗灰褐色粘質土（炭・焼土含む）

1　暗茶褐色粘質土（焼土・炭多く含む）
2　暗灰褐色粘質土（微砂含む）
3　茶褐色粘質土
4　灰褐色粘質土（微砂・焼土含む）
5　暗褐色粘質土

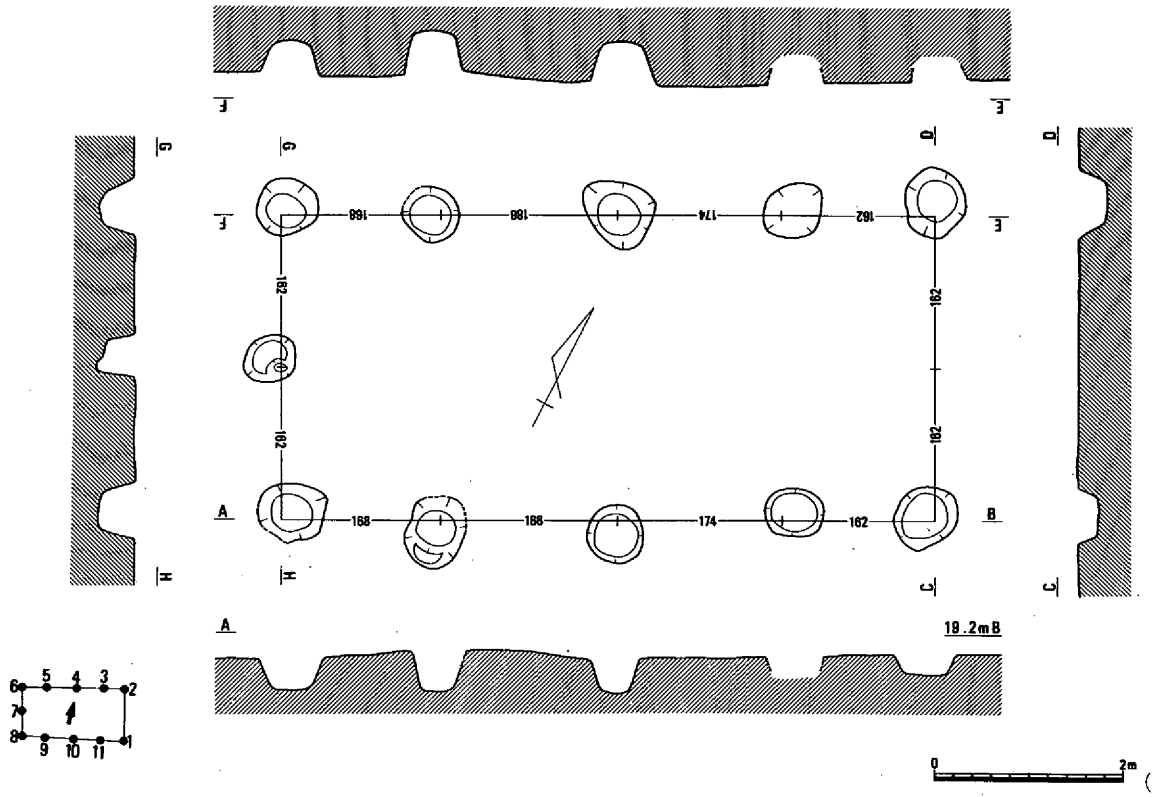
1　茶褐色粘質土（炭・焼土含む）
2　暗茶褐色粘質土（微砂・焼土多く含む）
3　暗灰褐色粘質土（炭・焼土含む）

（１/80）

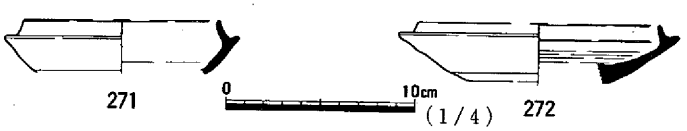
位置(調査区)	規　模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm) 桁	柱間寸法(cm) 梁	面積(m²)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期
ＫＭ３	(3)×2	不明	258	144～180	129	不明	N-9°-E	円	68×57	?

掘立柱建物20は、掘立柱建物19の東約10ｍの位置に検出した。調査区の境に検出し、一部が調査区外に伸びるため全体大きさは不明である。建物の規模は梁間は２間であるが、桁行は西側列において３間までは確認したがそれ以上は不明である。柱間の距離は桁144～180cm、梁129cm、検出面からの深さ20～45cmを測る。Ｐ１・Ｐ２の底面には柱の位置と考えられる場所に扁平な石が置かれていた。柱穴の直径は45～70cmを測る。（井上）

掘立柱建物21



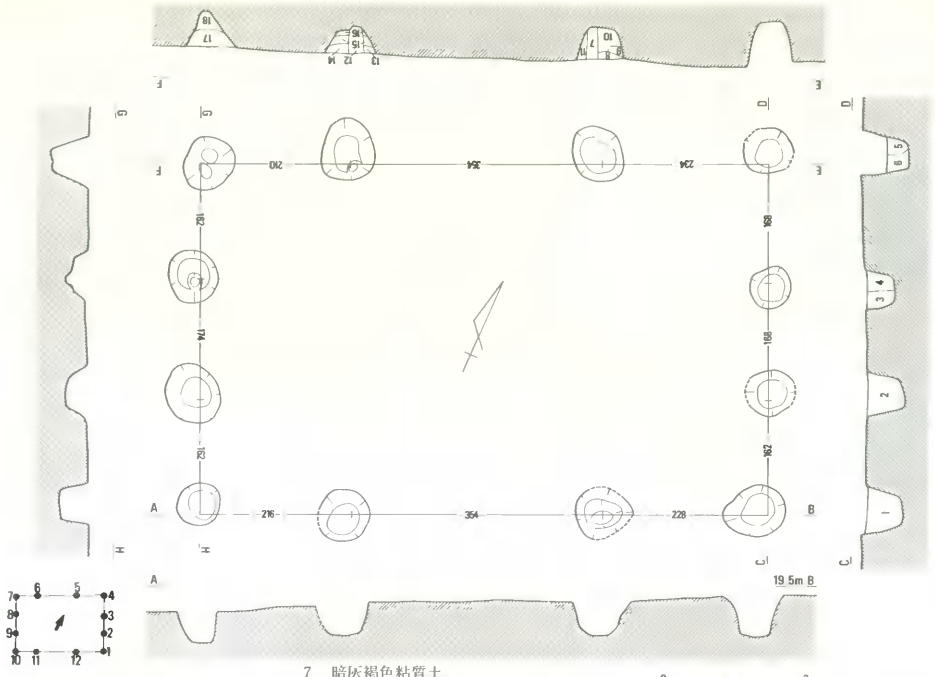
位置(調査区)	規　模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm)		面積(㎡)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期
				桁	梁					
MBOX3	4×2	690	324	162～186	162	22.4	N-62°-E	円	68	古墳後半末葉以降



掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
271	須恵器	杯身	(10.3)			良好	(内・外)青灰5PB5/1　(断)暗青灰5PB4/1	精良	
272	須恵器	杯身	(12.9)			良好	(内・断)灰白N-8　(外)灰白7.5Y7/1　(断)灰白N-8	微砂	

掘立柱建物21は、掘立柱建物20の北西約50ｍの位置に検出した。東側の梁間に柱穴が検出できていないため規模は確定できないが桁行４間、梁間２間と考えられる建物である。柱間の距離は桁162～186cm、梁162cmを測る。柱穴の平面形は円形を呈するもので直径50～70cm、検出面からの深さ20～48cmを測る。遺物としては**271**は須恵器の杯身がある。少し内傾して立ち上がる立ち上がり部をもつものである。**272**も須恵器の杯身である。短く立ち上がる立ち上がり部をもつものである。建物の時期は７世紀の前半を遡らないものと考えられる。（井上）

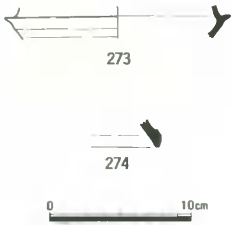
掘立柱建物22



1　暗褐色粘質土（礫含む）
2　茶褐色粘質土
3　茶褐色粘質微砂（焼土・炭少し含む）
4　淡灰茶褐色粘質微砂
5　暗褐色粘質土
6　淡灰暗褐色粘質土
7　暗灰褐色粘質土
8　黄褐色粘質微砂
9　茶褐色粘質微砂
10　暗茶褐色粘質土（礫含む）
11　灰褐色粘質微砂（礫多く含む）
12　灰茶褐色粘質土（礫含む）
13　灰褐色粘質土（礫含む）
14　〃　（礫多く含む）
15　黄褐色粘質土
16　黄灰色粘質土
17　〃　（礫含む）
18　黄灰褐色粘質土

0　2m　（1/80）

位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（m²）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
MBOX3	[illegible]	7[illegible]	498	210～354	162～174	[illegible]	N-67°-E	円	[illegible]	古墳後半未葉以降

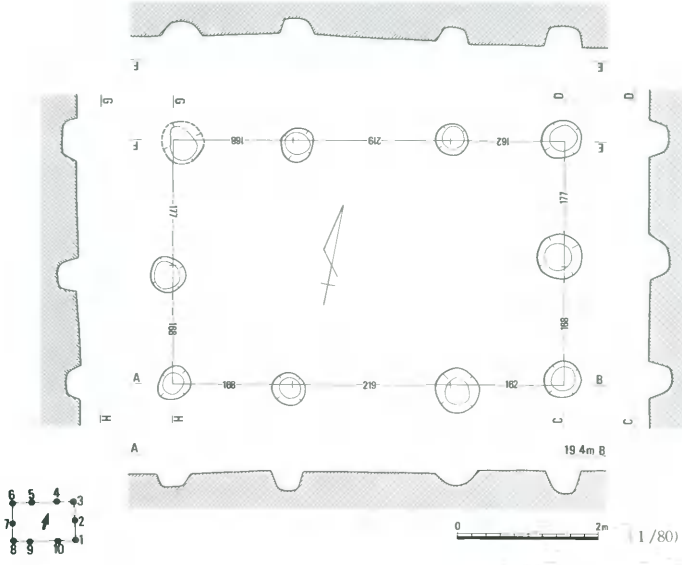


（1/4）

掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
273	須恵器	杯身				良好	（内・外）暗青灰5PB3/1 （断）暗青灰5RP3/1	精良	外面自然軸
274	須恵器	[illegible]				良好	（内・外・断）[illegible]-6/1	微砂	

掘立柱建物22は、掘立柱建物21の南東約5mの位置に検出した。桁行3間、梁間3間の建物である。柱穴の配置を見ると梁の部分はほぼ等間隔に配置されるのに対し、桁方向では外側が狭く中央の柱間が広い配置になっている。柱間の距離は桁210～354cm、梁162～174cm、検出面からの深さ30～55cmを測る。柱穴の平面形は円形を呈するもので、直径56～80cmを測る。P5・P6の断面には柱痕跡が見られた。その痕跡の中心間の距離は330cmを測る。遺物は少量出土している。**273**は須恵器の杯身である。受部は水平に伸びるもので、立ち上がり部は少し内傾している。**274**も須恵器で、高杯の脚端部である。この建物の時期も7世紀前半を遡らないものと考えられる。（井上）

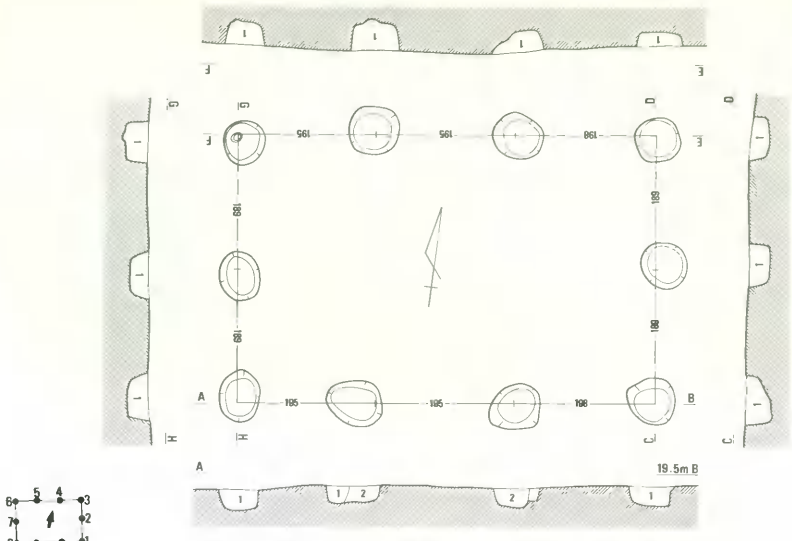
掘立柱建物23



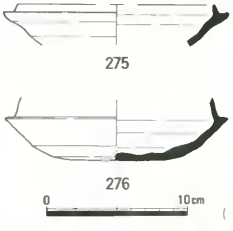
位置(調査区)	規　模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm)		面積(m²)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期
				桁	梁					
MBOX3	3×2	549	345	162～219	168～177	18.9	N-80°-E	円	55	古墳後半以降

掘立柱建物23は、掘立柱建物の南約2mの位置に検出した。桁行3間、梁間2間の建物である。柱穴の配置を見ると、桁方向では中央の柱間が広くその両側が狭い。梁方向も等間隔ではなく北側が広く南側が狭い。柱穴の芯心間の距離は桁162cm、168cm、219cm、梁168cm、177cmを測る。柱穴の平面形は円形を呈するもので、直径44～62cm、検出面からの深さ24～34cmを測る。P5～P7は竪穴住居57と重複しているが、建物の柱穴が壁体溝を切っていることなど、検出の状況から掘立柱建物23が新しいものと考えられる。（井上）

掘立柱建物24



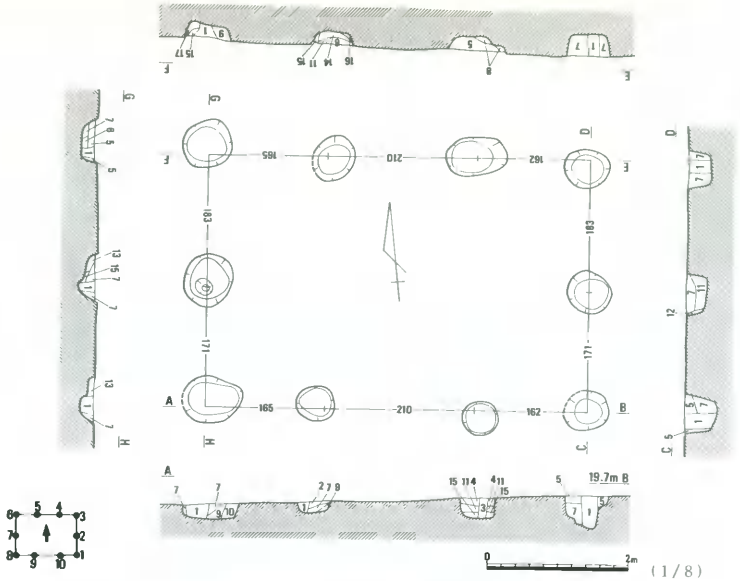
位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
MBO\3	3×2	588	378	195～198	189	[illegible]	N-82°-E	円	径	古墳後半～末葉以降



掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
275	須恵器	杯身	(11.9)			良好	口内・断）灰白7.5Y R7/1 （外）灰白N6/	微砂	
276	須恵器	杯身				良好	口内・外・断）暗青灰5PB4/1	精良	立ち上がり部ハリツケ・内面仕上げナデ・ロクロ回転右

掘立柱建物24は、掘立柱建物22の北約２ｍの位置に検出したもので、掘立柱建物23とは方位、規模ともに似たものがある。桁行３間、梁間２間の建物である。柱穴の配置を見ると桁方向、梁方向ともに等間隔に配置されている。柱間の距離は桁195cm・198cm、梁189cmを測る。柱穴の平面形は円形を呈するもので、直径58～64cm、検出面からの深さ20～38cmを測る。Ｐ２～Ｐ４は竪穴住居12と、Ｐ１・Ｐ10は竪穴住居61と重複しているが、検出の状況からして建物が新しい。柱穴からは少量の遺物が出土している。**275**は須恵器の杯身で、立ち上がり部の長さは短い。**276**も須恵器の杯身である。受部は短く水平に伸び、立ち上がり部は内傾して立ち上がる。建物の時期としては７世紀前半を遡らないものと考えられる。（井上）

掘立柱建物25

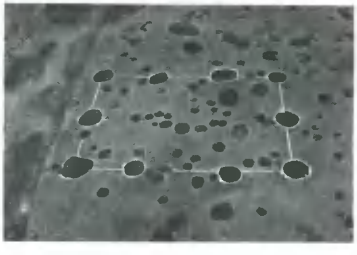


（1/8）

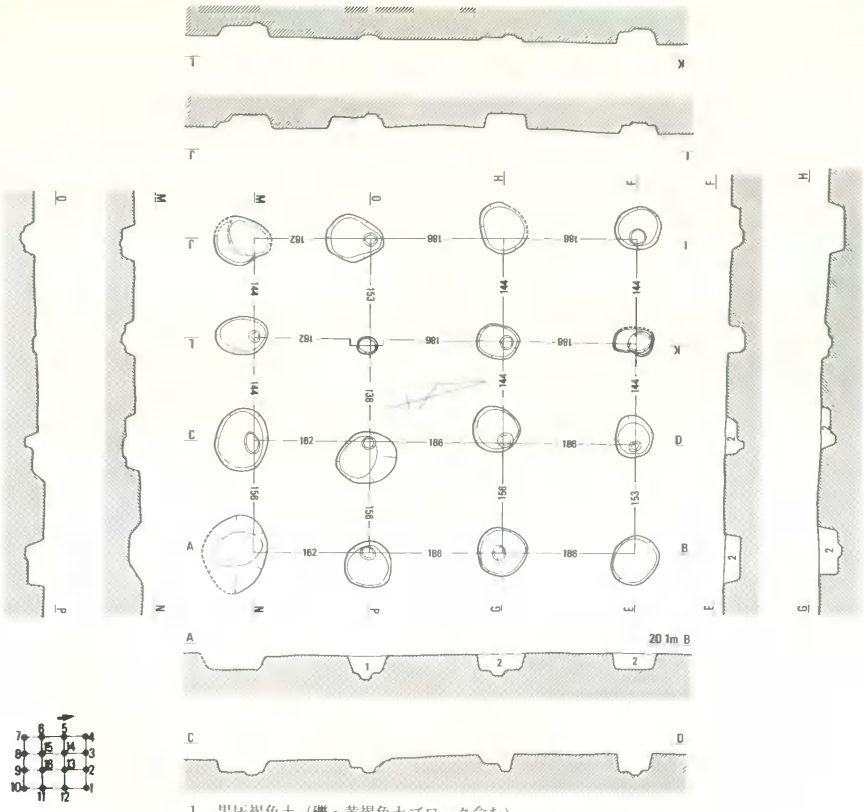
1　暗褐色粘質土
2　暗茶褐色粘質土
3　茶褐色粘質土
4　褐灰色粘質土
5　暗灰褐色粘質土（黄褐色土ブロック含む）
6　灰褐色粘質土（黄褐色土ブロック含む）
7　暗灰褐色粘質土
8　灰色粘質土（黄褐色土ブロック含む）
9　淡黄灰色粘質土
10　暗灰褐色粘質土
11　灰褐色粘質土
12　灰茶色粘質土
13　黄褐色粘質土・暗灰褐色粘質土混合
14　茶褐色粘質土（黄褐色土ブロック含む）
15　灰色粘質土
16　淡黄褐色粘質土
17　暗褐色粘質土（黄褐色土ブロック含む）

位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（m²）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
ＭＭ２	3×2	540	354	162～210	172～183	19.1	N-83°-W	円	68×58	古墳後半末葉以降

掘立柱建物25は、掘立柱建物22の東約５ｍの位置に検出した。桁行３間、梁間２間の建物である。柱穴の配置を見ると桁方向では中央が広く両側が狭い。また、梁方向はほぼ等間隔に造られている。柱穴の断面に見られる柱痕跡の中心間の距離は桁行540cm、梁間360cmを測る。この規模は掘立柱建物23に近いものであり、同一の企画により建てられた可能性が考えられる。柱穴の平面形は円形を呈するもので、直径50～70cm、検出面からの深さ20～44cmを測る。方位、規模などは掘立柱建物24にも似るところがあり、掘立柱建物23とともに同じ時期か、もしくは、非常に近い時期のものと考えられる。（井上）



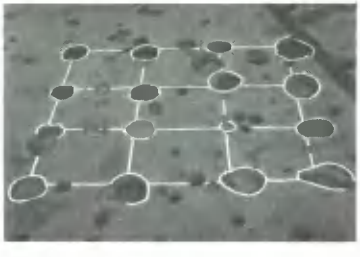
掘立柱建物26



1　黒灰褐色土（礫・黄褐色土ブロック含む）
2　〃　（礫含む）

0　2m　（1/8）

位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（m）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
MM５	3×3	534	441～444	162～186	138～156	23.5	N-16°-E	円	73×62	古墳後半末葉以降



掘立柱建物26は、ＭＭ５区で検出された３×３間の総柱の建物である。棟方向はＮ－16°－Ｅを指す。柱穴は70cm前後のややいびつな円形を呈し、深さは15cmほど残っていたにすぎない。なお、いくつかの柱穴には底面に柱痕跡状に径10～15cmほどの１段低い部分が観察された。

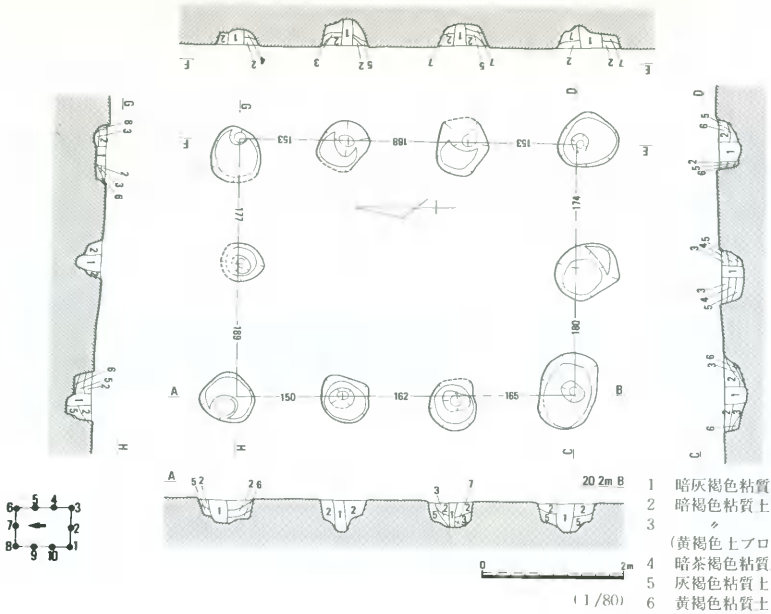
柱穴からの出土遺物としては図示した須恵器の杯身**277**がある。これを参考にすれば、この建物は７世紀以降の時期が想定される。　（大橋）

277

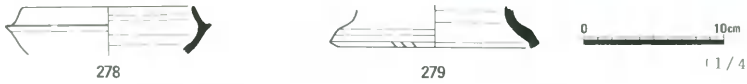
0　10cm　（1/4）

掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
277	須恵器	杯身	12.2			良好	内・外・断（灰白）	精良	[illegible]

掘立柱建物27



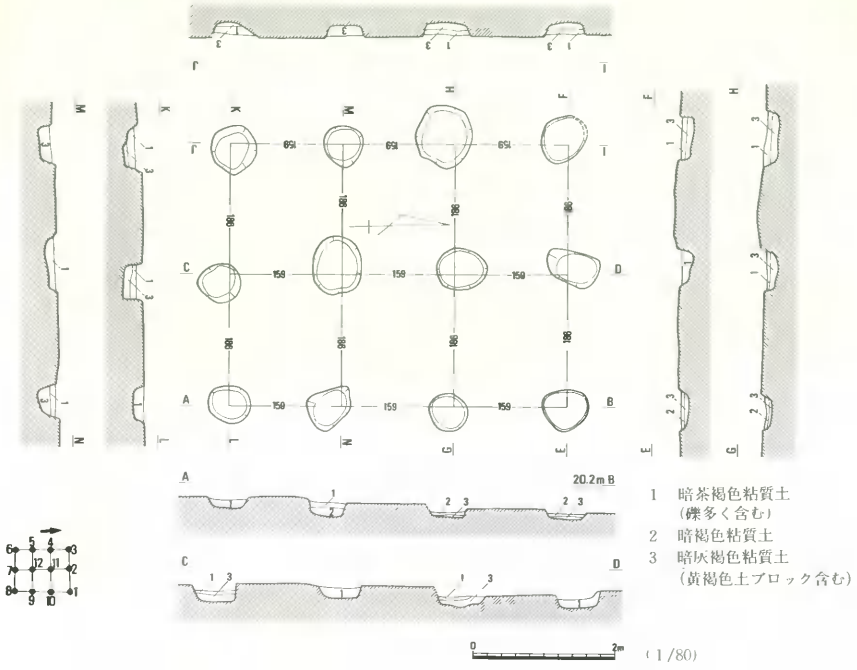
位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（m²）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
MM2	3×2	474～477	354～366	150～168	174～189	17.1	N-1°-W	円	80×68	古墳後半末葉以降



掲載番号	種別	器種	大きさ（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
278	須恵器	杯身	12.0			良好	（内）灰N5/1 （外）灰N4/1 （断）灰褐7.5YR4/2	精良	立ち上がり部ハリツケ・ロクロ回転不明
279	須恵器	（台部）		脚（13.6）		良好	（内・断）灰7.5Y7/1 （外）灰7.5Y8/1	精良	脚端面に櫛目あり

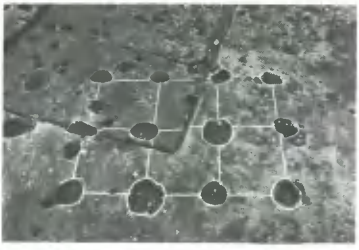
掘立柱建物27は、掘立柱建物26の南約２ｍの位置に検出した。桁行３間、梁間２間の建物である。Ｐ３・Ｐ４は竪穴住居62の埋土の上から掘り込まれたもので、この建物が新しい。柱穴間の距離は桁153～168cm、梁174～180cmを測る。柱穴の平面形は円形を呈するもので、Ｐ１は特に大きく長径110cm、短径80cmを測るが、その他のものは直径60～80cm、検出面からの深さ22～40cmを測る。柱穴の断面に残る柱痕跡から柱の直径を見ると約25cmを測る。柱穴からの出土遺物は少ないが、**278**は須恵器の杯身である。受部は短く水平に伸びるもので、立ち上がり部は内傾しており端部は丸く納められる。**279**は須恵器の高杯の脚部と考えられるもので、端部は外傾した面をもつ。いずれも６世紀後半のものと考えられるため、掘立柱建物はそれを遡らない時期と考えられる。　（井上）

掘立柱建物28



（１/80）

位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
ＭＭ２	３×２	477	372	159	186	17.7	Ｎ-１°-Ｅ	円	67×58	古墳後半末葉以降

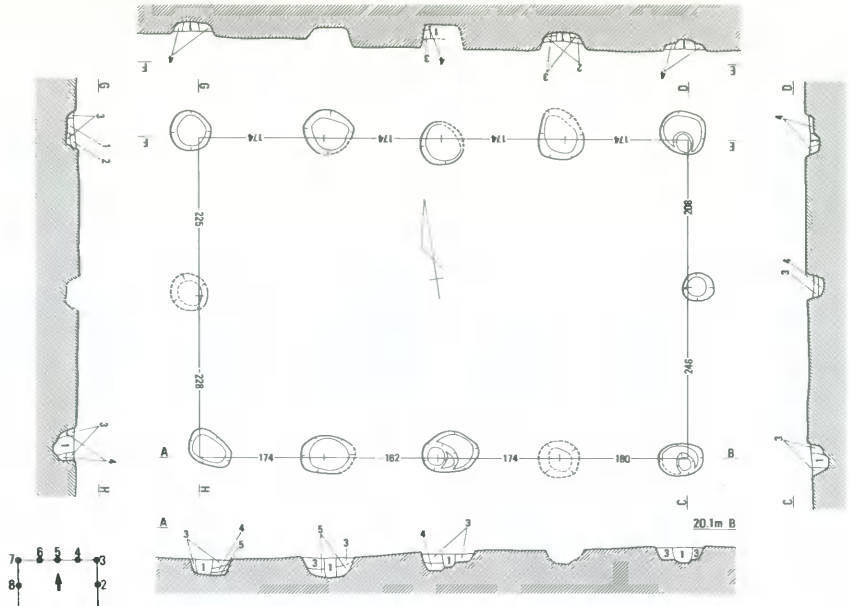


（１/４）

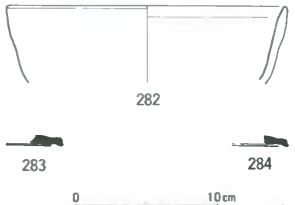
掘立柱建物28は、掘立柱建物27の南約1.5ｍの位置に検出した総柱の建物である。この建物は規模、方向ともに掘立柱建物27と同じである。桁行３間、梁間２間で、柱穴は桁方向、梁方向ともに等間隔に配置されている。柱間の距離は、桁159㎝、梁186㎝を測る。柱穴の平面形は円形を呈するもので直径58～80㎝、検出面からの深さ15～30㎝を測る。Ｐ１・Ｐ２・Ｐ10・Ｐ11は竪穴住居62の埋土の上から掘り込まれており、この建物が新しい。出土遺物のうち**280・281**は須恵器の杯身で、立ち上がり部は短い。建物の時期としては７世紀の前半を遡らないものと考えられる。　（井上）

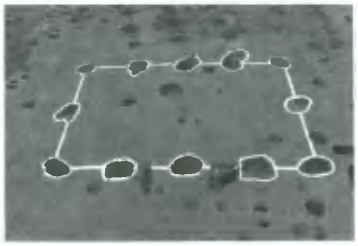
掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
280	須恵器	杯身				良好	内：灰（青味5PB5/1） 外：灰（青味5PB5/1）	精良	
281	須恵器	杯身				良好	内：灰（N5/）　外：灰（N5/）	精良	

掘立柱建物29



位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（m²）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
MM2	4×2	[illegible]～636	435～454	162～180	208～246	31.4	N-81°-W	円	[illegible]×55	奈良

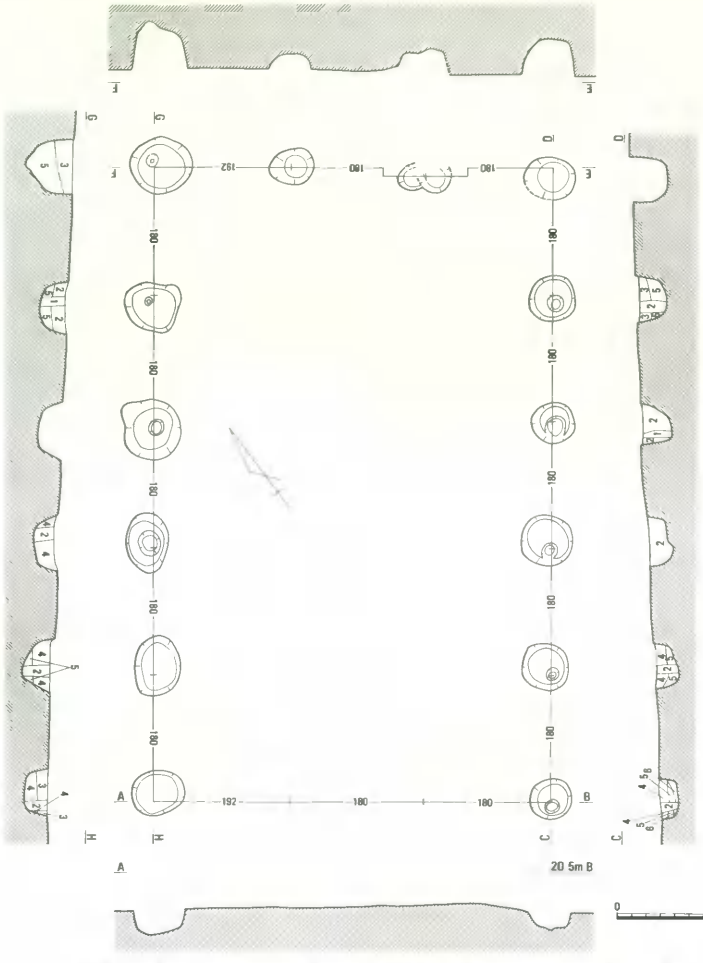




掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
282	土師器	杯	(19.5)			良好	橙2.5YR6/6	精良	
283	須恵器	蓋				良好	(内・外・断)灰N-5	精良	
284	須恵器	蓋				良好	(内・外・断)灰N-5	精良	

掘立柱建物29は、掘立柱建物28のＰ６～Ｐ８が、掘立柱建物29のＰ４～Ｐ６と重複した状態で検出した。建物29の柱穴が切られるものであり、この建物が古い。桁行４間、梁間２間の建物で、柱間の距離は、桁162～180cm、梁208～246cmを測る。柱穴の平面形は円形を呈するもので、直径45～65cm、検出面からの深さ15～30cmを測る。遺物は**282**は土師器の杯である。**283・284**は須恵器の蓋である。天井部にふくらみがなく、端部は折り返されて段を成すものである。　（井上）

掘立柱建物30



（1/80）

位置・調査区	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm） 桁	柱間寸法（cm） 梁	面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
M-M 2	[illegible]	900	[illegible]	180	180 [illegible]	[illegible]	N-36°-E	[illegible]	[illegible]	[illegible]

285

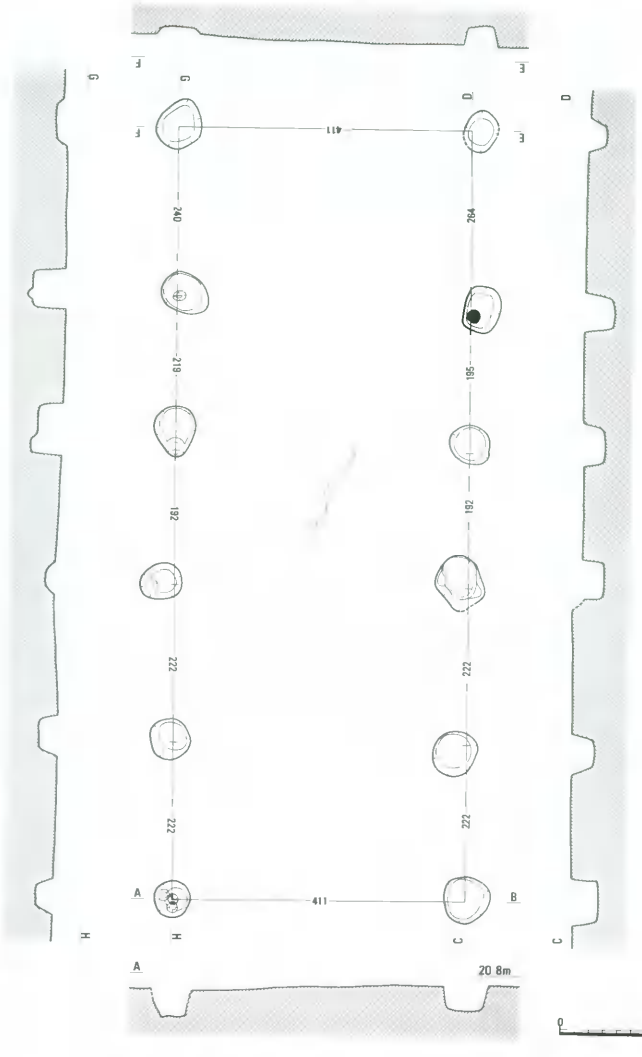
0　10cm

（1/4）

掲載番号	種別	器種	口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
285	土師器	高杯	[illegible]	[illegible]	12.8	良好	[illegible]	精良	杯部、脚部接合痕上端元・器壁摩滅

掘立柱建物30は、掘立柱建物29の南東約18mの位置に検出した。建物はさらに南西に延びる可能性を考えて調査したが、この建物に対応する柱穴は検出されなかったことから、桁行5間、梁間3間の建物と考えられる。柱間の距離は桁180cm、梁180cm・192cmを測る。柱穴の平面形は円形を呈するもので直径60～98cmを測る。遺物としては**285**がある。土師器の高杯で、椀状の杯部とラッパ状に開く脚部を持つものである。建物の時期としてはおおむね奈良時代に属すると考えられる。　（井上）

掘立柱建物31



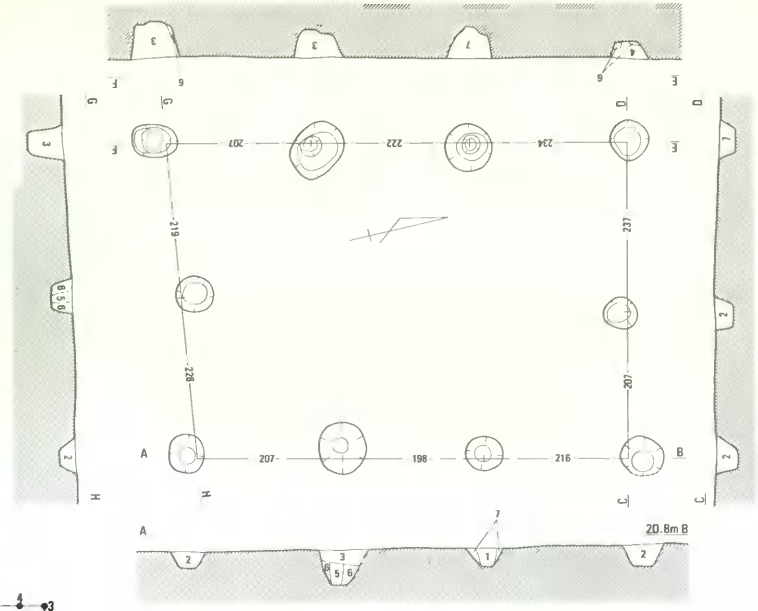
1/80

掘立柱建物31は、M・N18・19グリッド（MM6区）に位置する。後述する建物33・34に近接し、竪穴住居64と重複するが、その切り合い関係から建物の新しいことを確認している。建物の規模は5×1間で、桁行1095cm、梁間411 cmを測る。柱穴掘り方の平面形は円形と楕円形で、その規模は径40～55cmである。埋土は暗灰色土と暗灰褐色土で、P5・P12では柱痕を確認している。また、底面に柱が沈んでできたくぼみを検出したものもある。

その時期は、竪穴住居64との切り合いから、少なくとも6世紀中頃以降と考えられる。　（高田）

位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（m²）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
MM	×1		411	195～264	411	45.0	N-27°-W	円		

掘立柱建物32



位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（m²）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
ＭＭ３	３×２	621～663	444～447	198～234	207～237	28.5	N-13°-E	円	61	奈良

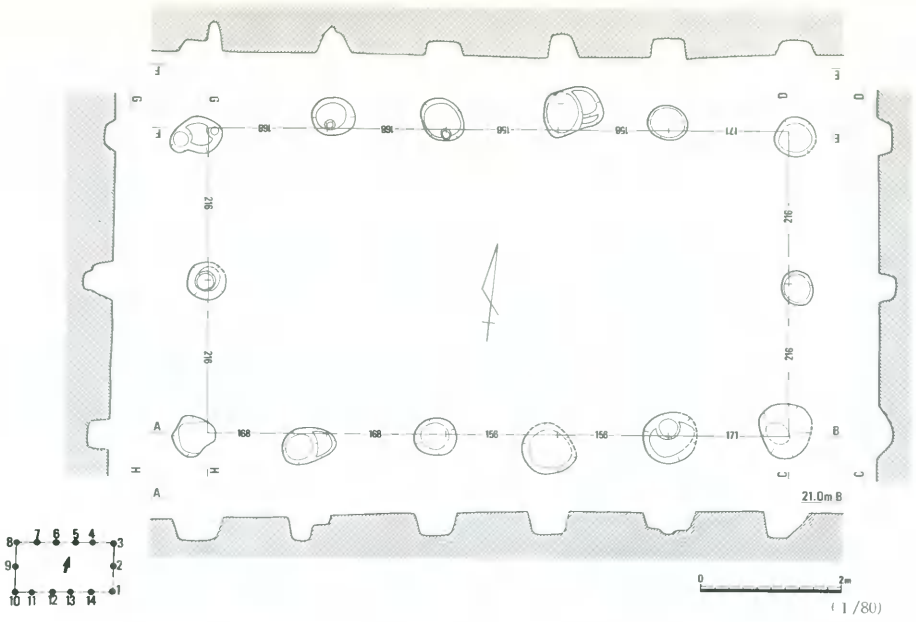
掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
286	須恵器	高杯				良好	（内・外・断）灰白N-7	微砂	

掘立柱建物32は、ＭＭ３区で検出され、掘立柱建物26の東約13ｍに位置する。３×２間の建物であり、棟方向はＮ－13°－Ｅを指す。西側の桁行がやや長く663㎝を測り、梁間は447㎝である。

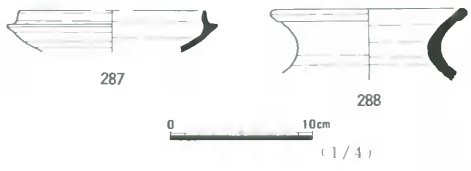
柱穴は、やや方形を意識したかのような円形を呈する。これは、本来的には方形であったものが崩壊したものとも理解される。柱穴の規模は径60～70㎝、深さは約25～30㎝ほど残っていた。

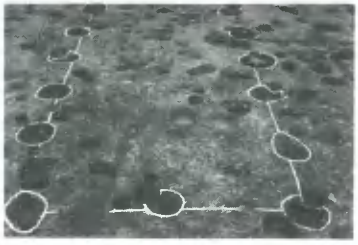
柱穴からの出土遺物には図示した高杯**286**がある。これを参考にすれば、この建物の時期を奈良時代と考えることが可能と思われる。（大橋）

掘立柱建物33



位置(調査区)	規　模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm) 桁	梁	面積(㎡)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期
MM6	5×2	819	432	156～171	216	35.4	N-84°-E	円	56～65	古墳後半末葉



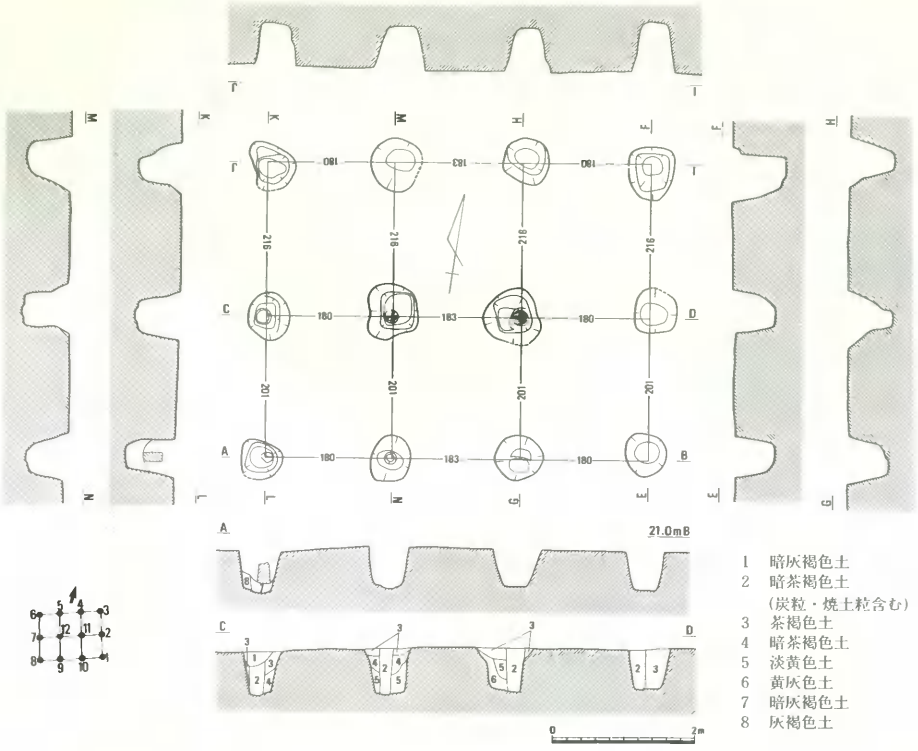


掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
287	須恵器	杯身	(13.0)			良好	(内・外)オリーブ灰5G5/1 断)褐灰7.5YR4/	微砂	ロクロ右回り
288	須恵器	甕	15.6			良好	(内・外)灰N5/ 断)褐灰7.5YR4/	細礫	平面自然軸

掘立柱建物33は、M19・20グリッド(MM6区)に位置する。棟をほぼ東西方向に向ける5×2間の建物で、規模は桁行819cm、梁間432cmを測る。柱穴掘り方はほぼ円形を呈し、規模は径60cmあまりを測る。その並びを見ると一応どこかに軸線が掛かるものの、やや整然さに欠ける。柱間間隔は桁行の東端が少し幅広である以外には、ほぼ一定している。梁間の柱間間隔は桁行に比べて広く、ほぼ216cmで一定している。

建物の時期は、わずかに出土した須恵器から古墳時代後期、6世紀後半ごろと考えられる。(平井)

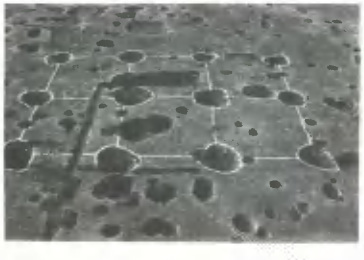
掘立柱建物34

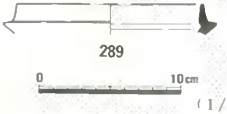


位置・調査区	規　模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm) 桁	柱間寸法(cm) 梁	面積(㎡)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期
ＭＭ６	3×2	543	417	180～183	201～216	22.6	N-83°-E	方・円	80×60	古墳後半末葉

掘立柱建物34は、Ｍ・Ｎ20グリッド（ＭＭ６区）に位置する。建物33・35に近接し、建物33とほぼ平行している。建物は３×２間の総柱で、桁行 543cm、梁間417cmを測る。柱穴掘り方の平面形は円形と不整円形だが、２段に落ち込むものの中場と底面は方形である。これは本来、方形の掘り方であった上部が崩落したためと考えられる。その規模は径60～80cmで、底面のレベルをほぼそろえている。確認した柱痕は径15～20cmで、Ｐ８では柱根の基部が残存していた。

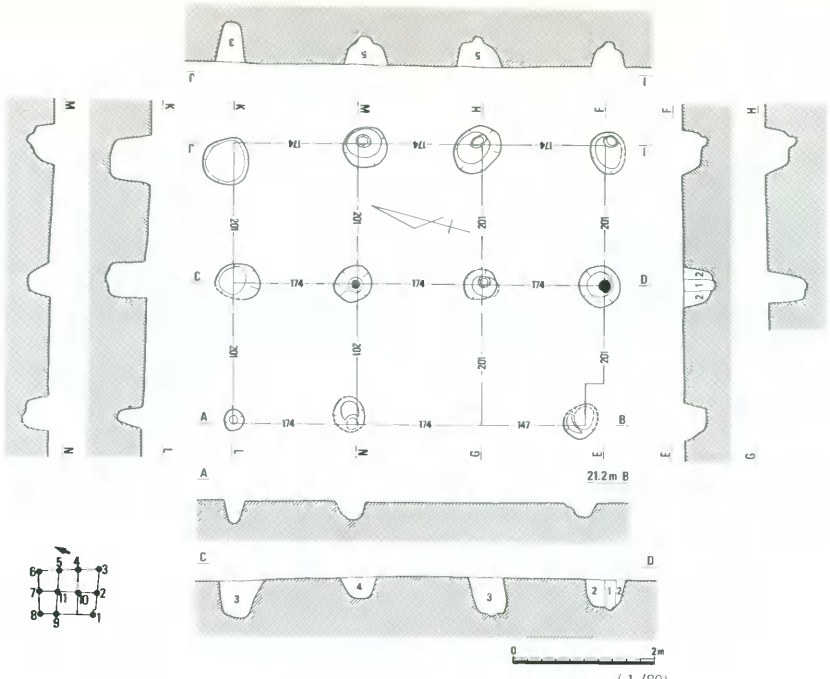
建物の時期は古墳時代後期と考えられる。（高田）





掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
289	須恵器	杯身	(13.0)			良好	(内・外・断)暗青灰5PB4/1	精良	

掘立柱建物35



(1/80)

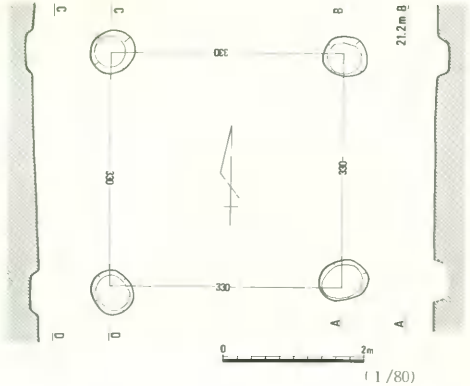
1　暗褐色土
2　茶褐色土
3　黄茶褐色土
4　茶灰色土
5　暗黄褐色土

位置(調査区)	規　模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm)		面積(m²)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期
				桁	梁					
MM6	3×2	495～522	402	147～174	201	21.9	N-17°-W	円	49～55	古代以前

掘立柱建物35は、M・N20・21グリッド(MM6区)に位置する。棟をほぼ南北方向に向ける総柱の建物で、規模は桁行495～522cm、梁間402cmを測る。柱穴掘り方は南西隅から桁行方向に1間寄ったところが欠けている以外は揃っている。ただ規模は北西隅のような小さいものから北東隅のような大きいものまであり、やや不揃いという感じは否めない。柱穴掘り方の中には、柱痕跡や柱にかかる重みで掘り方の底部がくぼんだ痕跡を残すものが認められる。柱間間隔は南西隅が少し北側へ寄っている以外は一定しており、桁行は174cm、梁間201cmを測る。

遺物はまったく認められなかった。このため建物の時期は明確にし得ないが、柱穴掘り方の埋土から少なくとも中世にまで下るものではないと考えられる。　(平井)

掘立柱建物36



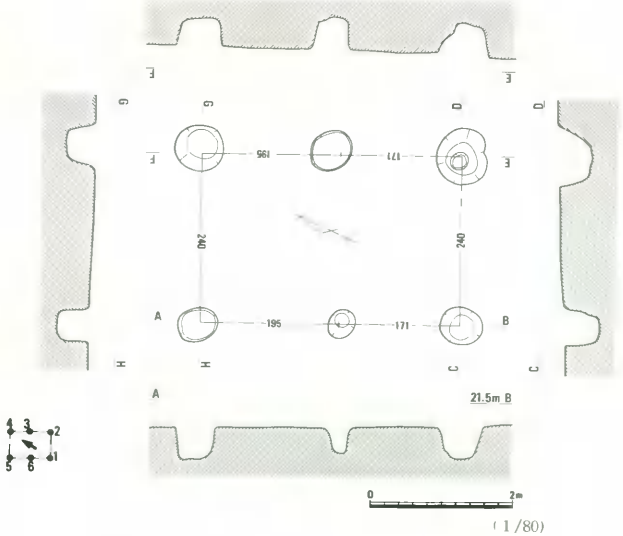
（１/80）

掘立柱建物36は、Ｍ・Ｎ21グリッド（ＭＭ６区）に位置し、建物35と近接する。また、竪穴住居31と重複するが、その切り合い関係から建物36の新しいことを確認している。建物の規模は１×１間で、桁行と梁間は330㎝を測る。柱穴掘り方の平面形はほぼ円形で、規模は径65㎝である。埋土は暗灰褐色土で、柱痕等は確認していない。柱間が広いものの、柱穴の埋土・規模・底面のレベルがそろうことから建物とした。

時期は、竪穴住居31より新しいことから、古墳時代後半以降と考えられる。（高田）

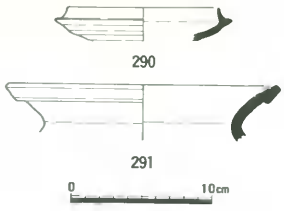
位置・調査区	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
ＭＭ６	１×１	330	330	330	330	1.1	Ｎ－１－Ｗ	円	65	古墳後半以降

掘立柱建物37



（１/80）

位置・調査区	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
ＭＭ６	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	古墳後半末葉以降



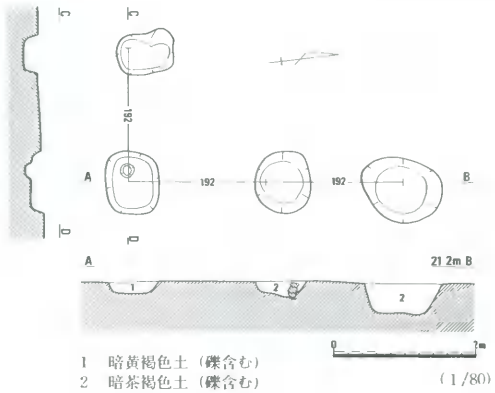
（1/4）

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
290	須恵器	杯身	10.7			良好	(内・断)灰N4/　(外)暗灰N3/	細砂	ロクロ方回り
291	須恵器	甕	15.4			良好	(内・外・断)灰N6/	細砂	

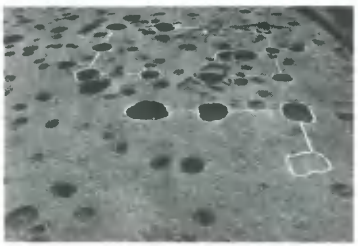
掘立柱建物37は、M21グリッド(ＭＭ６区)に位置する。棟を北西南東方向に向ける２×１間の建物で、規模は桁行366cm、梁間240cmを測る。柱穴掘り方は円形を呈し、規模は61cmを測る。柱間間隔は桁行に20cmあまりの較差が見られるが、梁間は一定している。

遺物はわずかに須恵器が出土している。**290**の須恵器の杯身は口径が小さくなり、内傾する口縁部で、立ち上がりも短くなるなど、古墳時代後半、７世紀初頭の特徴を示している。　（平井）

掘立柱建物38



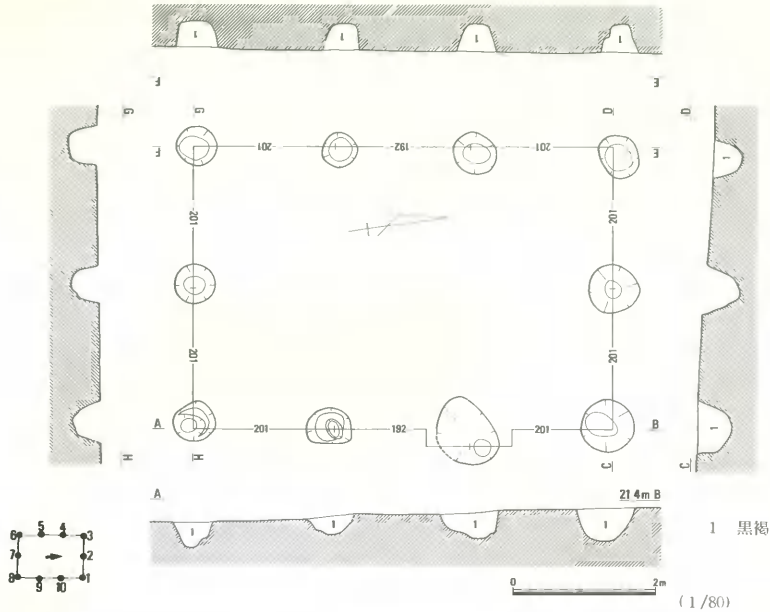
1　暗黄褐色土（礫含む）
2　暗茶褐色土（礫含む）
（1/80）



位置・調査区	規模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm) 桁	梁	面積(㎡)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期
ＭＭ３	不明	不明	不明	192	192	不明	N-6°-E	方・円	93×76	奈良？

掘立柱建物38は、ＭＭ３区にあり、後述する掘立柱建物39の西隣に位置する。精査したにも関わらず、桁方向で２間、梁方向で１間が確認されたのみであり、Ｌ字型に検出したにすぎない。建物方向は、Ｎ－６°－Ｅを指し、ほぼ真北方向を示す。出土遺物は細片のみであり、これからは時期を決定できなかったが、奈良時代のものと推測している。　（大橋）

掘立柱建物39



1　黒褐色土

（１/80）

位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
ＭＭ３	３×２	594	402	192～201	201	23.8	Ｎ-８-Ｅ	円	65	奈良

（１/４）

（１/３）

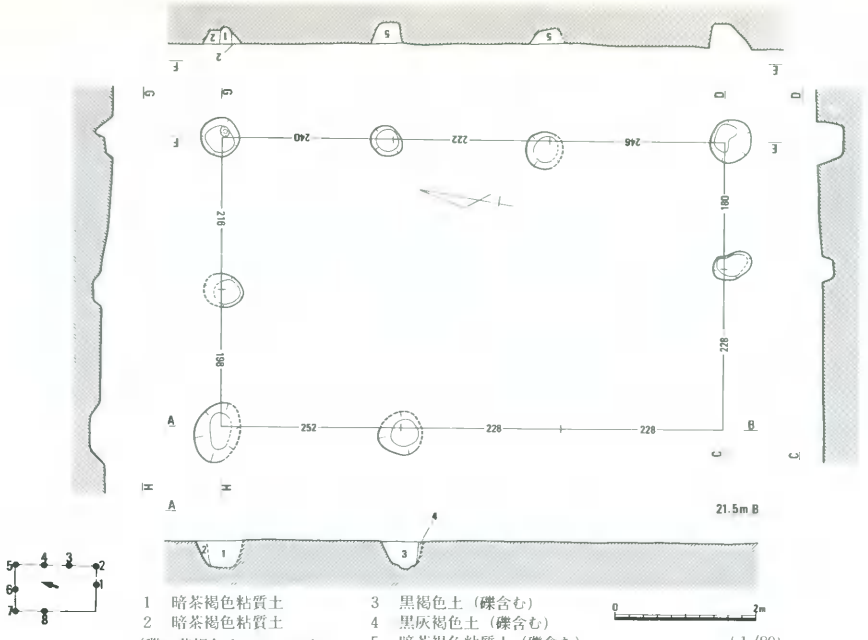
掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
292	土師器	高杯？	(13.7)			良好	灰白10YR8/2	精良	内外面赤色顔料

掲載番号	器種	材質	法量				備考
			最大長（mm）	最大幅（mm）	最大厚（mm）	重量（g）	
M16	不明	鉄	44.0	24.0	4.5	1.79	

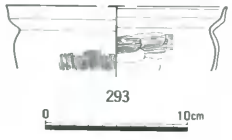
掘立柱建物39は、前述した掘立柱建物38の東隣に位置し、建物方向をほぼ同一にする。３×２間の桁行は594cmを測り、梁間は402cmあった。柱穴はほぼ円形を呈していたが、遺存状況が悪く本来の形態かどうかは断定できない。現状では径約65cm、深さ約20cmを測る。

柱穴からの出土遺物として**292**の丹塗りの土師器と**M16**の不明鉄製品を図示した。この遺物を参考にすれば、この掘立柱建物の時期は奈良時代と考えられよう。　（大橋）

掘立柱建物40



位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
ＭＭ３	3×2	708	408～414	222～252	180～228	29.1	N-7°-W	円	31～50	古代？



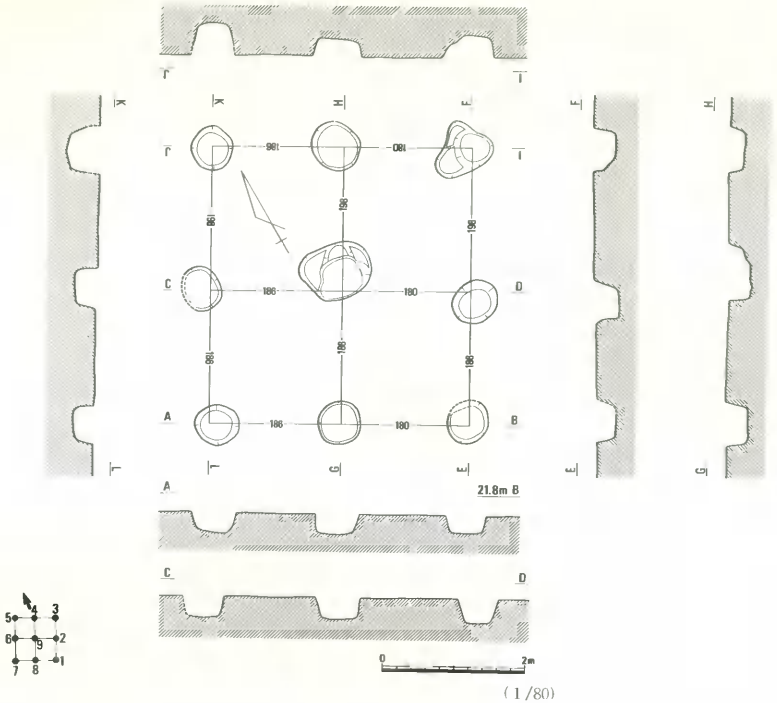
（1/4）

掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
293	土師器	鉢	15.2			良	橙（5YR6/6）	微砂	内外面ナデ調整

掘立柱建物40は、ＭＭ３区とＭＭ６区にまたがって検出され、掘立柱建物39と重複する。３×２間の建物と判断したが、南西隅と西側の桁方向の計２本は確認できなかった。建物の方向はＮ－７°－Ｗを測り、掘立柱建物38・39と近似する。柱穴の規模は径50㎝程度である。

柱穴からの出土遺物として図示した**293**は土師器の鉢であり、古墳時代前半の時期が考えられ、直接的にこの建物の時期を示すものではないと判断している。（大橋）

掘立柱建物41

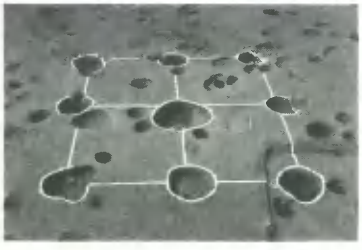


（１/80）

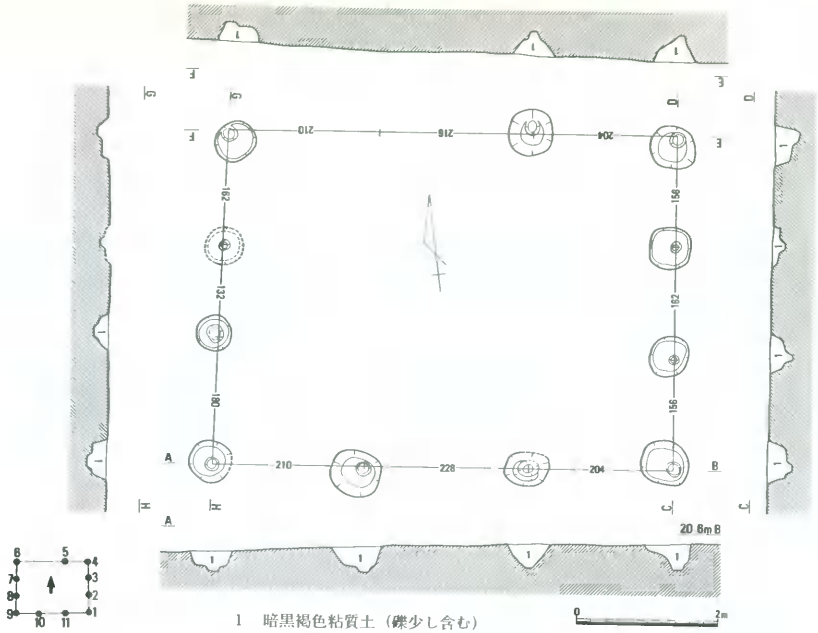
位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
ＭＭ６	２×２	384	366	186～198	180～186	14.1	N-84°-E	円	59～90	古墳後半末葉以降

掘立柱建物41は、M22グリッド（ＭＭ６区）に位置し、黄色土上面で検出したもので、竪穴住居68と重複する。建物の規模は２×２間の総柱で、桁行386 cm、梁間366 cmを測る。柱穴の平面形は円形で、不整円形を呈するＰ３とＰ９については、複数の柱穴が重複したためと考えられる。その規模は径60cm前後を測り、壁がほぼ垂直に近い急斜に落ち込む。底面はいずれも平坦で、そのレベルをほぼそろえている。埋土は灰茶褐色土で、柱痕等は確認していない。なお、竪穴住居68と重複するのはＰ５で、検出状況から建物が新しいことを確認している。

出土遺物は少量の土器細片で、建物の詳細な時期は不明であるが、重複する竪穴住居68との切り合い関係から、６世紀中頃以降と考えられる。　（高田）

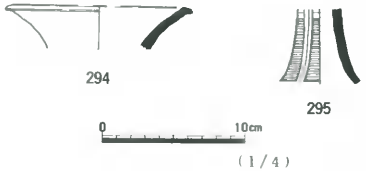


掘立柱建物42

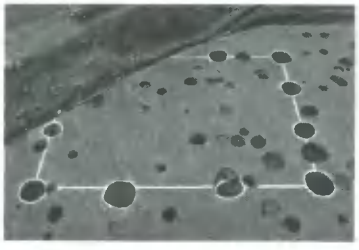


（１/80）

位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
ＭＭ３	3×3	630～642	474	204～228	132～180	30.1	N-8°-W	円	64	奈良



（１/４）

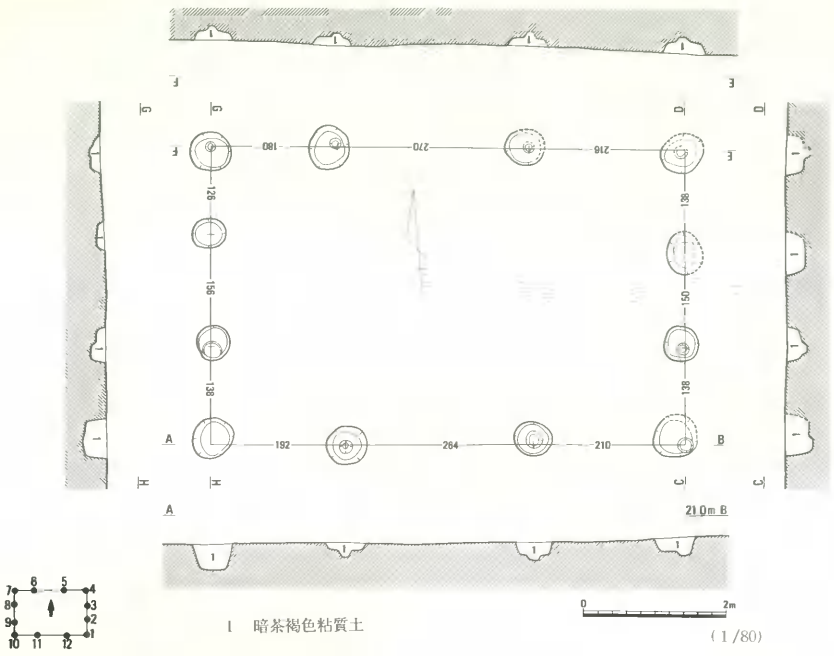


掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
294	須恵器	甕？				良好	（内・外・断）暗青灰5PB4/1	精良	
295	須恵器	高杯		脚（12.0）		良好	（内・外）暗青灰5PB4/1 （断）にぶい赤7.5YR4/4	精良	

掘立柱建物42は、ＭＭ３区とＭＳ１区にまたがって検出された。桁行３間、梁間３間の建物である。建物の方向は、Ｎ－７°－Ｅであり、ほぼ真北方向を示す。柱穴は、やや角を有し方形に近く、長軸で60cmほどの規模を持つ。その底面は径10～15cmほどに浅く窪み、柱痕跡状を呈する。

出土遺物は**294・295**の須恵器があるが、これが直接的にこの建物の時期を示すものではないと考えている。建物の時期は、その主軸方向などから奈良時代のなかにおさまると判断した。　（大橋）

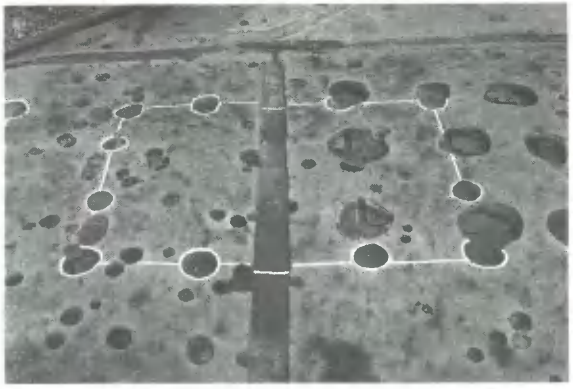
掘立柱建物43



1　暗茶褐色粘質土

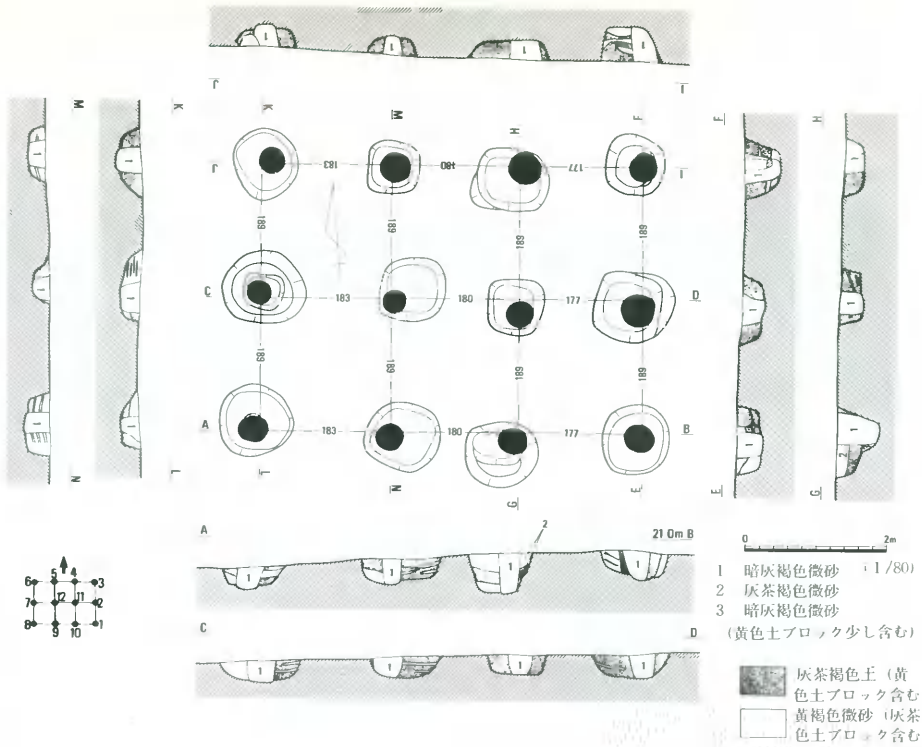
（１/80）

位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
ＭＭ３	3×3	666	420～426	180～270	126～156	28.2	N-8° W	円	57	奈良

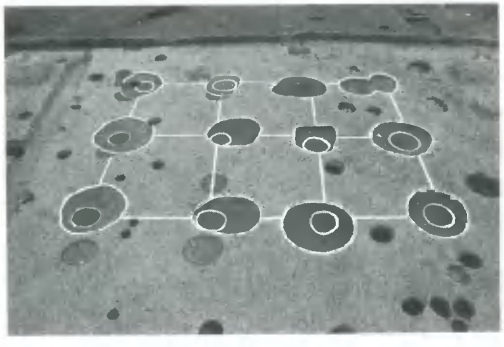


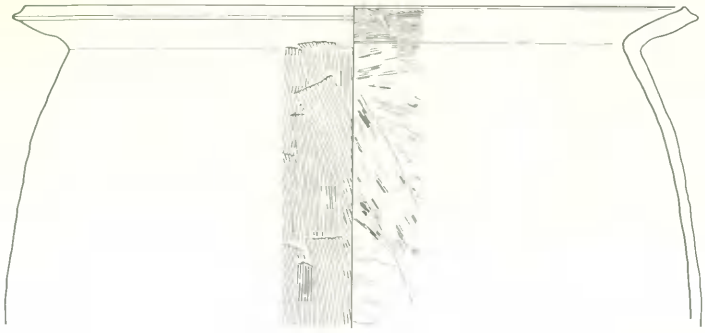
掘立柱建物43は、掘立柱建物42の東隣に位置し、建物の方向をＮ－５°－Ｅにとり、ほぼ主軸を同一にする。桁行３間、梁間３間であり、桁行の柱間距離で中央部分が長くなる。この建物構造は掘立柱建物42と同様であり、これと同時併存あるいは近接した時期が考えられる。出土遺物は細片のみで図示していないが、先のことから奈良時代と考えることが可能と判断した。　（大橋）

掘立柱建物44



位置(調査区)	規　模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm) 桁	柱間寸法(cm) 梁	面積(m²)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期
MM3	3×2	540	378	177～183	189	20.4	N-84°-W	方・円	×90	奈良





297

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
296	土師器	甕	46.5			良好	にぶい橙7.5YR6/4	微砂	口縁部強いヨコナデによる凹部
297	土師器	高杯				良好	にぶい赤褐2.5YR5/4	精良	脚柱部面取り成形・赤色顔料
298	須恵器	高台付		(15.1)		良好	(内・外・断)灰白N8	微砂	丁寧なヨコナデ

掘立柱建物44は、ＭＭ３区で検出され、掘立柱建物43の東側と重複する。桁行３間、梁間２間の総柱の建物である。建物の方向はＮ－６－Ｅを指し、真北方向を指向する。建物は、桁行で540cm、梁間で378cmを測る。柱穴は、ややいびつではあるが一辺90cmほどの隅丸方形を呈する。斎富遺跡では柱穴規模の点で最大級の建物である。柱穴の埋土は灰褐色土と黄褐色土を互層状につき固めている状況が確認された。柱痕跡は、径30～40cmのものが確認された。また、北東隅の柱穴では柱痕跡が二重になり、そのひとつの底に礎石状に小礫が配されていた。このことは柱の立て替え、もしくは補強が行われていたと理解された。

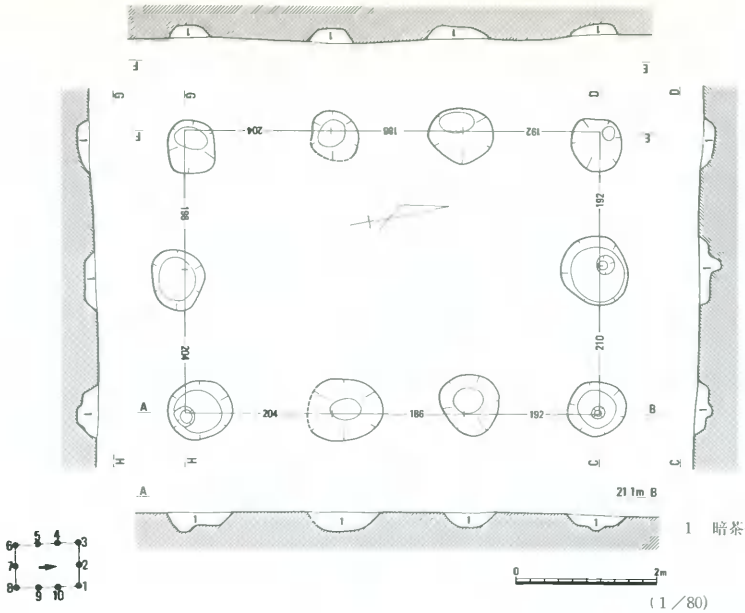
なお、後述する二重の方形区画溝とも方位を同一にするものの、建物付近ではこの溝は未検出であった。溝の延長線を想定すればこの建物とは間隔が100cmほど接近しており、同時併存であるかどうかの判断はできなかった。このことは、区画内に位置する真北に近い方位をとる掘立柱建物群がすべて同時併存ということではないとの傍証となると考えられる。

柱穴からの出土遺物として**296**～**298**を図示した。**296**は土師器の甕である。**297**は面取りの脚柱をもつ土師器の高杯であり、丹塗りが観察される。**298**は須恵器の高台付杯か高台付壷である。

これらの出土遺物を勘案すれば、この掘立柱建物の時期は奈良時代と判断されよう。また、この掘立柱建物と建物の方位を同一にする他の建物の時期を推察する材料の一つとなると思われる。

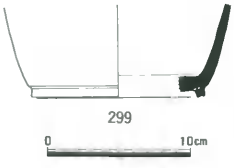
（大橋）

掘立柱建物45

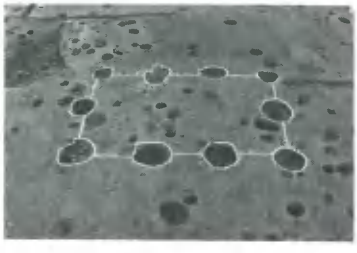


（1／80）

位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
MM3	3×2	582	402	186－204	192－210	23.4	N-11°-E	円	86	奈良



（1／4）

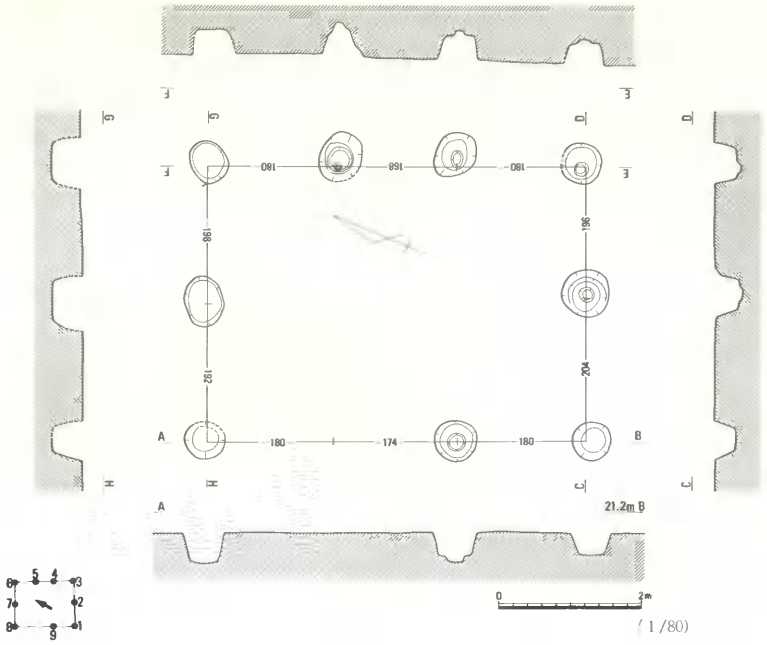


掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
299	須恵器	高台付壺		11.2		良好	内・外・断	精良	高台部内面は、やや内側にアクセントを持つ

掘立柱建物45は、MM3区で検出された。前述した掘立柱建物43の東側の梁間のほぼ延長線上にこの建物の東側の桁行が位置する。桁行3間、梁間2間の建物である。桁行582cm、梁間402cmを測る。建物の方位はN－11°－Eとなる　柱穴は遺存状況が悪いのか、わずかに方形を意識したかのような円形を呈する状況で検出されている。残存している深さも20cmほどと浅い。

柱穴からの出土遺物として、**299**の高台付の壺を図示した。これから推測すれば、この建物の時期は奈良時代と考えられる。　（大橋）

掘立柱建物46



（1/80）

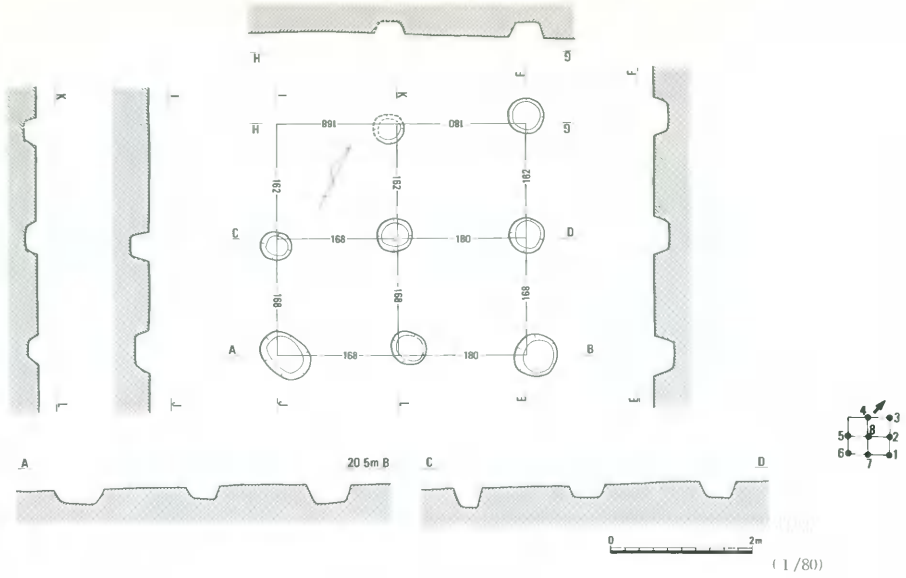
位置（調査区	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
ＭＭ３	3×2	528～534	390～400	168～180	192～204	21.0	N-22°-W	円	62	古墳後半～奈良

掘立柱建物46は、ＭＭ３区で検出された。掘立柱建物44と一部重複する。桁行３間、梁間２間の建物であるが、西側の桁の柱穴の１本は掘立柱建物44に重複し壊されており、検出していない。桁行で最大534㎝、梁間で最大400㎝を測る。建物面積は約21㎡である。建物の方向は棟方向でＮ－22°－Ｗを示す。

柱穴は、径60㎝前後の円形を呈し、残存する深さも20～30㎝ほどである。柱穴の底面には径10～15㎝ほどの窪みが認められ、柱痕跡を示すものと考えられる。

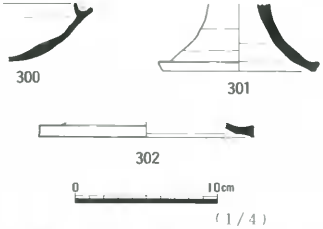
柱穴からの出土遺物はなく、図示できなかった。これからはこの建物の時期を判断することはできなかった。しかしながら、先述したように掘立柱建物44に壊されることから、これに先行する建物であることが確実である。現状では、古墳時代後半から奈良時代の大きな幅のなかにこの建物の時期を捉えざるをえない。　（大橋）

掘立柱建物47

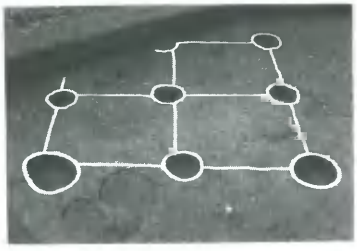


（１/80）

位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
ＭＳ２	２×２	348	330	168～180	162～168	11.5	Ｎ－63°－Ｅ	円	54×48	古墳後半主体



（１/４）



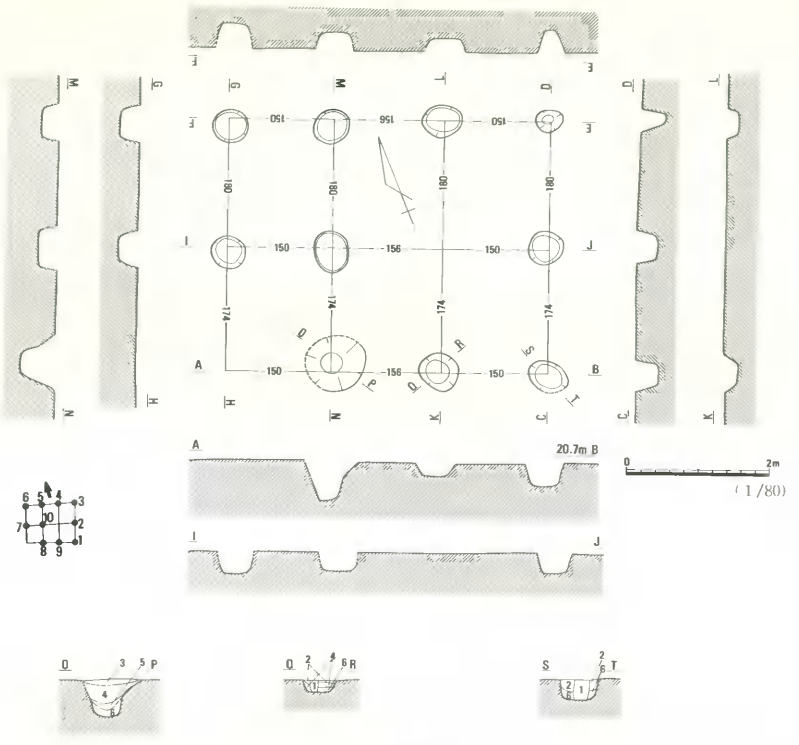
掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
300	須恵器	杯身				良好	（内・外・断）灰N6/	細砂	立ち上がり部折り込み
301	須恵器	高杯		10.6		良好	（内）暗灰 N3/　（外）暗灰 N3/ （断）赤灰2.5YR4/1	砂礫	脚端部上方へつまみ出す
302	須恵器	高杯		15.1		良好	（内・外・断）青灰5PB5/1	精良	

掘立柱建物47は、ＭＳ２区の北西側境界部分に位置し、西端の柱穴１本は検出することができなかった。

この掘立柱建物47は、棟方向がＮ－63°－Ｅになる２×２間の総柱の建物で、桁行348cm・梁間330cmになっていた。柱穴の規模は約54×48cmを測る円形を呈し、底部のレベルはほぼ同じであった。桁行の柱間寸法は168～180cm、梁間のそれは162～168cmの計測値になっていた。

柱穴内より須恵器の杯身と高杯の破片が出土したが、７世紀前半の時期になるであろう。（福田）

掘立柱建物48



1　黒褐色土と黄色土混合
2　黒褐色土
3　灰黄褐色土
4　黒灰褐色土
5　暗灰褐色砂質土・黄色砂質土混合
6　暗灰色粘土（黄色土含む）

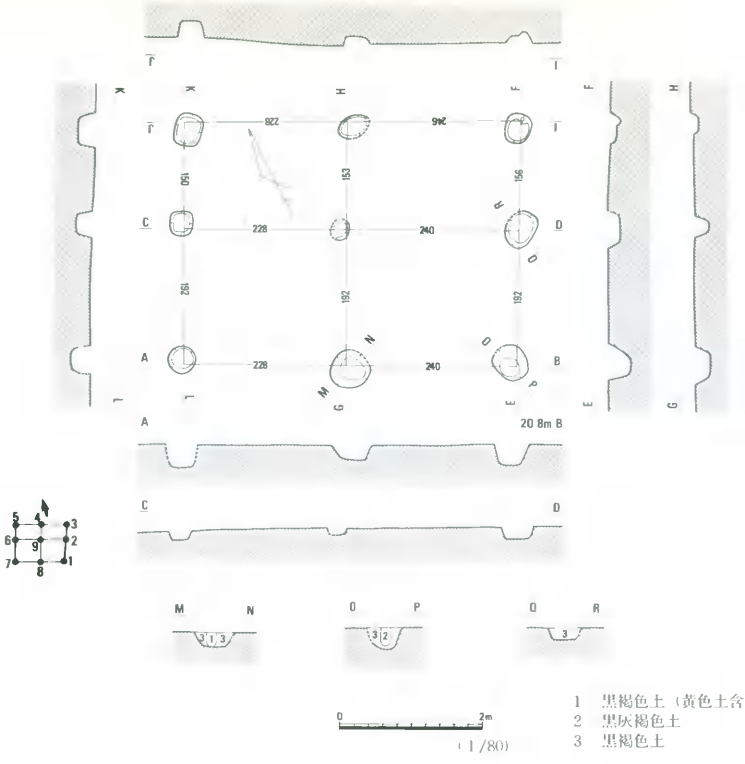
位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
ＭＳ２・ＭＭ１	２×１	456	354	150～156	174～180	16.1	Ｎ-68°-Ｗ	円	55×50	古墳後半末葉

掘立柱建物48は、ＭＳ２区の北西側境界に近接して存在し、掘立柱建物49とほぼ同じ規模で重複した状態に検出された。この建物の西側には前述した掘立柱建物47が認められ、東側には一部分が切り合って掘立柱建物50が発見された。この建物の西端に存在するべき柱穴は、精査したにもかかわらず検出できなかった。

この掘立柱建物48は、棟方向がＮ－68°－Ｗになる３×２間の建物で、桁行456cm・梁間354cmになっていた。柱穴の規模はＯ－Ｐ断面に提示したＰ８を除いて約55×50cmを測る円形を呈し、底部のレベルはほぼ同じであった。柱間寸法は桁行150～156cm・梁間174～180cmで、桁行よりも梁間の寸法が長くなっていた。柱穴内には柱痕跡と推定される黒褐色土と黄色土が混在した土が認められ、その周辺には黒褐色土や黄色土を含む暗灰色の粘土が存在した。

この建物に伴う遺物は何も出土していないが、周辺に存在した建物の調査結果を参考にしながら柱穴の規模や覆土を検討すると、掘立柱建物48は古墳時代後半後葉の時期になるであろう。　（福田）

掘立柱建物49



位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm） 桁	柱間寸法（cm） 梁	面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
ＭＭ１	２×２	468～474	342～348	228～246	150～192	16.2	Ｎ-62°-Ｗ	方・円	45×37	中世？

掘立柱建物49は、ＭＭ１区とＭＳ２区に位置し、掘立柱建物48と重複している。

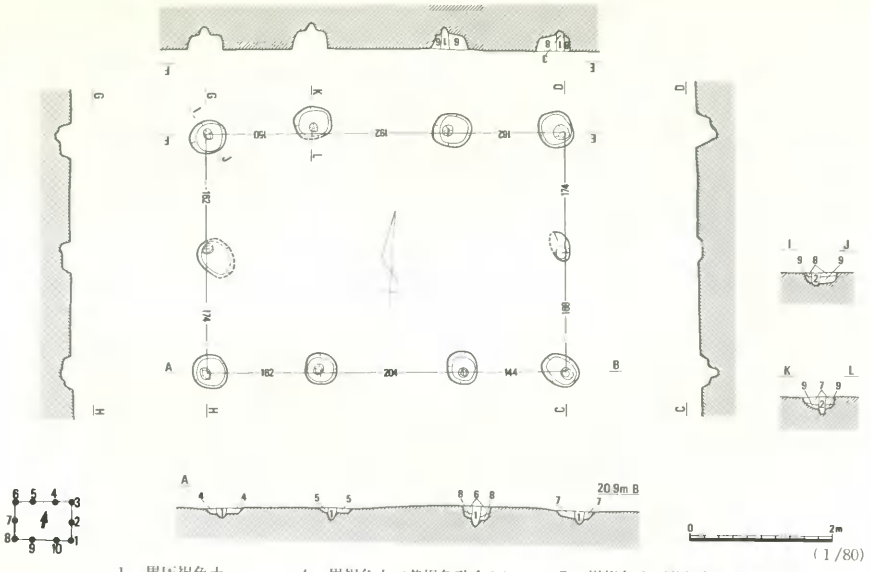
２×２間の総柱の建物であるが、調査時においては掘立柱建物48と同一視し、１棟のみを確認していた。整理時において両調査区にまたがる部分を接合して検討した結果、重複していることが明らかとなったのである。柱間は、北側の梁間が南のそれに対して狭くなり、開きぎみの傾向を示すことから整った配列になってない。

柱穴の平面形態は、Ｐ５とＰ６が方形を、他は円形を基調としていることが認められる。規模は，37～45cmを測りふぞろいな内容を示している。柱痕は、Ｐ１とＰ８に土層断面の観察によって認めることができたが、他はすでに掘り下げていたため確認することはできなかった。

出土遺物は、ほとんど認められず、したがって時期を判断しがたいのである。しかしながら、掘立柱建物48との重複で中世よりも古くなると考えていた。このことで、掘立柱建物69が形態的にこれと近い内容を有することからして、必ずしも中世よりも古くする必要はないと思考されるのである。

（下澤）

掘立柱建物50



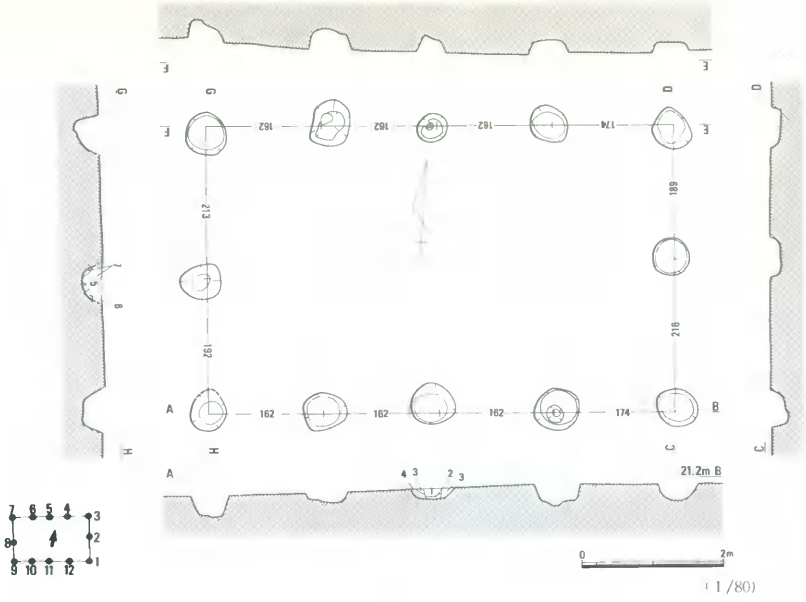
1　黒灰褐色土
2　黒褐色土
3　暗黄色粘質土
4　黒褐色土（黄褐色砂含む）
5　暗褐色土（黄褐色土含む）
6　淡黒褐色土
7　黒褐色土（黄褐色土含む）
8　黒褐色土・黄色土混合
9　黒灰褐色土・黄褐色土混合

位置・調査区	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
ＭＭ１	３×２	504～510	338～342	144～204	162～174	17.2	N-86°-E	円	51×43	Ⅰ

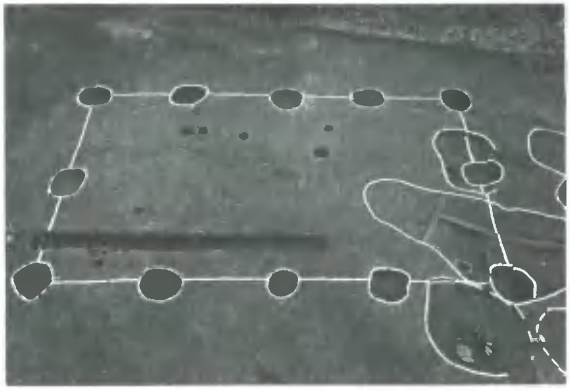
掘立柱建物50は、ＭＭ１区に位置し、掘立柱建物48・49と重複している。

３×２間の建物で、それぞれの柱間の距離は一定していない。柱穴の平面形態は円形を呈し、底面にはＰ２をのぞいてくぼみを形成させている。Ｐ２は、建物を構成する柱穴と比較して内容が相違しすぎるが、位置的にこの柱穴しか認められなかったため伴うものとしたのである。　（下澤）

掘立柱建物51



1　暗黒褐色粘質土
2　灰黄褐色粘質土
3　明黒褐色粘質土
4　灰黄褐色粘質土
5　暗灰褐色土
6　淡黄褐色土
7　暗灰黄色土

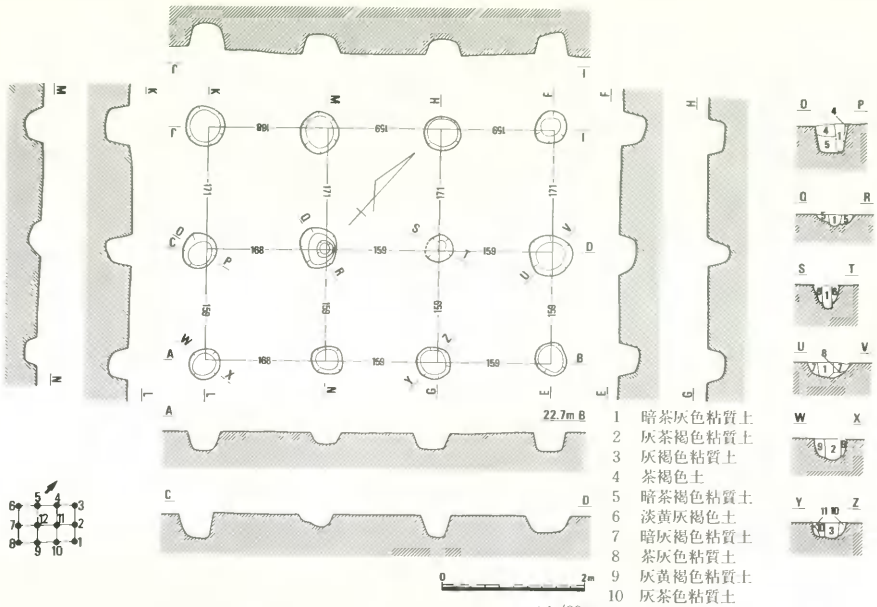


位置(調査区)	規　模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm) 桁	柱間寸法(cm) 梁	面積(㎡)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期
MM1	4×2	660	405	162～174	189～216	26.7	N-86°-E	円	38・51	中世

掘立柱建物51はＭＭ１区に位置する。桁行４間×梁間２間（660×405cm）の規模で、建物主軸をほぼ東西（Ｎ－86°－Ｅ）に向ける建物である。柱間距離は桁方向162cmで、東側１間のみが174cmを測る。梁間の柱間は統一性がない。

出土遺物はみられず建物の時期は不明であるが，中世の建物と推測している。　（伊藤）

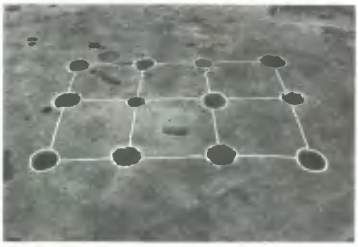
掘立柱建物52



位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
ＭＭ４	３×２	486	330	159～168	159～171	16.0	Ｎ-42°-Ｅ	円	51	古墳後千木塚以降

303

304



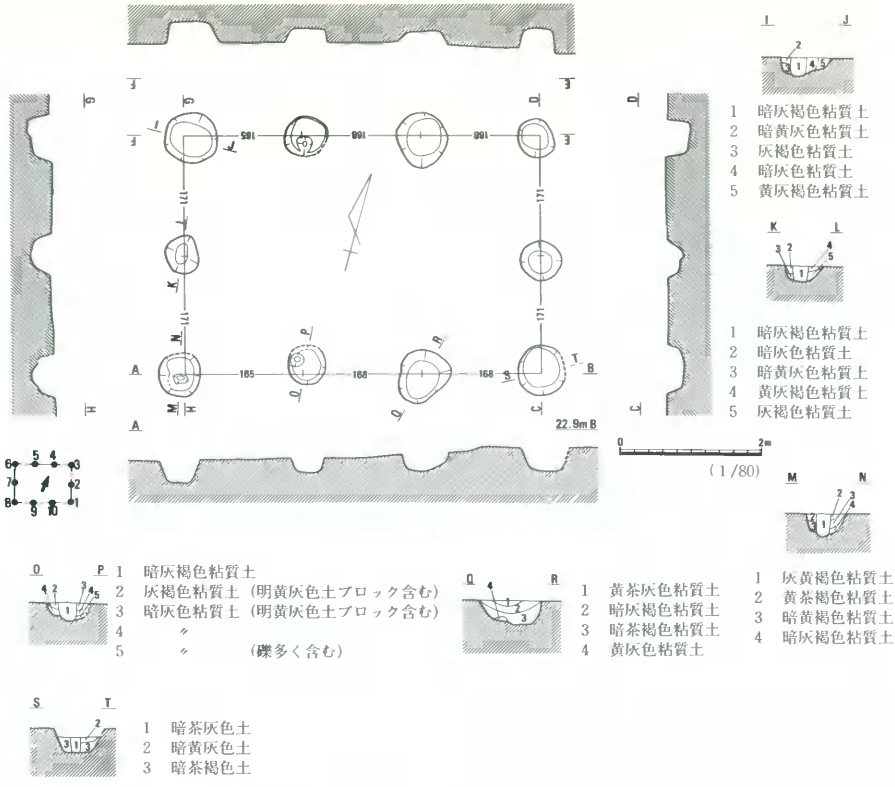
0　10cm
（1/4）

掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
303	須恵器	杯身	14.4			良好	（内・外）暗青灰5PB4/1　（断）暗青灰5RP4/1	微砂	
304	須恵器 土師質ヨ	カマド？				やや不良	（内・外）浅黄橙7.5YR8/6　（断）橙5YR7/6	微砂	内面青海波当具痕

掘立柱建物52は、ＭＭ４区に位置し、掘立柱建物53の南西側に接してある。

３×２間の総柱建物である。柱間は、ほぼ等しい距離にある。柱穴の平面形態は円形を示し、規模も径50cm前後を測るが、Ｐ11は掘り方が小さくなっている。柱痕は、土層断面の観察においてＰ２・Ｐ７・Ｐ８・Ｐ10～Ｐ12において認められたが、底面のくぼはＰ12のみに認められた。出土遺物は、**303**の須恵器と**304**のカマドである。いずれもが小片であるため、この建物の時期を判断するには躊躇する。　（下澤）

掘立柱建物53



位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（m²）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
ＭＭ４	1×2	501	342	間5－168	171	17.1	Ｎ-74°-Ｅ	円	65	古墳後半～末葉以降

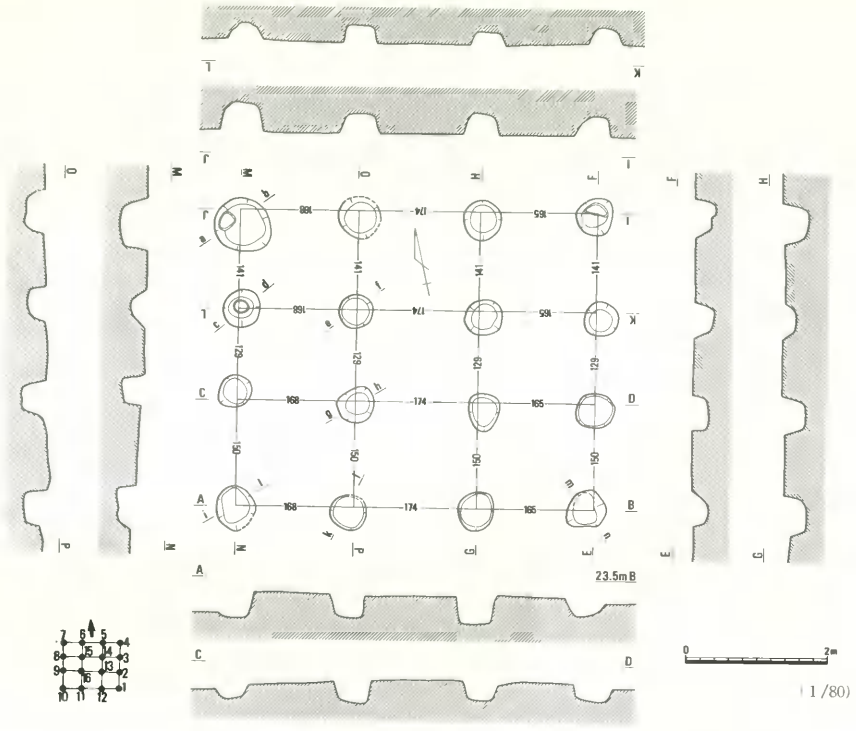
掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
305	須恵器	杯身				良好	（内・外）暗紫灰5P4/1　（断）灰赤10R4/2	微砂	外面自然釉
306	須恵器	甕				良好	（内・断）灰N4/　（灰）灰N4/	細砂	

掘立柱建物53は、前田ＭＭ４調査区に位置し、掘立柱建物52の南西に接してある。

３×２間の建物で、柱穴の平面形態は円形を示し、規模も径60cm前後と比較的大き掘り方となっている。柱痕は、土層断面の観察によりＰ１・Ｐ６～Ｐ９の５本が認められた。柱穴底面のくぼもＰ５・Ｐ８・Ｐ９で認められている。

出土遺物は、Ｐ８から**306**の甕の口縁部とＰ９から**305**の杯身が検出されている。時期は、これらの須恵器から６世紀前半の段階を想定されるが、この建物の時期になると判断しがたいのである。　（下澤）

掘立柱建物54



（1/80）

1　暗褐色土
2　暗褐色土
（黄色土粒含む）
3　黒灰褐色粘質土

1　黒褐色土
2　暗黄灰褐色土

1　暗黄褐色粘質土
2　暗褐色土
（土器片含む）
3　暗灰黄褐色土

1　暗灰褐色土
（土器片含む）
2　〃
（黄色土含む）

1　暗灰褐色粘質土
2　灰褐色粘質土（礫含む）
3　灰黄色粘質土

1　黒褐色粘質土
2　暗灰褐色土
3　黒褐色土
（黄色土粒含む）

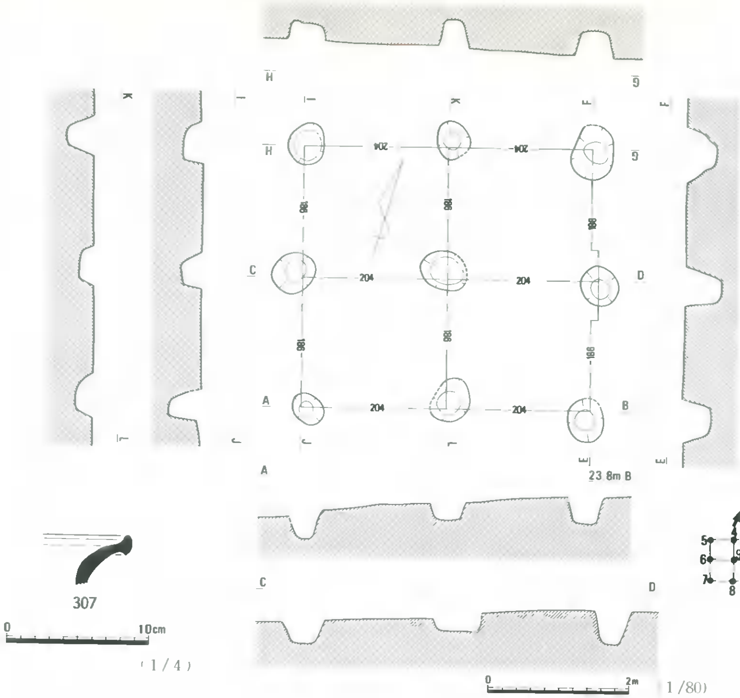
1　暗灰褐色粘質土
（土器片・礫含む）

位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（m²）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
ＭＭ４	３×３	[illegible]	4[illegible]	16[illegible]～174	[illegible]～1[illegible]	21[illegible]	N-[illegible]-W	円	[illegible]	奈良

掘立柱建物54は、ＭＭ４区に位置し、３×３間で、桁行がわずかに長い総柱の掘立柱建物である。柱間距離は桁方向で約10cm、梁方向で約20cmのばらつきはあるが、ほぼ等間隔に並び、円形の掘り方の平面形態を示す。その径は45cmから最大で75cmという数値である。検出面からの深さは、15cmの浅いものから40cmの深さの柱穴とまばらである。

このように柱穴が浅いのは、後世の開田によるものである。しかし、このようにわずかに残った柱穴内に、柱痕跡の認められるものも数本確認されている。図示した土層断面図の暗褐色土（１層）がそれである。出土遺物は細片で少量のみであったため時期の判断は困難であったものの、奈良時代のものと考えるのが妥当であろう。　（二宮）

掘立柱建物55



位置（調査区）	規模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
MBOX[illegible]	2×2	408	372	204	186	[illegible]	N-[illegible]-E	円	61・50	奈良

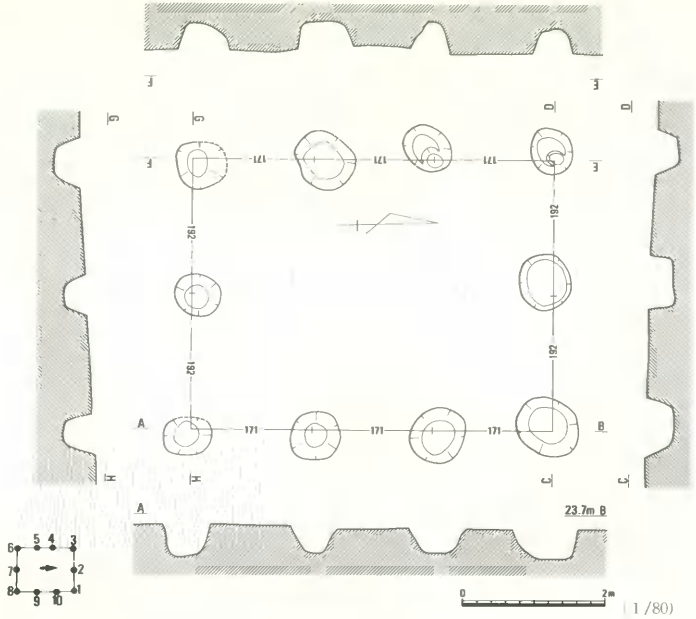
掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
307	須恵器	甕				良好	(内)灰N[illegible] (外)暗灰N[illegible] [illegible]灰褐5YR4/2	微砂	口縁部断面鈍い三角形・上方に拡張させる

掘立柱建物55は、東西方向の桁行がやや長めの２×２間の総柱建物である。柱穴掘り方は、ほぼ円形を呈するが、かなりいびつで不揃いである。柱穴の断面形もさまざまである。また、桁行・梁間それぞれの中央の柱穴がやや浅い傾向が観察される。さらに、建物を構成する柱穴の配置も、柱通りも直線的でなく、身舎からはみ出しているように見えるものさえある。

柱穴からの出土遺物には、**307**の須恵器片がある。甕あるいは、壺の破片と考えられるが、奈良時代以前の須恵器と考えてよいだろう。

建物の時期は、柱穴の埋積土や周辺の遺構との関係等から、やはり古代それも奈良時代のものと考えるのが妥当であろう。　　　　（岡田）

掘立柱建物56



（1/80）

位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（m²）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
MBOX2	3×2	513	384	171	192	19.7	[illegible]	円	[illegible]	奈良

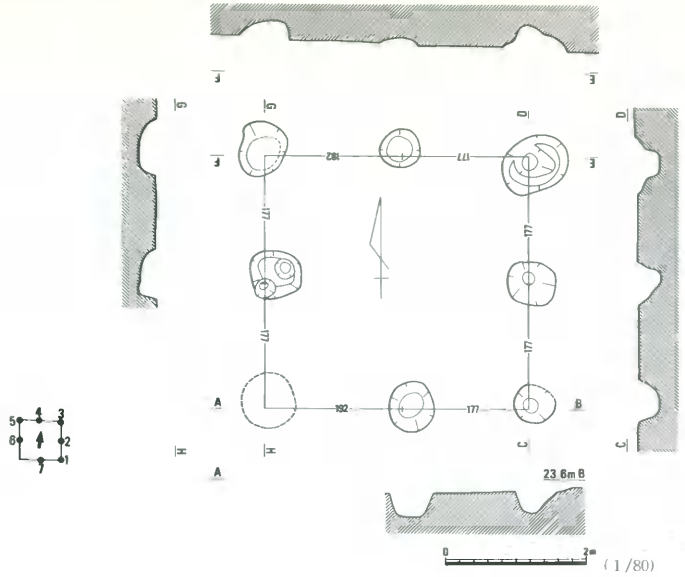
（1/4）

掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
308	須恵器	高台		(11.2)		良好	内・外・断・灰N[illegible]	微砂	内面不定方向のナデ

掘立柱建物56は、遺跡地の高位部の緩斜面で検出された、桁行３間、梁間２間の側柱建物である。棟方向はほぼ南北方向を示す。柱穴掘り方は、円形あるいはややいびつな不整円形を呈するものが多い。大きさもまちまちで、柱通りが揃っているわりには、掘り方の配置は不揃いである。しかも、柱穴の掘り方や底の形状も不統一である。桁行は６尺弱、梁間は６尺強を基準としており、それぞれの柱の芯心距離は等間隔である。

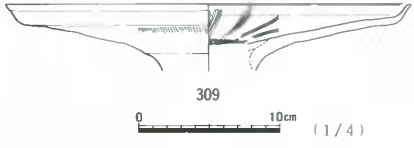
柱穴からの出土遺物は、**308**の須恵器杯の高台部分以外にはほとんどみられない。**308**は、比較的分厚い底部をもつ杯で、外底部にやや外方する高台が付けられる。奈良時代に比定される。　（岡田）

掘立柱建物57



（１/80）

位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
MBOX2	2×2	369	354	177～192	177	13.1	N-89°-W	円	72×62	奈良



（１/４）

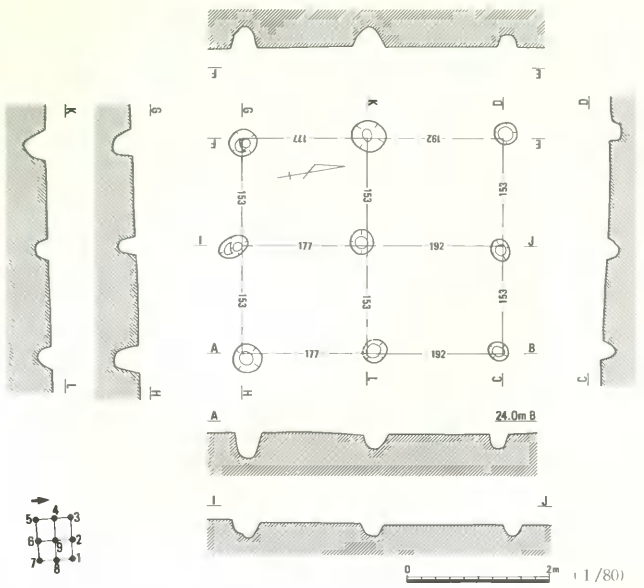
図載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
309	土師器	高杯	28.8			良好	明赤褐5YR5/6	砂礫	外面赤色顔料・内面放射状のヘラミガキ・黒斑

掘立柱建物57は、掘立柱建物56の南側に棟方向を揃えて並んで検出された２×２間の建物である。南東隅は、中世の井戸10の掘り方によって消滅している。

掘立柱建物56と同様、柱穴の形状には差があり、大小いびつな掘り方を示している。建物の南北梁間では６尺弱等間であるが、東西桁行では東側の柱間が短い。

Ｐ６からは、２本の柱痕跡が検出されており（いずれも抜き取りか？）、その１本から**309**の土師器高杯が出土している。脚部は失われているが、外面には赤色顔料が塗布されている。杯部には、放射状のヘラミガキ（暗文）が施され、口縁端部は緩やかに外方して立ち上がる。古代、それも奈良時代に比定される土師器と考えられる。　（岡田）

掘立柱建物58



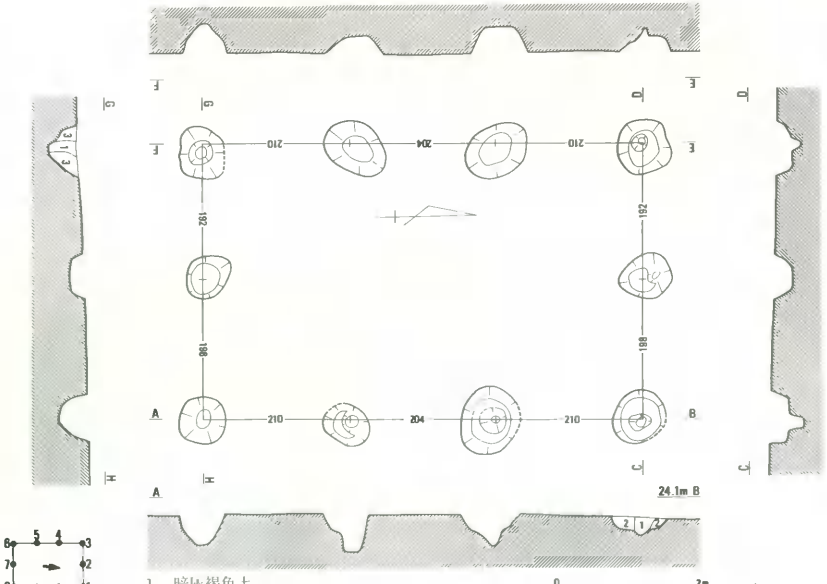
（１/80）

掘立柱建物58は、掘立柱建物59と重なって検出された２×２間の小規模な総柱建物である。東西方向がやや長く、ほぼ南北の棟方向を指し示すと考えられる。柱穴掘り方は、すべて円形でいびつなものは少ない。Ｐ８は、掘立柱建物59の柱穴１を切っており、先後関係は、明らかである。時期的には中世、室町時代に比定される。

（岡田）

位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm） 桁	柱間寸法（cm） 梁	面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
MBOX2	２×２	369	306	177～192	153	11	N-11°-E	円	37・42	中世（室町）

掘立柱建物59



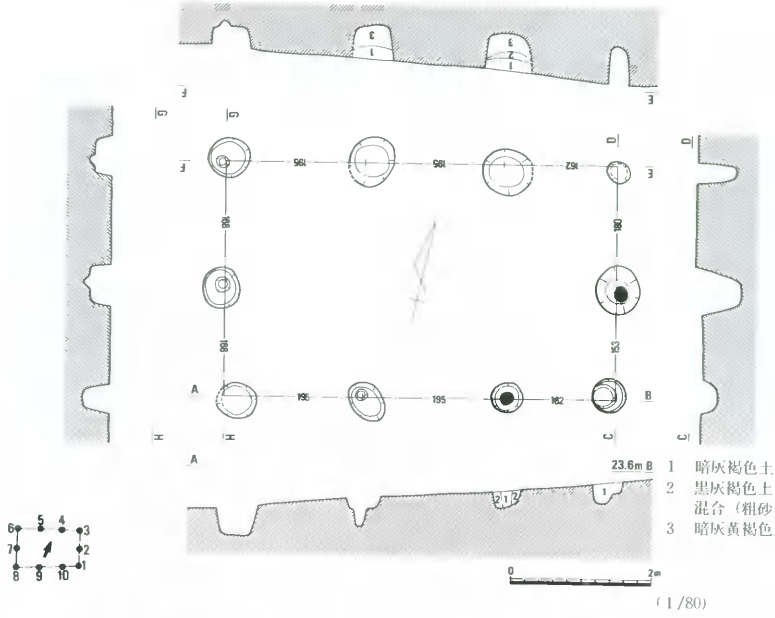
1　暗灰褐色土
2　淡褐灰色土（礫含む）
3　黄灰褐色土（礫多く含む）

（１/80）

位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
MB[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	192～198	24.3	N-1°-E	円	81×67	奈良

掘立柱建物59は、桁行３間、梁間２間の側柱建物である。棟方向はほぼ南北を示す。柱穴掘り方は円形を基本とするが、いびつで長円形を呈するものがみられる。また、柱穴の断面形もまちまちで底面をほとんど平らにするもの、擂鉢状にすぼむものなど不揃いである。柱間は桁行で７尺前後、梁間で６尺強前後で、掘立柱建物56などに比べると、梁間は同じであるが、桁行は長目である。柱穴からの出土遺物はまったくみられないが、周辺の遺構との関係などから、奈良時代に比定される掘立柱建物と考えられる。（岡田）

掘立柱建物60



1　暗灰褐色土（粗砂含む）
2　黒灰褐色土・暗灰黄褐色土混合（粗砂含む）
3　暗灰黄褐色土（粗砂含む）

（1/80）

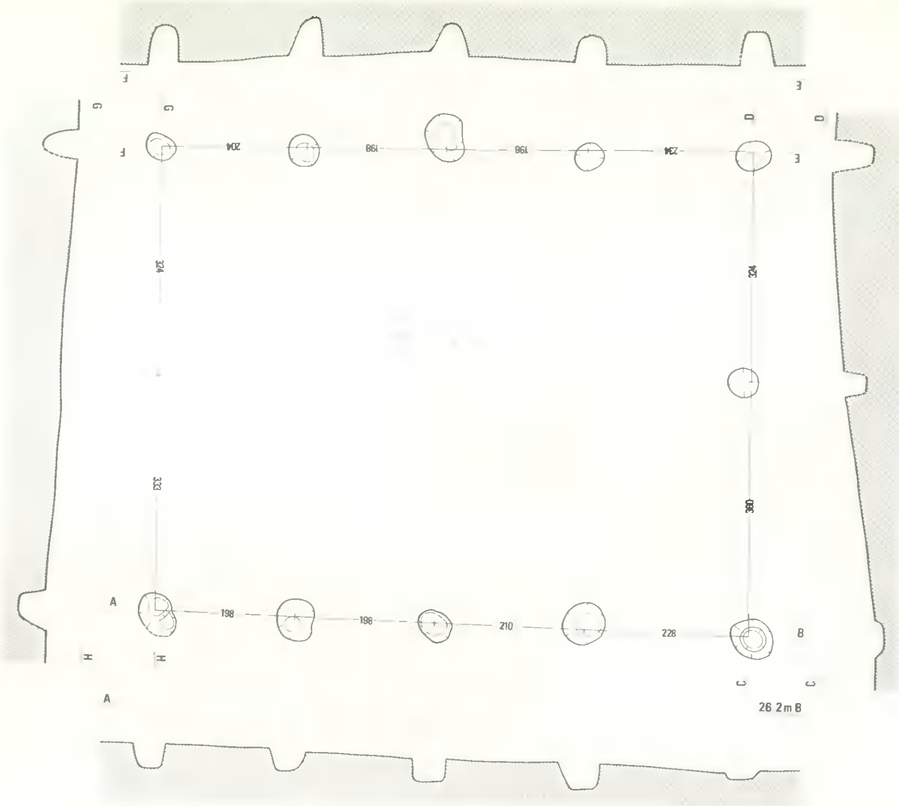
位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
MS1	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	円	[illegible]	?

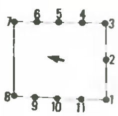
掘立柱建物60は、前田調査区の北東端部で検出された。

この建物は棟方向がＮ－78°－Ｅになる３×２間で、桁行552cm・梁間333～336cmになっていた。柱穴は円形または楕円形を呈し、Ｐ２とＰ10には柱痕跡が残存していた。柱間寸法は桁方向で162～195cm、梁方向153～180cmで、柱穴底部のレベルは地形に沿って不揃いになっていた。

この掘立柱建物60から出土した遺物はなかったので、時期は不明である。（福田）

掘立柱建物61





0　2m　(1/80)

位置(調査区)	規模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm)		面積(㎡)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期
				桁	梁					
MBOX1	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	54・[illegible]	[illegible]

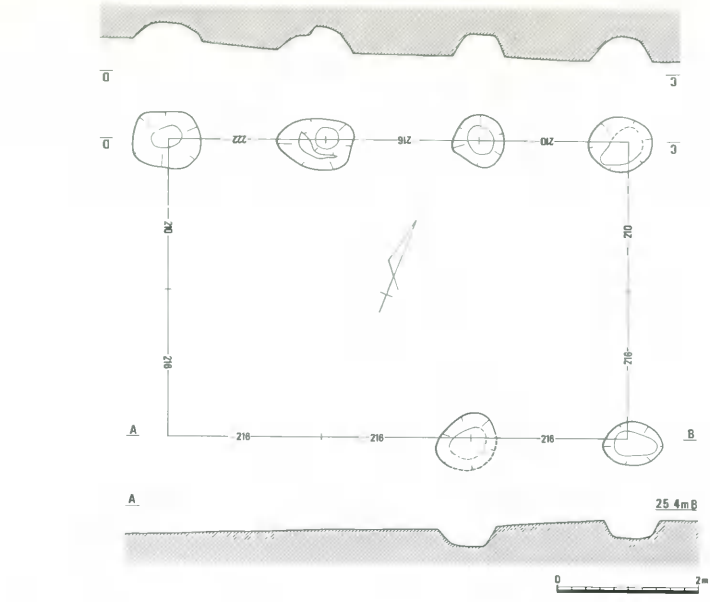
掘立柱建物61は、ＭＢＯＸ１区の北側に位置し、建物76が西隣にある。

基盤層が黄褐色であったため検出は容易であった。建物の北側は調査区外になるが、調査区外はすぐに丘陵端部となることから、さらに北側へ建物が延びるとは想定しにくい。

遺物は、柱穴から土師器片が少量出土していて、建物の時期は中～近世であると想定される。またこの建物と隣接する建物76は、主軸方向が同じであることから同時期の建物と考えられる。

遺構図には示していないが、建物61・76の西側に、建物と同じ主軸方向で柵列群が存在する。柵列群は、建物76の西に、建物76南側縁を延長する形で東西方向に２条が連続して配置され、その間に南北方向に１条、連続する２条の南側に同じく東西方向に１条の計４条が確認できた。建物・柵列の南側約10ｍに井戸11があり、これらと関連して屋敷地を構成していた可能性がある。　（氏平）

掘立柱建物62



(1/80)

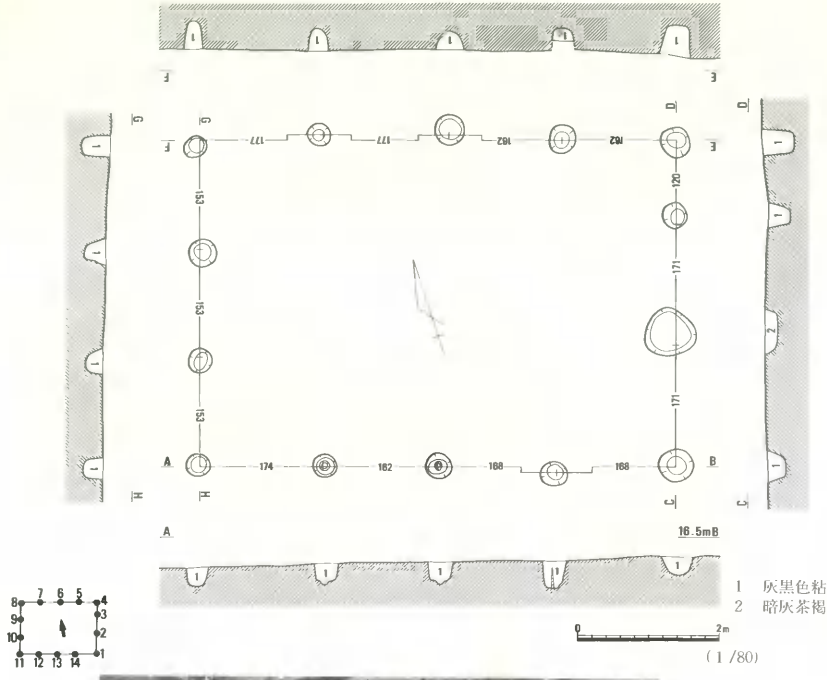
位置(調査区)	規　模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm)		面積(m²)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期
				桁	梁					
MBOX1	3×1	648	438	210~222	210~216	(27.6)	N 69　E	円	90×73	古代

掘立柱建物62は、ＭＢＯＸ１区のほぼ中央に位置する。長軸を東西方向にとる３×１間以上の建物と考えられる。建物周辺の地山は礫まじりの黒褐色土で、柱穴の検出は容易ではなかった。

建物柱穴の直径が50~80cmと周囲の柱穴に比べて大きいことから、建物の時期は古代の可能性がある。

ＭＢＯＸ１区にはこのような建物は１棟だけであるが、他の調査区との関連で考えると古代の建物群をなしていた可能性が高いものと思われる。　（氏平）

掘立柱建物63



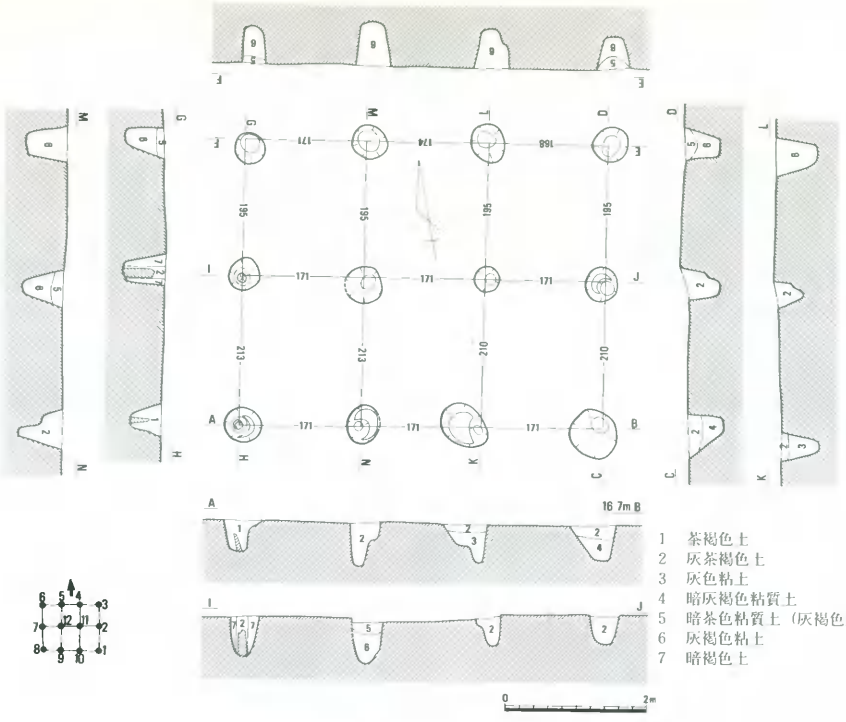
位置(調査区)	規　模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm)		面積(m²)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期
				桁	梁					
KM6	4×3	672～678	459～462	162～177	120～171	31.1	N-73°-W	円	[illegible]	[illegible]

掘立柱建物63は、亀田調査区の最も南西端部に位置する地形の低い地点に存在した。

この建物は棟方向がＮ－73°－Ｗになる４×３間で、桁行672～678cm・梁間459～462cmになっていた。柱穴はいずれも円形で、柱間寸法は桁行方向162～177cm・梁間方向120～171cmであった。

この掘立柱建物63に伴う出土遺物がないので時期は不明であるが、柱穴の規模や柱穴内の覆土などから推定して、中世に属するのではなかろうか。　（福田）

掘立柱建物64



1　茶褐色土
2　灰茶褐色土
3　灰色粘土
4　暗灰褐色粘質土
5　暗茶色粘質土（灰褐色土含む）
6　灰褐色粘土
7　暗褐色土

（1/80）

位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（m）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
KM5	3×2	513	405－408	168－174	195－213	20.9	N-90°-W	円	47－52	中世

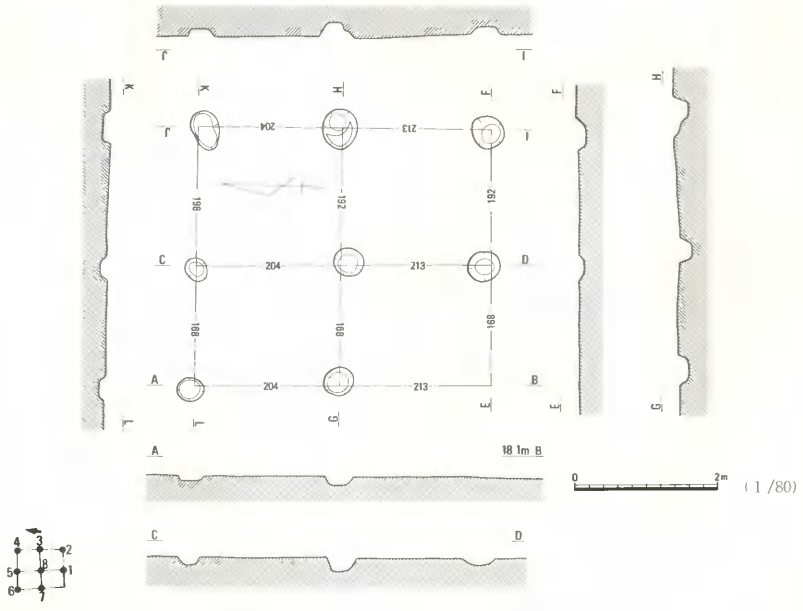
掘立柱建物64は、ＫＭ３区で検出された。掘立柱建物63の東に位置する。桁行３間、梁間２間の総柱建物である。

桁行では513㎝、梁間では最大408㎝を測り、建物面積は、約21㎡であった。棟方向はＮ－80°－Ｗを示す。柱穴の掘り方は径50㎝前後の円形を呈し、深さは30㎝ほど残存していた。また、このなかに径10～15㎝ほどの柱痕が残存していた。この柱痕の樹種はアカマツとの鑑定を受けた。柱穴の埋土は、灰色を基調とするものであった。

柱穴からの出土遺物は細片であり図示できず、これからは時期を判断できなかった。しかしながら、他の建物を構成する柱穴の埋土とこの建物の柱穴埋土を比較考慮して、中世以降のものと理解したい。

（大橋）

掘立柱建物65



（１/80）

位置(調査区	規　模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm) 桁	柱間寸法(cm) 梁	面積(㎡)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期
ＫＭ２	２×２	417	(360)～366	204～213	168～198	15.1	N-3°-W	円	45	中世以降？

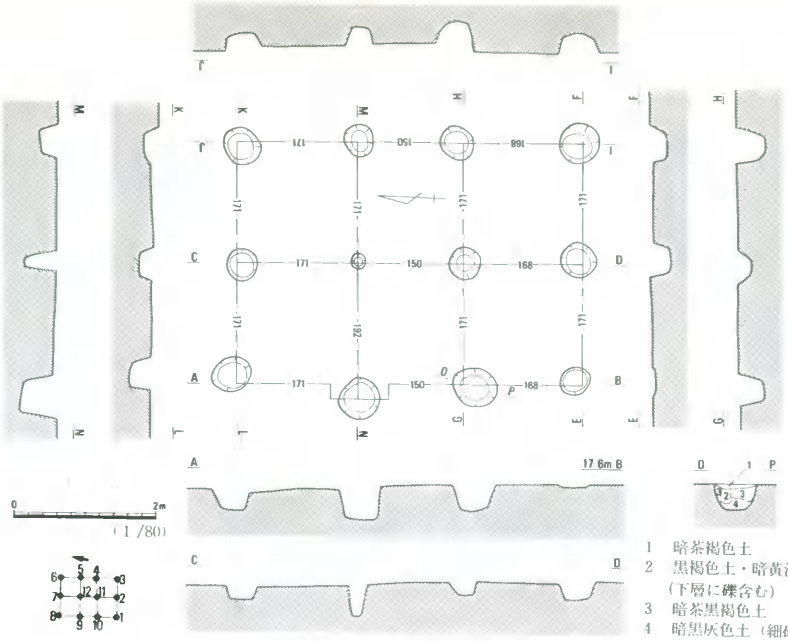
掘立柱建物65は、ＫＭ２区に位置し、建物５と重複して検出された。２×２間(417㎝×360～366㎝)のわずかに南北に長い平面形態であり、円形の掘り方を示した柱穴を持った総柱の掘立柱建物である。南西隅は消滅している。

建物の柱穴は径30㎝から最大で45㎝で、深さは10㎝から最も深いもので約25㎝を測ることができる。

柱穴内からの遺物の出土はほとんどなく、建物の時期決定にとまどうが、中世以降のものと理解したい。

（二宮）

掘立柱建物66

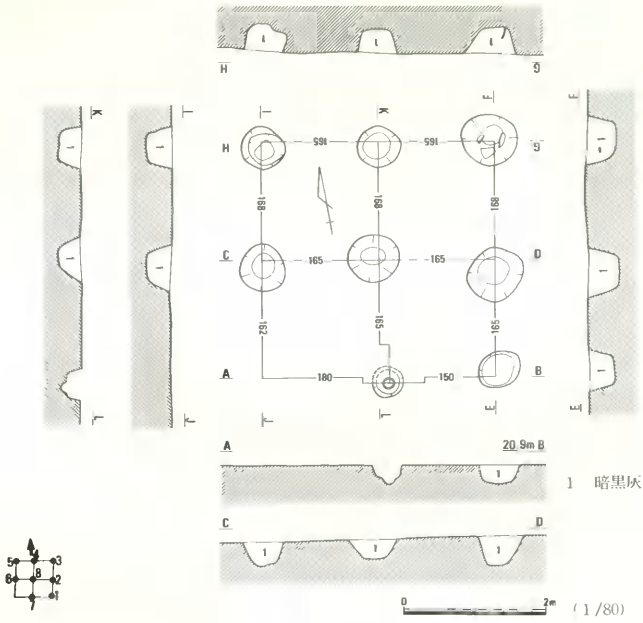


位置(調査区)	規　模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm) 桁	柱間寸法(cm) 梁	面積(㎡)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期
K M 2	3×2	489	342	150～171	171～192	16.7	N-4°-W	円	30	

掘立柱建物66は、掘立柱建物5に重複し、掘立柱建物65の北側に位置する。建物の長軸を掘立柱建物65と同方向に向け、桁行3間×梁間2間(489×342cm)の総柱の掘立柱建物である。

すべての柱間距離は150cm～192cmとまちまちである。また、柱穴掘り方平面形もほぼ円形であるが、径は20cmのものから最大で約60cmのものまであり、深さは5cmから、最深で50cmを測るものまである。掘立柱建物65と同時期の遺構で、同時併存の可能性もある。　(二宮)

掘立柱建物67



（１/80）

位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（m²）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
ＭＭ３	［2］×［2］	330	330～333	162～168	150～180	11.0	N-11°-E	円	70	中世

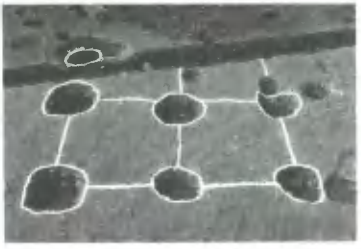
掘立柱建物67は、ＭＭ３区とＭＭ６区にまたがって検出された。

桁行２間、梁間２間の総柱の建物が復元されるが、うち南西隅の１本は先行した調査区境の側溝で検出できなかった。

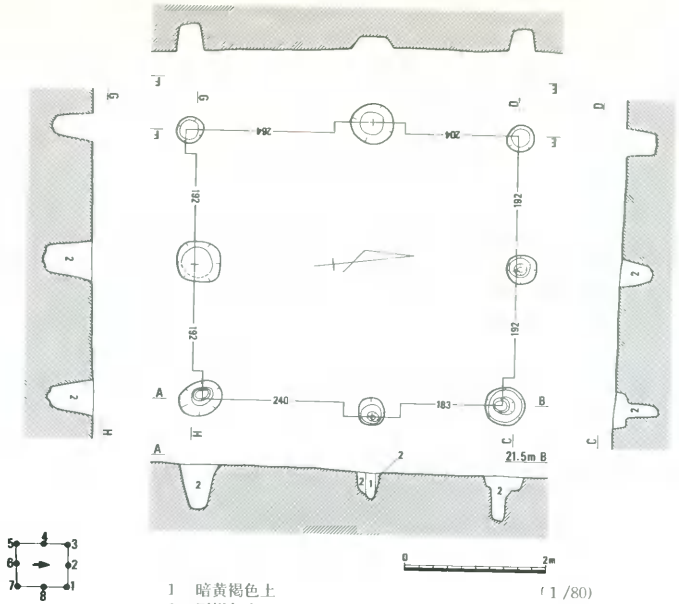
桁行、梁間とも約330cmほどを測る。建物の主軸はＮ－11°－Ｅを指す。

柱穴規模は約70cmほどの円形を呈する。深さは30cmほどが残存していた。

調査当初、柱穴規模および建物の方位などの点から奈良時代の建物群をなすものと理解していたが、遺物整理の過程で中世の土師器の鍋の足の出土が確認されたことから、この時期の建物であると思われる。　（大橋）



掘立柱建物68



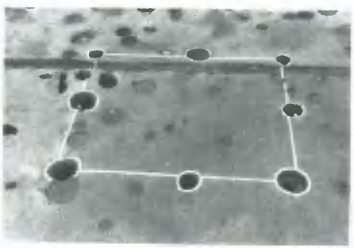
1　暗黄褐色土
2　灰褐色土

(1/80)

位置(調査区)	規　模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm) 桁	柱間寸法(cm) 梁	面積(㎡)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期
MM7	2×2	423～468	384	183～264	192	17.1	N-6°-E	円	50	中世

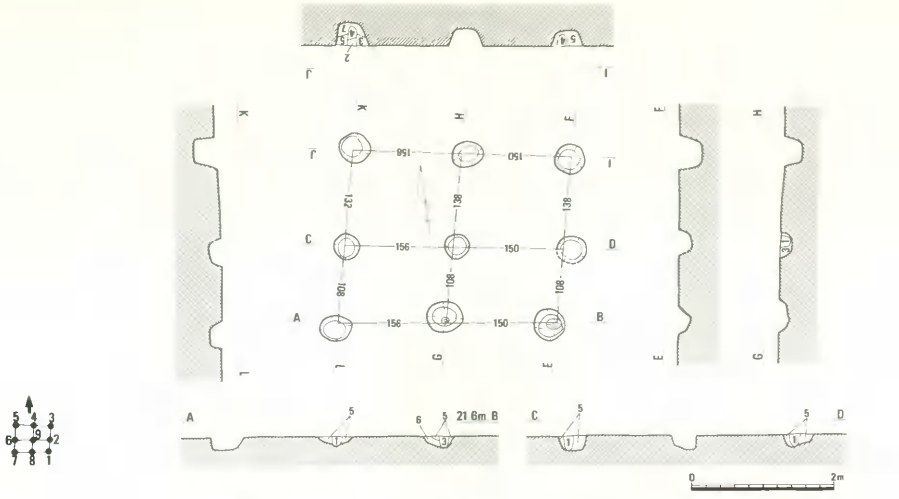
掘立柱建物68は、ＭＭ３区とＭＭ７区にまたがって検出された。

桁行２間、梁間２間の建物であり、桁行423～468㎝、梁間384㎝の規模を測る。柱穴間距離は梁間方向は192㎝と揃っているが、桁方向は不揃いである。また柱の通りも良くない。柱穴は検出面で径50㎝ほどの円形を呈し、最も深いもので約60㎝を測った。比較的残りが良いものと思われる。また、四隅のＰ１・Ｐ３・Ｐ５・Ｐ７に比べ、Ｐ２・Ｐ４・Ｐ６・Ｐ８は浅い。



出土遺物は細片であり、これからは時期を判断できなかったが、灰褐色を呈する柱穴埋土を他の遺構埋土と比較すれば、中世以降の時期が想定可能である。なお、この建物のＰ６から取鍋が出土している。　　（大橋）

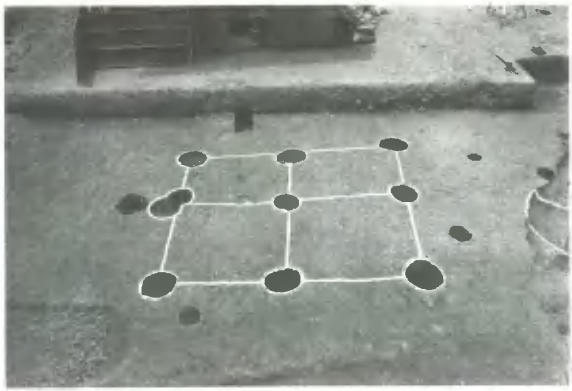
掘立柱建物69



1 /80

1　黒褐色土
2　暗灰色粘質土
3　黒褐色土（黄色土少し含む）
4　黒灰褐色土
5　黒灰褐色土（黄色土含む）
6　黒灰褐色土・黄褐色土混合
7　黒灰褐色粘質土

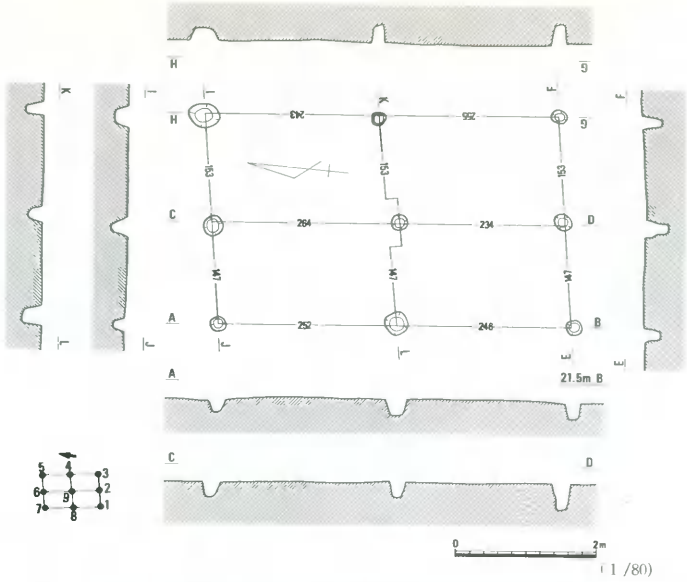
位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
ＭＭ４	２×２	306	240～246	150～156	108～138	7.5	Ｎ-81°-Ｗ	円	43	？



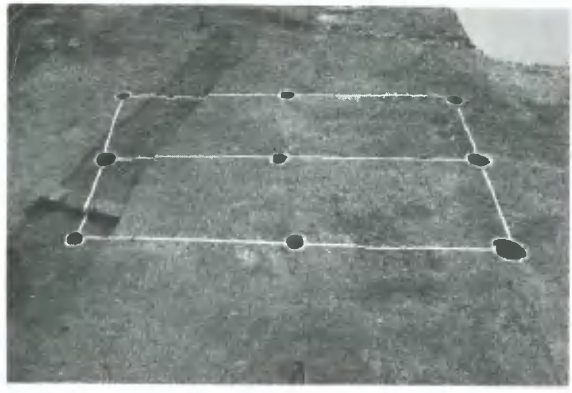
掘立柱建物69は、ＭＭ４区に位置し、桁行２間×梁間２間（306×240～246cm）の総柱の建物である。桁方向の東側１間の柱間は150cm、西側156cm、梁間南側は108cm、北側は132・138cmである。建物全体が北東に約９°ほど振っている。

出土遺物はなく時代は不明である。　（伊藤）

掘立柱建物70



(1/80)



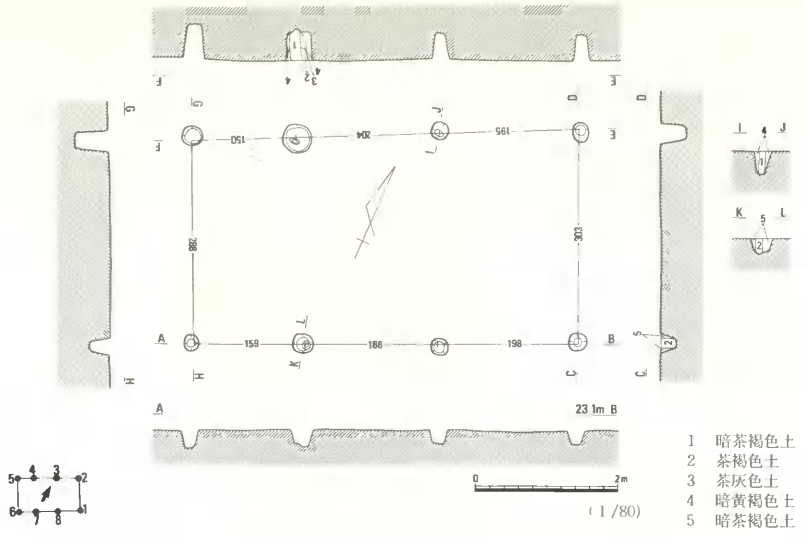
位置(調査区)	規　模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm) 桁	柱間寸法(cm) 梁	面積(㎡)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期
ＭＭ１	2×2	498	300	234～264	147～153	15.0	N－W	円	36×33	中世

掘立柱建物70は、ＭＭ１区に位置する。桁行２間、梁間２間(498×300cm)の規模を持ち、建物主軸をほぼ東西(Ｎ－５°－Ｗ)に向ける総柱建物である。桁行の柱間距離は234～255cmとすべて統一性がないが、梁間の柱間距離は東側153cm、西側は147cmと統一されている。建物全体が西に約５°ほど振っている。

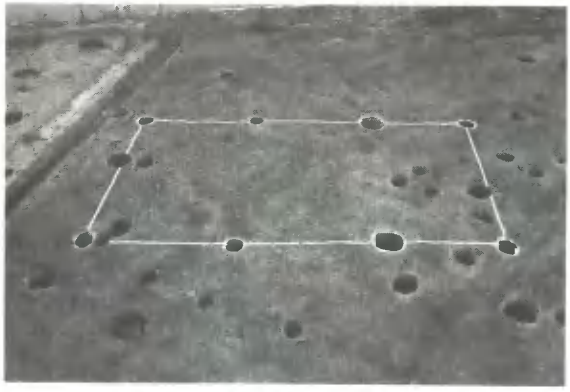
出土遺物はなく、時期は不明であるが、柱穴の掘り方も小さく中世でも後半の建物と推定される。

(伊藤)

掘立柱建物71



（1/80）



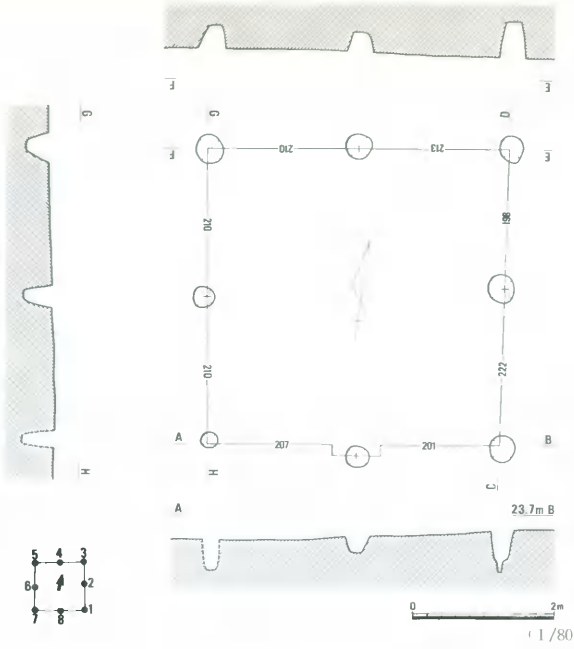
位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
MM４	3×1	543～549	288～303	150～204	288～223	16.0	N 67°E	円	28	中世

掘立柱建物71は、ＭＭ４区で検出された。総柱の掘立柱建物54の南西に位置し、桁行３間、梁間１間の掘立柱建物である。建物の柱間寸法においても、桁・梁でかなりの差が認められている。柱穴の掘り方は円形であるが、その径は、最小で20cm、最大で約40cmと倍に達するという違いも認められ、さらに深さについても20cmから50cmとまちまちの数値を測り得た。

このような梁間が広いことについて考えた場合、柱間に穴を掘らないで添え柱的に柱を立てていたとも推察される。

建物の時期は中世と考えられる。　（二宮）

掘立柱建物72

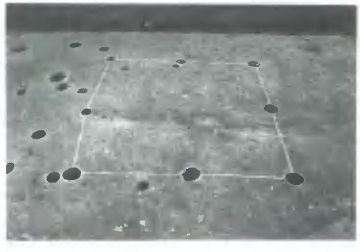


位置（調査区）	規　模	桁行（cm）	梁間（cm）	柱間寸法（cm）		面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模（cm）	時期
				桁	梁					
MBQX2	2×2	420	408～423	196～222	201～213	17.5	N-7°-W	円	75	中世（室町）

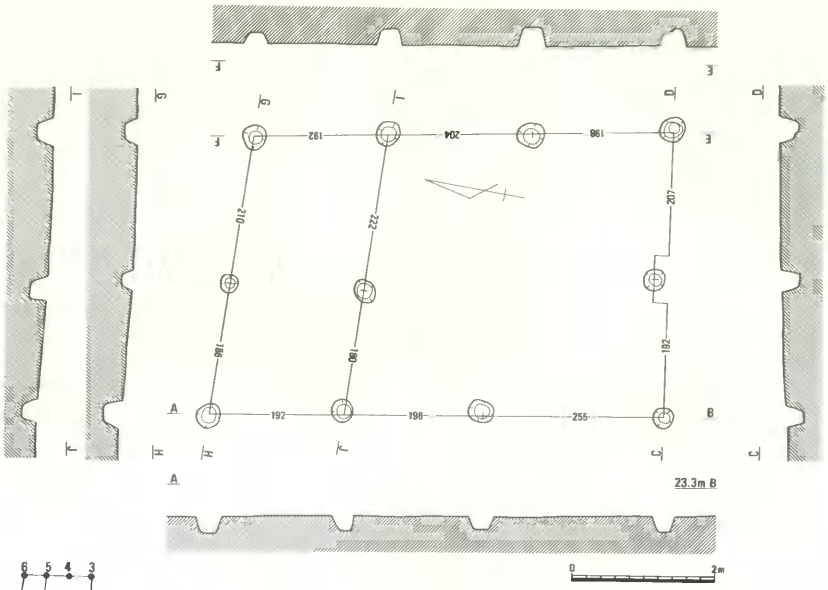
掘立柱建物72は、２×２間の小規模な建物で20～40cm前後の円形の掘り方を持つ柱穴で構成される。柱間はほぼ７尺等間で、身舎は不整形ながらも正方形に近い平面形を示している。

柱穴からの出土遺物はほとんどみられないが、埋積土や、柱穴の規模、周辺遺構との関係などから、中世それも室町時代に比定される可能性がもっとも強い。井戸10やこのほかの建物とともに形成された集落を形成した建物であろう。

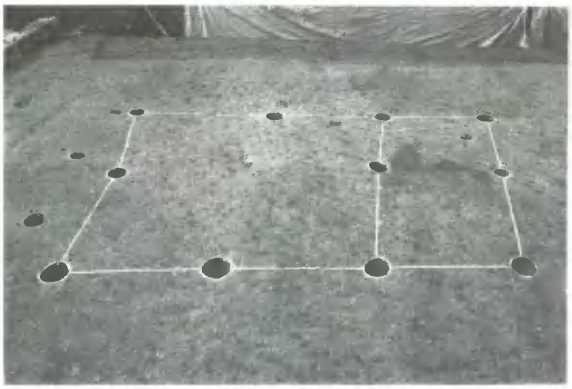
なお、この規模の建物は随所に想定復元されたが、明確に平面形が把握された建物は、きわめて少ない。その遠因には、遺構検出面が礫を含む堅硬な基盤層であったため、検出作業に際しては、さまざまな困難を伴ったことや、調査期間の切迫などがあげられる。（岡田）



掘立柱建物73



(1/80)

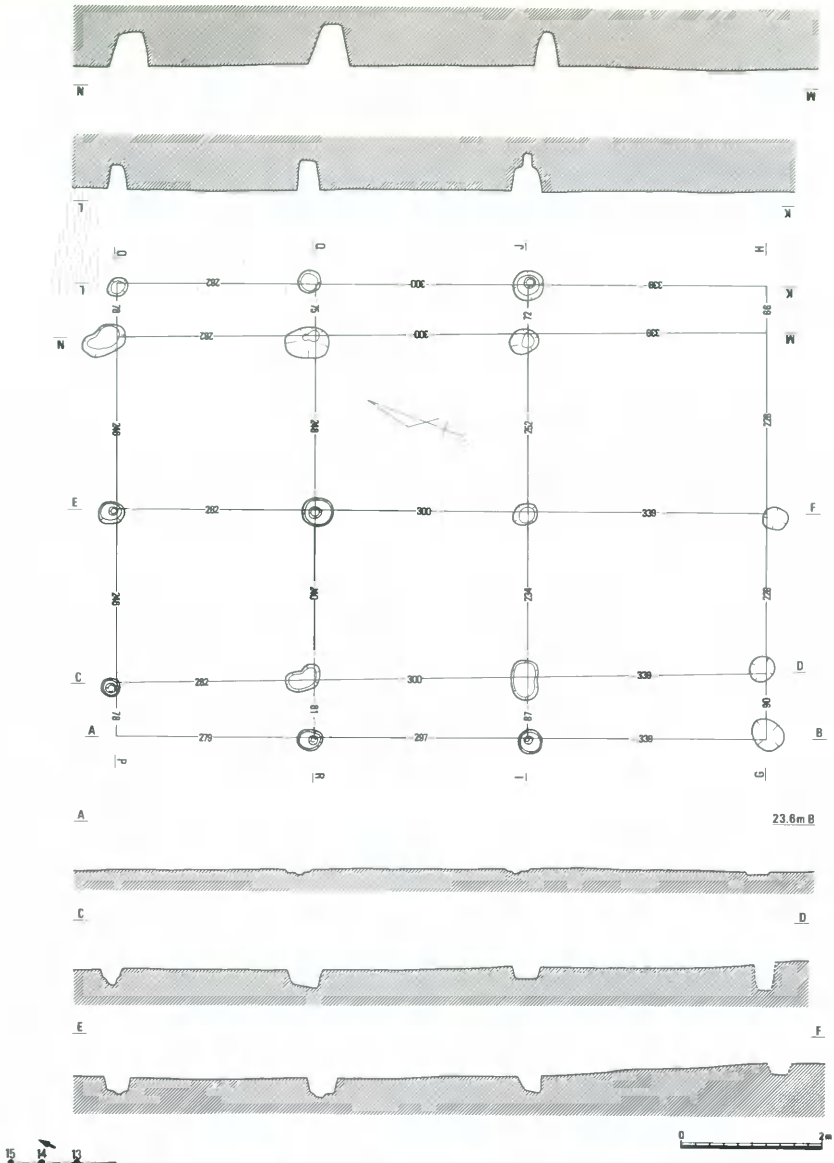


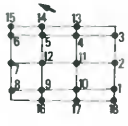
位置(調査区)	規　模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm) 桁	柱間寸法(cm) 梁	面積(m²)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期
MBOX2	3×2	594～645	396～399	192～255	180～222	23.8	N-10°-W	円	34	中世(室町)

掘立柱建物73は、桁行3間、梁間2間の側柱建物である。棟方向は、わずかに西振するがほぼ南北方向である。身舎の北側に間仕切りがみられ、通常の居住に使われた家屋と考えられる。ただ、平面形は、いびつで整然とした長方形を呈さず、建物の隅では直角とならない。このように歪んだ建物は、ほかにも掘立柱建物70・76などがある。

柱穴からの出土遺物は皆無であるが、埋積土などから中世、室町時代に比定される掘立柱建物と考えられる。　(岡田)

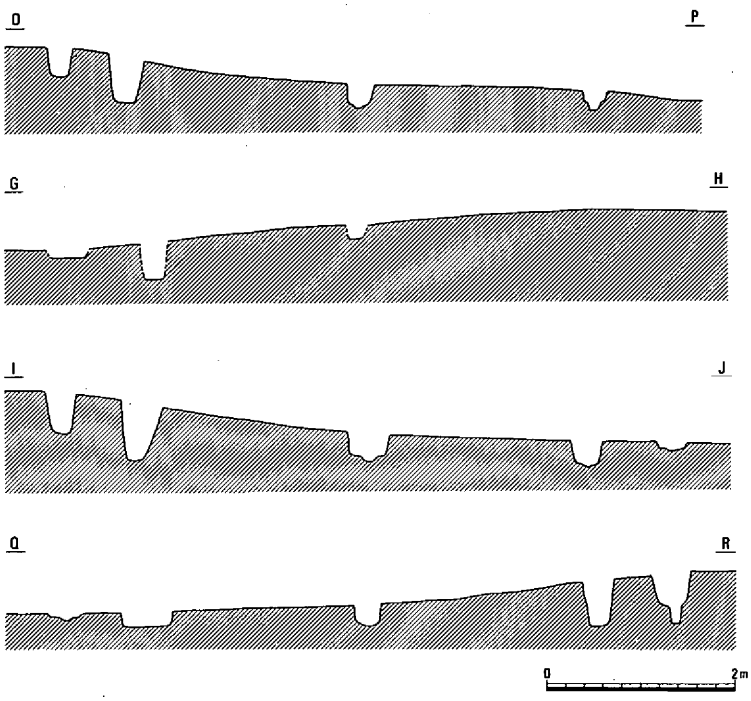
掘立柱建物74





(1/80)

位置(調査区)	規　模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm)		面積(m²)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期
				桁	梁					
MS1・MBOX1	3×2	915～921	45～192	282～339	234～252	43.7	N-21°-W	円	41・34	中世



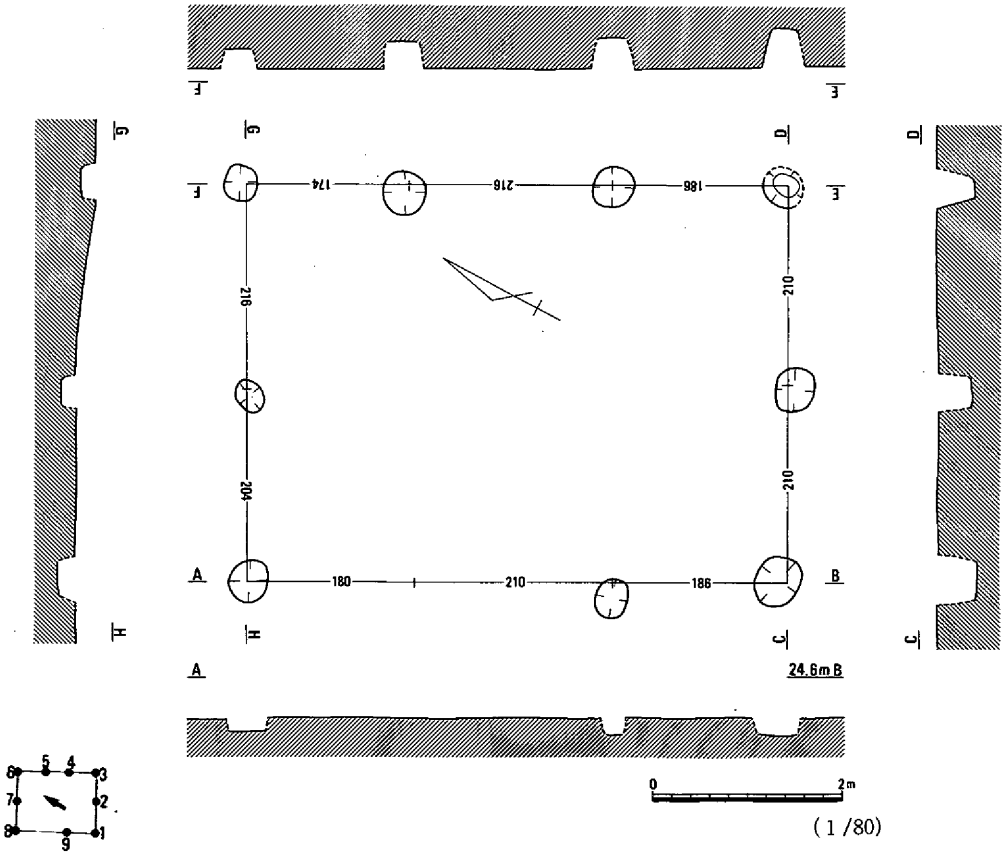
(1/80)

掘立柱建物74は、前田調査区の北東端部に、前述した掘立柱建物60と重複して存在した。

この建物は棟方向がN－21°－Wになる3×2間の総柱の建物で、桁行の両面に庇が付属している。この建物の規模は桁行915～921cm・梁間456～462cmで、柱間寸法は桁行282～339cm・梁間228～252cmになっていた。この建物の柱穴底部のレベルは、地形に沿って不揃いになっていた。

この掘立柱建物74に出土遺物はないが、柱穴の規模や柱間寸法から中世のものであろう。(福田)

掘立柱建物75



(1/80)

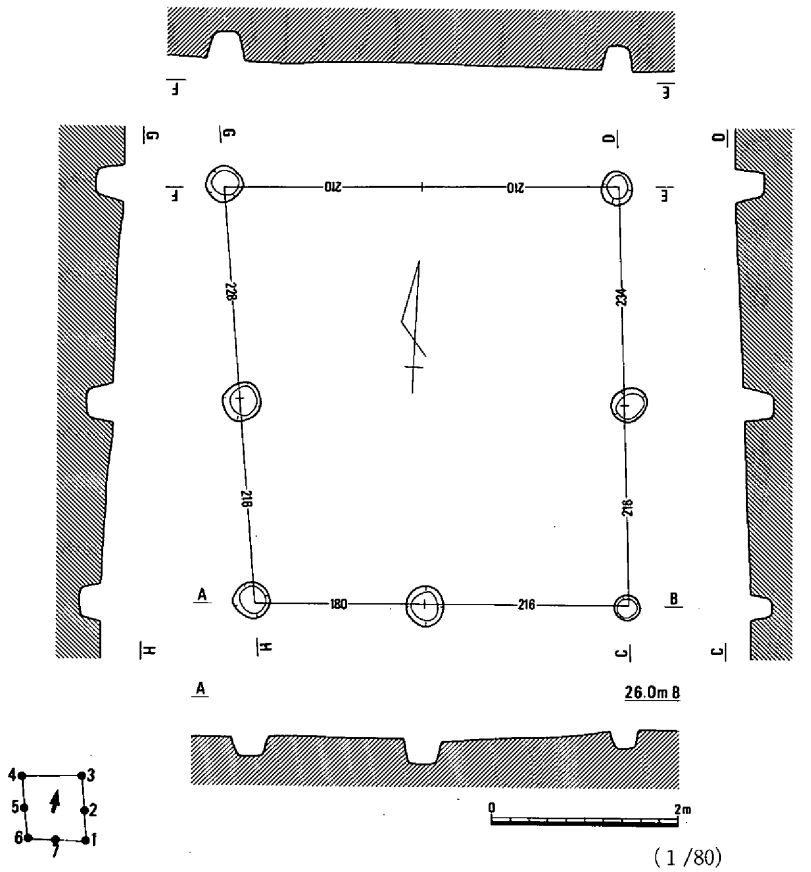
位置(調査区)	規　模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm)		面積(m²)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期
				桁	梁					
MBOX1	3×2	576	420	174～216	204～216	24.2	N-28°-W	円	46×40	中～近世

掘立柱建物75は、ＭＢＯＸ１区北西端に位置する。検出時には建物として認識できなかった。

柱穴埋土の色調は茶褐色(Ｐ１・Ｐ２、Ｐ７～Ｐ９)、灰褐色(Ｐ３)、黄灰色(Ｐ４・Ｐ５)、黄褐色(Ｐ６)である。Ｐ５・Ｐ７から若干の遺物が出土している。いずれも小片のため、流入したものである可能性が大である。Ｐ７からは内面青海波当て具痕、外面格子タタキメのある甕片が見られる。

建物の棟方向が建物74と近似方向であることから、中～近世の建物である可能性が高い。(氏平)

掘立柱建物76



(1/80)

位置(調査区)	規　模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm)		面積(㎡)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期
				桁	梁					
MBOX1	2×2	444～450	396～420	216～234	180～216	18.4	N-4°-W	円	37	中～近世

掘立柱建物76は、ＭＢＯＸ１区の中央やや東よりに位置し、掘立柱建物61に東側が接する。棟方向をほぼ南北にとる２×１間の建物である。遺物は土師器・須恵器が少量出土している。

Ｐ２とＰ５の間に別の柱穴が存在し、南辺と同様２間になる可能性があったが、柱の通りが悪くなるため外して考えている。

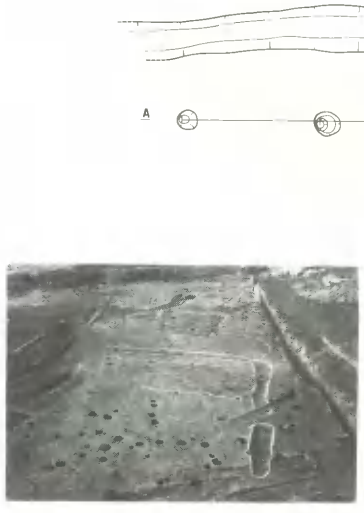
掘立柱建物61の項でも述べたが、掘立柱建物61と共に屋敷地の一角をなす建物であり、中～近世に属すると考えられる。(氏平)

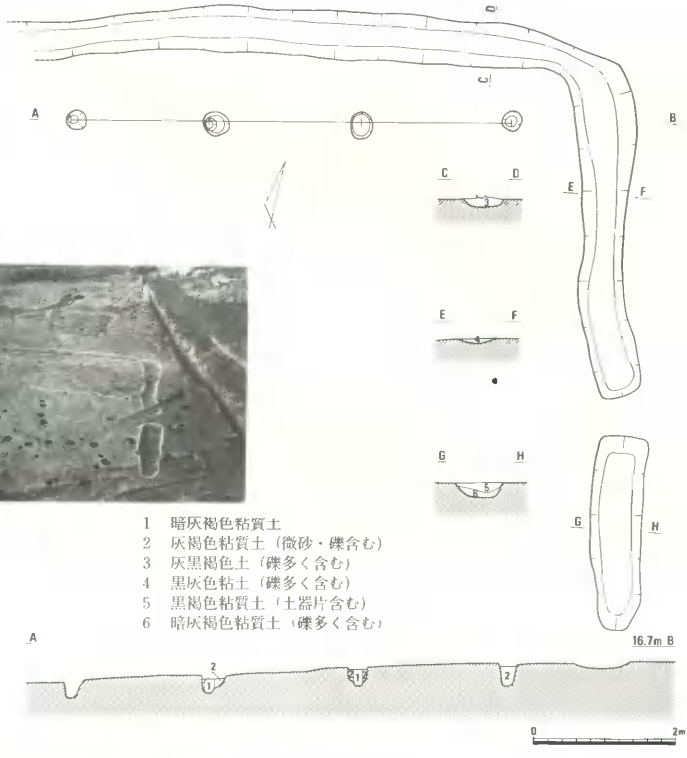
(3) 周溝遺構

周溝遺構と呼称して以下説明するのは、平面形が方形、あるいは弧を描きながら巡る溝である。これらのなかには、柱穴が配されて、掘立柱建物、あるいは柱穴列を区画するようなものもある。

斎富遺跡では6か所で検出されており、出土遺物からすべて5世紀末から6世紀の時期が想定される。この時期特有の構造物をなすものと理解したが、これらすべてが同機能をもつものかどうかは不明である。以下、各遺構ごとに、説明を加えていくこととする。　(大橋)

周溝遺構1

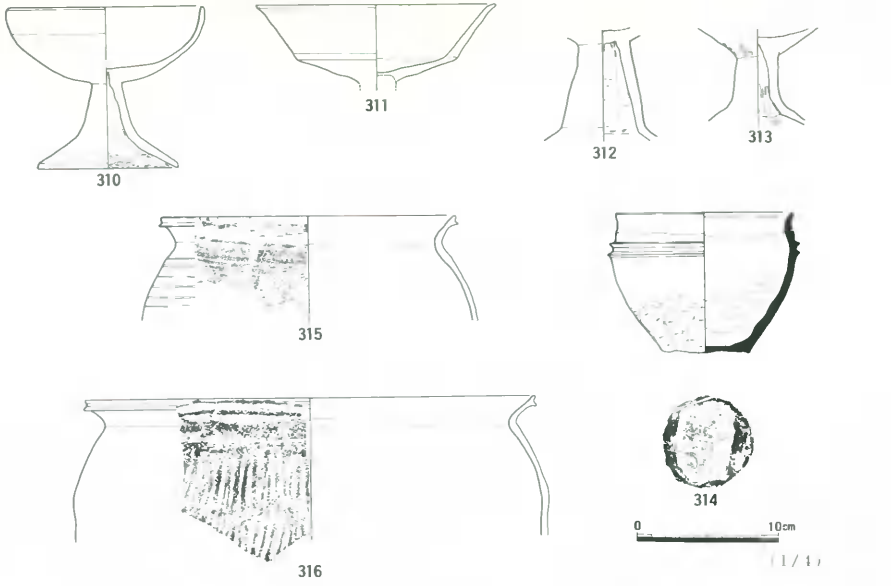




(1/80)

遺構名	溝部				建物・柱列						備考
	平面形	断面形	幅(cm)	深さ(cm)	規模	面積	桁行	梁間	方向	柱穴掘り方	柱穴規模	
周溝遺構1	L字	逆台	45～90	11	3間		321		N-7°-E	円	29	

周溝遺構1は、遺跡の低位の緩斜面に位置する。高位部すなわち東辺に、途切れた通路状部分をもち、ほぼ直角に西方低位に曲折する区画溝である。途切れた部分から南側は、土壙状におさまる。内側の北辺に沿って4本の丸い柱穴が直線的に2m等間で並ぶ。規模などから推察すると建物の一部ではなく、柵あるいは塀と考えるべきであろう。柱穴の底のレベルも地形と同じように、徐々に下がっ

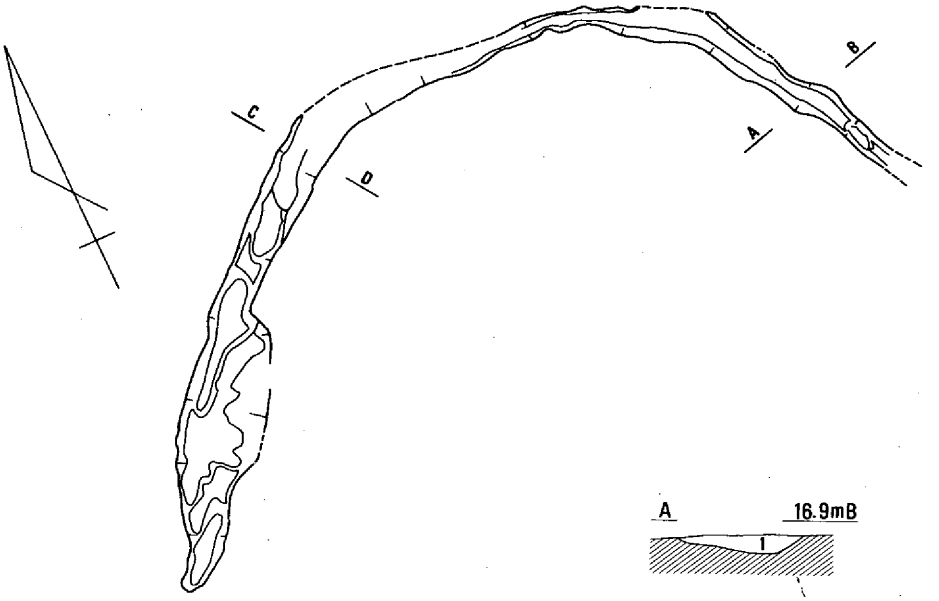


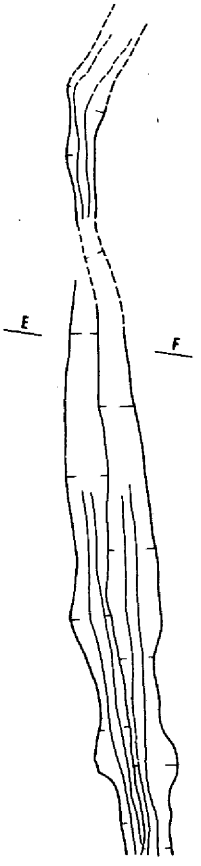
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
310	土師器	高杯	(13.6)	9.6	11.6	良好	黄橙7.5YR7/8	精良	磨滅・接合部差し込み
311	土師器	高杯	(16.8)			良好	にぶい黄橙6/4	微砂	接合部差し込み
312	土師器	高杯				良好	にぶい黄橙10YR7/4	細砂	接合部差し込み
313	土師器	高杯				良好	橙7.5YR6/6	細砂	接合部差し込み
314	陶質系土器	椀	(12.4)		10.1	良好	(内・外)灰N6/ (断)灰褐7.5YR5/2	精良	外面下半静止ヘラケズリ・把手がつく可能性・底部に下駄状の痕跡
315	軟質系土器	甕	(20.8)			良好	橙7.5YR6/6	細砂	外面タタキメ
316	軟質系土器	甕？鉢？	[8.]			良好	にぶい黄橙10YR6/4	細砂	外面タタキメ

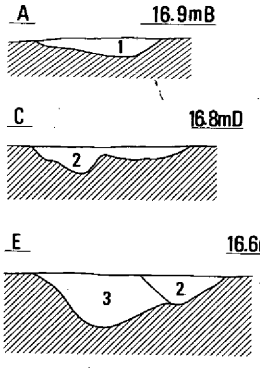
ているので、地形にあわせた構築物の存在が推定される。本来、周溝の内側には柵を伴う建築遺構が存在した可能性が強いが、際立った柱穴も検出できず、その痕跡は明らかにはできなかった。位置的には、西方低位の竪穴住居48とは８ｍほどしか離れていないので、出土遺物などからみても同時期に共存していた可能性も強い。周溝の断面形は、凸レンズ形もしくは、逆台形を呈している。深さは、10～20cm前後を測る。出土遺物には、図に掲げるように土師器と韓式系土器がみられる。前者で実測図作成可能となったのはすべて高杯である。杯部が丸みをもって内湾する**310**と、**311**のように直線的に外方するものの二通りのタイプがある　後者は、陶質系土器の**314**の椀と、軟質系土器の**315・316**などの甕(鉢)とがある。**314**は、Ｃ－Ｄ断面の上層で出土したもので、溝の埋没時期を示しているといえる。体部には把手が付けられていた可能性が強い。体部下半は静止ヘラケズリが施されている。外底部には、ロクロの下駄印の痕跡が看取される。**315・316**は、甕あるいは、鉢と考えられるものである。比較的焼成良好な軟質系土器で白っぽい黄橙色を呈している。体部外面は、丁寧な平行タタキで器面調整されている。口縁部は外方し、端部はやや肥厚してくぼむ。口縁下端は鋭くおさまる特徴がある。

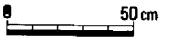
以上の出土遺物は、遺跡に居住した人々の出自を知る手がかりとなるだけでなく、当時の活発な国際交流や文物の搬入などを示唆する重要な遺物と考えられる。　（岡田）

周溝遺構２







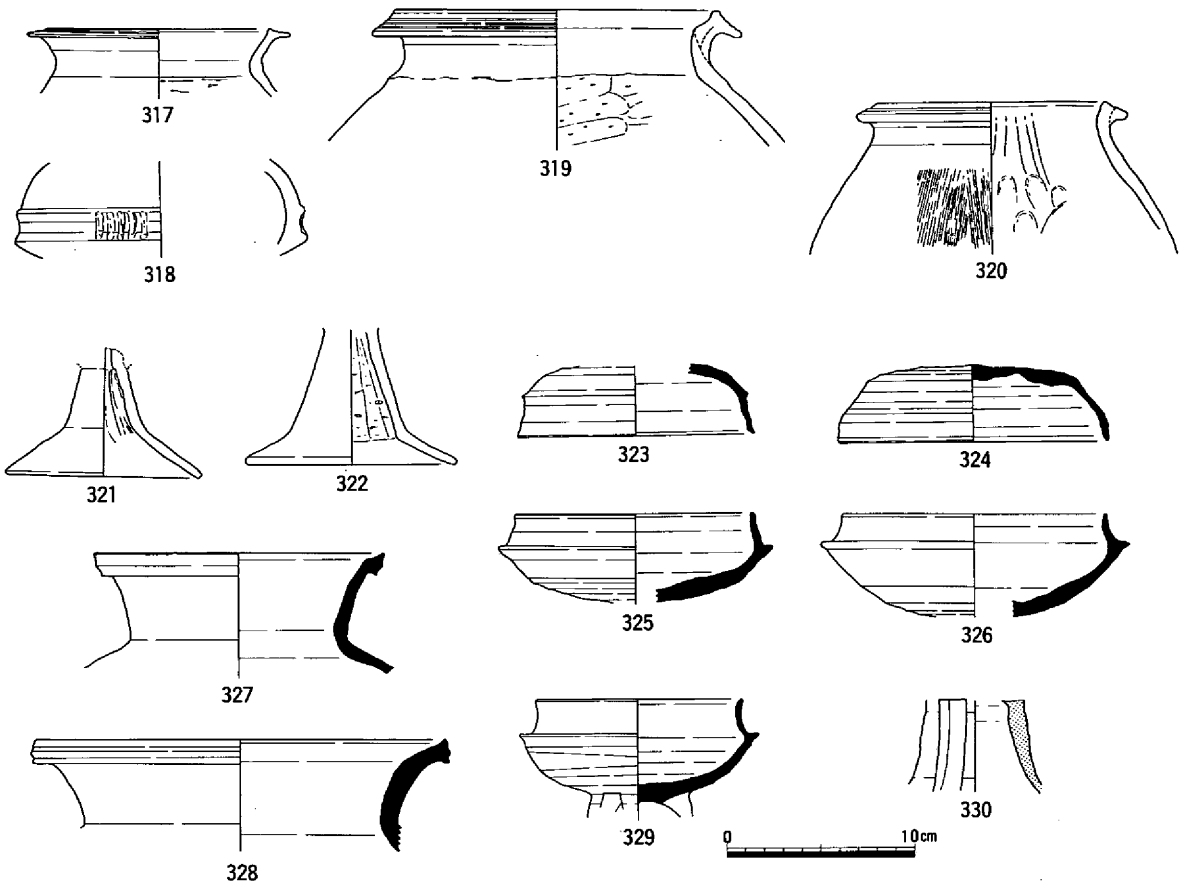


(１/30)

1　淡灰褐色～暗灰褐色土
　(礫・黄褐色ブロック含む)
2　茶褐色粘質土
3　淡茶褐色粘質土

(１/100)

遺構名	溝部				建物・柱列							備考
	平面形	断面形	幅(cm)	深さ(cm)	規模	面積	桁行	梁間	方向	柱穴掘り方	柱穴規模	
周溝遺構２	長楕円	U字	50－60	20	－	－	－	－	－	－	－	溝は重複

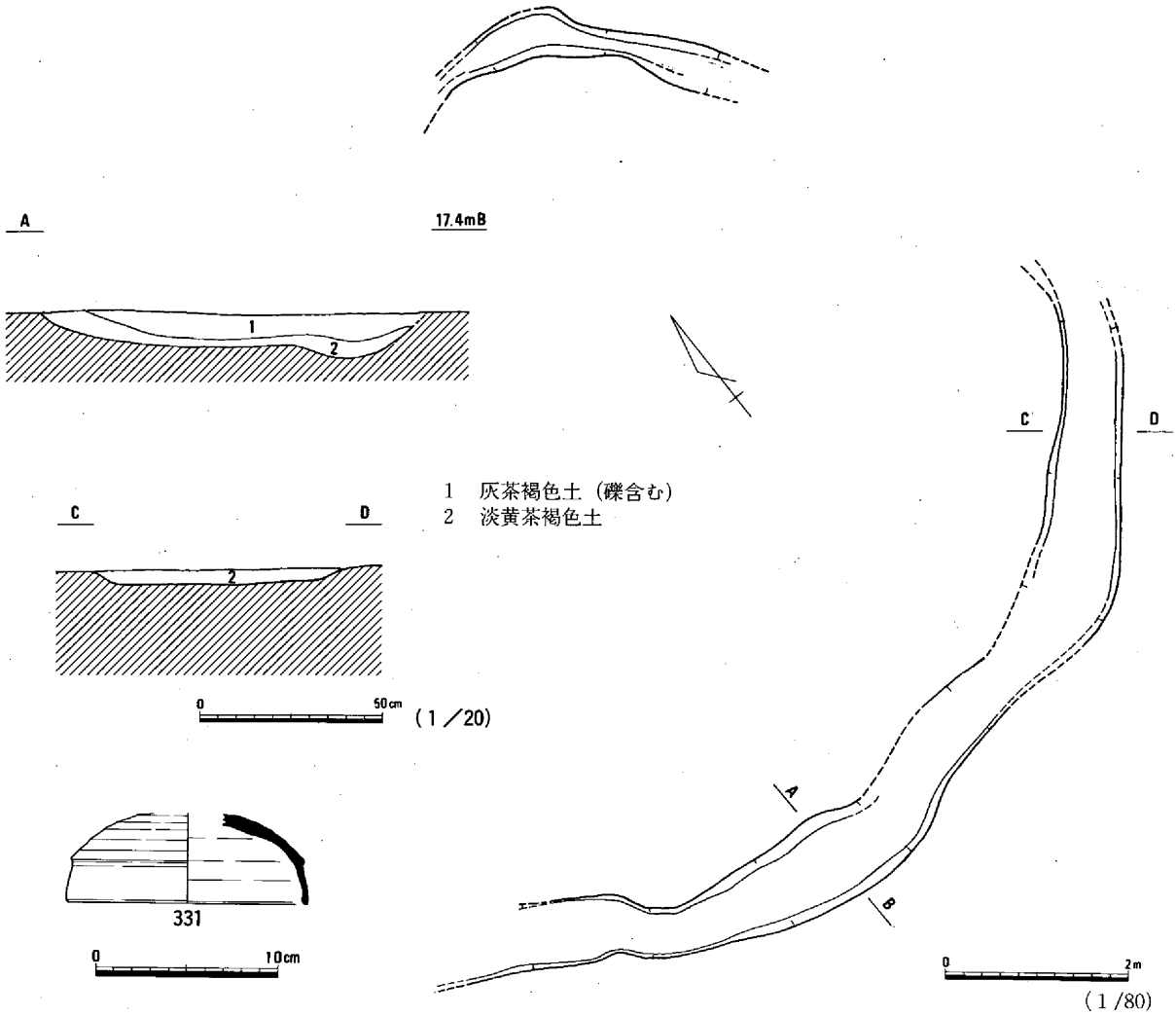


掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
317	弥生土器	甕	(11.6)			良好	灰黄2.5Y7/2	砂礫	口縁端面に擬凹線
318	弥生土器	壺				良好	灰黄2.5Y6/2	細砂	棒状浮文
319	弥生土器	壺	(17.0)			良好	にぶい黄橙10YR7/2	細砂	
320	弥生土器	甕	(12.0)			良好	にぶい黄褐10YR5/3	砂礫	内面押圧痕
321	土師器	高杯	(10.2)			良好	橙5YR7/8	精良	差し込み・内外面磨滅
322	土師器	高杯	(11.0)			良好	にぶい黄橙10YR7/3	砂礫	外面裾の後ヘラミガキ・脚部に黒斑
323	須恵器	蓋	(12.6)			良好	(内・外・断)灰N4/	微砂	ロクロ左回り
324	須恵器	蓋	(14.4)			良好	(内・外・断)灰N5/	砂礫	ロクロ左回り
325	須恵器	杯身	(12.4)			良好	(内・外・断)灰N6/	微砂	立ち上がり部ハリツケ・ロクロ右回り
326	須恵器	杯身	14.0			良好	(内・断)黄橙7.5YR7/8 (断)黄橙7.5YR7/8	微砂	立ち上がり部ハリツケ・ロクロ右回り
327	須恵器	甕	(15.2)			良好	(内・外)灰N7/(断)灰N5/	微砂	二次的に火を受ける
328	須恵器	甕	(21.6)			良好	(内・外)灰N6/ (断)褐灰7.5YR5/1	砂礫	
329	須恵器	有蓋高杯	(10.9)			良好	(内・外・断)灰N6/	細砂	三方透かし孔・杯体部ヘラケズリ・ロクロ左回り
330	須恵器 (土師質c)	高杯				良好	(内)にぶい橙5YR6/6 (外)にぶい橙5YR6/6 (断)にぶい橙5YR6/6	精良	透かしは3か所か？(台形状となるか)・ロクロ回転不詳・杯部との接合は平面接合

周構遺構２は、Ｓ～Ｕ６～８グリッド(ＭＭ４区)に位置する。溝は北東から南西方向に一旦途切れながら流走するが、北東側は東に向かって弧を描くように屈曲し、その端は南東方向に向かいながら断ち消える。また、南西方向には一旦途切れながら流走するが、途切れたところから南西側は２本の溝が切り合って並走する。この２本の溝は東側の溝が西側の溝を切っているが、北東側の溝に続くのがどちらであるのかは、途切れているため明確に捉えられなかった。規模は南西側と北東側の溝が同一であるとすれば延長26ｍ以上になり、幅は狭いところで25cm、広いところで110cmを測る。検出面からの深さは北東側で浅く、南西側でやや深くなる。

遺物は弥生土器と土師器、そして須恵器が出土した。弥生土器はいずれも弥生時代後期前半に属するものである。須恵器は新旧のものが混在しているが、ほぼ６世紀前半に比定され、土師器も同時期であろう。　(平井)

周溝遺構３



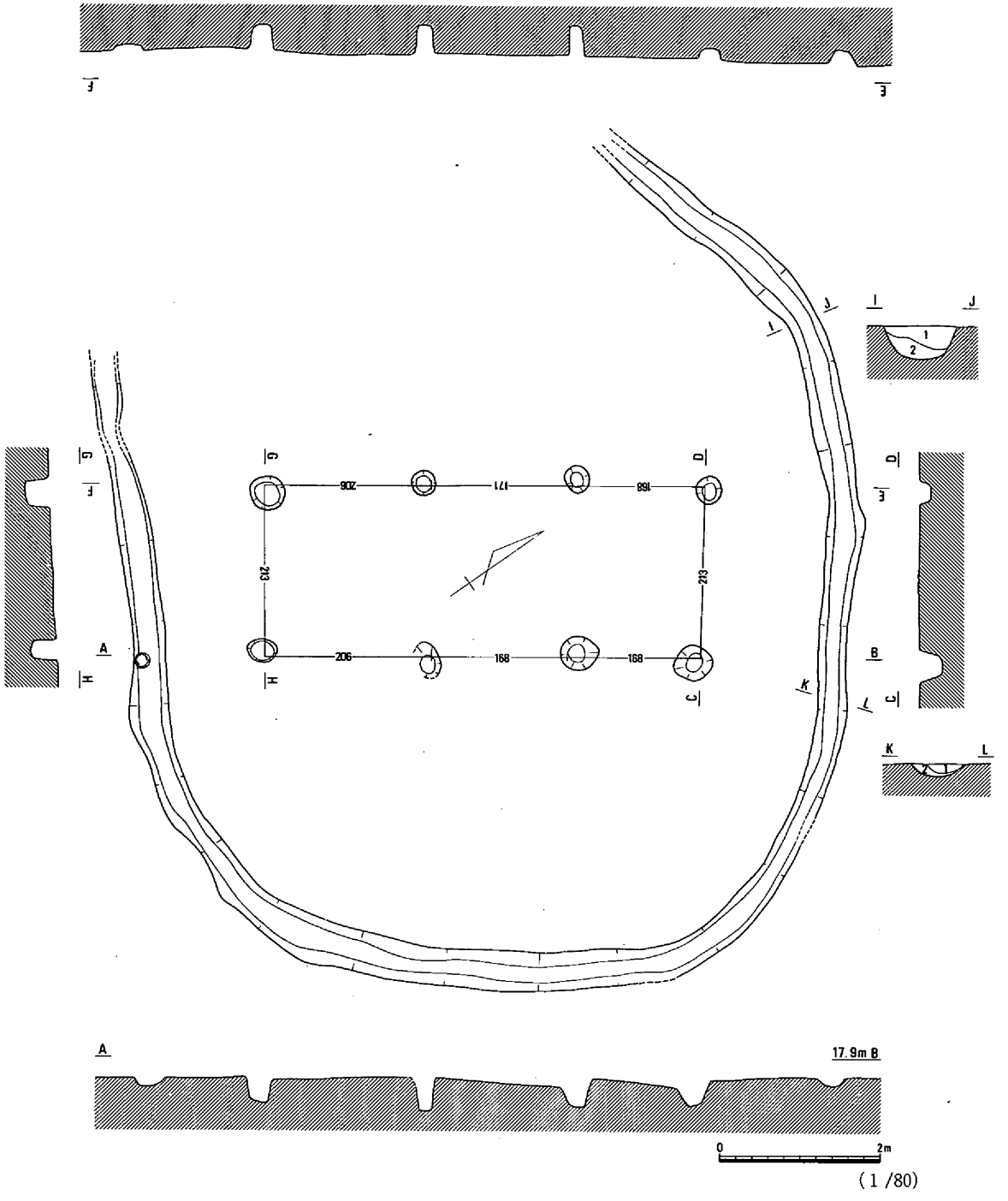
遺構名	溝部				建物・柱列							備考
	平面形	断面形	幅(cm)	深さ(cm)	規模	面積	桁行	梁間	方向	柱穴掘り方	柱穴規模	
周溝遺構３	楕円	浅い椀	100	46	—	—	—	—	—	—	—	

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
331	須恵器	杯蓋	13.1			良好	(内・外・断)灰N6/	微砂	端部は丸くおさめる・ロクロ左回り

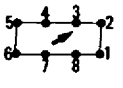
周溝遺構３は、Ｓ９グリッド（ＫＭ４調査区）に位置し、溝13と重複する。東側部分を欠くなど、残りが悪いため不明な部分が多い。現状での平面形はやや楕円形を呈し、南西方向にやや開きぎみに延びるが、本来多角形状であった可能性もある。その規模は、南北で10.4ｍを測る。周溝の幅は30～100cm、断面形は幅広の浅い椀形で、Ａ－Ｂ断面付近の底面に若干の凹凸がみられた。なお、周溝内にはいくつかの柱穴を検出しているが、建物としてまとまるものはなく、周溝との関係も明らかではない。出土遺物は少量の弥生土器と須恵器片のみである。

周溝遺構の時期は、出土遺物が少ないため決し難いが、図示した須恵器の杯蓋片の６世紀前半代と考えたい。これは、周溝遺構が溝13と切り合い関係にあり、溝13よりも古いことを確認していることとも整合する。　（高田）

周溝遺構４



（１/80）



1　黒褐色土（褐色土・焼土含む）
2　黒褐色粘質土

遺構名	溝部				建物・柱列							備考
	平面形	断面形	幅(cm)	深さ(cm)	規模	面積	桁行	梁間	方向	柱穴掘り方	柱穴規模	
周溝遺構４	楕円	椀	32－56	12	３×１	11.60	542－545	213	N-36°-E	円	40	

332

0　10cm

(1/4)

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
332	土師器	平底鉢	(16.3)	(14.6)	7.2	良好	にぶい黄橙10YR6/3	砂礫	雑な作り

周溝遺構4は、ＫＭ１区とＫＳ２区に位置し、周溝遺構３の北側にある。

溝は、幅32～56cmでめぐり、平面形態は隅丸方形を示すが、北西辺が北コーナーからと西辺はコーナーを形成せずにそのまま上方に延びていく形状を示している。この延びて行く溝は、第11図で認められるように側道部分に続いていくことが確認されている。

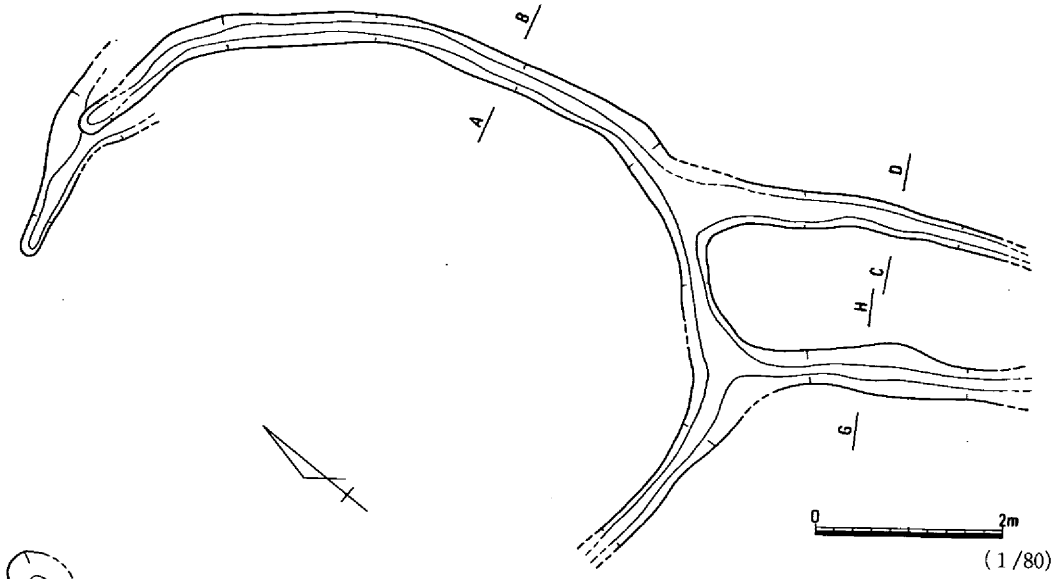
溝で囲まれた内側には、３×１間の掘立柱建物が存在している。柱間の距離はほぼ等しく、整ったものである。溝と建物の関係は、建物の梁間と平行する溝の辺での距離がほぼ等しいものであり、かつその平面的な位置関係から周溝と一体となった構造物であったことが思考されるのである。

出土遺物は、断面図のポイントＡの溝中にピット状に示したのが**332**の土器である。この土器は、溝中に底部を水平にして溝底面に置かれているように検出され、あとから流入したという状況は認められなかった。器面の内外とも調整が雑で、粘土の小さい凹凸が著しく、面としての調整が認められない。表で器種は平底鉢とし、種別については土師器にしたが、韓式系土器としたほうが妥当であろうか判断しがたいのである。

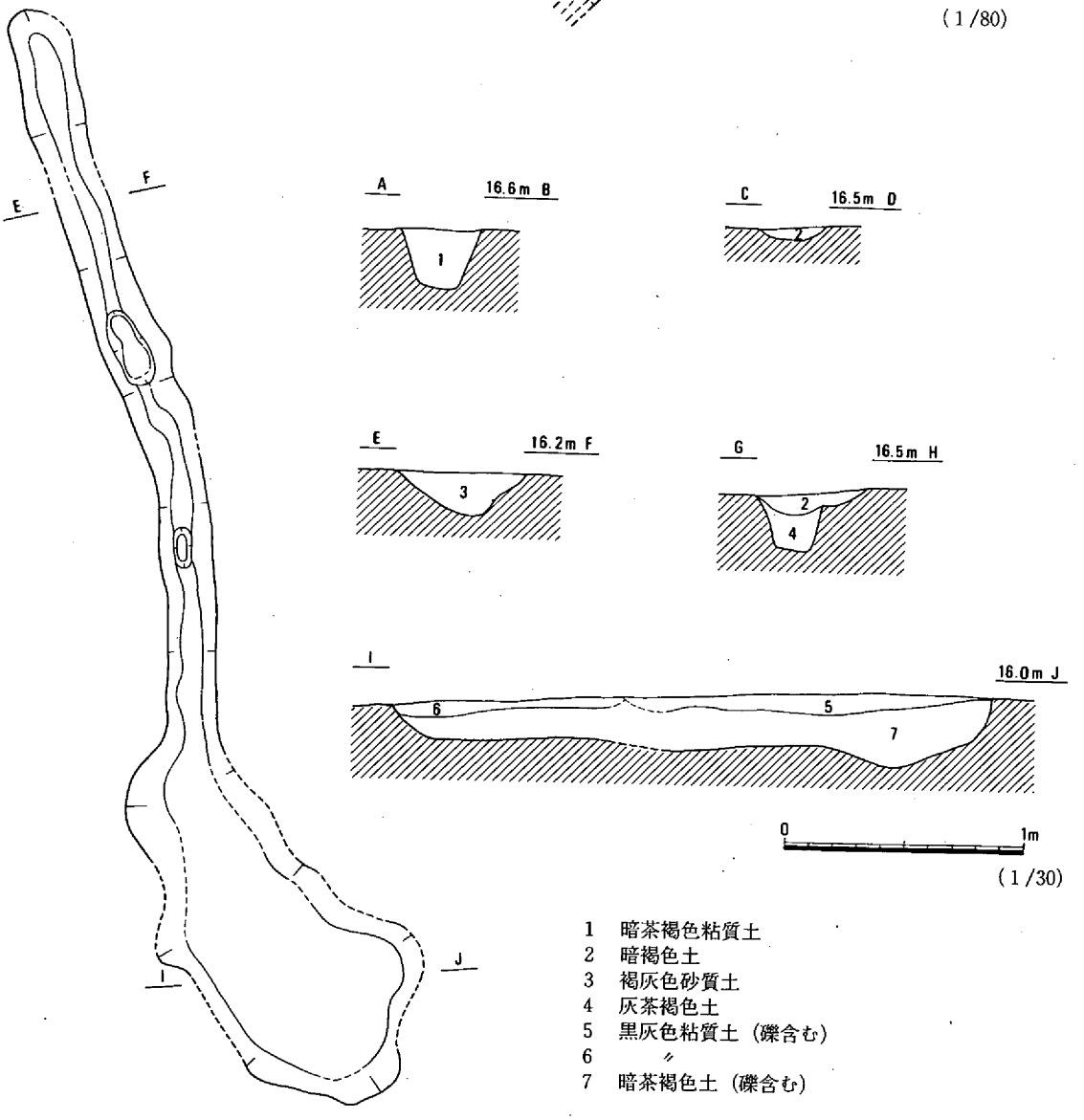
なお、溝２(第13図)がこの溝と同様な形態を示していることが把握されている。溝３の時期は、新しくとも弥生時代後期中葉である溝を切っていることから周溝遺構に伴うことが考えられる。

(下澤)

周溝遺構5



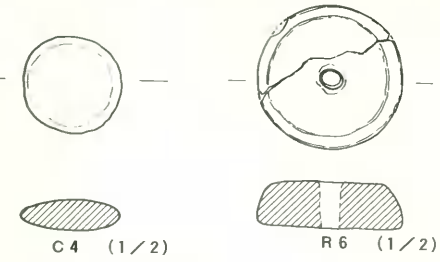
(1/80)

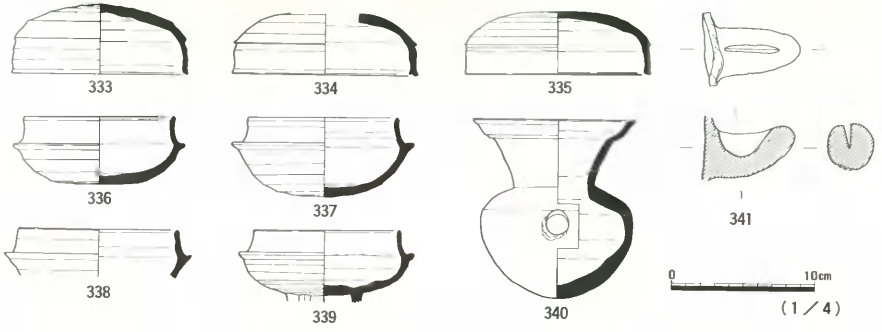


(1/30)

1　暗茶褐色粘質土
2　暗褐色土
3　褐灰色砂質土
4　灰茶褐色土
5　黒灰色粘質土（礫含む）
6　〃
7　暗茶褐色土（礫含む）

遺構名	溝部				建物・杆列							備考
	平面形	断面形	幅(cm)	深さ(cm)	規模	面積	桁行	梁間	方向	柱穴掘り方	柱穴規模	
周溝遺構5	円+直線	逆台・椀	26～[illegible]	[illegible]～2	—	—	—	—	—	—	—	派生する2条の溝





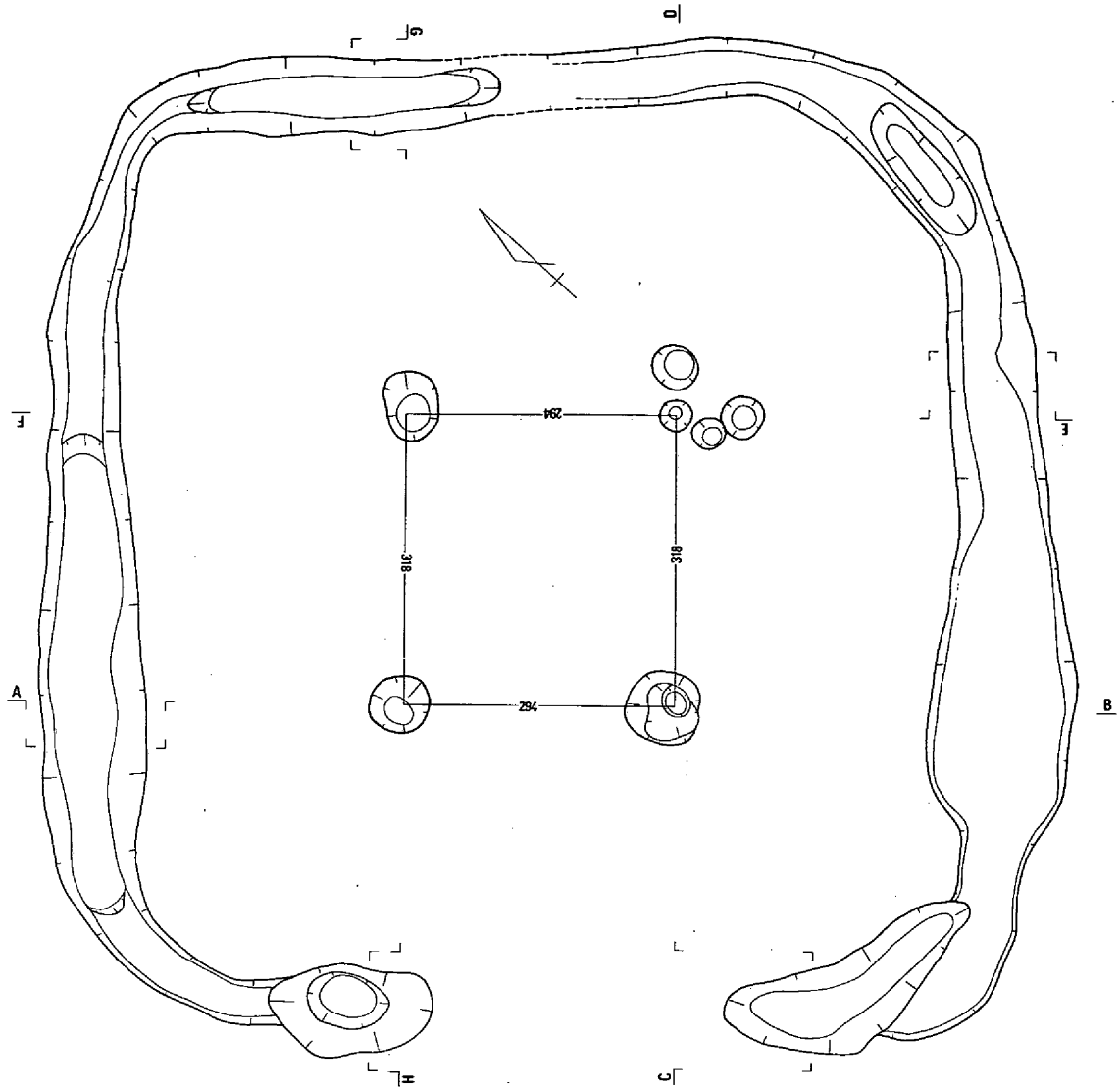
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
333	須恵器	蓋	(12.4)		5.0	良好	(内・外・断)灰N6/	砂礫	端部面を形成・天井部ヘラケズリ・ロクロ左回り
334	須恵器	蓋	(13.0)			良好	(内・断)明紫灰5P7/1　(外)灰N5/	精良	端部凹部有り・外面磨滅
335	須恵器	蓋	(12.9)		4.5	良好	(内・断)灰N5/　(外)灰7.5Y6/	精良	端部面をなす・仕上げナデ・ロクロ左回り
336	須恵器	杯身	10.6		4.8	良好	(内・外・断)灰N6/	細砂	端部は面を形成・内面にタタキ当て具痕残る・ロクロ左回り
337	須恵器	杯身	10.5		5.6	良好	(内)灰白5Y7/1　(外・断)灰N6/	砂礫	端部、稜とも丸く鈍い・ロクロ左回り
338	須恵器	杯身	(11.2)			良好	(内・外・断)灰N5/	微砂	端部丸く納める
339	須恵器	高杯	10.3			良好	(内・外)灰N5/　(断)灰白2.5Y8/1	砂礫	端部は丸く納める・鋭いヘラケズリ・杯外面は黒鉛状の付着物・ロクロ左回り
340	須恵器	甕	(11.4)		12.7	良好	(内)灰N4/	砂礫	胴下半ヘラケズリのちナデ・口縁端部面を形成
341	軟質系土器	(把手)				良好	にぶい黄橙10YR7/2	微砂	把手部に切り込み

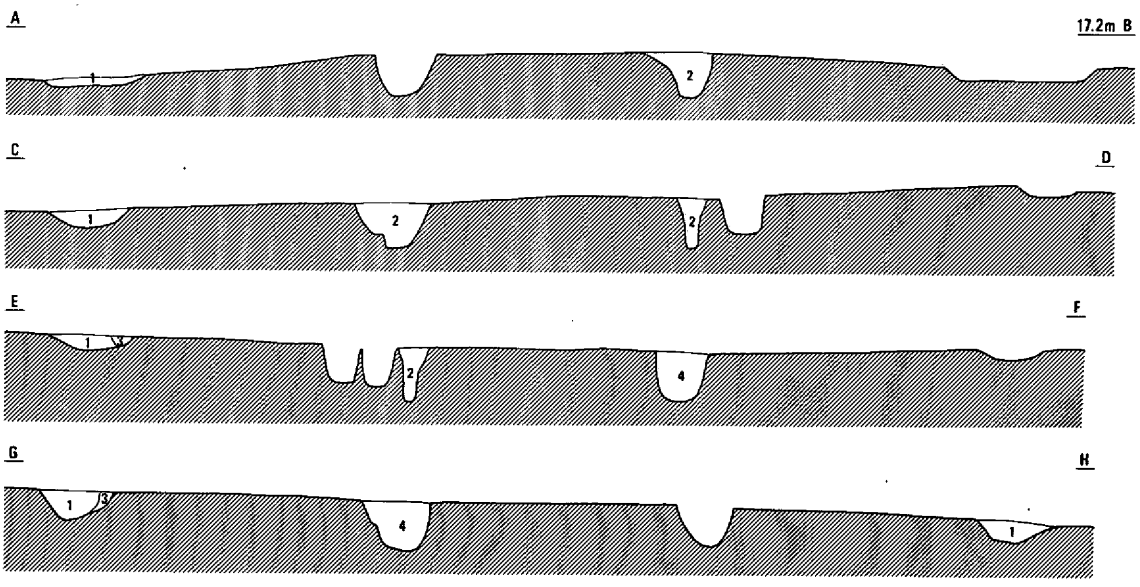
掲載番号	器種	色調	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
C4	円盤状土製品	橙7.5YR7/6	35.0	10.5	11.8		完形

掲載番号	器種	材質	形態	色調	最大径(mm)	最大厚(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
R6	紡錘車	土	D2	灰黄2.5Y7/2	51	[illegible]	[illegible]	47.9	

周溝遺構5は、ＫＭ５区とＫＭ６区にまたがって検出された。円弧をなす溝とそれから派生する直線的な溝がある。特に東側へ派生する２条の溝は切り合い関係を断面で観察したが認められず、一連の遺構と考えざるを得なかった。溝の幅は円弧をなす部分で30cmほどであり、断面も逆台形を呈する。半円形を描いて検出された部分と幅が広くなって直線的に延びる部分は、堆積土が相違することから別の遺構である可能性もある。遺構の性格は不明であり、他の周溝遺構のように建物を区画したものとは考えられなかった。図示した出土遺物から考えて、この遺構は古墳時代後半５世紀末の時期に何らかの機能を果たしたものと理解したい。　(大橋)

周溝遺構６

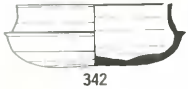




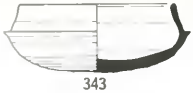
1　暗茶褐色土　　3　暗褐色土（暗茶褐色土混じる）
2　暗灰茶褐色土　　4　暗褐色土

0　2m
(1 /80)

遺構名	溝部				建物・柱列							備考
	平面形	断面形	幅(cm)	深さ(cm)	規模	面積	桁行	梁間	方向	柱穴掘り方	柱穴規模	
周溝遺構6	正方形	逆台形	40～158	17	1×1	9.00	318	294	N-46°-E	円	77～80	建物建て替え有り

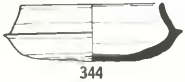


342

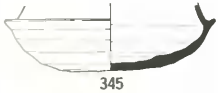


343

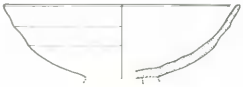
346



344



345



347

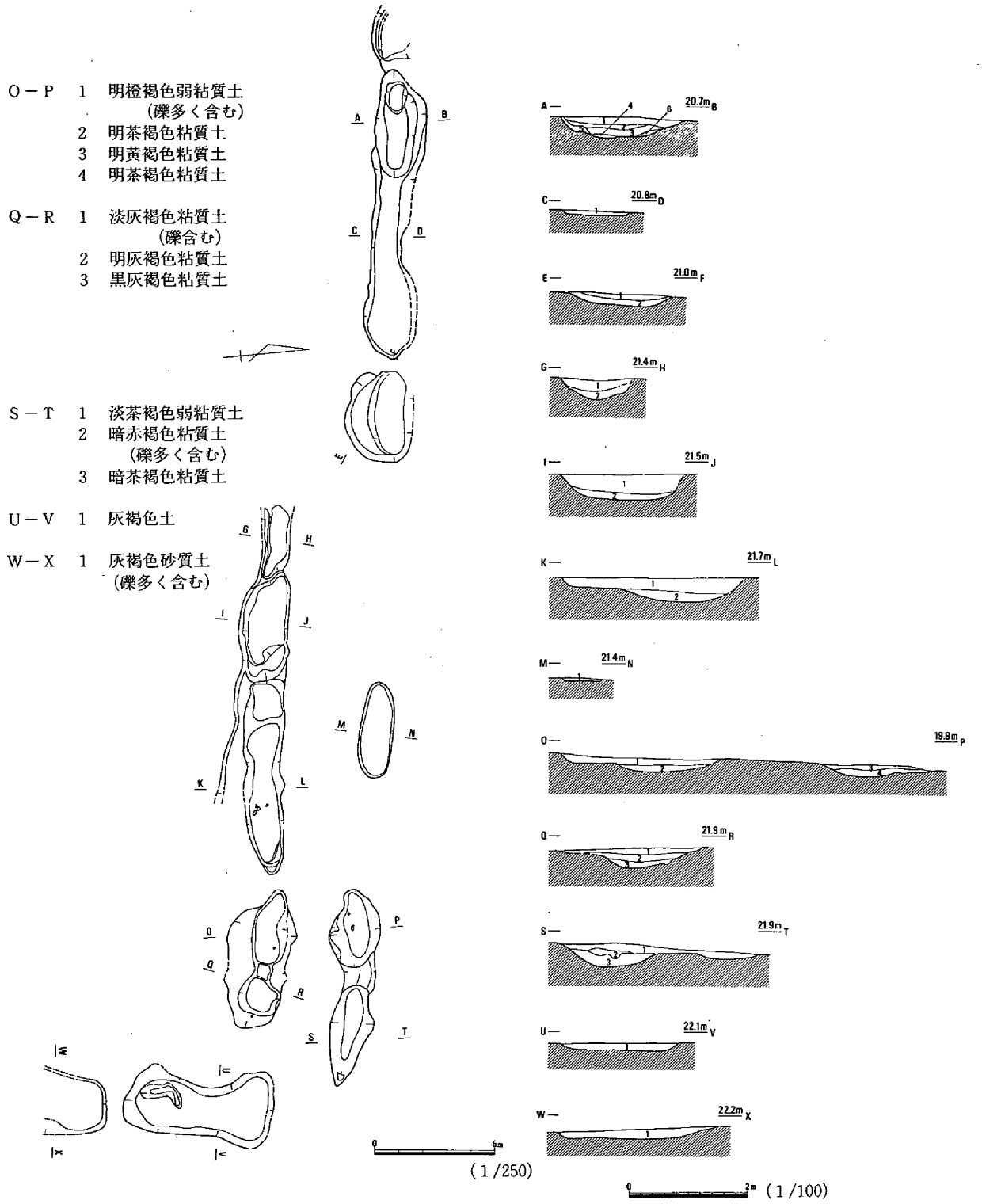
(1/4)

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
342	須恵器	杯身	11.0		4.5	良好	(内・外)灰N5/　(断)褐灰10YR5/1	精良	端部面を形成・稜は水平方向に延びる・内面仕上げナデ・ロクロ右回り
343	須恵器	杯身	10.8		4.9	良好	(内・外・断)灰N6/	精良	端部は丸く納める・やや器壁厚い・内面仕上げナデ・ロクロ右回り
344	須恵器	杯身	10.1		5.1	良好	(内・外・断)灰白N7/	精良	端部丸く納める・ロクロ左回り
345	須恵器	杯身				良好	(内)灰N-6 (外・断)明青灰5PB7/1	微砂	ロクロ右回り
346	須恵器	高杯	(15.0)			良好	(内)紫灰5RP5/1　(外)暗青灰5PB4/1　(断)灰赤7.5R5/2	精良	2段の透し・稜部・四方透かしか？・ロクロ右回り
347	須恵器 土師質?	高杯	(16.4)			不良	(内)にぶい橙7.5YR7/4 (外)橙5YR6/6	細砂	

周溝遺構6は、ＫＭ５区で検出された。一辺約11ｍの方形を区画する溝とそれに囲まれた１×１間の建物で構成されるものである。溝部の南西辺部分は建物への通路状に掘り残されており、また、四隅付近では土壙状に一段深くなる。当初この遺構を竪穴住居とその外側の周溝とも考えたが、規模とその間隔の点から溝に囲まれた掘立柱建物と理解した。建物は、柱穴の配置と切り合いから少なくとも１回は建て替えが行なわれたと考えている。

溝部からの出土遺物として**342**～**347**の須恵器を図示した。特に**342**～**344**の３個体は重なってほぼ完形で出土している。これらからこの遺構の時期を５世紀末～６世紀初頭に判断している。　（大橋）

（４）区　画　溝



O－P　1　明橙褐色弱粘質土（礫多く含む）
2　明茶褐色粘質土
3　明黄褐色粘質土
4　明茶褐色粘質土

Q－R　1　淡灰褐色粘質土（礫含む）
2　明灰褐色粘質土
3　黒灰褐色粘質土

S－T　1　淡茶褐色弱粘質土
2　暗赤褐色粘質土（礫多く含む）
3　暗茶褐色粘質土

U－V　1　灰褐色土

W－X　1　灰褐色砂質土（礫多く含む）

A－B　1　暗黄褐色土
2　暗茶褐色土
3　暗灰色粘土
4　暗灰色粘質微砂
5　黄灰色土
6　明黄灰色土

C－D　1　明黄褐色土

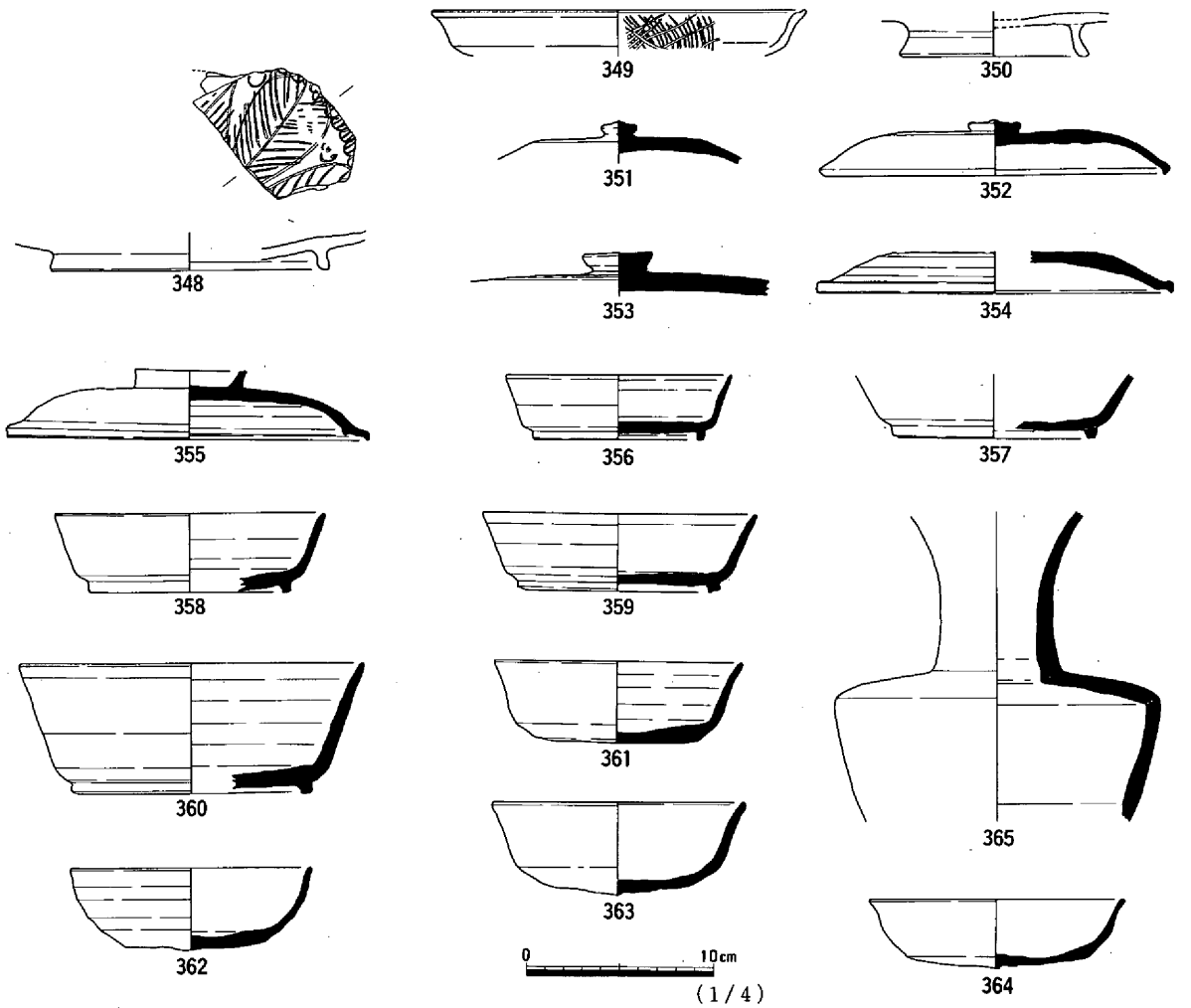
E－F　1　灰褐色土
2　暗灰褐色土

G－H　1　暗灰褐色微砂
2　黒灰褐色粘質土

I－J　1　暗灰褐色微砂
2　黒灰褐色粘質土

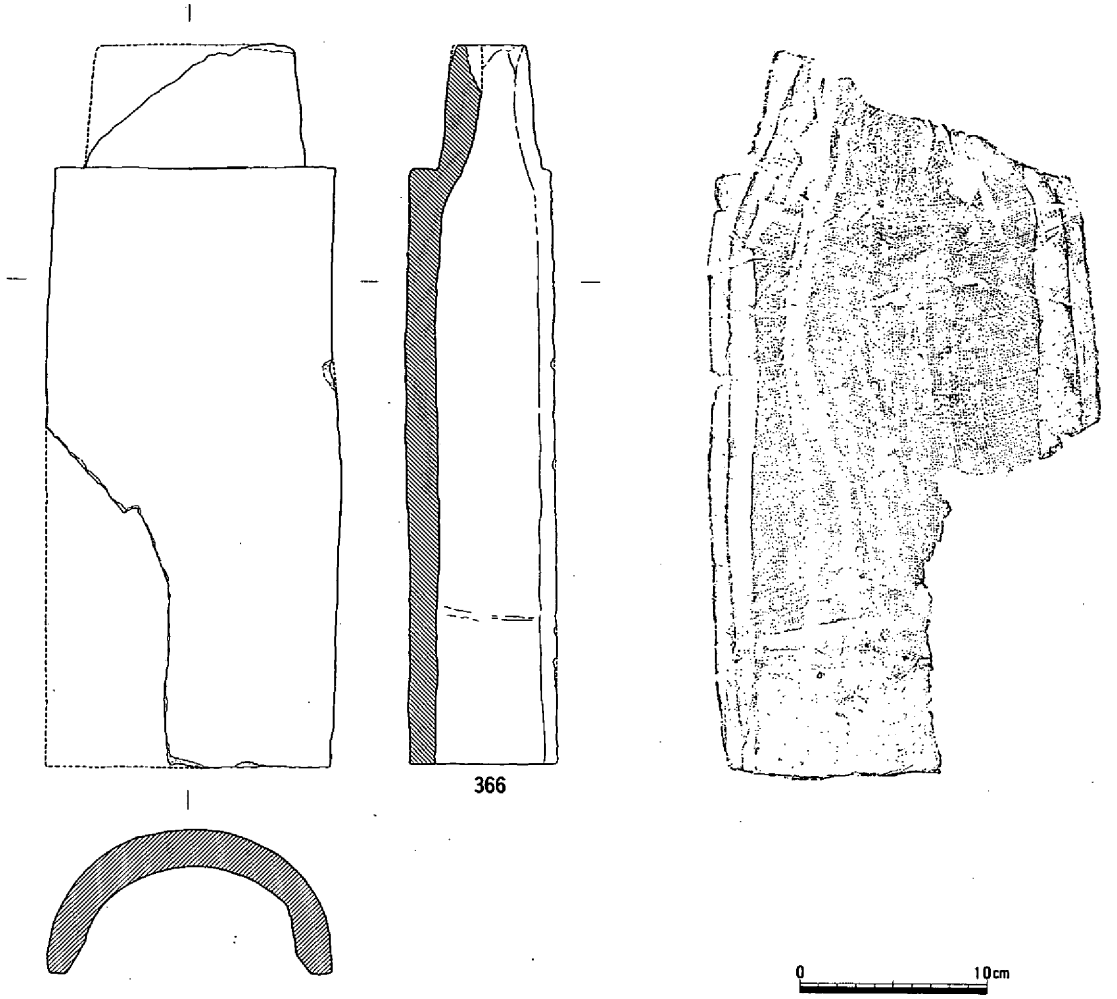
K－L　1　暗灰褐色微砂
2　黒灰褐色粘質土

M－N　1　黒褐色土

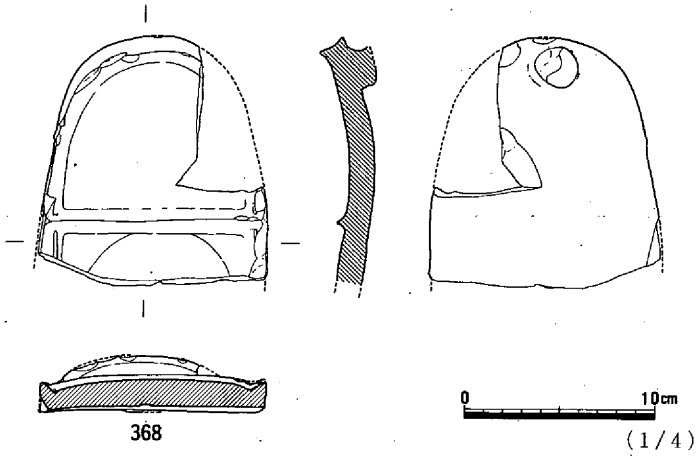


(1/4)

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
348	土師器	高台付杯				良好	橙 2.5YR6/6	微砂	水漉粘土・内面に木の葉様の暗文・丹塗り
349	土師器	Ⅲ				良好	にぶい褐7.5YR5/4	精良	内外面丹塗り・内面暗文状のヘラミガキ・丹塗り
350	土師器	(高台)				良好	にぶい黄橙10YR7/2	微砂	底部内外面に丹塗り・高台部はわずかに外反する・丹塗り
351	須恵器	蓋				良好	(内･断)明青灰5PB7/1　(外)灰N6	精良	宝珠つまみ・内面不定方向のナデ仕上げ
352	須恵器	蓋	18.0		3.0	良好	(内･断)灰5Y6/1　(外)灰N6/	細砂	端部下方へ折り曲げ・天井部外面に重ね焼痕あり
353	須恵器	蓋				やや不良	(内･断)灰白5Y7/1 (外)灰黄2.5Y7/2	砂礫	内面不定方向のナデ
354	須恵器	蓋	(18.8)			良好	(内)灰白N7　(外･断)青灰5PB5/1	微砂	端部内側へ折り曲げ・丁寧なロクロナデ
355	須恵器	蓋	19.4		3.7	良好	(内･外･断)灰N6/	細砂	かえり有り・輪台状のつまみ
356	須恵器	杯身	(12.0)	高台径 内(8.4) 外(9.0)	3.5	良好	(内･断)灰N6/1 (外)灰7.5Y6/1	微砂	やや小形、高台
357	須恵器	杯身		高台 (10.1)		良好	(内)暗青灰5PB4/1 (外･断)青灰5PB5/1	精良	外面丁寧なロクロナデ、高台
358	須恵器	杯身	14.5	10.6	4.3	良好	(内･外) 灰N5/ (断)褐灰10YR5/1	砂礫	杯底部外面へラケズリ、高台
359	須恵器	杯身	14.6	高台径 内 9.7 外10.8	4.2	良好	(内･外･断)灰N6/	細砂	内面不定方向の仕上げナデ、高台
360	須恵器	杯身	18.5	高台径 内11.8 外13.0	7.0	良好	(内･外･断)灰N6/	細砂	深い立ち上がりを有す、高台
361	須恵器	杯	13.2	8.2	4.2	良好		精良	丁寧なロクロナデ
362	須恵器	杯	(12.8)	7.5	4.5	良好	(内･断)青灰5PB5/1 (外)暗青灰5PB4/1	精良	端部わずかに外反し丸く納める・丁寧なロクロナデ
363	須恵器	杯	(13.3)		5.0	良好	(内･外)灰白5Y7/1　(断)灰白N7	精良	底部ヘラオコシ未調整・底部内面不定方向のナデ
364	須恵器	杯	(13.4)			やや不良	(内･外･断)灰白N7	精良	底部ヘラオコシのみナデ調整・端部わずかに外反
365	須恵器	長頸壺				良好	(内･断)灰N6/ (外)オリーブ灰2.5GY5/1	微砂	外面に自然釉



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 長	幅	厚	焼成	色調	胎土	特徴・備考
366	瓦	丸瓦	38.0	15.2	1.8	良好	灰5Y6/1	砂礫	凹面布目
367	瓦	平瓦			3.0	良好	灰5Y6/1	砂礫	凸面縄目



掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			長	幅	厚				
368	硯	風字硯	(13.2)	(12.0)	(1.2)	良好	灰N6	微砂	部分的に墨残る

区画溝は、ＭＭ４区およびＭＭ７区で検出された。方形区画をなす二重の溝の北西隅部分であると理解され、後述するような状況から奈良時代の官衙関連の遺構と判断されるものである。

区画の主軸方向はほぼ真北を示す。確認できたのは最長で北辺約50ｍ、東辺15ｍである。北辺内側の溝は北東角から22ｍまでを確認したが、その延長はあらかじめ調査区境に設定したトレンチのため未検出であった。なお、このトレンチ掘削時に比較的多量の奈良時代の須恵器が出土している。また、東辺内側の溝は精査したが検出できなかった。これは地形的に南側が高く後世に削平されたためと理解している。西辺および南辺は検出できず、区画の全体の規模は不明である。なお現在の農道がこの北辺に沿っており、区画の名残が現在まで踏襲されていたようである。

溝は二重に巡り、不整形な土壙状のものが連なる状況で検出された。これは、溝底の深い部分のみが確認できたためと考えられる。このような状況は、岡山市津寺遺跡でも確認されており、溝の掘削に関わる工人の単位であるとの意見も出されている。溝の残存する深さは最も深い部分で約40cmほどである。また、幅は検出面で最も広いもので約250cmを測った。二重の溝の芯心距離は450cmを測った。

この区画内には、掘立柱建物群が配されているが、区画自体の規模が不明なためどこまでがこの区画内の建物であるかの判断はしきれていない。また、溝と同時併存の建物についても、ここでは断定を避けたい。

出土遺物は、比較的多くの須恵器が認められた。このうち、**348～368**を図示した。**348～350**は土師器の杯、あるいは皿である。特に**348**には内面に木の葉を形どった暗文状のヘラミガキが施されており注目される。**351～364**は須恵器である。このうち**351～355**は蓋であり、**355**は輪台状のつまみ部をもち、返りがある。**356～360**は高台付杯、**361～364**は高台をもたない杯である。**365**は長頸壺である。瓦は比較的少ない。**366**は丸瓦であり、玉縁を持つ。凹面は布目である。**367**は平瓦で凸面には縄目が認められる。このほか**368**の風字硯が出土している。海部長8.9cm、残存する陸部幅10.6cmを測る。圻部は完存しており、0.6cmの高さを持つ。部分的に墨の遺存が認められた。

溝の存続時期は、出土遺物に時期のばらつきがあるものの奈良時代後半期と考えている。(大橋)

（5）柱　穴　列

ここで柱穴列と呼称して3基取り上げる。これらは、柱穴が直線上に並ぶものであり、柵として使用されたのかどうかは不明であり、建物の一部を構成した可能性も残されている。

また、出土遺物も少なく、詳細な時期判断が下せなかった側面もある。

以下、個別に概要説明をしていくこととする。

柱穴列1

柱穴列1は、遺跡の上位部で検出されたほぼ南北方向を指し示す遺構である。検出当初は、3棟の掘立柱建物の東側桁行部分と考えていたが、後の発掘調査によってすぐ西側部分は中世の堀状の溝によって旧状が失われたことが判明し、その推定を裏付けることは果たせなかった。したがって、柱穴列遺構としてとりあげることとした。

柱穴は、すべて円形もしくは不整円形を呈し、深さは20～30cm前後を測る。柱穴からの出土遺物はまったくみられないが、埋積土は掘立柱建物56・57などと同一であり、時期的には奈良時代に比定されるべき遺構である。　（岡田）

柱穴列2

柱穴列2は、前田調査区の北東端部に存在し、東側には掘立柱建物60や掘立柱建物74が検出されている。この柱穴列2は後述した柱穴列3とほぼ平行する状態で確認されたが、柱間寸法が柱穴列3が189cmであるのに対し、柱穴列2は204cmと間隔が広くなっていた。

柱穴の平面形はいずれも円形を呈し、柱穴の底部は地形に沿って不揃いであった。3本の柱穴内の底部には円形を呈する小規模な窪みが認められ、その部分に柱が据えられていた痕跡であると推定された。いずれの柱穴内からも遺物が出土しなかったので、柱穴列2の時期は不明である。　（福田）

柱穴列3

柱穴列3は、前述した柱穴列1や柱穴列2と同様に前田調査区の北東端部に所在し、柱穴列2とほぼ平行する。主軸はN－71°－Eの方向を示す。柱穴列2と柱穴列3は著しく近接した位置で検出され、柱穴の規模や柱間寸法が異なっていたことから、同一の建物を構成はしないものと考えられた。

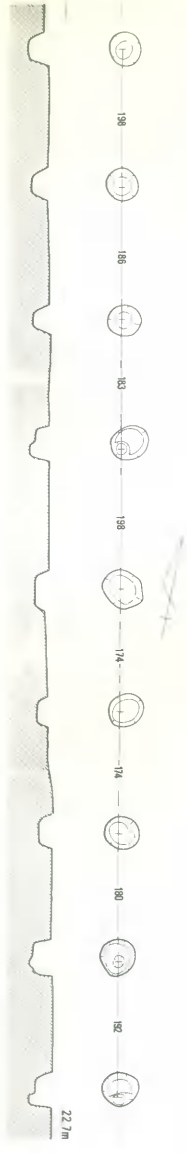
この柱穴列3には直線的に並ぶ4本の柱穴が存在したが、いずれの柱穴も規模は小さく、その平面形は円形を呈していた。柱間は189cmでありほぼ揃っていたが、柱穴の底は地形に沿って不揃いであった。東端部に検出した柱穴内には灰褐色土の柱痕跡が認められたが、残る3本は明らかではない。

柱穴列3の周囲を精査したところ、柱穴は存在したものの規則的に並んで建物としてまとまるものは把握できなかった。しかしながら、この柱穴列は、前述した柱穴列2と同様に建物の外側あるいは、間に設置された仕切りの役目をしていたのでなかろうか。

4本の柱穴内から何も出土しなかったのでこの柱穴列の時期は不明であるが、柱穴列が区画溝の方向とは著しく相違することから、両遺構の作られた時期が異なるのは明らかと思われる。

柱穴規模や埋土を時期が判明した他の掘立柱建物と比較検討し、柱穴列3は中世のものと推定した。　（福田）

柱穴列1

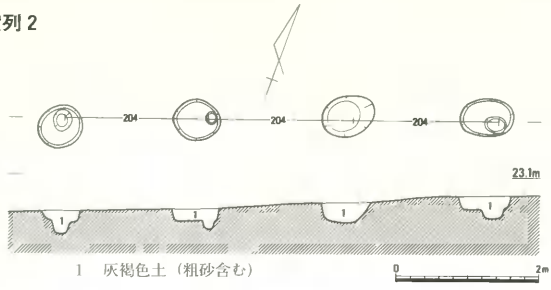


0　2m

(1/80)

位置(調査区)	規模	長さ(cm)	列方向	柱穴掘り方	柱穴規模(cm)	時期	備考
MBOX二	4間	485	N-[illegible]-W	円	47-[illegible]	弥生	

柱穴列2



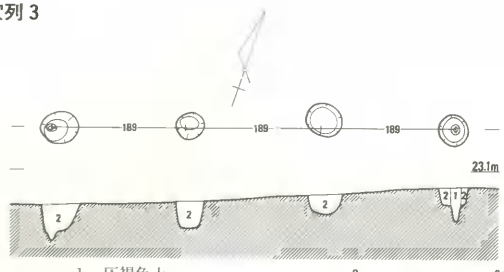
1　灰褐色土（粗砂含む）

0　2m

(1/80)

位置(調査区)	規模	長さ(cm)	列方向	柱穴掘り方	柱穴規模(cm)	時期	備考
MS1	3間	[illegible]2	N-71°-E	楕円	65-[illegible]	〃	

柱穴列3



1　灰褐色土
2　灰黄褐色土（粗砂含む）

0　2m

(1/80)

位置(調査区)	規模	長さ(cm)	列方向	柱穴掘り方	柱穴規模(cm)	時期	備考
MS1	3間	567	N-71°-E	円	46	中世	

（６）井　　戸

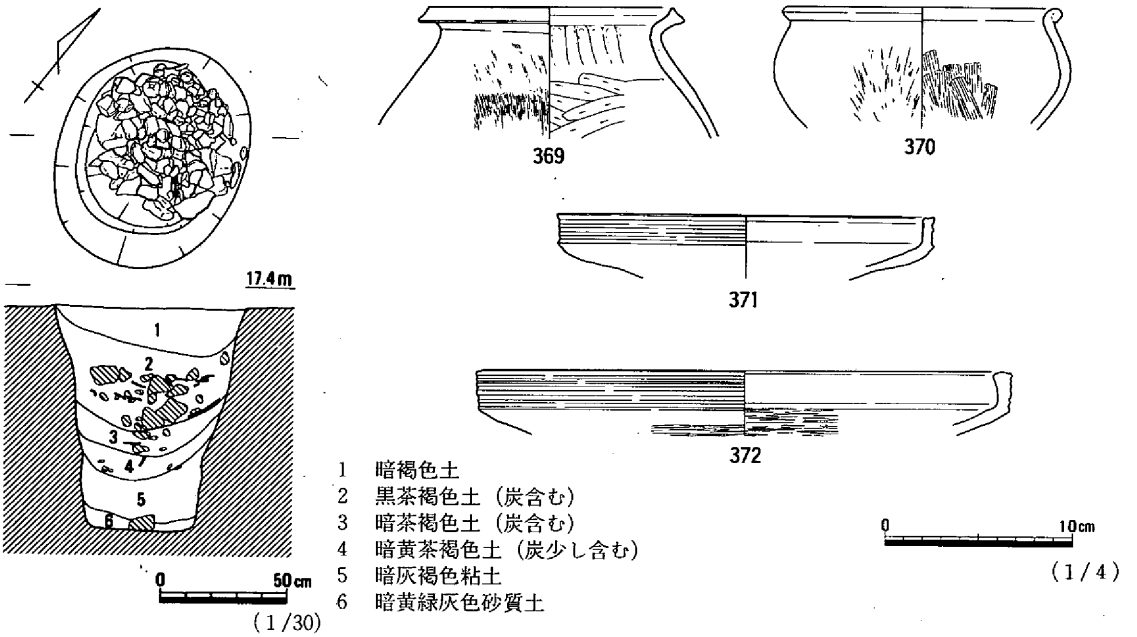
ここでは、井戸として11基報告する。最も古いものは弥生時代後期前半のものであり、２基確認されている。また、中世末から近世にかけての石組みの井戸も２基検出されている。

注目されるのは、古墳時代後半の木組みを有するものであり、ここで井戸として取り扱ったが、別の機能を果たしていたとの想定も指摘される。

このほか、井戸８と井戸９については土壙状のものであるが、諸状況から井戸と判断している。

以下、この11基について個別に概要に触れていくこととする。　（大橋）

井戸１

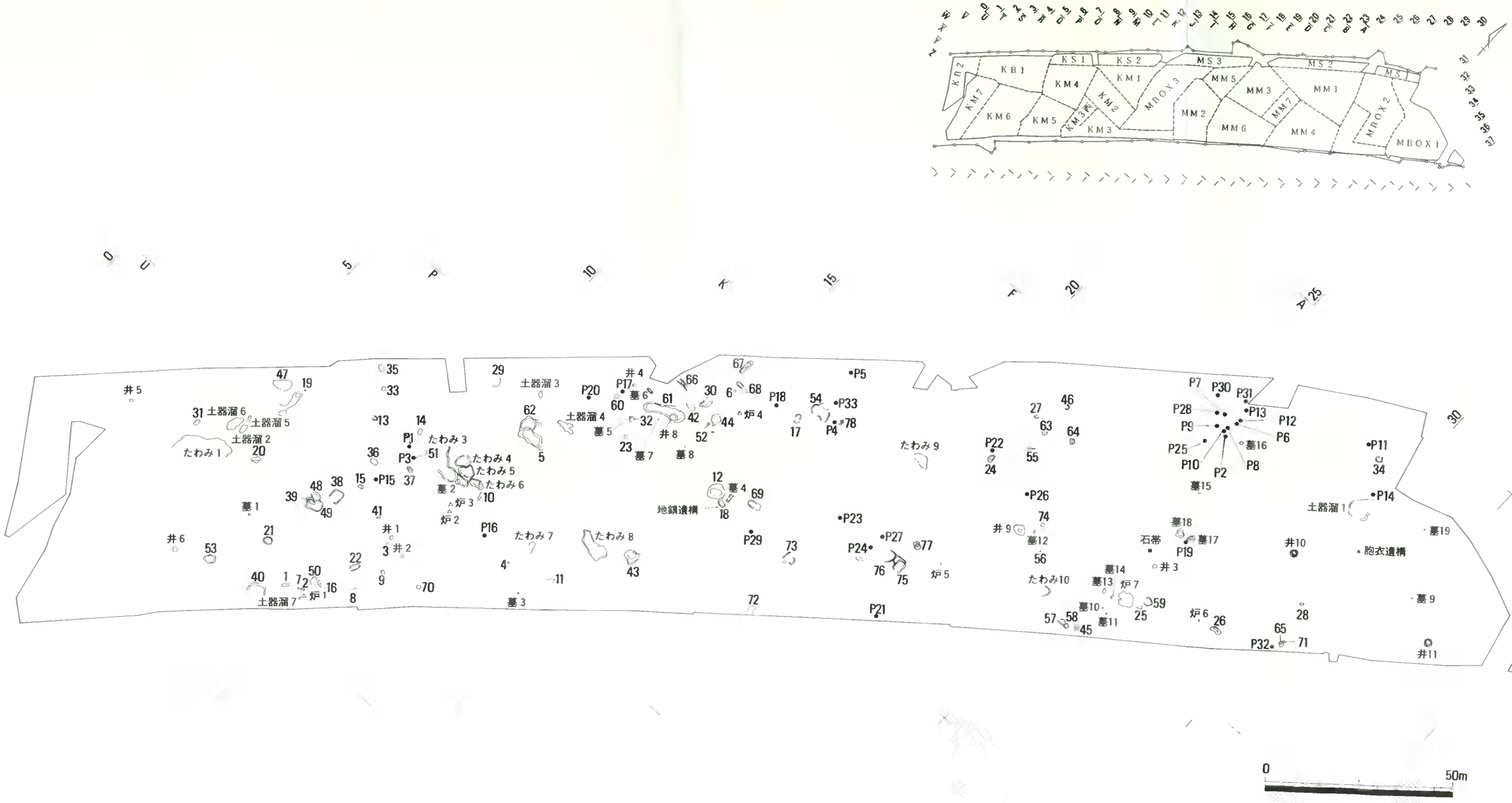


1　暗褐色土
2　黒茶褐色土（炭含む）
3　暗茶褐色土（炭含む）
4　暗黄茶褐色土（炭少し含む）
5　暗灰褐色粘土
6　暗黄緑灰色砂質土

遺構名	位置(調査区)	規模(cm)			平面形	断面形	土器	時期	備考
		上面径	底面径	深さ					
井戸１	ＫＭ５	91×73	40×34	89	楕円	矩	○	弥生中期後葉～後期前葉	礫多し

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
369	弥生土器	甕	12.9			良好	にぶい黄橙10YR7/2	微砂	胴部外面板状工具による調整・口縁部ヨコナデ
370	弥生土器	鉢	14.3			良好	にぶい黄橙10YR7/3	精良	口縁部折り曲げて玉縁状・外面ハケメか？
371	弥生土器	高杯	20.0			良好	にぶい黄橙10YR7/2	微砂	口縁部凹線・端部ナデによるくぼみ
372	弥生土器	高杯	26.6			良好	灰白2.5Y8/2	微砂	口縁部凹線・杯部内面横方向のヘラミガキ

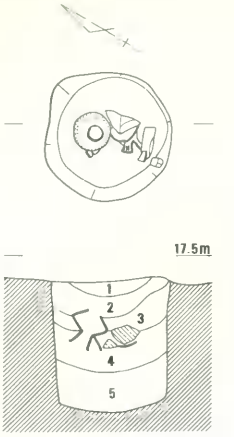
井戸１は、ＫＭ５区で検出された。竪穴住居５の北に隣接して位置する。検出面で91×73cmのやや不整な円形を呈し、深さは約90cm残存していた。埋土の中程では多量の礫が投げ込まれている状況が把握された。出土遺物は多くなく図示したのは**369**～**372**である。**370**は玉縁状の口縁部を持つ鉢であり、注目される。井戸１の時期は、これらの出土遺物から弥生時代中期後葉～後期前葉と判断した。　（大橋）



第12図　井戸・炉・墓・土壙・柱穴・土器溜り・たわみ配置図(１/1,000)

（数字のみは土壙を示す）

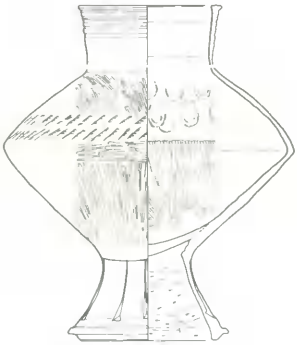
井戸２



（１/30）

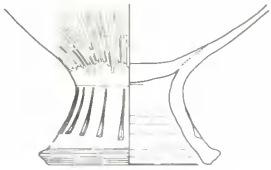
1　淡茶褐色粘質土
2　明茶褐色粘質土
3　暗茶灰褐色粘質土
4　暗褐色粘質土
5　淡黒灰色粘質土

遺構名	位置・調査区	規模(cm)			平面形	断面形	土器	時期	備考
		上面径	底面径	深さ					
井戸２	ＫＭ３西	68	57	[illegible]	円	矩	[illegible]	弥生後期前葉	



373

374



375

（１/４）

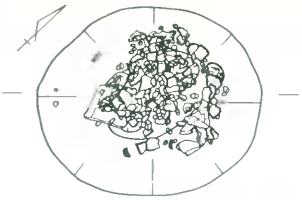
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
373	弥生土器	脚付直口壺	10.[illegible]	[illegible]	23.[illegible]	良好	淡黄2.[illegible]3	極礫	胴部・[illegible]メ原体による連続刺突文
374	弥生土器	直口壺	10.[illegible]			良好	灰白2.5[illegible]2	細砂	頸部下端に波状文
[illegible]	弥生土器	台付鉢		11.1		良好	灰黄褐[illegible]	極礫	胴部・貫通しない三角形透かし孔

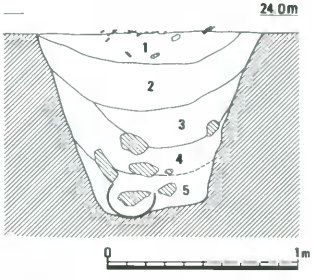
井戸２は、ＫＭ３西区に位置し、井戸１の東側にある。

規模は径68cmを測り、平面形態は円形を呈する。掘り込みは、ほぼ垂直に掘り下げて底はすぼまって行かない。出土遺物は、井戸の中ほどで検出された。**373**は、台付直口壺で口縁端部を肥厚させ頸部中ほどまで凹線を施文する。算盤玉の胴部上半に２段の刺突文を付す。**374**は、頸部屈曲部に波状文を施文する。**375**は**373**と同様に台部に貫通しない三角形の透かしを付している。時期は弥生時代後期前葉である。

（下澤）

井戸３

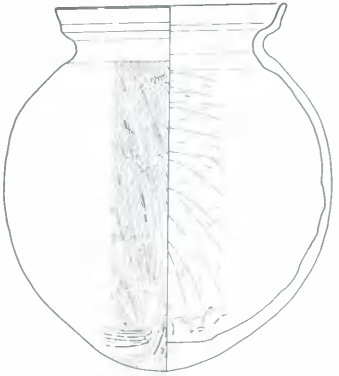




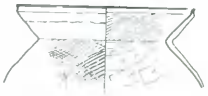
（１/30）

1　灰黒褐色土（土器片多く含む）
2　灰茶褐色粘質土（礫含む）
3　暗灰黒色粘質土（礫・黄灰色土ブロック含む）
4　暗黒灰色粘土
5　〃　（４より粘性強，炭化物含む）

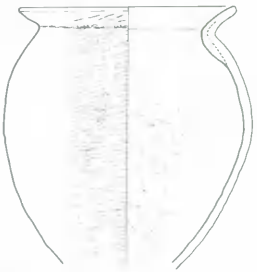
遺構名	位置（調査区）	規模(cm)			平面形	断面形	土器	時期	備考
		上面径	底面径	深さ					
井戸３	ＭＭ４	118×99	60×41	99	円	逆台		[illegible]平中葉	



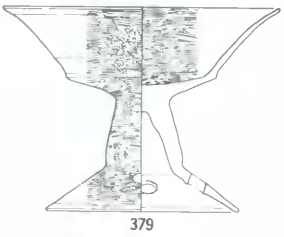
376



377



378



379

380

0　10cm

（１/４）

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
376	土師器	壺	16.1		26.0	良好	浅黄2.5Y7/3	細礫	やや鈍い，重口縁・黒斑・スス付着
377	土師器	甕	12.6			良好	浅黄橙8/4	細砂	「C」の字口縁の端部は上方へつまみ上げ・胴外面はタタキメ
378	土師器	甕	15.0			良好	赤褐10R4/4	砂礫	非在地産か？・外面タタキメ調整
379	土師器	高杯	19.5	脚13.5	15.6	良好	明赤褐2.5YR5/8	砂礫	屈曲して大きく外方へ開く杯部・外面は[illegible]ミガキ，脚裾部に円形透かし孔４個
380	土師器	皮形器台				良好	[illegible]黄橙10YR7/4	砂礫	内面上[illegible]ラケズリ・[illegible]器壁厚い

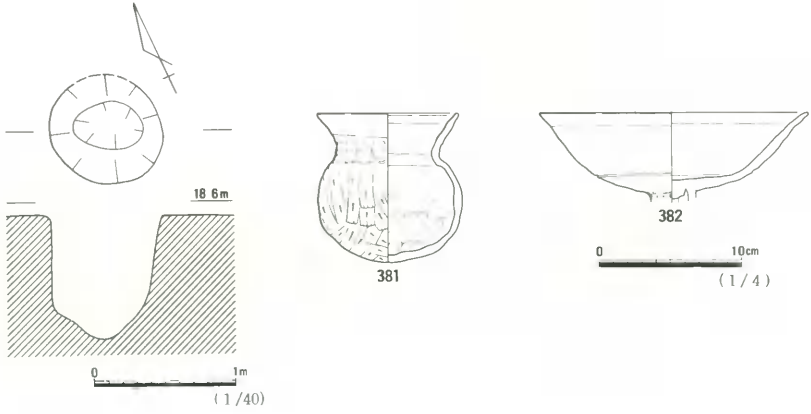
井戸３は、ＫＭ４区に位置し、墓17の南にある。

平面形態はほぼ円形を示し、断面形態は逆台形を呈する。検出面からの深さは99cmを測る。底面に２か所のくぼみがあり、そこから調査時においても湧水が認められている。

遺物の出土状態は、平面形態検出時に土器溜まりを検出した。土器溜まりは、第１層の灰黒褐色土の上面に集中して認められたもので、**345**の高杯などはここからの出土であり井戸内からの出土遺物の９割近くがこの部分から出土している。第２・３層にかけては、遺物はほとんど認められなかった。第５層の底に堆積した土層およびその土層中から15cm前後の礫が数個認められ、礫を伴う**378**や井戸底に接して**376**が出土している。

出土遺物は、**376**～**380**の土師器である。**376**は、短い頸部から外方へ広がる二重口縁をつくり、底は丸底である。胴部外面はヘラミガキを行い、底部内面には押圧痕が認められる。**377**は、「く」の字状に屈曲する頸部で口縁端はつまみ上げる。胴部外面には細かいタタキが認められる。**378**は、「く」の字状に屈曲する頸部をもつもので、器壁の厚さと胴部外面のタタキの太さが注目される。**379**は、短脚から長脚になった段階のものである。**380**は、鼓形器台である。　　(下澤)

井戸４



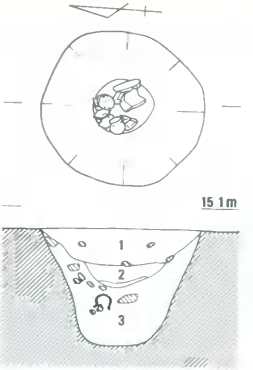
遺構名	位置/調査区	規模(cm) 上面径	底面径	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
井戸４	[illegible]	78	[illegible]	88	円	楕		古墳前半後葉	

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
381	土師器	壺	9.7		10.6	良好	灰黄2.5Y7/3	砂礫	
382	土師器	高杯	18.8			良好	にぶい褐7.5YR6/3	砂礫	

井戸４は、発掘調査区のほぼ中央の北側で検出された。検出当初は、古代の掘立柱建物の柱穴と理解していたが、掘り方の形状や出土遺物などから、古墳時代に比定される井戸と理解するに至った。

掘り方はほぼ円形で、径約80cmを測る。深さは約90cmで、井底の中央部は窪んでいる。出土遺物は全て土師器で、**381**の小形壺、**382**の高杯の杯部が図化した遺物である。井戸５などとほぼ同時期に存在した井戸と考えられ、井戸そのものの規模も小規模である点で共通する。　　(岡田)

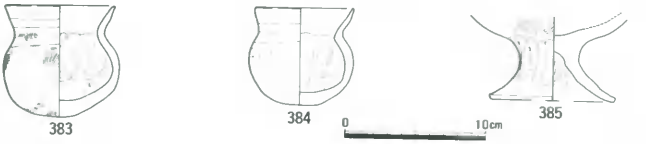
井戸５



1　灰黒褐色砂礫（マンガン含む）
2　暗灰青色粘土（炭含む）
3　灰青色粘土

（1/30）

遺構名	位置（調査区）	規模（cm） 上面径	底面径	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
井戸５	ＫＢ１	85	2m	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	与墳前半後葉	



（1/4）

掲載番号	種別	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
383	土師器	小形壺	7.6		7.9	良好	浅黄2.5Y7/3	砂礫	内面にカキ取り状のケズリ・完形品
384	土師器	小形壺	6.9		7.0	良好	浅黄2.5Y7/3	細砂	
385	土師器	台付壺？		(8.7)		良好	[illegible]	砂礫	

井戸５は、遺跡の下位、掘立柱建物１の南西方約15ｍに位置する円形の素掘りの井戸である。周囲は、比較的湿潤な部分で間断なく湧水が認められた。検出面は礫を多量に含み、堅硬である。

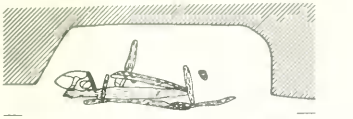
掘り方は、やや不整な円形で井底は径約30cmほどの平坦面をなす。法面は、その井底にむかって擂鉢状にすぼんでいる。井底では、わずかながら湧水が認められる。

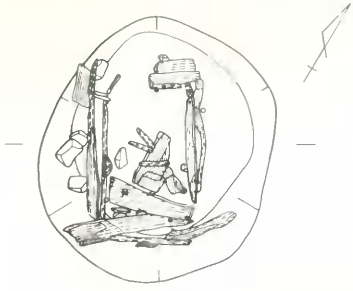
出土遺物には、**383・384**の小形の壺がある。いずれも完形品あるいは、それに近いものである。**385**は、台あるいは脚の部分で壺の下部にあたる可能性が強い。

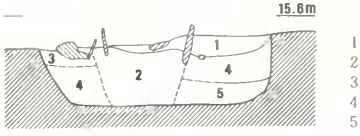
時期的には、古墳時代に比定される井戸と考えられ、掘立柱建物１などのほぼ同時期の遺構と共存していた可能性がきわめて強い。

出土遺物の中でも小形壺は、井戸４・６でも同じようにみられ、常に井戸の近くに備えられていた器物であったのか、あるいは何らかの井戸の祭祀と関わる可能性もある。　（岡田）

井戸６



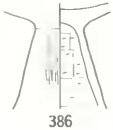




（１/30）

1　暗茶灰褐色粘質土
2　灰色砂質土
3　暗灰黒褐色粘質土
4　灰色砂礫
5　黒灰色粘質土

遺構名	位置（調査区）	規模（cm）			平面形	断面形	土器	時期	備考
		上面径	底面径	深さ					
井戸６	ＫＭ６	142×124	109×96	38	円	矩	○	古墳後半前葉	木枠・勾玉



（１/４）

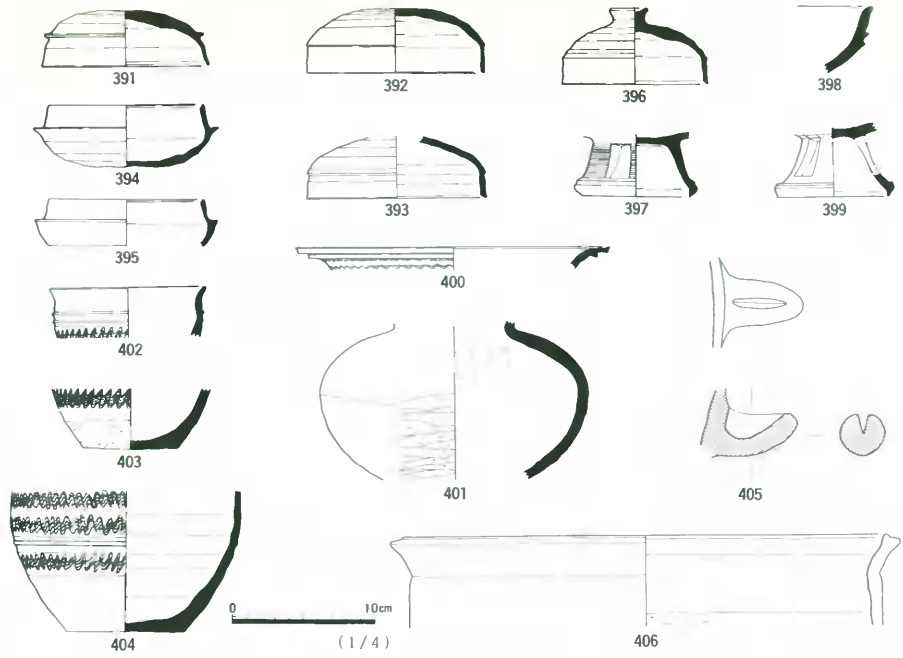
R７　（１/２）

Ｏ８
（１/２）

掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
386	土師器	高杯				良好	にぶい黄橙10YR7/2	精良	脚柱部外面ヘラ、ガキか？
387	土師器	小型壺				良好	にぶい橙7.5YR7/4	微砂	内面ヘラケズリ・ユビナデ・外面磨滅
388	土師器	小型壺				良好	灰白5YR8/1	微砂	内面細かいヘラ状工具のかき上げ
389	土師器	手づね			4.7	良好	灰黄2.5Y7/2	微砂	わずかに平らな底部あり
390	土師器	手づね			3.8	良好	灰白2.5Y8/1	細砂	ユビオサエ

掲載番号	種	材質	形態	色調	最小幅（mm）	最大厚（mm）	孔径（mm）	重量（g）	備考
Ｒ６	紡錘車	土	Ｄ２	灰黄2.5Y7/2	5	17	7.5	47	

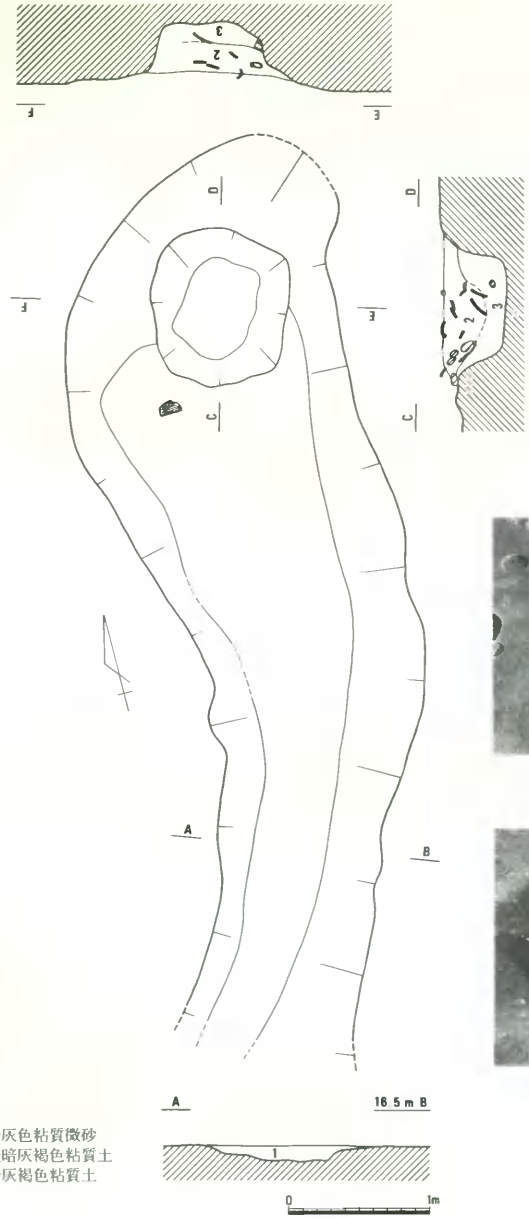
掲載番号	種	材質	色調	最大幅（mm）	最大径（mm）	孔径（mm）	重量（g）	備考
Ｇ８	Ｅ	土	灰白5Y8/1	41	24.10	18.45	14	



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
391	須恵器	蓋	11.6		4.0	良好	(内・外・断)青灰5PB5/1	精良	稜部分は水平方向へ大きくつまみ出す・内面仕上げナデ・ロクロ右回り
392	須恵器	蓋	(12.4)		4.6	良好	(内・外・断)明青灰5PB7/1	微砂	端部面あり・内面仕上げナデ・ロクロ左回り
393	須恵器	蓋	12.6			良好	(内・外)灰N4 (断)暗灰N3/1	精良	つまみ部欠損・端部面を形成・ロクロ左回り
394	須恵器	杯身	(10.8)			良好	(内・外)青灰5PB5/1 (断)暗青灰5PB4/1	精良	端部段あり・杯内面仕上げナデ・ロクロ左回り
395	須恵器	杯身	(10.8)			良好	青灰5PB6/1	精良	端部わずかに段あり
396	須恵器	蓋	(10.3)		5.45	良好	(内・外)青灰5PB5/1 (断)暗紫灰5RP4/1	微砂	検鏡い・端部面あり・天井部内面仕上げナデ・つまみ・ロクロ左回り
397	須恵器	高杯	脚(9.6)			良好	(内・外)灰N6/ (断)灰褐5YR4/2	精良	脚柱部カキメ状の調整
398	須恵器	高杯				良好	(内・外)灰10Y5/1 (断)灰褐5YR5/2	細砂	突線２条・端部は丸く納める
399	須恵器	高杯		脚7.85		良好	(内・外)暗青灰5PB4/1 (断)暗紫灰5RP4/1	精良	脚端部断面三角形・三方透かし孔
400	須恵器	甕	(23.0)			良好	(内)青灰5PB5/1　(外)暗青灰5PB4/1　(断)灰赤7.5R4/2	精良	口縁部下に断面三角形の突線、その下に波状文
401	須恵器	壺				良好	(内・外)灰N6　(断)紫灰5P6/1	精良	内面上半ユビオサエ・外面下半細いヘラケズリ
402 403	須恵器	鉢	(10.9)	(6.6)		良好	(内・外・断)青灰5PB6/1	微砂	下半静止ヘラケズリ・接点なしの同一個体か？
404	須恵器	把手付鉢		8.2		良好	(内)灰N6/　(外)灰N5/ (断)褐灰5YR5/1	細砂	把手部欠損・胴下半外面静止ヘラケズリ後丁寧なナデ・波状文
405	軟質系土器	(把手)				良好	にぶい黄橙10YR7/3	砂礫	把手部切り込み
406	土師器	鉢	35.0			良好	にぶい黄橙10YR7/2	微砂	焼き不明・口縁端部強いヨコナデによるくぼみ

井戸６は、発掘調査を実施した範囲の最も南西端部に位置する地形の低い所に存在し、この所在地点より南西側は基盤層が急勾配に傾斜して粘質土が厚く堆積していた。井戸の掘り方の平面形は長径142cm・短径124cmの円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは38cmであった。掘り方の断面形は矩形になっており、内部に板材を使用した平面形が長方形の井戸枠が設置されていた。４方向に配置された井戸枠の残存状態は極めて悪く、内側の灰色砂質土内に崩壊した板材が散乱していた。内部からは須恵器や土師器が比較的多く出土し、珍しい遺物として土製の紡錘車**Ｒ７**や勾玉**Ｏ８**も認められた。この須恵器群は陶邑編年のＴＫ208に酷似しているから、古墳時代後半前葉と考えられる。（福田）

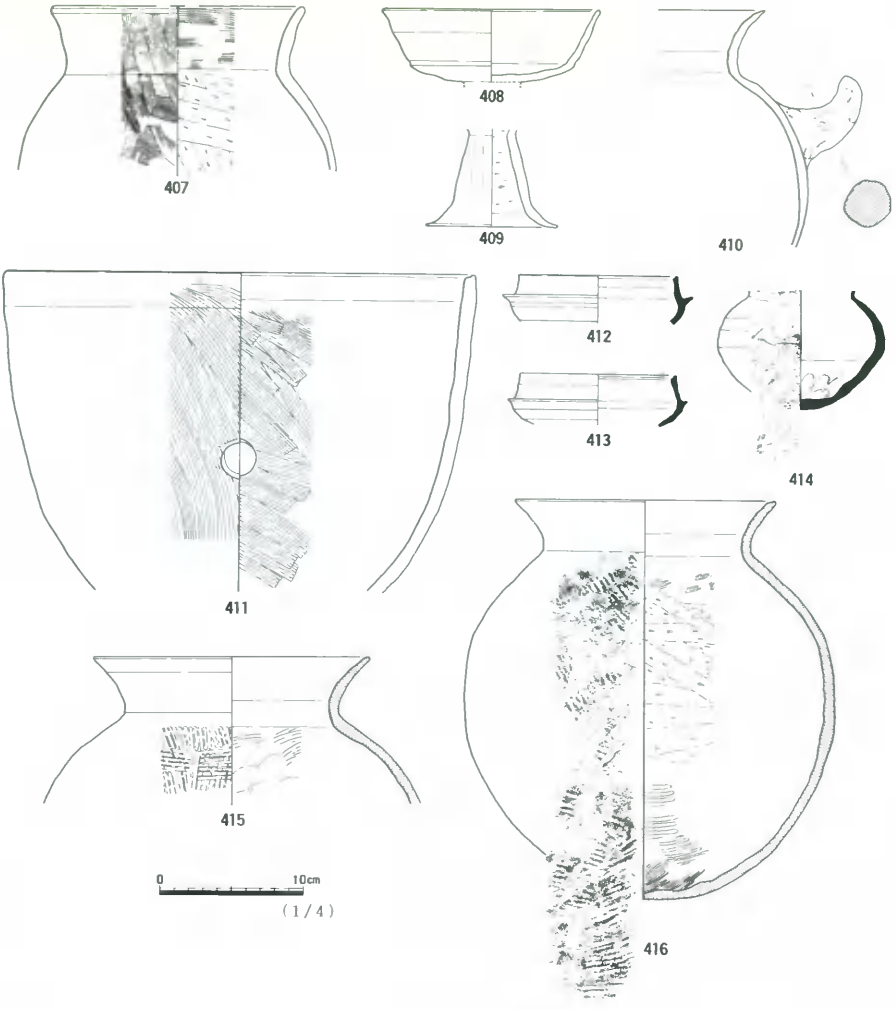
井戸7



1　暗灰色粘質微砂
2　淡暗灰褐色粘質土
3　暗灰褐色粘質土

(1/40)

遺構名	位置(調査区)	規模(cm)			平面形	断面形	土器	時期	備考
		上面径	底面径	深さ					
井戸7	KB1	108	69×49	48	隅丸方	逆台		古墳後半前葉	書あり　深さ10cm、幅110～190cm、長さ(630cm)



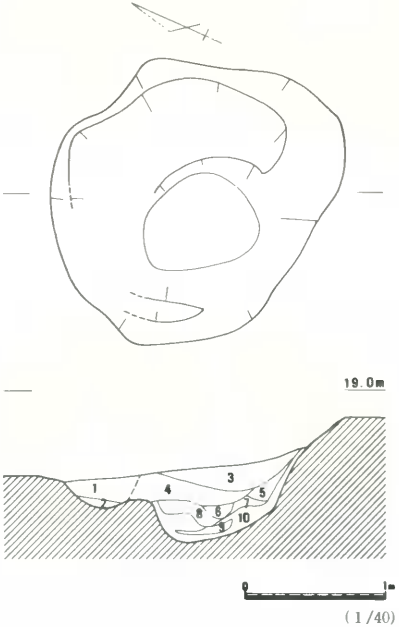
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
407	土師器	甕	(17.6)			良好	灰黄褐10YR6/2	砂礫	
408	土師器	高杯	15.3		5.3	良好		砂礫	接合部は須恵器技法
409	土師器	高杯		(9.2)	(7.0)	良好	にぶい橙7.5YR6/4	細砂	接合部凸有・脚柱部板状工具による調整で、縦方向に横線がはいる
410	土師器	甕				良好	明赤褐5YR5/6	砂礫	把手あり
411	土師器	甑？	32.6			良好	明赤褐5YR5/6	砂礫	円孔2か所内外面にハケメ・口縁端部面を持つ・平底
412	須恵器	杯身	11.2			良好	(内・外)灰N4/ (断)暗赤褐10YR4/1	細砂	ロクロ右回り・立ち上がり部ハリツケ
413	須恵器	杯身	11.0			良好	(内)灰N5/　(外)灰N5/ (断)灰N5/	砂礫	端部にアクセントを持つ・ロクロ右回り
414	須恵器	壺				良好	(内)灰N4/　(外・断)灰N5/	細砂	頸部櫛描波状文・胴下半平行タタキメ
415	須恵器 （土師質ぐ）	甕	19.0			やや不良	(内・断)灰黄褐10YR6/2 (外)にぶい褐7.5YR5/4	砂礫	外面（綾格子）タタキメ
416	須恵器 （土師質ぐ	甕	18.4		28.5	やや不良	(内)明褐7.5YR5/6　(外)明赤褐5YR5/6　(断)褐灰7.5YR5/1	細砂	器形、焼成とも土師器的・タタキメ調整は須恵器

井戸7は、溝を伴う井戸状の遺構としてまず溝が検出され、ついで一番奥まった高位の部分で隅丸方形の掘り込みが検出された。発掘調査当時も少量ながらも湧水が認められていたので、当時もかなり浅いレベルでもある程度の湧水があったことは確かであろう。その余剰水の排水路として、下位方向すなわち南方へ溝が付設されたものと理解したい。

井戸の検出面は、礫層ともいうべき大小の多量に礫を含む灰褐色土で、かなり堅硬な土層が掘り込まれている。深さは約40cmあまりを測り、井底は比較的平坦である。

出土遺物の多くは井戸部分に集中しており、土師器・須恵器がその大半を占めている。前者では、甑と推定される**411**が注目される。体部の中程よりやや下位に直径2.5cmほどの円孔が穿たれている。内外面にハケメ調整が施された器面には黒斑が観察される。一方、**415・416**は土師質を呈する須恵器である。器表面のタタキメ調整に須恵器の製作技法が明瞭に看取される。　(岡田)

井戸8



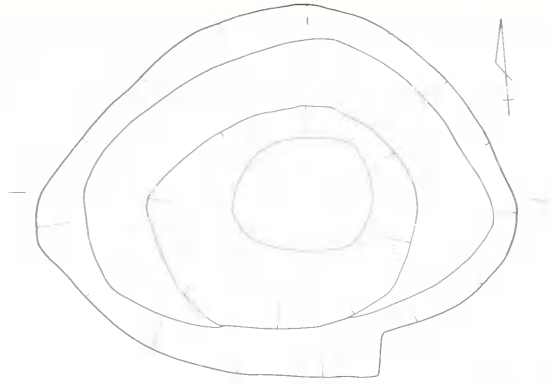
1　暗灰色粘土
2　灰色粘土
3　暗黒灰色粘質土（炭化粒含む）
4　淡黒灰色粘質土
5　黄灰色土（礫多く含む）
6　淡灰黄色土
7　淡灰黄色砂質土
8　淡暗灰色土（黄灰色土ブロック含む）
9　淡黄色粘質土（礫含む）
10　黄灰色土（礫少し含む）

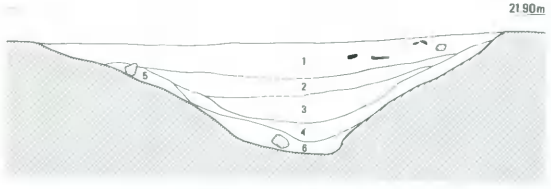
(1/40)

遺構名	位置・調査区	規模（cm）			平面形	断面形	土器	時期	備考
		上面径	底面径	深さ					
井戸8	MBOX3	214×185	81×66	87	楕円	椀	・	古墳後半末葉	

井戸8は、調査区のほぼ中央の北寄りに土壙61と重複して検出した。平面形は歪な楕円形を呈しており、長径214cm、短径185cmを測る。底面は中心より少し南西に寄っており、北東から北西にかけては2段になる。底面の大きさは長径81cm、短径66cm、検出面からの深さ87cmを測る。遺構からの出土遺物がないため時期は不明であるが、埋積の状況から土壙61と同時期か、それよりも古い時期と考えられる。　(井上)

井戸９





1　灰黄褐色土（礫・土器片含む）
2　明灰色砂質土
3　淡灰黒色粘土
4　暗黒灰色粘土
5　暗灰色粘質土
6　明黒灰色粘土

0　1m　（1/40）

遺構名	位置（調査区）	規模（cm） 上面径	底面径	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
井戸９	ＭＭ４	138・265	90×80	88	楕円	鉢	△	中世（室町後半）	備前焼含む

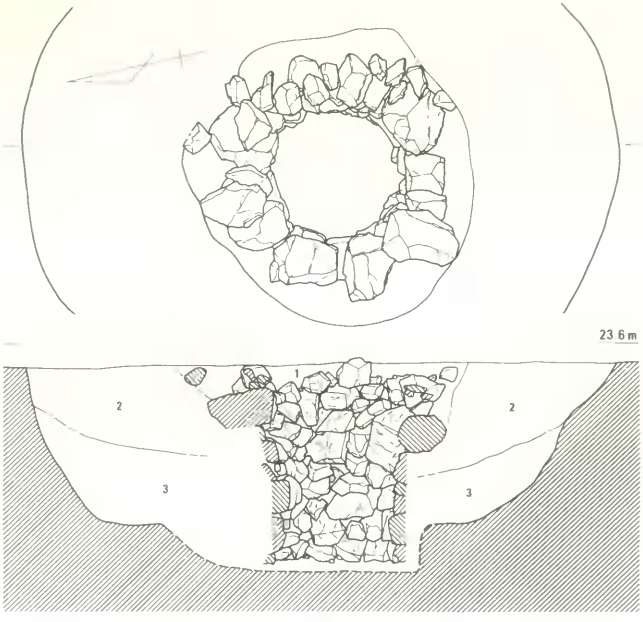
0　10cm　（1/4）

掲載番号	種別	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
417	備前焼	甕				良好	褐灰7.5YR4/1	細砂	口縁部は折り曲げて肥厚
418	備前焼	擂鉢				良好	にぶい橙7.5YR6/4	砂礫	
419	備前焼	擂鉢	（26.4）	（16.6）		良好	にぶい褐7.5YR6/3	微砂	
420	青磁	碗	（14.1）			良好	釉　明オリーブ灰5GY7/1 地　灰白N8/1	精良	連弁文

井戸９は、ＭＭ４区にあり、東西340cm、南北270cmの不整円形をなす。深さは、検出面より88cmある。井戸底の標高は、20.78ｍである。埋土は粘質土で埋土内より、備前焼甕**417**、擂鉢**418**、鉢**419**、龍泉窯系の蓮花文青磁碗**420**が出土している。

時期は室町時代後半と考えられる。　（伊藤）

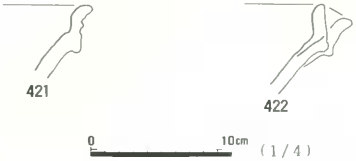
井戸10



（１/40）

1　淡灰褐色土
（粗砂・礫多く含む）
2　ブロック土
（灰色土・黄色土・灰褐色土，礫含む）
3　ブロック土
（灰色土・灰褐色土，礫含む）

遺構名	位置（調査区）	規模（cm）			平面形	断面形	土器	時期	備考
		上面径	底面径	深さ					
井戸10	ＭＢＯＸ２	212×196	77	138	不整円	逆台・矩形二段	△	中世（室町）	石組



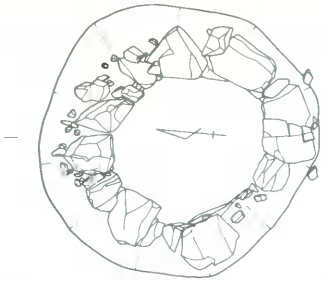
（１/４）

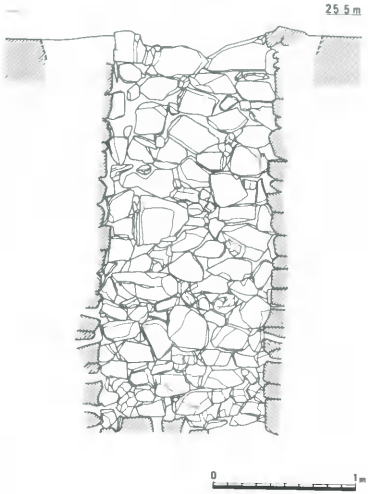
掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
421	備前焼	擂鉢				良好	灰赤7.5R4/2	緻密	口縁部外面に２条の沈線・口径はいびつで注口状
422	備前焼	擂鉢				良好	灰赤7.5R4/2	緻密	

井戸10は、遺跡の高位で検出された石組みの井戸である。掘り方は、井側の規模に比べかなり大きく径約４ｍあまりの不整円形を示すことが確かめられている。掘り方から井底までは、およそ140cmほどであり、後述の井戸11に比べるとかなり浅い。井側の石積みは、人頭大から一人持ち大あるいは二人持ち大の石の横口を内側に向けて円形になるように行なわれており、上部では径約１ｍを測る。

出土遺物には、備前焼の擂鉢**421・422**があり、室町時代に使用された井戸と考えられる。（岡田）

井戸11





（1/40）

M17
（1/1）

423

424

（1/4）

遺構名	位置（調査区）	規模（cm）			平面形	断面形	土器	時期	備考
		上面径	底面径	深さ					
井戸11	ＭＢＯＸ１	195	116	[illegible]	[illegible]	矩	△	[illegible]	石組上径11[illegible]大観通宝あり

掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
423	備前焼	甕				良好	暗赤褐2.5YR3/2	精良	折り返し口縁部
424	備前焼	[illegible]				良好	赤灰2.5YR4/1	精良	[illegible]外へ折り曲げ[illegible]

掲載番号	器種	材質	法量				備考
			最大長（mm）	最大幅（mm）	最大厚（mm）	重量（g）	
M17	古銭	銅	径24.3	——	1.3	3.18	大観通寶

井戸11はＭＢＯＸ１区の南東側に位置する。

掘り方は上面のみを確認した。壁面は、大きさの不整な角礫を無造作に積んでおり、石材を選択したり目を揃えてはいないように見受けられる。井戸内は、検出面より約450cmで底に達する。裏込めには角礫を使用しておらず、掘った土をそのまま埋めた可能性が高い。

遺物は、須恵質の高台付椀・土鍋・備前焼片、および加工木材片と北宋の大観元年（1107年）初鋳の大観通寶が１点出土した。備前焼は大甕**423**、肩部にクシガキ波状文のある壺**424**が室町時代に属し、その他にも、やや新しい擂鉢片がある。この井戸は中～近世のかなり長い期間にわたって使用されたものであろう。

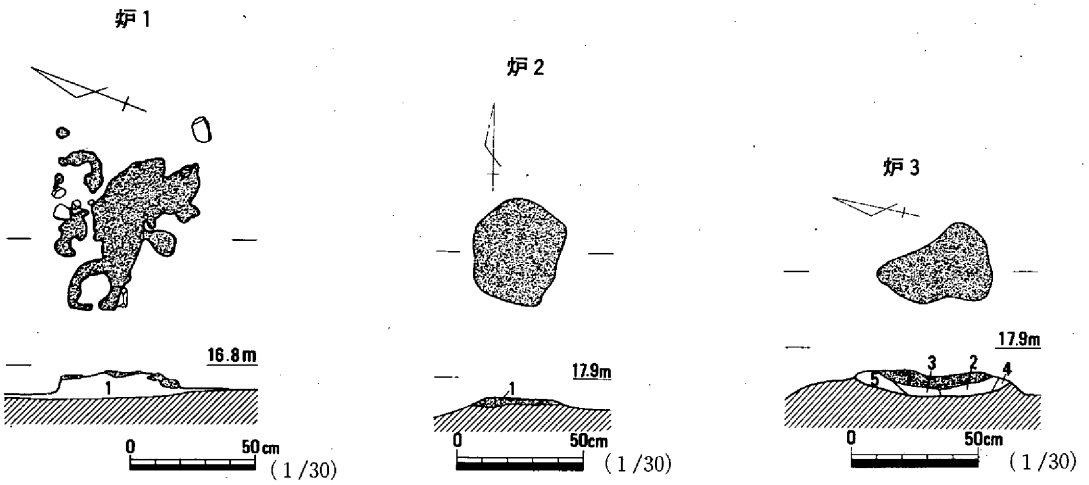
（氏平）

(7) 炉

ここで炉と呼称し記述するのは、基本的に被熱した面を持つものであり、掘り方が不明で平面的に被熱範囲を確認したものと、土壙状を呈し面的に被熱したものの2者が含まれる。これらのうち、鉄滓の出土を見たものもあり、全てではないにせよ、何らかの鉄製産に関わった遺構の可能性があると思われる。

以下、確認できた7基について個別に見ていくこととする。　(大橋)

炉 1・炉 2・炉 3



1　暗茶褐色土（礫・土器片含む）

1　赤褐色土（焼土）

1　赤褐色土（焼土）
2　淡茶灰色土（焼土・炭含む）
3　淡黄灰色土
4　淡茶灰色土（炭含む）
5　茶灰色土（焼土・炭含む）

遺構名	調査区	平面形	被熱部規模(cm)			土器	時期	備考
			長軸	短軸	厚み			
炉1	KM5	不整	80	60	—	×	?	
炉2	KM3西	方	40	33	3	×	?	
炉3	KM3西	隅丸三角	62	(30)	10	×	?	

炉1は、KM5区で検出された。掘り方等は不明であり、不整形に約80×60cmほどの面が被熱していた。共伴する出土遺物も皆無であり、性格についても不明と言わざるを得ないが、古墳時代後半期のものと考えたい。　(大橋)

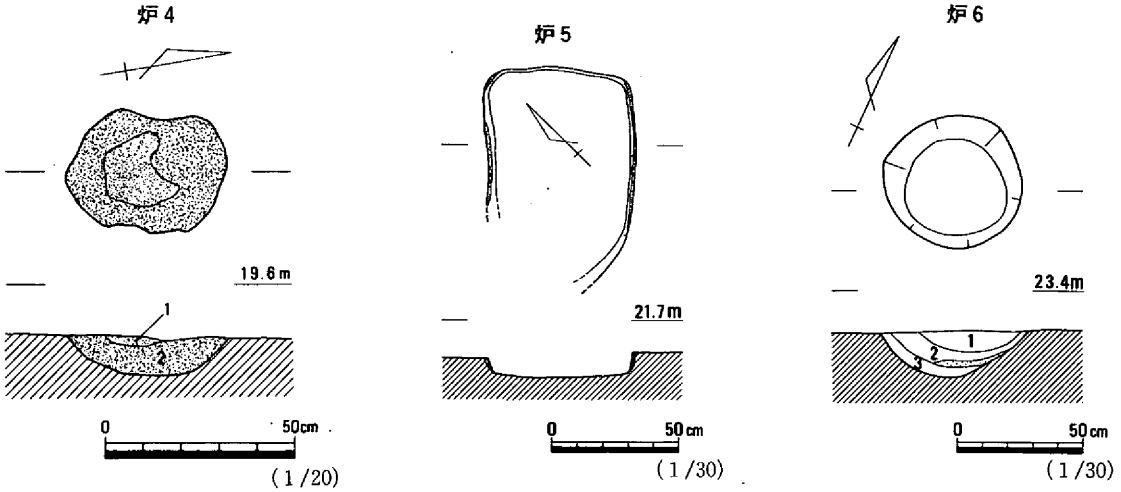
炉2は、KM3西区に位置し、炉3の南にある。

規模は、140×33cmの方形を呈するもので、遺構検出途中の茶褐色土面において認められた。この茶褐色土面に厚さ3cmの堅く焼かれて赤褐色土状となる炉を検出したのである。炉にともなうと考えられる遺構、遺物は認められず時期を判断できるものは得られなかった。　(下澤)

炉3は、亀田M3西調査区に位置し、炉2の北にある。

規模は、62×30cmの不整方形を呈するもので、炉2と同様に遺構検出途中の茶褐色土面において検出された。炉は、焼土部分が深さ8cmほどの椀状に茶褐色土面が焼けているのである。最も焼けている部分が土層断面の1であり、まわりと下層に行くにしたがい影響を受けなくなる。　(下澤)

炉 4・炉 5・炉 6



炉4
1　淡黄灰色土
2　赤褐色土

炉6
1　暗黄褐色土（炭化物少し含む）
2　暗灰褐色土（炭化物含む）
3　暗灰褐色粘質土（下層に焼土）

遺構名	調査区	平面形	被熱部規模(cm)			土器	時期	備考
			長軸	短軸	厚み			
炉4	ＭＢＯＸ３	楕円	42	32	10	×	?	
炉5	ＭＭ６	方	(85)	(55)	＊10	×	?	
炉6	ＭＭ４	円	56	54	＊18	×	?	

炉４は、ＭＢＯＸ３区の北東、土壙44の東約６ｍに位置する。包含層掘り下げ中に検出し、上部構造はすでに消失していた。検出できたのは基底部のみである。土層は１層の高温を受けて還元した部分と２層のそれよりも温度が低く赤変した部分に分けられる。

包含層中からも少なからず鉄滓が見つかっており、このような炉は小鍛冶に使用された精錬炉であると想定される。炉近くの包含層中から６世紀中葉の須恵器杯蓋が見つかっており、炉の時期も古墳時代後期の可能性が高いと思われる。　(氏平)

炉５は、Ｌ22グリッド(ＭＭ６区)に所在する。平面形は、南西の部分が明確に検出されていないため不明確であるが、ほぼ長方形を呈するものと考えられる。規模も明確にし得ないが、幅55cm、長さ85cm前後になるものと推定される。検出面からの深さは10cmあまりで、底部はほぼ平坦である。壁の立ち上がりは垂直で、１cm程の厚さが赤褐色に焼けている。なお、底部には被熱による色調の変化は認められなかった。　(平井)

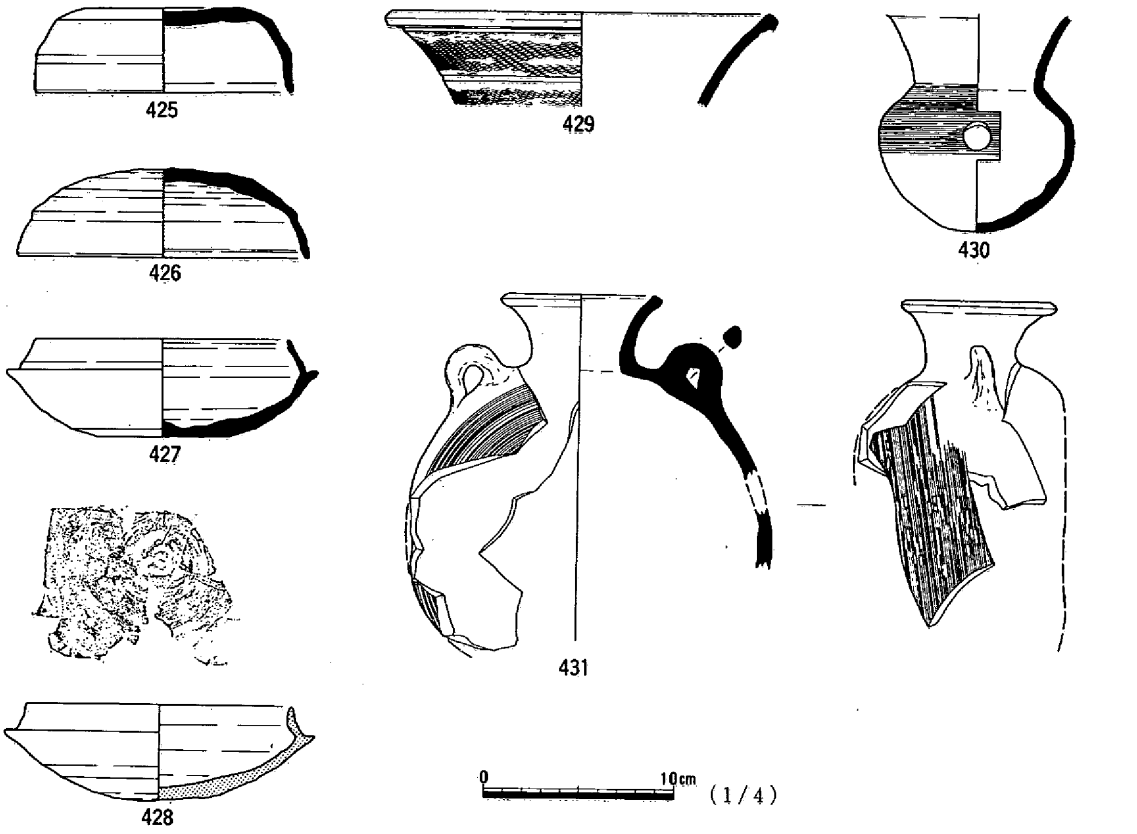
炉６は、ＭＭ４区に位置し、土壙26の西にある。

規模は、径56cmの円形を呈するものである。厚さは18cmほどあり、第１層は炭化物を若干含み、第２層になると炭化物が多く含まれているのが認められる。この第２層の東よりに炭化物だけの層が存在している。そして、第３層の下層部分に焼土層が検出されたのである。これに伴う遺物がなく、時期を判断する資料を得ていないのである。　(下澤)

炉　7

1　焼土（非常に強く火をうける赤色面）
2　赤色部（1より固くない）
3　淡赤色部（炭化粒含む）
4　灰色土（炭・焼土粒含む）
5　焼土ブロック（黒色）
6　〃
7　淡茶灰色土（炭・焼土粒含む）
8　茶灰色土（炭・焼土粒多く含む）
9　淡灰色土（炭・焼土粒多く含む）
10　淡茶灰色土
11　淡暗茶灰色土
12　黒褐色土（炭多く含む）

遺構名	調査区	平面形	被熱部規模(cm)			土器	時期	備考
			長軸	短軸	厚み			
炉7	MM4	不整	411	384	39	○	古墳後半末葉	下部構造か？



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
425	須恵器	蓋	(13.4)			良好	(内・外)暗青灰5PB4/1 (断)青灰5PB6/1	微砂	稜は鈍いくぼみで表現・端部は丸く納める・ロクロ左回り
426	須恵器	蓋	(15.2)			良好	(内・外・断)青灰5PB5/1	微砂	稜は鈍い凹部で表現・口縁部は外方へ開き、端部は鈍い段を形成
427	須恵器	杯身	(13.3)		5.2	良好	(内・外・断)青灰5PB5/1	精良	立ち上がり部ハリツケ・口縁端部は鈍い段を有す・ロクロ左回り
428	須恵器 (土師質B)	杯身	(13.85)			良好	(内)にぶい橙5YR6/4 (外)橙5YR7/8 (断面)褐灰10YR6/1	精良	内面アテ具痕残る・立ち上がり部折り込み・端部は丸く納める・ロクロ右回り
429	須恵器	甕	(19.8)			良好	(内・外・断)青灰5PB6/1	精良	口縁端部は断面鋭い三角形を呈す・頸部は沈線の上下に波状文
430	須恵器	瓶				良好	(内・外・断)青灰5PB5/1	精良	体部外面下半タタキメ後ナデ、上半カキメ・内面に押圧痕
431	須恵器	提瓶	(7.65)			良好	(内)灰N6 (外)青灰5PB6/1 (断)明青灰5PB7/1	微砂	輪状把手・体部外面カキメ・口縁端部はわずかに外方に面を形成

炉7は、ＭＭ４区に位置し、墓14の東にある。規模は411×384cmを測り、平面形態は一定した形状を認めることができなかった。平面図に示したように、この検出面において４か所の焼土面を検出したのである。土層断面Ａ－Ｂの右焼土面は45×30cmのものであり、深さ17cmにわたって影響をうけている。他の３か所の焼土面の規模は、45×20cm、46×15cm、35×28cmで下層にほとんど影響を与えていない。

断面観察からは、炉の下部が２時期にわたって掘られていることが認められるが、平面的に把握することはできなかった。また、この４か所の炉がいずれに属するかについては、現状では新しい時期に伴う可能性が大きいのである。

炉下の不整形な大形の掘り込み中の底には、多くの礫と土器片を認め、二次的な流入でないことから意識的に投げ込まれたような感を受けるのである。埋土は、焼土、炭化物であることからしても、上部の炉に伴う何らかの下部構造としての内容を有していたことが考慮されるのである。

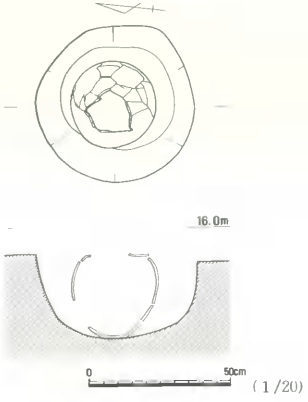
出土遺物は須恵器で、**428**は土師質のものである。時期は、古墳時代後半末葉と考える。　(下澤)

(8) 墓

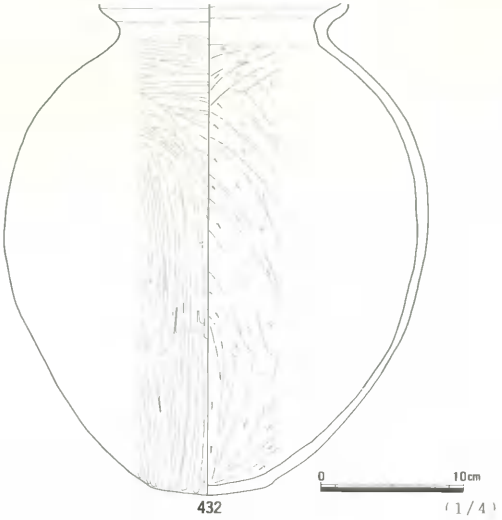
斎富遺跡では19基の墓が確認された。棺の種類としては、土器を用いたものと木棺が検出されたもの、および木棺が確認できず素掘り状を呈するものの3種であるが、火葬墓と判断した平安時代のものもここで説明する。最も古いものは弥生時代後期前半の時期である。

以下、各々個別に説明を加えていくこととする。　(大橋)

墓 1



(1/20)



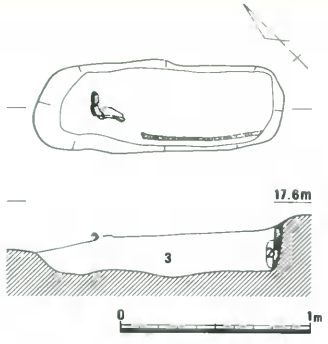
432
(1/4)

遺構名	位置(調査区)	種類	掘り方		掘り方規模(cm)			開口方向	時期	備考
			平面形	断面形	長さ	幅	深さ			
墓1	KMf	器棺墓	円	椀	59	55	28	-	古墳前半前葉	

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
432	土師器	壺		[illegible]		良好	浅黄2.5Y7/3	砂礫	土器棺として使用・体部外面ハケメ後ヘラミガキ・口縁端部ヨコナデ・黒斑あり

墓1は、発掘調査を実施した範囲の南西端部に位置する地形の低い地点に検出され、西側と東側には土壙20と土壙21が存在した。掘り方の平面形は長径59cm・短径55cmの円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは28cmと極めて浅かった。内部に口縁部を打ち欠いた土師器の壺**432**が棺として据えられていた。この壺は口縁部の形態が不明であるが、頸部から底部にかけての内外面の調整手法や底部の様相から、古墳時代前半前葉の時期に属するであろう。　(福田)

墓　2



（1/30）

1　暗灰色粘土（細砂含む）
2　黒灰色土・暗黄色土混合
3　黒灰色土・暗茶淡褐色土混合

墓２は、ＫＭ２区に位置し、たわみ状遺構等と重複して検出された。平面形態は隅丸長方形を呈する土壙であり、土壙底部は中央部と北西小口部分がやや窪んでいる。

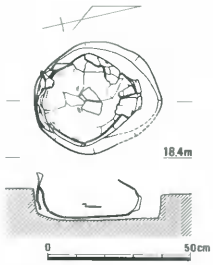
土壙の南西壁側にあたる位置で、木棺の痕跡を確認することができたことから、木棺直葬墓と考えられる。

出土遺物は少量であり図示していないが、これらから、時代は弥生時代後期と考えている。

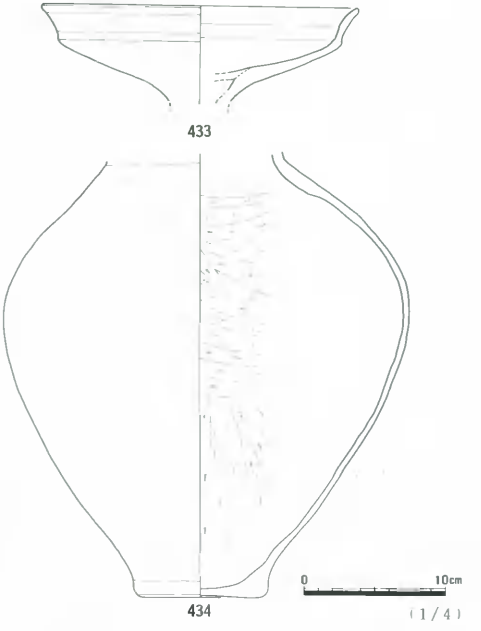
（二宮）

遺構名	位置（調査区）	種類	掘り方		掘り方規模（cm）			開口方向	時期	備考
			平面形	断面形	長さ	幅	深さ			
墓２	ＫＭ２	木棺墓	隅丸長方	[illegible]	131	[illegible]	[illegible]	—	弥生後期	木棺痕跡あり

墓　3



（1/20）



（1/4）

遺構名	位置（調査区）	種類	掘り方		掘り方規模（cm）			開口方向	時期	備考
			平面形	断面形	長さ	幅	深さ			
墓３	ＫＭ３	土器棺墓	円	[illegible]	[illegible]	[illegible]	11	南	弥生後期中葉	棺蓋・高杯・棺身・壺

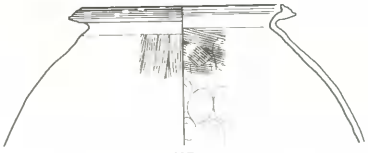
掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
433	弥生土器	高杯	22.3			良好	橙5YR6/6	砂礫	棺蓋・器壁磨滅
434	弥生土器	壺		[illegible]		良好	[illegible]5YR6/[illegible]	砂礫	口頸部[illegible]欠き・黒斑・器壁磨滅・棺体

墓3は、墓2の東約34mの位置に検出した。少し南北に長い円形の掘り方の中に土器棺を検出したものである。掘り方は長径45cm、短径39cmを測るものである。棺身は壺の頸部と口頸部を欠いた胴部を用いたもので、口を斜め上方に向けて横位置に置かれたものである。蓋としては高杯の脚部を欠いたものを使用していた。棺体の開口方向は南である。**433**は蓋に使用された高杯である。口縁部が少し外に曲がりながら立ち上がるものである。**434**は棺身に使用された壺である。胴部内面は頸部の直下までヘラケズリの施されるものである。時期は弥生時代後期中葉と考えられるものである。　(井上)

墓　4

1　暗茶褐色粘質土
2　灰褐色粘質土
3　暗褐色粘質土

(1/30)



435

0　10cm

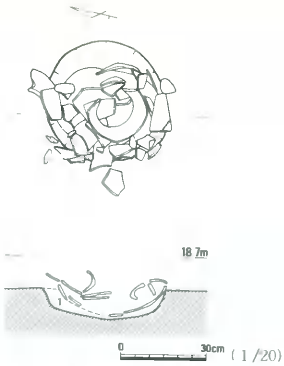
(1/4)

遺構名	位置(調査区)	種類	掘り方		掘り方規模(cm)			開口方向	時期	備考
			平面形	断面形	長さ	幅	深さ			
墓4	MM2	土壙墓	長方	甕	226	77	23	――	弥生中期後葉	

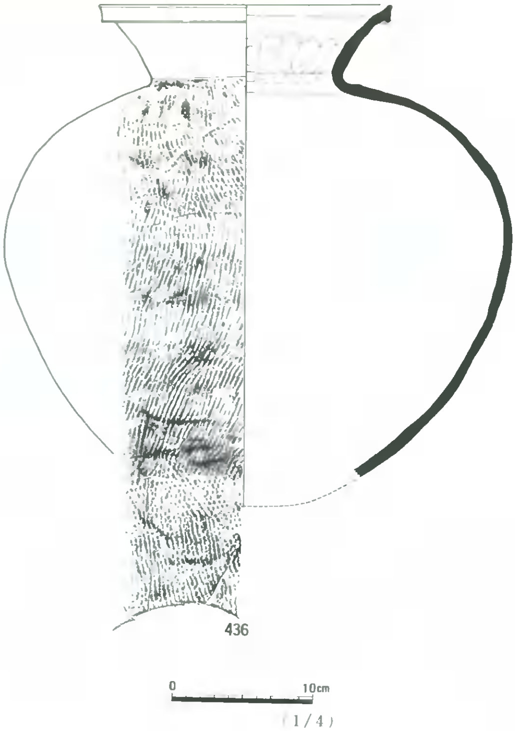
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
435	弥生土器	甕	14.0			良好	橙7.5YR6/6	微砂	口縁部上方へ拡張し外面を形成・胴内面ユビオサエ、ナデ

墓4は、墓3の北北東約60mの位置に検出した。平面形は南北に長い長方形を呈するもので、長さ226cm、幅77cm、検出面からの深さ23cmを測る。床面は平坦で、この遺構に伴うと考えられるものは何も検出されなかった。断面は矩形を呈しており、壁体はほぼ垂直に立ち上がるものである。埋積する土は水平堆積に近いものである。土壙の中心軸はほぼ磁北を向くものである。墓壙からは少量の土器が出土している。**435**は甕である。外方に折れ曲げられた口縁部の端部が上方に少し拡張するもので、外面に凹線が施される。胴部外面はハケメ、内面は口縁部に近い部分はハケメ、その下方はユビオサエが施される。時期は弥生時代中期後葉と考えられる。　(井上)

墓　5



1　淡茶灰色土



遺構名	位置（調査区）	種類	掘り方		掘り方規模（cm）			開口方向	時期	備考
			平面形	断面形	長さ	幅	深さ			
墓5	ＫＭ１	土器棺墓	円	逆台	42	43	15	上	古墳後半後葉	棺身 須恵器甕

掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
436	須恵器	甕	20.6		35.[illegible]	良好	内 N6/ 外・断 N5/1	細砂	底部穿孔 内面[illegible]

墓５は、ＫＭ１区に位置し、土壙32と重複している。

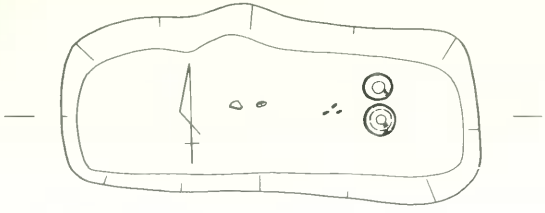
墓壙掘り方は径43cmの円形で、断面形態は逆台形を示している。底面は、ややくぼむがほぼ平坦である。この掘り方の中に**436**の須恵器が潰された状態で検出されたのである。掘り方と甕の大きはほぼ同じであり、したがって甕を据える墓壙はぎりぎりに掘られていたようである。

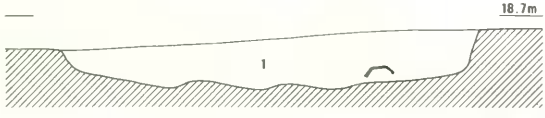
出土状態から甕の底部を土壙の底に付けて置かれたようで、口縁部がほぼ中央にそのままはまりこんだ状態であった。甕の内部からは、骨が１片認められたことから埋葬に用いられたと考えられる。

出土遺物は、棺に用いられた須恵器である。底部は、焼成後の穿孔がされているようである。時期は、６世紀前半と考えられる。

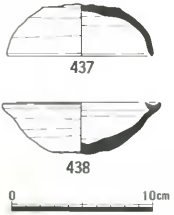
（下澤）

墓　6





1　暗灰褐色粘質土　　0　1m　(1/40)



(1/4)

遺構名	位置(調査区)	種類	掘り方		掘り方規模(cm)			開口方向	時期	備考
			平面形	断面形	長さ	幅	深さ			
墓6	KM1	土壙墓	長方	逆台	146	64	21	——	古墳後半末葉	杯を枕として使用か?

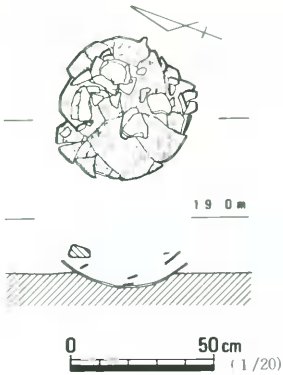
掲載番号	種別	器種	計測値(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
437	須恵器	杯蓋	10.2	5.5	3.3	良好	(内・外・断)灰白N7/	砂礫	天井部外面未調整
438	須恵器	杯身	11	4.2	3.7	良好	(内・外・断)灰白N	砂礫	底面未調整

墓6は、KM1区に位置し、土壙61の西にある。

規模は146×64cm、深さ21cmの長方形の土壙墓である。底面は、凹凸が見られ平坦には整えられていない。また、東西の壁の立ち上がりは丸味を持って外に広がりぎみとなり、特に西は顕著である。掘り方と土層断面観察から、当初想定していた棺はなく直接埋められたことが思考されるのである。出土遺物は、土壙の東よりに**438**が北に**437**が南に伏せた状態で揃えて置かれていた。この須恵器の西よりに骨片が確認されたが、遺存状態が悪く鑑定に出せなかった。また、中央部分からは鉄片が出土している。

時期は、先の須恵器から7世紀前半と考えられる。　　(下澤)

墓　7



（1/20）

O 9
（1/1）

（1/6）

439

遺構名	位置(調査区)	種類	掘り方		掘り方規模(cm)			開口方向	時期	備考
			平面形	断面形	長さ	幅	深さ			
墓７	MBOX3	土器墓	不明	不明	不明	不明	不明	不明	古墳後半未葉	小玉有り

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
439	須恵器	甕				良好	(内・外)暗青灰5PB4/1 (断)紫灰5P6/1	微砂	

掲載番号	器種	材質	色調	最大長(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
O 9	小玉	ガラス	土透明緑	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	

墓７は、ＭＢＯＸ３区の北側、竪穴住居60の南西約15ｍに位置する。

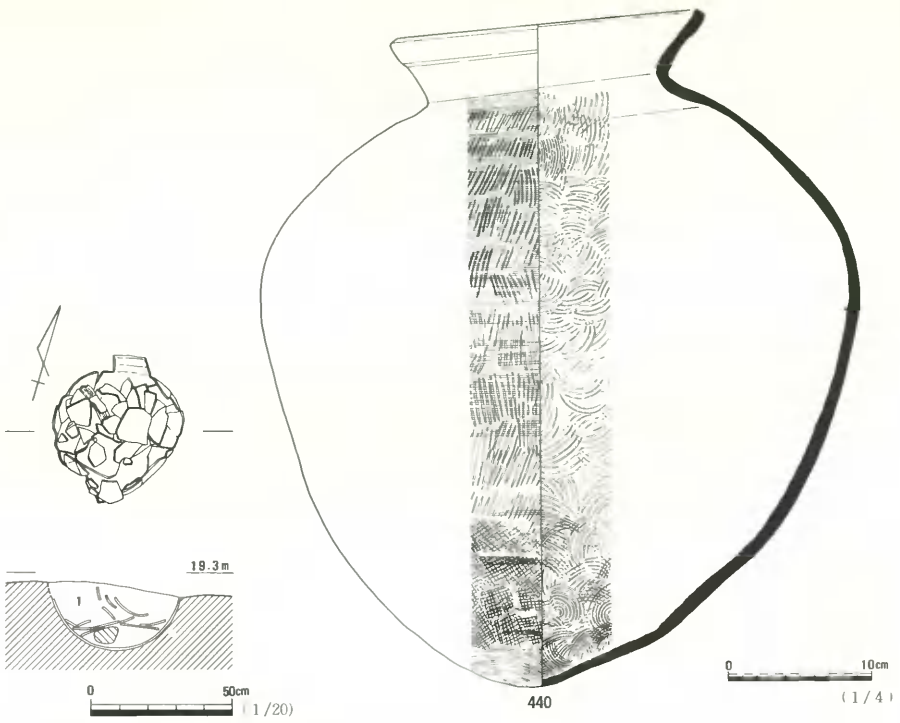
包含層掘り下げ中に検出したもので、掘り方は精査したが明らかにできなかった。

棺身の須恵器の甕**439**は、口縁部を欠く以外はほぼ完形であった。本来は口縁部を上にして埋められていたものと考えられる。

埋土中にガラス小玉**Ｏ９**を検出した。このガラス小玉は、甕の底面からかなり浮いた状況で甕の破片と共に検出された。

時期は、甕胴部のみで判別しにくいが、後述する墓８とほぼ同時期の７世紀前半であると考えられる。　　（氏平）

墓　8



1　暗灰褐色粘質土（焼土・炭化物・礫含む）

遺構名	位置(調査区)	種類	掘り方		掘り方規模(cm)			開口方向	時期	備考
			平面形	断面形	長さ	幅	深さ			
墓8	MBOX3	土器棺墓	不明	不明	不明	不明	不明	北	古墳後半末葉	

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
440	須恵器	大甕	21.2		46.4	良好	(内・断)灰N6 (外)明オリーブ灰2.5Y7/1	砂礫	歪み有り・体部外面タタキメ後カキメ

墓8は、ＭＢＯＸ３区の北側、墓７の東方の約10ｍに位置する。

包含層掘り下げ中に検出され、掘り方は精査したにも関わらず明確ではない。

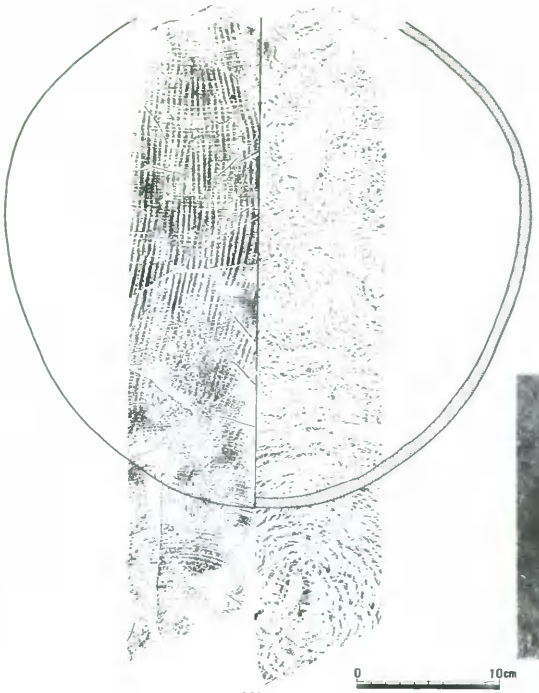
棺に用いられた須恵器の甕は口縁部を北方向に向け、寝かされた状態で据えられており、胴部片が中へ落ち込んだ状況で検出された。

埋土中からは鉄滓が１点見つかったが、副葬されたものではなく混入と判断される。

甕はほぼ完形に復元できるもので、田辺昭三編年のＴＫ217型式に相当すると考えられる。

（氏平）

墓　9



(1/4)

遺構名	位置(調査区)	種類	掘り方		掘り方規模(cm)			開口方向	時期	備考
			平面形	断面形	長さ	幅	深さ			
墓9	MBOX1	土器棺墓	不明	不明	不明	不明	不明	不明	古墳後半末葉	台石あり

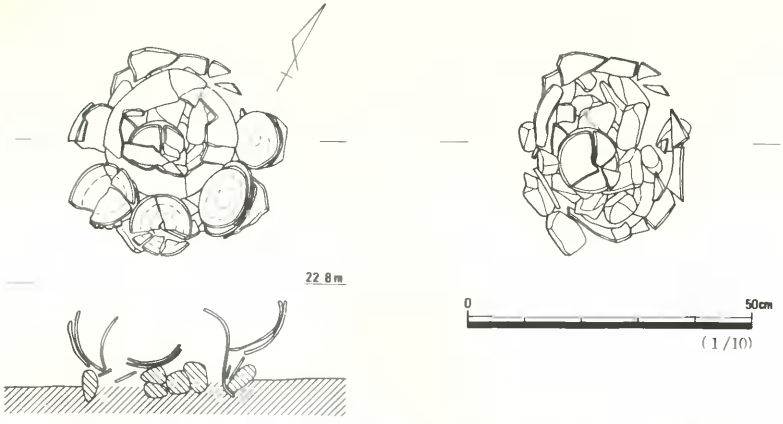
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
441	須恵器 (土師質B)	甕			(34.8)	やや不良	(内)橙7.5YR6/6 (外)橙7.5YR7/6 (断)橙7.5YR6/6	細砂	外面平行タタキメ・内面青海波アテ具痕

墓9は、ＭＢＯＸ１区の中央部に位置する。検出面の海抜高はおよそ25.0ｍで、黒褐色を呈する包含層掘り下げ中に検出した。墓壙の掘り方は、精査したが検出できなかった。

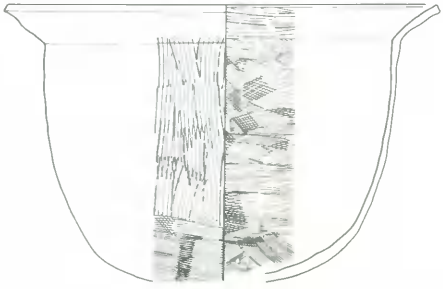
棺体をなす須恵器の甕**441**は口部を上にして埋められていたものと考えられる。口縁部は検出時には見つかっておらず、打ち欠いて使用されたものと判断される。打ち欠いた口部径は約18cmを測る。棺体の甕は、角礫５個を輪状に配した台石の上に据えられており、棺体の安定を図ったものと推測される。

遺構の時期は、甕の形態から古墳時代後期のうちでも墓７や８のものより若干古く考えることができるかもしれない。　　(氏平)

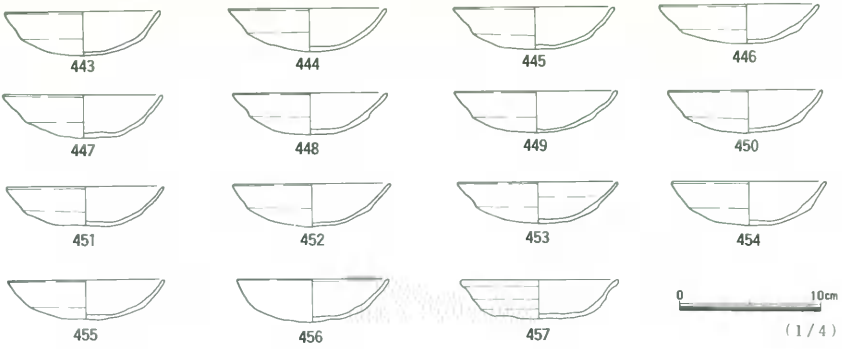
墓 10



遺構名	位置(調査区)	種別	掘り方		掘り方規模(cm)			土器	時期	備考
			平面形	断面形	長さ	幅	深さ			
墓10	MM4	大型墓?	不明	不明	不明	不明	不明	○	古代(平安)	土器のみ・掘り方不明



掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
442	土師器	甕	31.4			良好	にぶい黄2.5Y6/3	砂礫	胴外面および口縁部内面横いハケメ・口縁端部は面を形成



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
443	土師器	皿	10.8		3.2	良好	浅黄橙10YR8/4	精良	底部やや丸みを有す
444	土師器	皿	11.1		3.1	良好	淡黄2.5Y8/3	砂礫	底部やや丸みを有す
445	土師器	皿	11.3		3.0	良好	橙7.5YR7/6	砂礫	底部やや丸みを有す
446	土師器	皿	11.2		2.8	良好	橙7.5YR7/6	砂礫	底部やや丸みを有す
447	土師器	皿	11.2		3.2	良好	橙5YR6/6	砂礫	底部やや丸みを有す
448	土師器	皿	10.8		3.0	良好	橙7.5YR7/6	精良	底部やや丸みを有す
449	土師器	皿	11.4		3.0	良好	橙5YR7/8	砂礫	底部やや丸みを有す
450	土師器	皿	10.9		3.1	良好	にぶい橙7.5YR7/4	精良	底部やや丸みを有す
451	土師器	皿	11.0		2.9	良好	浅黄橙10YR8/4	精良	底部やや丸みを有す
452	土師器	皿	11.0		3.1	良好	橙7.5YR7/6	微砂	底部やや丸みを有す・黒斑
453	土師器	皿	11.2		3.0	良好	橙7.5YR7/6	微砂	底部やや丸みを有す
454	土師器	皿	10.8		3.2	良好	橙7.5YR7/6	微砂	底部やや丸みを有す
455	土師器	皿	11.0		2.8	良好	浅黄橙10YR8/4	細砂	底部やや丸みを有す
456	土師器	皿	11.3		3.1	良好	にぶい黄橙10YR7/4	細砂	底部やや丸みを有す
457	土師器	皿	11.0		2.8	良好	浅黄橙10YR8/4	細砂	やや平底ぎみ・体部にナデによる強いくぼみあり

墓10は、ＭＭ４区に位置し、建物53のＰ３と重複している。

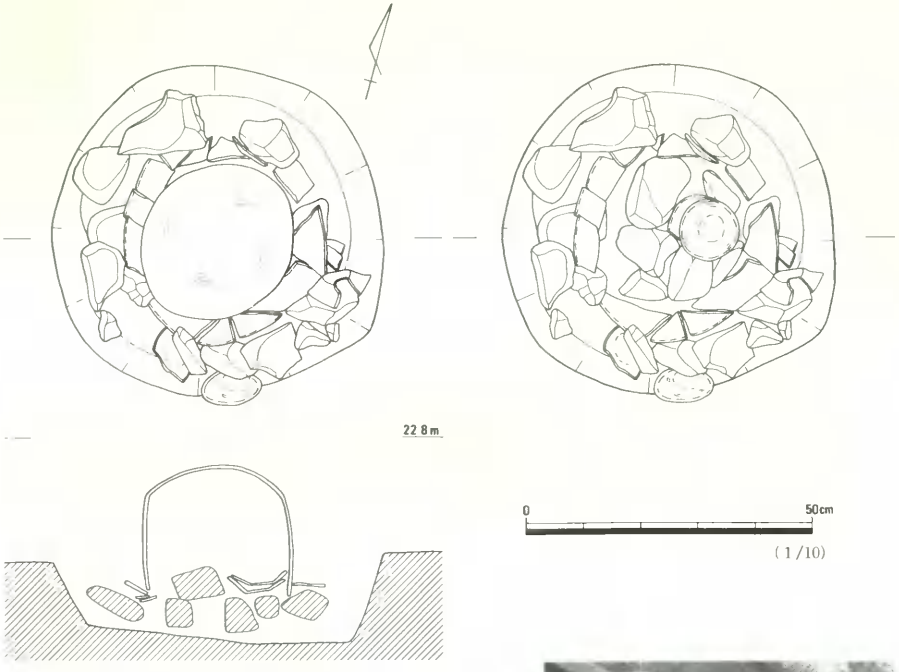
掘り方は不明で、建物53の柱穴掘り方内の南よりに検出された。検出時においては、**442**の甕が伏せた状態で認められたが掘り方は認められず、さらに掘り下げて甕の周囲に皿が重ねた状態で検出された。したがって、このような検出状態になって建物53のＰ３の掘り方を確認したのである。

甕は、Ｐ３の掘り方上面に拳大の円礫を敷き、その中央に皿を２枚重ねておいている。さらに、その甕の周囲に皿を重ねて認められた。検出時においては、外側にたおれた状態であったが本来は甕に立て掛けておかれていたものと思考されるのである。

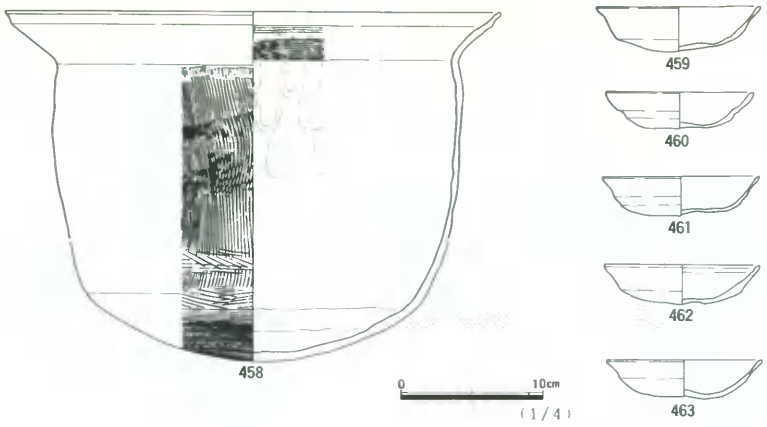
出土遺物は、**442**の甕と**443**～**457**の皿である。**442**は、内外面とも粗いハケメの調整が認められる。皿は、いずれも底部は丸味を有し、口縁は外方へひろがる。**443**～**445**は、底部から口縁への移行は屈曲するが**456**は変化なく、**457**は平底風の底部から口縁部近くで屈曲させている。

時期を判断するには、建物53も考慮しなければならないであろう。さきに述べたように建物53のＰ３の上にあることが認められている。Ｐ３の埋土は、暗茶褐色土の単層であり、柱痕はなく意識的に埋められた可能性が考えられる。このことから、建物の撤去後に設けられたことが思考される。そして、これらの土器から平安時代の中に入るものと考えるのである。　（下澤）

墓 11



遺構名	位置(調査区)	種類	掘り方		掘り方規模(cm)			土器	時期	備考
			平面形	断面形	長さ	幅	深さ			
墓11	MM4	火葬墓?	円	逆台	58	58	16	○	古代(平安)	覺を伏せる



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
458	土師器	甕	34.8		24.8	良好	にぶい黄橙10YR7/4	細砂	胴外面および口縁部内面粗いハケメ・口縁端部は丸く納める・底部内面に接合痕明瞭
459	土師器	皿	11.5		3.1	良好	にぶい橙7.5YR7/4	微砂	底部指オサエ・金雲母
460	土師器	皿	5.4		2.7	良好	明赤褐5YR5/6	微砂	強いヨコナデ・底部はやや平担
461	土師器	皿	11.0		2.8	良好	にぶい橙5YR7/4	微砂	底部押圧痕
462	土師器	皿	10.9		2.9	良好	浅黄橙10YR8/3	微砂	底部押圧痕
463	土師器	皿	10.9		2.7	良好	にぶい橙7.5YR7/4	細砂	底部やや丸みを帯びる・ヘラ押圧痕

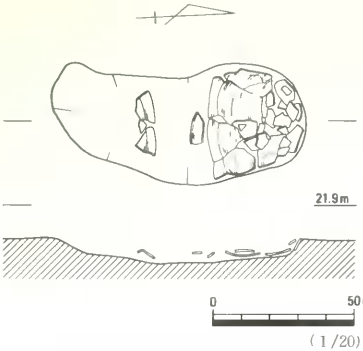
墓11は、ＭＭ４区に位置し、墓10の東にある。

規模は、径58cmで断面形態は逆台形を示す。円形の掘り方の中に甕を伏せた状態で検出され、甕の周囲には墓10よりも一回り大きめの礫そして皿が認められた。

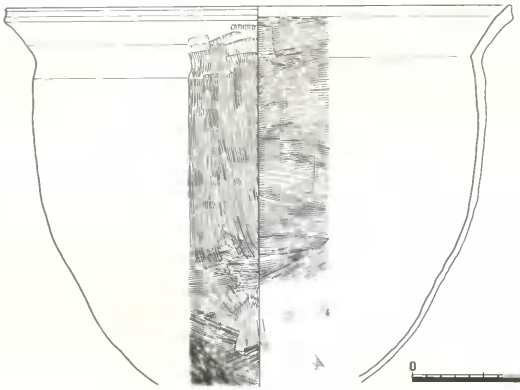
墓の内容は、掘り方の底面に拳大より一回り大きめの礫を据え、その上に皿を２枚重ねて置いた後に甕をかぶせるように伏せた状態であることが認められた。甕の口縁部は、伏せたために破損し頸部がめりこんだようになっていた。甕の内部は、底部が完全であったため、土の流入はなく当時のままの状態であったと思われる。なかは、全体的にやや煤ぽい状態を呈していた。

出土遺物は、**458**の甕と**459**～**463**の皿である。**458**は、外方に広がる頸部から口縁部は、強いナデにより一段屈曲させている。胴部は、ほぼ寸胴であるが下半で平底ぎみに底部へと移行する。内外面とも粗いハケによる調整が認められる。**459**と**460**が甕の中より出土している。両者とも平底ぎみで体部に強いヨコナデによる凹部を形成させている。**461**～**463**は、甕の外側から出土したものである。他に１点同様な皿が出土している。底部は、平底ぎみのもの**461**と丸底風の**462**、**463**があり、底部から体部への移行は**461**と**462**が屈曲をもっている。時期は、さきの墓10との関係において極めて近い内容を示している。皿は、両者ともほぼ同じ内容を示すが、甕においては異なる。いずれにしても、このような特殊な遺構は密接な関連を有していることが考えられる。したがって、平安時代の中で納まるものと思考される。　　（下澤）

墓 12



(1/20)



464

(1/4)

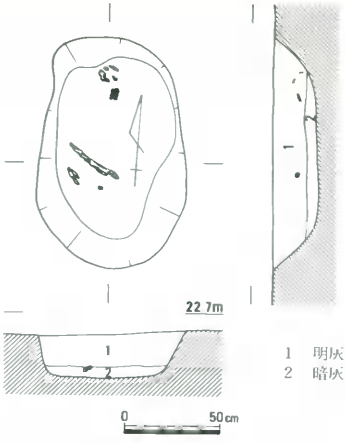
遺構名	位置(調査区)	種類	掘り方		掘り方規模(cm)			土器	時期	備考
			平面形	断面形	長さ	幅	深さ			
墓12	MM4	土器棺墓?	不整楕円	皿	90	42	[illegible]		古代(平安後半)	

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
464	土師器	甕	[illegible]			良好	[illegible]黄橙10YR7/4	微砂	内外面粗いハケメ・口縁部は肥厚し外面を有す

墓12は、MM4区に位置する。墓壙の規模は長さ(南北)90cm、幅30～40cmの楕円形を呈する。深さは、検出面から5～8cmあり。底部での標高は21.02mである。土壙北側部分から土師器甕**464**が出土している。

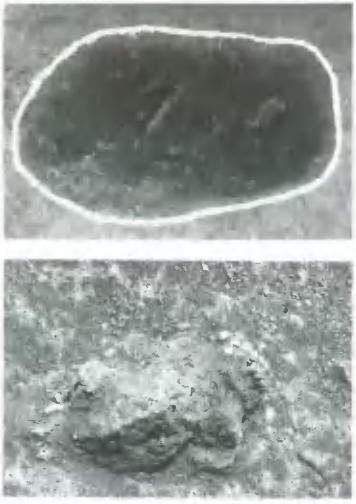
甕内より焼いた骨粉状のものが認められ、火葬墓と考えた。詳細な時期は不明であるが、平安時代後半頃と考えられる。　(伊藤)

墓　13



（１/30）

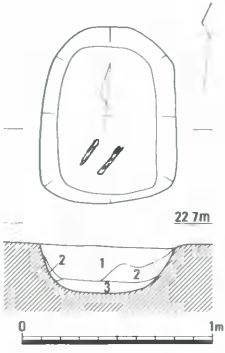
1　明灰褐色土
2　暗灰褐色土



遺構名	位置（調査区）	種類	掘り方		掘り方規模（cm）			土器	時期	備考
			平面形	断面形	長さ	幅	深さ			
墓13	ＭＭ４	土壙墓	楕円	皿状	122	79	25	×	古代～中世	骨・歯あり

墓13は、ＭＭ４にあり、長さ122cm、幅79cm、検出面よりの深さ25cmを測り、底部の標高は22.36ｍである。土壙内の北側から歯と長さ30cmほどの骨が検出され、屈葬されたものと推察される。時期は不詳であるが、古代から中世と考えられる。　（伊藤）

墓　14



（１/30）

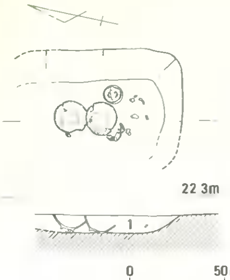
1　明灰褐色砂質土
2　灰黄褐色粘質土
3　暗灰色粘質土

遺構名	位置（調査区）	種類	掘り方		掘り方規模（cm）			土器	時期	備考
			平面形	断面形	長さ	幅	深さ			
墓14	ＭＭ４	土壙墓	楕円	楕	94	72	20	×	古代～中世	骨あり

墓14は、ＭＭ４区に位置し、墓13の西にある。

規模は、94×72cmの楕円形を呈している。底部近くで残存状況が悪かったものの骨の一部が認められたことから墓と判断した。木棺の存在を想定させる土壙の掘り方および埋土の堆積状況ではなく、土壙墓と思われる。時期は不詳であるが古代から中世と考えている。　（下澤）

墓　15



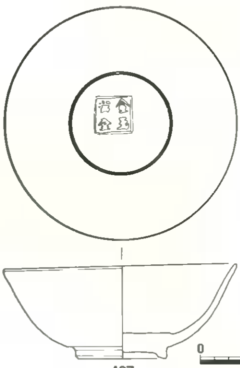
(１/30)

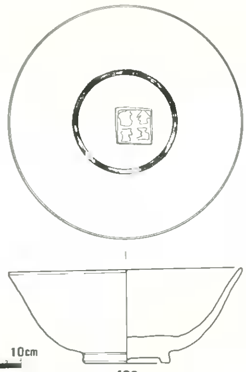
1　暗黒褐色粘土

遺構名	位置(調査区)	種類	掘り方		掘り方規模(cm)			土器	時期	備考
			平面形	断面形	長さ	幅	深さ			
墓15	MM１	土壙墓	(長方)	椀	不明	不明	10	[illegible]	平安末	骨あり

465

466


467


468

(１/４)

M18　(１/２)

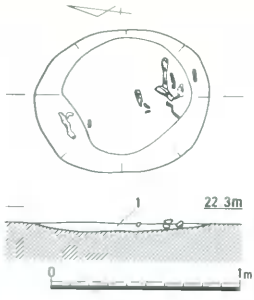
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
465	土師器	皿	8.0	6.8	1.1	良好	浅黄橙10YR8/3	微砂	スス付着
466	土師器	皿	7.7	6.6	1.3	良好	浅黄橙10YR8/3	砂礫	スス付着
467	青磁	碗	16.5	6.5	6.6	良好	(釉)オリーブ5Y5/4 (地)灰白2.5Y8/2	精良	「金玉満堂」印・龍泉窯
468	青磁	碗	16.4	6.2	6.7	良好	(釉)灰オリーブ7.5Y6/2 (地)[illegible]	精良	「金玉満堂」印・龍泉窯

掲載番号	器種	材質	法量				備考
			最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	
M18	刀子	鉄	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	木質残え

墓15は、ＭＭ１区にあり、規模は不明であるが、長さ(南北)70cm、幅50cm程が残存している。南北に長い長方形になる墓壙と考えられる。深さは、検出面より10cm残存している。南東隅から土師器小皿２点**465**・**466**、内面見込みに「金玉満堂」と刻印された青磁碗２点**467**・**468**と刀子の柄部と考えられる鉄器**M18**と骨片などが出土している。これらの出土遺物からこの土壙墓の時期は平安時代末頃と考えられる。

(伊藤)

墓　16



1　灰黄褐色粘質土

（1/30）

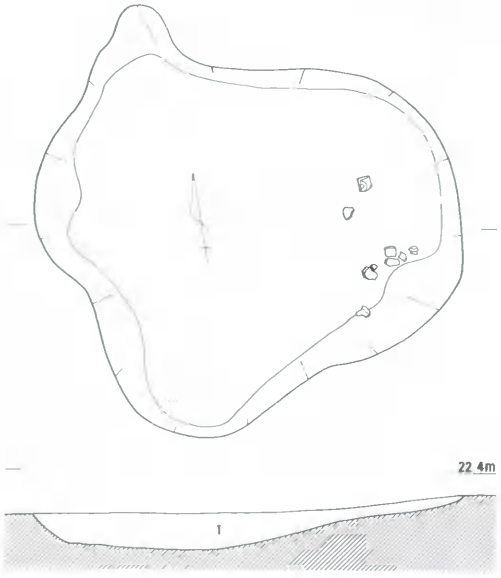
遺構名	位置（調査区）	時期	掘り方		掘り方規模（cm）			土器	時期	備考
			平面形	断面形	長さ	幅	深さ			
墓16	ＭＭ１	土壙墓	楕円	皿	93	76	6	×	中世	骨あり

墓16は、ＭＭ１区に位置し、墓15の北側にある。規模は93×76cmを測り、平面形態は楕円形を呈する。深さは６cmほどしかなく削平を受けたと思われる。土壙内には、骨が検出されている。

時期は、出土遺物が伴わないため判断しがたいが、埋土から中世に含まれるものと思考される。

（下澤）

墓　17



1　黒褐色粘質土

（1/30）

墓17は、ＭＭ１区に位置し、墓18の東に接する。

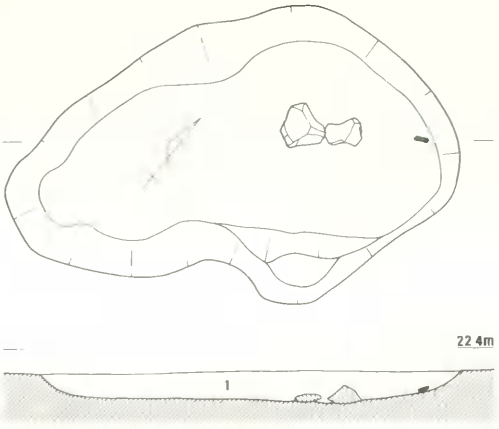
規模は、230×227cmで平面形態は不整形を呈する。底は、東から西へ深くなり平坦となっていない。

骨片が少量出土したことからここでは墓として扱ったが、明確に判断できる出土遺物および遺構の内容からしても墓というよりも土壙として扱うほうが妥当であろう。

出土遺物は、須恵器片が検出されていることから古墳時代の後期に属するものと想定される。　（下澤）

遺構名	位置（調査区）	時期	掘り方		掘り方規模（cm）			土器	時期	備考
			平面形	断面形	長さ	幅	深さ			
墓17	ＭＭ１	土壙墓	不整形	皿	[illegible]	[illegible]	18		古墳後期	

墓　18



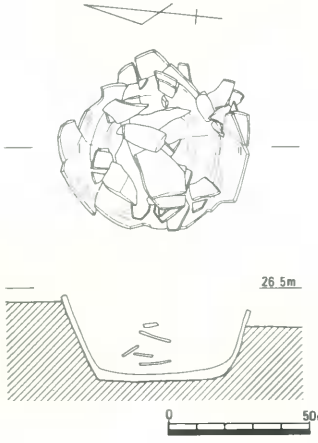
(１/30)

遺構名	位置(調査区)	種類	掘り方		掘り方規模(cm)			土器	時期	備考
			平面形	断面形	長さ	幅	深さ			
墓18	ＭＭ１	土壙墓	楕円	Ⅲ	241	158	19		古墳後半	

墓18は、ＭＭ１区に位置し、墓17の西に接する。

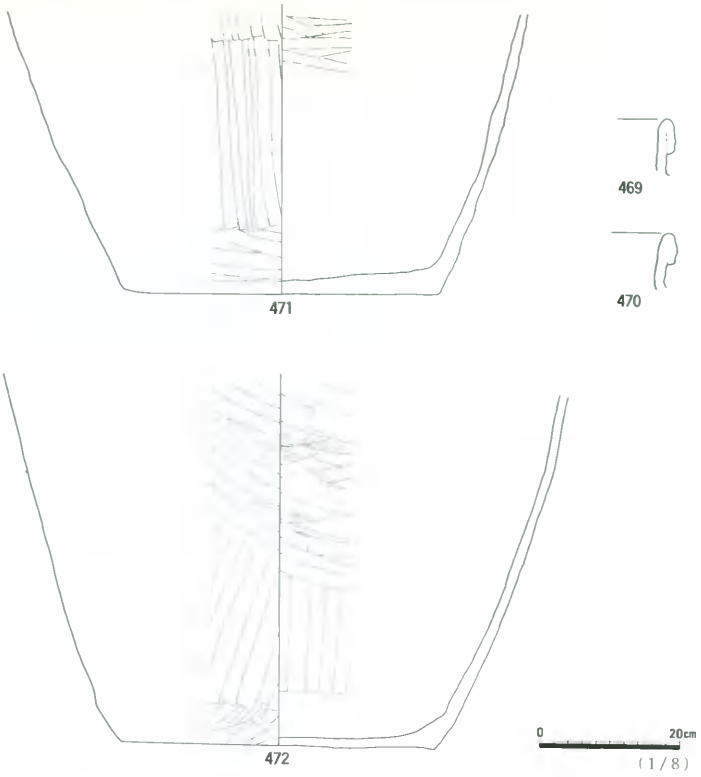
規模は241×158cmを測り、平面形態は楕円形を呈する。深さは19cmを測り、底面は皿形を示し平坦となる。北東よりに礫が２個検出され、さらに壁寄りに骨が見い出だされている。人骨かどうかについては、遺存状態が極めた悪く不明である。時期は、須恵器片から古墳時代後期と考える。（下澤）

墓　19



(１/20)

遺構名	位置(調査区)	種類	掘り方		掘り方規模(cm)			開口方向	時期	備考
			平面形	断面形	長さ	幅	深さ			
墓19	ＭＢＯ１	土器棺墓	不明	不明	不明	不明	不明			棺：縄文後



掲載番号	種別	器種	広量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
469	備前焼	大甕		44.4	(40.0)	良好	黒褐5YR2/1	精良	471と同一個体か？
470	備前焼	大甕		44.0	(52.0)	良好	赤黒2.5YR2/1	砂礫	472と同一個体か？
471	備前焼	大甕				良好	黒褐5YR2/1	精良	体部板状工具による調整
472	備前焼	大甕				良好	赤黒2.5YR2/1	砂礫	体部板状工具による調整

墓19は、ＭＢＯＸ１区の中央部付近で検出した。包含層除去前に先行して掘削したトレンチで検出した遺構である。掘り方は検出できなかった。

図で出土状況を表したものの他にもう１基が近接して存在しており、トレンチ掘削の際に誤って除去してしまったため出土状況を明確にできなかった。このため、取り上げたのは２基分である。

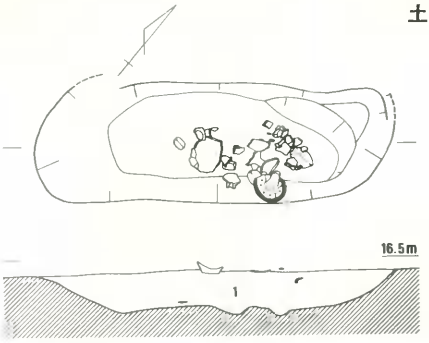
遺物はいずれも備前焼の大甕で、時期は17世紀以降のものと考えられる。

なお、この箇所は調査前ぶどう畑として利用されており、墓19は畑に伴う用水だめなどの用途として埋められたものではないかとも推測される。　（氏平）

(9) 土　　壙

機能を限定できないような土壙をここで記述する。斎富遺跡では多くの土壙が検出されたが、出土遺物がなく、また形状が不定なものには割愛したものもある。ここでは、78基について個別説明をすることとし、割愛したものについては全体図のみに掲載することとした。　　(大橋)

土壙1

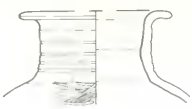


1　暗灰茶褐色粘質土
(礫・炭含む)

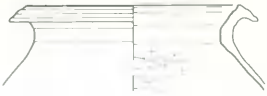
0　1m

(1/30)

遺構名	位置(調査区)	規模(cm)			平面形	断面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
土壙1	KM5	192	(64)	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	

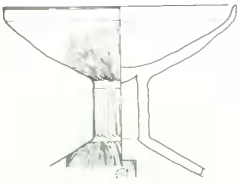


473

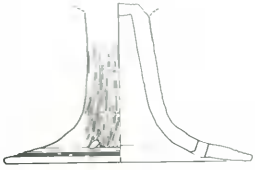


474

475



476



477

478

0　10cm

(1/4)

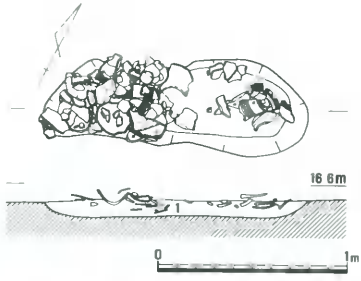
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
473	弥生土器	壺	(8.8)			良好	橙5YR6/6	微砂	口縁部水平方向に拡張・頸部沈線4条
474	弥生土器	甕	15[illegible]			良好	にぶい黄褐10YR5/4	細砂	磨滅著しい・口縁部外面ヨコナデ
475	弥生土器	甕	(13.8)			良好	灰白10YR8/2	微砂	口縁部擬凹線・胴外面ヘラミガキ?
476	弥生土器	高杯	(16.5)			良好	橙5YR6/6	微砂	口縁端部ヨコナデによる凹みあり・外面放射状のヘラミガキ
477	弥生土器	高杯		脚12[illegible]		良好	浅黄2.5Y7/3	微砂	脚端部擬凹線・円形透かし孔8個
478	弥生土器	高杯				良好	にぶい橙[illegible]5YR[illegible]	細砂	脚[illegible]部[illegible]条線・[illegible]円盤充塡

土壙１は、ＫＭ５区で検出され、竪穴住居６の南側に位置する。検出面で長軸約190cm、短軸約60cmを測る平面長楕円形を呈するものである。断面は浅い皿状である。

出土遺物は、比較的多くの弥生土器があり、そのうち**473**～**478**を図示した。**473**は壺、**474**～**475**が甕、**476**～**478**は高杯であり、タイプの異なったものを特に図示した。

これらの出土遺物から、この土壙の時期は弥生時代後期前葉と判断した。　　（大橋）

土壙２

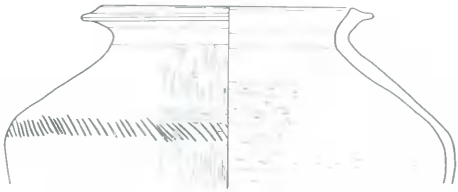


（1/30）

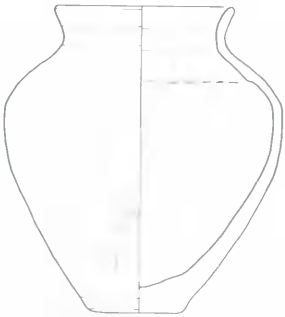
1　淡茶褐色粘質土（礫含む）

遺構名	位置/調査区	規模（cm）			平面形	断面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
土壙２	ＫＭ５	[illegible]	[illegible]	[illegible]	長楕円	皿	○	弥生後期前葉	

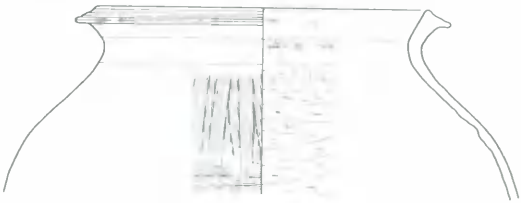
479



481



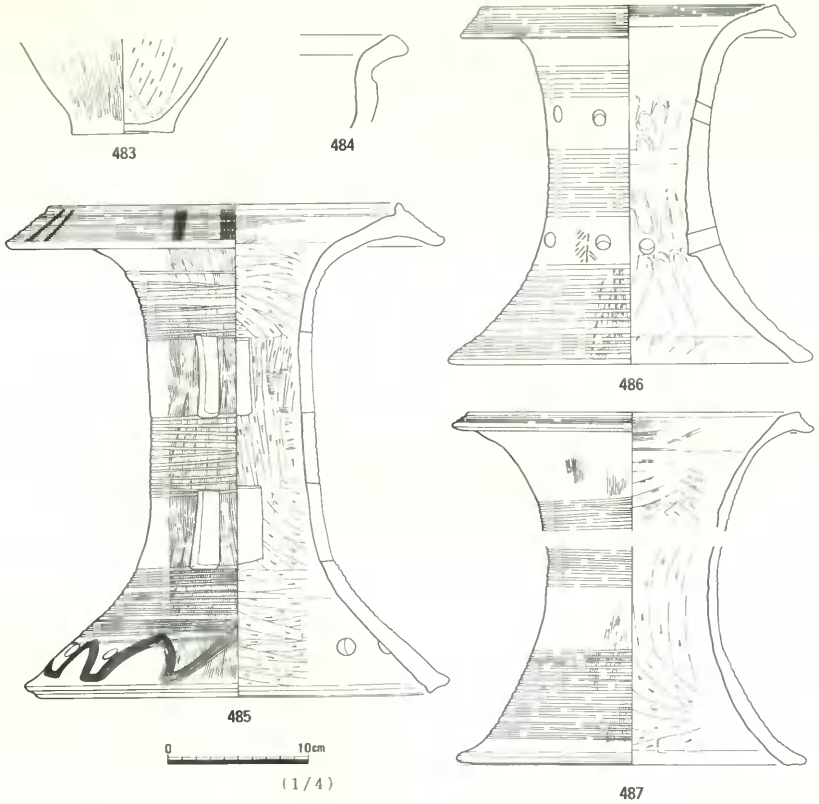
480



482

（1/4）

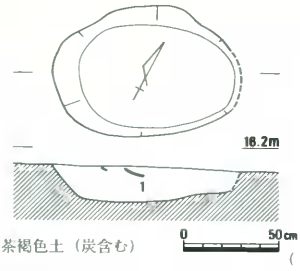
掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
479	弥生土器	壺	21.1			良好	橙5YR6/[illegible]	砂礫	口縁部は水平方向に[illegible]・磨滅著[illegible]
480	弥生土器	壺	12.[illegible]		21.8	良好	橙5Y6/6	砂礫	底部、胴部に黒斑
481	弥生土器	壺	[illegible]		[illegible]	良好	明赤褐5YR5/8	砂礫	口縁部は斜め下方に肥厚させ[illegible]面を形成・胴部に連続刺突文
482	弥生土器	甕	[illegible]3.4			良好	明赤褐5YR5/[illegible]	砂礫	口縁部ヨコナ[illegible]・胴上半[illegible]・肩部は[illegible]



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
483	弥生土器	(底部)		7.1	6.7	良好	にぶい黄橙10YR7/4	砂礫	二次的に火を受ける
484	弥生土器	鉢				良好	明赤褐5YR5/6	砂礫	口縁部はやや丸みを帯びる・内面はヘラミガキ
485	弥生土器	器台	24.7	27.7	35.0	良好	明赤褐2.5YR5/8	砂礫	口縁部外面櫛描文・脚部櫛描波状文・円形透かし孔2個一対4単位・筒部方形透かし孔4個2段で沈線で飾られる・赤色顔料
486	弥生土器	器台	20.6	23.2	25.5	良好	橙5YR6/8	砂礫	口縁部斜め下方に肥厚させ外面、上面に凹線文・筒部に粗ミガキの線刻・器壁磨滅著しい
487	弥生土器	器台	(23.1)	22.3		良好	明赤褐5YR5/6	砂礫	接点なしの同一個体・筒部から脚部にかけて凹線文

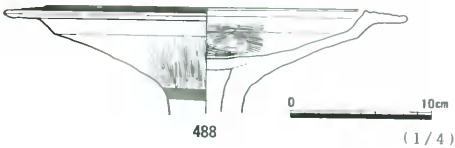
土壙2は、土壙1の東方に位置し、土壙7の北東に隣接する。この土壙も土壙1と同様長楕円形を呈し、長軸方向で約140cm、短軸方向で約50cmを測った。深さは現状で約10cmほどと浅い。この土壙からは多量の弥生土器が出土しており、このうち**479**～**487**を図示したが、器台は3個体ある。いずれもほぼ全体が復元されるものである。**485**は器高35cmを測り、直立した円筒を呈する筒部を持つ。口縁部外面はクシガキによる縦位の直線文が施され、脚裾部にもクシによるややいびつな波状紋が描かれ2個一対の円形透かし穴が4単位配されている。筒部は2段の方形透かし穴と螺旋状の沈線が施され、器壁の外面には赤色顔料が認められた。**486**・**487**の器台は筒部から脚裾部にかけて凹線文で加飾され、特に**486**には受け部内面にも凹線が施されている。これら3個体を比較するとプロポーション、および施文の状況の点で**485**に新しい様相がうかがえる。これらの出土遺物からこの土壙の時期は弥生時代後期前葉と判断される。　　(大橋)

土壙３



1　暗茶褐色土（炭含む）

（１/30）



488

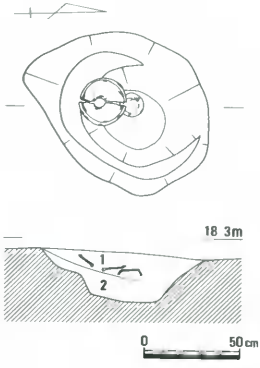
（１/４）

遺構名	位置(調査区)	規模(cm)			平面形	断面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
土壙3	ＫＭ[illegible]	(111)	[illegible]	30	楕円	椀	△	弥生後期前葉	

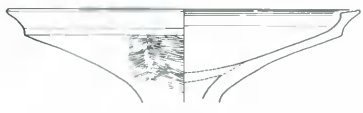
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
488	弥生土器	高杯	(22.6)			良好	明赤褐2.5YR5[illegible]	砂礫	口縁部水平方向に大きく拡張し、上面に凹線文

土壙３は、竪穴住居５の床面下で確認された。長さ約110cm、幅約70cmを測り、深さは20cm残存していた。出土した**488**は口縁部を水平に大きく拡張する高杯である。これからこの土壙の時期は弥生時代後期前葉段階で竪穴住居５より古く設定される。　（大橋）

土壙４



（１/30）



489

490

（１/４）

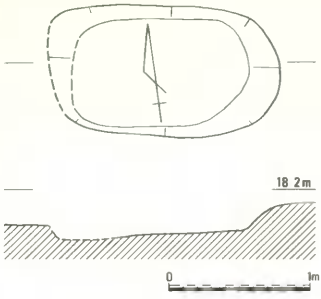
1　暗褐色粘質土（微砂・焼土・炭含む）
2　灰褐色粘質土（炭含む）

遺構名	位置(調査区)	規模(cm)			平面形	断面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
土壙4	ＫＭ３	104	79	27	楕円	逆台		弥生後期前葉	

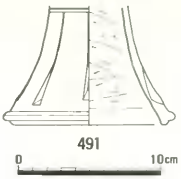
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
489	弥生土器	高杯	24.9			良好	橙5YR6/8	砂礫	器壁磨滅・口唇部橫凹線
490	弥生土器	鉢	12.3	8.0	3.8	良好	にぶい橙5YR7/4	細砂	粗雑な作り・内外面ユビオサエ

土壙４は、土壙３の北東約32ｍの位置に検出した。平面形は楕円形を呈するもので長さ104cm、幅79cmを測る。断面形を見ると南側は二段に掘られており、検出面からの深さは27cmを測る。**489**は口縁部が外に開きながら立ち上がり、端部は少し内傾する面を持つ。**490**は内外面ユビオサエの見られる鉢である。時期は弥生時代後期前葉と考えられる。　（井上）

土壙5



(1/40)



(1/4)

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙5	KM1	164		26	楕円	台	△	弥生後期前葉	

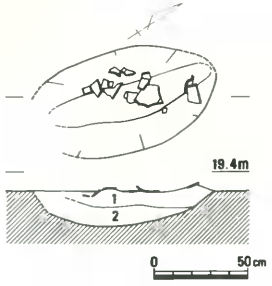
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
491	弥生土器	脚				良好	浅黄橙	微砂	

土壙5は、KM1区に位置し、土壙62と重複してある。

規模は、164×92cm、深さ26cmを測り、平面形態は楕円形を呈する。西辺をピットおよび土壙62と重複し、出土遺物からこれらの遺構に切られていることが判断された。

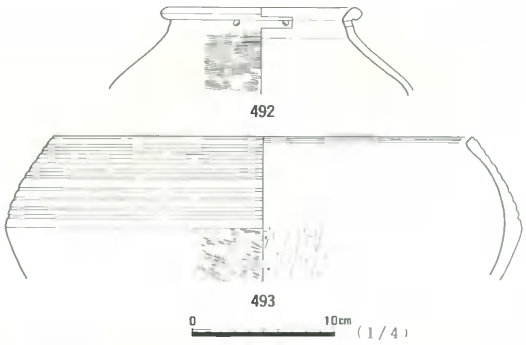
出土遺物は、**491**の脚部の破片であり、時期は弥生時代後期前葉を示している。　　(下澤)

土壙6



1　暗茶褐色土
2　暗茶灰色土

(1/30)



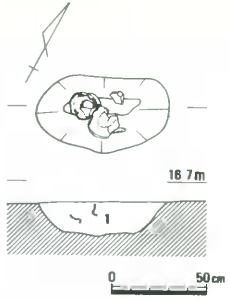
(1/4)

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙6	MBOX3	不明	55	18	楕円			弥生中期後葉	

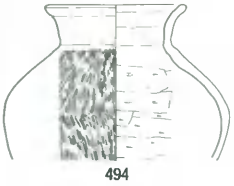
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
492	弥生土器	壺	(13.0)			良好	橙2.5YR6/8	微砂	玉縁状の口縁部の直下に2個一対の円形透かし孔
493	弥生土器	台付鉢	(9.4)			良好	橙7.5YR7/6	細砂	内傾する口縁部外面に沈線

土壙6は、土壙5の北北東約52mの位置に検出した。平面形は南北に長い楕円形を呈するものであるが、南端を他の遺構により切られているため全長は不明である。検出した幅55cm、深さ18cmを測る。**492**は弥生土器の壺である。口縁部が玉縁状に丸く造られ、口縁部直下に2個一対の小さな円孔が穿たれる。**493**は鉢で、体部からの屈曲は柔らかく、口縁部の外面に沈線が施されるものである。　　(井上)

土壙7

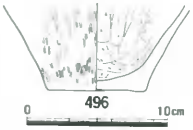


1　暗茶褐色土　　(1/30)



494

495



496

0　10cm

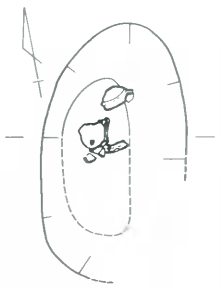
(1/4)

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙	KM5	[illegible]	42	19	楕円	鍋	[illegible]	弥生後期前葉～中葉	

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
494	弥生土器	壺	9.4			良好	にぶい黄橙10YR7/4	砂礫	胴外面は細かいヘラミガキ・口縁部は丸く納める
495	弥生土器	(底部)		6.9		良好	橙2.5YR6/8	砂礫	二次的に火を受ける
496	弥生土器	(底部)		6.5		良好	明赤褐5YR5/6	砂礫	スス付着

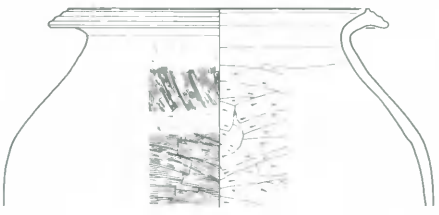
土壙7は土壙2の南西隣に位置する。現状で70×42×19cmの規模を持ち、平面は楕円形を呈する。図示したのは**494**～**496**であり、**494**と**496**は同一個体と思われる。土壙の時期は弥生時代後期前様～中葉と判断した。　　(大橋)

土壙8

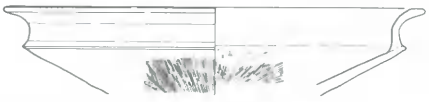


1　暗茶褐色土
2　茶褐色土

(1/30)



497



498

0　10cm

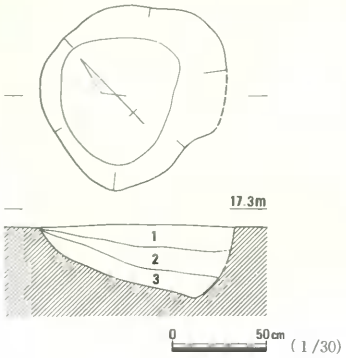
(1/4)

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙	KM5	[illegible]	[illegible]	11	楕円	[illegible]	[illegible]	弥生後期中葉	

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
497	弥生土器	甕	(21.3)			良好	浅黄橙10YR8/3	微砂	口縁部凹線・胴上半タテハケメ・肩部ヨコハケメ
498	弥生土器	高杯	(28.5)			良好	明赤褐2.5YR5/6	細砂	大きく外反する口縁部・杯部は細かいヘラミガキ・二次的に火を受ける

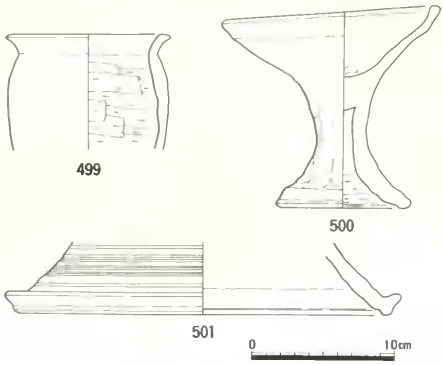
土壙8は、竪穴住居7の北隣で検出された。平面は長楕円形を呈する。一部分を溝11によって壊されている。出土遺物は少なく**497**の甕と**498**の高杯を図示した。これらからこの土壙の時期を弥生時代後期中葉と判断した。　(大橋)

土壙9



(1/30)

1　明灰褐色粘質微砂（土器片含む）
2　灰褐色粘質微砂（土器片含む）
3　暗灰褐色粘質土（礫含む）



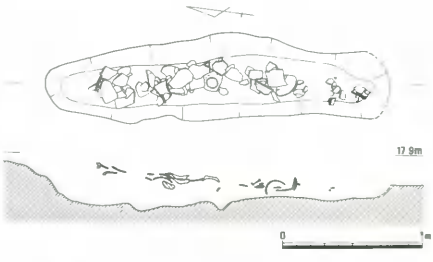
(1/4)

遺　構　名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙9	KM3	(101)	97	39	円	鍋		弥生後期前葉	

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
499	弥生土器	甕	(10.5)			良好	明赤褐5YR5/8	細砂	外面ヘラミガキ
500	弥生土器	高杯	14.6	8.5	14.0	良好	橙2.5YR6/8	砂礫	粗雑な作り・脚柱部板状工具による調整による面あり
501	弥生土器	器台		(25.4)		良好	橙5YR6/8	細砂	器壁磨滅・わずかに脚脈部に沈線が見える

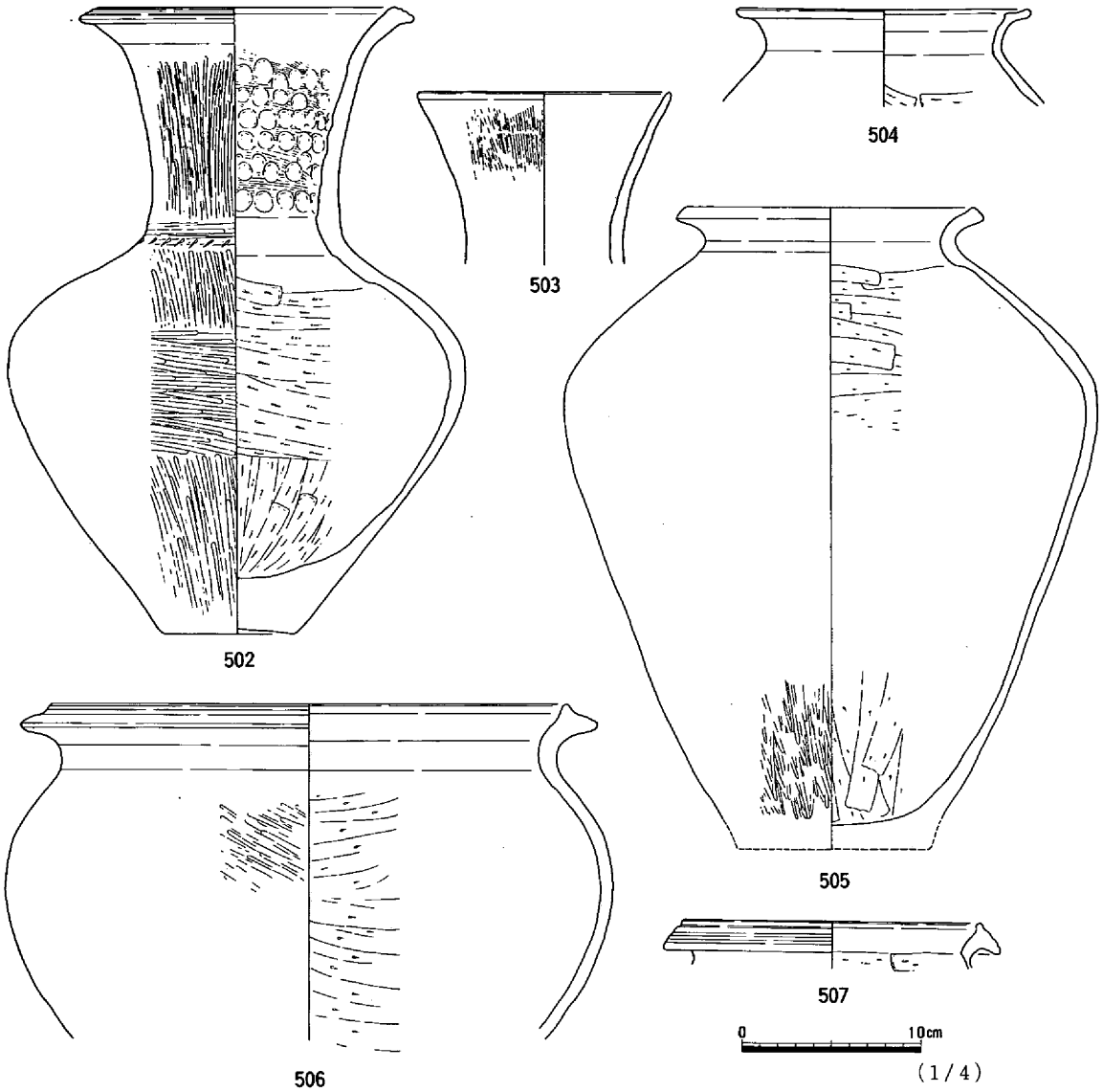
土壙9は、土壙8の北約9mの位置に検出した。平面形は歪つな円形を呈しており、長さ101cm、幅97cmを測る。底面は北西から南東に向けて深くなり、検出面からの深さは39cmを測る。出土遺物のうち**499**は甕である。内面は口縁部直下までヘラケズリが施される。**500**は高杯である。**501**は器台の脚部である。外面には沈線が見られる。土壙の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。　(井上)

土壙10



(1/40)

遺　構　名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙10	KM2	(246)	62		長楕円	皿	○	生後期中葉	



掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
502	弥生土器	壺	16.3	7.3	35.1	良好	にぶい黄橙10YR7/4	砂礫	頸部下端に刺突文・口縁部に沈線・底部器壁厚い
503	弥生土器	直口壺	13.8			良好	灰黄2.5Y7/2	細砂	外面細かいヘラミガキ
504	弥生土器	甕	16.1			良好	橙5YR7/6	砂礫	口縁部水平方向に拡張・二次的に火を受ける
505	弥生土器	甕	(16.0)			良好	明褐灰7.5YR7/2	砂礫	器壁磨滅
506	弥生土器	甕	28.5			良好	橙5YR7/6	砂礫	黒斑・口縁部外面に強いヨコナデ
507	弥生土器	甕	16.5			良好	にぶい黄橙10YR7/2	砂礫	口縁部擬凹線

土壙10は、ＫＭ２区の南西部に位置する。土壙の一部はたわみ部分と重複して検出された。土壙の規模は、長さ約250cm、最大幅62cm、最深部で31cmを測る。

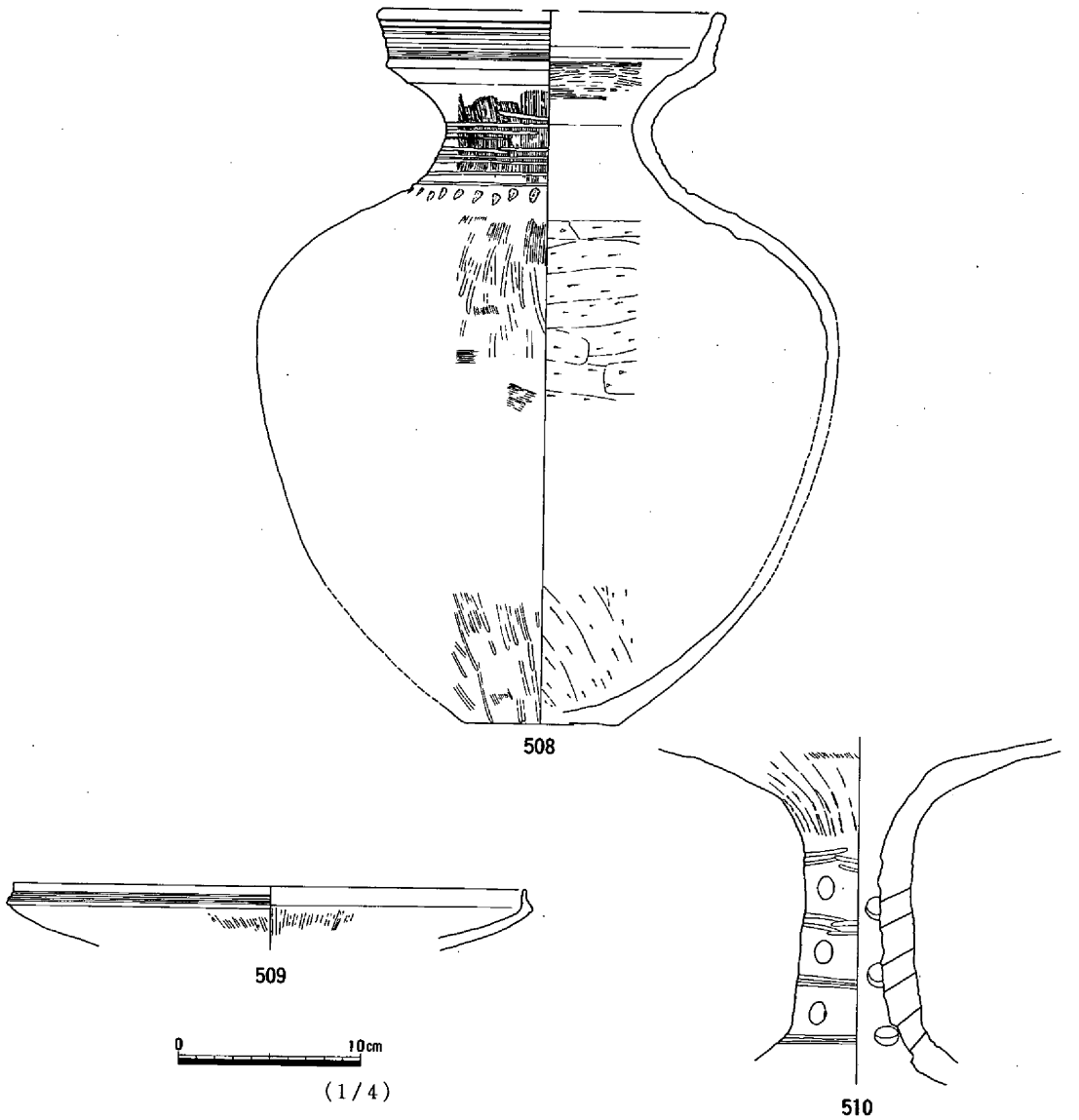
土壙はほぼ南北方向に長辺を持って掘られ、北側でやや尖りぎみに丸く終っている歪な長楕円形の平面形態を示し、底面には凹凸が認められた。

土壙内には多量の土器が投入され、**503**の直口壺のように細かい砂粒を含む胎土の土器も含まれる。他の土器は砂礫をかなり多く含むものである。出土遺物から弥生時代後期中葉の遺構と考えられる。

（二宮）

土壙11

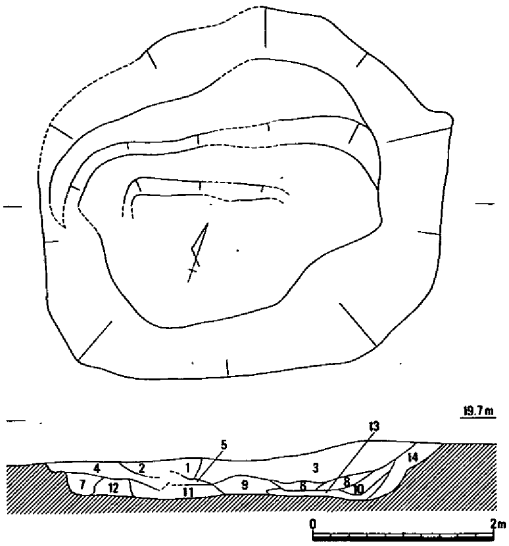
遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙11	MBOX3	不明	不明	44	不明	不明	○	弥生後期後葉	



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
508	弥生土器	壺	(18.0)			良好	灰黄2.5Y6/2	細砂	頸部下端に貝殻圧痕・接点なしの同一個体
509	弥生土器	高杯	(28.0)			良好	にぶい黄橙10YR7/3	微砂	屈曲して短く立ち上がる口縁部外面に凹線・杯外面はヘラミガキ
510	弥生土器	器台				良好	灰白10YR8/2	細砂	円形透かし孔3段5方向・高杯状の細い筒部・外面粗いヘラミガキ

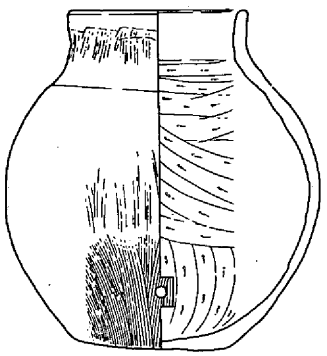
土壙11は、土壙10の東約28mの位置に検出した。調査区の南端部の側溝の掘り下げ中に検出したため土壙の形状や規模については不明である。検出面からの深さは44cmを測る。遺物は弥生土器が出土している。**508**は壺である。頸部は裾に向けて開き、その長さは短い。胴部内面は頸部の下端までヘラケズリが施される。**509**は高杯である。杯部の端部が上方に立ち上がるものである。**510**は高杯の脚部に似た器台である。土壙の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。　(井上)

土壙12

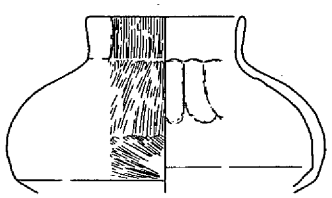


(1/80)

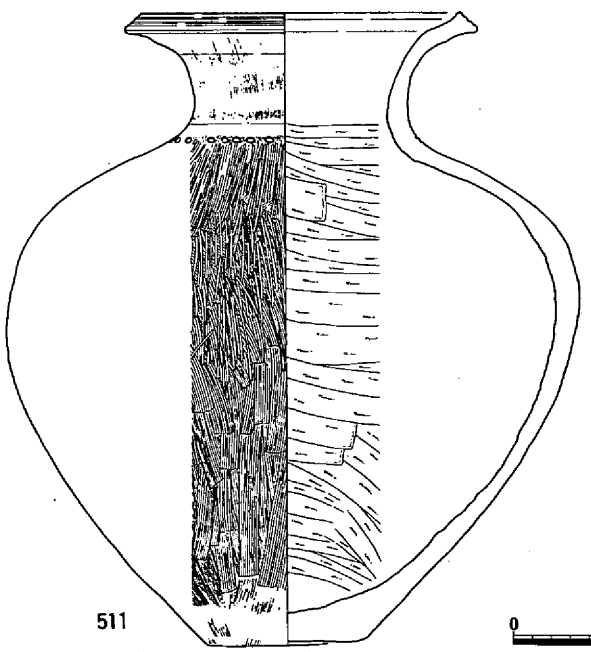
1　黄褐色土・暗灰褐色土ブロック混合
2　黄灰色粘質土
3　黄褐色粘質土
(灰褐色土・茶褐色土ブロック含む)
4　暗灰褐色粘質土（砂質強）
5　〃
6　淡黄褐色粘質土
7　黄褐色粘質土（灰褐色土ブロック含む）
8　淡黄灰色粘質土
9　〃　（8より粘質強）
10　淡灰褐色粘質土
11　淡黄褐色粘性砂質土
12　淡暗黄褐色粘質土
13　灰褐色粘質土
14　暗褐色粘質土（土器片多く・礫含む）



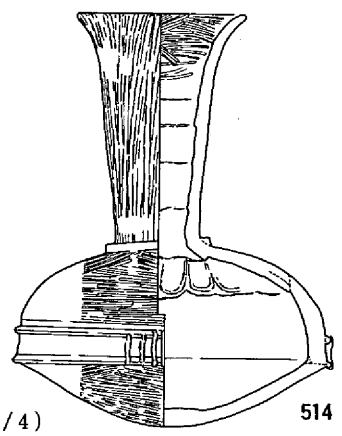
512



513



511

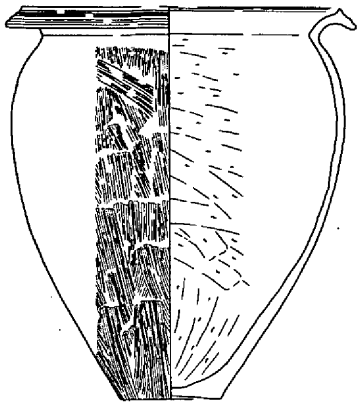


514

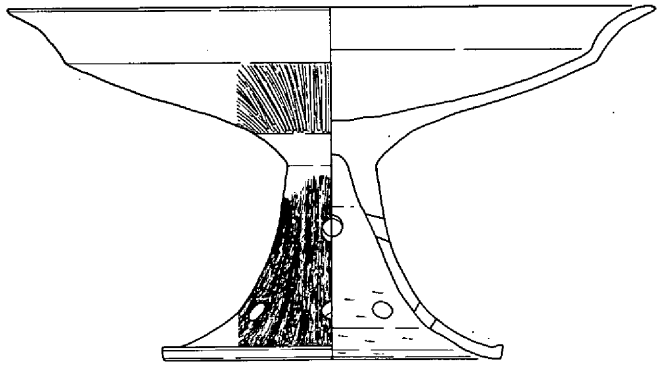
0　10cm　(1/4)

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙12	MM2	443	410	65	不整円	逆台	◎	弥生後期中葉	

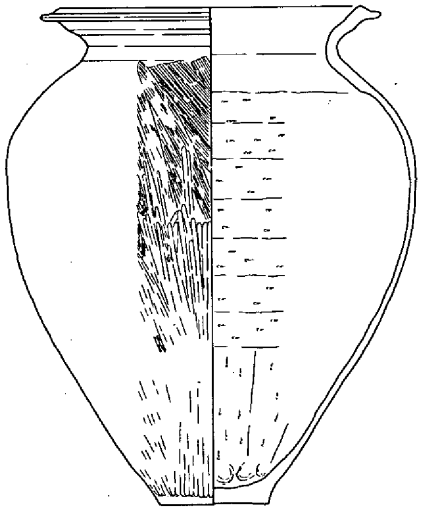
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
511	弥生土器	壺	(16.8)	(8.3)	33.8	良好	橙5YR6/6	砂礫	口縁部は肥厚させ外面に擬凹線・頸部下端に竹管文・胴下半・肩部に黒斑
512	弥生土器	短頸壺	9.2	8.2	18.2	良好	浅黄2.5Y7/3	砂礫	完形品・胴下半に焼成後穿孔・黒斑
513	弥生土器	直口壺	(8.2)			良好	明赤褐2.5YR5/6	微砂	胴屈曲部を下半に持ち底部へとなす
514	弥生土器	直口壺	8.8		22.1	良好	にぶい黄橙10YR7/3	砂礫	体部2条の突帯・棒状浮文あり・直立する頸部下端に突帯・内面に粘土接合痕明瞭



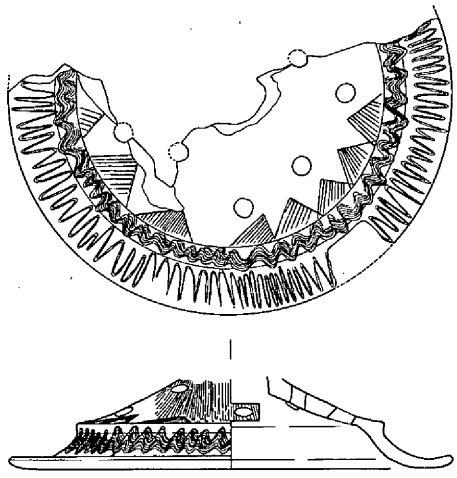
515



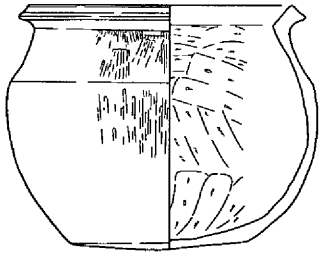
517



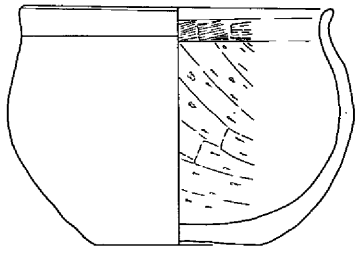
516



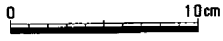
518



519

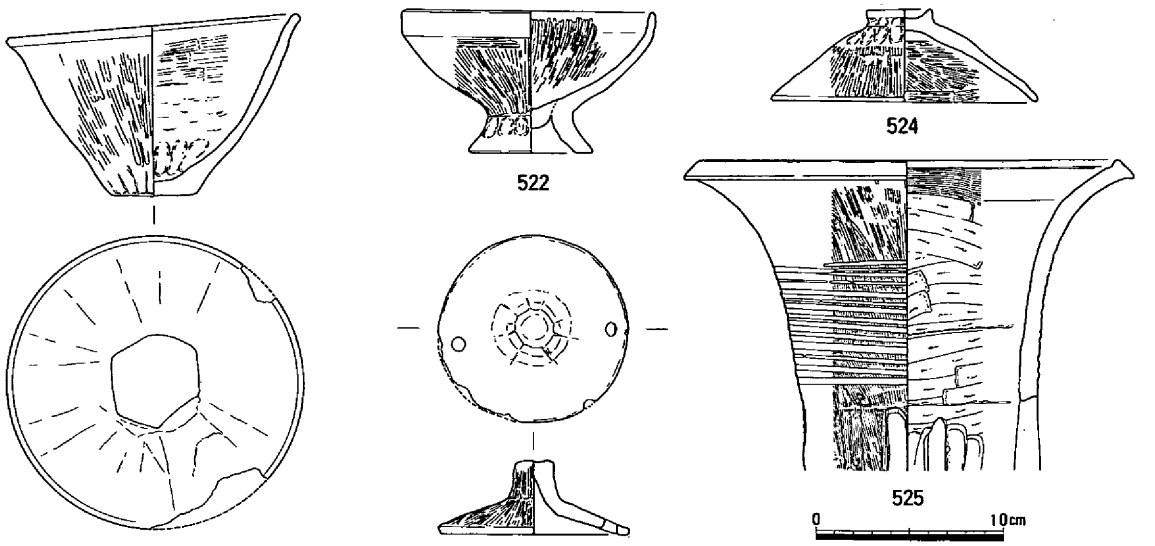


520



(1/4)

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
515	弥生土器	甕	(17.0)	5.4		良好	灰黄2.5Y7/2	細砂	斜め下方に拡張する口縁部・内面ヘラケズリは頸部下まで・外面ハケメ・スス付着
516	弥生土器	甕	16.0	5.8	26.5	良好	にぶい黄橙10YR7/3	砂礫	口縁部はやや水平方向に拡張して上面を形成・二次的に火を受ける
517	弥生土器	高杯	34.4	17.6	18.8	良好	橙5YR6/6	砂礫	屈曲して大きく外反する口縁部・脚柱～脚裾にかけて4方向と7方向の円形透かし孔2段
518	弥生土器	装飾高杯		20.0	4.7	良好	灰黄.5Y7/2	細砂	円形透かし孔2段・波状文は2単位・裾部に暗文状のヘラミガキ
519	弥生土器	甕	14.1	9.4	13.0	良好	橙7.5YR7/6	砂礫	完形品・底部外面にヘラケズリ痕跡あり
520	弥生土器	鉢	16.2	8.8	12.6	良好	にぶい橙7.5YR6/4	砂礫	ほぼ完形・やや雑な造作・胴下半部にハケメ・黒斑



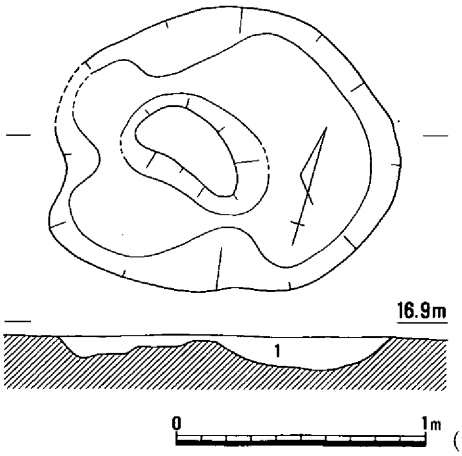
(1/4)

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
521	弥生土器	鉢	15.3	4.6	9.15	良好	橙7.5YR6/6	細砂	底部は六角形状を呈す・外面粗いヘラミガキ・内面ハケメ後ユビナデ・爪痕状の痕跡あり
522	弥生土器	台付鉢	13.0	4.8	7.6	良好	にぶい橙7.5YR6/4	微砂	完形品・内外面丁寧なヘラミガキ・口縁部は鈍く屈曲して上方に立ち上がる
523	弥生土器	蓋	9.8		3.95	良好	橙5YR6/6	砂礫	円孔2か所・外面ヘラミガキ・ユビオサエ
524	弥生土器	蓋	14.2		4.95	良好	にぶい黄橙10YR6/3	細砂	ユビオサエによるつまみ部の成形・外面ヘラミガキ・内面ハケメ
525	弥生土器	器台	(22.3)			良好	橙7.5YR6/6	砂礫	口縁部は肥厚させて外面を形成・筒部螺旋状の沈線・方形透かし孔は不等間隔に4方向

土壙12は、土壙11の北約46ｍの位置に検出した。平面形は不整円形を呈するもので、長さ443cm、幅410cmを測る。東西の断面形は逆台形を呈するものの北半には三段の掘り込みが見られる。埋積の状態を見るときれいな層序は見られない。底面はほぼ平らで、検出面からの深さは65cmを測る。

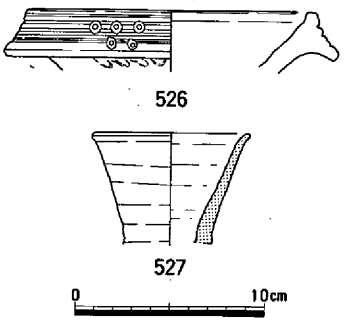
土壙からは多量の弥生土器が出土している。**511**は壺である。短い頸部からさらに大きく開く口縁部の端部は少し肥厚させ、端面には擬凹線が施される。胴部外面はハケメ、内面は頸部直下までヘラケズリが施される。**512**は短頸壺である。頸部はほぼ垂直に立ち上がるもので端部は丸く納められている。外面はほぼ全面にハケメが、内面は頸部の直下までヘラケズリが施される。胴部下半には土器焼成後に穿孔された小円孔が1個見られる。**513**は直口壺である。胴部外面にハケメが、内面にはユビナデが施される。**514**も直口壺である。長く伸びた頸部の先が少し外に開く。頸部の下端には1条の突帯が見られる。胴部には2条の突帯が巡り、棒状浮文が見られる。**515・516**は甕である。口縁部と胴部の張りに違いがあるが、胴部の調整は外面にハケメ、内面にヘラケズリが施され、共通したものが見られる。**517**は高杯である。皿部から大きく屈曲して外反する口縁部を持つもので、脚部は裾に向けて緩やかに開く。脚柱部と裾部には円形の透かし孔が穿たれる。**518**は装飾高杯の脚部である。ヘラガキの鋸歯文、クシガキの波状文、円形の透かし孔が施されている。**520～522**は鉢である。**521**は底部が六角形状を呈しており、**522**には台が付く。**523・524**は蓋で、**523**には小円孔が穿たれる。**525**は器台で、筒部には螺旋状に施された沈線と、方形透かし孔が見られる。時期は弥生時代後期中葉のものと考えられる。　(井上)

土壙13



(1/30)

1　暗淡灰褐色土（礫・黄褐色土ブロック含む）



(1/4)

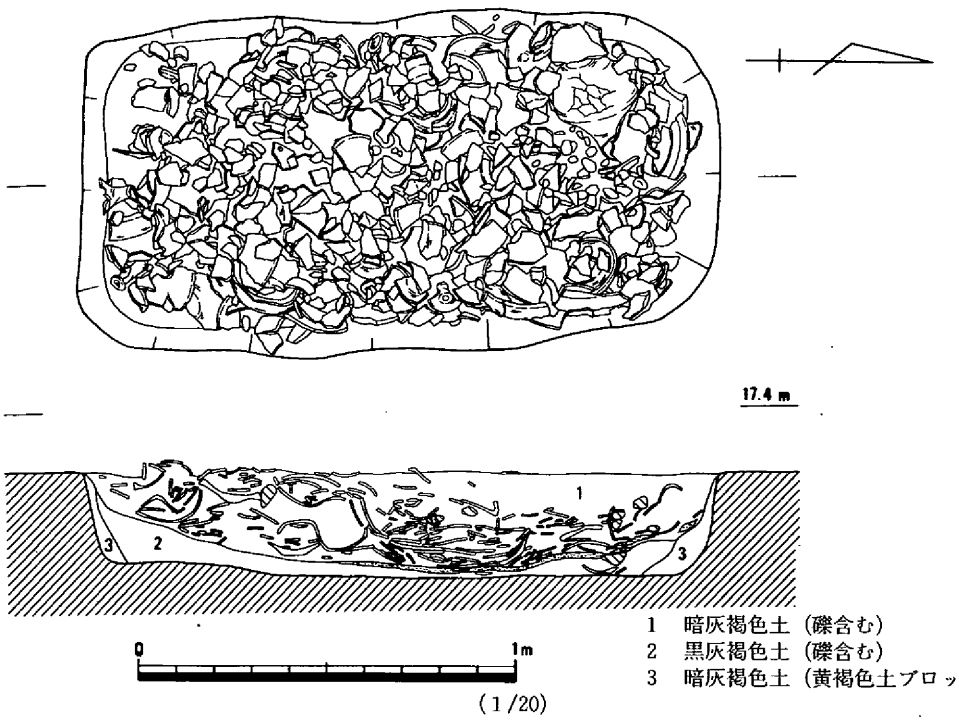
遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙13	KM4	143	115	14	楕円	椀	△	古墳後半	

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
526	弥生土器	壺	(14.6)			良好	にぶい黄橙10YR6/3	細砂	口縁部外面竹管文
527	須恵器（土師質c）	不明	8.0			良好	にぶい褐7.5YR5/4	微砂	丁寧なヨコナデ

土壙13は、T7グリッド(KM4区)に所在する。平面形はやや不定形な楕円形で、規模は長さ143cm、幅115cmを測る。底部は凹凸があり、中央が島状に高まる。

遺物は弥生土器と須恵器がわずかに出土している。土壙の時期は明確でないが、須恵器から古墳時代の後期と考えられる。　(平井)

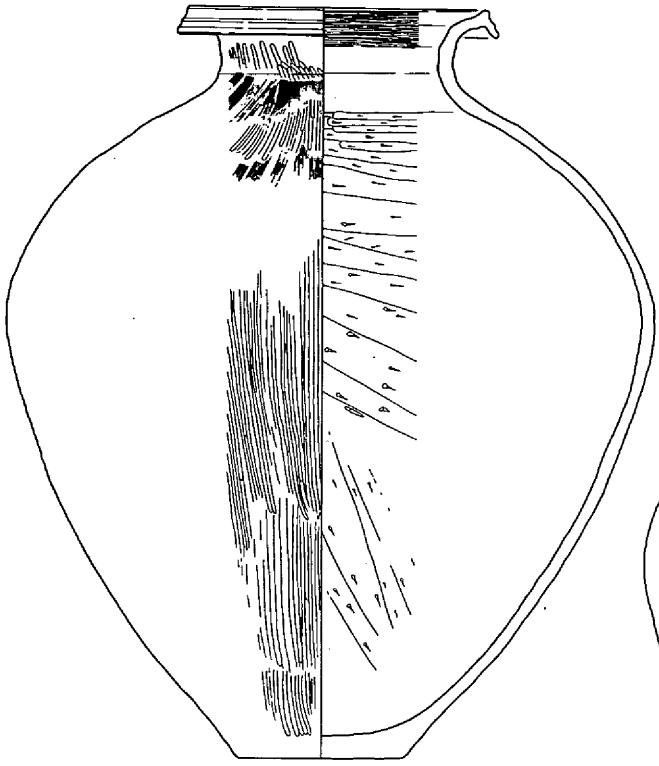
土壙14



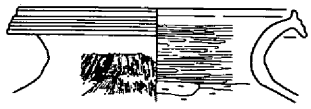
(1/20)

1　暗灰褐色土（礫含む）
2　黒灰褐色土（礫含む）
3　暗灰褐色土（黄褐色土ブロック含む）

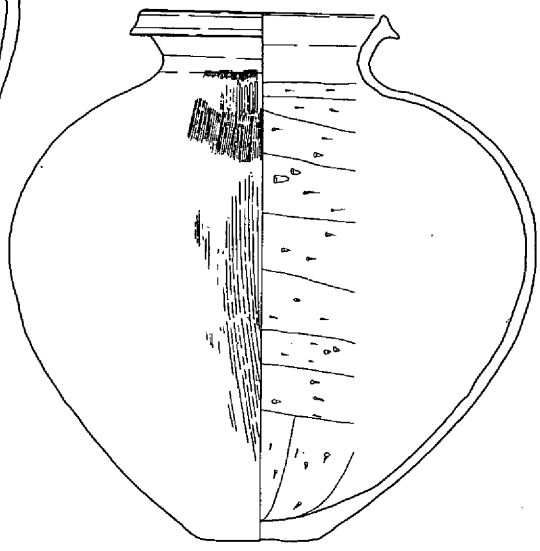
遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙14	KM4	170	91	29	隅丸長方	矩	◎	弥生後期中葉	



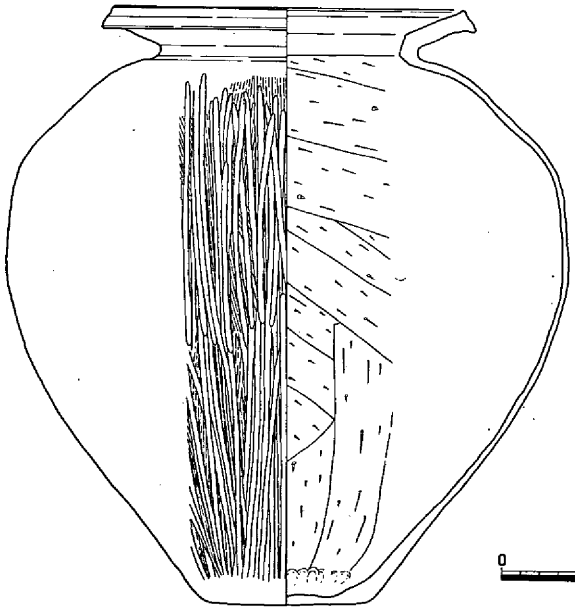
528



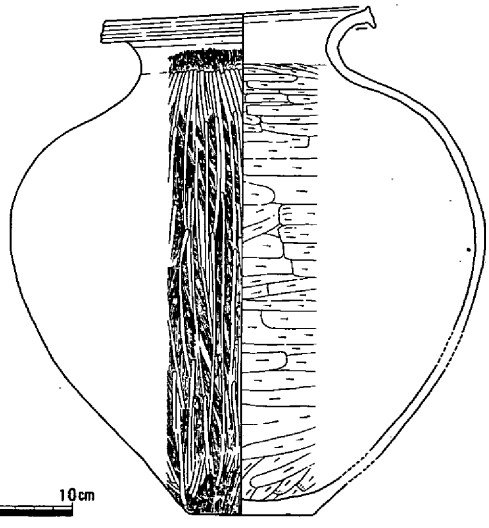
530



531

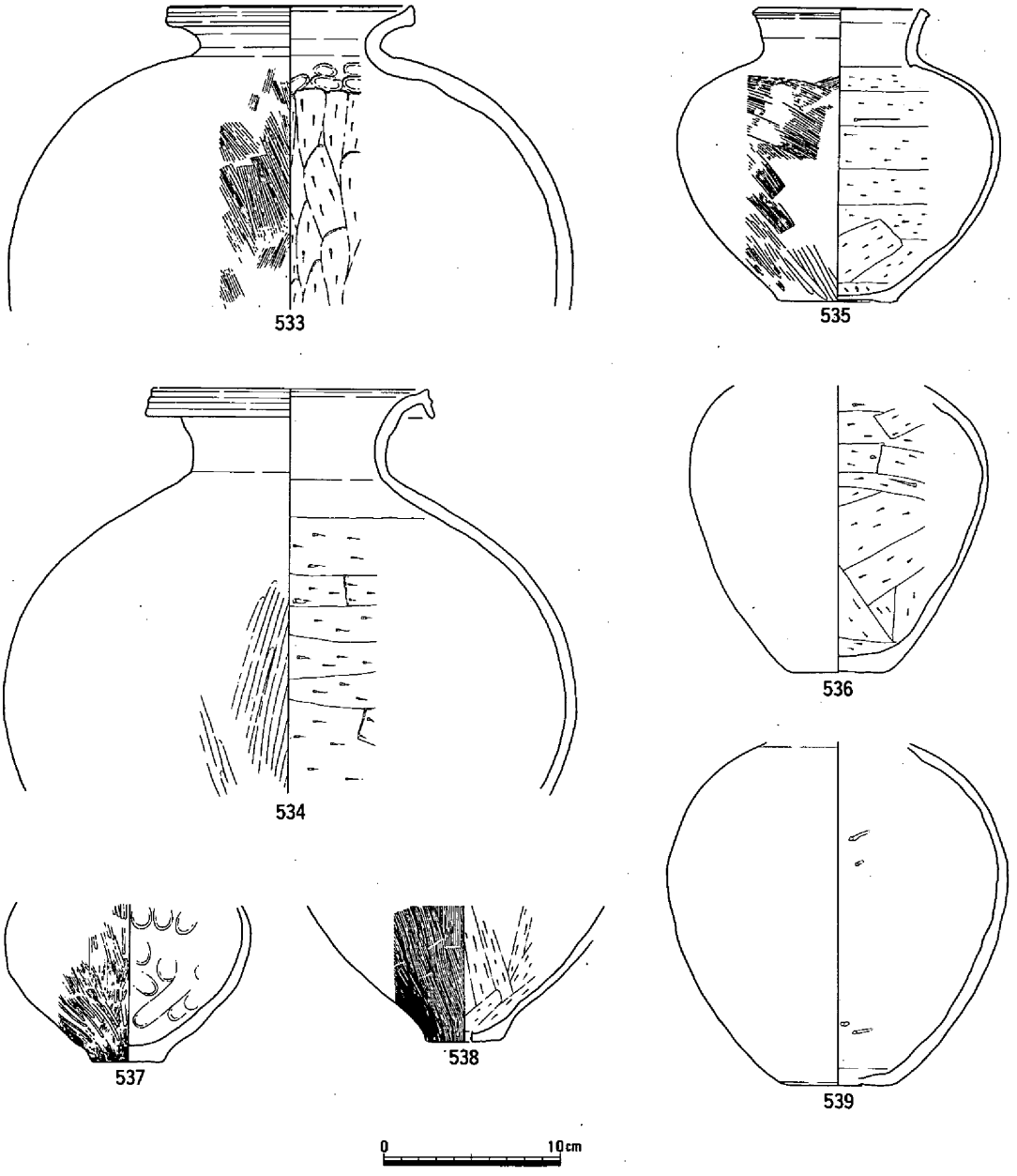


529



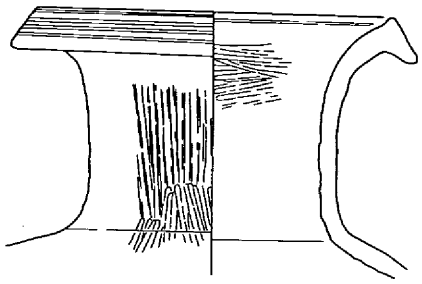
532

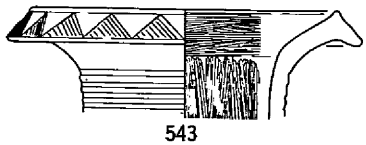
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
528	弥生土器	壺	15.6	8.8	40.3	良好	にぶい橙7.5YR4/6	砂礫	口縁部凹線
529	弥生土器	壺	18.4	8.8	31.9	良好	にぶい褐7.5YR6/3	砂礫	口縁部外面ヨコナデによる凹線状のくぼみ
530	弥生土器	壺	(14.6)			良好	にぶい橙5YR7/4	微砂	口縁部擬凹線
531	弥生土器	壺	12.8	6.5	28.3	良好	灰黄褐10YR6/2	砂礫	口縁部ヨコナデによる凹線状のくぼみ・黒斑
532	弥生土器	壺	14.2	16.6	26.7	良好	浅黄2.5Y7/3	細砂	口縁部凹線・黒斑

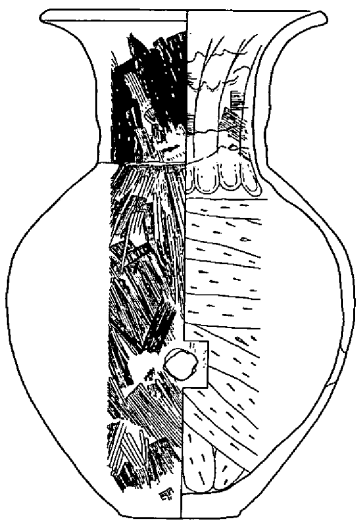


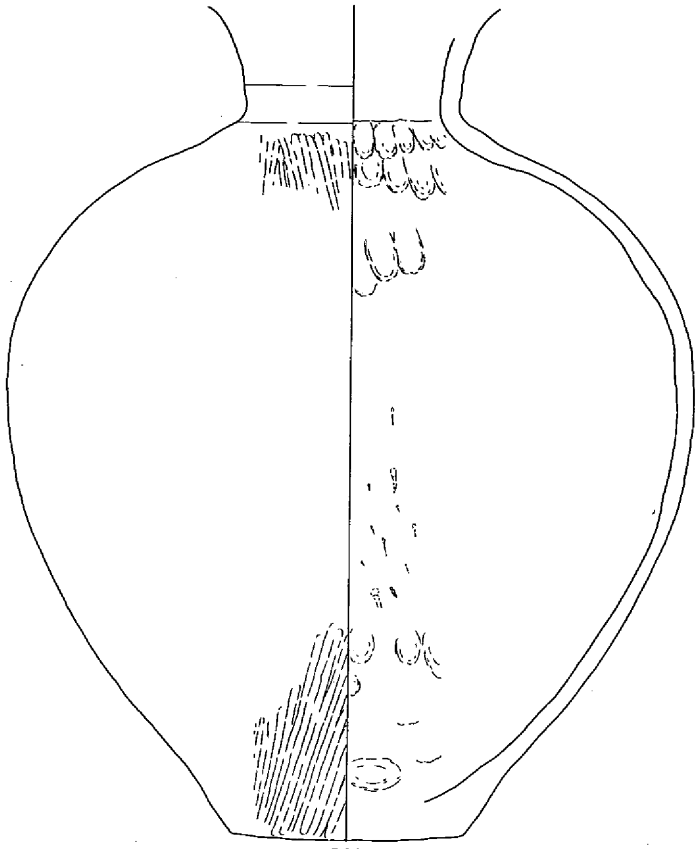
(1/4)

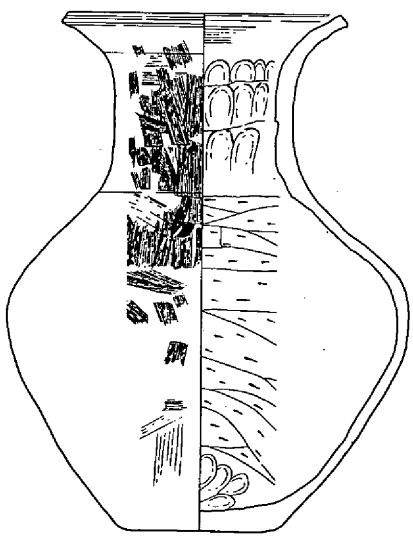
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
533	弥生土器	壺	(13.8)	-		良好	にぶい橙7.5YR6/4	砂礫	
534	弥生土器	壺	(15.6)			良好	にぶい黄橙10YR6/3	砂礫	口縁部ヨコナデによるくぼみ・二次的に火を受ける
535	弥生土器	壺	(9.1)	(6.8)	16.8	良好	にぶい黄橙10YR6/3	微砂	口縁部やや外反して直立
536	弥生土器	壺		5.1		良好	にぶい黄褐10YR5/3	砂礫	磨滅・スス付着
537	弥生土器	壺		4.0		良好	にぶい褐7.5YR5/3	細砂	
538	弥生土器	壺		4.3		良好	にぶい黄橙10YR7/4	細砂	底部焼成前穿孔
539	弥生土器	壺		(5.3)		良好	橙2.5YR6/6	砂礫	砂礫磨滅

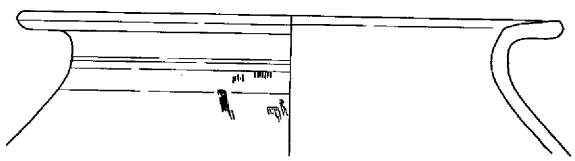

540

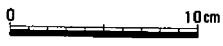

543


541


544

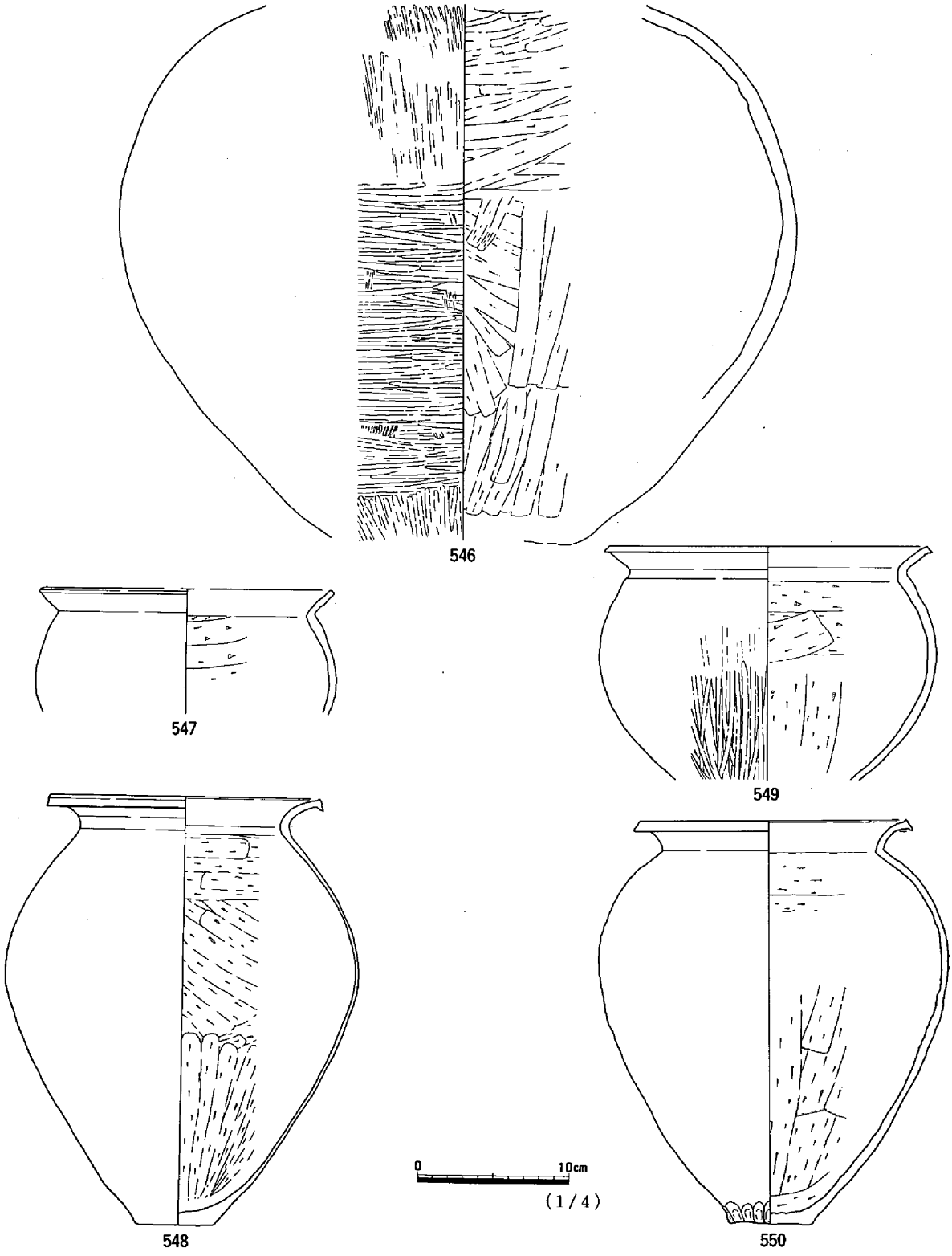

542


545

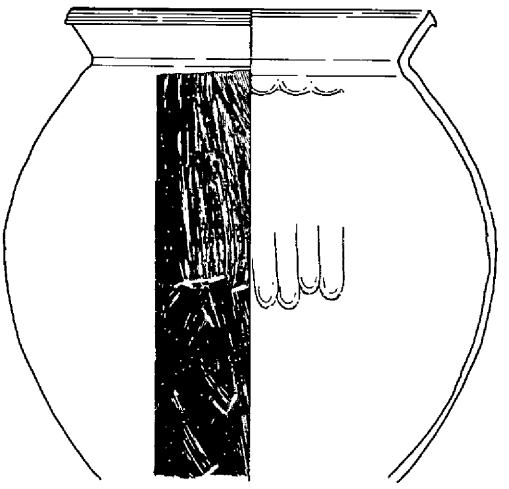


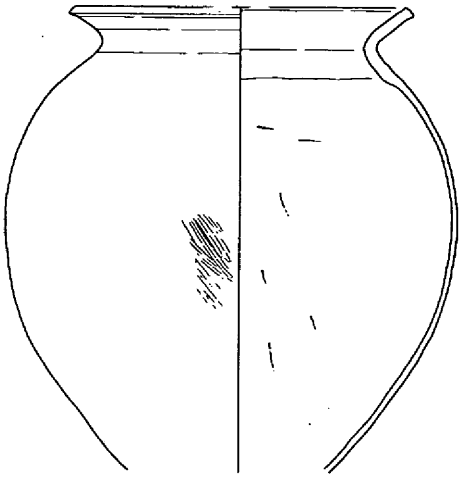
(1/4)

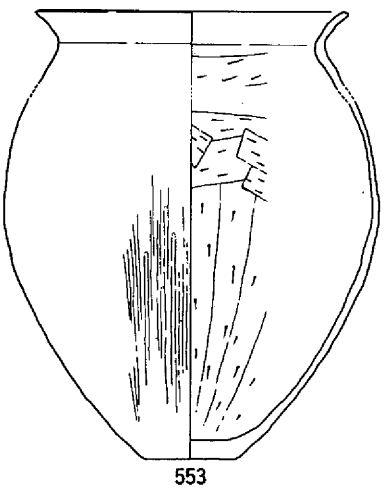
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
540	弥生土器	長頸壺	18.6			良好	浅黄2.5Y7/3	砂礫	口縁部凹線・二次的に火を受けて器壁剥離
541	弥生土器	長頸壺	(17.6)	7.4	27.6	良好	浅黄2.5Y7/3	細砂	スス付着
542	弥生土器	長頸壺	(14.4)	6.3	27.2	良好	灰白2.5Y8/2	砂礫	胴部に焼成後穿孔・黒斑
543	弥生土器	長頸壺	(16.2)			良好	にぶい黄橙10YR7/3	細砂	口縁部外面鋸歯文・頸部沈線
544	弥生土器	壺		(12.4)		良好	橙2.5YR6/6	細砂	磨滅・黒斑
545	弥生土器	壺	(28.5)			良好	にぶい黄橙10YR6/4	砂礫	

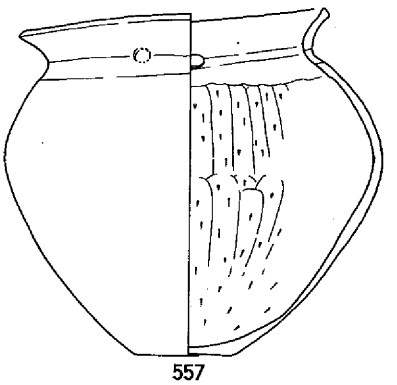


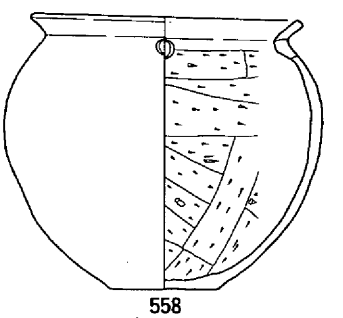
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
546	弥生土器	壺		(14.0)		良好	浅黄2.5Y7/3	砂礫	黒斑
547	弥生土器	甕	19.0			良好	明赤褐2.5YR5/6	細砂	磨滅
548	弥生土器	甕	17.9	5.1	28.5	良好	灰黄褐10YR6/2	砂礫	磨滅・スス付着
549	弥生土器	甕	(20.9)			良好	にぶい橙7.5YR6/4	砂礫	
550	弥生土器	甕	(17.0)	5.2	26.8	良好	橙5YR6/8	細砂	磨滅

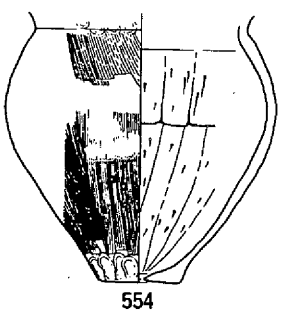

551

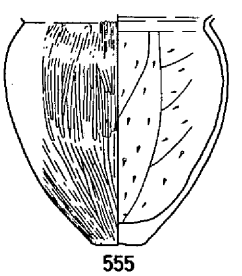

552

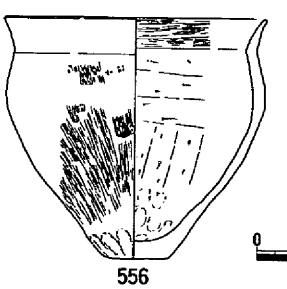

553


557


558


554

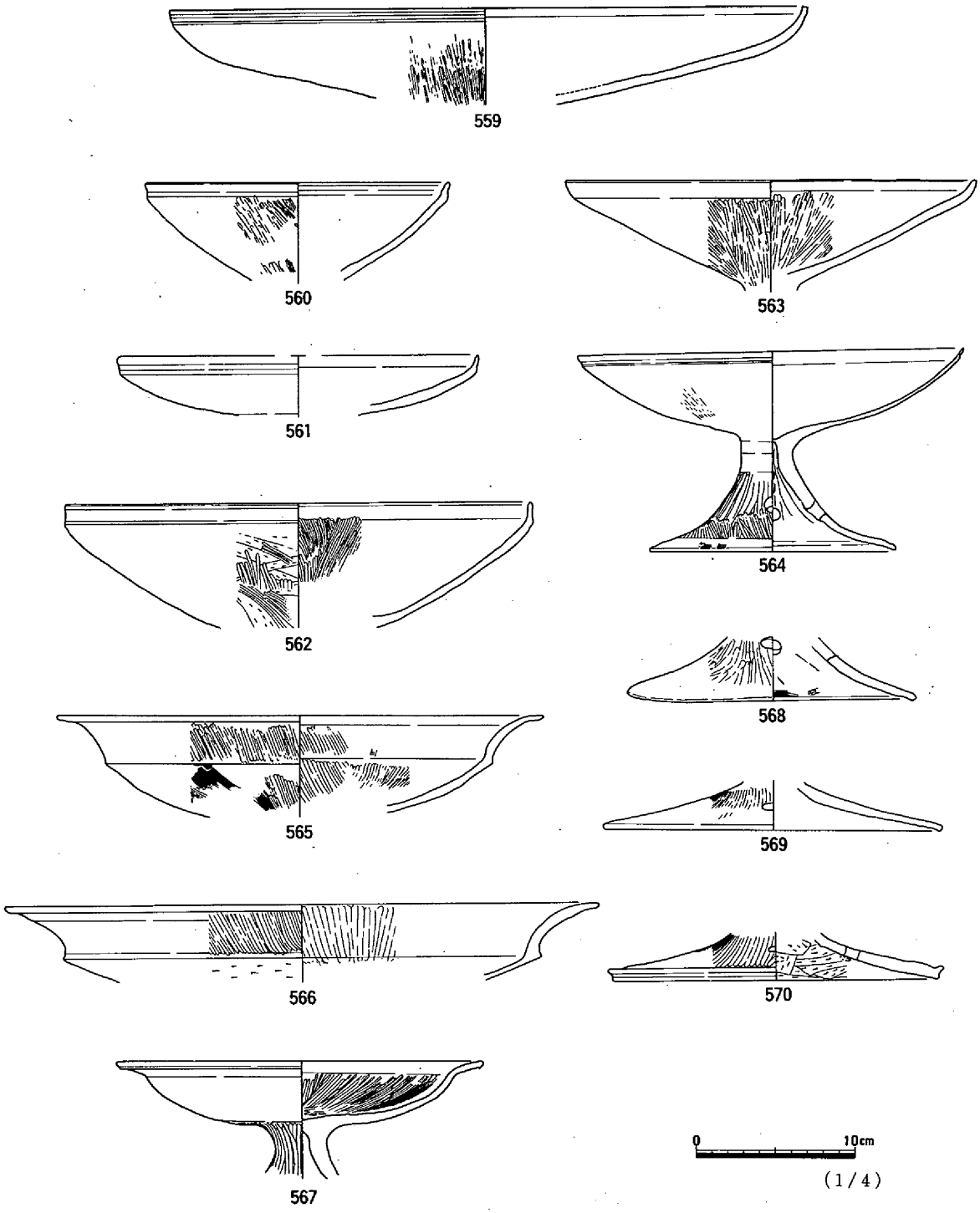

555


556

0　10cm

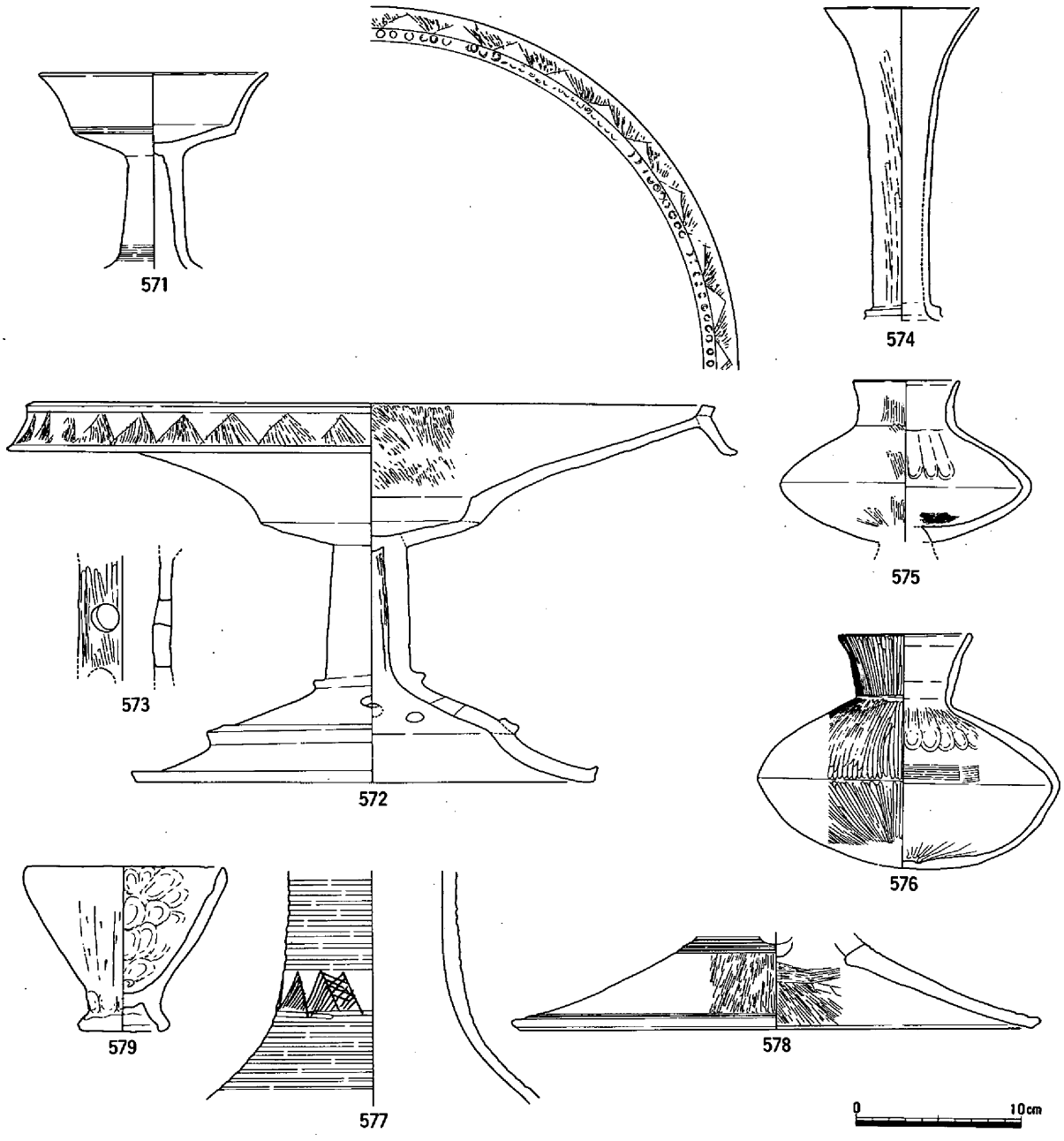
(1/4)

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
551	弥生土器	甕	(19.0)			良好	にぶい橙5YR6/4	細砂	スス付着
552	弥生土器	甕	(17.6)			良好	明黄褐10YR7/6	細砂	口縁部端面を持つ・磨滅
553	弥生土器	甕	15.8	4.8	24.0	良好	明赤褐2.5YR5/6	細砂	接点なしの同一個体
554	弥生土器	甕		4.3		良好	にぶい褐7.5YR5/4	細砂	底部焼成後穿孔
555	弥生土器	甕	(10.2)	2.9	12.3	良好	明赤褐2.5YR5/6	砂礫	スス付着
556	弥生土器	甕	14.0	3.5	12.9	良好	灰黄褐10YR5/2	砂礫	
557	弥生土器	甕	15.9	4.9	18.7	良好	赤橙10R6/8	細砂	口縁部下端透かし孔２個・磨滅・黒斑
558	弥生土器	甕	13.9	5.8	24.6	良好	灰赤2.5Y4/2	砂礫	口縁部下端透かし孔２個



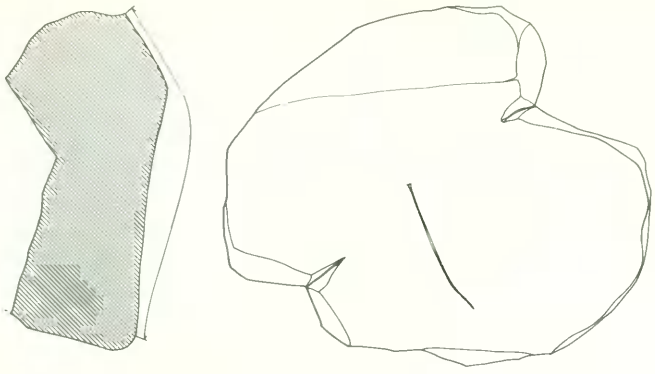
(1/4)

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
559	弥生土器	高杯	40.1			良好	にぶい黄橙10YR6/3	砂礫	端部沈線2条
560	弥生土器	高杯	29.2			良好	にぶい黄橙10YR7/3	微砂	口縁部屈曲して短く立ち上がる・凹線状
561	弥生土器	高杯	(23.0)			良好	にぶい黄橙10YR7/4	砂礫	口縁部屈曲して短く立ち上がる・凹線状
562	弥生土器	高杯	29.6			良好	褐灰10YR4/1	砂礫	口縁部屈曲して短く立ち上がる・凹線状
563	弥生土器	高杯	(25.6)			良好	にぶい橙7.5YR7/3	微砂	
564	弥生土器	高杯	24.2	15.3	12.8	良好	橙2.5YR7/6	細砂	口縁部わずかに屈曲して立ち上がる・凹線状・外面磨滅・二次的に火を受ける
565	弥生土器	高杯	(30.9)			良好	橙2.5YR6/6	砂礫	杯部屈曲して外反する
566	弥生土器	高杯	(38.0)			良好	にぶい橙2.5YR6/4	砂礫	
567	弥生土器	高杯	(23.3)			良好	橙7.5YR6/6	細砂	わずかに端面に条線・0.5mm以下の黒雲母が多い
568	弥生土器	高杯		18.3		良好	橙2.5YR6/8	精良	脚端部丸く納める・透かし孔4個
569	弥生土器	高杯		(21.1)		良好	赤10R5/6	砂礫	透かし孔3個
570	弥生土器	高杯		(20.6)		良好	にぶい橙7.5YR7/4	細砂	脚端部沈線・透かし孔6個



（1/4）

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
571	弥生土器	高杯	(13.5)			良好	にぶい橙7.5YR6/4	微砂	杯部屈曲して立ち上がる・凹線状のくぼみ
572	弥生土器	装飾高杯	40.7	27.1	23.0	良好	橙5YR6/8	砂礫	口縁端部竹管文・外面鋸歯文・脚部貼り付け突帯・透かし孔５個・0.5mm以下の雲母を多く含む
573	弥生土器	高杯				良好	赤橙10R6/6	微砂	脚柱部透かし孔３方２段
574	弥生土器	直口壺	9.3			良好	明赤褐2.5YR5/6	細砂	ラッパ状の頸部
575	弥生土器	直口壺	6.3			良好	にぶい黄褐7.5YR6/3	砂礫	脚台あり
576	弥生土器	直口壺	7.7		14.3	良好	にぶい橙7.5YR6/4	細砂	二次的に火を受ける・赤色顔料
577	弥生土器	器台				良好	褐灰7.5YR6/1	細砂	凹線文・鋸歯文・長頸壺の頸部の可能性
578	弥生土器	器台		(30.9)		良好	にぶい黄橙10YR7/3	微砂	脚端部沈線・透かし孔４個
579	弥生土器	台付鉢	(11.8)	4.5	10.0	良好	にぶい黄橙10YR7/4	微砂	製塩土器



S15　（1/3）

掲載番号	器種	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
S15	砥石	半花崗岩	223	190	(86)	4919.1	4片同一個体

土壙14は、Ｓ９グリッド（ＫＭ４区）に所在する。平面形はやや隅の丸い長方形で、長さ170cm、幅91cmを測る。検出面からの深さは29cmあまりで、底部はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直ないし急傾斜で立ち上がる。内部には多量の弥生土器が底部近くまで廃棄されていた。廃棄の状況を少し詳しく見ると、壁際では高い位置にあるが、中央部は底部に接する深さまで認められる。土器は完形に近いものもあるが、どちらかといえば小片が折り重なるように廃棄されている。また、中央部の土器層の直下には薄い炭層が見られた。

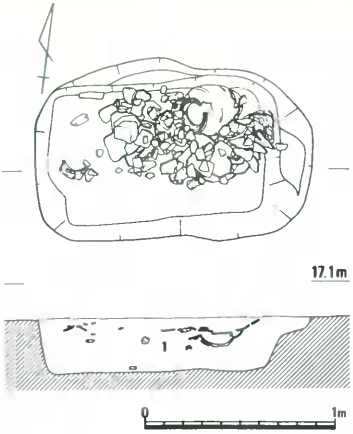
遺物は大量の弥生土器と石器が１点出土した。弥生土器は壺、甕、高杯、器台、製塩土器などの器種が認められる。壺には頸部が長くなるものと短いものとがある。頸部の短いものは**528**や**529**のように胴部最大径が上位にあり、肩の張った大形の器形が多い。口縁部はくびれた頸部から強く外反し、端部を上下に拡張するが、**535**のようにわずかに外反ぎみに立ち上がる口縁部をもつ中形のものもある。長頸壺は器高こそ高いが、胴部で比較すると頸部の短いものより小さく、中形の部類に属する。ただ、**544**は大形の胴部で、頸部はやや外反ぎみに立ち上がるなど、他のものとは少し異なる。頸部は無文のものが多いが、**543**は沈線がめぐる。頸部から強く外反する口縁部は、端部を拡張するものとしないものとがある。

甕には器高の高い**548**などと低いもの**549**などとがある。器高の高いものは倒卵形の胴部から「く」の字状に外反する口縁部をもつ。口縁端部はわずかに拡張するものと、丸く収めるものとがある。器高の低いものは胴部が球形に近くなる。また、**557**や**558**のように口縁部直下に１対の円孔を穿つものも見られる。

高杯は口縁部が短く立ち上がるものと、強く外反しながら長く立ち上がるものとがある。脚端部は**570**のように拡張するものもあるが、その他は丸く納める。**572**は装飾高杯で、拡張された口縁部上端面には円形竹管文、そして外端面には鋸歯文が施される。**579**は製塩土器で、外面はヘラケズリで仕上げられる。

以上の土器は弥生時代後期中葉に属するものと考えられる。　（平井）

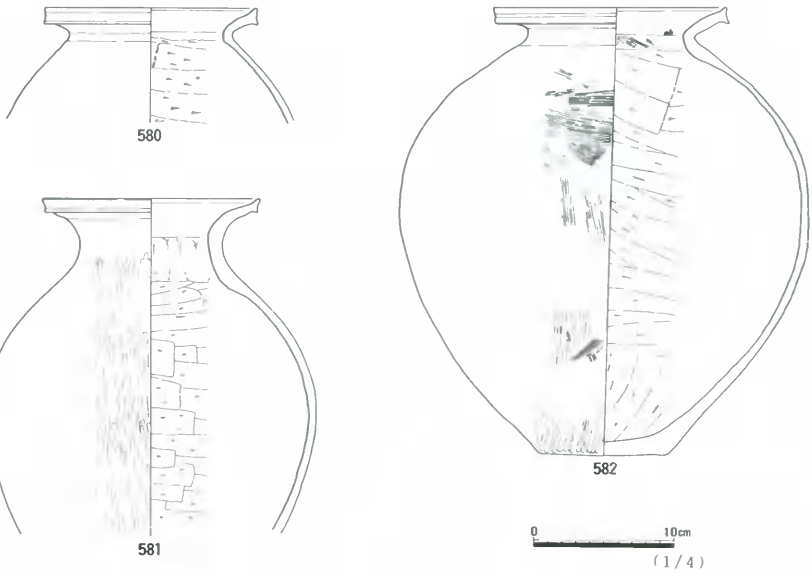
土壙15



（1/30）

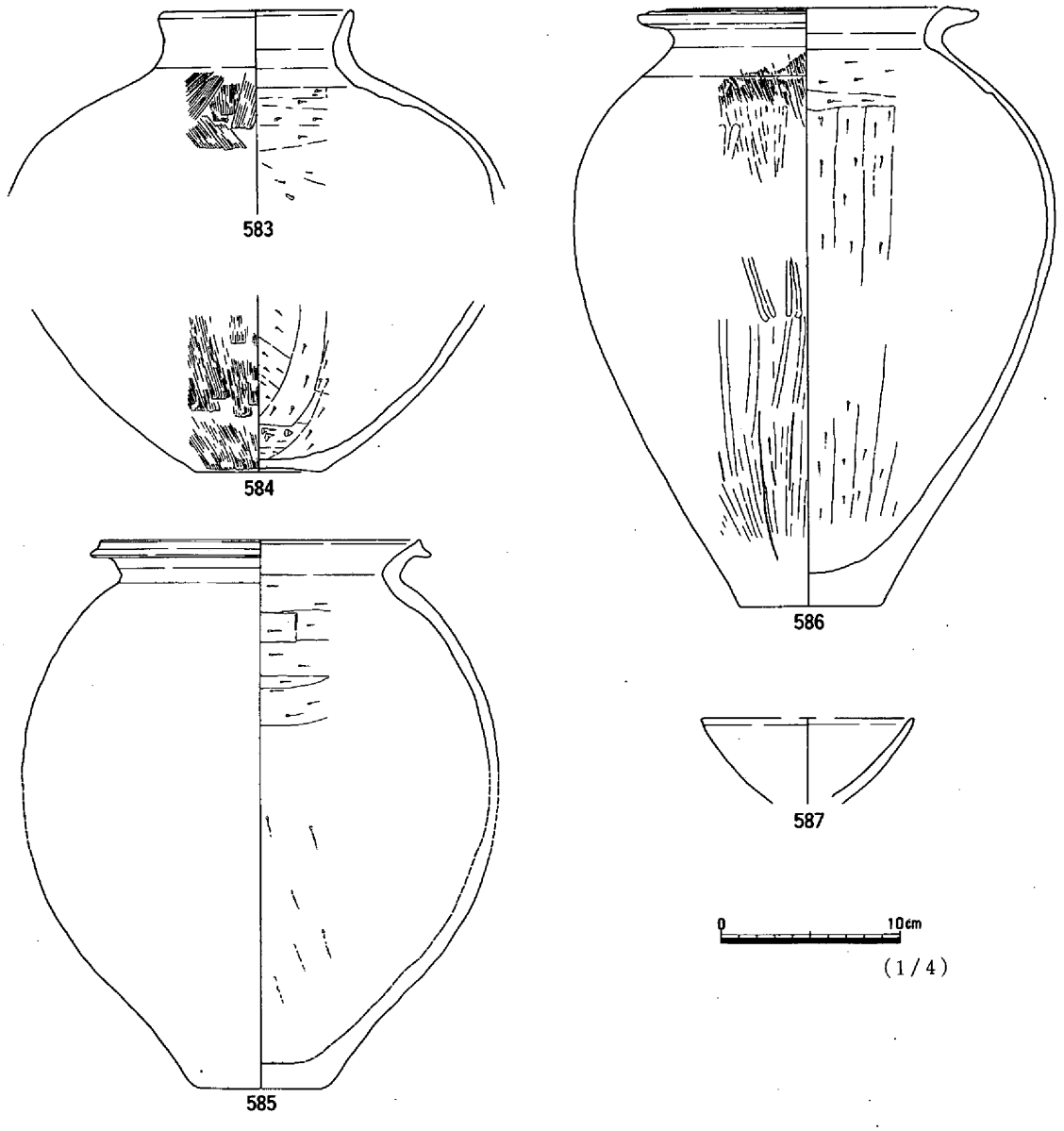
1　暗灰褐色土（礫含む）

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙15	KM4	145	92	31	長方	逆台	○	弥生後期中葉	



（1/4）

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
580	弥生土器	壺	(14.8)			良好	にぶい黄橙10YR7/4	砂礫	外面磨滅・口縁部肥厚して直立させる
581	弥生土器	壺	(15.2)			良好	にぶい赤褐5YR5/3	細砂	外面ヘラミガキ・内面ヘラケズリ
582	弥生土器	壺	16.4	8.9	31.8	良好	浅黄2.5Y7/3	砂礫	



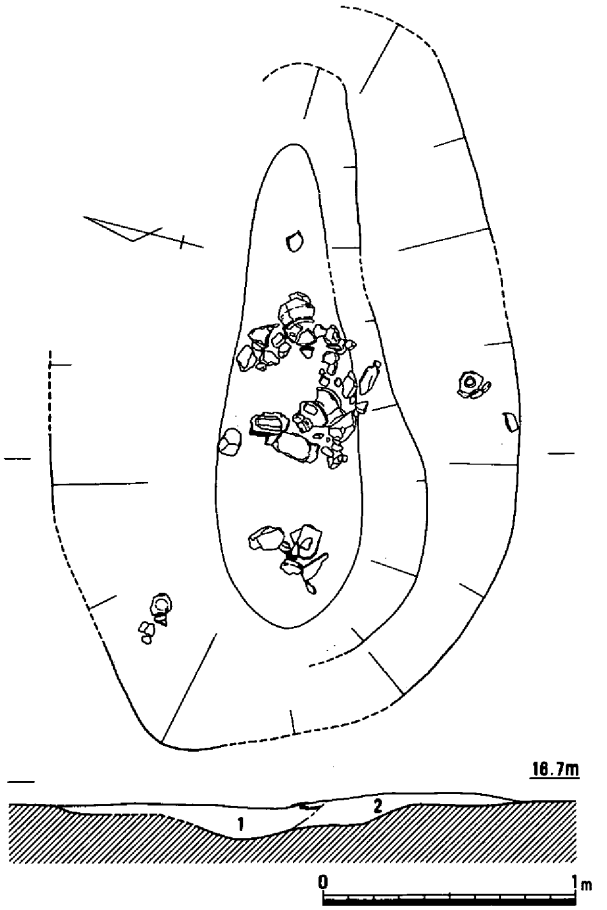
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
583	弥生土器	壺	10.6			良好	灰黄褐10YR6/2	砂礫	口縁部直立させる・584と同一個体か？
584	弥生土器	壺		7.0		良好	灰黄褐10YR6/2	砂礫	
585	弥生土器	甕	(18.0)	6.8		良好	明赤褐2.5YR5/8	細砂	外面磨滅・黒斑
586	弥生土器	甕	(15.4)	(7.6)	33.9	良好	にぶい黄橙10YR7/3	砂礫	粗いヘラミガキ・黒斑・スス付着
587	弥生土器	鉢	(11.6)			良好	にぶい黄橙10YR7/2	精良	外面磨滅

土壙15は、U9グリッド(KM4区)に位置する。平面形は北側と東側とで少し乱れるが、ほぼ長方形を呈する。規模は長さ145cm、幅92cm、検出面からの深さ31cmを測る。底部はほぼ平坦で、東側の壁以外は垂直に近い急傾斜で立ち上がる。埋土は同じものであるが、その上部には多くの土器が廃棄されていた。土器は北東の隅でほぼ完形のものが認められた以外は小片であった。

遺物はすべて弥生土器で、壺、甕、鉢が認められる。壺のうち**583**は胴部からやや外反ぎみに短く立ち上がる口縁部を持つもので、例は少ない。

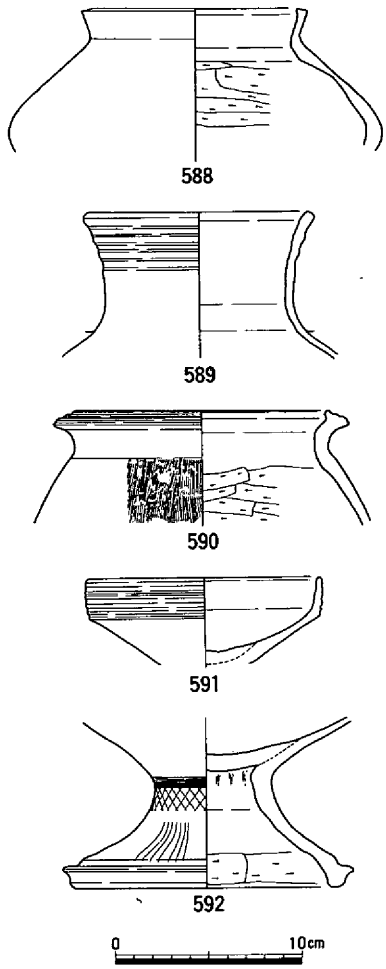
土壙の時期は、出土した土器が弥生時代後期中葉であることから、それに近いものと考えられる。(平井)

土壙16



(1/30)

1　暗灰褐色粘質土
2　暗褐色土（黄褐色土ブロック含む）



(1/4)

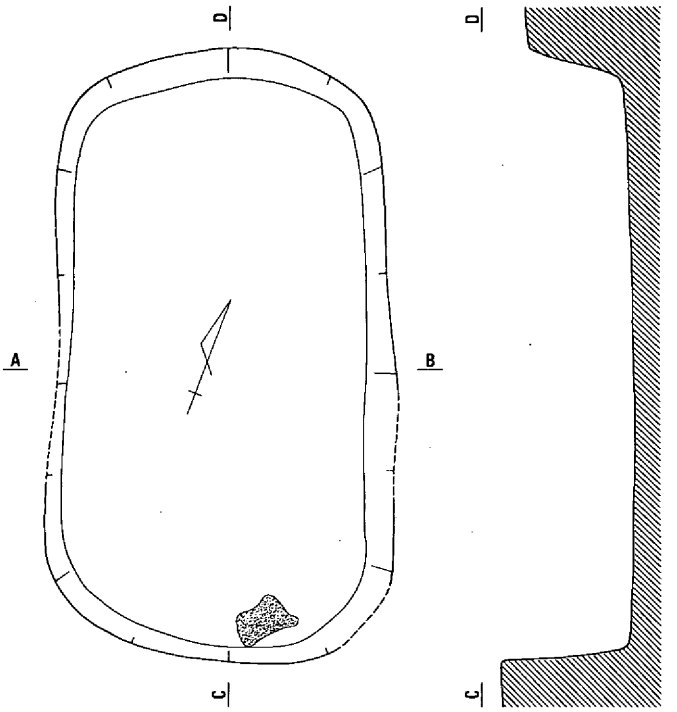
遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙16	ＫＭ５	(294)	186	14	(楕円)	皿	○	弥生後期前葉	

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
588	弥生土器	直口壺	11.0			良好	橙7.5YR7/6	砂礫	外面磨滅
589	弥生土器	直口壺	11.8			良好	灰黄2.5YR7/2	微砂	口縁部凹線
590	弥生土器	甕	13.6			良好	明赤褐5YR5/6	砂礫	口縁部外面凝凹線
591	弥生土器	高杯	12.4			良好	橙5YR6/8	細砂	口縁部凹線
592	弥生土器	台付鉢		脚(13.8)		良好	橙2.5YR6/8	細砂	外面磨滅・櫛描沈線・ヘラ描き格子文

土壙16は、ＫＭ５区で検出された。竪穴住居６の南に接して、これに壊されている。長さ約300cm、幅約180cmほどの浅いくぼみ状の土壙であった。出土土器は、ほぼ土壙の中央部付近に集中して出土した。土層断面の観察から２基の土壙が重複するようにも考えられたが、平面および遺物の出土状況から断定はできなかった。

図示したのは**588**が短頸壺、**589**が直口壺、**590**は甕、**591**が高杯、**592**が台付鉢である。**589**の直口壺には把手がつく。これらの出土遺物からこの土壙の時期は弥生時代後期前半に考えられる。（大橋）

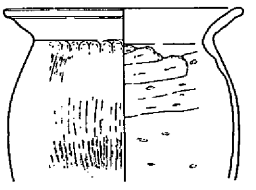
土壙17



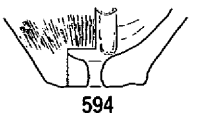
1　暗灰褐色土（炭・土器片含む）
2　暗褐色土（明黄褐色土・炭・土器片含む）

(1/30)

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙17	ＭＭ５	246	142	48	隅丸長方	矩	△	弥生後期後葉	



593



594

0　10cm

(1/4)

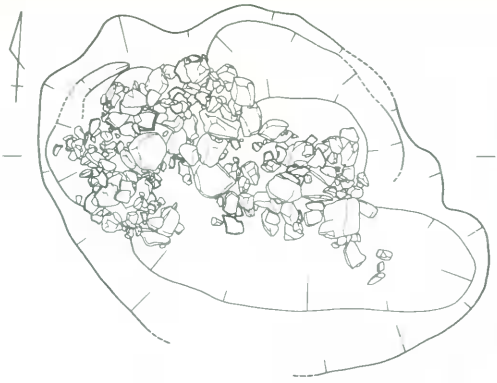
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
593	弥生土器	甕	12.8			良好	橙7.5YR7/6	細砂	外面ハケメ
594	弥生土器	(底部)		5.2		良好	橙5YR6/6	砂礫	底部穿孔

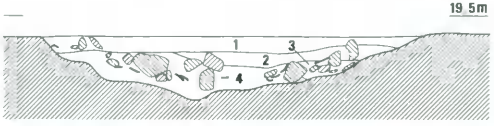
土壙17は、ＭＭ５区で検出された。竪穴住居28の西約13ｍに位置する。

隅丸長方形の平面形を呈し、長軸方向で246㎝、短軸方向で142㎝を測った。深さは約50㎝ほどが残存していた。埋土中には比較的多くの炭片が含まれていた。

出土遺物は細片で少量であった。図示したのは**593・594**であり、これからこの土壙の時期は弥生時代後期後葉段階と考えている。　(大橋)

土壙18

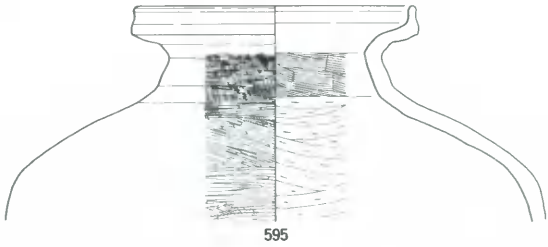


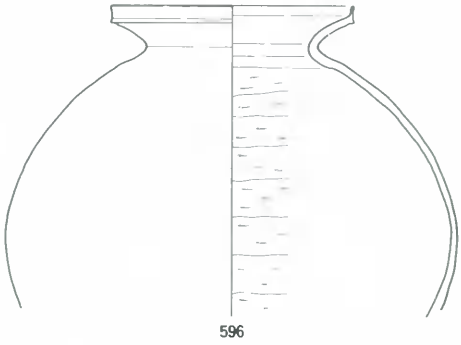


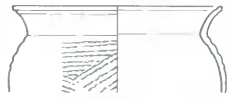
1　暗茶褐色粘質土（礫含む）
2　暗褐色粘質土
3　灰褐色粘質土（土器片少し含む）
4　暗灰褐色粘質土（礫・土器片多く含む）

0　1m　（1/30）

遺構名	位置（調査区）	規模（cm） 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙18	MM2	256	182	35	楕円	椀	○	古墳前半前葉	


595


596


597

598

599

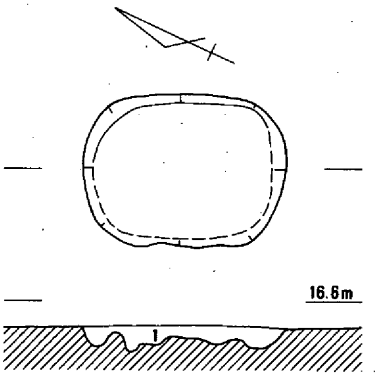
0　10cm　（1/4）

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
595	土師器	壺	19.4			良好	橙5YR6/6	細砂	二重口縁部は強いヨコナデ調整・胴外面はハケメ後ヘラミガキ・頸部内面にハケメ
596	土師器	甕	27.0			良好	にぶい橙7.5YR6/4	細砂	
597	土師器	甕	14.8	(6.7)		良好	灰黄2.5Y7/2	砂礫	やや外反する「く」の字状口縁
598	土師器	甕		1.4		良好	褐灰10YR5/1	細砂	体部外面タタキメ後ヘラミガキ・内面ハケメ・わずかに底が残る
599	土師器	高杯	16.2	脚12.3	10.7	良好	橙5YR6/8	精良	杯部は屈曲して直立する・外面に粘土接合痕あり

土壙18は、土壙17の南約28mの位置に検出した。平面形は楕円形を呈するもので長さ256cm、幅182cmを測る。土壙の北西部を中心に多量の礫が出土した。その礫の間から多くの土器が出土した。土壙の断面形は椀形を呈しており、平坦な底面はない。検出面からの深さは35cmを測る。

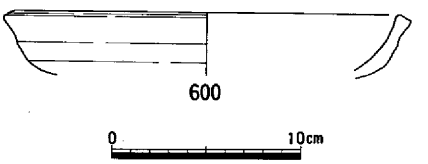
595は壺である。裾に向けて開く短い頸部を持つもので、口縁部は頸部の上端からほぼ水平に折れ曲がりその端部はさらに上方に引き伸ばされる。胴部外面はハケメ後ヘラミガキ、頸部内面はハケメ、胴部内面はヘラケズリが施される。**596**は甕である。球形の胴部から大きく折れ曲がった口縁部の端部が上方に拡張し外面に面を持つ。胴部内面はヘラケズリが施される。**597**は甕である。口縁部は少し外半して立ち上がるもので端部は丸く納められる。胴部外面にはタタキが見られる。**598**も甕である。わずかに底部が見られるものである。胴部の外面はタタキ後ヘラミガキが、内面はハケメが施される。**599**は高杯である。椀状に曲線を描く杯部の端部が屈曲してほぼ垂直に立ち上がるものである。杯部の外面に粘土の接合痕が見られる。脚柱部は短く、裾部は大きく屈曲するもので、円孔が穿たれる。土壙の時期は古墳時代前半前葉と考えられる。　(井上)

土壙19



(1/40)

1　褐灰色粘質微砂



(1/4)

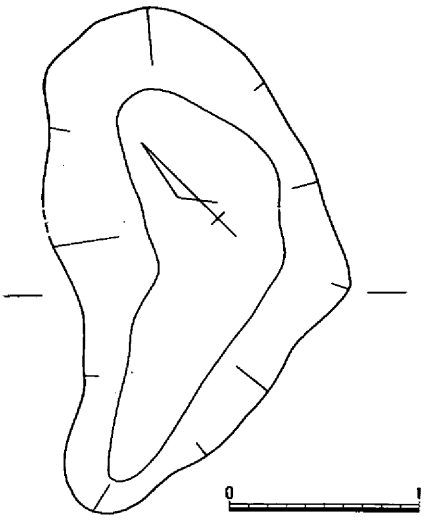
遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙19	KB1	110	85	(10)	隅丸方	皿	△	弥生中期後葉	底の凹凸が著しい

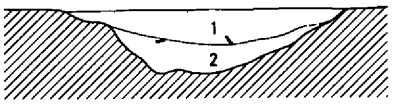
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
600	弥生土器	高杯	(20.4)			良好	褐灰10YR5/1	砂礫	外面強いヨコナデによる凹部

土壙19は、遺跡の低位部で検出されたほぼ隅丸方形を呈する浅い土壙である。壙底は、掘り込まれた基盤層の土質とも関連するが、凹凸が顕著である。

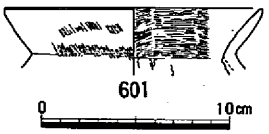
出土遺物には、弥生時代中期後葉に比定される**600**の弥生土器小片があるのみである。　(岡田)

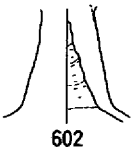
土壙20





1　暗灰黄褐色土（礫・土器片含む）
2　灰黒褐色土（礫少し含む）





土壙20は、竪穴住居48に上部を切られて掘り込まれた不整形な土壙である。壙底は、丸みをもって窪んでおり、もっとも深いところでは、30cm以上を測る。

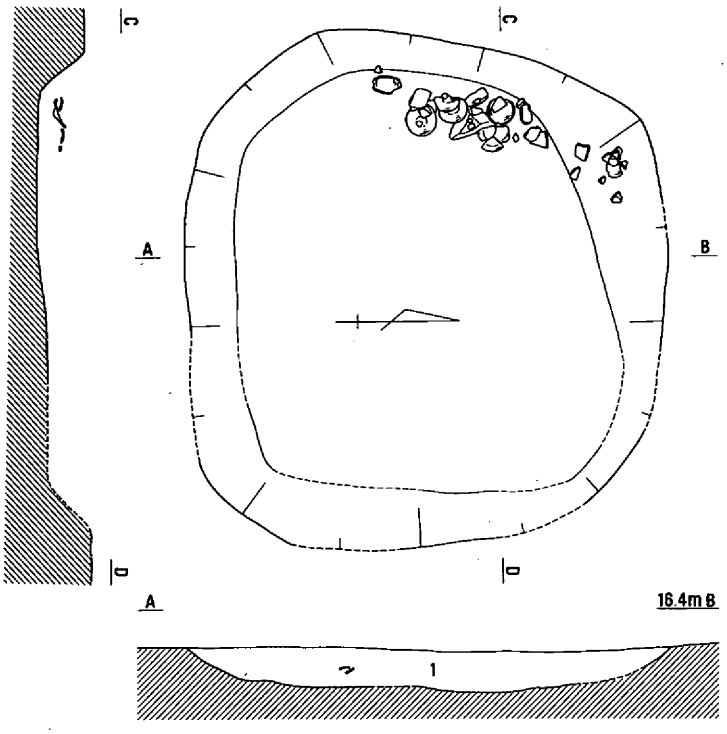
出土遺物には、混入の弥生土器のほか土師器のみ出土している。実測可能な遺物として**601・602**の土師器があるが、小片である。須恵器はまったく出土していない。時期的には、古墳時代前半に比定されよう。

（岡田）

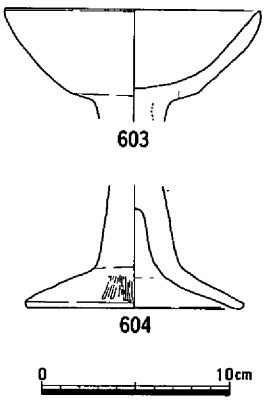
遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙20	KB1	270	150	35	不整楕円	椀	△	古墳前半	

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
601	土師器	甕	(13.8)			良好	にぶい黄橙10YR6/3	砂礫	
602	土師器	高杯				良好	にぶい黄橙10YR7/2	砂礫	接合部差し込み

土壙21



1　褐灰色砂質土（黄色土ブロック含む）



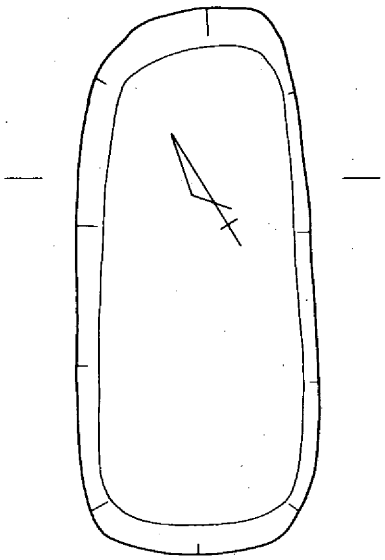
遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙21	KM6	(208)	191	16	隅丸方	皿	○	古墳後半後葉	

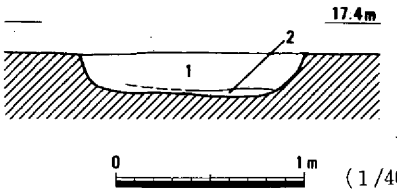
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
603	土師器	高杯	(13.6)			良好	浅黄橙7.5YR8/3	細砂	器壁磨滅・杯接合部は突起あり
604	土師器	高杯	10.4			良好	灰黄2.5Y7/2	砂礫	外面ヘラミガキ・軸部は縦方向の稜あり

土壙21は、亀田調査区の南西端部に位置する地形の低い地点に存在した。

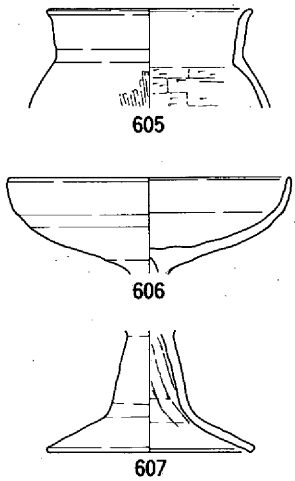
この土壙の平面形は長径208cm・短径191cmの隅丸方形に近い形態を呈し、検出面からの深さは16cmであった。土壙の西側の壁面に寄った部分から、床面より浮いた状態で土師器片が出土した。図化できたのは2点の高杯**603・604**だけであるが、古墳時代後半後葉の時期になるであろう。　(福田)

土壙22





(1/40)



(1/4)

1　暗茶褐色粘質土（焼土多く含む）
2　黒色土（炭多く含む）

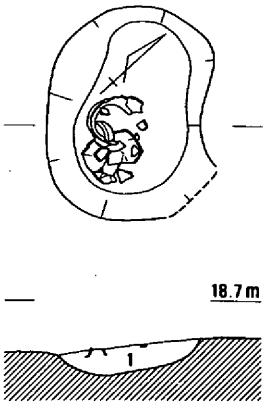
遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙22	KM5	291	129	24	隅丸長方	椀	○	古墳後半後葉	

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
605	土師器	甕	10.6			良好	にぶい黄橙10YR7/4	砂礫	口縁端部は外方にわずかにつまみ出す
606	土師器	高杯	14.8			良好	にぶい橙7.5YR7/4	微砂	口縁部強いヨコナデ
607	土師器	高杯	10.8			良好	橙7.5YR7/6	細砂	端部面を形成

土壙22は、竪穴住居6の北西隣に接して検出された。隅丸長方形の平面形を呈し、長軸方向で約290cm、短軸方向で約130cm、深さは約24cm残存していた。この土壙の埋土中には多量の焼土が含まれていたが、壁面、底面とも明瞭な被熱痕跡は確認されなかった。出土遺物は図示したものがあるにすぎない。

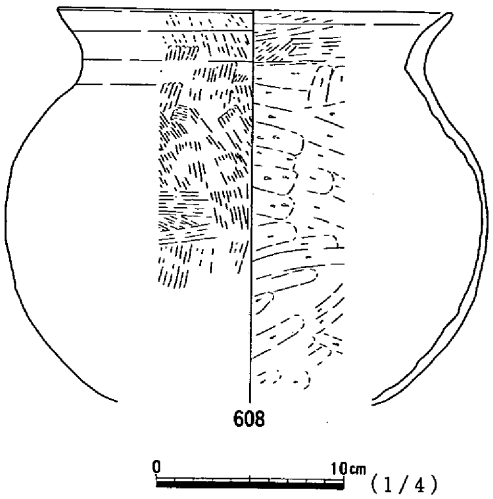
これらの出土遺物から、この土壙の時期を古墳時代後半と考えた。　(大橋)

土壙23



(1/30)

1　暗茶褐色粘質土



(1/4)

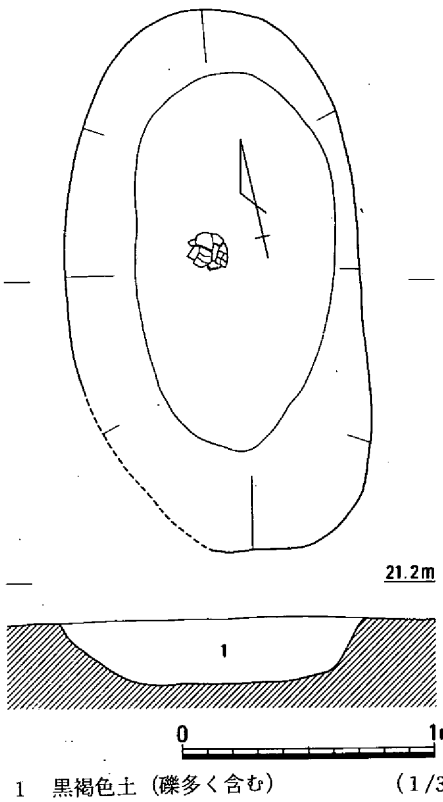
遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙23	ＫＭ１	88	61	17	不整楕円	皿	○	古墳後半後葉	

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
608	土師器	甕	20.8			良好	橙7.5YR6/6	砂礫	底部付近に黒斑

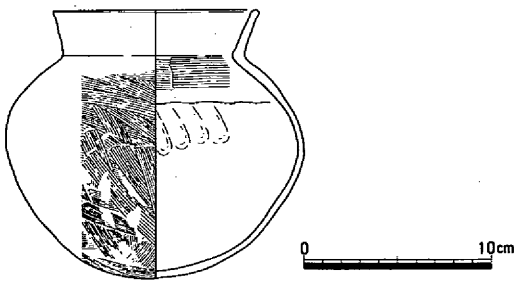
土壙23は、ＫＭ１区にあり、長さ88cm、幅61cmの不整楕円形を呈する。深さは、検出面より17cmあり、底面の標高は18.4ｍを測る。土壙南側より、土師器の甕**608**が１点出土している。

時期は古墳時代のものと考えられる。　(伊藤)

土壙24



1　黒褐色土（礫多く含む）　(1/30)



609

(1/4)

土壙24は、ＭＭ３区で検出された長楕円形の平面形を呈する土壙である。竪穴住居30の北東約15ｍの位置にある。

長軸方向で216cm、短軸方向で114cmを測る。土壙のほぼ中央部の底面で図示した**609**の甕が１個体出土した。

土壙の時期は、これを参考にすれば古墳時代前半に求められる。　(大橋)

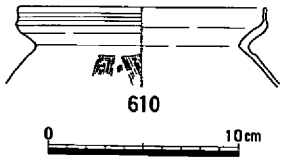
遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙24	MM3	216	114	[illegible]	長楕円	椀	△	古墳前半後葉	

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
609	土師器	甕	10.8		14.3	良好	橙5YR6/8	微砂	内面粘土紐の接合痕残る・[illegible]次的に火を受けた

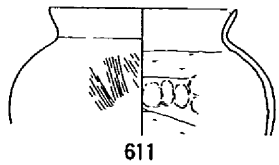
土壙25

(1/30)

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙[illegible]	MM4	—	—	[illegible]	[illegible]	[illegible]		古墳[illegible]中葉	複数切り合い



（1/4）



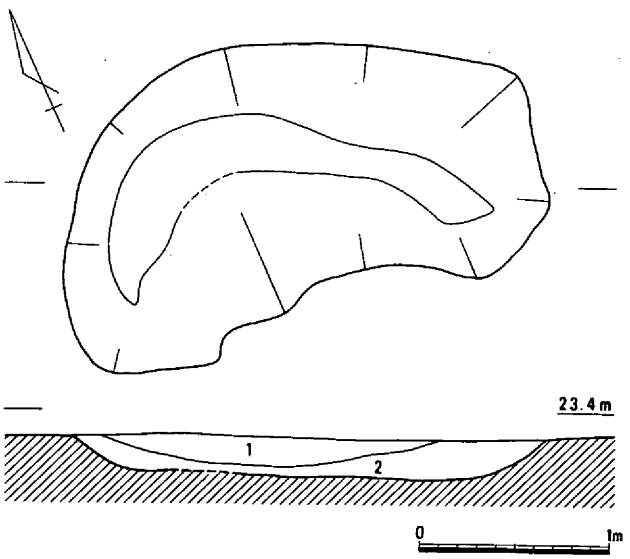
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
610	土師器	甕	13.0			良好	にぶい橙5YR7/3	精良	吉備型甕
611	土師器	甕	(10.0)			良好	にぶい黄橙10YR7/3	微砂	「く」の字状口縁・端部は丸く納める

土壙25は、ＭＭ４区に位置し、土壙59の南にある。

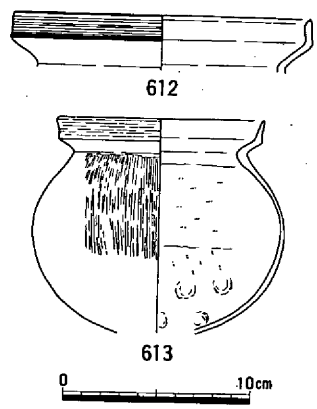
規模や形態について明確に把握することができなかった。東隅から南への辺を有するものと東辺に方形状に張り出し状のものとの２個の土壙の重複と推定される。しかし、土層および底面などの変化は認められなかった。また、竪穴住居の可能性を考慮したが、壁の掘り込みおよび柱穴の有無等について検討したが見出だすことはできなかった。

出土遺物は、**610**と**611**がどちらも土師器である。**610**は口縁端面に櫛描沈線文を施文する。時期は、これらの遺物から古墳時代前半と考える。　（下澤）

土壙26



（1/40）



（1/4）

1　暗灰褐色粘質土（炭粒少し含む）
2　灰黄褐色土（礫含む）

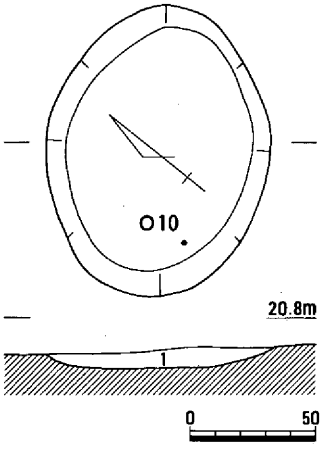
遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙26	ＭＭ４	269	184	22	不整円	椀	△	古墳前半中葉	

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
612	土師器	甕	17.8			良好	浅黄橙10YR8/4	微砂	吉備型甕・口縁部櫛描沈線
613	土師器	甕	11.0			良好	橙7.5YR7/6	微砂	吉備型甕・球形気味の胴部・底部内面に押圧痕

土壙26は、ＭＭ４区にあり、長さ269cm、幅184cmの東西に長い不整円形を呈し、深さは22cmを測る。土壙内より土師器甕２点**612・613**が出土している。

時期は、出土土師器から古墳時代前半と考えられる。　（伊藤）

土壙27



(1/30)

1　黒褐色粘質土

O10
(1/1)

土壙27は、ＭＭ１区に位置し、土壙46の南にある。

規模は118×90cm、深さ８cmを測り、平面形態は楕円形を呈する。土壙内から管玉が出土していることから土壙墓の可能性が考慮されたが、それを判断する内容をそれ以上得られなかった。

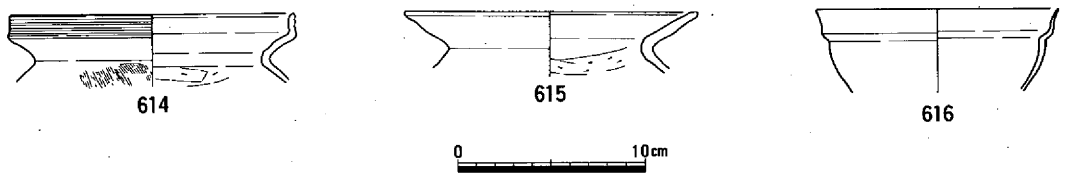
出土遺物は、土壙南壁近くから**O10**の管玉を検出している。他の遺物は須恵器の小片が認められている。この小片からは時期を判断しがたいが古墳時代の中に納まると思考される。　(下澤)

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙27	MM1	118	90	8	楕円	皿	△	古墳	管玉あり

掲載番号	器種	材質	色調	最大長(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
O10	管玉	碧玉		22.30	上4.2　下4.3	上2.1　下1.2	0.59	分析

土壙28

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙28	MBOX2	85	75	42	円	不明	△	古墳前半	



(1/4)

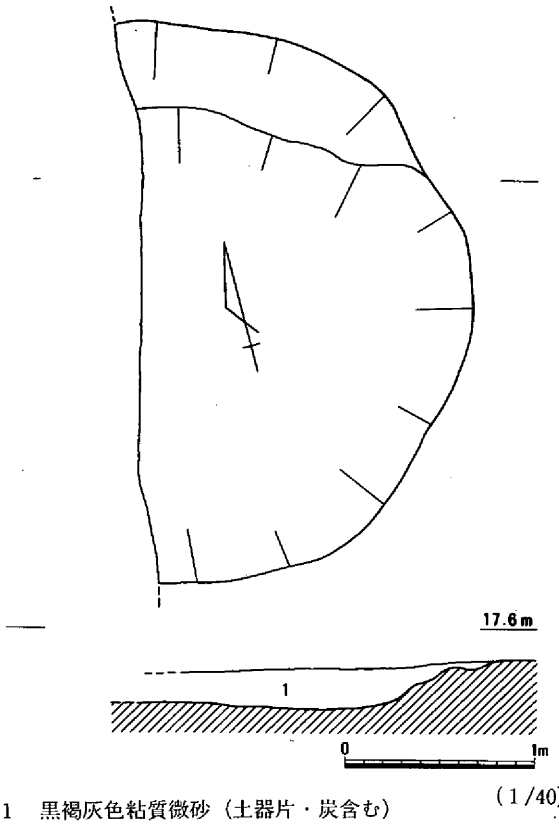
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
614	土師器	甕	(15.1)			良好	にぶい黄橙10YR7/3	微砂	吉備型甕
615	土師器	甕	15.6			良好	橙7.5YR6/6	細砂	「く」の字状口縁・端部丸く納める
616	土師器	鉢	(12.8)			良好	浅黄橙10YR8/3	微砂	鈍い二重口縁

土壙28は、遺跡の高位で検出された土壙であるが、検出当初は浅いくぼみとして認識していたため、個別の遺構図は掲載していない。

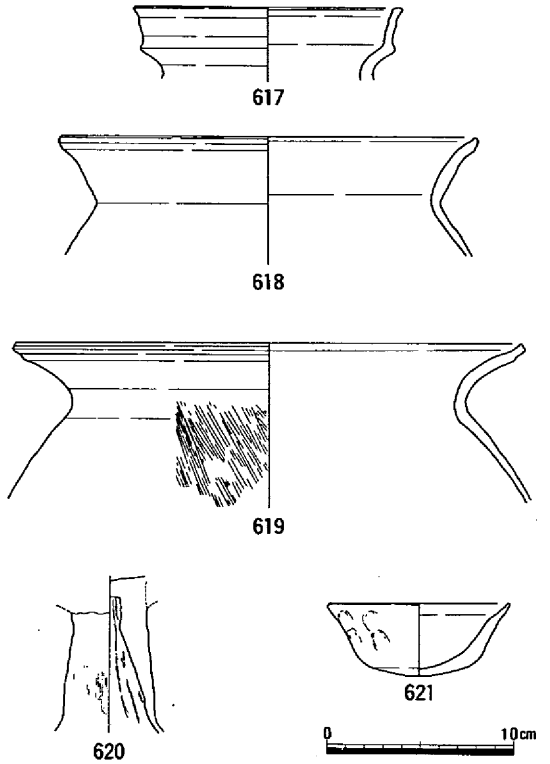
出土遺物には、口縁部に櫛描き沈線が巡る、いわゆる吉備型甕といわれる**614**のほか、**615**の甕や小形の二重口縁の鉢などがある。時期的には、古墳時代前半に比定される。

本遺跡では、吉備型甕の出土は稀少で特筆すべき遺物と考えられる。　(岡田)

土壙29



1　黒褐灰色粘質微砂（土器片・炭含む）　（1/40）



（1/4）

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙29	ＫＳ１	300	(300)	30	円	皿	○	古墳前半	

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
617	土師器	壺	(14.0)			良好	灰白10YR8/2	微砂	
618	土師器	甕	(22.2)			良好	橙7.5YR7/6	細砂	磨滅
619	土師器	甕	(27.0)			良好	にぶい橙7.5YR7/4	細砂	口縁部下を突線状につまみ出す
620	土師器	高杯				良好	にぶい黄橙10YR7/3	微砂	差し込み
621	土師器	鉢	(9.6)			良好	灰黄褐10YR6/2	微砂	てづくね　磨滅

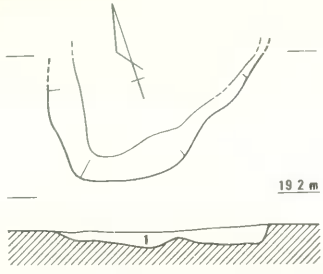
土壙29は、直径約３ｍを測るほぼ円形を呈する土壙のおよそ半分強の残存部分である。掘り方の西側は、南北方向の直線的な古代の溝13によって切られている。

掘り方は明瞭であるが、深さは20cmほどで壙底は浅く、比較的平坦である。埋積土は単一土層で、礫や炭片を多く含む黒褐灰色を呈する粘質の砂質土である。用途・性格などは不明である。

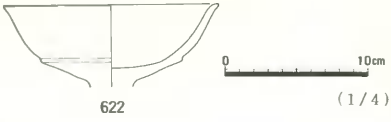
古代の溝などの遺構群が、淡灰色を基調とする埋積土であることが確かめられているのと対照的な暗い色調を観察することができる。

出土遺物はすべて古墳時代前期の土師器であるが、出土量はそれほど多くない。**617・618**の壺と甕の口縁部のほか、**619**の甕、**620**の高杯、**621**の小形の鉢などが図化できている。なお**621**は、手づくね土器である。　（岡田）

土壙30



1　灰褐色土（礫含む）　(1/40)



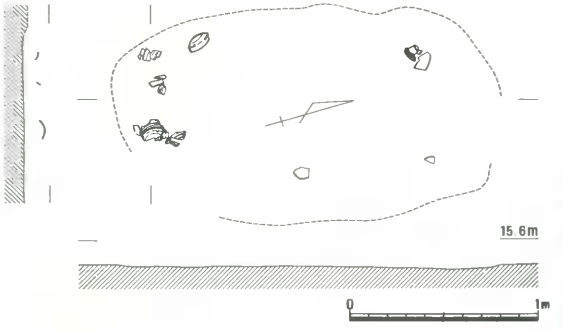
622　(1/4)

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙30	MBOX3	不明	不明	16	不明	逆台		古墳前半後葉	

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
622	土師器	高杯	(15.0)			良好	明赤褐5YR5/8	微砂	杯部は屈曲して外湾して立ち上がる

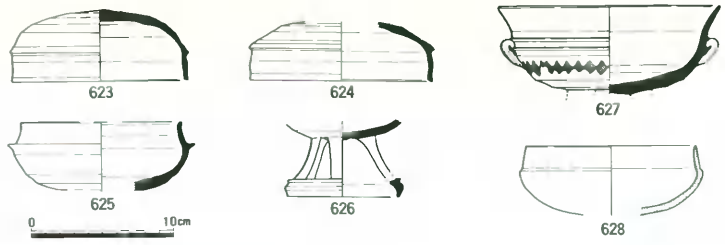
土壙30は、土壙29の北東約53mの位置に検出した。平面形が不明であるため平面形は確認していない。そのため全体の規模は不明であり、現状での最大幅152cmを測る。断面の形状は全体に浅くくぼむものであり、底面には浅い起伏がある。検出面からの深さは16cmを測る。土壙からは少しであるが土器が出土している。**622**は高杯である。杯部の内面は平らで、口縁部は開きながら立ち上がるものである。皿部との境に明瞭な稜線が見られる。土壙の時期は古墳時代前半後葉と考えられる。　(井上)

土壙31



(1/30)

遺構名	位置・調査区	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙31	KB		(1)		楕円	皿		古墳後半前葉	



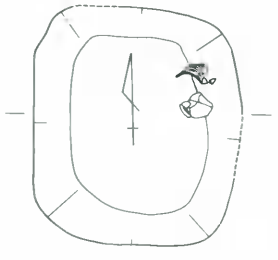
（1/4）

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
623	須恵器	蓋	(12.4)			良好	(内・外・断)灰白N7/	砂礫	内面仕上げナデ・ロクロ右回り
624	須恵器	蓋	(12.8)			良好	(内・断)灰白N7/　(外)灰白5Y7/1	砂礫	低い天井部・稜シャープ・自然釉・ロクロ右回り
625	須恵器	杯身	(11.2)			良好	(内・外・断)灰白N7/	微砂	ロクロ右回り・立ち上がり部ハリノケ
626	須恵器	高杯		7.9		良好	(内・外・断)青灰5B5/1	微砂	透かし孔3個・杯内面仕上げナデ
627	須恵器	把手付高杯	(15.6)			良好	(内・外・断)灰N6/	微砂	シャープな2段の稜・杯内面仕上げナデ
628	須恵器（土師質a）	杯	(12.0)			良好	(内・外・断)橙5YR6/6	精良	水漉し粘土状の精良な胎土、器壁磨滅で稜は不明瞭・立ち上がり部は内傾する

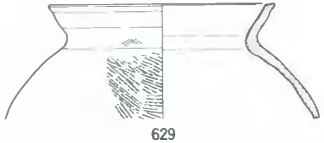
土壙31は、遺跡の低位部すなわち掘立柱建物1の南東方約10m、たわみ1の北西方約5mに位置する。掘り方は不鮮明で浅く、深さは4.5cmを測る。かろうじて楕円形の平面形が看取されたが、これは遺物の出土範囲といってよい。

出土遺物には、古式の須恵器といわゆる赤焼けの須恵器が共伴して存在する点が注目され、とりわけ**628**の杯と考えられる土師質の須恵器は精良な水漉し粘土が使われている点が特筆される。（岡田）

土壙32



1　茶褐色粘質土　　（1/30）



（1/4）

土壙32は、ＫＭ１区に位置し、墓５と重複している。

規模は127×109cm深さ12cmを測り、平面形態は隅丸方形を呈する。墓５とは東隅よりで認められたが、この土壙の埋土中に掘り込まれた状態であったため底面には達していなかった。

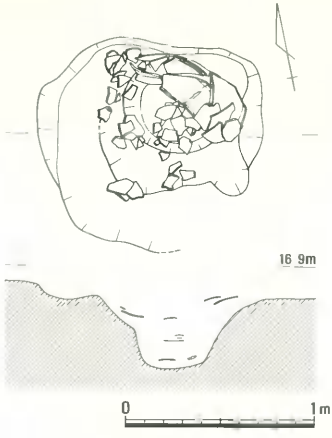
出土遺物は、北隅よりに**629**の須恵器が出土した。土師質のｃとしたものである。時期は、５世紀後半とされる。

（下澤）

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	上器	時期	備考
土壙32	ＫＭ１	127	109	12	隅丸方	皿	△	古墳後半中葉	

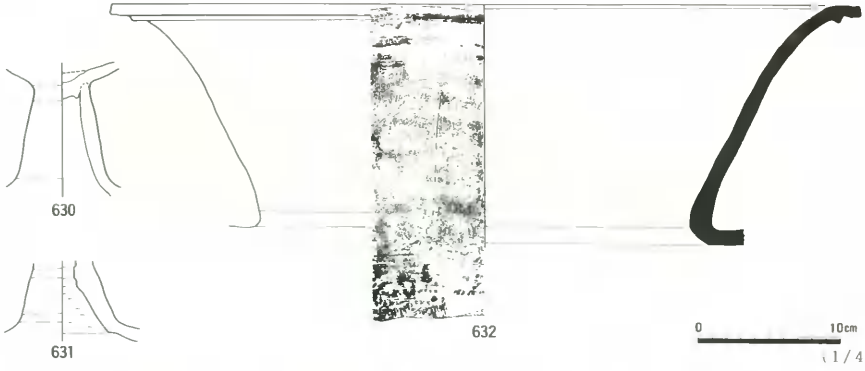
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
629	須恵器（土師質）	甕	16.1			良好	(内・外・断)7.5YR6/6	細砂	外面平行タタキメ・端部面をもつ

土壙33



(1/30)

遺構名	位置(調査区)	規模(cm)			平面形	断面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
土壙33	ＫＳ１区	120	102	43	不整円	凹台	○	古墳[illegible]業	



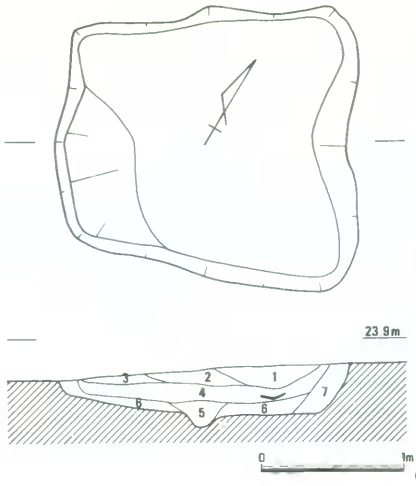
(1/4)

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
630	土師器	高杯				良好	にぶい橙7.5YR7/4	細砂	
631	土師器	高杯				良好	淡赤橙2.5YR7/3	砂礫	
632	須恵器	大甕	53.0			良好	(内・断)灰赤7.5R5/2 (外)暗灰N3	微砂	[illegible]比較的明瞭

土壙33は、隅丸の方形に近い不整な円形を呈する小土壙であるが、深さは40cmを越える。壙底は、径約30cmあまりで比較的平らである。

埋積土は灰黒褐色で、掘り方の全体上面から壙底にかけて、**630**・**631**の土師器高杯と**632**の須恵器大甕の口頸部が出土している。**632**は、硬く焼き締まった灰色を呈する古式の須恵器で、大きく外反する口縁部は角張って終わる。口縁端部からやや下がった位置に断面三角形を呈する鋭い突帯が巡る。内外面には、ナデ調整の痕跡が明瞭に観察される。体部の破片はほとんどみられなかったが、内面はタタキが擦り消されているようである。　(岡田)

土壙34



（１/40）

1　暗褐灰色粘質土（炭・焼土粒含む）
2　褐灰色粘質土（炭・焼土粒含む）
3　淡茶灰色粘質砂（炭・焼土粒含む）
4　淡褐灰色色粘質砂（炭・焼土粒含む）
5　暗褐灰色粘質土（炭・焼土粒含む）
6　褐灰色粘質土
（炭・焼土粒・黄褐色粘質土ブロック含む）
7　暗褐灰色粘質土

遺構名	位置（調査区）	規模（cm）			平面形	断面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
土壙34	MBOλ1	204	195	44	小整方	椀	△	古墳後半前葉	

（１/４）

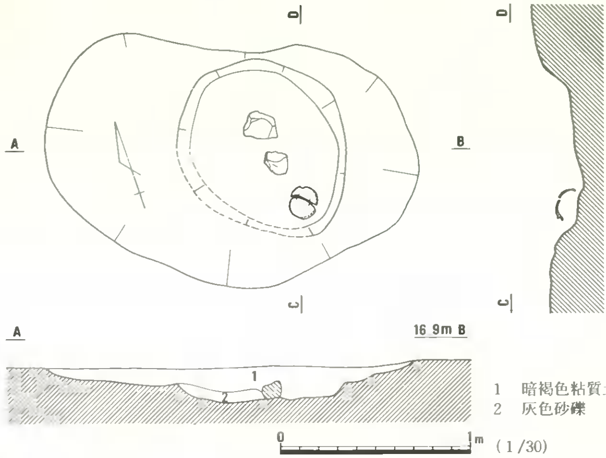
633

掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
633	須恵器	大甕	49.8			良好	（内）灰N5/　（外）暗灰N3/ （断）褐灰5Y R6/1	細砂	口縁部下に断面一角形の突線・頸部外面板状工具による調整

土壙34は、ＭＢＯＸ１区の北西部に位置する。検出の際に、土壙の範囲には炭化物や焼土が多く見られた。断面図に示すように、埋土中にも炭化物や焼土、地山ブロックを含んでいる。壁面の立ち上がりがかなり急であるが、貼り床・壁体溝は存在せず、底面も平坦ではない。また平面形も正確な方形を意図しているとは言えず、規模の点からみても竪穴住居とは考えがたかった。そのため土壙としてここで取り扱った。

出土遺物には、図示した須恵器大甕**633**の他に土師器小片がある。**633**は４層から出土している。時期はこの大甕から田辺昭三編年のＴＫ73型式に相当する可能性があるが、およそ５世紀の中頃と考えておきたい。　（氏平）

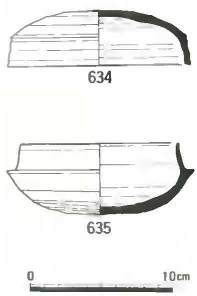
土壙35



1　暗褐色粘質土（礫含む）
2　灰色砂礫

(1/30)

遺構名	位置(調査区)	規模(cm)			平面形	断面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
土壙35	ＫＳ１	200	12[illegible]	[illegible]	不整楕円	皿	○	古墳後半中葉	

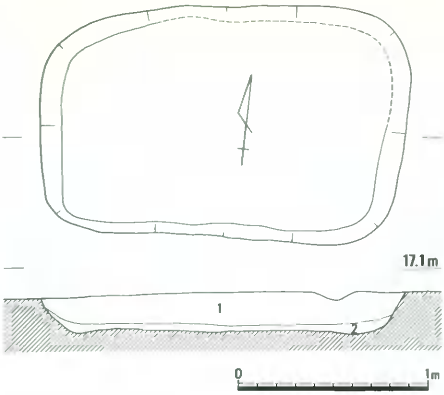


掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
634	須恵器	杯蓋	12.8		4.[illegible]	良好	内・外・断 灰N[illegible]	細砂	稜下部に凹線・端部面をなす・ロクロ右回り
635	須恵器	杯身	11.0		5.1	良好	内・外・断 灰N6	細砂	内面仕上げナ[illegible]・ロクロ右回り・[illegible]次的に火を受けた[illegible]器壁がは[illegible]れ[illegible]箇所あり

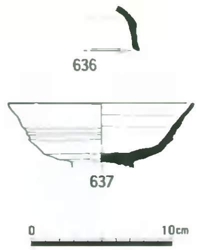
土壙35は、土壙33の北西約５ｍに位置する。上面は、溝12によってかなり削平されている。平面形は不整な長円形を呈するが、やや東寄りに径約90cmの円形の深まりがあり、そこから礫とともに**634**・**635**の須恵器杯の蓋・身のセットが出土している。正確には、この部分が土壙の掘り方といえるかもしれない。

壙底は平坦で、人工的に掘りくぼめられたことが推定されるが、性格等は不明である。　（岡田）

土壙36



(１/30)



(１/４)

1　茶灰褐色土
2　灰褐色土

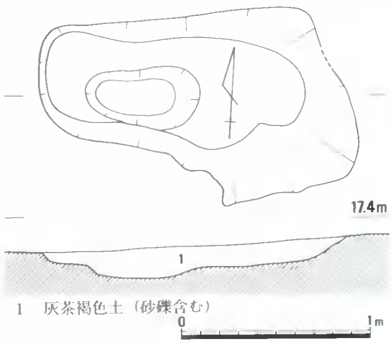
遺構名	位置(調査区)	規模(cm)			平面形	断面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
土壙36	ＫＭ４	193	128	24	隅丸長方	逆台	△	古墳後半中葉	

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
636	須恵器	蓋	(12.2)			良好	(内・断)灰白N7/　(外)灰N6/	微砂	端部面を持つ
637	須恵器	高杯	(13.2)			良好	(内・外)明青灰5PB5/1 (断)暗青灰5PB4/1	微砂	２条の凹線状のくぼみ

土壙36は、Ｕ８・９グリッド(ＫＭ４区)に位置する。平面形は隅丸の長方形で、規模は長さ193cm、幅128cm、検出面からの深さ24cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立ち上がる。

遺物は須恵器が少量出土した。須恵器の時期は５世紀末前後と考えられる。　　　　(平井)

土壙37



1　灰茶褐色土（砂礫含む）

(１/30)

土壙37は、Ｔ９グリッド(ＫＭ４区)に位置する。平面形は西側の幅が狭いのに対し東側が広くなる不定形を呈する。規模は長さ176cm、最大幅113cm、検出面からの深さ25cmを測る。底部はほぼ平坦であるが、西寄りの部分が楕円形に浅く掘られいる。壁は緩傾斜で立ち上がる。埋土は１層で、砂礫を含む灰茶褐色土が認められた。

遺物は土師器がわずかに出土した。図示できたのは高杯の脚部で、時期は５世紀代のものと考えられる。　　　　(平井)

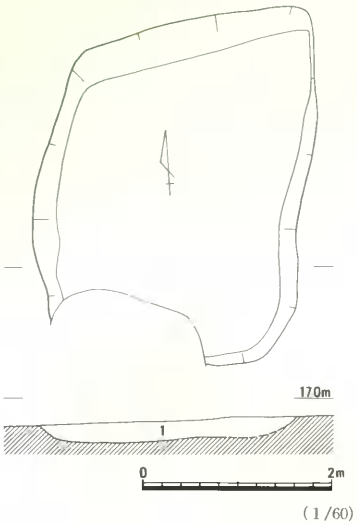
638

(１/４)

遺構名	位置(調査区)	規模(cm)			平面形	断面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
土壙37	ＫＭ４	176	113	25	不整長方	Ⅲ	△	古墳後半中葉	

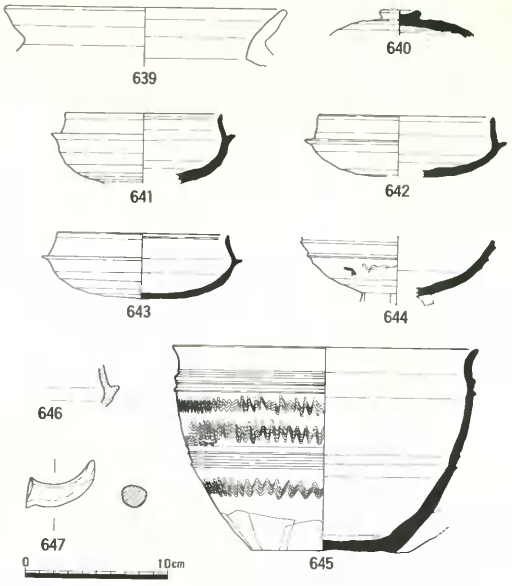
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
638	土師器	高杯		10.65		良好	[illegible]	[illegible]	[illegible]

土壙38



（１/60）

１　暗茶褐色土（砂礫多く含む）



（１/４）

遺構名	位置（調査区）	規模（cm） 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙38	ＫＭ５	（378）	（281）		不整長方	皿		古墳後半前葉	

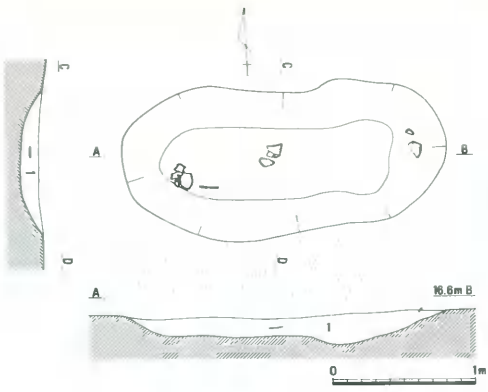
掲載番号	種別	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
639	土師器	甕	(20.0)			良好	にぶい橙7.5YR6/4	微砂	口縁部強いヨコナデ
640	須恵器	蓋				良好	(内･外)灰N6/　(断)灰褐N4/2	細砂	ロクロ右回り
641	須恵器	杯身				良好	(内)灰N6/　(外)灰N4/ (断)灰赤2.5YR5/2	精良	端部くぼみ有り・受け部分に重ね焼の痕跡か？・ロクロ右回り
642	須恵器	杯身	(12.3)			良好	(内･外)灰N6/　(断)灰N5/	精良	端部鈍い面有り・重ね焼痕跡
643	須恵器	杯身	12.0		4.7	良好	(内･外･断)灰N6/	精良	口縁端部くぼみ有り・内面仕上げナデ・ロクロ右回り・歪み大
644	須恵器	高杯				良好	(内)灰褐5YR5/2　(外)黒褐7.5YR3/1　(断)灰N6/	精良	波状文かすかに残る・２段の穿
645	須恵器	把手付椀	21.3		14.6	良好	(内)灰白N4/　(外)灰N5/ (断)灰N6/	精良	把手が付くか不明・体下半静止ヘラケズリ・底部に井桁状の痕跡
646	須恵器（土師質で）	杯身				良好	(内･断)にぶい橙7.5YR6/4 (外)灰黄2.5Y7/2	精良	稜鈍い
647	軟質系土器？	（把手）				良好	にぶい橙7.5YR7/4	精良	角状[illegible]

土壙38はＫＭ４区とＫＭ５区にまたがって検出された。不整な長方形を呈し、長さ約380cm、幅約280cmほどを測る。深さは30cmほど残存していた。出土遺物が無く、掲載できなかったほぼ同時期と推察される他の土壙２基と重複している。

この土壙からは比較的多くの土師器、須恵器が出土した。土師器は**639・647**を図示した。特に**647**は椀状のものの把手と考えられるものである。**640～646**は須恵器である。**644**の高杯は２条の突線の下に波状紋が施されている。**645**は把手付椀である。器高14.6cmを測りやや大形品である。外面下半は静止ヘラケズリで調整されている。**646**は橙色を呈する焼成であり杯身の受部の部分である。

これらの出土遺物からこの土壙の時期は古墳時代後半前葉と考えられる。　（大橋）

土壙39



（1/4）

1　暗灰茶褐色土（炭・黄褐色土含む）　（1/40）

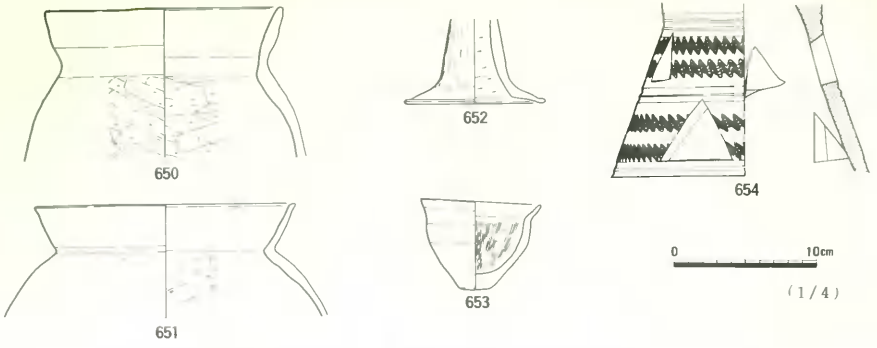
遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙39	KM5	226	115	21	長楕円	皿		古墳後半前葉	

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
648	須恵器	蓋	(12.3)		5.0	良好	(内) 灰白N7　(外) 青灰5PB6/1 (断) 青灰5PB6/1	微砂	端部わずかに段有り・ロクロ右回り
649	須恵器	壺?				良好	(内)紫灰5P5/1 (外)暗紫灰5P4/1 断)赤褐10R4/3	精良	口縁部下に2条の突線

土壙39は土壙38の南西約3mの位置にある。後述する土壙49の下部で検出され、別の土壙として認識した。長軸226cm、短軸115cmを測る長楕円の平面形を呈する。図示した出土遺物から5世紀末の時期が考えられる。　（大橋）

土壙40

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙40	KM5	(90)	不明	(10)	(方)	皿台		古墳後半中葉	



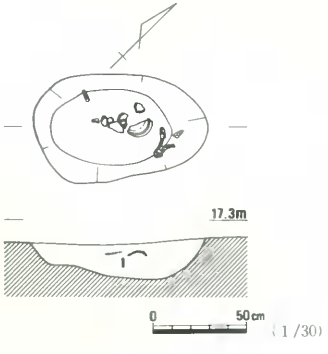
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
650	土師器	甕	(16.6)			良好	灰黄2.5Y6/2	微砂	外面のハラケズリ明瞭に残る・スス付着
651	土師器	甕	(18.4)			良好	浅黄橙10YR8/3	精良	端部明瞭に面をなし、須恵器風・外面磨滅
652	土師器	高杯		(9.5)		良好	橙7.5YR7/6	微砂	脚柱部板状工具による調整で面がかすかに形成される
653	土師器	小形鉢	8.4	2.3	6.3	良好	浅黄2.5Y7/3	細砂	外面磨滅・内面ハラ[illegible]ガキ
654	須恵器（土師質ｂ）	器台				不良	橙5YR7/6	細砂	外面磨滅・２条一組の沈線３段にはさまれた櫛描波状文・カキメ状の条線がかすかに観察できる

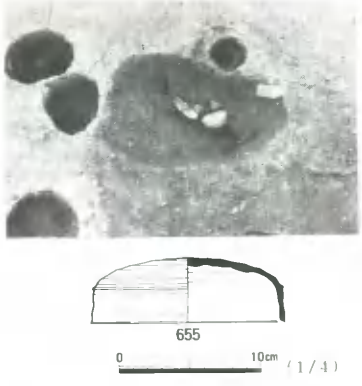
土壙40は、ＫＭ５区の南西隅で検出された方形を呈する大形の土壙である。一辺約950cmほどを測るが、深さ約10cmほどと残存状況は悪い。調査時の不手際から詳細は不明となってしまった。

出土遺物は**650**～**654**を図示した。**650**～**653**は土師器であり、**651**の甕の口縁端部は明瞭に面を有する。**654**は赤褐色を呈する土師器に近い焼成の須恵器の器台である。

これらの出土遺物からこの土壙の時期を５世紀後半段階に判断した。　（大橋）

土壙41





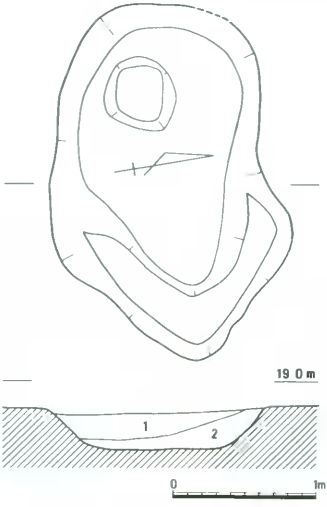
1　暗茶褐色土（焼土・炭含む）

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙41	ＫＭ５	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	椀	[illegible]	古墳後半中葉	

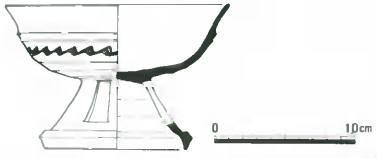
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
[illegible]	須恵器	杯蓋	[illegible]		[illegible]	良好	青灰5PB5/1	[illegible]	[illegible]

土壙41は、ＫＭ５区で検出された。土壙38の東方約10ｍの位置にある。長さ93㎝、幅59㎝、深さ22㎝を測る不整楕円形の平面形を呈する。図示した**655**の須恵器の杯蓋とともに骨片が出土しているが、遺存状況は悪く種別は不明であり、墓とは考えられなかった。土壙の時期は５世紀後半段階と考えている。　（大橋）

土壙42



（１/40）



656　（１/４）

1　暗灰褐色土
2　灰色土（黄褐色土含む）

遺構名	位置（調査区）	規模（cm） 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	上器	時期	備考
土壙42	MBOX3	254	160	39	楕円	椀	○	古墳後半中葉	

掲載番号	種別	器種	土量（cm） 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
656	須恵器	高杯	（16.4）	（12.1）		良好	暗青灰5PB3/1	細砂	杯部２条の突線の下に横描波状文

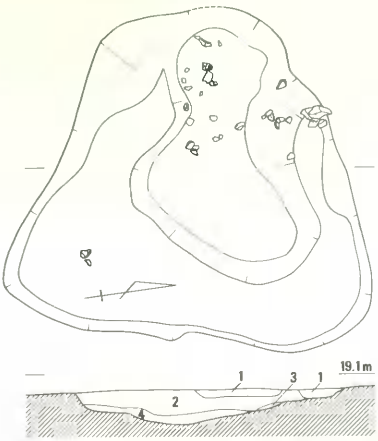
土壙42は、ＭＢＯＸ３区北側、竪穴住居60の東に位置する。

平面形は不整形で、検出面から約30㎝の深さで残っていた。東側にあるくぼみは別の柱穴の痕跡と考えられる。

埋土は２層で、単純な堆積を示している。

遺物は、須恵器の無蓋高杯**656**の他にも須恵器片が出土している。図示した高杯の脚部三方透かし、横描波状文等の特徴から、この高杯は田辺昭三編年のＴＫ23～47型式に相当し、土壙が埋没したのは５世紀後半～６世紀前葉であるといえよう。ただし、須恵器片の中には６世紀中～後葉の時期を示すものも存在するが、それらは混入した可能性が高いと思われる。　（氏平）

土壙43



1　淡灰茶色土（粗砂含む）
2　淡黄茶褐色土（微砂含む）
3　暗茶褐色粘質土
4　暗褐色粘質土（黄褐色土ブロック含む）

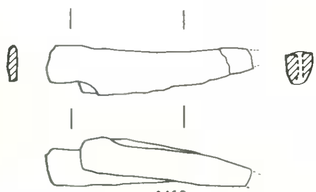
(1/60)

遺構名	位置(調査区)	規模(cm)			平面形	断面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
土壙43	MBOX3	[illegible]70	[illegible]	[illegible]	不整方	皿	[illegible]	古墳後半中期	

657

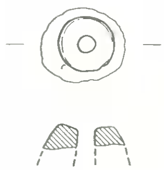
658

(1/4)



M19

(1/2)



R 8

(1/2)

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
657	須恵器	蓋	(12.1)		5.4	良好	(内・断)灰N6/　(外)灰N5/	精良	稜は沈線で表現・端部段有り・焼きぶくれ有り
[illegible]	須恵器	有蓋高杯	[illegible]			[illegible]	(内・外・断)灰N5	精良	[illegible]

掲載番号	器種	材質	法量				備考
			最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	
M19	刀子	鉄	64.[illegible]	16.[illegible]	4.[illegible]	12.24	[illegible]3枚重な[illegible]

掲載番号	器種	材質	[illegible]	色調	最大径(mm)	最大厚(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
R 8	紡錘車	滑石	－		[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	欠損

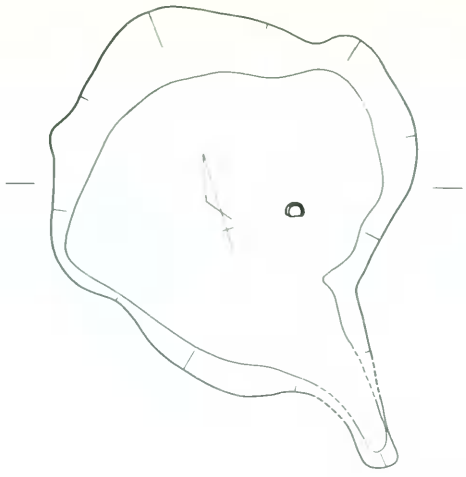
土壙43は、ＭＢＯＸ３区南端中央に位置する。平面形は不定形で、断面は浅いくぼみ状を呈する。また、遺物の出土状況は特定の部分への集中が見られず、散漫である。

出土遺物には須恵器の蓋**657**、有蓋高杯**658**、刀子**M19**、滑石製紡錘車**R 8**があり、図示したもの以外では須恵器の杯身・蓋、土師器の甕がみられた。

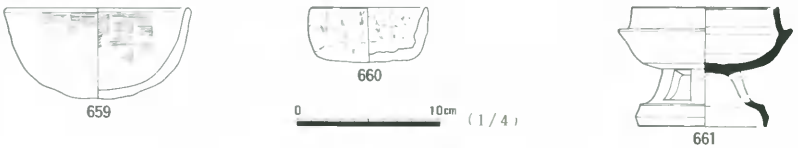
蓋、有蓋高杯は田辺昭三編年のＴＫ47型式に相当し、５世紀後葉のものである。当土壙の埋没時期もそのあたりに求められるであろう。

（氏平）

土壙44



遺構名	位置（調査区）	規模（cm） 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙44	MBOX3	[illegible]	[illegible]	39	不整方	皿	○	古墳後半中	

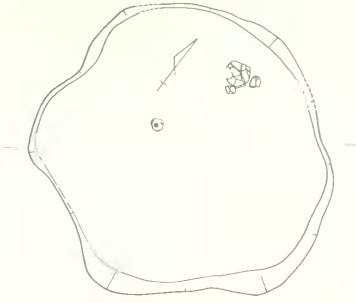


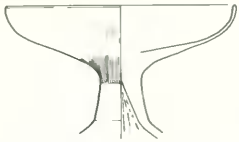
掲載番号	種別	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
659	土師器	鉢	(12.8)		6.5	良好	橙5YR6/6	精良	丸底・内外面ハケメのちナデ
660	土師器	平底杯	8.05	6.35	4.0	良好	橙5YR6/6	微砂	内外面ユビオサエのちナデ
661	須恵器	有蓋高杯	(10.3)	脚9.0		良好	(内・外)青灰5PB6/1 (断)明青灰5PB7/1	微砂	杯底ちょっと上がり部ハリツケ・端部段を有す

土壙44は、ＭＢＯＸ３区北側、竪穴住居60の上位に位置する。土壙の平面は不定形で、底面にはかなりの凹凸がある。

出土遺物は、土師器・須恵器ほかで、弥生時代後期の高杯から奈良時代の須恵器杯蓋までを含む。また、それらに混じってかなり多くの骨片が検出されている。遺物のうち、量が多いのは図示した須恵器が属する５世紀後葉のものであり、土壙の機能していたのもその時期であろう。この土壙は竪穴住居60廃絶後のくぼみを利用したごみ穴と考えられる。（氏平）

土壙45

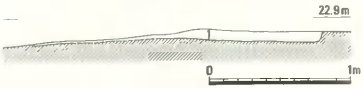




662

663

(１/４)



(１/40)

１　灰黄褐色粘質土

遺構名	位置(調査区)	規模(cm)			平面形	断面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
土壙45	ＭＭ４	216	208	9	不整円	逆台	△	古墳後半中葉	

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
662	土師器	高杯	(16.0)			良好	明赤褐5YR5/8	微砂	浅い鉢状の杯部・外面ハケメ残る
663	須恵器	杯蓋	(11.6)			良好	(内)灰N5/　(外)灰N6/ (断)灰赤10R5/2	精良	稜は鋭くつまみ出す・端部凹部あり・ロクロ右回り

土壙45は、ＭＭ４区に位置し、土壙58の東にある。

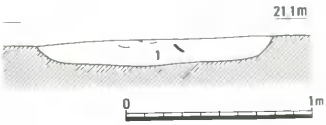
規模は216×208cm、深さ９cmを測り、平面形態は不整円形を呈する。底面は平坦となっている。

出土遺物は、**662**の土師器と**663**の須恵器であり、時期は５世紀後半を示す，　　(下澤)

土壙46

664

(１/４)



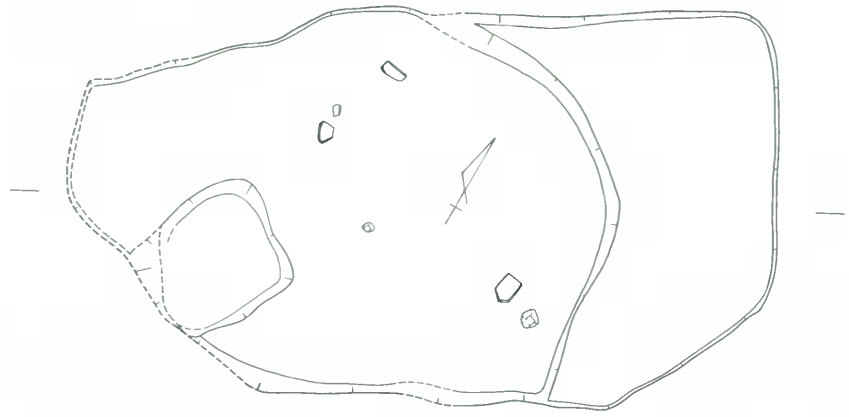
１　暗灰褐色粘質土　　(１/30)

遺構名	位置(調査区)	規模(cm)			平面形	断面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
土壙46	ＭＭ１	[illegible]	[illegible]	14	不[illegible]	楕		古墳後半中葉	

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
664	須恵器	杯身	11.7			良好	(内・外・断)灰N[illegible]	砂礫	[illegible]部ハリツケ・端部は[illegible]まみ出[illegible]、面を[illegible]成・[illegible]回り

土壙46は、ＭＭ１区にあり、長さ159㎝、幅127㎝の不整方形状を呈す。深さは検出面より14㎝である。土壙内より出土した須恵器杯身**614**を図示した。土壙の時期は出土須恵器から５世紀末頃と考えられる。（伊藤）

土壙47



1　暗灰褐色粘質土（礫多く含む）
2　暗茶褐色粘質土

（１/40）

遺構名	位置（調査区）	規模（cm） 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙47	ＫＢ１	364	230	[illegible]	不整六角			古墳後半前葉	

（１/４）

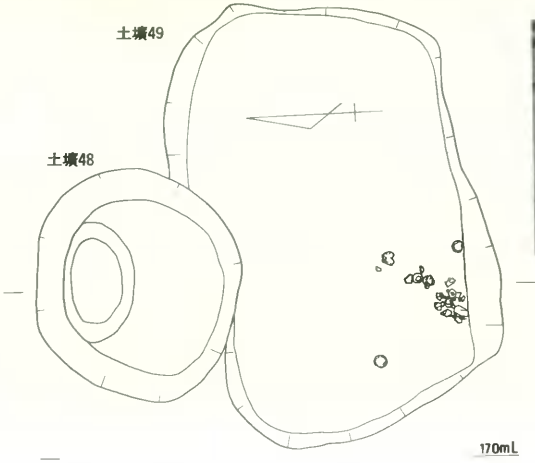
掲載番号	種別	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
665	土師器	高杯				良好	灰白10YR8/2	細砂	接合部差し込み
666	須恵器	蓋				良好	青・外・断：青灰5PB6/1	微砂	[illegible]

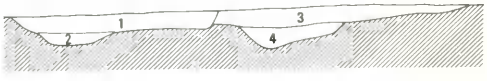
土壙47は、遺跡の低位部にあり、井戸７の西約７ｍに位置する。二つのいびつな掘り方が重なった状態で検出された。

検出当初は、竪穴住居の可能性も十分に考えられたため、精査を実施したが、柱穴等は明確に検出できなかった。小規模な竪穴の工房の可能性もある。

平面形の西側部分で、須恵器や土師器に混じって鉄滓が出土している点が特筆される。出土遺物のうち須恵器には、壺・甕の破片のほか**666**の蓋がある。また土師器には**665**の高杯のほか甕片もみられる。時期的には、古式須恵器の時期とみてよいだろう。（岡田）

土壙48・49

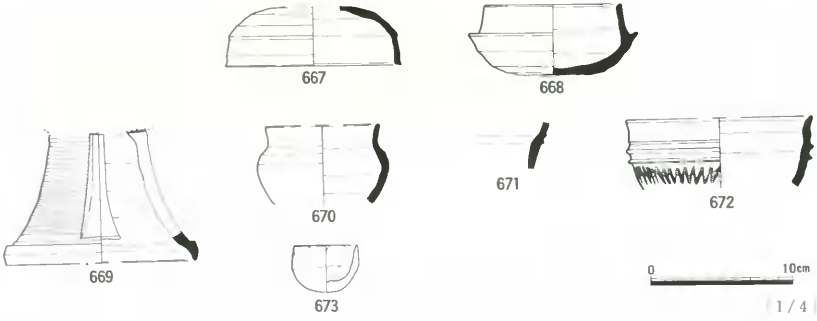




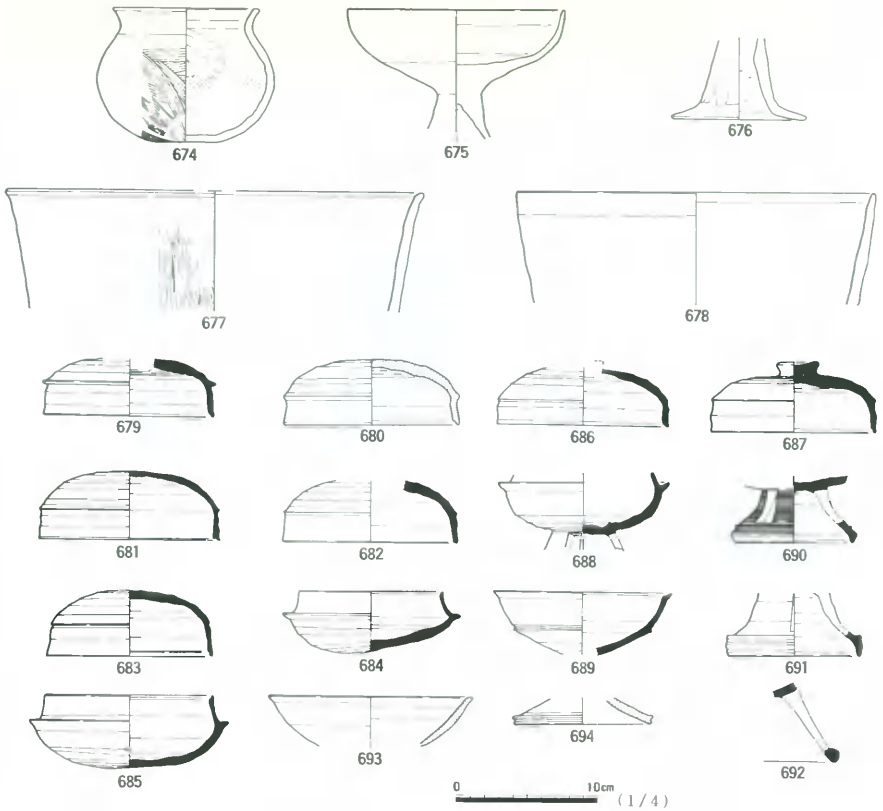
1　暗褐色土
2　暗灰黄色土
3　暗茶灰褐色土（小礫含む）
4　暗灰茶褐色土（土壙39埋土）

0　2m　(1/60)

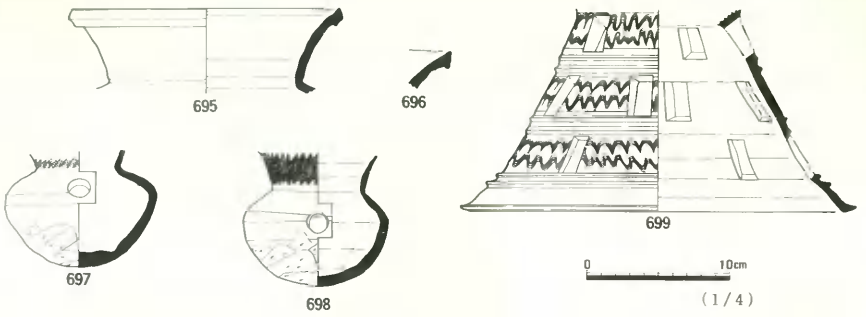
遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙48	KM5	252	228	32	楕円	逆台	◎	古墳後半中葉	
土壙49	KM5	480	(310)	22	不整長方				



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
667	須恵器	蓋	(12.5)			良好	内･断)灰N6/1　外)灰5Y4/1	精良	端部面を形成・稜は鈍い　ロクロ右回り
668	須恵器	杯身	(9.5)		5.0	やや不良	内･外･断)灰白N7/	砂礫	器壁やや厚減・端部わずかに面を形成・ロクロ右回り
669	須恵器	高杯	(13.4)			良好	内･外･断)灰N6	精良	脚柱部カキメ
670	須恵器	小形壺	(8.0)			良好	内･外･断)褐灰10YR6/1	細砂	端部丸く納める
671	須恵器	甕				良好	内･外･断)灰N5/	微砂	器種不明・突線２条と、その下に櫛描波状文
672	須恵器	把手付鉢	(13.0)			良好	内･外)灰5Y6/1 断)灰赤10R5/2	精良	把手部欠損・端部内面にわずかにくぼみあり
673	須恵器	壺または甕	(4.4)		3.4	良好	黄2.5Y8/3	微砂	ユビナデ・イサエ



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
674	土師器	鉢	10.1		9.6	良好	にぶい橙7.5YR7/4	細砂	内面はユビナデ上げる・端部に面形成
675	土師器	高杯	15.2			良好	橙2.5YR6/8	精良	接合部差し込み・器壁磨滅
676	土師器	高杯		9.1		良好	浅黄橙7.5YR8/3	微砂	接合部中空・軸部に縦方向の棒
677	土師器	鉢	29.0			良好	にぶい黄橙10YR7/3	細砂	外面ハケメ・端部わずかに外反
678	土師器	鉢	25.3			良好	橙5YR6/6	細砂	器壁磨滅
679	須恵器	蓋	11.9			良好	内・外・断1灰N5	微砂	端部段有り・稜下に浅線状のくぼみ
680	須恵器（土師質で）	蓋	12.2			不良	内：橙5YR6/6 外・断：にぶい黄橙10YR7/4	砂礫	接点なし・図上復元・焼成は土師器・器壁磨滅
681	須恵器	蓋	12.8		4.9	良好	内・外・断1灰N6/1	微砂	端部段有り・天井部内面仕上げナデ・ロクロ右回り
682	須恵器	蓋	13.4			良好	内・外・断：にぶい赤褐2.5YR4/4	精良	備前焼のような発色・稜鈍く鋭い・天井部内面仕上げナデ・ロクロ右回り
683	須恵器	蓋	11.6		4.7	良好	内・外・断1灰N5/1	微砂	稜下に浅線状のくぼみ・端部段有り・ロクロ左回り
684	須恵器	杯身	10.1		4.5	良好	内・外・断1灰N5/	砂礫	水平方向に延びる稜・仕上げナデ・ロクロ右回り
685	須恵器	杯身	11.8		5.3	良好	内・外・断1青灰5PB5/1	微砂	端部浅線状のくぼみ・ロクロ右回り
686	須恵器	蓋	12.2			良好	内・外・断1灰N5/	微砂	稜下端にくぼみ・ロクロ右回り
687	須恵器	蓋	11.6		5.1	良好	内・外：青灰5PB5/1 断：紫灰5RP5/1	微砂	端部段有り・稜はやや鋭い・ロクロ左回り
688	須恵器	有蓋高杯				良好	内・外・断1灰N6/	微砂	透かし孔3方向・ロクロ左回り
689	須恵器	高杯	12.7			良好	内：灰N5/1　外：灰N4/1 断：灰赤2.5YR5/2	精良	口縁端部段有り・杯底面部に浅線・蓋乃可能性有り
690	須恵器	高杯		9.4		良好	内・外：灰N6/　断：赤褐5YR4/6	精良	脚部カキメ状・透かし孔3方向
691	須恵器	高杯		9.2		良好	内・外・断1灰N6/1	細砂	脚端部・断面やや鋭い三角形
692	須恵器	高杯				良好	内・外1青灰5PB5/1 断：にぶい赤褐7.5R4/3	微砂	端部・断面丸みを帯びる
693	須恵器（土師質）	高杯	14.4			やや不良	内・外・断1橙5YR7/6	微砂	脚上は精良・端部つまみ出す
694	須恵器（土師質で）	高杯		9.6		やや不良	内・外・断1橙2.5YR6/6	微砂	



挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
695	須恵器	甕	19.6			良好	(内・断)灰N5/　(外)灰N4/	細砂	口縁部断面三角形・頸部下端に沈線状のくぼみあり
696	須恵器	甕				良好	(内・外)灰白N7/ (断)紫灰5RP5/1	微砂	口縁部下に櫛描波状文
697	須恵器	甕	10.7			良好	(内・外・断)灰N6/	砂礫	胴下半静止ヘラケズリ
698	須恵器	甕				良好	(内・外)灰N6/ (断)暗赤褐5YR3/2	微砂	胴下半静止ヘラケズリ
699	須恵器	器台		脚(26.0)		良好	(内・断)褐灰7.5YR4/1 (外)褐灰10YR4/1	精良	2条1組の突線にはさまれて櫛描波状文

土壙48・49は、土壙38の南西約3mの位置で検出された。やや楕円形を呈するものを土壙48、これと重複し先行する不整方形のものを土壙49とした。

土壙48は、長径約250cm、短径約228cmを測り、検出面からの深さ32cmほどが残存していた。底面は北側が一段低くなる。出土遺物は**667**～**672**の須恵器、**673**の土師器の手づくねを図示した。**667**が杯蓋、**668**は杯身。**669**は高杯、**670**は短頸壺、**671**は甕の破片と考えられる。**672**は椀である。

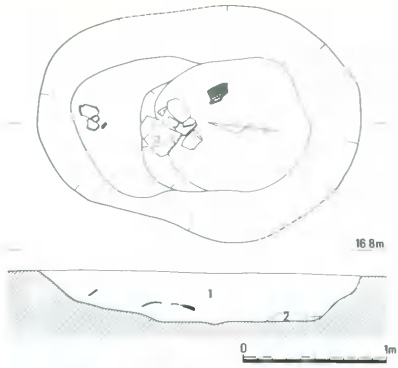
土壙49は、長軸約480cm、短軸約310cmを測る。検出面からの深さは22cmある。また、この土壙の底面下で、土壙39を検出している。断面図の4層がこれにあたる。

この土壙49からは比較的多くの土師器、須恵器が出土しており、特に南西部に集中していた。このうち**674**～**699**を図示した。**674**～**678**が土師器、**679**～**699**が須恵器である。**674**はやや平坦ぎみの底をもち、プロポーションからみて鉢と考えた。**675**・**676**は高杯、**677**・**678**は甑の口縁部である。

679～**683**は杯蓋である。特に**679**は天井部が低く稜部が水平方向につまみ出すもので、他とは違った形態を示す。また、**680**は土師質の焼成のものである。**684**・**685**は杯身、**686**・**687**は高杯の蓋と考えた。**688**～**692**は高杯としたが、**689**については断面が灰赤色を呈し、蓋とも考えられるものである。**693**は精良な胎土で硬質の土師質焼成であり、器形的にも須恵器とはやや異なるものの、端部の成形の手法からここでは須恵器に分類している。**692**は小破片であるが多窓透かしの可能性がある。**695**・**696**は甕の口縁部。**697**・**698**は甕であり、体部下半は静止ヘラケズリで調整されている。**699**は器台である。

これら出土遺物には**695**のように比較的新しいものが含まれているが、おおむね5世紀後半段階のものが多い。このことから、土壙48・49をこの段階の所産と判断した。　　(大橋)

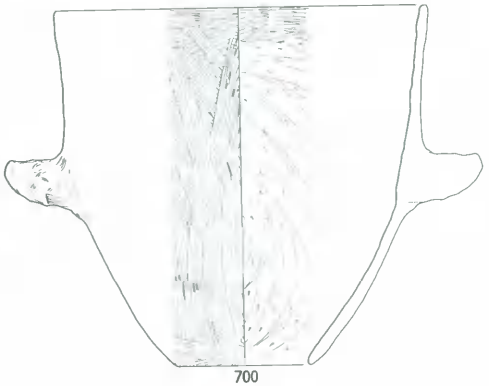
土壙50

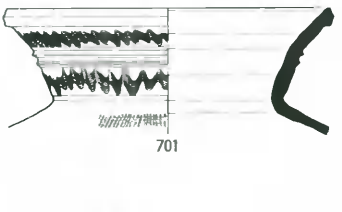


（１/40）

1　暗灰色粘土（礫含む）
2　灰色粘質土・黄褐色土ブロック混合（礫多く含む）

遺構名	位置（調査区）	規模（cm） 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙50	ＫＭ５	226	168	36	楕円	皿	△	古墳後半中葉	





（１/４）

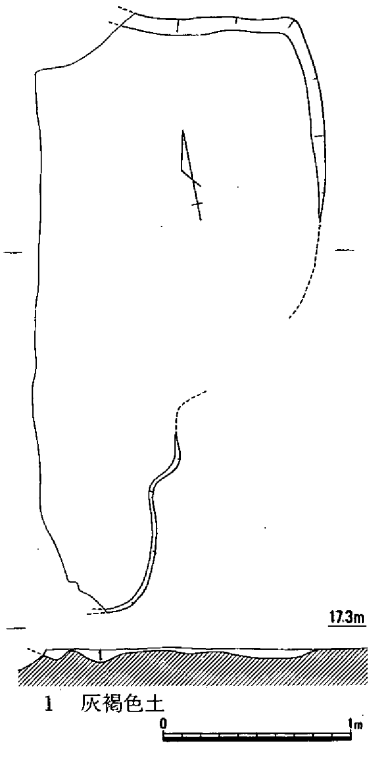
掲載番号	種別	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
700	土師器	甑	(26.1)		25.5	良好	にぶい黄橙10YR7/4	砂礫	底部刺離・外面粗いハケメ・ヌス付着
701	須恵器	甕	23.0			良好	(内)灰N5/1　(外)灰N4/1 断(灰N6/1	細砂	口縁部２条の突線の上下に櫛描波状文・体部平行タタキメ

土壙50は、ＫＭ５区で検出され、土壙48・49の南西約20ｍに位置する。

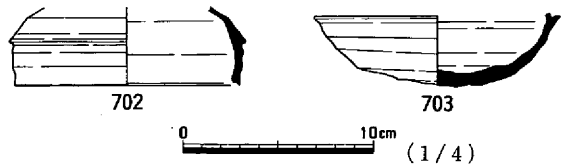
長さ226cm、幅168cmを測る楕円形の平面形をもつ。検出面からの深さ約36cm残存していた。底面はやや平坦ぎみであった。この底面で図示した**700**の土師器の甑と**701**の須恵器の甕が出土した。**700**は器高25.5cmに復元される。**701**は口径23cmを測り、頸部に突線を２条巡らしてその上下に波状文を施している。このほかの出土遺物は細片でほとんどなかった。

図示した出土遺物から土壙50の時期を５世紀末と考えた。　（大橋）

土壙51



（１/40）



（１/４）

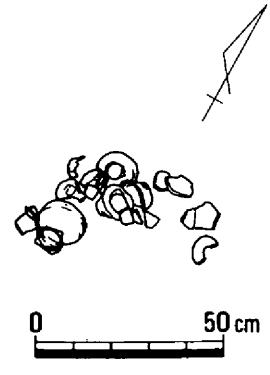
土壙51は、Ｓ・Ｔ９グリッド（ＫＭ４区）に位置する。平面形は南北に長い不定形を呈する。規模は残存状態が悪いため明確でないが、残存部の南北は320cmあまりである。深さも浅く、底部は凹凸が著しい。

遺物は須恵器が少量出土した。**702**は杯蓋で、天井部と口縁部を画する稜は鋭く、口縁端部に面をもちくぼみが巡る。**703**は杯身で受部の立ち上がりは欠損している。時期は５世紀の終わり頃から６世紀の初め頃と考えられる。　（平井）

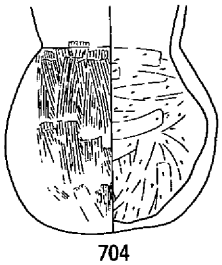
遺　構　名	位置（調査区）	規模（cm）			平面形	断面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
土壙51	ＫＭ４	不明	不明	不明	不明	不明	○	古墳後半中葉	

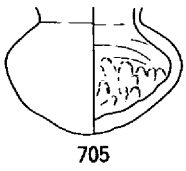
掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
702	須恵器	蓋	(11.9)			良好	(内・外)青灰5PB6/1 (断)紫灰5RP5/1	微砂	端部くぼみあり・稜鋭い・ロクロ左回り・自然釉
703	須恵器	杯身				良好	(内・断)灰N5/1　(外)灰10Y4/1	微砂	ロクロ左回り・自然釉・受部欠損

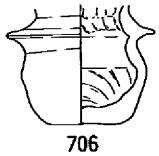
土壙52

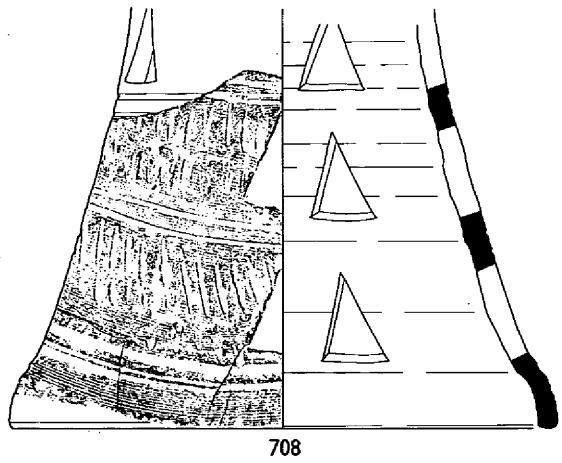


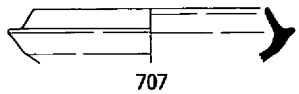
（１/20）


704


705


706


708


707

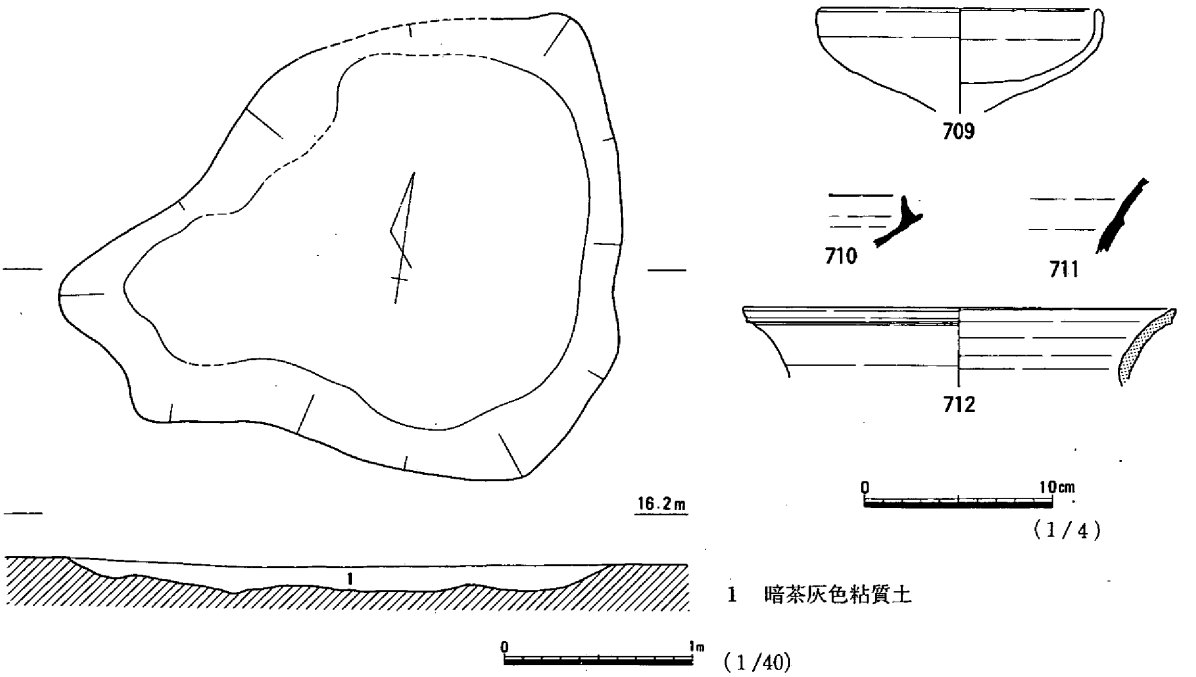
（１/４）

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙52	MBOX3	不明	不明	不明	不明	不明	○	古墳後半末葉	

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
704	土師器	壺				良好	淡橙5YR8/4	砂礫	平底ぎみ・外面ハケメ・器壁厚い
705	土師器	小形壺				良好	橙5YR6/6	微砂	外面ヘラケズリのちナデ・内面はナデアゲか？
706	土師器	小形壺		4.1		良好	橙5YR7/6	細砂	ミニチュア土器・つば状の突起
707	須恵器	杯身	(12.3)			良好	(内・外・断)灰白N7	細砂	立ち上がり部ハリツケ
708	須恵器	器台				やや不良	(内・断)灰白5Y7/2 (断)淡黄2.5Y8/3	精良	三角形透かし孔・粗雑な櫛描波状文

土壙52は、ＭＢＯＸ３区の北側に位置する。出土遺物の底面のレベルが竪穴住居60の検出レベルより10cmほど高いことから、この土壙は住居60を切って存在していたものと思われる。検出面では掘り方が検出できなかった。遺物に小形土師器を含み、密集した出土状況などから意図的な廃棄が想定される。時期は、須恵器から６世紀後半であると考えられる。　　(氏平)

土壙53

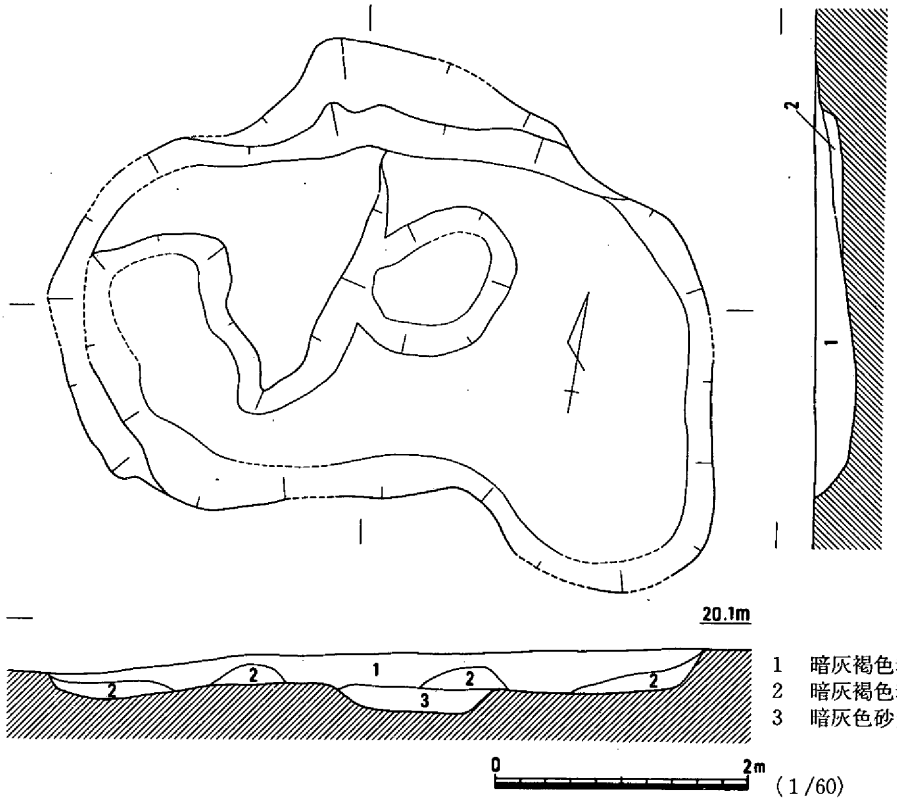


遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙53	ＫＭ６	148	125	7	不整方	皿	○	古墳後半末葉	

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
709	土師器	高杯	15.8			良好	にぶい赤褐5YR5/4	砂礫	緩やかに湾曲して立ち上がる杯部
710	須恵器	杯身	14.6			良好	(内・外・断)灰N6/	精良	浅い杯部・器壁薄い・端部は丸く納める
711	須恵器	甕？壺？				良好	(内・外)灰N6/ (断)灰赤2.5YR5/2	精良	頸部破片突線にはさまれて波状文
712	須恵器 (土師質ｃ)	甕	23.0			不良	(内・断)橙5YR6/6 (外)にぶい橙7.5YR6/4	微砂	口縁部下端に沈線状のくぼみ

土壙53は、亀田調査区の南西端部に位置する地形の低い地点で検出された。この土壙の平面形は歪んだ不整形を呈し、長径148cm・短径125cmになっていた。検出面からの深さは７cmと極めて浅く、断面形は皿形になっていた。出土遺物として土師器の高杯**709**、須恵器の杯身**710**や壺または甕の口縁部**711・712**が存在するが、杯身の形態的特徴が陶邑編年のＴＫ43のものに酷似していることから、６世紀後半の時期になるであろう。　　(福田)

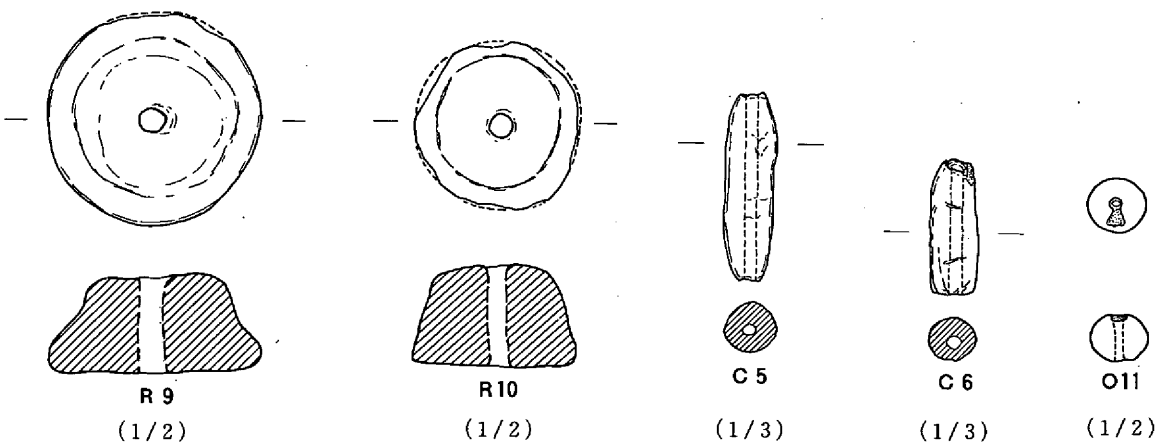
土壙54



1　暗灰褐色粘質土
2　暗灰褐色粘質土（黄色土ブロック含む）
3　暗灰色砂質土

(1/60)

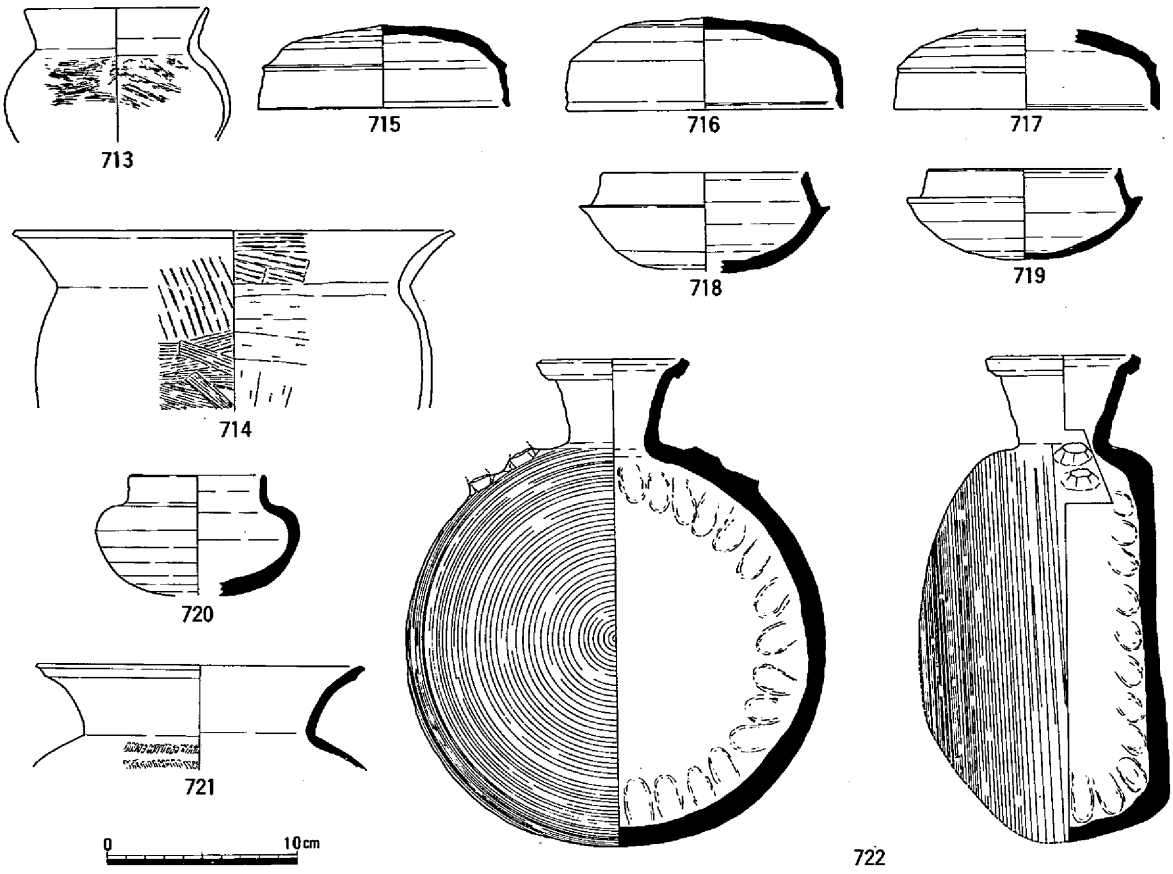
遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙54	MM5	561	399	49	不整楕円	逆台	○	古墳後半後葉～末葉	



掲載番号	器種	材質	形態	色調	最大径(mm)	最大厚(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
R9	紡錘車	土	F1	橙7.5YR6/6	57.0	27.0	6.8	83.2	
R10	紡錘車	土	D1	橙7.5YR6/6	44.0	26.5	4.8	59.9	

掲載番号	器種	形態	色調	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
C5	土錘	B－Ⅱ	灰黄褐10YR6/2	74.5	20.5	5.0	35.4	
C6	土錘	A－Ⅲ	にぶい橙7.5YR6/4	54.0	19.0	5.5	22.8	

掲載番号	器種	材質	色調	最大長(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
O11	土玉	土	にぶい橙7.5YR6/4	13.0	15.0	3.0	3.1	



（1/4）

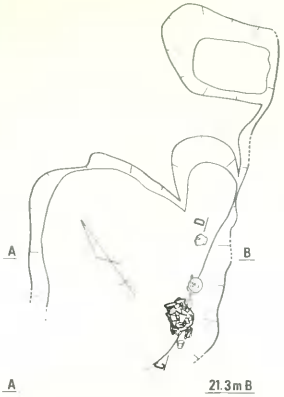
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
713	土師器	甕	9.4			良好	橙2.5YR6/6	精良	内面ハケメ状に観察できるユビナデ
714	土師器	甕	23.0			良好	にぶい橙7.5YR7/4	砂礫	外面粗いハケメ・口縁端部は面を持つ・黒斑
715	須恵器	蓋	13.2		4.5	良好	(内・外)灰N4/　(断)褐灰5YR4/1	細砂	端部外反し面を有す・稜部は強いヨコナデにより成形・ロクロ回転左
716	須恵器	蓋	14.2		4.9	良好	(内・外・断)灰N4/	微砂	端部明瞭な段を有す・ロクロ回転右・歪み大
717	須恵器	蓋	14.2			良好	(内・外)灰5Y4/1 (断)褐灰7.5YR4/1	微砂	端部段を有す・強いヨコナデにより稜を形成・ロクロ回転右
718	須恵器	杯身	10.8			良好	(内・外)暗灰N3/　(断)灰N4/	微砂	立ち上がり部はハリツケ・内面仕上げナデ・ロクロ回転右・歪み大
719	須恵器	杯身	10.2		4.9	良好	(内・外)灰N5/ (断)暗赤灰10R4/1	細砂	端部鈍い段を有す・立ち上がり部はハリツケ・体部内面にアテ具痕残る
720	須恵器	短頸壺	7.0		6.5	良好	(内)灰N5/　(外)灰N4/ (断)赤灰5R6/1	精良	体部外面ヘラケズリ後ナデ・内面底部アテ具痕残る
721	須恵器	甕	17.2			良好	(内・外)灰N5/ (断)赤褐灰5R4/1	良好	口縁端部外方へつまみ出す・内面スリ消し
722	須恵器	提瓶	7.4			良好	(内・外)灰N4/ (断)にぶい赤褐5YR5/3	細砂	口縁部折り曲げて肥厚・輪状把手・体部外面カキメ・内面ユビオサエ・布状の圧痕

土壙54はＭＭ５区で検出された。竪穴住居65の３ｍ西方に位置する。長軸方向で561cm、短軸方向で約400cm、深さは約50cmを測った。平面形は不整な楕円形を呈し、底面も凹凸であった。本来的に人為的掘削が及んだものかどうかは断定できない。

出土遺物には**713・714**の土師器、**715～722**の須恵器、**Ｒ９・Ｒ10**の土製紡錘車、**Ｃ５・Ｃ６**の土錘、**Ｏ11**の土製の玉がある。

出土した須恵器は６世紀前半～後半と時期のばらつきがあり、この土壙の詳細な時期を判断できないが、おおむね６世紀代のものとして理解している。　（大橋）

土壙55

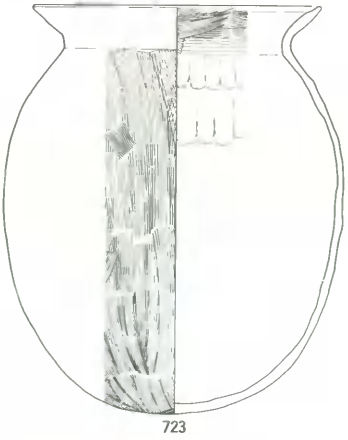


(1/60)

1　淡黄褐色土（礫含む）
2　明灰褐色土
3　黄褐色土
4　暗灰褐色土（炭化粒含む）
5　暗黄褐色土

(1/30)

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙55	MM4	不明	不明	33	不明	皿		古墳後半末葉	複数埋り合い



723

724

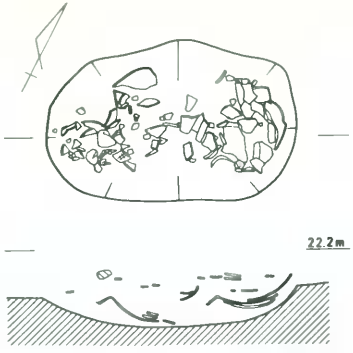
725

(1/4)

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
723	土師器	甕	20.4		29	良好	浅黄橙7.5YR8/3	微砂	卵形の胴部・胴部外面および口縁部内面粗いハケメ
724	須恵器	杯蓋	(12.2)		3.9	良好	(内・外・断)灰白N7/	微砂	天井部内面仕上げナデ・口縁端部は丸く納める
725	須恵器	杯身	10.7		3.4	良好	(内)灰白N7/　(外)灰N6/	精良	完形品・立ち上がり部ヨコナデ・底部外面未調整・内面仕上げナデ

土壙55は、MM4区に位置し、土壙63の南にある。平面形態および土層断面の観察から、独立した3基の土壙と考えられる。北東側の方形の土壙は単独で認められるが、土層断面から南東のものが切っている。図の遺物出土状態は、この土壙に伴うものとするのが妥当であろう。出土遺物は、**723**の土師器と**724・725**の須恵器であり、時期は6世紀末から7世紀前半を考えている。　(下澤)

土壙56



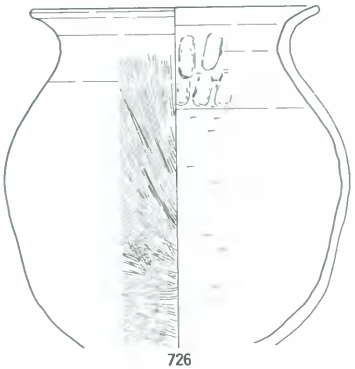
土壙56は、ＭＭ４区に位置し、土壙47の南にある。

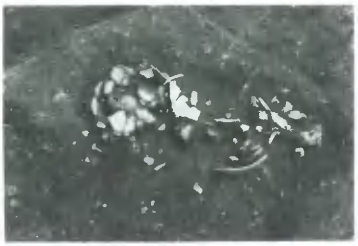
規模は88×57cm深さ15cmを測り、平面形態は隅丸方形を呈する。土壙内には、**728**が西側に**726**が東側にそれぞれ口縁部を西に向けて据えられた状態で検出され、**727**がその中央近くに認められている。

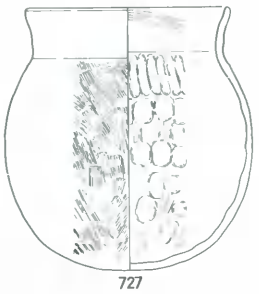
遺物の出土状態から合口の土器棺としたほうが妥当であろう。

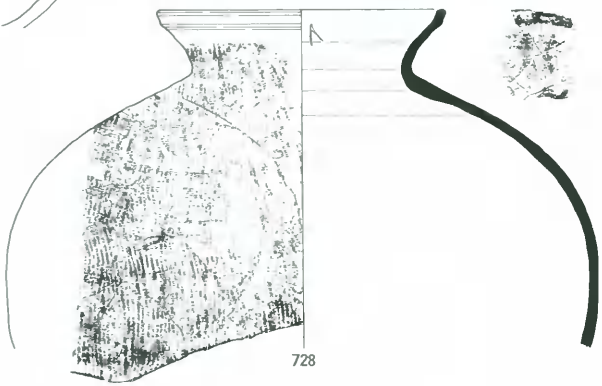
出土遺物は、前述した**726**・**727**の土師器と**728**の須恵器であり、時期は６世紀末から７世紀前半を示している。

（下澤）







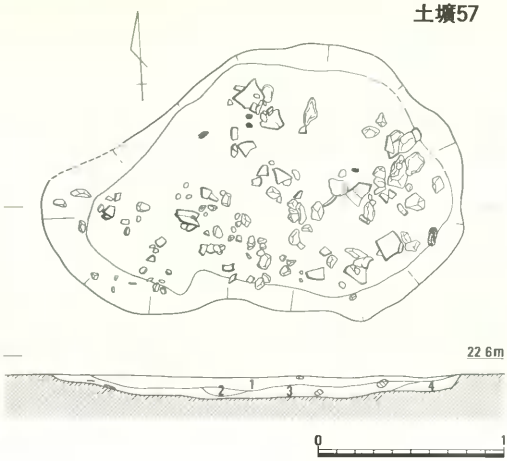


0　10cm　（1/4）

遺構名	位置（調査区）	規模（cm） 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙56	ＭＭ４	88	57	15	隅丸方	皿	○	古墳後半末葉	

掲載番号	種別	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
726	土師器	甕	20.0		24.2	良好	にぶい黄橙10YR6/3	砂礫	緩く屈曲し外方へ開く口縁部・胴外面粗いヨコナデ
727	土師器	甕	14.0		18.7	良好	灰褐7.5YR4/2	砂礫	胴内面に押圧痕多
728	須恵器	甕	20.2		24.0	良好	（内・外・断）灰N5/	砂礫	外面カキメ・タタキメ・内面青海波アテ具痕・口縁部内面にヘラ記号

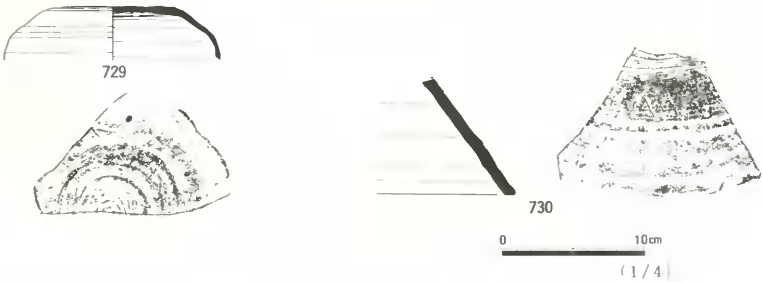
土壙57



1　暗灰黄色粘質土
2　淡灰黄色粘質土
3　暗茶褐色粘質土
4　明灰黄色粘質土

(1/30)

遺構名	位置(調査区)	規模(cm)			平面形	断面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
土壙57	MM4	[illegible]	150	12	不整楕円	[illegible]	○	古墳後半未満	



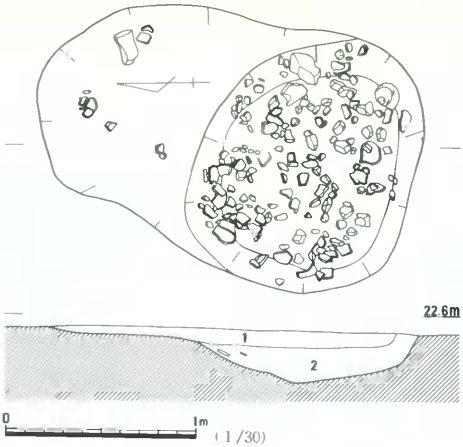
(1/4)

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
729	須恵器	杯蓋			3.8	良好	(内・外・断)灰N5	砂礫	天井部内面アテ具痕・外面平坦で部分的に木目状の痕跡あり・ロクロ右回り
730	須恵器	器台				良好	(内・外)青灰5B5/1 (断・里褐7.5YR[illegible]	砂礫	粗雑な造作・裾部カキメ・波状文

土壙57は、ＭＭ４区に位置し、最大長227cm、最大幅150cmの不整楕円形を呈する。検出面からの深さは12cmを測り、底面の状態は若干の凹凸が認められる。西側部分がすぼんでいくような形態をとるが、東側部分は円形に広がる内容となる。遺構検出時において、プラン内に多くの土器片と礫が認められていた。これらの遺物等は底面に接して認められるものは少なく、ほとんどが浮いた状態であった。また、遺物も細片が多かった。

出土遺物は、**729**と**730**の須恵器である。**729**は、内面にタタキが認められる。これらの土器から土壙の時期は、６世紀前半と考えられる。　　(伊藤)

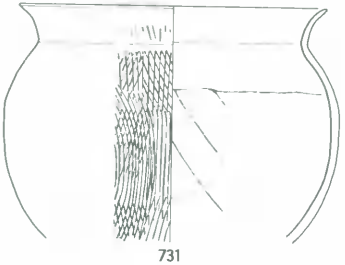
土壙58



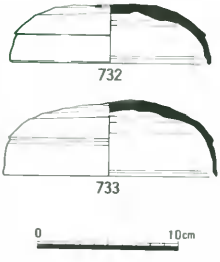
（1/30）

1　暗灰黄色粘質土（炭多く含む）
2　暗黄褐色土

遺構名	位置（調査区）	規模（cm）			平面形	断面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
土壙58	ＭＭ４	203	140	27	楕円	椀とテラス	○	古墳後半後葉	



731



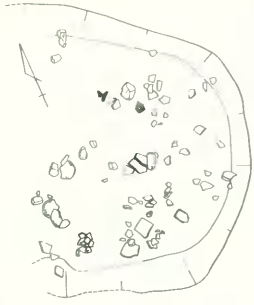
（1/4）

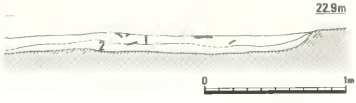
掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
731	土師器	甕	21.6			良好	浅黄橙10YR8/4	微砂	胴内面は板状工具による調整
732	須恵器	蓋	14.0		4.2	良好	（内・外・断）灰N4/	微砂	稜部は沈線で表現・端部段を有す・内面アテ目痕残る・ロクロ左回り
733	須恵器	蓋	15.2		5.2	良好	（内・外・断）灰N5/	細砂	稜部は鈍い沈線で表現・内面仕上げナデ・ロクロ左回り

土壙58は、ＭＭ４区に位置し、土壙57と西辺部分の一部で重復している。規模は、長さ203cm、幅140cmの楕円形を呈する。この底面の形態は、南側部分が深く明瞭な下端を認めることが可能であるが、北側部分については非常に浅くなっている。したがって、土層断面の第１層は、暗灰黄色粘質土で多くの炭化物が含まれているが、第２層は暗黄褐色土で炭化物を含まない。さらに、第２層底面近くに大小の礫が認められていること、第１層が南側の深い部分に流れこむような堆積ではなく、浅い部分と同一の様相を示している。このようなことから、２基の土壙が重なっている可能性も考えられる。

出土遺物は、土師器甕**731**、須恵器杯蓋**732・733**がいずれも第２層内から検出している。これらの土壙の時期は６世紀前半と考えられる。　（伊藤）

土壙59

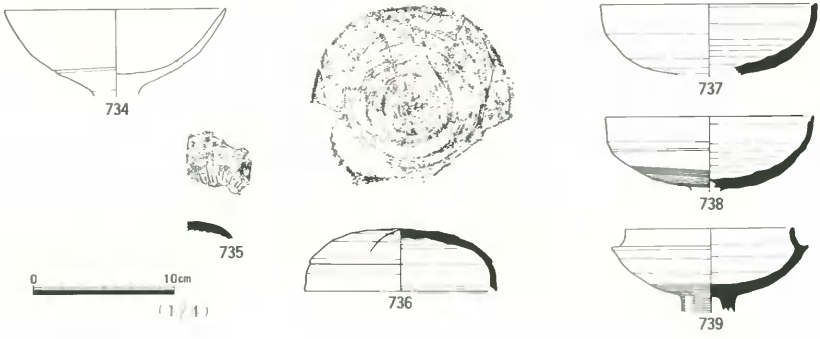




1　暗灰褐色粘質土
2　暗茶褐色粘質土（焼土・炭含む）

（1/40）

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙59	MM4	不明	(207)	14	(隅丸方)	皿		古墳後半後葉	



（1/4）

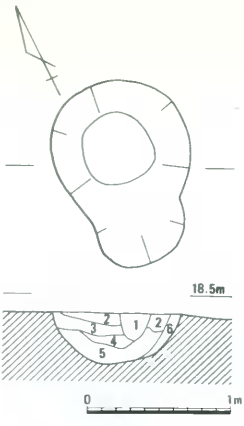
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
734	土師器	高杯	15.7			良好	にぶい橙7.5YR7/4	精良	ロクロ使用？・雲母に焼成・窯を使用か？
735	陶質系土器	蓋				良好	(内・外・断)灰N6/	精良	天井部外面カキメ・列点文
736	須恵器	蓋	13.6		4.5	良好	(内・断)灰N6　(外)灰N5/	精良	天井部内面ナデ・貝殻・ロクロ右回り
737	須恵器	高杯？	15.2			良好	(内・外)灰N5　(断)赤灰10R4/2	精良	蓋の可能性あり・ナデ大・端部面を有す
738	須恵器	高杯？	14.6			良好	(内・外)灰N5 (断)赤灰2.5YR4/1	精良	蓋の可能性あり・杯外面カキメ・端部は面を有す
739	須恵器	有蓋高杯	11.6			良好	(内)灰N6　(外・断)灰N5	精良	内面仕上げナデ・杯外面下半から脚柱部を有す

土壙59は、MM4区に位置し、土壙25の北に接する。

規模は、西側部分がトレンチと第一次調査のグリットにより確認できなかった。深さ14cmで平面形態は隅丸方形を呈するものと考えられる。遺物は埋土および底近くから広がる状況で検出された。

出土遺物は、**734**の土師器と**735**～**739**の須恵器である，**734**は、色調が土師質であるが焼成は硬質であり、一般的な土師器の焼成と異なる。**735**は、韓式系土器で陶質系のものである。これらの土器から土壙の時期は6世紀前半を示すと考えられる。（下澤）

土壙60



（1/40）

1　黒褐色土（炭・焼土含む）
2　〃　（炭含む）
3　黒褐色粘質土
4　暗灰褐色粘質土（黄褐色土含む）
5　黒褐色粘質土（黄褐色土含む）

（1/4）

土壙60は、ＫＭ１区に位置し、土壙61の西にある。

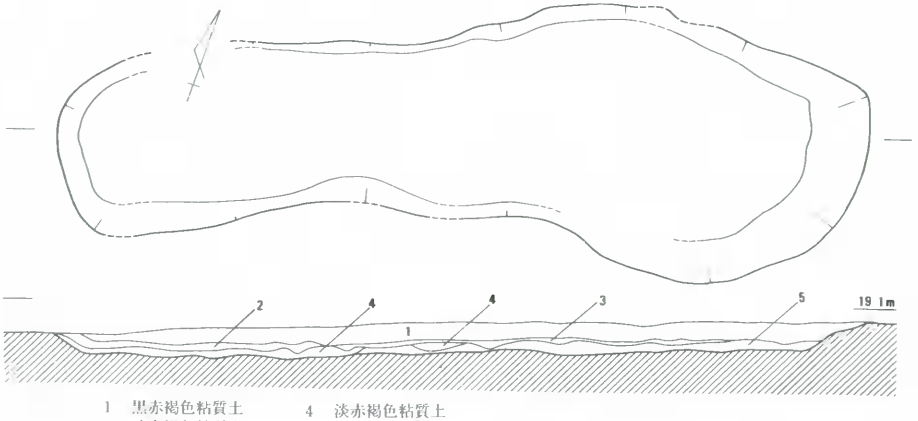
規模は133×95cmを測り、平面形態は瓢箪形をなし、深さは35cmを測るが、南側部分がそれよりも９cmほど浅くなる。土層断面においては、柱穴と重複しているが平面検出時においては確認できなかった。

出土遺物は**740**の須恵器の杯身である。立ち上がりは短く内傾し、端部は丸く納めている。時期は６世紀末と考えられる。　（下澤）

遺構名	位置（調査区）	規模（cm）			平面形	断面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
土壙60	ＫＭ１	[illegible]	[illegible]	[illegible]	瓢箪	椀	[illegible]	古墳後半末葉	

掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
740	須恵器	杯身	(14.6)			良好	（内・断）[illegible]（外）[illegible]N4	精良	端部丸く納める・ロクロ左回り

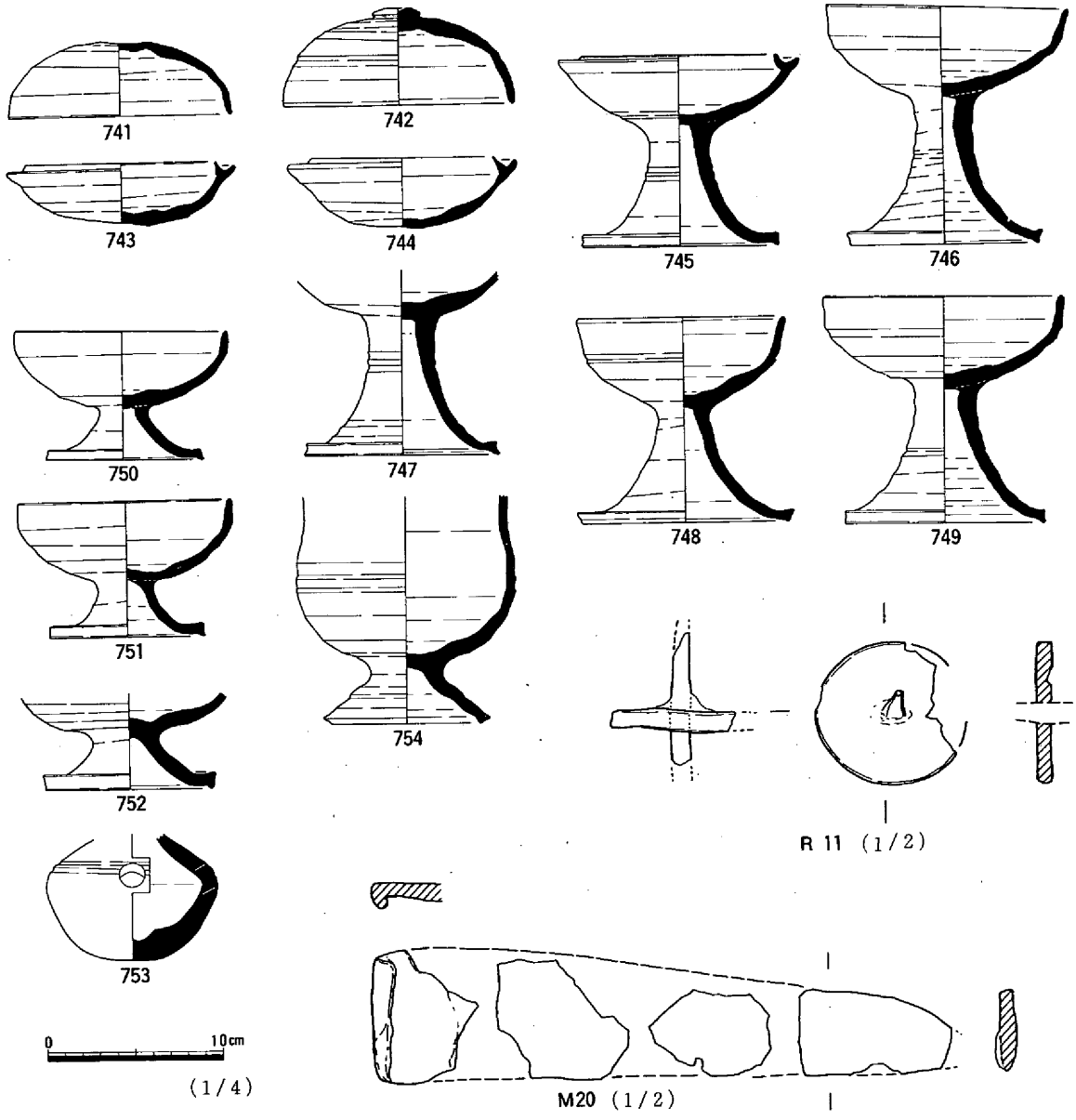
土壙61



1　黒赤褐色粘質土
2　暗赤褐色粘質土
3　淡茶褐色粘質土
4　淡赤褐色粘質土
5　暗茶褐色粘質土
6　淡灰褐色粘質土（黄色土ブロック含む）

（1/80）

遺構名	位置（調査区）	規模（cm）			平面形	断面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
土壙61	ＫＭ１	[illegible]	[illegible]	48	長楕円	皿	○	古墳後半末葉	



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
741	須恵器	蓋	(12.7)		4.2	良好	(内)灰白N7 (外・断)灰N6	微砂	稜は不明瞭・内面仕上げナデ・ロクロ右回り
742	須恵器	蓋	13.1		5.6	良好	(内・外・断)灰N6/	細砂	端部丸く納める・稜は沈線状・ロクロ左回り
743	須恵器	杯身	(10.9)			良好	(内・外・断)青灰5PB6/1	微砂	立ち上がり部折り込みで短く内傾する・外面自然釉
744	須恵器	杯身	10.5		4.0	良好	(内・外・断)青灰5PB5/1	微砂	立ち上がり部折り込みで短く内傾する・底部未調整
745	須恵器	有蓋高杯	12.0	11.0	11.0	良好	(内・外・断)灰N6/	細砂	杯部内面仕上げナデ・外面は丁寧なヨコナデ
746	須恵器	高杯	(13.8)	(10.7)		良好	(内・外・断)青灰5PB6/1	微砂	脚端部下方につまみ出す・脚柱部は強いロクロナデによる凹凸
747	須恵器	高杯		11.2		良好	(内・外・断)灰N5/	細砂	脚端部は強いヨコナデ
748	須恵器	高杯	11.7	11.8	11.7	良好	(内・外・断)灰N5/	細砂	杯・稜部に沈線
749	須恵器	高杯	(13.5)	(11.3)	13.1	良好	(内・外・断)青灰5PB5/1	微砂	脚端部は下方につまみ出す・脚柱部沈線
750	須恵器	高杯	12.0	8.9	7.4	良好	(内・外・断)明青灰5PB7/1	微砂	脚端部下方へつまみ出す・ロクロ左回り
751	須恵器	高杯	12.0	8.8	7.9	良好	(内・外・断)青灰5PB5/1	精良	脚端部下方へつまみ出す
752	須恵器	高杯		9.4		良好	(内・外・断)灰白N8/	砂礫	ロクロ右回り
753	須恵器	甕				良好	(内・外)暗青灰56PB4/1 (断)暗赤灰5R3/1	微砂	底部「×」ヘラ記号・外面丁寧なナデ調整
754	須恵器	台付椀		(8.5)		良好	(内・外・断)青灰5PB5/1	微砂	体部・突線状のくぼみ

掲載番号	器種	材質	法量 最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
M20	鎌	鉄	(165.0)	37.6	6.2	34.99	小片複数 (同一個体と考えられる)

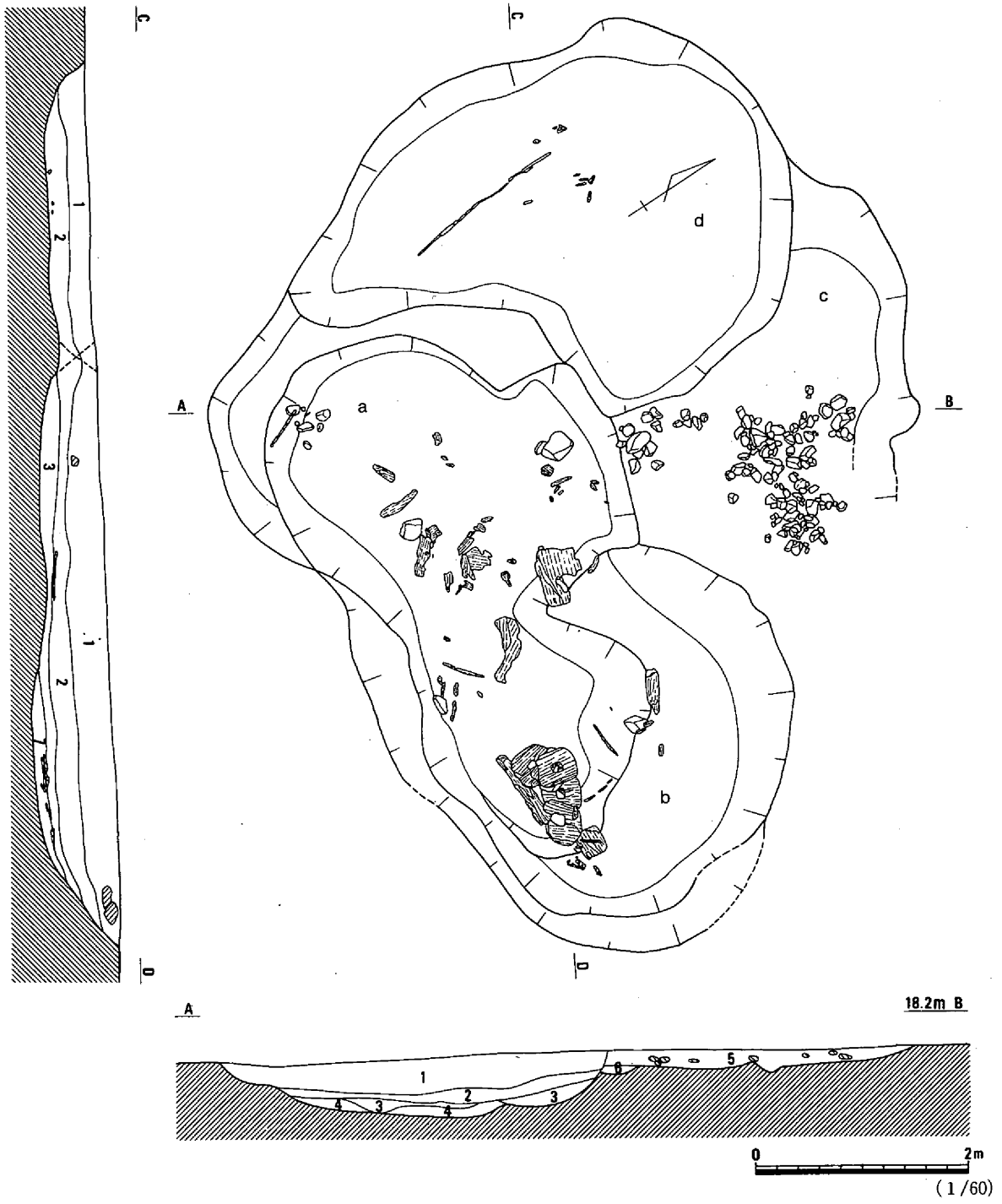
掲載番号	器種	材質	形態	色調	最大径(mm)	最大厚(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
R11	紡錘車	鉄	—		42.0	—	5.2	14.52	

土壙61は、土壙60の北東約６ｍの位置に検出した。東西に長い土壙の平面形は、西側は隅丸長方形で、東側は長楕円形を呈しており、やや膨らんでいる。底面はほぼ平坦で、目立つ凹凸も無い。土壙の規模は長さ1152㎝、幅364㎝を測る。断面は皿形を呈しており、壁面は上方に開きながら立ち上がるものである。検出面からの深さは48㎝を測る。層位は水平堆積に近い堆積を見せている。上層の２層には焼土や炭を含んでいた。また、下層からは比較的まとまった量の遺物が出土した。

遺物としては須恵器、鉄製品などが出土している。**741**は杯蓋である。天井部から口縁部にかけては緩やかに弧を描くもので、その境を成す稜線は明瞭でない。口縁端部は丸く納められる。**742**は扁平なつまみを持つ杯蓋である。天井部から口縁部にかけては緩やかな弧を描くものであるが、その境には浅い沈線が見られる。口縁端部は丸く納められる。**743**は杯身である。丸くふくらみのある体部を持ち、受部は斜め上方に延びる。立ち上がり部は短く内傾して立ち上がる。**744**も杯身である。丸くふくらみのある体部を持ち、受部は斜め上方に延びる。立ち上がり部は短く、受部に比べ少し高いのみである。**745**は有蓋高杯である。杯部は杯身とほとんど同じ形状を呈するもので、受部は斜め上方に延び、立ち上がり部は短く、受部よりわずかに高く立ち上がる。脚部は裾に向けて開くもので、端部近くでほぼ水平に開き平坦面を形成する。端部は下方に折り返されている。**746**も高杯である。杯部は蓋と同じような形態を呈した丸みのあるものである。脚部は裾に向けて弧を描きながら開くもので、端部は上端を上につまみ出している。脚柱部にはロクロナデによる凹凸が見られる。**747**は高杯の脚部である。裾に向けて開く脚部の端部は下方に折り返されている。脚端部には強いヨコナデが見られる。**748**も高杯である。杯部の中間に弱い稜線を持ち、その部分に沈線が巡る。脚部は裾に向けて緩やかな弧を描きながら開き、端部は肥厚し内傾した面を持つ。**749**も高杯である。蓋杯の蓋を返したような杯部をもつもので、脚部は裾に向けて緩やかな弧を描きながら開く。脚端部は上下に少しつまみ出されている。脚柱部の中程には沈線が見られる。**750**も高杯であるが、**745**～**749**に比べて脚は短い。杯部は蓋付きの蓋を返した形状をしており、脚部は裾に向けて「ハ」の字状に広がり、端部で少し水平に延びて端部は下方につまみ出される。そのため、脚端部に少しの平坦面を持つ。**752**は**751**とほぼ同じ形状を呈する高杯の脚部であるが平坦面が少しくぼむものである。**753**は鼈である。球形に近い胴部のやや高い部分に稜線が認められ、浅い沈線が見られる。円孔はその肩部に斜め下方に向けて穿たれる。底面にはヘラ記号が見られる。高杯は何れも杯部と脚部との接合面が認められる。**754**は台付椀である。細長い体部の下半が少し下膨れ状を呈しており、上半はほぼ垂直に立ち上がる。胴部にはロクロナデによる凹凸が見られる。台脚部は直線的に「ハ」の字状に開き、端部は内傾する面を持つ。台脚部もロクロナデによる凹凸が認められる。**R11**は鉄製の紡錘車である。直径42㎜の鉄製円盤の中央に棒状の軸が付くものである。軸は両端が欠落しているため全体の長さは不明である。**M20**は鉄製の鎌である。破片で出土したため全長は不明であるが、おおよそ165㎜程度と考えられる。刃部は直線的で、背の部分は刃先に向けて細くなる。根元の部分は「Ｌ」字状に折り返されるものである。現状で判明する法量は、最大幅37.6㎜、最大厚6.2㎜を測る。土壙の時期は７世紀前半と考えられる。

（井上）

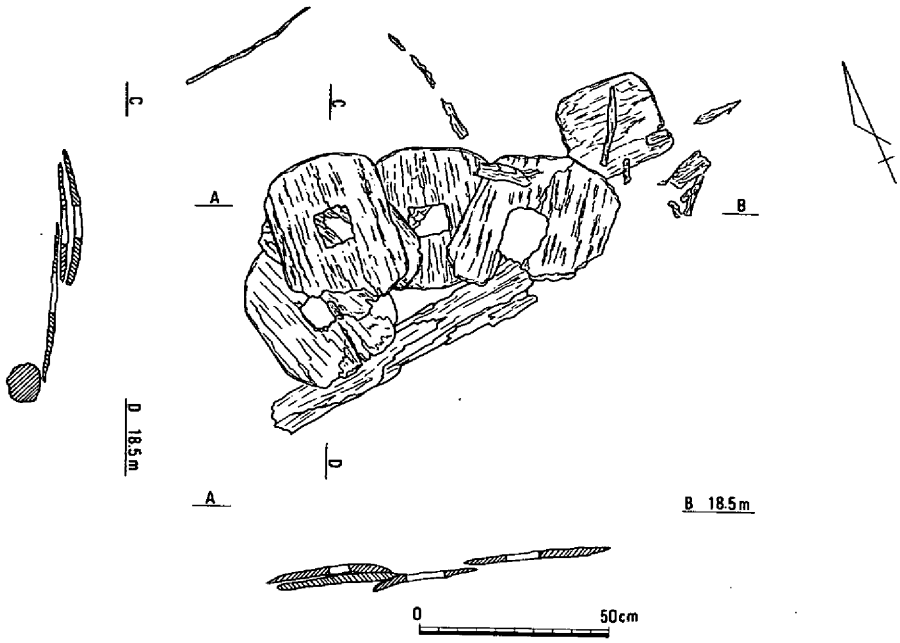
土壙62



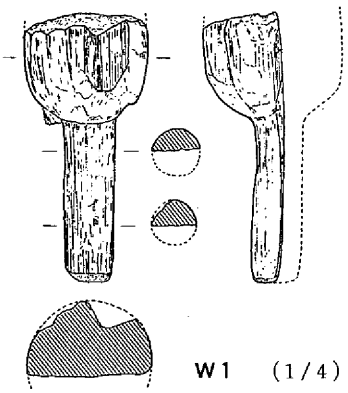
(1/60)

1　黒褐色土（褐色土粒・焼土粒・炭粒含む）
2　黒褐色粘土（炭化物含む）
3　黄灰褐色微砂・黒褐色粘土の互層
4　黒褐色粘質土（礫含む）
5　１と同じ（礫多く含む）
6　１と同じ（黄褐色土含む）
7　黒灰色粘土

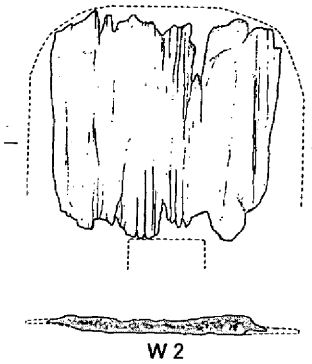
遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙62	ＫＭ１	880	640	83	不整方	皿	○	古墳後半末葉	複数切り合い　木製品多量



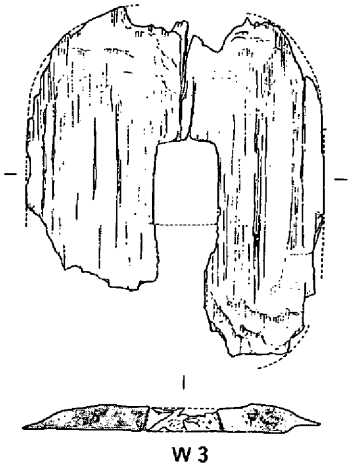
(1/20)



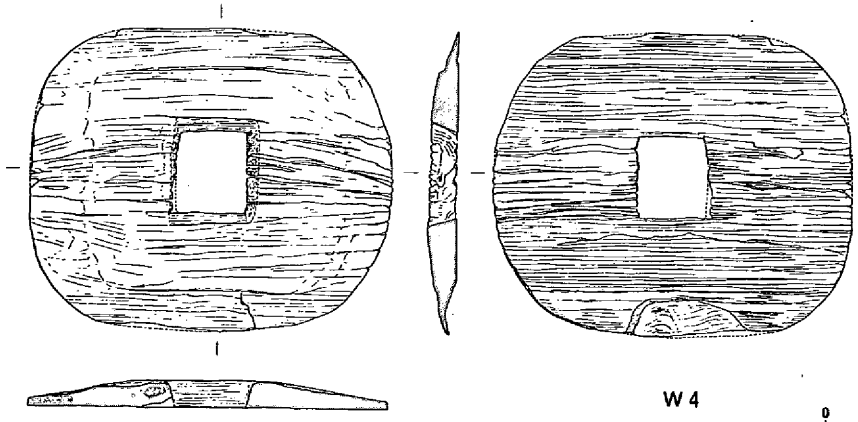
W1　(1/4)



W2

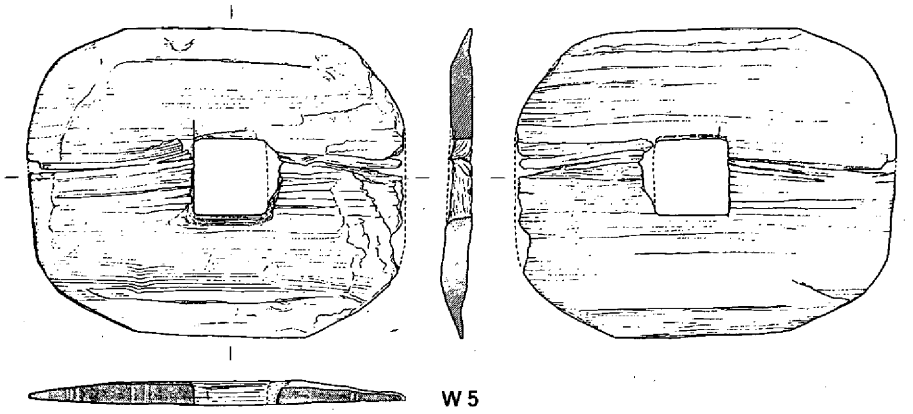


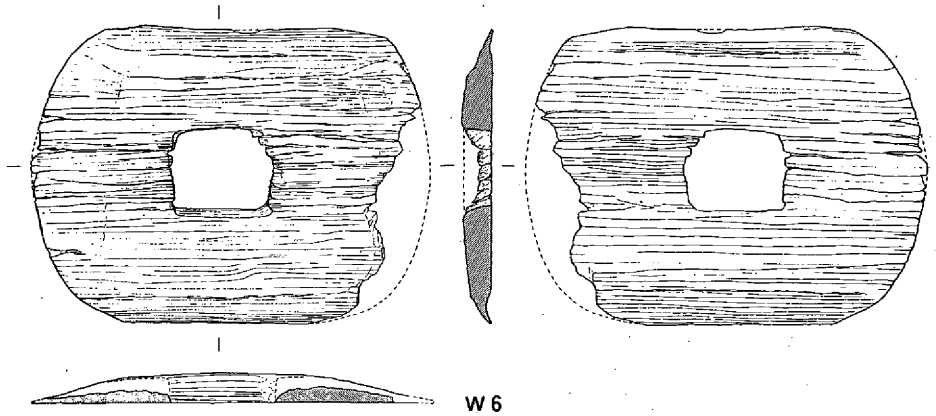
W3

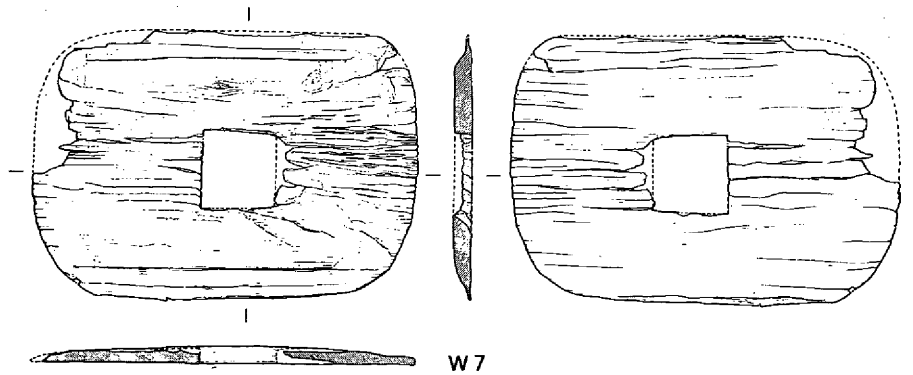


W4

(1/8)

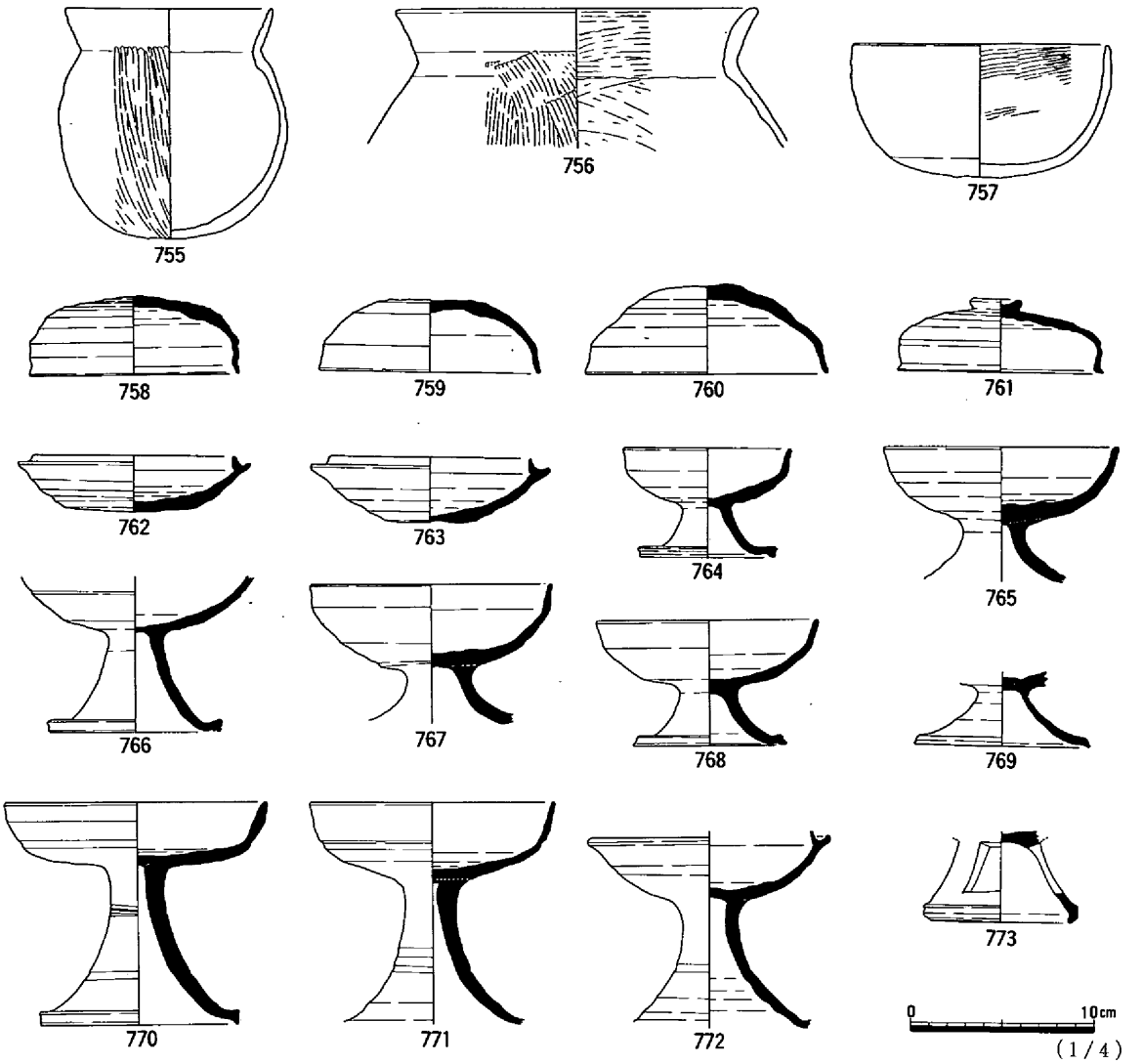






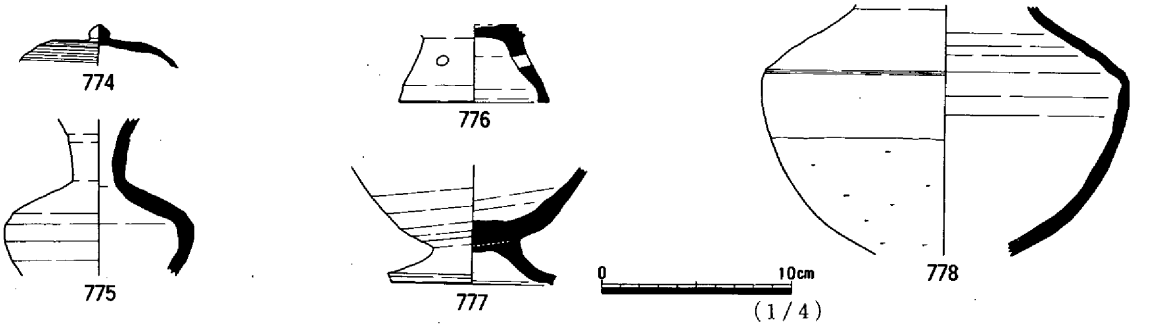
(1/8)

掲載番号	種別	法量(cm)				特徴・備考	
		最大長	最大幅	最大厚	孔		
W1	きぬた状木製品	(14.4)	径6.5、2.6	−	−	半截状態	ヒノキ？
W2	ねずみ返し状木製品	(24.3)	(24.1)	2.1	−	1/2欠損	ヤマザクラ？
W3	ねずみ返し状木製品	(36.9)	31.5	3.1	8.8×6.8	1/3欠損	〃
W4	ねずみ返し状木製品	38.1	32	3.1	8.5×7.2	ほぼ完存	〃
W5	ねずみ返し状木製品	(39.8)	32.5	2.8	8.5×8.0	ほぼ完存、鋸痕跡	〃
W6	ねずみ返し状木製品	(41.5)	31.6	3.2	10.0×9.5	一部欠損	〃
W7	ねずみ返し状木製品	40.9	28.4	2.0	8.3×8.0	一部欠損	〃



（１／４）

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
755	土師器	甕	(11.0)		12.7	良好	にぶい橙5YR7/3	細砂	二次的に火を受ける
756	土師器	甕	(19.2)			良好	にぶい黄橙10YR7/2	微砂	内面スス付着
757	土師器	鉢	(13.8)		9.3	良好	灰黄2.5Y7/2	精良	外面は磨滅・端部丸く納める
758	須恵器	蓋	(11.2)		4.3	良好	(内・外・断)暗青灰5PB4/1	微砂	稜鈍い・端部にアクセントあり
759	須恵器	蓋	(11.9)		4.0	やや不良	(内・外・断)にぶい赤褐5YR5/4	微砂	稜鈍い・端部丸く納める
760	須恵器	蓋	(13.0)		4.8	良好	(内・外)青灰5PB6/1 (断)灰褐5YR4/2	微砂	天井部ヘラキリ未調整
761	須恵器	蓋	(11.2)			良好	(内・外)暗青灰5PB4/1 (断)暗赤灰5R3/1	細砂	端部水平方向につまみ出す・ロクロ右回り
762	須恵器	杯身	(10.8)		3.1	良好	(内・外)青灰5PB5/1 (断)暗青灰5PB4/1	微砂	底部ヘラキリ未調整
763	須恵器	杯身	(10.8)		3.6	良好	(内・外)灰N5　(断)灰褐5YR6/2	精良	底部ヘラキリ未調整
764	須恵器	高杯	(8.9)	(7.2)	6.0	良好	(内・外)青灰5PB6/1 (断)灰黄褐10YR5/2	微砂	口縁端部丸く納める
765	須恵器	高杯	(12.6)	(7.4)		やや良好	(内・外・断)灰白N8	細砂	やや粗い胎土
766	須恵器	高杯		(9.2)		良好	(内・外)灰白N7/ (断)橙7.5YR7/6	精良	脚端部強いヨコナデ
767	須恵器	高杯	(13.0)			良好	(内・外)青灰5PB6/1 (断)明青灰5PB7/1	微砂	杯部は丁寧なナデ・内面に重ね焼の痕跡
768	須恵器	高杯	(11.9)	8.2	6.85	良好	(内・外・断)青灰5PB5/1		脚端部強いヨコナデ
769	須恵器	高杯		(9.5)		良好	(内・外・断)灰白N7/	精良	
770	須恵器	高杯	(14.0)	10.6	12.2	良好	(内・断)青灰5PB5/1 (外)暗青灰5PB4/1	微砂	杯稜部に緩やかなるくぼみ・内面仕上げナデ
771	須恵器	高杯	(13.2)			良好	(内・外)青灰5PB5/1 (断)明青灰5PB7/1	細砂	杯・稜部に緩やかなくぼみ
772	須恵器	有蓋高杯				良好	(内・外・断)青灰5PB6/1	微砂	脚部ヨコナデによる沈線状のくぼみ
773	須恵器	高杯		7.6		良好	(内・外)暗青灰5PB4/1 (断)赤褐10R4/4	微砂	方形透し孔３方



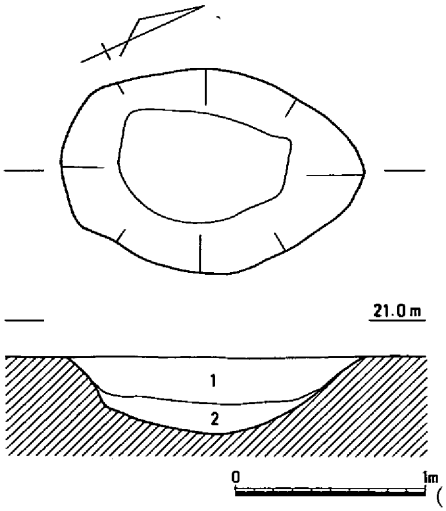
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
774	須恵器	蓋				良好	(内) 青灰 5PB5/1　(外) 暗青灰 5PB4/1　(断) にぶい黄2.5Y6/3	精良	宝珠つまみ　カキメ
775	須恵器	長頸壺				良好	(内・外) 青灰5PB5/1 (断) にぶい褐7.5YR5/3	精良	肩部に鈍い沈線・ロクロ右回り
776	須恵器	高杯		(7.8)		良好	(内・外・断) 暗青灰5PB4/1	微砂	円形透かし孔３個
777	須恵器	台付椀		8.6		良好	(内・外・断) 青灰5PB5/1	細砂	ロクロ左回り
778	須恵器	壺				良好	(内・外・断) 青灰5PB6/1	微砂	肩部１条の沈線・胴下半ヘラケズリ

土壙62は、ＫＭ１区に位置し、建物66の北にあって建物９の一部と重複している。全体の規模は、長さ980cm、幅640cmを測り、形態は不整形を呈している。ここでは、１基の土壙として扱ったが複数の重複が認められた。平面的には、南側のもの（以下ａ）は710×310cmを測り、形態は楕円形を呈しているが、さらにその東側において幅350cmのもの（以下ｂ）が重複している可能性を認める。この形態の西側の北辺部分には、420×300cmを測り、形態は不定形を呈するもの（以下ｃ）が認められる。さらに、この東辺に明確な形態を把握することができなかったが礫を含むもの（以下ｄ）が認められるのである。次に、土層断面観察から検討を加えることにする。土層断面図Ａ－Ｂにおいては、明らかにａがｂを切って掘られていることが観察された。ａの土壙内埋土の第３層および第４層の関係から掘り返しの可能性が示唆される。また、土層断面図Ｃ－Ｄにおいては、ａとｃとの関係を把握するために設定したが、土層の変化を認めることはできなかった。

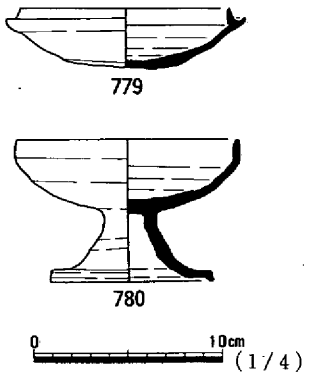
以上のことから、土壙62は４個の土壙の重複が思考される。そして、これらの土壙が相互に有機的関係を持っていたことが、先の土層断面図と以下に記す遺物の出土状況から窺える。ａは、底面近くに図示したきぬた状木製品とねずみ返し状木製品と、それ以外に多くの板状や棒状の木片が検出されている。ｃは、底面近くに遺構図に示してあるが、長さ160cm、幅２～５cmの棒状の木製品や木片が認められている。このように、ａとｃは土層断面の内容からも同時に機能していたことが判断される。しかし、ｂとの関わりは不明である。そして、これらとｄとの関係であるが、底面が浅く礫が多く全く木片は認められなかった。さらに、Ａ－Ｂの土層断面観察からａに切られているとが明らかになっている。さらに、調査時においてｄより６世紀前半の須恵器を出土していることを確認していることからａ、ｂ、ｃとは時期が異なるものである。なお、ｄと建物９のＰ６と重複しているが、土壙内の礫が柱穴の範囲に認められないことから、建物が新しいことが判断された。

出土遺物は、ａの南よりに多くの木製品が出土している。中でもきぬた状木製品**Ｗ１**とねずみ返し状木製品**Ｗ２**～**Ｗ７**の６枚の他の木切れなどとともに重なるように出土している。ねずみ返し状木製品は長さ19～21cm、幅14.2～16.2cmの楕円形を呈し、中央部は3.8～5.8×4.0～5.0cmの方形の孔をあけており最大厚3.2cmを測る。この他に、小型丸底壺**755**、甕**756**、椀**757**、須恵器杯蓋**758**～**761**・**774**、杯身**762**・**763**、高杯**764**～**773**などが出土している。土壙の時期は、ｄが６世紀前半に、その外のａ～ｃは７世紀中葉前後に相当すると考えられる。　(伊藤)

土壙63



(1/40)



(1/4)

1　黒褐色土（土器片・礫含む）
2　黒灰褐色土（礫含む）

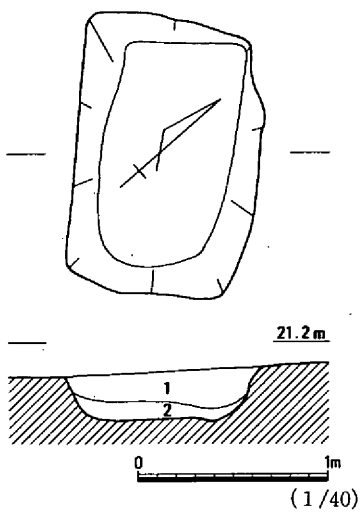
遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙63	MM1	160	110	43	楕円	椀	○	古墳後半末葉	

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
779	須恵器	杯身	11.1		3.3	良好	(内・外・断)灰N6/	精良	低い立ち上がり部・ロクロ右回り・内面仕上げナデ
780	須恵器	高杯	11.7	9.6	7.7	良好	(内・断)灰白N7/　(外)灰N5/	精良	杯部はやや屈曲して直立ぎみに立ち上がる

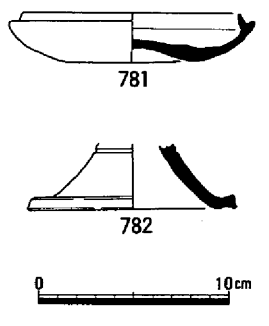
土壙63は、MM1区に位置し、土壙55の北にある。

規模は、160×110cm深さ43cmを測り、平面形態は楕円形を呈する。出土遺物は**779**と**780**の須恵器で、時期は6世紀末～7世紀前半と考えている。　(下澤)

土壙64



(1/40)



(1/4)

1　黒褐色土（土器片含む）
2　暗灰色土・黄褐色砂質土混合

土壙64は、MM1区にあり、長さ153cm、幅99cmを測る長方形の土壙である。深さは29cmを測る。

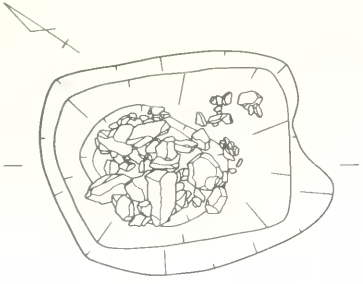
土壙内から須恵器杯身**781**、高杯の脚部**782**が出土している。

土壙の時期は、これらの須恵器から6世紀後半から7世紀代にかけてのものと考えられる。　(伊藤)

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙64	MM1	153	99	29	長方	逆台	△	古墳後半末葉	

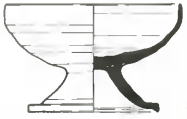
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
781	須恵器	杯身	11.3		2.7	良好	(内・外)灰白N7/　(断)灰N4/	砂礫	歪み大・短い立ち上がり部は折り込みで成形・外面自然釉
782	須恵器	高杯		10.9		良好	(内・断)青灰5PB6/1 (外)灰5Y6/1	微砂	短脚・脚端部は下方へ折り曲げて肥厚させ面を形成

土壙65



(1/30)

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙65	MM4	140	115	50	隅丸長方	擂鉢	△	古墳後半末葉	礫(大)多



783

(1/4)

784

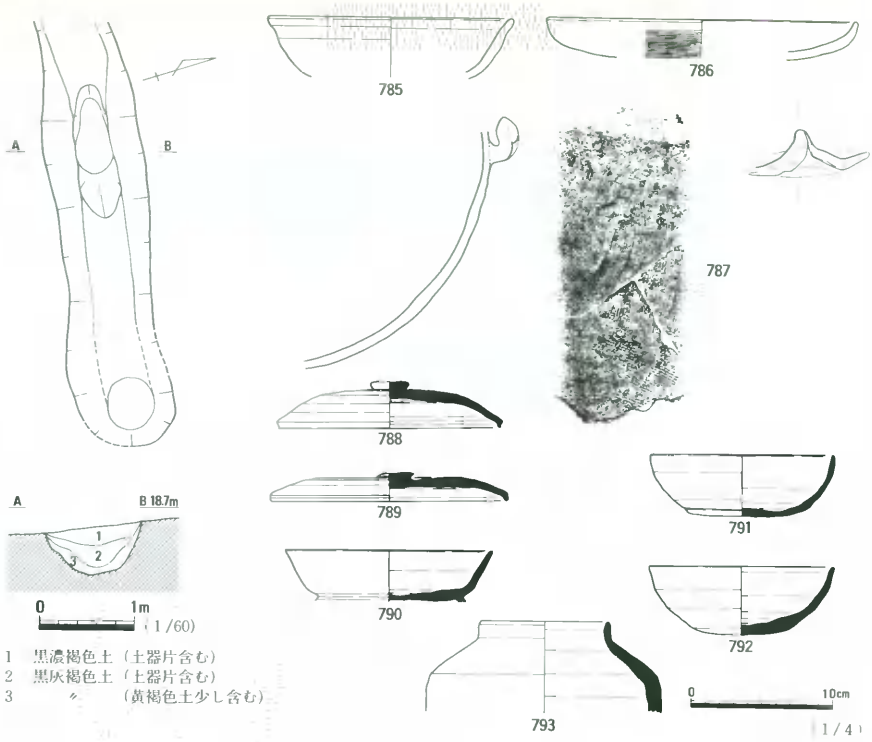
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
783	須恵器	高杯	(12.4)	9.2	7.7	良好	(内・外・断)灰白N7	精良	脚・杯部はやや丸みを帯び、端部は丸く納める
784	須恵器	長頸壺	8.5			良好	(内・外・断)青灰5PB6/1	細砂	頸部に2条のにぶい沈線

土壙65は、MM4区の調査区境に位置し、北西南東方向に主軸を持つ歪つな隅丸長方形の平面形態を呈し、土壙は擂鉢状の断面形を有し、底面はほぼ平坦であった。

土壙の検出時は平面形が長方形の形態を示していたことと、掘り下げ中において、石組みらしき形状の石が認められたため、墓とも考えたが、遺構を掘り下げていく段階で、その擂鉢状の断面形態等、墓壙とは認めがたい要素を確認した。しかしながら、現時点では、その他の諸状況を考えあわせ、墓の可能性を留保しておきたい。土壙内の石は、人為的に並べたものではなく、土壙の埋めもどしの時に投入したものか、あるいは、埋めもどした後の時点で上部に並べたものなのかは不明である。最終的に壙内に落ち込んだ状態になったものである。

土壙内からは図示した**783・784**の須恵器が出土している。これらからこの遺構の時期は古墳時代後半末葉と思われる。　(二宮)

土壙66



1　黒濃褐色土（土器片含む）
2　黒灰褐色土（土器片含む）
3　〃　（黄褐色土少し含む）

遺構名	位置(調査区)	規模(cm)			平面形	断面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
土壙66	ＭＳ３	－	102	72		椀		[illegible]	区画溝の底？

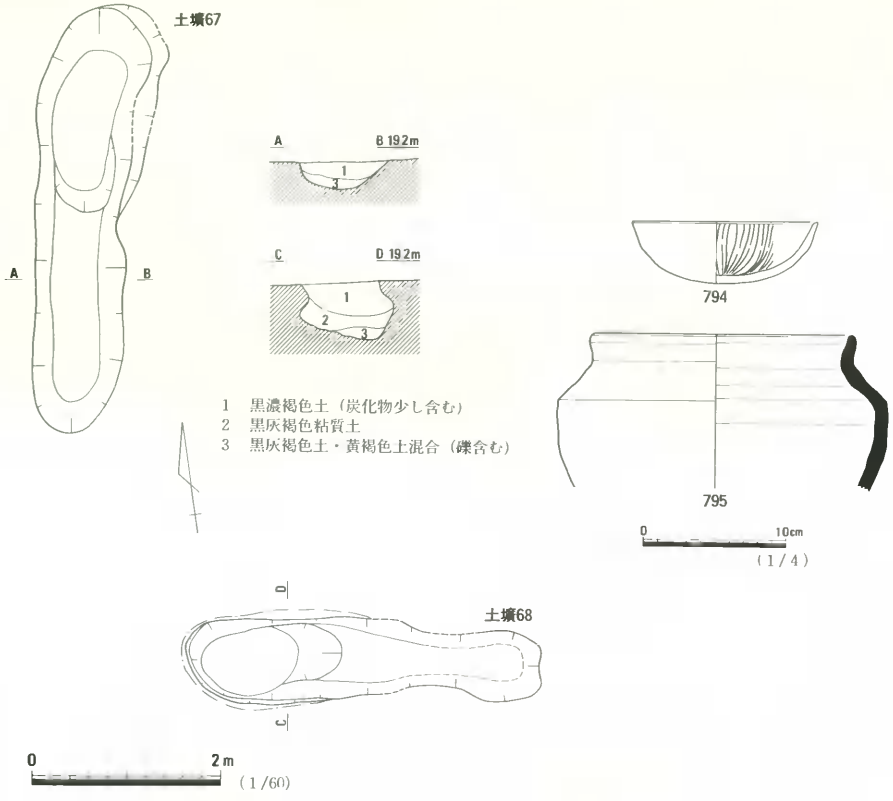
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
785	土師器	高杯？	(17.0)			良好	にぶい橙7.5YR7/3	微砂	内外面丹塗り
786	土師器	皿	(21.8)			良好	明赤褐2.5YR5/6	微砂	内面かすかに暗文状のヘラミガキ
787	土師器	甕				良好	にぶい黄橙10YR7/2	微砂	指本・外面スス付着
788	須恵器	蓋	15.6		3.3	良好	(内・外・断)灰N6	微砂	端部下方へ折り曲げてナデ成形
789	須恵器	蓋	(16.5)		2.1	良好	(内・外・断)青灰5PB6/1	微砂	内面不定方向のナデ
790	須恵器	杯身	14.5			良好	(内・外・断)青灰5PB5/1	微砂	底部外面ヘラケズリ残る・貼り付け高台
791	須恵器	杯	13.0	8.7	4.4	良好	(内・外・断)青灰5PB5/1	微砂	底部未調整
792	須恵器	杯	13.0	7.0	4.9	良好	(内・外・断)灰白N7	微砂	底部、外面粗いナデ調整
793	須恵器	短頸壺	9.0		[illegible]	良好	(内・外・断)灰N6	細砂	

土壙66は、発掘調査を実施した範囲のほぼ中央部に位置する北西側境界部分に近接して存在した。この土壙に酷似した形態を有するものは、北東方向へ約15ｍ寄った所で土壙67と土壙68が検出されている。内部に堆積していた土砂は同じで、出土遺物もほぼ同時期のものと推定される。

平面形は細長い溝状を呈し、部分的に２段掘りになっていた。検出面での最大幅51cm・深さ26cmを測り、断面形は「U」字形であった。

土壙内からは比較的多くの土師器や須恵器が出土したが、これらの土器は平城Ⅲ式のものに類似しており、８世紀中葉の時期に属するであろう。　（福田）

土壙67・68



遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙67	M S 3	458	125	30	長楕円	舟	△	奈良	区画溝の底？
土壙68	M S 3	187	88	58	長楕円	袋状			

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
794	土師器	椀	13.0		4.4	良好	にぶい橙7.5YR6/4	細砂	外面月牙巻り・内面暗文状のヘラミガキ
795	須恵器	短頸壺	17.1			良好	内・外)灰白7.5Y7/1 断面)にぶい黄橙10YR7/4	砂礫	端部は丸く納める

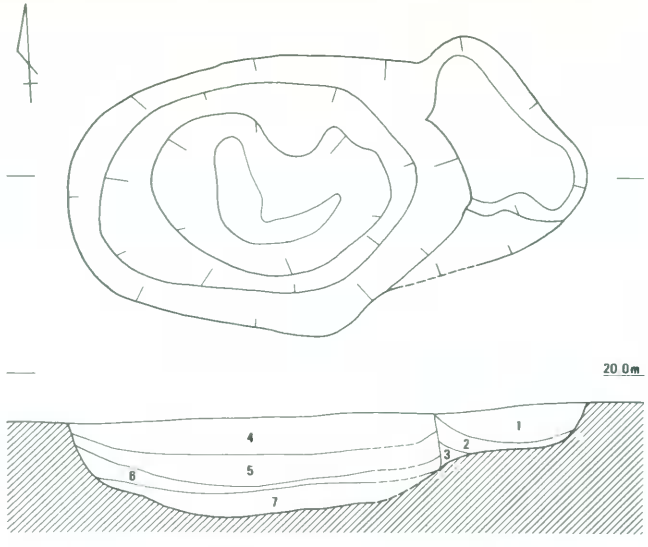
土壙67と**土壙68**は、調査範囲のほぼ中央部に位置する西側境界部分に近接して存在し、長軸方向が直交した状態に検出されたため、両方の土壙は何らかの関係があったと推定される。

土壙67の平面形は細長い溝状を呈し、長さ458cm・最大幅125cm・深さ30cmを測り、断面形は浅い「U」字形で部分的に2段掘りになっていた。内部には黒濃褐色土や礫を含む黒灰褐色土と黄褐色土が混合した土砂が堆積していた。

土壙68の平面形も前述した土壙66や土壙67と同様に細長い溝状を呈し、長さ187cm・最大幅44cm・深さ31cmであった。西端部分は底部が深くなり、断面形が袋状を呈していた。内部には黒灰色粘質土の上下に濃黒褐色土や礫を含む黒灰褐色土と黄褐色土が混合した土砂が認められた。

土壙67と土壙68の出土遺物はほぼ同時期と推定され、8世紀中葉になるであろう。　　(福田)

土壙69



1　灰褐色土（礫・土器片含む）
2　灰褐色土（黄色土含む）
3　〃
4　〃　（礫・土器片・焼土・炭含む）
5　暗灰褐色土（炭・焼土多く含む）
6　灰褐色土
7　暗灰褐色微砂

0　1m
（1/40）

796

797

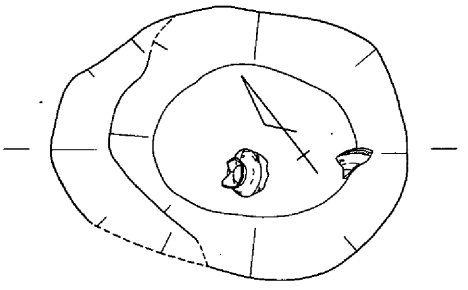
0　10cm
（1/4）

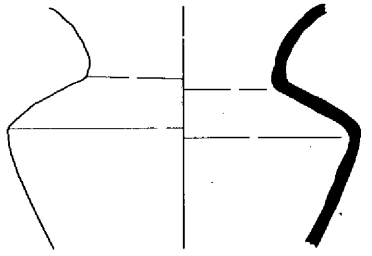
遺構名	位置（調査区）	規模(cm)			平面形	断面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
土壙69	MM2	[illegible]	[illegible]	83	楕円	椀	ニ	奈良	

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
796	須恵器	杯身	(19.2)	高台14.2	4.4	良好	(内・断)灰N7/1　(外)灰5Y6/1	微砂	底部外面ヘラケズリ・杯内面不定方向ナデ・高台
797	須恵器	高杯		[illegible]		良好	(内・外・断)灰N6/1	精良	脚端部下方へ折り[illegible]・[illegible]外軸

土壙69は、土壙68の南東約28ｍの位置に検出した。平面形は楕円形を呈するもので、長さ365cm、幅203cmを測る。土壙は椀形にくぼむものであり、底面の平坦面をなす部分は少ない。検出面からの深さは83cmを測る。土壙からは少量の遺物が出土している。**769**は高台付杯身である。底部はほぼ平坦で、体部は少し開きながら立ち上がる。**797**は高杯の脚部である，弧を描きながら開くもので、端部は下方に折れ曲がるものである。土壙の時期は奈良時代と考えられる。　（井上）

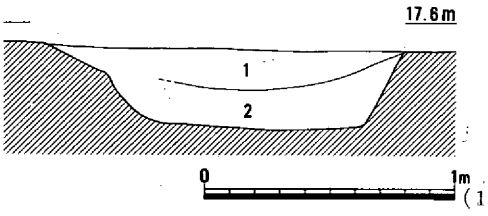
土壙70





798

0　10cm
(1/4)



1　灰褐色粘質微砂（炭・土器片含む）
2　暗褐灰色粘質土（土器片含む）

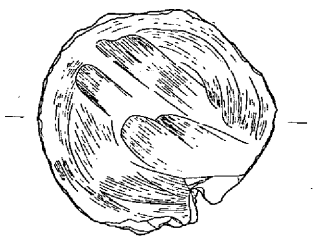
(1/30)

遺構名	位置(調査区)	規模(cm)			平面形	断面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
土壙70	KM3	142	106	32	楕円	逆台	△	奈良	

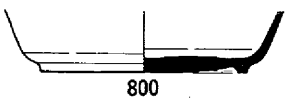
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
798	須恵器	広口壺				良好	(内・外)青灰5PB5/1 (断)暗紫灰5RP4/1	精良	丁寧なヨコナデ・外面自然釉

土壙70は、土壙69の南西約91mの位置に検出した。平面形は楕円形を呈するもので、長さ142cm、幅106cmを測る。断面形は逆台形を呈するものであるが、北西側は二段に掘られている。底面はほぼ平坦で検出面からの深さは32cmを測る。土壙からは少量の遺物が出土している。798は須恵器の壺で、肩部に明瞭な稜が見られる。土壙の時期は奈良時代と考えられる。　(井上)

土壙71



799



800

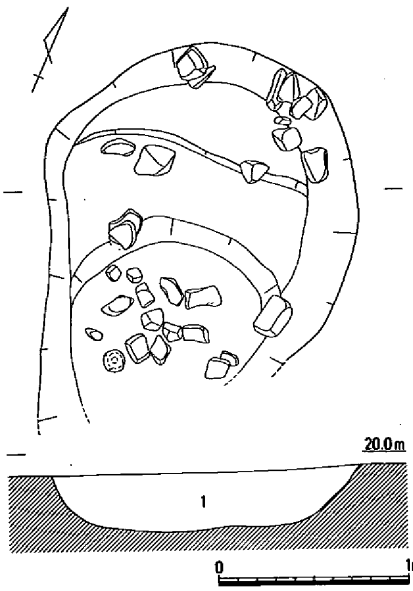
0　10cm
(1/4)

土壙71は、MM4区に位置し、土壙65と重複して検出された土壙である。土壙65よりまとまった礫が投入されている。調査時に重複した大形の土壙65が検出されたため、土壙71は石の詳細な図化をおこなっていない。出土遺物は図示した須恵器で、**799**は転用硯として用いられている。時代は奈良時代と考えられる。　(二宮)

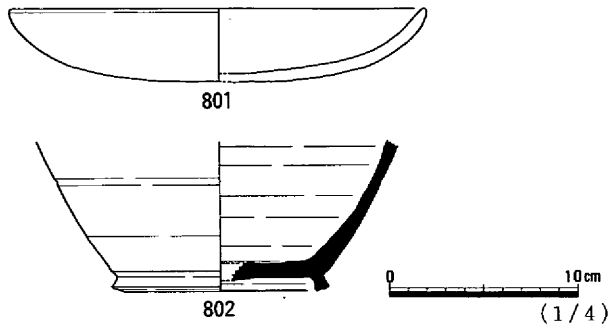
遺構名	位置(調査区)	規模(cm)			平面形	断面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
土壙71	MM4	(85)	55	23	楕円	−	△	奈良	

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
799	須恵器	転用硯				良好	(内)灰白N7/　(外・断)灰白5Y8/1	細砂	内面使用痕あり・外面も使用か？
800	須恵器	杯身		10.1		良好	(内・断)灰白N7/　(外)灰N6/	微砂	内面仕上げナデ・高台

土壙72



1　暗茶褐色粘質土　　(1/40)



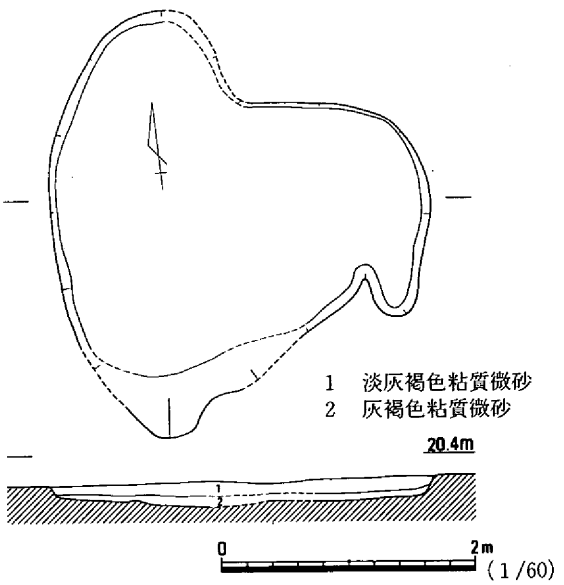
(1/4)

土壙72は、土壙71の南西約139mの位置に検出した。調査区の南端に検出したため全体の形状は不明であるが楕円形を呈すると考えられる。判明する規模は幅162cm、深さ38cmを測る。**801**は土師器の皿で、磨滅のため調整は不明である。**802**は須恵器の壺で高台が付く。土壙の時期は奈良～平安時代と考えられる。　　(井上)

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙72	MM2	不明	(162)	38	(楕円)	椀	△	奈良～平安時代	

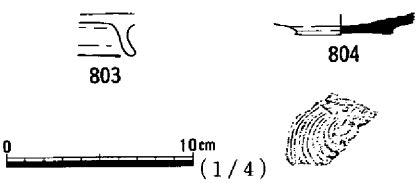
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
801	土師器	皿	(22.0)			良好	にぶい黄橙10YR6/4	微砂	内外面磨滅
802	須恵器	壺		高台10.4		良好	(内・断)灰白5Y7/1 (外)黄灰2.5Y6/1	精良	内外面丁寧なロクロナデ・高台

土壙73



(1/60)

土壙73は土壙72の北約14mの位置に検出した。平面形は不整形を呈している。土壙は長さ300cm、幅341cmを測る。断面形は逆台形を呈しており、底面は浅い起伏がある。検出面からの深さは21cmを測る。土壙からは少量の土器が出土している。**803**は土師器の杯で、高台が付く。**804**は須恵器の椀で、底面に糸切り痕跡が見られる。土壙の時期は古代の終末と考えられる。　　(井上)

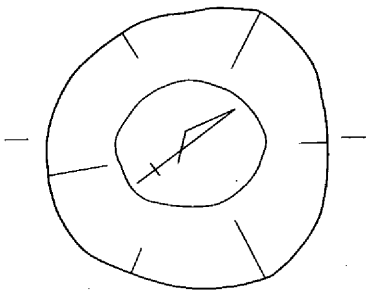


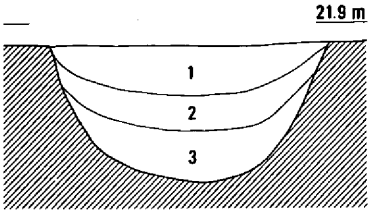
(1/4)

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙73	MM2	300	341	21	不整形	逆台	△	平安	

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
803	土師器	杯				良好	橙7.5YR6/6	精良	赤色顔料
804	須恵器	椀		(5.5)		良好	(内・外・断)灰N5/1	精良	底部糸切り

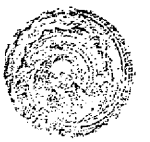
土壙74





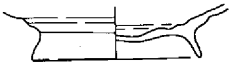
(１/30)

1　黒褐色土
2　黒灰褐色粘質土
3　黒灰色粘質土



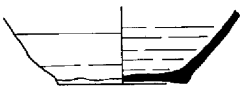
805

806

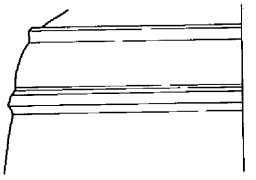


807

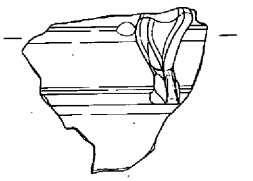
808



809



810



(１/４)

遺　構　名	位置(調査区)	規模(cm)			平面形	断面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
土壙74	ＭＭ４	112	114	56	円	椀	○	平安後半	

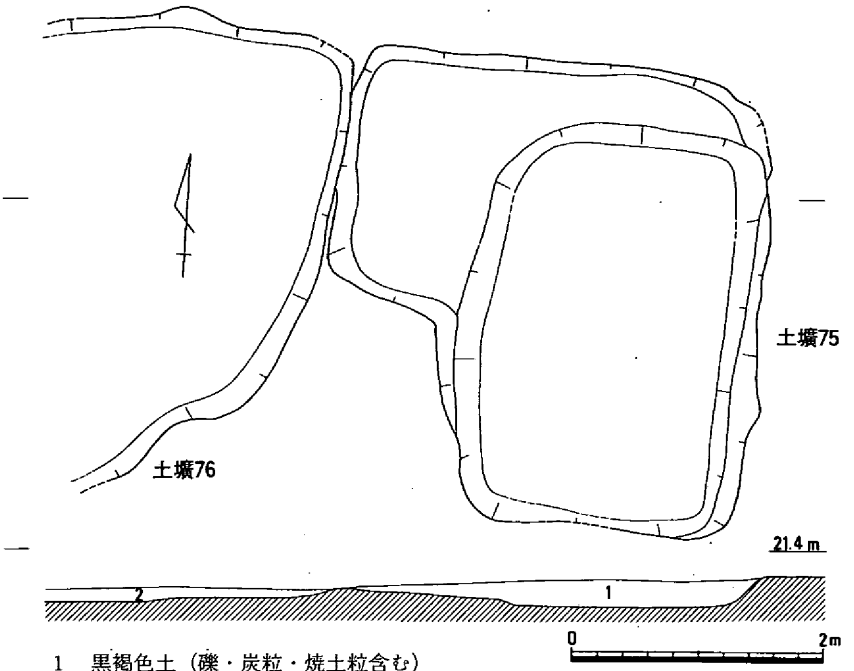
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
805	土師器	杯	11.4	7.0	2.7	良好	にぶい橙7.5YR7/4	微砂	底部ヘラ切り
806	土師器	杯	11.6	7.6	2.7	良好	にぶい黄橙10YR6/4	微砂	底部ヘラ切り
807	土師器	杯？		高台8.6		良好	にぶい橙7.5YR7/4	細砂	高い高台部を有す
808	土師器	皿	13.0	高台7.2	2.6	良好	にぶい橙7.5YR7/4	細砂	器壁磨滅・貼り付け高台
809	須恵器	椀		6.8		良好	(内･外･断)灰白N7/	細砂	底部糸切り
810	須恵器	壺				良好	(内･外･断)灰白N7/	細砂	把手付・体部に２条の貼り付け突帯

土壙74は、ＭＭ４区に位置し、直径112～114cmの円形を呈し、深さは、検出面より56cmを測る。井戸の可能性もある。

土壙内からの出土遺物は、土師器の杯**805・806**、高台付杯あるいは椀の底部**807**、高台付小皿**808**、須恵器椀**809**、取手付瓶子形壺**810**などが出土している。

この土壙の時期は出土遺物から平安時代後半に属すると考えられる。　(伊藤)

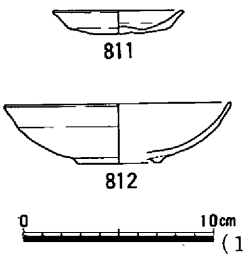
土壙75・76



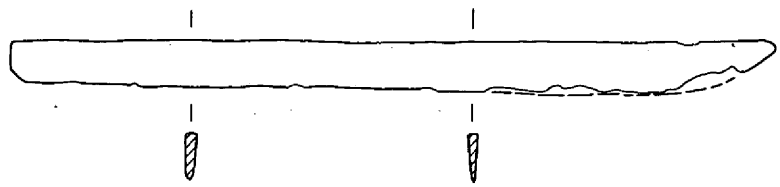
1　黒褐色土（礫・炭粒・焼土粒含む）
2　〃　（黄褐色土ブロック・礫・炭粒・焼土粒含む）

（1/60）

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙75	MM6	330	220	22	方	逆台	△	中世(室町)	方形土壙が重複
		340	210	10	不明				
土壙76	MM6	不明	不明	(12)	不明	皿	△		



（1/4）



M21　（1/2）

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
811	土師質土器	小皿	6.8	3.4	1.3	良好	にぶい橙7.5YR7/4	微砂	丁寧なナデ調整
812	土師質土器	高台付椀	(12.0)	(4.4)	3.3	良好	灰白10YR8/1	精良	「早島式土器」・高台部貼り付け

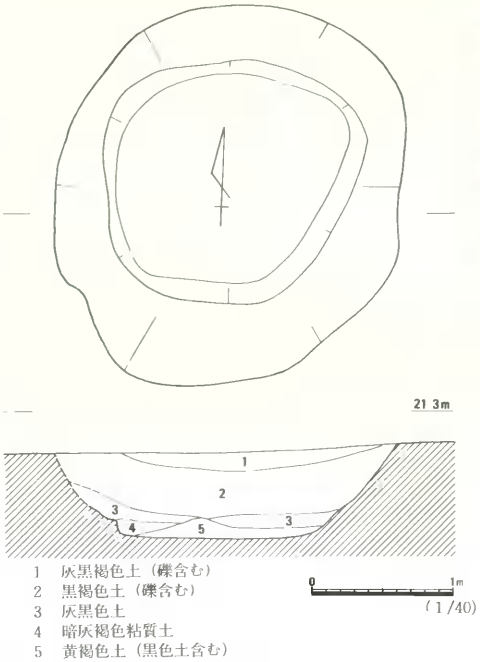
掲載番号	器種	材質	法量 最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
M21	刀子	鉄	203.0	13.5	3.5	25.57	

土壙75・76は、M21グリッド(MM6区)に位置する。土壙75は平面形が鈎形になっており、切り合い関係を確認することができなかったが、2基の長方形を呈する土壙が重なっているものと考えられる。もしそうであるとすれば、長軸を南北に向けるものは長さ330cm、幅220cm、深さ22cm、長軸を東西に向けるものは長さ340cm、幅210cm、深さ10cmあまりの規模になる。

土壙76は土壙75の西側に接している。土壙の西半分は削平されているため形状は不明である。規模は現状で南北370cmを測る。深さは浅く、底部はほぼ平坦である。

遺物は土師質土器が少量と刀子が1点出土した。**811**は小皿である。**812**は高台付椀で、高台の断面は三角形を呈する。土器の時期は室町時代と考えられる。　（平井）

土壙77



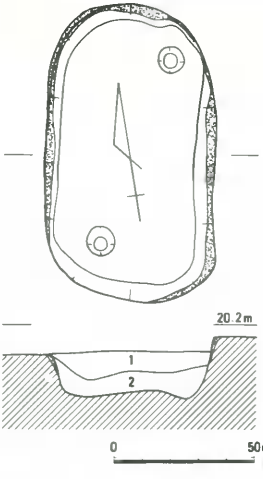
1　灰黒褐色土（礫含む）
2　黒褐色土（礫含む）
3　灰黒色土
4　暗灰褐色粘質土
5　黄褐色土（黒色土含む）

(1/40)

土壙77はL21グリッド（MM6区）に位置する。平面形はやや歪んだ円形を呈する。規模は長さ287cm、幅248cm、深さ67cmを測る。底部は平坦で、壁は一旦急傾斜で15cmほど立ち上がり、そこからやや傾斜を緩めてさらに立ち上がる。埋土は上層で大きく2層に分かれるが、下層では数層の薄い堆積が見られた。土壙の時期は埋土から中世のものと考えられる。　(平井)

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙77	MM6	287	248	67	円	椀		中世	

土壙78



1　暗灰褐色土（礫含む）
2　灰黒褐色土（焼土・炭含む）

(1/20)

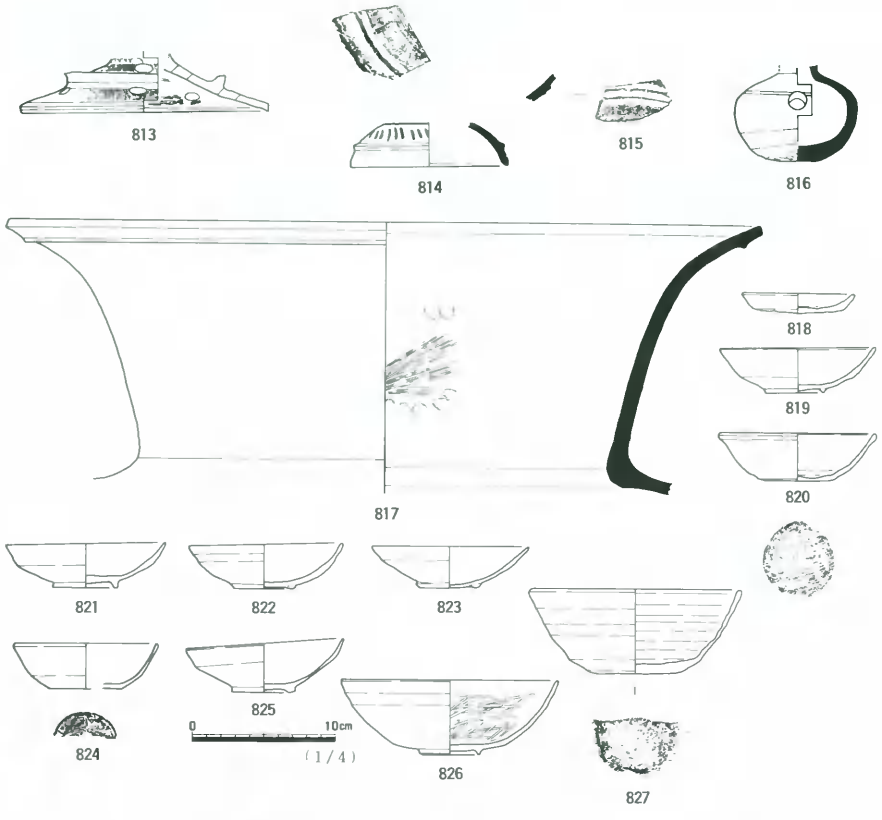
土壙78は、MM5区で検出された。土壙54の東方約5mに位置する。長軸方向で約110cm、短軸方向で約60cmを測る長楕円形を呈する平面形である。深さは約30cm残存していた。底面はやや平坦であり、その両端側に深さ10cm程度の小穴が確認された。また、この土壙の特徴として、壁が被熱していたことが指摘され、何らかの火を用いたことが憶測されるが、性格についてはこれ以上言及できる手がかりを得ることはできなかった。時期についても、出土遺物が無く、不明と言わざるを得ない。　(大橋)

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙78	MM5	105	60	[illegible]	長楕円	[illegible]	[illegible]	土壙?	[illegible]

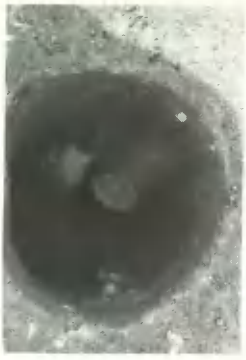
(10) 柱　　穴

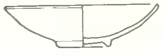
掘立柱建物を構成するものとして認識できた柱穴以外からも良好な遺物の出土を見たものがある。このことから、特徴的で主要な遺物を出土した柱穴について位置と遺物を図示した。

なお、主に集落の時期的な変化を補足する程度の資料しか示していないことを記しておく。　（下澤）



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
813	弥生土器	装飾高杯		17.2		良好	にぶい赤褐10R7/3	細砂	円形透かし孔2段（上4・下5）・貼り付け突帯
814	陶質系土器	甕	11.0			良好	内・外）オリーブ黒7.5Y3/1 断）暗赤褐10R3/2	精良	連続刺突文
815	陶質系土器	高杯				良好	内・外・断）灰N4/	微砂	
816	須恵器	鉢				良好	内・外・断）灰N6/	微砂	底部静止ヘラケズリ
817	須恵器	甕	52.7)			良好	内・外）灰白N7/　断面）褐灰N6/	微砂	歪み大
818	土師質土器	小皿	3.9	6.35	1.5	良好	にぶい褐5YR7/4	精良	
819	土師質土器	高台付椀	10.8	高台(4.6)	3.2	良好	灰白10YR8/2	精良	「早島式土器」・退化した貼り付け高台
820	備前焼	椀	(10.8)	3.5	3.4	良好	灰白N6/	精良	底部糸切り・口縁部黒斑
821	土師質土器	高台付椀	11.6	高台3.9	3.2	良好	灰黄2.5Y7/2	精良	「早島式土器」・貼り付け高台
822	土師質土器	高台付椀	10.7	高台4.0	3.2	良好	灰白10YR8/2	微砂	「早島式土器」・退化した貼り付け高台
823	土師質土器	高台付椀	10.8	高台3.8	3.0	良好	灰白2.5Y8/2	精良	「早島式土器」・退化した貼り付け高台
824	備前焼	椀	9.9	10.0	3.3	良好	灰N6/	精良	底部糸切り
825	土師質土器	高台付椀	11.0	高台3.5	3.6	良好	浅黄2.5Y8/4	精良	「早島式土器」・貼り付け高台
826	瓦器	高台付椀	(15.2)	高台3.8		良好	灰N5/1	精良	内面ヘラミガキが密に観察できる
827	備前焼？	椀	(14.6)	(8.0)		良好	灰白2.5Y8/2	精良	底部糸切り





828

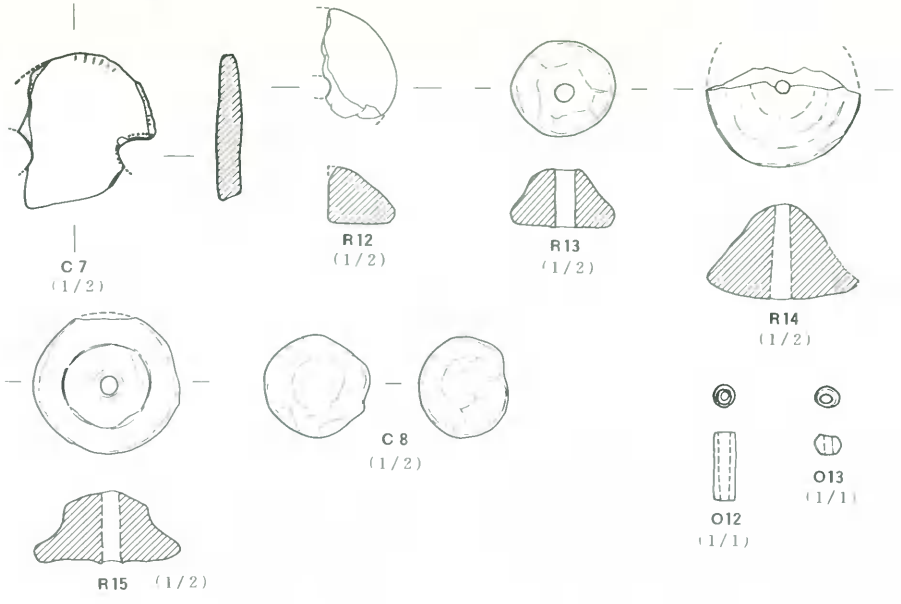
829

830

0　10cm
(1/4)

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
828	土師質土器	高台付椀	10.7	高台3.3	3.0	良好	灰白2.5Y8/2	精良	早島式土器
829	土師質土器	小皿	6.9	5.4	1.6	良好	橙7.5YR6/6	微砂	
830	瓦器	高台付椀	(14.6)	高台4.7	4.5	良好	灰N5/	精良	外面ユビナデ・ナデ明瞭・内面不定方向ヘラミガキ

柱穴1は、ＫＭ４区に位置し、**813**の弥生土器を出土している。装飾高杯の脚部で、裾中ほどに突帯を付しその上下に円形の透かし孔を用いている。**柱穴2**は、ＭＭ１区に位置し、**814**と**815**の韓式系土器と思考されるのが出土している。**814**は蓋と考えられるもので器形は椀を伏せたように全体的に丸みを持つ。稜は三角形状に張り出し、口縁端部は内傾し凹面状となる。天井部には、沈線文と刺突文が施される。**815**は高杯の杯部の小破片である。２段の突帯を付し、その下半にヘラ状工具による斜格子が認められる。この両者は陶質土器と思考されるが、特に**814**は胎土、焼成などからその可能性が大きいものである。**柱穴3**は、ＭＭ４区に位置し、**816・817**の須恵器を出土している。**816**は、甕であり、体部上半の沈線と円孔を認める。底部には、静止ヘラケズリが認められる。**817**は、甕であり、口縁端部は角ばり端部外面には突線が付されている。**柱穴4**は、ＭＭ５区に位置し、**818**の早島式土器を出土している。**柱穴5**は、ＭＳ３区に位置し、**819**の高台を付す早島式土器と**820**の糸切り底を持つ備前焼を出土している。**柱穴6～柱穴10**は、ＭＭ１区に位置し、**821～823**と**825**の高台を付す早島式土器を出土している。**824**は、勝間田焼で底部は糸切りである。**柱穴11**は、ＭＭＢＯＸ１区に位置し、**826**の瓦器と**827**の勝間田焼が出土している。**柱穴12**と**柱穴13**は、ＭＭ１区に位置し、**828**の高台を付す早島式土器と**829**の早島式土器の皿が出土している。**柱穴14**は、ＭＢＯＸ２区に位置し、**830**の瓦器椀を出土している。　（下澤）



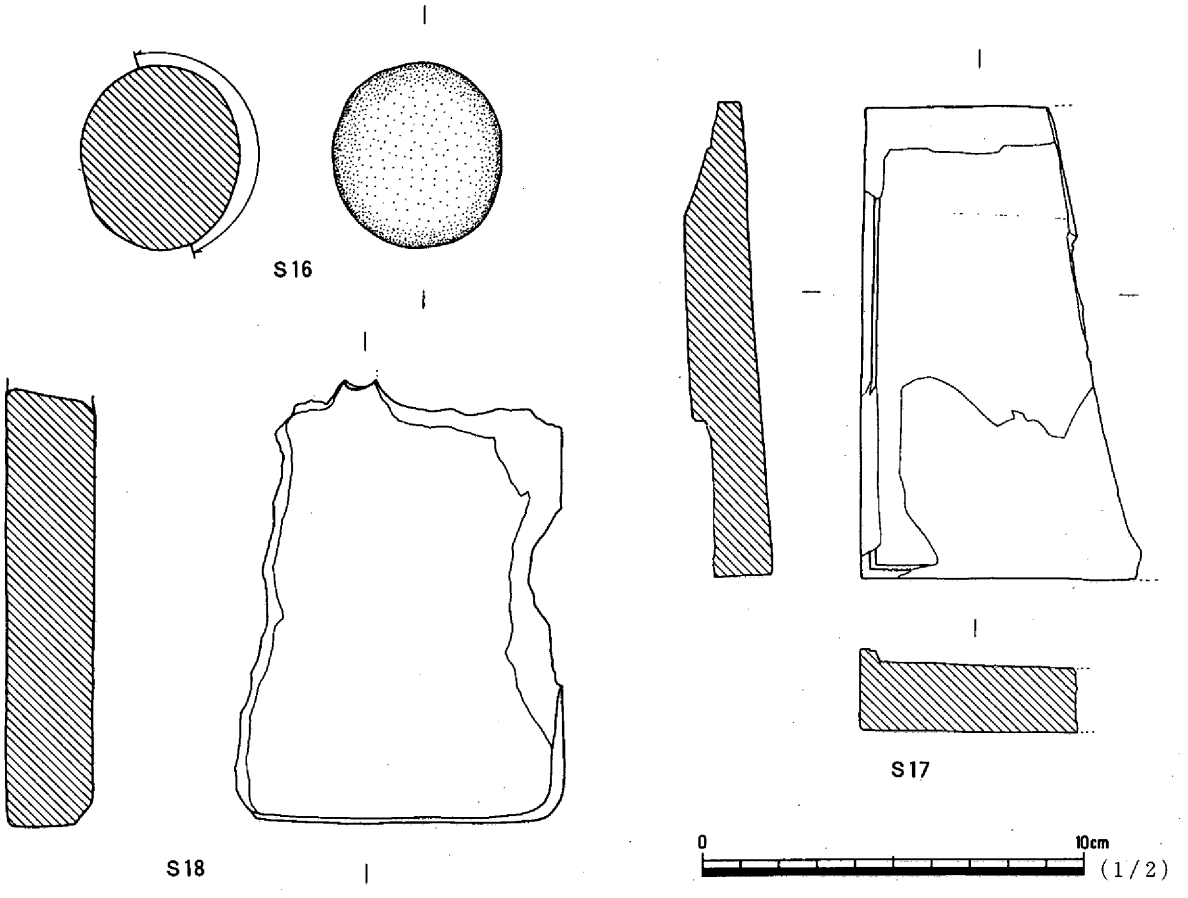
掲載番号	器種	色調	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
C 7	分銅形土製品	にぶい黄橙10YR7/[illegible]	[illegible]	31.5	[illegible]	[illegible]	

掲載番号	器種	材質	形態	色調	最大径(mm)	最大厚(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
R 12	紡錘車	土	F 2	にぶい橙5YR7/2	38.0	20.0			
R 13	紡錘車	土	F 1	灰白2.5Y8/2	35.7	21.1	5.2	22.0	
R 14	紡錘車	土	F 2	橙5YR6/6	53.5	34.0	5.1	(39.3)	
R 15	紡錘車	土	F 1	橙7.5YR6/6	[illegible]	[illegible]	[illegible]	48.1	

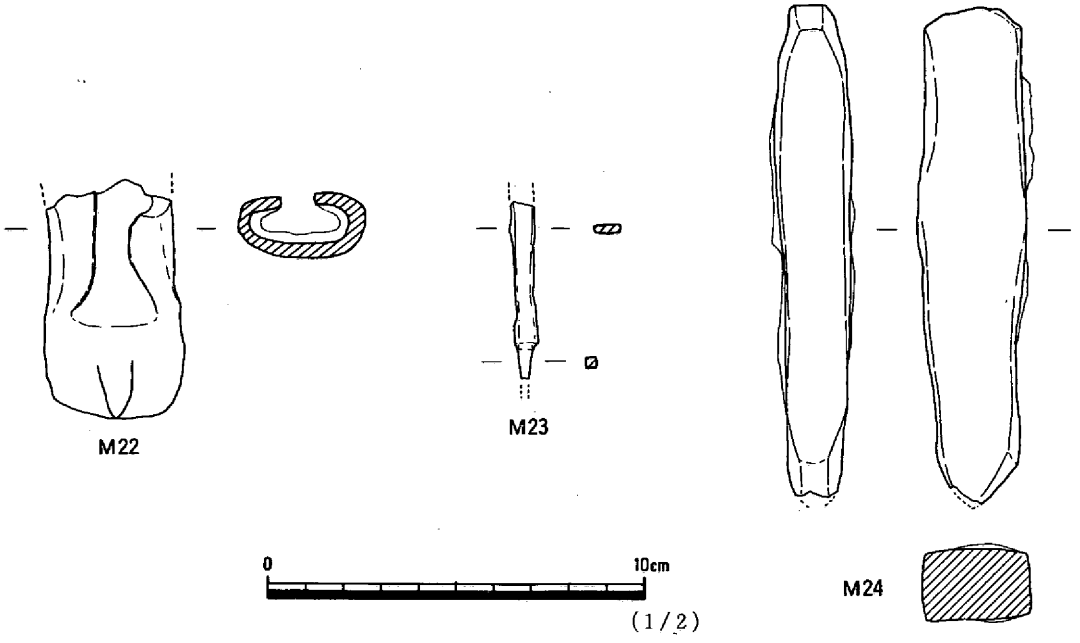
掲載番号	器種	色調	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
C 8	土鈴	明赤褐5YR5/6	[illegible]	31.5	[illegible].9	完形	

掲載番号	器種	材質	色調	最大長(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
O 12	管玉	碧玉の巻い部分	濃い緑	12.4[illegible]	[illegible]	上2.2　下1.4	0.31	
O 13	小玉	ガラス	土透明青	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	

柱穴15は、ＫＭ４区に位置し、**Ｃ７**の分銅形土製品が出土している。上半分の破片である。両側の抉り部は大きくなく、「Ｕ」字状を呈し縁どるように刺突文を施す。**柱穴16**は、ＫＭ３区に位置し、**Ｒ12**が出土している。台形状を呈するが、丸みを持っている。**柱穴17**は、ＫＳ２区に位置し、**Ｒ13**が出土している。台形状を呈するが、丸みを持ち押圧痕を留めている。底面には、線刻文が認められる。**柱穴18**は、ＭＢＯＸ３区に位置し、**Ｒ14**が出土している。山形を呈し押圧痕を止める。孔は、上方のほうに行くにしたがい狭くなる。**柱穴19**は、ＭＭ１区に位置し、**Ｒ15**が出土している。台形状を呈するが、側面なかほどですぼまって立ち上がっている。**柱穴20**は、ＫＭ１区に位置し、**Ｃ８**の土鈴が出土している。完形品であるため内部の様子は不明であるが、振ると乾いた音が聞かれる。**柱穴21**は、ＭＭ６区に位置し、**Ｏ12**の管玉を出土している。穿孔は片面から行なわれている。**柱穴22**は、ＭＭ３区に位置し、**Ｏ13**のガラス製の小玉を出土している。　（下澤）

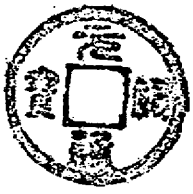


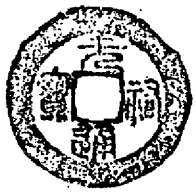
掲載番号	器種	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
S16	磨り石	玢岩	長径49		42	140.75	
S17	硯	頁岩	124	(73)	23	280.77	
S18	硯	片岩	(116)	(87)	23	440.20	滑石を多く含む



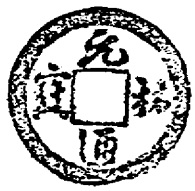
掲載番号	器種	材質	法量				備考
			最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	
M22	斧	鉄	63.0	38.5	10.0	61.27	
M23	鏃	鉄	(47.0)	6.2	3.0	2.43	
M24	鑿	鉄	(130.0)	29.5	20.0	272.74	

柱穴23は、ＭＭ６区に位置し、**Ｓ16**の磨り石を出土している。円形を呈し、半面に磨った面が認められるが、叩いた面は認められなかった。**柱穴24**は、ＭＭ６区に位置し、**Ｓ17**の硯を出土している。陸部と海部の一部が剥離し、側辺は段を作っている。**柱穴25**は、ＭＭ１区に位置し、**Ｓ18**の硯を出土している。陸部は掘り込まれておらず平面となっており、海部は不明である。表裏の両面ともに墨が認められた。**柱穴26**は、ＭＭ７区に位置し、**Ｍ22**の鉄斧を出土しいる。**柱穴27**は、ＭＭ６区に位置し、**Ｍ23**の鉄鏃を出土しいる。鏃身部分は欠失して不明であるが、長い篦被部を有し、篦被は棘状を呈さない。**柱穴28**は、ＭＭ１区に位置し、**Ｍ24**の鑿を出土しいる。遺存状態は、極めて良好である。

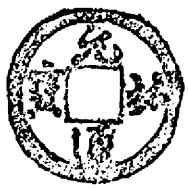

Ｍ25　（1/1）

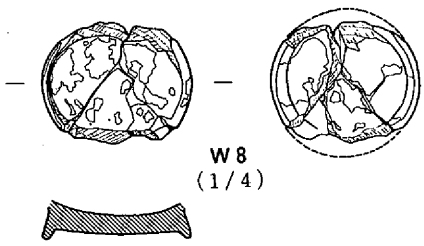

Ｍ26　（1/1）

Ｍ27　（1/1）


Ｍ28　（1/1）

Ｍ29　（1/1）


Ｍ30　（1/1）


Ｗ８
（1/4）

掲載番号	器種	材質	法量				備考
			最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	
Ｍ25	古銭	銅	径24.4		1.3	2.85	元■通寶
Ｍ26	古銭	銅	径24.7		1.1	3.27	元祐通寶
Ｍ27	古銭	銅	径24.6		1.3	3.17	咸平元寶
Ｍ28	古銭	銅	径24.4		1.4	3.72	元祐通寶
Ｍ29	古銭	銅	(径21.9)		1.3	1.66	元豊通寶
Ｍ30	古銭	銅	径24.4		1.6	2.85	元祐通寶

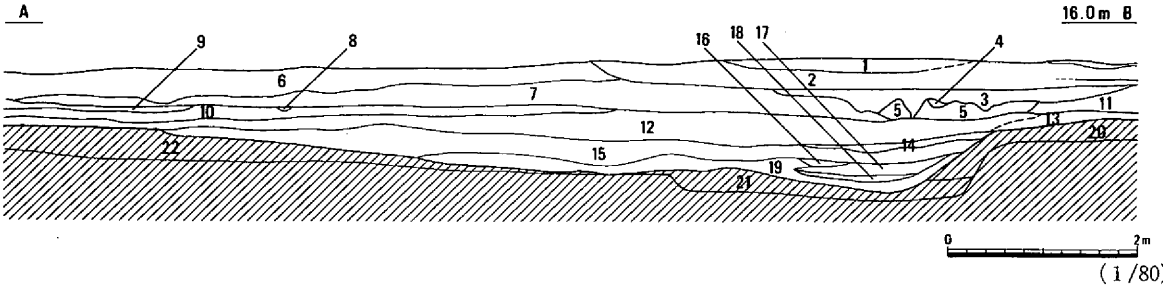
柱穴29は、ＭＭ２区に位置し、**Ｍ25**と**Ｍ26**の古銭を出土しいる。**Ｍ25**は、一部名が不明であるが、**Ｍ26**が元祐通寶であり初鋳が1086年であり、他のピット出土の銭がこの年代よりも古くなるが、その幅はせまく、**Ｍ25**もこの幅に納まるとするのが妥当であろう。**柱穴30**は、ＭＳ２区に位置し、**Ｍ27**の古銭を出土している。初鋳が998年で他のピット出土の銭の中で最も古い年代を示している。**柱穴31**は、ＭＳ２区に位置し、**Ｍ28**の古銭を出土しいる。**柱穴32**は、ＭＭ４調査区に位置し、**Ｍ29**とＭ30の古銭が出土している。**Ｍ29**の元豊通寶の初鋳が1078年である。これらの、銭の年代の幅は998年～1086年であることから宋銭であることが明らかであり、今回の報告書でその主要部分遺物を示すことができなかったものの年代の目安となろう。

柱穴31は、ＭＭ５区に位置し、**Ｗ８**を出土している。**Ｗ８**は木製の椀で、高台部分が遺存していた。底部には、漆と思われるものが全面に付着していた。　（下澤）

(11) 溝

確認された溝のうち、ここで17条を個別に説明する。しかしながら出土遺物が細片で詳細が不明なものや形状の不定なものについては個別で扱わず割合したものも多い。　(大橋)

溝　1

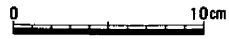


(1/80)

1　茶褐色砂礫
2　明青灰褐色粘質土
3　明青灰褐色砂礫
4　淡茶褐色砂質土
5　暗青灰褐色強粘質土（炭含む）
6　明褐灰色粘質土（微砂含む）
7　灰色粘質土
8　灰褐色砂質土
9　明灰色粘質土
10　褐灰色粘質土（微砂・鉄含む）
11　明青灰褐色強粘質土
12　暗オリーブ灰色粘質土（鉄含む）
13　淡灰褐色砂質土（礫含む）
14　暗黒灰色粘質土（砂礫少し含む）
15　暗淡黒灰色粘質土
16　褐灰色砂質土
（植物遺体多く含む）
17　褐灰色粘質土
（植物遺体多く含む）
18　灰色砂
19　灰緑色砂礫
20　濃青灰褐色砂質土
21　黒色粘質土
22　暗褐灰色粘質土

831

832

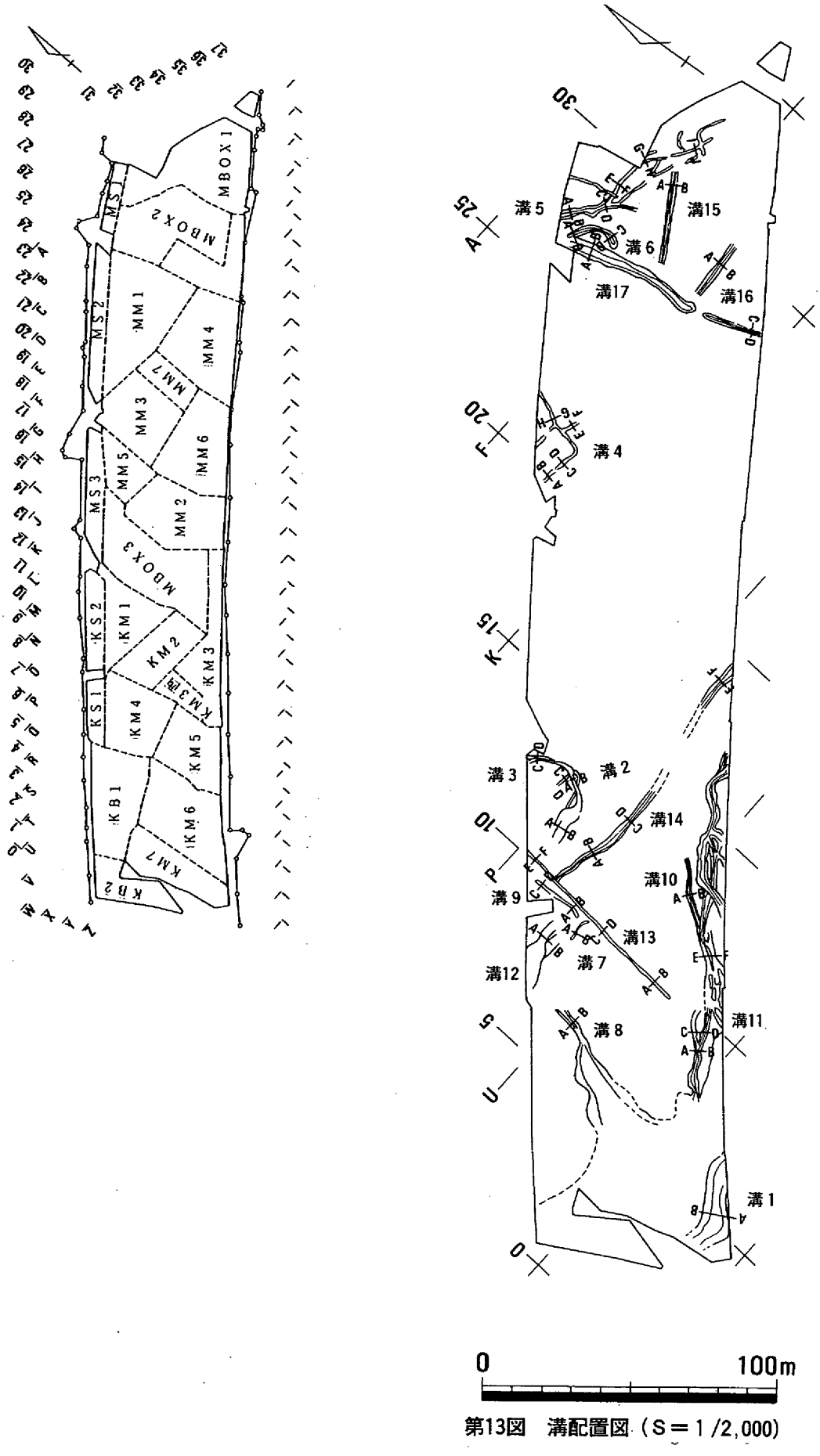


(1/4)

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
831	縄文土器	深鉢				良好	(内)灰黄褐10YR5/2 (外)灰黄褐10YR5/2	細砂	外－2条の爪形文・口唇部－キザミメ・内－押部有り
832	縄文土器	深鉢				良好	(内)褐灰10YR5/1 (外)褐灰10YR5/1	細砂	外－アルカ属の条痕→平滑・内－平滑

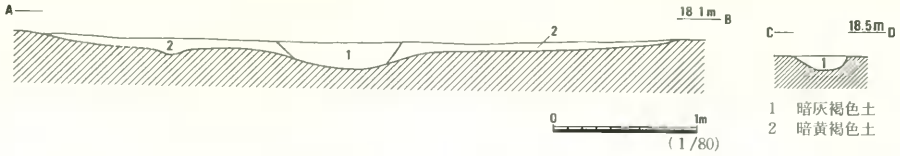
溝1は、ＫＭ７区に位置し、斎富遺跡調査区の南端にある。

当調査区は、東側のＫＢ１とＫＭ６区で遺構が認められる黄褐色土系の層がなくなり、後背地の様相を示すことが明らかになっていた。このことから、さらに下層に遺構の存在の有無を確認するため、トレンチによる調査を実施した。この結果、溝１が検出されたのである。このようなことから、溝１は面的な把握はできず各トレンチの結果において幅９ｍ、深さ60cm前後で東西に流路をとることが想定されるものである。土層断面図によれば、北側の肩の遺存が良好で南側はなだらかに立ち上がって行く。溝の埋土は、14層－19層である。出土遺物は、**831**の縦の爪形文と**832**のアルカ属の条痕を文様風に用いている。時期は、これらの出土遺物から縄文時代晩期中葉とされる。　(下澤)



第13図　溝配置図（S＝1/2,000）

溝　2



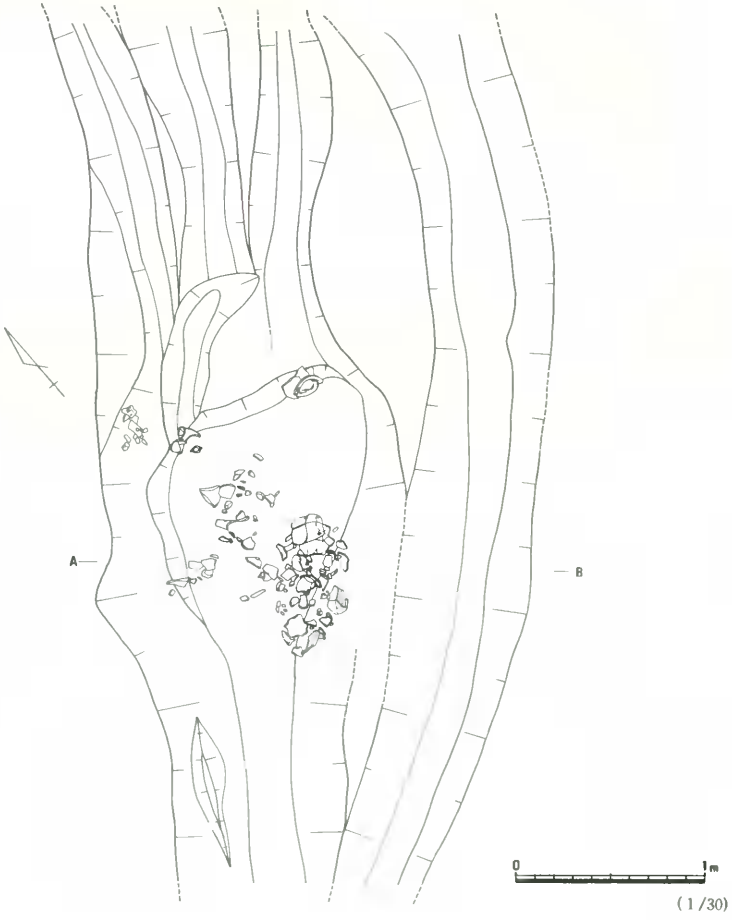
(1/80)

溝2は、ＫＭ１とＫＳ２の調査区に位置し、溝３と重複する。

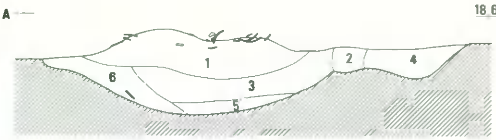
溝は、東西方向に向いて東側で「Ｕ」字状に屈曲する。幅は40～90㎝を測るが、平均的には50㎝前後の細い溝である。

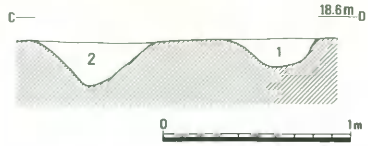
この溝は、周溝遺構４の溝と極めて近い内容を有していることが知られる。しかしながら、これと関連するものとして具体的に把握できていない。時期は出土遺物はないが溝３より新しい。（下澤）

溝　3



(1/30)

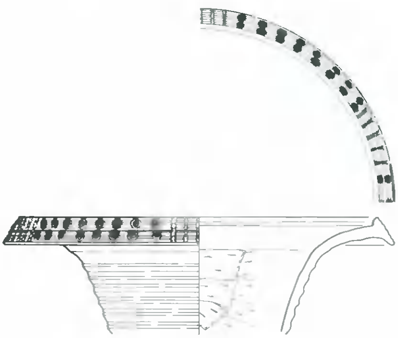




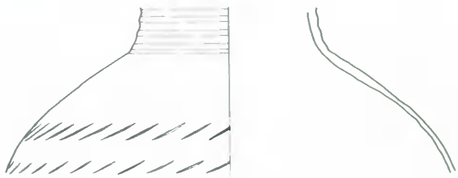
(1/30)

1　淡黒褐色土（礫・炭化粒含む）
2　茶褐色土
3　〃　　（焼土・炭化粒少し含む）
4　淡黄褐色土
5　黒褐色土（炭化粒含む）
6　淡茶褐色土（炭化粒・黄褐色土ブロック含む）

1　暗灰褐色土
2　暗褐灰色粘質土（礫多く含む）



835

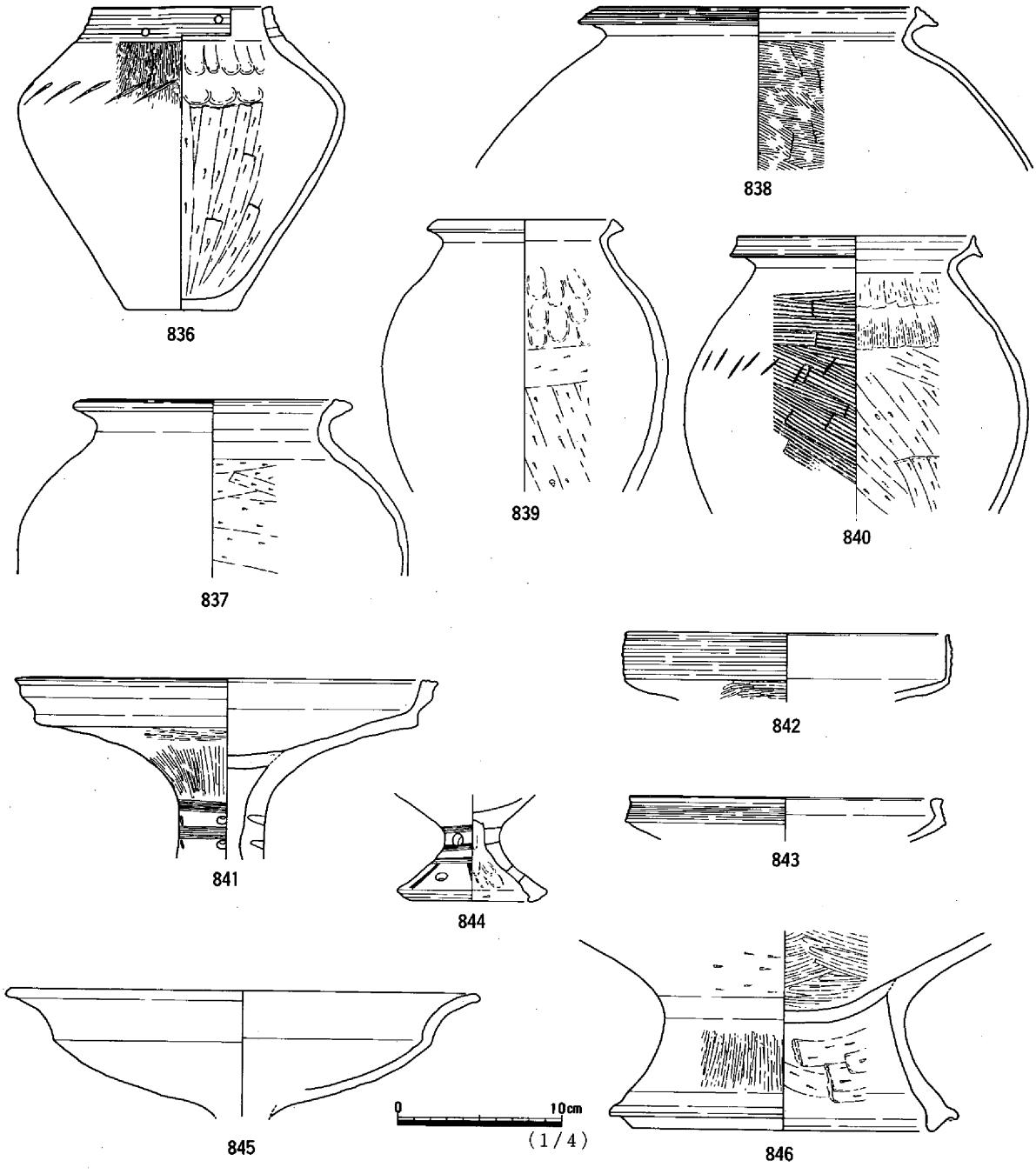


833

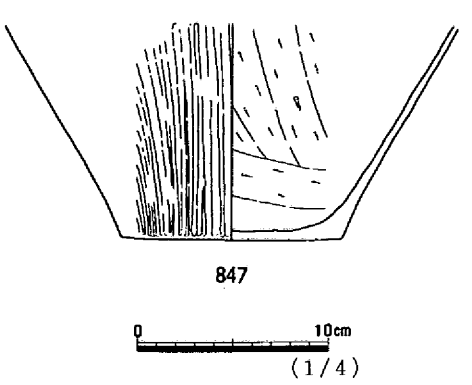
834

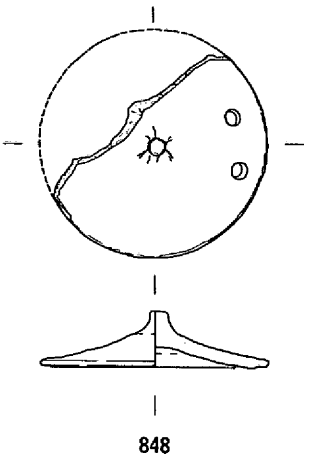
0　10cm
(1/4)

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
833	弥生土器	壺				良好	浅黄橙5YR8/4	細砂	847と同一個体か
834	弥生土器	甕	14.2			良好	にぶい橙7.5YR6/4	細砂	胴内面ユビナデ
835	弥生土器	器台	(25.2)			良好	橙5YR6/8	細砂	[illegible]



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
836	弥生土器	無頸壺	10.8	6.6	18.6	良好	にぶい黄橙10YR7/4	砂礫	口縁部2個一対の透かし孔
837	弥生土器	甕	15.0			良好	にぶい橙7.5YR6/4	細砂	
838	弥生土器	甕	19.2			良好	橙5YR6/6	微砂	内面はハケメ・外面ハケメ？
839	弥生土器	甕	(10.6)			良好	にぶい黄橙10YR7/3	砂礫	
840	弥生土器	甕	14.2			良好	にぶい橙5YR6/4	砂礫	
841	弥生土器	高杯	23.8			良好	にぶい橙7.5YR7/4	砂礫	
842	弥生土器	高杯	19.4			良好	にぶい橙7.5YR7/4	砂礫	直立する口縁部外面に凹線文
843	弥生土器	高杯	(17.5)		2.7	良好	にぶい橙5YR7/4	精良	口縁部上面に凹線
844	弥生土器	高杯		7.1		良好	にぶい橙7.5YR6/4	砂礫	
845	弥生土器	高杯	28.4			良好	明赤褐5YR5/6	砂礫	
846	弥生土器	台付鉢		18.0		良好	にぶい黄橙10YR6/4	砂礫	外面磨滅





掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
847	弥生土器	壺				良好	淡橙5YR8/4・暗灰N3/	微砂	833と同一個体か
848	弥生土器	蓋	12.1		3.0	良好	橙7.5Y6/3	砂礫	

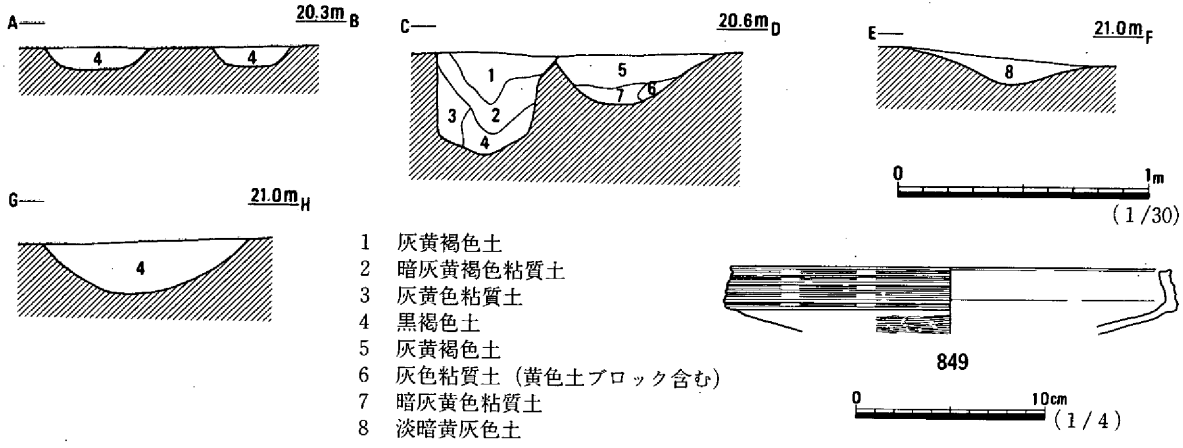
溝3は、ＫＭ１区とＫＳ２区に位置し、溝２と重複する。

弧を描くように認められるが、溝の規模および内容は一様ではない。溝は、調査区西寄りで２条として検出され、６ｍほど東へ行った所で１条となり幅も340cmとなる。さらに、北へ屈曲する部分において幅は160cmとなり２条で１条となる部分で１ｍを測る溝となる。土壙61近くでは、３条となりＳ２調査区においては２条となる。３条から１条となる部分は、淵状となっている。溝の深さは、最も幅の広がる部分で５cmで非常に浅く、最も幅の狭まる部分では30cmを測る。また、淵部分では35cm、側道部分の２条の溝は24cmと15cmをそれぞれ測る。

遺物は、主に３条の溝が淵状となり１条となる部分において土器溜り状に検出された。**833**は、壺の頸部下半から胴部上半にかけての破片である。頸部には凹線が、肩部上下に２段の刺突文が施文されている。**834**は、頸部が「く」の字状に屈曲し端部を上下に拡張させ、端面には凹線を施文する。頸部から胴部へは稜をもって移行する。内面は、ヨコナデが認められる。**835**は、頸部から口縁部にかけて大きく逆「ハ」の字に広がる器台である。口縁端部は上下に拡張し外面に凹線、重竹管文、棒状浮文がみられる。内面は、横位のヘラケズリが認められる。**836**は、無頸壺で口縁部に凹線を施文し、２個一対の透かし孔が認められる。肩部上半に刺突文を施す。**838**～**840**は、甕である。**838**と**840**は、「く」の字状に屈曲する頸部から上下に拡張する口縁部をつくり、端面には凹線を施文する。**837**・**839**は、口縁端部の拡張が顕著でなく肥厚させる。**841**～**846**は、高杯である。**842**は、上方に立ち上がる口縁部をもち、その外面に凹線を施す。**844**は、脚部に櫛状工具を用いて施文する。**845**は、口縁部が外方に大きく屈曲する。**846**は、**847**と同様に円盤充塡が認められる。**848**は、蓋で中央につまみ状に盛り上げ、２個一対の孔が認められる。

溝３の時期は、上記の出土遺物が弥生時代中期末から後期中葉までのものが認められることから、この間の時期をあてることができる。　　（下澤）

溝　4



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
849	弥生土器	高杯	21.4			良好	橙5YR7/6	精良	口縁部外面凹線文

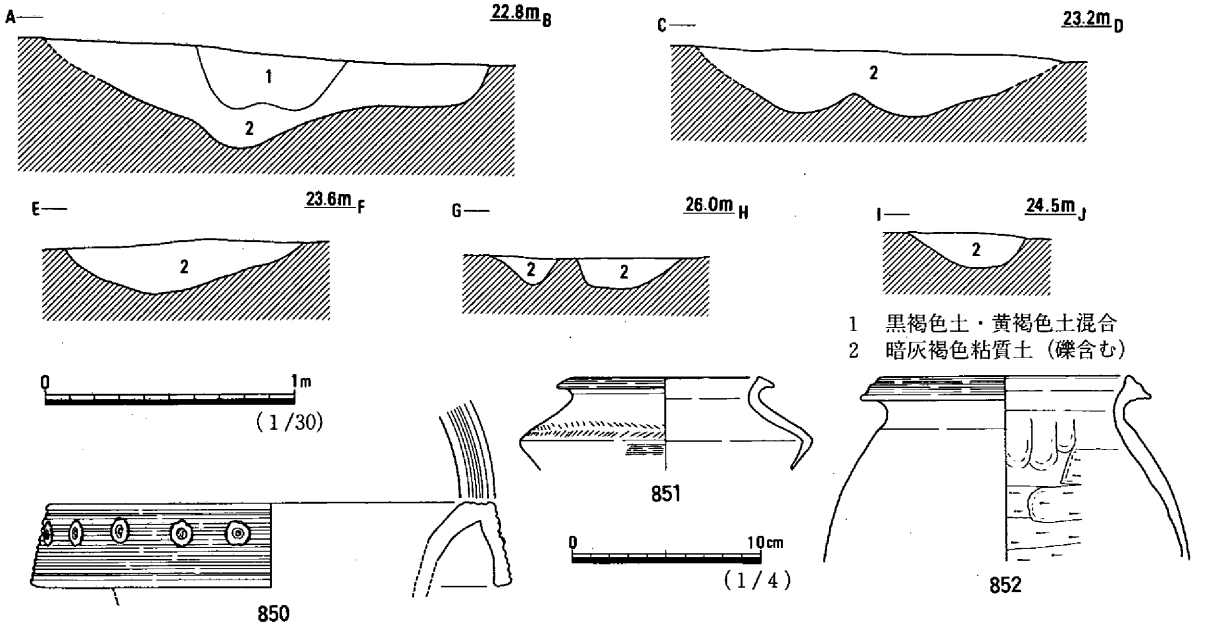
溝4は、ＭＭ１区とＭＳ２区に位置し、区画溝と平行して検出された。

溝は、「Ｌ」字状に西と北に延びており、北方向の溝の中ほどからは東に長さ５ｍほどの溝がでている。溝の幅は100～45cm、深さ17～11cmを測る。東へのびる溝は先端近くでやや太くなり、深さは東に行くにしたがい浅くなる。

溝４と区画溝との間に同じような溝（第13図）が認められるのが土層断面図Ａ－Ｂである。また、Ｃ－Ｄのポイント側のものは柱穴である。

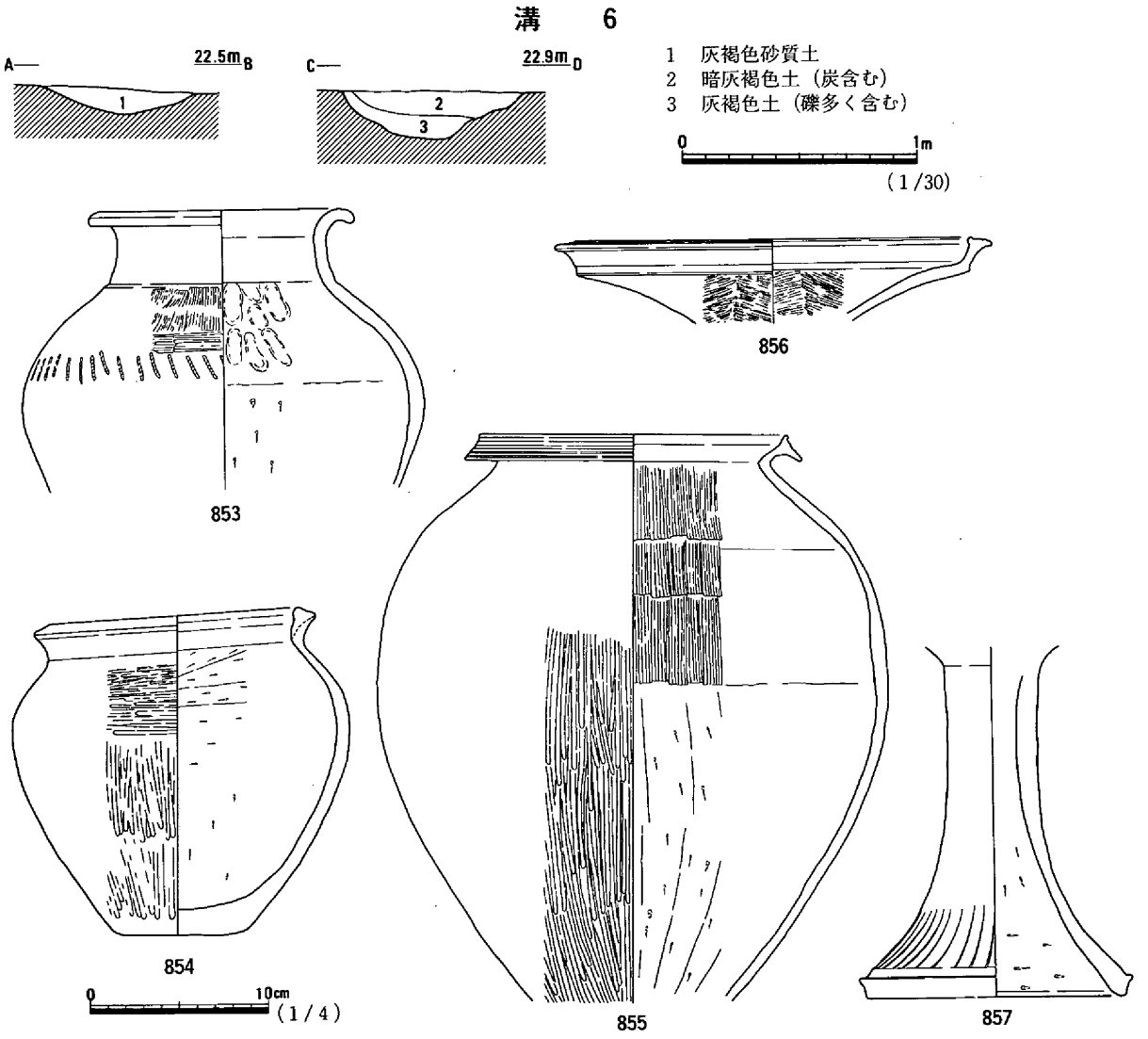
出土遺物は、**849**の高杯である。時期は、弥生時代中期末と考える。　（下澤）

溝　5



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
850	弥生土器	器台	(20.5)			良好	にぶい橙7.5YR6/4	細砂	大きく下方へ垂れ下がる口縁部外面に凹線を巡らす・円形浮文の中に竹管状工具による刺突有り
851	弥生土器	甕	(13.0)			良好	にぶい黄橙10YR7/2	微砂	胴内面ヘラケズリは下から2/3まで
852	弥生土器	鉢	(9.9)			良好	橙5YR6/6	微砂	算盤玉状の胴部

溝5は、遺跡の東端の高位に位置する。東方あるいは、南東の高所から複数の細い溝が、曲折しつつ合流して谷部となる北西部分に到達し、最大幅約2m前後を測る規模となる。検出全長は、60m近くに達する。各所の溝の断面形はいびつな凸レンズ形を示し、深さは20～30cm前後を測る。明らかに集落の縁辺に位置していたと思われ、居住部分への降雨などによる水の流入を避けるための排水溝として、ある程度人工的な手が加わった溝と考えてよいだろう。屈曲しつつも、かなり直線的な部分が観察される点からも自然な溝とは異なる点と考えられる。埋積土は、基本的に単一土層で、礫を比較的多く含む暗灰褐色の粘質土である。出土遺物は、下位部分で顕著にみられる。**850**は、凹線を巡らせた器台の口縁部で、竹管を刺突した円形浮文が加飾される。**851**は甕で、体部内面のヘラケズリの始まりが特徴的である。**852**は、脚付の鉢である。体部は、算盤玉状を示し刺突文が巡る。これらの土器から、溝の時期は中期後半に比定される。　（岡田）

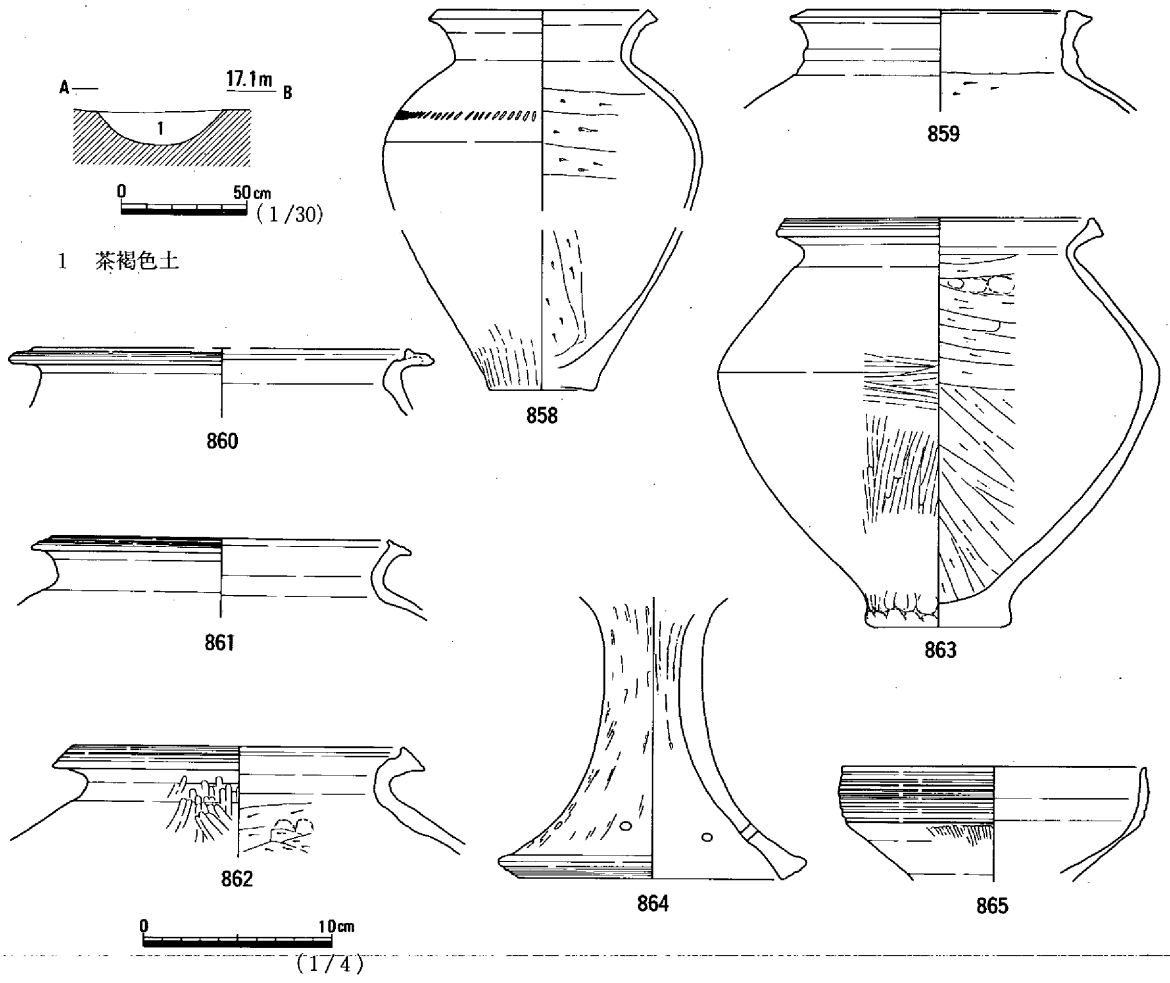


掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
853	弥生土器	壺	13.4			良好	橙5YR6/6	砂礫	内面のヘラケズリは下半のみ
854	弥生土器	甕	13.7	6.0	18.0	良好	にぶい橙7.5YR7/4	砂礫	胴上半横位・下半縦位のヘラミガキ・二次的に火を受ける
855	弥生土器	甕	17.0			良好	にぶい橙7.5YR5/4	砂礫	口縁部は上下に拡張し、外面に凹線
856	弥生土器	高杯	(22.2)			良好	明赤褐5YR5/6	砂礫	口縁部は短い「T」字状をなし、上面に沈線を巡らす
857	弥生土器	高杯	14.2			良好	橙5YR6/8	砂礫	器壁磨滅・かすかに横方向の櫛描沈線残る・裾部は縦方向のヘラ描沈線

溝6は、遺跡の高位、溝5の下位部分のすぐ西側で検出された。検出全長は約15mで、緩やかな弧を描く周溝状の溝である。幅60～110cm前後、深さは上位では約20cm、下位では10cm前後と浅い。したがって、完全に円を描く溝ではなく、周溝を伴う竪穴住居19と同様、やはり西側に住居が存在した可能性が高い。しかし、柱穴列2や溝17によって旧状が失われており、それを証明することはできなかった。

出土遺物には、**853**の壺、**853・854**の大小の甕、**856・857**の高杯がみられる。高杯は、口縁端部が平らに拡張し、凹線が巡る。脚はかなり長脚で、下位にヘラ描き沈線が飾られる。これらの土器の特徴から、中期末葉の時期に比定される。　(岡田)

溝　7

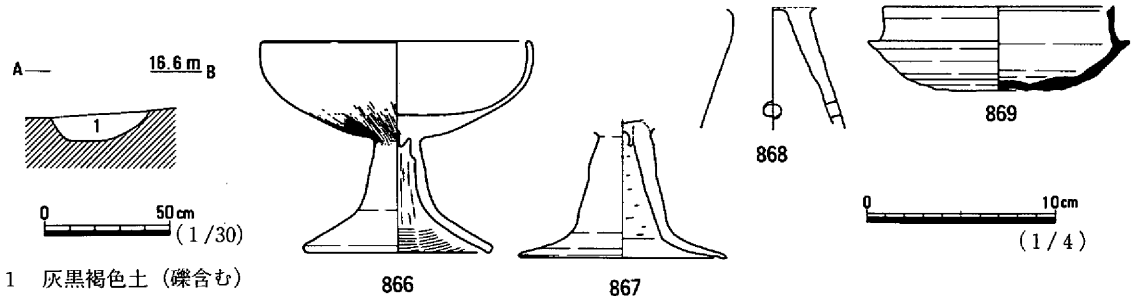


掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
858	弥生土器	壺	(11.2)	(5.4)		良好	灰白10YR8/1	細砂	外面磨滅・肩部に刺突文
859	弥生土器	直口壺	(15.6)			良好	黒10YR2/1	細砂	雑な作り・磨滅著しい
860	弥生土器	壺	(19.8)			良好	橙5YR6/6	細砂	磨滅著しい
861	弥生土器	壺	(17.6)			良好	にぶい黄橙10YR7/4	砂礫	口縁部外面凹線
862	弥生土器	壺	(17.4)			良好	灰黄2.5Y7/2	細砂	外面ヘラミガキ・口縁部凹線
863	弥生土器	壺	16.1	6.7	21.6	良好	浅黄橙10YR8/3	砂礫	胴下半縦方向、上半横方向ヘラミガキ
864	弥生土器	高杯		(23.8)		良好	赤橙10R6/6	細砂	磨滅・脚下端凹線
865	弥生土器	高杯	(16.0)			良好	にぶい黄橙10YR7/2	微砂	深い杯部・口縁部外面凹線

溝7は、S8・9グリッド(KM4区)に位置する。溝はやや弧を描きながら東西に流走するもので、約10mにわたって検出された。規模は幅50cm前後、検出面からの深さ14cmあまりを測る。断面を見ると底部は弧を描き、壁は緩傾斜で立ち上がる。

遺物は弥生土器が出土した。**858**は胴部から「く」の字状に外反する口縁部をもつ壺で、肩部には刺突文がめぐる。**859**は口縁部がほぼ垂直に立ちあがる壺である。**860～863**は「く」の字状に外反する口縁部の端を拡張する壺である。**864・865**は高杯で、**865**の口縁部外面には凹線がめぐる。土器の時期は弥生時代後期前半に属すると考えられる。　(平井)

溝　8



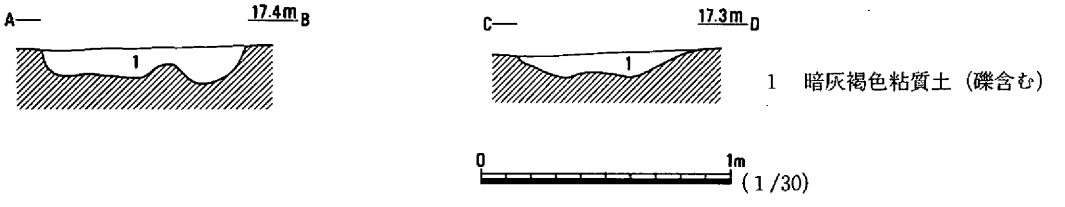
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
866	土師器	高杯	(13.8)			良好	橙5YR7/8	微砂	水簸粘土
867	土師器	高杯		(11.0)		良好	灰白2.5Y8/2	砂礫	平面接合
868	土師器	高杯				良好	橙5YR6/6	砂礫	脚部・平面接合部は須恵器的
869	須恵器	杯身	(12.2)			良好	(内・外)灰N6/ (断)灰赤2.5YR4/2	微砂	ロクロ左回り・立ち上がり部ハリツケ

溝8は、溝を伴う井戸7の東、竪穴住居21を切って掘りこまれた、ほぼ南北方向を示す溝である。北から南に向け緩やかな傾斜をもち、南端はたわみ1の東の溝状のくぼみに達している。検出全長は、約15m、深さ5～10cm前後を測り、断面形は丸みをもった逆台形を呈する。

出土遺物は土師器が多く、**866～868**の3点を図示している。須恵器では**869**の比較的古い時期の杯身がある。

溝の性格は、集落内の排水を目的として設定された可能性が高いだろう。　(岡田)

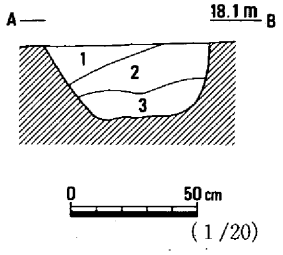
溝　9



溝9は、溝13の西側に位置し、ほぼ南北方向を示す。南の端はやや西方に屈曲して消滅する。検出全長は約20m、幅約70cm前後、深さ約10cm前後を測る。溝の断面形は、いびつな凸レンズ形を呈するが、位置によってかなり異なる形状を示す。

埋積土から時期的には、古墳時代の範囲におさまるものと考えられるが、出土遺物がほとんど得られていないため、古墳時代の前半・後半のいずれかについては特定できない。　(岡田)

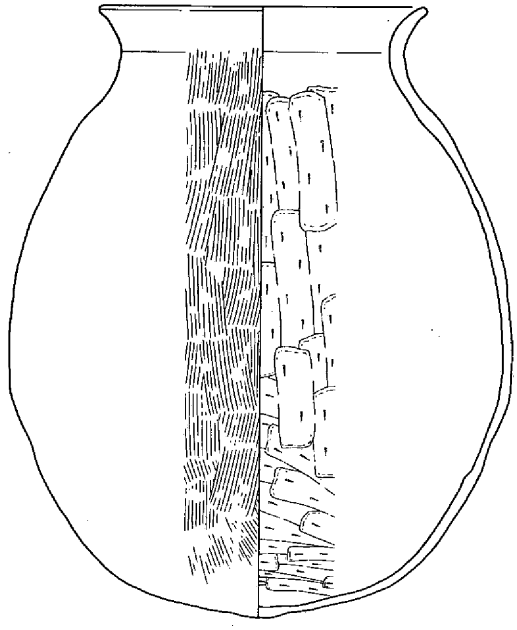
溝 10



(1/20)

1 暗茶褐色粘質土
2 灰色粗砂
3 礫

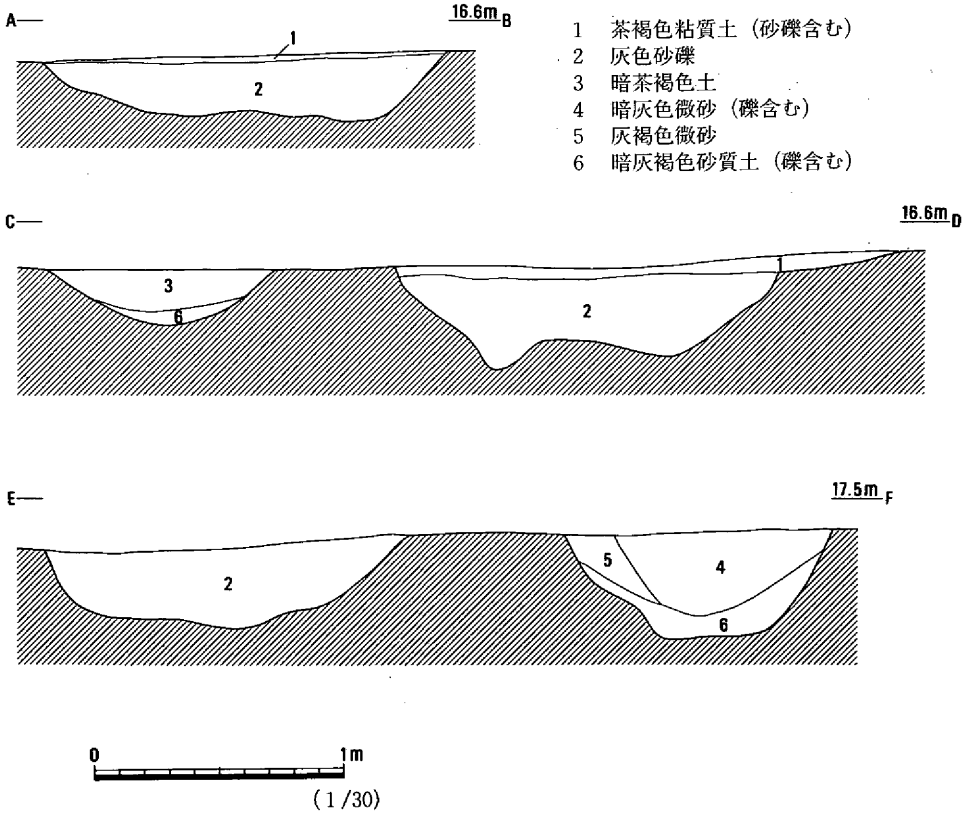
溝10は溝11の北西側に検出したもので、下流側は溝11により切られている。溝は全長約24mを検出し、調査した。溝の幅は60～120cm、検出面からの深さは30～40cmを測るものである。溝からは少量の遺物が出土している。**870**は土師器の甕である。長円形の胴部をもつもので、口縁部は「く」の字状に外反する。時期は7世紀代と考えられる。　(井上)



(1/4)

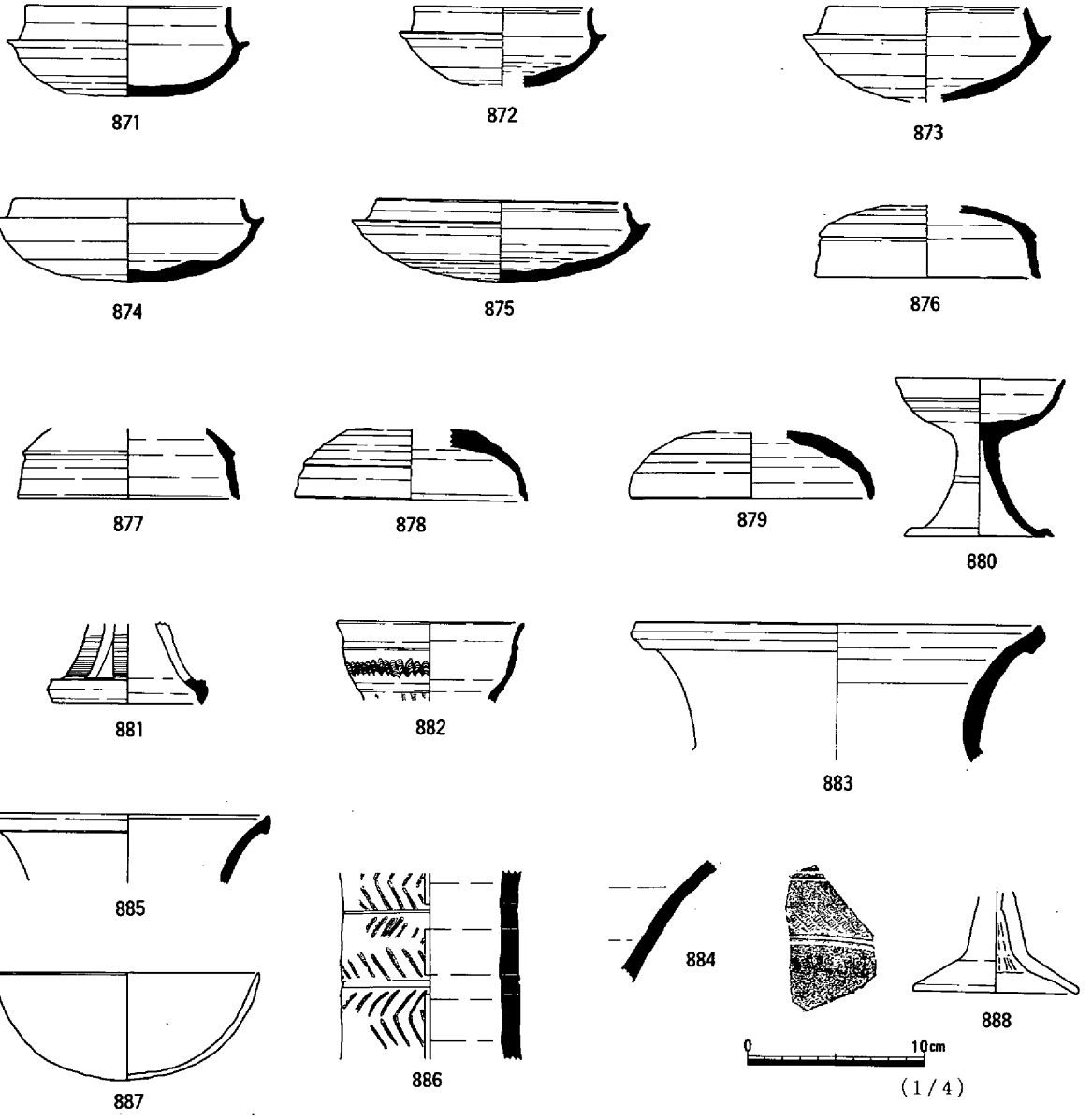
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
870	土師器	甕	(16.9)		32.3	良好	にぶい橙7.5YR7/3	砂礫	長い倒卵形の胴部・外面はハケメ

溝 11



(1/30)

1 茶褐色粘質土（砂礫含む）
2 灰色砂礫
3 暗茶褐色土
4 暗灰色微砂（礫含む）
5 灰褐色微砂
6 暗灰褐色砂質土（礫含む）



(1/4)

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
871	須恵器	杯身	11.45		5.2	良好	(内・外・断)灰N5/	砂礫	端部面をなす・立ち上がり部ハリツケ・ロクロ右回り
872	須恵器	杯身	10.0			良好	(内・外)青灰5PB6/1 (断)にぶい赤褐2.5YR5/4	細砂	端部段あり・ロクロ左回り
873	須恵器	杯身	(11.2)			良好	(内・外)灰N5/ (断)褐7.5YR4/3	微砂	端部面と段を持つ・立ち上がり部ハリツケ・ロクロ右回り
874	須恵器	杯身	(12.8)		4.7	良好	(内)灰N4/　(外)灰N4/	砂礫	端部は丸く納める・立ち上がり部オリコミ・ロクロ右回り
875	須恵器	杯身	14.0		4.7	良好	(内・外・断)灰N5/	細砂	粗い仕上げナデ・ロクロ右回り
876	須恵器	蓋	(12.6)			良好	(内・外・断)灰N6/	精良	端部面あり・稜下部に沈線状のくぼみ・ロクロ右回り
877	須恵器	蓋	(12.3)			良好	(内・外)灰N6/ (断)灰褐5YR5/2		端部くぼみ有り
878	須恵器	蓋	(13.0)			良好	(内・外)暗青灰5PB4/1 (断)にぶい赤褐2.5YR5/4	微砂	端部段をもつ・稜は鈍い・天井部雑なヘラケズリによって平坦ぎみ・ロクロ右回り
879	須恵器	蓋	(13.6)			良好	(内・外・断)青灰5PB6/1	微砂	ロクロ右回り・天井部強いナデによるくぼみ
880	須恵器	高杯	(9.5)	8.8	10.0	良好	(内・外・断)灰N5/	精良	杯部沈線
881	須恵器	高杯		8.3		良好	(内・外・断)灰N6/	砂礫	脚端部断面三角形・外面はカキメ状
882	須恵器	(把手付)椀	10.5			良好	(内・断)灰N5/ (外)　オリーブ灰2.5GY5/1	細砂	自然釉・丁寧なつくり
883	須恵器	甕	(22.8)			良好	(内・外)青灰5PB5/1 (断)明赤灰5R7/1	微砂	外面タタキメ残る
884	須恵器	甕				良好	(内)灰7.5Y6/1 (外)灰N4/(断)褐灰10YR4/1	微砂	口縁部櫛描波状文・沈線
885	須恵器	甕	(15.7)			良好	(内・外)青灰5PB6/1 (断)灰赤10R4/2	微砂	
886	須恵器	器台				良好	(内・外・断)灰N5/	細砂	方形透かし
887	土師器	鉢	14.8		6.1	良好	浅黄橙7.5YR8/4	精良	器壁磨滅・ユビオサエの痕跡
888	土師器	高杯		9.2		良好	橙2.5YR6/8	精良	外面赤色顔料・杯部との接合は差し込み

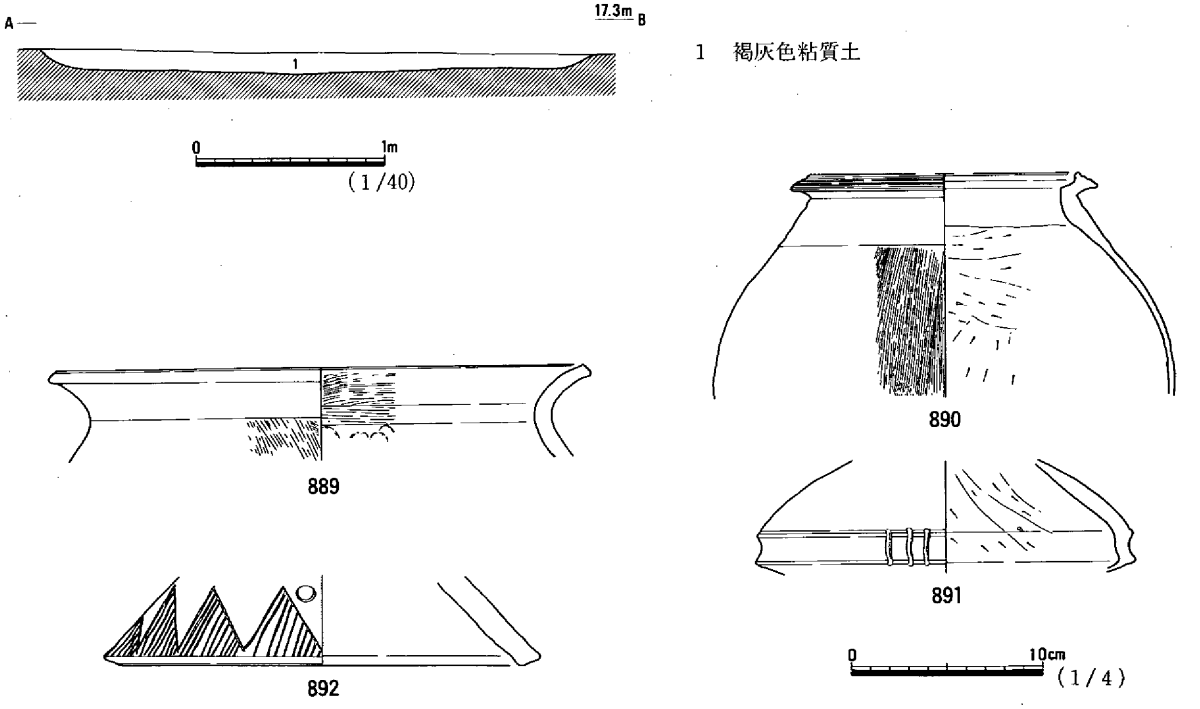
亀田調査区の南東部に流れる複数の溝をここで一括して**溝11**として報告する。この溝は、基本的に３～４条のものが、溝幅を変えながら幾重にも重複して地形の低い西側へと流路をとるものである。確認できた範囲では、溝は全長120ｍにわたっている。

Ａ－Ａ'断面の位置では、１条に収斂し、溝幅160cmほどを測った。この位置から西側はたわみ状の地形となりそこに注ぎ込む。上流部では、検出面の差違で溝は大きく形態が異なり、元来的に人工的な掘削が及んだ溝とは考えられなかった。このことは、溝に埋積した土砂の状況からも検証された。溝内は基本的に砂礫～拳大までの礫で埋まっており、間層的に砂質土が認められた。この状況は、溝内に水が流れる時期があった後に徐々に埋没したのではなく、これらの礫が地形を抉り、押し流されてこの溝を形成したものと理解される。また、複数の溝が重複した状況は、徐々にあるいは一度にこの状況が作り出されたのではなく、過渡期を挟みながら複数回にわたって地形の低い方へと礫が押し出された結果と考えられた。

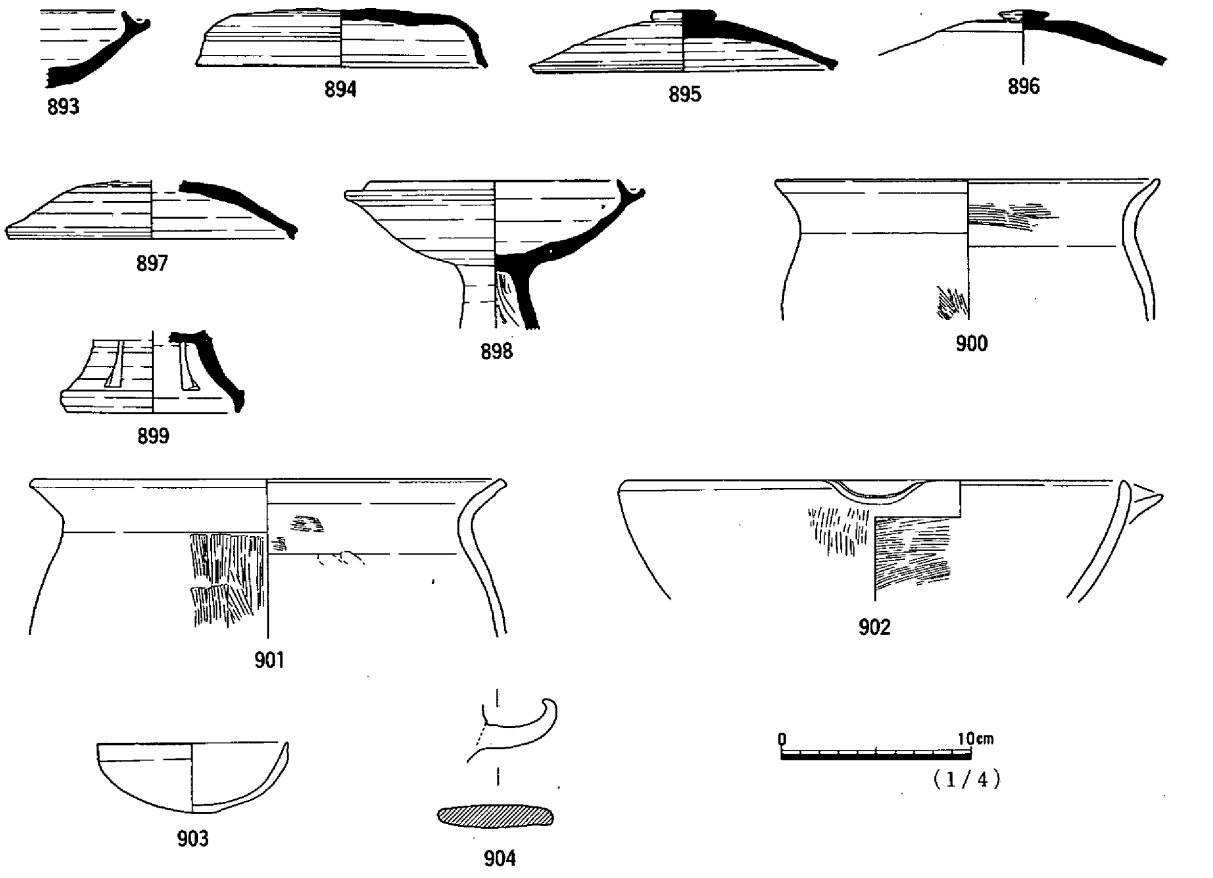
溝内には、礫の他、鉄滓が遺物コンテナに換算して50箱以上にのぼり、何らかの鉄製産に関わったものとも想像できるが、上流部は調査範囲外に延びるため、確証は得られなかった。

出土遺物は古墳時代後半のものが大半を占め、これ以降のものは認められなかった。**871～888**は、そのうちの一部である。出土した須恵器には図示したもので見るように時期幅が大きいが、このこともこの溝群が１度に形成されたものではなく、時間差があるものとする理解の手助けとなろう。おそらく５世紀末～６世紀代にかけて、この溝群が形成されたと判断される。　　(大橋)

溝　12



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
889	土師器	甕	(27.9)			良好	浅黄2.5Y7/3	微砂	端部上方へわずかにつまみ出す・赤色顔料？
890	弥生土器	甕	(14.0)			良好	にぶい橙7.5YR7/4	砂礫	口縁部擬凹線
891	弥生土器	壺				良好	にぶい黄橙10YR6/4	細砂	胴部棒状浮文
892	弥生土器	器台				良好	明褐7.5YR5/6	細砂	脚裾部ヘラ描き文



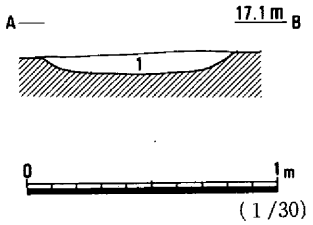
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
893	須恵器	有蓋高杯	(11.8)			良好	(内)灰N6/　(外)灰N6/	微砂	ロクロ左回り
894	須恵器	蓋	(15.3)			良好	(内・外・断)青灰5PB5/1	精良	ロクロ左回り・稜下部沈線状のくぼみ
895	須恵器	蓋	(15.8)		3.3	良好	(内)灰N6/　(外)灰N6/	微砂	
896	須恵器	蓋				良好	(内・外・断)灰N7/	微砂	内面不定方向のユビナデ・ロクロ右回り
897	須恵器	蓋	(15.0)			良好	(内・外・断)灰白N7/	細砂	つまみ部欠損・ロクロ右回り
898	須恵器	有蓋高杯	(13.0)			良好	(内・外・断)灰白N7/	微砂	内面仕上げナデ
899	須恵器	高杯		(9.0)		良好	(内・外・断)灰N6/	細砂	
900	土師器	甕	(24.4)			良好	橙7.5YR7/6	砂礫	口縁部内面ハケメ残る
901	土師器	甕	(20.0)			良好	淡赤橙2.5YR7/4	細砂	外面ハケメ残る・二次的に火を受ける
902	土師器	片口鉢	(26.2)			良好	浅黄2.5Y7/3	細砂	内面スス付着
903	土師器	鉢	10.1		3.8	良好	浅黄橙7.5YR8/3	細砂	口縁部は屈曲して立ち上がる
904	土師器	(把手)				良好	にぶい黄橙10YR7/4	細砂	断面扁平

溝12は、遺跡の低位北辺で検出されたほぼ東西方向を示す溝である。検出全長は８～９ｍ、幅1.2～５ｍ前後、深さ10～15cm前後を測る。

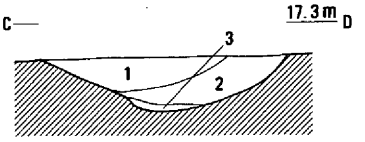
厳密には、２条の溝が重複しており、北寄りが最終的に溝として機能した中世、南寄りが古代と推定している。どちらも西端がやや広くなっており、たわみのような形状を示している。溝の掘り方は緩やかで、東方の高位では消滅して検出されなかった。

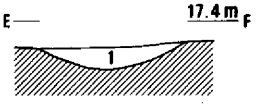
出土遺物は時期的に幅広く、弥生時代から中世にかけての土器などが多数混在している。**890～892**は弥生土器で後期前半に比定される。**893・894・898・899**などは、古墳時代後期の須恵器で、付近に土壙33・35などの遺構が存在していたこととも関連する。**895～897**は、奈良時代に比定される蓋で、扁平なツマミが天井部に付けられる。**900～902**などもやはり古代に比定される土師器と推定される。中世に比定される遺物では、図化可能なものは皆無であったが、おもに土師質の皿・椀の細片が出土している。　（岡田）

溝 13

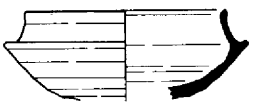


(1/30)

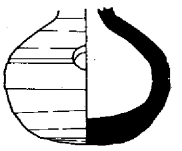




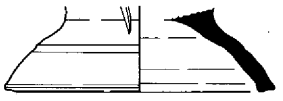
1　淡灰色粘質土（礫含む）
2　暗灰褐色土
3　暗褐色土（礫含む）


905

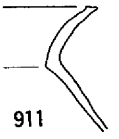
906

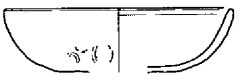

907

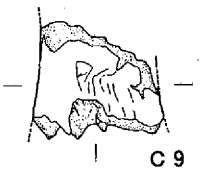
908


909

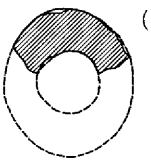
910


911


912


C 9

(1/3)



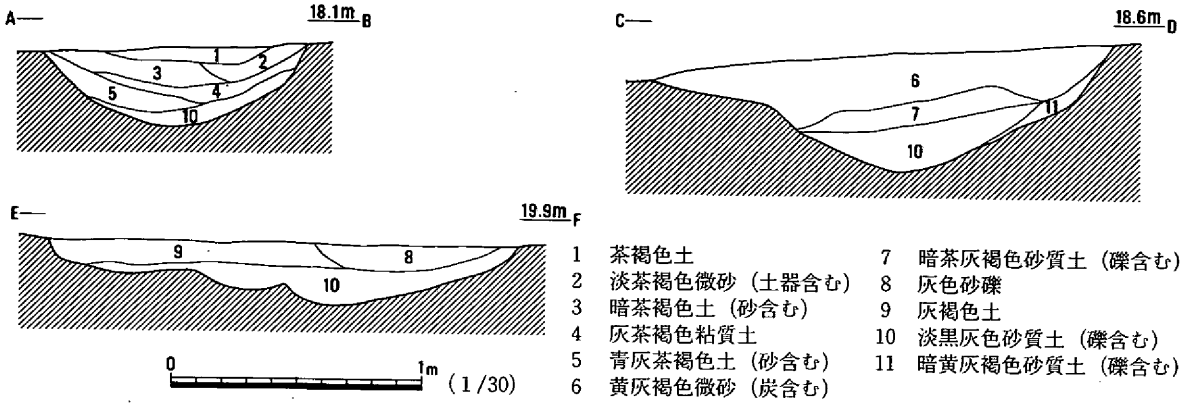
(1/4)

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
905	須恵器	杯身	10.5			良好	(内)灰N5/1　(外・断)灰N4/1	微砂	体部下半ヘラケズリ・ロクロ左回り
906	須恵器	杯蓋	13.0			良好	(内・断)灰白7.5Y8/1 (外)灰白N8/1	微砂	天井部ヘラケズリ・ロクロ左回り
907	須恵器	鉢				良好	(内・断)灰白N7/1　(外)灰N6/1	微砂	体部下半ヘラケズリ・ロクロ左回り
908	須恵器	(脚部)		(14.0)		良好	(内・外・断)灰N6/	微砂	強いヨコナデによる稜・端部明瞭な面
909	須恵器	(脚部)		12.8		良好	(内・外・断)灰N6/1	細砂	内外面ヨコナデ・ヘラによる切れ目
910	須恵器	長頸壺				良好	(内・外)灰N6/　(断)暗灰N3/	精良	内面に自然釉
911	土師器	甕				良好	灰白10YR8/2	微砂	外面ハケメ・内面ユビオサエ・端部ヨコナデで平坦に仕上げ
912	土師器	高杯	12.0			良好	浅黄橙10YR8/3	微砂	ヨコナデ

溝13は、ＫＭ４区からＫＭ５区にかけて南流する溝である。確認できた範囲では、長さ約70ｍにわたる。溝幅は最も広いところで100cmを測った。また、検出面からの深さは最深部で20cm、浅いところでは10cm程度である。

出土遺物は、**905～912**、**Ｃ９**を図示した。**905**は口縁端部に面をもつ。**908・909**は台付椀の脚部と思われるものである。**910**は古代の時期が考えられる台付長頸壺である。**Ｃ９**は羽口である。図示したもののうち、**910**はやや新しくこの溝の時期を示さないと思われ、おおむねこの溝は６世紀後半のものと判断している。（大橋）

溝　14



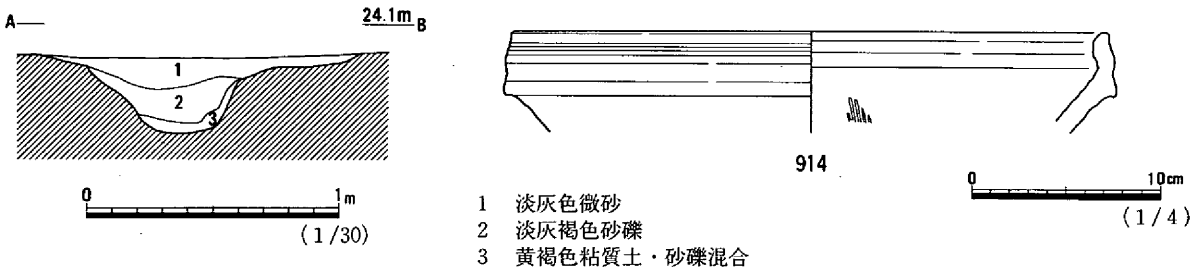
913

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
913	備前焼	椀	(16.3)	7.6	4.8	良好	灰白10YR8/1		底部糸切り

溝14は、ＫＭ１区とＭＭ２区に位置し、周溝遺構４と建物66と重複している。

溝は東西方向に認められ、幅は100～240cmでＫＭ１区の中ほどから西については１条であるが、それより東は複数の溝になっていることが土層断面などによって明らかとなっている。第13図においては、Ｅ－Ｆの土層断面の溝を同一のものとした。しかしながら、これより北に接して認められる溝も附図で示すようにその可能性があるが、ＭＢＯＸ３区部分においてこの溝の検出が困難であったために具体的に把握することができなかった。出土遺物は、**913**の備前焼の椀である。底部は糸切りである。時期は、この出土遺物から鎌倉時代に属すると考える。　（下澤）

溝　15



914

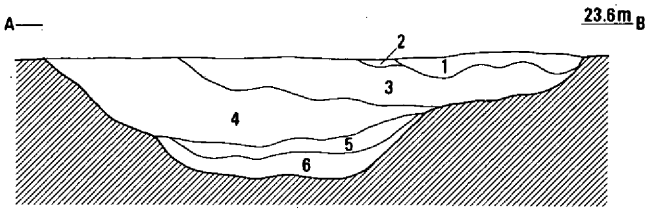
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
914	備前焼	擂鉢	(31.3)			良好	赤褐10R4/3	精良	口縁部はわずかに内傾する

溝15は、遺跡の高位部で検出された北東から南西方向を指し示す溝である。東側高位から西側低位に向けて、直線的な平面形を示すが、溝底の形状や幅は不規則である。

溝中からの出土遺物には、焼土塊の小片が多数みられる。**914**の備前焼が示すように、溝の時期は中世それも室町時代に比定されよう。

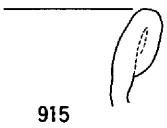
溝の方向と周辺の同時期の掘立柱建物の方位とは一致せず、中世の集落を区画するような存在ではないと考えられる。　（岡田）

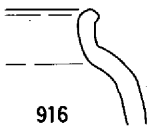
溝　16

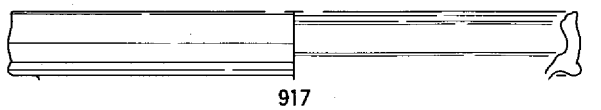


1　淡灰色粘質土
2　黄色粘質土
3　灰褐色粘質土（微砂・礫含む）
4　〃　（３よりやや暗い・礫多く含む）
5　褐灰色粘質土
6　灰色粘質土

0　1m　(1/30)







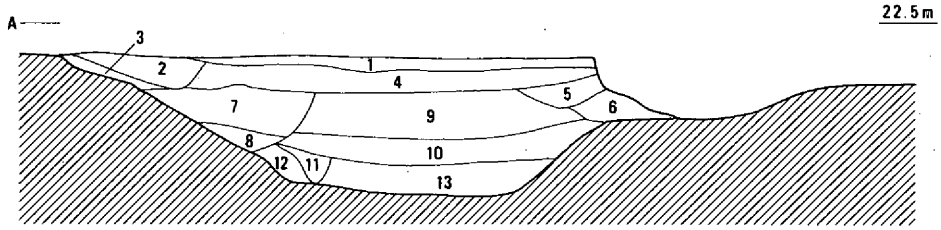
0　10cm　(1/4)

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
915	備前焼	甕				良好	灰褐5YR4/2	微砂	口縁部折り返して肥厚させる・傾き不詳
916	備前焼	壺				良好	暗赤灰10R3/1	微砂	口縁部は折り曲げて肥厚・胴外面に波状文
917	備前焼	擂鉢	(29.6)			良好	紫灰5P5/1	精良	口縁端部内側にくぼみ

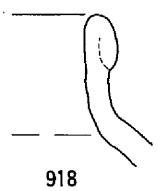
溝16は、遺跡の高位部南側で検出された東西方向の溝である。検出全長約20ｍで、西端は溝17の南端部に近接するが、連続するか否か判然としない。周辺の掘立柱建物の棟方向とは、方位がほぼ合致するので、中世の屋敷地割を示す可能性が強いといえるかもしれない。

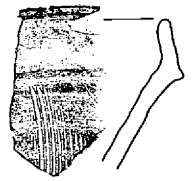
出土遺物には、**915～917**の室町時代に比定される備前焼がある。　(岡田)

溝　17



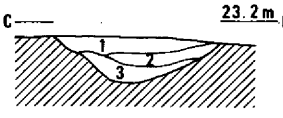
1　淡灰白色粘質土
2　明灰茶褐色粘質土
3　淡灰茶褐色粘質土
4　明灰褐色粘質土
5　灰褐色粘質土
6　暗灰茶褐色粘質土
7　褐茶灰色粘質土
8　暗灰色粘質土
9　暗灰褐色粘質土
10　黒灰褐色粘質土
11　黒灰色粘質土
12　褐茶灰色細砂
13　暗黒灰色粘質土
1　灰白色土（微砂含む）
2　褐灰色土（微砂含む）
3　暗褐黄灰色粘質土





0　10cm　(1/4)

0　1m　(1/40)



0　50cm　(1/20)

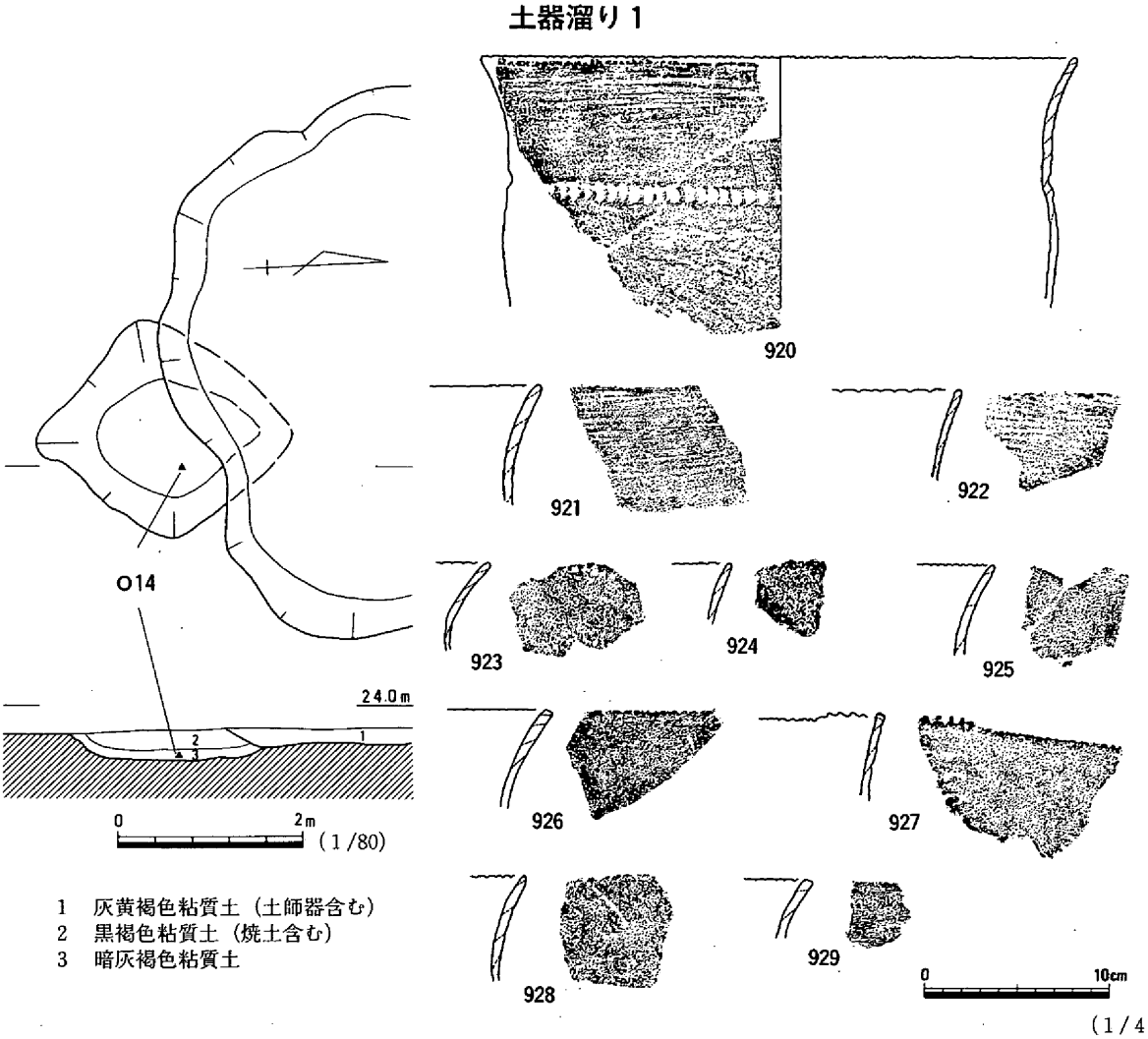
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
918	備前焼	甕				良好	暗褐2.5YR3/3	細砂	折り返して肥厚させる口縁部
919	備前焼	擂鉢				良好	赤褐10R4/4	微砂	

溝17は、ＭＭ４、ＭＭ１、ＭＢＯＸ２の各調査区に認められ、南北方向に走っている。ＭＭ１区の南端近くで幅３～４ｍの溝が立ち上がって途切れてしまう。調査当初においては、３ｍほど南にいって幅１ｍほどの溝を認めたが、これと同一のものとは考えなかった。しかし、出土遺物と溝の内容からこの１ｍの間を陸橋と思考すると同一の遺構と想定できるのである。また、この溝の内側と考えられる東側の調査区から同時期の遺物が多く認められることから堀と想定するのが妥当であろう。出土遺物は、**918・919**の備前焼であり、中世から近世にかけて機能していたと考える。　(下澤)

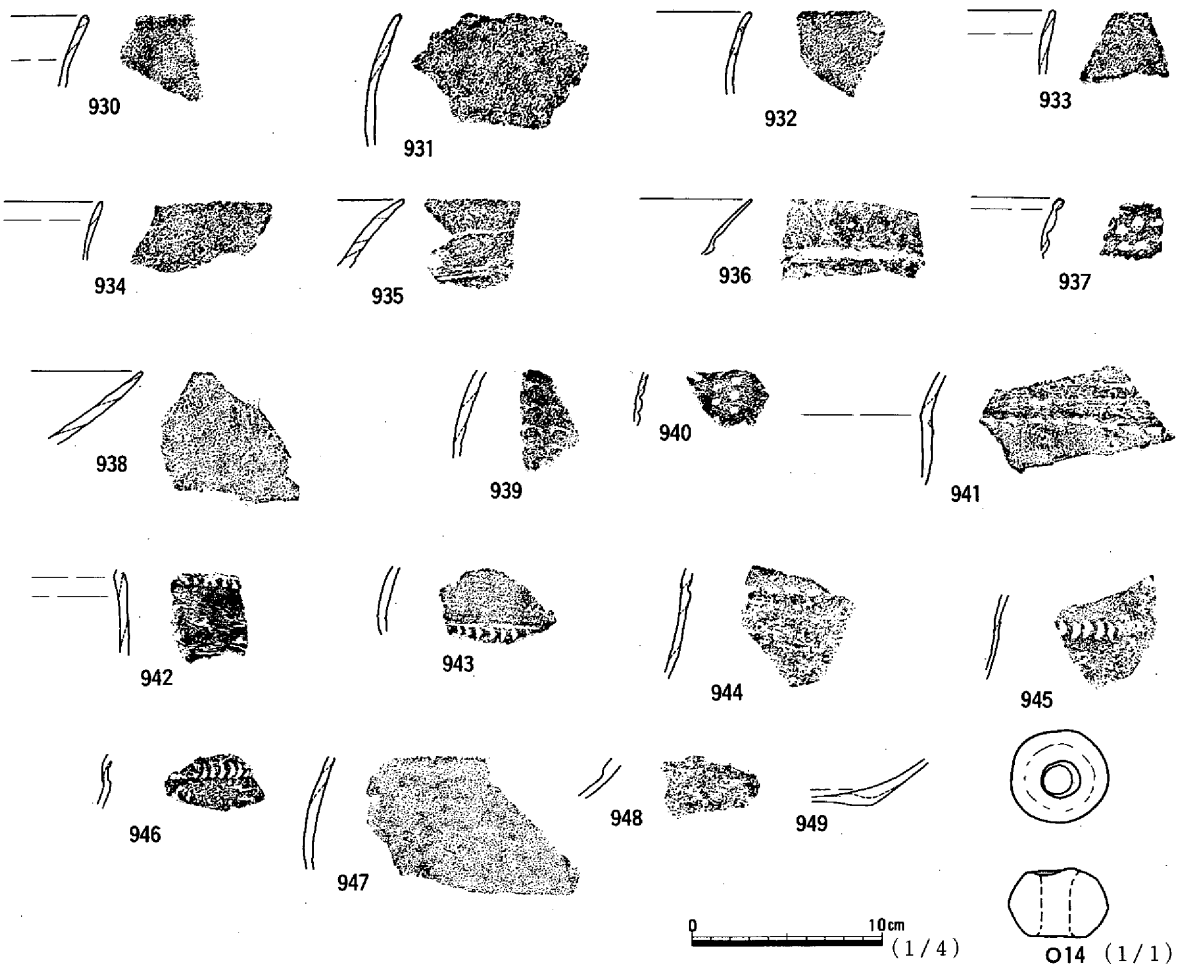
(12) 土器溜り

ここでは、掘り方が明瞭でないものの比較的多くの土器等の遺物がまとまって出土した地点を土器溜りとして、７か所報告する。また、縄文時代の土壙状のものを併せてここで報告する。縄文土器は、各所で散見できるものの遺構として確認できたものはこの１か所であった。

以下、個別に詳細に見ていくこととする。　　(大橋)



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
920	縄文土器	深鉢	(31.9)			良好	(内)黒10YR2/1 (外)灰黄褐10YR4/2	細砂	口唇部キザミ・屈曲部爪形文・頸部アルカ属の条痕・胴部擦痕
921	縄文土器	深鉢				良好	(内・外)灰褐10YR4/1	微砂	口唇部キザミ・頸部にアルカ属の条痕
922	縄文土器	深鉢				良好	(内・断)灰黄褐10YR6/2 (外)にぶい黄橙10YR6/4	砂礫	外－二枚貝条痕・口唇部－キザミ
923	縄文土器	深鉢				良好	(内)褐灰10YR4/1 (外)にぶい黄褐10YR5/3	細砂	口唇部キザミ・屈曲部に刺突文
924	縄文土器	深鉢				良好	(内)灰黄褐10YR5/3 (外)にぶい黄褐10YR5/3	微砂	口唇部キザミ
925	縄文土器	深鉢				良好	(内)暗灰黄2.5Y5/2 (外)にぶい橙7.5Y6/4	細砂	口唇部キザミ
926	縄文土器	深鉢				良好	(内・外)灰黄褐10YR5/2	微砂	口唇部キザミ・内外－平滑
927	縄文土器	深鉢				良好	(内)暗灰黄2.5Y4/2 (外)にぶい黄2.5Y6/3	細砂	口唇部キザミ・タテ２条の爪形文
928	縄文土器	深鉢				良好	(内)にぶい黄褐10YR5/3 (外)灰黄褐10YR6/2	細砂	口唇部キザミ・内外－平滑
929	縄文土器	深鉢				良好	(内・外)黄灰2.5Y4/1	細砂	内外－擦痕・口唇部キザミ



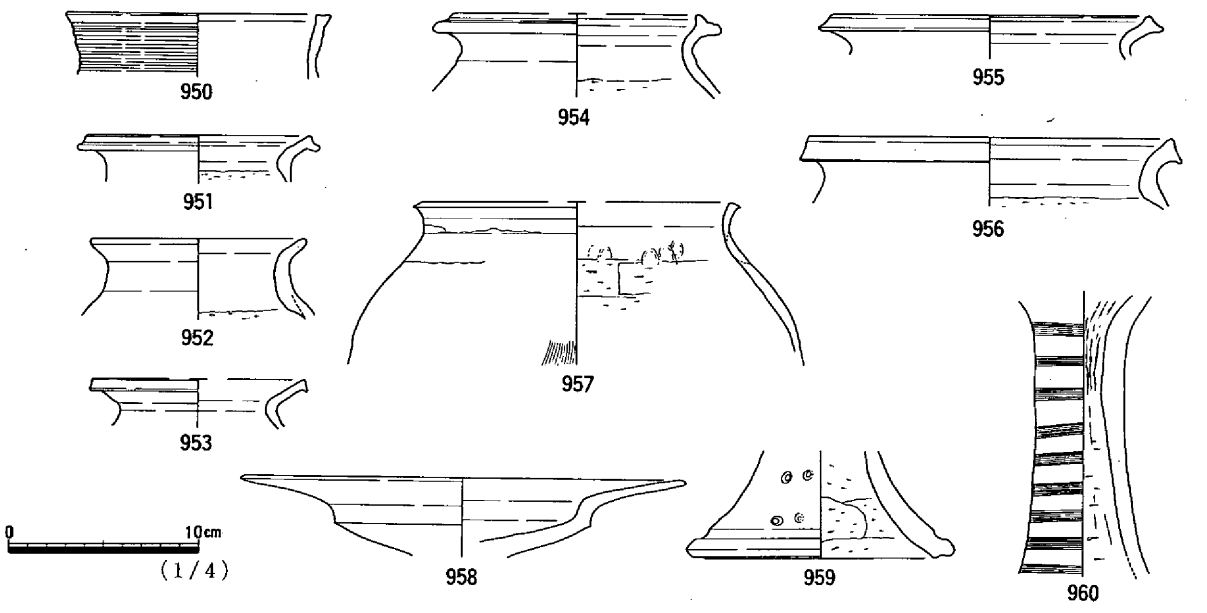
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
930	縄文土器	深鉢				良好	(内・外)にぶい黄褐10YR5/3 (断)黒褐10YR3/2	細砂	口唇部キザミ
931	縄文土器	深鉢				良好	(内・外・断)灰5Y4/1	細砂	口唇部キザミ・内外一風化
932	縄文土器	深鉢				良好	(内)黄灰2.5Y4/1 (外)黄褐2.5Y5/3 (断)黄灰4/1	細砂	口唇部キザミ・・タテの刺突文
933	縄文土器	深鉢				良好	(内)灰黄褐10YR5/2 (外)黄褐2.5Y5/4 (断)黒褐2.5Y3/1	細砂	
934	縄文土器	深鉢				良好	(内・外・断)にぶい黄2.5Y6/4	砂礫	口唇部キザミ
935	縄文土器	浅鉢				良好	(内・外・断)にぶい黄橙10YR7/3	微砂	外一二枚貝のち平滑・口唇部キザミ
936	縄文土器	浅鉢				良好	(内)褐灰10YR6/1 (外)灰白2.5Y8/1	微砂	
937	縄文土器	浅鉢				良好	(内)にぶい黄褐10YR5/3 (外)暗灰黄2.5Y4/2 (断)黒褐2.5Y3/1	微砂	波状口縁・口唇部キザミ・タテの３条の刺突文
938	縄文土器	浅鉢				良好	(内・外・断)にぶい黄褐10YR5/3	細砂	
939	縄文土器	深鉢				良好	(内・外・断)にぶい黄褐10YR5/3	微砂	タテ２条の爪形文
940	縄文土器	深鉢				良好	(内・外)灰黄褐10YR4/2 (断)黒褐2.5Y3/1	細砂	タテの３条の刺突文
941	縄文土器	深鉢				良好	(内・断)暗灰黄2.5Y5/2 (外)黄褐2.5Y5/3	細砂	屈曲部刺突文・頸部平滑・胴部擦痕
942	縄文土器	深鉢				良好	(内)灰黄褐10YR5/2 (外・断)にぶい黄褐10YR5/3	砂礫	屈曲部に刺突文
943	縄文土器	深鉢				良好	(内・外・断)オリーブ褐2.5Y4/2	微砂	屈曲部に爪形文・頸部細い条痕
944	縄文土器	深鉢				良好	(内・断)褐灰10YR4/1 (外)にぶい黄橙10YR6/3	細砂	刺突文
945	縄文土器	深鉢				良好	(内・外・断)にぶい黄橙10YR6/3	細砂	屈曲部爪形文・胴一擦痕・口縁一平滑
946	縄文土器	深鉢				良好	(内)褐灰10YR4/1 (外)灰黄褐10YR4/1	微砂	屈曲部に爪形文
947	縄文土器	深鉢				良好	(内)にぶい黄褐10YR5/3 (外)橙7.5YR6/6 (断)褐灰10YR4/1	砂礫	
948	縄文土器	浅鉢				良好	(内・外・断)にぶい褐7.5YR5/4	微砂	
949	縄文土器	浅鉢				良好	(内・断)にぶい黄褐10YR5/3 (外)明赤褐5YR5/6	砂礫	上げ底

掲載番号	器種	材質	色調	最大長(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
O14	丸玉	軟玉	白と緑		12.8	上5.1 下5.4	2.10	分析

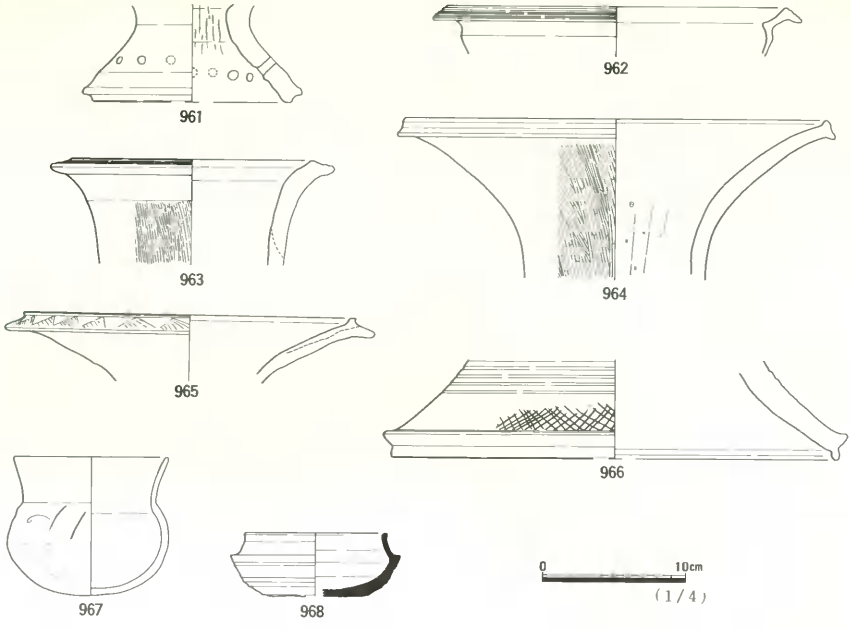
土器溜り１は、遺跡の高位部で検出された遺構である。厳密には土器溜りではなく、一辺約２ｍ、深さ約30cmあまりの隅丸方形の土壙である。上面が古墳時代（６世紀代）のたわみ状の凹地（土層断面図の第１層）によって削平されていたため、報告書作成時に土壙との認識に欠けていたため、土壙の項には収載できなかった。壙底は比較的平坦で、焼土を多く含む黒褐色～灰褐色土が埋積する。上層から下層にかけて、縄文土器の破片とサヌカイト剥片が出土している。縄文土器は、深鉢が多く少数の浅鉢を含む。口唇部にキザミ目、体部の上位には条痕あるいは、擦痕が施されるものが多い。また体部の上位と下位の屈曲部に、爪形文が巡る**920・942・943・945**などが特徴的である。また、縦方向に爪形文や刺突文が飾られる、**937・939・940**などもある。以上の所見から、北房町谷尻遺跡No.130土壙出土一括土器に近似し、晩期前半に位置付けられるものとして考えてよいだろう。遺跡の南東方約300ｍに位置する、南方前池遺跡出土の晩期深鉢には、口縁部に刻み目突帯が認められ、その点で本出土例は時期的にはやや先行するものであろう。この時期の特筆すべき装身具として、下層から**O14**の硬玉製の丸玉が出土している。白濁した鮮緑色を呈し、ほぼ中央に円孔が穿たれる。　（岡田）

土器溜り２

遺構名	位置（調査区）	範囲・規模（cm）			土器	時期	備考
		長さ	幅	平面形			
土器溜り２	ＫＢ１	310	130	方	◎	弥生後期前葉～中葉	



掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
950	弥生土器	壺	12.5			良好	明赤褐2.5YR5/8	砂礫	磨滅・口縁外面凹線
951	弥生土器	壺	(11.7)			良好	にぶい橙7.5YR7/4	細砂	小破片
952	弥生土器	壺	(11.1)			良好	灰白7.5YR8/2	微砂	胴部外面ハケメわずかに残る
953	弥生土器	甕	(11.2)			良好	橙5YR6/6	細砂	ごく細かい雲母を多く含んでいる
954	弥生土器	甕	(12.8)			良好	にぶい黄橙10YR7/2	砂礫	口縁部擬凹線
955	弥生土器	甕	(16.8)			良好	灰黄2.5Y7/2	細砂	口縁部ヨコナデによる凹部あり
956	弥生土器	甕	(19.4)			良好	にぶい黄橙10YR7/3	微砂	口縁部ヨコナデ
957	弥生土器	甕				良好	にぶい橙7.5YR6/4	砂礫	口縁外面に粘土接合痕残る
958	弥生土器	高杯	(23.0)			良好	橙2.5YR6/6	細砂	磨滅
959	弥生土器	高杯	(12.0)			良好	灰白2.5Y5/1	細砂	竹管文
960	弥生土器	高杯				良好	浅黄橙10YR8/3	微砂	脚柱部７条・櫛描沈線９段



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
961	弥生土器	台付鉢	(13.2)			良好	橙5YR6/6	砂礫	透かし孔3個残存
962	弥生土器	鉢	23.6			良好	明赤褐YR5/6	砂礫	口縁部擬凹線
963	弥生土器	壺?	(17.0)			良好	橙5YR6/6	砂礫	口縁部凹線
964	弥生土器	器台?	29.6			良好	にぶい橙7.5YR7/4	砂礫	外面ヘラミガキ
965	弥生土器	器台?	23.2			良好	にぶい橙7.5YR7/4	砂礫	受部内面ヘラミガキ残る・磨滅・鋸歯文あり
966	弥生土器	器台		(31.0)		良好	明褐灰5YR4/1	細砂	磨滅・脚裾部ヘラ描きの斜格子文
967	土師器	小形壺	(10.8)			良好	にぶい赤褐色2.5YR5/4	細砂	体部ヘラ状工具による刻み・二次的に火を受ける
968	須恵器	杯身	(10.1)			良好	(内・外・断)灰N7/	微砂	立ち上がり部ハリツケ・ロクロ左回り

土器溜り2は、遺跡の低位部、たわみ1の北側約7mで検出された弥生土器の集積遺構である。溝9や周溝遺構1などの延長部にあたり、溝の上面といえる浅い小規模な谷状地形部分に位置する。

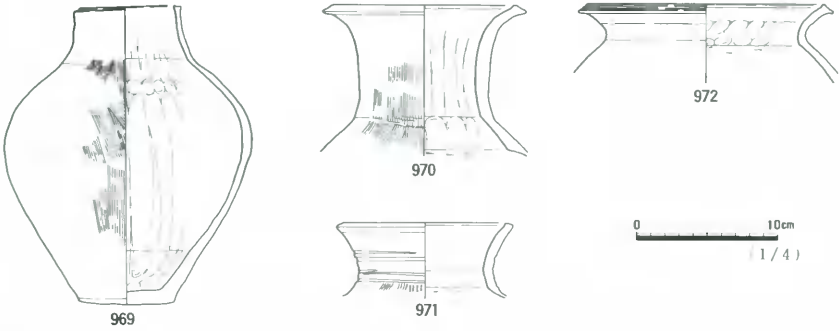
967・968など古墳時代の土師器・須恵器がわずかに混在するが、全体的に弥生時代後期前半期の、まとまりのある一括土器である。

掲載図では、完形に復するものは少ないが、壺**950**～**952**、甕**953**～**957**、高杯**958**～**960**、器台**963**～**966**のほか、台付鉢の台部**961**、鉢**962**など豊富な器種が認められる。特に、高杯は長脚で横位のクシ描文や竹管文で飾られる。

周囲には、同時期の住居や遺構は検出されておらず、古墳時代以降長期にわたる大規模な集落の継続により削平を受け、消滅した可能性が強い。　　(岡田)

土器溜り3

遺構名	位置（調査区）	範囲・規模（cm）			土器	時期	備考
		長さ	幅	平面形			
土器溜り3	KM1	190	100	楕円	○	弥生後期中葉	



掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
969	弥生土器	壺	(6.6)		16.3	良好	黄橙7.5YR8/6	細砂	内面強いユビナデ・単頸
970	弥生土器	壺	(12.8)			良好	橙7.5YR6/6	細砂	外面磨滅
971	弥生土器	壺	12.2			良好	にぶい黄橙10YR7/4	細砂	頸部穿孔の痕跡
972	弥生土器	甕				良好	橙5YR7/6	微砂	外面磨滅

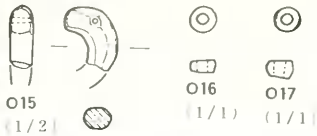
土器溜り3は、KM1区に位置し、土壙62北で溝3の西端上に認められた。

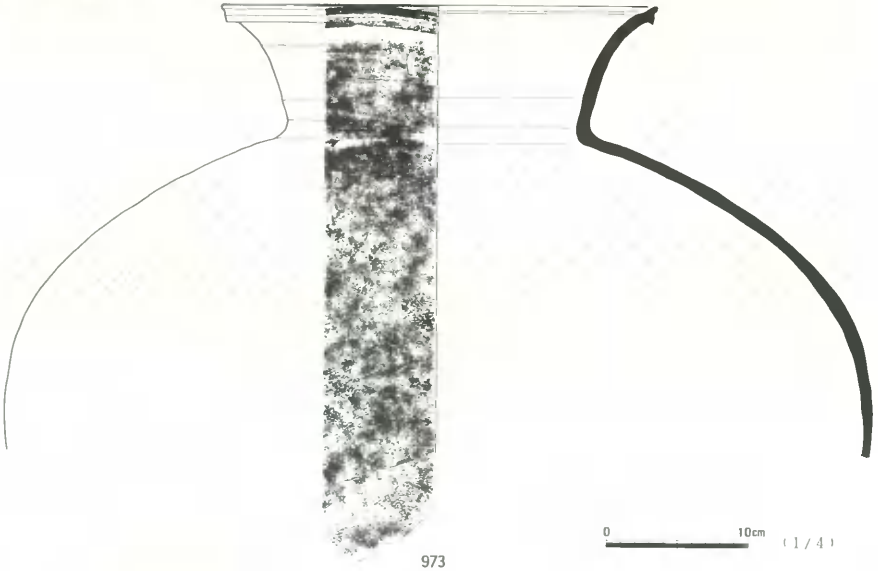
分布範囲は、170～100cmに細長く検出された。溝3との関係は、この土器溜りを除いて溝のプランを検出するが、溝に伴うかどうかは確認できなかった。

出土遺物は、**969**～**971**の壺と**972**の甕である。**969**は、肩部からやや内傾ぎみに直立する口縁部を有し、端部は凹部を形成する。**970**は直立する頸部から外へ開く口縁をもち、端部は肥厚ぎみとなる。**971**は、ゆるやかに外反する頸部をもち、口縁端部は平坦とする。**972**は、「く」の字状に外反する頸部から、口縁端を上下に拡張ぎみにさせ端面には凹線を施文する。時期は、これらの出土遺物から弥生時代後期中葉を考える。（下澤）

土器溜り 4

遺構名	位置（調査区）	範囲・規模（cm）			土器	時期	備考
		長さ	幅	平面形			
土器溜り 4	KM 1	320	270	不整	○	古墳後半頃か	



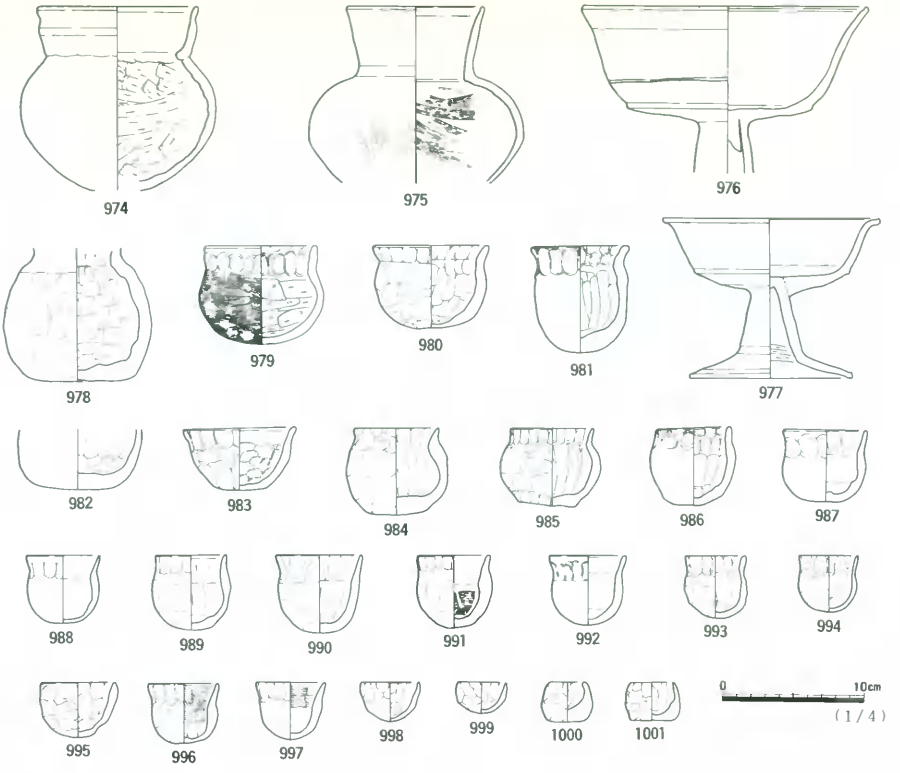


973

掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
973	須恵器	甕	30.7			良好	内・外：紫灰5P[illegible] 断：灰赤10R4/2	精緻	内外面ヨコナデ消

掲載番号	器種	材質	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考
S19	有孔円盤	滑石	[illegible]7.6			5.9[illegible]	

掲載番号	器種	材質	色調	最大長（cm）	最大径（cm）	孔径（cm）	重量（g）	備考
O15	勾玉	碧玉	暗い緑	27.[illegible]	12.0	2.0×3.5	4.2[illegible]	一部欠損
O16	臼玉	滑石	暗い緑	2.45	4.90	2.[illegible]	0.[illegible]	
O17	臼玉	滑石	暗い緑	2.[illegible]	4.[illegible]	1.2	0.[illegible]	



図版番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
974	土師器	壺	11.0			良好	橙25YR6/6	砂礫	赤色顔料・口縁部強いヨコナデによるくぼみ
975	土師器	壺	9.5			良好	橙25YR6/6	砂礫	内外面ハケメ
976	土師器	高杯	20.0			良好	にぶい黄橙10YR7/4	細砂	口縁端部にわずかに面をもつ・脚部接合部に凸帯あり
977	土師器	高杯	15.3	11.5	11.4	良好	浅黄橙7.5YR8/6	砂礫	接合部差し込み・口縁端部は水平方向につまみ出す
978	土師器	手づくね		7.4		良好	浅黄橙10YR8/3	砂礫	
979	土師器	手づくね	(7.6)			良好	橙5YR6/6	微砂	
980	土師器	手づくね	7.9		6.0	良好	にぶい橙7.5YR7/4	細砂	
981	土師器	手づくね	(6.4)		7.6	良好	にぶい橙7.5YR7/4	微砂	
982	土師器	手づくね		4.9		良好	にぶい橙7.5YR7/4	微砂	
983	土師器	手づくね	7.8		4.5	良好	黒褐2.5Y3/1	微砂	
984	土師器	手づくね	(5.9)		6.3	良好	橙5YR7/6	細砂	
985	土師器	手づくね	5.8	4.0	5.6	良好	橙5YR6/6	微砂	
986	土師器	手づくね	5.1		4.6	良好	灰白10YR8/2	細砂	
987	土師器	手づくね	5.6		5.2	良好	橙5YR6/6	細砂	
988	土師器	手づくね	(5.1)			良好	橙5YR6/6	精良	
989	土師器	手づくね	(5.0)		5.4	良好	にぶい橙7.5YR7/4	細砂	
990	土師器	手づくね	(6.0)		5.6	良好	橙5YR6/6	微砂	
991	土師器	手づくね	4.9		5.2	良好	にぶい橙7.5YR7/4	微砂	
992	土師器	手づくね	(5.4)		5.0	良好	橙5YR7/6	微砂	
993	土師器	手づくね	4.2		4.4	良好	灰白7.5YR8/2	精良	
994	土師器	手づくね	4.2		4.1	良好	にぶい橙7.5YR7/4	微砂	
995	土師器	手づくね	5.1		3.9	良好	浅黄橙7.5YR8/4	微砂	
996	土師器	手づくね	4.8		4.3	良好	にぶい黄橙10YR7/3	細砂	
997	土師器	手づくね	4.8		4.1	良好	にぶい橙7.5YR7/4	細砂	
998	土師器	手づくね	4.0		2.9	良好	灰白10YR8/2	微砂	
999	土師器	手づくね	3.4		2.3	良好	浅黄橙7.5YR8/3	微砂	
1000	土師器	手づくね	(2.4)	2.5	2.9	良好	灰N4	精良	
1001	土師器	手づくね	(3.0)	3.0	3.8	良好	にぶい橙7.5YR7/4	精良	

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
	土師器	手づくね	6.1		5.1	良好	にぶい橙7.5YR7/4	細砂	口縁部わずかに外反
	土師器	手づくね	(5.6)		3.7	良好	橙5YR6/6	微砂	小形
	土師器	手づくね	5.4		4.9	良好	灰白10YR7/1		二次的に火を受ける
	土師器	手づくね	5.0		4.9	良好	浅黄橙7.5YR8/3	微砂	二次的に火を受ける
	土師器	手づくね	(5.4)		4.6	良好	にぶい橙5YR7/4	微砂	端部わずかに外反
	土師器	手づくね	(7.0)		5.2	良好	にぶい橙5YR7/4	微砂	
	土師器	手づくね	(6.6)		4.2	良好	にぶい橙5YR6/4	砂礫	黒斑あり
	土師器	手づくね	4.3		4.1	良好	にぶい橙7.5YR7/3	精良	小形
	土師器	手づくね	5.2		3.8	良好	灰白10YR8/2	微砂	
	土師器	手づくね	5.7		3.7	良好	にぶい橙5YR7/4	微砂	二次的に火を受ける
	土師器	手づくね				良好	灰白7.5YR8/2	微砂	小形
	土師器	手づくね	5.9		4.9	良好	浅黄橙10YR8/3	微砂	黒斑
-	土師器	手づくね				良好	灰白7.5YR8/2	微砂	
-	土師器	手づくね	(4.8)		3.9	良好	にぶい橙7.5YR7/4	微砂	
-	土師器	手づくね	(4.6)		4.5	良好	にぶい黄橙10YR7/3	精良	
-	土師器	手づくね	6.1		4.7	良好	にぶい橙7.5YR7/4	細砂	やや大ぶり
-	土師器	手づくね	5.3		3.7	良好	黄灰2.5Y4/1	精良	二次的に火を受ける
-	土師器	手づくね	8.1		4.8	良好	にぶい橙7.5YR7/4	精良	器壁厚い
-	土師器	手づくね	(7.8)			良好	橙5YR7/6	微砂	やや大ぶり
-	土師器	手づくね	(4.2)		4.2	良好	にぶい橙5YR6/4	精良	小形
-	土師器	手づくね	6.1	4.0	2.6	良好	にぶい橙7.5YR7/4	砂礫	やや平底ぎみ
-	土師器	手づくね	5.8		4.4	良好	にぶい黄橙10YR7/3	細砂	二次的に火を受ける
-	土師器	手づくね	5.1		3.4	良好	にぶい橙7.5YR7/4	微砂	黒斑
-	土師器	手づくね	4.8		5.3	良好	灰白10YR8/2	細砂	二次的に火を受ける
-	土師器	手づくね	4.7		4.7	良好	にぶい橙7.5YR7/4	微砂	二次的に火を受ける
-	土師器	手づくね	(8.2)			良好	にぶい橙7.5YR7/3	微砂	大形
-	土師器	手づくね	(4.8)		3.1	良好	橙5YR6/6	微砂	
-	土師器	手づくね	6.6		4.4	良好	にぶい黄橙10YR7/2	細砂	黒斑
-	土師器	手づくね	(5.7)		4.9	良好	にぶい黄橙10YR7/2	微砂	二次的に火を受ける
-	土師器	手づくね	4.8		4.6	良好	灰白10YR8/1	細砂	底あり・赤色顔料？
-	土師器	手づくね	4.5		3.9	良好	橙5YR6/6	微砂	雑なつくり
-	土師器	手づくね	4.6		4.8	良好	にぶい黄橙10YR7/3	微砂	二次的に火を受ける
-	土師器	手づくね	5.7		3.4	良好	明褐灰7.5YR7/2	精良	平底ぎみ・二次的に火を受ける
-	土師器	手づくね	3.5		2.7	良好	明赤褐5YR5/6	微砂	小形
-	土師器	手づくね	(4.8)		2.9	良好	浅黄橙10YR8/3	微砂	赤色顔料？
-	土師器	手づくね	3.9		4.3	良好	にぶい橙5YR6/4	微砂	二次的に火を受ける
-	土師器	手づくね	5.7		4.6	良好	浅黄橙7.5YR8/3	砂礫	二次的に火を受ける
-	土師器	手づくね	6.0		4.3	良好	にぶい橙7.5YR7/4	微砂	
-	土師器	手づくね				良好	橙5YR7/6	微砂	やや大ぶり
-	土師器	手づくね	4.9		3.4	良好	にぶい黄橙10YR7/3	微砂	
-	土師器	手づくね	4.1		3.7	良好	にぶい黄橙10YR7/2	微砂	二次的に火を受ける
-	土師器	手づくね	6.2		5.1	良好	にぶい橙7.5YR7/4	微砂	
-	土師器	手づくね	3.1		2.8	良好	浅黄橙7.5YR8/3	細砂	二次的に火を受ける
-	土師器	手づくね	4.9		3.6	良好	にぶい黄橙10YR7/4	微砂	
-	土師器	手づくね	5.1		4.8	良好	にぶい橙7.5YR7/4	細砂	二次的に火を受ける
-	土師器	手づくね	4.3		3.3	良好	にぶい黄橙10YR6/3	微砂	小形

土器溜り4は、ＫＭ１区に位置し、掘立柱建物９の北に接してある。

分布範囲は、長さ500cm、幅275cmであり、検出時は土器が密集して盛り上がっている状態であった。

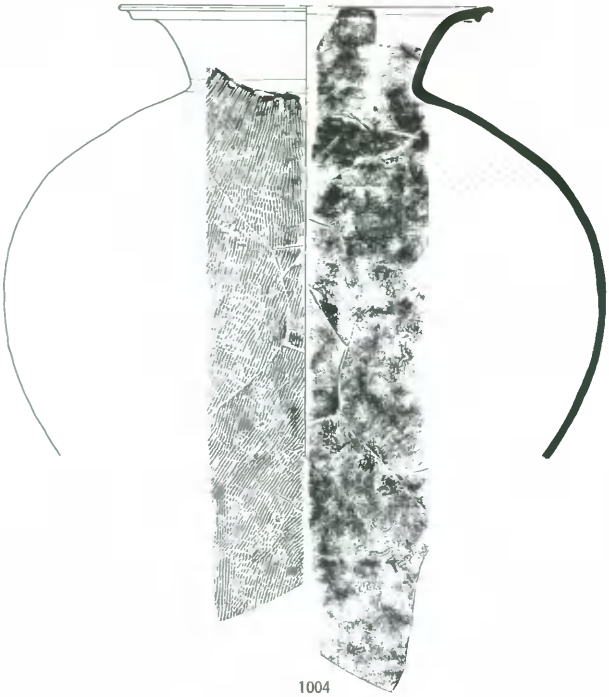
図示した出土遺物は、勾玉、臼玉、有孔円盤と**973**の須恵器と**974**～**1001**の土師器であるが、図化していない手づくね土器を計測可能なものについて46個体を表に示した。**O15**は、なかほどから下は欠失しているが碧玉製の勾玉である。**O16**と**O17**は、滑石製の臼玉である。**O17**は外面に稜を有する。**S19**は、滑石製の有孔円盤である。**973**は、頸部の外反はゆるやかであり、口縁部近くの外方への屈曲は顕著でない。口縁端部は、やや上方へ屈曲し内面には凹部を形成させる。口縁部直下の突帯は、非常にシャープで三角形を呈する。調整は、タタキの後からナデ消している。**974**は、頸部をやや内傾ぎみとし、上半部に凹部を形成している。**976・977**は、高杯で杯底部が平底状となり杯部の立ち上がり部分で段を有する。**977**は、口縁端部をさらに水平方向に屈曲させている。この土器溜りを特徴づける遺物が**978**からの手づくね土器である。破片を含めるとかなりの個体数になるがその内の主要な形態のものについて図示した。**978・982・1000・1001**は平底で従来の手づくね土器とは様相が異なる。時期は、出土遺物から５世紀中葉とされよう。　　（下澤）

土器溜り５

遺構名	位置(調査区)	範囲・規模(cm)			土器	時期	備考
		長さ	幅	平面形			
土器溜り５	ＫＢ１	130	40	長楕円	○	古墳後半前葉	

1002

1003



1004

（１/４）

掲載番号	種別	器種	土量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
1002	土師器	高杯				良好	橙5YR6/6	砂礫	
1003	須恵器	蓋	[illegible]		[illegible]	良好	(内)灰白N7　(外)灰N6 (断)褐灰7.5YR5/1	細砂	ロクロ右回り・内面仕[illegible]ナデ
1004	陶質系土器	甕	[illegible]			良好	(内)灰N6　(外)[illegible]	精良	

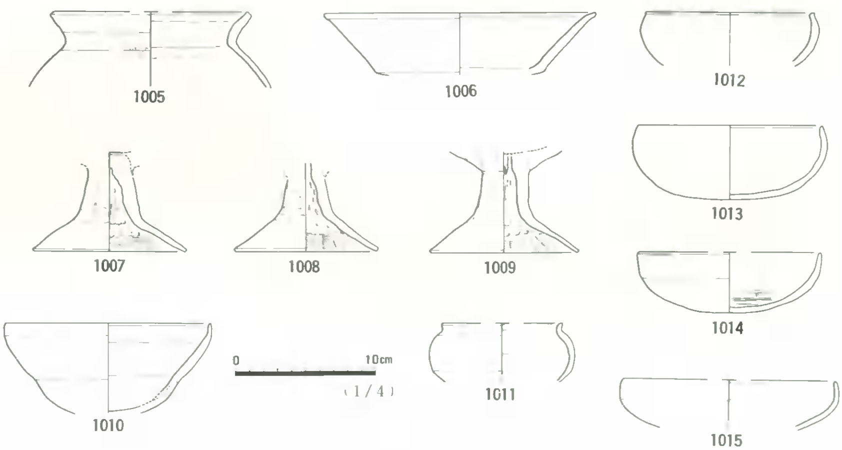
土器溜り５は、遺跡の低位部で検出された。後述の土器溜り６と近接し、またたわみ１とも位置的に密接に関わるとみてよいだろう。

検出状態は、不整な長楕円形を呈する土壙状の浅いくぼみの範囲に、弥生土器・土師器・須恵器が少量出土している。**1002**は、弥生後期に比定される高杯の脚部である。**1003**は、須恵器高杯の蓋で天井部にツマミが付けられる。天井部と体部の境は、鋭い突帯をなす。**1004**は、陶質系土器の大甕で体部下位から口頸部にかけて全形を復元観察できる良好な土器である。口縁端部の外面には鋭い突帯が巡る。体部外面には、細かな平行タタキが観察される。内面には、ナデ消された細かい同心円タタキの痕跡がかすかに看取される。周辺の古墳時代後半の出土遺物と十分な比較検討が必要な特筆すべき遺物である。

（岡田）

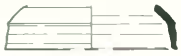
土器溜り 6

遺構名	位置(調査区)	検出・規模(cm)			土器	時期	備考
		長さ	幅	平面形			
土器溜り 6	KB 1	[illegible]20	20[illegible]	楕円	○	古墳後半前葉	



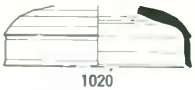
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	器高	底径				
1005	土師器	甕	[illegible]			良好	灰白10YR8/[illegible]	細砂	端部[illegible]ケメを[illegible]
1006	土師器	高杯	19.1			良好	にぶい黄橙7.5YR7/4	微砂	[illegible]残る
1007	土師器	高杯		[illegible]		良好	橙7.5YR7/[illegible]	微砂	脚部[illegible]工具による調整・接合[illegible]込み
1008	土師器	高杯		[illegible]		良好	にぶい黄橙10YR7/4	細砂	脚部[illegible]具による調整・接[illegible]込み
1009	土師器	高杯		[illegible]		良好	橙5YR6/8	微砂	脚部[illegible]具による調整・[illegible]
1010	土師器	鉢	14.[illegible]			良好	浅黄橙7.5YR[illegible]	砂礫	摩滅
1011	土師器	鉢	8.[illegible]			良好	にぶい黄橙10YR7/3	精良	
1012	土師器	鉢	11.[illegible]			良好	橙[illegible]	細砂	端部[illegible]
1013	土師器	鉢				良好	橙[illegible]	精良	[illegible]摩滅
1014	土師器	鉢	1[illegible]			良好	にぶい黄橙10YR7/2	微砂	内面摩滅・[illegible]ナデ
1015	土師器	鉢	12.[illegible]			良好	にぶい黄橙[illegible]	[illegible]	摩滅

1016


1019

1022

1017

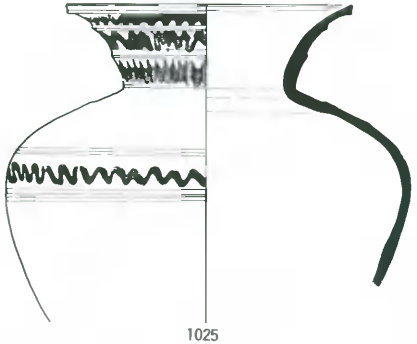

1020

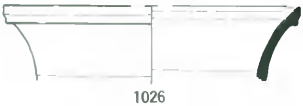
1023

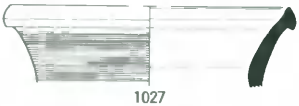
1018

1021

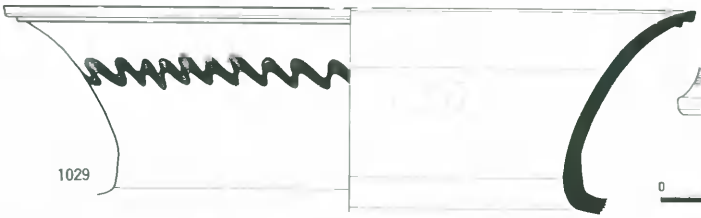
1024


1025


1026


1027

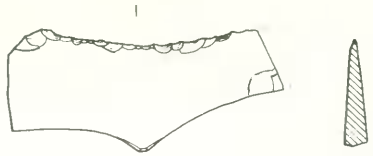
1028


1029

1030

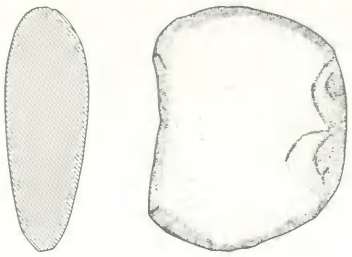
0　10cm
（1/4）

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1016	須恵器	蓋	12.2			良好	内:外:断:5Y5/1	精良	非常に丁寧な作りだが胎土に砂粒多し・天井部は水平につまみ出している・ロクロ右回り
1017	須恵器	蓋	12.5)			良好	内:外:断:5Y5/1	細砂	端部凹部あり・つまみの痕跡
1018	須恵器	蓋	12.2)			良好	内:外:断:5Y5/1	微砂	ロクロ右回り
1019	須恵器	蓋	12.1			良好	内:5Y5/1 外:青灰5PB5/1 断:灰白N7/	細砂	ロクロ回転不明・天井部に自然釉
1020	須恵器	蓋	13.1)			良好	内:灰N6/ 外:青灰5PB5/1 断:灰白N7/	微砂	稜下部にくぼみ明瞭・ロクロ右回り
1021	須恵器	蓋	13.8		4.2	良好	内:外:断:灰N4/	砂礫	ロクロ左回り・内面タタキメ状痕跡が残る・仕上げナデあり
1022	須恵器	杯身	(11.8)			良好	内:灰N5/ 外:灰N4/ 断:紫灰5RP5/1	砂礫	受け上がり部がリング・ロクロ右回り
1023	須恵器	杯身	(12.0)			良好	内:外:断:灰N5/	微砂	端部凹部あり
1024	須恵器	杯身	11.0		5.0	良好	内:灰N6/ 外:灰N5/	微砂	ロクロ左回り・器壁焼きぶくれ多し
1025	須恵器	壺	20.4)			良好	内:外:断:灰白N7/	砂礫	肩部焼きぶくれあり・口縁部二角形の交差2条・内面はアテ具板ユビナデ
1026	須恵器	壺	21.6)			良好	内:外:断:灰N6/	細砂	口縁部外面三角形の貼り付け
1027	須恵器	壺	(19.2)			良好	内:外:断:灰N5/	微砂	カキメ
1028	須恵器	壺	(19.0)			良好	内:外:断:明青灰5PB	細砂	端部内側に拡張・脚部の可能性
1029	須恵器	甕	(48.8)			良好	内:灰N6/ 外:灰N6/	精良	口縁部外面1段によるナデ・胎土、焼成ともに良
1030	須恵器	高杯		>5.1		良好	内:外:断:灰白N7/	砂礫	摩滅しており詳細不明



S20　(1/2)

S21　(1/3)



S22　(1/3)

掲載番号	器種	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
S20	スクレイパー	サヌカイト	(98)	37	8		
S21	磨り石	安山岩	長径(15)		(47)		破片、蛤歯石斧の頭付点？
S22	叩き石	平花崗岩	長径130		44		

土器溜り6は、土器溜り5の南西方に近接して検出された。幅約2m、長さ約5mあまりの範囲に多数の土器が集中して出土している。東端付近では、小児頭大の礫が多くみられたが、それらが遺構を形づくるのでもなく、直接的な関連性はないものと考えられる。遺物が出土している範囲は、窪んでいるという状態ではない。周辺全体がやや浅い谷状の地形を呈しており、大規模なたわみともいえる。

出土遺物には、1005～1015の土師器、1016～1030の須恵器のほか、明らかに混入と思われるS20～S22の石器がある。

土師器では、大形品は少なく甕1005・高杯1006～1009・小型丸底坩1010のほかさまざまな小形の鉢1011～1015がある。1011は、椀ともいうべき器種である。

須恵器では、杯蓋1016～1021・杯身1022～1024が最も多い。ついで壺1025～1028、大甕1029、高杯1030がある。杯蓋では、1016・1017のように天井部と体部の境界が突帯状をなすものと、1019・1020のように角張って稜をなすもの、あるいは稜の下部がくぼみをなすものなど、5世紀末葉から6世紀代にかけての時期的な幅がある。

1025は、口頸部に2条の突帯が巡り、さらにクシ描波状文が飾られる。体部の中央にも沈線に挟まれたクシ描波状文が巡る、装飾的な古式の壺である。

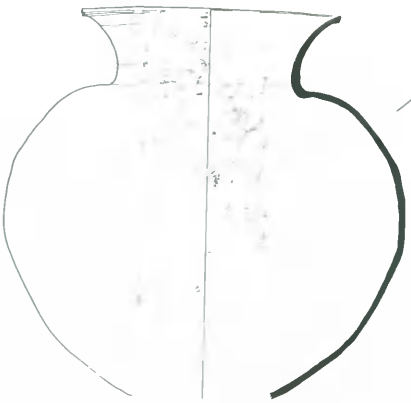
1026～1028はやや時期の下る壺の口頸部である。1025とほぼ同時期に比定される大甕1029は、口頸部のやや上位にクシ描きの波状文が1条巡る。口縁端部のやや下方には、断面三角形の鋭い1条の突帯が巡る。

以上の出土遺物は、同時に存在した遺物だけではなく、かなりの時期的な幅が推定される。しかしその撹乱も古墳時代の範囲内の出来事と受けとめてよいだろう。　(岡田)

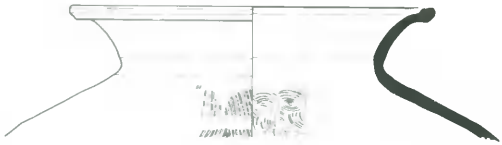
土器溜り７

（１/20）

遺構名	位置・調査区	軸距・規模（cm）			土器	時期	備考
		長さ	幅	平面形			
土器溜り７	ＫＭ５	—	—	—		古墳後半産業	



1031　（１/８）



1032

（１/４）

掲載番号	種別	器種	土器（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
1031	須恵器	甕	[illegible]			良好	内・外[illegible]N4[illegible] 断[illegible]YR4[illegible]	微砂	口縁部下段に沈線・[illegible]・胴内面[illegible] [illegible]
1032	須恵器	甕	[illegible]			良好	内・[illegible] 断[illegible]YR[illegible]	細砂	口縁部上端[illegible]沈線状[illegible]口縁[illegible] [illegible]あ[illegible]

土器溜り７は、ＫＭ５区で検出された。およそ完形に近く復元できる１個体分の須恵器の甕**1031**と、別個体の須恵器の甕**1032**の口縁部のみが検出された。掘り方は確認できず、ここで土器溜りとして扱った。**1031**の甕は倒立して口縁部を下側に向けていた。検出状況からは土器棺墓であるかどうかは判断できなかった。また、**1032**は混入と考えられ、元来的には**1031**のみが存在したとも理解される。

（大橋）

(13) た　わ　み

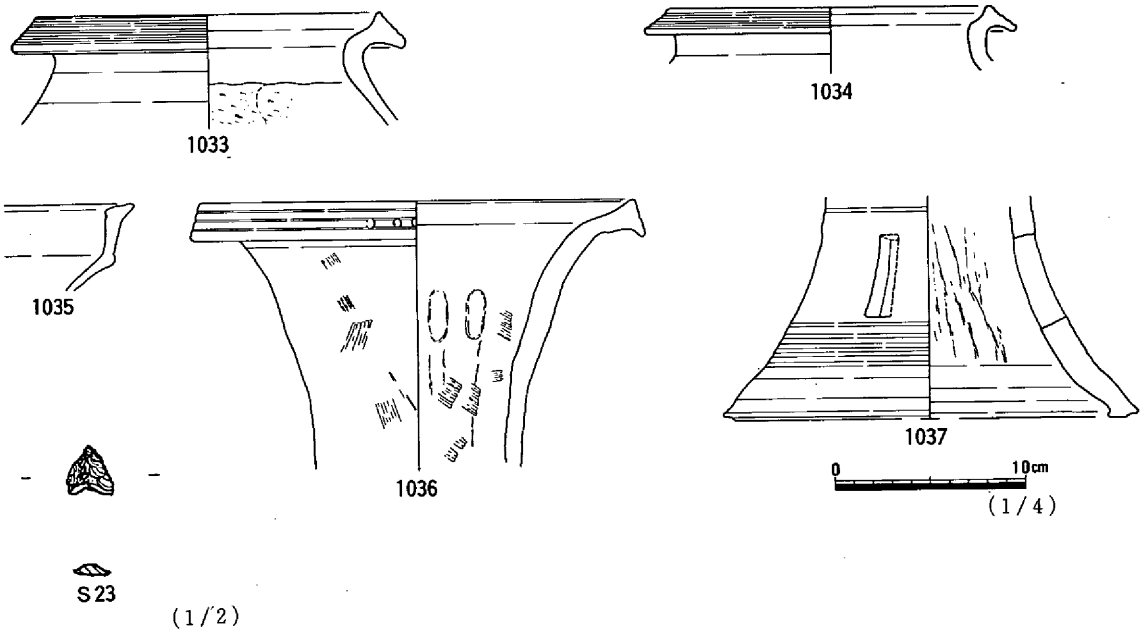
本項でたわみとしたものは、不定形なくぼみや土壙状のものであり、必ずしも人為的掘削が及んだものに限っていない。おそらくは自然堆積が進行する中で生じた地形上のくぼみに遺物が包含されたと推測されたものも含めている。これらのうちから、比較的形状の明らかなものや、遺物が多量に出土したものについて特にここで個別に報告するようにした。このほかにも、くぼみ状の地形は各所で観察されているものの、割愛したものが多い。

10か所について以下報告するが、特筆されるのはたわみ１である。多量の出土遺物があり、特に古式の須恵器が出土している。また、他のたわみも５世紀から６世紀初頭にかけての須恵器が比較的多く出土している。これらはくぼみを利用した土器の廃棄場とも思われる状況を示すようである。

(大橋)

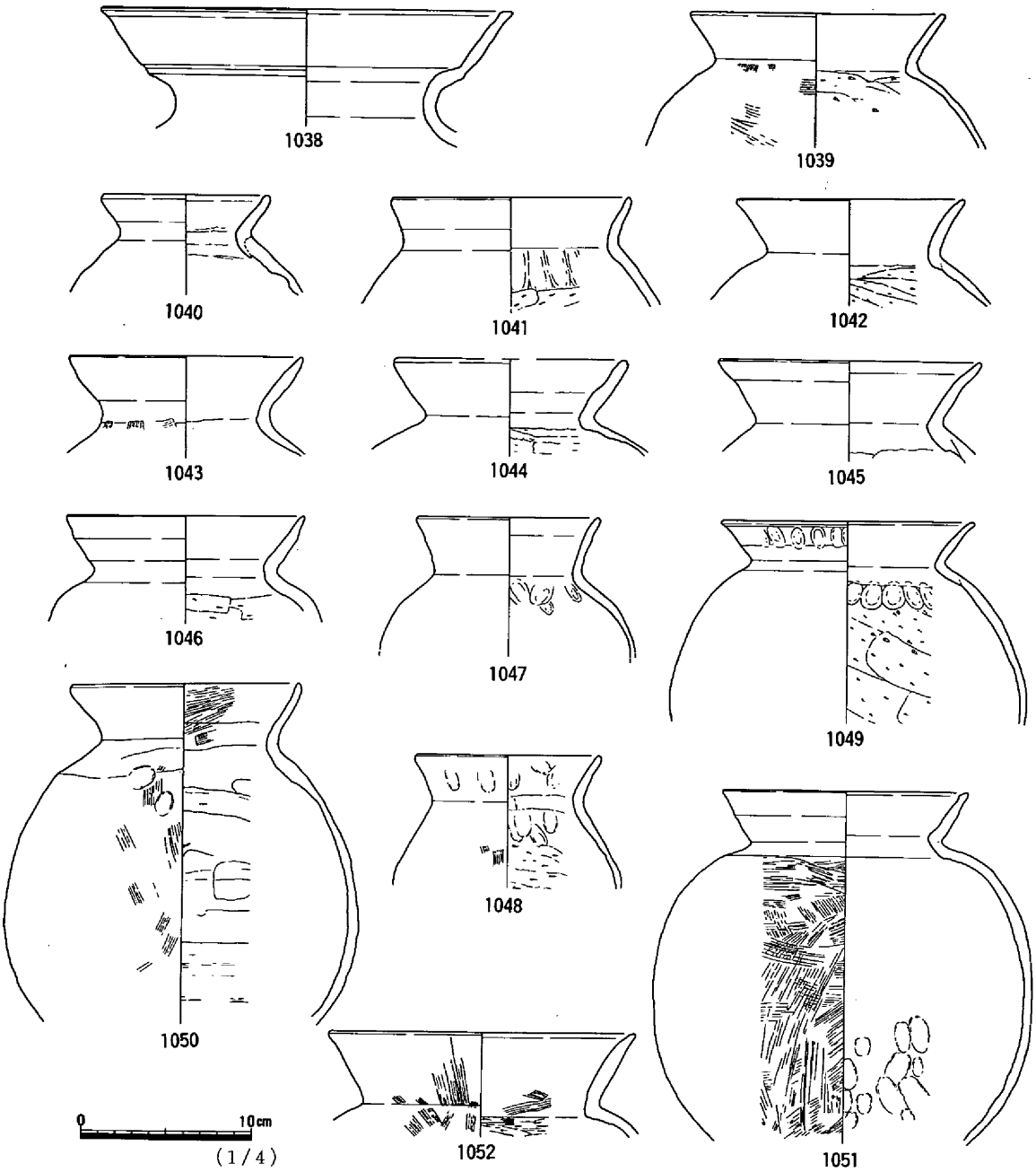
たわみ１

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	土器	時期	備考
たわみ１	ＫＢ１	(1630)	470+α	.20	不整	◎	古墳後半前葉	

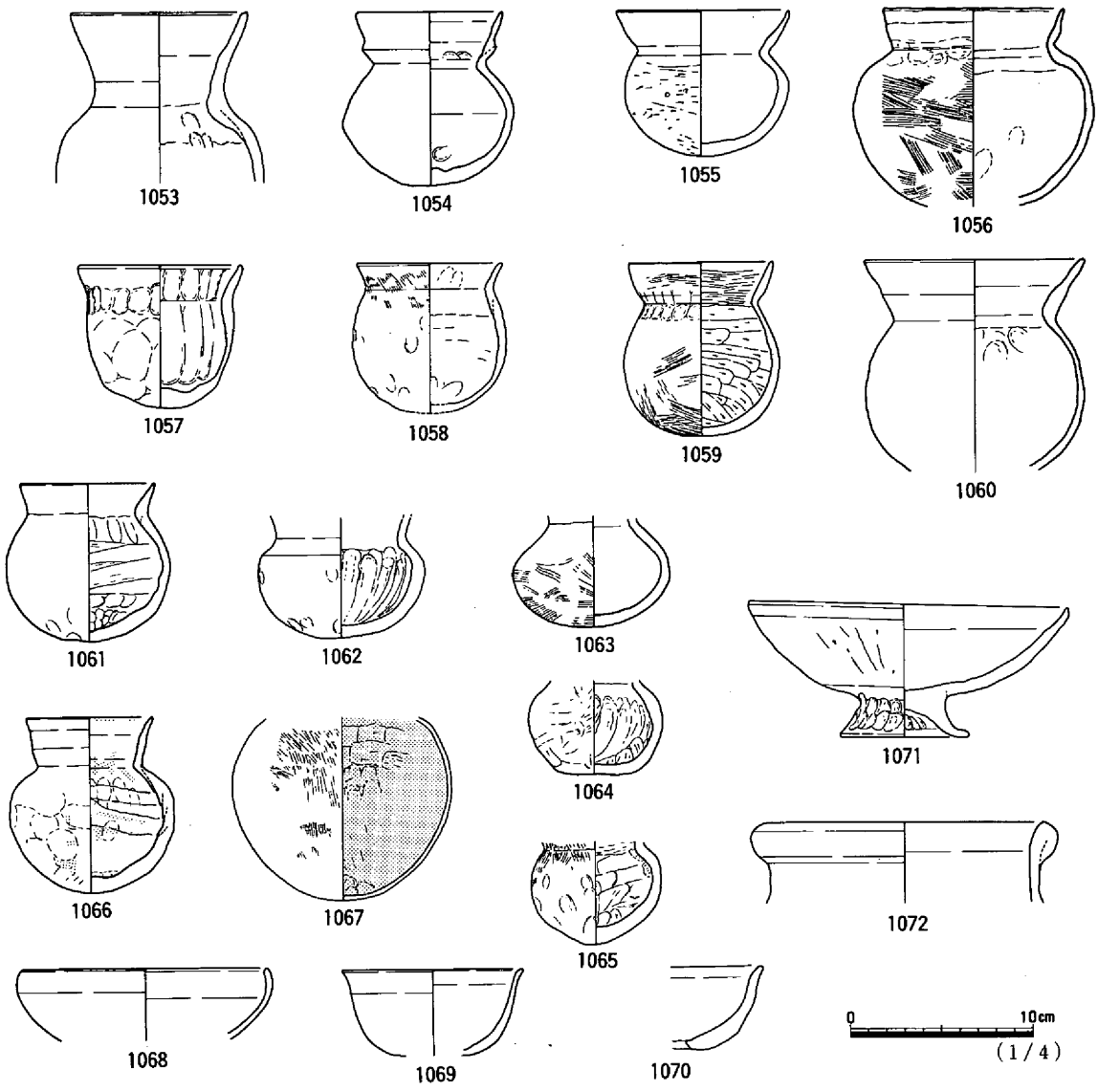


掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1033	弥生土器	壺	(18.2)			良好	橙2.5YR6/6	微砂	口縁部凹線
1034	弥生土器	壺	(16.6)			良好	灰白2.5YR8/2	砂礫	口縁部凹線
1035	弥生土器	高杯				良好	にぶい黄橙10YR7/3	細砂	上端面凹線
1036	弥生土器	長頸壺	(25.0)			良好	浅黄2.5Y7/3	砂礫	口縁部外面擬凹線・竹管文
1037	弥生土器	器台		(19.0)		良好	灰黄2.5Y7/2	砂礫	脚端部凹線

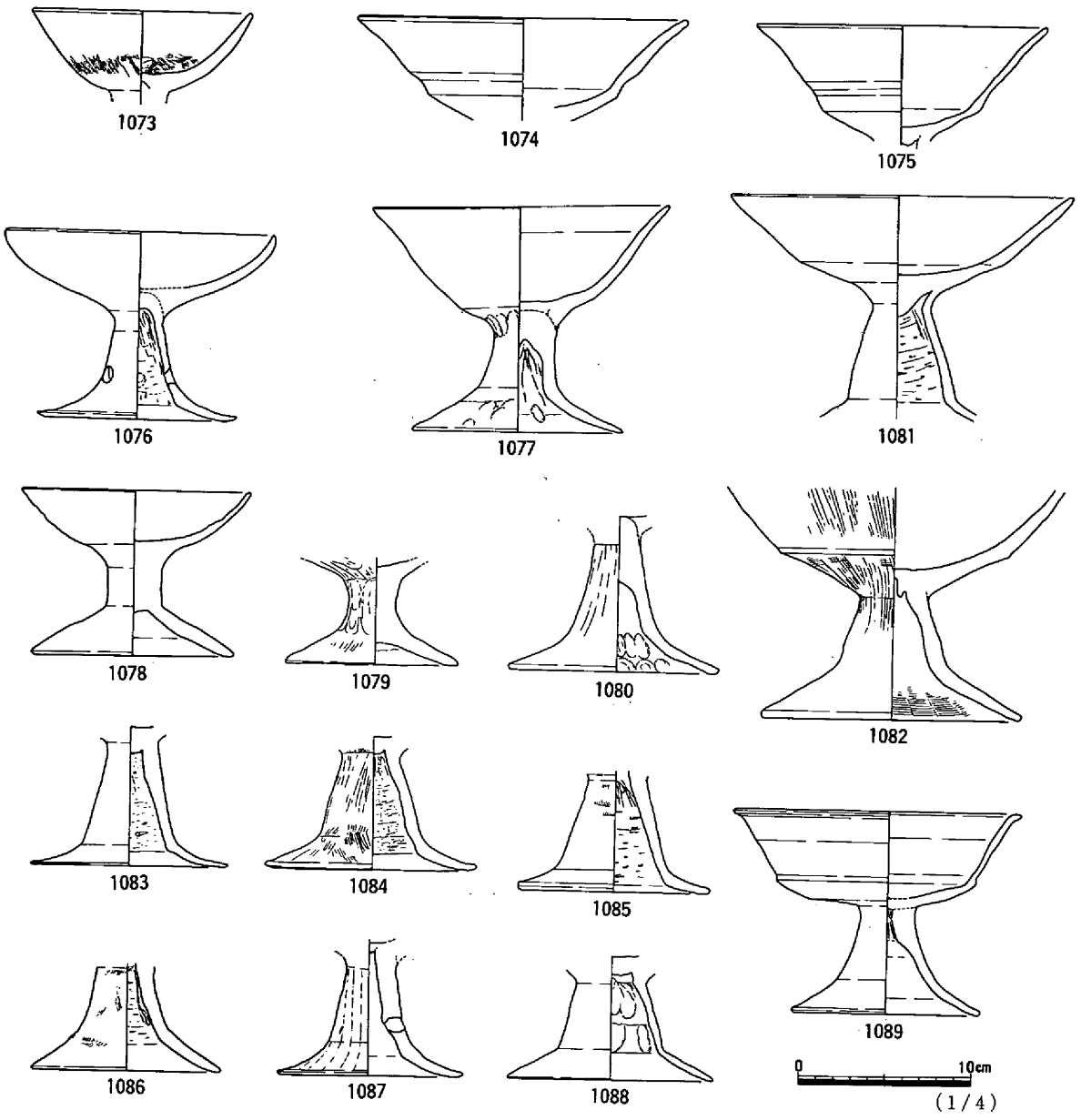
掲載番号	器種	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
S23	石鏃	サヌカイト	13.0	12.0	3.0	0.32	



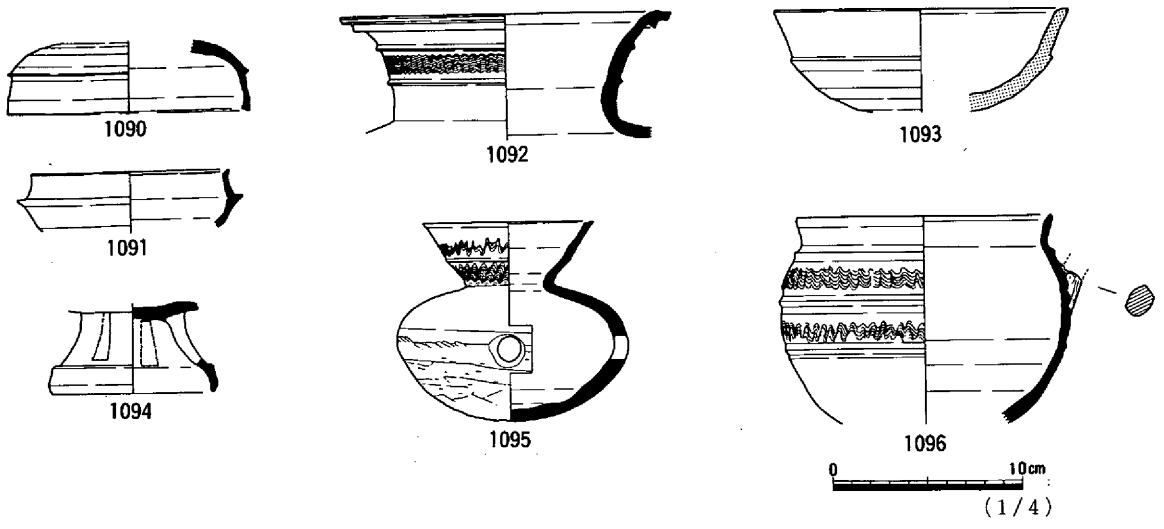
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1038	土師器	壺	(23.8)			良好	灰黄2.5Y7/2	細砂	口縁部下部にくぼみ
1039	土師器	甕	(15.0)			良好	灰黄2.5Y7/2	細砂	胴部外面ハケメ
1040	土師器	甕	(9.7)			良好	浅黄2.5Y7/3	細砂	スス付着・二次的に火を受ける・雑な作り
1041	土師器	甕	(13.8)			良好	橙7.5YR7/6	細砂	
1042	土師器	甕	13.2		6.4	良好	淡橙5YR8/4	砂礫	端部丸く納める
1043	土師器	甕	(13.5)			良好	灰黄2.5Y7/2	砂礫	短く直立する頸部が認められる
1044	土師器	甕	(13.0)			良好	にぶい黄橙10YR7/4	細砂	内面鋭いヘラケズリ・黒斑
1045	土師器	甕	(15.4)			良好	にぶい黄橙10YR7/2	砂礫	ヨコナデ
1046	土師器	甕	(13.8)			良好	灰白2.5Y7/1	細砂	スス付着・ヨコナデ
1047	土師器	甕	10.4			良好	浅黄橙7.5YR8/3	砂礫	磨滅
1048	土師器	甕	(10.6)			良好	にぶい黄橙10YR6/3	細砂	雑な作り
1049	土師器	甕	(14.6)			良好	にぶい黄橙10YR7/3	砂礫	口縁部ユビオサエ明瞭
1050	土師器	甕	(13.2)			良好	浅黄2.5Y7/4	微砂	雑な作り・胴部外面ハケメ
1051	土師器	甕	(14.5)			良好	浅黄2.5Y7/3	微砂	端部明瞭な水平面を持つ・外面にスス付着
1052	土師器	甕	17.9			良好	灰黄2.5Y7/2	細砂	口縁内面ハケメ後ヨコナデ・黒斑・スス付着



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1053	土師器	壺	(9.6)			良好	灰白5Y7/2	砂礫	端部は面を意識している・雑な作り
1054	土師器	壺	(8.0)		9.7	良好	灰黄2.5Y7/2	微砂	外面丁寧なヨコナデ・口縁部は粘土を積み上げている・接合面明瞭
1055	土師器	小形壺	9.4		8.1	良好	灰黄2.5Y7/2	細砂	外面ヘラケズリ後ヨコナデで成形・内面に赤色顔料明瞭に残る
1056	土師器	壺	(9.8)			良好	灰白5Y7/1	細砂	外面横方向の粗いハケメ・一部ナデ消し
1057	土師器	鉢	(8.8)	(2.0)		良好	にぶい黄橙10YR6/3	細砂	わずかに底あり・雑な作り
1058	土師器	壺	(8.0)			良好	黄灰2.5Y6/1	微砂	外面ハケメ残る
1059	土師器	壺	(7.9)		9.7	良好	灰白5Y7/2	細砂	外面ハケメをナデ消している
1060	土師器	壺	(12.0)			良好	灰黄2.5Y7/2	細砂	磨滅
1061	土師器	小形壺	(7.4)		8.9	良好	灰黄褐10YR6/2	細砂	黒斑
1062	土師器	小形壺				良好	灰黄2.5Y6/2	砂礫	内面明瞭なユビナデ
1063	土師器	小形壺				良好	にぶい黄橙10YR7/2	砂礫	ハケメ後ナデ消し
1064	土師器	小形壺		4.6		良好	灰白7.5Y7/1	細砂	底は平底になる
1065	土師器	小形壺				良好	灰白5Y7/2	細砂	外面ハケメ・黒斑
1066	土師器	小形壺	(6.9)			良好	灰白7.5Y7/1	微砂	内面漆残る・内面に粘土接合明瞭
1067	土師器	壺				良好	浅黄橙7.5YR8/4	微砂	内面漆残る
1068	土師器	鉢	(13.5)			良好	にぶい黄橙10YR7/3	細砂	高杯の杯部の可能性もある
1069	土師器	鉢	(9.9)			良好	灰黄2.5Y7/2	砂礫	口縁部にスス付着・内面はユビナデで丁寧に仕上げている
1070	土師器	鉢				良好	にぶい黄橙10YR7/2	微砂	底部に焼成後に穿孔
1071	土師器	台付鉢	(17.4)	(7.0)		良好	黄灰2.5Y6/1	砂礫	外面ヘラケズリ後ヨコナデ・胴部はユビオサエ
1072	土師器	壺	(15.2)			良好	浅黄橙10YR8/3	砂礫	玉縁状の口縁



掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
1073	土師器	高杯	12.5			良好	にぶい黄2.5Y6/3	細砂	杯部外面下半縦方向のハケメ・上半はヨコナデ
1074	土師器	高杯	(18.9)			良好	にぶい橙5YR7/4	細砂	接合部差し込み・杯屈曲部に凹線状のくぼみ・磨滅
1075	土師器	高杯	(16.9)			良好	にぶい黄橙10YR7/4	砂礫	
1076	土師器	高杯	(15.3)	(10.6)		良好	橙2.5YR6/8	砂礫	透かし孔3個・接合部差し込み
1077	土師器	高杯	(17.2)	(12.2)		良好	灰黄2.5Y7/2	微砂	接合部差し込み
1078	土師器	高杯	(12.9)	11.3		良好	灰白2.5Y7/1	細砂	浅い杯部・杯内外面ハケメ・スス付着
1079	土師器	高杯		(9.8)		良好	灰オリーブ5Y6/2	細砂	脚外面ハケメ残る・黒斑
1080	土師器	高杯		(11.0)		良好	にぶい黄橙10YR7/	細砂	接合部差し込み・脚柱部タテ方向に稜が入る
1081	土師器	高杯	(19.7)			良好	灰白7.5Y7/1	砂礫	接合部凸部
1082	土師器	高杯		(14.7)		良好	橙5YR6/6	細砂	杯外面粗いハケメ・接合部差し込み
1083	土師器	高杯		10.4		良好	橙5YR7/8	砂礫	接合部凸部・脚柱部タテ方向に稜が入る
1084	土師器	高杯		11.0		良好	浅黄橙10YR8/3	砂礫	接合部凸部、外面ハケメをナデ消している
1085	土師器	高杯		(11.4)		良好	浅黄2.5Y7/3	砂礫	接合部差し込み
1086	土師器	高杯		10.6		良好	にぶい黄橙10YR6/4	細砂	
1087	土師器	高杯		(10.8)		良好	灰白2.5Y7/1	微砂	透かし孔を再びふさいでいる・接合部差し込み
1088	土師器	高杯		(12.0)		良好	灰黄2.5Y7/2	微砂	接合部凸部・内面に粘土接合部明瞭
1089	土師器	高杯	(16.2)	(10.7)	11.9	良好	灰黄褐10YR6/2	砂礫	須恵器的成形技法



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1090	須恵器	杯蓋	(12.8)			良好	(内・外)青灰5PB6/1 (断)暗赤灰５R	微砂	ロクロ右回り
1091	須恵器	杯身	(10.4)			良好	(内・外・断)灰N4/	微砂	立ち上がり部ハリツケ
1092	陶質系土器	壺	17.5			良好	(内・外・断)青灰5B5/1	砂礫	突帯３条・胴部平行タタキメ
1093	須恵器 (土師質ｃ)	高杯	(15.4)			やや不良	(内・外・断)灰黄2.5Y6/2	微砂	磨滅
1094	須恵器	高杯		(8.5)		良好	(内)灰N5/　(外)灰N6/	微砂	
1095	須恵器	甕	(8.9)		10.6	良好	(内・外・断)灰N6/	精良	下半静止ヘラケズリ後きれいにナデを施している
1096	陶質系土器	把手付椀	(13.4)			良好	(内・外)青灰5PB6/1 (外)青灰5PB6/1	精良	３条の突帯

たわみ１は、遺跡下位のやや湿潤な浅い谷状地形に位置する。北東から南西方向にかけて、幅約５～６ｍ、検出長約16ｍの範囲にたわみは広がる。たわみは、緩やかな傾斜で南方へ下がり、最も深い部分では、約20～30cm前後を測る。埋積土は黒灰色を呈する粘性の強い土で、土器はもとより多数の礫をも含む。また、ウマと推定される少量の四肢骨・歯牙も認められた。低位部分では、性格・用途不明の数本の杭も検出されたが、細いばかりでなく、打ち込みが浅く、残りも悪い状態であった。

たわみのほぼ全体にわたって多量の土器が出土しているが、弥生土器の混入もみられる。これらの大半は、後期前半に比定されるもので、壺**1033・1034**、高杯**1035**、長頸壺**1036**、器台**1037**などがある。また、**S23**のサヌカイト製の小形石鏃もみられる。

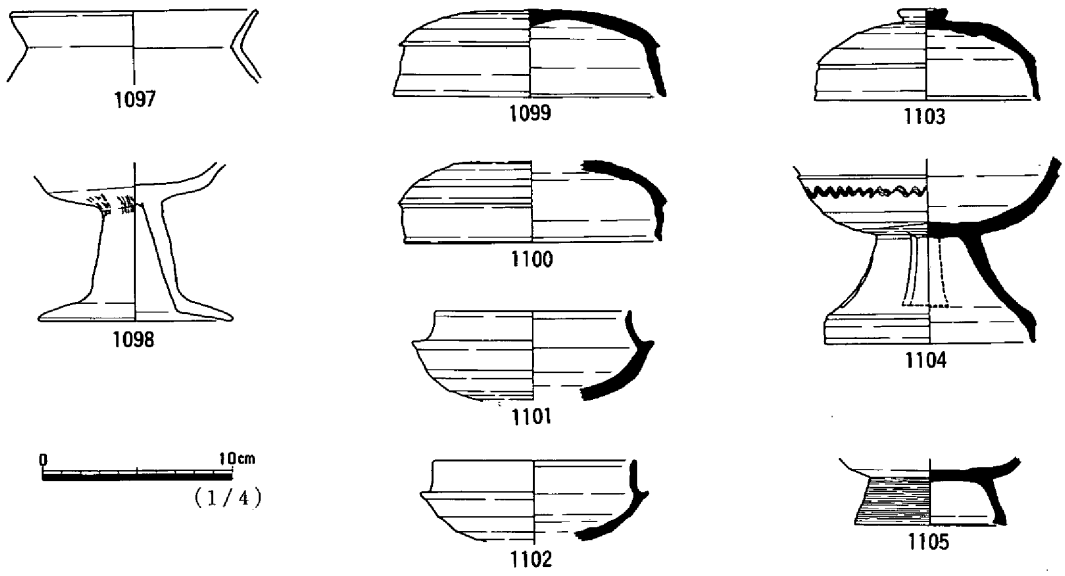
たわみに直接伴う時期の遺物としては、多量の土師器と須恵器がある。土師器には、壺・甕・鉢・高杯が多く、ことに壺には小型の器種が加わり、中には**1055**のように体部内面に、赤色顔料が付着しているものや、**1066・1067**のように漆膜がはりついているものなどがある。ほかにも漆が付着する破片は比較的多く、この時期のさまざまな漆の用途を考える上で重要な出土例といえる。

須恵器は、古式に属するもので杯蓋**1090**・杯身**1091**・高杯**1094**・壺**1092**・甕**1095**・把手付椀**1096**を図示した。このほか、壺・甕の破片もみられる。この中には、**1093**のように軟質で土師質の須恵器もある。**1092・1095・1096**は、いずれも胎土は精良で緻密で、焼成もきわめて良好なものである。精緻な櫛描波状文を巡らして飾る。**1092**は、口頸部に２条の突帯を巡らせその間に波状文を飾る。また**1096**も体部上位に鋭い３条の突帯を巡らせ、その間に２条の櫛描波状文を飾っている。

以上の出土遺物は、古墳時代でも５世紀に限定される一括性の高い遺物であり、きわめて興味深い一群の資料である。　　（岡田）

たわみ２

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	土器	時期	備考
たわみ２	ＫＢ１	240	141	不明	楕円	○	？	



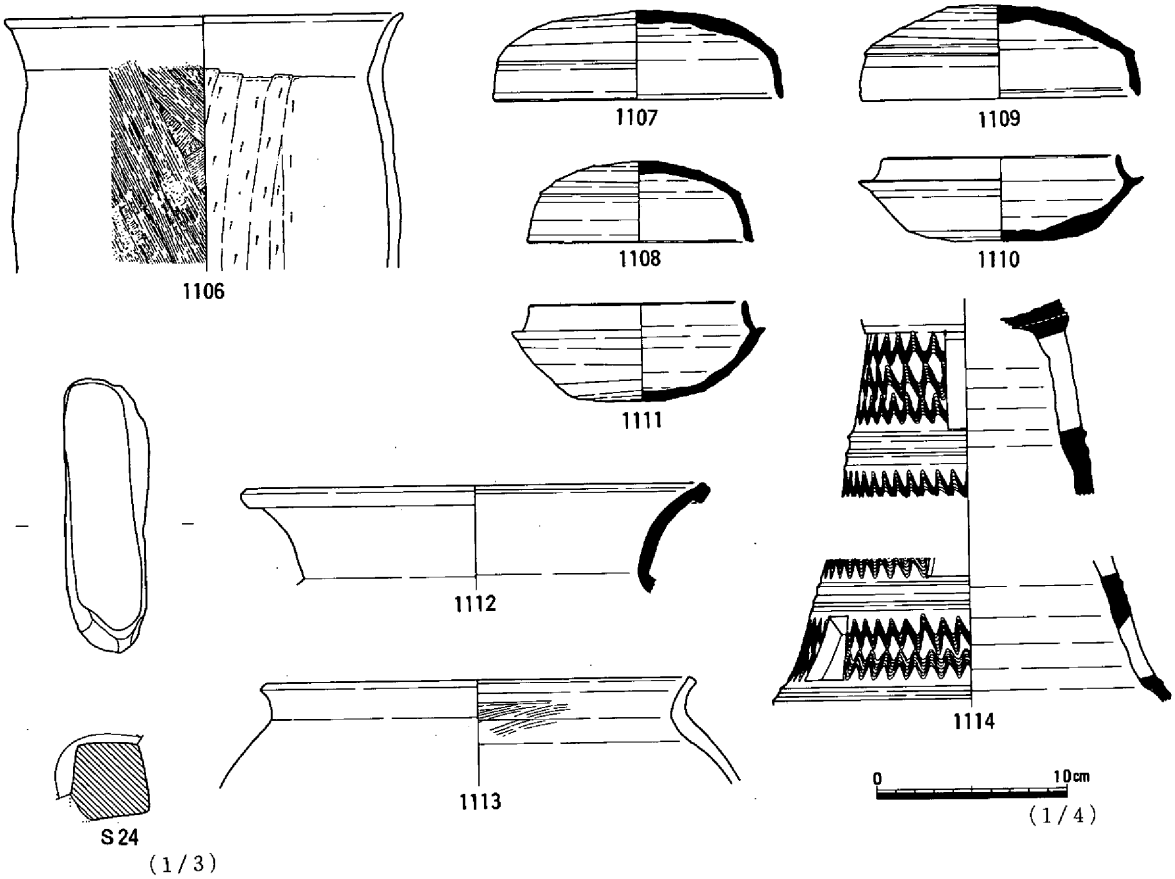
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1097	土師器	甕	(12.9)			良好	灰黄褐10YR4/2	細砂	端部面を持つ・二次的に火を受ける
1098	土師器	高杯		(10.0)		良好	橙7.5YR7/6	微砂	接合部差し込み・磨滅
1099	須恵器	蓋	(14.2)			良好	(内・断)青灰5PB6/1　(外)灰N6/	細砂	稜鋭い・外面磨滅・口縁部外方開きぎみ
1100	須恵器	蓋	(13.6)			良好	(内・断)明青5PB7/1 (外)灰5Y6/1	微砂	ロクロ左回り
1101	須恵器	杯身	(10.3)			良好	(内・外・断)灰N5/	微砂	ロクロ右回り・端部アクセントを持つ
1102	須恵器	杯身	(5.3)			やや不良	(内)灰褐7.5YR5/2 (外)灰N5/　(断面)赤褐5YR4/6	精良	ロクロ右回り
1103	須恵器	蓋	(11.4)		4.9	良好	(内・断)明青5PB7/1　(外)灰N6/	微砂	稜下部に沈線状のくぼみ
1104	須恵器	高杯		(11.0)		良好	(内・外・断)灰N4/	微砂	ロクロ右回り・杯内面に重ね焼痕跡
1105	須恵器	(台部)		(7.8)		良好	(内・外)灰N6/ (断)暗赤灰5R4/1	微砂	台部カキメ

たわみ２は、遺跡の西方低位部で検出された。井戸７から南方下方へ派生する溝によって切られるかのように、その東側で検出されている。長径240cm、短径140cmとやや長円形を呈し、深さは約10cm前後と浅く、どちらかと言えば土壙状をなしているといえる。

出土遺物はさほど多くはないが、土師器・須恵器など時期的にまとまりのあるものが得られている。土師器では、**1097**の甕、**1098**の高杯脚部があげられる。須恵器には小形の器種が多く、**1099・1100**の杯蓋、**1101・1102**の杯身のほか、**1103**の高杯の蓋や、体部下位に櫛描波状文が施された**1104**の高杯などが復元、図化されている。杯蓋では、丁寧なヘラケズリが施された天井部と体部との境界が、鋭い突帯状をなすものが目立つ。杯身では、立ち上がりが高く、上端に段がつく古式のタイプで占められる。**1105**は、台付壺の台部と推定される形態を示す。台部の外面には、特徴的な横位のカキメ調整が施されている。また、端部のすぐ内側はかえり状に肥厚している。　(岡田)

たわみ３

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	土器	時期	備考
たわみ３	ＫＭ２	(1230)	(400)	62	(不整台)	◎	古墳後半中葉	



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1106	土師器	甕	(21.0)			良好	灰黄褐10YR5/2	細砂	口縁部は外方へ屈曲し端部をわずかにつまみ出す
1107	須恵器	蓋	(15.2)		4.7	良好	(内・断)灰N5/1　(外)灰N4/1	精良	稜は沈線により表現・天井部外面未調整・内面仕上げナデ・ロクロ右回り
1108	須恵器	蓋	(11.4)		4.3	良好	(内)灰N6/1　(外・断)灰10Y6/1	精良	稜は鋭い沈線で表現・端部はにぶい面を有す・内面仕上げナデ・ロクロ左回り
1109	須恵器	蓋	14.6		5.0	良好	(内)青灰5PB6/1 (外・断)灰N6/1	微砂	稜は沈線により表現・内面指頭圧痕残る・後仕上げナデ・端部鈍い段を持つ・ロクロ右回り
1110	須恵器	杯身	(12.4)		4.5	やや不良	(内)灰10Y6/1　(外)灰7.5Y6/1 (断面)橙7.5Y6/6	微砂	端部丸く納める・ロクロ右回り・内面仕上げナデ
1111	須恵器	杯身	11.4		5.2	良好	(内)灰5Y6/1　(外・断)灰N6/1	精良	端部丸く納める・立ち上がり部はオリコミ・内面仕上げナデ・ロクロ左回り
1112	須恵器	甕	24.2			良好	(内・外)青灰5PB6/1 (断)にぶい褐7.5YR5/4	細砂	口縁部折り曲げて肥厚・外面板状工具による調整
1113	軟質系土器	甕	(22.4)			良好	にぶい橙7.5YR6/4	精良	口縁端部鋭い面を持つ・外面は磨滅
1114	須恵器	器台				良好	(内・外)青灰5PB6/1 (断)明青灰5PB7/1	微砂	接点なし同一個体か？・透かし孔の形状は三角形と長方形

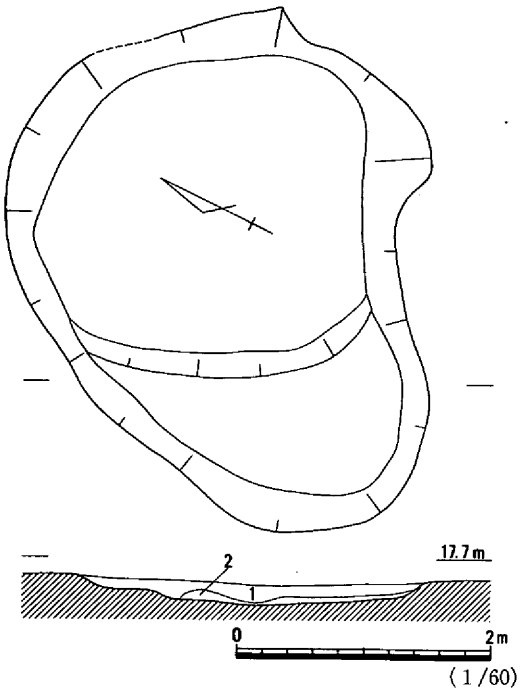
掲載番号	器種	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
S24	砥石	流紋岩	110	34	30	224.11	凝灰岩（白名倉）

たわみ３は、ＫＭ２区に位置し、他の遺構と切り合って検出された遺構の一つである。

遺構の平面形態、断面等が歪つで不整形な様相を呈していることから、ここではたわみとして扱った。

たわみ内の埋土中からは出土遺物も多く、土師器、須恵器、軟質系土器**1113**等が出土している。さらに流紋岩製の砥石も含まれている。この「たわみ」は、自然のくぼみに堆積したものと思われるが、たわみができた時期は不明である。　(二宮)

たわみ４



(１/60)

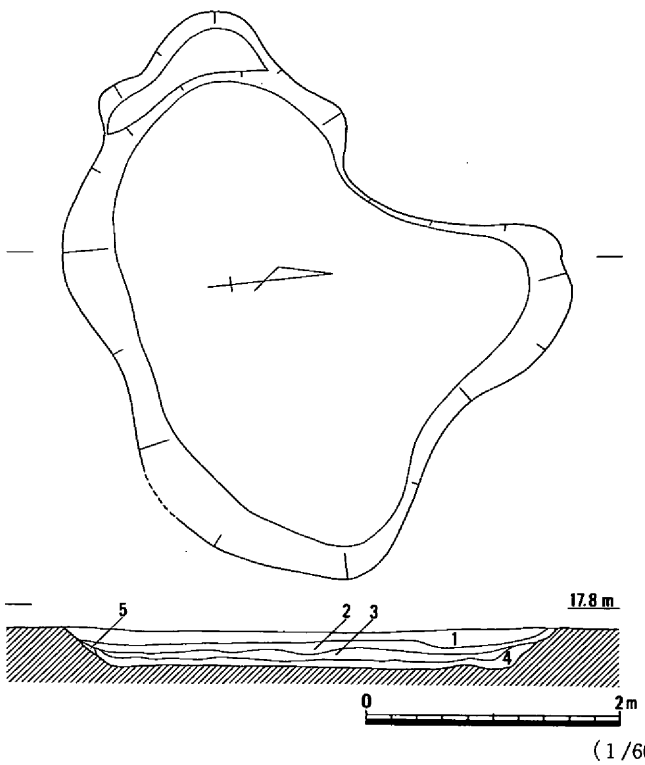
たわみ４は、たわみ３の北に位置し、平面形態が不整円形と楕円形を呈する２つのくぼみが重複しているものと思われる。現状では長さ415cm、幅342cm、検出面からの深さは16cmを測った。

このたわみ４は人工的な土壙状を呈しており、埋土中から少量ではあるが、図示していない須恵器等の遺物も出土している。遺物の大半は古墳時代後半のものであった。自然のくぼみの可能性も残されるが、ここではたわみとして扱った。　(二宮)

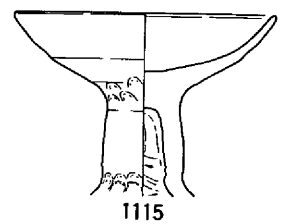
1　暗灰褐色粘質土
2　暗灰黄色粘質土

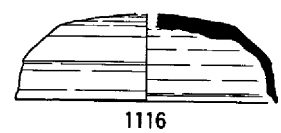
遺構名	位置(調査区)	規模(cm)			平面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ				
たわみ４	ＫＭ２	415	342	16	楕円・不整円	△	古墳後半	

たわみ５



(１/60)





1　明灰褐色粘質土
2　灰褐色粘質土（炭含む）
3　明灰褐色粘質土
4　暗灰色粘質土
5　暗灰褐色粘質土（礫含む）

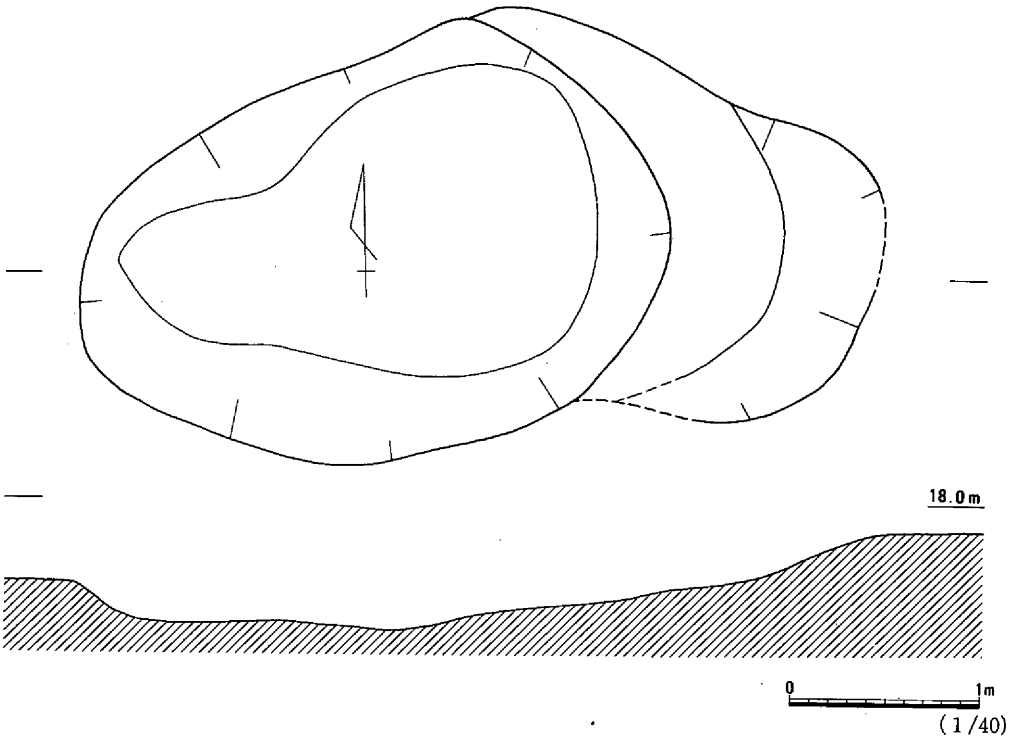
遺構名	位置(調査区)	規模(cm)			平面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ				
たわみ５	ＫＭ２	463	357	27	不整	○	古墳後半中葉	

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1115	土師器	高杯	(13.8)			良好.	浅黄橙10YR8/4	細砂	杯内面丁寧なナデ・端部丸く納める
1116	須恵器	蓋	13.8			良好	(内・断)青灰5PB6/1 (外)青灰5B5/1	細砂	天井部平たい・ロクロ右回り・端部は段を有す

たわみ5は、たわみ4の東に位置し、北西部が切られた状態で検出された遺構である。

平面形態は歪つな不整形であり、断面形は擂鉢状を呈し、底面は平坦ぎみであった。自然のくぼみ地形とは若干様相が異なっている。出土遺物から古墳時代後半の遺構と思われる。　(二宮)

たわみ6

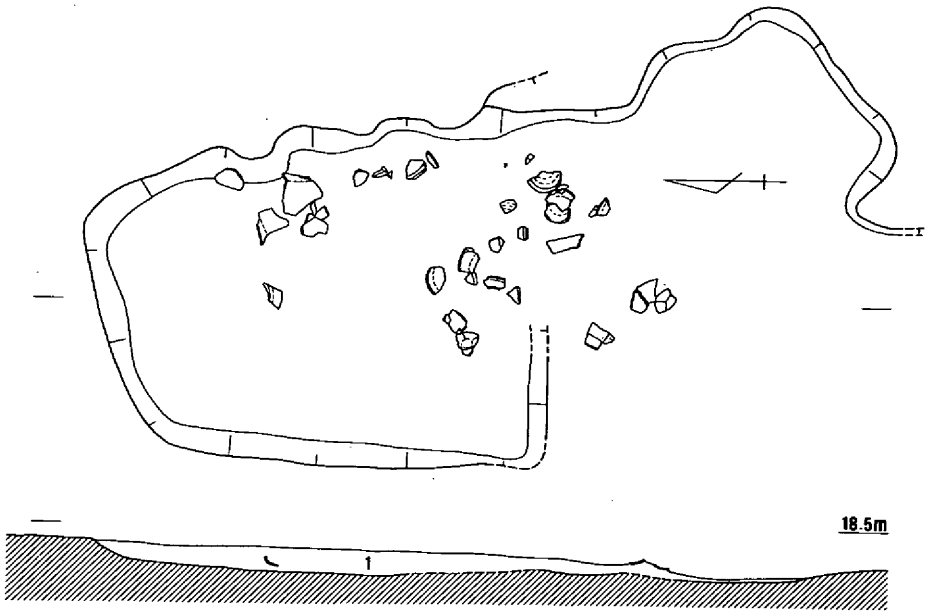


遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	土器	時期	備考
たわみ6	KM2	420	225	70	楕円	△	古墳後半	

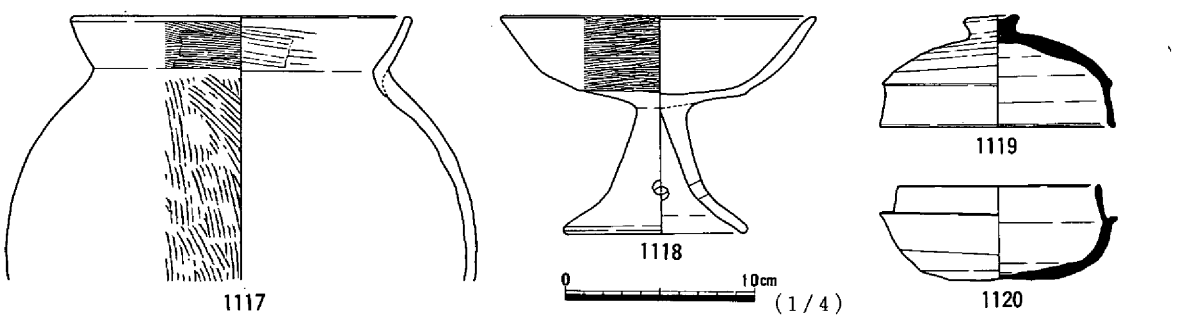
たわみ6は、たわみ5の東に位置する。長軸は東西方向を向き、東側でわずかに段が認められた。平面・断面の観察から隅丸長方形のものを長楕円形のものが切っていると推定されたが、検出面での切り合いは確認できなかった。

埋土中から須恵器片が出土している。古墳時代後半に比定されよう。　(二宮)

たわみ7



遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	土器	時期	備考
たわみ7	KM2	不明	(143)	15	不整	○	古墳後半中葉	



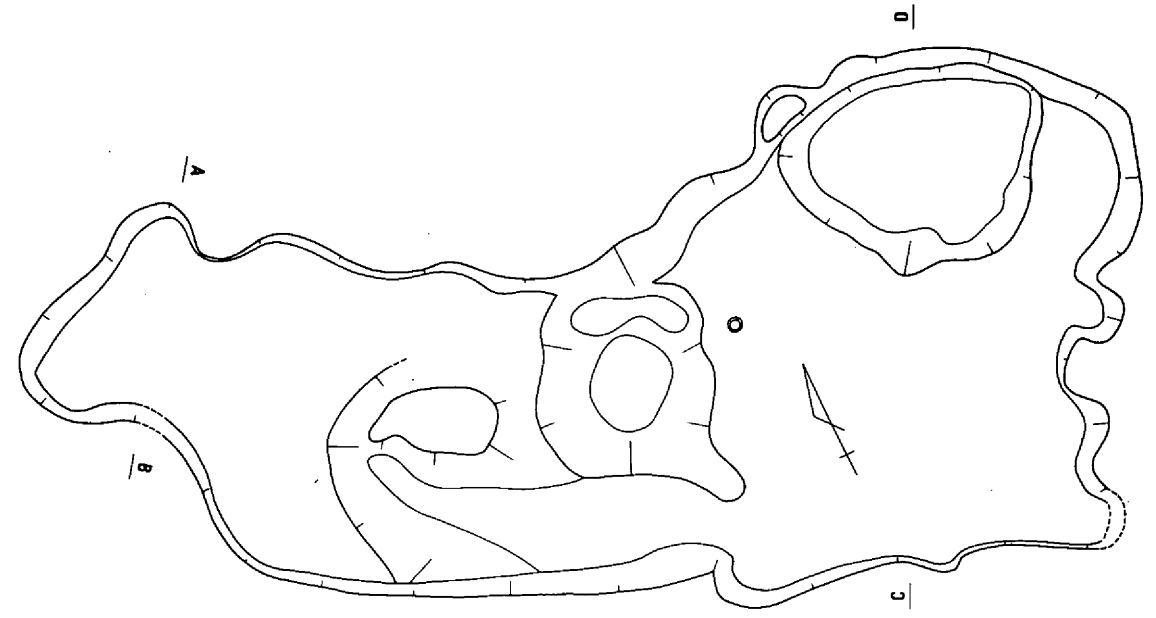
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1117	土師器	甕	(17.5)			良好	浅黄2.5Y7/3	微砂	内面・強いユビナデ上げ
1118	土師器	高杯	16.5	脚(9.3)	11.6	良好	灰白5YR8/1	微砂	脚部円形透かし孔
1119	須恵器	蓋	12.4		5.9	良好	(内・外・断)青灰5PB6/1	微砂	端部鈍い面をなす・天井部ヘラケズリ・内面仕上げナデ・ロクロ右回り
1120	須恵器	杯身	(10.7)		5.0	良好	(内・外・断)青灰5PB6/1	微砂	端部丸く納める・立ち上がり部ハリツケ・ロクロ右回り

たわみ7は、たわみ6の東方約20mの位置で、不整長方形の平面形態の遺構らしきくぼみが重複しているものであるが、切り合い、および新旧の判断はできず、不整形な現状からここではたわみとして扱った。

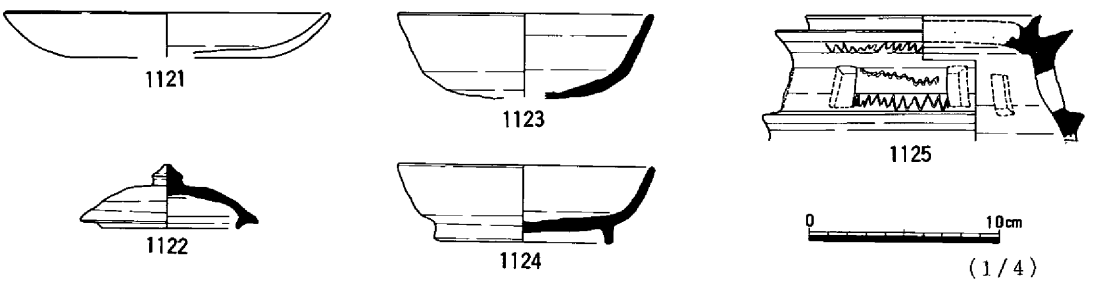
遺構埋土中からは、土師器、須恵器が多量に出土しているが、細片がほとんどで、実測できたものはわずかであった。

出土遺物から時期は古墳時代後半と考えられ、人工的に掘られた土壙が重複しているものと判断したい。　　（二宮）

たわみ8



遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	土器	時期	備考
たわみ8	MBOX3	868	416	52	不整	◎	奈良	

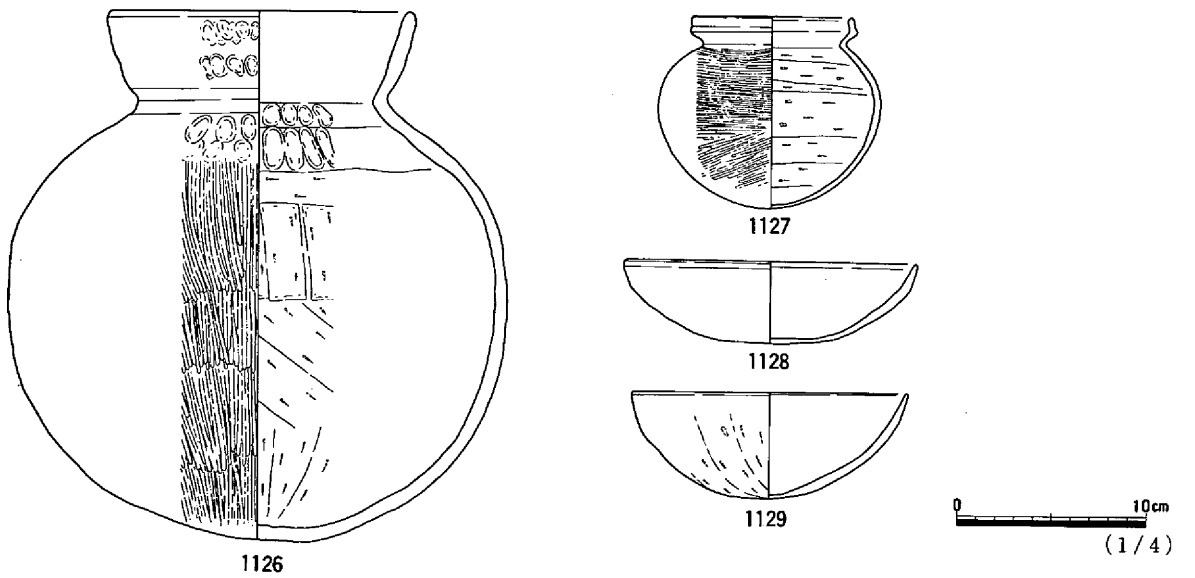


掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1121	土師器	皿	(17.2)			良好	にぶい黄橙10YR7/2	微砂	器壁磨滅
1122	須恵器	蓋	9.2		3.4	良好	(内・外・断)灰白N7/	精良	宝珠つまみ
1123	須恵器	杯	(13.6)			良好	(内・外・断)灰白N7/	精良	丁寧なロクロナデ
1124	須恵器	杯身	(13.5)	8.8	4.1	良好	(内・外・断)灰白N7/	精良	丁寧なロクロナデ・高い高台部
1125	須恵器	円面硯				良好	(内・外・断)灰N5/	精良	稚拙な波状文・方形透かし孔

たわみ８は、たわみ７の北東約12ｍの位置に検出した。平面形は特に定まった形状は呈しておらず北西から南東に長く、少し弧を描く不整形を呈するものである。底面は北西側が高く南東側が低い。また、底面は段やくぼみが形成されている部分以外はほぼ平坦である。遺構の規模は長さ868cm、幅416cm、検出面からの深さは８～52cmを測る。遺構からは比較的多くの遺物が出土している。**1121**は土師器の皿である。体部が斜め上方に開くものである。器壁は磨滅しているため調整は不明である。**1122**は須恵器の蓋である。天井部には宝珠つまみを持つ。天井部から口縁端部にかけては緩やかに弧を描くもので、内面には返りを持つ。**1123**は須恵器の杯身である。底部から口縁部にかけては弧を描くもので、端部は丸く納められている。**1124**も須恵器の杯身である。体部は少し開きながら立ち上がるもので、端部は丸く納められている。底部には高台が付くものである。**1125**は須恵器の円面硯である。脚部には方形透かし孔と波状文が見られる。透かし孔の下端に三角突帯が見られるが、破片のため脚端部の形状は不明である。遺構の時期は奈良時代と考えられる。　（井上）

たわみ９

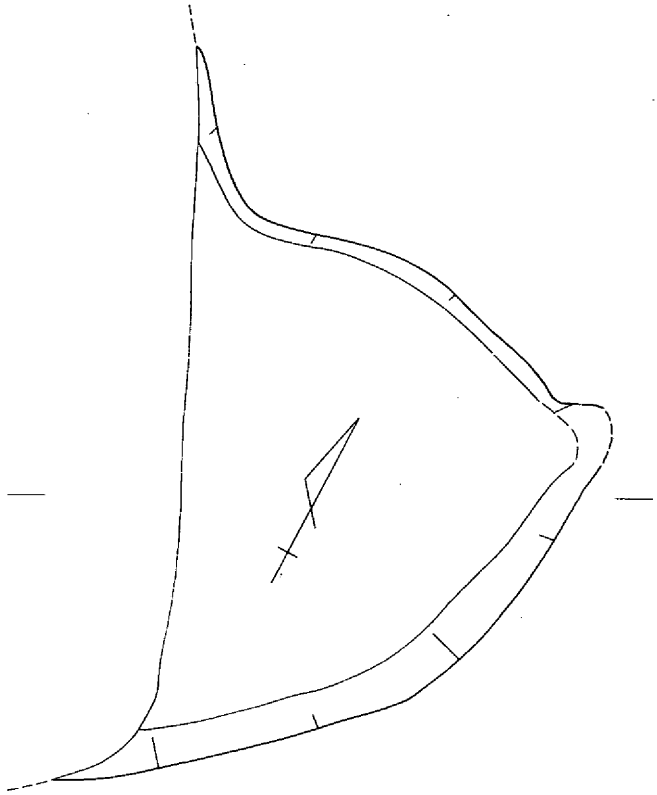
遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	土器	時期	備考
たわみ９	ＭＭ３	433	233	37	不整	○	古墳前半中葉	



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1126	土師器	甕	15.6		28.1	良好	にぶい赤褐5YR5/4	砂礫	口縁部外面指頭圧痕残る・肩部に黒斑
1127	土師器	甕	8.4		10.2	良好	にぶい橙7.5YR6/4	細砂	外面赤色顔料・丁寧なヘラミガキ
1128	土師器	鉢	15.4		4.4	良好	褐灰10YR6/1	細砂	口縁部はわずかにアクセントを持って立ち上がる
1129	土師器	鉢	14.6		5.7	良好	灰黄褐10YR6/2	砂礫	二次的に火を受ける・外面ヘラケズリ

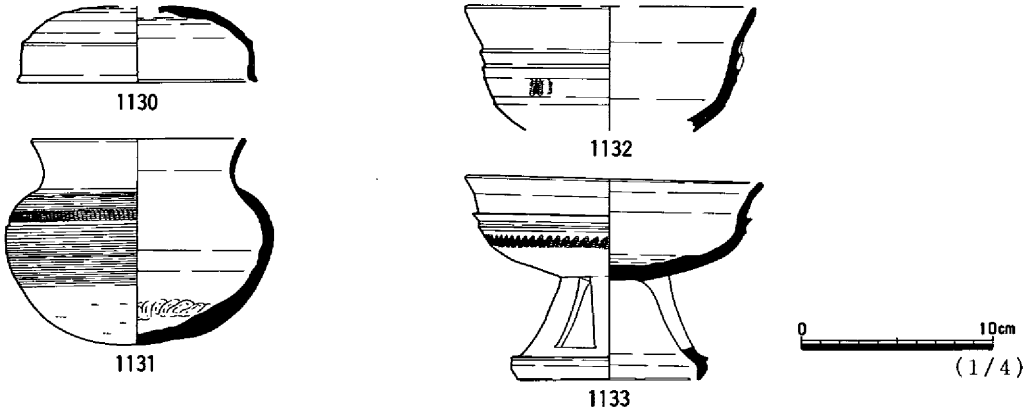
たわみ９は、ＭＭ３区で検出され、古墳時代初頭の竪穴住居30の床面下で確認された。竪穴住居30の調査終了後、床面下に土器を包含する黒褐色土が広がる状況が確認されたが、平面・断面とも不整形であり、人為的に掘削されたものかどうかは断定できず、ここでたわみとして扱った。出土遺物としては、**1126～1129**を図示した。これらの遺物で見るように、竪穴住居30と大きな時期差もなく、その下部構造等何らかの関連する遺構の可能性も残される。　（大橋）

たわみ10



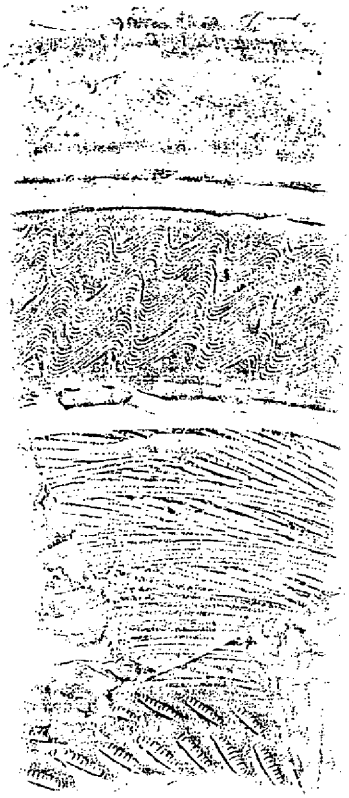
(1/40)

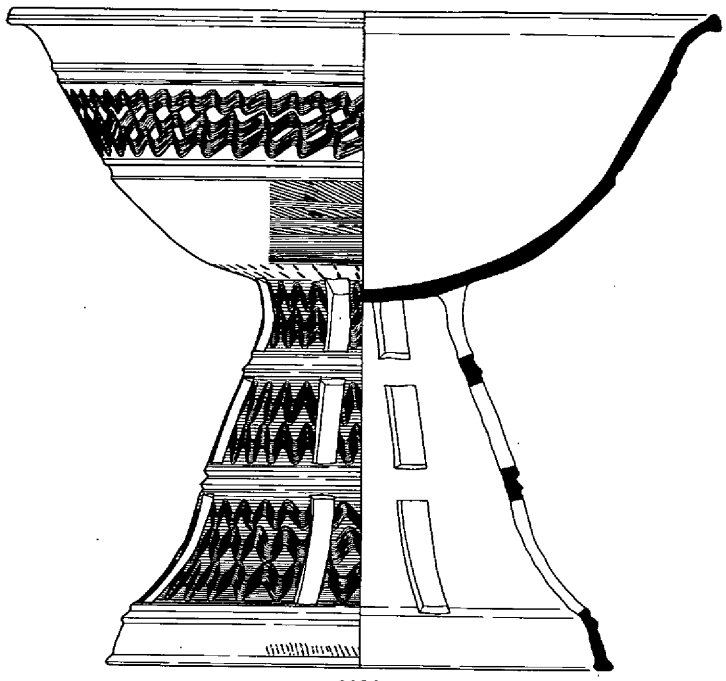
遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	土器	時期	備考
たわみ10	MM4	不明	(274)	13	不整	○	古墳後半中葉	



(1/4)

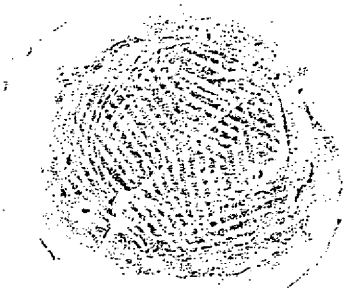
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1130	須恵器	壺	(12.6)			良好	(内・外)青灰5PB6/1 (断)暗青灰5PB3/1	微砂	後部分はつまみ出している・天井部に重ね焼痕跡有り・ロクロ右回り
1131	須恵器	短頸壺	(11.1)		10.9	良好	(内・外)暗青灰5PB4/1 (断)暗青灰5R4/1	精良	体部上半は外面カキメ・波状文・下半外面はタタキメ後ヘラケズリ後ナデ消しを行っている・底部内面に押圧痕有り
1132	須恵器	高杯？	(15.2)			良好	(内)暗青灰5PB4/1 (外)青灰5PB5/1 (断)暗紫灰5RP4/1	微砂	2条の突線の下に波状文・外面自然釉
1133	須恵器	高杯	15.5	脚9.5	10.8	良好	(内・外・断)暗青灰5PB3/1	微砂	杯部2条の突線の下に波状文・透かし孔3方向





1134

0　10cm
（1/4）



拓影1／2

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1134	須恵器	器台	(37.2)	(25.5)		良好	(内・外)暗青灰5PB4/1 (断)暗紫灰5RP4/1	細砂	受部下半外面タタキメ調整・内面に青海波アテ具痕スリ消し・脚部にもタタキメがわずかに残る・方形透かし孔6方向三段

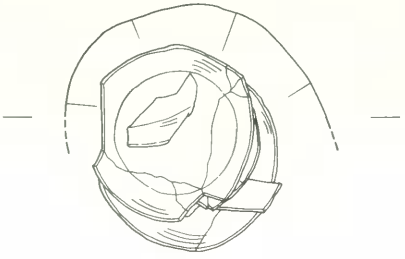
たわみ10は、ＭＭ４区に位置し、竪穴住居37と重複している。

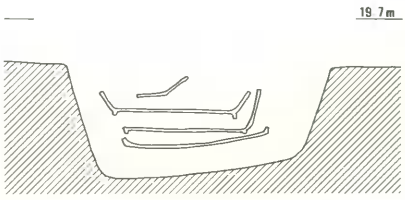
西側を竪穴住居37に切られているため規模は不明である。底面は平坦となる。

出土遺物の**1130**は、杯蓋で口縁部は直下に下がり端部をわずかに外反させる。**1131**は、頸部をゆるやかに外反させ端部は丸くなる。胴部外面には、カキメおよび波状文が認められる。胴部下半から底部にかけては、タタキの後ヘラケズリさらにナデ消している。底部内面には、押圧痕が認められる。頸部と胴部の器壁の厚さの差が顕著である。**1132・1133**は、無蓋高杯である。**1132**は、杯部の深い高杯を考えるものである。口縁部は、外反ぎみとなり端部は丸くし、また、２条の突線が認められその下に波状文を認める。把手は、剝離した部分を認める。**1134**は、体部を口縁部近くでさらに外方へ屈曲し、上下に肥厚させて端面には沈線を施す。突線の間には、波状文を施文する。台部は、「ハ」の字状に開き突線の上下を沈線状にして際立たせている。その間に波状文と方形の透かしを施す。体部と台部の接合付近で刺突文が認められる。時期はこれらの出土遺物から５世紀後半から末近くとされる。　（下澤）

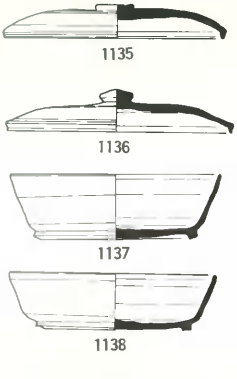
(14) その他の遺構

地鎮遺構





(1/5)

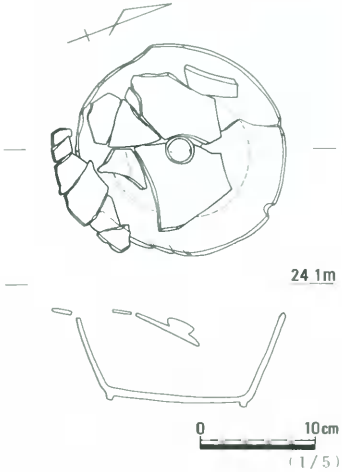


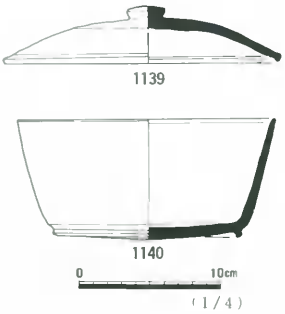
(1/4)

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1135	須恵器	杯蓋	15.2		2.4	良好	(内)灰白7.5Y8/1 (外)灰7.5Y8/1 (断)灰白N7/	微砂	端部下方へ折り曲げ天井部は内面仕上げナデ・外面ヘラケズリ後ロクロナデ・重ね焼痕跡
1136	須恵器	杯蓋	15.7		3.0	良好	(内・外・断)灰N6/	細砂	擬宝珠つまみ・端部は下方へ折り返す・天井部内面仕上げナデ
1137	須恵器	杯身	14.6	10.4	4.6	良好	(内)灰白7.5Y8/1 (外)灰N5/ (断)灰白7.5Y8/1	細砂	貼り付け高台・丁寧なロクロナデ・杯底部に仕上げナデ
1138	須恵器	杯身	14.3	9.7	4.0	良好	(内・外・断)灰白7.5Y7/1	細砂	貼り付け高台・内外面丁寧なロクロナデ・杯底部仕上げナデ

地鎮遺構は、竪穴住居24の北西端の上層で検出した。掘り下げ中に須恵器の蓋杯の完形品が出土したことで判明したものである。そのため、容器を納めた土壙の全体は不明である。しかし、半分程度は残存するためそのおおよその規模は推定できる。土壙は円形を呈するもので、検出面での直径は23cm、底面の直径は17～18cm、検出面からの深さ10.5cmを測る。深さについては、検出面において杯の上端が見えていたことから、本来はさらに深かったものと推定される。土壙の中には、底に杯蓋が裏向きに置かれその上に杯身が２点重ねて置かれるもので、３点の須恵器は上下にきれいに重ねられた状態で置かれていた。**1135・1136**は杯蓋で、天井部につまみを持つ。**1137・1138**は低い高台の付く杯身である。遺構の時代は奈良時代と考えられる。　(井上)

胞衣遺構





掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1139	須恵器	杯蓋	[illegible]		4.1	良好	内・外・断:灰白10Y7/1	砂礫	丁寧なロクロナデ・端部はわずかに下方に折り曲げる
1140	須恵器	杯身	18.1	(外)13.4 (内)12.6	8	良好	内・外・断:灰白7.5Y7/1	砂礫	底部内面不定方向のナデ　高台

胞衣遺構は、遺跡の高位部で検出された。周囲には奈良時代に比定される掘立柱建物群すなわち、掘立柱建物56・57・59があり、これらの北東方10数mに位置している。重機による表土除去作業中に発見され、上面の詳細な状況は明らかではないが、後の精査によっても掘り方は、明瞭に看取されていない。

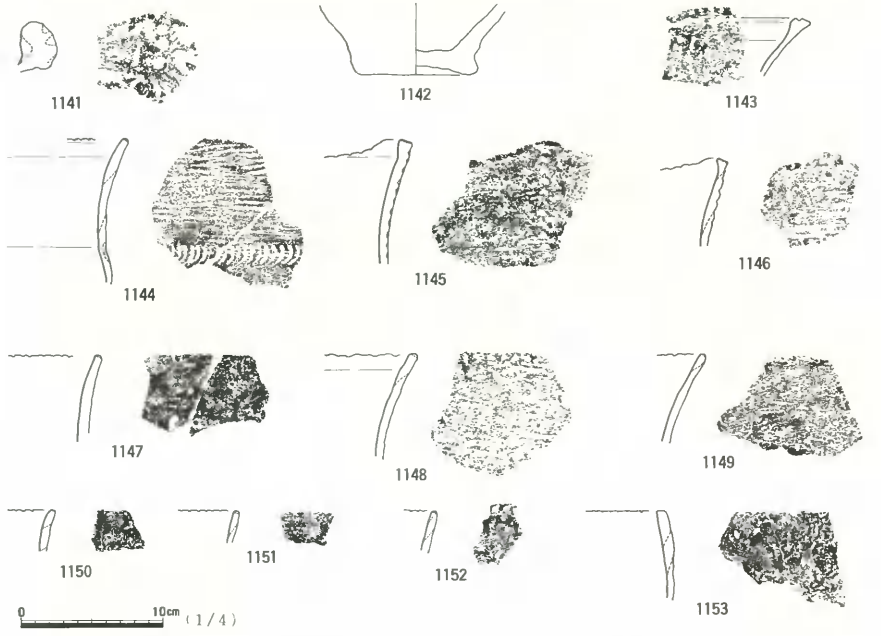
検出状態は、須恵器の高台付杯身**1140**に杯蓋**1139**がかぶさった正位状態で発見されている。内部にはまったく遺物は見当らず、流入土の脂肪酸分析も行えなかった。胞衣容器とは断定できないが、その可能性は高いとみてよいだろう。一方、地鎮遺構の可能性も検討する必要がある。

なお、遺跡の南西方約3.5kmの馬屋遺跡では、和銅開珎5枚を伴う胞衣容器が出土している。（岡田）

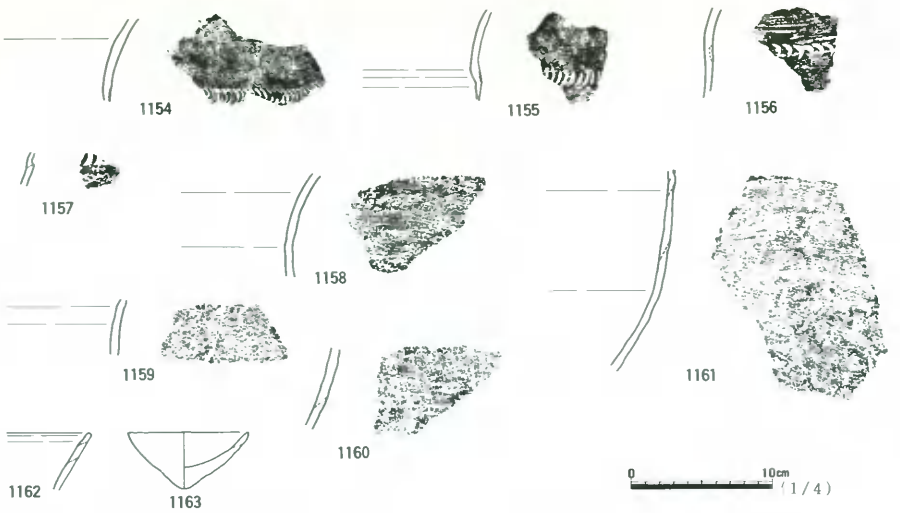
(15) 遺構に伴わない遺物

この項で遺構に伴わない遺物として取り扱うのは、遺構検出面までの掘り下げ中に出土したものと、諸状況から割愛せざるをえず前項までに取り上げて説明することのできなかった遺構から出土したものである。これらのうちから、比較的全容のわかるもの、特徴的なものに限って掲載した。これらは、前項までの補足的意味あいもあり、斎富遺跡を概観する上で欠くことのできない遺物である。

以下、できるだけ時期別、器種別に構成し説明していくこととする。　　(大橋)



掲載番号	出土調査区	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1141	MM5	縄文土器	深鉢				良好	(内・断)浅黄2.5Y7/3 (外)橙2.5YR6/6	砂礫	
1142	MM5	縄文土器	深鉢		7.6		良好	(内・断)にぶい黄橙10YR7/4 (外)にぶい黄2.5Y6/3	砂礫	
1143	KM4	縄文土器	深鉢				良好	(内)黄褐色2.5YR5/4 (外・断)黄灰色2.5Y4/1	砂礫	内面端部を肥厚させ沈線を施文・擦り消し縄文?
1144	MM3	縄文土器	深鉢				良好	(内)にぶい黄2.5Y6/3 (外)にぶい黄褐10YR5/3 断)灰5Y4/1	砂礫	屈曲部に爪形文・口唇部にキザミ・頸部にアルファ属の条痕
1145	MM4	縄文土器	深鉢				良好	(内)灰黄2.5Y6/2 (外)オリーブ黒5Y3/1 断)黄褐2.5Y5/3	砂礫	
1146	MM4	縄文土器	深鉢				良好	(内・断)黄褐2.5Y5/3 (外)にぶい黄褐10YR5/4	砂礫	山形口縁・口唇部キザミ・外面タテの刺突文、四角で2列?、　枚貝条痕・内面平滑
1147	MM4	縄文土器	深鉢				良好	(内・外)黄褐10YR6/4 断)黄灰2.5Y4/1	砂礫	
1148	MM4	縄文土器	深鉢				良好	(内)にぶい黄2.5Y6/4 (外・断)黄褐2.5Y5/3	砂礫	外面擦痕・1161と同一個体
1149	MM4	縄文土器	深鉢				良好	(内・断)にぶい黄2.5Y6/3 (外)黄褐2.5Y5/3	砂礫	口唇キザミ・外面擦痕
1150	MM4	縄文土器	深鉢				良好	(内)にぶい黄橙10YR6/4 (外・断)灰黄褐10YR5/2	微砂	口唇部キザミ・内外面平滑
1151	MM4	縄文土器	深鉢				良好	(内・外・断) にぶい黄橙10YR6/4	微砂	口唇部キザミ・内外面平滑
1152	MM4	縄文土器	深鉢				良好	(内・外・断) にぶい黄橙10YR6/4	微砂	口唇部キザミ
1153	MM4	縄文土器	深鉢				良好	(内・外・断) にぶい黄橙10YR7/3	細砂	外面擦痕・内面平滑・口唇部キザミ



掲載番号	出土調査区	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1154	MM4	縄文土器	深鉢				良好	(内)にぶい黄橙10YR7/4 (外)暗黄灰2.5Y5/2 (断)黒褐10YR3/1	砂礫	
1155	MM4	縄文土器	深鉢				良好	(内・外・断)にぶい黄橙10YR6/4	砂礫	
1156	KM6	縄文土器	深鉢				良好	(内)にぶい黄2.5Y6/3 (外)にぶい黄2.5Y6/3	砂礫	
1157	MM4	縄文土器	深鉢				良好	(内・外)橙5YR7/6 (断)にぶい黄橙10YR7/3	微砂	爪形文
1158	MM4	縄文土器	深鉢				良好	(内)暗灰黄2.5Y5/2 (外・断)にぶい黄褐10YR5/4	砂礫	外面擦痕
1159	MM4	縄文土器	深鉢				良好	(内)浅黄2.5Y7/4　(外)黄褐2.5Y5/4　(断)浅黄2.5Y7/4	砂礫	外面二枚目後擦痕
1160	MM4	縄文土器	深鉢				良好	(内・断)暗灰黄2.5Y4/2 (外)黄褐2.5Y5/3	砂礫	外面二枚目後擦痕
1161	MM4	縄文土器	深鉢				良好	(内)にぶい黄2.5Y6/4 (外・断)黄褐2.5Y5/3	砂礫	外面擦痕・1148と同一個体
1162	KM6	縄文土器	深鉢				良好	(内)灰黄2.5Y4/1 (外)灰黄2.5Y4/1	細砂	
1163	MM4	縄文土器	鉢	8.4		4.0	良好	(内)にぶい黄橙10YR6/3 (外)にぶい褐7.5YR5/4 (断)灰5Y4/1	砂礫	

縄文時代の土器

1141～1143は、縄文時代後期の土器である。**1141**は波頂部で縦に刺突がなされ、その左右の一方には方形の沈線の区画が認められるが、他は剝離が著しく不明である。**1143**は口縁部内面を肥厚させ、その部分に縄文と沈線を施している。**1142**は平底でやや上げ底状のものである。**1144～1152**は外反する口縁部を有する深鉢である。**1144～1146**は連続爪形文を施文するものである。爪形文は、幅1.5～8.5cmで**1144**が最も大きく、最も小さいのは**1145**の方形の刺突を用いている。調整は、アルカ属の擦痕のあと平滑にするもの**1145**と**1147**、アルカ属の擦痕は**1146**、他の擦痕は**1148**と**1149**などが認められる。**1153**は内傾する口縁部を有する深鉢である。外面は、口縁下を平滑に仕上げ以下は擦痕による。内面は平滑にしている。**1154～1157**は、胴部と口頸部の屈曲部に連続爪形文を施文するものである。爪形文の幅は、12～10mmを測る。**1154・1155**は口頸部外面は平滑にしている。**1162**は精製土器に属する浅鉢で、口縁部内面にヘラによる段を設けている。**1163**は小形の鉢であるが、内外面とも平滑に比較的丁寧に作られている。**1144～1135**の口縁部には、キザミメを付している。　(下澤)

弥生時代の土器

1164～1212までの49点を図示した。1164～1175が壺、1176～1187が甕、1189～1191が鉢、1192～1194・1200～1203が高杯、1195・1197～1199・1204～1210が器台である。

最も古く位置づけられるのは、1164・1165の弥生時代中期中葉段階の壺である。1164は刻目を有す貼り付け突帯を巡らす。1165は口縁部が大きく外反し、頸部下端に突帯をもつ。

1166の壺は受け部に円形の透かし穴を配している。1168は口縁部を水平に拡張し上面に凹線をもつ。長頸壺は1170・1171を図示した。備中に通有なものとはやや形態が異なり、1170は口縁部を肥厚して外面に凹線を巡らす。また、頸部内面にもヘラミガキを施している。また、1171の頸部には沈線が3条巡らされている。器高26.5cmを測る。1172は短頸の壺であり、器高20.7cmを測るがやや胴部が寸胴なものである。1173は直立した短頸を有し、頸部下にやや乱雑なクシガキの波状文が施されている。1175の二重口縁の壺には赤色顔料が見られる。

1176～1179は口縁部を斜め上下に肥厚させ外面に擬凹線を施す甕である。口径は13～15cm前後を測る。1180・1182の甕は水平方向に口縁部を拡張させている。1181・1188は「く」の字形の口縁部をもつ。1187は算盤玉形の体部をもつ。

1190の鉢は、ほぼ完形に復元できるものである。口径15.8cm、器高13.4cmを測り、体部下半外面にはヘラケズリの痕跡が残る。1191は推定口径約41cmを測る大形の高杯、もしくは鉢である。小片からの図上復元であるため、傾きにも不安が残る。

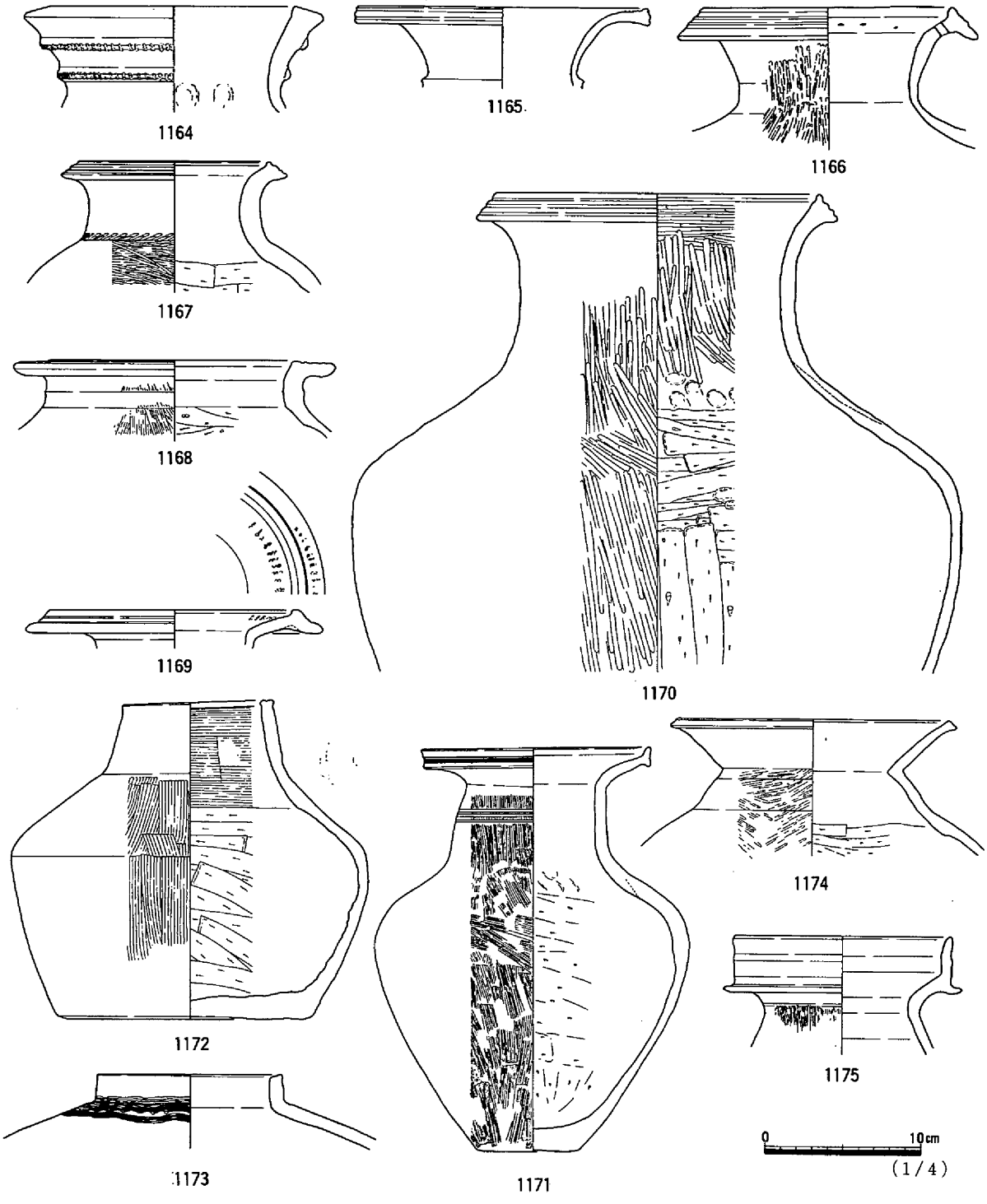
高杯は口縁部の形態差から1192～1194の3個体を図示した。1192は端部が「T」字形になるものである。1193は水平方向に肥厚し、1194はさらに拡張して上面を形成している。いずれも端部上面に凹線、擬凹線を施している。

1195は破片のため全容が判らないものの器台の口縁部と判断した。口縁部外面および端部上面に重弧の竹管文とこれを連続させるヘラガキ文が施されている。1179～1199・1205も器台の口縁部と考えた。いずれも鋸歯文を基本的な施文のモチーフとしている。1198の受部内面には半截竹管文、1199には鋸歯文が施されている。1204・1208は同一個体の可能性があるものの1204には円形、1208には方形の透かし穴の痕跡が見られたことから別個体とした。いずれも凹線文で筒部が装飾され、弥生時代中期後半の特色を持つ器台である。1207は綾杉文をもつ。1210は、乱雑な2段の波状文を脚裾部に施している。土壙2から出土した485と同一のモチーフをとるものと思われる。

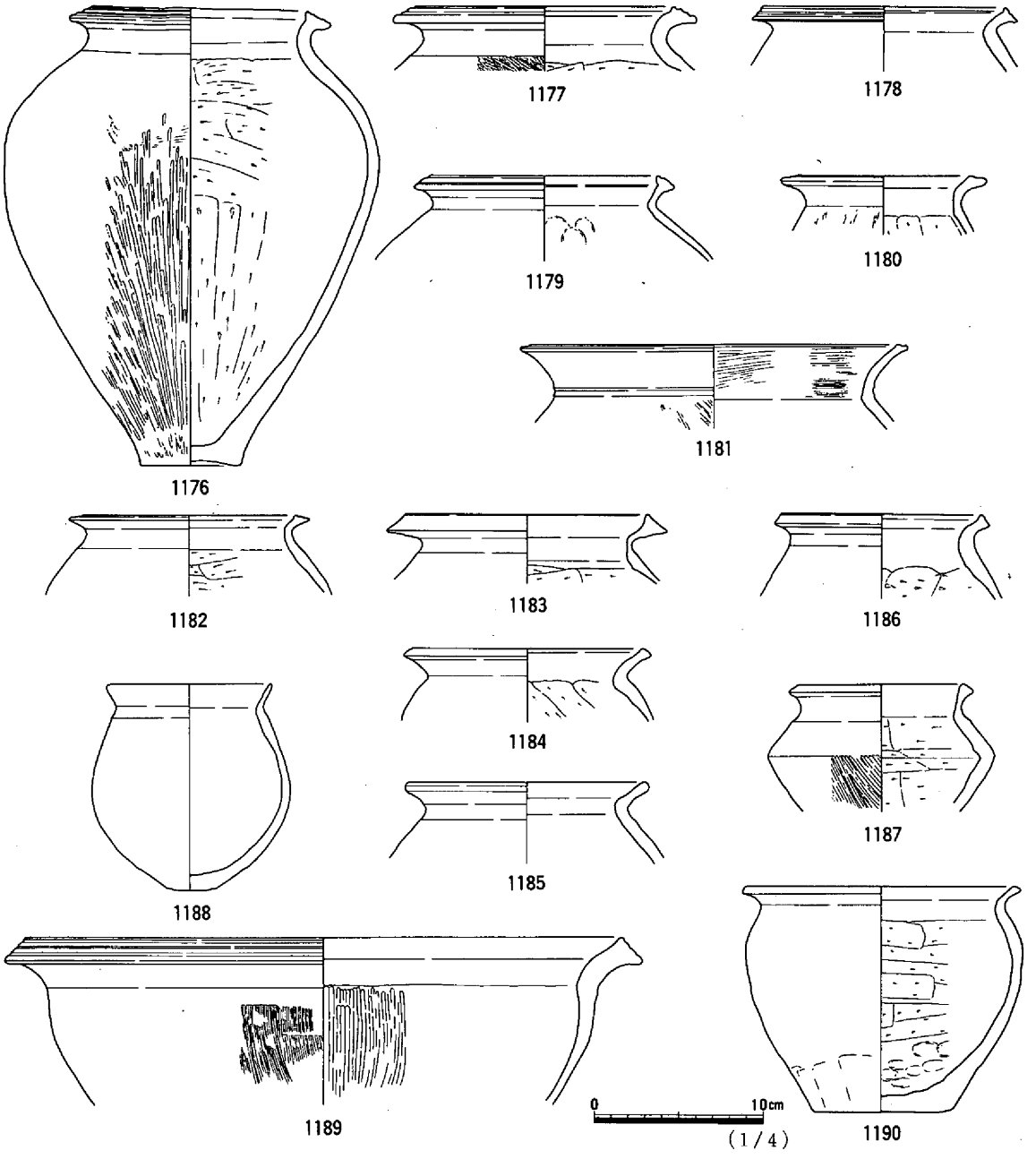
1211は把手付きの鉢である。2方向に把手がつき、体部に刺突文がつく。

1212は破片から復元したもので、口部径22cmほどを測るものと思われる。底部は平底であり、口縁部は「く」の字に外反して短くおさまる。内面には凹部が認められ、無文アテ具様の痕跡の可能性が考えられた。器壁は摩滅しており調整は不明であった。器形、タタキメ状の痕跡等、この地域の弥生土器の系譜から著しく逸脱するものであるが、胎土、焼成からこの項で扱った。朝鮮半島の影響の可能性が指摘されるが、詳細は不明と言わざるを得ない。

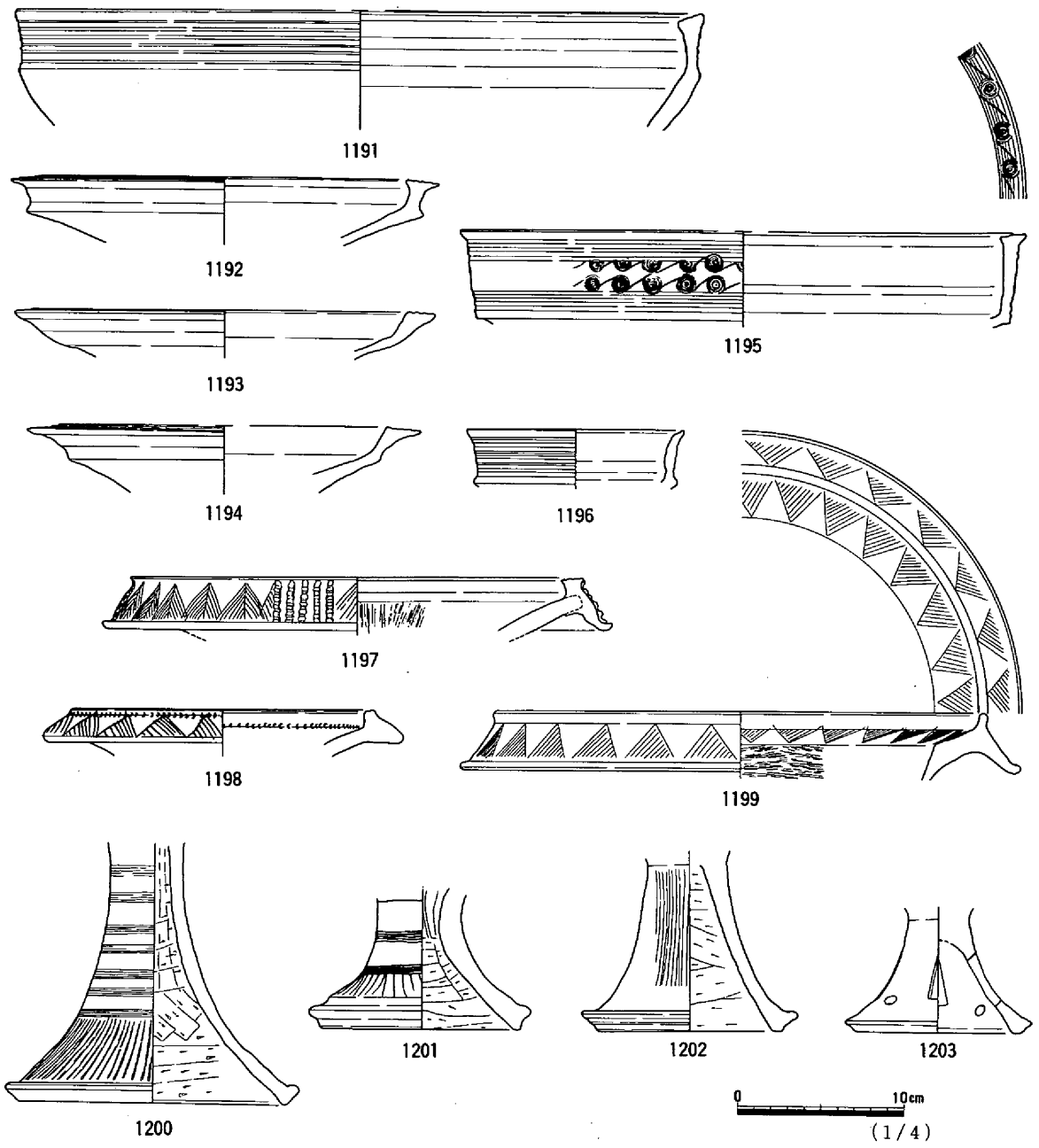
以上、概観してみたが、先に触れたように縄文時代晩期に斎富遺跡の集落形成の先鞭をみるものの、弥生時代前期～中期前半までの弥生土器は出土しておらず、この間集落の移動が想定される。中期中葉以降集落が再び占地するようであるが、遺跡全体において弥生時代中期の遺構・遺物は少なく、集落規模も小さいものと思われる。後期になると遺構・遺物量とも増加し、集落の拡大が看取され、古墳時代へと続くものと考えられる。　　(大橋)



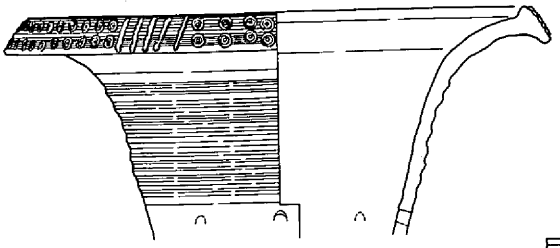
掲載番号	出土調査区	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1164	ＫＭ６	弥生土器	壺	19.4	(6.8)	6.8	良好	浅黄2.5Y7/3	砂礫	
1165	ＫＭ６	弥生土器	壺	(16.4)			良好	灰黄2.5Y6/2	微砂	口縁端に凹線・頸部に突帯を付す
1166	ＫＳ２	弥生土器	壺	(17.9)			良好	にぶい橙7.5YR7/4	砂礫	貫孔あり・口縁端面に擬凹線
1167	ＫＭ５	弥生土器	壺	(12.0)			良好	橙5YR6/6	砂礫	頸部下端に連続刺突文
1168	ＫＭ４	弥生土器	壺	(20.0)			良好	橙2.5YR6/6	砂礫	口縁部水平方向に拡張し上面に凹線・黒斑
1169	ＫＢ１	弥生土器	壺	(15.0)			良好	にぶい黄橙10YR7/3	砂礫	器壁剝離・口縁内外面に列点の刺突
1170	ＫＢ１	弥生土器	壺	(20.8)			良好	灰黄2.5Y7/2	砂礫	口縁端面に凹線３条
1171	ＭＭ６	弥生土器	壺	14.5	6.6	26.5	良好	にぶい黄橙10YR7/2	細砂	口縁部外面沈線３条・頸部沈線
1172	ＭＭ２	弥生土器	壺	8.4	16.2	20.7	良好	橙5YR6/6	細砂	胴部は肩以下が低い
1173	ＫＭ１	弥生土器	壺	11.7			良好	橙5YR6/6	砂礫	頸部下端に櫛描文
1174	ＭＭ５	弥生土器	壺	17.4			良好	橙5YR6/8	砂礫	大きく外方へ屈曲する口縁部
1175	ＭＭ２	弥生土器	壺				良好	にぶい橙7.5YR5/4	細砂	赤色顔料



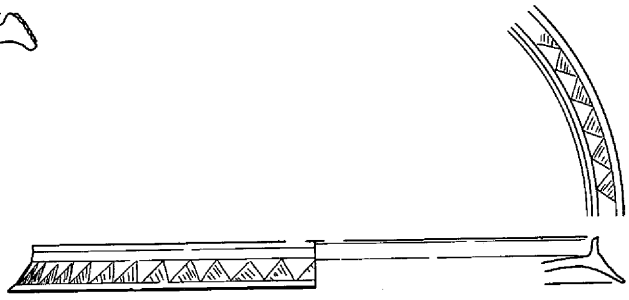
掲載番号	出土調査区	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
				口径	底径	器高				
1176	ＫＳ２	弥生土器	甕	(12.7)	(5.8)		良好	にぶい黄橙10YR7/4	細砂	口縁部外面に擬凹線
1177	ＫＭ５	弥生土器	甕	(15.3)			良好	灰白2.5Y8/2	微砂	口縁部外面凹線
1178	ＫＳ２	弥生土器	甕	(14.4)			良好	にぶい黄橙10YR7/4	砂礫	口縁部外面に凹線２条
1179	ＫＳ２	弥生土器	甕	(13.4)			良好	橙2.5YR6/8	微砂	口縁部外面に擬凹線２条・磨滅顕著
1180	ＫＭ４	弥生土器	甕	(12.2)			良好	明赤褐2.5Y5/8	細砂	口縁部水平方向につまみ出す
1181	ＫＳ２	弥生土器	甕	(26.6)			良好	にぶい橙10YR7/2	細砂	
1182	ＫＭ４	弥生土器	甕	(12.5)			良好	にぶい褐7.5YR6/3	細砂	スス付着
1183	ＫＭ５	弥生土器	甕	(14.2)			良好	にぶい黄橙10YR7/3	細砂	口縁部強いヨコナデ
1184	ＫＳ１	弥生土器	甕	(13.6)			良好	灰白10YR8/2	細砂	丁寧なヨコナデ
1185	ＫＭ４	弥生土器	甕	(14.0)			良好	にぶい褐7.5YR5/4	細砂	内外面磨滅・端部丸く納める
1186	ＫＳ２	弥生土器	甕	(11.6)			良好	赤10R5/6	微砂	
1187	ＫＭ４	弥生土器	甕	(9.7)			良好	にぶい橙5YR6/6	砂礫	
1188	ＭＭ５	弥生土器	鉢	(9.6)	2.8	12.2	良好	にぶい橙5YR7/4	精良	黒斑
1189	ＭＭ２	弥生土器	鉢	23.2			良好	橙7.5YR6/6	微砂	口縁部擬凹線・内面ヘラミガキか？
1190	ＫＭ５	弥生土器	鉢	15.8	7.25	13.4	良好	浅黄2.5Y7/3	微砂	外面磨滅・底部に黒斑



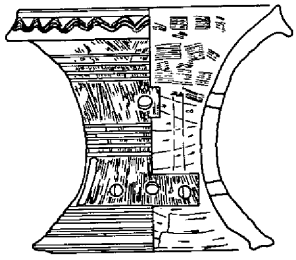
掲載番号	出土調査区	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1191	ＫＢ１	弥生土器	鉢	(40.8)			良好	灰黄2.5Y7/2	砂礫	口縁外面、端面に凹線・器面磨滅
1192	ＫＭ５	弥生土器	高杯	(21.8)			良	橙2.5YR6/8	砂礫	口唇部凹線・器壁磨滅
1193	ＫＭ４	弥生土器	高杯	22.0			良好	にぶい褐7.5YR5/4	砂礫	上端面に擬凹線３条
1194	ＫＢ１	弥生土器	高杯	(19.4)			良好	橙5YR6/6	細砂	
1195	ＫＳ２	弥生土器	器台				良好	橙7.5YR7/6	細砂	
1196	ＫＢ１	弥生土器	(口縁部)	(12.0)			良好	にぶい黄橙10YR7/3	微砂	口縁端部わずかに上方へつまみ出す
1197	ＫＭ１	弥生土器	器台	(27.0)			良好	浅黄2.5Y7/3	細砂	口縁部棒状浮文・上端面に沈線
1198	ＫＭ４	弥生土器	器台	(18.0)			良好	にぶい黄橙10YR7/3	砂礫	口縁部外面、内面に半截竹管文・外面に鋸歯文
1199	ＫＭ５	弥生土器	器台	(29.2)			良好	橙5YR6/6	細砂	口縁部外面および上面に鋸歯文
1200	ＫＭ１	弥生土器	高杯		15.8		良好	にぶい橙7.5YR7/4	砂礫	
1201	ＫＭ４	弥生土器	高杯		11.8		良好	浅黄橙10YR8/3	砂礫	櫛描条線２段・ヘラ描き文
1202	ＫＭ５	弥生土器	高杯		10.9		良好	にぶい黄橙10YR7/3	砂礫	接合部円盤充塡
1203	ＫＭ５	弥生土器	高杯		9.1		良好	にぶい黄橙10YR6/4	砂礫	円形・三角形透かし孔４方向



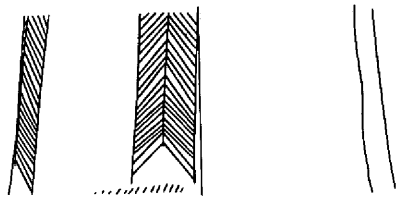
1204



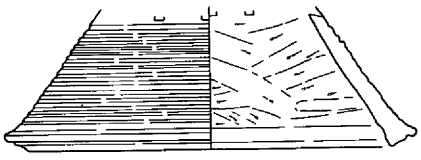
1205



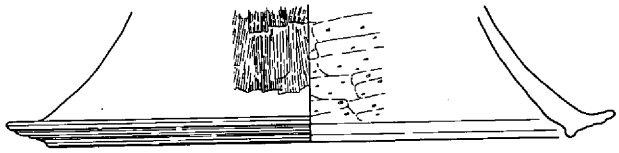
1206



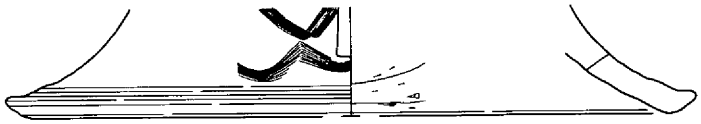
1207



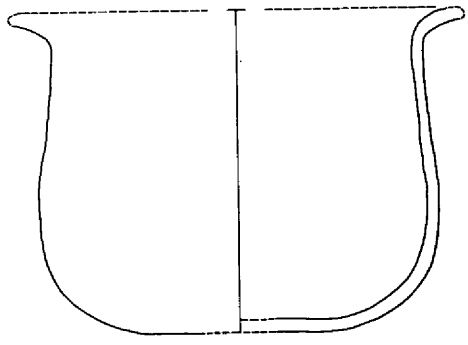
1208



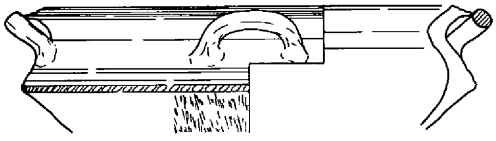
1209



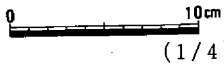
1210



1212

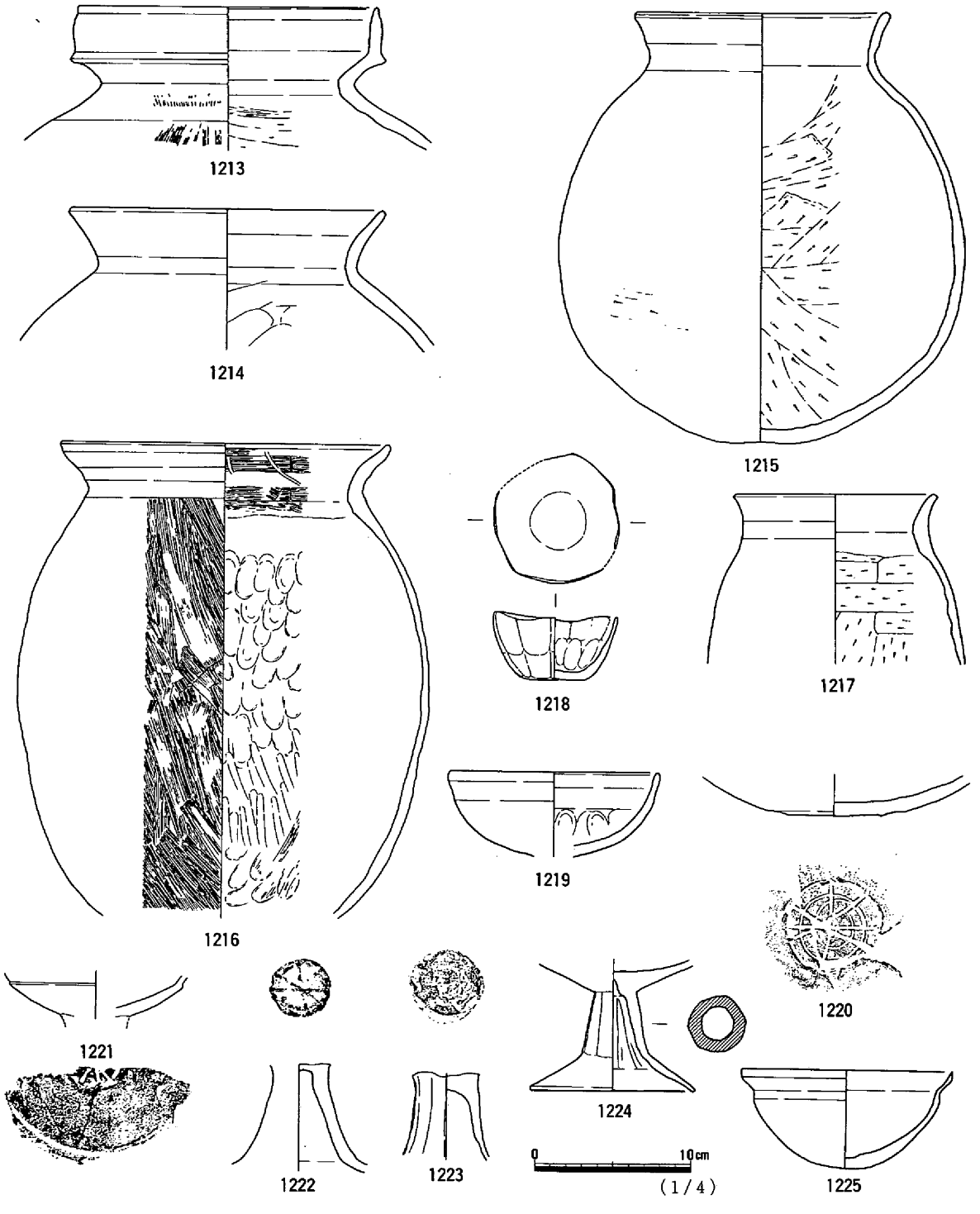


1211

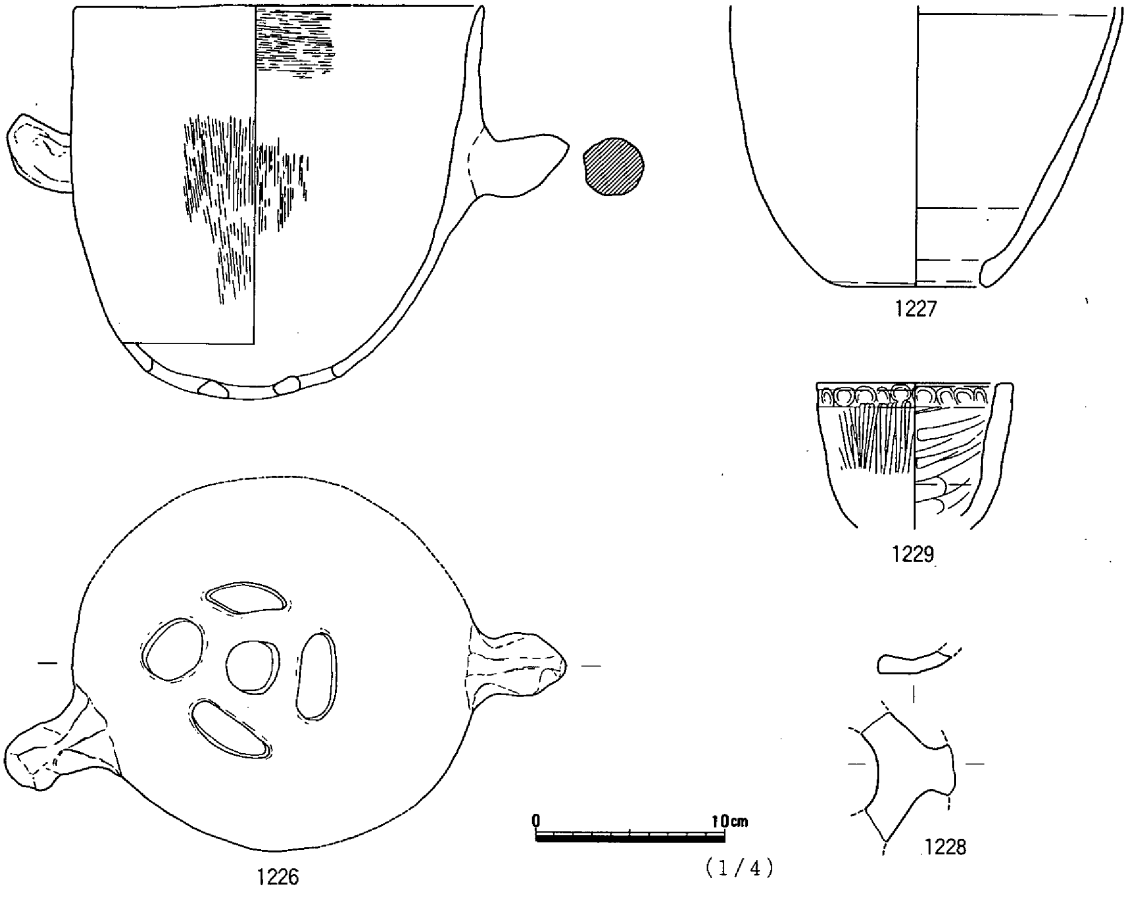


(1/4)

掲載番号	出土調査区	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1204	ＫＳ２	弥生土器	器台	(26.2)			良好	明赤褐2.5YR5/8	砂礫	重弧の刺突・棒状浮文・筒部に凹線
1205	ＫＢ１	弥生土器	器台	(29.8)			良好	橙5YR7/8		口縁端面に斜線充填の鋸歯文
1206	ＫＭ４	弥生土器	器台	14.7	(12.8)	12.9	良好	浅黄2.5Y7/3	砂礫	方形透かし孔４個・円形透かし孔２段
1207	ＫＭ６	弥生土器	器台				良好	浅黄橙7.5YR8/4	微砂	
1208	ＫＳ２	弥生土器	器台		脚(19.0)		良好	にぶい黄橙10YR7/4	細砂	透かし孔は方形？
1209	ＫＭ４	弥生土器	器台		(27.4)		良好		細砂	
1210	ＫＢ１	弥生土器	器台				良好			櫛描波状文
1211	ＫＭ５	弥生土器	把手付鉢	(21.7)			良好	淡黄2.5Y8/3	微砂	把手一方向のみ残存・胴屈曲部に刺突文と２条の沈線
1212	ＫＳ２	？	鉢	(22.0)			良好	(内)にぶい橙5YR6/4 (外)にぶい黄橙10YR7/2	砂礫	内面にアテ具のくぼみ状のもの認められる・磨滅顕著



掲載番号	出土調査区	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1213	ＭＭ４	土師器	壺	19.0			良好	橙7.5YR7/6	砂礫	二重口縁部の外面に強いヨコナデ
1214	ＫＭ４	土師器	甕	(19.8)			良好	にぶい橙7.5YR6/4	微砂	外面磨滅
1215	ＫＭ１	土師器	壺	(16.0)			良好	浅黄橙7.5YR8/4	細砂	外面磨滅・スス付着
1216	ＫＳ２	土師器	甕	20.8		30.6	良好	浅黄橙7.5YR8/4	微砂	内面に押圧痕を顕著に残す
1217	ＫＭ４	土師器	甕	(12.6)			良好	橙7.5YR7/6	微砂	器壁磨滅・黒斑
1218	ＫＭ５	土師器	鉢	7.8	3.8	4.3	良好	にぶい赤褐5YR5/4	細砂	製塩土器
1219	ＫＭ４	土師器	杯？	(13.3)			良好	橙5YR7/6	微砂	外面磨滅
1220	ＫＭ６	土師器	高杯				良好	にぶい橙2.5YR6/4	精良	接合は須恵器技法
1221	ＫＭ６	土師器	高杯				良好	明褐灰7.5YR7/1	粗砂	接合は須恵器技法
1222	ＫＭ６	土師器	高杯				良好	にぶい黄橙10YR7/2	細砂	接合は須恵器技法
1223	ＫＭ６	土師器	高杯			5.6	良好	にぶい黄10YR7/2	微砂	面取り状に稜・接合は須恵器技法
1224	ＫＭ４	土師器	高杯		脚10.4		良好	にぶい褐7.5YR5/4	微砂	脚柱部縦方向に稜線が入る
1225	ＫＭ６	土師器	鉢	13.6	4.0	6.3	良好	にぶい橙7.5YR7/3	微砂	黒斑



掲載番号	出土調査区	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
				口径	底径	器高				
1226	KM6	土師器	甑	21.6		20.9	良好	橙7.5YR6/6	砂礫	孔は楕円状に5か所
1227	KM4	土師器	甑		7.5		良好	橙7.5YR7/6	砂礫	器壁磨滅
1228	KB1	土師器	甑(底)				良好	橙7.5YR7/6	粗砂	
1229	KM4	土師器?	鉢	(10.2)			良好	にぶい黄橙10YR6/3	砂礫	口縁部ユビオサエ

古墳時代の土器

土師器　古墳時代の土師器として1213～1229を図示した。1213は二重口縁の壺である。1214～1217は「く」の字口縁をもつ甕である。1215が球形状の体部をもつのに対し1216は長胴の体部である。また、1216の内面は工具によるカキトリ状の痕跡をみる。

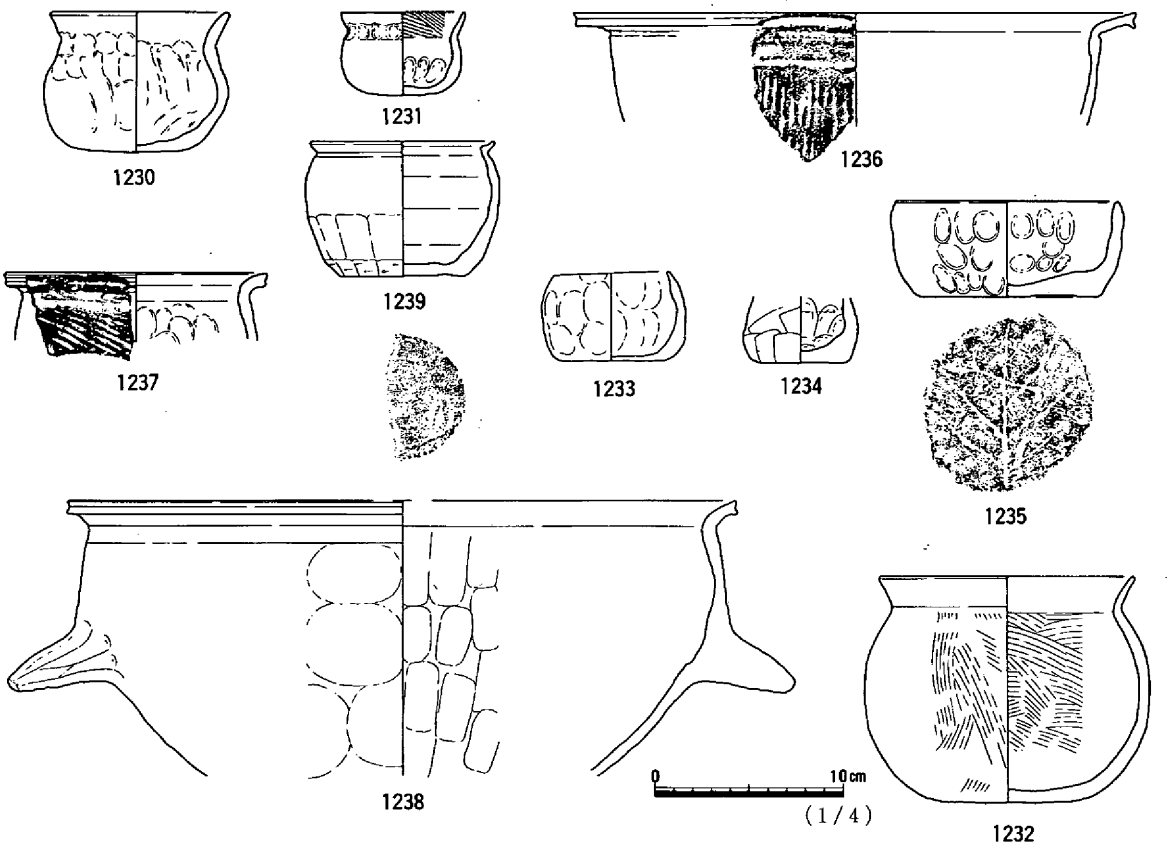
1218は製塩土器である。図示したのはこの1個体であるが、このほかにも細片は出土しているものの図示できなかった。

1220～1224は高杯である。このうち1220～1223は杯部と脚柱部の接合面に放射状の切り込みが明瞭に認められ、須恵器製作技法の影響が色濃い。また、1224の高杯の脚柱部は6面の面取りがある。1225は鉢であり、有段の口縁部をもつ。

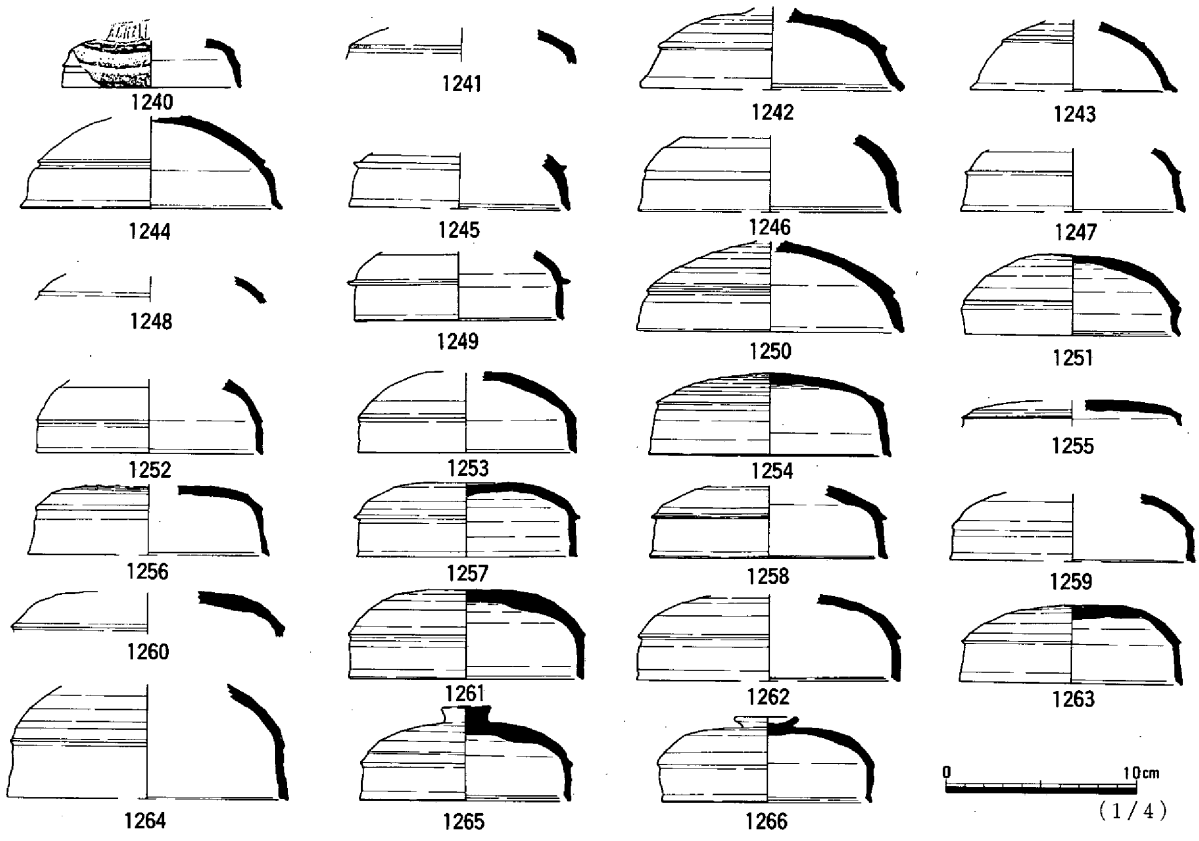
1226・1227・1228は甑である。1226は底部に5か所の孔がある。1229は、在地の系譜からは追えないものである。器壁が厚く深い鉢状の体部をもつ。破片のため不明であったが、把手がつく可能性は残される。　(大橋)

平底系の土器　1230～1235は平底のものであり、朝鮮半島の影響が色濃いものである。1230・1231・1232は「く」の字状に屈曲する口縁部をもつ鉢であるが平底であり、在地の土師器の系譜からは追いがたいものである。また、小形の杯状の体部をもつ1233・1234の器壁には平坦面が観察され無文タタキメと思われた。1235は粗雑な造りであり、底面には木の葉状の圧痕がある。

1236～1239は軟質系土器である。1236・1237は口縁端面に凹部を作り出しており外面はタタキメで調整されている。1238の口縁端部の成形も1236と同様なものであり、体部に下方方向に把手がつく。体部の調整は器壁が摩滅しているものの平坦面が観察され、無文のタタキの可能性が高い。1239は体部外面下半がヘラケズリされ、底部には井桁状の圧痕の痕跡がかすかに観察された。　（大橋）



掲載番号	出土調査区	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1230	MM2	軟質系土器	平底鉢	(9.25)	6.2	7.5	良好	橙5YR7/6	細砂	外面タタキ
1231	MBOX3	軟質系土器	平底鉢	6.5		4.5	良好	(内)灰白2.5Y7/1 (外・断)橙5YR6/6	砂礫	内面ナデ上げ
1232	KM2	軟質系土器?	甕	(13.5)		12.1	良好	にぶい褐7.5YR5/3	微砂	やや平底ぎみ・二次的に火を受ける
1233	KS1	軟質系土器	平底杯	6.0	5.6	4.7	良好	(内)黄灰2.5Y6/1 (外)橙7.5YR6/6	砂礫	外面に平坦なタタキ面が見られる 手づくね
1234	MM4	軟質系土器	平底鉢?		4.5		良好	(内・外・断)橙7.5YR7/6	精良	手づくね
1235	KM4	軟質系土器	平底杯	11.8	9.4	5.15	良好	にぶい赤褐5YR5/4	砂礫	器壁磨滅・底部に木葉文
1236	KM6	軟質系土器	甕	29.8			良好	(外)浅黄橙10YR8/3	細砂	外面タテのタタキ目・内面アテ具痕・口縁端面に凹部
1237	MBOX3	軟質系土器	甕	13.3			良好	(内・外・断)橙7.5Y6/6	精良	外面平行タタキ
1238	KM4	軟質系土器	把手付鉢	(35.2)			良好	(内・外・断)橙5YR6/6	精良	体部外面に平坦面、内面にもアテ具状の凹面が認められ、タタキメ調整か?
1239	KM6	軟質系土器	鉢	9.6	6.6	7.3	良好	(内)灰黄褐10YR5/2 (外)にぶい黄橙10YR6/3	細砂	外面胴下半静止ヘラケズリ



掲載番号	出土調査区	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1240	ＭＭ２	陶質系土器	蓋	(9.5)			良好	(内・断)灰N5/　(外)灰5Y4/1	精良	天井部に連続刺突文
1241	ＫＢ１	陶質系土器	蓋				良好	(内・外・断)褐灰7.5YR6/1	細砂	屈曲部にキザミ
1242	ＫＭ６	陶質系土器	蓋	(13.6)			良好	(内・外・断)灰N6/	細砂	ロクロ右回り・高杯の可能性あり
1243	ＫＭ６	陶質系土器	蓋	(9.5)			良好	(内・外)灰N5/ (断)暗オリーブ5Y4/4	微砂	突線１条・高杯の可能性あり
1244	ＫＭ６	陶質系土器	蓋	(13.6)			良好	(内・外)灰N5/ (断)にぶい赤褐2.5YR5/3	精良	天井部につまみ痕跡
1245	ＫＢ１	須恵器	蓋	(11.0)			良好	(内・外・断)暗青灰5B4/1	微砂	
1246	ＫＢ１	須恵器	蓋	(13.5)			良好	(内・外・断)暗赤灰7.5R7/1	精良	ロクロ左回り
1247	ＫＢ１	須恵器	蓋	(11.5)			良好	(内・外・断)灰N4/	微砂	
1248	ＫＢ１	須恵器	蓋				良好	(内・外・断)暗赤灰10R4/1	精良	外面に自然釉
1249	ＫＭ４	須恵器	蓋	11.2			良好	(内・外)灰白N7/1 (断)灰N6/1	微砂	ロクロ右回り・稜は水平方向につまみ出されている
1250	ＫＭ６	須恵器	蓋	14.0			良好	(内)灰10Y5/1　(外)灰N4/ (断)灰赤10R5/2	精良	内面に自然釉・つまみ有りか？・ロクロ右回り
1251	ＫＭ５	須恵器	蓋	11.2		4.3	良好	(内・外)青灰5PB5/1 (断)灰赤2.5YR4/2	精良	
1252	ＫＭ５	須恵器	蓋	12.0			良好	(内・断)灰N7/　(外)灰5Y6/1	細砂	
1253	ＫＭ６	須恵器	蓋	11.8			良好	(内・外・断)灰N4/	微砂	外面に自然釉
1254	ＫＭ３	須恵器	蓋	(12.7)			良好	(内・断)赤褐10R5/3 (外)暗青灰5PB4/1	微砂	稜の際までヘラケズリ
1255	ＫＭ１	須恵器	蓋				良好	(内・外)暗青灰5PB4/1 (断)灰赤7.5R4/2	精良	天井が低い
1256	ＫＢ１	須恵器	蓋	(12.6)			良好	褐灰7.5YR5/1	精良	ロクロ左回り
1257	ＫＭ５	須恵器	蓋	11.8		3.9	良好	(内・外)灰N5/ (断)灰赤2.5YR5/2	細砂	焼成時に表面に砂粒が付着している
1258	ＫＭ１	須恵器	蓋	(12.4)			良好	(内・外)暗青灰5PB4/1 (断)赤灰10R4/3	微砂	ロクロ左回り
1259	ＫＢ１	須恵器	蓋	(12.8)			良好	(内・外・断)灰白N7/	微砂	ロクロ左回り
1260	ＫＢ１	須恵器	蓋				良好	(内・外・断)灰N4/	精良	外面に自然釉
1261	ＫＭ４	須恵器	蓋	(12.4)		4.7	良好	(内・断)にぶい赤褐2.5YR4/3 (外)灰7.5Y4/1	砂礫	ロクロ右回り・端部面を持つ
1262	ＫＢ１	須恵器	蓋	(13.8)			良好	(内・外・断)褐灰7.5YR5/1	微砂	ロクロ左回り
1263	ＫＭ４	須恵器	蓋	11.7		4.2	良好	(内・外・断)灰N6/1	微砂	ロクロ左回り・天井部にヘラ記号？
1264	ＫＢ１	須恵器	蓋	(14.8)			良好	(内・外・断)青灰5B5/1	微砂	ロクロ左回り
1265	ＫＭ４	須恵器	蓋	11.5		5.1	良好	(内)明青灰5PB7/1 (外)暗オリーブ灰2.5GY4/1 (断)紫灰5P5/1	微砂	つまみ・ロクロ右回り・天井部に重ね焼痕跡
1266	ＫＭ５	須恵器	蓋	11.0		4.6	良好	(内・外)青灰5PB6/1 (断)灰赤2.5YR5/2	精良	輪台状のつまみ

杯蓋・蓋　1240～1266として図示したのは、須恵器あるいは陶質系土器の杯蓋・蓋である。

1240は、天井部に突線を設け、連続刺突文が施されている。1241は稜部にキザミメが認められ、低い天井部を有すと考えられる。1242は口縁部が大きく外反し端部に段をもつ。つまみが欠損しており高杯の蓋とも思われる。1243・1244は丸く高い天井部をもつ。高杯の杯部の可能性もあるが、ここでは蓋とした。これらは胎土的にみて他のものと大きく異ならないことから陶質土器そのものとは言いがたいものの強い影響下にあるものと判断している。

1245・1249・1257の稜部は水平方向に大きく引き出されている。また、1255は天井部が低く、水平状を呈する。口径が13cmを超えるものは前述した1242・1244と、1250・1262・1264がある。1264については、天井部も高い。

1265・1266は有蓋高杯の蓋である。1266のつまみは中央部がくぼみ、小さな輪台状の形態をとる。

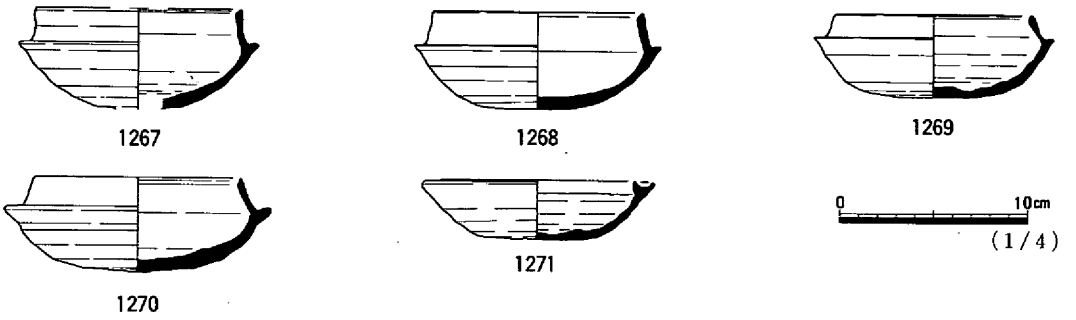
図示した中で断面の色調が赤褐色系を示すのは1244・1246・1248・1250・1251・1254・1255・1257・1258・1261・1265・1266である。これらは胎土も精良なもので砂粒はほとんど含まず、堅緻な焼成である。

以上、これら図示したものは5世紀後半から6世紀の年代のものと思われる。特に5世紀後半から6世紀前葉のものは、斎富遺跡でも西半部(亀田調査区)に多く認められ、集落の展開を考える上での指針となった。　(大橋)

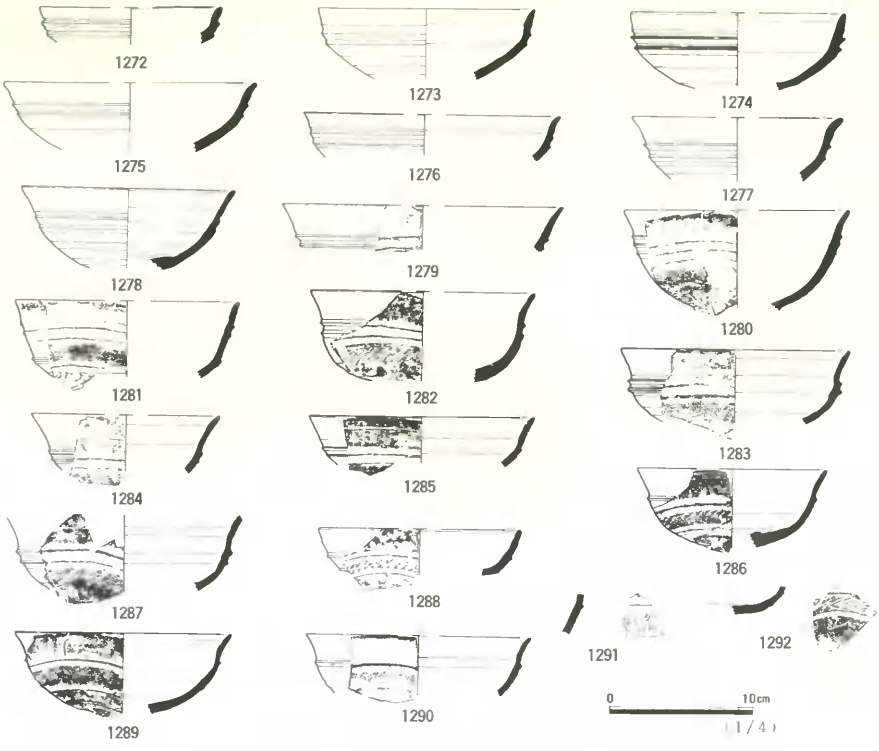
杯身　須恵器の杯身として1267～1271を図示した。杯蓋・蓋と比較して、全体の器形がつかめるのは少ないが、個体数としては同等に出土している。

1267は、深い体部をもち口縁端部に比較的明瞭な段を作り出している。1268もやや深い体部をもち1270と同様、6世紀前半の年代が考えられる。1269は6世紀中葉、1271は7世紀前半の時期である。

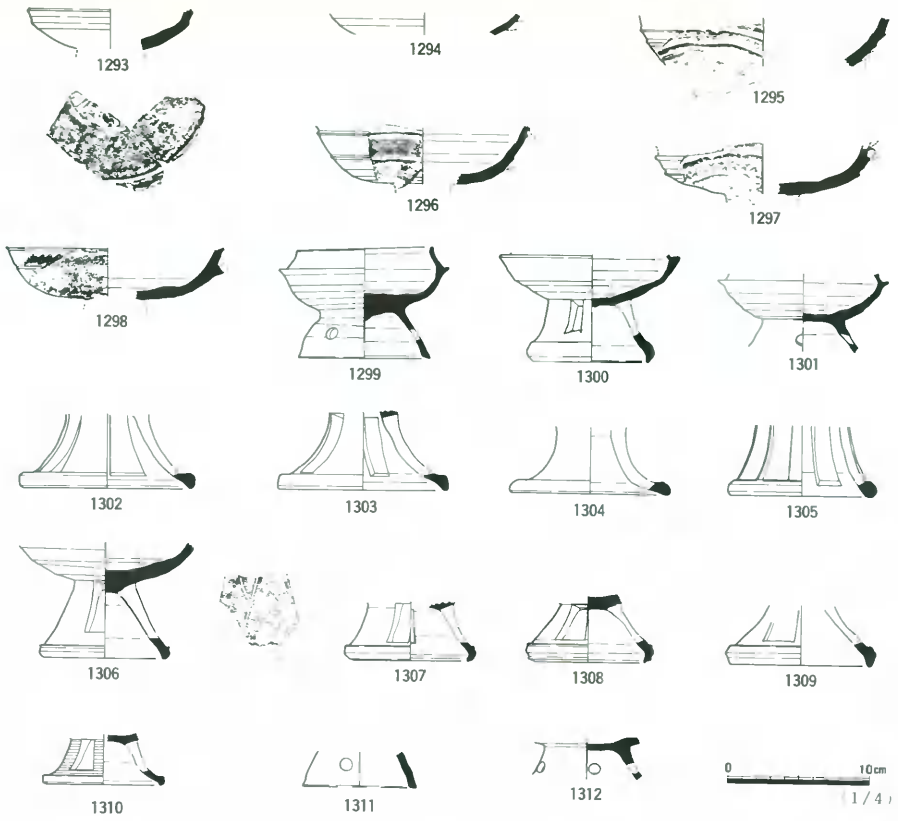
比較的新しい1269・1271に代表される時期のものは多くが斎富遺跡の東半部で出土している。　(大橋)



掲載番号	出土調査区	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1267	KM4	須恵器	杯身	(10.8)			良好	(内・外・断)灰N6/	砂礫	ロクロ左回り・端部面を持つ
1268	KB1	須恵器	杯身	(11.0)			良好	(内・外・断)灰N6/	微砂	ロクロ右回り
1269	MBOX2	須恵器	杯身	(10.4)			良好	(内・外)暗青灰5PB3/1 (断)暗紫灰5RP3/1	微砂	立ち上がり部ハリツケ・ロクロ右回り
1270	KM4	須恵器	杯身	(10.8)			良好	(内・外・断)灰N6/	砂礫	ロクロ右回り・内面仕上げナデ
1271	MM1	須恵器	杯身	10.1		3.2	良好	(内・外)灰N6/1 (断)暗オリーブ5GY4/1	微砂	低い立ち上がり部オリコミ・ロクロ右回り・完形品

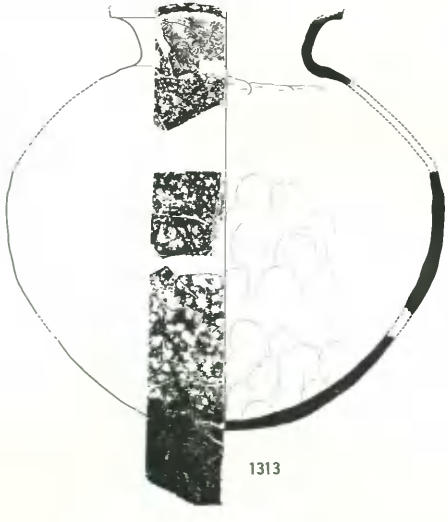


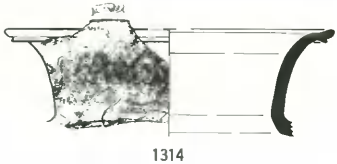
掲載番号	出土調査区	種別	器種	大きさ(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1272	ＫＢ１	須恵器	高杯				良好	(内・外・断)暗青灰5B3/1	精良	内面自然釉
1273	ＫＭ３	陶質系土器	高杯	(15.4)			良好	(内)灰N6/　(外)灰 5Y6/1 断)灰赤2.5YR5/2	精良	突線２条
1274	ＫＭ５	陶質系土器	高杯	(14.8)			良好	内・外)灰N6/ 断)赤褐10R5/3	精良	突線２条
1275	ＫＢ１	須恵器	高杯				良好	内・外・断)暗青灰5PB3/1	細砂	ロクロ右回り
1276	ＫＭ５	須恵器	高杯	(17.2)			良好	内)灰N5/　(外)灰N4/ 断)にぶい赤褐5YR4/3	精良	突線２条
1277	ＫＭ６	須恵器	高杯				良好	(内・外・断)灰N6/	精良	突線２条・ロクロ右回り
1278	ＫＭ５	陶質系土器	高杯	(15.4)			良好	内・外・断)灰N6/1	精良	
1279	ＫＢ１	須恵器	高杯				良好	内・外・断)灰白5Y7/1	精良	線刻有(ロクロ右回り)
1280	ＫＭ６	須恵器	高杯				良好	内・外・断)灰N6/	微砂	突線２条、波状文・ロクロ右回り
1281	ＫＭ６	陶質系土器	高杯				良好	内・外・断)暗青灰5PB3/1		突線２条付近に一段、波状文を施文
1282	ＫＢ１	須恵器	高杯				良好	内・外・断)灰N6/	微砂	杯底部に波状文・ロクロ右回り
1283	ＫＭ１	須恵器	高杯	16.0		13.3	良好	内)灰N4/ 断)褐灰5YR4/1	細砂	突線２条・波状文
1284	ＫＭ５	須恵器	高杯	(13.4)			良好	内・灰N7/　(外)灰N6/ 断)灰白5Y7/1	精良	突線２条・波状文
1285	ＫＭ２	須恵器	高杯	(15.9)			良好	内・断)灰N7/1 外)灰5Y4/1	精良	突線２条・波状文
1286	MBOX３	須恵器	高杯	(13.3)			良好	内)灰N4/　外)暗緑灰10GY4/1 (断)灰N6/	精良	波状文・内面自然釉
1287	ＫＭ２	須恵器	高杯				良好	(内・外)赤灰2.5YR5/1 (断)黄灰	精良	
1288	ＫＢ１	須恵器	高杯				良好	(内・外・断)暗灰N3/	精良	波状文・静止ヘラ文
1289	MBOX３	須恵器	高杯	(15.3)			良好	(内・外)灰N5/ 断)灰赤2.5YR4/2	微砂	細い波状文
1290	ＫＢ１	須恵器	高杯				良好	(内・外・断)青灰5B6/1	微砂	波状文を施文・ロクロ右回り
1291	ＭＭ４	陶質系土器	高杯				良好	(内・外・断)青灰5PB5/1	微砂	
1292	ＭＭ１	須恵器	高杯				良好	内)灰N6/　(外・断)灰白5Y7/1	精良	波状文



掲載番号	出土調査区	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1293	KM2	須恵器	高杯				良好	(内・外)灰N6 (断)灰N6	精良	
1294	KB1	須恵器	把手付高杯				良好	(内・外・断)灰N4/	精良	ロクロ左回り
1295	KS1	須恵器	把手付高杯				良好	(外)暗青灰5B3/1	精良	ヘラケズリ
1296	KB1	須恵器	把手付高杯				良好	(内・外・断)灰N6/	精良	波状文施文
1297	KB1	須恵器	把手付高杯				良好	(内・外・断)灰N5/	精良	波状文を施文
1298	KM6	須恵器	把手付高杯				良好	(内)灰N6/ (外・断)灰N5/	細砂	
1299	KM3	須恵器	有蓋高杯	9.4	9.1	7.8	良好	(内・外)灰N4/1 (断)灰赤7.5R6/2	細砂	円形透かし孔3か所
1300	KM6	須恵器	有蓋高杯		8.1		良好	(内・断)灰N6/ (外)灰N5/	精良	透かし方形3か所・ロクロ左回り
1301	KM5	須恵器	有蓋高杯				良好	(内・断)灰5Y6/1 (外)灰5Y5/1	細砂	円孔3か所
1302	KM5	陶質系土器	高杯		11.7		良好	(内・断)灰白N7 (外)灰7.5Y5/1	微砂	
1303	KM5	陶質系土器	高杯		(11.6)		良好	(内・外・断)青灰5PB5/1	微砂	
1304	KM5	陶質系土器	高杯		11.1		良好	(内・外)暗灰N3/ (断)灰白N7/	精良	外面自然釉
1305	KM6	陶質系土器	高杯				良好	(外)暗緑灰5G3/1	精良	透かし孔6か所
1306	KM6	須恵器	高杯		(8.3)		良好	(内・外・断)灰N5/	精良	杯内面、脚外面に自然釉・ヘラ記号・ロクロ左回り
1307	KM5	須恵器	高杯		7.9		良好	(内・外・断)灰5/	砂礫	方形透かし孔3か所
1308	KM5	須恵器	高杯		7.8		良好	(内)灰N4 (外)灰N6/ (断)灰白N8/	細砂	透かし孔3か所
1309	KB1	須恵器	高杯		9.8		良好	(内・外・断)灰5Y5/1	微砂	透かし孔3か所で長方形
1310	KM5	須恵器	高杯		8.1		良好	(内)青灰5PB5/1 (外)暗青灰5PB4/ (断)灰褐7.5YR4/2	微砂	脚部外面にカキメ
1311	KB1	須恵器	(脚部)				良好	(内・外・断)灰N5/	微砂	円形透かし孔
1312	KM5	須恵器	(脚部)				良好	(内・外・断)青灰5PB5/1	微砂	円形透かし孔3か所

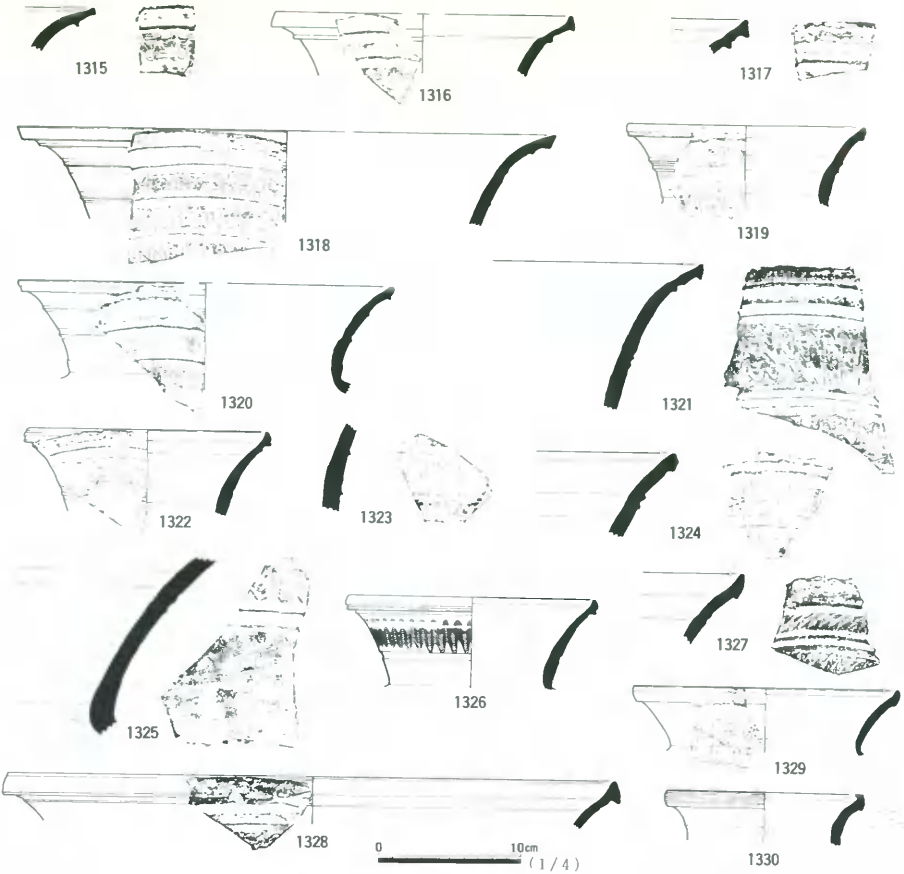
高杯　1272～1312は高杯である。1272は2条の突線をもち、短く外へ広がる口縁を形成する。器壁は厚く、口縁端は細くならない。1273は2条の突線を有するが、その上下を強くナデることにより際立たせている。口縁部内面に稜をもち、口縁端に向かって細くなる。1274も2条の突線を有するもので、1272と同様に突線はシャープである。1275～1277は2条の突線をもつもので、口縁端部が強く外反する傾向にある。1278は突線のシャープさがなくなる。1279は、直口ぎみに広がる口縁部を有する。1280は3条の突線をもち、杯部が深くなり突線下に波状文を施文する。1281は外に広がって直立する口縁で、2条と1条の突線を付す。突線間には、波状文を施文する。1282～1285・1287は杯部が深めのもので、2条の突線を有し、その下に波状文を施文する。1282は、他が突線から底部にかけてすぼまっていくのに対し下膨れ状となる。1286は、稜線下に波状文を用いてその下に突線ではなく凹部として区画している。1288と1289は、突線間に波状文を施文している。1288は杯部が浅く底部は平底状となる。1289は、口縁部に移行する稜は明瞭であるが文様下端は突線というより低い稜という感を呈する。1291は、稜というより突線か、この下に左右に斜行するヘラガキ沈線を施す。1292は文様を画する下端に凹線を用いるのは1286と同じであるが、その間の文様は斜めの連続刺突文である。1293～1298は、底部近くのもので1293の他は把手が付されている。1293は、突線下を幅広のヨコナデがみられる。1295は、波状文下の区画は2条の突線を用いており、調整は静止ヘラケズリが認められる。1299は、脚部が「ハ」の字状に外反し、端部に変化のないものである。1302～1305は、「ハ」の字状に開く脚部端がさらに屈曲するものであり、その端部は肥厚させる。透かし孔は、1302が5ないし6個、1303は4個、1305は6個に復元できる。1306～1309は、脚部端が屈曲して凹凸の段を有するものである。　（下澤）


1313

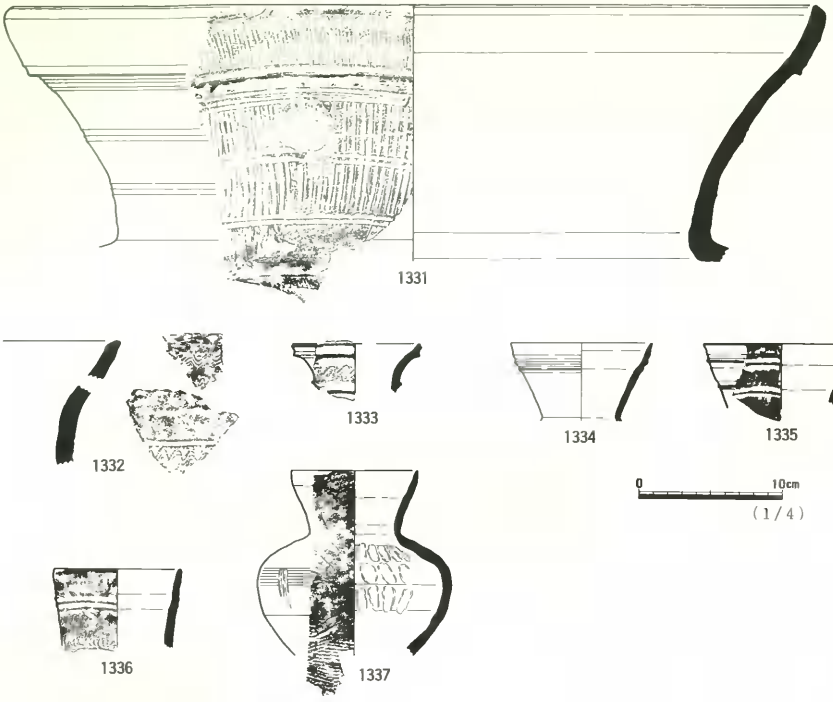

1314

(1/4)

掲載番号	出土調査区	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1313	KM6	須恵器	壺				やや不良	(外)褐灰5Y R6/1	細砂	土師器の器形を呈するが一部調整法は須恵器的
1314	KB1	須恵器	甕				良好	(内)暗緑灰7.5GY4/1 (外)暗緑灰10GY3/1 断面:N5/1	精良	カキメの後から波状文



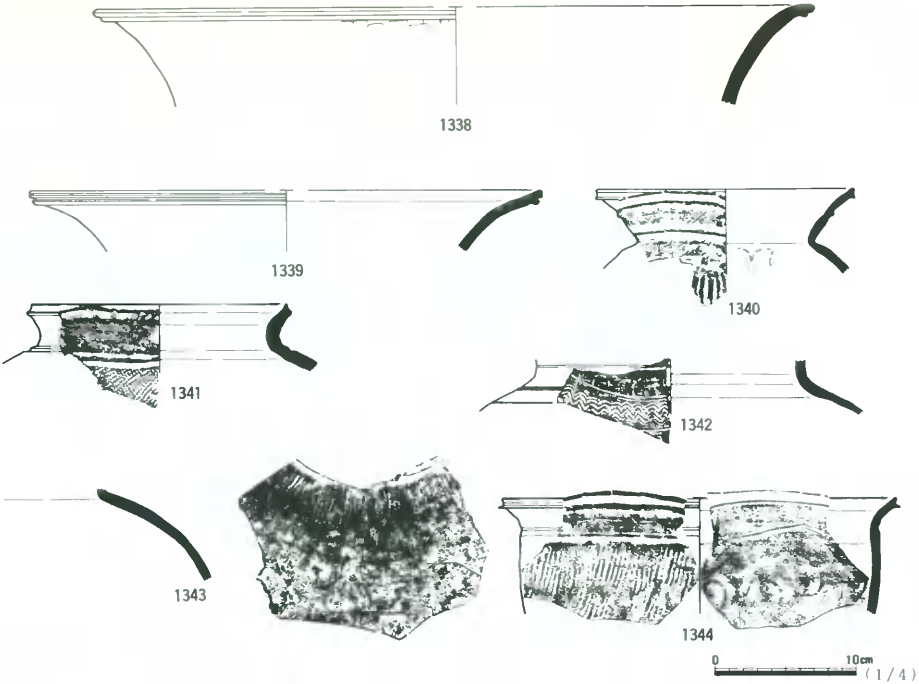
掲載番号	出土調査区	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1315	ＫＭ２	須恵器	甕				良好	(内)褐灰7.5YR5/1 (外)黒褐5YR3/1 断)灰褐5YR5/2	細砂	
1316	ＫＢ１	須恵器	甕				良好	(外)暗青灰5B4/1	細砂	頸部にカキメ
1317	MBOX３	須恵器	甕				良好	(内・外)暗青灰5PB4/1 断)灰赤7.5R4/2	精良	突線
1318	ＫＭ３	須恵器	甕	(37.8)			良好	(内)青灰5PB5/1 (外)暗青灰5PB4/1 断)暗紫灰5RP4/1	微砂	突線・波状文
1319	ＫＭ５	須恵器	甕	(16.8)			良好	(内・外・断)青灰5PB6/1	精良	突線２条・波状文
1320		須恵器	甕				良好	(内・外・断)にぶい赤褐5YR4/3	精良	突線・波状文
1321	MBOX１	須恵器	甕				良好	(内)青灰5PB6/1 (外)暗青灰5PB4/1 断)紫灰5P	精良	突線・波状文
1322	ＫＭ５	須恵器	甕	(16.)			良好	(内・外・断)灰N6	精良	頸部に波状文
1323	ＫＢ１	須恵器	甕				良好		精良	突線間に波状文・ロクロ右回り
1324	ＫＭ５	須恵器	甕				良好	(内・外)灰5Y5/1 断)灰白N7	砂礫	突線２条・波状文
1325	ＭＭ４	須恵器	甕				良好	(内)灰赤2.5YR4/1 (外)灰赤10R5/2 断)にぶい赤褐5YR5/3	砂礫	突線・波状文
1326	ＫＭ４	須恵器	甕	(17.4)			良好	(内)青灰5PB6/1 (外・断)青灰5PB6/1	微砂	口縁部外面に突帯・尤線１条・櫛描波状文
1327	ＭＭ２	須恵器	甕				良好	(内)灰N5 (外)灰N4 断)灰褐5YR4/2	精良	突線２条・波状文
1328	MBOX３	須恵器	甕	(42.6			良好	(内)灰N5 (外)暗灰N3 (断)暗赤灰10R4/1	砂礫	波状文
1329	ＫＭ５	須恵器	甕	(18.7			良好	(内・外)青灰5PB6/1 断)紫灰5P6/1	細砂	頸部波状文
1330	ＫＭ４	須恵器	甕		12.9		良好	(内・断)灰白5Y7/1 (外)灰白N7	微砂	ヨコナデ・端部内側に折り曲げ



掲載番号	出土調査区	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1331	ＫＳ２	須恵器	甕	(56.4)			良好	(内・外・断)灰白N7/	細砂	
1332	ＫＢＩ	須恵器	甕				良好	(外)にぶい赤褐2.5YR4/3	細砂	波状文と沈線を施文
1333	ＫＢＩ	須恵器	壺				良好	(外)青灰5B5/1	精良	波状文を施文
1334	ＭＭ６	須恵器	甑	10.0			良好	(内)灰N4/　(外)暗灰N3/ (断)灰褐5YR4/2	微砂	
1335	MBOX３	陶質系土器	壺	(10.8)			良好	(内・外)暗青灰5PB3/1 (断)暗青灰5PB4/1	精良	突帯２条・波状文
1336	ＫＳ１	須恵器	壺	(9.0)			良好	青灰5B6/1	微砂	ロクロ左回り
1337	ＫＭ３	須恵器	壺	8.9		13.1	良好	(内)灰N6/　(外)灰N4/ (断)褐灰10YR5/1	細砂	底部にタタキ

壺・甕　**1314**は、須恵質の壺であるがそれぞれの部位の接合点がなく、図のような復元をした。器形は土師器の二重口縁を示している。調整は、胴部外面から底部にかけて剝離が著しく調整の観察が困難であったが格子目のタタキが認められ、内面にはアテ具の痕を認めることができた。なお、内面頸部下はヘラケズリが認められる。

1314～**1331**は、甕である。口頸部が緩やかに外反しながら立ち上がり、口縁近くでさらに上外方に屈曲して「コ」の字状を示す。口縁端部外面には、突線を付し口縁端部は丸く仕上げられている。**1316**・**1317**の口縁端部は張り出させているが**1315**は張り出さずそのまま平坦面として終わらせている。**1318**と**1320**は３段突線に波状文を施文する。**1319**・**1321**・**1324**は、２条突線である。**1322**は、口縁部下の突線が上下のヨコナデにより際立せている。**1326**は波状文の下の区画は沈線を用いている。**1331**は、大形の甕である。口頸部にはヘラを用いて太い沈線が施文されている。**1332**～**1337**は、壺である。**1337**は、肩部に平行沈線を用いさらに部分的にタタキを付すことによりアクセントをつけている。**1333**は、甑としたほうが妥当であろうか。

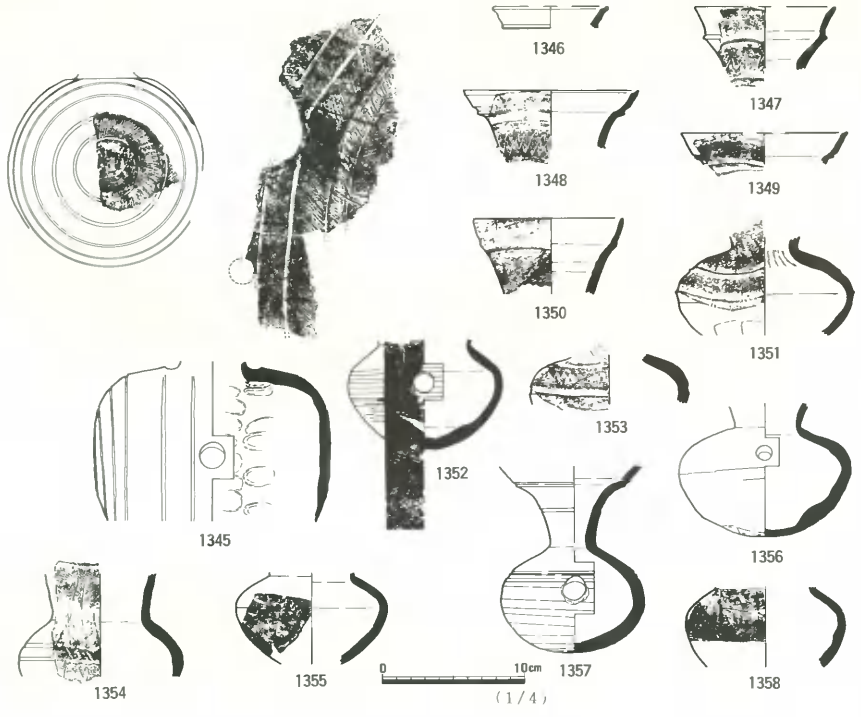


掲載番号	出土調査区	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
				口径	底径	器高				
1338	KM5	陶質系土器	甕	(50.4)			良好	(内・断)灰N6/　(外)灰N4/	砂礫	外面タタキメ痕
1339	KM5	陶質系土器	甕	35.7)			良好	(内・外)青灰5PB6/1 (断)にぶい赤褐2.5YR4/3	精良	外面平行タタキメ→横撫方向のナデ
1340	KM6	頸壺器	壺	18.0			良好	(内・外)灰白N5/ (断)にぶい赤褐2.5YR5/3	細砂	幅広の平行タタキメ・内面アテ具痕をナデ消す・ロクロ右回り
1341	MBOX3	陶質系土器	壺	(17.8)			良好	(内)青灰5B5/1　(外)灰N5/ (断)灰褐5YR4/2	精良	細い格子目タタキ
1342	MBOX3	陶質系土器	壺				良好	(内・外・断)灰N4/	砂礫	太い波状文
1343	KM3	頸壺器	甕				良好	(内・外)灰白5Y7/1 (断)灰黄2.5Y7/2	精良	外面平行タタキメ→内面アテ具痕をナデ消す
1344	KB1	陶質系土器	鉢？鍋？	(27.0)			良好	(内・断)灰白5Y7/1 (外)灰5Y6/1	砂礫	外面タタキメ→端部周縁にナデによるくぼみ

1338と**1339**は、韓式系土器で陶質系と考えるものである。**1338**は大形の甕である。口縁部近くで外方へ大きく屈曲させ突帯を付し、端部は丸く仕上げている。外面にはタタキ痕が、内面にはアテ具とみられるわずかなくぼみが認められる。**1339**は、口縁端部を丸みをもって仕上げ、その外面直下に突帯を付す。**1340**は、口縁端部を下方に張り出し端面はくぼませている。口頸部中ほどには突帯を用いている。胴部外面には、幅広の平行タタキを用いている。

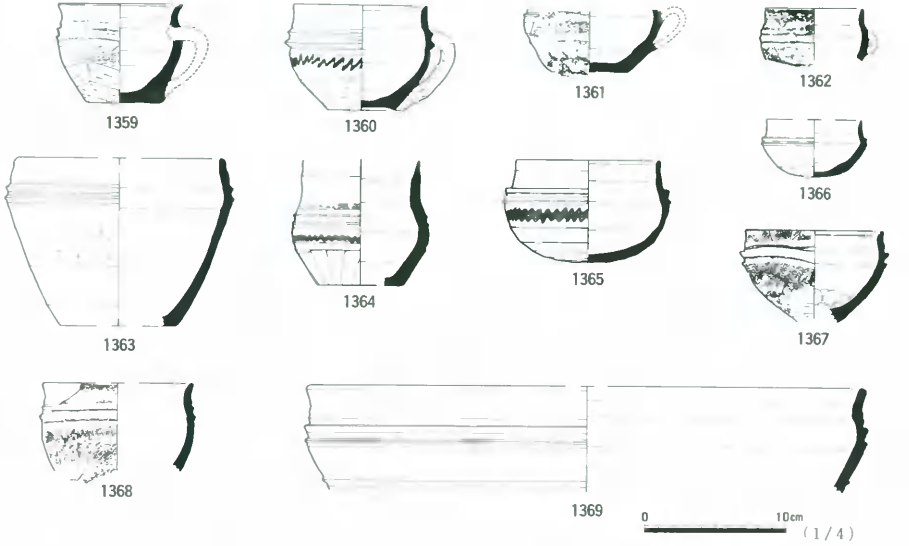
1341～**1342**は、韓式系土器で陶質系と考える壺である。**1341**は、短い口頸部から口縁端部を上方へ立ち上がらせる。基部には太めの沈線を２本施し、その間の凸部はカマボコ状を呈する。基部以下は、細かい格子目タタキが認められる。**1342**は、肩部の２条の沈線の下に太い波状文が見られ、その上には刺突文が施文されている。**1343**は、肩部に平行タタキを認めるもので、内面はナデ消している。**1344**は韓式系土器で陶質系と考える鉢か鍋とされるものである。軟質系土器の**1233**と器形が似る。緩やかに外反する口頸部をもち、端部は凹部をなす。外面は平行タタキに横線が付されたものを用いている。内面はアテ具痕が明瞭に残されている。

甕　**1345**～**1358**は、甕である。**1345**は、俵形甕である。**1346**～**1349**は、口縁部は細い頸部から外反し、さらに段をなして外方へ屈曲させる。**1350**は、その段があまり顕著ではない。**1351**の体部は波状文を２条の突帯で画し、基部下半とその間と頸部にも同様の波状文を施している。底部は静止ヘラケズリが認められる。**1352**は、底部に格子目タタキが認められる。**1355**・**1358**は、波状文を施文されているが、それを画する沈線などは認められない。**1356**は、底部に静止ヘラケズリを認める。　（下澤）



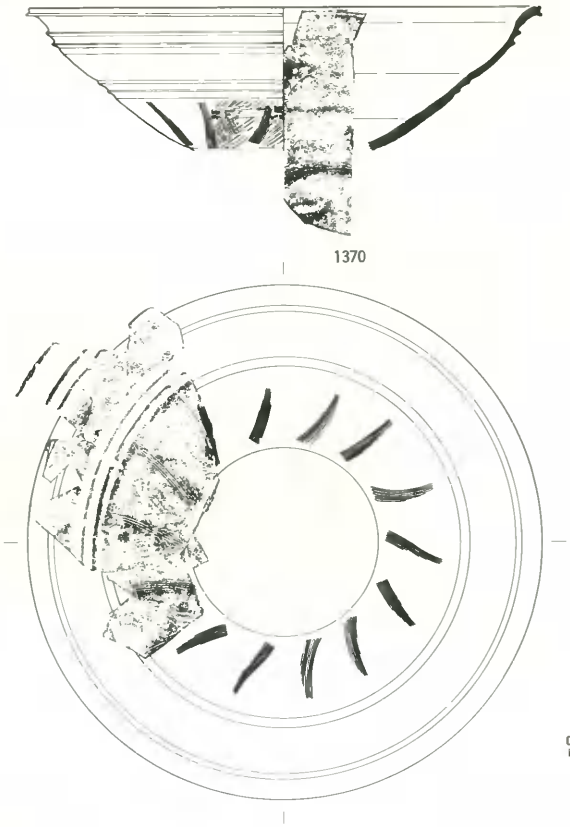
掲載番号	出土調査区	種別	器種	大きさ(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1345	ＫＭ３	須恵器	俵形甕				良好	内・外・断:灰N6/	砂礫	
1346	ＫＭ６	陶質系土器	甕				良好	内・外・断:灰N6/	精良	
1347	ＫＢ１	須恵器	甕				良好	褐灰7.5YR6/1	微砂	頸部に波状文・ロクロ右回り
1348	ＫＭ５	陶質系土器	甕				良好	内:灰N5　外:灰N5/ 断:褐灰10YR5/1	精良	頸部波状文
1349	ＫＭ５	陶質系土器	甕	(11.6)			良好	内・断:灰白N7 外:黄灰2.5Y5/1	精良	口縁部に波状文
1350	ＫＭ７	須恵器	甕				良好	内・外:灰N6/ 断:褐灰10YR6/1	精良	頸部に波状文・内・外ともに自然釉
1351	ＫＭ６	陶質系土器	甕				良好	内・外:灰N5 断:灰赤10R4/2	精良	突帯２条、波状文２段
1352	ＭＭ２	須恵器	甕				良好	内・外:灰N4/　断:灰N5	砂礫	底部格子目タタキ
1356	ＫＢ１	陶質系土器	甕				良好	内・外:褐灰10YR5/1	微砂	沈線間に波状文を施文・内外面に自然釉・ロクロ左回り
1354	ＫＭ５	須恵器	甕				良好	内:灰N4　外・断:暗灰N3	細砂	頸部波状文・胴部に波状文と沈線
1355	ＭＢＯＸ３	須恵器	甕				良好	内・外:暗青灰5PB4/1 断:暗紫灰5RP4/1	精良	
1356	ＫＭ６	陶質系土器	甕				良好	内・外:灰N4 断:褐灰7.5YR4/1	精良	胴部中[illegible]静止[illegible]
1357	ＫＭ７	須恵器	甕				良好	内・外・断:灰白10Y7/1	細砂	自然釉・ロクロ右回り
1358	ＫＭ２	陶質系土器	甕				良好	内・外:青灰5PB5/1 断:暗赤5R4/1	精良	

椀　1359～1369は椀であり、1359～1362には把手が付いている。1359は２条の突線をもち、口頸部は緩やかに外反する。口縁端部内面は凹部を形成させている。突線部分をヘラで孔をあけ、把手部分を差し込み、内面部分は粘土を後から貼り付けて整形している。底部外面にはそのまま貼り付けている。突線下には波状文を施文し、体部中位以下は静止ヘラケズリが認められる。1360も２条の突線を持ち、口頸部は直口し端部は丸くおさめている。底部は上げ底となる。突線下には波状文を施文している。体部中位以下は、静止ヘラケズリが認められる。1361は、わずかに上げ底ぎみの底部をもつものである。突線下には波状文を施文し、静止ヘラケズリが認められるがその後から強いナデを施す。1362の突線は強いナデによって際出たせている。1363は体部上半以下静止ヘラケズリの後ナデを行なっている。1364は口頸部が長くなり、体部下半は静止ヘラケズリが認められる。1365・1366は丸底となり、1366には静止ヘラケズリが認められる。1367は、内面に押圧痕が認められる。1368は、突線下に２条の波状文を施文している。1369は大形であり、他の器種の可能性が考えられる。　（下澤）



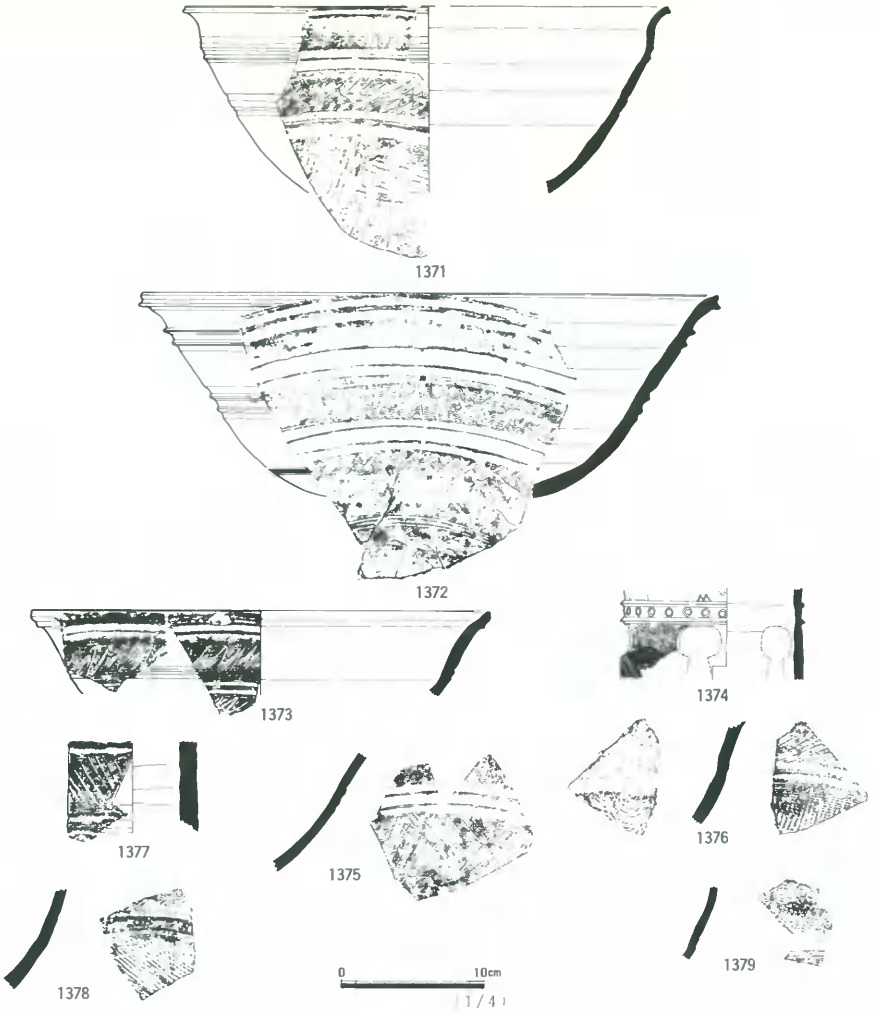
（1/4）

掲載番号	出土調査区	種別	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1359	ＫＢ１	須恵器	把手付椀	(8.6)			良好	(内・外)青灰5PB5/1 (断)暗青灰5PB4/1	精良	ひずみあり・下半静止ヘラケズリ
1360	ＫＭ６	須恵器	把手付椀	(8.5)	4.7	7.5	良好	(内)灰10Y5/1　(外)灰5Y4/1	細砂	突線２条・波状文・胴中位下は静止ヘラケズリ 内面自然釉
1361	ＫＭ５	陶質系土器	把手付椀		5.3		良好	(内・外)暗青灰5PB4/1 (断)黄灰2.5Y5/1	砂礫	静止ヘラケズリ
1362	ＫＭ２	須恵器	椀	(6.9)			良好	(内・外・断)灰N6	精良	波状文
1363	ＫＭ６	須恵器	椀				良好	(外)灰N5/	微砂	突線２条・胴中位下は静止ヘラケズリ後ナデ・ロクロ右回り
1364	ＫＭ６	須恵器	椀	8.2			良好	(内・外・断)灰N6/	精良	下半は静止ヘラケズリ
1365	ＫＭ４	須恵器	椀	(10.0)		7.1	良好	(内・外)青灰5PB6/1 (断)暗紫灰5RP4/1	微砂	下半波状文・２段の貼り付け突帯・長いさち上り部・ロクロ右回り
1366	ＭＢＯＸ３	須恵器	椀	6.1		4.1	良好	(内・外)灰N4/ (断)灰褐5YR5/2	微砂	突線２条
1367	ＫＭ６	陶質系土器	把手付椀	9.5			良好	(内・外)暗オリーブ灰 2.5GY4/1　(断)褐灰5YR4/1	細砂	胴中位下は静止ヘラケズリ
1368	ＫＭ６	須恵器	椀				良好	(外)灰N5/ (断)オリーブ灰10Y4/2	微砂	突線２条と波状文２単位
1369	ＫＭ５	陶質系土器	椀	(39.0)			良好	(内)灰5Y4/1 (外)オリーブ黒[illegible] (断)明褐[illegible]	精良	２段の２条の突線



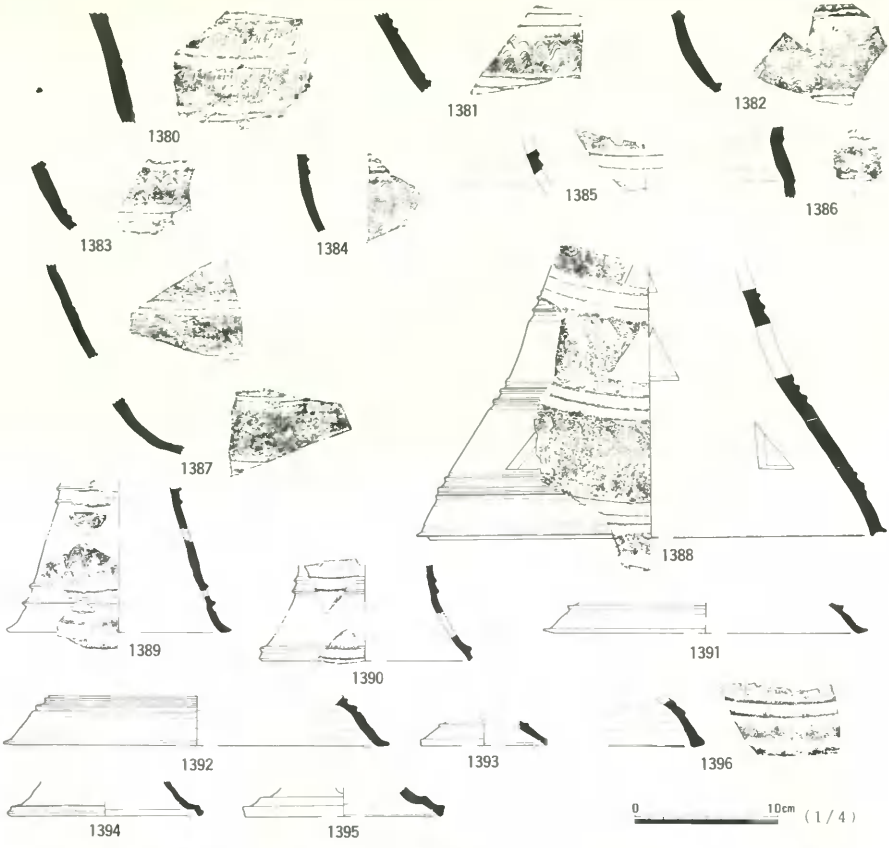
（1/4）

掲載番号	出土調査区	種別	器種	法量 cm³			焼成	色調	胎土	特徴・備考
				口径	底径	器高				
1370	ＫＭ６	陶質土器	器台	36.0			良好	(内)赤灰2.5YR4/1 (外)暗赤灰2.5YR3/1 (脚)にぶい赤褐2.5YR4/3	細砂	外面下半にタタキメの後ヘラケズリ・内面に重ね焼の痕跡



（1/4）

掲載番号	出土調査区	種別	器種	計量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1371	MM 4	陶質系土器	器台	[illegible]			良好	内・青灰5PB6/1　外・暗青灰5PB4/1　断・赤褐10R4/4	精良	突線・波状文・外面にタタキの後[illegible]
1372	KM 3	陶質系土器	器台	[illegible]			良好	内・灰N6/　外・灰10Y6/1　断・暗灰黄2.5Y5/1	細砂	突帯2条・対・波状文・列点文
1373	KM 1	須恵器	器台	[illegible]			良好	内・外・黄灰2.5Y6/1　断・浅黄2.5Y7/4	砂礫	
1374	KM 3	陶質土器	器台	[illegible]			良好	内・灰N4　外・灰N6　断・褐灰5YR5/1	精良	突帯中に竹管の押圧・鍵穴状・方形透かし・深明瞭な線で波状文・弧文
1375	KM 3	陶質土器	器台				良好	内・灰N6　外・灰N4　断・灰赤10R4/2	細砂	突線2条・波状文[illegible]描複合鋸歯文
1376	KM 3	須恵器	器台				良好	内・青灰5PB6/1　外・暗青灰5PB4/1　断・灰赤7.5R5/2	微砂	刺突文
1377	MBOX 3	須恵器	器台				良好	内・外・青灰5PB5/1　断・紫灰5P5/1	微砂	連続刺突文・角形の透かし有り
1378	KM 1	須恵器	器台				良好	内・灰白N7　外・灰N4　断・灰N5	砂礫	
1379	KM 5	須恵器	器台				良好	内・外・青灰5PB6/1　断・暗紫灰5P[illegible]/1	精良	突線2条・波状文



掲載番号	出土調査区	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1380	MBOX 3	須恵器	器台				良好	内・断:灰N6　外:緑灰K3	細砂	沈線２条・波状文
1381	MBOX 3	須恵器	器台				良好	内:青灰5PB5/1　外:暗青灰5PB4/1　断:黄灰7.5R4/2	精良	突線２条・波状文
1382	MBOX 3	須恵器	器台				良好	内・外:暗青灰5PB4/1　断:灰赤7.5R4/2	精良	突線・波状文
1383	KM1	須恵器	器台				良好	内:暗青灰5PB4/1　外:暗青灰5PB3/1　断:灰赤7.5R4/2	微砂	突線・波状文
1384	MBOX 3	須恵器	器台				良好	内:灰白5Y8/1　外:灰N4/1　断:灰褐5YR4/2	精良	突帯・波状文
1385	MM4	須恵器	器台				良好	内・外:灰N4　断:灰黄褐10YR4/2	細砂	突線・波状文・透か
1386	MBOX 3	陶質系土器	器台？				良好	内:灰白　外:暗青灰5PB4/1　断:灰赤10R5/2	精良	円形の刺突文有り
1387	MBOX 3	須恵器	器台				良好	内・外:暗青灰5PB4/1　断:暗紫灰5RP3/1	微砂	凹線２条・波状文
1388	KM3	陶質系土器	器台		(31.1		良好	内:青灰5PB6/1　外:青灰5PB5/1　断:灰赤7.5R4/2	微砂	突線・三角形透かし・波状文帯 1372と同一個体か
1389	KM6	陶質系土器	器台				良好		微砂	透かしを認めるが構成不明
1390	KB1	陶質系土器	器台				良好	外:緑オリーブ灰2.5GY4/1	微砂	突帯間に波状文・外面に自然釉
1391	KM6	須恵器	器台				良好	外:褐7.5YR4/4	微砂	
1392	KM5	須恵器	器台			3.5	良好	内・外:灰褐7.5YR4/2　断:にぶい赤褐5YR5/3	細砂	突線２条・透かし有
1393	KB1	須恵器	脚部				良好	外:灰白5Y7/1	精良	円形透かし有り
1394	KB1	須恵器	脚部				良好	外:灰白N7	精良	円形透かし有り　スタンプ同一
1395	KM3	陶質系土器	脚部	13.4			良好	内:青灰5PB5/1　外:暗青灰5PB3/1　断:暗紫灰5RP3/1	精良	内面に自然釉
1396	MM4	須恵器	脚部				良好	内:暗赤灰2.5YR3/1　外:黒褐灰7.5YR3/1	細砂	波状文・透か

器台　1370～1392は須恵器あるいは陶質・陶質系土器の器台である。なお、1393～1396は、器台もしくは高杯等の脚部と推測されるものである。斎富遺跡では比較的多くの器台を確認したが、いずれも破片であり図示した中にも同一個体が含まれる可能性は否めない。また、陶質・陶質系と思われるものも、この器種が比較的多いことが注目される。以下、個別に概観していく。

1370～1373・1375・1376・1378・1379が受部の破片であり、1374・1377が筒部、1380～1390は筒部から脚部にかけての破片である。

1370は、破片であるため口径、傾きとも若干の不安は残るものの浅い体部をもつと思われる。外面には2条の突線が2段に巡り、その下にクシガキ文が施されている。口縁端部は凹部を形成している。内面には重ね焼痕跡が認められる。5世紀代の所産と思われ、朝鮮半島の影響が感じられるものの一つである。陶質土器の可能性が高い。1371・1372は、1370と同様口縁端部は凹部を作り出している。この形態は、先述した軟質系土器の1233・1234・1235、陶質系土器1344と共通するものであり、特徴的な形態である。

特筆されるのは1374と1375である。両者とも陶質土器と判断した。1374は直立する筒状を呈し、外面に巡らした突帯に竹管文を施す。透かし孔は破片であるため全容は確実ではないものの鍵穴状を呈するものと復元した。施文は波状文と弧状と直線の複合したクシガキ文である。類例は明らかにできなかった。1375は受部外面にヘラガキの複合鋸歯文が施されている。

1376の内面は青海波のアテ具痕跡が残る。1377は細い筒部で外面は刺突文で飾られる。1378は外面に波状文が施されている。傾きに不安が残る。1379も傾きに不安があるが、外面に突線が2条とその上位に波状文が観察される。

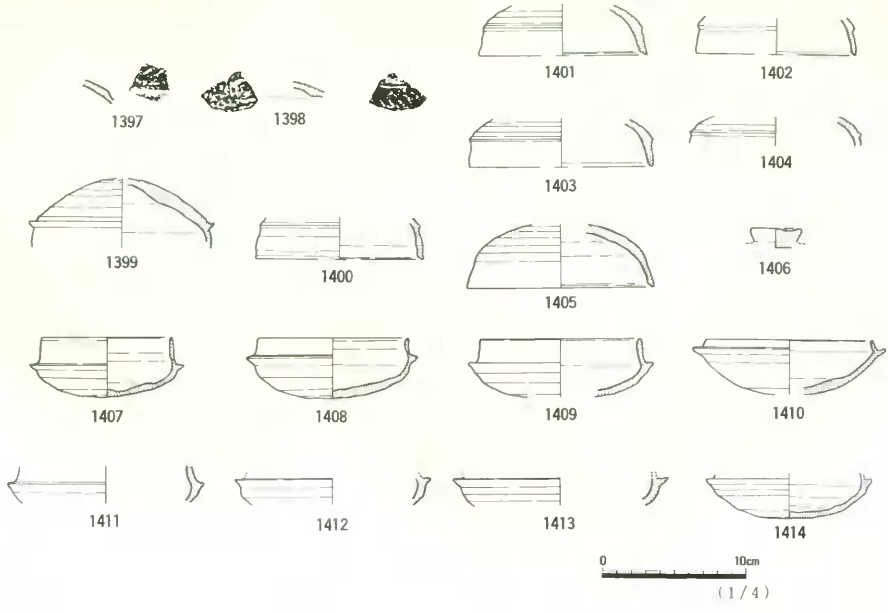
1389・1390はそれぞれ同一個体と思われる破片を図上で復元したものである。1389は筒部径が細く、そのまま脚部へと移行するものと復元した。透かし孔は認められるものの形状は不明である。1390は、2条の突線の上位に波状文が施されている。いずれも傾き、径の復元は不確実性が残るものである。1389の脚端部の形状に似るのが1391・1392である。端部は外方に肥厚し、面を形成している。両者とも類例は明らかに出来なかった。須恵器の器台の脚部とはやや趣きが異なる。

1394と1395は、脚端部の形態が比較的似るものであり、1395には円形透かし孔が認められた。また、1393にも円形の透かし孔が認められる。これらは器台としては考えがたく、なんらかの台部あるいは脚部の可能性を考えた。

これら図示したもののうち断面が赤褐色系の色調を示すのは、1370・1371・1375～1377・1379・1381～1383・1386・1388・1392・1396である。

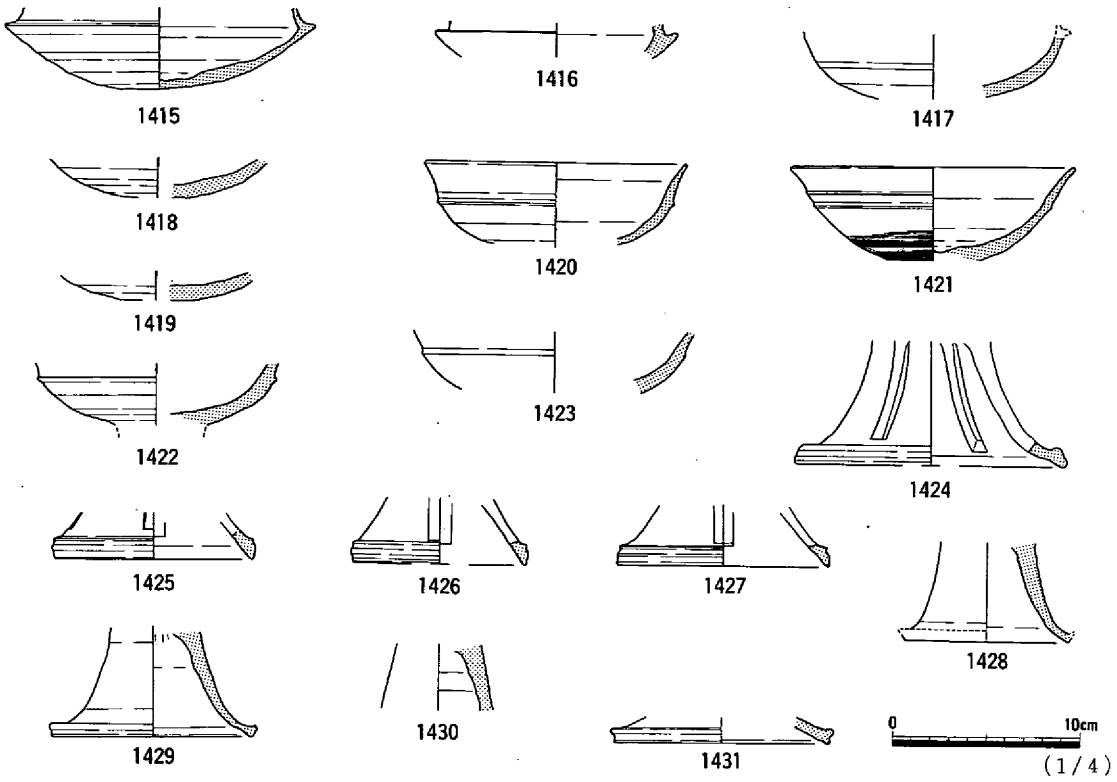
以上図示したものは、そのほとんどが斎富遺跡のなかでも西半部から出土していることも注意が必要なことと思われる。　（大橋）

須恵器（土師質）　ここでは、須恵器の器形、あるいは成形・調整の点で須恵器と共通でありながら、土師器に近い焼成を受けているもののうち1397～1449を図示して説明を加える。これらは第2章第2節で示したように、a：水漉し粘土様の精良な胎土で橙色の色調をもつもの、b：やや精良な胎土で堅緻な焼成であり、橙色の色調を有するもの、c：いわゆる通常の土師器の胎土・焼成であり、黄褐色系の色調を示すもの、に大きく分類される。図示したものでみるように、蓋杯、高杯、椀、壺、甕、器台と主要各器種にそれぞれ認められた。また、時期的にみても5世紀末～6世紀前半のものが多いものの、これ以降の時期のものでも図示していないが確実に少量ではあるが認められた。この評価に

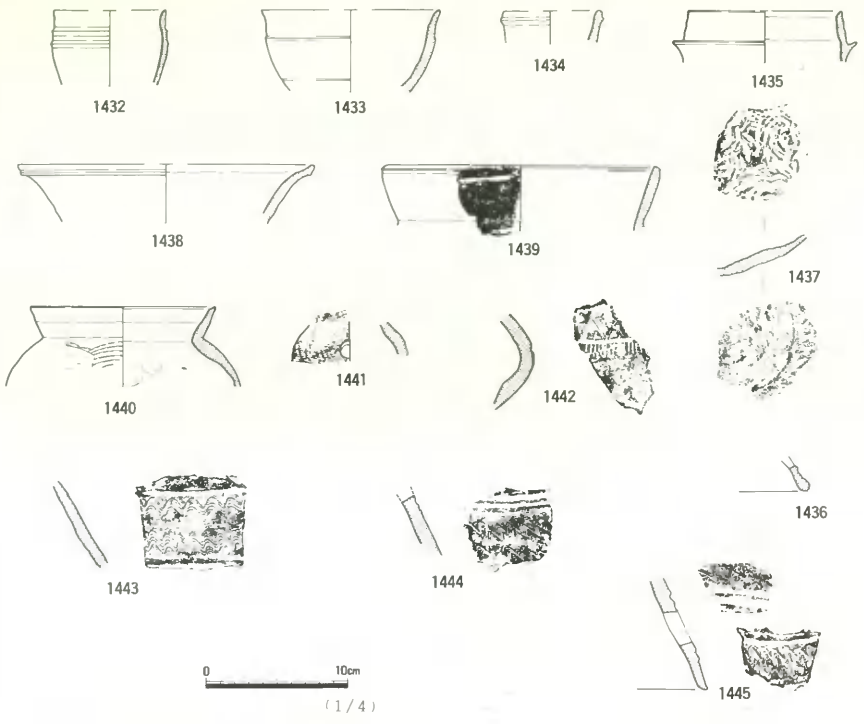


(1/4)

掲載番号	出土調査区	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1397	KM1	陶質系土器(土師質a)	蓋				やや不良	(内・外)にぶい橙5YR7/4	精良	
1398	MM2	陶質系土器(土師質b)	蓋				やや不良	(内・断)橙5YR6/8 (外)にぶい橙7.5YR6/3	細砂	外面刺突文・内面タタキ後ヘラケズリ
1399	KM5	陶質系土器(土師質b)	蓋				やや不良	(内)浅黄2.5Y8/4 (外)にぶい黄橙10YR7/4 (断)灰10Y6/1	微砂	稜は返りぎみとなる
1400	KB1	須恵器(土師質b)	蓋				やや不良	(外)橙7.5YR6/6	細砂	器壁摩滅
1401	KM6	須恵器(土師質a)	蓋				やや不良	(外)橙5YR7/8	微砂	
1402	KB1	須恵器(土師質b)	蓋				やや不良	(外)橙5YR7/8	細砂	
1403	KM6	須恵器(土師質a)	蓋				やや不良	(外)橙7.5YR7/6	細砂	ロクロ右回り
1404	KB1	須恵器(土師質b)	蓋				やや不良	(外)橙7.5YR6/6	微砂	ロクロ右回り
1405	KM2	須恵器(土師質b)	蓋	13.2			やや不良	(内・断)橙5YR6/6 (外)にぶい橙7.5YR6/4	砂礫	ヘラケズリ稜線直上まで
1406	KB1	須恵器(土師質b)	蓋				やや不良	(外)橙7.5YR6/6	細砂	
1407	KM2	須恵器(土師質c)	杯身	[12.2]		4.3	不良	(内・断)にぶい黄橙10YR7/4 (外)にぶい橙7.5YR6/4	微砂	
1408	KM6	須恵器(土師質b)	杯身			4.2	やや不良	(内・外・断)にぶい黄橙10YR7/2	細砂	ロクロ右回り
1409	KM4	須恵器(土師質c)	杯身	11.2			不良	(内)にぶい橙7.5YR6/6 (外)灰白10YR7/1	微砂	
1410	MM1	須恵器(土師質b)	杯身	(11.6)			やや不良	(内)浅黄橙10YR8/3 (外)にぶい黄橙10YR7/3	精良	
1411	KB1	須恵器(土師質b)	杯身				やや不良	(外)橙7.5YR6/8	細砂	ロクロ右回り
1412	KB1	須恵器(土師質b)	杯身				やや不良	(外)橙7.5YR6/8	細砂	
1413	KB1	須恵器(土師質b)	杯身				やや不良	(外)橙7.5YR6/8	細砂	
1414	KM6	須恵器(土師質b	杯身				やや不良	(内)にぶい橙10YR6/3 (外)にぶい黄橙10YR6/3 (断)にぶい褐7.5YR5/4	砂礫	器壁摩滅

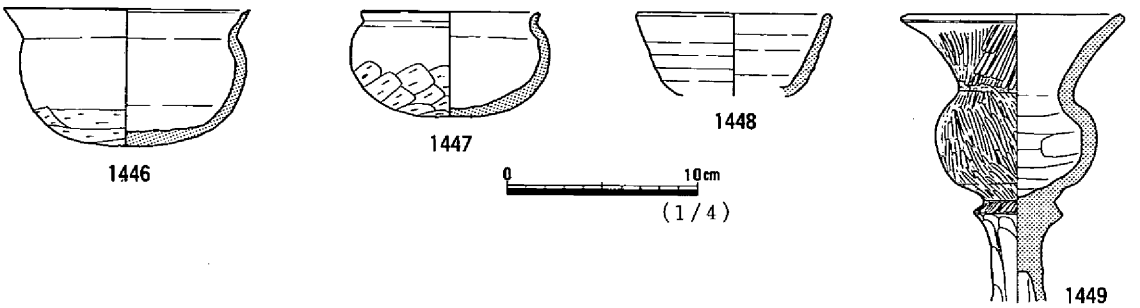


掲載番号	出土調査区	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
				口径	底径	器高				
1415	MBOX 2	須恵器(土師質b)	杯身				やや不良	(内)橙7.5YR7/6　(外)明赤褐5YR7/6　(断)橙7.5YR7/6	砂礫	ロクロ右回り
1416	KB1	須恵器(土師質b)	杯身				やや不良	(外)にぶい橙7.5YR7/3	細砂	器面磨滅
1417	KB1	須恵器(土師質b)	高杯				やや不良	(外)橙7.5YR6/8	細砂	ロクロ左回り
1418	KM6	須恵器(土師質b)	杯身				やや不良	(外)橙7.5YR6/6	細砂	ロクロ右回り
1419	KB1	須恵器(土師質b)	杯身				やや不良	(内)浅黄橙10YR8/6 (外)灰白10YR8/1	細砂	
1420	KM4	須恵器(土師質b)	高杯	13.9			やや不良	(内)橙5YR6/6 (外・断)橙7.5YR6/6	細砂	
1421	MBOX 3	須恵器(土師質b)	高杯	15.1			やや不良	(内)明赤褐2.5YR5/6 (外)橙2.5YR6/6 (断)にぶい橙7.5YR7/4	砂礫	丹塗り
1422	KB1	須恵器(土師質b)	高杯				やや不良	(外)橙5YR6/8	粗砂	ロクロ右回り
1423	KB1	須恵器(土師質a)	高杯				やや不良	(外)橙5YR6/6	細砂	
1424	KM4	須恵器(土師質a)	高杯				やや不良		細砂	
1425	KM5	須恵器(土師質b)	高杯		10.4		やや不良	(内・外・断)にぶい褐7.5YR6/3	細砂	
1426	KM5	須恵器(土師質b)	高杯		(9.0)		やや不良	(内・外・断)橙5YR7/6	微砂	カキメ有り
1427	MBOX 3	須恵器(土師質b)	高杯		(11.2)		やや不良	(内・外)橙5YR6/6 (断)暗赤褐2.5YR5/6	微砂	
1428	KM5	須恵器(土師質b)	高杯		9.4		やや不良	(内)橙5YR7/6 (外)橙5YR6/6 (断)にぶい橙7.5YR6/4	細砂	
1429	KM2	須恵器(土師質b)	高杯		10.5		不良	(内・外)にぶい橙5YR6/4	精良	
1430	KB1	須恵器(土師質b)	高杯				やや不良	(内)浅黄橙10YR8/4 (断)灰白2.5YR7/1	粗砂	
1431	KB1	須恵器(土師質b)	高杯				やや不良	(外)灰白5Y7/1	微砂	



（１/４）

掲載番号	出土調査区	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
				口径	底径	器高				
1432	ＫＭ６	須恵器（土師質ｂ）	甕				やや不良	(外)オリーブ黄7.5Y6/8	細砂	器壁磨滅
1433	ＫＭ６	須恵器（土師質ｂ）	甕				やや不良	(外)橙7.5YR6/6	細砂	胴部下半に沈線を付す
1434	ＫＭ６	須恵器（土師質ｂ）	？				やや不良	(外)明黄褐10YR7/6	細砂	内外面磨滅
1435	ＭＭ２	陶質系土器（土師質ｂ）	台付壺				やや不良	橙7.5YR7/6	微砂	1436・1437と同一個体か
1436	ＭＭ２	陶質系土器（土師質ｂ）	台付壺				やや不良	橙7.5YR7/6	微砂	端部丸く納め、透かし孔あり
1437	ＭＭ２	陶質系土器（土師質ｂ）	台付壺				やや不良	橙7.5YR7/6	微砂	内面ヘラ具痕
1438	ＫＭ６	須恵器（土師質ｂ）	甕				やや不良	(外)明黄褐2.5YR7/6	微砂	
1439	ＭＢＯＸ３	須恵器（土師質ｂ）	甕	18.8			やや不良	(内・断)橙7.5YR7/6 (断)10YR7/1	細砂	波状文
1440	ＭＢＯＸ３	須恵器（土師質ｂ）	甕	[illegible]			やや不良	(内・断)橙7.5YR7/6 (外)灰黄褐2.5YR6/2	細砂	内面ヘラケズリ
1441	ＫＭ６	須恵器（土師質ｂ）	鉢				やや不良	(内・外・断)橙7.5YR7/6	微砂	連続刺突文
1442	ＫＭ６	須恵器（土師質ｂ）	鉢				やや不良	(内・外・断)にぶい黄2.5Y6/3	微砂	連続刺突文
1443	ＭＢＯＸ３	須恵器（土師質ｂ）	器台				やや不良	(内・外・断)橙2.5YR6/6	細砂	凹線・波状文
1444	ＫＭ６	須恵器（土師質ｂ）	器台				やや不良	(外)黄橙7.5YR7/8	微砂	透かし孔、沈線と波状文を付す
1445	ＫＭ６	須恵器（土師質ｂ）	器台				やや不良	(外)橙7.5YR6/6	細砂	波状文・三角形の透かし孔を付す



掲載番号	出土調査区	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1446	ＫＳ２	須恵器(土師質ｂ)	鉢	13.0		7.3	やや不良	(内)にぶい橙7.5Y7/4 (外・断)橙7.5Y6/6	細砂	静止ヘラケズリ・ロクロ右回り・掘り下げ
1447	ＫＭ４	須恵器(土師質ｂ)	鉢	9.2		5.7	やや不良	(内)橙7.5YR6/6 (外)明赤褐5YR5/6	微砂	体部下手ヘラケズリ・口縁部短く外反する
1448	ＭＭ４	須恵器(土師質ｂ)	杯	(9.8)			やや不良	(内・外・断)明赤褐2.5YR5/6	精良	
1449	ＭＭ６	須恵器(土師質ｂ)	小形壺	11.2			やや不良	(内・外・断)橙7.5YR6/6	微砂	子持の部分か？

ついてはここでは触れず、以下個別に概観していく。

1397～1405は杯蓋、あるいは蓋である。うち、特筆されるのは、**1397**と**1398**である。**1397**には天井部に刺突文が認められる。**1398**はここでは蓋として取り扱った。外面に刺突文が施され、内面にはアテ具痕跡が残る。いずれも通常の杯蓋とは考えがたいものである。

1407～1419は杯身である。うち**1409**は通常の土師器と胎土・焼成を同一にするものである。小片で図示していないものの、これ以外にもこのような焼成のものも少なくない。

1421～1431は高杯である。判別できた限りでは、図示していないものも含め無蓋の高杯がほとんどであった。**1421**は外面にカキメを施している。また、**1423・1424**は水漉し粘土様の胎土であり、**1424**は破片であるもののその構成から多窓になるものと思われた。

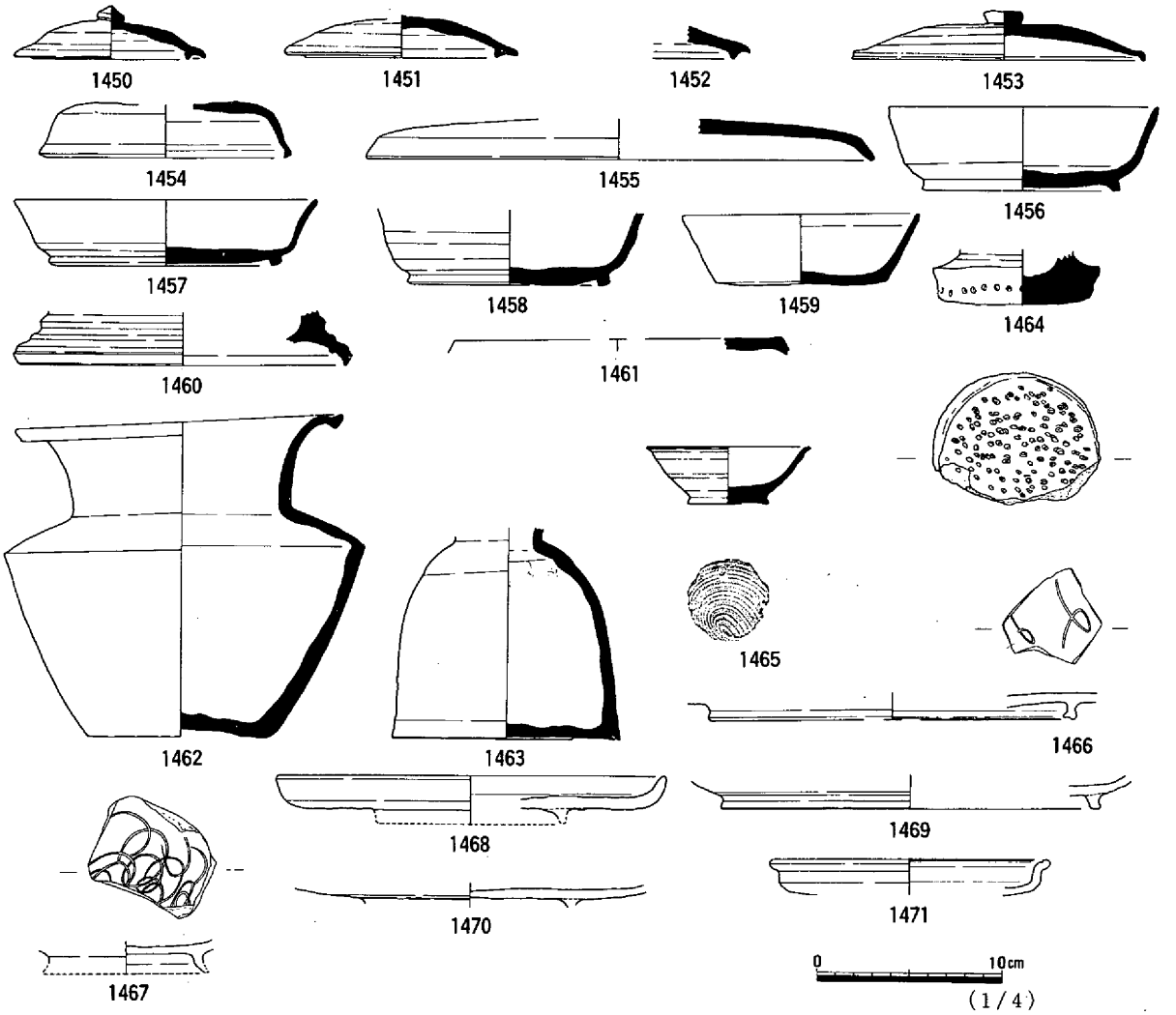
1432・1433は椀であるが、この器種は比較的少ない。特に把手付きのコップ形をなすものは見あたらなかった。**1438**は壺、**1439・1440**は器形的には土師器と同一であるが、調整が須恵器のタタキメを用いる点、および焼成が通常の土師器と異なりこの項で扱った。

1441・1442は鼈、**1443・1444**は器台である。

注目されるのは同一個体の可能性がある**1435～1436**である。器形は有蓋の台付壺となると判断される。**1435**は内傾する口縁部を有し、体部の底の**1437**の内面はアテ具痕が認められる。脚台部の端部は丸く納められ、透かし孔がある。朝鮮半島系の影響が強く認められるものである。

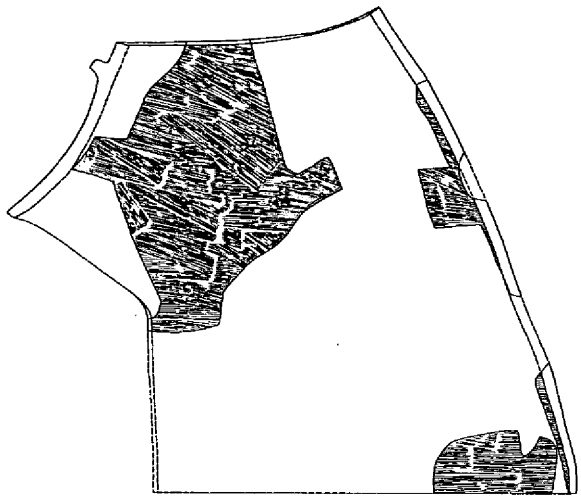
1446・1447は鉢である。体部下半は静止ヘラケズリで調整されている。いずれも６世紀前半以前の時期を考えている。

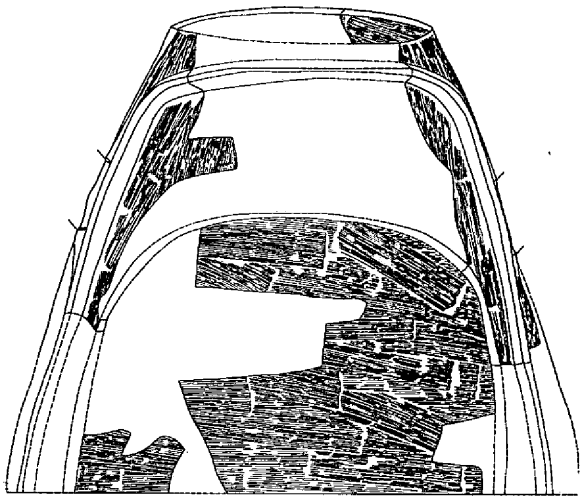
1449は類例をみない遺物である。壺状のものに、細い筒状の脚部がつくものであるが、外面はヘラミガキが認められる。全体の器形も時期も不明なものである。焼成の点でこの項で扱った他のものと近似していることから、古墳時代後半のものである可能性は高いと思われる。　　(大橋)

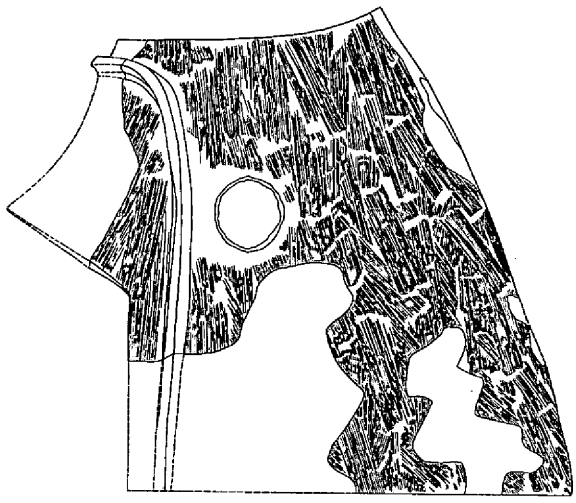


(1/4)

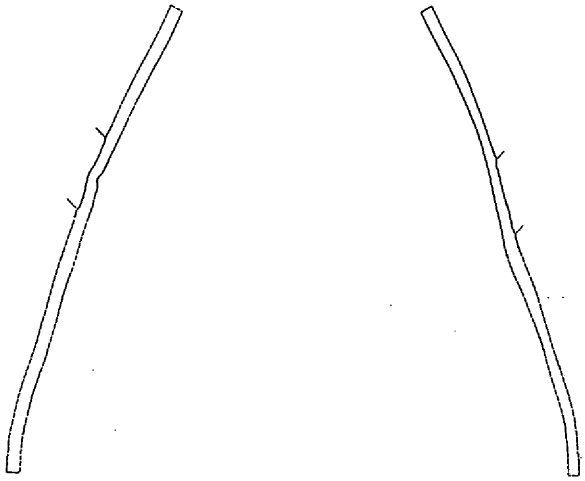
掲載番号	出土調査区	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1450	MBOX３	須恵器	蓋	8.5		3.0	良好	(内・外・断)灰白7/	精良	宝珠つまみ・寒風産
1451	MBOX３	須恵器	蓋	10.6			良好	(内・外・断)灰白N7/	微砂	つまみ欠損・丁寧なロクロナデ
1452	ＫＳ２	須恵器	蓋	(9.2)			良好	(内・外・断)灰N7/	微砂	自然釉
1453	ＭＭ６	須恵器	蓋	15.9		2.8	良好	(内)灰白5Y8/1 (外)灰白5Y7/1 (断)灰白5Y8/1	微砂	つまみを付す
1454	ＭＭ２	須恵器	蓋	13.1		3.1	良好	(内・断)灰7.5Y6/1 (外)灰7.5Y7/1	細砂	寒風産
1455	ＭＭ３	須恵器	蓋	(27.7)			良好	(内・外・断)灰白N7	精良	
1456	ＭＭ２	須恵器	杯身	14.7	10.8	4.7	良好	(内・断)明オリーブ灰2.5GY7/1 (外)灰N6/	砂礫	高台
1457	ＭＭ２	須恵器	杯身	16.7	12.8	3.7	良好	(内・断)青灰10BG5/1 (外)青灰5BG5/1	微砂	高台
1458	ＫＳ２	須恵器	杯身		11.2		良好	(内)灰白N7/	微砂	内外面の底に磨滅・特に外面底部にスミ痕か？転用硯？
1459	ＭＭ３	須恵器	杯	12.9	9.4	3.9	良好	(内・断)灰N5/ (外)明オリーブ灰2.5GY7/1	砂礫	ロクロ左回り
1460	ＭＭ２	硯	円面硯		(18.0)		良好	(内・外・断)明青灰5PB7/1	精良	小破片
1461	ＭＭ２	硯	円面硯				良好	(内・外・断)明青灰5PB7/1	精良	小破片
1462	ＭＭ３	須恵器	広口壺	18.1	10.0	17.5	良好	(内・外)灰N6/ (断)灰N4	細砂	
1463	ＭＭ１	須恵器	壺		12.5		良好	(内・外・断)灰白N7	微砂	
1464	ＫＭ３	須恵器	捏鉢		8.1		良好	(内)オリーブ灰2.5GY6/1 (外・断)灰N6/	細砂	自然釉
1465	ＭＭ４	緑釉陶器	杯	(8.8)	(4.5)	3.2	良好		微砂	糸切り
1466	MBOX３	土師器	盤		(19.7)		良好	にぶい黄橙10YR7/2	精良	暗文・丹塗り
1467	MBOX１	土師器	杯				良好	橙5YR6/6	微砂	内面暗文・丹塗り・高台
1468	ＭＭ２	土師器	盤				良好			丹塗り
1469	ＫＳ２	土師器	杯身		(20.4)		良好	灰黄2.5Y7/2	微砂	外面丹塗り
1470	ＭＭ１	土師器	盤				良好	にぶい黄橙10YR7/3	精良	高台
1471	ＫＭ２	土師器	杯	(14.9)			良好		精良	端部玉縁状に丸く納める・内外面丹塗り







1472



(1/6)

掲載番号	出土調査区	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
				口径	底径	器高				
1472	ＫＭ３	土師器	カマド	18.8	43.0	38.5	良	にぶい橙5YR7/4	微砂	

古代の土器

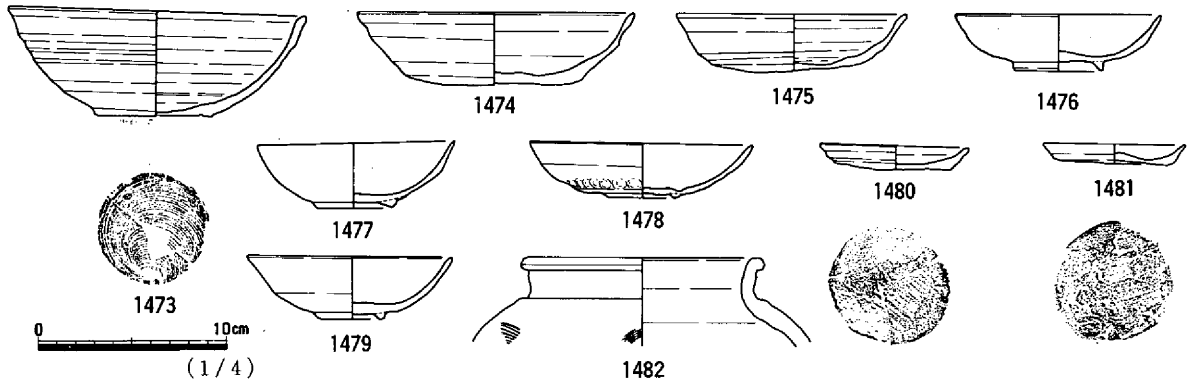
1450～1455は蓋であり、1450～1452は内面にかえりが設けられている。1453は、口縁端部を屈曲させている。1456～1459は外方に広がる体部を有する杯である。1458は底部が高台よりも低くなっており、1459は高台がつかない。1460・1461は、硯の小破片である。1460は脚部で、1461は陸部であり、いずれも円面硯と考えられる。1462は広口壺である。口頸部は、やや開きぎみに直立し、大きく外反して口縁端部を拡張させる。出土状況を明らかにしえなかったが、胞衣用器の可能性が考えられる。1463は底部を後から付している。1465は緑釉である。口縁端部は、ナデにより外反ぎみとなる。底部は、糸切りが認められる。

1466～1471は、土師器である。1466は高台端部が肥厚ぎみにとなるもので、内外面とも丹塗りがなされている。内面には、暗文が認められる。1467は高台端部が細くなり外へ開きぎみとなる。内外面とも丹塗りがなされている。内面には弧状の線を重ねたような暗文が認められる。1468も内外面とも丹塗りがなされている。1469は高台端部が肥厚ぎみにとなり丸く終わらせている。内外面とも丹塗りがなされている。1470は細身の高台が付されているようである。内外面も丹塗りがなされている。1471は、体部は短く立ち上がり、端部はさらに外方へ屈曲させる。口縁端部内面は、沈線を施文している。内外面とも丹塗りがなされている。

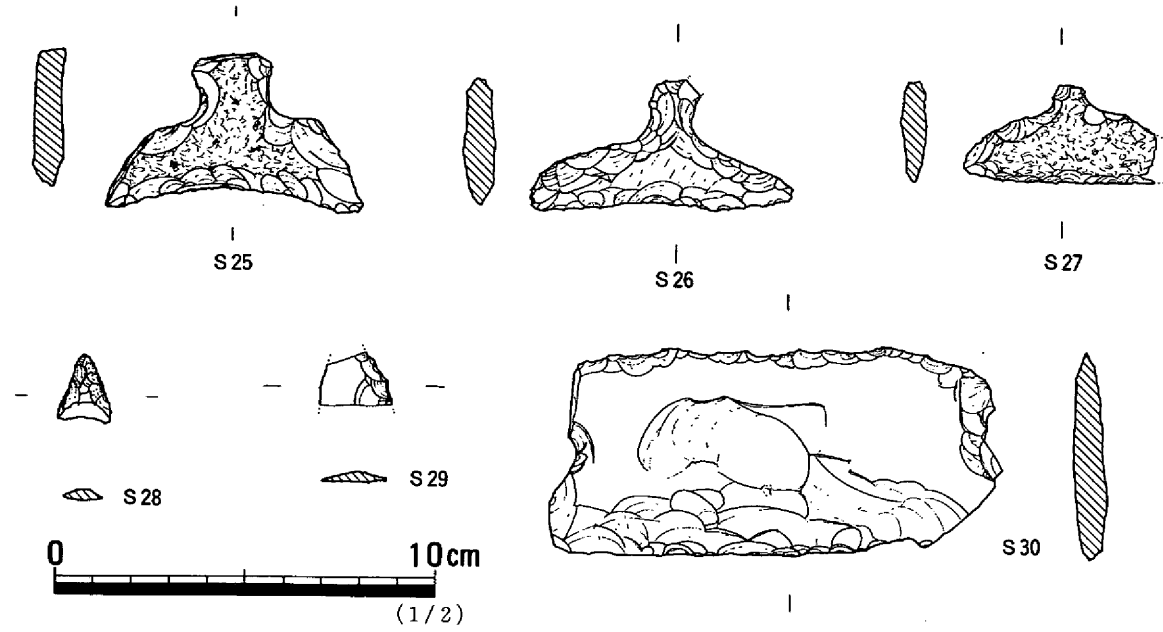
1472は、ほぼ全容を把握できうるカマドである。器高は、推定で38.9cmを測る。鍔および把手は、器面に貼り付けて設けられている。調整は、内外面ともやや粗目のハケを用いている。　(下澤)

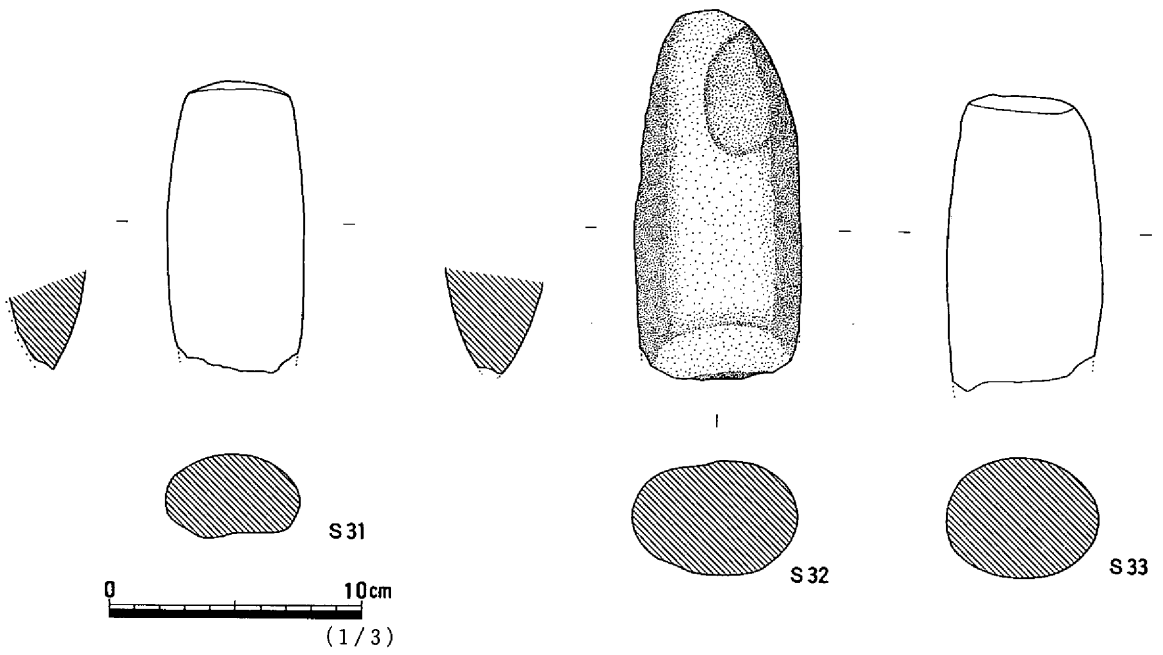
中世の土器

1473と1482は、備前焼である。1473は、ナデの痕跡を顕著に残し、底部は糸切りが認められる。1482は、口縁端部が玉縁状となり、肩部に線刻が認められる。1474と1475は土師器の杯で、1475の底部はヘラオコシで、口縁外面に丹の痕跡が認められる。1476～1479は、いわゆる早島式土器である。いずれも扁平な高台を付している。1480と1481は、早島式の小皿である。　(下澤)



掲載番号	出土調査区	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1473	MBOX1	備前焼	鉢	15.8	6.3	5.8	良	(内・外)灰白5Y7/1 (断)灰5Y5/1	砂礫	糸切り底
1474	MBOX2	土師器	杯	14.7	9.6	3.9	良好	浅黄2.5Y7/4	砂礫	底部内面不定方向のナデ・外面黒斑
1475	MM3	土師器	杯	12.3	3.2	8.1	良好	橙7.5YR7/6	砂礫	
1476	MM1	土師質土器	高台付椀	(10.8)	(4.6)	3.1	良好	灰白10YR8/2	精良	「早島式土器」・貼り付け高台
1477	MM6	土師質土器	高台付椀	10.6	3.5	4.0	良好	橙2.5YR7/6	精良	退化した貼り付け高台・内面重ね焼痕跡
1478	MM6	土師質土器	高台付椀	11.8	3.7	2.9	良好	灰白2.5Y8/1	精良	「早島式土器」・退化した貼り付け高台
1479	MM6	土師質土器	高台付椀	10.9	3.4	3.4	良好	灰白10YR8/2	精良	「早島式土器」・退化した貼り付け高台・口縁部にスス
1480	KS2	土師質土器	小皿	(8.0)	(6.4)	1.5	良好	にぶい黄橙10YR7/3	微砂	
1481	KS2	土師質土器	小皿	7.6	5.7	1.2	良好	にぶい黄橙10YR7/3	微砂	
1482	MBOX2	備前焼	壺	12.0			良好	暗赤褐2.5YR3/2	砂礫	玉縁状をなす口縁部・体部に線刻有り

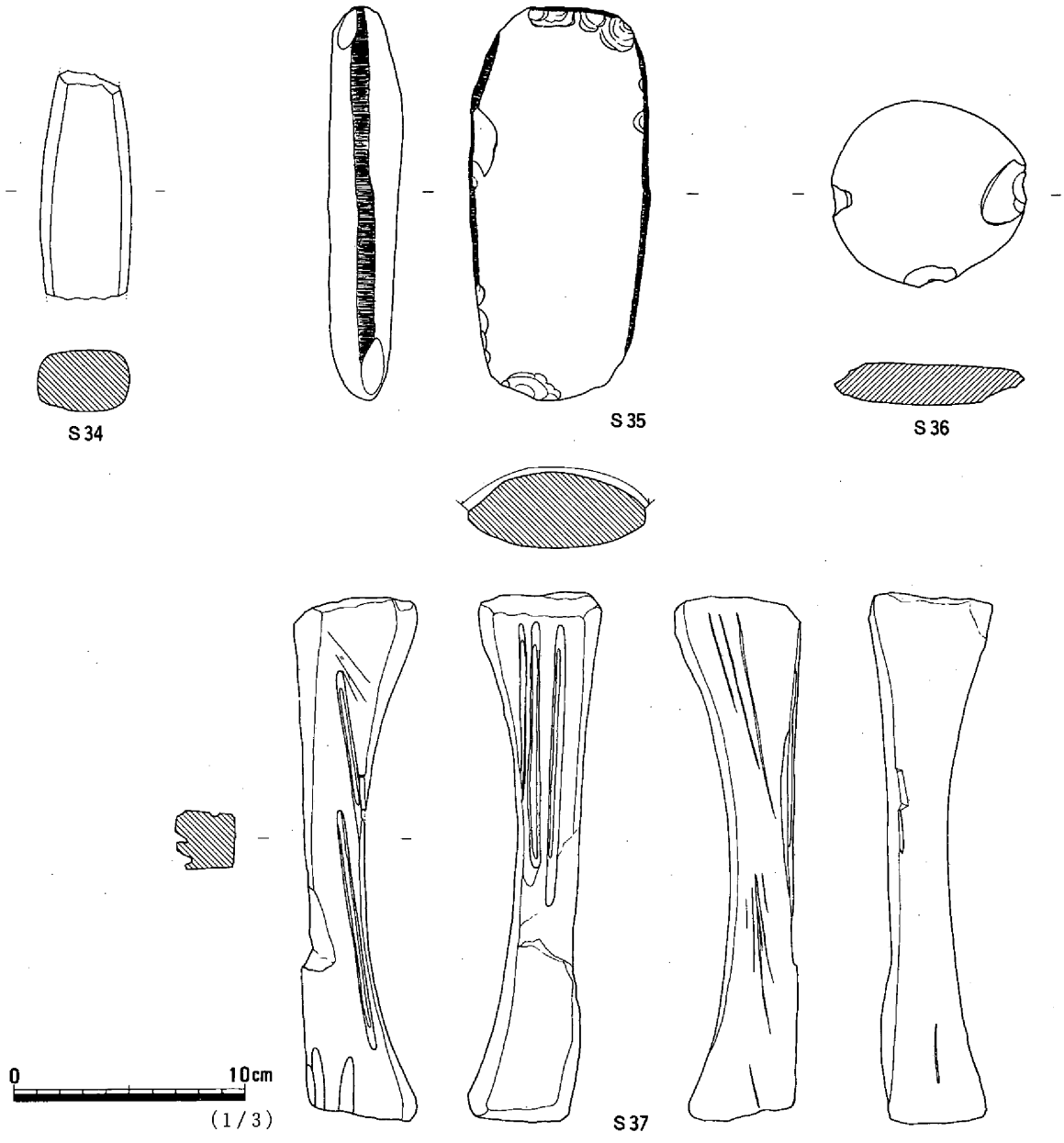




掲載番号	出土調査区	器種	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	孔径(mm)	重量(g)
S25	KB1	石匙	サヌカイト	69	35	8		17.35
S26	MBOX3	石匙	サヌカイト	70	33	8		13.11
S27	MS1	石匙	サヌカイト	(5.2)	2.1	0.6		6.79
S28	MM6	石鏃	サヌカイト	18	15	2		0.51
S29	MBOX1	石鏃	サヌカイト	(1.5)	(1.9)	0.28		0.88
S30	KM6	打製石包丁	サヌカイト	118	53	9		87.21
S31	KB1	磨製蛤刃石斧	安山岩	(113)	53	34		367.75
S32	MBOX3	磨製蛤刃石斧	玢岩	(147)	66	46		665.00
S33	MM3	磨製蛤刃石斧	安山岩	(108)	40	48		585.00

石器

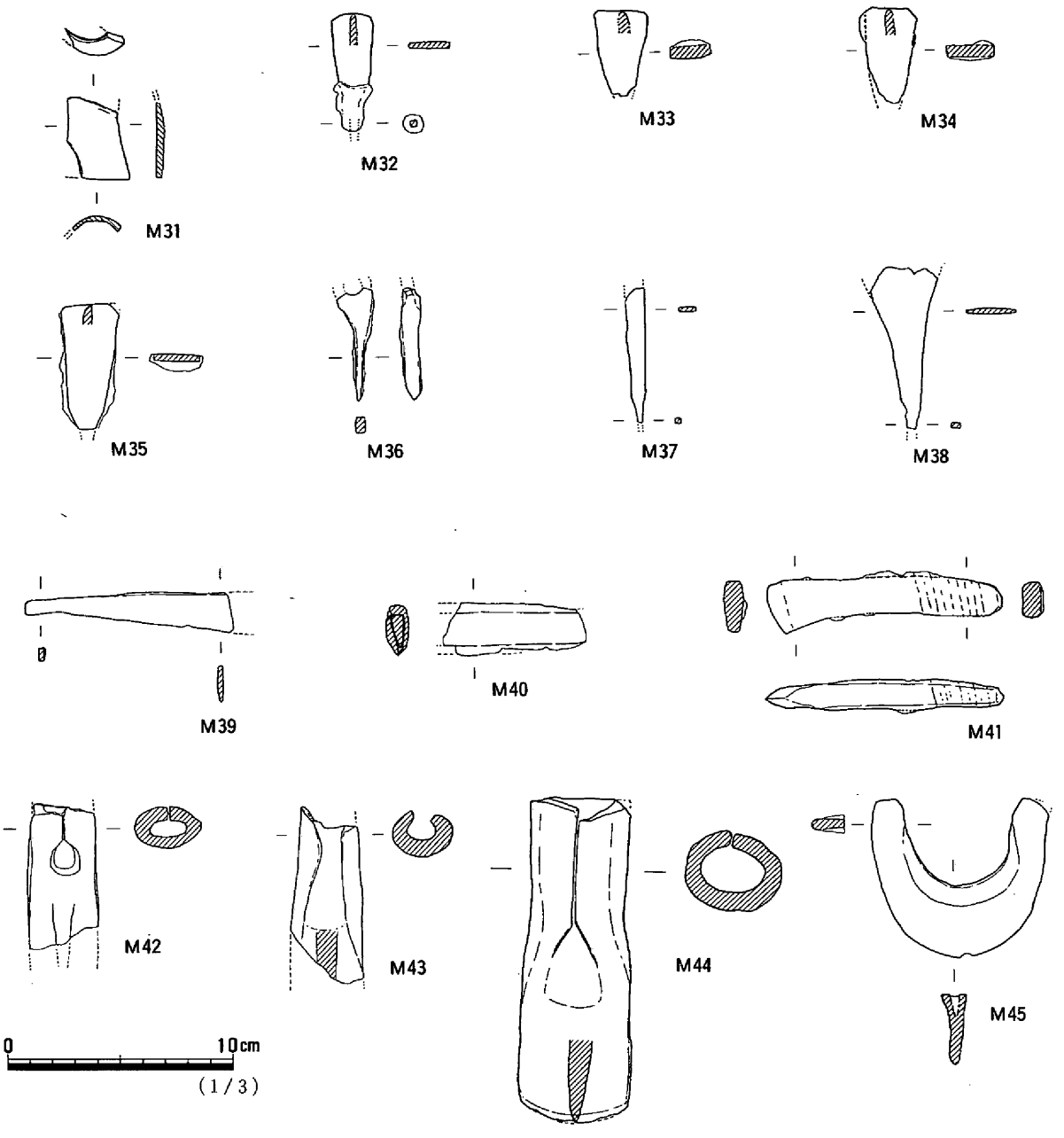
S25～S27は石匙で、S25とS27は自然面を残す。S28・S29は石鏃で、S29は剥片を利用したものである。S30は打製石包丁で、両側に抉りをもうけている。S31～S33は、磨製蛤刃石斧である。いずれも刃部を欠いているが、その形状がよく残っている。材質は、S31とS33が安山岩で他は玢岩



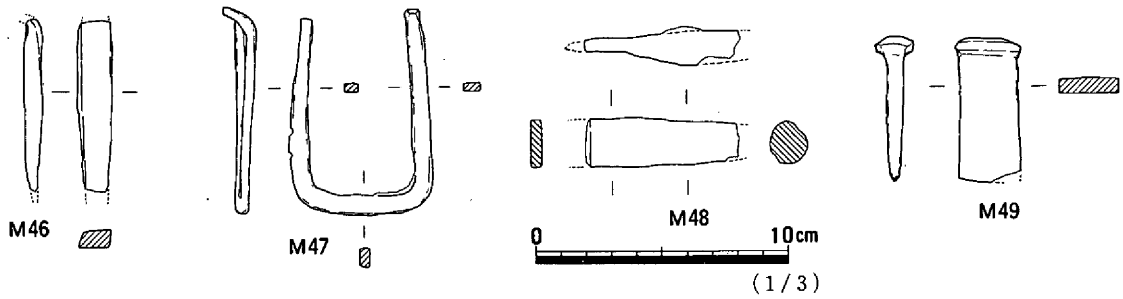
掲載番号	出土調査区	器種	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	孔径(mm)	重量(g)
S34	MM1	石斧	玄武岩	(95)	40	26		227.71
S35	KM4	叩き石	安山岩	167	77	31		680.00
S36	MM2	石錘	細粒砂岩	84	80	18		180.02
S37	MBOX3	砥石	流紋岩	225	42	36		545.24

である。

S34は、刃部が欠失しているため形状が不明である。**S35**は、叩き石である。両側が線状に叩いた痕が認められる。このような痕跡が残る使用方法は、石包丁の背部のブランティグなどに用いられたものではないかと考えられる。**S36**は石錘で、扁平な石の両側を欠いて用いている。**S37**は、流紋岩の砥石である。4面ともすべて使用されている。特に、2面は深く溝状になっている箇所が複数残されている。　(下澤)



掲載番号	出土調査区	器種	材質	法量				備考
				最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	
M31	MM4	不明銅器	銅	(38.3)	22.6	4.5	15.98	
M32	MM3	鏃	鉄	(5.2)	1.8	0.5	7.98	方頭細広根斧箭式
M33	MBOX2	鏃	鉄	(38.3)	24.2	4.7	12.38	方頭広根斧箭式
M34	MM1	鏃	鉄	(43.7)	25.8	4.5	11.43	方頭広根斧箭式
M35	MM2	鏃	鉄	(57.0)	26.0	2.5	23.91	方頭広根斧箭式
M36	MM3	針?	鉄	(50.0)	8.0	5.0	8.41	
M37	MBOX3	鏃	鉄	(60.8)	8.6	3.8	3.49	
M38	MM6	鏃	鉄	73.3	29.0	3.5	10.42	
M39	MS1	刀子	鉄	(92.0)	(19.0)	(3.0)	11.25	
M40	MM1	刀子	鉄	(62.5)	14.5	5.5	26.02	鉄製鞘が残る
M41	MBOX1	斧	鉄	105.0	32.0	13.0	51.53	
M42	MBOX3	斧	鉄	(65.5)	31.0	8.6	65.37	
M43	MBOX2	斧	鉄	(7.6)	32.0	10.0	74.51	
M44	KB1	斧	鉄	146.0	51.0	10.0	383.40	
M45	MBOX3	鋤先	鉄	70.5	79.5	7.5	69.55	



(1/3)

掲載番号	出土調査区	器種	材質	法量				備考
				最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	
M46	MBOX3	釘	鉄	(68.8)	14.0	7.7	15.68	
M47	MM2	把手?	鉄	(81.5)	47.0	5.0	29.95	
M48	MM3	鑿	鉄	(61.6)	18.8	8.2	25.83	
M49	MM4	楔	鉄	57.0	23.0	6.5	37.43	

金属器

M31は器種が不明の銅製品である。下端部分は、楕円を描くように見られるが欠失がほとんどであるため判断しがたい。出土層位は、古く遡らしても古代までであり、中世から古代の遺構検出中に出土したのである。

M32～M38は、鉄鏃である。M32～M35は斧箭式に属するもので、その内のM32は方頭細根で他は方頭広根に分類されるものである。M32は、身に接して茎が認められるが他は欠失していて不明である。M36は、透かしが認められる。M37は、篦被ぎ部分である。M38は、雁股式に含まれるものと想定される。

M39とM40は、刀子の茎と刀身の部位であり、M39は無関のものである。また、M40は鉄製の鞘の中に認められる。

M41～M44は、鉄斧である。M41には柄を取り付けた痕が認められる。M42～M44は袋状鉄斧で、M44は完形品である。

M45は、鋤先である。遺存状態は良好である。

M46は、釘としたが扁平な形状を示していることから他の器種の可能性も考慮される。

M47は、「コ」の字状で開いてる部分が狭まっている形状を示す。開いている片方は、欠失して不明であるがもう一方のそれは屈曲させている。このようなことから、把手部分とした。

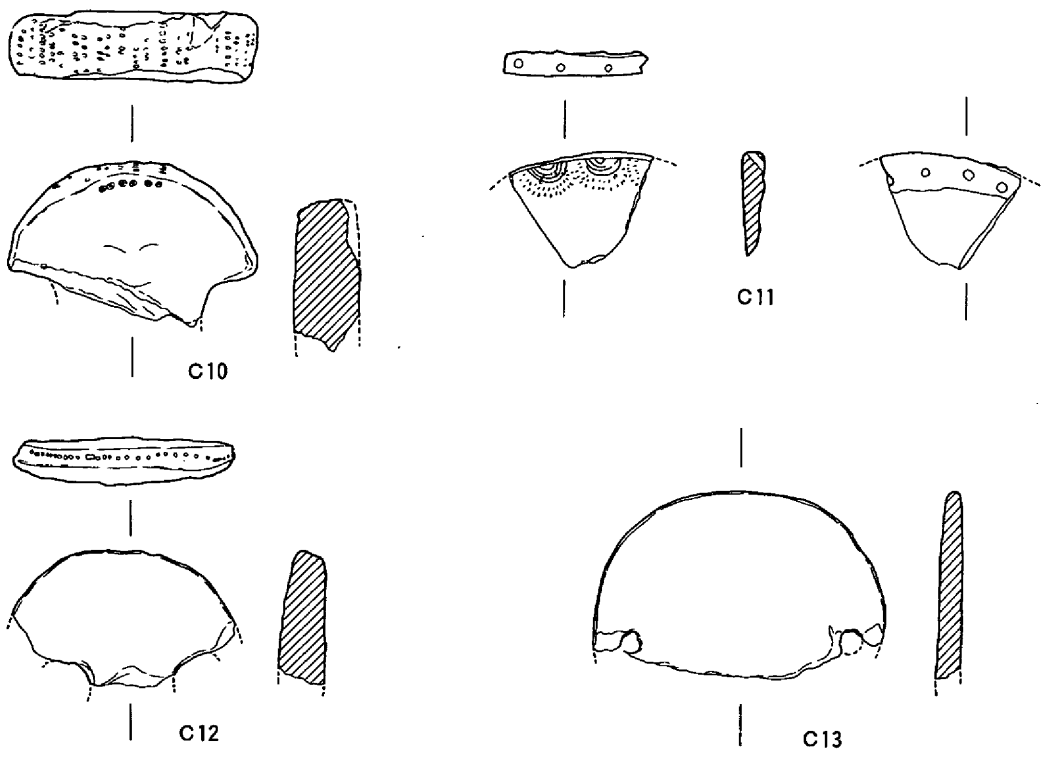
M48は、残欠の左右の形状が円と方を示している。このことから、鑿とした。

M49は、扁平な形状を示し頭部が「T」字状になつている。このことから、一応楔とした。

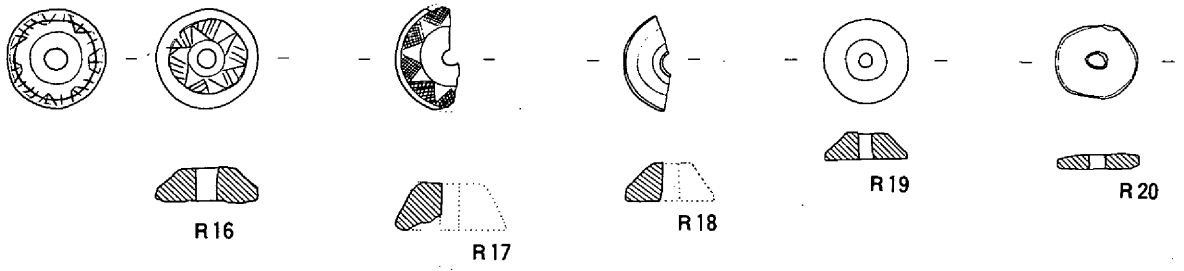
(下澤)

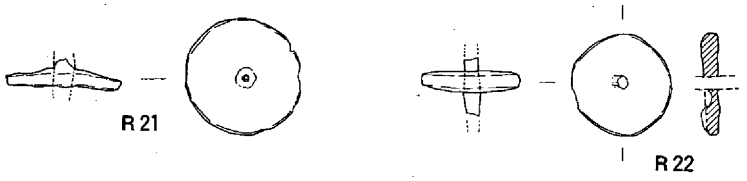
分銅形土製品

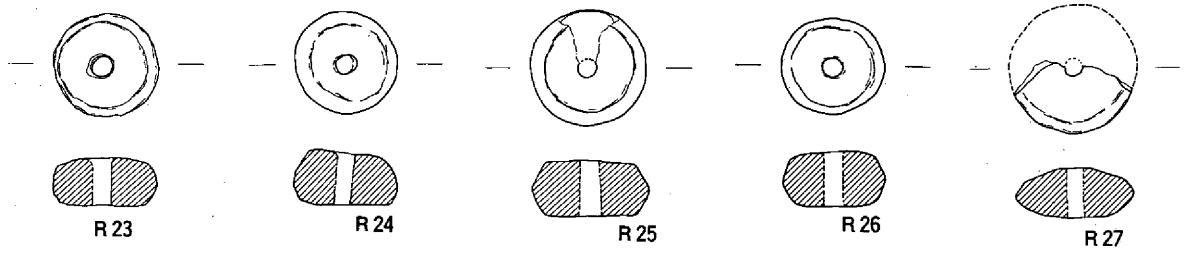
C10～C13は、分銅形土製品である。C10は、上半部の破片で抉り部はあまり大きくなく、端面も平坦となる。文様は、細いヘラにより目と口が描かれている。端部には、円形の刺突文の一部が認められ、端面には刺突文が施文されている。C11は、上半部の小破片である。端部には、重弧文とそれを縁取るように刺突文がなされ文様の単位として用いられている。端面は、面取りされて平坦となりその部分から斜めに背面に抜ける孔を設けている。この文様を用いるものは、時期的に弥生時代中期後葉に伴う例が多い。C12は、上半部の破片と考えるもので抉り部は弧を描くようである。断面形態は、やや膨らみのある形状を示し、端面は平坦ぎみとなり刺突文が付されている。C13は、小判形の形状を示し、断面形態はやや膨らみのある形状を示し、端面は丸くしている。抉り部は、その部分と考えられる所に背面に抜ける孔があり、これを抉り部とした。しかしながら、明確に分銅形土製品として扱うのには躊躇するのである。その可能性が考えられるのは、形状でありさらに付け加えるならば、先に抉り部とした背面に抜ける孔がその形骸化したものとして残されたと判断した場合であろう。なお、遺存部分を上半部としたが判断しがたいのである。　（下澤）

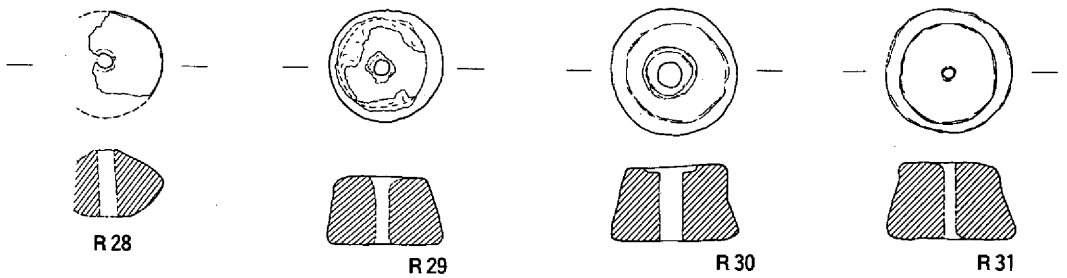


掲載番号	調査区	器種	色調	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	備考
C10	MM2	分銅形土製品	橙7.5YR7/6	(44.0)	66.0	12.2	
C11	KM1	分銅形土製品	灰白10YR8/2	30.0	(38.0)	6.0	
C12	MBOX3	分銅形土製品	橙5YR6/8	36.0	59.0	12.5	
C13	MM2	分銅形土製品	にぶい黄褐10YR7/4	50.0	78.0	7.0	



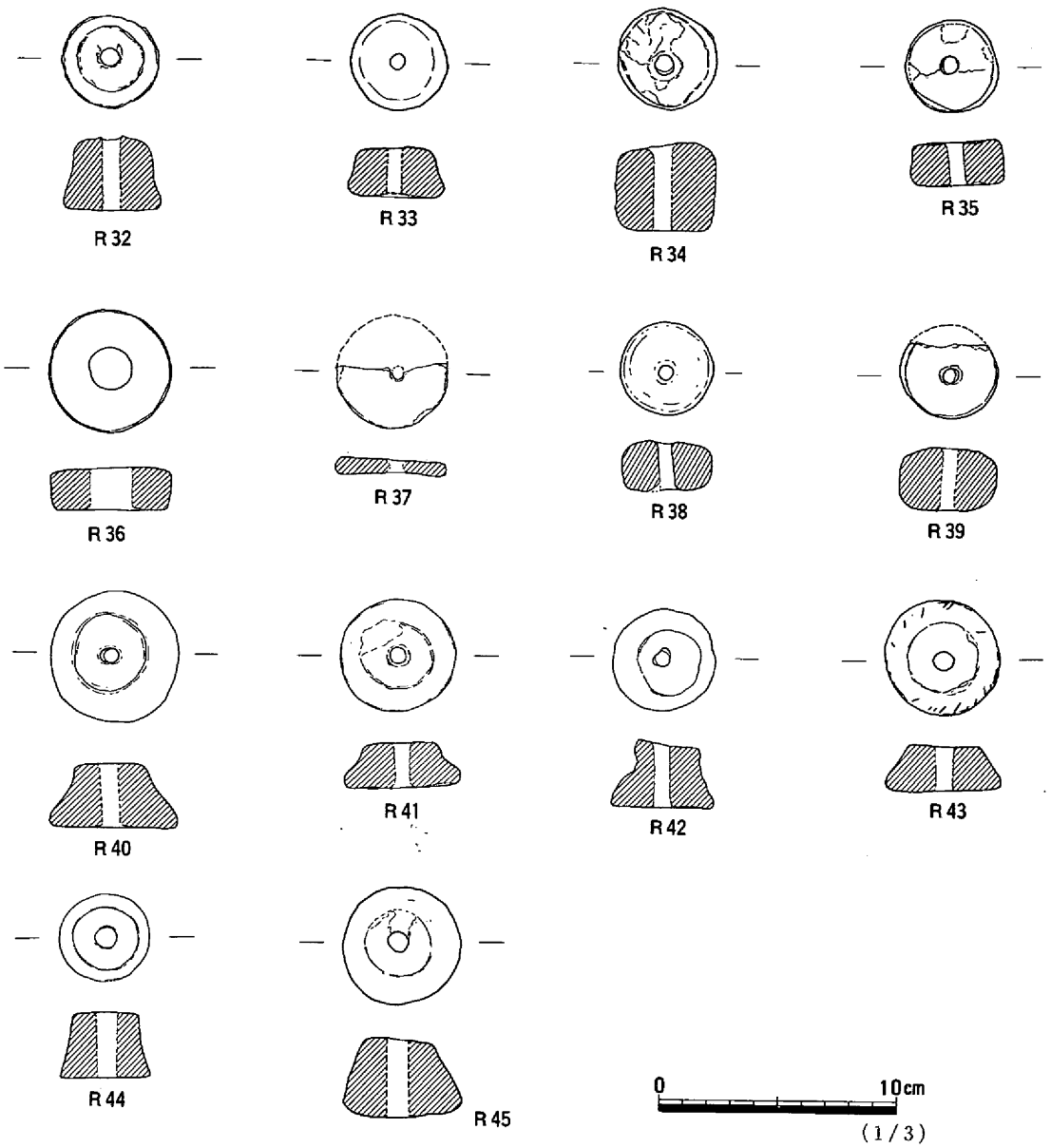






(1/3)

掲載番号	出土調査区	器種	材質	形態	色調	最大径(mm)	最大厚(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
R16	KS2	紡錘車	滑石	−		上径22　下径41	13	9	31.34	
R17	KM1	紡錘車	滑石	−		上径23　下径(44)		6	18.36	
R18	KB1	紡錘車	滑石	−		上径(16)　下径(36)		(6)	12.03	
R19	MM5	紡錘車	滑石	−		上径16　下径33	18	5	15.47	
R20	KB1	紡錘車	滑石	−		径29～32	6		6.88	
R21	KM1	紡錘車	鉄	−		径46.0		6.0	23.57	
R22	MBOX3	紡錘車	鉄	−		径41.5		5.5	23.23	
R23	KM6	紡錘車	土	A	明褐7.5YR5/6	42.5	19.5	7.3	39.5	
R24	MM1	紡錘車	土	A	橙7.5YR6/6	41.8	22.1	6.5	43.0	
R25	KM6	紡錘車	土	A	褐灰10YR5/1	46.3	22.8	上7.2　下9.0	56.8	
R26	KM7	紡錘車	土	A	にぶい黄2.5Y6/3	41.0	22.0	7.5	40.1	
R27	KM3西	紡錘車	土	B	にぶい橙7.5YR6/4	52.0	19.8	6.8	(21.5)	
R28	MBOX3	紡錘車	土	C	にぶい黄橙10YR6/4	43.0	27.7	6.1	(16.7)	
R29	KM6	紡錘車	土	D1	明褐灰7.5YR7/2	45.6		5.5	69.1	
R30	KM4	紡錘車	土	D1	にぶい黄橙10YR6/3	52.5	33.5	9.0	88.5	
R31	MM2	紡錘車	土	D1	橙5YR6/6	50.9	30.4	5.5	87.4	



掲載番号	出土調査区	器種	材質	形態	色調	最大径(mm)	最大厚(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
R32	MM6	紡錘車	土	D1	橙7.5YR6/6	39.5	31.4	6.4	51.3	
R33	KM2	紡錘車	土	D1	にぶい黄橙10YR7/4	40.6	21.2	6.2	36.51	
R34	MM3	紡錘車	土	E1	灰黄2.5Y6/2	43.1	37.1	7.9	68.5	
R35	MM4	紡錘車	土	E1	にぶい黄橙10YR7/3	39.8	18.3	6.8	37.4	
R36	KM6	紡錘車	土	E1	褐灰10YR6/1	51.4	18.4	17.4	52.9	
R37	MM2	紡錘車	土	E1	橙7.5YR6/6	46.8	7.5	5.7	(11.0)	
R38	KM4	紡錘車	土	E2	にぶい黄橙10YR7/2	39.0	21.5	6.1	33.6	
R39	MBOX3	紡錘車	土	E2	にぶい黄橙10YR6/3	41.4	26.7	6.3	(40.0)	
R40	KM5	紡錘車	土	F1	にぶい黄橙10YR6/4	53.0	27.0	7.5	74.5	
R41	MM6	紡錘車	土	F1	にぶい黄橙10YR7/3	47.2	19.0	6.1	41.2	
R42	KM6	紡錘車	土	F1	にぶい黄橙10YR7/3	43.1	28.4	6.5	43.5	
R43	MBOX3	紡錘車	土	F1	橙7.5YR6/6	49.0	19.7	7.5	48.0	
R44	KM4	紡錘車	土	D1	灰黄褐10YR6/2	37.1	27.9	9.0	39.3	
R45	KM5	紡錘車	土	F2	にぶい黄橙10YR7/4	49.7	33.5	9.0	73.50	

紡錘車

石製、鉄製、土製を含め比較的多くの紡錘車が出土したが、そのほとんどは遺構に伴わずここで扱う。R16～R20は石製である。いずれも滑石製でR16・R17には鋸歯文が描かれている。R20を除き断面台形をなす。遺構に伴うものも含め石製の紡錘車は8個体出土した。R21・R22は鉄製である。鉄製紡錘車はここで図示した以外に遺構に伴うものが1個体ある。R23～R45は土製の紡錘車である。表に示した形態分類は第2章に示したとおりであるが、注目されるのは断面形が算盤玉をなすR23～R26である。朝鮮半島系のものと思われ、遺構に伴うものとあわせ5個出土している。　(大橋)

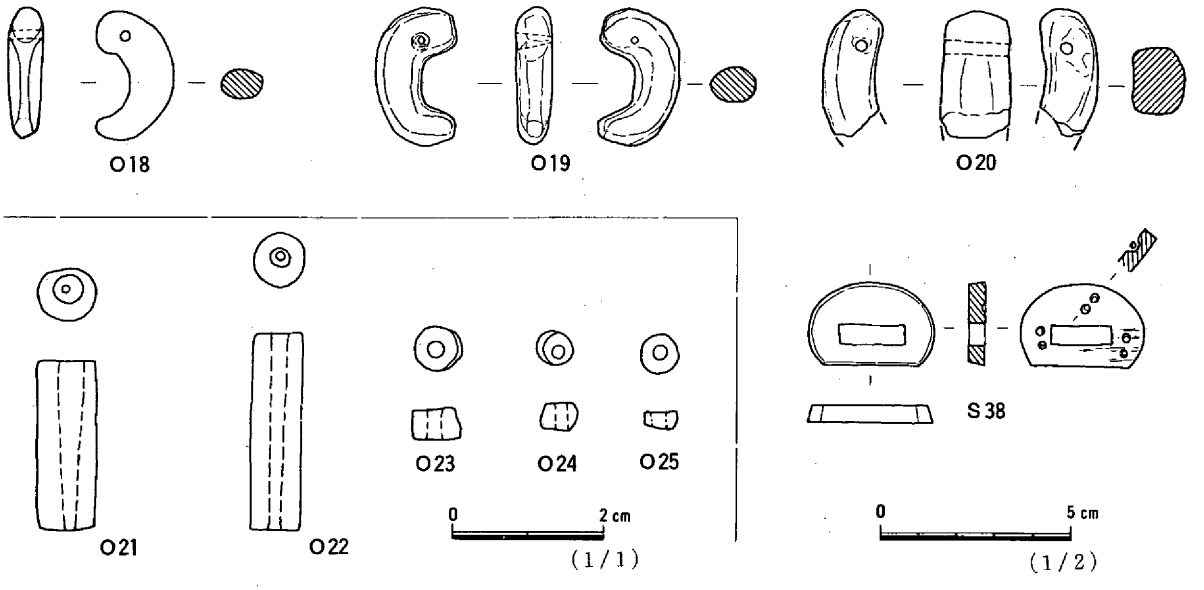
装飾品

O18～O20は、勾玉である。O18は、滑石製で形状の整ったものである。O19は碧玉製で、孔は片面穿孔である。O20は土製で、一部を欠いている。

O21とO22は、管玉である。この両者は、いずれも碧玉製で孔は片面穿孔である。

O23～O25は、臼玉である。O24とO25には稜が見られる。

S38は、蛇紋岩製の石帯である。丸鞆であり、潜り孔が3か所設けられている。　(下澤)



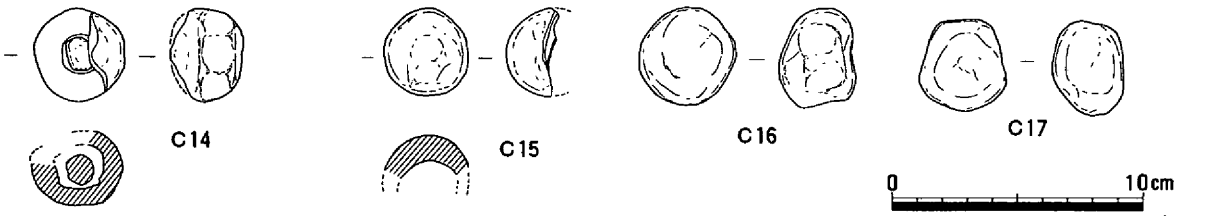
掲載番号	調査区	器種	材質	色調	最大長(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
O18	KB1	勾玉	滑石	緑灰(7.5GY5/1)	34.00	9.00		7.22	
O19	MS2	勾玉	碧玉	淡灰緑に濃い緑	36.20	21.55	0.9	9.61	
O20	KM6	勾玉	土	灰白色	33.90	16.00	1.8	10.48	
O21	MM3	管玉	碧玉	暗オリーブ灰	22.35	7.99	(上)4 (下)1	2.63	
O22	MM6	管玉	碧玉		26.25	7.20	(下)1.6	2.18	
O23	KM3西	臼玉	滑石	濃い緑	4.10	6.30	2.1	0.27	
O24	KM2	臼玉	滑石	灰色	3.80	4.80	1.7	0.15	
O25	MM2	臼玉	滑石	暗灰オリーブ	2.80	5.25	1.0	0.11	

掲載番号	出土調査区	器種	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	孔径(mm)	重量(g)
S38	MM4	石帯	蛇紋岩	22.50	32.9	4.8		5.95

土鈴

斎富遺跡の中で注目される出土遺物に土鈴がある。遺構に伴うものも合わせ５個体出土している。これらはいずれも手ずくね状に作られており、４cm弱のいびつな球形をなすものである。１個体のみ中の芯を確認したが、径１cmほどの球体である。

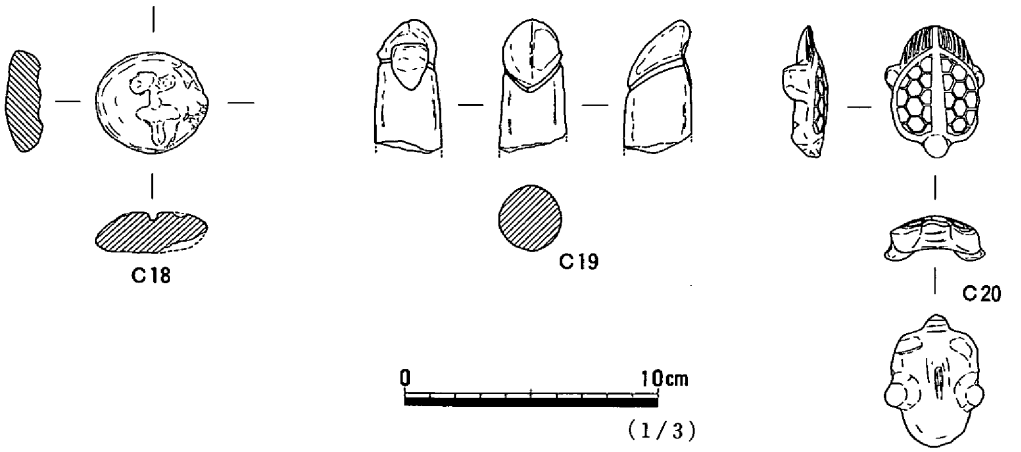
時期については遺構に伴ったものも柱穴からの出土であり、確実性に欠けるものの、すべて古墳時代後半の時期の中で捉えられるものと判断している。　（大橋）



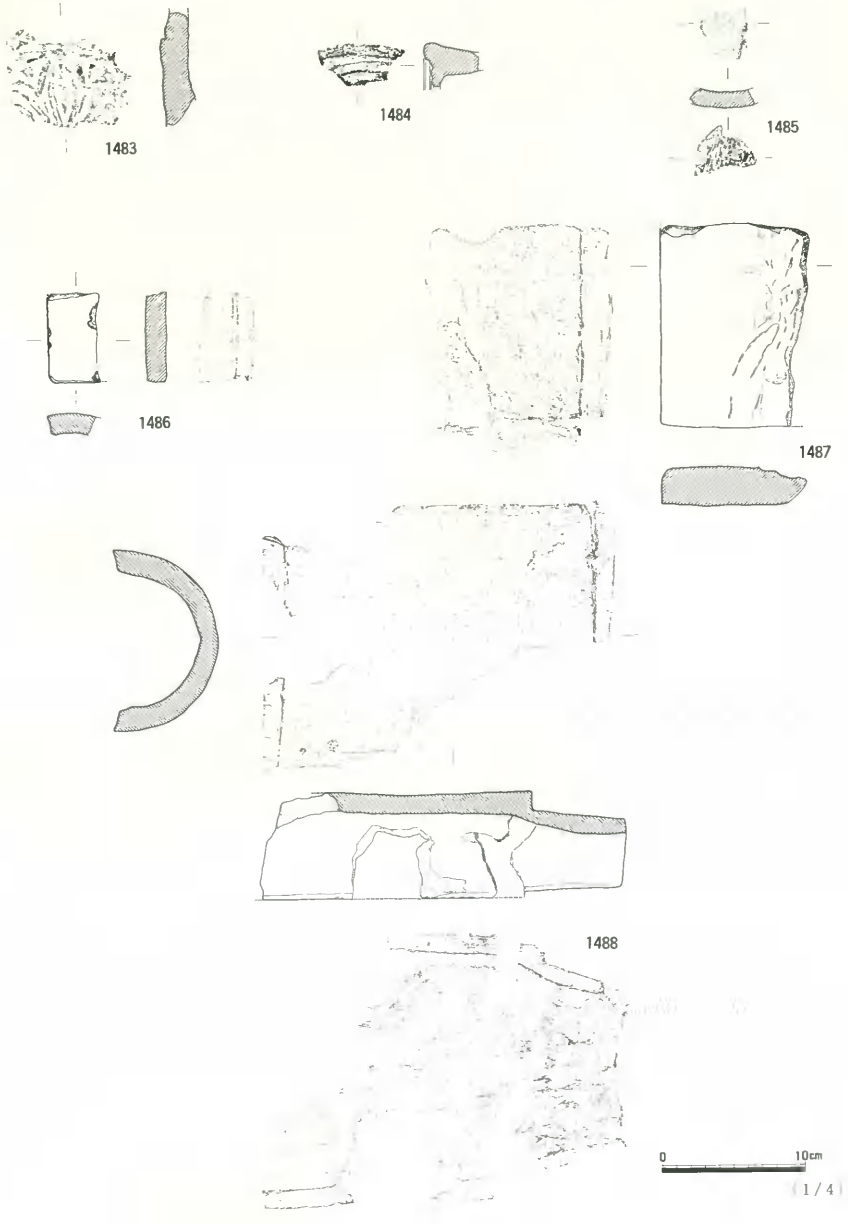
掲載番号	調査区	器種	色調	最大長(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
C14	MM6	土鈴	橙7.5YR/6	37.0	36.0	(38.4)	半割・玉あり
C15	MBOX1	土鈴	橙5YR6/6	35.0	33.0	(16.6)	半割
C16	MM6	土鈴	明赤褐5YR5/6	39.0	38.0	29.5	完形
C17	MBOX3	土鈴	灰黄褐10YR5/2	37.5	27.5	29.5	完形

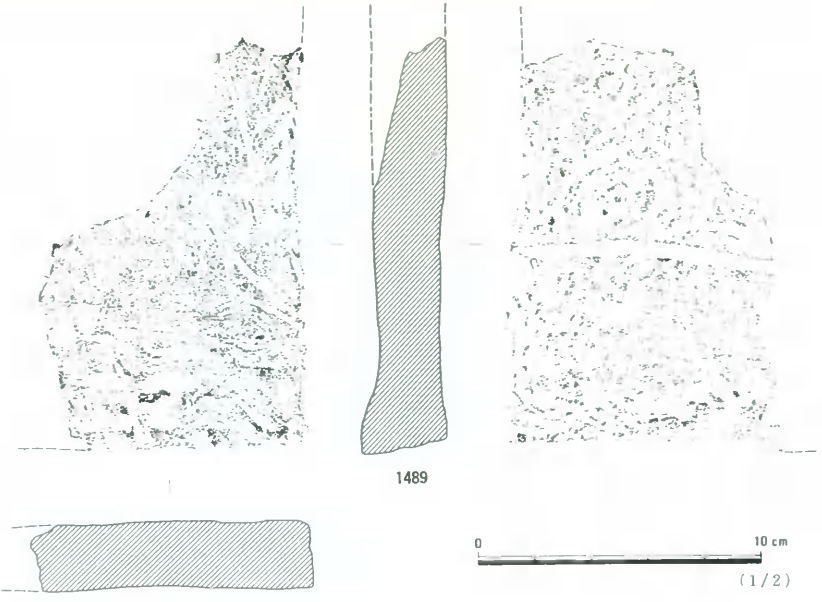
その他の土製品

C18は円盤状土製品とした。しかしながら、表面の上部分に押圧によるくぼみがあり、中ほどには同じような浅いくぼみを認める。この横のくぼみを縦の深い沈線によりつなげ、さらにその下に縦の浅いくぼみをのばしている。これらの３か所のくぼみは、それぞれの施文内容が異なるようである。横位のくぼみの内の上部分は、くぼみの中ほどが狭まるりくぼみの左右が深くなっているが、下のものはそのような形状を示さない。縦の文様部分は、両者を結ぶのは明確な沈線であり、下のものはくぼみで先を丸く終わらせている。このように文様の内容が異なることから、そのことにより各部分を表現したと思われる。したがって、人面を表現した土製品と思考される。**C19**は、男根形土製品であり、非常に写実的である。**C20**は、亀形土製品であり、裏面に孔が認められることから何かの製品に飾りとして取り付けられていたものと想定される。　（下澤）



掲載番号	調査区	器種	色調	最大長(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
C18	MBOX3	円盤状土製品	にぶい橙7.5YR7/4	44.5	15.0	26.87	ほぼ完形、人面か？
C19		男根形土製品		49.5	25.5		
C20		亀形土製品		51.5	12.0		腹面に孔


1483
1484
1485
1486
1487
1488
0
10cm
1/4



掲載番号	出土調査区	種別	出土量	特徴・備考
1483	MM1	軒丸瓦	厚さ1.8cm	瓦当単弁八弁　備前国分寺Ⅰ類
1484	MM4	軒丸瓦	厚さ1.8cm	外縁部破片
1485	MS2	平瓦	厚さ0.8cm	凹面布目　凸面縄目
1486	MM2	丸瓦？	厚さ1.2cm	小片　凹面布目
1487	MM6	熨斗瓦？	厚さ2.4cm	背面縄目
1488	MM2	丸瓦	現存長25.2cm　幅12.5cm　厚さ1.2cm	玉縁　凹面布目
1489	MS2	塼	現存長14.3cm　厚さ3.8cm	背面同心円タタキメ

瓦・塼

1483～**1488**として図示したのは瓦である。瓦の出土量は、遺構に伴うものと合わせても比較的少なく、特に軒瓦は微量であった。

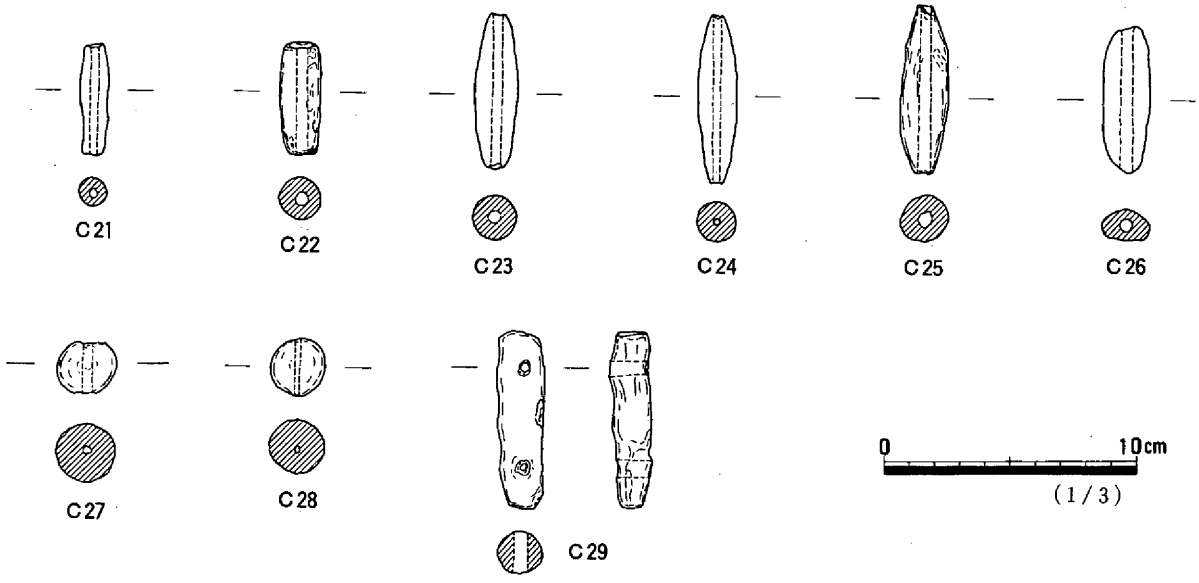
1483・**1484**は軒丸瓦である。**1483**は破片であるものの、単弁八弁に復元でき、備前国分寺Ⅰ類に近似する。1484は外縁部の破片である。**1485**は平瓦であり、凹面には布目、凸面には縄目が観察される。**1486**は小片で詳細は判らないが丸瓦と思われる。**1486**は熨斗瓦の可能性を考えた。**1488**は玉縁を持つ丸瓦で、凹面には細かい布目が見られ、凸面は丁寧なナデが施されている。図示したものの他、凸面に格子叩き目が認められるものもある。

これらの瓦は、そのほとんどが前田調査区から出土している。　（大橋）

注目されるのは**1489**の須恵質の塼(せん)である。溝13の北端の東付近で検出された溝状の土壙から出土したものである。表裏ともに淡灰色を呈しやや軟質な焼成である。全形は不明であるが、片面には、同心円タタキが全体に施され、もう一方には粗いナデの後、藁状の繊維の圧痕が看取される。時期的には、共伴遺物から6世紀末から7世紀初頭に比定される特筆すべき遺物である。　（岡田）

土錘

土錘は、斎富遺跡全体で113個体出土している。ただし、遺構に伴うものは少なく、そのほとんどは詳細な時期が不明と言わざるを得ない。表中の形態分類は第２章第２節に示すとおりであるが、大きくは、Ａ：寸胴で孔が中央を貫通するもの、Ｂ：上下の端部が細い紡錘形をなすもの、Ｃ：球形で孔があるもの、Ｄ：両端に孔があるもの、の４別にできる。図示したものは、各分類の例である。図示しなかったものは表としてまとめた。数量的にはＢ類が最も多く、つづいてＡ類が多い。Ｃ類、Ｄ類は希有であった。特にＤ類については、図に示した１個体のみである。　(大橋)



掲載番号	調査区	器種	色調	最大長(mm)	最大幅(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
C21	土錘	A－Ⅳ	明赤褐5YR5/8	45.0	11.5	3.0	5.4	
C22	土錘	A－Ⅲ	灰黄2.5Y7/2	45.0	16.0	5.2	13.2	
C23	土錘	B－Ⅱ	橙5YR7/6	62.5	16.5	5.5	3.7	
C24	土錘	B－Ⅱ	にぶい黄橙10YR7/2	68.0	16.6	3.8	15.9	
C25	土錘	B－Ⅱ	にぶい黄橙10YR7/3	67.5	19.0	5.5	18.7	
C26	土錘	B－Ⅲ	橙5YR6/8	(6.0)	(1.9)	0.5	16.9	
C27	土錘	C	明赤褐5YR5/6	20.0	24.0	4.0	11.7	
C28	土錘	C	にぶい橙7.5YR7/4	23.0	22.0	2.0	11.4	
C29	土錘	D	にぶい黄橙10YR7/3	75.0	19.0	5.5	22.0	
－	土錘	A－	にぶい橙7.5YR7/4	(49.5)	17.5		(14.9)	
－	土錘	A－	にぶい橙7.5YR6/4	(36.1)	15.0		(7.9)	
－	土錘	A－	にぶい橙7.5YR7/4	(33.2)	(11.2)		(3.4)	
－	土錘	A－Ⅱ	明赤褐5YR5/6	(78.0)	26.4		44.5	
－	土錘	A－Ⅱ	灰白10YR8/2	64.5	23.0	6.48	34.3	
－	土錘	A－Ⅲ	にぶい黄橙10YR6/3	60.2	17.6		20.7	
－	土錘	A－Ⅲ	浅黄橙10YR8/3	47.7	19.2		18.4	
－	土錘	A－Ⅲ	にぶい黄橙7.5YR7/3	(58.0)	18.0	5.0	(16.6)	
－	土錘	A－Ⅳ	橙7.5YR6/6	(40.0)	10.0	3.0	(4.8)	
－	土錘	B－	にぶい橙7.5YR6/4	(26.1)	13.7		(3.2)	
－	土錘	B－	にぶい橙7.5YR7/4	(39.9)	21.1		(14.8)	
－	土錘	B－	浅黄橙10YR8/3	(51.5)	18.4		(17.8)	
－	土錘	B－	にぶい橙7.5YR6/4	(45.8)	20.2		(18.5)	
－	土錘	B－	浅黄橙7.5YR8/3	(34.1)	(17.4)		(6.3)	
－	土錘	B－	橙7.5YR6/6	(40.9)	14.3		(12.2)	
－	土錘	B－	にぶい橙7.5YR7/4	(37.8)	13.3		(7.0)	
－	土錘	B－	にぶい橙7.5YR6/4	(53.5)	18.0	2.9	(18.0)	
－	土錘	B－	にぶい橙7.5YR6/4	(41.5)	16.5	2.2	(11.2)	
－	土錘	B－	にぶい黄橙10YR7/4	(38.5)	11.0	3.4	(4.2)	
－	土錘	B－	明黄褐10YR6/6	(38.0)	17.5	5.3	(12.7)	
－	土錘	B－	にぶい黄橙10YR7/3	(40.0)	16.0	4.7	8.6	
－	土錘	B－	にぶい橙7.5YR7/4	(33.5)	18.5	5.1	10.9	
－	土錘	B－	にぶい橙7.5YR6/4	(55.5)	19.0	4.8	19.3	
－	土錘	B－	明赤褐2.5YR5/6	(25.5)	10.0	3.1	2.7	
－	土錘	B－Ⅰ	橙5YR6/6	(64.0)	24.0	4.0	27.8	
－	土錘	B－Ⅰ	橙5YR6/6	(86.8)	17.0		23.3	

掲載番号	調査区	器種	色調	最大長(mm)	最大幅(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
−	土錘	B－Ⅱ	橙5YR6/6	(49.5)	17.0	5.0	(11.9)	
−	土錘	B－Ⅱ	にぶい黄橙10YR7/3	69.4	15.9		13.7	
−	土錘	B－Ⅱ	にぶい黄橙10YR7/2	48.0	13.1		6.8	
−	土錘	B－Ⅱ	浅黄橙7.5YR8/4	61.8	20.6		24.4	
−	土錘	B－Ⅱ	橙5YR6/6	65.5	14.5	4.5	16.4	
−	土錘	B－Ⅱ	にぶい橙7.5YR7/4	61.5	19.5	5.7	2.4	
−	土錘	B－Ⅱ	にぶい黄橙10YR6/4	64.0	14.0	4.2	13.2	
−	土錘	B－Ⅱ	橙5YR7/6	(43.0)	10.0	3.6	(4.4)	
−	土錘	B－Ⅱ	にぶい黄橙10YR6/4	61.0	20.0	4.7	22.9	
−	土錘	B－Ⅱ	にぶい黄橙10YR7/3	62.0	20.0	3.8	23.7	
−	土錘	B－Ⅱ	にぶい橙7.5YR7/4	65.5	18.5	4.9	22.3	
−	土錘	B－Ⅱ	褐灰10YR4/1	(55.0)	16.0	3.7	14.6	
−	土錘	B－Ⅱ	橙7.5YR6/6	(49.0)	13.5	4.9	8.3	
−	土錘	B－Ⅱ	にぶい黄2.5Y6/2	(51.4)	22.5	4.5	16.9	
−	土錘	B－Ⅲ	にぶい橙7.5YR7/4	(33.5)	14.0	4.5	(5.7)	
−	土錘	B－Ⅲ	にぶい橙7.5YR6/4	57.5	19.0	6.0	16.7	
−	土錘	B－Ⅲ	にぶい黄橙10YR6/3	(48.5)	13.4	2.9	(7.8)	
−	土錘	B－Ⅲ	灰白10YR8/2	(4.2)	1.8		6.9	
−	土錘	B－Ⅲ	橙5YR6/6	(47.5)	16.5	3.0	(7.6)	
−	土錘	B－Ⅲ	橙5YR7/6	(49.5)	10.4		(5.0)	
−	土錘	B－Ⅲ	にぶい黄橙10YR7/2	56.5	13.0		7.8	
−	土錘	B－Ⅲ	灰褐10YR5/1	(40.2)	12.6		(6.2)	
−	土錘	B－Ⅲ	灰黄褐10YR5/2	52.3	12.5		8.0	
−	土錘	B－Ⅲ	にぶい橙7.5YR6/4	(52.5)	14.0	4.0	(10.3)	
−	土錘	B－Ⅲ	灰黄褐10YR6/2	(4.8)	1.8		14.1	
−	土錘	B－Ⅲ	にぶい橙7.5YR7/4	(30.5)	12.5	4.0	3.5	
−	土錘	B－Ⅲ	浅黄2.5YR7/3	43.0	11.5	3.0	4.8	
−	土錘	B－Ⅲ	灰黄褐10YR5/2	49.1	15.3		(9.7)	
−	土錘	B－Ⅲ	にぶい黄10YR7/4	51.9	14.0		11.2	
−	土錘	B－Ⅲ	にぶい黄10YR7/4	58.1	14.4		11.4	
−	土錘	B－Ⅲ	橙5YR7/6	54.7	11.3		7.1	
−	土錘	B－Ⅲ	橙5YR7/6	56.4	9.9		5.3	
−	土錘	B－Ⅲ	橙7.5YR7/6	(38.5)	12.4		(4.9)	
−	土錘	B－Ⅲ	灰褐7.5YR6/2	48.3	18.3		11.0	
−	土錘	B－Ⅲ	にぶい橙7.5YR6/4	(43.8)	11.4		(5.7)	
−	土錘	B－Ⅲ	灰白7.5YR8/2	49.9	10.7		5.4	
−	土錘	B－Ⅲ	橙5YR6/6	(50.0)	12.8		7.5	
−	土錘	B－Ⅲ	橙5YR6/6	(54.0)	20.8		20.0	
−	土錘	B－Ⅲ	明赤褐5YR5/6	(52.8)	17.8		(16.0)	
−	土錘	B－Ⅲ	橙2.5YR6/6	47.0	12.6		(6.1)	
−	土錘	B－Ⅲ	灰白10YR8/2	(43.0)	11.8		(5.4)	
−	土錘	B－Ⅲ	浅黄橙10YR8/3	45.3	14.2		7.5	
−	土錘	B－Ⅲ	橙2.5YR6/6	(34.6)	13.2		(4.6)	
−	土錘	B－Ⅲ	橙5YR6/6	(57.9)	18.4		15.1	
−	土錘	B－Ⅲ	橙5YR6/6	(42.7)	13.9		(7.0)	
−	土錘	B－Ⅲ	橙7.5YR7/6	(46.9)	19.2		15.0	
−	土錘	B－Ⅲ	灰黄2.5YR7/2	62.9	17.8		15.4	
−	土錘	B－Ⅲ	にぶい黄橙10YR7/3	(43.5)	17.4		(11.9)	
−	土錘	B－Ⅲ	灰白10YR8/1	59.1	19.3		23.2	
−	土錘	B－Ⅲ	にぶい橙7.5YR7/4	(49.4)	15.0		(9.8)	
−	土錘	B－Ⅲ	にぶい橙7.5YR7/4	59.7	18.3		21.3	
−	土錘	B－Ⅲ	橙5YR7/6	(49.0)	16.0	4.5	(10.8)	
−	土錘	B－Ⅲ	にぶい黄橙10YR7/4	50.5	14.0	4.0	9.8	
−	土錘	B－Ⅲ	にぶい黄橙10YR7/4	(47.0)	11.0	3.5	(5.7)	
−	土錘	B－Ⅲ	橙5YR6/6	(41.0)	12.0	4.1	(5.8)	
−	土錘	B－Ⅲ	にぶい黄2.5Y6/3	(50.0)	18.0	6.7	(15.6)	
−	土錘	B－Ⅲ	にぶい橙7.5YR7/4	52.5	22.5	5.6	24.4	
−	土錘	B－Ⅲ	にぶい橙7.5YR7/4	(46.5)	15.0	3.5	11.5	
−	土錘	B－Ⅲ	橙5YR6/6	57.0	17.5	5.2	15.3	
−	土錘	B－Ⅲ	橙7.5YR6/6	49.0	17.5	4.8	13.3	
−	土錘	B－Ⅳ	橙7.5YR6/6	(23.1)	8.6		(1.4)	
−	土錘	B－Ⅳ	灰黄褐10YR6/2	38.7	9.3		3.5	
−	土錘	B－Ⅳ	灰白10YR8/2	39.5	10.2		3.5	
−	土錘	B－Ⅳ	橙2.5YR7/6	43.1	12.7		6.1	
−	土錘	B－Ⅳ	にぶい橙7.5YR7/3	36.0	9.4		3.1	
−	土錘	B－Ⅳ	橙5YR7/6	(18.2)	8.5		(1.2)	
−	土錘	B－Ⅳ	橙2.5YR6/6	(36.5)	10.0	3.0	(3.2)	

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告105

斎富遺跡

山陽自動車道建設に伴う発掘調査13

（第１分冊）

1996年３月21日　印刷

1996年３月31日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3

発　行　岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6

印　刷　岡山県農協印刷株式会社

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 105

斎　富　遺　跡

山　陽　自　動　車　道
建　設　に　伴　う　発　掘　調　査

13
(第2分冊)

1996

日本道路公団広島建設局岡山工事事務所
岡　山　県　教　育　委　員　会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 105

斎　富　遺　跡

山　陽　自　動　車　道
建　設　に　伴　う　発　掘　調　査

13
(第2分冊)

1996

日本道路公団広島建設局岡山工事事務所
岡　山　県　教　育　委　員　会

第５章　結　　語

第１節　調査成果の概要

斎富遺跡は、岡山県南東部の赤磐郡山陽町斎富に位置する。遺跡は小丘陵に挟まれた南西方向に向かってなだらかに傾斜する扇状地地形に立地する。調査以前では調査対象地は主に棚田として利用されていた。遺跡の南隣には縄文時代晩期の貯蔵穴で著名な南方前池遺跡[1)]が所在する。また、北1.5kmには古代山陽道が東西に延び、西約３kmほどには備前国分寺・尼寺、および岡山県下第３位の全長192ｍを測る前方後円墳である両宮山古墳が位置する。このような地理的・歴史的環境にあり、岡山県下でも有力地域の一つとして数えられる。

こうしたなかで第１章調査の経緯で冒頭に触れたように、山陽自動車道建設に伴いその路線内を第一次調査の結果をふまえて全面調査が実施された。調査面積は約27,150㎡である。

斎富遺跡では、立地したその地形的・地質的条件から必ずしも良好な状態で遺構・遺物を検出できたわけではなかった。とくに、遺跡全体に広がる礫層の存在は、遺構の検出を著しく困難にさせた。また、遺物においても後世の混入と認めざるをえない場合も多々あった。さらには、現在の棚田利用による大きな削平という条件も重なり、本書に掲載した遺構についても時期を含め若干の不確実性がが残るものである。そのため、第４章において遺構種別ごとに個別説明を加えた。

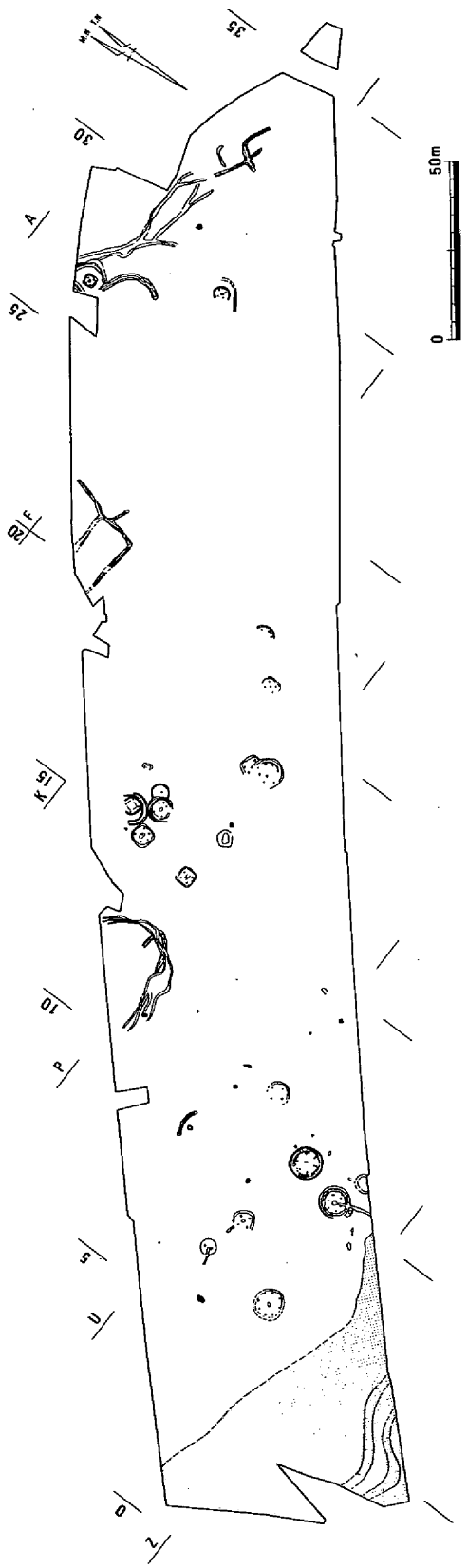
以下、本節では時期が判別できたものを中心に、これら調査成果を再構成して時期別に斎富遺跡の集落の変遷と遺物の概要について触れてみたい。

（１）縄文時代の遺構・遺物（第14図）

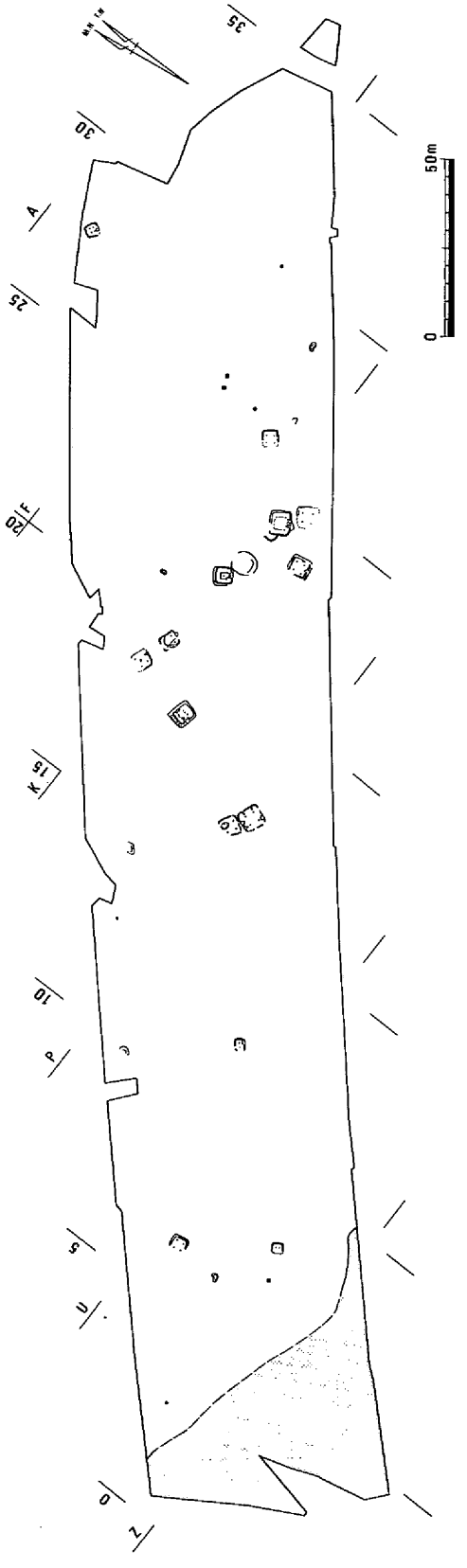
遺跡南隣には先に触れたように縄文時代晩期の南方前池遺跡があることから、この期に相当する遺構の存在が調査前に想定された。しかしながら、明らかにこの時期まで遡る遺構は、調査範囲の南西端部に広がる低位部で確認された溝１と、北東部に位置する土器溜り１のみである。このほか細片であるが縄文時代後期～晩期の土器が、遺構検出面までの掘り下げ中、および弥生時代の遺構の基盤層中から出土している。これら遺構に伴わないものは、北東側前田調査区に比較的多くみられる。出土した縄文土器の多くは細片であり、器壁が磨滅を受けていることからも二次的な堆積と考えられ、調査範囲外の近接した地点にこの時期の遺構が存在すると思われる。また、その集落規模自体もさほど大きいものでないことを想定している。溝１は、自然河道状のものであり縄文時代晩期中葉の遺物を包含するものである。土器溜り１については、第４章に詳細に記述したごとく、遺物自体は土壙状の遺構から検出されており、この時期の人為的行為の唯一の確証である。また、ここからは軟玉製の丸玉が検出されており、附編に分析結果の詳細を掲載したが、注目される遺物である。

（２）弥生時代の遺構・遺物（第14図）

弥生時代前期の遺構・遺物は確認されていない。先にみた縄文時代晩期の集落は継続しないようで



第14図　縄文・弥生時代の遺構配置図（1／2,000）



第15図　古墳時代前半期の遺構配置図（1／2,000）

ある。この後、弥生時代中期後半以降に集落が営まれる。なお、調査範囲の南西端部は低位部となっているようであり、遺構は広がらない。また、この低位部で土壌分析を行なった結果、附編の分析から後述するようにイネの花粉が検出されており、水田耕作が行なわれていた可能性が指摘できる。

弥生時代中期中葉から遺物は認められているが、遺構を伴うのは後葉からである。竪穴住居1は中期後葉の遺物を伴うもので、竪穴住居としては最も古く位置付けられる。平面形態の一部を認められたにすぎないが、隅丸方形を示すものと思考され柱穴も4本の方形の配置となり、かつ中央穴もその中に認められるなど遺存状態は良好ではなかったが極めて整ったものであったことが理解できるのである。この期において注目されるのが土壙墓の存在で、墓4がそれである。この時期より古い土壙墓が調査されている岡山市南方遺跡[2]や同雄町遺跡[3]では、まとまって多数の土壙が検出されているのと対照をなしている。このことは、集落規模に由来するものであろうか。さらに、斎富遺跡から南西方向に2.5kmの地点に四辻土壙墓群[4]が調査され、報告においては墓4の時期にすでに丘陵の上に営まれている。このような墓の在り方は、居住空間における水平的概念からそれを離れた垂直的概念への変化の過程を示すものであろうか。

そして、やや新しくなると竪穴住居、井戸、土壙と遺構が認められるようになる。竪穴住居10は、前時期の竪穴住居1と比較して規模が一回り大きいが形態が良く似ている。土壙は竪穴住居の近くに認められるが、井戸はこれらの同時期の遺構から南に100mほど離れて検出された。第9図の堆積土分布から見ると竪穴住居を構えているところは、礫の堆積が認められるところである。一方井戸の検出されたところはまったく礫の含まれない黄褐色土であることから、単純に掘削における容易さと湧水さらには保水性の関係だけであろうか。この他に、溝が認められるが溝4以外は後期までの遺物を含んでいる。

このように、中期後葉からの居住域は比較的狭い範囲に展開する様相を示していることから、これと離れて認められる同時期の遺構と一体として、把握することが難しい内容を示している。

弥生時代後期前葉

この段階で集落規模が拡大する傾向がみられ、竪穴住居は8軒、井戸1基、土壙10基、土器溜り11か所を調査している。ここでは、竪穴住居の時期的な細分を行い、その変遷を把握するため、高橋護氏の土器編年[5]を用いた。

Ⅶa期は、この期の最も古い時期でであり検出した遺構は井戸1基と土壙1基である。これらから出土した高杯脚部は、弥生時代中期において三角透孔が内面に抜けるが、この期においては途中でとどまる新しい内容を示すものである。

Ⅶb期は、竪穴住居1軒、土壙1基、溝2条が検出され、後期においてはこの期から住居が営まれる。竪穴住居12は、重複が認められるが12aの床面においてこの期の遺物を認めている。この平面形態は、東辺が不整になるがほぼ隅丸方形を示している。土壙16が当該期であり、このほかに溝6と溝7がある。溝7は調査時、土壙14を半月状に囲むように認められることから同時期の所産と考えたが、土壙のほうが新しくなり別個に存在したものであることが明らかとなった。

Ⅶc期は、竪穴住居5棟、土壙4基、たわみ1か所である。竪穴住居2は、同期の他のものと比較して最も床面積が大きく、柱数も8本で、この期に唯一拡張が認められている。竪穴住居3は、2本柱で中央穴から住居外に出る溝を有している。同様の溝は、竪穴住居4・6にも認められるが時期的にこれよりも新しくなる。竪穴住居18の床面積は、この期としては最も規模の小さいものである。し

かしながら、形態的には胴張隅丸方形で4本柱からなるものでたいへん整ったものである。また、外側にはこの竪穴住居を囲むように溝が認められ、検討の結果住居と一体のものであることが明らかになったのである。このような外側に溝を有する住居は、斎富遺跡から西へ2.5kmほに所在する門前池東方遺跡の第一地点[6]の後期前葉とされるもの、南溝手遺跡[7]の中期後葉のもの、百間川原尾島遺跡[8]の後期中葉のものが知られている。また、竪穴住居19においても認められるが、時期を示す遺物がなくこの期に属するか判断できかねるのである。しかしながら、先の百間川原尾島遺跡のように時期の近いものが併存していることからこの期に含めても可能であろうか。土壙は4基認められるが、土壙1は出土した土器のうち**476**と**477**が他のに比較して時期的に差があることから、これらの土器の示す時期まで下げたほうが妥当であろう。注目されるのは、土壙2である。比較的多くの土器が出土しており、中でも器台が3個体ほぼ完形に復元できる。**486・487**は凹線文で飾られるものであるが、中期の器台と比較してプロポーションが弓状でなく筒状となり、また、筒部から台部への移行は顕著な変化を認めないものから「ハ」の字状に広がることから、やや脚径に対する器高の比率が低い。類例としては門前池遺跡[9]出土のものが知られる。そして、**486**の筒部には、綾杉状の線刻が施されておりこれまで知られているなかでも古い部類になるであろう[10]。一方、**485**は筒部に凹線文を用いず沈線が施され、透かし孔も中期のものと比較して細長い長方形のものから低く幅の広いものとなり新しい様相を示す。

弥生時代後期中葉

前の時期においては、調査区西寄りと東端の離れた2か所にそれぞれ遺構がまとまって分布することが明らかになっているが、この期になると中央部と西寄りというようにその2か所が近接して分布するのである。遺構は、竪穴住居4軒、墓1基、土壙7基、土器溜り2か所を確認した。

Ⅶd期は、比較的まとまって認められ、竪穴住居1棟、墓1基、土壙5基、土器溜り1か所が検出されている。竪穴住居は、円形を呈するもので規模も比較的大きくなっている。竪穴住居6においては、住居の拡張に伴い柱本数の増加が明確に認められ、中央穴から住居外への溝が存在する。墓3は、壺の口縁部を欠かして高杯で蓋をしている。このような土器棺墓は、他遺跡で複数が比較的狭い範囲に認められる傾向にあるが、1基のみの検出であるので一定の墓域を形成していたかどうかについては言及できない。土壙は、前の時期に引き続き比較的多くの遺物が伴う傾向に変わりなく、特に、土壙12は壺、甕、高杯、鉢、器台、蓋のようにほぼ全ての器種が認められている。

Ⅷa期は、竪穴住居3軒、土壙2基を検出し、調査区西よりとその中央部の2か所に住居の分布が認められる。竪穴住居5は、重複がみられ火災により廃棄されている。柱穴は6本ないし8本で、中央穴の周囲には土堤状の低い高まりが認めらる。竪穴住居15は、形態、規模、柱穴などにおいて、竪穴住居5と近い内容が認められ、竪穴住居13は、柱穴などが今一つ不詳であるが炭化材の検出から火災にあっている。土壙2基のうち土壙14は、170×91×29cmの長方形を呈する土壙中の全面に一括と思われる状況で土器が検出されており、興味深い。詳細は第4章に記述したとおりである。出土した器種は、壺が長頸のものと短頸のものがありそれぞれ大形のものが存在する。この内長頸壺は、いわゆる備中南部上東式のそれとは様相が異なるのである[11]。甕は、口縁端部を上下に肥厚ぎみにするもの、肥厚させないもの、丸く終わらせるものなどが認められる。頸部の屈曲は、内面屈曲部までヘラケズリにより強く屈曲させるものと、ヘラケズリがその下方でとまり比較的緩やかに屈曲させるものが存在する。高杯は、杯部から外方へ大きく外反するもの、内傾する杯部から水平方向へ外反するもの、杯部が皿状で端部を上方につまみ上げるものなどが存在する。この他に、装飾高杯、小形直口壺、器

台が詰め込まれたように出土したのである。これらの土器の特徴は、先のⅦd期のそれにも認められるものもあり、この山陽自動車道の建設に伴い調査された新屋敷遺跡[12]の土壙8からの土器はこの資料を補うもののと考えられるのである。このように、従来の調査にかかる偏りがこれら沖積地の土器を含め当該期を検討する良好な資料となるであろう。

弥生時代後期後葉

先の時期に引き続き2か所にわたって遺構が認められる。遺構は、竪穴住居3軒、土壙2基が検出されている。

Ⅷb期は、竪穴住居1棟、土壙2基が認められる。竪穴住居4は、西壁が削平されているが平面形態は隅丸台形状を呈し、柱穴は4本認められ大変整った形態を示している。床面が削平され中央穴とのつながりが不明確であるが、住居外に認められる溝が伴うことが思考される。この住居外の溝は、斎富遺跡で最も新しい時期のものである。

Ⅷc期は、竪穴住居1軒が調査区中央に認められる。竪穴住居11は、4棟以上の重複が認められ、この内、当該期に相当するものは11aである。詳細は本文中に記しているが、他の住居との関係を概述する。11aは11bが埋まった後に営まれたことが、11aが火災にあいその時に生じた炭化材が11aの床面状にとどまり、さらに、11bの床面からは後期前葉の器台が出土していることからも判断される。11cとは、土層断面観察および出土土器からこれより新しく営まれたことが理解される。

Ⅷd期は、竪穴住居1棟が調査区中央に認められる。竪穴住居16は、一部しか遺存していないが、平面形態は円形に近いと想定される。

弥生時代後期末葉

この時期においては、調査区中央に竪穴住居1軒、土壙1基が認められ、分布の範囲が狭まっていることが知られる。

Ⅸa期は、竪穴住居11cで、その重複関係については概述した。この住居は、西壁側に高床部を有し、中央は方形の凹部をつくり中央穴も認められる。なお、銅鏃が1点出土しており、おそらくこの竪穴住居に伴うものと考えられる。

以上のように、弥生時代後期の遺構のうち竪穴住居は19棟を検出しているが、時期については前述したような区分ができないものがある。これらは、弥生時代後期としたのが竪穴住居23、弥生時代後期前葉としたのは竪穴住居8・11b・19である。このようなことから、弥生時代中期後葉～後期末葉における集落について概略を述べる。

斎富遺跡において住居が営まれだすのは、第9図に示した砂礫を多く含む暗黄褐色土であり、たいへん掘り下げにくい堆積土が存在する地点に相当し、条件的には良いとはいえない。このことは、中期末葉になっても同様であり西へ移動したのみである。平面形態は、いづれも胴張りの隅丸方形を呈している。後期前葉にはいると、前段階と異なり集落規模が拡大する。従来の地区を踏襲する以外に、調査区東寄りと西寄りに認められる。ここで注目されることは、条件の悪い地区から黄褐色土の堆積が認められる東と西に住居を展開させていることである。平面形態は、竪穴住居18を除いてほぼ円形を指向し、その施設や規模において住居間の差異が顕著である。後期中葉は、中央部と西の2か所になるが、やはり中央部には継続して住居が存在する。平面形態は、円形であるが、その規模の大きいのが認められる。後期後葉は、前段階と同様な在り方を認める。平面形態においては、竪穴住居4の他は円形を呈する。後期末葉は、祖先帰りのように条件の悪い中央部に営まれるのである。

このように、住居の展開を見ていくと、住居の拡大期においては居住条件の良い地区にその場を求めていたことが想定される。しかし、斎富遺跡において居住条件の良い地区は、砂礫の含まれない耕作にも適したものである。このことからすれば、集落としての拡大は耕地の確保が前提であるとすれば、おのずと、この地区以外に求めざるをえない要因ともなると思考される。

以上の遺構、遺物の他に弥生期に伴なうであろう遺物が認められる。分銅形土製品が6個体出土している。このうち竪穴住居6出土のC1は、ほぼ完存の状態であり時期が特定できるものである。これ以外は、柱穴と包含層からの出土で時期を決めかねる。しかしながら、C10は上半部をふちどる重弧文と側面に抜ける孔が認められることから中期後葉前後に位置付けられるものであり[13]、この時期の竪穴住居が存在することからも理解される。また、C9はヘラにより目と口を描いている。このように、具象的に目や口を表現している出土例は、近接する遺跡である用木山遺跡[14]、さくら山遺跡[15]に認められる。前者においては、眉を表現しているものも存在する。これらの出土例は、比較的古い段階のものであり、当遺跡出土例はそれよりもその示す内容から後出的と判断される。

（3）古墳時代前半期の遺構と遺物（第15図）

本書で扱う古墳時代前半期とは第2章に記したように、須恵器出現を境として区分したものである。また、この間を前葉・中葉・後葉に区分して以下説明する。

確認された遺構は、竪穴住居17軒、井戸3基、土器棺墓1基、土壙7基である。また、先述したように調査区南西端部はこの段階においても低位部となっていたと考えられ、水田耕作が行なわれていた可能性がある。

古墳時代前半期前葉

竪穴住居3軒は、中央部やや東寄りと西寄りに、井戸は中央南東寄りにあり、また、土器棺墓は、南西端部の低位部に近い地点で認められた。竪穴住居17は、六角形あるいは八角形といった不整な多角形を呈するものと思われ、建て替えが認められるものの、柱構造などの明確な対応ができなかった。竪穴住居22は、小規模で2本柱である。竪穴住居30は、一部壁体溝が2本認められるところがあり建て替えが想定される。この2棟は、方形土壙が認められ、前者は隅よりに後者は壁の中央付近に付設されている。墓1は、壺を立てた状態で埋置されていた。

古墳時代前半期中葉

竪穴住居8軒は、一部に建て替えや重複が認められるが、中央やや北東寄りに7軒と、南隅側に1軒認められる。井戸および土壙は、調査区南東よりに検出された。平面形態は、いづれも方形で、4本柱である。竪穴住居38・42以外は壁中央に方形土壙を設けているが、竪穴住居29はややコーナー寄りで形態も円形を呈し、様相を異にする。竪穴住居34・37には高床部があり、そして、方形土壙を仕切る2条が対となる溝も設けられている。竪穴住居39・42には火所が認められるれ、竪穴住居39は住居の中央近くにあるが竪穴住居42は東コーナー寄りに比較的広い範囲に火を受けている。土壙は、調査区東よりに認められ、住居とともに東方に居住空間を形成していたと想定される。しかし、竪穴住居45は、1棟のみ離れて認められることから、これより北西の調査範囲外に広がることが考えられる。

古墳時代前半期後葉

竪穴住居4軒は、調査区中央部分と離れて低位部近くに認められる。井戸は3基検出され、いづれも住居から離れた箇所である。この他に土壙2基が検出された。竪穴住居28は、2回の建て替えが認

められ2本柱と4本柱であるが、後者の4本柱の内の4本とも確認できたものにともなうプランは内側である。また、3本の柱しか認められなかったものは外側のプランであると思考される。そして、この構造を持つものは、前段階の竪穴住居37にも認められ、さらに、後述する古墳時代後半の竪穴住居にも認められている。このような構造は、鳥取県青木遺跡[16]、同上種第5遺跡[17]、同大下畑遺跡[18]など山陰地域に分布が認められる傾向にあり[19]、斎富の集落がこの地域と密接な関わりを持っていた可能性、あるいは移住と言ったことを暗示するものと考えられる。しかし、このような構造を有するものは、管見するところでは福岡県那珂川町仲遺跡群[20]、同筑後市森ノ本遺跡[21]において調査例がある。とくに、竪穴住居28の北壁の方形土壙にともなう溝は1本であり、これと同じ構造をとるものが、先の仲遺跡群の11号住居址である。このように分布域もひろがることが予想され、時期的な前後関係によっては遺跡の把握に大きく影響を与えることになると考える。さらに、方形土壙の住居内での推移ともあわせての検討が望まれる。

古墳時代前半期、須恵器以前の遺構として、以上のほか詳細な時期が判別できなかった竪穴住居と土壙がある。これらを含めても、居住域は、中央やや東寄りに東西方向に営まれる傾向が認められ、それらと距離をおいて単独のものも存在する。このことから、集落規模は大きいものではない。

（4）古墳時代後半期の遺構と遺物（第16図）

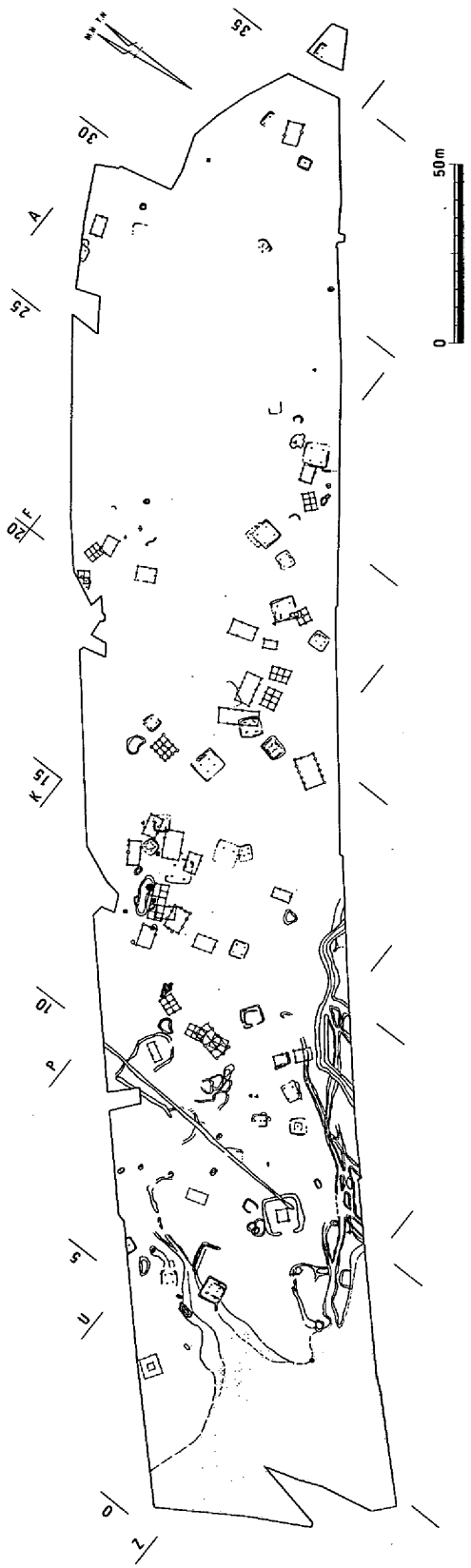
斎富遺跡の集落が拡大するのはこの時期である。検出した遺構は、竪穴住居35軒、周溝遺構6基、井戸2基、墓7基、炉7基、土壙39が認められる。このほか不整形なたわみが8か所、土器溜りが4か所と溝がある。なお、掘立柱建物については、第2節に改めて述べるが、中世以降のものを除いた16棟のうち、建物方位から奈良時代と判断したもの以外を古墳時代後半期の掘立柱建物として扱った。

古墳時代後半期前葉

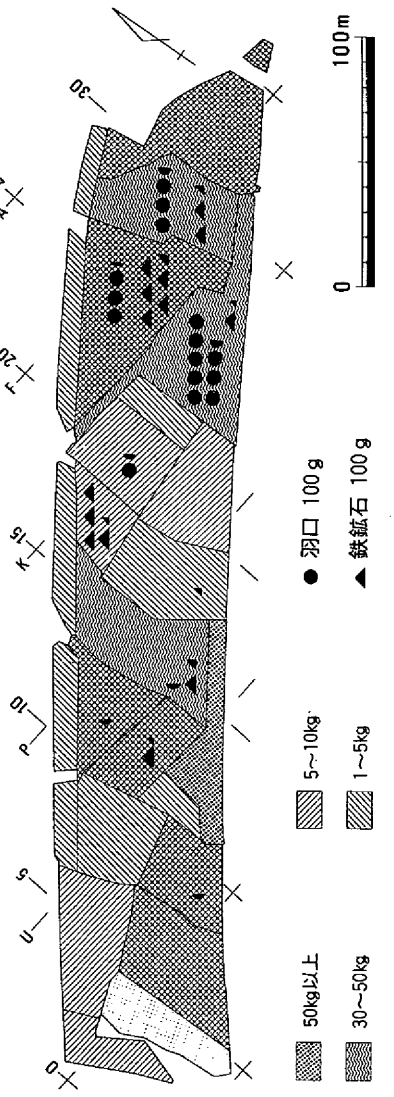
この段階の竪穴住居2軒が確認された。この他に井戸2基、土壙3基、周溝遺構1がある。集落規模としては、前段階と大きくは変わらず小規模であったと考えられる。竪穴住居62からは、珠文鏡**M9**、陶質土器**211**、軟質系土器**212**、が出土している。なお、珠文鏡については附編において成分分析を行なっている。さらに、住居規模も一辺7mをえる大形のものであり、竪穴住居73も7m近くありこの段階での住居の規模の大型化が注目される。土壙出土遺物では、**632・633**が口縁端部および調整において比較的古い様相を示している。

古墳時代後半期中葉

集落規模が著しく拡大するのがこの時期からと考えられた。検出された遺構は、竪穴住居11、周溝遺構2、土壙12である。竪穴住居の分布状況は、中央北東側の北側に空白域が認められ、より南西側に向かって広がっている。住居構造は基本的に4本柱で方形を呈するものであり、作り付けカマドは認められない。しかし、竪穴住居53・75については、方形の一辺に張り出し部を有した特異な形態をとるものである。とくに、竪穴住居53はこの辺の壁際に幅広の浅い溝を有し、この溝の延長部にあたる住居外に穴を確認している。この溝と穴が同一の構造物にともなう遺構なのかは調査時において確認することができなかった。しかしながら、溝についてはこの部分のみに認められ、他の壁には検出されず、溝自体も張り出し部寄りが浅くなり南の隅に行くにしたがい幅が広くなり、さらには深くなる形状を示すのである。このようなことと、先の同一の構造物とすれば、いわゆるオンドル状の遺構である可能性が指摘される[22]。竪穴住居58からは、新羅系陶質土器**186**、金銅張りの辻金具**M5**が出土



第16図　古墳時代後半期の遺構配置図（1／2,000）



第17図　製鉄関係物出土分布図（1／3,000）

している。この住居の遺存状態が悪かったももの、北東隅に作り付けのカマドと考えられる被熱痕跡を確認している[23]。そして、この他の住居には作り付けカマドはみとめられず、その採用は継続することがない。なお、前半期後葉において触れたように、２条一対の溝が認められる住居が存在する。

竪穴住居以外の注目される遺構は、前段階でも認められたが周溝遺構である。これらは、それぞれの構成する構造は異なるもので、同一の機能を持つものかは判断できないが、溝で空間を仕切る内容から同一の遺構名称を付したのである。とくに、周溝遺構６は方形に巡る溝の一辺の中央部分に陸部を設け、この溝で囲まれた空間内に建物が認められており、特殊な機能を持つものと推測される。ここでは、とくに断定はできかねるが、通常の住居として用いられた可能性は考えていない[24]。この他に、土壙が認められているが、比較的遺物を伴うものが存在することから何らかの機能を有していたことが窺われる。

以上のように、前段階と比較し、著しく竪穴住居の軒数が増加することが確認され、それに伴い、集落内容の変容を窺い得ることができた。これは、自然的な集落変遷過程とは認めがたく、何らかの外的要因の結果と思われる。この外的要因を、この期から顕著に認められるようになる陶質土器・軟質土器をはじめとする朝鮮半島に係わる遺構・遺物から可能ではないかと思考され、それらは、当然人の移動あるいは移住を想定することが妥当と思われる。

古墳時代後半期後葉

前段階に引き続き集落規模は、拡大したまま営まれる。検出された遺構は、竪穴住居10、周溝遺構２、土壙８などである。竪穴住居の分布状況は、調査区中央部の東から西にかけて帯状に認められる。

作り付けカマドは、ほとんどの竪穴住居では検出されていないが、竪穴住居68で住居の建て替えに伴い新しく作り付けカマドが設けられている状況が確認された。このことから、当集落における作り付けカマドの導入はこの時期以降とされる。

表４　斎富遺跡鉄滓関係遺物出土量一覧表

（単位：ｇ）

調査区	製錬滓	炉壁	炉内滓	鉄塊系遺物	鍛冶滓	椀形鍛冶滓	黒鉛化木炭	含鉄鉄滓	製錬鍛冶滓	鉄鉱石	羽口	一般滓	その他	計
前田BOX１		85		275								16,790		17,150
前田BOX２				4,595	540	450	15			267	331	29,205		35,403
前田BOX３	205			4,435	300	1,330	40			153	55	28,920		35,438
前田Ｓ１～３	1,345													1,345
前田Ｍ１	245			2,110		700				578	335	12,020		15,988
前田Ｍ２				295						44		4,385		4,724
前田Ｍ３				1,820	230	1,080					120	6,930		10,180
前田Ｍ４		890	855	10,765	3,005	1,930	400	600	700	117	875	21,915	15	42,067
前田Ｍ５			300	80	125	600				441		2,895	90	4,531
前田Ｍ６	1,660		220	670	235	1,180	20					1,360		5,345
前田Ｍ７					780	355	45					220		1,400
亀田Ｂ	780	520	1,155	225		150		370				5,585		8,785
亀田Ｓ１～２		380	540	955			110							1,985
亀田Ｍ１		640	1,900	2,345		140	155	405			20	11,670		17,275
亀田Ｍ２		570	240	825	2,820	330	35		1,525	138		6,760		13,243
亀田Ｍ３	20,125	560	61,000	1,660		575	230	400	1,890			38,810		125,250
亀田Ｍ３西														0
亀田Ｍ４			160	300		95						2,560		3,115
亀田Ｍ５		1,380	3,985	1,410	75	305					25	15,140	40	22,360
亀田Ｍ６							100					22,685		22,785
亀田Ｍ７														0
計	24,360	5,025	70,355	32,765	8,110	9,220	1,150	1,775	4,115	1,738	1,761	227,850	145	388,369

＊分類は大澤正己氏の教示のもと、山陽町事務所で行った。

特筆される遺物としては、この竪穴住居68出土の角状杯238がある。口縁部が欠損しており全容は不明であるものの、県内出土としては初例となる[25]。この資料については胎土分析を行い、その結果を附編に掲載しているが、陶邑・伽耶の領域内にはいらず、陶質土器の可能性があるとの指摘を得ているが、地元産のものと推測したい。いずれにしても、朝鮮半島系の遺物であり、ほかの陶質土器、陶質系土器と併せて評価されるべきであろう。また、竪穴住居70出土の砥石S14は小口面にかけて孔があけられており、腰佩状の形態をとる[26]。

古墳時代後半期末葉

この段階において、竪穴住居の軒数が大きく減少している。検出された遺構は、竪穴住居5軒、土壙10基、墓4基が認められている。その分布は、竪穴住居が中央部の東西方向に、その他の遺構は東よりに認められる。墓としては土器棺墓3基、土壙墓1基がこの時期と考えられる。墓6は、杯の蓋身を枕として利用しており、墓7からはガラス小玉が出土している。なお、墓6・7・8は近接していることから、一定の墓域を意識した可能性が看取される。土壙62は、複数のものが重複しており、現状では不定形な形態を呈するが、土壙底付近から土器とともに比較的多くの木製品を出土している。これらの木製品は形状の判明するものとしては、ねずみ返し状木製品[27]が6個体、砧状木製品が1個体である。ねずみ返し木製品とせずにねずみ返し状木製品としたのは、判断しかねたからである。これとほぼ同じ形状を示す木製品が静岡県伊豆山木遺跡[28]で認められている。ここで認められるものは、長径57cm、短径50cm、中央部に11×7cmの穴をあけ、穴の周囲に一辺20cmの台形状の作り出しを設けるものであり、斎富遺跡のように作り出しを持たず、形態の近いものは1点のみである。これらと比較して検討していくと、斎富遺跡ではその大きさが一回り小さいことか認められる。特に、ほぞ孔は大きいもので10×9.5cm、他は8.8～8.3cmと8～6.8cmであり、その小ささが気にかかる。この程度のほぞ孔で、山木遺跡の『原始高床家屋設計図』[29]のような使用に耐えうるであろうか。さらに、出土数が6個であることから3×1間の建物を想定でき、掘立柱建物37が認められる。しかし、ねずみ返しを必要とする構造物は倉庫と考えられることから、斎富遺跡の建物群と有機的な関係を見出し難たい。このようなことから、ねずみ返し以外の用途を想定する可能性が認められる。出土した土壙からはとくに、木屑が多く認められていることから、ここにおいて木製品の加工がなされたことが思考される。居住近くでこのような木製品の加工を行なうということは、建物などの構造物の建築に関わるものではない木製品の製作がなされていたものとするのが妥当であろう。

また、被熱箇所を含むことから炉として扱ったもののうち、炉7は当該期のものと考えられる。この炉は4mを越える不整形な掘り方を有し、上面に赤色に変化たし4か所の被熱部が認められた。第4章中で記したように、掘り方自体はこれら炉の下部構造と思考され、複数回の作り直しが想定される。製鉄関係遺構としては明確にし得なかったが、炉の状態と下部構造の存在からその可能性を考える。

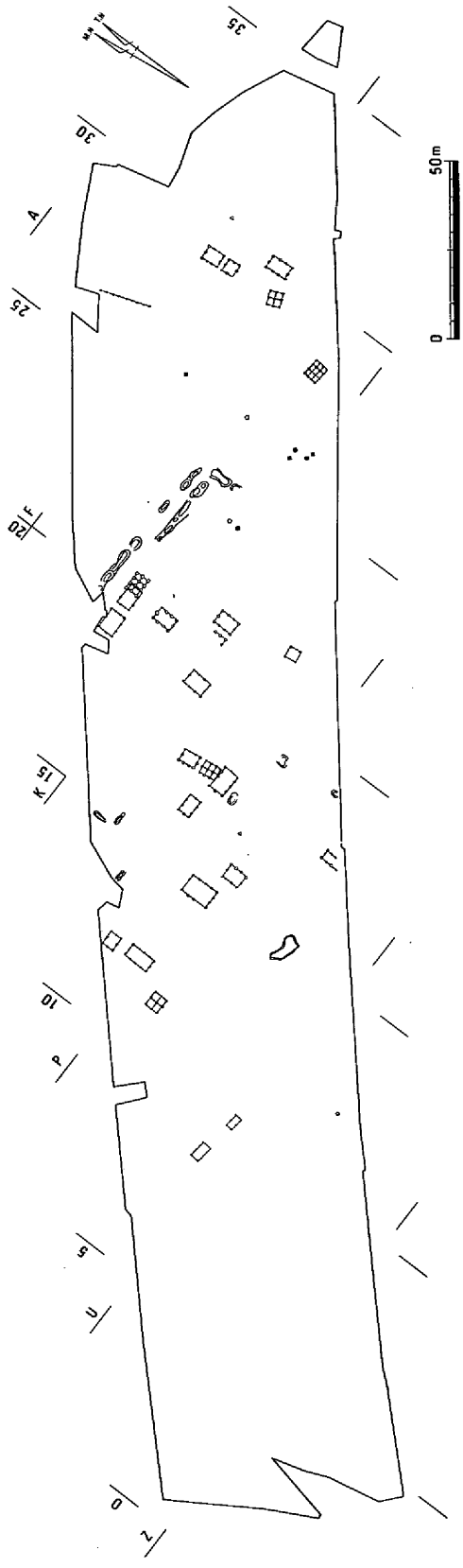
この他に、古墳時代後半期の遺構として掘立柱建物が調査されている。この掘立柱建物は個別の詳細な時期の判断（第2節で述べる。）ができていない。しかしながら、土壙62と掘立柱建物9、竪穴住居64と掘立柱建物31、竪穴住居41と掘立柱建物41などの他の遺構との重複状況等から、古墳時代後半期後葉以降考えることが許されるのではないかと思われる。このようなことから、竪穴住居以外に掘立柱建物をも住居としていたことが思考され、古墳時代後半期末葉における竪穴住居の大幅な減少はこのような、住居形態の変化に起因することを考えることが可能であろう。

以上の他、古墳時代後半期の遺物として注目されるものに鉄滓がある。前述したように製鉄関係の遺構は明らかにし得なかったが、炉７の他に、規模の小さいものの被熱箇所として、炉１～６を報告している。これらの内、炉７以外はその時期を判断できず、他に炉４がこの近くの包含層中から古墳時代後半期後葉の須恵器が認められる程度である。そして、当遺跡から出土がみられた鉄滓および関連遺物の総重量は約390kgを測る（第17図、表４）。これらのほとんどが遺構検出面までの掘り下げ中の出土と溝11から見出されている。この溝11周辺からは、出土する鉄滓の量が多い傾向にあり、その上流部の北周辺に相当する調査区においては羽口、鉄鉱石などの生産に関わる遺物も多く検出されている。しかしながら、溝11の上流部は調査範囲外にあり、鉄滓などの出土状況から製鉄遺構本体が存在する可能性が高い。溝11の時期は、その出土土器から古墳時代後期中葉以降と考えられ、製鉄に関わる作業がこの期以降に開始されたことが想定される。附編に大澤氏による分析を掲載しているが、本遺跡では製錬段階の作業が主体であり、原料としては鉄鉱石が主で一部砂鉄も確認されるとの指摘を受けた。

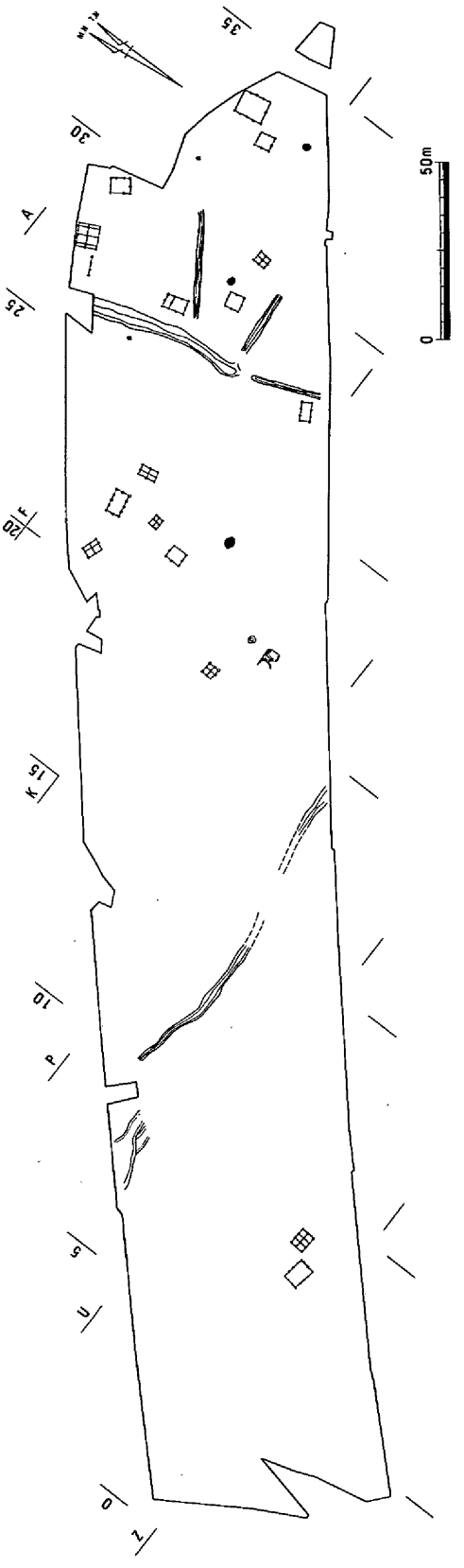
（５）奈良・平安時代の遺構と遺物（第18図）

奈良時代と考えられる掘立柱建物は24棟ある。これらは、建物方位を真北方向にほぼ揃えているものの、重複関係を有するものがある。また、２・３棟では桁揃えているものがあるものの全体的にはやや雑然とした配置をとる。これは、同時併存を考える上で興味深い。また、これら建物を区画すると考えられる二重の溝の一部分が検出されている。この区画溝は、先に記したように遺存状態が悪くその全容を推測することができなかった。しかしながら、検出された区画溝および掘立柱建物の位置と現地形との検討から、大まかな概要を把握することができた。二重に認められる北側の区画溝は、現在する農道の下より検出されている。農道は、幅２ｍ前後を測り、東西方向に存在することからこの北辺の区画の名残が踏襲されたものと推測される。このことから、この農道と検出された区画溝および掘立柱建物を検討すると、方形区画の概要がおぼろげながら把握することができた。検出された区画溝の北東隅を起点とし、農道を西へたどると亀田と前田の畔境で交わる。区画をここまでとすると、１町と推測される。また、これより西に認められる掘立柱建物10・11がほぼ南北に桁を揃え、さらに、畔境から南西側で南北で通る畔はこれのみである。このようなことから、この方形区画はこの付近まで含まれる可能性もある。先の検討結果から、東辺と南辺が不明であるが、一辺１町程度の方形区画を想定することが可能であろう。出土遺物としては、石帯、丹塗り土師器、陶硯などが認められる。とくに、数点と量がわずかではあるが、瓦類の出土が注目される。このような、ことから何らかの公的関連施設としての把握が妥当ではないであろうか。

平安時代の遺構は少ない。確実にこの時期に該当する遺構は、墓10・11・12・15があげられる。これらは、何れも調査範囲の北東側に位置している。墓10・11は甕を伏せ、周囲に土師器の皿を配した特異な形態を示すものである。ここでは火葬墓の可能性を考えたが、地鎮等のなんらかの祭祀遺構とも考えられる。また墓15からは輸入青磁碗が２個体出土しており、有力層の被葬者の存在を想起させる。この他の建物、井戸等の人々の居住を示す遺構は明らかにしえなかった。なお、時期の判別のできなかった柱穴がこの時期に相当するものが存在することは否定できないが、集落の中心は調査範囲外にあるものと理解される。



第18図　奈良・平安時代の遺構配置図（1／2,000）



第19図　鎌倉時代以降の遺構配置図（1／2,000）

（6）鎌倉時代以降の遺構と遺物（第19図）

掘立柱建物15棟を確認している。2棟以外は、調査区北東半部に位置する。出土遺物が少ないことから詳細な時期の判断は困難であるが、これらのほとんどが室町時代後半期のものと理解している。井戸は3基検出され、うち2基は石組みである。井戸10は掘立柱建物72・58と、井戸11は掘立柱建物61・71と隣接していることから村落形態の一端を知ることができた。このほかに、方形土壙として土壙75・76を認めている。江戸時代遺構の遺構・遺物はほとんど確認されず、この段階において土地利用が居住地から耕作地へと変化した結果とも理解されるのである。　（下澤・大橋）

註

1）近年、正式報告書が刊行された。
市原寿文　近藤義郎ほか『南方前池遺跡－縄文時代木の実貯蔵穴の発掘』山陽町教育委員会　1995
2）出宮徳尚『南方遺跡発掘調査概報』岡山市教育委員会　1971
3）「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1　岡山県教育委員会　1972
4）神原英郎「四辻土墳墓遺跡・四辻古墳群」『岡山県山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』（3）山陽町教育委員会　1973
5）高橋　護「弥生土器」『考古学ジャーナル』175　1980
高橋　護「上東式土器の細分編年基準」『研究報告』7　岡山県立博物館　1986
6）「門前池遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』9　岡山県教育委員会　1975
7）「南溝手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100　岡山県教育委員会　1995
8）「百間川原尾島遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56　岡山県教育委員会　1984
9）註6）に同じ
10）最古としては、用木山遺跡のものが指摘されている。これは、弥生時代中期後半の時期が考えられているが疑問の残るものである。
正岡睦夫「備前地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』木耳社　1992
11）註5）に同じ
12）「新屋敷遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』99　岡山県教育委員会　1995
13）東　潮「分銅形土製品の研究（1）」『古代吉備』7　1971、下澤公明「分銅形土製品」『えとのす』1984
14）神原英郎「用木山遺跡」『岡山県山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』（4）山陽町教育委員会　1977
15）神原英郎「さくら山遺跡」『岡山県山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』（5）山陽町教育委員会　1973
16）『青木遺跡発掘調査報告』Ⅲ　青木遺跡発掘調査団　1978
17）「上種第5遺跡発掘調査報告」『大栄町文化財調査報告書』14集　鳥取県東伯郡大栄町教育委員会　1985
18）「大下畑遺跡」『鳥取県教育文化財団報告書』36　財団法人　鳥取県教育文化財団　1994
19）青木遺跡は、主に古墳時代前半にこの構造の住居をみるが、斎富遺跡は須恵器が出土した古墳時代後半のものにも認められ、時期的なずれがある。
20）「仲遺跡群」『那珂川町文化財調査報告書』32　1993
21）「藤数遺跡群」『筑後市文化財調査報告書』6　1990
23）岡山市津寺遺跡、同高塚遺跡において5世紀代の竪穴住居の方形の角に、造り付けカマドを有す例が知られている。
24）5世紀～6世紀における、この種の遺構の類例は管見によるかぎり見られない。類例の増加を待ちたい。
25）第5章第3節で取り扱う。
26）この遺物についても、朝鮮半島系の可能性がある。
沈奉鐘『金海府院洞遺跡』古趾調査報告書五冊　東亜大学校博物館　1981
27）掘立柱建物が少なくともこの段階に存在したとの傍証になろう。
28）後藤守一『伊豆山木遺跡』築地書館　1962
29）註27）と同じ

第2節　掘立柱建物群と奈良時代の遺構について

これまで述べたように、斎富遺跡では、合計76棟の掘立柱建物を確認したが、中・近世の16棟を除き、そのほとんどは時期を確定する資料を欠いていた。調査担当者間ではこれらの建物群は古墳時代後半から古代にかけてのものという共通認識があったものの、それ以上言及することは出来なかった。しかしながら、奈良時代の遺物を柱穴中から出土した建物があり、これらは確実にこの時期と判断された。また、これらの建物を区画したと思われる二重の溝が検出されている。さらには、遺構に伴わないものの石帯、丹塗り土師器、陶硯といったものの出土から、これらの建物がなんらかの公的な性格をもっていたと考えられる。

ここでは、各掘立柱建物の時期を再考し、その後に奈良時代における当遺跡の性格についての意義付けを行いたい。

（1）掘立柱建物群の時期

調査範囲のほぼ全面に多数の柱穴を検出した(附図参照)が、掘立柱建物として認識できたのは、76棟にすぎなかった[1)]。確認された76棟のうち、中世～近世のものは、出土遺物のほかに、柱穴埋土の差違、およびその柱穴規模が比較的小さいことなどの理由から、これ以前の時期のものとは比較的峻別ができた。このため以下の作業からこれら16棟は除くこととし、60棟を検討対象とする[2)]。

作業1

建物群が古墳時代後半～古代にかけての時期のものであると調査担当者間で共通認識をもったのは、出土遺物にこれ以前のものがほとんどないことと、他の遺構との重複切り合い関係からである。古墳時代後半の竪穴住居と重複するものとしては、掘立柱建物14(竪穴住居56と重複　以下同)、掘立柱建物22・24(竪穴住居61)、掘立柱建物23(竪穴住居57)、掘立柱建物31(竪穴住居64)、掘立柱建物41(竪穴住居68)、掘立柱建物47(竪穴住居33)、掘立柱建物53(竪穴住居73)などが挙げられ、いずれも竪穴住居を切っている。またこれら竪穴住居の時期は、最も新しいもので6世紀末～7世紀初頭であり、最も古いもので5世紀後半である。建物柱穴からの出土遺物としては6世紀～7世紀前半のもの、奈良時代のものの2者がある。また、平安時代の遺物はほとんど検出していない。以上のことから例外は否定出来ないが、これら60棟の掘立柱建物群は上限が6世紀、下限が平安時代以前の所産と判断しても差し支えないものと思われる。

作業2

建物の方向に注目し、奈良時代の建物を抽出することとする。また、この作業で抽出できなかったものは、古墳時代後半の時期と判断することにした。

作業の方法は、まず棟方向の磁北からの斜度を真北方位に再計算し、それを第20図上左に示すようなグラフにし、グルーピングを行った。この後、棟方向が直交するものが同一グループであるとはこのグラフでは読みとりにくいため、棟方向が45°以上の斜度をもつもののうち、西偏しているものは90°加算し、東偏しているものは減算して建物の方向として用いた。つまり、棟方向が88°西偏している建物と2°東偏している建物は直交の関係にあり建物方向としては同一とした。これをグラフとしたのが第20図上右である。これをもとにさらにグルーピングを明確にした。なお、以下では真北方向

からの斜度をいう。

まず、前提となるのが奈良時代の遺物を柱穴から出土した掘立柱建物の方位である。奈良時代の遺物が出土したのは、掘立柱建物18・29・32・39・44・45・56・57の８棟である。これらは、柱穴規模からみても、この時期の建物と判断している。これらのうち最も真北からの斜度が大きいものは掘立柱建物32の７°である。なおまた、奈良時代の遺物をもつ二重の区画溝も真北から２°東偏している。以上のことから、真北から７°の斜度を最大誤差としてこの範囲に入るものを１類として、奈良時代の所産と判断した。また、これ以外の斜度をもつものを２類とした。前述した８棟の他に、掘立柱建物３・４・８・10・11・17・20・25・27・28・36・38・42・43・54・59を合わせ、計24棟がこの１類のグループで抽出できる。

作業３

作業２で抽出された以外の２類に分類される建物についてグルーピングを試みた。作業内容は同じである。この結果大きく以下の３群に分離を行った。

まず２ａ類としたのは建物方向が20°～45°東偏するものである。掘立柱建物１・６・７・９・30・41・52がこの範囲にはいる。ばらつきが大きく、集中度は示さないため、ひとつのグループとしては成立出来ない可能性はある。なお、周溝遺構４で検出された建物はこのグループになる。

次ぎに、２ｂ類としたのは建物方向が27°～34°西偏するものである。掘立柱建物14・15・21・22・31・37・46・47・62の９棟がこれにあたる。

２ｃ類としたのは建物方向が12°～23°西偏するものである。掘立柱建物２・12・13・16・19・23・24・33・34・35・40・53・55・60の14棟がこれにあたる。このうち、特に12°～18°の範囲に10棟が集中する。なお、掘立柱建物55については、調査担当者から検出した諸状況から奈良時代と考えられるとの指摘がある。

以上のグルーピングに入らないものとしては、掘立柱建物５・26・50・65・66があり、それぞれ10°西偏あるいは東偏し、１類の誤差範囲に属するのかどうかは判断できない。また、掘立柱建物48は16°東偏し、どのグループにも属さない。

以上の作業から次の事象が想定可能と思われる。

１．建物方位から建物群が大きく４つのグループに分離できそうである。

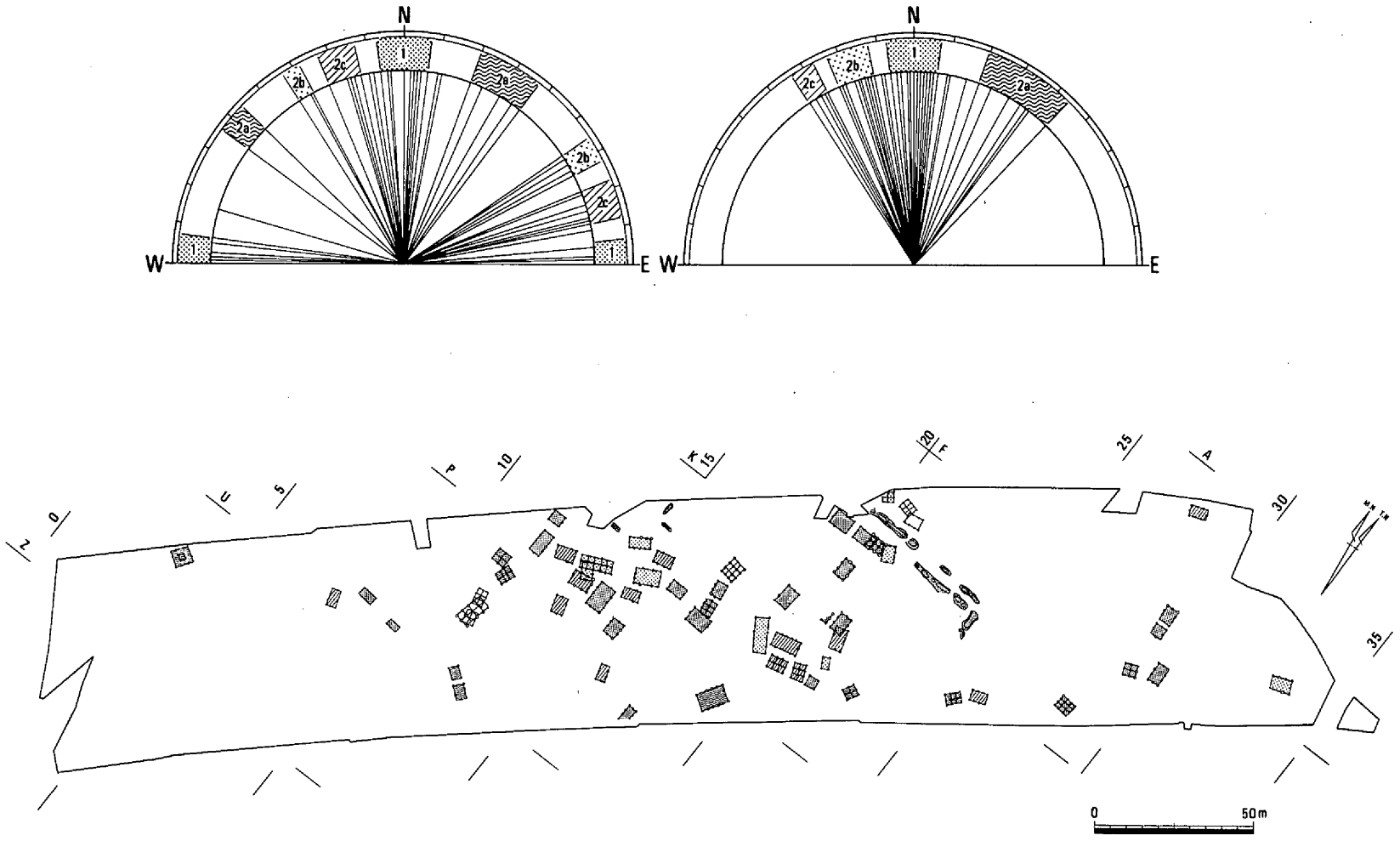
２．真北に近い建物方位をとる一群は奈良時代の建物群と考えられる。

３．他の３グループの建物群については、消去法ではあるが古墳時代後半６世紀～７世紀のものと考えられる。

（２）古墳時代後半の掘立柱建物群について

先の作業において４群にグルーピングを行ったもののうち、２ａ・ｂ・ｃについて、見ていく。これらは、前述したような消極的な根拠であるが、６世紀から７世紀の時期をあてはめて考えている。

２ａ類　その分布は各所に散在する。掘立柱建物６・７が近隣し、棟方向を同一にしており、同時併存の可能性が指摘されている。細片ではあるが６世紀中葉の遺物を出土したものがある。この一群においては、その建物方向も他のグループと比較してややばらつきがあるため企画性は認めがたいようである。



第20図　掘立柱建物方位と配置（1／2,000）

２ｂ類　調査範囲の中央部にやや集中するが、離れた東端部もに１棟所在している。掘立柱建物14・15は重複し、必ずしも同時併存ではないことは明らかである。また、掘立柱建物14・31に見るように桁行が５間を数える規模の大きな建物が存在している。竪穴住居との切り合いからみて、掘立柱建物14・15・21・22は７世紀の所産の可能性が高い。

２ｃ類　調査範囲の中央部に２群の集中分布を示す。また、これと離れた箇所に３棟が散在している。掘立柱建物12・13・16・19・23・24が一つの群をなし、これの約30ｍ東側に掘立柱建物33・34・35・40が一つの群をなして近隣している。しかしながら、この２群についても整然とした建物配置とは認めがたく、やや雑然とした感がある。

これら古墳時代後半と判断した掘立柱建物群は、２ｂ類・２ｃ類の一部のもののように、比較的近隣に集中して所在することが認められ、なんらかの規則性をもって造られた可能性は残る。また、時期については、これらの３類型が時期差を反映しているとは直ちには断定できないが、２ａ類がそのばらつきから他の類型より先行するかもしれない。さらに、竪穴住居が５世紀後半の軒数に比較して、６世紀以降の軒数が激減することから、集落規模が縮小したのではなく、この時期から掘立柱建物に居住形態が移行したものと推測される。岡山県南部における集落形態との比較の点でみれば、６世紀における掘立柱建物を主とした集落は一部にすぎず、その点からも、当斎富遺跡の集落が先進的な一面をもっていたと考えられる。これは、その前段階における陶質土器等の朝鮮半島系遺物の出土の点からも肯首されるであろう。

（３）奈良時代の掘立柱建物群と区画溝について

これまでの作業で、１類として抽出した24棟について、言及してみたい。

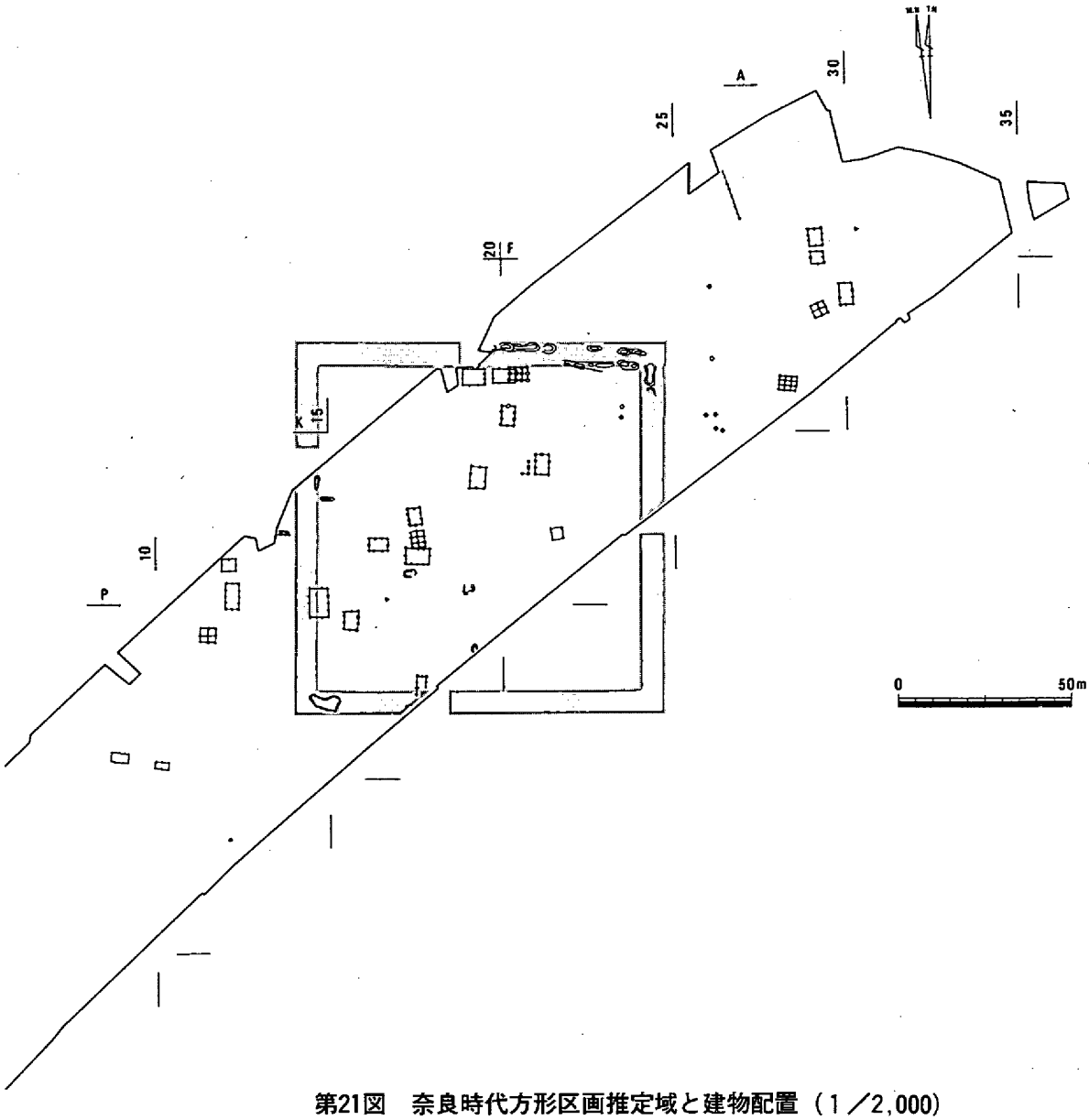
奈良時代の掘立柱建物としたこれらは、出土遺物から８世紀後半を中心とし、一部９世紀初頭まで降るものと思われる。これらの建物配置は、基本的に２～４棟を単位として７単位が分散し、特に整然とした「コ」の字、あるいは「ロ」の字配列は認められない。また、その１単位内に総柱建物が１棟認められることが多く、建て替えを考慮すれば、１ないし２棟の建物に１棟の倉庫で１単位をなす構成が導き出されそうである。建物規模は、表５に記すとおりであるが、桁行８ｍを超える比較的大きな建物もある。また、掘立柱建物44は柱穴規模も約１ｍ四方と他のものより大きく、柱痕跡も明瞭に観察された[3)]。また、調査範囲全域における奈良時代の瓦出土量はコンテナ２箱に満たず、また軒瓦にいたっては、破片２枚のみであった。これらのことから流出を考えても瓦葺建物は想定しがたい。殿斗棟あるいは甍棟の存在を想起すべきであろうか。または、二次的利用による後世の搬入の可能性も考えられ、瓦利用の建築物は皆無とも思われる。

ところで、これらの掘立柱建物群と有機的に関連づけられるものとして、区画溝が検出されている。区画溝は二重の溝で構成され[4)]、この二重の溝の間に土を盛り上げた土塁状の構造物の存在が想定される[5)]。区画の規模は、調査時において北辺と東辺の溝の一部を認識したのみであるので、判断できなかった。しかしながら、Ｌ14・Ｍ15・Ｍ13グリッドで検出されている長楕円形の土壙66・67・68が、方位・出土遺物を勘案すれば、区画溝の一部と考ええた。特に、南北方向に向く土壙67を内側の溝の一部と想定すれば東西で１町ほどの区画が導き出される。さらに、円面硯が出土しているＲ14グリッドで検出されたたわみ８を、南西隅部の溝の痕跡を示すものとすると、南北１町を測ることが想定される。以上のことから区画全域の規模を１町四方に復元することが可能と思われた[6)]。また、土壙67に

直行する土壙68の位置関係から、この区画内において間仕切り状に溝が存在していたことが読みとれる。[7)]

この想定した区画内には掘立柱建物17・18・20・25・27～29・32・36・38・39・42～45の15棟が検出されている。これらは掘立柱建物17・18、掘立柱建物25・27～29、掘立柱建物32・38・39、掘立柱建物42～45の4単位に分離される。うち、掘立柱建物28・44が総柱建物であり、他は2間4間、2間3間、3間3間の側柱建物であった。なお、地鎮遺構[8)]もこの区画内に位置する。区画外に位置するのは掘立柱建物3・4、掘立柱建物8・10・11、掘立柱建物54～59であり、これらで3単位をなしている。この掘立柱建物56・57の東約10mに胞衣容器の可能性がある杯蓋・杯身が出土しており[9)]、何らかの関連性があるのかも知れない。区画内外における建物の単位構成、および建物規模には著しい差違は認めがたい[10)]。

以上のような掘立柱建物の規模・配置の在り方は、独立した官衙施設ではなく、集落と考えるほう



第21図　奈良時代方形区画推定域と建物配置（1／2,000）

がより妥当と思われる。しかしながら、出土遺物と区画の存在を加味すれば、通常の一般集落とも考えがたく、借倉といったことも含め、有力集落が官衙の出先機関としてある一定の官衙機能を合わせ持っていた、あるいは分与されていたものと理解される。なお、木簡、墨書土器といった文字資料の出土がなかったことから、この集落における官衙機能がどのようなものであったかについては言及することはできなかった。

いずれにせよ、胞衣遺構、地鎮遺構と思われる土器埋納遺構なども検出されていることから、この習俗を知る階層がこの集落内に存在していたと思われる。

官衙関連遺構については、その評価を断定することは困難であることが多く、今回は類推に留まった。今後の資料の蓄積と、また、この地域における他の事象との関連も含め再検討が必要と思われる。また、奈良時代の建物群の評価については、山中敏史氏の指摘によるところが大きいが、紙面の関係上、十分に意を尽くせなかった点が多い。これは、すべて筆者の責であり、深くお詫びしたい。　（大橋）

註

1）このほかにも多数の掘立柱建物が存在していたことは明らかではあるが、本稿ではこれについては触れず、検討の対象から除外する。

2）以下の本稿における掘立柱建物の時期設定は、すべて筆者の判断によるものであり、報告文中と一部意見の齟齬があるが、これは筆者の責とする。

3）この建物は規模を参考にすれば、即断はできないが穎倉とみるべきであろうか。また、その場合3000束ほどの収蔵が可能と考えられている。なお、穀倉と見た場合は1000斛と考えられている。
松村恵司「古代稲倉をめぐる諸問題」『文化財論叢』1983

4）築地塀的なものの存在を想起させるものであるが、先に触れたように瓦の出土がほとんどないこと、また溝埋土中に崩壊した版築土も見られなかったことから、これについては否定的に考えている。

5）報告中に触れたように、複数の土壙が連なったような途切れた溝の形態は作業単位、あるいは工人単位を示すものと思われ、土塁を構築するための土取りを行った結果と推測される。

6）なお、現在の水田畦境を勘案して東西1.5町に復元する案も示されている。

7）岡山市津寺遺跡では南北120m、東西90mの二重の溝による長方形の区画が認められており、この区画内に、間仕切り状の溝が確認されている。
高畑知功「古代の役所とその周辺　特集　山陽自動車道と埋蔵文化財」『教育時報』第507号　岡山県教育委員会　1991
亀山行雄ほか「津寺遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』104　岡山県教育委員会　1996

8）報告文中に述べたように、須恵器の蓋杯が2セット埋納されていた。銭貨等は出土していないものの、検出状況から地鎮と判断したものである。このような類例は管見にないが、県下における地鎮としては津寺遺跡出土の二彩小壺がその可能性があると指摘される。
「津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』21　岡山県教育委員会　1991

9）胞衣遺構としては、県下で馬屋遺跡、津寺遺跡の2例が知られる。いずれも和同開珎が出土しており、また脂肪酸分析を行ったものである。本遺跡ではその機会を逸してしまい、確証に欠けてしまった。地鎮とも考えられる遺構である。
伊藤　晃・横山　定ほか「馬屋遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』99　岡山県教育委員会　1995
「津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』21　岡山県教育委員会　1991

10）掘立柱建物42～45の単位が総柱の掘立柱建物44の規模の点から、やや傑出している感はある。これは、区画北辺中央部というその位置関係から、中心的単位とも思われる。

表5　掘立柱建物方位と規模一覧表

遺構名	規模	桁行(cm)	梁間(cm)	棟方向(真北)	建物方向(真北)	方位グループ	時期
掘立柱建物 1	4×3	564	513	N-34°-E	N-34°-E	2 a	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 2	3×2	546	294～300	N-15°-W	N-15°-W	2 c	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 3	4×1	486	270	N-84°-W	N-6°-E	1	奈良
掘立柱建物 4	2×1	396	198	N-83°-W	N-7°-E	1	奈良
掘立柱建物 5	(4)×2	不明	432	N-11°-E	N-11°-E	?	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 6	3×2	390	300	N-54°-W	N-36°-E	2 a	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 7	3×2	456～462	330～336	N-46°-W	N-44°-E	2 a	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 8	2×2	459～468	409～414	N-88°-W	N-2°-E	1	奈良
掘立柱建物 9	3×2	492	360	N-20°-E	N-20°-E	2 a	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 10	2×2	420	354	N-88°-E	N-2°-W	1	奈良
掘立柱建物 11	4×2	750～753	378	N-5°-E	N-5°-E	1	奈良
掘立柱建物 12	3×2	612	422	N-69°-E	N-21°-W	2 c	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 13	3×2	549	384	N-16°-W	N-16°-W	2 c	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 14	4×2	784～826	396～399	N-59°-E	N-31°-W	2 b	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 15	3×2	549	366	N-29°-W	N-29°-W	2 b	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 16	3×3	648	459	N-76°-E	N-14°-W	2 c	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 17	4×3	825	540	N-0°-E	N-0°-E	1	奈良
掘立柱建物 18	3×2	531	399	N-4°-E	N-4°-E	1	奈良
掘立柱建物 19	3×2	510	276	N-17°-W	N-17°-W	2 c	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 20	(3)×2	不明	258	N-3°-E	N-3°-E	1	奈良
掘立柱建物 21	4×2	690	324	N-56°-E	N-34°-W	2 b	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 22	(3×3)	798	498	N-61°-E	N-29°-W	2 b	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 23	3×2	549	345	N-74°-E	N-16°-W	2 c	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 24	3×2	588	378	N-76°-E	N-14°-W	2 c	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 25	3×2	537	354	N-89°-W	N-1°-E	1	奈良
掘立柱建物 26	3×3	534	438～444	N-10°-E	N-10°-E	?	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 27	3×2	474～477	354～366	N-7°-W	N-7°-W	1	奈良
掘立柱建物 28	3×2	477	372	N-5°-W	N-5°-W	1	奈良
掘立柱建物 29	4×2	690～696	435～454	N-87°-W	N-3°-E	1	奈良
掘立柱建物 30	(5)×3	(900)	552	N-30°-E	N-30°-E	2 a	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 31	5×1	1095		N-33°-W	N-33°-W	2 b	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 32	3×2	621～663	443～47	N-7°-E	N-7°-E	1	奈良
掘立柱建物 33	5×2	819	432	N-78°-E	N-12°-W	2 c	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 34	3×2	543	417	N-77°-E	N-13°-W	2 c	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 35	3×2	495～522	402	N-23°-W	N-23°-W	2 c	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 36	1×1	330	330	N-7°-W	N-7°-W	1	奈良
掘立柱建物 37	2×1	366	240	N-29°-W	N-29°-W	2 b	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 38	不明	不明	不明	N-0°-E	N-0°-E	1	奈良
掘立柱建物 39	3×2	592	402	N-2°-E	N-2°-E	1	奈良
掘立柱建物 40	3×2	708	408～414	N-13°-W	N-13°-W	2 c	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 41	2×2	384	366	N-24°-E	N-24°-E	2 a	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 42	3×3	630～642	474	N-89°-W	N-1°-E	1	奈良
掘立柱建物 43	3×3	666	420～426	N-89°-E	N-1°-W	1	奈良
掘立柱建物 44	3×2	540	378	N-90°-W	N-0°-E	1	奈良
掘立柱建物 45	3×2	582	402	N-5°-E	N-5°-E	1	奈良
掘立柱建物 46	3×2	528～534	390～400	N-28°-W	N-28°-W	2 b	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 47	2×2	348	330	N-57°-E	N-33°-W	2 b	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 48	3×2	456	354	N-74°-W	N-16°-E	?	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 50	3×2	504～510	336～342	N-80°-E	N-10°-W	?	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 52	3×2	486	330	N-37°-E	N-37°-E	2 a	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 53	3×2	501	342	N-68°-E	N-22°-W	2 c	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 54	3×3	507	420	N-83°-W	N-7°-E	1	奈良
掘立柱建物 55	2×2	408	372	N-68°-E	N-22°-W	2 c	奈良
掘立柱建物 56	3×2	513	384	N-4°-W	N-4°-W	1	奈良
掘立柱建物 57	2×2	369	354	N-85°-E	N-5°-W	1	奈良
掘立柱建物 59	3×2	624	390	N-5°-W	N-5°-W	1	奈良
掘立柱建物 60	3×2	552	333～336	N-72°-E	N-18°-W	2 c	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 62	(3×2)	648	426	N-63°-E	N-27°-W	2 b	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 65	2×2	418	360～366	N-9°-W	N-9°-W	?	古墳後半期後葉以降
掘立柱建物 66	3×2	489	342	N-10°-W	N-10°-W	?	古墳後半期後葉以降

中・近世の掘立柱建物は除く

第３節　朝鮮半島系の遺物について

斎富遺跡では、比較的多くの朝鮮半島系の遺物が出土した[1)]。これらのなかには、かの地からの搬入品とともに、その影響を受けて作られたものが多いと考えられる。本節では、これらの遺物について報告文中には詳細に触れることができなかったことから、再検討してみたい。

（１）軟質土器・軟質系土器

小形平底鉢、甕、鉢、鍋、甑などが遺構・包含層から出土している。

小形平底鉢

周溝遺構４から出土している小形平底鉢**332**は口径16.3cm、器高７～８cm、底径14.6cmの筒状の平底鉢である。内外面ともハケメ調整を行い、黄橙色を呈し砂粒が多く雑なつくりである。時期は不明であるが、周溝に囲まれた１×３間の掘立柱建物は弥生時代の可能性もあり、遺物もその時期に含まれる可能性がある。いずれにせよ、器種として余り類例をみないものである。弥生時代後期初頭の類例としては、土壙４出土の小形鉢**490**は少し小振りで口径12.3cm、器高8.0cm、底径3.8cmを測り、作りも手づくね状の小形平底鉢である。鉢の他に、弥生時代中期と考えられるたわみ１から出土した**1072**がある。これは、玉縁状の口縁を持つ壺と考えられる。また包含層出土の**1212**の鉢は、弥生土器かどうかを含め余り見ない器種である。

土壙44出土の**660**はさらに小振りで口径8.1cm、器高4.0cm、底径6.4cmで、５世紀末の須恵器高杯と供伴している。包含層からは**1233**・**1235**などがあり、**1235**は底部に木葉痕が認められる。その他に筒状を呈す鉢状（コップ状とでもいうべきか）のものがある。竪穴住居59から出土した**188**、ＫＭ４区の包含層から出土した**1229**がある。浅いコップ状のものには、土壙38から出土している**647**のような、細長い把手が付く可能性がある。

鉢

竪穴住居51ａ出土の平底鉢**171**は、口径10.0cm、器高6.2cm、底径11.1cm、胴部最大径13.0cmで、口縁部は、「く」の字状に外反し短い口縁を持つ。内面はユビオサエの後ナデで調整され、外面はハケメ調整がかすかに残るが、磨滅が著しい。底部から２cm程に静止ヘラケズリを行っている。ＫＭ６区包含層から同様の形態の少し小振りのもの**1239**が出土している。細部は異なるが金海礼安里49号墳出土のものと形態は良く似ており[2)]、同時期のものとすると６世紀前半のものと考えられる。

甕

竪穴住居62から出土している甕(壺)**212**は、体部下半の小片である。表面は細かい格子目叩きを持つ。この住居からは、珠文鏡、陶質系土器、須恵器の特徴を持つ土師器高杯などが出土している。出土遺物類から５世紀前半の住居である。同様の格子目叩きをもつ破片は、ＭＭ２区包含層などからも出土している。

甕（鍋）

周溝遺構１から出土している甕**315**・**316**は、体部から「く」の字状に外反する口縁を持ち、口縁端部は鋭く上下に拡張する。白橙色・橙色を呈し、外面には平行叩きを施し、内面はアテ具痕状の凹凸が残る。胎土は両者とも石英・長石などの砂粒を多く含む。包含層からも同形態のもの**1236**・**1237**があ

り、また須恵質にもこれと同様の形態、口縁部のつくり、平行叩きをもつ**1233**が包含層から出土している。供伴する須恵器・土師器から5世紀後半に含まれるものと考えられる。

鍋

ＫＢ１区井戸７から出土している甕(鍋？)**410**は、体部から「く」の字状に外反する口縁部を持ち、肩部に牛角状把手を持つ。内外面とも調整は不明である。胎土には石英・長石などの砂粒を多く含み、明赤褐色を呈す。供伴遺物から5世紀後半の時期に含まれる。包含層から出土した鍋**1238**は、胴部中央に下位方向に三角錐状の把手を持つ。表面は無文の叩きと考えられる圧痕が残り、内面にも凹凸があり、アテ具痕と思われる。報告中には図示していないが、包含層出土品の中に三角錐状の把手を持ち、表面平行叩きで把手の所にヘラによる沈線が施され、内面青海文アテ具痕跡が認められるものがみられる。

たわみ３出土**1113**は、球状の体部から、「く」の字状に外反する短い口縁を持つ。胎土は精良でにぶい橙色を呈する。内面は刷毛調整を行うが、外面は磨滅が著しい。供伴する須恵器は6世紀前半代のものである。この時期の土師器でこのタイプのものは斎富遺跡では類例をみない。

えぐり入り牛角状把手

甑、あるいは鍋に取り付く把手に上面に袋状に切り込みを入れ、わずかに上向きかげんの５～10cmの牛角状をした特徴的な遺物である。斎富遺跡からは、竪穴住居53柱穴・埋土から各１点、周溝遺構５の**344**、井戸６の**405**などの遺構から４点、包含層から36点の合計40点が出土している[3]。そのほとんどが、淡橙色～灰橙色～灰白色を呈し、石英・長石などの砂粒を多く含み、表面を平行叩きあるいはハケで調整を行った土師質のものである。甑・鍋の器形が判別できるように復元できるものはない。甑の底部は丸底・平底の二者が見られ、蒸し穴は円形、楕円形などが見られる。

えぐり入り牛角状把手のつく甑・鍋などは朝鮮半島の影響を強く受けた土器といわれている。斎富遺跡の出土例は一集落遺跡としては異常に多く、朝鮮半島から直接持ちこまれたものもあるかもしれないが、そのほとんどは胎土・成形等から見る限りこの遺跡で作られ、使用されていたものであり朝鮮半島から渡ってきた人、あるいはその影響を強く受けた人達によって作られ、使用されていたものと思われる。

（２）陶質土器・陶質系土器

杯蓋、高杯、鉢、把手付椀、壺、甕、器台、角状杯などの陶質土器あるいは陶質系土器と考えられるものがが出土している。

杯蓋

竪穴住居58(埋土および床面直上)から出土した杯蓋**186**は、口径12.5cm、高さ6.2cmの高杯の蓋である。体部中央に直径4.5cm、高さ２cm程立ち上り外に開く輪状のつまみをもつ。つまみ端部は内傾に押え三角形を呈する。つまみ立ち上り部には逆台形状の方形透しを４か所切り込む。体部はわずかに丸みをもち、体部から口縁部境には突帯状の稜をもち、口縁部は垂直に下がり、口縁端部は丸く納める。体部外面は明青灰（紫）色を呈し、中程までヘラケズリ（時計回り）を行っている。内面は自然釉がゴマ状に付着する。断面は明るいセピア色を呈している。胎土は緻密で、焼成は堅緻で良く焼け締まっているが、体部中央は火ぶくれにより部厚くなっている。この手のものは朝鮮半島、昌寧校洞１号墳をはじめ洛東江中流域の東岸からの出土例が知られているという[4]。時期は５世紀後半と考えら

れる。[5)]

土壙59から出土した杯蓋の小片**735**は、天井部にカキメ、列点文を施している。胎土は緻密で、全体に灰色を呈し良く焼成されている。供伴する土師器・須恵器から６世紀前半と考えられる。

ＭＭ１区柱穴内(Pit-６)から出土した杯蓋**814**は、復元口径11cmで、丸みを持つ体部から突帯で境をなし、そのまま口縁部に至る。口縁部は1.3cmと短い。突帯上部に列点文、その上に沈線を施す。内面は自然釉がかかり、外面は灰黒色を呈し、断面はセピア色である。

高杯

土壙48から出土した無蓋高杯**689**は体部と口縁部境にわずかに突帯をつくり、上部に沈線がめぐる。口縁部は外に開き、端部はさらに外に張り出す。胎土は緻密で、内外面とも灰色、断面は灰赤褐色を呈す。あまり類例を見ないタイプの有蓋高杯であるが、包含層出土の**1243・1244**もこのタイプに含まれる。

ＫＭ６区包含層出土の無蓋高杯**1281**は口径15.8cm測り、体部下段に１条上段に２条の細く鋭い突帯がめぐり、その間に櫛描波状文をめぐらす。把手痕１か所認められるが対になるかは不明である。外面は明青灰色、内面は灰紫色、胎土は緻密で良く焼き締まっている。断面は明るいセピア色を呈する。

ＫＭ６区包含層出土の**1305**は、多窓の６方透かしになると思われる高杯の脚部である。外面は面取りを行う。脚端部は丸く納めている胎土は緻密で精良である。外面は暗青灰色、内面に明青（灰）色、断面はセピア色を呈す。

壺

たわみ１から出土した壺**1092**は口縁部に鋭い三角形状の突帯が３条めぐり、中央に櫛目の細い波状文を施している。体部は平行叩きが認められる。表面灰色、内面淡灰色、断面灰色を呈し、胎土内に石英・長石粒を含むが精良で、焼成は良好である。

ＫＭ６区包含層から出土した壺**1313**は、須恵器というよりも灰黒色を呈し、瓦質に近い胎土である。口縁は不明であるが、二重口縁状になるものと思われる。外面は剝離が著しいが、わずかに格子目叩きが認められ、内面は頸部にヘラケズリ、下半部は無文のアテ具痕が見られる。表面灰黒色、内面淡灰色、断面淡灰色を呈する。胎土は精良である

ＭＢ３から出土した**1335**は、直口壺の口縁部で、２条の突帯がめぐり、その間に櫛描波状文を施す。表面は灰黒色、内面は濃緑色の自然釉がかかる。断面は灰黒色を呈す。

ＭＢ３区包含層から出土した壺**1341**は、球状に近い体部から曲線的な「く」の字状に外反する口縁部を持ち、口縁端部を上方に拡張する。頸部・体部境に２本の沈線がめぐる。体部外面は細い格子叩き、内面は丁寧なナデ調整を行う。表面灰色、内面青灰色、断面はセピア色を呈し、長石・石英粒を多く含む。

同じくＭＢ３区から出土した壺**1342**は、小片であるが、頸部に１条の沈線、肩部に刺突文、２条の沈線、櫛描波条文、沈線、刺突文(？)が続く装飾性の豊かな壺である。表面青灰色、内面暗青灰色、断面灰黒色を呈し、石英・長石粒を含む。

把手付椀

ＫＭ６区包含層出土の**1367**は、口径8.6cm、高さ７cm程の小さなカップ状の椀で把手は欠損している。体部下半に静止ヘラケズリを行っている。櫛描波状文、２条の鋭い突帯を持つ。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部をわずかに外に出し、内側に浅い段を作る。外面は灰黒色、内面は自然降

灰により灰白色を呈す。胎土は緻密で良く焼け締まっている。断面はセピア色を呈す。包含層1359・1360・1368は櫛描波状文は2段に描かれるが、いずれも良く似た成形、胎土のものである。

器台

土壙48・49から出土した高杯形器台脚部699は、そのほとんどが土壙49内からの出土であるが脚の一部が土壙48から出土している。櫛描波状文2段の組合せの文様帯が3段あり、それぞれその間を2条の鋭い突帯がめぐる。杯部との接合付近の厚さは1.2cm程あるが、脚裾部では0.4cm程である。3段の文様帯内に方形の透かしが千鳥状に切り込まれている。脚端部は、外上方に拡張する。内外面とも青灰紫色を、断面はセピア色を呈し、良く焼け締っている。胎土は細かい石英・長石粒を含んでいる。

高杯形器台1370はＭ６区包含層が主体であるが、溝11、井戸６上層出土の物が接合している。杯部の口径36cm、高さ10cmほどで非常に浅く、厚さは４～６mmの薄手の作りである。体部は底から1/2程は格子目叩きの後、櫛状工具で左下がりの縦方向に櫛目を施し、その上に２条の突帯がめぐり、外に開く口縁部にいたる。口縁端部は上下に拡張しＣ字状を呈す。内面中央部に重ね焼痕が認められる。内外面とも灰紫色、断面は明るいセピア色を呈し良く焼成されている。胎土には細かい石英・長石粒が含まれている。

ＭＭ４区から出土した高杯形器台の杯部1371は、体部下半に平行叩き目をもち、２条の沈線、２段の櫛描波状文、２条の突帯、沈線を持ち、少し湾曲ぎみに外に開く口縁部を持つ。口縁部はわずかに上下に拡張する。内面底部下半には、アテ具痕状の凹凸が認められる。外面は灰黒色、内面は自然釉がかかり明灰白色、断面はセピア色を呈し、胎土は緻密で良く焼け締まっている。

ＫＭ３区から出土した高杯形器台杯部1372は口径40cm、深さ14cm程になり体部外面は下から刺突文・２条の沈線・櫛描波状文・２条の突帯・２段の櫛描波状文・２条の突帯で飾る。口縁部はわずかに外に開き口縁端部を上下に突帯状に拡張する。外面は明灰色、内面は自然釉が流れる程かかり、濃緑灰色を呈する。胎土は緻密であるが細かい石英・長石粒を含み灰(紫)色を呈する。

脚部1338は杯部境での径10cm、脚端部の径33cm、高さ20cm前後に復元できる。上から２段の櫛描波状文・凹線・突帯・凹線・突帯・凹線の組合せが３段あり、更に最下段に櫛描波状文で飾り、２段の櫛描波状文の所に三角形の透かしを、上段と２段目は上下同位置に、３段目のみ千鳥状に配した装飾性豊かな脚部である。脚端部は凹線状に内外に強く拡張する。外面は明灰色であるが自然釉がかかり濃緑色、部分的に白色、内面は明灰色、断面は明セピア色を呈す。胎土は緻密で良く焼け締まっている。杯部1372と同一個体と考えられる。

同じくＫＭ３区から出土した高杯形器台の杯体部1375は、小片であるが複合鋸歯文、２条の突帯、２段の櫛描波状文をもつ。外面は灰黒色、内面は灰白色を呈する。胎土は緻密で、断面セピア色を呈する。

ＭＭ３区包含層出土の筒形器台1374は小片であるが、上から刺突文・２条の突帯間に、５cm間隔の竹管文・櫛描波状文・組紐文・組紐文の間に竹管文を施す。上段にも透かしの切り込み跡が見られるが形は不明である。櫛描波状文・組紐文の所には上部が円形、下部が台形状になる透かしを切り込んでいる。外面は明灰色、内面は明灰黒色、断面淡いセピア色を呈する。胎土は緻密で砂粒をほとんど含まない。

ＫＭ６区、ＫＢ１区から出土した椀形器台の脚部と考えられる389・1390は脚端部径15～16cm程で、突帯文・櫛描波状文・透かしなどで飾っている。全体に薄手の作りである。

角状杯

竪穴住居68から出土した須恵質角状杯は、三角錐状の先端部を少し曲げ角状にし最先端を切り落としたもので、筒部・口縁部は欠損しているが、その先端部７㎝程が残存している。外面は丁寧なナデ、内面はヘラケズリを行い、先端部にシボリ状の痕跡が認められる。住居内から６世紀前半の須恵器、製塩土器、刀子などが出土している。

管見による限り日本における須恵器の角状杯出土は表６の通りであり、本例が８遺跡９例目となる。時期的には本例も６世紀前半段階と考えられ、他の類例と考え合わせてもこの短時間における特異な器形と評価されている。現状では若狭・越に集中しており、この地域の独自の対外交渉の象徴的遺物とする意見がある[6]。本例が、直接間接にせよ、この地域との交渉の産物かどうかは即断は避けたい。

表６　角状杯（須恵質）出土遺跡一覧表

番号	出土遺跡	出土遺構	時期	文献
1	石川県中村畑遺跡	溝	６世紀後半	谷内尾晋司ほか「志賀町中村畑遺跡」『能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書』Ⅰ　石川県立埋蔵文化財センター　1982
2	石川県天神山遺跡	竪穴住居	６世紀前半	中島俊一ほか『敷地天神山遺跡群』　石川県立埋蔵文化財センター　1982
3	福井県獅子塚古墳	横穴式石室	６世紀前半	入江文敏　「獅子塚古墳」『福井県史』第13巻考古編　1986
4	福井県興道寺窯跡	窯跡	６世紀前半	森川昌和　『興道寺窯跡発掘調査概報』美浜町教育委員会　1979 入江文敏「興道寺窯跡」『福井県史』第13巻考古編　1986
5	岐阜県陽徳寺１号墳	横穴式石室	６世紀前半	大江　命ほか　『陽徳寺古墳群』関市教育委員会　1976
6	大阪府西岩田遺跡	包含層	６世紀？	才原金弘　「西岩田遺跡」『(財) 東大阪市文化財協会年報』1983年度　(財) 東大阪市文化財協会　1984
7	兵庫県赤根川金ヶ崎窯跡	窯跡	６世紀前半	
8	岡山県斎富遺跡	竪穴住居	６世紀前半	本書

愛知県陶磁資料館『装飾須恵器展』Ｈ.7.10　図録に土師質の角状杯を含めた一覧表・写真が掲載されている。なお本表は註６）文献を参考にした。

これらの他に須恵器の器形・胎土を持ちながら土師質に焼成されている土器群がある。これらの中にも陶質系土器の模倣と考えられるものがある。杯蓋**1397・1398・1399**、高杯**1428**、椀**1432・1433**、器種不明の**1434**、台付有蓋壺**1435・1436・1437**、器台**1443～1445**が指摘される。これらすべてが意識的に作られているとは思えないが、窯の構造が異なるのか、単に温度が上がらなかったため土師質にならざるを得なかったのであろうか。いずれにせよ、これらはこの地域で作られたものと考えたいが、その確証はない。

（３）算盤玉形土製紡錘車

算盤玉形土製紡錘車は直径４㎝、厚さ２㎝、重さ30ｇ前後の大きさになり、斎富遺跡から５点出土している。１点は竪穴住居21の埋土からで、あとは包含層出土のものである。定森秀夫の教示によれば、算盤玉形土製紡錘車は、朝鮮半島において無文土器時代には存在せず、瓦質土器の時期には不明であるが陶質土器が出現する４世紀初頭には確実に陶製・土師質の算盤玉形土製紡錘車がみられ６・７世紀まで存在し、朝鮮半島南部では古墳の副葬品として多く出土しているとの事である。列島内においては、西日本を中心に約36例が知られ、斎富遺跡例を加えると40例を越えることになる。これは土師質と須恵質の両者がみられ、滑石製のものが一点みられる。斎富遺跡の例はすべて土師質のものであり、岡山県内の出土例としても初例である。一集落遺跡から出土する量としては大阪市長原遺跡から７個、福岡市吉武遺跡から５個が出土している。竪穴住居21からはＥ２タイプの土製紡錘車とと

もに土師器壺の口縁部高杯の口縁部小片が出土している。これらの時期は5世紀後半前後のものと推察され紡錘車もまずこの時期に納まるものと考えられる。包含層の4点はＫＭ1区から1点、ＫＭ6区から2点、ＫＭ7区から1点で、遺跡の西半部分からの出土がほとんどである。これらも大きくは古墳時代の包含層が中心である。大きさ、厚さなど形態的にも竪穴住居21のものと同様なものである。管見に触れた算盤玉形土製紡錘車出土遺跡を表7に付す。

表7　算盤玉形紡錘車出土遺跡一覧表

＜九州＞

	所在地	遺跡名	個体数	文献
1	福岡県甘木市	池の上墳墓群	5	甘木市教育委員会「池の上墳墓群」1979
2	福岡県甘木市	古寺墳墓群	4	甘木市教育委員会「古寺墳墓群Ⅰ・Ⅱ」1982・1983
3	福岡県夜須町	石櫃	1	
4	福岡県三輪町	山隅窯跡	1	甘木市教育委員会「甘木市史資料考古編」1984
5	福岡県前原町	三雲寺口遺跡	1	柳田康雄・小池史哲(編)「三雲遺跡」1～Ⅳ「福岡県文化財調査報告書」1980～1983
6	福岡県福岡市	吉武遺跡群	5	山崎竜雄(編)「吉武遺跡群」Ⅰ「福岡市埋蔵文化財調査報告書」第127集　1986
7	佐賀県東背振村	浦田遺跡	1	

＜中国・四国＞

1	香川県豊中町	宮山窯跡	1(須)	松本敏三「香川県出土の古式須恵器－宮山窯跡－」『瀬戸内海歴史民俗資料館年報』第7号　1982
2	愛媛県伊予市	猿ケ谷2号墳	1(須)	「埋文えひめ」No23　1995
3	愛媛県	太郎丸遺跡	1	上記文献による
4	愛媛県松山市	福音寺筋違遺跡	1(須)	松山市教育委員会「国道11号バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書」1983
5	岡山県山陽町	斎富遺跡	5	本書
6	岡山県山手村	前山遺跡	1	岡山県教育委員会発掘調査（未報告　正岡睦夫・物部茂樹教示）

＜近畿＞

1	大阪府大阪市	長原遺跡	7	大阪市文化財協会「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅲ　1992
2	大阪府大阪市	瓜破遺跡	1	
3	大阪府八尾市	八尾南遺跡	3	八尾南遺跡調査会「八尾南遺跡」　1981
4	大阪府東大阪市	鬼塚遺跡	1	東大阪市文化財協会「かまどのふしぎ　5世紀ころの東大阪」　1993
5	大阪府堺市	大庭寺遺跡	4(須3)	大阪府埋蔵文化財協会「陶邑・大庭寺遺跡」　1989　大阪文化財センター「大庭寺遺跡」Ⅰ　1991
6		深田遺跡	1(須)	大阪府教育委員会「陶邑・深田」　1973
7		土師遺跡	1(須)	堺市教育委員会「土師遺跡49年度発掘調査概報」　1975
8	兵庫県神戸市	神楽遺跡	1(滑)	神戸市教育委員会「神楽遺跡」　1987
9	兵庫県神戸市	玉津・田中遺跡	1	兵庫県教育委員会発掘調査（未報告　定森秀夫・種定淳介教示）
10	兵庫県姫路市	三方古墳	1	兵庫県教育委員会「三方古墳調査報告」1980
11	奈良県御所市	下茶屋遺跡	1(須)	奈良県立橿原考古学研究所付属博物館「大和を掘る」14　1993　発掘調査速報展
12	京都府長岡市	今里遺跡	1(須)	京都府教育委員会「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」　1979
13	滋賀県守山市	欲賀西遺跡	1	滋賀県教育委員会「欲賀西遺跡発掘調査報告書」　1992

近畿出土のものについては、櫻井久之「古墳時代算盤玉形紡錘車―近畿地方出土例を中心とした検討―」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第32回）資料』1995．6による所が多い。

(4) おわりに

以上が斎富遺跡から出土した軟質系土器・陶質系土器と考えた主なものである。明らかに搬入された軟質土器・陶質土器と考えられるものは少ない。しかし軟質系土器としたものは、この地域においてその系譜をたどることが困難である。またこれらは、弥生時代後期ものを除けば、5世紀前半の竪穴住居62の格子目叩きをもつ甕（壺）、5世紀後半の周溝遺構1にともなう甕、甑（鍋）の抉り入り牛角状把手、6世紀前半の礼安里49号墳出土のものに似た平底鉢など、各時期にそのピークを見いだせるが、それ以前・以後の土器については見いだすことが出来ない。5世紀前半段階において朝鮮半島から渡来した人たちが、この地に定住し、これらの土器を作っていたものと考えられる。その後も

継続的に渡来は行なわれ、そのたびに新しい文物・技術が招来されたのであろう。

陶質系土器も同様のことが考えられるが、5世紀前半の時期には陶邑で生産が始められており、陶質土器とこれらを識別することは困難である。[7] さらに同じ頃、備中地域においても須恵器生産が行なわれていることが明らかになってきた。[8] 斎富遺跡のなかでもたわみ1の壺**1092**、包含層の壺**1341**・**1342**などは吉備で焼かれた可能性が考えられる。このように陶質系土器としたものの中には、陶邑産の初期須恵器、吉備産あるいはその他の地域産の初期須恵器が含まれている可能性がある。このことは、附編とした三辻氏の分析でも触れられており、陶質領域、陶邑領域以外に不明領域とされたもの中にはこの地域産の可能性を指摘されている。陶質土器としたもののなかでも竪穴住居58の杯蓋**186**のようにその故地が判明したものは少ない。多くは洛東江西岸地域・伽耶地域からもたらされたものと考えられるが、故地の追求は今後の研究課題としておきたい。

他に、鉄器についての問題が残るが、力量不足から加えることが出来なかった。また、土器・土製品等については、亀田修一・定森秀夫・安在　皓・金　斗喆・孫　明助・小田富士男・武末純一・田中清美・中野雅美の各氏から資料の提供、多くの有益な教示を得たが、小文には反影しきれない。各氏には心から御礼申し上げたい。（伊藤）

註

1）以下、触れる韓式系土器、軟質土器・軟質系土器、陶質土器・陶質系土器の用語については、第2章を参照されたい。

2）亀田修一・孫明助氏の教示による
鄭澄元・申敬淑・安在皓ほか「金海禮安里古墳群」Ⅰ　釜山大学校博物館　1985

3）そのほとんどのものが遺構に伴わなかったため紙面の関係上報告中に実測図を掲載できなかった。そのため、写真図版51－2として掲載している。

4）定森秀夫・亀田修一両氏の教示による。
沈奉謹・朴広春ほか「昌寧校洞古墳群」東亜大学校博物館　1992

5）この住居址からは、鉄地金銅張馬具の辻金具が出土している。辻金具が住居址内から出土した例は、日本国内においては福岡県八女市八女南中学校校庭遺跡11号竪穴住居から大量の須恵器などとともに出土しているのみで非常に希有な例である。
『八女市史』資料編　1953.3　武末純一・赤崎敏男氏の教示による。

6）入江文敏　「角杯形土器小考」『網干善教先生華甲記念　考古学論集』1988

7）特に最近調査された大阪府陶邑内に含まれる大庭寺遺跡(窯址)の出土品については、彼地出土品とどう異なるのか不明な点が多い。
『陶邑・大庭寺遺跡』Ⅰ～Ⅲ　大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財協会　1989　1990・1993

8）総社市奥ヶ谷窯跡が、1993年の調査でこの時期の窯跡であることが明らかとなった。
柴田英樹「奥ヶ谷窯跡」『岡山県埋蔵文化財報告』24　1994

第4節　遺跡の歴史的位置付け

第1節から第3節においては、斎富遺跡の時代変遷および遺構・遺物について検討を加えてきた。最後に当遺跡の歴史的位置付けについて述べることにより、発掘調査から報告書に関わる一応の責めを果たしたい。

斎富遺跡で人跡が辿れるのは縄文時代後期であるが、その内容は磨滅した2点の土器片のみであった。縄文時代晩期になると当遺跡から350mほど南に行った地点に南方前池遺跡が近接し、この周辺に集落を形成していた可能性が窺われる。

弥生時代になると、前期段階には遺構・遺物とも確認されておらず、空白の存在が考えられる。中期の中葉段階で遺物がわずかに認められるだけであり、再び居住が行なわれるのは後葉になってからである。これは周辺遺跡の状況とも基を一にしている。第2章で触れたように斎富遺跡の西方、砂川を挟んだ反対側の丘陵部には用木山遺跡・門前奥池遺跡をはじめとした遺跡がこの時期前後から営まれることが認められる。おそらくは斎富遺跡の集落もこうした動きのなかで生み出されてきたものと評価される。また、これら遺跡の調査は大規模開発に伴うであり、当然調査範囲も広大であったことから、墓域も確認され、その中で首長層の特定化といった現象が窺える。斎富遺跡では、特定の墓域は認められず、集落中から単独で成人埋葬と思われる土壙墓が検出されている。このことは、先に述べたが、観念の差に起因するのであろうか。なお、今回の報告で詳細に論じえなかったが、後期前葉から中葉にかけての比較的まとまった土器資料があり、岡山市雄町遺跡や同百間川遺跡群が占地する備前南部の沖積遺跡群と同じ地域に立地するが、それよりも奥の丘陵縁辺に占地する当遺跡の資料は、土器の様相を比較検討する良好な材料となるであろう。このことは、竪穴住居18出土の**73**の壺と溝5出土の**850**の器台の土器は、器形・胎土・色調とも美作地域に分布する中期後半のそれときわめて近い内容を示すことも、周辺地域との関係を知る上でも注目される。

先に、周辺遺跡との関係で一連のものとして営まれたことを述べた。しかし、古墳時代後期中葉に朝鮮半島との関わりの萌芽が認められる以前に、すでにこの弥生時代の段階において、そのことが認められると思考されるのである。遺構は、古墳時代後半期に含めたが具体的に言及を避けた周溝遺構4である。この遺構からの出土遺物は**332**の平底鉢で、あまり認められない器種であるが、当遺跡においては時期の明らかとなる土器を伴う。最も古くなるのは、土壙4のⅦc期の高杯をともなうもので、新しいものは古墳時代後期中葉である。また、包含層からの**1235**がそれであるが、底部外面に木葉文を付している。いずれも雑な作りであり、土壙4と包含層のものは顕著にユビオサエが認められるが、**332**は、器面の凹凸は認められるがユビオサエは顕著でなく、ハケメが認められる。この器種に近いものが斎富遺跡から南西に2.3kmの地点に所在する門前池東方遺跡[1]から筒杯形土器として出土している。土器は斎富遺跡出土のものに対し丁寧に作られ、様相が異なるがその形態的類似を想起させる。この時期は弥生時代後期のⅧaとされ、周溝遺構4は伴出遺物がなく判断できかねるが、重複する溝3との関係から弥生時代後期中葉以降と考える。このことから、後期前葉においすでにて認められるが周溝遺構4例は、その時期まで遡るものではないことが明らかとなった。したがって、古墳時代後期中葉まで下げることが可能であろうか、再度検討したい。周溝内に存在する建物は、梁の中柱が認められないのである。仮に、新しい時期にともなうものであれば、斎富遺跡において梁の中柱

が認められないのは4例、時期が想定できるのは掘立柱建物31・37で時期はいずれも古墳時代後期末葉である。梁の中柱を用いないという建物は、弥生時代に普遍的に認められるものである。また、遺構の位置関係においても竪穴住居と重複することなく、強いて言えば、それらと距離をおいて存在している状況が看取される。遺物においては、当遺構出土のものは大形であり、新しい時期に伴うのは小さことが言えよう。このようなことから、周溝遺構4は、弥生時代後期後葉以降に存在していたことが妥当と考える。さらに、包含層出土の**1172**と**1212**の土器は、前者が弥生土器と後者を韓式系土器としたが、管見において見られない土器である。時期的には、**1212**が古そうな感を受け、**1172**はそれよりも新しくなると考えられ、弥生時代後期に含まれると考えるが、そのいずれかの段階かの判断ができない。しかし、周溝遺構4の存在とともにより早い段階から朝鮮半島との関わりがわずかであっても、以降の展開におおきな影響を及ぼしたことが明らかとなった。

古墳時代前半から後半期前葉までは、集落を規模的にみれば前段階からの継続上にあると考えられる。このことは、韓式系土器の出土など前段階からの斎富遺跡の有する対外的なつながりを内在させていることが、この後に顕在化する朝鮮半島系遺物などによって明らかであろう。この遺跡が占地する所、第4章第1節で述べたように肥沃な平野部と異なり、限られた扇状地に立地するこの遺跡では生産基盤となりうる可耕地も少なく、集落の大きく発展することは望めず、分村的存在であったと思われる。

集落規模が大きく拡大するのは古墳時代後期中葉以降である。山陰地域に多く認められる形態を有する竪穴住居が存在し、陶質系・軟質系土器、算盤玉形の土製紡錘車をはじめとする朝鮮半島系遺物の出土が顕在化する。日常生活具である土器の**315**・**316**・**1236**・**1238**の色調は橙色系のものであるが、**1344**は灰色系のものであり、その焼成内容を異にするが口縁部端部の処理は同じ、**171**にみられ平底鉢、**226**・**1229**の小形の甑とそれに似た鉢など極めてその傾向の強いものである。これらの土器は、従来からの認識として煮炊きに用いられたものであるが、これに属さないものがわずかながら認められる。**1435**・**1436**・**1437**と**1072**である。**1435**～**1437**は図において別個体として示しているが、416頁で述べたごとく脚付有蓋壺である。また、**1072**は土師器の壺としているが、短めに立ち上がる頸部から端部を折り曲げて玉縁の口縁をつくる。この器種は朝鮮半島において見られるものに、大変近い内容[2)]を示すが、この遺物は肩部以下にタタキを施すのが常である。しかしながら、当遺跡出土のものはそこまでの遺存がなく不明である。このように、食にかかわるものの他に、衣にかかわる紡錘車の出土が見られる。朝鮮半島系とみられる算盤玉形のものは、5個出土している。これ以外に在来系のものは、29点みられる。一遺跡において朝鮮半島系の紡錘車がこのようにまとまって出土することは管見しても多くはない。さらに、生業としては明らかな遺構そのものは検出できなかったものの多量の鉄滓の出土は、これに直接関わっていたことの証であろう。

このようにみて行くと、とくに衣における紡錘車の存在は、新たな織物の展開を可能にさせる技術的側面を内包していたことが、これだけ多くの出土の契機とされる。生業は、斎富遺跡の人々が当時の先端技術の一つである鉄生産に関わる可能性を述べた。このことが、第4章第1節で述べた他に、文中で度々指摘した遺跡の立地条件の悪さが存在するにもかかわらずこの期以降このような集落が形成された内的な要因である。しかし、この直接的な要因としては、この地域に全長192mの前方後円墳である両宮山古墳を頂点とする強大な勢力が介在していたことは想像に難くない。これらの勢力が、畿内との密接な関係のなかでこうした朝鮮半島との交渉を掌握していたか、独自に関係を保持してい

たのかは憶測の域をでない。しかしながら、斎富遺跡の在り方から統括され居住地を限定された集落と理解できないであろうか。これが、直接的要因であると思考する。

斎富遺跡と密接に関わっていることが指摘されるのは、すでに報告がなされている斎富古墳群[3]がこの北東丘陵上に位置する。この古墳群の被葬者はその位置関係からして、斎富遺跡を構成する集落の首長層であることを想定することは可能であろう。斎富古墳群は6世紀中葉から7世紀前半の時期を考えている[4]。古墳群からは、直接に斎富遺跡と関わりのある朝鮮半島系遺物の出土は見られていない。しかし、何らかの関わりを有するものと考えられるのが、数点認められる。これが、2号墳第1主体と同第3主体出土の曲刀子および同第4主体出土の長脚無蓋高杯である。曲刀子は、鍛造具や各種の工具などの多くの副葬品が検出された総社市隋庵古墳[5]から出土している。豊富な鉄関係の副葬から、それらに関わる集団の首長のものとされる。また、曲刀子は朝鮮半島にも見られることから、その系譜を鉄生産と合わせ彼の地との繋がりを考慮できないであろうか。さらに、長脚無蓋高杯は脚下端を塞ぎ、中に陶製の丸玉2個を入れて鈴として作っているのである。このように、別の製品で鈴として作製されているのは、半島では14～20cmの小形の長頸壺の体部や脚、小形の壺をこのように塞いで鈴杯という名称で認められている[6]。このようにみていくと、時期的に重なり合う両者が生活の場と葬送の場におけるその種の遺物の顕在化する差異の背景は、次のように理解できないであろうか。

まず、先に触れたように移動あるいは移住にかかわる人々が世代交代により在地化、または、首長層自体は在地出身であり、移住者層を支配した。このどちらかとは、判断しがたいが斎富古墳群に副葬されている品物は、我が国内においても余り出土例のないものであり[7]、とくに、長脚無蓋高杯の鈴の副葬は一般的な副葬品ではなく、そこに鳴らすという行為があったのではないであろうか。また、斎富遺跡からはC14～17の4個の土鈴が出土している。朝鮮半島においても出土しているが、当遺跡のものより大きく、球形状に丁寧に作られているようであり、穴も認められる。このように、様相が異なるが音を出すということは同じような用い方をしていたとみても可能であろうか。そして、短絡的ではあるが、葬送の場に加わり用いられたことが推測することが可能ならば、先の見解の後者に比重をおくことが許されるでのではないか。何れにしても、6世紀中葉段階よりも新しい製塩土器を伴う竪穴住居68からは、角状杯が出土している。また、竪穴住居70からは6世紀中葉の須恵器と伴に2本の長方形の鎌が検出され、その基部の折り曲げ方向が異なるのである。鎌の刃部を下にし基部を右側に置いた場合、手前と向こう側に曲げられるものが存在し、前者が国産で後者が朝鮮半島産との考えがある[8]。このように、6世紀中葉以降においても依然として、朝鮮半島に係わると推定される遺物の存在が認められる。しかし、このような遺物は6世紀後半から末葉にいたってはこうした遺物は見られなくなり、こうした側面からも在地化への進行が判断される。

以上のことから、斎富遺跡の集落は人の移住に起因し、鉄生産といった当時の先進技術を有する人々である。この人々の生業以外に副次的にもたらされた衣食にかかわる側面についても大きな影響をもたらしたことが言えよう。5世紀後半以降、この地域において先進技術を持つ外来の人々を移住させ統括した在地の有力集団が単独で行いえたものであろう否か、検討が必要であろう。

ともかく、在地化へと内包されていった集落は、斎富古墳群を形成させるほどの有力集団へと変化していったと思われる。この集団は、奈良時代に二重の溝により構成される方形区画を持つまでになる。しかし、方形区画溝を持つものの、雑然とした掘立柱建物配置から、「郡」「郷衙」といつたものではなく、「館」的な性格[9]や、また、このような公的以外の性格付けも可能であろう。何れにしても、

この時代の公的施設あるいは一般的な掘立柱建物の在り方を考える上で新たな資料となる。さらに、1町ほどの範囲においてこれらの配置が想定されたが、当遺跡が存在する大字斎富の南側の大字南方を含めた部分は、条里の地割りがこの付近を境として認められないのである。このようなことから、奈良から平安時代までは、居住地域とされていたと解され、鎌倉時代以降現在のような水田としての景観を次第に形成していったと思考されるのである。　（下澤・大橋）

なお、第5章第1・4節は、下澤と大橋の協議のもと、大橋が草稿したものを、下澤が文章化したものであり、遺構の時期・性格についての責は下澤にある。

註

1）塩見真康也「岡山県山陽町門前池東方遺跡の朝鮮半島系資料」『古文化談叢』1994
2）亀田修一の教示による。
3）「斎富古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』99　岡山県教育委員会　1995
4）註3）に同じ
5）鎌木義昌『隨庵古墳』総社市教育委員会　1965
6）定森秀夫の御教示による。『눈으로　보는　고대의소리』国立晋州博物館　1992
7）島根県松江市金崎古墳から出土している。
『音の考古学―音具と鳴器の世界』茨城県立歴史館　1996
8）松井和幸「日本と朝鮮半島の鉄と鉄製品」『考古学ジャーナル第33号』1990
9）斎富遺跡から3㎞西に、馬屋遺跡があり、これも「館」的性格が想定されている。馬屋遺跡が所在する馬屋地区は古代山陽道高月駅に想定されている。
「馬屋遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』99　岡山県教育委員会　1995

附編　自然科学分野における分析・鑑定

・斎富遺跡出土の軟玉製丸玉の産地分析

京都大学原子炉実験所　　藁科哲男

・斎富遺跡出土の赤色顔料物質の微量定性分析ならびにその赤色顔料に関わる材質定量分析

武庫川女子大学薬学部　　安田博幸　金杉直子

・斎富遺跡出土珠文鏡の鉛同位体比

東京国立文化財研究所　　平尾良光　榎本淳子

・斎富遺跡出土硬質土器の蛍光X線分析

奈良教育大学　　三辻利一

・斎富遺跡出土土器の胎土分析　－土師質の須恵器を中心に－

岡山理科大学　　白石　純

・斎富遺跡と周辺古墳出土製鉄関連遺物の金属学的調査

大澤正己

・斎富遺跡亀田調査区における花粉分析・植物珪酸分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

斎富遺跡出土の軟玉製丸玉の産地分析

京都大学原子炉実験所　藁科　哲男

（1）はじめに

遺跡から出土する大珠、勾玉、管珠の産地分析というのは、玉類の製品が何処の玉造遺跡で加工されたということを調査するのではなく、何ケ所かあるヒスイの原産地うち、どこの原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが、玉類の原産地推定である。玉類の原石の産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法[1]および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光X線分析で行う元素比法[2,3]が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析で系統的に行った研究は蛍光X線分析法と電子スピン共鳴法を併用し産地分析より正確に行った例[4]が報告されている。石鏃など石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。(1)石器の原材産地推定で明らかになる、遺跡から石材原産地までの移動、活動範囲は、石器は生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。(2)玉類は古代人が生きるために必ずしもいるものではない。勾玉、管玉は権力の象徴、お祭、御守り、占いの道具、アクセサリーとして、精神的な面に重要な作用を与えると考えられる。従って、玉類の産地分析で、明らかになるヒスイ製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を現わしているかもしれない、お祭、御守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏が考えられる。石器の原材産地分析で得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

今回分析を行った玉類は岡山市斎富の斎富遺跡土器溜り1出土の軟玉製丸玉1個で、この遺物の分析結果が得られたので報告する。

（2）非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。

ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行なえる方法でなければ発展しない。石器の原材産地分析で成功している[5]。非破壊で分析を行なう蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠、勾玉、管珠などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。ヒスイ製玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をり、この元素比の値を原産地を

区別する指紋とした。

（3）ヒスイの原産地

分析したヒスイ原石は、日本国内産では(1)新潟県糸魚川市と、それに隣接する同県西頸城郡青海町から産出する糸魚川産、(2)軟玉ヒスイと言われる北海道沙流郡日高町千栄の日高産[6]、(3)鳥取県八頭郡若桜町角谷の若桜産、(4)岡山県阿哲郡大佐町の大佐産、(5)長崎県長崎市三重町の長崎産であり、さらに(6)西黒田ヒスイと呼ばれている静岡県引佐郡引佐町の引佐産の原石、(7)兵庫県養父郡大屋町からの原石、(8)北海道旭川市神居町の神居コタン産、(9)岐阜県大野郡丹生川村の飛騨産原石、また、肉眼的にヒスイに類似した原石で玉類等の原材になったのではないかと考えられる(10)長崎県西彼杵郡大瀬戸町雪浦からの原石である。国内産のヒスイ原産地は、これでほぼつくされていると思われる。これら原石の原産地を図1に示す。これに加えて外国産として、ミャンマー産の硬玉と台湾産軟玉および韓国、春川産軟玉などのヒスイの分析も行われている。

（4）ヒスイ試料の蛍光X線分析

ヒスイの主成分元素はナトリュウム(Na)、アルミニュム(Al)、珪素(Si)などの軽元素[7]で、次いで比較的含有量の多いカルシウム(Ca)、鉄(Fe)、ストロンチウム(Sr)である。また、ヒスイに微量含有されている、カリウム(K)、チタニウム(Ti)、クロム(Cr)、マンガン(Mn)、ルビジウム(Rb)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)、ニオビウム(Nb)、バリウム(Ba)、ランタニウム(La)、セリウム(Ce)の各元素を分析した。主成分の珪素など軽元素の分析を行わないときには、励起線源のX線が試料によって散乱されたピークを観測し、そのピークの大きさが主に試料の分析面積に比例することに注目し、そのピークを含有元素と同じく産地分析の指標として利用できる。ナトリュウム元素

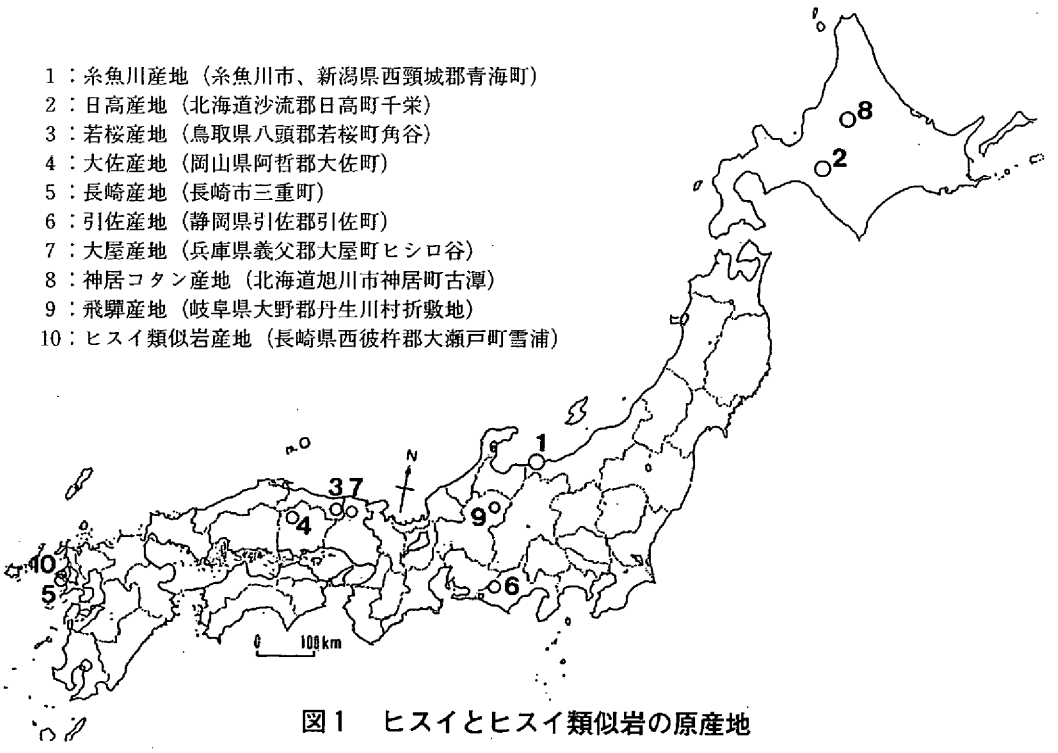


図1　ヒスイとヒスイ類似岩の原産地

はヒスイ岩を構成するヒスイ輝石に含有される重要な元素で、出土した遺物が硬玉か否かを判定するには直接ヒスイ輝石を観測すればよい、しかし、ヒスイ輝石を非破壊で検出できる方法が確立されるまでは、蛍光X線分析でNa元素を分析し間接的にヒスイ輝石の存在を推測する方法にたよる他ないのではなかろうか。各原産地の原石のなかで、確実にNa元素の含有が確認されるヒスイ産地は糸魚川、大屋、若桜、神居コタン、長崎の各原産地の原石でこれらは硬玉に属すると思われる。Na元素の含有量が分析誤差範囲の産地は日高、引佐、飛騨の各産地の原石である。糸魚川産原石のうち緑色系の硬玉に、肉眼的に最も似た原石を産出する産地は、他の硬玉産地よりも後述した日高、飛騨、引佐の原石に見られる。各原産地の原石の他の特徴を以下に記述する。若桜産のヒスイ原石はSrのピークがFeのピークに比べて相当大きく、またZrの隣に非常に小さなNbのピークが見られ、Baのピークも大きく、糸魚川産では見られないLa、Ceのピークが観測されている。このCeのピークは大佐産と長崎産ヒスイ原石のスペクトルにも見られ、これらCeを含有する原石の産地は、糸魚川の産地と区別するときに有効な判定基準なる。長崎産ヒスイは、Tiの含有量が多く、Yのピークが見られるのが特徴的である。日高産、引佐産、飛騨産ヒスイ原石は、Caピークに比べてTiとかK、またFeピークに比べてSrなどのピークが小さいのが特徴で糸魚川産のものと区別するときの判断基準になる。

春川軟玉原石は、優白色の工芸加工性に優れた原石で、軟玉であるが、古代では勾玉などの原材料となった可能性も考えられることから分析を行った。この原石には、Sr、Zrのピークが全く見られないため、糸魚川産などのSr、Zrを含有する原石と容易に区別できる。また、長崎県雪浦のヒスイ類似岩をヒスイの代替品として勾玉、大珠などの原材料に使用している可能性が考えられ、分析を行った。この岩石は比重が2.91と小さく、比重でもって他の産地のものと区別できる。また砒素(As)ピークが見られる個体が多いのも特徴である。

これら各原産地の原石は同じ産地の原石であっても、原石ごとに元素の含有量には異同がある。したがって、一つの原産地について多数の原石を分析し、各元素の含有量の変動の範囲を求めて、その産地の原石の特徴としなければならない。

糸魚川産のヒスイは、白色系が多いが、緑色系の半透明の良質のもの、青色系、コバルト系、およびこれらの色が白地に縞となって入っているものなど様々である。分析した糸魚川産原石の比重を調べると、硬玉の3.2～3.4の範囲のものと、3.2に達しない軟玉に分類される原石もある。若桜産、大佐産の分析した原石には、半透明の緑色のものはないが、全体が淡青緑かかった乳白色のような原石、また大屋産は乳白色が多い。このうち大佐産、大屋産の原石では比重が3.20に達したものはなく、これらの原石は比重からは軟玉に分類される。しかし、ヒスイ輝石の含有量が少ない硬玉とも考えられる。長崎産のヒスイ原石は3個しか分析できなかったが良質である。このうち1個は濃い緑色で、他の2個は淡い緑色で、少しガラス質である。日高産ヒスイの原石は肉眼観察では比較的糸魚川産のヒスイに似ている。ミャンマー産のヒスイ原石は、質、種類とも糸魚川産のヒスイ原石と同じものが見られ肉眼で両産地の原石を区別することは不可能と考えられる。分析した台湾産のヒスイは軟玉に属するもので、暗緑色のガラス質な原石である。これらの各原産地の原石の分析結果から各産地を区別する判断基準を引き出し産地分析の指標とする。

(5) ヒスイ原産地の判別基準

原石産地の判定を行なうときの判断基準を原石のデーターから引き出すが、分析個数が少ないため、

表1　ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準（1）

原産地名	分析個数	蛍光X線法による元素比の範囲					
		比重	K／Ca	Ti／Ca	Sr／Fe	Zr／Sr	Ca／Si
糸魚川産	41	3.00～3.35	0.01～0.17	0.01～0.56	0.15～30	0.00～2.94	0.72～27.6
若桜産	12	3.12～3.29	0.01～0.91	0.03～0.59	3.45～47	0.00～0.25	4.33～48.4
大佐産	20	2.85～3.17	0.01～0.07	0.00～1.01	3.18～61	0.00～12.4	3.47～28.6
長崎産	3	3.16～3.23	0.01～0.14	0.17～0.33	0.02～0.06	4.30～16.0	
日高産	22	2.98～3.29	0.00～0.01	0.00～0.02	0.00～0.37	0.00～0.063	5.92～51.6
引佐産	8	3.15～3.36	0.04～0.04	0.00～0.03	0.03～0.33	0.00～0.018	36.3～65.9
大屋産	18	2.96～3.19	0.03～0.08	0.04～0.16	1.08～79	0.02～0.48	0.95～4.81
神居コタン産	9	2.95～3.19	0.02～0.49	0.09～0.17	0.04～0.22	0.12～0.85	2.22～17.3
飛騨産	40	2.85～3.15	0.01～0.04	0.00～0.00	0.02～0.10	0.00～1.24	12.7～28.5
ミャンマ産	26	3.15～3.36	0.02～0.14	0.01～0.26	0.09～2.5	0.01～23	
台湾産	1	3.00	0.003	ND	ND	ND	

ND：検出限界以下の濃度

表2　ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準（2）

原産地名	蛍光X線法による分析元素（各元素が確認できた個体数の百分率）							
	Cr	Mn	Rb	Y	Nb	Ba	La	Ce
糸魚川産	26%	6%	20%	ND	13%	33%	ND	ND
若桜産	ND	ND	16%	ND	100%	100%	67%	67%
大佐産	ND	ND	44%	ND	33%	100%	67%	67%
長崎産	ND	ND	ND	100%	100%	100%	100%	100%
日高産	tr	tr	ND	ND	ND	tr	ND	ND
引佐産	88%	75%	ND	ND	ND	ND	ND	ND
大屋産	tr	ND	31%	ND	6%	90%	100%	100%
神居コタン産	ND	100%	22%	100%	ND	55%	ND	ND
飛騨産	100%	100%	ND	ND	ND	ND	ND	ND
ミャンマ産	13%	4%	ND	ND	ND	35%	ND	ND
台湾産	tr	tr	ND	ND	ND	ND	ND	ND

ND：検出限界以下　　tr：検出確認

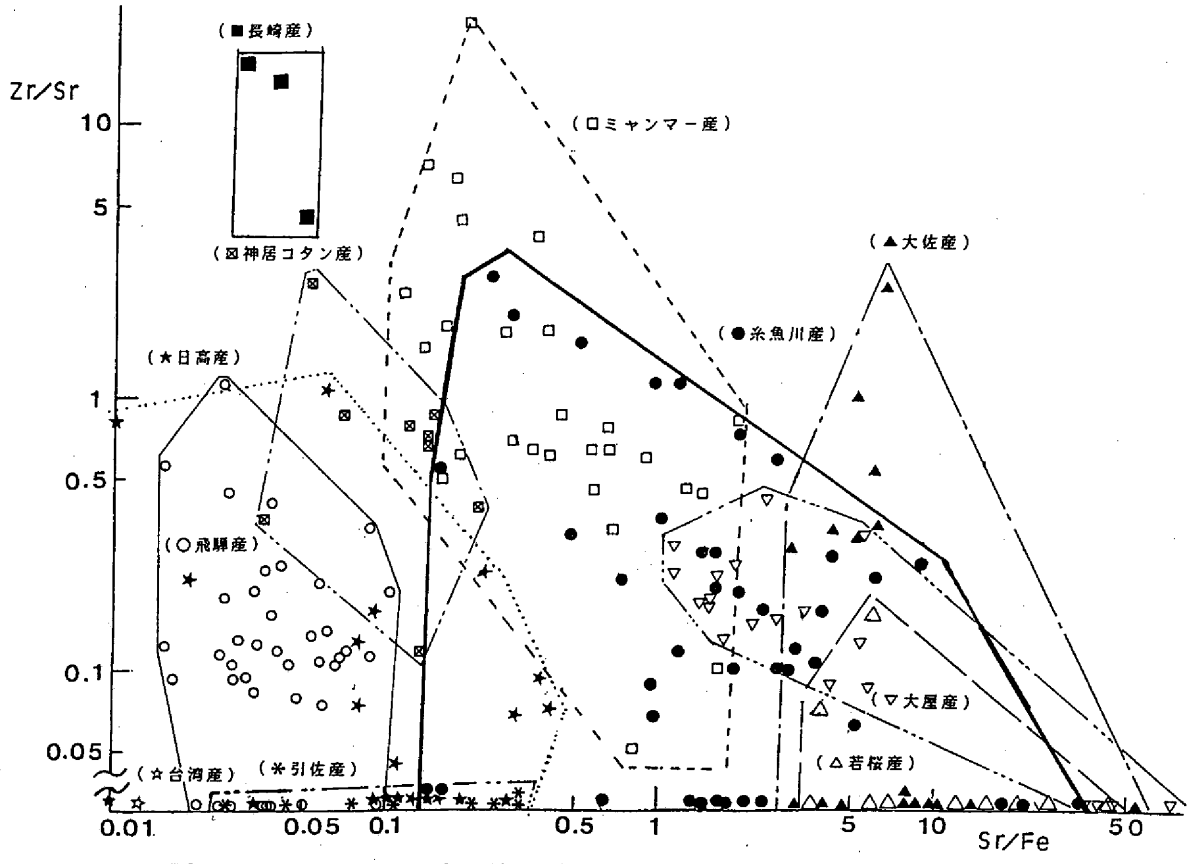


図2　ヒスイ原石の元素比値Zr／Sr対Sr／Feの分布および分布範囲

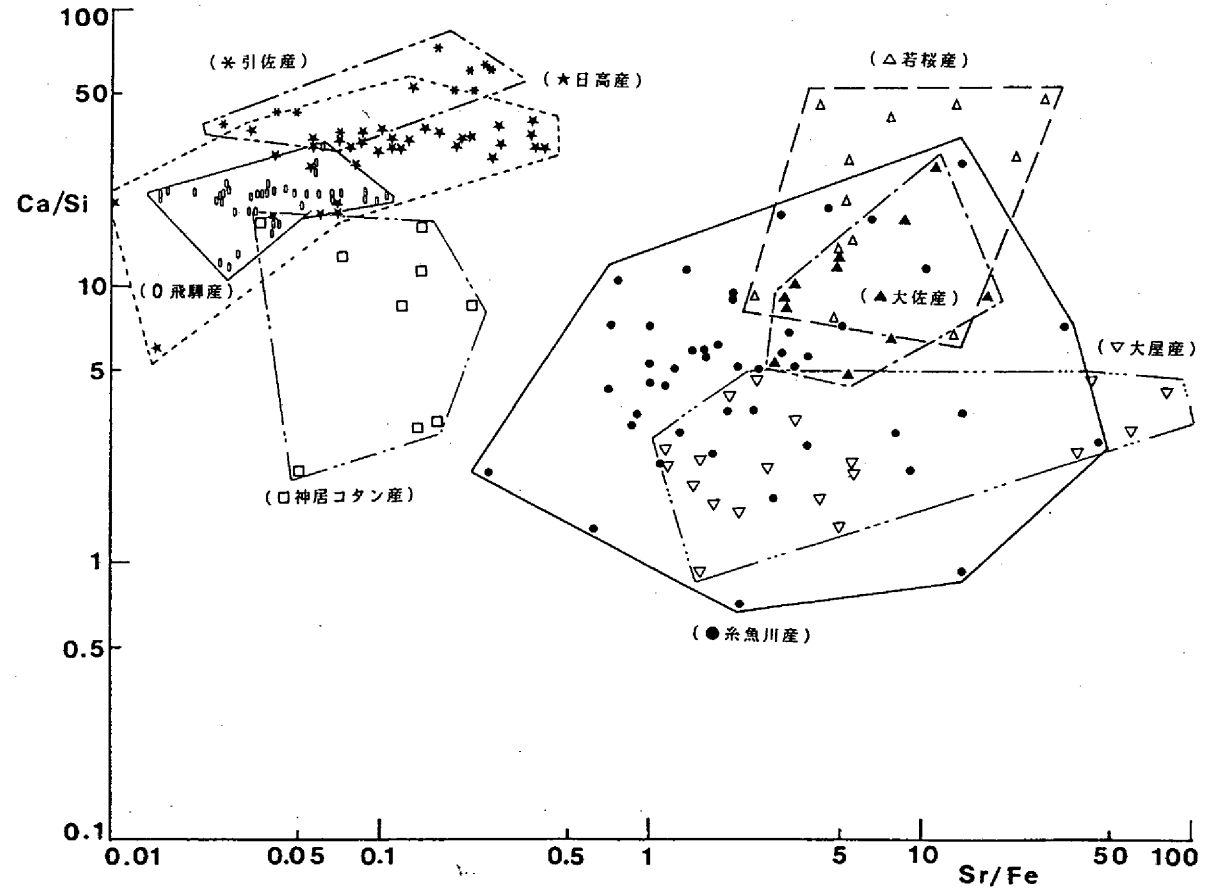


図3　ヒスイ原石の元素比値Ca／Si対Sr／Feの分布および分布範囲

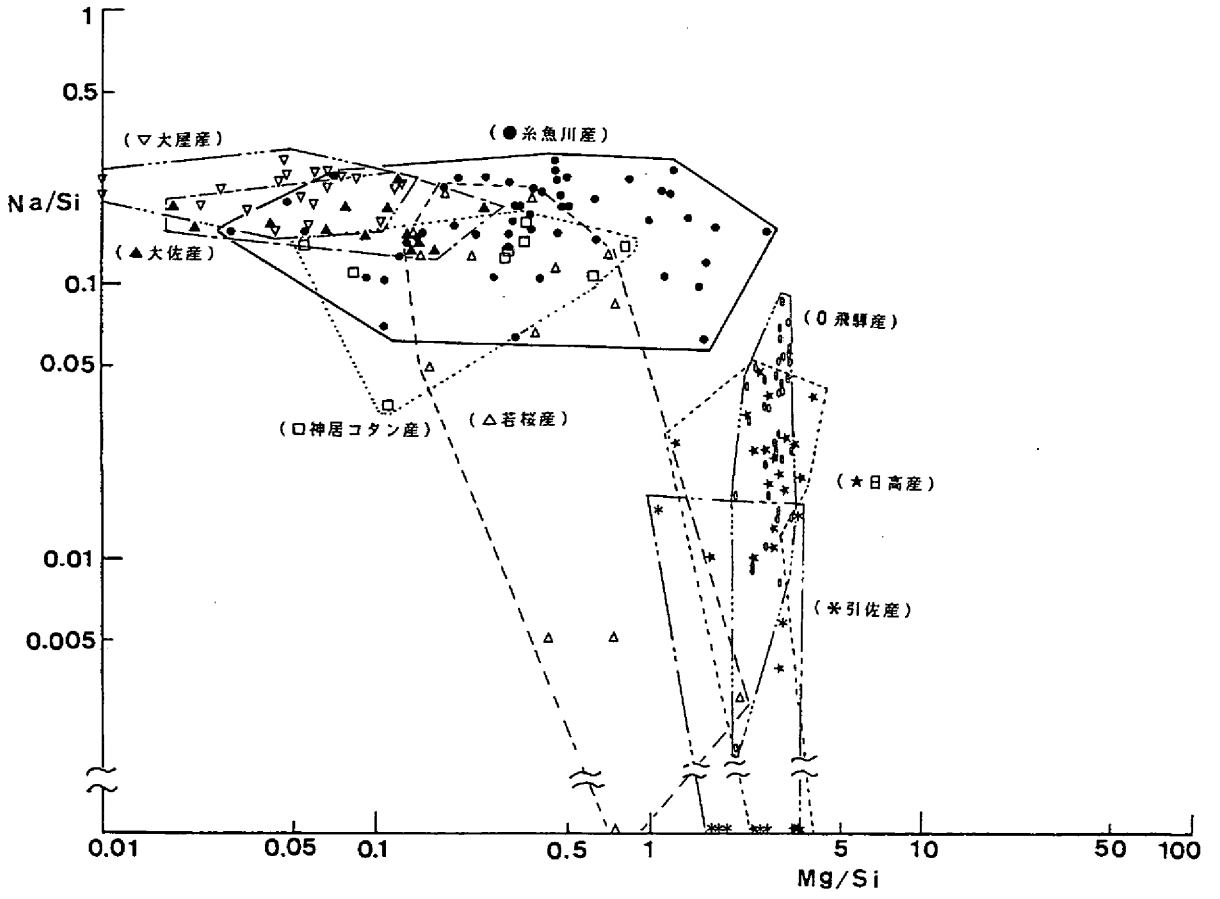


図4　ヒスイ原石の元素比値Na／Si対Mg／Siの分布および分布範囲

必ずしもその原産地の特徴を十分に反映したと言えない産地もある。表1に各原産地ごとの原石の比重と元素比量をまとめた。元素比量の数値は、その原産地の分析した原石の中での最小値と最大値の範囲を示し、判定基準(1)とした。ヒスイで比重が3.19未満の軽い原石は、硬玉ヒスイではない可能性があるが、糸魚川産の原石で3.19未満のものも分析を行った。大佐産のヒスイは比重が3.17未満であった。したがって、遺物の比重が3.3以上を示す場合は判定基準(1)により大佐産のヒスイでないと言える。日高産、引佐産の両ヒスイではSr/Feの比の値が小さくて、糸魚川産と区別する判定基準(1)になる。表2の判定基準(2)にはCr、Mn、Rb、Y、Nb、Ba、La、Ceの各元素の蛍光X線ピークが観測できた個体数を%で示した表である。例えば、遺物を分析してBaのピークが観測されなかったとき、その遺物は、若桜、大佐、長崎産のヒスイでないといえる。

図2はヒスイ原石のSr／Feの比の値とSr／Zrの比の値の分布を各原産地ごとにまとめて分布範囲を示したものである。●は糸魚川産のヒスイで、分布の範囲を実線で囲み、この枠内に遺物の測定点が入れば糸魚川産の原石である可能性が高いと判断する。□はミャンマー産のヒスイの分布で、その範囲を短い破線で囲む。糸魚川の実線の範囲とミャンマーの破線の範囲の大部分は重なり両者は区別できないが、ミャンマーと糸魚川が区別される部分がSr／Feの値(横軸)2.5以上の範囲で見られる。この範囲の中に、遺物の測定点が入ればミャンマー産と考えるより、糸魚川産である可能性の方が高いと考えられる。▲は大佐産の、△は若桜産の、▽は大屋産のヒスイの分布を示している。

糸魚川と大佐、若桜、大屋のヒスイが重なる部分に遺物の測定点が入った場合、これら複数の原産地を考えなければならない。しかし、この遺物にBaの蛍光X線スペクタルのピークが見られなかっ

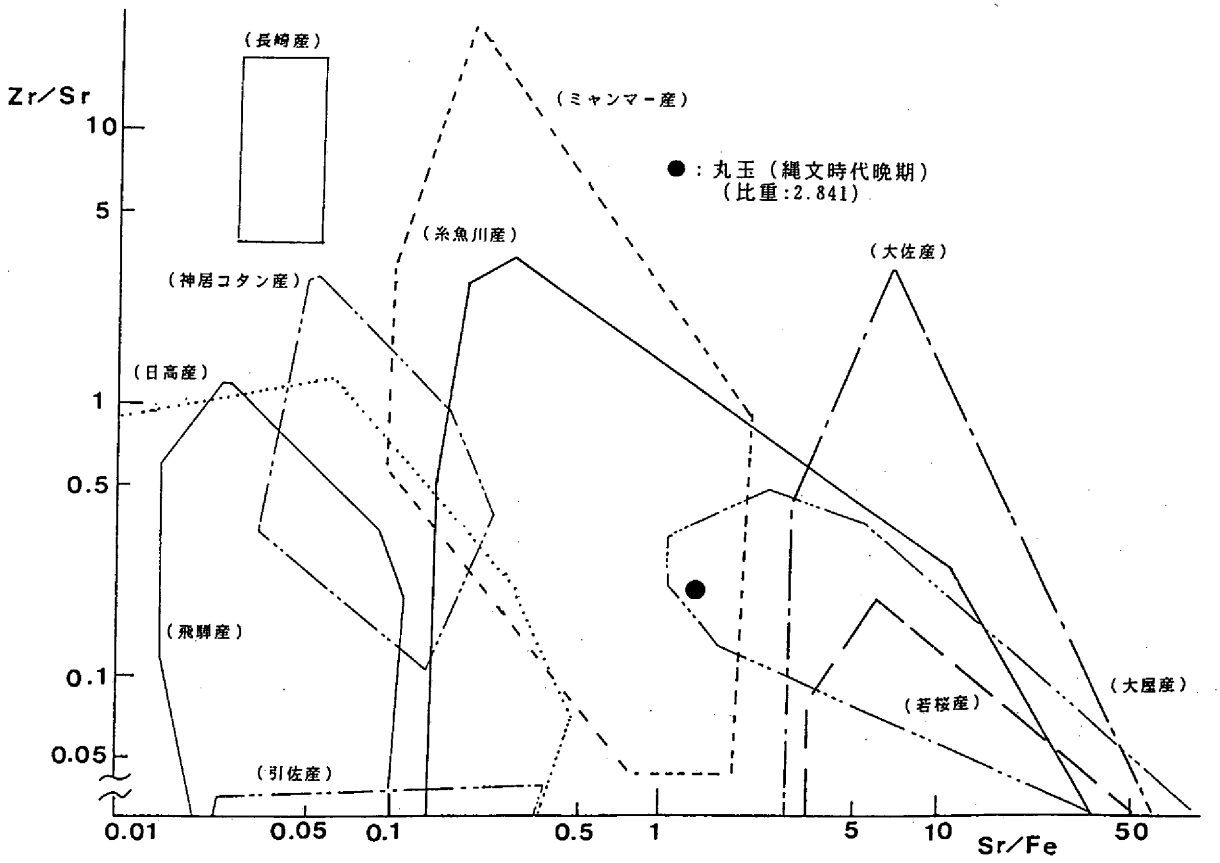


図5　斎富遺跡出土の軟玉製丸玉のZr／Sr対Sr／Feの分布

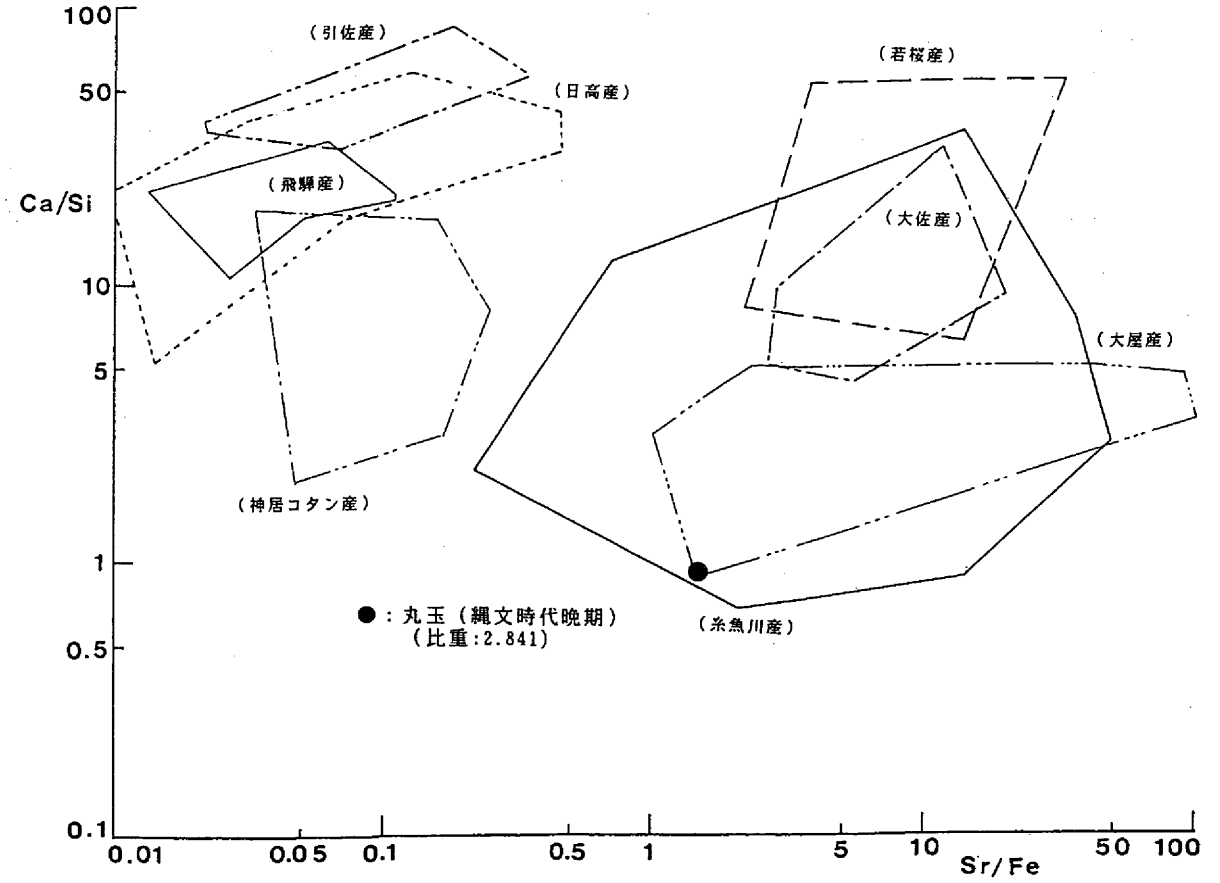


図6　斎富遺跡出土の軟玉製丸玉のCa／Si対Sr／Feの分布

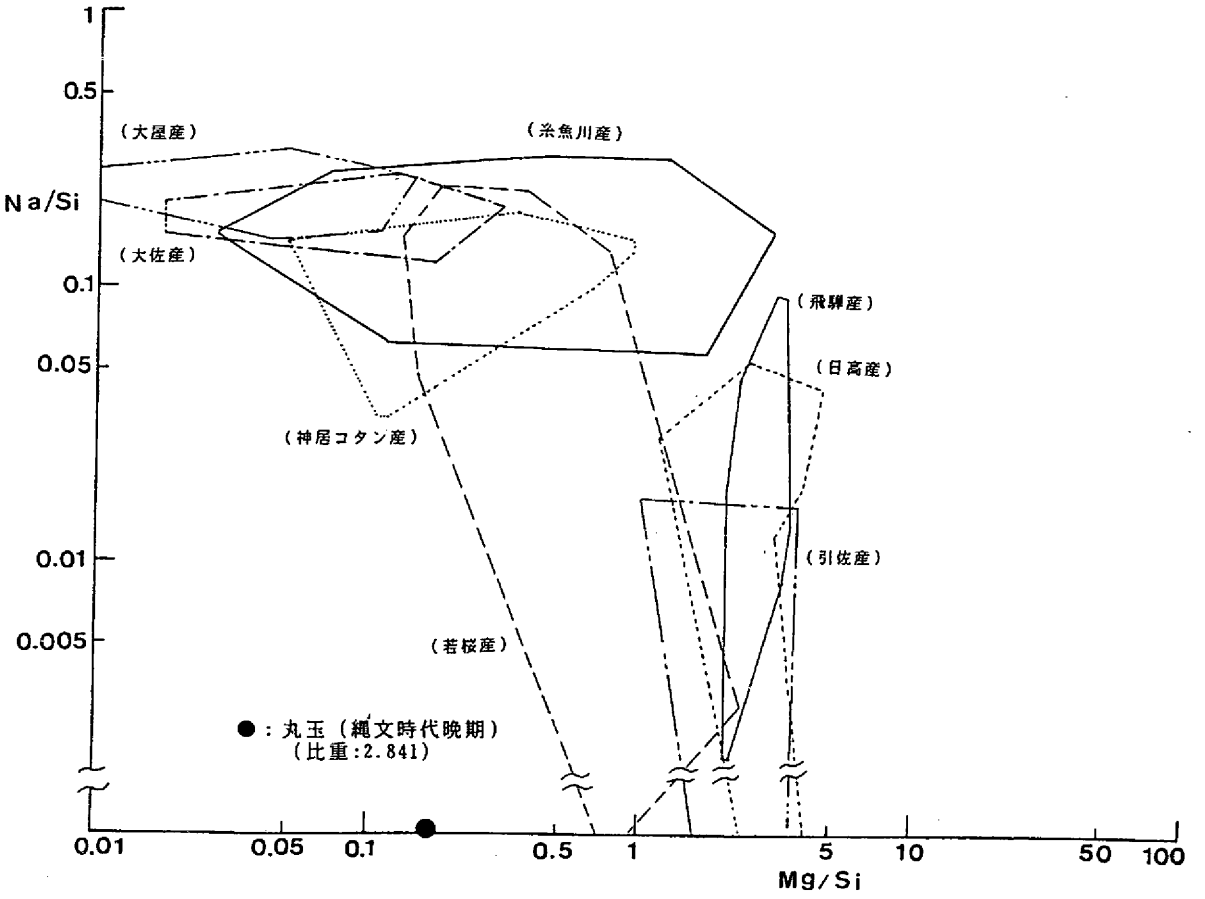


図7　斎富遺跡出土の軟玉製丸玉のNa／Si対Mg／Siの分布

表3　斎富遺跡出土の軟玉製丸玉の元素分析値

分析番号	元素 分析値の 比量 K／Ca	Ti／Ca	Sr／Fe	Zr／Sr	Ca／Si	Na／Si	Mg／Si	分析元素の有無 ○有、△微量、×無 Nb Ba La Ce
30831	18.513	2.775	1.409	0.222	0.856	0.000	0.155	○ ○ × ×
JG-1a)	1.320	0.271	0.354	0.739	2.412	0.029	0.090	加圧固化整形試料

a)標準試料：Ando,A.,Kurasawa,H.,Ohmori,T. & Takeda,E. (1974) .
1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. ★Geochemical Journal★, Vol.8 175-192.

た場合、表2の判定基準(2)に従えば、糸魚川産または大屋産のヒスイであると判定でき、その遺物の比重が3.2以上であれば大屋産でなくて、糸魚川産と推定される。■は長崎産ヒスイの分布で、独立した部分の範囲を持っていて他の産地のヒスイと容易に区別できる。台湾産の軟玉はグラフの左下に外れる★印の日高産および＊印の引佐産ヒスイの分布の一部分が、糸魚川産と重なり区別されない範囲がみられる。しかし、Ca／Si比とSr／Fe比を指標とすることにより(図3)、糸魚川産ヒスイは日高産および引佐産の両ヒスイと区別することができる。Na／Si比とMg／Si比を各原産地の原石につ

いて分布を示すことにより(図4)、遺物がどこの原産地の分布内に帰属するかにより、硬玉か軟玉かの判別の手段の一つになると考えられる。

(6) 斎富遺跡出土の軟玉製丸玉の分析結果

この大珠の比重は2.841(アルキメデス法)で、蛍光X線分析では、Na元素が検出限界以下で、肉眼観察ではヒスイ様であるが、硬玉の可能性を証明する結果は得られなかった。比重は軟玉の範囲に入ると思われる。この丸玉の原石産地を明らかにするために、K/Ca、Ti/Ca、Sr/Fe、Zr/Sr、Ca/Si、Na/Si、Mg/Siなどの各比値を求め表3に示し、また各原産地の原石の元素比量の分布範囲と比較し図5、6、7に示した。これら図中の中で、Zr/Sr対Sr/Feの分布範囲では、丸玉は糸魚川産、ミャンマー産、大屋産の枠内に入り、Ca/Si対Sr/Feでは糸魚川産、大屋産に、またNa/Si対Mg/Siではどこの産地にもはいらない。この硬玉の蛍光X線スペクタルはBa元素が非常に多く観測されている。また、K元素の含有量も非常に高く、ヒスイ判定基準から大きく外れ、この丸玉の原石産地を特定することができなかった(表4)。

表4　斎富遺跡出土の軟玉製丸玉の原石産地推定結果

岡山市

分析番号	品名、遺物番号、層	遺物重量	遺物比重	時代　時期	総合判定 原石産地
30831	丸玉、土器溜り1	2.088	2.841	縄文時代晩期	不明

参考文献

1) 茅原一也(1964)、長者ケ原遺跡産のヒスイ(翡翠)について(概報)。長者ケ原、新潟県糸魚川市教育委員会:63－73

2) 藁科哲男・東村武信(1987)、ヒスイの産地分析。富山市考古資料館紀要6:1－18

3) 藁科哲男・東村武信(1990)、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析。橿原考古学研究所紀要『考古学論攷』, 14:95－109

4) Tetsuo Warashina(1992)、Alloction of Jasper Archeological Implements By Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological Science 19:357－373

5) 藁科哲男・東村武信(1983)、石器原材の産地分析。考古学と自然科学, 16:59－89

6) 番場猛夫(1967)、北海道日高産軟玉ヒスイ。調査研究報告会講演要旨録 No. 18:11－15

7) 河野義礼(1939)、本邦における翡翠の新産出及び某化学的性質。岩石砿物鉱床学雑誌22ケ195－201

斎富遺跡出土の赤色顔料物質の微量定性分析ならびにその赤色顔料素材にかかわる材質定量分析

武庫川女子大学薬学部　安田博幸　金杉直子

はじめに

斎富遺跡は岡山県赤磐郡山陽町斎富に所在し、先般、山陽自動車道の建設に伴う発掘調査が実施された。

このたび、同遺跡より検出された土壌に付着した赤色顔料物質について、化学分析による鑑定を依頼されたので、まず、筆者らの常法[1]とするろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による微量化学分析を適用し、さらに、その結果に基づいて、赤色顔料物質の素材にかかわる材質定量分析を行ない、所見を得たので報告する。

試料の外観および分析用試料の採取

試料　　斎富遺跡・前田Ｍ４区の竪穴住居37に接するたわみ10の北端で採取された土壌に付着の赤色顔料物質。色調はやや褐色を帯びた赤色である。その固化した土壌に、まみれるようにして付着いている顔料物質を、表面から、うすく刷毛で掃き取るようにして採取する。[Ⅰ]の微量定性分析用試料としては数箇所から２～３mgずつ計20mgを採取。また、[Ⅱ]の材質定量分析用試料としては数箇所から計100mg余りを採取してそれぞれ分析用試料とする。また、材質定量分析に関しては、土質にかかわる対照試料として遺構近辺の土壌が供与されたので、これも同条件下で分析した。

[Ⅰ] 赤色顔料物質の微量定性分析

試料検液の作製

上記の微量定性分析用試料をガラス尖形管に移し、濃硝酸１滴と濃塩酸３滴を加え、加温して酸可溶性成分を溶解させたのち、適当量の蒸留水を加えて遠心分離機にかけ、酸不溶性成分から分離した上澄液を加熱濃縮して、ろ紙クロマトグラフ用の試料検液とする。

ろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による呈色反応からの赤色顔料成分の確認

東洋ろ紙No51Ｂ（２cm×40cm）を使用し、ブタノール硝塩酸を展開溶媒として、試料検液と、対照の鉄イオン(Fe^{3+})と水銀イオン(Hg^{2+})の標準液を同条件下で展開した。

展開の終わったろ紙を風乾してから縦に二分し、その一方は、検出試薬として１％ジフェニルカルバジドのエタノール溶液を噴霧してからアンモニア蒸気に曝し、もう一方には、検出試薬として0.05％ジチゾンのクロロホルム溶液を噴霧して、それらの際に、ろ紙上に発現するそれぞれの呈色スポットの位置(Rf値で表現する)と色調を検した。

上記試料検液、ならびに、対照イオンの標準液について得られたろ紙上のスポットのRf値と色調は、下記の表1、表2のとおりである。

（1）ジフェニルカルバジド・アンモニアによる検出:(Hg^{2+}は紫色、Fe^{3+}は紫褐色のスポットとして検出される。)

表1　ジフェニカルカルバジドによる呈色スポットのRf値と色調

試料	Rf値（色調）
試料検液	0.11（紫褐色）
Fe^{3+}標準液	0.11（紫褐色）
Hg^{2+}標準液	0.82（紫　色）

（2）ジチゾンによる検出:(Hg^{2+}は橙色スポットとして検出され、Fe^{3+}は反応陰性のため呈色せず。)

表2　ジチゾンによる呈色スポットのRf値と色調

試料	Rf値（色調）
試料検液	呈色スポット発現せず
Fe^{3+}標準液	呈色スポット発現せず
Hg^{2+}標準液	0.81（橙色）

判定

以上の結果のように、竪穴住居37に接するたわみ10より採取された赤色顔料物質の分析用試料の検液中からは、Fe^{3+}のみが検出され、Hg^{2+}は検出されなかった。したがって、遺構より採取された土壌に付着の顔料物質は、ベンガラ(酸化鉄、Fe_2O_3)系の赤色顔料のみであって、水銀朱(辰砂、HgS)系の赤色顔料の使用ないしは混用はなかったものと判定する。

(1993年9月分析)

［Ⅱ］赤色顔料物質の材質定量分析

［Ⅰ］の結果のように、斎富遺跡の住居跡に接するくぼみより採取された赤色顔料物質は、水銀朱(辰砂、HgS)を全く含まない、ベンガラ成分(Fe_2O_3)含量の多い赤色土壌物質であると考えられる。そこで、そのFe_2O_3成分を主とする土壌成分に関する材質定量分析を行った。

定量分析操作の概要

試料量が２ｇ以上ある場合には、筆者らの一人安田が、「化学分析による土器生産地同定の試み」(『古代学研究』第54号)に発表した方法にしたがって分析するのが本来なのであるが、すでに、「分析用試料の採取」の項に述べたような方法では、試料量として辛うじて総量100mgの分析用試料が得られるにすぎなかったので、原子吸光分析法を適用して主要成分の鉄(Fe)およびアルミニウム(Ａ１)の定量を行った。その概要はつぎのとおりである。

粉末化試料一定量(100mg)をとり、濃塩酸４mℓを加えて１時間加熱したのち、酸可容性成分の溶けている溶液と酸不溶性成分とをガラスフィルターで濾し分けて分離し、酸不溶性成分(ケイ酸塩類)は乾燥して秤量する。溶液は蒸留水で一定量(25mℓ)に希釈して原液とし、原子吸光分析装置にかけて検量線法でまず、Fe^{3+}とAl^{3+}の定量分析を行い、Fe_2O_3量とAl_2O_3量に換算する。得られた酸不溶性成分、酸可溶性酸化鉄(Fe_2O_3)、同酸化アルミニウム(Al_3O_3)の各成分量の採取試料量に対する比をとることにより、試料中の各成分の含量％が算出される。

ほかに、土質の特徴を調べる一助として、カルシウム(Ca)・マグネシウム(Mg)・チタン(Ti)についても同じく原子吸光分析法で定量分析を行い、それぞれ酸化カルシウム(Cao)・酸化マグネシウム(MgO)・酸化チタン(TiO_2)の含量％として算出する。機器としては日立１８０－６０型原子吸光光度計と日立０５６型卓上記録計を使用し、各成分の測定は表３の諸条件で行った。

表３　原子吸光分析における各元素の分析条件

分析元素	ランプ（HLC-3型）	燃焼ガス	ランプ電流（mA）	使用光波長（nm）
Al	Al 専用	N_2O－アセチレン	10.0	309.3
Fe	Fe 専用	空気－アセチレン	15.0	248.3
Mg	Ca-Mg専用	空気－アセチレン	7.5	285.2
Ca	Ca-Mg専用	空気－アセチレン	7.5	422.7
Ti	Ti 専用	N_2O－アセチレン	12.5	364.3

分析結果

前項の操作に従って分析した赤色顔料物質の材質としての成分の諸分析値は表4の通りである。

表4　赤色顔料物質の成分分析値

試料	酸不溶性成分 (%)	Fe_2O_3 (%)	Al_2O_3 (%)	CaO (%)	MgO (%)	TiO_2 (%)
赤色顔料	46.96	37.0	3.35	0.003	0.51	0.46
対照土壌	86.44	4.53	5.34	0.07	1.10	1.77

考　察

上記の表4の結果のように、斎富遺跡のたわみ10から出土の粉末状の赤色顔料物質は、水銀朱(辰砂、HgS)を全く含まない、鉄含量(%)の非常に多い赤色顔料物質であることがわかった。また、酸不溶性成分含量(%)が対照土壌に比べて著しく低く、色調も明瞭に赤いことから、単なる赤土を代用したものではなく、特に選んでもたらされた褐鉄鉱系の岩石土壌を素材とし、これに焼成・粉砕などの処理を加えたベンガラ(酸化鉄、Fe_2O_3)系の赤色顔料であったと考えられる。

(1993年10月分析)

[註]

1）安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材料科学」『斉藤 忠編集　日本考古学論集1　考古学の基本的諸問題』吉川弘文館　pp.389-407 (1986)
安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材質ならびに技法の伝流に関する二、三の考察」　『橿原考古学研究所論集　第7』吉川弘文館　pp.449-471 (1984)

岡山県赤磐郡斎富遺跡出土珠文鏡の鉛同位体比

東京国立文化財研究所　平尾良光・榎本淳子

1　はじめに

岡山県古代吉備文化財センターから、岡山県赤磐郡山陽町斎富遺跡古墳時代の竪穴住居62出土の珠文鏡について鉛同位体比法による調査を依頼された。

2　分析法

産地推定のために鉛同位体比法を利用した[1)]。鉛同位体比の測定はＶＧ社製全自動表面電離型質量分析計Sector-Jで測定した。資料の錆の一部を採取し、溶解し、含まれている鉛を電気分解法で精製分離した。この鉛の一定量を質量分析計に装着し、鉛の同位体比を測定した。値はNBS-SRM-981で規格化した[2)]。

3　資料

珠文鏡は、５世紀前半の竪穴住居から出土している。分析用の試料は分析者が直接鏡から採取したのではなく、現場の方が採取して分析者へ送付した微細資料のみを取り扱った。

4　鉛同位体比の測定結果と考察

１）　鉛同位体比の測定

試料を石英製のビーカーに入れ、硝酸を加えて加熱、溶解し、蒸留水で希釈した。この溶液を白金電極を用いて２Ｖで電気分解し、鉛を二酸化鉛として陽極に集めた。析出した鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解し、希釈した。0.2μｇの鉛をリン酸－シリカゲル法で、レニウムフィラメント上に載せ、ＶＧ社製の全自動表面電離型質量分析計Sector-Jに装着した。分析計の諸条件を整え、フィラメント温度を1200℃に設定して鉛同位体比を測定した。同一条件で測定した標準鉛NBS-SRM-981で規格化し、測定値とした。

２）鉛同位体比測定値

測定された鉛の同位体比を表１で示した。そしてこの値を図１と図２で示した。

図１は縦軸が$^{208}Pb/^{206}Pb$の値、横軸が$^{207}Pb/^{206}Pb$の値である。この図を仮にＡ図式と呼ぶこととする。これらは古代東アジアの青銅器および鉛・銅鉱石から得られた鉛同位体比の地域分布を模式的に表した図である。今回の結果をこのなかに「●」でプロットした。

東アジア地域においてＡは中国前漢鏡が主として分布する地域で、後の結果からすると華北の鉛である。Ｂは中国後漢鏡および三国時代の銅鏡が分布する領域で、華南産の鉛と推定される。Ｃは現代日本産の主要鉛鉱石が分布する領域．Ｄは朝鮮半島産の多鈕細文鏡と細形銅剣が分布するラインとして示されることが判っている。またａは弥生時代の後期銅鐸が示した特別な鉛を意味する領域である。

珠文鏡の値は、Bの領域内に位置した。

3）結果

これらの結果から、材料が華南産であると判断され、少なくとも鉛に関しては、古墳出土鏡としてよくある資料といえる。

表1　岡山県赤磐郡山陽町斎富遺跡竪穴住居62出土珠文鏡の鉛同位体比

	$\frac{^{206}Pb}{^{204}Pb}$	$\frac{^{207}Pb}{^{204}Pb}$	$\frac{^{208}Pb}{^{204}Pb}$	$\frac{^{207}Pb}{^{206}Pb}$	$\frac{^{208}Pb}{^{206}Pb}$
珠文鏡（CP468）	18.271	15.665	38.716	0.8574	2.1190
誤差範囲	±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006

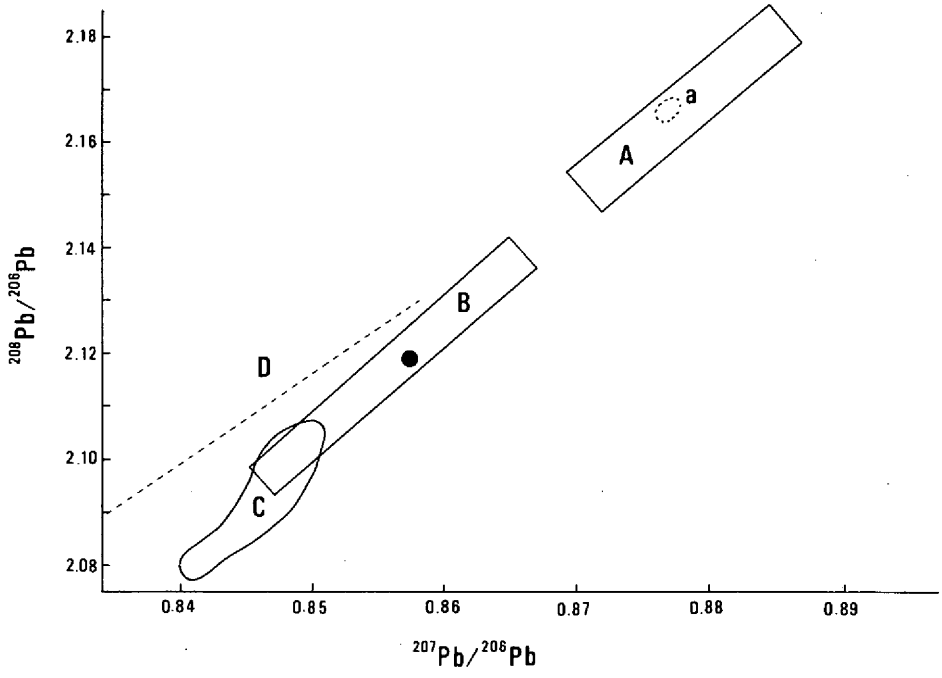

2.18
2.16
2.14
2.12
2.10
2.08
$^{208}Pb/^{206}Pb$
0.84
0.85
0.86
0.87
0.88
0.89
$^{207}Pb/^{206}Pb$
A
a
B
C
D

図1

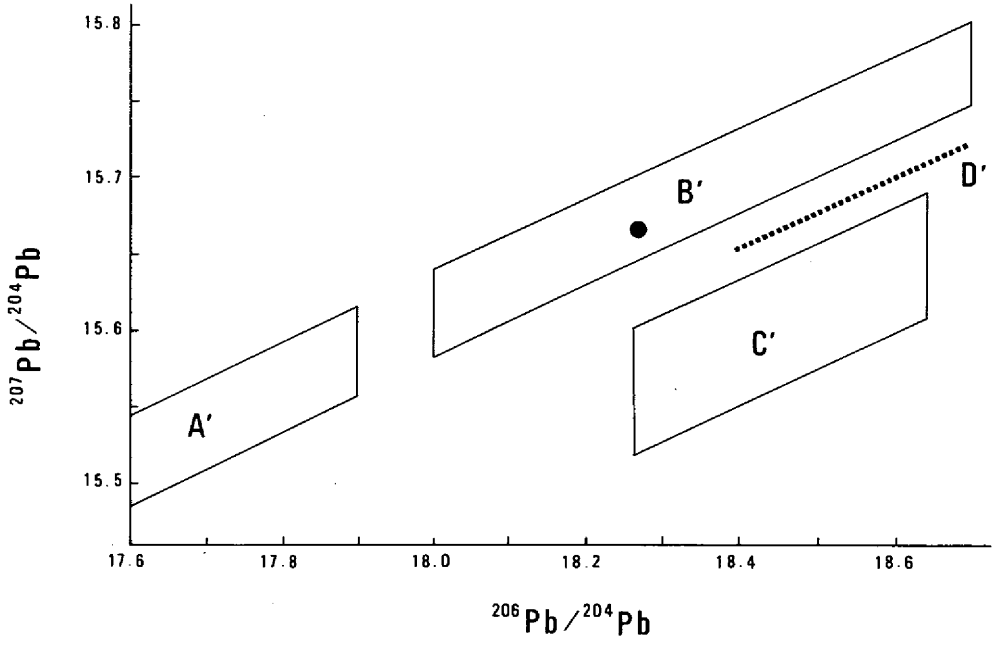

15.8
15.7
15.6
15.5
$^{207}Pb/^{204}Pb$
17.6
17.8
18.0
18.2
18.4
18.6
$^{206}Pb/^{204}Pb$
A′
B′
C′
D′

図2

斎富遺跡出土硬質土器の蛍光X線分析

奈良教育大学　三辻　利一

1）はじめに

全国各地に残っている窯跡から出土した多数の須恵器片を分析した結果、母岩の長石類に由来したとみられるK、Ca、Rb、Srの4因子が有効に地域差を表示することが判明した。地域差は、通常、Rb－Sr分布図上で表示されるが、窯間の相互識別には2群間判別分析法が適用される。この方法は古墳出土須恵器の産地推定にも応用される。すなわち、土器形式から推定される年代などの考古学的条件から産地と予想されるいくつかの窯群の中から、任意に2つ選び出し、2群間判別分析法で両者の相互識別を検討したのち、古墳出土の須恵器試料が両者のうちのいずれに帰属し得るのかを調べる。産地候補に上げられたすべての母集団(窯群)について、同様の手法を適用し、帰属し得る母集団を 捜し出す。初期須恵器の場合には、地元産か大阪陶邑産かの2群間判別分析で決着する場合が多い。本報告では斎富遺跡から出土した初期須恵器の産地を推測した結果について報告するが、陶質土器が混じっている可能性があるので、大阪陶邑群と伽耶群間の2群間判別分析を試みた。

2）分析方法

すべての須恵器試料は表面をタスグステンカーバイド製の刃をもつミニグラインダーで研磨したのち、タングステンカーバイド製乳鉢のなかで100メッシュ以下に粉砕された。粉末試料は塩化ビニール製リングを枠にして、約13トンの圧力を加えてプレスし、内径20㎜、厚さ5㎜の錠剤試料を作成し、蛍光X線分析用の試料とした。

蛍光X線分析には波長分散型のスペクトロメーター(理学電機製3270型機)が使用された。この装置には48個の試料が搭載できる自動試料交換機が連結されており、完全自動分析が可能である。この中の1個は常に、岩石標準試料ＪＧ－1である。ＪＧ－1はSiO_2とAl_2O_3の合計が80％以上含有しており、粘土試料とマトリックスが類似している点から標準試料として採用された。同様に、ＪＧ－1中の各元素の蛍光X線強度が一定であるかどうかチェックすることによって、日々の自動分析が定常状態で進行したかどうかを知るモニターとしての役割も合わせもつ。

分析値はＪＧ－1の各元素の蛍光X線強度を使って標準化した値で表示された。通常、岩石学や地球化学では分析値を％やppmで表示するが、主成分元素と微量元素をほぼ同等に取り扱うためには、ＪＧ－1による標準化法による表示法が有効である。

K、Ca、Rb、Srの4因子を使った各母集団からのマハラノビスの汎距離の二乗値(D^2)の計算にはパソコンが使用された。

3）分析結果

全試料の分析値は表1にまとめられている。データ解析にあたっては、母集団となる生産地側の窯群のデータ整理が必要である。今回分析した試料は初期須恵器であるので、まず、母集団の一つとし

て大阪陶邑群が上げられる。また、陶質土器が含まれている可能性を考慮に入れて、伽耶群を母集団の一つとした。高霊の内谷洞窯群と昌寧の余草里窯群が伽耶群を構成する。陜川の磻溪堤窯の陶質土器は陶邑の須恵器の化学特性とは異なるが、他の伽耶群の陶質土器の化学特性とも少し異なっており、これを入れると伽耶群のばらつきも大きくなるので、伽耶群から削除した。また、最近、吉備地方でも初期須恵器の窯らしいものが見つかっているとの報告もあるが、その分析値は筆者の手元にはないので、今回は母集団には加えることはできなかった。陶邑群についても、本来は陶邑内のすべての初期須恵器の窯跡から出土したものについて分析を行うべきであるが、筆者の手元には、大庭寺１・２号窯、狐池南窯、ＴＫ－73号窯など少数なので、新しい時期のものも含めて陶邑内の約30基の窯跡から出土した須恵器を使って陶邑群とした。

はじめに、母集団間の相互識別の結果について説明する。陶邑群と伽耶群の２群間判別図を図１に示す。両軸には伽耶群、および、陶邑群からのマハラノビスの汎距離の二乗値をとってある。いずれも、K、Ca、Rb、Srの４因子を使って計算した。両群の領界線は５％の危険率をかけたHotellingのT^2検定の結果、D^2(伽耶)＝10、D^2(陶邑)＝10のところに引かれた。したがって、伽耶領域はD^2(伽耶)≦10であり、陶邑領域はD^2(陶邑)≦10である。図１をみると、両群の試料のほとんどは、それぞれ、自群の領域に分布していることがわかる。この図では両群の化学特性が明確に異なると、試料は互いに相手群から遠く離れて分布することになり、D^2(自群)≦10、D^2(相手群)＞10の領域に分布する。逆に、両群の化学特性は類似すると、両群の試料は互いに接近して分布するようになり、D^2(自群)≦10、D^2(相手群)≦10の重複領域に混在する。そして、両群の化学特性が一致したとき、両群の試料は中央に引かれた傾線(理想境界線という)沿いに分布する。このような例はごく稀で、多くの場合、たとえ化学特性が類似していても、理想境界線を境に分かれて試料は分布する。図１をみると、理想境界線を境に上側に陶邑群の試料が、また、下側に陶質土器が分布することがわかる。しかし、理想境界線を踏み越えて互いに相手側の領域に分布している試料も少数あり、両者の相互識別は完全ではなく、若干の誤判別の確率があることを示している。このことはこの図を使って、古墳出土須恵器の産地を推定する場合に注意を要する。

さて、この図を使って古墳出土硬質土器が陶邑産の須恵器か、それとも、陶質土器かを判断する場合には、当然、陶邑領域に分布したものは陶邑産と推定され、陶質土器領域に分布したものが陶質土器と推定される訳であるが、前述したように、理想境界線付近に分布したものについては帰属するかしないかの判断に注意を要する。

図２には斎富遺跡出土硬質土器の産地推定の結果を示してある。明らかに、大半の試料が陶邑領域に分布しており、陶邑産と推定される須恵器が多数あることを示している。これに対して、少数ではあるが、伽耶領域に分布する試料もあり、陶質土器と推定されるものが若干含まれていることもわかる。さらに、D^2(伽耶)＞10、D^2(陶邑)＞10の不明領域に分布する試料もあり、伽耶群にも、陶邑群にも帰属しないものがあることは図１と図２を比較すればよくわかる。これで、全体の様相が把握できたと思う。

次に、個々の試料についてみてみよう。計算されたD^2(伽耶)とD^2(陶邑)の値は表１の最右欄示してある。図１、２からもわかるように、D^2(伽耶)≦10、D^2(陶邑)＞10の条件を満たすものは伽耶群産とし、陶質土器であると判断した。この条件を満足した試料は資料番号11（掲載番号1092　以下同）の壺、資料番号36の器種不明品、資料番号54の高杯または壺、資料番号118(186)の杯蓋、資

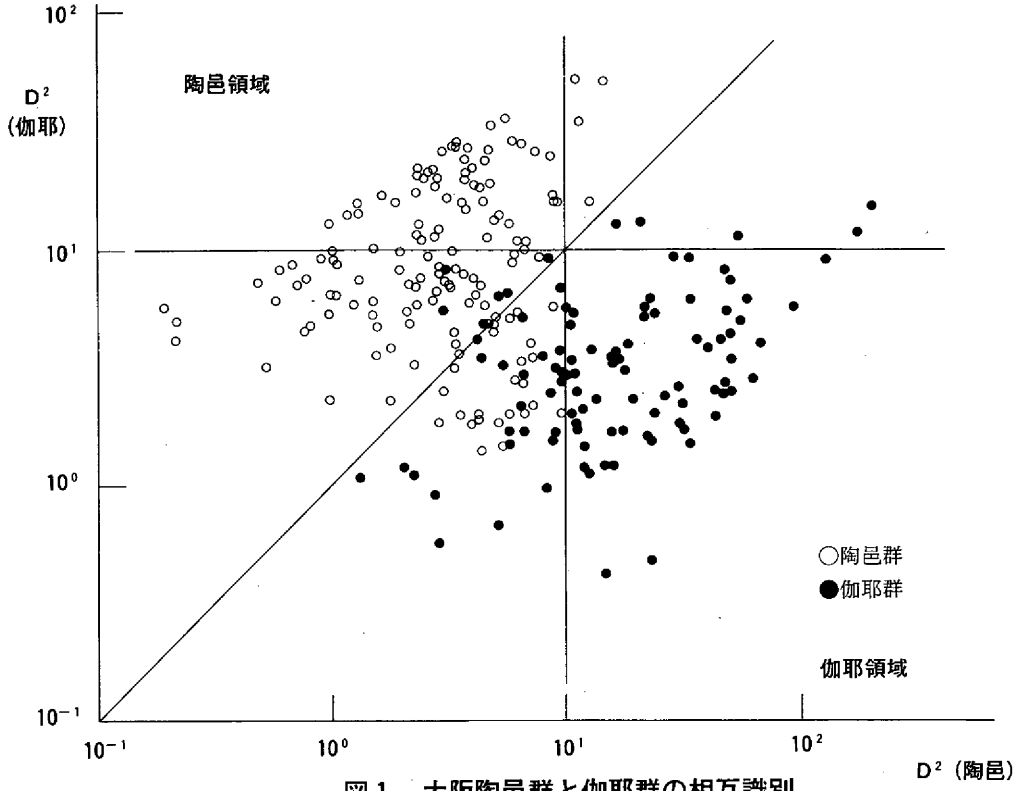


図1　大阪陶邑群と伽耶群の相互識別
（K、Ca、Rb、Sr因子使用）

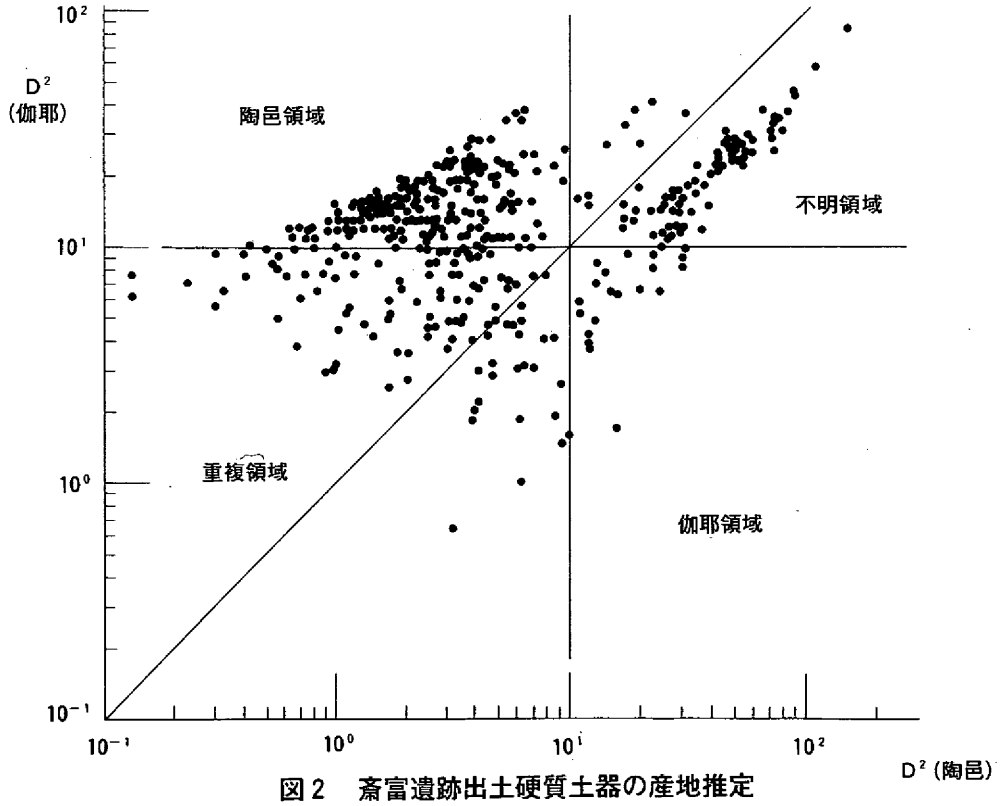


図2　斎富遺跡出土硬質土器の産地推定

料番号120の器台、資料番号134の器種不明品、資料番号203の器種不明品、資料番号207、資料番号226(1388)の器台、資料番号229(1375)の器台、資料番号237の鉢、資料番号266の高杯、資料番号269の高杯、資料番号312(1351)の鉢、資料番号326(1370)の器台、資料番号339の高杯、資料番号343(1341)の壺、資料番号348の器台、資料番号387の器台、資料番号388(1291)、資料番号395の合計、21点である。また、D^2(伽耶)≦10、D^2(陶邑)≦10の重複領域に分布し、D^2(伽耶)＜D^2(陶邑)で、伽耶群産らしいとみられるものは資料番号10(1096)の把手付椀、資料番号114(814)の杯蓋、資料番号153(1353)の鉢、資料番号181の胴部、資料番号190(1358)の鉢、資料番号219の甕、資料番号227(1372)の器台、資料番号256の壺、資料番号287の器台、資料番号306(1356)の鉢、資料番号323の高杯(1281)、資料番号325(1346)の鉢、資料番号328(1367)の把手付椀、資料番号329(1305)の高杯、資料番号358の器台、資料番号372の壺の16点で、これらを併わせても陶質土器の可能性があると判断されたものは37点にすぎない。

これに対して、D^2(陶邑)≦10、D^2(伽耶)＞10の陶邑領域に分布したものは171点、D^2(陶邑)≦10、D^2(伽耶)≦10の重複領域に分布し、D^2(陶邑)＜D^2(伽耶)の条件から、陶邑産らしいと判別された資料番号2などの74点を加えると、実に、245点の多さに達する。

念のために、これらのRb－Sr分布図とK－Ca分布図を次に示す。陶質土器と推定されたもののRb－Sr分布図を図3に、K－Ca分布図を図4に示す。いずれも、陶質領域内に分布していることがわかる。ここに描かれている陶質土器領域と陶邑領域は、これまでに分析されている両群の試料の大部分を包含するようにして描かれたものであり、勿論、定量的に領界を示している訳でもない。それでも、陶質土器と陶邑の領域を比較する上には十分役に立つ。表1で推定さてた結果はこのようにして、図上でも確かめられる訳である。他方、陶邑産と推定さてたもののRb－Sr分布図を図5に、また、K－Ca分布図を図6、図7に示してある。K－Ca分布図では狭い領域内に密集して分布したので、図6と図7の2枚の図に分けて描いてみた。いずれも、陶邑領域内に分布していることが確かめられる。

ここで問題になるのは、産地不明となったものが109点あったことである。これらがすべて不明領域に分布した訳ではない。重複領域で理想境界線付近に分布し、陶邑群としたらよいのか、陶質土器としたらよいのか、判断できないものが28点含まれていた。これらは資料番号35、同43、同46(871)、同49、同52、同67(670)、同68(687)、同87(393)、同105(658)、同128(1131)、同146(1256)、同154、同175(1314)、同180、同187、同200、同201、同213、同214(1299)、同230(1374)、同236、同297(1310)、同316(1253)、同362(1317)、同367(1381)、同370、同377(1327)、同378である。しかし、これらのほとんどはCa、Sr量が比較的少なく、陶質土器というよりも陶邑産の須恵器である可能性が高い。残る81点が不明領域【D^2（伽耶）＞10、D^2＞10】に分布した。これらの中にも、陶邑や陶質土器の領界線近くに分布し、それぞれ、陶邑産の須恵器、陶質土器の可能性を残すものが若干あるが、多くは産地不明とせざざるを得ないものである。

さて、ここで、産地不明となった109点の試料のRb－Sr分布図を図8に、また、K－Ca分布図を図9に示す。陶邑産の可能性をもつものが含まれることは理解できる。しかし、大半のものにはCa、Sr量が多く、陶邑産の須恵器ではあり得ない。ここでは、Ca、Sr量が多いという共通点をもつところから、これらを陶質土器の可能性をもつものとしてあるが、必ずしも陶質土器であるとは限らない。とくに注目すべき点は、これらの多くにはK量とRb量がやや少ないという点である。この特性は陶

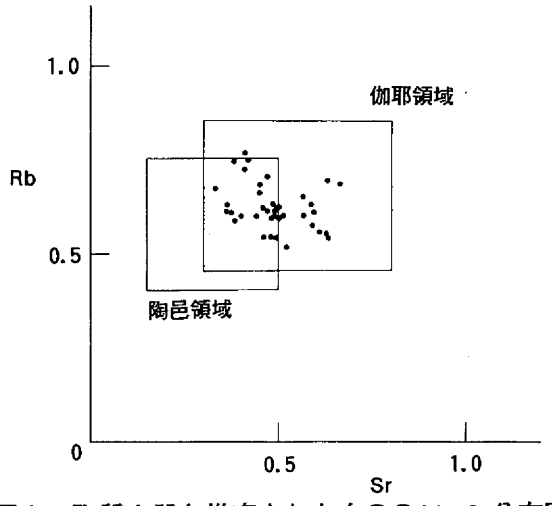


図3　陶質土器と推定されたもののRb-Sr分布図

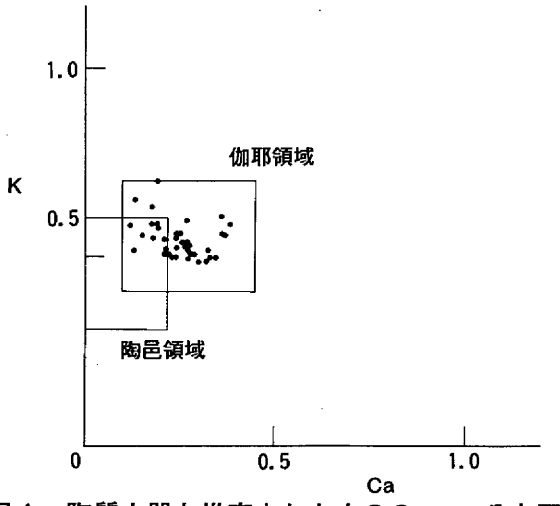


図4　陶質土器と推定されたもののK-Ca分布図

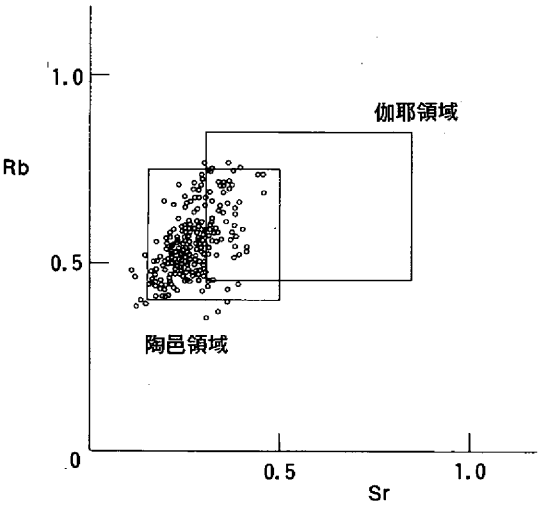


図5　陶邑産と推定されたもののRb-Sr分布図

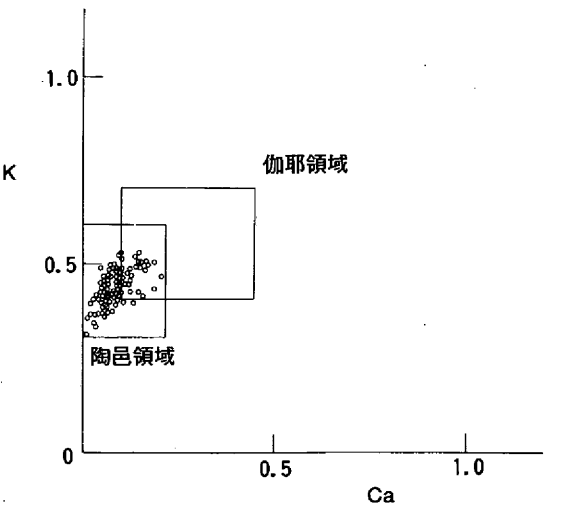


図6　陶邑産と推定されたもののK-Ca分布図（その1）

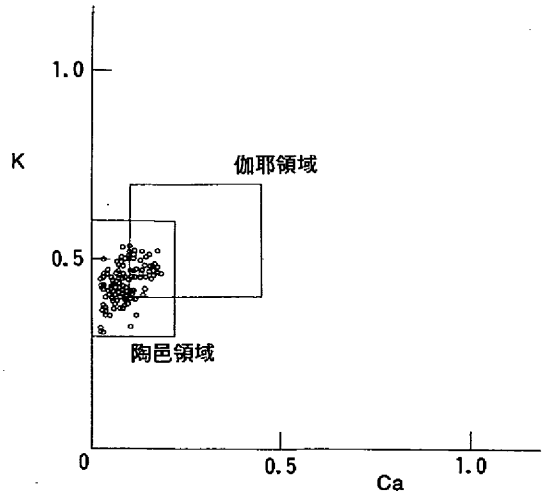


図7　陶邑産と推定されたもののK-Ca分布図（その2）

質土器のものではない。むしろ、日本の須恵器の特性である。ここで問題になるのは、もし、地元、吉備地方に初期須恵器の窯があったらという点である。もし、あるとすれば、吉備地方の新しい時期の窯跡から出土する須恵器と類似した化学特性をもつはずである。このことは陶邑でも、九州北部地域の朝倉窯群でも、また、その他の地域でも確かめられてる。極端にいえば、同じ地域で生産された古代の須恵器と中世の陶器も類似した化学特性をもつのである。このことは古代から中世に至るまで一環して、材料の粘土は地元で調達したことを物語る。図８、図９で陶質土器の可能性のあるものとした試料の多くは岡山県内の新しい時期の窯跡から出土した須恵器と類似した領域に分布しているのである。したがって、これらの多くは地元産の初期須恵器である可能性をもつのである。ただ、ここでは地元産の初期須恵器のデータがないので、地元産とは推定しなかっただけである。ここで注目すべき点はこの地元産の須恵器である可能性をもつものの中に、器台【資料番号77(886)、同222(1376)、同262、同263、同264、同310(1389)、同318、同321(1391)、同365(1377)、同385、同389、同390(1371)】、把手付椀【資料番号61(645)、同65(672)、同85(404)、同173(1359)、同245、同307(1360)、同315(1368)、同317(1363)】、甑【資料番号12(1095)、同55(165)、同122、同274(1350)、同396(1334)】が多い点である。

他方、K、Rb量が多い資料番号１(158)、同136(721)、同176、同184(1383)、同274(1350)、同282(1395)、同349、同362(1317)、同367(1381)は陶質土器である可能性が高く、資料番号138(238)の角状杯は陶質土器の可能性もある。

以上の結果、今回分析した試料の大半は大阪陶邑産の須恵器であり、陶質土器の可能性をもつものは精々１割程度であった。また、全体の２割程度が産地不明となったが、これらは地元産の須恵器である可能性をもつ。この結果を土器形式と対比することによって、より興味深い知見が得られるであろう。

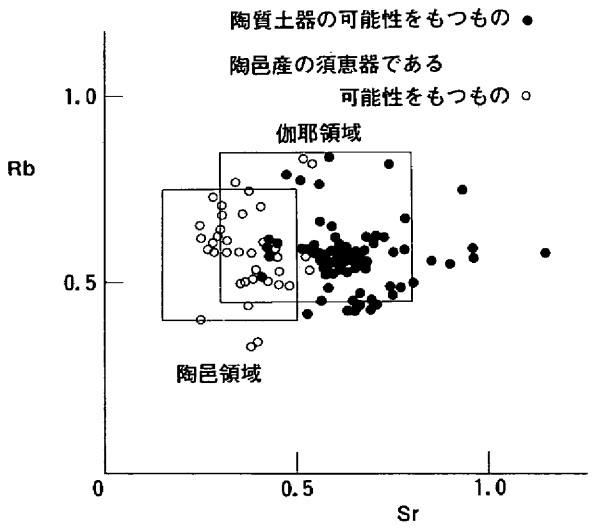


図８　不明となったもののRb-Sr分布図

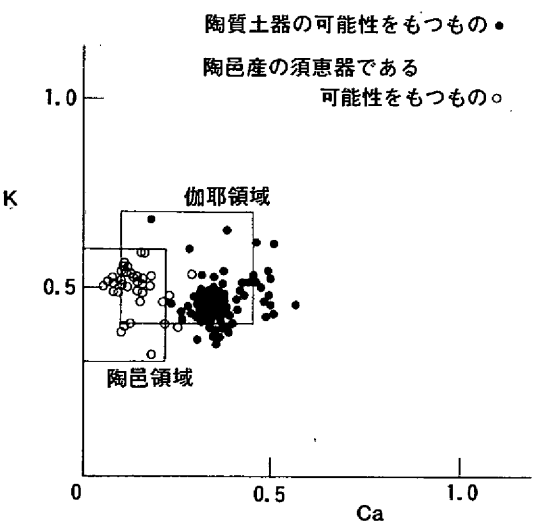


図９　不明となったもののK-Ca分布図

表1　胎土分析資料一覧表　（その1）

資料番号	挿図番号	調査区名	掲載遺構名	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D^2 (陶邑)	D^2 (伽耶)	判定
1	158	KB1	竪穴住居48	甕	0.620	0.456	1.53	0.747	0.926	0.329	47.00	30.00	不明→陶質土器
2	414	KB1	井戸7	壺	0.449	0.094	2.12	0.577	0.317	0.206	0.41	7.70	陶邑
3	1004	KB1	土器溜り5	甕	—	—	—	—	—	—			
4	1025	KB1	土器溜り6	壺	0.457	0.206	2.19	0.533	0.412	0.244	5.80	7.00	陶邑
5	1029	KB1	土器溜り6	大甕	0.399	0.045	3.10	0.428	0.218	0.148	3.40	19.00	陶邑
6	1016	KB1	土器溜り6	杯蓋	0.384	0.364	2.41	0.431	0.626	0.387	48.00	28.00	不明→陶質土器
7	316	KB1	周溝遺構1	鉢？	0.519	0.497	2.23	0.588	0.957	0.223	76.00	35.00	不明→陶質土器
8	314	KB1	周溝遺構1	椀	0.397	0.222	2.03	0.531	0.530	0.324	17.00	13.00	不明
9		KB1		高杯？	0.453	0.105	1.97	0.560	0.303	0.158	0.13	7.50	陶邑
10	1096	KB1	たわみ1	把手付椀	0.578	0.193	2.43	0.590	0.403	0.257	7.60	4.10	陶質土器
11	1092	KB1	たわみ1	壺	0.501	0.281	2.40	0.615	0.488	0.273	16.00	6.40	陶質土器
12	1095	KB1	たわみ1	甕	0.443	0.409	2.25	0.576	0.671	0.375	52.00	27.00	不明→陶質土器
13	627	KB1	土壙31	把手付高杯	0.420	0.082	2.13	0.482	0.275	0.242	1.20	12.00	陶邑
14	773	KM1	土壙62	高杯	0.507	0.100	2.90	0.681	0.285	0.128	2.80	6.20	陶邑
15	776	KM1	土壙62	台付鉢？	0.420	0.053	3.84	0.405	0.198	0.154	5.10	23.00	陶邑
16		KM1	土壙62	高杯	0.442	0.126	2.24	0.574	0.306	0.206	0.92	8.70	陶邑
17		KM1	土壙62	杯蓋	0.500	0.155	2.04	0.570	0.383	0.353	0.90	2.90	陶邑
18	761	KM1	土壙62	蓋	0.484	0.100	2.96	0.748	0.313	0.134	3.80	14.00	陶邑
19		KM2	竪穴住居54	壺	0.441	0.100	1.38	0.586	0.324	0.206	0.54	8.50	陶邑
20		KM2	竪穴住居54	杯蓋	0.413	0.087	1.44	0.577	0.245	0.159	1.30	14.00	陶邑
21		KM2	竪穴住居54	杯蓋	0.464	0.096	1.48	0.599	0.309	0.217	0.23	7.00	陶邑
22		KM2		杯蓋	0.411	0.162	2.36	0.439	0.392	0.265	5.40	11.00	陶邑
23		KM2		杯蓋	0.363	0.037	2.99	0.443	0.185	0.085	3.10	23.00	陶邑
24		KM2		蓋	0.440	0.067	3.26	0.553	0.223	0.126	1.50	12.00	陶邑
25		KM2		高杯	0.438	0.112	1.94	0.556	0.369	0.321	1.90	7.20	陶邑
26		KM2		高杯	0.443	0.074	2.90	0.559	0.250	0.123	0.81	10.00	陶邑
27		KM2		高杯	0.440	0.073	2.00	0.556	0.262	0.243	0.66	10.00	陶邑
28		KM2	たわみ3	甕？	0.480	0.165	1.83	0.693	0.456	0.213	4.10	10.00	陶邑
29		KM2	たわみ3	杯蓋	0.436	0.055	2.16	0.712	0.232	0.100	5.00	20.00	陶邑
30	1108	KM2	たわみ3	杯蓋	0.392	0.070	2.31	0.493	0.236	0.195	1.30	16.00	陶邑
31		KM2	たわみ3	杯蓋	0.464	0.129	2.09	0.517	0.329	0.166	1.20	7.80	陶邑
32	1114	KM2	たわみ3	器台	0.340	0.029	2.95	0.440	0.150	0.081	3.90	28.00	陶邑
33		KM2	たわみ3	杯蓋	0.517	0.104	2.29	0.721	0.336	0.179	2.50	7.60	陶邑
34		KM2	たわみ3	杯蓋	0.382	0.048	1.98	0.519	0.143	0.030	4.10	23.00	陶邑
35		KM2		高杯	0.491	0.099	2.33	0.527	0.394	0.429	4.50	4.70	不明
36		KM2		不明	0.517	0.264	2.49	0.618	0.458	0.259	13.00	4.80	陶質土器
37		KM2		高杯？	0.450	0.096	2.02	0.448	0.263	0.121	3.20	15.00	陶邑
38		KM2		杯蓋	0.398	0.055	2.39	0.508	0.195	0.142	1.90	18.00	陶邑
39	1120	KM2	たわみ7	杯身	0.469	0.091	2.06	0.516	0.267	0.221	1.80	10.00	陶邑
40	1119	KM2	たわみ7	蓋	0.426	0.073	2.04	0.565	0.257	0.191	0.68	12.00	陶邑
41		KM2		高杯	0.387	0.056	1.57	0.580	0.214	0.107	2.20	19.00	陶邑
42		KM2		把手付高杯	0.463	0.102	2.05	0.588	0.283	0.259	0.60	7.60	陶邑
43		KM3		壺	0.529	0.115	2.60	0.613	0.282	0.273	4.80	5.40	不明
44	876	KM3	溝11	杯蓋	0.441	0.089	2.18	0.586	0.297	0.232	0.40	9.20	陶邑
45		KM3	溝11	甕	0.496	0.193	1.85	0.751	0.410	0.159	6.50	11.00	陶邑

表1　胎土分析資料一覧表　（その2）

資料番号	挿図番号	調査区名	掲載遺構名	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D^2(陶邑)	D^2(伽耶)	判定
46	871	K M3	溝11	杯身	0.505	0.155	2.76	0.485	0.448	0.316	4.50	4.30	不明
47	882	K M3	溝11	(把手付)椀	0.423	0.148	2.19	0.477	0.302	0.209	4.20	14.00	陶邑
48		K M3	溝11	杯蓋	0.421	0.082	2.50	0.460	0.304	0.215	2.40	11.00	陶邑
49		K M3西	竪穴住居51	壺	0.529	0.146	2.51	0.529	0.450	0.329	4.10	3.00	不明
50		K M3西	竪穴住居51	杯身	0.454	0.095	2.31	0.695	0.268	0.139	3.10	13.00	陶邑
51		K M3西	竪穴住居51	杯蓋	0.426	0.052	1.77	0.587	0.216	0.120	1.70	14.00	陶邑
52		K M3西	竪穴住居51	杯蓋	0.539	0.130	2.09	0.582	0.380	0.226	2.00	2.80	不明
53	169	K M3西	竪穴住居51	杯身	0.421	0.134	2.15	0.627	0.350	0.172	2.60	13.00	陶邑
54		K M3西	竪穴住居51	高杯？蓋？	0.492	0.228	2.21	0.605	0.371	0.201	14.00	7.80	陶質土器
55	165	K M4	竪穴住居50	甕	0.489	0.313	2.74	0.793	0.472	0.189	35.00	22.00	不明→陶質土器
56	702	K M4	土壙51	杯蓋	0.398	0.059	2.17	0.537	0.208	0.160	1.50	17.00	陶邑
57	703	K M4	土壙51	杯身	0.402	0.154	2.24	0.452	0.310	0.133	5.40	16.00	陶邑
58	637	K M4	土壙36	高杯	0.523	0.099	2.81	0.648	0.281	0.241	3.50	5.00	陶邑
59	817	K M4	柱穴3	大甕	0.489	0.136	1.95	0.651	0.380	0.324	0.55	5.00	陶邑
60	640	K M5	土壙38	蓋	0.466	0.093	2.31	0.567	0.305	0.276	0.33	6.70	陶邑
61	645	K M5	土壙38	(把手付き)椀	0.483	0.433	2.28	0.557	0.675	0.356	56.00	25.00	不明→陶質土器
62		K M5	土壙38	杯蓋	0.348	0.064	2.62	0.451	0.213	0.095	3.10	23.00	陶邑
63		K M5	土壙38	杯蓋	0.481	0.131	2.70	0.709	0.293	0.114	4.60	9.40	陶邑
64	669	K M5	土壙48	高杯	0.388	0.059	2.04	0.505	0.180	0.044	2.50	20.00	陶邑
65	672	K M5	土壙48	把手付き鉢	0.401	0.387	2.21	0.487	0.767	0.395	59.00	28.00	不明→陶質土器
66	671	K M5	土壙48	甕	0.381	0.074	2.20	0.482	0.216	0.154	2.00	19.00	陶邑
67	670	K M5	土壙48	小形壺	0.542	0.119	2.05	0.592	0.272	0.260	7.80	7.50	不明
68	687	K M5	土壙49	蓋	0.508	0.078	2.21	0.496	0.361	0.258	6.80	7.70	不明
69	692	K M5	土壙49	高杯	0.467	0.369	2.76	0.525	0.604	0.328	37.00	18.00	不明→陶質土器
70	689	K M5	土壙49	高杯	0.427	0.324	2.49	0.545	0.586	0.319	29.00	17.00	不明→陶質土器
71		K M5	土壙49	脚部	0.357	0.035	2.31	0.484	0.158	0.115	3.10	25.00	陶邑
72	686	K M5	土壙49	蓋	0.397	0.071	2.42	0.510	0.225	0.150	1.30	16.00	陶邑
73	698	K M5	土壙49	甕	0.433	0.083	2.38	0.542	0.276	0.293	0.43	10.00	陶邑
74	697	K M5	土壙49	甕	0.449	0.073	2.03	0.766	0.299	0.144	7.10	25.00	陶邑
75	699	K M5	土壙49	器台	0.488	0.344	2.41	0.566	0.588	0.376	28.00	12.00	陶質土器(?)
76	679	K M5	土壙49	蓋	0.361	0.303	2.46	0.443	0.663	0.322	44.00	22.00	不明→陶質土器
77	886	K M5	溝11	器台	0.477	0.418	2.43	0.620	0.710	0.237	49.00	24.00	不明→陶質土器
78	877	K M5	溝11	蓋	0.459	0.108	2.41	0.558	0.328	0.291	0.13	6.30	陶邑
79	334	K M5	周溝遺構5	杯蓋	0.472	0.117	2.50	0.706	0.271	0.120	4.70	11.00	陶邑
80		K M5		甕	0.431	0.264	2.39	0.580	0.553	0.313	17.00	12.00	不明→陶質土器
81	402・403	K M6	井戸6	椀	0.496	0.474	1.90	0.615	0.716	0.549	71.00	31.00	不明→陶質土器
82	399	K M6	井戸6	高杯	0.359	0.052	2.68	0.555	0.196	0.092	3.10	23.00	陶邑
83	401	K M6	井戸6	壺	0.373	0.357	2.48	0.470	0.669	0.400	50.00	28.00	不明→陶質土器
84		K M6	井戸6	椀	0.481	0.089	2.47	0.583	0.304	0.267	0.71	6.10	陶邑

表1　胎土分析資料一覧表　（その3）

資料番号	挿図番号	調査区名	掲載遺構名	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D² (陶邑)	D² (伽耶)	判定
85	404	KM6	井戸6	把手付椀	0.448	0.503	2.27	0.548	0.901	0.397	90.00	43.00	不明→陶質土器
86	398	KM6	井戸6	高杯	0.473	0.413	2.52	0.571	0.658	0.304	50.00	23.00	不明→陶質土器
87	393	KM6	井戸6	杯蓋	0.506	0.111	2.49	0.514	0.385	0.465	3.40	4.90	不明
88	1364	KM6	包含層	椀	0.408	0.080	1.82	0.616	0.234	0.136	2.20	16.00	陶邑
89	633	MBox1	土壙34	大甕	0.499	0.159	2.03	0.633	0.381	0.284	0.98	3.10	陶邑
90	259	MBox2	竪穴住居75	高杯	0.455	0.093	2.38	0.529	0.294	0.191	0.55	8.20	陶邑
91		MBox2		甕	0.397	0.063	2.58	0.507	0.254	0.202	1.50	14.00	陶邑
92		MBox2		甕	0.404	0.034	2.70	0.473	0.207	0.097	2.90	17.00	陶邑
93		MBox2		甕	0.392	0.025	2.89	0.449	0.167	0.068	3.70	22.00	陶邑
94	192	MBox3	竪穴住居60	杯蓋	0.364	0.023	2.34	0.497	0.197	0.061	3.70	21.00	陶邑
95	193	MBox3	竪穴住居60	杯身	0.430	0.086	3.04	0.580	0.261	0.165	0.64	11.00	陶邑
96	195	MBox3	竪穴住居60	高杯	0.494	0.083	2.60	0.585	0.274	0.196	1.90	6.80	陶邑
97	194	Mbox3	竪穴住居60	甕	0.520	0.103	2.06	0.598	0.280	0.282	3.60	5.90	陶邑
98		MBox3	土壙44	有蓋高杯	0.450	0.131	2.04	0.543	0.379	0.256	1.10	5.60	陶邑
99	661	MBox3	土壙44	有蓋高杯	0.450	0.063	1.33	0.635	0.270	0.133	1.80	11.00	陶邑
100		MBox3	土壙52	壺	0.435	0.075	3.16	0.674	0.216	0.126	4.10	16.00	陶邑
101	708	MBox3	土壙52	器台	0.458	0.217	1.42	0.826	0.524	0.203	19.00	38.00	不明
102	656	MBox3	土壙42	高杯	0.466	0.104	2.17	0.609	0.282	0.267	0.87	7.60	陶邑
103		MBox3	土壙42	胴部	0.420	0.066	2.26	0.552	0.290	0.096	1.90	11.00	陶邑
104	657	MBox3	土壙43	蓋	0.429	0.189	2.84	0.577	0.373	0.146	6.00	10.00	陶邑
105	658	MBox3	土壙43	有蓋高杯	0.487	0.085	2.69	0.499	0.351	0.286	4.20	6.80	不明
106		MBox3		蓋	0.443	0.099	2.10	0.581	0.286	0.200	0.30	9.10	陶邑
107		MBox3		脚部	0.437	0.050	2.93	0.563	0.233	0.195	1.60	12.00	陶邑
108		MBox3		蓋	0.434	0.054	1.82	0.683	0.252	0.137	3.90	18.00	陶邑
109		MBox3		杯身	0.417	0.055	1.72	0.541	0.230	0.171	1.30	14.00	陶邑
110		MBox3		有蓋高杯	0.351	0.017	2.88	0.480	0.111	0.047	4.70	29.00	陶邑
111		MBox3		蓋	0.486	0.143	2.65	0.519	0.391	0.266	1.40	4.20	陶邑
112		MBox3		杯身	0.477	0.102	2.78	0.487	0.297	0.171	2.30	10.00	陶邑
113		MBox3		高杯	−	−	−	−	−	−			
114	814	MM1	柱穴2	杯蓋	0.565	0.186	2.61	0.751	0.421	0.239	4.60	2.80	陶質土器
115	815	MM1	柱穴2	杯？	0.444	0.098	1.90	0.663	0.297	0.137	1.70	12.00	陶邑
116	211	MM2	竪穴住居62	不明	0.534	0.153	1.75	0.749	0.384	0.342	3.20	6.00	陶邑
117	185	MM2	竪穴住居58	杯	−	−	−	−	−	−			
118	186	MM2	竪穴住居58	杯蓋	0.503	0.212	2.19	0.623	0.362	0.164	11.00	5.80	陶質土器
119		MM2		甕	0.442	0.073	2.22	0.537	0.201	0.160	3.10	14.00	陶邑
120		MM3	掘立柱建物45	器台？	0.552	0.355	2.40	0.649	0.568	0.286	30.00	8.80	陶質土器
121	256	MM4	竪穴住居73	杯蓋	0.518	0.142	1.95	0.735	0.440	0.236	3.60	10.00	陶邑
122		MM4	竪穴住居72	甕	0.525	0.445	2.50	0.613	0.703	0.247	51.00	22.00	不明→陶質土器
123	244	MM4	竪穴住居71	杯蓋	0.455	0.222	2.03	0.769	0.506	0.201	14.00	26.00	不明→陶質土器
124	134	MM4	竪穴住居39	蓋	0.510	0.366	2.58	0.654	0.586	0.244	34.00	14.00	不明→陶質土器
125	735	MM4	土壙59	杯蓋	0.424	0.491	1.80	0.487	0.747	0.317	89.00	45.00	不明→陶質土器
126		MM4		甕	0.456	0.072	2.87	0.469	0.288	0.173	2.90	11.00	陶邑

表1　胎土分析資料一覧表　（その4）

資料番号	挿図番号	調査区名	掲載遺構名	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D^2(陶邑)	D^2(伽耶)	判定
127	1132	MM4	たわみ10	高杯	0.499	0.278	2.86	0.416	0.525	0.268	19.00	14.00	不明→陶質土器
128	1131	MM4	たわみ10	短頸壺	0.458	0.152	2.66	0.495	0.420	0.276	3.00	4.80	不明
129	1134	MM4	たわみ10	器台	0.332	0.034	2.89	0.442	0.166	0.072	4.00	28.00	陶邑
130	1133	MM4	たわみ10	高杯	0.384	0.114	3.08	0.452	0.254	0.081	3.60	19.00	陶邑
131	1130	MM4	たわみ10	杯蓋	0.414	0.048	2.58	0.518	0.206	0.103	1.80	15.00	陶邑
132	429	MM4	炉7	甕	0.520	0.444	2.40	0.620	0.596	0.297	71.00	28.00	不明→陶質土器
133		MM4		(口縁部)	0.520	0.083	2.61	0.583	0.275	0.362	3.80	6.90	不明
134		MM4		?	0.513	0.322	2.74	0.549	0.625	0.405	20.00	6.80	陶質土器
135	720	MM5	土壙54	短頸壺	0.492	0.079	2.28	0.702	0.282	0.116	2.90	9.70	陶邑
136	721	MM5	土壙54	壺	0.682	0.179	2.37	0.599	0.452	0.244	17.00	15.00	不明→陶質土器
137	224	MM6	竪穴住居63	杯蓋	0.483	0.076	2.13	0.652	0.247	0.155	2.70	8.60	陶邑
138	238	MM6	竪穴住居68	角状杯	0.434	0.293	2.21	0.565	0.517	0.234	22.00	14.00	不明→陶質土器
139	1332	KB1	包含層	壺	0.469	0.504	3.17	0.498	0.805	0.323	84.00	37.00	不明→陶質土器
140	1323	KB1	包含層	壺	0.463	0.074	2.23	0.606	0.257	0.183	1.20	9.00	陶邑
141	1288	KB1	包含層	高杯(杯部)	0.484	0.073	2.02	0.480	0.264	0.125	4.20	13.00	陶邑
142	1246	KB1	包含層	杯蓋	0.384	0.087	2.20	0.539	0.265	0.152	1.70	16.00	陶邑
143	1272	KB1	包含層	高杯	0.394	0.367	2.53	0.425	0.651	0.363	48.00	26.00	不明→陶質土器
144	1275	KB1	包含層	高杯	0.439	0.376	2.43	0.540	0.609	0.295	43.00	22.00	不明→陶質土器
145		KB1	包含層	杯蓋	0.447	0.086	2.58	0.674	0.260	0.116	2.40	13.00	陶邑
146	1256	KB1	包含層	杯蓋	0.515	0.071	2.12	0.651	0.249	0.252	4.40	7.10	不明
147	1262	KB1	包含層	杯蓋	0.477	0.052	3.30	0.440	0.194	0.089	8.60	22.00	陶邑
148	1245	KB1	包含層	杯蓋	0.372	0.359	2.61	0.431	0.687	0.377	53.00	27.00	不明→陶質土器
149	1241	KB1	包含層	杯蓋	0.394	0.064	2.21	0.539	0.236	0.166	1.30	16.00	陶邑
150		KB1	包含層	杯蓋	0.418	0.084	3.14	0.525	0.263	0.165	0.62	12.00	陶邑
151	1347	KB1	包含層	甕?(口縁)	0.365	0.081	2.12	0.446	0.285	0.200	3.80	17.00	陶邑
152	1333	KB1	包含層	壺(口縁)	0.383	0.109	3.30	0.340	0.374	0.245	11.00	16.00	不明
153	1353	KB1	包含層	甕	0.540	0.178	2.47	0.544	0.484	0.319	3.90	1.90	陶質土器
154		KB1	包含層	甕(胴部)	0.524	0.106	2.12	0.679	0.307	0.276	2.60	4.60	不明
155	1248	KB1	包含層	杯蓋	0.450	0.063	2.21	0.528	0.210	0.161	2.70	13.00	陶邑
156	1316	KB1	包含層	壺(口縁)	0.296	0.021	2.64	0.457	0.115	0.034	6.30	37.00	陶邑
157	1290	KB1	包含層	高杯(杯部)	0.423	0.069	2.95	0.511	0.245	0.206	1.00	13.00	陶邑
158	1264	KB1	包含層	杯蓋	0.361	0.037	2.91	0.413	0.190	0.094	3.80	24.00	陶邑
159	1390	KB1	包含層	器台	0.390	0.110	3.23	0.329	0.379	0.244	12.00	16.00	不明
160	1297	KB1	包含層	把手付無蓋高杯(杯部)	0.433	0.100	2.14	0.559	0.276	0.164	0.50	10.00	陶邑
161	1394	KB1	包含層	高杯(脚部)	0.366	0.073	2.21	0.524	0.257	0.116	2.60	18.00	陶邑
162	1282	KB1	包含層	高杯(杯部)	0.414	0.081	2.13	0.478	0.264	0.227	1.20	13.00	陶邑
163	1279	KB1	包含層	高杯	0.500	0.149	1.67	0.607	0.357	0.326	1.00	3.20	陶邑
164	1393	KB1	包含層	高杯(脚部)	0.454	0.092	1.76	0.583	0.334	0.229	1.00	7.30	陶邑
165	1296	KB1	包含層	把手付高杯(杯部)	0.490	0.171	1.67	0.599	0.381	0.336	1.80	3.50	陶邑

表1　胎土分析資料一覧表　（その5）

資料番号	挿図番号	調査区名	掲載遺構名	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D^2（陶邑）	D^2（伽耶）	判定
166	1259	KB1	包含層	杯蓋	0.411	0.088	2.50	0.509	0.274	0.096	0.79	12.00	陶邑
167	1309	KB1	包含層	高杯(杯部)	0.375	0.065	1.40	0.528	0.222	0.141	1.90	19.00	陶邑
168		KB1	包含層	胴部	0.398	0.122	3.21	0.337	0.396	0.256	12.00	15.00	不明
169	1294	KB1	包含層	把手付高杯(杯部)	0.412	0.044	2.45	0.467	0.215	0.126	2.60	16.00	陶邑
170	1260	KB1	包含層	杯蓋	0.392	0.095	2.73	0.481	0.238	0.172	2.20	17.00	陶邑
171	1311	KB1	包含層	高杯(脚部)	0.403	0.071	2.34	0.536	0.238	0.174	1.00	15.00	陶邑
172	1247	KB1	包含層	杯蓋	0.388	0.051	2.85	0.422	0.230	0.192	3.30	19.00	陶邑
173	1359	KB1	包含層	把手付椀	0.424	0.354	2.62	0.493	0.575	0.305	39.00	22.00	不明→陶質土器
174	1344	KB1	包含層	鉢？鍋？	0.390	0.344	2.35	0.471	0.745	0.339	53.00	24.00	不明→陶質土器
175	1314	KB1	包含層	壺	0.502	0.065	2.18	0.623	0.252	0.149	3.30	7.60	不明
176		KM1	包含層	？	0.650	0.381	2.08	0.819	0.738	0.221	25.00	15.00	不明→陶質土器
177	1378	KM1	包含層	器台	0.351	0.051	2.82	0.448	0.158	0.082	3.80	27.00	陶邑
178	1283	KM1	包含層	高杯	0.445	0.031	2.53	0.509	0.177	0.113	4.40	16.00	陶邑
179	1255	KM1	包含層	杯蓋	0.407	0.046	3.11	0.430	0.194	0.167	3.60	21.00	陶邑
180		KM1	包含層	壺	0.523	0.157	2.49	0.606	0.315	0.275	6.10	4.90	不明
181		KM1	包含層	(胴)	0.533	0.123	2.98	0.674	0.332	0.295	6.40	3.10	陶質土器
182	1373	KM1	包含層	器台	0.474	0.233	1.42	0.819	0.538	0.218	17.00	33.00	不明
183		KM1	包含層	高杯	0.420	0.107	2.08	0.564	0.288	0.163	0.74	11.00	陶邑
184	1383	KM1	包含層	器台	0.586	0.161	2.54	0.566	0.432	0.315	5.40	4.70	不明→陶質土器
185	1258	KM1	包含層	杯蓋	0.407	0.074	2.77	0.445	0.263	0.190	2.20	15.00	陶邑
186		KM1	包含層	高杯	0.515	0.154	3.02	0.522	0.313	0.236	6.80	10.00	陶邑
187		KM1	包含層	壺	0.537	0.112	2.78	0.623	0.290	0.238	4.60	4.80	不明
188		KM1	包含層	器台	0.467	0.073	2.46	0.494	0.279	0.197	2.40	10.00	陶邑
189	1293	KM2	包含層	高杯	0.370	0.352	2.50	0.446	0.652	0.375	49.00	27.00	不明→陶質土器
190	1358	KM1	包含層	甕	0.506	0.128	2.46	0.542	0.458	0.453	6.00	3.10	陶質土器
191		KM2	包含層		0.482	0.315	1.41	0.842	0.589	0.249	31.00	37.00	不明→陶質土器
192	1287	KM2	包含層	高杯	0.497	0.101	2.72	0.592	0.285	0.227	1.70	6.00	陶邑
193	1362	KM2	包含層	把手付椀	0.431	0.081	1.74	0.613	0.263	0.171	1.00	12.00	陶邑
194		KM2	包含層	高杯	0.411	0.080	2.54	0.457	0.286	0.175	2.10	13.00	陶邑
195	1285	KM2	包含層	高杯	0.407	0.082	1.60	0.556	0.285	0.161	1.20	13.00	陶邑
196		KM2	包含層	杯身	0.389	0.066	2.22	0.509	0.230	0.167	1.40	16.00	陶邑
197	1315	KM2	包含層	甕	0.470	0.121	2.49	0.579	0.303	0.275	0.83	6.50	陶邑
198		KM2	包含層	高杯	0.425	0.388	2.27	0.577	0.668	0.335	48.00	27.00	不明→陶質土器
199		KM2	包含層	杯蓋	0.409	0.062	2.85	0.570	0.205	0.156	1.80	16.00	陶邑
200		KM2	包含層	杯身	0.562	0.109	2.26	0.769	0.335	0.257	5.60	6.80	不明
201		KM2	包含層	壺or甕	0.508	0.154	2.56	0.584	0.353	0.365	2.00	3.60	不明
202		KM3	包含層	胴部片	0.410	0.100	2.03	0.683	0.297	0.136	4.30	21.00	陶邑
203		KM3	包含層	？	0.520	0.267	2.51	0.625	0.483	0.259	12.00	3.90	陶質土器
204		KM3	包含層	壺	0.317	0.189	2.50	0.400	0.253	0.104	23.00	41.00	不明
205		KM3	包含層	杯蓋	0.379	0.063	2.34	0.552	0.242	0.156	2.10	18.00	陶邑
206		KM3	包含層	杯蓋	0.370	0.065	2.38	0.540	0.239	0.149	2.40	19.00	陶邑
207		KM3	包含層		0.488	0.231	2.47	0.577	0.381	0.250	13.00	8.40	陶質土器

表1　胎土分析資料一覧表　（その6）

資料番号	挿図番号	調査区名	掲載遺構名	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D^2(陶邑)	D^2(伽耶)	判定
208	1337	K M3	包含層	壺	0.450	0.028	2.65	0.557	0.195	0.110	3.70	14.00	陶邑
209		K M3	包含層	壺	0.424	0.062	2.50	0.478	0.249	0.179	1.80	13.00	陶邑
210	1254	K M3	包含層	杯蓋	0.431	0.066	2.79	0.501	0.246	0.219	1.30	12.00	陶邑
211	1318	K M3	包含層	甕	0.421	0.061	2.54	0.506	0.250	0.191	1.30	13.00	陶邑
212		K M3	包含層	器台	0.320	0.106	2.97	0.352	0.297	0.155	9.40	25.00	陶邑
213		K M3	包含層	甕	0.497	0.181	1.99	0.607	0.417	0.345	1.70	2.50	不明
214	1299	K M3	包含層	有蓋高杯	0.553	0.107	2.32	0.680	0.361	0.294	3.00	3.80	不明
215		K M3	包含層	高杯	0.419	0.047	2.30	0.564	0.230	0.114	1.70	14.00	陶邑
216		K M3	包含層		0.465	0.130	2.84	0.557	0.339	0.257	0.30	5.70	陶邑
217		K M3	包含層		0.450	0.556	2.24	0.568	0.964	0.389	110.00	57.00	不明→陶質土器
218	1345	K M3	包含層	俵形鐙	0.422	0.099	1.83	0.620	0.318	0.123	1.70	13.00	陶邑
219		K M3	包含層	甕(胴)	0.544	0.243	1.87	0.597	0.556	0.421	6.20	1.00	陶質土器
120		K M3	包含層	壺	0.463	0.069	2.25	0.537	0.276	0.216	1.50	8.70	陶邑
221		K M3	包含層	杯身	0.495	0.091	2.59	0.482	0.302	0.155	3.70	11.00	陶邑
222	1376	K M3	包含層	器台？	0.482	0.487	2.53	0.556	0.847	0.266	73.00	33.00	不明→陶質土器
223		K M3	包含層	壺	0.453	0.107	2.47	0.546	0.275	0.264	1.10	9.20	陶邑
224		K M3	包含層	高杯	0.440	0.149	2.19	0.389	0.361	0.249	5.90	15.00	陶邑
225	1343	K M3	包含層	甕	0.481	0.079	1.66	0.711	0.353	0.225	5.10	14.00	陶邑
226	1388	K M3	包含層	器台	0.532	0.267	2.50	0.595	0.478	0.274	12.00	4.10	陶質時
227	1372	K M3	包含層	器台	0.550	0.241	2.38	0.664	0.451	0.240	9.10	1.50	陶質土器
228	1273	K M3	包含層	高杯	0.446	0.329	2.43	0.551	0.622	0.325	28.00	14.00	不明→陶質土器
229	1375	K M3	包含層	器台	0.514	0.268	2.48	0.623	0.487	0.276	12.00	4.30	陶質土器
230	1374	K M3	包含層	器台	0.491	0.149	2.06	0.695	0.305	0.143	5.50	7.20	不明
231		K M4	包含層	鼈	0.418	0.033	2.65	0.477	0.186	0.117	3.30	18.00	陶邑
232		K M4	包含層	高杯	0.400	0.083	2.68	0.473	0.265	0.112	1.40	14.00	陶邑
233		K M4	包含層	鼈	0.435	0.066	2.52	0.514	0.251	0.200	1.20	12.00	陶邑
234		K M4	包含層	壺	0.426	0.054	3.10	0.509	0.193	0.129	2.50	16.00	陶邑
235		K M4	包含層	壺									
236		K M4	包含層	壺	0.528	0.110	2.69	0.635	0.298	0.240	3.20	4.20	不明
237		K M4	包含層	鼈	0.485	0.272	1.78	0.509	0.522	0.250	13.00	7.10	陶質土器
238	1326	K M4	包含層	壺	0.359	0.030	2.29	0.440	0.206	0.065	4.10	21.00	陶邑
239	1330	K M4	包含層	甕	0.529	0.100	2.21	0.712	0.371	0.259	3.20	7.50	陶邑
240	1265	K M4	包含層	杯蓋	0.417	0.085	2.63	0.492	0.226	0.168	2.00	16.00	陶邑
241	1365	K M4	包含層	鉢	0.402	0.052	2.82	0.485	0.185	0.059	2.50	19.00	陶邑
242	1267	K M4	包含層	杯身	0.349	0.040	1.92	0.489	0.221	0.075	4.00	22.00	陶邑
243	1240	K M4	包含層	杯蓋	0.419	0.054	2.75	0.588	0.259	0.198	2.00	14.00	陶邑
244		K M4	包含層	鼈	0.524	0.170	1.94	0.740	0.459	0.297	3.30	8.50	陶邑
245		K M4	包含層	把手付椀	0.371	0.353	2.43	0.450	0.685	0.397	51.00	27.00	不明→陶質土器
246	1263	K M4	包含層	杯蓋	0.456	0.036	2.41	0.465	0.231	0.098	5.30	15.00	陶邑
247	1252	K M5	包含層	杯蓋	0.385	0.063	2.00	0.507	0.228	0.171	1.50	17.00	陶邑
248		K M5	包含層	杯蓋	0.426	0.064	2.07	0.550	0.253	0.099	0.93	12.00	陶邑
249		K M5	包含層	高杯	0.393	0.120	2.12	0.433	0.365	0.216	5.30	11.00	陶邑
250		K M5	包含層	壺	0.445	0.073	1.63	0.737	0.285	0.147	5.30	21.00	陶邑
251		K M5	包含層	杯蓋	0.422	0.143	2.75	0.515	0.264	0.243	5.80	15.00	陶邑
252		K M5	包含層	杯蓋	0.454	0.137	2.44	0.512	0.377	0.250	4.80	11.00	陶邑
253	1278	K M5	包含層	高杯	0.413	0.058	2.44	0.493	0.232	0.206	1.50	14.00	陶邑

表1　胎土分析資料一覧表　（その7）

資料番号	挿図番号	調査区名	掲載遺構名	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D^2（陶邑）	D^2（伽耶）	判定
254	1338	KM5	包含層	大甕	0.476	0.154	2.20	0.589	0.396	0.189	0.68	3.80	陶邑
255		KM5	包含層	壺	0.460	0.178	2.23	0.542	0.408	0.339	2.50	5.10	陶邑
256		KM5	包含層	壺	0.546	0.149	2.49	0.540	0.489	0.372	6.70	3.10	陶質土器
257				壺	0.451	0.090	2.65	0.491	0.248	0.110	2.30	13.00	陶邑
258	1329	KM5	包含層	甕	0.442	0.070	1.65	0.732	0.289	0.150	5.50	21.00	陶邑
259	1274	KM5	包含層	高杯	0.453	0.377	2.53	0.562	0.647	0.310	40.00	20.00	不明→陶質土器
260	1354	KM5	包含層	鉢	0.468	0.479	2.43	0.588	0.778	0.263	73.00	35.00	不明→陶質土器
261	1369	KM5	包含層	鉢	0.452	0.336	2.35	0.576	0.582	0.275	29.00	15.00	不明→陶質土器
262		KM5	包含層	?	0.434	0.318	2.35	0.566	0.556	0.300	27.00	16.00	不明→陶質土器
263		KM5	包含層	器台	0.452	0.332	2.43	0.588	0.550	0.295	30.00	16.00	不明→陶質土器
264		KM5	包含層	器台	0.450	0.312	2.36	0.592	0.544	0.279	24.00	14.00	不明→陶質土器
265		KM5	包含層	高鉢	0.318	0.022	2.71	0.395	0.127	0.060	5.60	34.00	陶邑
266		KM5	包含層	高杯	0.604	0.364	2.81	0.677	0.656	0.350	24.00	6.50	陶質土器
267		KM5	包含層	把手付高杯	0.483	0.068	2.46	0.596	0.243	0.200	2.50	8.50	陶邑
268	1319	KM5	包含層	甕	0.397	0.030	2.91	0.424	0.187	0.125	4.20	22.00	陶邑
269		KM5	包含層	高杯	0.575	0.376	2.95	0.686	0.633	0.373	30.00	8.80	陶質土器
270		KM5	包含層	壺	0.405	0.108	2.58	0.502	0.213	0.053	4.90	19.00	陶邑
271	1303	KM5	包含層	高杯	0.401	0.094	1.61	0.577	0.291	0.154	1.50	14.00	陶邑
272	1308	KM5	包含層	高杯	0.424	0.063	2.69	0.568	0.284	0.172	1.90	12.00	陶邑
273		KM5	包含層	高杯	0.487	0.075	3.04	0.519	0.237	0.249	4.20	12.00	陶邑
274	1350	KM5	包含層	鉢	0.595	0.282	1.97	0.595	0.421	0.278	30.00	12.00	不明→陶質土器
275	1302	KM5	包含層	高杯	0.404	0.107	1.61	0.581	0.293	0.139	1.60	14.00	陶邑
276	1301	KM5	包含層	高杯	0.426	0.024	3.95	0.408	0.171	0.132	6.90	25.00	陶邑
277	1276	KM5	包含層	高杯	0.460	0.373	2.81	0.544	0.579	0.335	42.00	21.00	不明→陶質土器
278	1322	KM5	包含層	壺	0.357	0.032	2.24	0.445	0.212	0.062	4.20	21.00	陶邑
279	1251	KM5	包含層	杯蓋	0.299	0.025	3.10	0.392	0.142	0.064	6.20	35.00	陶邑
280		KM5	包含層	高杯	0.424	0.084	2.36	0.505	0.237	0.186	1.40	14.00	陶邑
281	1312	KM5	包含層	高杯(脚部)	0.426	0.028	3.76	0.452	0.158	0.168	5.50	22.00	陶邑
282	1395	KM5	包含層	高杯(脚部)	0.544	0.315	2.81	0.603	0.418	0.245	40.00	15.00	不明→陶質土器
283	1392	KM5	包含層	器台	0.455	0.320	2.39	0.582	0.519	0.288	28.00	15.00	不明→陶質土器
284	1284	KM5	包含層	高杯	0.491	0.077	2.16	0.573	0.232	0.162	3.80	9.40	陶邑
285	1266	KM5	包含層	杯蓋	0.409	0.060	2.69	0.591	0.249	0.160	1.70	15.00	陶邑
286	1361	KM5	包含層	把手付椀	0.513	0.099	2.11	0.667	0.316	0.254	1.70	5.20	陶邑
287		KM5	包含層	器台	0.525	0.258	2.54	0.621	0.495	0.267	9.10	2.60	陶質土器
288	1324	KM5	包含層	甕	0.392	0.102	1.74	0.538	0.308	0.166	2.00	13.00	陶邑
289	1257	KM5	包含層	杯蓋	0.412	0.097	2.87	0.441	0.312	0.219	2.60	12.00	陶邑
290		KM5	包含層	無蓋高杯	0.421	0.076	2.29	0.521	0.249	0.245	0.78	12.00	陶邑
291	1349	KM5	包含層	鉢	0.523	0.108	1.75	0.706	0.337	0.147	2.20	5.80	陶邑
292		KM5	包含層	高杯?	0.499	0.106	2.11	0.565	0.316	0.308	1.10	5.30	陶邑

表1　胎土分析資料一覧表　（その8）

資料番号	挿図番号	調査区名	掲載遺構名	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D^2(陶邑)	D^2(伽耶)	判定
293		KM5	包含層	?	0.437	0.316	2.34	0.571	0.556	0.293	26.00	16.00	不明→陶質土器
294		KM5	包含層	高杯	0.429	0.029	3.66	0.444	0.193	0.142	4.90	19.00	陶邑
295		KM5	包含層	高杯	0.433	0.082	2.30	0.502	0.248	0.234	1.20	13.00	陶邑
296	1348	KM5	包含層	甕	0.459	0.070	2.59	0.477	0.260	0.176	2.80	12.00	陶邑
297	1310	KM5	包含層	高杯	0.537	0.107	2.98	0.725	0.278	0.191	6.20	5.60	不明
298	1307	KM5	包含層	高杯	0.371	0.067	2.45	0.524	0.239	0.158	2.10	18.00	陶邑
299		KM5	包含層	杯蓋	0.516	0.129	2.41	0.763	0.387	0.145	3.50	11.00	陶邑
300	1379	KM5	包含層	?	0.482	0.423	2.28	0.558	0.671	0.342	52.00	23.00	不明→陶質土器
301	1399	KM5	包含層	杯蓋	0.539	0.369	2.07	0.659	0.564	0.341	37.00	12.00	不明→陶質土器
302	1339	KM5	包含層	甕	0.419	0.257	2.41	0.563	0.570	0.299	19.00	13.00	不明→陶質土器
303		KM5	包含層	高杯	0.415	0.043	2.36	0.564	0.174	0.082	2.80	17.00	陶邑
304		KM5	包含層	?	0.463	0.336	2.30	0.579	0.594	0.299	28.00	14.00	不明→陶質土器
305	1300	KM6	包含層	高杯	0.436	0.062	1.78	0.660	0.245	0.126	2.60	15.00	陶邑
306	1356	KM6	包含層	甕	0.509	0.210	2.14	0.602	0.440	0.383	4.00	2.20	陶質土器
307	1360	KM6	包含層	把手付椀	0.384	0.387	2.46	0.438	0.702	0.397	57.00	29.00	不明→陶質土器
308	1298	KM6	包含層	把手付高杯	0.469	0.035	2.90	0.428	0.178	0.099	4.40	22.00	陶邑
309	1250	KM6	包含層	杯蓋									
310	1389	KM6	包含層	器台	0.485	0.345	2.39	0.565	0.627	0.366	27.00	11.00	不明→陶質土器
311	1340	KM6	包含層	壺	0.542	0.488	2.31	0.620	0.679	0.322	79.00	31.00	不明→陶質土器
312	1351	KM6	包含層	甕	0.496	0.285	2.40	0.595	0.509	0.284	15.00	6.50	陶質土器
313	1313	KM6	包含層	壺	0.424	0.503	2.20	0.582	1.150	0.150	150.00	83.00	不明→陶質土器
314	1306	KM6	包含層	高杯	0.461	0.082	2.49	0.552	0.296	0.262	0.74	7.60	陶邑
315	1368	KM6	包含層	椀	0.428	0.374	2.38	0.527	0.631	0.303	43.00	23.00	不明→陶質土器
316	1253	KM6	包含層	杯蓋	0.499	0.123	2.37	0.511	0.414	0.378	3.80	4.00	不明
317	1363	KM6	包含層	椀	0.421	0.307	2.15	0.562	0.595	0.326	27.00	17.00	不明→陶質土器
318		KM6	包含層	器台?	0.472	0.311	2.44	0.585	0.529	0.258	23.00	11.00	不明→陶質土器
319	1243	KM6	包含層	杯蓋	0.422	0.338	2.53	0.535	0.612	0.312	34.00	19.00	不明→陶質土器
320	1244	KM6	包含層	杯蓋	0.431	0.338	2.61	0.539	0.589	0.313	32.00	18.00	不明→陶質土器
321	1391	KM6	包含層	器台	0.479	0.335	2.42	0.577	0.629	0.351	25.00	11.00	不明→陶質土器
322	1277	KM6	包含層	高杯(杯部)	0.415	0.366	2.22	0.552	0.641	0.330	43.00	24.00	不明→陶質土器
323	1281	KM6	包含層	高杯(杯部)	0.520	0.239	3.26	0.594	0.495	0.349	6.10	1.90	陶質土器
324	1280	KM6	包含層	高杯(杯部)	0.311	0.021	2.77	0.378	0.124	0.054	6.10	36.00	陶邑
325	1346	KM6	包含層	甕?	0.538	0.207	2.00	0.617	0.460	0.354	3.10	0.64	陶質土器
326	1370	KM6	包含層	器台	0.486	0.331	2.46	0.549	0.610	0.326	24.00	9.80	陶質土器

表1　胎土分析資料一覧表　（その9）

資料番号	挿図番号	調査区名	掲載遺構名	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D^2（陶邑）	D^2（伽耶）	判定
327	1242	KM6	包含層	杯蓋	0.374	0.081	2.15	0.447	0.321	0.195	5.60	4.00	陶邑
328	1356	KM6	包含層	把手付椀	0.627	0.177	2.26	0.768	0.412	0.216	8.70	1.90	陶質土器
329	1305	KM6	包含層	高杯(脚部)	0.503	0.216	3.25	0.595	0.483	0.357	4.00	2.10	陶質土器
330		KS1	包含層	長頸壺(口縁部)	0.503	0.031	1.75	0.670	0.192	0.106	7.70	11.00	陶邑
331		KS1	包含層		0.379	0.077	2.04	0.461	0.239	0.217	2.00	18.00	陶邑
332		KS2	包含層	壺	0.345	0.116	2.62	0.372	0.344	0.159	9.40	19.00	陶邑
333		MBOX1	包含層	器台	0.380	0.034	2.69	0.470	0.168	0.048	2.90	22.00	陶邑
334	1321	MBOX1	包含層	壺	0.373	0.034	2.69	0.478	0.173	0.052	2.70	22.00	陶邑
335		MBOX1	包含層	甕	0.496	0.127	2.60	0.590	0.310	0.292	1.70	5.10	陶邑
336		MBOX1	包含層	器台	0.507	0.137	1.91	0.612	0.316	0.337	2.50	4.30	陶邑
337		MBOX3	包含層	(高杯)	0.449	0.053	1.88	0.597	0.252	0.142	1.80	11.00	陶邑
338		MBOX3	包含層	壺	0.529	0.080	2.88	0.487	0.304	0.313	7.20	13.00	陶邑
339		MBOX3	包含層	高杯	0.480	0.304	2.21	0.610	0.594	0.339	18.00	9.20	陶質土器
340	1289	MBOX3	包含層	高杯	0.426	0.058	2.46	0.516	0.222	0.082	1.50	14.00	陶邑
341		MBOX3	包含層	壺	0.417	0.079	1.97	0.521	0.276	0.172	0.80	11.00	陶邑
342		MBOX3	包含層	高杯	0.428	0.086	2.56	0.529	0.244	0.209	1.10	12.00	陶邑
343	1341	MBOX3	包含層	壺	0.697	0.190	2.46	0.719	0.405	0.218	22.00	8.20	陶質土器
344		MBOX3	包含層	高杯	0.410	0.138	2.08	0.501	0.259	0.175	5.50	17.00	陶邑
345	1286	MBOX3	包含層	高杯	0.478	0.138	2.11	0.528	0.288	0.273	4.30	9.80	陶邑
346		MBOX3	包含層	壺	0.472	0.107	2.30	0.505	0.276	0.116	2.50	11.00	陶邑
347	1380	MBOX3	包含層	器台	0.489	0.073	2.45	0.503	0.289	0.212	3.40	9.50	陶邑
348		MBOX3	包含層	器台	0.646	0.128	1.46	0.735	0.379	0.247	11.00	5.30	陶質土器
349		MBOX3	包含層	甕	0.620	0.512	2.19	0.677	0.775	0.251	73.00	26.00	不明→陶質土器
350	1386	MBOX3	包含層	器台？	0.474	0.123	2.02	0.680	0.275	0.117	4.10	9.00	陶邑
351	1382	MBOX3	包含層	器台	0.508	0.102	2.10	0.637	0.339	0.281	1.00	4.50	陶邑
352		MBOX3	包含層	器台？	0.388	0.059	2.26	0.541	0.240	0.129	1.70	16.00	陶邑
353				器台？	0.388	0.059	2.26	0.541	0.240	0.129	1.70	16.00	陶邑
354		MBOX3	包含層	壺	0.467	0.096	2.31	0.468	0.269	0.090	3.20	13.00	陶邑
355	1328	MBOX3	包含層	甕	0.481	0.173	2.77	0.689	0.353	0.136	5.00	7.60	陶邑
356	1355	MBOX3	包含層	甕	0.389	0.059	3.37	0.406	0.203	0.151	3.70	23.00	陶邑
357		MBOX3	包含層	壺	0.405	0.077	1.90	0.513	0.273	0.185	1.10	13.00	陶邑
358		MBOX3	包含層	器台	0.553	0.243	2.46	0.676	0.449	0.263	9.90	1.60	陶質土器
359		MBOX3	包含層	器台	0.471	0.157	2.69	0.716	0.349	0.129	4.50	11.00	陶邑
360	1366	MBOX3	包含層	杯身	0.476	0.159	2.28	0.772	0.361	0.125	6.80	16.00	陶邑
361	1342	MBOX3	包含層	壺	0.525	0.351	2.62	0.770	0.560	0.207	34.00	17.00	不明→陶質土器
362	1317	MBOX3	包含層	甕	0.592	0.158	2.48	0.570	0.450	0.329	5.80	4.70	不明
363	1384	MBOX3	包含層	器台	0.512	0.100	2.11	0.653	0.338	0.282	1.30	4.80	陶邑
364	1335	MBOX3	包含層	壺(口縁部)	0.405	0.048	2.52	0.503	0.166	0.116	3.10	19.00	陶邑
365	1377	MBOX3	包含層	器台	0.509	0.460	2.54	0.584	0.750	0.257	59.00	25.00	不明→陶質土器
366	1387	MBOX3	包含層	器台	0.462	0.163	2.76	0.697	0.359	0.133	4.30	11.00	陶邑
367	1381	MBOX3	包含層	器台	0.585	0.160	2.51	0.586	0.443	0.324	4.60	3.20	不明
368		MM1	包含層	高杯	0.465	0.154	2.65	0.721	0.356	0.135	4.40	13.00	陶邑
369	1352	MM2	包含層	甕	0.471	0.129	1.94	0.694	0.309	0.160	3.00	9.70	陶邑
370		MM2	包含層	甕	0.525	0.135	3.11	0.580	0.323	0.270	3.30	4.80	不明
371		MM2	包含層	器台	0.476	0.166	2.48	0.657	0.363	0.156	2.80	6.40	陶邑
372		MM2	包含層	壺？甕	0.577	0.175	2.06	0.613	0.361	0.173	8.60	4.10	陶質土器

表1　胎土分析資料一覧表　(その10)

資料番号	挿図番号	調査区名	掲載遺構名	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D^2(陶邑)	D^2(伽耶)	判定
373		MM2	包含層	甕	0.447	0.073	2.79	0.574	0.246	0.177	1.00	10.00	陶邑
374	1240	MM2	包含層	杯蓋	0.385	0.256	2.83	0.492	0.477	0.144	20.00	18.00	不明
375		MM2	包含層	高杯	0.409	0.069	2.15	0.531	0.222	0.175	0.120	15.00	陶邑
376		MM2	包含層	壺	0.446	0.124	2.51	0.510	0.278	0.309	2.50	11.00	陶邑
377	1327	MM2	包含層	壺	0.546	0.123	1.97	0.695	0.408	0.354	2.50	4.50	不明
378		MM2	包含層	?	0.533	0.185	2.38	0.738	0.380	0.157	6.20	4.30	不明
379	1396	MM4	包含層	高杯(脚部)	0.385	0.088	2.36	0.474	0.278	0.169	1.90	15.00	陶邑
380		MM4	包含層	器台	0.380	0.081	2.35	0.488	0.261	0.142	1.80	16.00	陶邑
381	1292	MM4	包含層	高杯	0.395	0.056	1.90	0.591	0.254	0.130	2.70	17.00	陶邑
382	1385	MM4	包含層	器台	0.381	0.091	2.38	0.470	0.283	0.175	2.20	15.00	陶邑
383		MM4	包含層	器台	0.408	0.066	2.26	0.518	0.237	0.179	1.00	14.00	陶邑
384		MM4	包含層	高杯	0.451	0.114	1.70	0.758	0.317	0.108	5.70	21.00	陶邑
385		MM4	包含層	器台	0.485	0.336	2.56	0.584	0.606	0.346	25.00	11.00	不明→陶質土器
386		MM4	包含層	甕	0.463	0.037	2.98	0.452	0.184	0.158	7.20	21.00	陶邑
387		MM4	包含層	器台	0.546	0.362	2.44	0.632	0.583	0.297	31.00	9.80	陶質土器
388	1291	MM4	包含層	高杯	0.478	0.321	2.68	0.532	0.629	0.403	23.00	9.10	陶質土器
389		MM4	包含層	器台	0.485	0.342	2.55	0.559	0.590	0.356	27.00	12.00	不明→陶質土器
390	1371	MM4	包含層	器台	0.486	0.345	2.55	0.561	0.603	0.352	28.00	12.00	不明→陶質土器
391	1325	MM4	包含層	壺	0.422	0.070	2.31	0.515	0.248	0.182	0.92	13.00	陶邑
392		MM4	包含層	器台	0.404	0.065	2.27	0.495	0.234	0.162	1.30	15.00	陶邑
393		MM4	包含層	器台	0.464	0.070	2.88	0.491	0.251	0.185	2.70	12.00	陶邑
394		MM5	包含層	?	0.447	0.103	2.06	0.612	0.291	0.188	0.56	9.20	陶邑
395		MM5	包含層	?	0.588	0.270	2.68	0.695	0.468	0.272	16.00	1.70	陶質土器
396	1334	MM6	包含層	甕	0.514	0.419	3.74	0.454	0.563	0.368	66.00	38.00	不明→陶質土器

斎富遺跡出土土器の胎土分析

ー土師質の須恵器を中心にー

岡山理科大学自然科学研究所　白石　純

1．はじめに

この分析では、蛍光X線分析法により斎富遺跡出土の5世紀後半から6世紀代の土師質の須恵器[1)]（形態・技法的には須恵器の要素を持つが焼成が土師質の土器）・韓式系土器[2)]（陶質系土器……朝鮮半島あるいは国内で生産されたか区別できないもの。軟質系土器……国内で生産されたと考えられるが朝鮮半島の影響を強く受けているもの。）の胎土分析をおこない以下の点について検討した。

（1）斎富遺跡出土の土師質の須恵器・土師器および韓式系土器の間で胎土に差異がみられるかどうか。

（2）山陽町別所窯跡（6世紀中頃）と岡山県南部地域[3)]の6世紀後半から8世紀の須恵器窯跡および和泉陶邑古窯群との比較。

2．分析方法と結果

分析方法は、波長分散型蛍光X線分析装置を用い、測定方法・条件・資料の作製などは、現在までおこなっている方法である[4)]。

資料提供147点のうち資料の問題から、実際の測定資料は第1表から第3表までの136点の土器である。内訳は、土師質の須恵器121点・韓式系土器11点（土師質の陶質系土器1点、陶質系土器1点、軟質系土器9点）・須恵器3点・土師器1点で、器種は杯・高杯・椀・壺・甕・器台などである。

分析の結果、斎富遺跡内での土師質の須恵器、韓式系土器、須恵器、土師器の各土器の比較では、第1図K_2O－CaO、第2図Sr－Rbの散布図から、土師質の須恵器が大きく3つのグループに別れた。Ⅰのグループは CaO（カルシウム）量が1.5％以上で、Sr（ストロンチウム）量が350ppm以上の土器群で、土師質の須恵器の資料番号24（掲載番号1404、以下同）、27、39、40、41、47（1407）、88、89、92、94、97（1435）、118（1427）、143の13点である。Ⅱのグループは CaO（カルシウム）量が0.5％以下、Sr（ストロンチウム）量が100ppm以下の土器群で、土師質の須恵器12,31,65,81,96,126,134,137,142、陶質系土器108（1304）、須恵器13の11点である。そして、これ以外の土師質の須恵器、軟質系土器9点、土師器がⅢのグループとなった。

このように、CaO・Srの量から大きく三つのグループに区別したが、これらのグループに別所・岡山県南部・和泉陶邑の各窯跡の領域を重ねると、第1・2図の散布地から、Ⅰのグループはどの領域にも入らなかった。Ⅱのグループは、岡山県南部の窯跡群と陶邑窯跡群が重複する領域にプロットされた。また、Ⅲのグループは岡山県南部および別所窯跡の領域にほぼプロットされた。

3．まとめ

斎富遺跡の土師質の須恵器、韓式系土器、須恵器、土師器の胎土分析からわかったことは、

（1）斎富遺跡内から出土した土器群は、CaO・Srの量により、大きく三つのグループに別れる様相を呈した。この三つのグループに別れたことの意味づけであるが、各グループ内で、出土地点・器種などでまとまりはみられなかった。しかし、胎土の観察および形態・技法的な面で検討しておらず、今後おこなう必要がある。

（2）Ⅰのグループは、どの領域にも入らず、生産地がはっきりしなかった。Ⅱのグループは、岡山県南部と陶邑が重複する領域に入り、このグループも識別できなかった。なお、このⅡのグープには陶質系土器(108)と須恵器(13)が含まれている。また、Ⅲのグループは岡山県南部と別所窯跡が重複する領域を中心としてプロットしており、このグループは、遺跡周辺の在地の粘土で生産されたことがほぼ推定される。軟質系土器についてもこのプロットに入ることから遺跡周辺で生産されたと考えられる。

以上のように、この分析では土師質の須恵器が三つのグループに別れることがわかったが、これらの土器の胎土がどの地域の胎土に近いか検討した結果では、前述したような結果となり、Ⅰのようなグループは現在の蓄積資料では検討できず、今後の課題となった。

この分析をおこなうにあたり、岡山県古代吉備文化財センターの職員の方々にはお世話になった。記して感謝いたします。

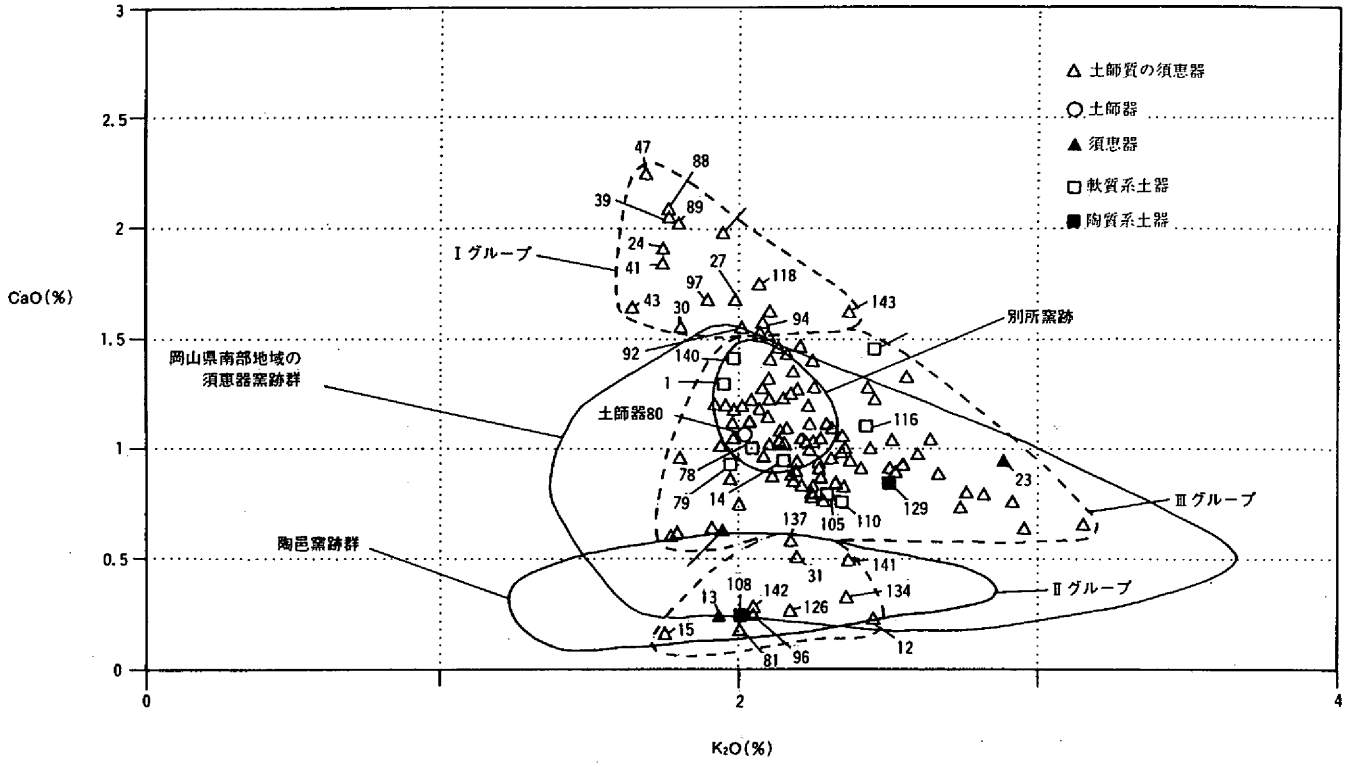
註

1）この土器の用語の解釈は、資料提供者による。

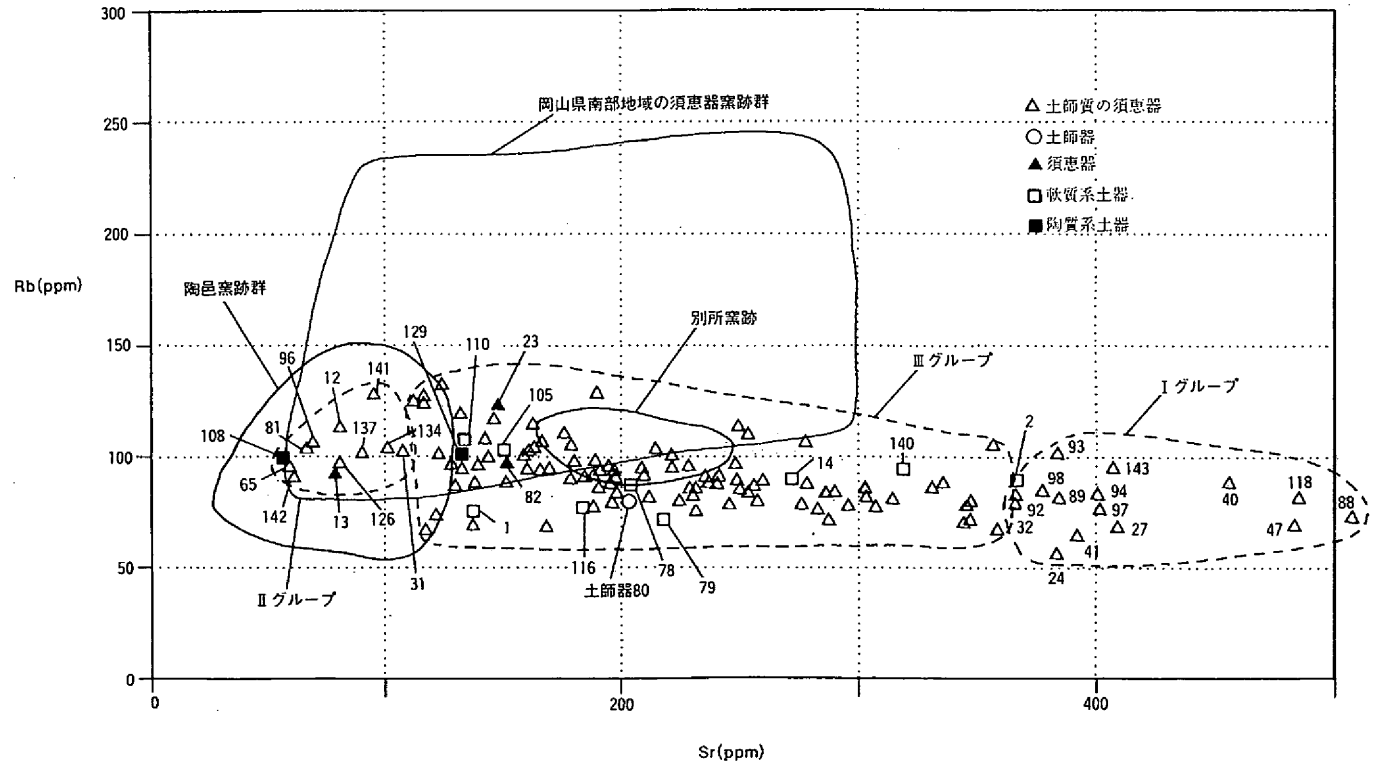
2）註1）

3）白石　純「菅生小学校裏山遺跡出土遺物の胎土分析」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告81』1993. 3.

4）白石　純「蛍光X線による須恵器の胎土分析－備前・備中・美作の須恵器窯跡資料について－」『鎌木義昌先生古稀記念論集　考古学と関連科学』1988. 12.



第１図　K_2O-CaO散布図（各土器別による）



第２図　Sr-Rb散布図各土器別による比較および他地域の須恵器窯跡群との比較

第1表　斉富遺跡出土土器胎土分析資料一覧表（%）ただしSr・Rbはppm

資料番号	掲載番号	調査区名	掲載遺構名	種別	器種	K_2O	Fe_2O_3	SiO_2	TiO	Al_2O_3	CaO	MgO	Sr	Rb	分類
1	315	KB1	周溝遺構1	軟質系出土	甕	1.96	11.84	61.24	0.87	22.24	1.29	1.13	138	75	Ⅲ
2	1113	KM2	たわみ3	軟質系出土	甕	2.45	6.09	67.54	0.75	16.46	1.46	1.54	367	89	Ⅲ
9	654	KM5	土壙40	須恵器(土師質B)	器台	2.15	6.18	70.57	0.85	19.80	1.08	1.92	185	91	Ⅲ
10	—	MBOX3	竪穴住居60	須恵器(土師質B)	小形壺	2.28	6.64	69.80	0.86	20.15	1.04	1.72	166	94	Ⅲ
11	—	MBOX3	竪穴住居60	須恵器(土師質B)	高杯	2.46	6.39	62.41	0.75	21.76	1.23	0.87	257	106	Ⅲ
12	—	MBOX3	土壙44	須恵器(土師質c)	杯身	2.47	4.16	75.28	0.72	17.94	0.24	0.91	81	146	Ⅱ
13	—	MM2	—	須恵器	杯身	1.94	4.62	75.64	0.70	18.05	0.24	0.78	79	93	Ⅱ
14	212	MM2	竪穴住居62	軟質系土器	甕	2.17	4.86	69.66	1.06	16.85	0.94	1.14	272	90	Ⅲ
19	—	MM4	竪穴住居71	須恵器(土師質b)	杯身	2.18	5.56	71.79	0.83	19.48	0.89	1.38	162	105	Ⅲ
20	—	MM4	竪穴住居39	須恵器(土師質b)	椀	2.93	5.52	69.47	0.92	21.62	0.76	2.18	124	133	Ⅲ
21	—	MM4	炉7	須恵器(土師質b)	杯身	2.12	5.86	72.09	0.84	18.09	0.88	1.25	176	111	Ⅲ
23	—	MM6	—	須恵器	杯蓋	2.90	4.77	70.11	0.84	19.56	0.94	2.17	148	121	Ⅲ
24	1404	KB1	包含層	須恵器(土師質c)	杯蓋	1.76	8.21	62.04	0.73	18.78	0.91	1.47	384	57	Ⅰ
25	1400	KB1	包含層	須恵器(土師質c)	杯蓋	2.24	8.24	62.38	0.73	16.35	1.20	1.01	282	77	Ⅲ
26	1416	KB1	包含層	須恵器(土師質c)	杯身	1.96	8.46	61.92	0.78	16.66	1.30	1.07	345	73	Ⅲ
27	1411	KB1	包含層	須恵器(土師質c)	杯身	1.99	8.29	62.08	0.68	17.18	1.69	1.27	410	69	Ⅰ
28	1413	KB1	包含層	須恵器(土師質c)	杯身	2.08	8.31	63.00	0.79	18.57	1.19	1.14	303	83	Ⅲ
29	1417	KB1	包含層	須恵器(土師質c)	高杯	2.16	6.62	66.23	0.81	18.36	1.23	1.36	229	86	Ⅲ
30	1422	KB1	包含層	須恵器(土師質c)	高杯	1.81	7.80	65.26	0.78	18.20	1.56	1.22	345	71	Ⅲ
31	1430	KB1	包含層	須恵器(土師質c)	杯蓋	2.20	5.20	69.32	0.85	19.73	0.51	1.55	107	102	Ⅱ
32	—	KB1	—	須恵器(土師質)		1.98	7.09	61.29	0.92	18.86	1.06	1.12	366	80	Ⅲ
33	1423	KB1	包含層	須恵器(土師質a)	高杯	2.10	8.12	63.94	0.87	17.64	1.02	1.19	231	86	Ⅲ
34	—	KB1	—	須恵器(土師質)		1.92	6.12	66.79	0.83	19.38	0.63	1.72	152	89	Ⅲ
35	—	KB1	—	須恵器(土師質c)	杯身	1.96	8.69	61.46	0.77	16.83	1.20	1.05	287	73	Ⅲ
36	—	KB1	—	須恵器(土師質)	杯蓋	2.08	4.83	65.51	0.81	17.62	1.29	1.36	347	81	Ⅲ
37	—	KM1	—	須恵器(土師質c)	甕	2.51	6.28	68.22	0.80	19.12	0.86	1.73	144	100	Ⅲ
38	—	KM1	—	須恵器(土師質c)	杯身	2.83	5.19	68.96	0.91	19.39	0.80	2.26	132	120	Ⅲ
39	—	KM1	—	須恵器(土師質c)	高杯	1.78	6.36	66.69	0.89	18.25	2.05	1.87	359	68	Ⅰ
40	—	KM1	—	須恵器(土師質c)	高杯	1.95	6.66	64.45	0.70	19.76	1.98	1.84	457	89	Ⅰ
41	—	KM1	—	須恵器(土師質b)	甕(胴)	1.75	5.68	65.69	0.91	18.46	1.84	0.70	393	65	Ⅰ
42	—	KM1	—	須恵器(土師質c)	甕	2.31	4.52	70.13	0.76	16.92	0.96	1.11	239	89	Ⅲ
43	—	KM1	—	須恵器(土師質b)	甕(胴)	1.64	6.26	69.74	0.69	17.94	1.65	1.42	308	78	Ⅲ
44	—	KM1	—	須恵器(土師質)	高杯	2.44	6.39	62.07	0.60	17.67	1.29	0.67	277	107	Ⅲ
45	—	KM1	—	須恵器(土師質c)	高杯	2.51	5.87	65.60	0.71	20.90	0.91	0.92	163	115	Ⅲ
46	—	KM1	—	須恵器(土師質b)	甕(胴)	1.94	7.99	63.69	1.02	19.60	1.03	2.02	245	79	Ⅲ
47	1407	KM2	包含層	須恵器(土師質c)	杯身	1.69	6.41	61.20	0.69	19.95	2.25	1.66	484	70	Ⅰ
48	—	KM2	—	須恵器(土師質)	杯蓋	2.35	6.43	68.00	0.87	19.74	0.83	1.74	130	87	Ⅲ
49	—	KM2	—	須恵器(土師質)	甕	1.97	6.49	63.89	0.91	22.10	0.86	1.52	169	69	Ⅲ
50	1405	KM2	包含層	須恵器(土師質)	蓋	2.52	5.98	66.16	0.79	16.92	1.04	1.38	257	81	Ⅲ
51	—	KM2	—	須恵器(土師質c)	高杯	2.25	5.96	69.30	0.83	16.92	1.02	1.34	248	90	Ⅲ
52	—	KM2	—	須恵器(土師質a)	高杯	2.67	6.10	66.87	0.91	18.51	0.89	2.05	161	161	Ⅲ
53	—	KM3	—	須恵器(土師質a)	壺？	2.14	5.57	69.55	0.86	18.61	1.02	1.28	180	98	Ⅲ
54	—	KM3	—	須恵器(土師質)		2.28	6.69	66.46	0.87	19.14	0.89	1.01	198	91	Ⅲ
55	—	KM3	—	須恵器(土師質c)	杯身	2.75	5.28	67.34	0.90	20.15	0.74	1.99	117	128	Ⅲ
56	1420	KM4	包含層	須恵器(土師質)	高杯	2.20	6.47	67.08	0.84	19.39	0.94	1.30	179	91	Ⅲ
57	—	KM4	—	須恵器(土師質c)	高杯	2.27	6.46	66.09	0.79	18.52	1.30	1.77	253	84	Ⅲ
58	—	KM4	—	須恵器(土師質C)	杯	2.24	6.39	67.10	0.81	18.36	1.11	1.55	205	89	Ⅲ

第２表　斉富遺跡出土土器胎土分析資料一覧表（％）ただしSr・Rbはppm

資料番号	掲載番号	調査区名	掲載遺構名	種別	器種	K_2O	Fe_2O_3	SiO_2	TiO	Al_2O_3	CaO	MgO	Sr	Rb	分類
59	－	ＫＭ4	－	須恵器(土師質a)	高杯	2.09	6.61	65.99	0.83	18.26	0.97	1.28	236	91	Ⅲ
60	－	ＫＭ4	－	須恵器(土師質a)	高杯	2.18	6.52	67.90	0.86	16.77	0.89	1.15	187	91	Ⅲ
61	－	ＫＭ4	－	須恵器(土師質c)	高杯	2.24	6.06	66.72	0.79	15.90	0.99	1.18	196	80	Ⅲ
62	1424	ＫＭ4	包含層	須恵器(土師質a)	高杯	2.12	6.03	67.87	0.78	16.19	1.23	1.30	336	90	Ⅲ
63	－	ＫＭ4	－	須恵器(土師質a)	壺	2.25	6.07	69.72	0.86	17.64	0.80	1.38	132	95	Ⅲ
64	－	ＫＭ4	－	須恵器(土師質C)	高杯	2.16	6.66	65.04	0.83	17.20	1.01	1.27	221	96	Ⅲ
65	－	ＫＭ4	－	須恵器(土師質C)	高杯	1.76	4.31	63.23	0.76	19.95	0.16	0.56	59	96	Ⅱ
66	－	ＫＭ4	－	須恵器(土師質c)	杯	1.92	6.45	63.43	0.81	17.90	1.21	0.92	346	80	Ⅲ
67	－	ＫＭ4	－	須恵器(土師質c)	杯蓋	2.65	5.91	71.08	0.78	17.26	1.05	0.82	215	103	Ⅲ
68	－	ＫＭ4	－	須恵器(土師質c)	杯身	2.01	6.63	64.03	0.78	17.55	1.18	1.28	286	83	Ⅲ
69	－	ＫＭ4	－	須恵器(土師質a)	高杯	1.99	6.79	67.93	0.81	19.02	1.06	1.78	196	87	Ⅲ
70	－	ＫＭ4	－	須恵器(土師質c)	杯身	2.25	5.92	67.82	0.84	19.28	0.78	1.65	139	96	Ⅲ
71	－	ＫＭ4	－	須恵器(土師質c)	杯	1.99	7.98	61.61	0.80	17.14	1.11	0.98	232	76	Ⅲ
72	－	ＫＭ4	－	須恵器(土師質c)	杯身	2.08	6.64	67.33	0.84	18.79	1.17	1.55	212	82	Ⅲ
73	－	ＫＭ4	－	須恵器(土師質a)	高杯	2.21	6.08	70.84	0.82	17.62	0.83	1.57	139	89	Ⅲ
74	－	ＫＭ4	－	須恵器(土師質c)	高杯	2.11	6.85	65.16	0.79	17.75	1.15	1.18	314	81	Ⅲ
75	－	ＫＭ4	－	須恵器(土師質c)	杯	2.00	6.86	65.38	0.80	18.97	1.18	1.73	225	81	Ⅲ
76	－	ＫＭ4	－	須恵器(土師質a)	杯身	2.05	6.16	67.63	0.92	18.90	1.22	1.75	230	83	Ⅲ
77	－	ＫＭ4	－	須恵器(土師質a)	杯	2.21	6.37	68.04	0.77	18.96	1.46	1.16	275	79	Ⅲ
78	1231	ＫＭ4	包含層	軟質系土器	平底杯	2.05	6.31	65.16	0.81	16.65	1.00	1.02	203	86	Ⅲ
79	1238	ＫＭ4		軟質系土器	把手付甕	1.98	8.60	65.65	0.97	15.81	0.96	1.28	284	72	Ⅲ
80	1224	ＫＭ4	包含層	土師器	高杯	2.01	6.78	68.03	0.83	19.43	1.06	1.97	202	81	Ⅲ
81	－	ＫＭ5	－	須恵器(土師質b)	杯身	2.01	3.32	73.76	0.82	18.10	0.19	0.70	67	104	Ⅰ
82	－	ＫＭ5	－	須恵器	甕	1.94	4.31	73.77	0.78	17.83	0.62	0.82	152	99	Ⅲ
83	－	ＫＭ5	－	須恵器(土師質b)	器台	2.37	5.69	67.78	0.80	18.65	0.79	1.57	123	101	Ⅲ
84	－	ＫＭ5	－	須恵器(土師質c)	杯身	2.13	5.37	68.38	0.73	19.68	1.46	1.60	289	85	Ⅲ
85	－	ＫＭ5	－	須恵器(土師質c)	杯身	2.07	5.25	68.36	0.73	19.39	1.55	1.68	303	86	Ⅲ
86	1426	ＫＭ5	包含層	須恵器(土師質c)	高杯	2.30	5.66	70.00	0.77	19.21	1.11	1.74	197	93	Ⅲ
87	－	ＫＭ5	－	須恵器(土師質c)	杯身	2.09	5.20	66.64	0.73	19.24	1.57	1.65	332	87	Ⅲ
88	－	ＫＭ5	－	須恵器(土師質c)	杯身	1.77	5.20	61.61	0.70	19.32	2.08	1.65	511	72	Ⅰ
89	－	ＫＭ5	－	須恵器(土師質a)	杯身	1.80	6.15	63.40	0.72	21.39	2.02	1.62	385	82	Ⅰ
90	1428	ＫＭ5	包含層	須恵器(土師質c)	高杯	1.90	6.43	65.86	0.77	20.63	1.68	1.42	296	78	Ⅲ
91	－	ＫＭ5	－	須恵器(土師質b)	甕(胴)	2.24	5.46	69.21	0.86	19.65	0.80	1.51	153	105	Ⅲ
92	－	ＫＭ5	－	須恵器(土師質c)	杯身	2.01	4.83	65.77	0.75	18.13	1.55	1.36	367	84	Ⅰ
93	－	ＫＭ5	－	須恵器(土師質c)	高杯	2.19	4.12	62.86	0.85	19.46	1.35	1.35	384	103	Ⅲ
94	－	ＫＭ5	－	須恵器(土師質c)	高杯(?)	2.08	5.26	66.45	0.74	17.67	1.53	0.96	401	84	Ⅰ
95	－	ＫＭ5	－	須恵器(土師質b)	高杯	2.11	5.47	67.87	0.76	18.51	1.40	1.60	278	88	Ⅲ
96	－	ＫＭ5	－	須恵器(土師質b)	杯蓋	2.05	4.40	71.19	0.81	19.60	0.26	0.98	70	107	Ⅱ
97	1425	ＫＭ5	包含層	須恵器(土師質c)	高杯	2.11	5.03	64.97	0.68	18.48	1.62	1.56	402	77	Ⅰ
98	－	ＫＭ5	－	須恵器(土師質c)	高杯	2.20	5.01	64.06	0.79	16.47	1.28	1.24	378	76	Ⅲ
99	－	ＫＭ5	－	須恵器(土師質)	甕	2.31	5.01	62.04	0.73	19.31	1.09	1.12	253	111	Ⅲ
100	－	ＫＭ5	－	須恵器(土師質c)	甕	2.28	4.32	67.94	0.97	19.01	0.91	1.34	249	114	Ⅲ
101	－	ＫＭ5	－	須恵器(土師質a)	高杯	2.05	6.58	67.77	0.79	19.14	1.12	1.25	198	85	Ⅲ
102	－	ＫＭ5	－	須恵器(土師質a)	壺？	1.94	6.99	66.42	0.88	19.78	1.02	1.65	188	78	Ⅲ
103	－	ＫＭ5	－	須恵器(土師質a)		1.77	8.70	70.21	0.88	15.28	0.60	1.21	117	67	Ⅲ
104	－	ＫＭ5	－	須恵器(土師質a)		1.78	7.44	71.38	0.87	14.96	0.60	1.37	122	74	Ⅲ
105	－	ＫＭ5	－	軟質土器		2.30	6.07	67.45	0.84	19.46	0.79	1.59	151	101	Ⅲ

第3表　斉富遺跡出土土器胎土分析資料一覧表（%）ただしSr・Rbはppm

資料番号	掲載番号	調査区名	掲載遺構名	種別	器種	K_2O	Fe_2O_3	SiO_2	TiO	Al_2O_3	CaO	MgO	Sr	Rb	分類
106	—	KM5	—	須恵器(土師質)	甕(胴部)	2.19	6.16	68.51	0.85	18.04	0.85	1.43	167	95	Ⅲ
107		KM5	—	須恵器(土師質a)	杯蓋	2.68	6.19	67.27	0.93	18.82	0.89	2.30	163	104	Ⅲ
108	1304	KM5	包含層	陶質系土器	高杯	2.01	4.95	71.85	0.72	19.81	0.25	0.80	57	97	Ⅱ
109	—	KM5	—	須恵器(土師質C)	杯蓋	2.57	7.15	67.16	0.83	18.29	1.33	1.03	194	96	Ⅲ
110	—	KM5	—	陶質系土器	甕	2.36	6.34	66.87	0.87	20.25	0.76	1.65	134	106	Ⅲ
111	—	KM5	—	須恵器(土師質c)	杯身	2.17	5.93	66.99	0.75	18.79	1.43	1.45	290	84	Ⅲ
112	1445	KM6	包含層	須恵器(土師質b)	器台	2.22	5.49	65.40	0.79	17.28	1.02	1.29	259	89	Ⅲ
113	1446	KS2	包含層	須恵器(土師質)	鉢	2.33	6.19	67.05	0.82	19.70	0.84	1.61	158	100	Ⅲ
114	1415	MBOX2	包含層	須恵器(土師質)	杯身	1.80	5.64	72.21	0.78	17.64	0.96	1.09	188	91	Ⅲ
115	1440	MBOX3	包含層	須恵器(土師質)	甕	2.01	5.10	70.31	0.78	16.30	0.75	1.24	161	94	Ⅲ
116	1237	MBOX3	包含層	陶質系土器	甕	2.43	6.25	64.90	0.90	20.38	1.10	1.65	184	76	Ⅲ
117	—	MBOX3	—	須恵器(土師質c)	高杯	2.19	6.14	69.97	0.76	18.59	1.26	1.74	210	92	Ⅲ
118	1427	MBOX3	包含層	須恵器(土師質c)	高杯	2.07	5.91	64.70	0.70	17.97	1.75	1.42	486	82	Ⅰ
119	1439	MBOX3	包含層	須恵器(土師質)	甕	2.22	6.61	66.20	0.99	18.67	1.04	1.95	256	88	Ⅲ
120	1443	MBOX3	包含層	須恵器(土師質b)	器台	2.16	6.94	69.25	0.80	18.80	1.10	1.66	190	87	Ⅲ
121	1421	MBOX3	包含層	須恵器(土師質c)	高杯	2.61	4.04	68.81	0.70	22.14	0.98	1.09	190	129	Ⅲ
122	1410	MM1	包含層	須恵器(土師質c)	杯身	1.37	7.57	70.93	0.96	17.43	0.69	1.01	137	70	Ⅲ
123	—	MM1	—	須恵器(土師質c)	杯身	2.78	4.59	70.51	0.88	19.49	0.80	2.35	147	118	Ⅲ
124	—	MM2	—	須恵器(土師質a)	はそう	2.35	6.85	68.43	1.09	10.13	0.98	1.93	169	94	Ⅲ
125	—	MM2	—	須恵器(土師質c)	器台	2.19	7.20	66.82	0.87	19.86	0.89	1.69	166	107	Ⅲ
126	—	MM2	—	須恵器(土師質b)	(胴)	2.18	4.81	73.37	0.79	20.44	0.27	0.88	81	98	Ⅱ
127	—	MM2	—	須恵器(土師質)		2.56	6.29	70.19	0.81	18.95	0.93	1.02	191	95	Ⅲ
128	—	MM2	—	須恵器(土師質C)	?	2.44	6.18	68.78	0.80	17.89	1.01	1.14	209	94	Ⅲ
129	1436	MM2		軟質系土器(土師質b)	台付壺	2.24	7.33	66.33	0.86	20.49	0.81	1.70	132	103	Ⅲ
130	—	MM2	—	須恵器(土師質C)	杯身?	2.53	6.23	70.68	0.80	19.13	0.89	1.59	159	102	Ⅲ
131	—	MM2	—	須恵器(土師質C)	高杯	2.35	6.23	69.41	0.83	18.94	1.06	1.79	248	97	Ⅲ
132	—	MM2	—	須恵器(土師質b)	甕	3.17	4.96	69.42	0.85	21.69	0.66	2.05	116	125	Ⅲ
133	1398	MM2	包含層	須恵器(土師質b)	杯蓋	2.38	6.04	70.07	0.78	18.64	0.95	1.60	189	99	Ⅲ
134	—	MM2	—	須恵器(土師質b)	甕	2.37	4.65	71.89	0.80	20.05	0.33	1.15	101	104	Ⅲ
135	—	MM2	—	須恵器(土師質b)	(胴)	2.53	6.01	69.80	0.79	19.28	0.86	1.43	143	108	Ⅲ
136	—	MM2	—	須恵器(土師質c)	?	2.41	6.35	69.72	0.84	19.18	0.92	1.19	178	106	Ⅲ
137	—	MM2	—	須恵器(土師質B)	杯身	2.18	5.56	72.85	0.96	18.99	0.59	1.24	91	102	Ⅱ
138	—	MM2	—	須恵器(土師質)	杯身	2.97	5.25	71.31	0.84	19.34	0.64	1.85	113	125	Ⅲ
139	—	MM2	—	須恵器(土師質c)		2.36	6.49	67.51	0.84	18.47	1.00	1.62	228	96	Ⅲ
140	—	MM2	—	軟質系土器	(胴)	1.98	4.48	73.33	0.82	15.38	1.42	0.96	319	94	Ⅲ
141	1448	MM4	包含層	須恵器(土師質b)	杯	2.38	2.63	78.40	0.52	17.14	0.50	0.57	96	129	Ⅲ
142	—	MM5	—	須恵器(土師質c)	杯身	2.05	5.17	75.38	0.78	18.24	0.28	0.80	61	91	Ⅱ
143	—	MM5	—	須恵器(土師質c)	高杯	2.39	5.74	64.75	0.81	18.22	1.62	1.16	408	96	Ⅰ
144	—	MM5	—	須恵器(土師質c)	高杯	2.25	6.17	70.66	0.75	18.77	1.41	1.65	250	86	Ⅲ
145	1449	MM6	包含層	須恵器(土師質b)	小形壺	2.10	6.41	65.16	0.75	18.71	1.32	1.47	241	91	Ⅲ
146	—	MS3	—	須恵器(土師質b)	杯	2.28	6.34	68.59	0.84	19.63	0.77	1.57	129	97	Ⅲ
147	—	MS3	—	須恵器(土師質c)	高杯	2.27	6.41	68.71	0.85	18.66	0.95	1.60	221	101	Ⅲ

斎富遺跡と周辺古墳出土製鉄関連遺物の金属学的調査

大　澤　正　己

概　要

斎富遺跡の包含層と勘定口２号墳墳丘下並びに斎富古墳群２号墳第４主体部より出土した製鉄関連遺物(鉄滓、炉壁、鉄鉱石、鉄塊系遺物、羽口、取鍋)を調査して次の点が明らかになった。

〈1〉　出土鉄滓は、磁鉄鉱石と塩基性砂鉄を始発原料とした製錬滓と、荒鉄(製錬生成鉄で、表皮スラグや捲き込みスラグ、更には炉材粘土などの不純物を含む原料鉄：鉄塊系遺物)の成分調整で排出された精錬鍛冶滓が存在する。

〈2〉　鍛冶原料となる鉄塊系遺物は亜共析鋼(C：0.77％以下)から鋳鉄なりかけの過共析鋼(C：0.77％以上)までが認められる。また、鉄塊系遺物は、水中冷却を行って焼入れ組織と同じマルテンサイト(Martensite：麻の葉模様の針状)組織を有するものもあった。これは製錬後の作業工程で小割り選別を配慮しての冷却であって、水鋼法の採用と考えられる。

〈3〉　製鉄炉の炉壁粘土は鉄分(Fe_2O_3)が4.17％と若干多めで軟化傾向にあり、更に酸化アルミニウム(Al_2O_3)が11.0％と不足して耐火度は、1370℃と低温型であった。なお、羽口は先端溶融鉱物相に微小マグネタイト(Magnetite：Fe_3O_4)の晶出があって、精錬鍛冶用羽口と推定された。

〈4〉　斎富遺跡内における鉄生産の開始時期は、包含層出土遺物が主体であって推定年代は捉え難いが、大まかにみると、古墳時代前期の竪穴住居から小割り鉄塊系遺物(SAIT－24)が出土するので、この時期には精錬鍛冶操業が想定されて、さらに、古墳時代後半には鉱石製錬(SAIT－25)が行われていた可能性をもつ。

〈5〉　また、古墳時代の製鉄は、斎富古墳群２号墳第４主体部(６世紀後葉)出土の鉱石製錬滓や鉄塊系遺物があり、続く７世紀前半には勘定口２号墳の墳丘下からも鉱石製錬滓と鉄塊系遺物が検出される事により実証される。

〈6〉　斎富遺跡の中・近世には、銅の鋳造に関連した溶解作業が実施された痕跡が窺われて、これに付随する青銅品(Cu＋Sn)の製作が出土取鍋内の溶着物から傍証された。

１．いきさつ

斎富遺跡と斎富古墳群は、岡山県赤磐郡山陽町斎富に所在する。斎富遺跡は縄文時代晩期から中・近世までの複合遺跡であって、包含層から鉄滓が約30箱、鉄鉱石10数点が出土した。推定年代については確定はできないが古墳時代後半の可能性をもつといわれている。

斎富古墳群２号墳第４主体部(横穴式石室羨道部)からは鉄滓と鉄塊系遺物が数点出土した。これは６世紀中頃以降に比定されて供献鉄滓と考えられる。また、勘定口２号墳は赤磐郡瀬戸町に所在して、遺物は古墳墳丘下の７世紀前半代に属する製鉄排滓場に想定できる遺構から６箱が出土した。斎富遺跡は、明確な製鉄・鍛冶遺構の検出はなかったが、製鉄関連遺物から当時の鉄生産の実態を把握すべく目的から金属学的調査を行うこととなった。

筆者は３遺跡出土の製鉄関連遺物を、1993年11月24日に山陽町所在の岡山県古代吉備文化財センター山陽町事務所に赴き、出土遺物の分類を行うと共に供試材を選別して今度の調査報告となった。

２．調査方法

２－１．供試材

Table．１に示す。斎富遺跡出土品26点、勘定口２号墳出土品２点、斎富２号墳出土品２点の合計30点の調査となる。

２－２．調査項目

①　肉眼観察

②　マクロ組成

顕微鏡埋込み試料の全体を10倍の倍率で、投影機を使って撮影している。

③　顕微鏡組織

鉄滓と鉄塊系遺物は、水道水で充分に洗浄乾燥後、中核部をベークライト樹脂に埋込み、エメリー研摩紙の#150、#240、#320、#600、#1000と順を追って研摩し、最後は被研面をダイヤモンドの３μと１μで仕上げ、光学顕微鏡観察を行っている。

④　ビッカース断面硬度

鉄滓の鉱物組成と金属鉄の組織同定を目的としてビッカース断面硬度計(Vickers Hardness Tester)を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研摩した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡試料を併用した。

⑤　ＣＭＡ (Computer Aided X-ray Micro Analyzer) 調査

EPMA(Electron Probe Micro Analyzer)にコンピューターを内蔵させた新鋭分析機器である。旧式装置は、別名Ｘ線マイクロアナライザーとも呼ばれる。分析の原理は、真空中で試料面(顕微鏡試料併用)に電子線を照射し、発生する特性Ｘ線を分光後に画像化し、定性的な結果を得る。更に標準試料とＸ線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

⑥　化学組成

鉄滓と鉄塊系遺物、鉄鉱石などは次の方法で分析している。

全鉄分(Total Fe)、金属鉄(Metallic Fe)、酸化第１鉄(FeO)：容量法。　炭素(C)、硫黄(S)：燃焼容量法、燃焼赤外線吸収法。

二酸化珪素(SiO_2)、酸化アルミニウム(Al_2O_3)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化カリウム(K_2O)、酸化ナトリウム(Na_2O)、酸化マンガン(MnO)、二酸化チタン(TiO_2)、酸化クロム(Cr_2O_3)、五酸化燐(P_2O_5)、バナジウム(V)、銅(Cu)：ICP(Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer)法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

３．調査結果と考察

３－１．斎富遺跡出土品

（１）　SAIT－１：鉄滓（鉱石製錬滓）

①　肉眼観察：表裏共に淡緑色粘土状素地をもつ炉内残留滓である。木炭の噛み込みと小気泡を散在

させる。また、茶褐色の粘土を付着する。

② 顕微鏡組織：Photo. 1 の①～③に示す。鉱物組成は、淡灰色盤状結晶のファイヤライト(Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$)と微小白色粒状のヴュスタイト(Wüstite：FeO)、基地の暗黒色ガラス質スラグなどから構成される。鉱石製錬滓の晶癖である。

③ ビッカース断面硬度：Photo. 1 の③に淡灰色盤状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は701Hvであった。ファイヤライトの文献硬度値は600～700Hvなので[1]、当結晶は顕微鏡観察でみた鉱物相に同定される。

④ 化学組成：Table. 2 に示す。全鉄分(Total Fe)は40.46％に対して金属鉄(Metallic Fe)が0.06％、酸化第１鉄(FeO)49.28％、酸化第２鉄(Fe_2O_3)2.99％の割合である。ガラス質成分($SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$)は45.70％あって、このうちに鉄と滓の分離を促進する塩基性成分(CaO＋MgO)は多くて10.02％を含む。他の随伴微量元素は低め傾向で、二酸化チタン(TiO_2)0.16％、バナジウム(V)0.01％、酸化マンガン(MnO)0.69％、酸化クロム(Cr_2O_3)0.01％、硫黄(S)0.02％、五酸化燐(P_2O_5)0.17％などであった。銅(Cu)は0.022％と砂鉄系製錬滓よりは高めであった。

（２） SAIT－２：鉄滓（鉱石製錬滓）

① 肉眼観察：表面の大半は小豆色から灰黒色を呈する滑らか肌の流動性をもち、これの側面側の一部に茶褐色鉄錆が覆う。また、球状突起部は淡緑色素地を露出して前述した製錬滓と同質と判る。裏面は多くの木炭痕が深く刻まれる。炉内流動滓である。

② 顕微鏡組織：Photo. 1 の④～⑥に示す。鉱物組成はファイヤライトと、やや量の多いヴュスタイト、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。これも鉱石製錬滓の晶癖である。

③ ビッカース断面硬度：Photo. 1 の⑥に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は473Hvであった。ヴュスタイトの文献硬度値は450～500Hvであって[2]、これに同定される。

④ 化学組成：Table. 2 に示す。前述鉄滓SAIT－１よりも鉄分が多く、逆にガラス質成分は低減するが成分傾向は近似して鉱石製錬滓系を表わす。全鉄分(Total Fe)は46.91％、ガラス質成分($SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$)が33.97％、このうちに塩基性成分(CaO＋MgO)を7.37％を含む。二酸化チタン(TiO_2)0.23％、バナジウム(V)0.01％、酸化マンガン(MnO)0.29％、銅(Cu)は高めで0.076％であった。

（３） SAIT－３：炉壁（製鉄炉壁）

① 肉眼観察：内面は粘土が溶融し、黒色ガラス化し、滑らか肌となっている。幅４cmの大型木炭痕を２ケ所に残すが、ここは発泡して白色を呈していた。裏側胎土は、スサ入りで、補強材の為か0.5～1.0cmに砕いた土器片が混入。胎土の半分は淡赤色、残りは白色で炉内温度差の影響が認められた。ガラス化部分を検鏡、胎土は化学組成と耐火度を調査した。炉壁の厚みは7.3cmを測る。

② 顕微鏡組織：Photo. 1 の⑦に示す。鉱物組成は暗黒色ガラス質スラグ中に微小白色多角形のマグネタイト(Magnetite：Fe_3O_4)を晶出する。箱形製鉄炉の炉壁溶融スラグで一般に観察される鉱物相であった。

③ 化学組成：胎土分析としての結果をTable. 2 に示す。胎土は炉内から熱影響を受けて強熱減量(Ig Loss)として1.32％である。これは粘土中の結晶構造水がかなり飛散したところの分析値となっている。鉄分(Fe_2O_3)は4.17％と若干高めであるが成型性には問題なくて、軟化性は僅かに

劣る程度である。また、塩基性成分(CaO＋MgO)は1.17％で耐火性に問題を起すことはない。ただし、該品の一番の欠陥は、酸化アルミニウム(Al_2O_3)が11.00％と少なくて耐火度が上りきれない事である。二酸化チタン(TiO_2)0.65％、バナジウム(V)0.01％は砂鉄の混入は少ない。

④ 耐火度：Table. 2に示す。酸化アルミニウム(Al_2O_3)の11.00と低値が響いて耐火度は1.370と低い。当炉壁は補強材として土器片の投入があった。製鉄工人は炉材粘土の特性を熟知しての対策であったのだろう。

（4） SAIT－4：鉄滓（砂鉄製錬滓）

① 肉眼観察：本来は流動状炉内滓の肌をもつ鉄滓であるが、大部分は茶褐色鉄錆に覆われる。また、一部側面は表皮が剝れて黒色粉末肌を露出。ここは気泡少なく緻密質である。該品も硬質でなく粘土質系であった。裏面は白色砂粒混在粘土を付着して木炭痕を残す。

② 顕微鏡組織：Photo. 2の①に示す。鉱物組成は淡茶褐色多角形のウルボスピネル(Ulvöspinel：$2FeO \cdot TiO_2$)、白色針状結晶のイルミナイト(Ilmenite：$FeO \cdot TiO_2$)、淡灰色小盤状結晶のファイヤライト、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。製鉄原料は塩基性砂鉄を始発原料とした砂鉄製錬滓である。

③ 化学組成：Table. 2に示す。全鉄分(Total Fe)は25.13％と少なくて金属鉄(Metallic Fe)が0.03％、酸化第1鉄(FeO)17.11％、酸化第2鉄(Fe_2O_3)16.83％の割合である。ガラス質成分($SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O$)は多くて45.37％、このうちの塩基性成分(CaO＋MgO)は鉱石系ほど多くなくて5.43％を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO_2)は高くて18.40％、バナジウム(V)0.22％、更に酸化マンガン(MnO)も多くて1.12％が検出された。また、五酸化燐(P_2O_5)も多くて0.59％、銅(Cu)は低減傾向で0.012％留りであった。砂鉄製錬滓に分類される。

（5） SAIT－5：鉄塊系遺物

① 肉眼観察：茶褐色酸化膜に覆われた鉄塊で木炭痕を残す。なお、裏面の一部には黒色粉末肌を呈する鉄滓を付着する。亀裂が走り金属鉄を含んだ痕跡が認められた。

② 顕微鏡組織：Photo. 2の②に示す。金属鉄は錆化して残存せずにゲーサイト(Goethite：$\alpha－FeO \cdot OH$)と、捲き込みスラグのヴュタイトが認められた。当鉄塊は荒鉄(製錬生成鉄で、表皮スラグや捲き込みスラグ、更には炉材粘土などの不純物を含む原料鉄：鉄塊系遺物)の成分調整を行った精錬鍛冶を施した鉄塊に分類される。

③ ビッカース断面硬度：紙面の都合で硬度測定の圧痕写真は割愛したが、ゲーサイト中のヴュタイトの硬度測定を行った。値は435Hvと文献硬度値の下限を若干下まわっているが、錆化鉄中の硬度値であって誤差を配慮するとヴュタイトに同定できる。

（6） SAIT－6：鉄塊系遺物

① 肉眼観察：表裏共に茶褐色鉄錆に覆われた小型鉄塊(55ｇ)である。亀裂が走り、表面剝離面は黒錆を発する。形状は丸味を帯び高炭材と想定された。

② 顕微鏡組織：Photo, 2の③～⑦に示す。③は錆化鉄で過熱組織(Over heated structure)の痕跡である。組織はフェライト(Ferrite：α鉄または純鉄の金相学上の呼称)とパーライト(Pearlite)で高温に加熱されて針状のフェライトが現れている。④⑤は、金属鉄の小塊の残留であって、組織は水中冷却の形跡を残したマルテンサイト(Martensite)である。一面に細かい針状または麻の葉

状にみえる。当組織は、850℃前後からの急冷で、フェライトと微細なセメンタイトの混合物となり、非常に高い硬さを特色とする。白黒2層分れは炭素量の相違であろう。

③ ビッカース断面硬度：Photo. 2の⑥はマルテンサイト白色組織の硬度圧痕、⑦は黒色組織の圧痕である。硬度値は、前者が773Hv、後者は825Hvであった。両者はマルテンサイト組織に同定されて、水中急冷の熱履歴が確認された。製錬終了時、鉄塊荒割り選別を目的としての水中冷却作業のあった事を示唆する。総社市所在、大ノ奥遺跡出土遺物においても水冷工程の存在を指摘している[3)]。

（7） SAIT－7：鉄塊系遺物

① 肉眼観察：平面が台形状の大型鉄塊(450ｇ)である。表裏共に黄褐色の鉄錆に覆われ、側面の一部は亀裂から表皮が剝離していた。また、該品は黄白色の粘土を付着する。

② マクロ組織：Photo.15の①に示す。該品は炭素量に大きく偏析があって、炭素量の多い個所は過共析鋼(Ｃ：0.77％以上)をもち、拡散層を経ると吸炭のないフェライト組織まで有していた。

③ 顕微鏡組織：Photo. 3の①～⑨に示す。①は表皮スラグに白色粒状のヴュタイトを晶出する。鉱石系製錬滓の履歴を呈する。②は鉄中非金属介在物で淡黄色微小の形態の組成は硫化鉄(FeS)である。③は亜共析鋼(Ｃ：0.77％以下)の個所、④は過共析鋼(Ｃ：0.77％以上)の炭素含有量の異なる個所を示す。⑤は金属鉄の過熱組織である。フェライトは白く、パーライトは黒く現れ、針状のフェライトはウイッドマンステッテン組織を呈していた。該品は製鉄炉内で高温(1,300℃前後)に加熱されてオーステナイト結晶粒が温度とともに成長し、著しく粗大化している。ここで現れたウイッドマンステッテン組織とは、Widmannstattenが隕鉄の研究において発見した組織で、面心立方格子の結晶粒において正八面体の結晶面(１１１)に沿って他の相が析出した組織である。⑥は過共析鋼のパーライトである。パーライトは、フェライトとセメンタイト(Cementite：Fe_3C)が交互に重なり合って構成された層状組織である。このパーライトの占める面積は、炭素含有量の増加にともなって増し、焼ならしの状態では0.4％前後で約半分、0.77％で全部パーライトとなる。パーライトは量が多くなるにしたがい、硬さ、引張強さは増加し、逆に伸び、衝撃値などは減少する。⑥は全面パーライトで炭素量は0.77％以上となっている。

④ ビッカース断面硬度：Photo. 3の⑦はフェライト部、⑧は亜共析鋼の過熱組織、⑨は全面パーライトの過共析鋼域の硬度測定の圧痕である。硬度値は、⑦で124Hv、⑧は140Hv、⑨は337Hvと、炭素量の増加にしたがって硬化してゆくのが判るであろう。

⑤ ＣＭＡ調査：Photo.16のSE(２次電子像)に示した微小淡黄色非金属介在物の高速定性分析結果をTable. 3に示す。検出元素は鉄(Fe)、硫黄(S)、マンガン(Mn)であって介在物組成は硫化鉄(FeS)である。Photo.16の特性Ｘ線像をみると、介在物に白色輝点が集中するのが鉄(Fe)と硫黄(S)である。定量分析値は61％Fe－37％Sとなる。この介在物から砂鉄特有元素のチタン(Ti)、バナジウム(V)、ジルコニウム(Zr)の検出がないのは、始発原料が鉱石系であることの表れであろう。なお、硫化鉄(FeS)の介在物をもつ鉄塊は高炭素系、特に鋳鉄に多い傾向がある。

⑥ 化学組成：Table. 2に示す。全鉄分(Total Fe)は59.82％に対して、金属鉄(Metallic Fe)が2.59％、酸化第１鉄(FeO)16.12％、大部分は錆化鉄の酸化第２鉄(Fe_2O_3)であって63.91％を含む。鉄塊の表皮スラグが僅かに存在するのでガラス質成分として5.78％が含まれ、このうちに塩基性成分(CaO＋MgO)を僅かに1.41％を含有する。脈石成分は全体に少なく、二酸化チタン(TiO_2)が

0.14%、バナジウム(V)0.00%、酸化マンガン(MnO)0.17%などとなる。該品の始発原料は鉱石系なので、銅(Cu)が多く0.074%と確認された。

(8)　SAIT－8：含鉄鉄滓

① 肉眼観察：半分以上は淡褐色粘土に覆われ、残りは茶褐色鉄錆を発した含鉄鉄滓である。表面は亀裂が走り金属鉄を内蔵したことを示す。なお、粘土中には土器片の噛み込みもあった。

② 顕微鏡組織：Photo. 4 の①～③に示す。①は金属鉄粒が極く少量と、大部分は錆化鉄となったゲーサイト、および暗黒色ガラス質スラグである。②は表皮スラグの白色粒状のヴュタイト、③は木炭に鉄が置換した組織を示す。木炭の導列管断面はよく遺存する。なお、この鉄も錆化されたものであった。

(9)　SAIT－9：鉄塊系遺物

① 肉眼観察：表裏共に茶褐色の鉄錆に覆われて丸味をもつ鉄塊(170ｇ)である。一部亀裂を起点として表面剥離があって、ここは黒錆となる。高炭素系鉄塊に想定される。

② マクロ組織：Photo.15の②に示す。全面パーライト析出の過共析鋼部分から、板状結晶(白色)のセメンタイトをもつ白鋳鉄なりかけの組織を混在させた鉄塊で、炭素含有量に偏析をもつ鉄塊である。

③ 顕微鏡組織：Photo. 4 の④～⑧に示す。④は鉄中非金属介在物である。淡黄色微小の異物は硫化鉄(FeS)であり、鋳鉄に多く認められる介在物である。⑤は針状フェライトを析出し、基地にパーライトをもつ過熱組織である。パーライトの量は多くて過共析鋼(Ｃ：0.77%以上)に分類される。⑦は白色板状結晶をもつ初晶セメンタイトを析出した白鋳鉄個所である。高炭素含有の鉄塊であった。

④ ビッカース断面硬度：Photo. 4 の⑦は過共析鋼の個所で、⑧は白色板状セメンタイトの硬度測定の圧痕である。硬度値は、前者は289Hv、後者で713Hvを示した。組織に見合った値であった。

(10)　SAIT－10：鉄塊系遺物

① 肉眼観察：破砕選別を経た可能性をもつ中鉄塊(70ｇ)である。淡茶褐色鉄錆に覆われ、かつ淡灰褐色粘土膜を付着し、礫粒の噛み込みも３ケ所にみられる。亀裂が走り、表皮の一部は剝落して黒褐色の肌を露出する。

② マクロ組織：Photo.15の③に示す。錆化鉄に囲まれた中に金属鉄が僅かに遺存する。パーライトの大量析出した高炭域から低炭域のフェライトまで存在して炭素量の偏析の大きいことを表している。

③ 顕微鏡組織：Photo. 5 の①～⑨に示す。①は鉄中非金属介在物の硫化鉄(FeS)、②は表皮スラグのヴュタイトが錆化鉄に囲まれて存在。③は低炭域のフェライト中の少量のパーライトが結晶粒界に析出する様相。④は同じく低炭域のナイタル腐食(Etching)で現れたフェライト結晶組織、⑤⑥は高炭域での針状フェライトをもつ過熱組織であって製鉄炉内での高温に加熱を受けた熱履歴を残す。

④ ビッカース断面硬度：Photo. 5 の⑦はパーライト少量析出のフェライト部、⑧⑨は過熱組織での全面パーライトでの硬度測定の圧痕を示す。硬度値は⑦は軟質傾向の158Hv、⑧が288Hvと硬化傾向、⑨は更に硬化して374Hvであった。組織に対応した硬度の上昇を示すものであった。

(11)　SAIT－11：鉄塊系遺物

① 肉眼観察：球形に近い淡茶褐色の淡錆を発した中型鉄塊(45ｇ)である。亀裂が走り金属鉄の残留が予測された。

② マクロ組織：点蝕を受けるが金属鉄の遺存度は良好で外縁部に高炭域をもち、内部未吸炭の低炭域となる。

③ 顕微鏡組織：Photo. 6 の①～⑨に示す。①は錆化鉄に取り囲まれた表皮スラグの暗黒色ガラス質スラグとヴｽタイトである。②③はナイタル腐食(Etching)で現れた低炭域のフェライト、④⑤はピクラル腐食での高炭域共析鋼(Ｃ：0.77％)でのパーライト組織である。⑥は鉄中非金属介在物で微小淡黄色の硫化鉄(FeS)を示す。これは高炭側での検出であった。

④ ビッカース断面硬度：Photo. 6 の⑦は低炭域、⑧は中炭域、⑨は高炭域での硬度測定の圧痕を示す。硬度値は、⑦は軟質で109Hv、⑧は192Hv、⑨は硬化して275Hvであった。炭素量に対応した硬度値となっている。

(12)　SAIT－12：含鉄鉄滓

① 肉眼観察：基地は茶褐色鉄錆を呈するが、これに灰黒色粘土を付着する。縦横に亀裂が走り、約1/3の面積は表皮が剝落し、その部分は赤黒色を露出する。重量は530ｇ。

② 顕微鏡組織：Photo. 7 の①～③に示す。①は表皮スラグである。白色粒状のヴｽタイトとファイヤライト、それに錆化した鉄粒のゲーサイトが散在する。②は大粒の金属鉄である。金属組織はフェライトであり、結晶粒界に極く微量の紐状セメンタイトが析出するが炭素含有量としては、0.008％前後である。該品の金属鉄は粒状で点在し、正確には鉄塊系遺物とはいいきれない。

③ ビッカース断面硬度：Photo. 7 の③にフェライト粒の硬度圧痕を示す。硬度値は、123Hvであった。フェライト粒にしてはやや硬質に測定された値である。硬度測定面積が小さいところでの誤差である。フェライトには同定できる。

(13)　SAIT－13：鉄塊系遺物

① 肉眼観察：丸味を帯びた小型鉄塊(65ｇ)である。基地は淡灰褐色皮膜に褐色粘土を付着し、亀裂を走らせる。また、表皮剝落面は茶褐色地に小気泡を発する面を有する。

② 顕微鏡組織：Photo. 7 の④～⑧に示す。表皮スラグは④でみられるファイヤライトと微小ヴｽタイト晶出の鉱石製錬滓の晶癖を留める。⑤は左側に表皮スラグのヴｽタイト晶出があって、その右側に金属鉄が遺存し、過熱組織の針状フェライトとパーライトの析出である。⑥は⑤の拡大組織でウイッドマンステッテン組織を表している。

③ ビッカース断面硬度：Photo. 7 の⑦はパーライト、⑧はフェライトの硬度測定の圧痕を示す。硬度値は、前者が167Hv、後者で124Hvであった。組織に対応した値であった。

(14)　SAIT－14：椀形鍛冶滓（鍛錬鍛冶滓）

① 肉眼観察：平面は楕円状で断面は椀状の鉄滓である。鍛冶炉の炉底に堆積形成され、表皮は茶褐色錆に覆われ、外縁側は淡緑色多気泡肌に木炭痕を残す。SAIT－１の基地に近似した淡緑粘土質で、破片だと製錬滓との区別は難しい。裏面は黄褐色錆の基地に青灰色粘土を薄く付着する。木炭痕多い。

② 顕微鏡組織：Photo. 8 の①～③に示す。鉱物組成は白色粒状のヴｽタイトと、大きく成長した淡灰色盤状結晶のファイヤライト、これにヴｽタイト粒内に微小茶黒色ヘーシナイト(Hercynit：$FeO \cdot Al_2O_3$)を晶出する。鍛錬鍛冶滓の初期工程でできた鍛冶滓に分類されて高温時(折返し鍛

接)での派生物と想定される。

③ 化学組成：Table. 2 に示す。全鉄分(Total Fe)は51.37％と多く、金属鉄(Metallic Fe)は0.03％、酸化第１鉄(FeO)48.21％と大半を占め、酸化第２鉄(Fe_2O_3)19.83％の割合となる。ガラス質成分(SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O)は26.97％あって、このうち塩基性成分(CaO＋MgO)1.76％と低め傾向をもち、鍛錬鍛冶滓としての傾向を呈する。脈石成分は全般的に少なくて、酸化マンガン(MnO)0.12％、二酸化チタン(TiO_2)0.25％、酸化クロム(Cr_2O_3)0.01％、硫黄(S)0.03％、五酸化燐(P_2O_5)0.6％、バナジウム(V)0.01％、銅(Cu)0.032％であった。

(15) SAIT－15：椀形鍛冶滓（精錬鍛冶滓）

① 肉眼観察：表皮は灰褐色の基地をもち、これに茶褐色鉄錆が覆う偏平の大型椀形滓(455ｇ)である。多くの小割状木炭痕を残す。裏面は灰色から茶褐色で粘土との反応痕と木炭痕が認められた。

② 顕微鏡組織：Photo. 8 の④～⑥に示す。鉱物組成は、白色粒状のヴュタイトとファイヤライト、一部に雪花状結晶のマグネタイト(Fe_3O_4)を晶出する。荒鉄(製錬生成鉄で表皮スラグや捲き込みスラグ、更には炉材粘土などの不純物を含む原料鉄：鉄塊系遺物)の成分調整で排出された精錬鍛冶滓に分類される。

③ ビッカース断面硬度：Photo. 8 の⑥にマグネタイト結晶の硬度測定の硬度圧痕を示す。硬度値は516Hvであって、文献硬度値の500～600Hvの範囲内に納まる。

④ 化学組成：Table. 2 に示す。全鉄分(Total Fe)は51.12％に対して、ガラス質成分が多くて30.61％、このうち、塩基性成分(CaO＋MgO)も4.87％と製錬滓の下限値に近い値である。他の随伴微量元素らは、酸化マンガン(MnO)0.17％、二酸化チタン(TiO_2)0.23％、五酸化燐(P_2O_5)0.35％、酸化クロム(Cr_2O_3)0.01％、硫黄(S)0.02％、銅(Cu)は高めの0.066％であった。成分的にも脈石成分が多くて精錬鍛冶滓に分類される。

(16) SAIT－16：椀形鍛冶滓（鍛錬鍛冶滓）

① 肉眼観察：五角形に近い平面をもつ小型椀形滓(95ｇ)である。僅かに浅い木炭痕を残す茶褐色小波状肌に小気泡を多発する。裏面は茶褐色から赤黒色で、反応痕や木炭痕および気泡を殆ど発生しなくて緩い曲面をもつ。

② 顕微鏡組織：Photo. 8 の⑦に示す。鉱物組成は白色粒状の大粒のヴュタイトと淡灰色長柱状のファイヤライト、基地の暗黒色ガラス質スラグなどから構成される。ヴュタイトの大量晶出は鍛錬鍛冶滓に分類される。これも赤熱鉄材の高温鍛接時の派生物である。

③ 化学組成：Table. 2 に示す。全鉄分(Total Fe)は53.95％に対してガラス質成分は22.01％と低減し、塩基性成分(CaO＋MgO)が3.62％である。酸化マンガン(MnO)は高めの0.65％、二酸化チタン(TiO_2)0.18％、酸化クロム(Cr_2O_3)0.01％、硫黄(S)0.02％、バナジウム(V)0.02％など少ないが、五酸化燐(P_2O_5)のみは1.08％と多い。若干の成分変動があるが鍛錬鍛冶滓に分類される。

(17) SAIT－17：黒鉛化木炭

① 肉眼観察：赤褐色鉄錆を発した木炭で磁性をもち、重量感がある。製鉄炉内で強還元雰囲気にさらされて木炭中に鉄が置換している。

② 顕微鏡組織：Photo. 9 の①に示す。コナラか栗が原木で環孔材で大導管と小導管が認められ、これに鉄が置換している。ただし鉄は錆化してゲーサイトとなっていた。

(18) SAIT－18：鉄鉱石（磁鉄鉱）

① 肉眼観察：全面が破砕面で黒色で光沢をもつ。強磁性。

② 顕微鏡組織：Photo. 9 の②～④に示す。鉱物組成の大部分は淡灰色を呈する磁鉄鉱で占められるが微細は割れ目沿いに褐鉄鉱化の進んだ個所や脈石鉱物が認められる。

③ ビッカース断面硬度：Photo. 9 の④に磁鉄鉱の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は509Hvであった。磁鉄鉱の文献硬度値は530～600Hvである。該品は下限値を若干割っているが、誤差範囲であって、硬度値からも磁鉄鉱は認定できる。

④ 化学組成：Table. 2 に示す。磁鉄鉱の鉄分の理論値は72.4％に対して、全鉄分(Total Fe)は65.74％なので純度の良好な成分系である。このうち酸化第１鉄(FeO)は27.38％、酸化第２鉄(Fe_2O_3)63.55％の割合となる。夾雑鉱物は少なくてガラス質成分(SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O)としては8.03％、塩基性成分(CaO＋MgO)が1.65％と、鉄と滓の分離を促進する元素は適度に含有される。酸化マンガン(MnO)0.26％、二酸化チタン(TiO_2)0.54％、酸化クロム(Cr_2O_3)0.01％、硫黄(S)0.02％、五酸化燐(P_2O_5)0.07％、バナジウム(V)、銅(Cu)0.002％など、いずれも低値である。

(19)　SAIT－19：被熱鉱石（磁鉄鉱）

① 肉眼観察：淡赤褐色の本来の表皮面を一面残し、他は人工的破砕面で、これが被熱のため、肌全体に微小反応痕とケバ立ちの荒れを残す。色調は光沢を無くした黒色である。

② 顕微鏡組織：Photo. 9 の⑤～⑦に示す。磁鉄鉱の微小亀裂が熱により大きく開き、還元時は一酸化炭素(CO)ガスとの接融面を増して良い状態となる。組織からみた純度は、前述SAIT－18鉱石と大差ないものである。

③ ビッカース断面硬度：Photo. 9 の⑦に磁鉄鉱面の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は505Hvであって、当鉱物相は磁鉄鉱に同定できる。

④ 化学組成：前述SAIT－18生鉱石の成分系に準ずるもので、その差は殆どなかった。

(20)　SAIT－20：鉄滓（不定形精錬鍛冶滓）

① 肉眼観察：表皮は赤褐色を呈して多くの木炭痕を残し、肌の荒れは左程ない。裏面は灰褐色で反応痕と木炭痕を混在させる。破面は黒色多孔質のコークス状。気泡の中に錆の発生が認められた。

② 顕微鏡組織：Photo.10の①～③に示す。鉱物組成は、大量の白色粒状ヴュタイトと、淡灰色短柱状ファイヤライト、基地の暗黒色ガラス質スラグなどから構成される。また、滓中には木炭の捲き込みがあり、これが鉄と置換した後に錆化した状態で検出された。

③ 化学組成：鉄分が多くてガラス質成分の少ない鍛冶滓成分である。すなわち、全鉄分(Total Fe)は59.92％、ガラス質成分が17.66％、塩基性成分(CaO＋MgO)が3.16％と中間レベル、同じく酸化マンガン(MnO)は0.35％であった。銅(Cu)は0.066％と若干濃縮気味である。

(21)　SAIT－21：鉄滓（鉱石製錬滓）

① 肉眼観察：表裏共に黄褐色鉄錆に覆われ、比較的滑らか肌に木炭痕と小気泡を発する炉底塊(505ｇ)である。裏面は側面が弯曲して気泡を多発し、椀形滓にみられる反応痕が無い。被面は古くて錆化して気泡がなく礫を付着する。

② 顕微鏡組織：Photo.10の④に示す。鉱物組成は、淡灰色盤状結晶のファイヤライトと中粒白色状のヴュタイトを晶出する。鉱石製錬滓の晶癖である。

③ 化学組成：Table. 2 に示す。鉄分は減少して、全鉄分(Total Fe)が44.76％、ガラス質成分が

33.25％と多く、このうちに塩基性成分(CaO＋MgO)3.9％を含む。酸化マンガン(MnO)0.37％、二酸化チタン(TiO_2)0.25％、五酸化燐(P_2O_5)0.63％、銅(Cu)0.028％などの成分系で脈石成分高め傾向は、鉱石製錬滓に分類される。

(22)　SAIT－22：鉄滓（鉱石製錬滓）

① 肉眼観察：茶褐色鉄錆に覆われ、この錆が多くの礫を抱き込み、木炭痕を残す炉底塊で、裏面に炉底灰色粘土を付着する。

② 顕微鏡組織：Photo.10の⑤～⑦に示す。鉱物組成は、淡灰色短柱状のファイヤライト主体で、これに白色粒状ヴュタイトの小粒を晶出する。なお、局部的なヴュタイト粒内には褐色微小粒のヘーシナイトを析出する。該品は鉱石製錬滓に分類される。

③ 化学組成：Table. 2 に示す。全鉄分(Total Fe)は43.87％と鍛冶滓の50～60％台に比べると低めで、ガラス質成分が39.25％と多く、このうちの塩基性成分(CaO＋MgO)も5.76％と高めである。また、酸化マンガン(MnO)は0.35％、二酸化チタン(TiO_2)が0.27％、銅(Cu)0.022％であった。これらの成分系は鉱石製錬滓に想定できる。

(23)　SAIT－23：鉄滓（精錬鍛冶滓）

① 肉眼観察：表面は小豆色から灰黒色で小波状肌に木炭痕を残し、磁性を有する。裏面は灰茶色で僅かに反応痕と木炭痕が認められて磁性は少ない。破面は灰黒色で気泡あるも比較的に緻密質であって比重も大きい。一見、製鉄炉内の上部で形成されるマグネタイト塊にも受取れる外観である。

② 顕微鏡組織：Photo.11の①～③に示す。鉱物組成は、大粒の白色粒状ヴュタイトと、一部に白色多角形のマグネタイト、これにファイヤライトと暗黒色ガラス質スラグなどから構成される。

③ ビッカース断面硬度：Photo.11の②は白色粒状結晶、また、③は白色多角形結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は、前者で509Hvでヴュタイト、後者は588Hvでマグネタイトに同定される。

④ 化学組成：Table. 2 に示す。全鉄分(Total Fe)は55.65％と鍛冶滓レベルであり、ガラス質成分は、25.65％に対して塩基性成分(CaO＋MgO)は3.65％と左程多くなく、酸化マンガン(MnO)0.26％、二酸化チタン(TiO_2)0.16％など随伴微量元素も低減傾向にあり、精錬鍛冶滓に分類される。

(24)　SAIT－24：小割り鉄塊（高炭素含有鉄塊）

① 肉眼観察：黄褐色鉄錆に覆われた小割り小鉄塊(15ｇ)である。一部表皮が剝落して赤黒色の鉄肌を露出する。実測図で断面を観察すると長方形の小割り状態が認められた。

② 顕微鏡組織：Photo.11の④～⑧に示す。表皮スラグは取り除かれて金属鉄のみである。④は鉄中の非金属介在物で、微小黄色の硫化鉄(FeS)が検出されて、高炭素系の鉄と予測がついた。ピクラル腐食によると全面パーライト析出の過共析鋼(C：0.77％以上)の個所と、白色板状のセメンタイトの析出個所が認められた。炭素含有量は、1.7～2.0％前後に想定できる。

(25)　SAIT－25：鉄滓（鉱石製錬滓）

① 肉眼観察：表面は淡茶褐色錆に覆われるが、突起部は淡緑粘土質状地肌の滓を露出する。また、地肌全体は木炭痕由来の凹凸をもつが比較的滑らかで気泡を散在させる。裏面は黒褐色で反応痕と木炭痕を有するところから炉底塊(740ｇ)の一部と考えられる。

② 顕微鏡組織：Photo.12の①に示す。鉱物組成は、淡灰色盤状結晶のファイヤライトと、白色小粒

結晶のヴュタイト、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。この晶癖は鉱石製錬滓に分類される。

③ 化学組成：Table. 2 に示す。全鉄分(Total Fe)は41.70%、ガラス質成分38.40%で、このうちに塩基性成分(CaO＋MgO)が5.64%を含む。酸化マンガン(MnO)は多くて2.23%、五酸化燐(P_2O_5)1.26%の高めが特徴的である。二酸化チタン(TiO_2)の0.84%は当遺跡内鉱石製錬滓としては最も多く、銅(Cu)は逆に0.010%と少なかった。該品は古墳時代後半に属し、当時の装入鉱石の特質を示すものであろう。

(26) SAIT－26：取鍋内溶着物

① 肉眼観察：口径10cm、器高3.5cm、器肉の厚さは最大で1.0cmの取鍋である。器形平面は真円で内弯浅く立ち上がる。きわだった注口はないが唇口に僅かに薄くなる個所がそれであろう。胎土は緻密で焼成は良好であった。取鍋内面は大部分が黒色無光沢溶着物があって注口反対側の突起ガラス質には金属質が存在(メタルチェッカー反応)する。ただし、この突起及び周縁は褐色から小豆色で光沢質であった。この光沢質部分を供試材とする。

② 顕微鏡組織：Photo.12の②～⑧に示す。暗黒色ガラス質スラグ中に50～200μ前後の赤銅色銅粒と淡灰色針状結晶と白色粒状結晶が共伴する。銅粒以外の鉱物はＣＭＡの項で述べる。

③ ビッカース断面硬度：Photo.12の⑤⑥に銅粒の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は、前者で67.0Hv、後者で59.8Hvで純銅である。また、⑦は白色粒状結晶の硬度値は178Hvでヴュタイトは異なって錫(Sn)合金あたりの可能性をもつが断定は出来ない。⑧はヴュタイト凝集に似た結晶であるが、こちらの硬度値は、203Hvであって、⑦と近似した鉱物と考えられる。

④ ＣＭＡ調査：Photo.17のSE(２次電子像)に示した組織の高速定性分析結果をTable. 4 に示す。供試材は銅粒を中心とした鉱物相であって、検出元素を強度(Count)順に並べると次の様である。銅(Cu)、珪素(Si)、アルミニウム(Al)、錫(Sn)、カリウム(Ca)、鉄(Fe)、鉛(Pb)、亜鉛(Zn)、カリウム(Ca)、マグネシウム(Mg)、ナトリウム(Na)、燐(P)などである。当取鍋内の合金元素の主体は銅(Cu)と錫(Sn)であり、青銅品の細工が想定される。

Photo.17の特性Ｘ線像は、高速定性分析結果を視覚化した面分析である。分析元素の存在は白色輝点の集中によって知ることができる。例えば、針状結晶は鉄(Fe)と銅(Cu)に白色輝点が集中してFe－Cu化合物を表す。当化合物は、ASTMカードのファイルNo.40－1294で同定される$Cu_{99}Fe$であろう。銅はα－Fe中に極く僅かに固溶して溶解度は841.3℃で1.79%Cuである。また、錫(Sn)も微小な楕円形で白色輝点が集中して、その存在が明らかとなった。更には、暗黒色ガラス質スラグ部からは、ガラス質成分(Si、Al、Ca、Mg、K、Na)に白色輝点が検出している。一方、SE(２次電子像)の中央でみられる銅粒の定量分析値は102%Cuで純銅であることを示していた。以上の結果により、当取鍋溶着物は高速定性分析結果において述べた様に銅(Cu)と錫(Sn)の合金に関する作業の派生物とみられる。

3－2．勘定口２号墳出土遺物

(1) KANS－１：鉄滓（鉱石製錬滓）

① 肉眼観察：表皮は黒色滑らか肌に鉄錆に覆われた炉底塊であろ。裏面は淡茶褐色で小波状の反応痕と石英砂粒を多く付着する。破面は黒色緻密質に鉄錆を滲ませる。炉底塊。

② 顕微鏡組織：Photo.13の①～③に示す。鉱物組成は、淡灰色盤状結晶のファイヤライトと、その粒間に微小樹状晶のマグネタイト及び暗黒色ガラス質スラグから構成される。鉱石製錬滓の晶癖であった。

③ ビッカース断面硬度：Photo.13の③に淡灰色盤状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は701Hvであった。ファイヤライトの文献硬度値の範囲内に納まる数字であった。

④ 化学組成：Table. 2 に示す。鉄分は少なくてガラス質成分の多い鉱石製錬滓を呈する成分系であった。すなわち、全鉄分(Total Fe)は32.12%、ガラス質成分が54.80%に対して塩基性成分(CaO＋MgO)は高くて4.72%、他の脈石成分も含まれていて酸化マンガン(MnO)0.46%、二酸化チタン(TiO_2)0.41%、銅(Cu)が0.016%であった。

（2） KANS－2：鉄塊系遺物

① 肉眼観察：表裏ともに黄褐色鉄錆に覆われ、木炭に挟まれて形成された50ｇの鉄塊系遺物である。中央部は特に赤黒色の錆汁を滲ませて中核部に金属鉄の残存を判らせる。

② 顕微鏡組織：Photo.13の④～⑧に示す。表皮はヴュスタイトとファイヤライトを晶出した製錬滓を付着して、内部は金属鉄を残す。⑤は左側に表皮スラグ、右の白い金属鉄中に球状の夾雑物が非金属介在物である。まだ、鍛打加工を受ける前なので、介在物は表面張力の関係から球状化した状態のままで観察される。⑥はピクラル腐食で現れたパーライトであって、生成された鉄は吸炭時間が短いので炭素量は少なく、0.01%前後であった。⑦はナイタル腐食によるフェライトである。製鉄炉内は温度が高く粗大化傾向のフェライトであった。

③ ビッカース断面硬度：Photo.13の⑧にフェライト結晶粒の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は112Hvであって、粗大化フェライトとしてはやや高め傾向を表すものであった。該品は鍛冶原料として、更に再加熱し、成分調整を行う精錬鍛冶が必要である。

3－3．斎富古墳群2号墳出土品

（1） SAKF－1：鉄塊系遺物

① 肉眼観察：不定三角形に近い形状で小豆色粉末に覆われ、亀裂を走らせた鉄塊系遺物である。磁性は強く、丸味を帯びるので高炭素系と予測された。裏面は亀裂部から剝離があって重量は120ｇであった。

② マクロ組織：Photo.15の⑤に示す。周縁表層部の一部は錆化するも、その内側は過共析鋼の全面パーライト組織の中で局部的に白色板状結晶をもつセメンタイトとレデブライト(パーライトとセメンタイトの共晶)が認められる。高炭素含有鉄塊である。

③ 顕微鏡組織：Photo.14の①～⑤に示す。表皮スラグは認められず錆化鉄のゲーサイトと金属鉄が遺存する。②③は、白色針状のフェライトが黒色パーライトに晶出し、局部的に白色板状結晶の初晶セメンタイトと、蜂の巣状のセメンタイトとオーステナイト(常温でパーライト)共晶のレデブライトが認められる。白鋳鉄鉄になりかけの過共析鋼(C：0.77%以上)の組織である。

④ ビッカース断面硬度：Photo.14の①に黒色パーライト部と白鋳鉄なりかけレデブライト部の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は、前者で366Hv、後者で463Hvであった。組織に対応した値であった。

（2） SAKF－2：鉄滓（鉱石製錬滓）

① 肉眼観察：表皮は淡緑色基地に茶褐色鉄錆を発し、木炭痕と気泡を散在させ、凹凸を有するが滑らか肌をもつ炉底塊である。裏面は弯曲面を有し、木炭痕と反応痕をかかえる。

② 顕微鏡組織：Photo.14の⑥～⑧に示す。鉱物組成は淡灰色盤状結晶のファイヤライト、白色微小樹状晶のマグネタイト、微小金属鉄粒などから構成される。鉱石製錬滓の晶癖である。

③ ビッカース断面硬度：Photo.14の⑧に白色鉱物の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は1027Hvと非常に硬質であった。石英質の鉱物であって、組成についての同定は結論を出しかねる。研究課題にしておきたい。

④ 化学組成：Table. 2 に示す。全鉄分(Total Fe)は40.38%、ガラス質成分45.44%あり、このうちに塩基性成分(CaO＋MgO)を8.14%と高値を含む。酸化マンガン(MnO)0.47%、二酸化チタン(TiO_2)0.43%、銅(Cu)0.018%など脈石成分は前述したKANS－１の勘定口２号墳出土鉱石製錬滓に近似する。

4．まとめ

斎富遺跡は、古墳時代の後半から鉄生産を行った可能性をもつものの、製鉄遺構や鍛冶遺構が未検出であり、かつ、製鉄関連遺物の大部分が包含層出土なので、明瞭な確定はできない状況にあった。

ここの製鉄は、遺跡内から鉱石片が出土するのと、製錬滓の大半の鉱物組成にファイヤライト

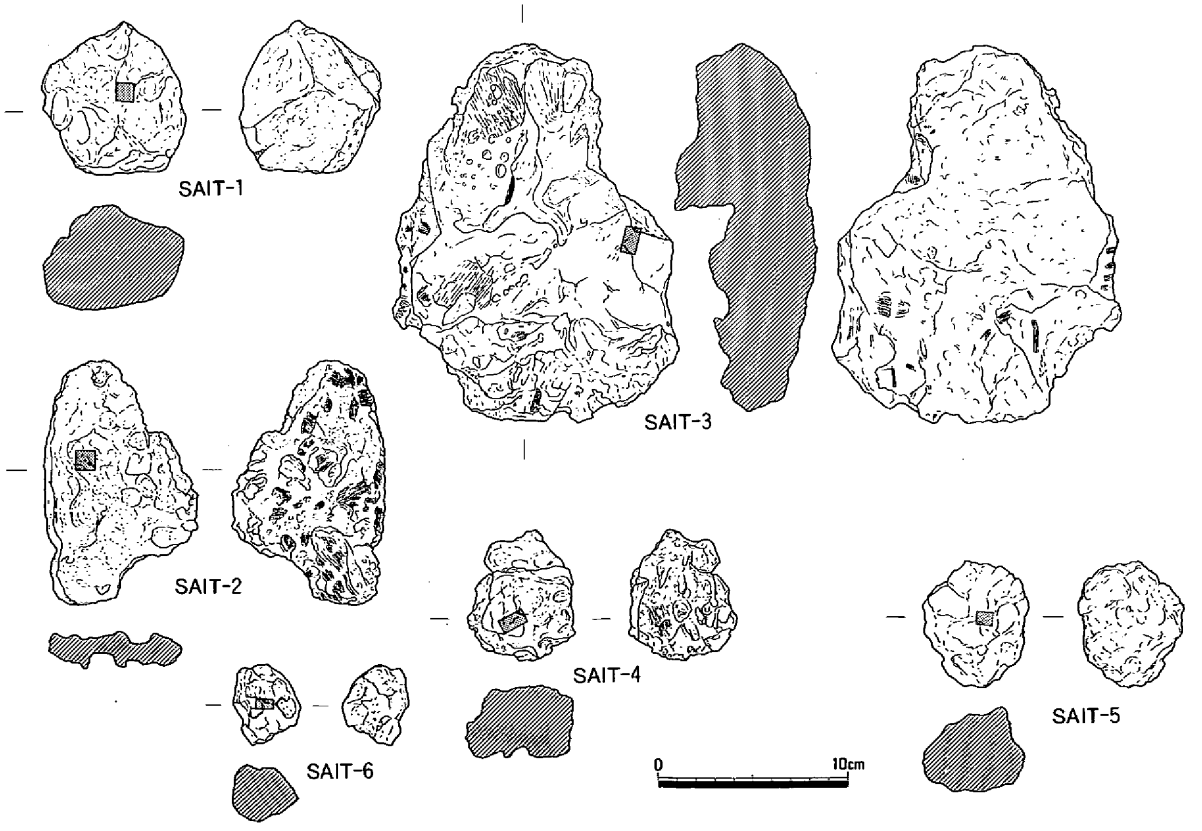


図１　斎富遺跡出土製鉄関連遺物実測図(１)　(１/４)

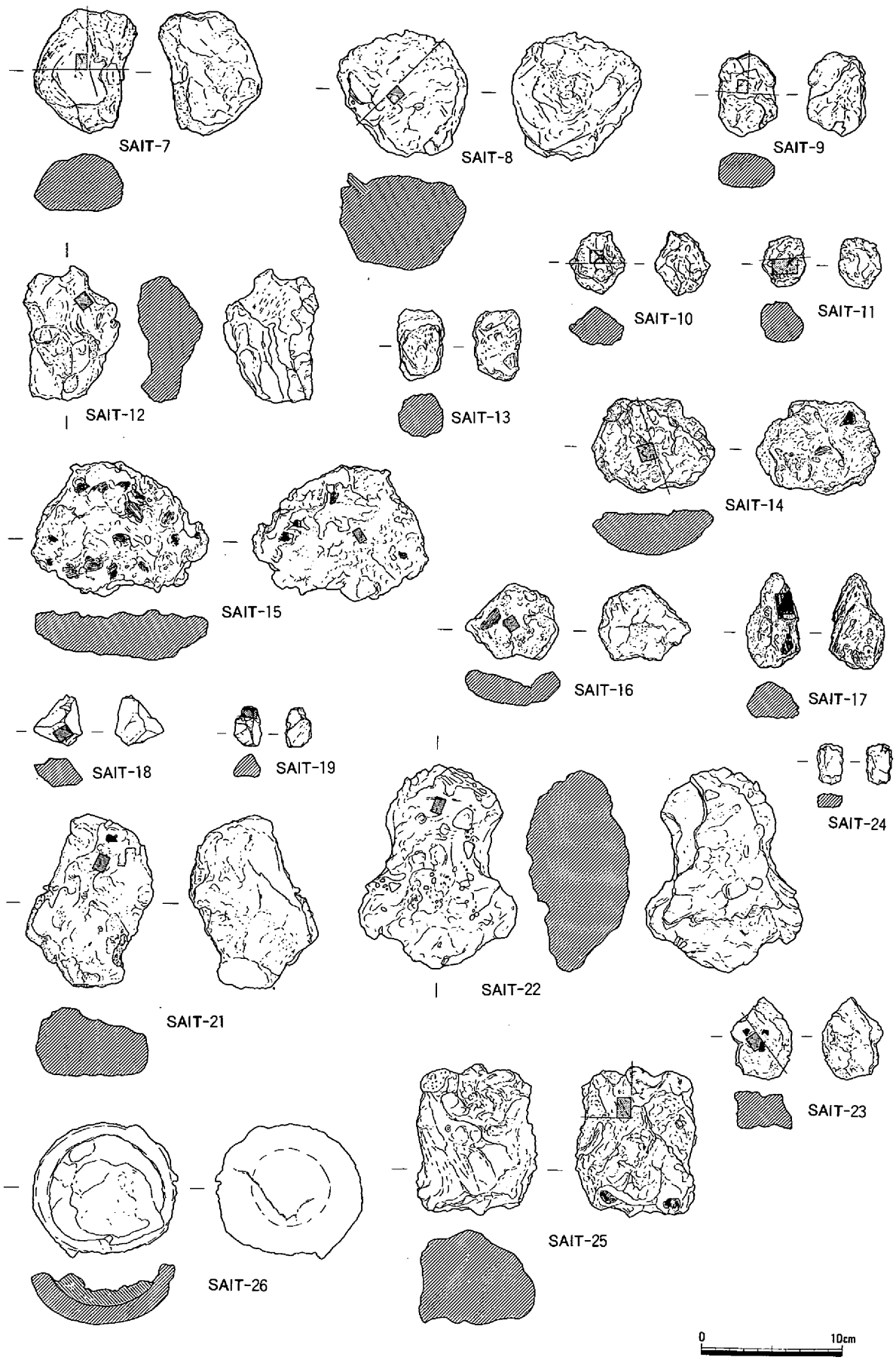


図1　斎富遺跡出土製鉄関連遺物実測図(2)　(1/4)

(Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$)主体で構成されて、化学組成は全鉄分(Total Fe)が40.46～46.9%台と高めで、塩基性成分(CaO＋MgO)が3.9～8.01%、銅(Cu)0.022～0.076%と多く、逆に二酸化チタン(TiO_2)が0.16%～0.84%、バナジウム(V)0.01～0.06%と低い特徴から鉱石製錬滓に分類される。

しかし、一方、亀田Ｂ１区トレンチ出土の鉄滓(SAIT－４)の鉱物組成は、ウルボスピネル(Ulvöspinel：$2FeO \cdot TiO_2$)とイルミナイト(Ilmenite：$FeO \cdot TiO_2$)を晶出し、化学組成の全鉄分(Total Fe)は、25.13%と少なくて、砂鉄特有元素の二酸化チタン(TiO_2)が18.40%、バナジウム(V)0.22%と多い特徴をもつ砂鉄製錬滓も存在する。

製鉄原料となった鉄鉱石は、砕かれた生鉱石片(44ｇ)や被熱鉱石片(16ｇ)が出土して、両者は鉄分(Total Fe)が65%台と純度の良い品位であった。両者は随伴微量元素にも大きな差異はなくて、被熱による亀裂の有無のみが、その相違点といえる。

また、製鉄作業は、製錬に続いて荒鉄の成分調整を行った精錬鍛冶や、鉄素材となる半製品製作の鍛錬鍛冶までが推定できる鍛冶炉の炉底に堆積形成された椀形鍛冶滓が検出された。こちらは、鉱物組成はヴスタイト(Wüstite：FeO)が主体であって、前者の精錬鍛冶滓の化学組成は、全鉄分(Total Fe)が51.12%～59.92%は増加して、逆に塩基性成分(CaO＋MgO)は3.16～4.87%をはじめ、脈石成分の酸化マンガン(MnO)など0.17～0.65%と低減する。更に鍛錬鍛冶滓は、塩基性成分(CaO＋MgO)17.6%、酸化マンガン(MnO)0.12%と低くなる。

鍛冶原料となった鉄塊系遺物は、炭素含有量に変動をもつもので亜共析鋼(Ｃ：0.77%以下)から銑鉄になりかけの過共析鋼(Ｃ：0.77%以上)があって、製錬滓に連なる鉱石系であった。このなかで水中冷却を行ったマルテンサイト(Martensite：フェライトと微細なセメンタイトとの混合物で硬質)組織を呈する鉄塊の存在から近世たたらの水鋼的な鉄塊選別が予想された。

次に製鉄炉に使用された炉材粘土は、耐火度が1,370℃と低温タイプで竪形炉には不向きの材質であった。これは、鉄分(Fe_2O_3)が4.17%と若干高めで、かつ、酸化アルミニウム(Al_2O_3)が11.0%と不足気味の成分系である。

斎富遺跡の中・近世になると、青銅品の鋳造が実施され、出土取鍋の溶着鉱物は銅粒と錫(Sn)が検出された。

推定年代がほぼ確定されて６世紀中葉が比定される斎富古墳群２号墳の第４主体部羨道からは、供献鉄滓や鉄塊系遺物が出土して、被葬者は製鉄集団との係りが示唆された。ここでも鉱石系の始発原料が確認される。岡山県下の古墳供献鉄滓の発見は100例に近いものであろう[4)]。

更に７世紀前半代が想定される勘定口２号墳の墳丘下には、製鉄炉の排滓場が検出されて、鉱石系の製錬滓と鉄塊系遺物が出土した。これらは、斎富古墳群２号墳に近似した成分系である。

以上の如く、３遺跡から出土した製鉄関連遺物は、赤磐郡内における古墳時代の製鉄操業の活況を物語るものであって、在地の賦存露出鉱石を採掘し、不足分は砂鉄で賄った製鉄活動を裏付ける事となった。

註

1）　日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』　1968
2）　前掲書1）
3）　大澤正己「総社久代製鉄遺跡群出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『水島機械金属工業団地協同組合西団地内遺跡群』（総社市埋蔵文化財発掘調査報告9）総社市教育委員会　1991
4）　大澤正己「古墳出土鉄滓からみた古代製鉄」『日本製鉄史論集』たたら研究会編1983
この拙稿中には中国の古墳供献鉄滓例として50例を挙げていたが、その後も増加を続けている。筆者の分析報告だけでも10例は越えていて、未分析分を含めれば100例は無理のない数字である。

Table. 1　供試材の履歴と調査項目

試料番号	遺跡名	試料	出土位置			推定年代	計測値		調査項目					
			調査区	出土遺構 ＊	遺構種別		大きさ（mm）	重量（g）	マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	CMA調査	化学組成	耐火度
SAIT-1	斎富	製錬滓	亀田M3	SD6	溝		80×72×54	285		○	○		○	
-2	〃	〃	前田M1	包含層	包含層		129×82×15	245		○	○		○	
-3	〃	炉壁	亀田M5	包含層	包含層		200×152×73	1380		○	−		○	○
-4	〃	製錬滓	亀田B1	トレンチ	包含層		70×57×38	150		○	−		○	
-5	〃	鉄塊系遺物	前田BOX3	包含層	包含層		67×56×44	180		○	○			
-6	〃	〃	前田M4	NO.428Pit	柱穴		42×35×30	55		○	○			
-7	〃	〃	前田BOX2	SD3（溝16）	溝	中世	137×62×40	450	○	○	○	○	○	
-8	〃	含鉄鉄滓	前田BOX3	建物4（掘立柱建物22）	掘立柱建物	古墳後半	90×90×68	590		○	−			
-9	〃	鉄塊系遺物	前田M3	包含層	包含層		59×35×24	170	○	○	○			
-10	〃	〃	前田BOX2	包含層	包含層		55×38×27	70	○	○	○			
-11	〃	〃	亀田B1	包含層	包含層		36×30×28	45	○	○	○			
-12	〃	含鉄鉄滓	前田M4	NO.455・540住居（竪穴住居70・71）	竪穴住居	古墳後半	94×66×45	530		○	○			
-13	〃	鉄塊系遺物	前田BOX2	包含層	包含層		50×32×31	65		○	○			
-14	〃	椀形鍛冶滓	亀田M3	河道1	溝		66×86×29	255		○	−		○	
-15	〃	〃	前田M3	包含層	包含層		95×120×35	455		○	○		○	
-16	〃	〃	亀田M4	包含層	包含層		53×66×15	95		○	−		○	
-17	〃	黒鉛化木炭	亀田M6	包含層	包含層		67×36×25	45		○	−			
-18	〃	鉄鉱石	前田M5	Pit134	柱穴		35×34×20	44		○	○		○	
-19	〃	被熱鉱石	亀田M2	包含層	包含層		27×17×16	16		○	○		○	
-20	〃	不定形鍛冶滓	前田M4	NO.482土壙	土壙		83×65×38	235		○	−		○	
-21	〃	製錬滓	亀田M2	NO.9溝	溝		121×71×48	505		○	−		○	
-22	〃	〃	亀田M2	包含層	包含層		144×111×73	1020		○	−		○	
-23	〃	不定形鍛冶滓	前田BOX2	Pit262	柱穴		58×43×26	90		○	○		○	
-24	〃	小割鉄塊	前田M4	NO.455・540住居（竪穴住居70・71）	竪穴住居	古墳前半	28×18×9	15		○	○			
-25	〃	製錬滓	亀田B1	SX1	たわみ	古墳後半	106×84×66	740		○	−		○	
-26	〃	取鍋溶融物	前田M7	NO.7建物（掘立柱建物68）	掘立柱建物	中・近世	102×92×42	313	○	○		○		
SAKF-1	斎富古墳群	鉄塊系遺物	2号墳	第4主体部		6C後葉	65×30×25	120		○	○			
-2	〃	製錬滓	〃	〃		〃	80×45×20	127		○	○		○	
KANS-1	勘定口2号墳	製錬滓	墳丘下	排滓場？		7C前半	105×65×30	324	○	○	○		○	
-2	〃	鉄塊系遺物	〃	〃		〃	37×27×25	181		○	○			

＊斎富遺跡の（ ）付遺構名は本書掲載遺構名、そのほかは調査時遺構名

Table. 2　供試材の化学組成

※ ※ ※ ※ ※ ※ Σ※

試料番号	遺跡名	出土位置	種別	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metalic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	二酸化珪素 (SiO_2)	酸化アルミニウム (Al_2O_3)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K_2O)	酸化ナトリウム (Na_2O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	造滓成分	造滓成分 / Total Fe	TiO_2 / Total Fe	耐火度 (℃)
SAIT-1	斎富	亀田M3区SD06溝	鉱石製錬滓	古墳時代後半の可能性	40.46	0.06	49.28	2.99	30.14	4.09	3.19	6.83	1.18	0.268	0.69	0.16	0.01	0.02	0.17	0.02	0.01	0.022	45.698	1.130	0.004	
2	〃	前田M1区包含層23H～24Hグリット	〃	〃	46.91	0.03	46.64	15.19	22.18	3.59	2.66	4.71	0.752	0.106	0.29	0.23	0.01	0.03	0.37	0.23	0.01	0.076	33.971	0.724	0.005	
3	〃	亀田M5区包含層	炉壁胎土	〃	3.32	0.18	0.29	4.17	77.65	11.00	0.58	0.59	2.31	0.836	0.13	0.65	0.02	0.01	0.09	IgLoss 1.32	0.01	0.002	92.966	28.002	0.196	1370
4	〃	亀田B1区トレンチ包含層	砂鉄製錬滓	〃	25.13	0.03	17.11	16.83	31.64	6.26	4.20	1.23	1.63	0.406	1.12	18.40	0.04	0.01	0.59	0.20	0.22	0.012	45.366	1.805	0.732	
7	〃	前田BOX2区SD03溝	鉄塊系遺物	〃	59.82	2.59	16.12	63.91	3.42	0.86	0.43	0.98	0.068	0.026	0.17	0.14	0.01	0.27	0.24	0.22	0.00	0.074	5.784	0.097	0.002	
14	〃	亀田M3区河道1	鍛錬鍛冶滓	〃	51.37	0.03	48.21	19.83	19.86	4.48	1.09	0.67	0.586	0.280	0.12	0.25	0.01	0.03	0.60	0.06	0.01	0.032	26.966	0.525	0.005	
15	〃	前田M3区包含層19Iグリット	精錬鍛冶滓	〃	51.12	0.07	54.34	12.60	19.89	4.18	3.59	1.28	1.34	0.334	0.17	0.23	0.01	0.02	0.35	0.05	0.01	0.066	30.614	0.599	0.005	
16	〃	亀田M4区包含層・黒灰色層	〃	〃	53.95	0.04	50.20	21.29	14.89	2.91	2.06	1.56	0.442	0.148	0.65	0.18	0.01	0.02	1.08	0.07	0.02	0.010	22.010	0.408	0.003	
18	〃	前田M5区Pit134柱穴	鉄鉱石	〃	65.74	0.01	27.38	63.55	4.20	1.95	1.12	0.53	0.136	0.092	0.26	0.54	0.01	0.02	0.07	0.02	0.01	0.002	8.028	0.122	0.008	
19	〃	亀田M2区包含層11Rグリット	被熱鉄鉱石	〃	65.17	0.01	27.95	62.10	4.82	1.87	1.21	0.68	0.118	0.082	0.29	0.48	0.01	0.01	0.05	0.02	0.00	0.002	8.780	0.135	0.007	
20	〃	前田M4区No.482土壙	精錬鍛冶滓	〃	59.92	0.01	61.90	16.86	11.68	2.26	1.22	1.94	0.444	0.116	0.35	0.12	0.01	0.03	0.47	0.04	0.00	0.066	17.660	0.295	0.002	
21	〃	亀田M2区No.9溝	鉱石製錬滓	〃	44.76	0.01	39.58	20.00	23.63	4.46	2.73	1.17	0.882	0.378	0.37	0.25	0.01	0.03	0.63	0.06	0.01	0.028	33.250	0.743	0.006	
22	〃	〃包含層13Tグリット	〃	〃	43.87	0.01	48.35	8.98	26.40	5.08	4.48	1.28	1.57	0.438	0.35	0.27	0.01	0.02	0.55	0.03	0.01	0.022	39.248	0.895	0.006	
23	〃	前田BOX2区Pit262柱穴	精錬鍛冶滓	〃	55.65	0.01	61.04	11.72	18.39	2.72	1.66	1.99	0.668	0.218	0.26	0.16	0.01	0.02	0.32	0.03	0.00	0.028	25.646	0.461	0.003	
25	〃	亀田B1区SX1たわみ	鉱石製錬滓	〃	41.70	0.01	43.36	11.42	25.62	6.12	3.98	1.66	0.622	0.394	2.23	0.84	0.01	0.04	1.26	0.04	0.06	0.010	38.396	0.921	0.020	
KANS-1	勘定口2号墳	墳丘下	〃	7C前半	32.12	0.05	31.66	10.68	39.74	8.31	2.16	2.56	1.87	0.160	0.46	0.41	0.01	0.02	0.25	0.06	0.01	0.016	54.800	1.706	0.013	
SAKF-2	斎富古墳群	2号墳第4主体部	〃	6C後葉	40.38	0.15	47.07	5.21	28.13	7.72	6.55	1.59	1.08	0.372	0.47	0.43	0.01	0.02	0.24	0.02	0.01	0.018	45.442	1.125	0.011	

POS. NO. 3

COMMENT : SAIT- 7
ACCEL. VOLT. (KV): 15
PROBE CURRENT : 4.997E-08 (A)
STAGE POS. : X 40000 Y 40000 Z 11000

07-JUN-95

CH(1) TAP				CH(2) PET				CH(3) LIF			
EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
Y -l	6.45	349	**********	TI-k	2.75	143	**********	BI-1	1.14	91	**********
RE-m	6.73	281	**********	BA-l	2.78	130	**********	PB-1	1.18	99	**********
SR-l	6.86	232	**********	CS-1	2.89	119	**********	TL-1	1.21	98	**********
W -m	6.98	232	**********	SC-k	3.03	104	**********	HG-1	1.24	102	**********
SI-k	7.13	207	**********	I -l	3.15	98	**********	AU-1	1.28	98	**********
TA-m	7.25	178	**********	TE-1	3.29	84	**********+	PT-1	1.31	91	**********
RB-1	7.32	175	**********	CA-k	3.36	86	**********+	IR-1	1.35	84	**********
HF-m	7.54	134	**********	SB-1	3.44	73	**********	OS-1	1.39	82	**********
LU-m	7.84	102	**********	SN-1	3.60	68	**********	ZN-k	1.44	69	**********
YB-m	8.15	87	**********	K -k	3.74	56	**********+	CU-k	1.54	71	**********
AL-k	8.34	78	**********	IN-1	3.77	59	**********	NI-k	1.66	49	**********
BR-1	8.37	67	**********	U -m	3.91	44	**********	TM-1	1.73	50	**********
ER-m	8.82	53	**********	CD-1	3.96	53	**********	CO-k	1.79	63	**********
SE-1	8.99	63	**********	TH-m	4.14	37	**********	◎ FE-k	1.94	10481	**********++++++++
HO-m	9.20	52	**********	AG-1	4.15	38	**********	GD-1	2.05	26	**********
DY-m	9.59	46	**********	PD-1	4.37	31	**********	○ MN-k	2.10	47	**********+
AS-1	9.67	51	**********	RH-1	4.60	30	**********	EU-1	2.12	28	**********
MG-k	9.89	45	**********	CL-k	4.73	23	**********	SM-1	2.20	24	**********+
TB-m	10.00	38	**********	RU-1	4.85	23	**********	CR-k	2.29	19	**********
GE-1	10.44	32	**********	○ S -k	5.37	909	**********++++	ND-1	2.37	13	**********
GA-1	11.29	30	**********+	MO-1	5.41	22	**********	PR-1	2.46	12	**********
NA-k	11.91	23	**********	NB-1	5.72	15	**********+	V -k	2.50	13	**********
**	14.72	15	**********	ZR-1	6.07	7	**********+	CE-1	2.56	13	**********
F -k	18.32	15	**********	P -k	6.16	15	**********	LA-1	2.67	12	**********+

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
  S MN FE ←検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
  NB

Photo.16のSEに示した淡黄色不定形の非金属介在物の分析結果を示す。検出元素は鉄（Fe）の強度（Count）が最高の10,481、続いて硫黄（S）909、マンガン（Mn）極く微量で47であった。介在物の組成は硫化鉄（FeS）である。砂鉄特有元素のチタン（Ti）、バナジウム（V）、ジルコニウム（Zr）の検出がなく、始発原料は鉱石の可能性がすこぶる大となる。

Table. 3　鉄塊系遺物（SAIT-7）鉄中非金属介在物のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

POS. NO. 2

COMMENT : SAIT-
ACCEL. VOLT. (KV): 15
PROBE CURRENT : 5.000E-08 (A) 07-JUN-95
STAGE POS. : X 40000 Y 40000 Z 11000

	CH(1) TAP				CH(2) PET				CH(3) LIF			
	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
	Y -l	6.45	353	**********	TI-k	2.75	182	**********+	BI-l	1.14	103	**********
	RE-m	6.73	392	**********	BA-l	2.78	186	**********+	○ PB-l	1.18	173	**********+
	SR-l	6.86	263	**********	CS-l	2.89	134	**********	TL-l	1.21	104	**********
	W -m	6.98	274	**********	SC-k	3.03	107	**********	HG-l	1.24	104	**********
○	SI-k	7.13	3538	**********	I -l	3.15	106	**********	AU-l	1.28	105	**********
	TA-m	7.25	194	**********	TE-l	3.29	101	**********	PT-l	1.31	100	**********
	RB-l	7.32	195	**********	○ CA-k	3.36	484	**********++	IR-l	1.35	95	**********
	HF-m	7.54	131	**********	SB-l	3.44	84	**********+	OS-l	1.39	1085	**********+++++
	LU-m	7.84	102	**********	○ SN-l	3.60	501	**********++++	○ ZN-k	1.44	172	**********+
	YB-m	8.15	105	**********	○ K -k	3.74	166	**********++	○ CU-k	1.54	6242	**********+++++++
○	AL-k	8.34	527	**********++++	IN-l	3.77	58	**********+	NI-k	1.66	59	**********
	BR-l	8.37	129	**********	U -m	3.91	40	**********	TM-l	1.73	55	**********+
	ER-m	8.82	67	**********	CD-l	3.96	51	**********	CO-k	1.79	58	**********
	SE-l	8.99	52	**********	TH-m	4.14	38	**********	○ FE-k	1.94	409	**********++++++
	HO-m	9.20	63	**********	AG-l	4.15	34	*********	GD-l	2.05	31	*********
	DY-m	9.59	52	**********	PD-l	4.37	29	*********	MN-k	2.10	29	*********
○	AS-l	9.67	76	**********+	RH-l	4.60	31	*********	EU-l	2.12	25	*********
○	MG-k	9.89	104	**********++	CL-k	4.73	29	*********+	SM-l	2.20	21	*******
	TB-m	10.00	41	**********	RU-l	4.85	22	*******	CR-k	2.29	18	*******
	GE-l	10.44	35	*********	S -k	5.37	13	******	ND-l	2.37	15	******
	GA-l	11.29	30	*********	MO-l	5.41	13	******	PR-l	2.46	15	******
○	NA-k	11.91	66	**********+	NB-l	5.72	7	*****	V -k	2.50	13	******
	**	14.72	25	********+	ZR-l	6.07	4	****	CE-l	2.56	12	******
	F -k	18.32	8	*****	○ P -k	6.16	31	********++	LA-l	2.67	9	*****

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
NA MG AL SI P K CA FE CU ZN AS SN ~~RB~~ ~~OS~~ PB ←検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
BA YB

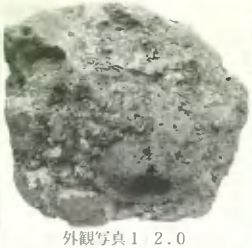
Photo.17のSE（２次電子像）に示した銅粒と微小粒状錫及び針状結晶の分析結果である。検出元素を強度（Count）順に並べると次の様になる。銅（Cu）6,242珪素（Si）3,538、アルミニウム（Al）527、錫（Sn）501、カルシウム（Ca）484、鉄（Fe）409、鉛（Pb）173、亜鉛（Zn）172、カリウム（K）166、マグネシウム（Mg）104、ナトリウム（Na）66、燐（P）31である。当取鍋内の主要合金は銅（Cu）と錫（Sn）であって青銅の細工が想定できる。他の元素はガラス質成分（Si＋Al＋Ca＋Mg＋K＋Na）と銅の随伴微量元素（Pb、Zn、As）である。

Table. 4　取鍋内溶着物（SAIT-26）のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

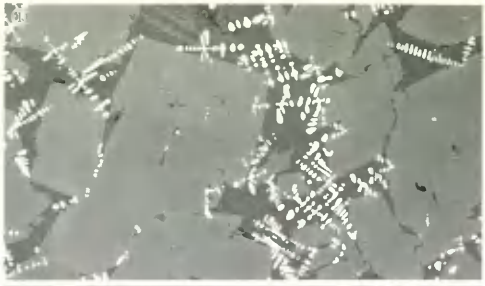
(1) SAIT-1
亀田M区SD6溝出土

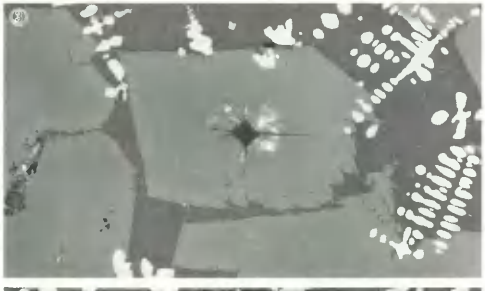
鉱石製錬滓

①×100 ②×400
ファイヤライト+微小ヴスタイト
③×200硬度圧痕
ファイヤライト：701Hv荷重200g



外観写真1/2.0



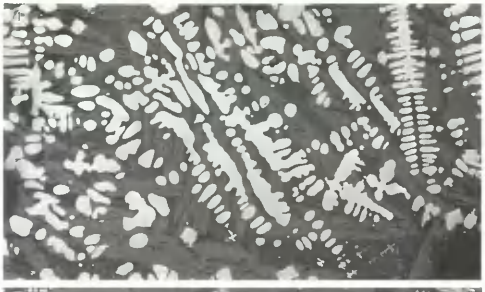


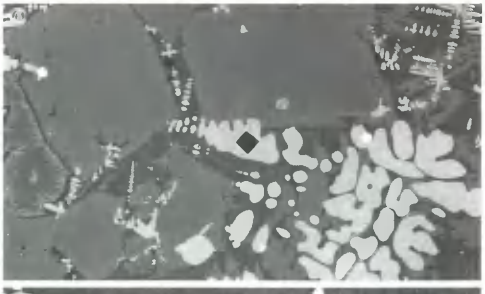
(2) SAIT-2
前田M1区包含層23H~24HGr

鉱石製錬滓

④×100 ⑤×400
ファイヤライト＋ヴスタイト
⑥×200硬度圧痕
ヴスタイト：473Hv荷重100g

外観
写真
1/2.9





(3) SAIT-3
亀田M5区包含層出土

炉壁溶融物

⑦×400
暗黒色ガラス質スラグ中の
マグネタイト

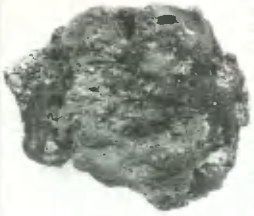
外観写真1 4.3

Photo. 1　鉄滓の顕微鏡組織

(4) SAIT-4
亀田B1区トレンチ包含層

砂鉄製錬滓

1×100
ウルボスピネル+イルミナイト



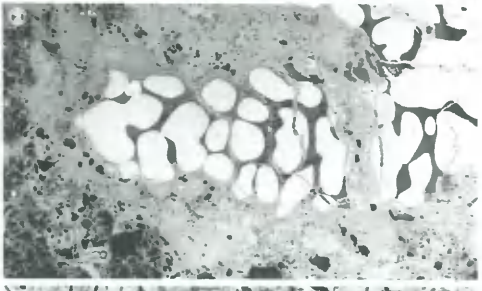
外観写真1 1.7

(5) SAIT-5
前田BOX3区包含層出土

鉄塊系遺物

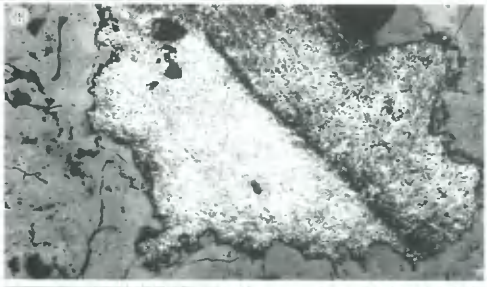
1×100
錆化鉄(ゲーサイト)中の
ヴスタイト
硬度圧痕写真割愛
ヴスタイト:435Hv荷重200g

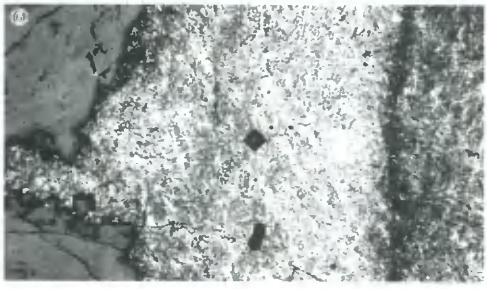
外観写真1 1.6



(6) SAIT-6
前田M4区No.428Pit柱穴
鉄塊系遺物
3×100錆化鉄(ゲーサイト)
過熱組織痕跡
1×100 5×400ピクラルetch
水冷組織:マルテンサイト
6(7)×200 硬度圧痕
6 773Hv荷重200g
7 825Hv荷重200g

外観写真1 1.0





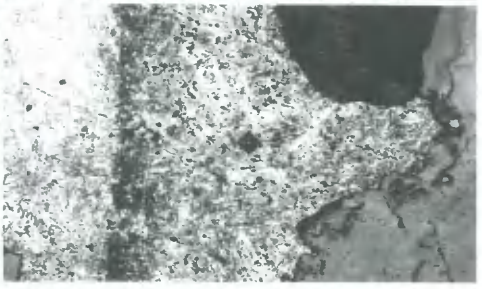
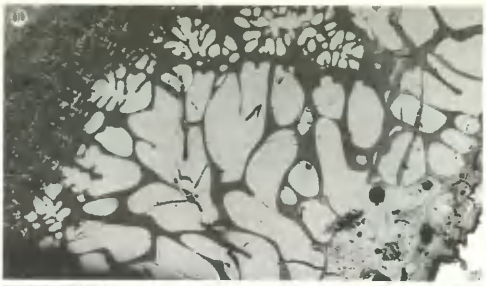
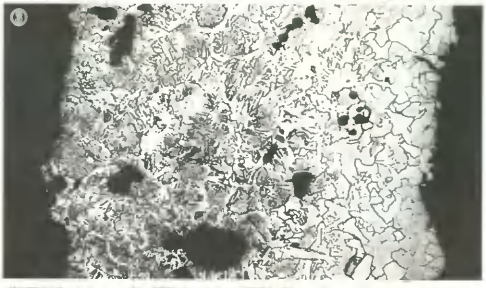


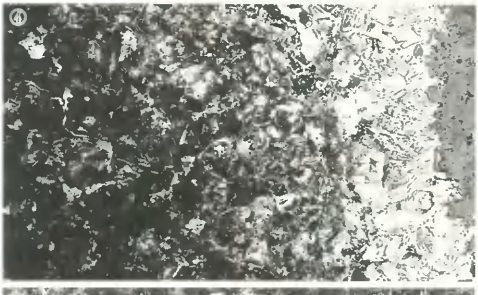
Photo. 2　鉄滓と鉄塊系遺物の顕微鏡組織

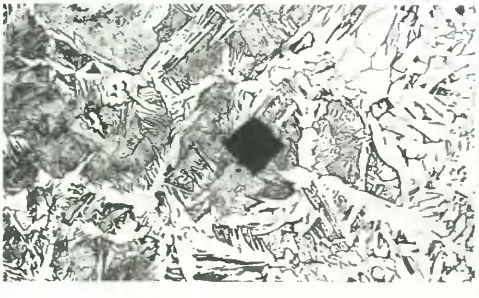
(7) SAIT-7
前田BOX２区SD３溝
①×100表皮スラグ：ヴスタイト
②×400介在物（FeS）
③×50 ④×100ナイタルetch
⑤⑥×400ピクラルetch
⑦⑧⑨×200硬度圧痕
⑦：フェライト124Hv荷重200g
⑧：過熱組織140Hv荷重200g
⑨：過共析鋼：337Hv荷重200g

外観写真１　2.2









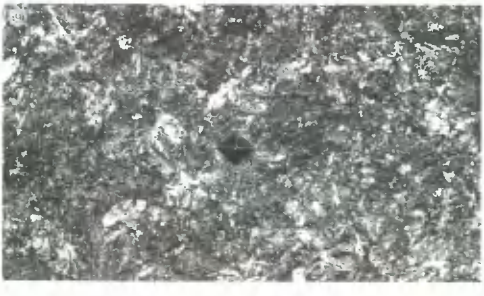
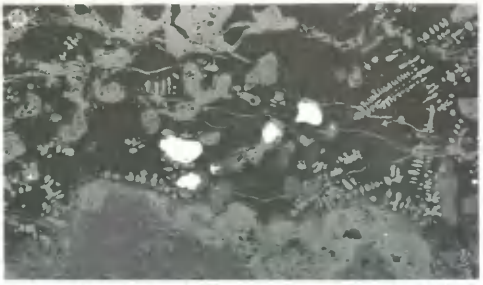


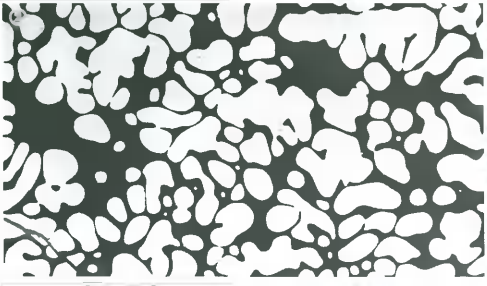
Photo. 3　鉄塊系遺物の顕微鏡組織

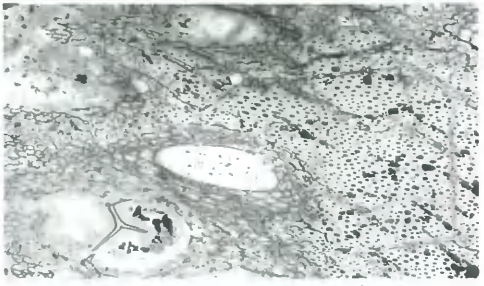
(8) SAIT-8
前田BOX3区建物4 P-10出土

鉄塊系遺物

1×100ガラス質スラグと錆化鉄
2×100表皮スラグ
ヴスタイト+ファイヤライト
3×100木炭に鉄が置換

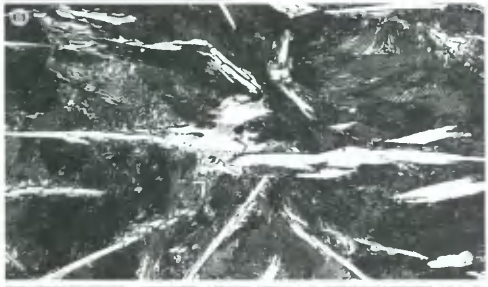


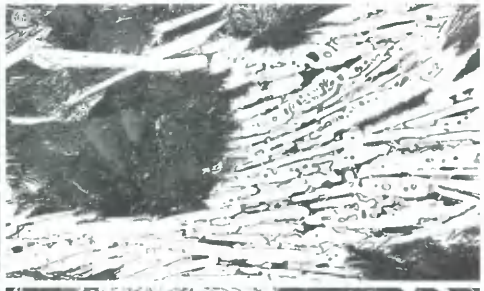


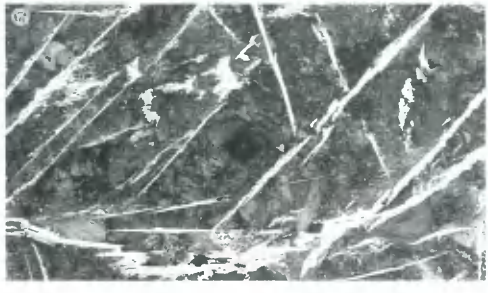


(9) SAIT-9
前田M3区包含層19I 19Jグリット
鉄塊系遺物
1×400介在物 (FeS)
2・6×400ピクラルetch
過共析鋼と白鋳鉄
7・8×200硬度圧痕
7パーライト：289Hv荷重200g
8白鋳鉄：713Hv荷重200g

外観写真







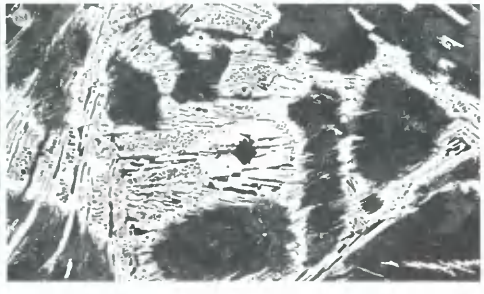


Photo. 4　鉄塊系遺物の顕微鏡組織

(10) SAIT-10
前田BOX2包含層出土
鉄塊系遺物
①×400介在物（FeS）
②×100表皮スラグ：ヴスタイト
③×400ピクラルetchパーライト
④-⑥×100ナイタルetch
⑦-⑨×200硬度圧痕
⑦：158Hv　⑧：288HV
⑨：374Hv荷重200g

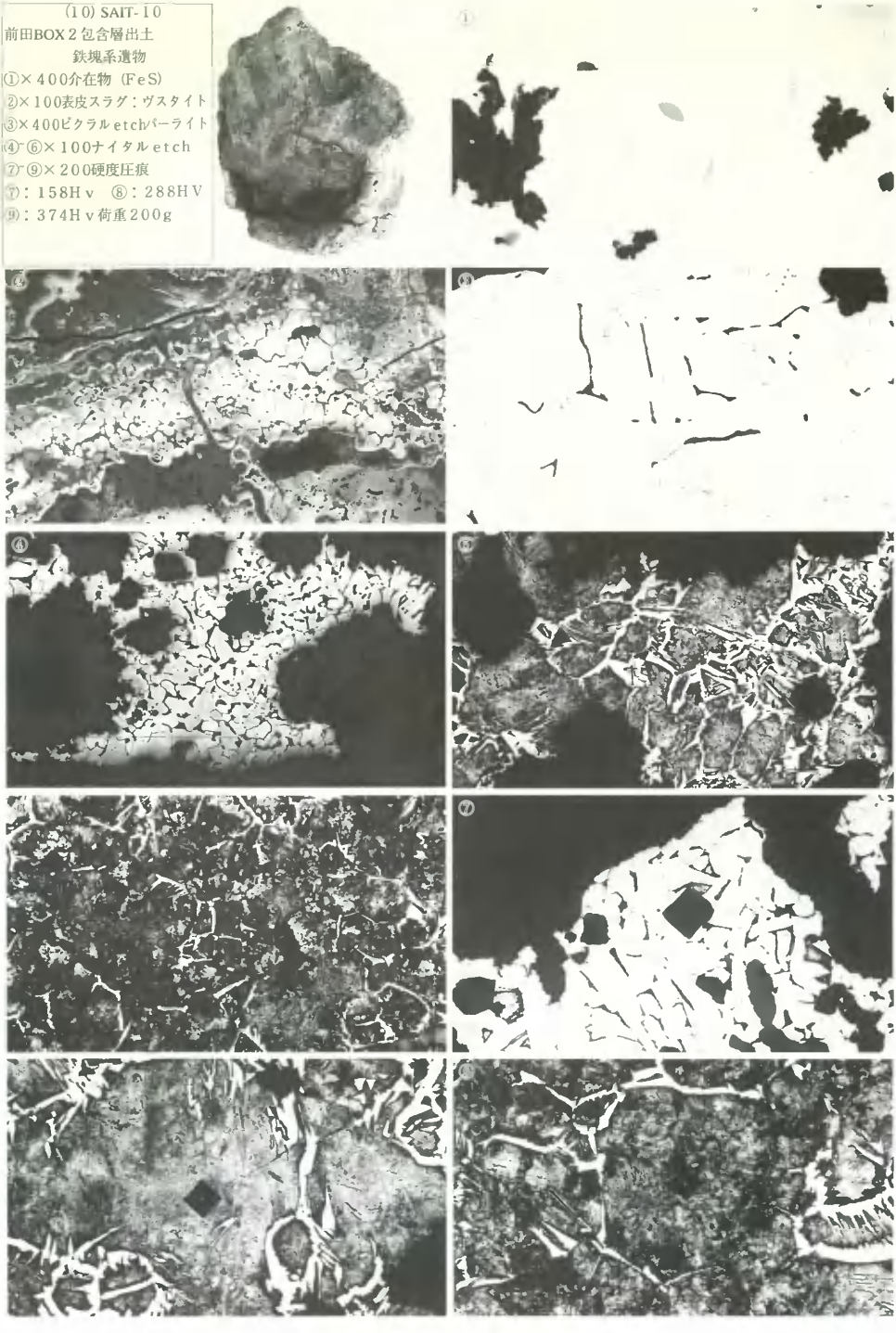
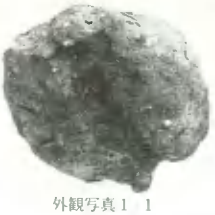
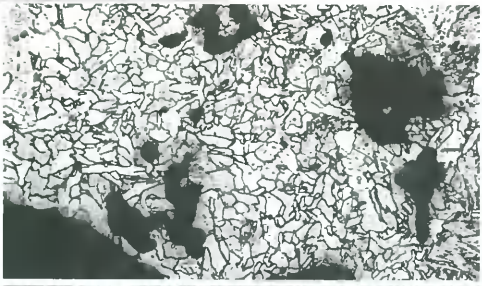


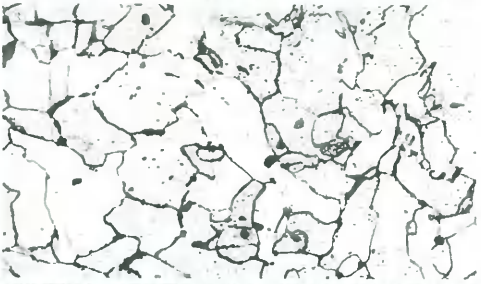
Photo. 5　鉄塊系遺物の顕微鏡組織

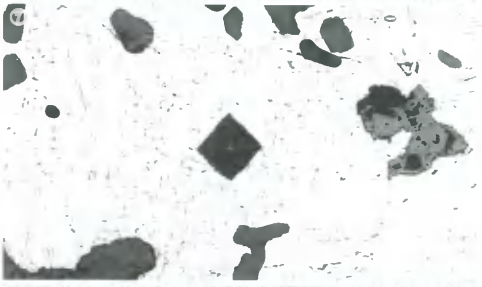
(11) SAIT-11
亀田B1区包含層出土
鉄塊系遺物
①×100表皮スラグ
②×100 ③×400低炭域
④×100 ⑤×400高炭域
⑥×400介在物（FeS）
⑦⑧⑨×200硬度圧痕
⑦：109Hv ⑧：192Hv
⑨：275Hv荷重200g

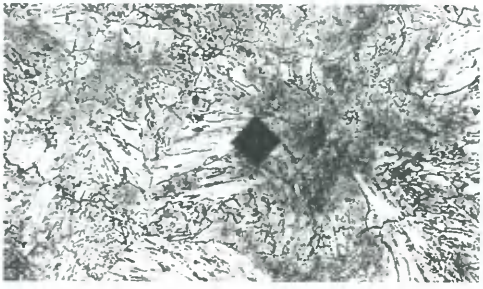


外観写真1/1









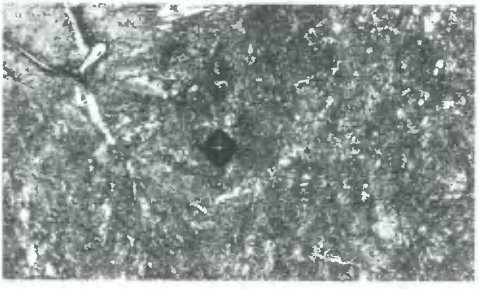


Photo. 6　鉄塊系遺物の顕微鏡組織

(12) SAIT-12
前田M4区No.455 No.540

含鉄鉄滓

①×100表皮スラグ
錆化鉄粒＋ウスタイト
②×100：ピクラルetchフェライト
③×200硬度圧痕
フェライト：123Hv荷重100g

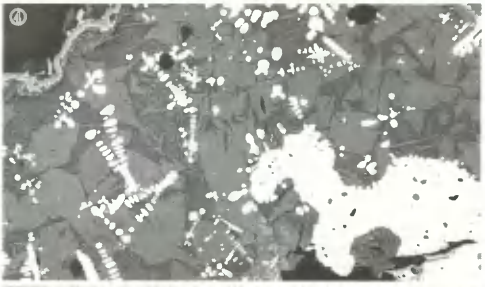
外観
写真
1/2.7

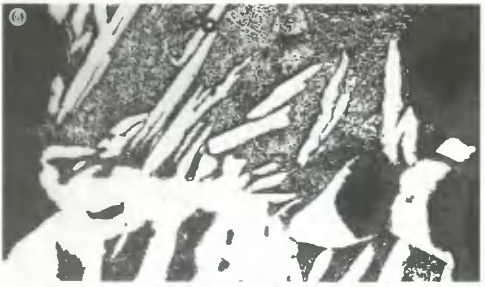
(13) SAIT-13
前田BOX2区包含層出土

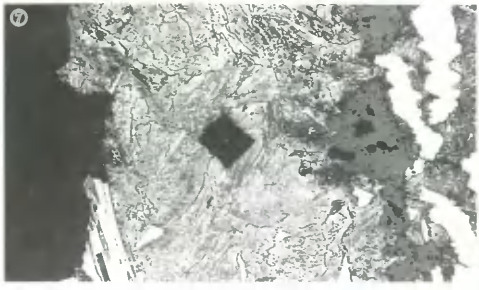
鉄塊系遺物

④×100表皮スラグ
⑤×100 ⑥×400
ピクラルetch：過熱組織
⑦⑧×200硬度圧痕
⑦：中炭域167Hv荷重200g
⑧：フェライト124Hv荷重200g

外観
写真
1/1.1







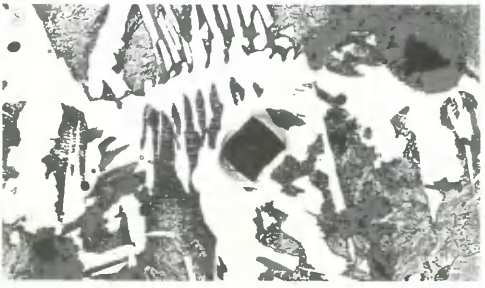


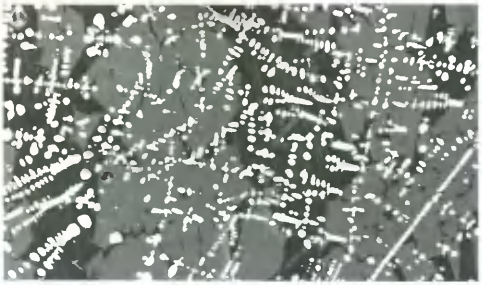
Photo. 7　含鉄鉄滓と鉄塊系遺物の顕微鏡組織

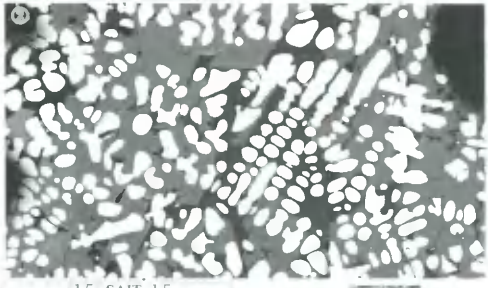
(14) SAIT-14
前田M3区包含層19IGr

精錬鍛冶滓

②×100 ③×400
ヴスタイト＋ファイヤライト
ヴスタイト粒内にはヘーシナイトが析出する。

外観写真1 2.0



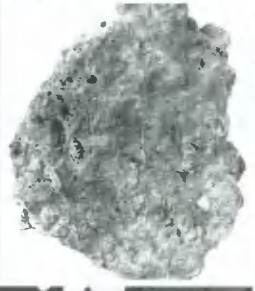


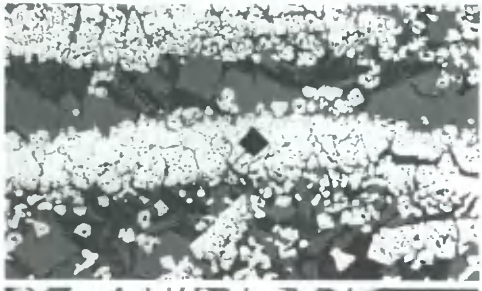
(15) SAIT-15
前田M3区包含層19IGr

精錬鍛冶滓

①×100 ⑤×400
ヴスタイト＋ファイヤライト
⑥×200硬度圧痕
マグネタイト：516Hv荷重200g

外観写真1 2.4





(16) SAIT-16
亀田M4区包含層黒炭色層

鍛錬鍛冶滓

⑦×100
ヴスタイト大粒晶出

外観写真1 1.4

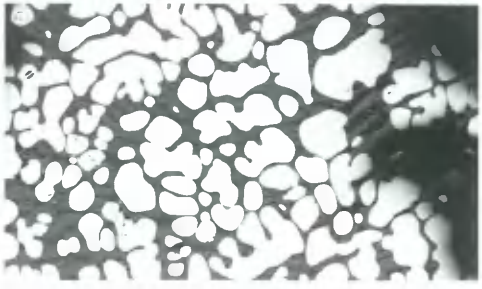


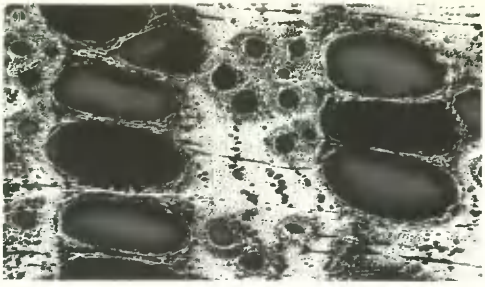
Photo. 8　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

(17) SAIT-17
亀田M6区包含層南部

黒鉛化木炭

①×50
木炭組織に鉄が置換している

外観
写真
1／1.4



(18) SAIT-18
前田M区Pit 134

磁鉄鉱石

②×100脈石の多い個所
③×100脈石の少ない個所
④×200硬度圧痕
509Hv荷重200g

外観写真1／1

(19) SAIT-19
亀田M2区包含層11RGr

被熱磁鉄鉱石

⑤×100クラック鮮明
⑥×100脈石：左側
⑦×200硬度圧痕
505Hv荷重200g

外観写真1／1.0

表側

裏側

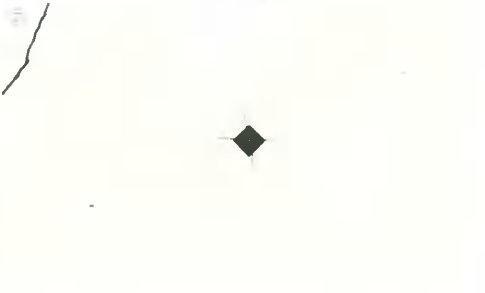


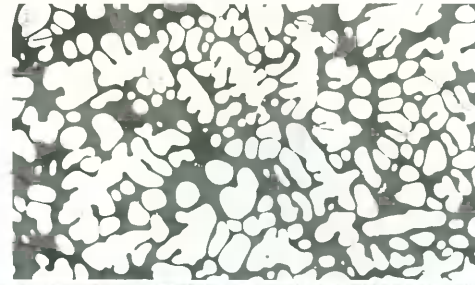
Photo. 9　黒鉛化木炭と磁鉄鉱石の顕微鏡組織

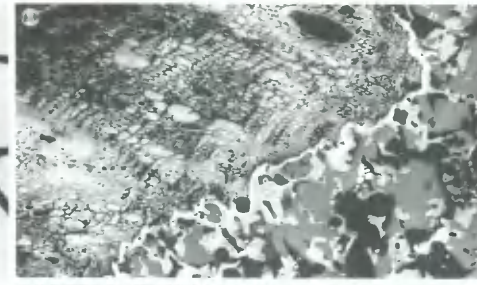
20 SAIT-20
前田M4区No.482土壙

精錬鍛冶滓

1×100 2×400
ヴスタイト＋ファイヤライト
3×100
木炭が鉄と置換

外観写真1 1.9



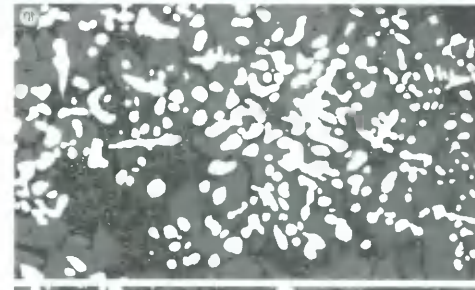


21 SAIT-21
亀田M2区No.9溝

鉱石製錬滓

1×100
ファイヤライト＋ヴスタイト

外観写真1 2.6



22 SAIT-22
亀田M2区包含層13TGr

鉱石製錬滓

5×6×100 2×400
ファイヤライト＋ヴスタイト
ヴスタイト粒内析出物あり

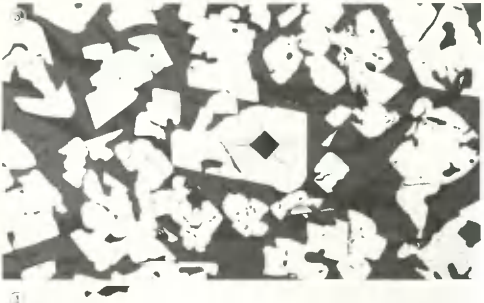
外観写真1 2.9

Photo. 10 鉄滓の顕微鏡組織

(23) SAIT-23
前田BOX２区Pit 262

精錬鍛冶滓

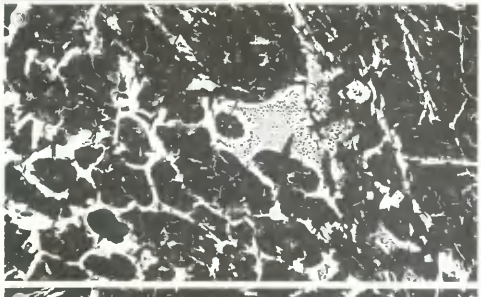
①×100
ヴスタイト＋ファイヤライト
②③×200硬度圧痕
②ヴスタイト：509Hv荷重200g
③マグネタイト：588Hv荷重200g
外観写真１ 1.9

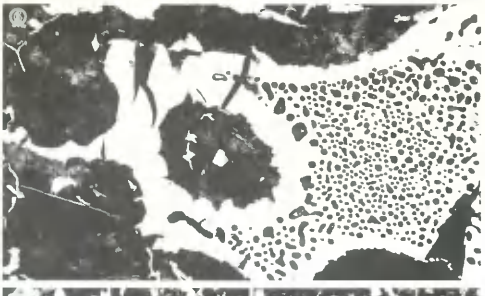


(24) SAIT-24
前田M４区No.473・474住居

小割り鉄塊
①×400介在物（FeS）
②⑦×100 ⑤×400
（過共析鋼パーライトに白色板状セメンタイトの白鋳鉄組織混在）
⑥×200硬度圧痕
セメンタイト：946Hv荷重200g

外観写真 1/1.1





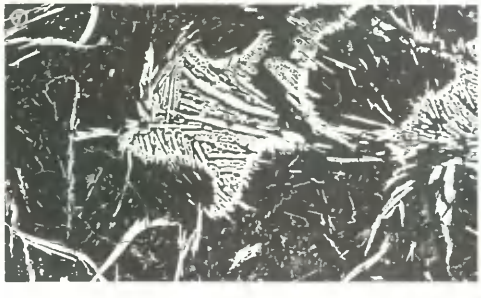


Photo. 11　鉄滓と鉄片の顕微鏡組織

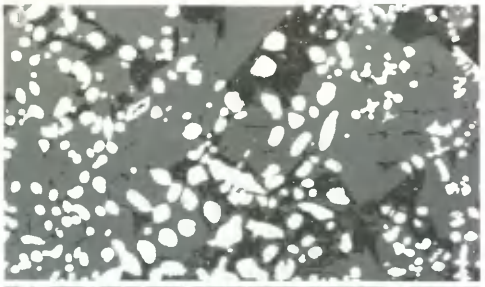
(25) SAIT-25
亀田B1区SX1

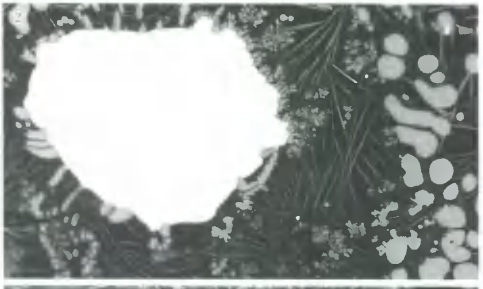
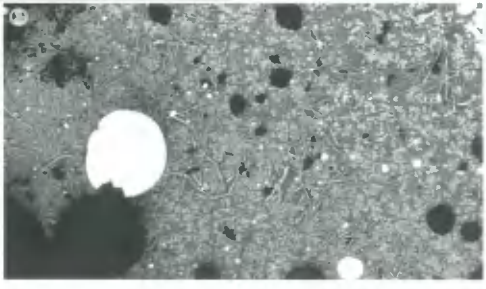
鉱石製錬滓

①×100
ファイヤライト＋ヴスタイト

外観写真1 2.5

(26) SAIT-26
前田M7区No.7建物Pit2
取鍋内付着物
②×400白色大粒：銅粒
③×100 ④×400
⑤⑥⑦⑧×200硬度圧痕
⑤67Hv ⑥59.8Hv荷重100g
大粒白色部は純銅
⑦178Hv:50g ⑧203Hv:25g
小粒白色部は錫合金か？
外観写真1 2.5



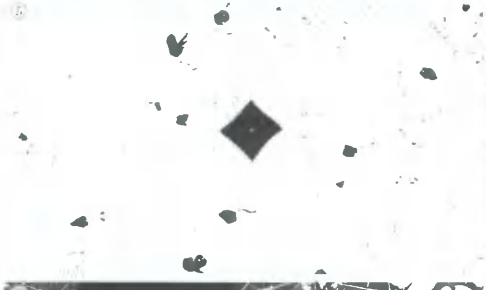
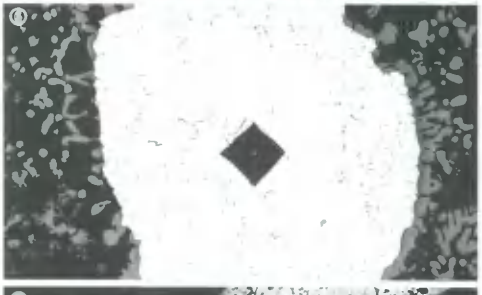
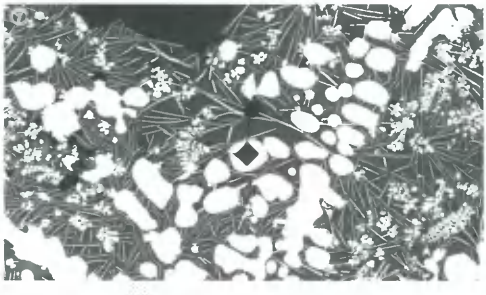
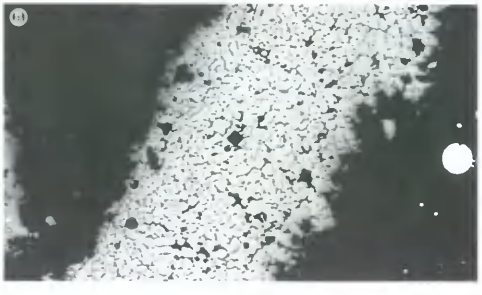
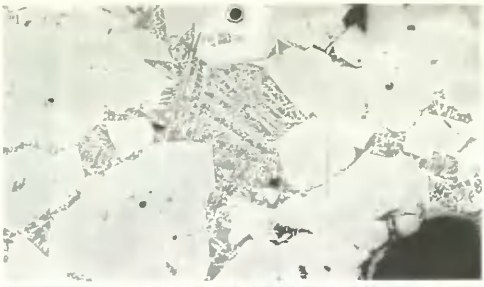





Photo.12 鉄滓と取鍋内溶着物の顕微鏡組織

(27) KANS-1
墳丘下出土
鉱石精錬滓
①×100 ②×400
ファイヤライト+微小マグネタイト
③×200硬度圧痕
ファイヤライト：701Hv荷重200g

外観
写真
1／2.5



(28) KANS-2
墳丘下出土
鉄塊系遺物
①×100表皮スラグ
ウスタイト+ファイヤライト
②×400介在物と表皮スラグ
③×100パーライトとフェライト
④×200硬度圧痕
フェライト：112Hv荷重200g

外観写真1 1.3

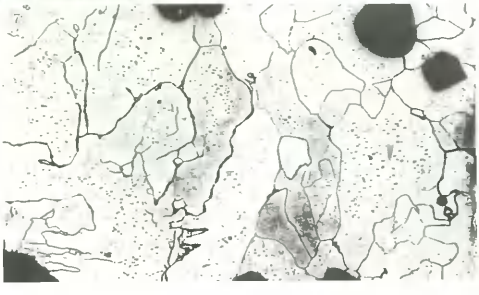
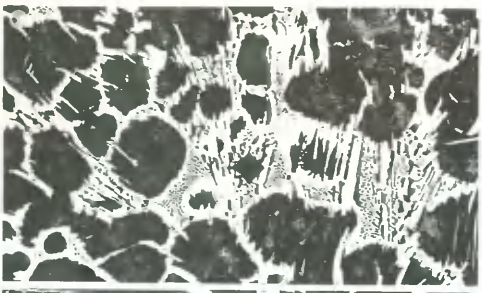
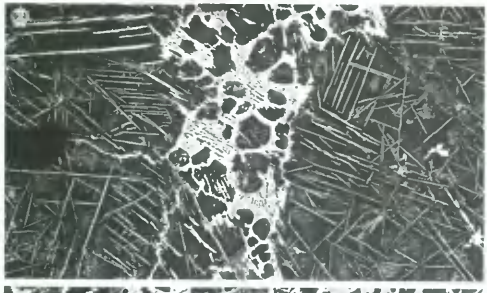


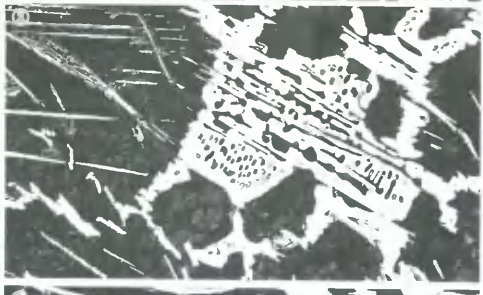
Photo. 13　鉄滓と鉄塊系遺物の顕微鏡組織

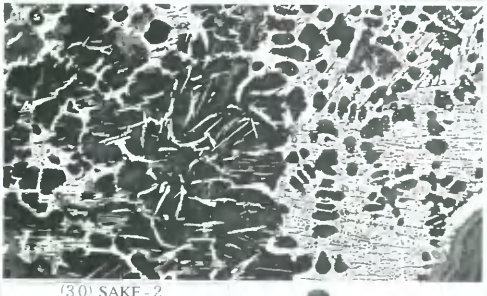
(29) SATF-29
斎富古墳群2号墳出土
鉄塊系遺物
①×200硬度圧痕
左:黒色部パーライト:366Hv 100g
右:白色部セメンタイト:463Hv 200g
②×100 ③×400
過熱組織と白鋳鉄
④×100 ⑤×400
亜共晶組成の白鋳鉄

外観
写真
1/1.4



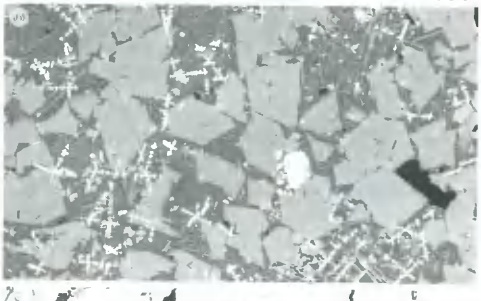






(30) SAKF-2
斎富古墳群2号墳出土
鉱石製錬滓
④×100 ⑤×400
ファイヤライト+マグネタイト
①×200硬度圧痕
102Hv 荷重200g
不明鉱物

外観
写真
1/1.8



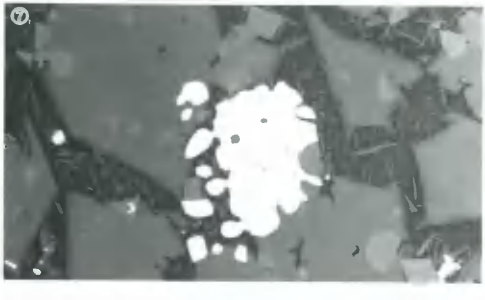
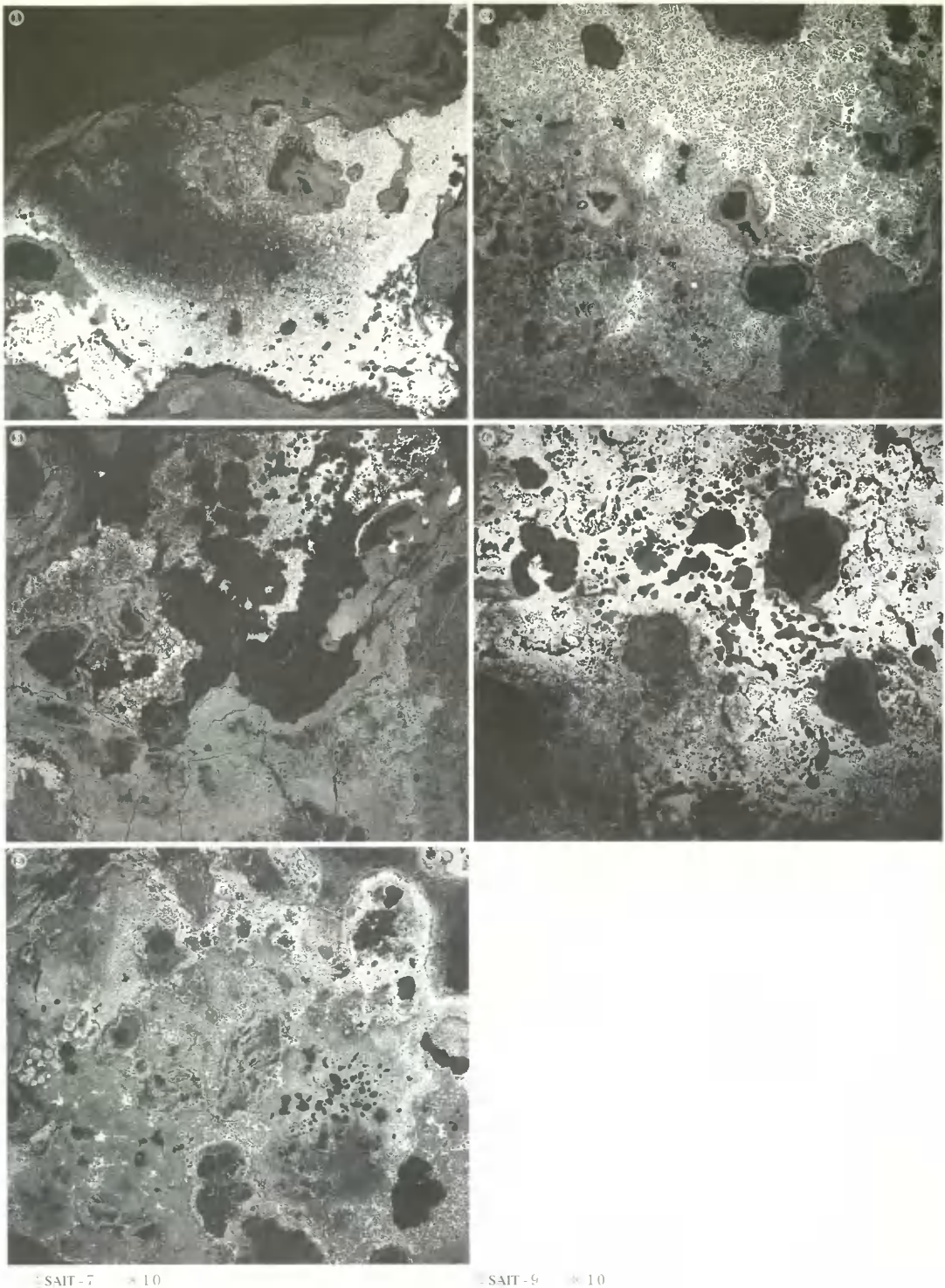
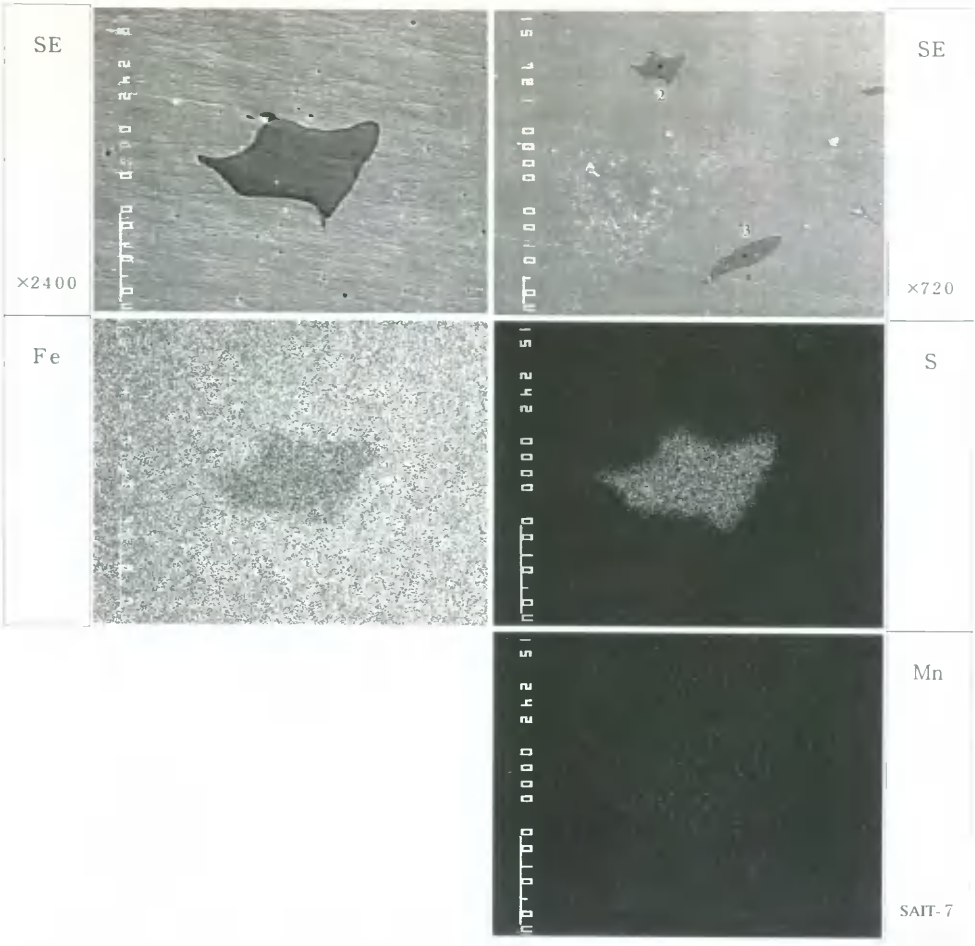


Photo. 14　鉄塊系遺物と鉄滓の顕微鏡組織



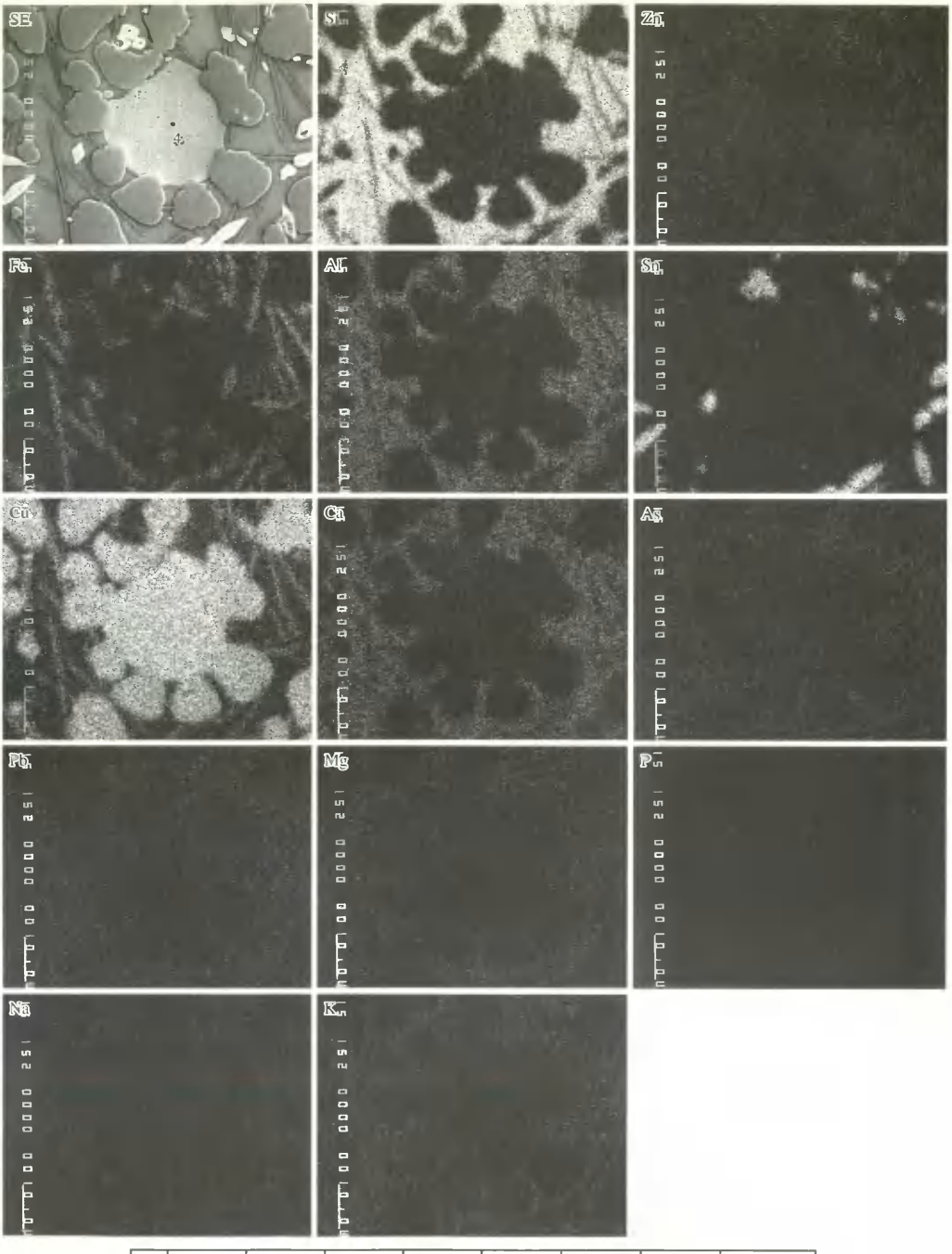
①SAIT-7　×10
②SAIT-9　×10
③SAIT-10　×10
④SAIT-11　×10
⑤SAKE-1　×10

Photo.15　鉄塊系遺物のマクロ組織



	P	S	V	Cr	Mn	Fe	TOTAL
2	0.000	37.635	0.036	0.000	0.804	60.506	98.981
3	0.001	37.792	0.030	0.000	0.615	61.765	100.203

Photo. 16　鉄塊系遺物（SAIT-7）鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値



	Ti	P	Cu	Mn	S	Zn	Fe	TOTAL
4	0.000	0.485	102.316	0.000	0.009	0.000	0.148	102.958

Photo. 17　取鍋内溶着物（SAIT-26）の特性X線像と定量分析結果

斎富遺跡亀田調査区における花粉分析・植物珪酸体分析

パリノ・サーヴェイ社

はじめに

斎富遺跡(赤磐郡山陽町斎富に所在)は、山陽町を南下する砂川左岸に広がる沖積低地に位置する。本遺跡では、低地部で縄文時代晩期の旧河道・古墳時代の溝跡や土器などの遺物が検出され、微高地部で弥生時代中期後半～中世の集落跡や遺物が検出されている。また、奈良時代の官衛関連の遺構も確認されている。

今回、弥生時代中期後半～中世の時期に微高地上で集落跡が検出されていることから、低地部が生産域であったのではないかと推定された。しかし、畦畔など水田に関連する遺構が検出されていない。そこで、本遺跡周辺の古植生と稲作の消長について検討することを試みるために、花粉分析・植物珪酸体分析を実施することにした。なお、分析点数は、花粉分析・植物珪酸体分析とも合計6点である。

1．層序と試料

試料採取地点の層序は、下位よりカ層～ア層6層に分層されており、その上位に盛土がある（図1・2)。各層とも砂混じりシルト質粘土からなる。試料は、カ層～ア層を対象に層位試料として採取された合計6点である（表1)。

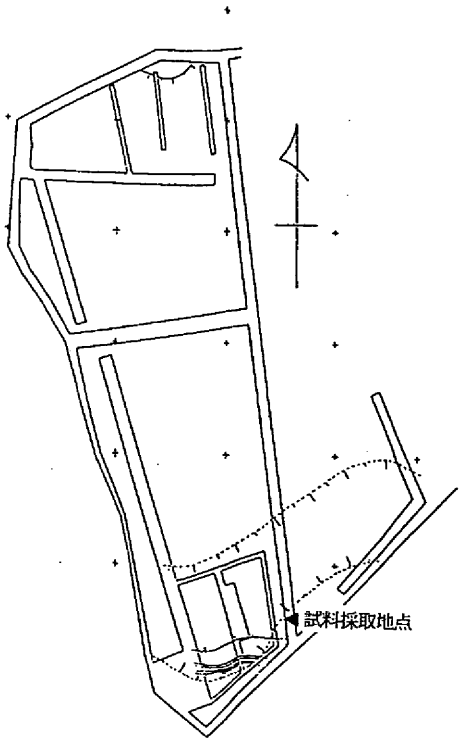


図1　斎富遺跡M－7区の分析試料採取地点

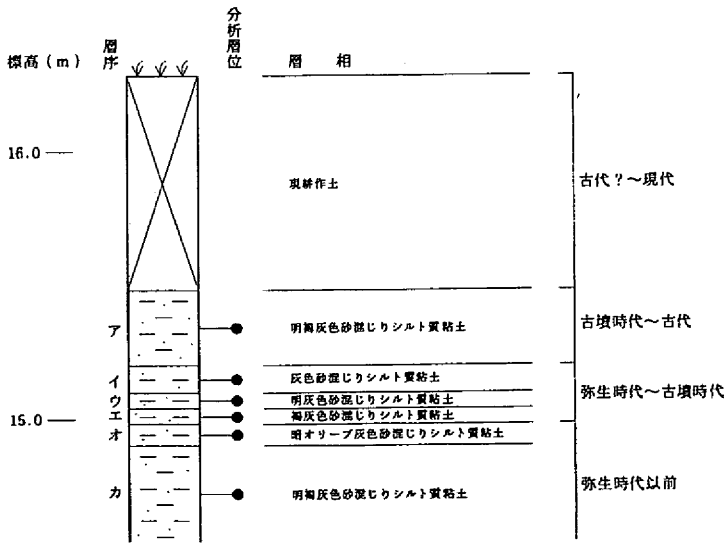


図2　斎富遺跡M－7区試料採取地点の模式柱状図

表１．分析試料の一覧

層位	土性	時代・時期	P	P0
ア　層	明褐灰色砂混じりシルト質粘土	古墳時代～古代	○	○
イ　層	灰色砂混じりシルト質粘土	弥生時代～古墳時代	○	○
ウ　層	明灰色砂混じりシルト質粘土		○	○
エ　層	褐灰色砂混じりシルト質粘土		○	○
オ　層	暗オリーブ灰色砂混じりシルト質粘土	弥生時代以前	○	○
カ　層	明褐灰色砂混じりシルト質粘土		○	○

註）P：花粉分析　　P0：植物珪酸体分析

２．分析方法

（１）花粉分析

花粉・胞子化石は、湿重約10ｇの試料についてKOH処理、重液分離(ZnBr２：比重2.2)、HF処理、アセトリシス処理の順に物理・化学的な処理を施して、試料から分離、濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら、出現する全ての種類(Taxa)について同定・計数を行う。

結果は同定・計数結果の一覧表と花粉化石群集の変遷図として表示する。図中の出現率は、木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・胞子が総数より不明花粉を除いた数を、それぞれ基数として百分率で算出する。なお、図表中で複数の種類をハイフォン(－)で結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

（２）植物珪酸体分析

試料約５ｇについて、過酸化水素水と塩酸による有機物と鉄分の除去、超音波処理による試料の分散、沈降法による粘土分の除去、ポリタングステン酸ナトリウム(比重2.6)による重液分離を順に行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡し易い濃度に希釈した後、カバーガラスに滴下し、乾燥させる。これを、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

検鏡は光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現するイネ科植物の葉部(葉身と葉鞘)の短細胞に由来する植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身の機動細胞に由来する植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、同定・計数する。なお、同定には、近藤・佐瀬(1986)の分類を参考にする。

結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数を一覧表で示す。また、各種類の出現傾向から、生育していたイネ科植物を検討するために、植物珪酸体組織図を作成する。出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数として百分率で算出する。なお、●○は１％未満の試料において検出した種類を示す。

３．微化石の産状

（１）花粉化石

結果は、表１・図３に示す。花粉化石の保存状態が悪いが、オ層を除く５点から良好に検出される。木本花粉は、ツガ属・マツ属・スギ属・コナラ属アカガシ亜属が多産する。この内、アカガシ亜属は上位に向かい減少する。この他、モミ属・クマシデ属－アサダ属・コナラ属コナラ亜属などを伴う。一方、草本花粉では、イネ科が多産するが、ア層になると減少する。この他、ガマ属・サジオモダカ属オモダカ属・アヤツリグサ科・サナエタデ節－ウナギツカミ節・ヨモギ属・ミズワラビ属・サンショウモなどを伴う。

（２）植物珪酸体

結果は、表２・図４に示す。イネ科植物起源の植物珪酸体は、短細胞珪酸体・機動細胞珪酸とも良好に検出される。

植物珪酸体組織は、カ層、オ層～ウ層、イ層・ア層でそれぞれ異なる。カ層ではタケ亜科が高率に出現し、イネ属・キビ族・ヨシ属などを伴う。オ層～ウ層にかけてはタケ亜科・ネザサ節が減少して、栽培種のイネ属機動細胞珪酸体が50％以上と高率に検出される。イ層・ア層ではイネ属機動細胞珪酸体の出現率が低下し、約30％となる。なお、籾に形成される穎珪酸体もオ層～ア層で検出される。

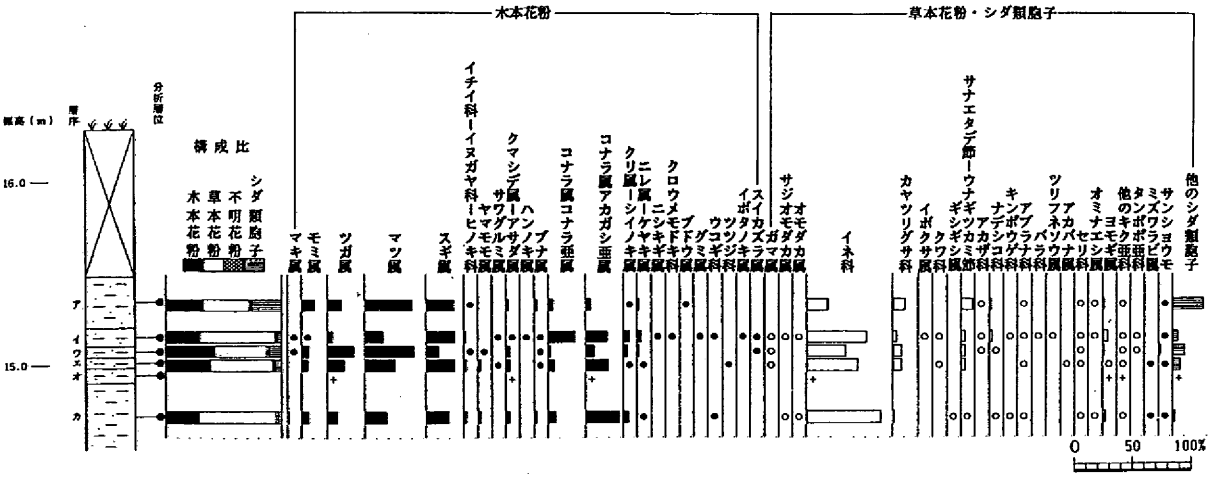


図３　斎富遺跡Ｍ－７区における花粉化石群集の層位的分布

出現率は、木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として百分率で算出した。なお、●○は１％未満、＋は木本花粉の100個体未満における試料において産出した種類を示す。

表1　斎富遺跡M－7区の花粉分析結果

種類（Taxa）	層名	ア	イ	ウ	エ	オ	カ
木本花粉							
マキ属		-	2	2	-	-	3
モミ属		24	2	15	12	-	16
ツガ属		28	9	52	36	2	20
マツ属		88	36	100	65	-	47
スギ属		51	58	24	61	-	49
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科		2	3	1	4	-	6
ヤマモモ属		-	-	2	4	-	5
サワグルミ属		-	2	-	2	-	-
クマシデ属－アサダ属		5	2	7	7	1	7
ハンノキ属		-	2	-	-	-	-
ブナ属		4	2	2	1	-	5
コナラ属コナラ亜属		10	54	6	12	-	16
コナラ属アカガシ亜属		8	44	18	49	2	72
クリ属－シイノキ属		2	13	8	2	-	10
ニレ属－ケヤキ属		3	7	3	2	-	2
ニシキギ属		-	1	-	-	-	-
クロウメモドキ科		-	1	-	-	-	-
ブドウ属		1	-	-	-	-	-
グミ属		-	1	-	-	-	-
ウコギ科		-	1	-	-	-	1
ツツジ科		-	-	-	1	-	-
イボタノキ属		-	1	-	-	-	-
スイカズラ属		-	1	1	-	-	-
草本花粉							
ガマ属		-	3	5	1	-	-
サジオモダカ属		-	1	-	-	-	1
オモダカ属		-	4	-	-	-	2
イネ科		120	415	182	292	1	561
カヤツリグサ科		71	27	41	46	-	10
イボクサ属		-	1	-	-	-	-
クワ科		-	1	-	1	-	-
ギシギシ属		-	-	-	-	-	1
サナエタデ節－ウナギツカミ節		68	27	19	23	-	8
アカザ科		1	5	1	-	-	-
ナデシコ科		8	16	1	-	-	4
キンポウゲ科		-	4	-	-	-	8
アブラナ科		2	7	-	1	-	2
バラ科		-	2	-	-	-	-
ツリフネソウ属		-	1	-	-	-	-
アカバナ属		-	-	-	2	-	-
セリ科		1	4	1	1	-	1
オミナエシ属		2	1	-	-	-	1
ヨモギ属		10	33	6	6	4	14
他のキク亜科		1	5	2	1	1	2
タンポポ亜科		-	1	2	-	-	-
不明花粉		12	13	13	11	-	15
シダ類胞子							
ミズワラビ属		-	-	-	1	-	1
サンショウモ		1	1	6	5	-	2
他のシダ類胞子		180	30	56	38	34	22
合計							
木本花粉		226	242	241	258	5	259
草本花粉		284	558	260	374	6	615
不明花粉		12	13	13	11	0	15
シダ類胞子		181	31	62	44	34	25
総花粉・胞子		703	844	576	687	45	914

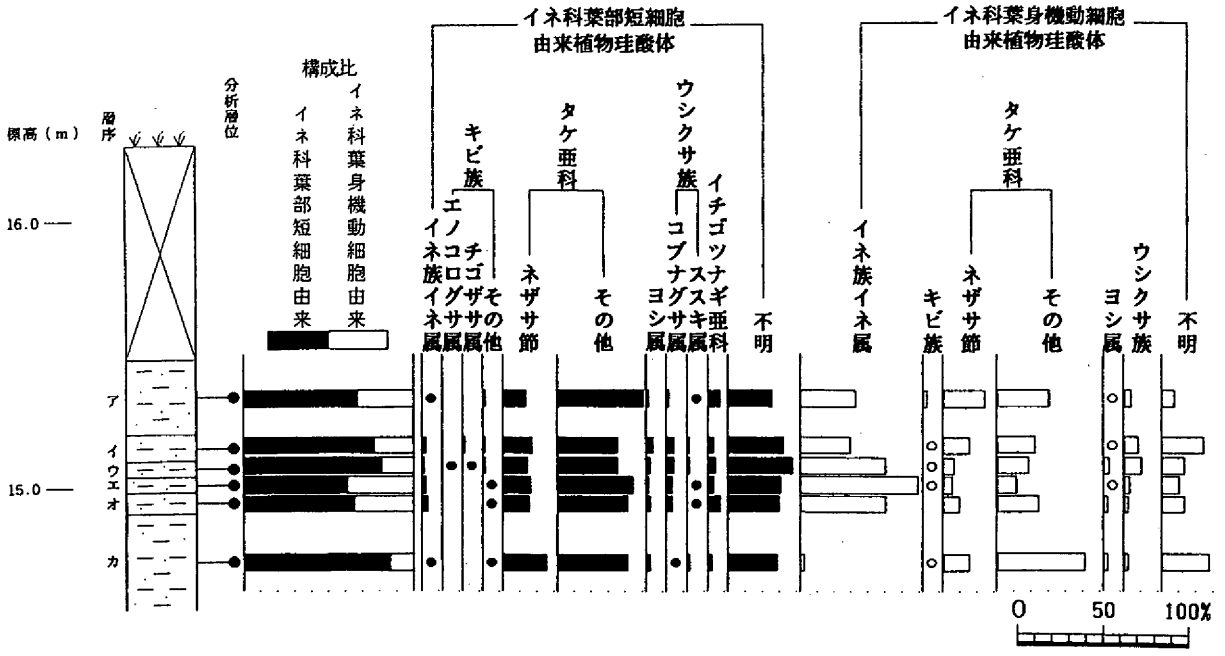


図４　斎富遺跡Ｍ－７区における植物珪酸体組成の層位的分布

出現率は、検出された短細胞珪酸体、機動細胞珪酸体ともにそれぞれの総数を基数として百分率で算出した。
なお、●○は１％未満の検出を示す。

表２．斎富遺跡Ｍ－７区の植物珪酸体分析結果

種類（Taxa）	層名	ア	イ	ウ	エ	オ	カ
木本花粉							
イネ科葉部短細胞珪酸体							
イネ族イネ属		3	7	6	4	7	2
キビ族エノコログサ属		-	-	2	-	-	-
キビ族チゴザサ属		-	4	2	-	-	-
キビ族（その他）		5	5	5	1	2	3
タケ亜科ネザサ節		43	61	62	36	39	161
タケ亜科（その他）		168	125	158	103	106	263
ヨシ属		4	13	10	3	5	12
ウシクサ族コブナグサ属		4	14	19	8	7	5
ウシクサ族ススキ属		3	5	5	1	2	7
イチゴツナギ亜科		23	10	17	6	17	14
不明キビ型		19	34	55	24	34	45
不明ヒゲシバ型		3	2	6	2	1	3
不明ダンチク型		62	80	104	44	41	132
イネ科葉身機動細胞珪酸体							
イネ族イネ属		53	32	53	101	71	2
キビ族		4	1	1	1	-	1
タケ亜科ネザサ節		40	16	6	8	13	16
タケ亜科（その他）		49	24	19	16	34	54
ヨシ属		1	1	3	1	3	2
ウシクサ族		7	9	11	5	3	2
不明		12	26	14	14	19	28
合計							
イネ科葉部短細胞珪酸体		337	360	451	232	261	647
イネ科葉身機動細胞珪酸体		166	109	107	146	143	105
検出個数		503	469	558	378	404	752
組織片							
イネ属穎珪酸体		3	2	3	2	15	-
イネ属短細胞列		2	-	-	1	1	-
イネ属機動細胞列		-	-	-	-	1	-
キビ型短細胞列		-	-	-	1	-	-

4．古植生について

（1）森林植生

カ層～ア層が体積した弥生時代～古墳時代の頃、本調査地点周辺はモミ属・ツガ属・マツ属・スギ属などの針葉樹や、アカガシ亜属などの広葉樹から構成される植生が存在していたと推定される。ただし、アカガシ亜属はア層になると減少することから、古墳時代～古代の頃には周辺の山地などから減少した可能性がある。アカガシ亜属が暖温帯常緑広葉樹林(照葉樹林)の主要構成要素であることから、当時調査地点の周辺は温暖帯に属してしたと推定される。また、モミ属・ツガ属は、暖温体から冷温帯にかけての推移帯(中間温帯)で森林を構成する種類であることから、広葉樹と混交あるいはモザイク状に分布していた可能性がある。また、ここでのマツ属・スギ属の多産は、人間の活動が著しくなり伐採や植林などの影響を受けて、周辺に代償植生が存在していたことを意味しているのかもしれない。しかし、本遺跡周辺では、高下遺跡で中層の層準に対する花粉分析が実施されているのみで(パリノ・サーヴェイ株式会社、未公表)、調査事例が少なく、詳細な検討がなされていないのが現状である。それゆえ、今回の調査結果は、周辺の古植生を考える上で重要な資料となり、今後ともにさらに資料を蓄積する必要がある。

（2）低地の植生

カ層が堆積した弥生時代以前とされる頃、調査地点の周辺は、サジオモダカ属・オモダカ属、ミズワラビ属・サンショウモなどの水生植物が生育する水湿地が存在しており、タケ亜科・キビ族・ヨシ属・ウシクサ族コブナグサ属・ススキ属・イチゴツナギ亜科などのイネ科植物を中心に、カヤツリグサ科やヨモギ属などの種類が生育していたと推定される。なお、本層では、栽培種のイネ属が検出される。しかし、イネ属機動細胞珪酸体は約５％と非常に低率である。したがって、本層が堆積した頃に周辺で稲作が行われていた可能性が低い。ここでのイネ属の産出は、イネ属の産出が上位のオ層や周辺地域からの流れ込みによる可能性がある。

オ層～ウ層が体積した弥生時代～古墳時代の頃、調査地点の周辺は、ガマ属・ミズワラビ属・サンショウモなどが生育する水湿地が存在しており、イネ科を中心とした草本類が生育していたと推定される。本層準では栽培種のイネ属機動細胞珪酸体が約70％もしくは50％の出現率を示し、籾に形成される穎珪酸体も検出される。現在の水田土層における機動細胞珪酸体の出現率について、調査した例として近藤(1988)がある。これによれば、10ha当り500kgのイナワラを堆肥する作業を８年間続けた水田耕作土層では、イネ属機動細胞珪酸体の出現率が16％以上とされている。この結果とイネ属機動細胞珪酸体の出現率を比較した結果、オ層～ア層まで高率である。このため、本遺跡で弥生時代以前～中世まで、調査地点の周辺低地では稲作が行われていたことが示唆される。とくにエ層に関しては、イネ属が約70％と最も多く検出され、上位層よりも高率であることから、耕作土層に相当する可能性がある。ただし、これについては、水田耕作土の特徴を把握するための土層断面観察や体積過程なども考慮するとともに、発掘調査成果も含めて本遺跡における稲作の様態を再検討する必要がある。なお、イ層・ア層になると、イネ属が多産するものの、機動細胞珪酸体の出現率が約30％とオ層～ウ層と比較して低率となる。これについては、耕作土層の削剝、稲作の様態の変化、耕作期間などの様々な要因と関係しており、ここでの調査結果のみで充分に検討することが不可能である。

〈引用文献〉

近藤錬三（1988）十二遺跡の植物珪酸体分析。鋳師屋遺跡群十二遺跡－長野県北佐久郡御代田町　十二遺跡発掘調査報告書、御代田町教育委員会、p.377-383。

近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析、その特性と応用。第四紀研究、25、p.31-64。

新旧遺構対照表

掲載遺構名	調査区	調査時遺構名	時期	掲載遺構名	調査区	調査時遺構名	時期
竪穴住居1	MM6	住居址3	弥生中期後葉	竪穴住居53	KM3	SH2	古墳後半中葉
竪穴住居2a	KM6	No.2住居－1	弥生後期前葉	竪穴住居54	KM2	No.37住居	古墳後半中葉
竪穴住居2b	KM6	No.2住居－2	弥生後期前葉	竪穴住居55	MBOX3	住居址13	古墳後半
竪穴住居3	KB1	SH3	弥生後期後葉	竪穴住居56	MBOX3	住居址11	古墳
竪穴住居4	KM4	住居址1	弥生後期前葉	竪穴住居57a	MBOX3	住居址14	古墳後半
竪穴住居5a	KM5	No.60住居	弥生後期中葉	竪穴住居57b	MBOX3	住居址15	古墳後半
竪穴住居5b	KM5	No.61住居	弥生後期中葉	竪穴住居57c	MBOX3	住居址16	古墳後半
竪穴住居5c	KM5	No.30住居	弥生後期中葉	竪穴住居58	MM2	SH5	古墳後半中葉
竪穴住居6a	KM5	No.41住居	弥生後期中葉	竪穴住居59	MM2	SH7	古墳後半後葉
竪穴住居6b	KM5	No.35住居	弥生後期中葉	竪穴住居60	MBOX3	住居址1	古墳後半中葉
竪穴住居7	KM5	No.50住居	弥生後期前葉	竪穴住居61	MBOX3	住居址3	古墳後半後葉
竪穴住居8	KM3西	No.104住居	弥生後期前葉?	竪穴住居62	MM2	SH1	古墳後半前葉
竪穴住居9	MM3	SH1、SD3	古墳？	竪穴住居63	MM6	住居址7	古墳後半中葉
竪穴住居10	MBOX3	住居址2	弥生中期後葉	竪穴住居64	MM6	住居址4	古墳後半後葉
竪穴住居11a	MBOX3	住居址8	弥生後期中葉	竪穴住居65	MM5	No.3住居	古墳後半末葉
竪穴住居11b	MBOX3	住居址7	弥生後期中葉	竪穴住居66	MM6	住居址5	古墳後半末葉
竪穴住居11c	MBOX3	住居址7	弥生後期中葉	竪穴住居67	MM6	住居址4	古墳後半末葉
竪穴住居11d	MBOX3	住居址9	弥生後期末葉	竪穴住居68	MM6	住居址8	古墳後半後葉
竪穴住居12	MM2	SH2・3	弥生中期後葉	竪穴住居69	MM4	No.476住居	古墳後半末葉
	MBOX3	住居址4・5・12		竪穴住居70	MM4	No.540住居	古墳後半後葉
竪穴住居13	MBOX3	住居址6	弥生後期前葉	竪穴住居71	MM4	No.455住居	古墳後半後葉
	MM2	SH4		竪穴住居72	MM4	No.441住居	古墳後半中葉
竪穴住居14	MM2	SH11	弥生後期前葉	竪穴住居73	MM4	No.333住居	古墳後半中葉
竪穴住居15a	MM2	SH10	弥生後期中葉	竪穴住居74	MM4	No.108住居	古墳
竪穴住居15b	MM2	SH9	弥生後期中葉	竪穴住居75	MBOX2	SH3	古墳後半中葉
竪穴住居16	KM6	住居址2	弥生後期中葉	竪穴住居76	MBOX1	2区住居址1	古墳後半
竪穴住居17a	MM7	No.6-1住居	古墳前半前葉	竪穴住居77	MBOX1	4区住居址1	古墳後半中葉
竪穴住居17b	MM7	No.6-2住居	古墳前半前葉	竪穴住居78	MBOX1	1区住居址1	古墳後半
竪穴住居18	MS1	住居址4	弥生後期前葉	掘立柱建物1	KB1	SB1	古墳後半
	MBOX1	SD20		掘立柱建物2	KM4	建物2	古墳
竪穴住居19	MBOX2	SH2、SD10	弥生後期	掘立柱建物3	KM4	建物3	古代以前
竪穴住居20	KB1	SH01	古墳前半後葉？	掘立柱建物4	KM4	建物4	?
竪穴住居21	KB1	SH2	古墳前半後葉	掘立柱建物5	KM2	SB1	奈良？
竪穴住居22	KM2	No.76住居	古墳前半前葉	掘立柱建物6	KM3	SB3	?
竪穴住居23	MBOX3	住居址17	弥生後期	掘立柱建物7	KM3	SB2	古墳後半中葉以降
竪穴住居24	MM2	SH6	古墳前半	掘立柱建物8	KM1	No.145建物	古墳後半以降
竪穴住居25	MM2	SH8	古墳後半前葉	掘立柱建物9	KM1	No.329建物	古墳後半中葉以降
竪穴住居26	MM2	SH13	古墳	掘立柱建物10	KS2	SB1	奈良？
竪穴住居27	MM2	SH12	古墳	掘立柱建物11	KM1	No.252建物	古墳後半以降
竪穴住居28	MM5	No.1住居	古墳前半後葉		KS2	SB2	
竪穴住居29	MM3	No.4住居	古墳前半前葉	掘立柱建物12	KM1	No.423建物	?
竪穴住居30	MM3	No.3住居	古墳前半前葉～中葉	掘立柱建物13	KM1	No.251建物	?
竪穴住居31	MM6	住居址1	古墳前半中葉		MBOX3	建物10	
竪穴住居32	MM6	住居址9	古墳後半中葉	掘立柱建物14	MBOX3	建物2	古墳後半末葉以降
竪穴住居33	MS2	住居址1	古墳後半末葉	掘立柱建物15	MBOX3	建物5	古墳後半末葉以降
竪穴住居34a	MM7	No.9住居	古墳前半中葉	掘立柱建物16	MBOX3	建物3	古墳後半末葉以降
竪穴住居34b	MM7	No.5住居	古墳前半中葉	掘立柱建物17	MBOX3	建物8	古墳後半末葉以降
竪穴住居35	MM4	No.454住居	古墳前半中葉	掘立柱建物18	MBOX3	建物11	古代？
竪穴住居36	MM4	No.541住居	古墳前半中葉	掘立柱建物19	MBOX3	建物12	?
竪穴住居37	MM4	No.453住居	古墳前半中葉	掘立柱建物20	KM3	SB1	?
竪穴住居38	MM4	No.462住居	古墳前半	掘立柱建物21	MBOX3	建物6	古墳後半末葉以降
竪穴住居39	MM4	No.473住居	古墳前半後葉	掘立柱建物22	MBOX3	建物4	古墳後半末葉以降
竪穴住居40	MM4	No.416住居址	古墳	掘立柱建物23	MBOX3	建物7	古墳後半以降
竪穴住居41	MM4	No.883住居	古墳？	掘立柱建物24	MBOX3	建物1	古墳後半末葉以降
竪穴住居42	MM4	No.75住居	古墳前半中葉	掘立柱建物25	MM2	SB3	古墳後半末葉以降
竪穴住居43	MS1	住居址3	古墳後半後葉	掘立柱建物26	MM5	No.5建物	古墳後半末葉以降
竪穴住居44	MS1	住居址2	古墳後半後葉	掘立柱建物27	MM2	SB1	古墳後半末葉以降
竪穴住居45	MS1	住居址1	古墳前半後葉	掘立柱建物28	MM2	SB2	古墳後半末葉以降
竪穴住居46	MBOX1	2区住居址2	古墳後半	掘立柱建物29	MM2	SB4	奈良
竪穴住居47	KB1	SH5	古墳後半中葉	掘立柱建物30	MM2	SB5	奈良
竪穴住居48	KB1	SH4	古墳後半中葉	掘立柱建物31	MM6	建物5	古墳後半末葉以降
竪穴住居49	KM5	No.6住居	古墳前半後葉	掘立柱建物32	MM3	No.2建物	奈良
竪穴住居50	KM4	住居址2	古墳後半中葉	掘立柱建物33	MM6	建物4	古墳後半末葉
竪穴住居51a	KM3西	No.168住居	古墳後半中葉	掘立柱建物34	MM6	建物3	古墳後半末葉
竪穴住居51b	KM3西	No.16住居	古墳後半中葉	掘立柱建物35	MM6	建物2	古代以前
竪穴住居52	KM3西	No.38住居	古墳後半	掘立柱建物36	MM6	建物7	古墳後半以降

掲載遺構名	調査区	調査時遺構名	時期	掲載遺構名	調査区	調査時遺構名	時期
掘立柱建物37	ＭＭ6	建物1	古墳後半末葉以降	井戸9	ＭＭ4	No.655井戸	中世(室町後半)
掘立柱建物38	ＭＭ3	No.12建物	奈良	井戸10	ＭＢＯＸ2	ＳＥ1	中世(室町)
掘立柱建物39	ＭＭ3	No.10建物	奈良	炉1	ＫＭ5	No.45 焼土	?
掘立柱建物40	ＭＭ3	No.8建物	古代?	炉2	ＫＭ3西	No.2 炉	?
掘立柱建物41	ＭＭ6	建物6	古墳後半末葉以降	炉3	ＫＭ3西	No.1 炉	?
掘立柱建物42	ＭＭ3	No.15建物	奈良	炉4	ＭＢＯＸ3	鍛冶炉	?
掘立柱建物43	ＭＭ3	No.16建物	奈良	炉5	ＭＭ6	鍛冶炉	?
掘立柱建物44	ＭＭ3	No.14建物	奈良	炉6	ＭＭ4	No.323炉	?
掘立柱建物45	ＭＭ3	No.13建物	奈良	炉7	ＭＭ4	No.70炉	古墳後半末葉
掘立柱建物46	ＭＭ3	No.19建物	古墳後半～奈良	墓1	ＫＭ6	No.1	古墳前半前葉
掘立柱建物47	ＭＳ6	建物2	古墳後半末葉	墓2	ＫＭ2	No.195木棺墓	弥生後期
掘立柱建物48	ＭＭ1	No.254建物	古墳後半末葉	墓3	ＫＭ3	ＳＧ1	弥生後期中葉
	ＭＳ2	建物1		墓4	ＭＭ2	ＳＫ7	弥生中期後葉
掘立柱建物49	ＭＭ1	No.267建物	中世?	墓5	ＫＭ1	No.144	古墳後半後葉
掘立柱建物50	ＭＭ1	No.253建物	?	墓6	ＫＭ1	No.132土壙墓	古墳後半末葉
掘立柱建物51	ＭＭ1	No.189建物	中世	墓7	ＭＢＯＸ3	土器棺1	古墳後半末葉
掘立柱建物52	ＭＭ4	No.411建物	古墳後半末葉以降	墓8	ＭＢＯＸ3	土器溜り1	古墳後半末葉
掘立柱建物53	ＭＭ4	No.410建物	古墳後半末葉以降	墓9	ＭＢＯＸ1	2区土器棺	古墳後半末葉
掘立柱建物54	ＭＭ4	No.345建物	古墳後半～奈良	墓10	ＭＭ4	No.396火葬墓	古代(平安)
掘立柱建物55	ＭＢＯＸ2	ＳＢ5	奈良	墓11	ＭＭ4	No.397火葬墓	古代(平安)
掘立柱建物56	ＭＢＯＸ2	ＳＢ7	奈良	墓12	ＭＭ4	No.471火葬墓	古代(平安後半)
掘立柱建物57	ＭＢＯＸ2	ＳＢ6	奈良	墓13	ＭＭ4	No.93土壙墓	古代～中世
掘立柱建物58	ＭＢＯＸ2	ＳＢ3	中世(室町)	墓14	ＭＭ4	No.94土壙墓	古代～中世
掘立柱建物59	ＭＢＯＸ2	ＳＢ4	奈良	墓15	ＭＭ1	No.74土壙墓	平安末
掘立柱建物60	ＭＳ1	建物2	?	墓16	ＭＭ1	No.50土壙墓	中世
掘立柱建物61	ＭＢＯＸ1	2区建物2	中～近世	墓17	ＭＭ1	No.83土壙墓	古墳後半
掘立柱建物62	ＭＢＯＸ1	2区建物3	古代	墓18	ＭＭ1	No.79土壙墓	古墳後半
掘立柱建物63	ＫＭ6	No.3建物	中世	墓19	ＭＢＯＸ1	3区埋甕	近世(江戸)
掘立柱建物64	ＫＭ5	No.12.13.14建物	中世	土壙1	ＫＭ5	No.53土壙	弥生後期前葉
掘立柱建物65	ＫＭ2	ＳＢ3	?	土壙2	ＫＭ5	No.53土壙	弥生後期前葉
掘立柱建物66	ＫＭ2	ＳＢ2	?	土壙3	ＫＭ5	No.68土壙	弥生後期前葉
掘立柱建物67	ＭＭ3	No.1建物	中世	土壙4	ＫＭ3	ＳＫ2	弥生後期前葉
掘立柱建物68	ＭＭ7	No.7建物	中世	土壙5	ＫＭ1	No.289土壙	弥生後期前葉
掘立柱建物69	ＭＭ4	No.124建物	?	土壙6	ＭＢＯＸ3	土壙5	弥生中期後葉
掘立柱建物70	ＭＭ1	No.242建物	中世	土壙7	ＫＭ5	No.56土壙	弥生後期前葉～中葉
掘立柱建物71	ＭＭ4	No.413建物	中世	土壙8	ＫＭ5	No.40土壙	弥生後期中葉
掘立柱建物72	ＭＢＯＸ2	ＳＢ2	中世(室町)	土壙9	ＫＭ3	ＳＫ6	弥生後期前葉
掘立柱建物73	ＭＢＯＸ2	ＳＢ1	中世(室町)	土壙10	ＫＭ2	No.185土壙	弥生後期中葉
掘立柱建物74	ＭＢＯＸ1	4区建物1	中世	土壙11	ＭＢＯＸ3	土壙10	弥生後期後葉
	ＭＳ1	建物1		土壙12	ＭＭ2	ＳＸ3	弥生後期中葉
掘立柱建物75	ＭＢＯＸ1	4区建物2	中～近世	土壙13	ＫＭ4	土壙10	古墳後半
掘立柱建物76	ＭＢＯＸ1	2区建物1	中～近世	土壙14	ＫＭ4	土壙2	弥生後期中葉
周溝遺構1	ＫＢ1	ＳＣ2・ＳＤ1	古墳後半中葉	土壙15	ＫＭ4	土壙13	弥生後期中葉
周溝遺構2	ＫＭ4	溝1・8	古墳後半後葉	土壙16	ＫＭ5	No.44土壙	弥生後期前葉
	ＫＢ1	ＳＤ5・6		土壙17	ＭＭ5	No.6土壙	弥生後期後葉
周溝遺構3	ＫＭ4	溝1・溝3	古墳後半後葉	土壙18	ＭＭ2	ＳＫ2	古墳前半前葉
周溝遺構4	ＫＭ1	No.343・255	古墳後半	土壙19	ＫＢ1	ＳＫ1	弥生中期後葉
	ＫＳ2	ＳＤ7		土壙20	ＫＢ1	ＳＨ4－ＳＫ2	古墳前半
周溝遺構5	ＫＭ5	No.18・19・20	古墳後半中葉	土壙21	ＫＭ6	No.4土壙	古墳後半後葉
	ＫＭ6	No.5・9		土壙22	ＫＭ5	No.1土壙	古墳後半後葉
周溝遺構6	ＫＭ5	No.33有溝建物	古墳後半中葉	土壙23	ＫＭ1	No.230土壙	古墳後半後葉
区画溝	ＭＭ7	No.4溝	奈良	土壙24	ＫＭ3	No.17土壙	古墳前半
	ＭＭ4	No.175・123・128・481・478・470・479・540		土壙25	ＫＭ4	No.390・415土壙	古墳前半中葉
				土壙26	ＫＭ4	No.327土壙	古墳前半中葉
				土壙27	ＫＭ1	No.250土壙	古墳
柵列1	ＭＢＯＸ2	ＳＣ1・2・3	奈良	土壙28	ＭＢＯＸ2	ＳＫ7	古墳前半
柵列2	ＭＳ1	柱穴列1	?	土壙29	ＫＳ2	ＳＫ1	古墳前半
柵列3	ＭＳ1	柱穴列2	中世	土壙30	ＭＢＯＸ3	土壙4	古墳前半後葉
井戸1	ＫＭ5	No.38井戸	弥生中期後葉～後期前葉	土壙31	ＫＢ1	ＳＫ2	古墳後半前葉
井戸2	ＫＭ3西	No.135 井戸	弥生後期前葉	土壙32	ＫＭ1	No.228土壙	古墳後半中葉
井戸3	ＫＭ4	No.898 井戸	古墳前半中葉	土壙33	ＫＳ1	ＳＫ1	古墳後半前葉
井戸4	ＫＳ2	ＳＥ1(ＳＫ2)	古墳前半後葉	土壙34	ＭＢＯＸ1	4区土壙1	古墳後半前葉
井戸5	ＫＢ1部	ＳＥ1(ＳＫ20)	古墳前半後葉	土壙35	ＫＳ1	ＳＫ2	古墳後半中葉
井戸6	ＫＭ6	No.15 井戸	古墳前半前葉	土壙36	ＫＭ4	土壙7	古墳後半中葉
井戸7	ＫＢ1部	ＳＤ7内ＳＥ1	古墳後半前葉	土壙37	ＫＭ4	土壙5	古墳後半中葉
井戸8	ＭＢＯＸ3	井戸	古墳後半末葉	土壙38	ＫＭ5	No.15土壙	古墳後半前葉

掲載遺構名	調査区	調査時遺構名	時期
土壙39	KM5	No.36土壙	古墳後半前葉
土壙40	KM5	No.42土壙	古墳後半中葉
土壙41	KM5	No.47土壙	古墳後半中葉
土壙42	MBOX3	土壙6	古墳後半中葉
土壙43	MBOX3	土壙7	古墳後半中葉
土壙44	MBOX3	土壙1	古墳後半中葉
土壙45	MM4	No.229土壙	古墳後半中葉
土壙46	MM1	No.191土壙	古墳後半中葉
土壙47	KB1	SX1	古墳後半前葉
土壙48	KM5	No.17土壙	古墳後半中葉
土壙49	KM5	No.16土壙	古墳後半中葉
土壙50	KM5	No.39土壙	古墳後半中葉
土壙51	KM4	土壙12	古墳後半中葉
土壙52	MBOX3	土壙2	古墳後半末葉
土壙53	KM6	No.10土壙	古墳後半末葉
土壙54	MM5	No.7土壙	古墳後半後葉～末葉
土壙55	MM4	No.125・126・127・131土壙	古墳後半末葉
土壙56	MM4	No.651土壙	古墳後半末葉
土壙57	MM4	No.228土壙	古墳後半後葉
土壙58	MM4	No.230土壙	古墳後半後葉
土壙59	MM4	No.389土壙	古墳後半後葉
土壙60	KM1	No.19土壙	古墳後半末葉
土壙61	KM1	No.229土壙	古墳後半末葉
	MBOX3	くぼみ	
土壙62	KM1	No.243土壙	古墳後半末葉
土壙63	MM1	No.249土壙	古墳後半末葉
土壙64	MM1	No.243土壙	古墳後半末葉
土壙65	MM4	No.408土壙	古墳後半末葉
土壙66	MS3	土壙6	奈良
土壙67	MS3	土壙3	奈良
土壙68	MS3	土壙4	奈良
土壙69	MM2	SK4	奈良
土壙70	KM3	SK4	奈良
土壙71	MM4	No.251土壙	奈良
土壙72	MM2	SK8	奈良
土壙73	MM2	SK1	平安
土壙74	MM4	No.185土壙	平安後半
土壙75	MM6	竪穴状土壙1	中世(室町)
土壙76	MM6	竪穴状土壙2	中世(室町)
土壙77	MM6	土壙1	中世
土壙78	MM5	No.4土壙	古墳？
柱穴1	KM4	pit179	弥生後期中葉
柱穴2	MM1	pit6	古墳後半前葉～中葉
柱穴3	KM4	pit107	古墳後半前葉～中葉
柱穴4	MM5	pit320	中世
柱穴5	MS3	pit71	中世
柱穴6	MM1	pit39	中世
柱穴7	MM1	pit140	中世
柱穴8	MM1	pit8	中世
柱穴9	MM1	pit192	中世
柱穴10	MM1	pit31	中世
柱穴11	MBOX1	4区pit33	中世
柱穴12	MM1	pit48	中世
柱穴13	MM1	pit47	中世
柱穴14	MBOX2	pit1	中世
柱穴15	KM4	pit150	弥生後期前葉～中葉
柱穴16	KM3	pit64	古墳
柱穴17	KS2	pit42	古墳
柱穴18	MBOX3	pit29	古墳
柱穴19	MM1	pit182	古墳
柱穴20	KM1	No.39pit	古墳
柱穴21	MM6	pit682	古墳
柱穴22	MM3	pit384	古墳
柱穴23	MM6	pit540	弥生
柱穴24	MM6	pit144	中世

掲載遺構名	調査区	調査時遺構名	時期
柱穴25	MM1	pit15	中世
柱穴26	MM7	pit136	古墳
柱穴27	MM6	pit182	古墳
柱穴28	MM1	pit43	？
柱穴29	MM2	pit150	中世
柱穴30	MS2	pit34	中世
柱穴31	MS2	pit7	中世
柱穴32	MM4	pit409	中世
溝1	KM7	No.4溝	縄文晩期中葉
溝2	KS2	SD8	？
	KM1	No.187・233溝	
溝3	KM1	No.242・231溝	弥生中期後葉～後期前葉
	KS2	SD1	
溝4	MS2	No.9・10溝	弥生中期後葉
	MM1	No.204・261溝	
溝5	MS1	No.5溝	弥生中期後葉
	MBOX2	SD19・13・11・18・12	
	MBOX1	4区溝2・3	
	MBOX3	溝6・5	
溝6	MS1	No.3溝	弥生中期後葉～後期前葉
	MBOX2	SD17	
溝7	KM4	溝4	弥生後期前葉
溝8	KB1	SD4	古墳後半中葉
溝9	KS2	SD9	古墳
	KM4	溝3	
溝10	KM3	溝21	古墳後半末葉
溝11	KM6	No.8溝	古墳後半中葉～末葉
	KM5	溝	
	KM3	溝14・20・9・10・11・12・22・河道2	
溝12	KS1	SD18・2	古代～中世
溝13	KM5	No.2溝	古墳後半末葉
	KM4	溝2	
	KM2	No.110溝	
	KS2	SD6	
溝14	KM1	No.10溝	中世(鎌倉)
	MM2	No.3溝	
溝15	MBOX2	SD7	中世(室町)
溝16	MM1	No.116溝	中世(室町)
	MBOX2	SD1～3	
溝17	MBOX2	SA1	中～近世
	MM4	No.335溝	
	MM1	No.46・110溝	
土器溜り1	MBOX2	土器群	縄文晩期前半
土器溜り2	KB1	土器溜り1群	弥生後期前葉～中葉
土器溜り3	KM1	No.71土器溜り	弥生後期中葉
土器溜り4	KM1	No.41土器溜り	古墳後半前半
土器溜り5	KB1	土器溜り2群	古墳後半前半
土器溜り6	KB1	土器溜り3群	古墳後半
土器溜り7	KM5	No.37土器溜り	古墳後半前半
たわみ1	KB1	SAO1	古墳後半前半
たわみ2	KB1	SAO2	？
たわみ3	KM2	No.131たわみ	古墳後半中葉
たわみ4	KM2	No.132たわみ	古墳後半
たわみ5	KM2	No.133たわみ	古墳後半中葉
たわみ6	KM2	No.134たわみ	古墳後半
たわみ7	KM2	No.77たわみ	古墳後半中葉
たわみ8	MBOX3	たわみ(土壙9)	奈良
たわみ9	MM3	No.9たまり	古墳前半中葉
たわみ10	MM4	No.418くぼみ	古墳後半前葉
地鎮遺構	MM2	SX1	奈良
胞衣遺構	MBOX2	SX1	奈良

索 引

遺構索引

竪穴住居…… 25～134
竪穴住居 1 ……写真図版11、25～28
竪穴住居 2 ……27～30
竪穴住居 3 ……写真図版11、27～28、31
竪穴住居 4 ……写真図版11、27～28、32～33
竪穴住居 5 ……写真図版11、27～28、33～37
竪穴住居 6 ……写真図版12、27～28、38～40
竪穴住居 7 ……27～28、40～41
竪穴住居 8 ……27～28、41～42
竪穴住居 9 ……27～28、42
竪穴住居10……27～28、43～44
竪穴住居11……写真図版12、27～28、45～47
竪穴住居12……27～28、48～50
竪穴住居13……写真図版12、27～28、51～52
竪穴住居14……27～28、52
竪穴住居15 a ……写真図版12、27～28、53
竪穴住居15 b ……写真図版12、27～28、54～55
竪穴住居16……写真図版12、27～28、56
竪穴住居17……写真図版12、27～28、57～58
竪穴住居18……写真図版 6 、写真図版12、27～28、59～62
竪穴住居19……27～28、63
竪穴住居20……27～28、64
竪穴住居21……27～28、64～65
竪穴住居22……写真図版13、27～28、65～66
竪穴住居23……27～28、66～67
竪穴住居24……27～28、67
竪穴住居25……写真図版13、27～28、68～70
竪穴住居26……27～28、71
竪穴住居27……27～28、71
竪穴住居28……写真図版13、27～28、72～73
竪穴住居29……27～28、74
竪穴住居30……写真図版13、27～28、75～76
竪穴住居31……写真図版13、27～28、77～78
竪穴住居32……27～28、79
竪穴住居33……27～28、80
竪穴住居34……27～28、81～82
竪穴住居35……27～28、83～84
竪穴住居36……27～28、83～84
竪穴住居37……写真図版13、27～28、83～84
竪穴住居38……27～28、85
竪穴住居39……写真図版14、27～28、86～87
竪穴住居40……27～28、88
竪穴住居41……27～28、88
竪穴住居42……27～28、89
竪穴住居43……27～28、90
竪穴住居44……27～28、90
竪穴住居45……27～28、91～92
竪穴住居46……27～28、92
竪穴住居47……27～28、93
竪穴住居48……写真図版14、27～28、94～95
竪穴住居49……27～28、96
竪穴住居50……写真図版14、27～28、96～97
竪穴住居51……写真図版15、27～28、97～98
竪穴住居52……写真図版15、27～28、99
竪穴住居53……写真図版15、27～28、100～101
竪穴住居54……写真図版15、27～28、102～103
竪穴住居55……27～28、104
竪穴住居56……27～28、105
竪穴住居57……27～28、106
竪穴住居58…… 巻頭カラー写真図版 2 、写真図版16、27～28、107
竪穴住居59……27～28、108～109
竪穴住居60……写真図版16、27～28、110～111
竪穴住居61……27～28、112
竪穴住居62……写真図版16、27～28、113～115
竪穴住居63……写真図版16、27～28、116～117
竪穴住居64……写真図版17、27～28、118～119
竪穴住居65……27～28、120
竪穴住居66……27～28、121
竪穴住居67……27～28、121
竪穴住居68……写真図版17、27～28、122～123
竪穴住居69……写真図版17、27～28、124～125
竪穴住居70……写真図版17、27～28、126～129
竪穴住居71……27～28、126～129
竪穴住居72……27～28、130～131
竪穴住居73……27～28、130～131
竪穴住居74……27～28、132
竪穴住居75……27～28、132～133
竪穴住居76……27～28、133
竪穴住居77……27～28、134
竪穴住居78……27～28、134
掘立柱建物……135～209
掘立柱建物 1 ……写真図版 7 、135～138
掘立柱建物 2 ……136～138
掘立柱建物 3 ……137～139
掘立柱建物 4 ……137～139
掘立柱建物 5 ……137～138、140
掘立柱建物 6 ……137～138、141
掘立柱建物 7 ……137～138、141
掘立柱建物 8 ……137～138、142～143
掘立柱建物 9 ……137～138、143～144
掘立柱建物10……137～138、144
掘立柱建物11……137～138、145
掘立柱建物12……137～138、146
掘立柱建物13……137～138、147
掘立柱建物14……137～138、148
掘立柱建物15……137～138、149
掘立柱建物16……137～138、150
掘立柱建物17……137～138、151
掘立柱建物18……137～138、152
掘立柱建物19……137～138、153
掘立柱建物20……137～138、153～154
掘立柱建物21……137～138、154
掘立柱建物22……137～138、155～156
掘立柱建物23……137～138、156
掘立柱建物24……137～138、157
掘立柱建物25……137～138、158
掘立柱建物26……137～138、159
掘立柱建物27……137～138、160

掘立柱建物28……137～138、161
掘立柱建物29……137～138、162
掘立柱建物30……137～138、162～164
掘立柱建物31……137～138、164
掘立柱建物32……137～138、165
掘立柱建物33……137～138、166
掘立柱建物34……137～138、167
掘立柱建物35……137～138、168
掘立柱建物36……137～138、169
掘立柱建物37……137～138、169～170
掘立柱建物38……137～138、170
掘立柱建物39……137～138、171
掘立柱建物40……137～138、172
掘立柱建物41……137～138、173
掘立柱建物42……137～138、174
掘立柱建物43……137～138、175
掘立柱建物44……137～138、176～177
掘立柱建物45……137～138、178
掘立柱建物46……137～138、179
掘立柱建物47……137～138、180
掘立柱建物48……137～138、181
掘立柱建物49……137～138、182
掘立柱建物50……137～138、183
掘立柱建物51……137～138、184
掘立柱建物52……137～138、185
掘立柱建物53……137～138、186
掘立柱建物54……137～138、187
掘立柱建物55……137～138、188
掘立柱建物56……写真図版７、137～138、189
掘立柱建物57……写真図版７、137～138、190
掘立柱建物58……137～138、191
掘立柱建物59……137～138、191～192
掘立柱建物60……137～138、192
掘立柱建物61……137～138、193
掘立柱建物62……137～138、194
掘立柱建物63……137～138、195
掘立柱建物64……137～138、196～197
掘立柱建物65……137～138、197
掘立柱建物66……137～138、198
掘立柱建物67……137～138、199
掘立柱建物68……137～138、200
掘立柱建物69……137～138、201
掘立柱建物70……137～138、202
掘立柱建物71……137～138、203
掘立柱建物72……137～138、204
掘立柱建物73……写真図版７、137～138、205
掘立柱建物74……写真図版８、137～138、206～207
掘立柱建物75……137～138、207～208
掘立柱建物76……137～138、208
周溝遺構……137～138、209～219
周溝遺構１……写真図版17、137～138、209～210
周溝遺構２……137～138、211～212
周溝遺構３……137～138、213
周溝遺構４……写真図版18、137～138、214～215
周溝遺構５……写真図版18、137～138、216～217
周溝遺構６……写真図版18、137～138、218～219
区画溝……137～138、220～223
区画溝……写真図版18、137～138、220～223
柱穴列……137～138、224～225
柱穴列１……写真図版８、137～138、224～225
柱穴列２……写真図版８、137～138、224～225
柱穴列３……137～138、224～225
井戸……226～240
井戸１……226～228
井戸２……写真図版19、227～229
井戸３……写真図版19、227～228、230～231
井戸４……227～228、231
井戸５……写真図版19、227～228、232
井戸６……写真図版19、227～228、233～234
井戸７……写真図版19、227～228、235～237
井戸８……227～228、237
井戸９……227～228、238
井戸10……写真図版７・８、227～228、239
井戸11……227～228、240
炉……227～228、241～244
炉１……227～228、241
炉２……227～228、241
炉３……227～228、241
炉４……227～228、242
炉５……227～228、242
炉６……227～228、242
炉７……写真図版20、227～228、243～244
墓……227～228、245～262
墓１……写真図版20、227～228、245
墓２……写真図版８、227～228、246
墓３……写真図版20、227～228、246～247
墓４……227～228、247
墓５……写真図版20、227～228、248
墓６……写真図版21、227～228、249
墓７……写真図版21、227～228、250
墓８……写真図版21、227～228、251
墓９……227～228、252
墓10……7～228、253～254
墓11……写真図版21、227～228、255～256
墓12……227～228、257
墓13……227～228、258
墓14……227～228、258
墓15……227～228、259
墓16……227～228、260
墓17……227～228、260
墓18……227～228、261
墓19……227～228、261～262
土壙……227～228、263～341
土壙１……写真図版22、227～228、263～264
土壙２……写真図版22、227～228、264～265
土壙３……227～228、266
土壙４……写真図版22、227～228、266
土壙５……227～228、267
土壙６……227～228、267
土壙７……227～228、268
土壙８……227～228、268～269
土壙９……写真図版22、227～228、269
土壙10……写真図版22、227～228、269～270
土壙11……227～228、271
土壙12……写真図版23・24、272～274
土壙13……227～228、275

土壙14……写真図版10・24・25・26、227～228、275～283
土壙15……写真図版26、227～228、284～285
土壙16……227～228、286
土壙17……227～228、287
土壙18……写真図版27、227～228、288～289
土壙19……227～228、289
土壙20……227～228、290
土壙21……227～228、290～291
土壙22……227～228、291
土壙23……227～228、292
土壙24……写真図版27、227～228、292～293
土壙25……227～228、293～294
土壙26……227～228、294
土壙27……227～228、295
土壙28……227～228、295
土壙29……227～228、296
土壙30……227～228、297
土壙31……写真図版27、227～228、297～298
土壙32……227～228、298
土壙33……写真図版27、227～228、299
土壙34……227～228、300
土壙35……写真図版27、227～228、301
土壙36……227～228、302
土壙37……227～228、302
土壙38……写真図版27、227～228、303
土壙39……227～228、304
土壙40……写真図版27、227～228、304～305
土壙41……写真図版28、227～228、305～306
土壙42……写真図版28、227～228、306
土壙43……写真図版28、227～228、307
土壙44……227～228、308
土壙45……227～228、309
土壙46……227～228、309～310
土壙47……227～228、310
土壙48……写真図版28、227～228、311～313
土壙49……写真図版28、227～228、311～313
土壙50……写真図版28、227～228、314
土壙51……227～228、315
土壙52……写真図版29、227～228、315～316
土壙53……227～228、316
土壙54……写真図版29、227～228、317～318
土壙55……写真図版29、227～228、319
土壙56……227～228、320
土壙57……227～228、321
土壙58……227～228、322
土壙59……写真図版29、227～228、323
土壙60……227～228、324
土壙61……写真図版30、227～228、324～326
土壙62……巻頭カラー写真図版4
写真図版9・30、227～228、327～331
土壙63……227～228、332
土壙64……227～228、332
土壙65……227～228、333
土壙66……写真図版30、227～228、334
土壙67……227～228、335
土壙68……227～228、335
土壙69……227～228、336
土壙70……写真図版30、227～228、337
土壙71……227～228、337
土壙72……227～228、338
土壙73……227～228、338
土壙74……227～228、339
土壙75……227～228、340
土壙76……227～228、340
土壙77……227～228、341
土壙78……227～228、341
柱穴……写真図版31、227～228、342～346
柱穴1……227～228、342～343
柱穴2……227～228、342～343
柱穴3……227～228、342～343
柱穴4……227～228、342～343
柱穴5……227～228、342～343
柱穴6……227～228、342～343
柱穴7……227～228、342～343
柱穴8……227～228、342～343
柱穴9……227～228、342～343
柱穴10……227～228、342～343
柱穴11……227～228、342～343
柱穴12……227～228、343
柱穴13……227～228、343
柱穴14……227～228、343
柱穴15……227～228、344
柱穴16……227～228、344
柱穴17……227～228、344
柱穴18……227～228、344
柱穴19……227～228、344
柱穴20……227～228、344
柱穴21……227～228、344
柱穴22……227～228、344
柱穴23……227～228、345～346
柱穴24……227～228、345～346
柱穴25……227～228、345～346
柱穴26……227～228、345～346
柱穴27……227～228、345～346
柱穴28……227～228、345～346
柱穴29……227～228、346
柱穴30……227～228、346
柱穴30……227～228、346
柱穴31……227～228、346
柱穴32……227～228、346
柱穴33……227～228、346
溝……347～363
溝1……写真図版31、347～348
溝2……348～349
溝3……写真図版31、348～352
溝4……348、353
溝5……348、353～354
溝6……写真図版31、348、354～355
溝7……写真図版10・31、348、355～356
溝8……348、356
溝9……348、356
溝10……348、357
溝11……写真図版31、348、357～359
溝12……写真図版10・31、348、359～360
溝13……348、361
溝14……348、362

溝15……348、362
溝16……348、363
溝17……写真図版７、348、363
土器溜り……227～228、364～376
土器溜り１……写真図版32、227～228、364～366
土器溜り２……227～228、366～367
土器溜り３……227～228、368
土器溜り４……写真図版32、227～228、369～371
土器溜り５……写真図版33、227～228、372
土器溜り６……写真図版33、227～228、373～375
土器溜り７……写真図版33、227～228、376
たわみ……227～228、377～390
たわみ１……写真図版34、227～228、377～381
たわみ２……写真図版35、227～228、382
たわみ３……写真図版35、227～228、383
たわみ４……227～228、384
たわみ５……227～228、384～385
たわみ６……227～228、385
たわみ７……写真図版35、227～228、386
たわみ８……写真図版35、227～228、387～388
たわみ９……写真図版35、227～228、388
たわみ10……写真図版36、227～228、389～390
その他……227～228、391～392
地鎮遺構……写真図版36、227～228、391
胞衣遺構……写真図版36、227～228、392

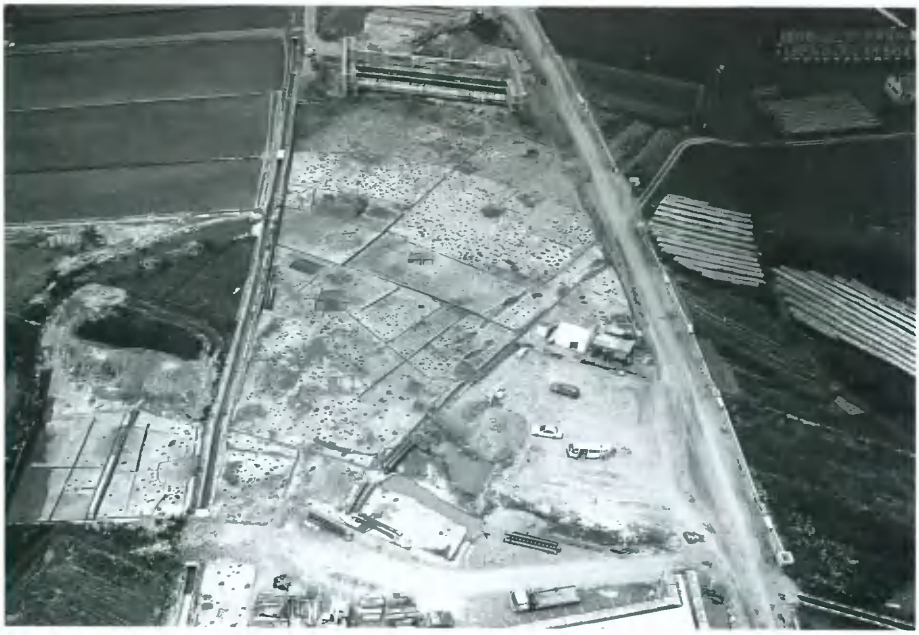
遺物索引

手焙形土器……58
製塩土器……123
陶質(系)土器……巻頭カラー写真図版２、16、107、114、131、210、342、372、381、403、405、406、409、410、411、412、413、414、415
軟質(系)土器……巻頭カラー写真図版３、16、98、114、210、217、234、303、383、402
角状杯……写真図版17、123
須恵器(土師質)…巻頭カラー写真図版３、写真図版42、16、99、136、185、212、219、236、244、252、275、298、303、305、312、316、381、417、418、419、420
カマド……写真図版42、185、422
緑釉……421
瓦器……342、343
青磁……238、259
早島式土器……340、342、343、423
備前焼……238、239、240、262、342、362、363、423
円面硯……387、421
風字硯……写真図版18、223、345
転用硯……337
瓦……222、433
塼……写真図版51、434
石匙……写真図版44、424
石鏃……写真図版44、377、424
砥石……写真図版43・44、49、61、62、111、128、283、383、425
石包丁……写真図版44、424
石斧……写真図版43・44、44、424、425
磨石……写真図版43・44、62、82、345、375
叩き石……375
石錘……写真図版44、425
有孔円盤……写真図版44、369
石帯……227～228、431
その他の石器・石製品……70、375、425
鉄鏃……30、49、112、345、426
鉄斧……109、111、345、426
鉄鏨……127、325
鋤先……426
刀子……88、121、123、259、307、340、426
辻金具……写真図版45、107
珠文鏡……写真図版45、115
銅鏃……写真図版45、47
古銭……写真図版46、240、346
その他の金属器・金属製品……写真図版45・46・47、127、171、345、426、427
きぬた状木製品……写真図版52、328
ねずみ返し状木製品…巻頭カラー写真図版４、写真図版52、328、329
漆椀……346
紡錘車……写真図版48・49、16
(石製)……87、151、307、429
(鉄製)……325、429
(土製)……65、118、217、233、317、344、429、430
玉……写真図版50、51、70、76、82、103、109、118、233、250、295、317、344、365、369、431
土錘……16、109、111、317、435、436
分銅形土製品……写真図版48、39、344、428
円盤状土製品……217
土鈴……写真図版50、344、432
異形土製品……写真図版50、432

1. 調査前遠景（北東から）

2. 調査前遠景（北東から）

写真図版 2



1．前田調査区全景（北東上空から）

2．前田調査区全景（南東上空から）

1．前田調査区　掘立柱建物と区画溝（南上空から）

2．前田調査区　西半部全景（南東上空から）

写真図版 4

1．亀田調査区　全景（南上空から）

2．亀田調査区　竪穴住居と溝（南上空から）

1．亀田Ｍ２区
全景
（東から）

2．亀田Ｍ３区
全景
（西から）

3．亀田Ｍ５区
西半全景
（北から）

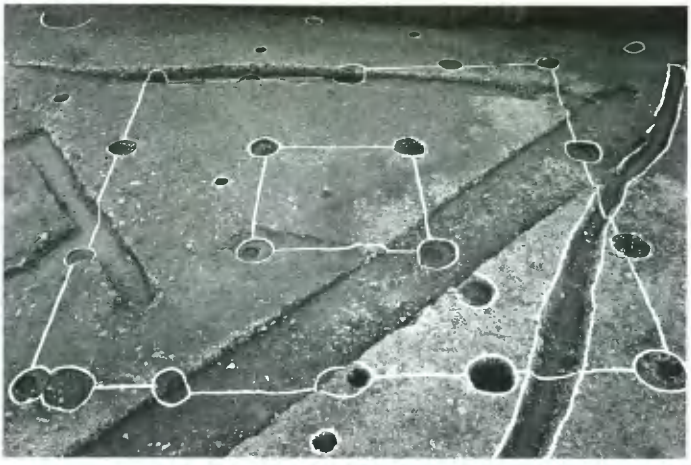
写真図版６

1．亀田Ｍ６区
北半全景
（北西から）

2．前田Ｍ６区
全景
（北から）

3．竪穴住居１８
（南西から）

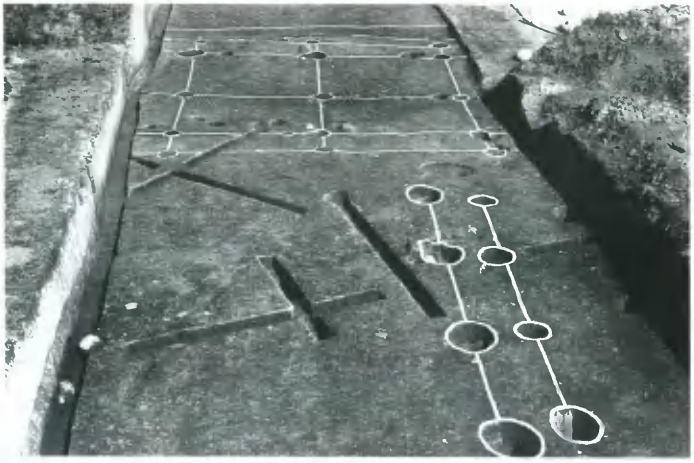
1．掘立柱建物１
（南東から）



2．掘立柱建物５６・５７
井戸１０
（南西から）

3．掘立柱建物７３
溝１７
（南から）

写真図版8



1．掘立柱建物７４
柱穴列１・２
（西から）

2．井戸１０
（西上から）

3．墓２
（東から）

1．土壙６２
（南から）

2．土壙６２
木製品出土状況
（北から）

3．土壙６２
木製品出土状況
（南から）

写真図版 10

1. 土壙１４
遺物出土状況
（東から）

2. 溝７西端部
遺物出土状況
（東から）

3. 溝１２
（東から）

1

4

10

11

2．竪穴住居 3 出土土器

3

1．竪穴住居 1 出土土器

12

3．竪穴住居 4 出土土器

17

24

31

28

19

27

29

4．竪穴住居 5 出土土器

写真図版 12

35

41

1．竪穴住居 6 出土土器

48

2．竪穴住居 11 出土土器

59

3．竪穴住居 13 出土土器

66

4．竪穴住居 15 出土土器

68

5．竪穴住居 16 出土土器

71

6．竪穴住居 17 出土土器

73

80

81

7．竪穴住居 18 出土土器

84

88

89

1．竪穴住居 22 出土土器

2．竪穴住居 25 出土土器

90

92

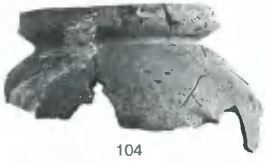
93

94

95

3．竪穴住居 28 出土土器

101



104

105

4．竪穴住居 30 出土土器

111

112

114

123

5．竪穴住居 31 出土土器

6．竪穴住居 37
出土土器

写真図版 14

134

134

141

139

142

140

1．竪穴住居 39 出土土器

153

158

159

154

156

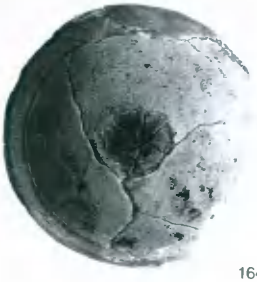
2．竪穴住居 48 出土土器

165

163

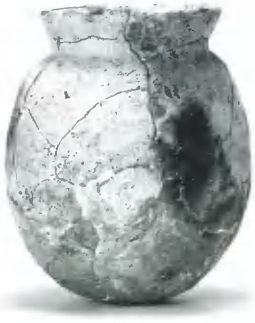
162

164


164

3．竪穴住居 50 出土土器

167



166

171

170

172

2．竪穴住居 52 出土土器

1．竪穴住居 51 出土土器

176

174

175

3．竪穴住居 53 出土土器

180

177

181

182

4．竪穴住居 54 出土土器

写真図版 16

186

1．竪穴住居 58 出土土器

193

196

2．竪穴住居 60 出土土器

207

206

207

202

3．竪穴住居 62 出土土器

212

219

220

216

215

4．竪穴住居 63 出土土器

225

232

227

229

1．竪穴住居 64 出土土器

238

241

2．竪穴住居 68 出土土器

3．竪穴住居 69 出土土器

248

247

4．竪穴住居 70 出土土器

315

310

5．周溝遺構 1 出土土器

写真図版 18

332

1．周溝遺構 4 出土土器

339

337

340

2．周溝遺構 5 出土土器

342

343

344

3．周溝遺構 6 出土土器

361

348

364

368

366

4．区画溝出土土器・硯・瓦

373

375

1．井戸 2 出土土器

383

384

3．井戸 5 出土土器

378

380

2．井戸 3 出土土器

392

404

4．井戸 6 出土土器

411

410

416

5．井戸 7 出土土器

写真図版 20

430

431

1．炉 7 出土土器

432

2．墓 1 出土土器

433

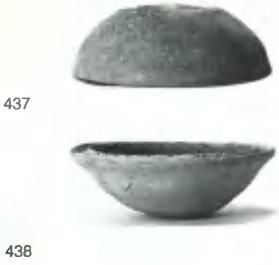
434

3．墓 3 出土土器

436

436
底

4．墓 5 出土土器



437

438

1．墓 6 出土土器

439

2．墓 7 出土土器

440

3．墓 8 出土土器

442

438

5．墓 11 出土土器

445

456

446

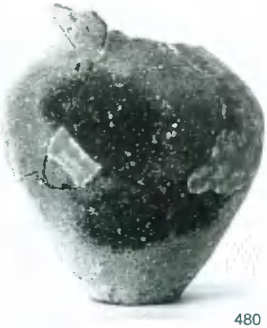
457

4．墓 10 出土土器

写真図版 22

476　477

1．土壙 1 出土土器



480

479

485

486

2．土壙 2 出土土器

489

490

3．土壙 4 出土土器

500

4．土壙 9 出土土器

502

5．土壙 10 出土土器

511

516

512

517

514

518

518

522

521

1．土壙12出土土器（1）

写真図版 24

520

519

523

525

1．土壙12出土土器（2）

529

528

531

2．土壙14出土土器（1）

532

535

542

550

556

541

552

558

557

1．土壙 14 出土土器（2）

写真図版 26

576

579

571

1．土壙14出土土器（3）

564

582

572

585

586

2．土壙15出土土器

599

597

1．土壙 18 出土土器

609

2．土壙 24 出土土器

623

627

3．土壙 31 出土土器

632

4．土壙 33 出土土器

634

635

5．土壙 35 出土土器

645

6．土壙 38 出土土器

650

653

654

7．土壙 40 出土土器

写真図版 28

655

657

656

1．土壙 41 出土土器

2．土壙 43 出土土器

3．土壙 42 出土土器

672

671

673

674

682

683

685

697

698

690

4．土壙 48・49 出土土器

700

699

701

5．土壙 50 出土土器

708

706

1．土壙52出土土器

715

716

719

2．土壙54出土土器

723

3．土壙55出土土器

735

722

4．土壙59出土土器

写真図版 30

741

742

743

745

746

747

748

749

754

774

776

753

751

1．土壙 61 出土土器

2．土壙 62 出土土器

791

792

3．土壙 66 出土土器

798

4．土壙 70 出土土器

813

817

816

818

820

1．柱穴出土土器

831

2．溝 1 出土土器

836

3．溝 3 出土土器

854

4．溝 6 出土土器

882

6．溝 1 1 出土土器

858

863

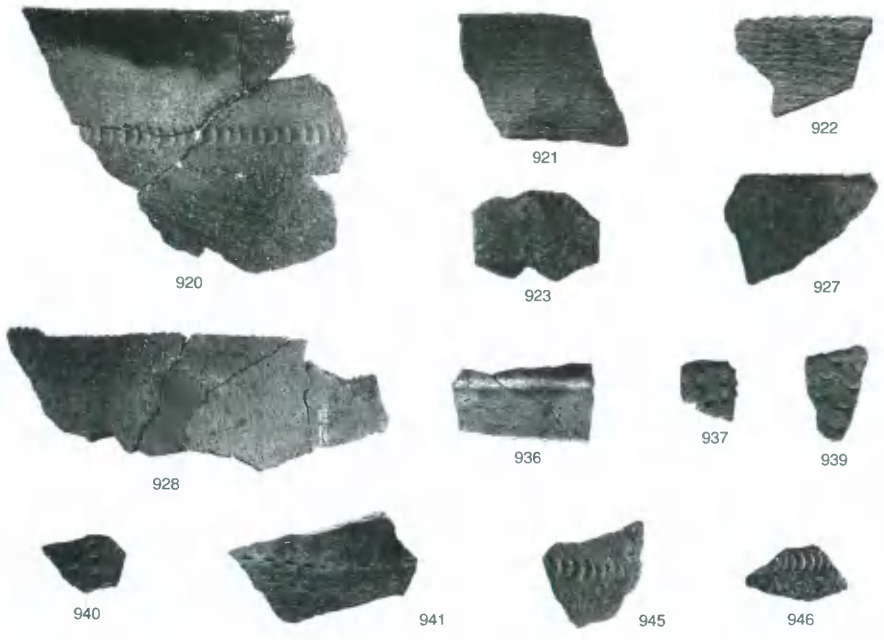
5．溝 7 出土土器

895

898

7．溝 1 2 出土土器

写真図版 32



1．土器溜り 1 出土土器

2．土器溜り 4 出土土器

1003

1004

1．土器溜り 5 出土土器

1010

1016

1021

1024

1025

1029

2．土器溜り 6 出土土器

1031

3．土器溜り 7 出土土器

写真図版 34

1051

1054

1055

1057

1061

1066

1063

1065

1081

1076

1075

1071

1073

1092

1089

1095

1096

1．たわみ 1 出土土器

1103

1．たわみ 2 出土土器

1107

1111

1118

1119

1120

3．たわみ 7 出土土器

1114

2．たわみ 3 出土土器

1122

1124

1125

4．たわみ 8 出土土器

1126

1127

1129

5．たわみ 9 出土土器

写真図版 36

1131

1132

1133

1134

1134

1．たわみ 10 出土土器

1135

1137

1136

1138

2．地鎮遺構出土土器

1139

1140

3．胞衣遺構出土土器

1．遺構に伴わない遺物（1）（縄文土器）

2．遺構に伴わない遺物（2）（弥生土器）

写真図版 38

1216

1218

1225

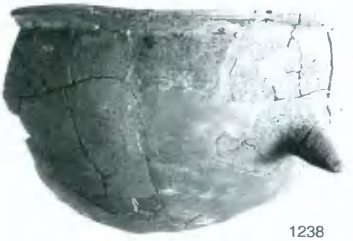
1226

1．遺構に伴わない遺物（3）（古墳時代の土師器）

1231

1233

1235


1238

1235

1237

1239

1232

2．遺構に伴わない遺物（4）（軟質系土器）

1251

1242

1257

3．遺構に伴わない遺物（5）（須恵器　蓋）

1273

1274

1306

1305

1304

1291

1．遺構に伴わない遺物（6）（須恵器・陶質系土器　高杯）

1321

1322

1335

1338

1339

1337

1341

1342

2．遺構に伴わない遺物（7）（須恵器・陶質系土器　壺、甕）

写真図版 40

1．遺構に伴わない遺物（8）（須恵器・陶質系土器　甕）

2．遺構に伴わない遺物（9）（須恵器・陶質系土器　椀）

3．遺構に伴わない遺物（10）（陶質系土器　器台）

1372

1374

1377

1378

1375

1381

1380

1387

1392

1395

1．遺構に伴わない遺物（11）（須恵器・陶質系土器　器台）

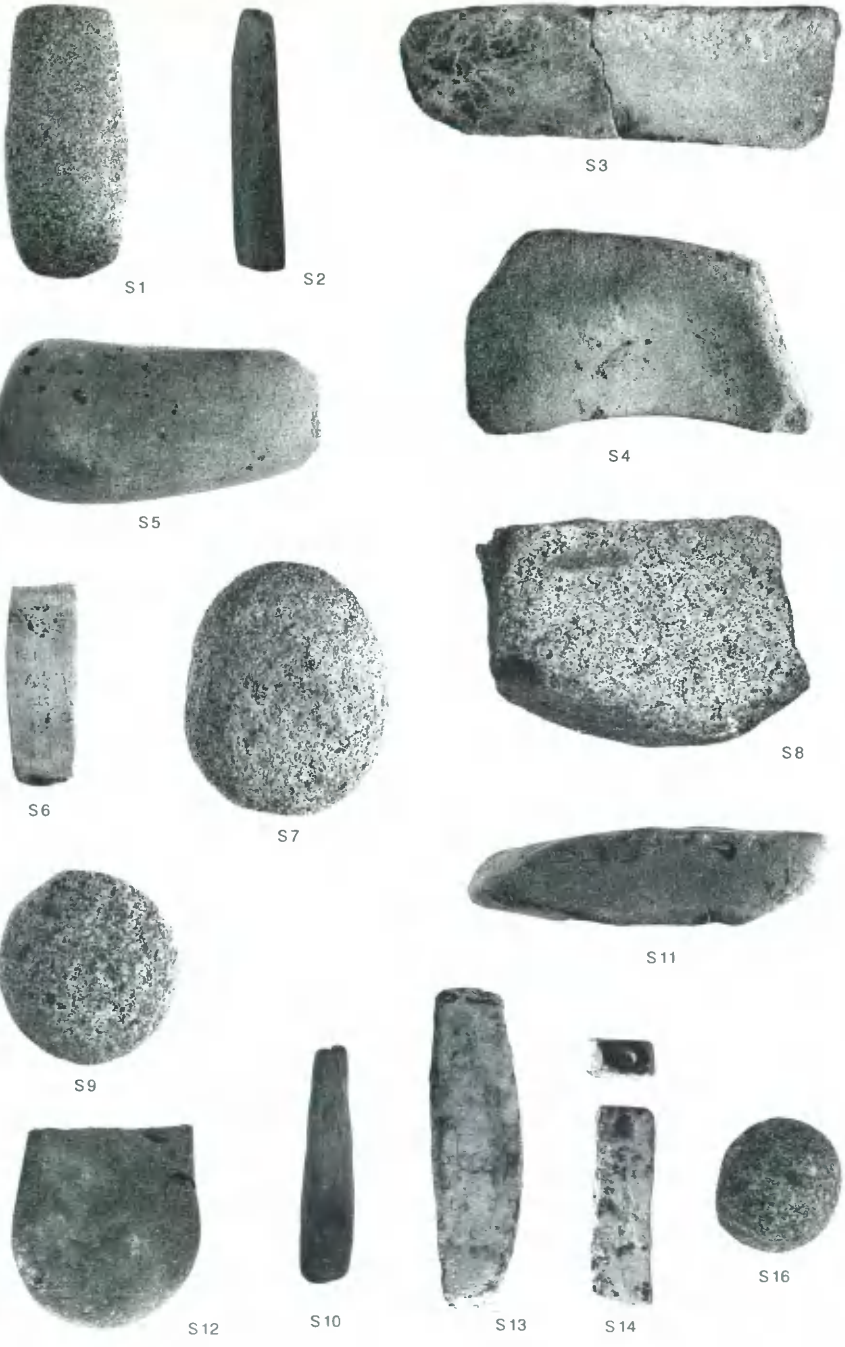
写真図版 42

1．遺構に伴わない遺物（12）（土師質の須恵器）

2．遺構に伴わない遺物（13）（奈良・平安時代の土器）

3．遺構に伴わない遺物（14）（鎌倉時代以降の土器）

4．遺構に伴わない遺物（15）（カマド）



1．出土石器（1）

写真図版 44

S 17

S 18

S 19

S 20

S 23

S 25

S 22

S 24

S 28

S 26

S 27

S 31

S 32

S 33

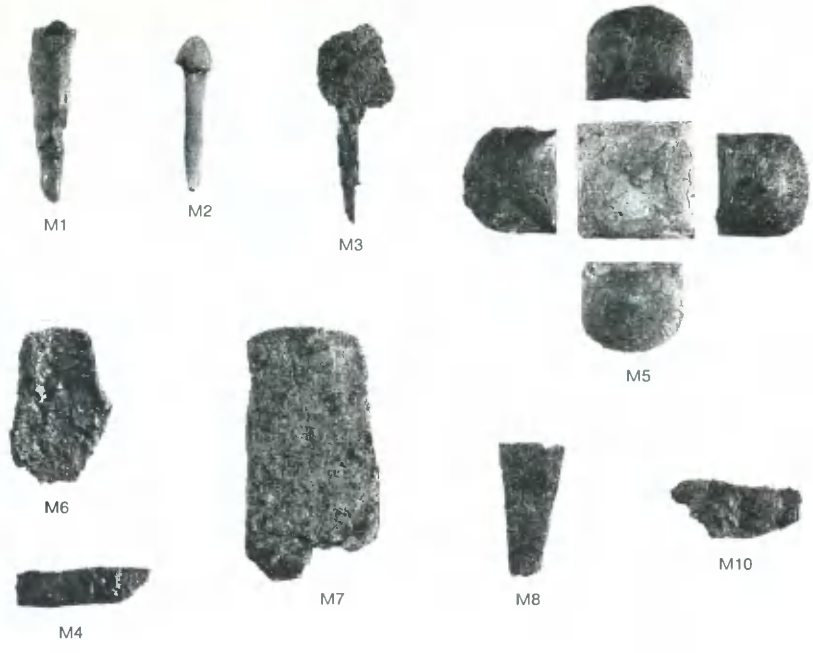
S 30

S 34

S 36

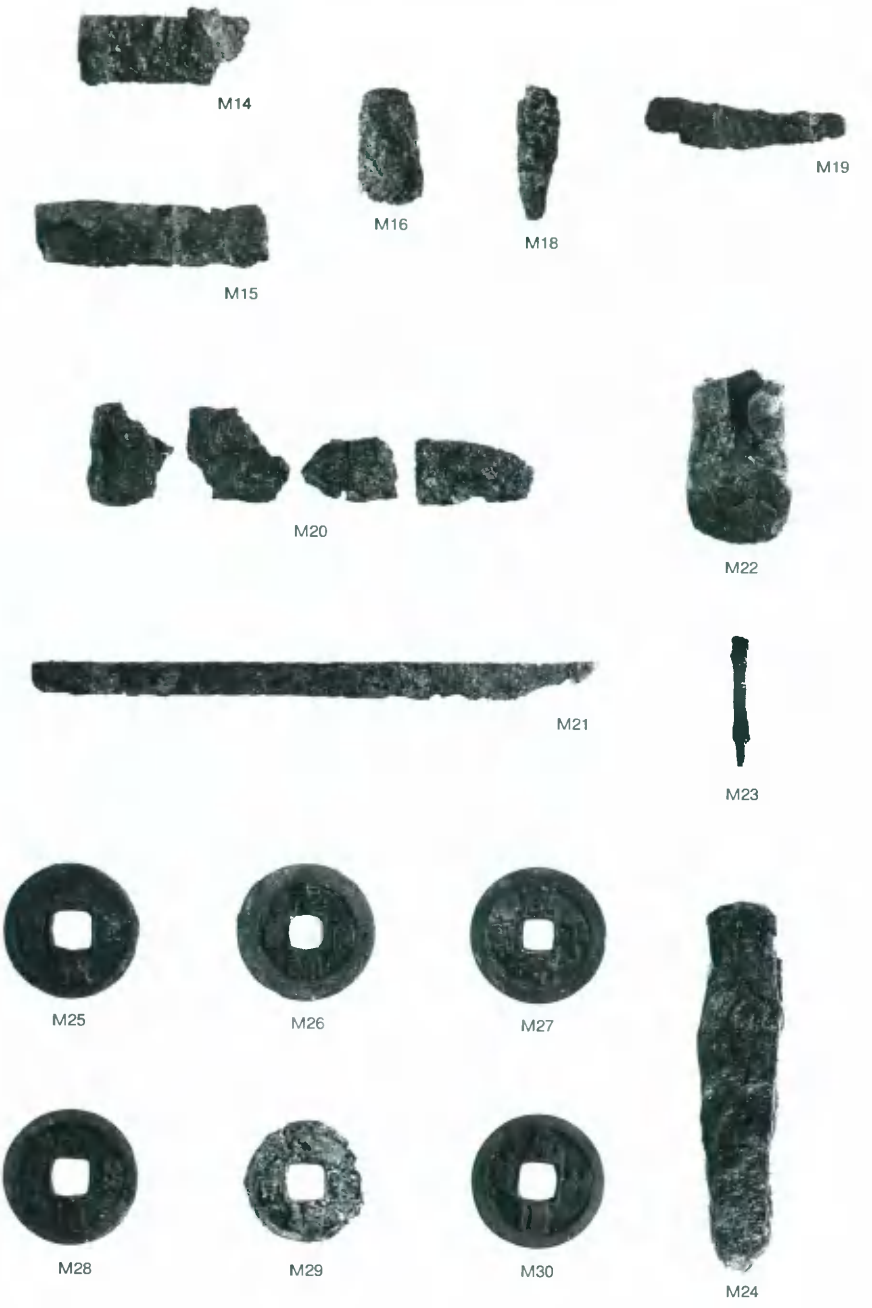
S 37

1．出土石器（2）



1．出土金属器（1）

写真図版 46



1．出土金属器（2）

M31

M32

M33

M34

M35

M36

M38

M39

M41

M43

M42

M44

M45

M47

M49

1．出土金属器（3）

写真図版 48

C1

C7

C9

C10

C11

C12

1．出土分銅形土製品

R1

R2

R3

R4

R5

R6

R7

R13

R9

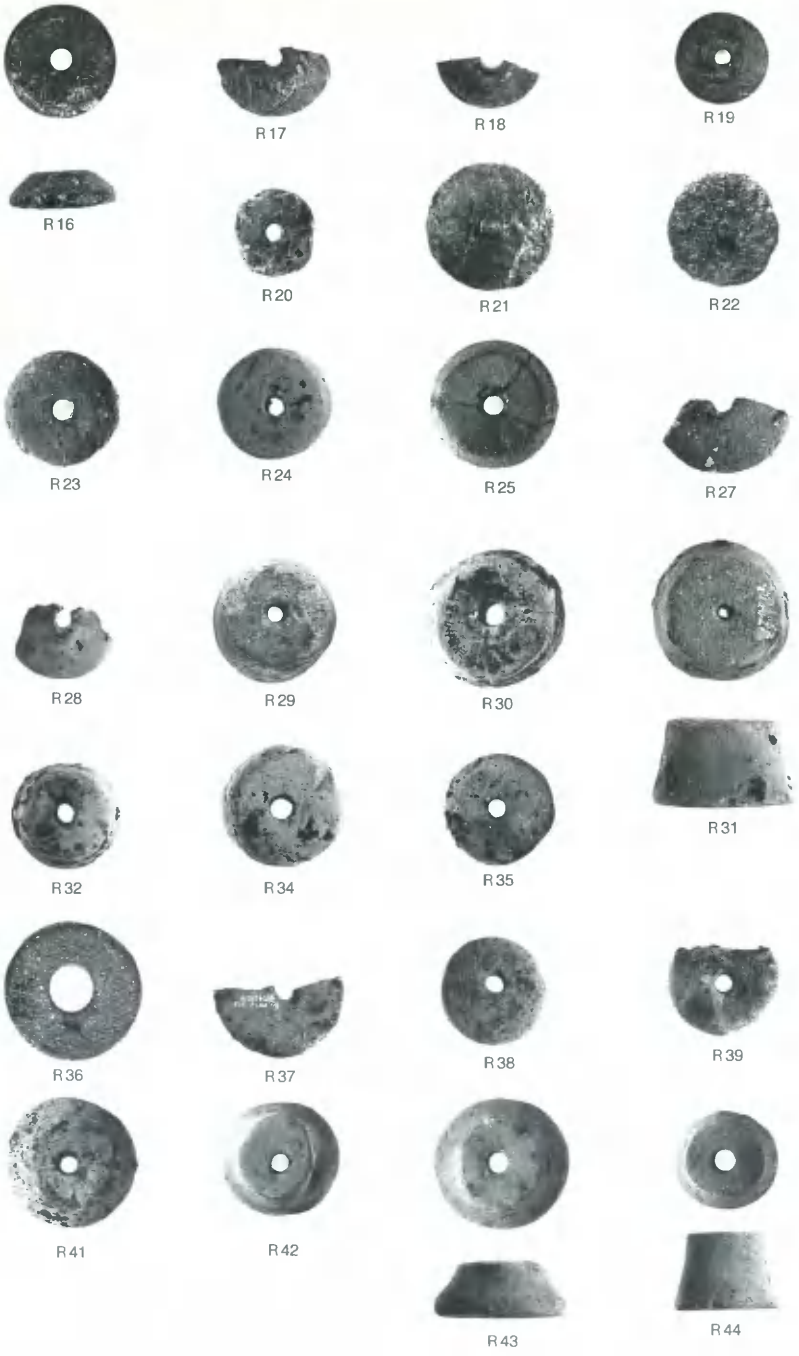
R10

R11

R14

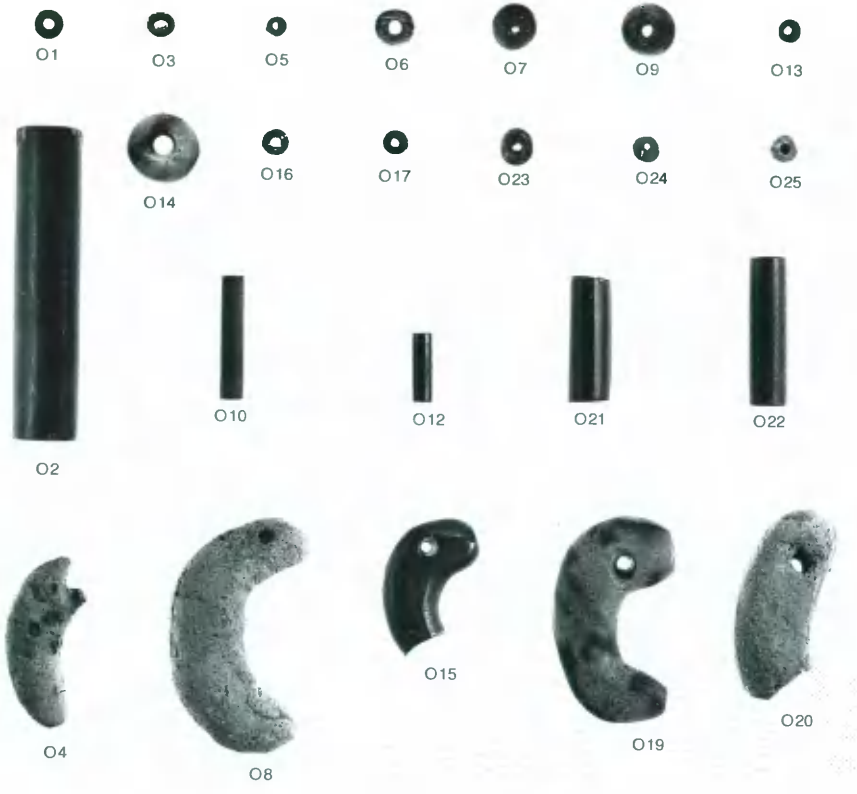
R15

2．出土紡錘車（1）


R16
R17
R18
R19
R20
R21
R22
R23
R24
R25
R27
R28
R29
R30
R31
R32
R34
R35
R36
R37
R38
R39
R41
R42
R43
R44

1．出土紡錘車（2）

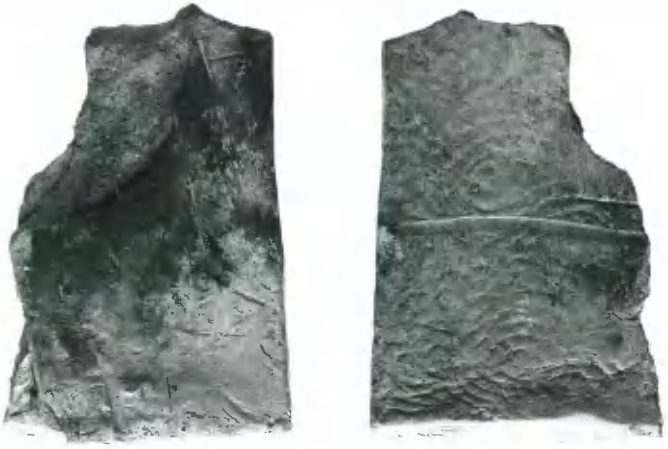
写真図版 50



1．出土玉類

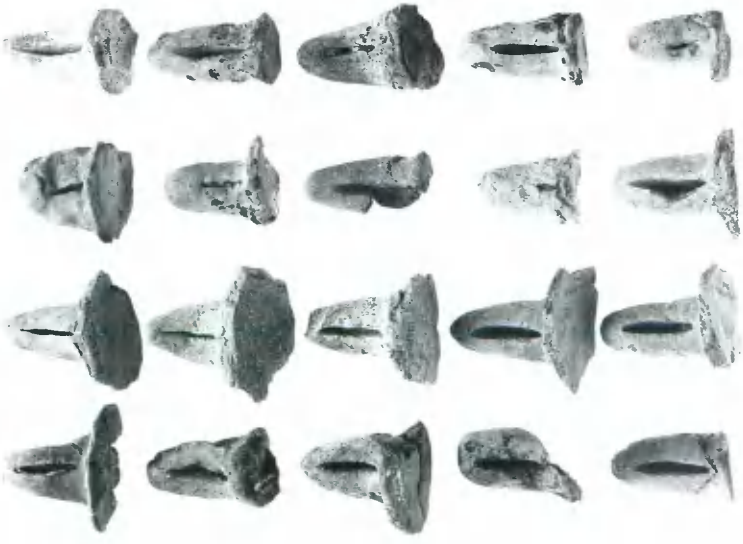
2．出土土鈴

3．出土異形土製品



1449

1．塼



2．遺構に伴わない遺物（16）（把手）

写真図版 52

W1

W2

W3

W4

W5

W6

W7

1．土壙 62 出土木製品

報告書抄録

ふりがな	さいどみいせき
書名	斎富遺跡
副書名	山陽自動車道建設に伴う発掘調査
巻次	13
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	105
編著者名	下澤公明・大橋雅也・伊藤　晃・井上　弘・岡田　博・平井　勝・二宮治夫 福田正継・高田恭一郎・氏平昭則
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-01　岡山県岡山市西花尻1325-3　TEL．086-293-3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700　岡山県岡山市内山下2-4-6　TEL．086-224-2111
発行年月日	1996年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
斎富（さいどみ）	岡山県（おかやまけん） 赤磐郡（あかいわぐん） 山陽町（さんようちょう）	33322	——	34° 45′ 00″	134° 2′ 15″	一次調査 19910507～ 19910517 全面調査 19910701～ 19921031	約27,150	山陽自動車道建設に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
斎富	集落	弥生	竪穴住居 井戸 土器棺墓 土壙 溝	弥生土器 石器 分銅形土製品 玉ほか	弥生時代から中・近世にいたる集落遺跡
		古墳	竪穴住居 土器棺墓 周溝遺構 掘立柱建物 土壙 溝	土師器・須恵器．陶質土器・軟質土器・石器・鉄器・木器・珠文鏡・玉・土鈴ほか	古墳時代の集落から朝鮮半島系遺物が出土
		奈良・平安	掘立柱建物 区画溝 墓 土壙	土師器・須恵器・石帯・円面硯・風字硯ほか	奈良時代と考えられる掘立柱建物群とそれを区画する溝
		鎌倉・室町 江戸	掘立柱建物 井戸 墓 土壙 溝	土師器・陶磁器・青磁・鉄器ほか	

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告105

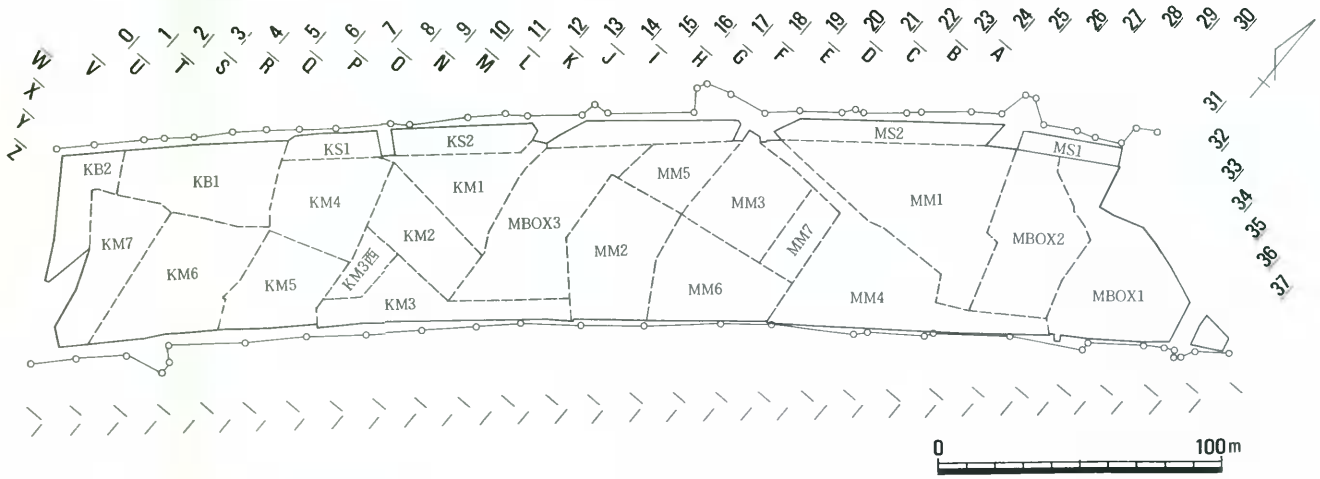
斎富遺跡

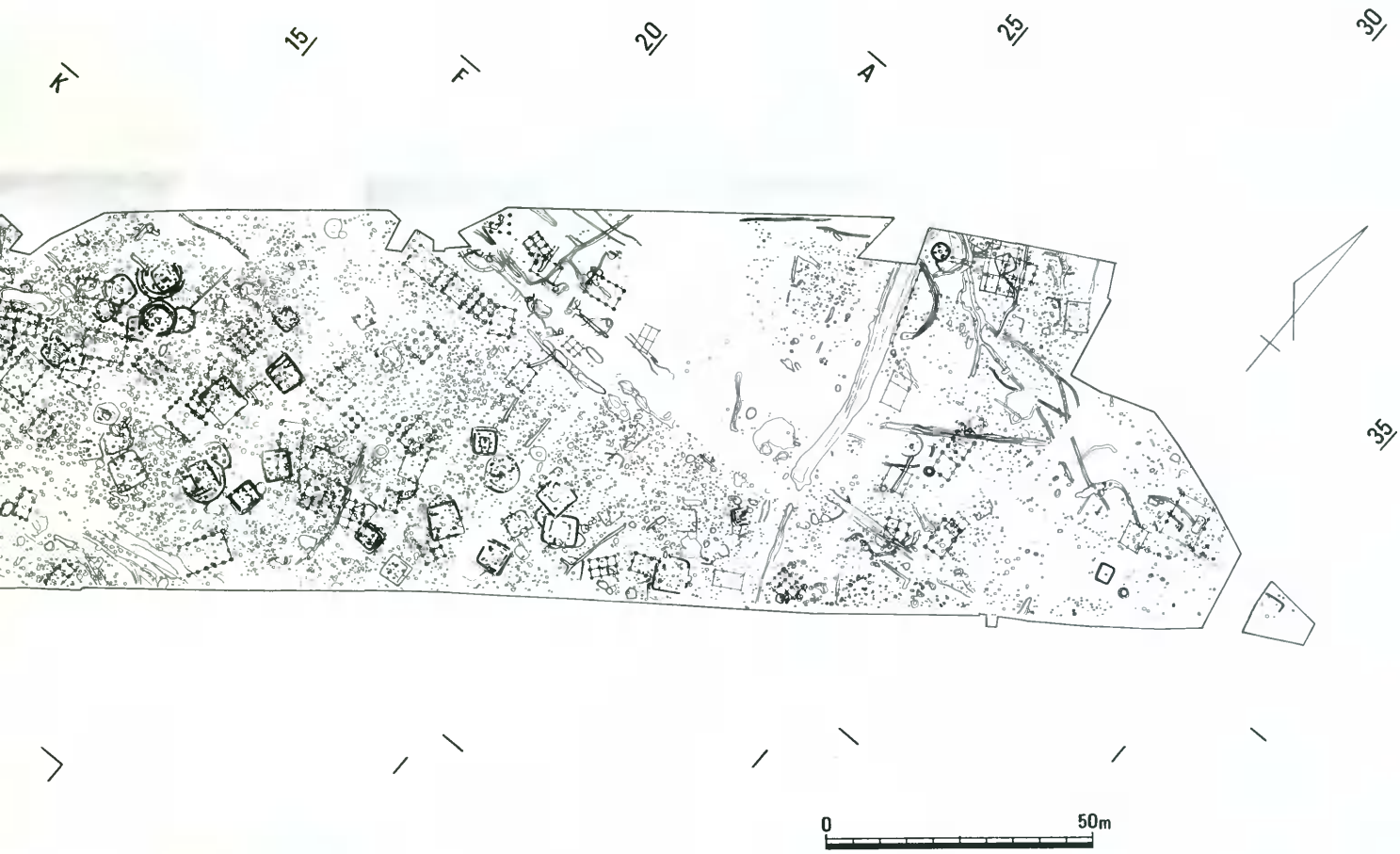
山陽自動車道建設に伴う発掘調査13

（第２分冊）

1996年３月21日　印刷
1996年３月31日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3
発　行　岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6
印　刷　岡山県農協印刷株式会社





附図　斎富遺跡遺構分布図（1/1000）